聖闘士星矢　黄金の若き戦士達

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖闘士星矢　黄金の若き戦士達

【Ｎコード】
Ｎ４４２４Ｇ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
冥皇ハーデスとの聖戦から二百三十年。今かつて聖域をあと一歩のところまで追い詰めた戦皇アーレスの軍勢狂闘士達が蘇って来た。迎え撃つは新たに黄金聖闘士となった若き戦士達、黄金聖闘士達、とりわけサガとアイオロスを主人公とした作品です。

プレリュード

プレリュード

冥皇ハーデスとの聖戦から二三〇年が過ぎた。現在の教皇であるシオンと童虎の二人を除いて全員倒れてしまったこの戦いから聖域は復興しその聖闘士の数もかなりのものになっていた。

そして今。聖域の中心でありその象徴とも言える十二人の黄金聖闘士が全員揃うことになった。彼等はその殆どがまだ若く活気に満ちた少年達だった。聖域は彼等の黄金聖闘士就任を心から祝福した。だが一人その中で暗い顔をしている男がいた。

スターヒル。聖域の奥深くにありアテナ神殿のさらに奥にある。教皇しかそこに入ることはできない絶対の場所であり今この断崖絶壁の上に白い法衣と黄金色の兜を被った仮面の男がいた。

彼こそが教皇シオン。先の聖戦で生き残った牡羊座、アリエスの黄金聖闘士であり長い間聖域の教皇を務めその復興にあたり今に至る。その彼が夜空を見上げていた。

夜の空は濃紫でありそこに赤や青、白の星達が瞬いている。一見すると眩く美麗な星空であるが彼はその中で仮面の下の顔を曇らせていた。そのうえで呟くのだった。

「赤い星が動いた」

不吉なものを感じ取っている声だった。その声を発した後で踵を返しそのまま己のいる教皇の間へと戻って行った。その星空には一つの星が赤く大きな姿を見せていた。それは火星、戦乱の星であり戦皇アーレスの星であった。その星がこれまでになく大きく、そして禍々しい光を放っていたのだ。周りに幾多の凶星達を従えて。

設定資料その一

聖闘士星矢　設定資料　聖域

聖闘士

女神アテナを守る為に聖衣と呼ばれる超金属製の鎧をその身にまとって戦う八十八人の闘士の総称。

各人それぞれが天空の星座を守護に持っている。即ち星座それぞれに対応しその為に八十八人の聖闘士が存在する。

おおまかに黄金聖闘士、白銀聖闘士、青銅聖闘士、雑兵の４階級に分けられる。また黄金聖闘士及び白銀聖闘士の下では素質を見込まれた多くの聖闘士候補生が修行している。八十八人の内訳は黄道に対応した黄金が十二人、白銀二十四人、青銅四十八人、その他に謎の存在が四人いるとされている。実力は黄金、白銀、青銅と考えられている。時として昇格もある。

アテナが武器を嫌いそれを持って戦うことを禁じている為聖闘士となる者は修行で己の肉体を極限まで鍛え原子を砕くという破壊の究極を身に付けている、また己の中の小宇宙（コスモ）を燃やすことによって潜在能力を引き出し想像を絶する破壊力を発揮する拳を持つまでに至る。その為にその拳は空を引き裂き蹴りは大地を割ると伝えられている。

聖闘士は守護星座の形がそのまま自らの急所、即ち星命点となる。傷を受け星命点から噴出する血を止める為には胸の中央にある真央点を打つ。

本来聖闘士は女性であるアテナを守護する少年達という意味合いから男性しかなることが出来ないが自ら女であることを捨てる為、常に仮面を被ればなれる。しかし若し素顔を見られた場合には素顔を見た人間を殺すか愛さなければならないという掟がある。

なお実際に全て野聖闘士が集結したことはない。聖戦に参加した人数で言えば先のハーデスとの聖戦に参加した七十九人が最高であ

るとされる。

聖衣

聖闘士が身にまとう防具。各々の守護星座の形を象った形態から分解して聖闘士の身体を包む防具になる。装着者である聖闘士の小宇宙が高まることで軽くなり攻撃力も増す。階級別に青銅聖衣、白銀聖衣、黄金聖衣の三種類がある。

聖衣には生命があり多少の破損ならば自己修復が可能である。しかしそれができないほど激しく破損したり長い間装着者が不在する期間が続くと死んでしまうこともある。死にかけた、或いは死亡した聖衣を復活させるには大量の聖闘士の血液が必要とされている。ただ中には自己修復能力を持っているものもあるという。

聖衣のはじまりは神話の時代にアテナが海皇ポセイドン配下の海闘士が纏う鱗衣に対抗して鍛冶神ヘパイストスが作りオリンポス十二神が身に纏う神衣を模して天空の星座を設計図としての錬金術師たちによって作らせたものである。材料はオリハルコン、ガマニオン、星砂粉等を用いているという。

設定資料その二

聖域

ギリシャの首都アテネにあるアテナ神殿周辺の地域。結界で守られており一般人は立ち入ることができず、その存在すら知覚することができない。知っているのは各国の要人や特別に聖域に関係する者等ごく僅かである。なお中心であるアテナ神殿に辿り着く為には黄金聖闘士の護る十二宮の全てと教皇の間を突破する必要がある。

十二宮

聖域にある黄道十二宮の名がつけられた十二の神殿のことである。アテナ神殿を守る為の結界でありそれぞれを聖域最強の戦士達である黄金聖闘士が守護している。頂上にあるアテナ神殿に辿り着くには白羊宮から順番に上っていかねばならず超能力等の突破も不可能。

アテナ神殿

聖域の頂上にある神殿。巨大なアテナ神像が安置されている。過去アテナがいる時代もあった。

スターヒル

教皇のみが出入りを許されているアテナ神殿よりもさらに奥にある絶対の禁区。教皇はここで星の動きを観測することで大地の吉凶を占う。

教皇

聖闘士をまとめアテナを補佐する聖域の最高権力者。アテナ不在時の代理でもあり通常は黄金聖闘士の中から先代教皇の直接指名によって次代の教皇が選ばれる。現教皇は先の聖戦の生き残りであり前の牡羊座の黄金聖闘士であるシオン。

黄金聖闘士

聖域の十二宮を守護する十二人の聖闘士。黄金聖衣を身に纏いその全員が全員光速の拳を繰り出すことができ第七感、即ちセブンセンシズに目覚めている。誰もが天才的な戦闘巧者であり白銀聖闘士とは隔絶どころではない戦闘能力を誇っている。その為余程の非常事態でなければ動くことはなく黄金聖闘士同士が顔を合わせること自体が非常に少ない。動く時は教皇の勅命によって動きそれ以外では動かない。また黄金聖闘士同士が戦った場合は実力が拮抗している為千日戦争になるか双方滅ぶと言われている。戦闘においては白銀聖闘士や青銅聖闘士を指揮下に置くこともある。それぞれの宮に従者達を置いている。聖域においての切り札である。

その特徴として他の聖闘士が普段は装着しない白いマントを常に羽織っている。また他の者から様付けで呼ばれるのが普通である。彼等の上にはアテナ、そして教皇しかいない。その為命令を出せるのは教皇だけであり彼の命令以外で動いてはならないともされている。

黄金聖衣

最上級の黄金に輝く聖衣。全部で十二個存在する。他の聖衣に比べてガードする範囲が遥かに大きく、またその能力も高い。同時に個々の意志を持ちかこの装着者の記憶も蓄積されておりこれが意識を形成する一因にもなっている。また装着者がいなくとも移動することもある。完全に破壊されたことすらなくその強さは装着者であ

る黄金聖闘士達と並んで聖域の象徴でもある。

第七感

視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五感と第六感の上にある第七感を指す。小宇宙を燃焼させそれを究極まで高めると目覚められるとされている。また、これに目覚めると小宇宙が限りなく増大し光速の動きに目覚めると言われている。黄金聖闘士になるにはこれに目覚めることも必要条件の一つである。

設定資料その三

双子座のサガ

双児宮を守護する黄金聖闘士であり今聖域にいる聖闘士達の中でも最強とも謳われている。高潔で謙虚であり誇り高くまた慈しみの深い心の持ち主である。しかし己の中に邪悪なものも抱えているが自分ではそれに気付いてはいない。今聖域にいる聖闘士達のリーダー的存在でもある。指導力もかなりのものでありまだ若く個性もかなり強いアイオロス以外の黄金聖闘士達を正しく導いている。異次元や星達を使う術を使うことからその小宇宙の途方もない強さを感じさせる。

射手座のアイオロス

人馬宮を守護する黄金聖闘士であり獅子座のアイオリアの実の兄でもある。勇敢で情も知る男。生真面目であり弟に対しても時として優しく時として厳しい兄である。まだ若い多くの黄金聖闘士達にとっては頼りになる兄とも言うべき存在である。正義を純粋に信じている。その強さと人柄は周囲から、とりわけ教皇であるシオンから深く信頼されており次期教皇にとも考えられている。

牡羊座のムウ

白羊宮を守護する黄金聖闘士。現教皇であるシオンの直弟子であり聖衣を修復する能力を身に着けている。超能力を得意としておりその小宇宙は若い黄金聖闘士達の中でもシャカに次ぐものがある。温和な性格であり常に微笑みを忘れないが本気になった時には誰よりも激しい闘志を見せる。黄金聖闘士達の参謀でありまた個性の強い彼等の調整役でもある。かなりの心配性の一面もある。

牡牛座のアルデバラン

金牛宮を守護する黄金聖闘士。正々堂々とした豪放磊落な性格をしておりその外観は武人そのものの顔と頑健な巨体である。黄金聖闘士の中で最も体格に恵まれておりそのパワーは随一とまで言われている。その戦術も居合いを思わせるものから地震に匹敵する力を持つものと彼らしいものがある。面子や理屈よりも己が見たものを信じる性格でもある。また身内に対しては鷹揚だが礼儀にはかなり厳しい。かなり清潔で奇麗好きな一面もあり花を愛する繊細さも併せ持っている。

設定資料その四

蟹座のデスマスク

巨蟹宮を守護する黄金聖闘士。力こそが正義であると考え善悪は時代と共に変わるとも考えている。冥府に強く関わる術を得意とし目的とあれば誰であろうと手にかけることができそれを誇りとさえ考えている。だがれっきとしたアテナの聖闘士でありその正義はあくまで人としての正義である。偽悪的な傾向も強く悪ぶった発言も多いが身内を失うことは好まない。とりわけ傲慢な神といった存在には嫌悪感を露わにする。

獅子座のアイオリア

獅子宮を守護する黄金聖闘士。射手座のアイオロスの実の弟でありその実力は兄には劣るもののかなりのものを誇っている。拳を主な武器としており生真面目かつ勇敢な性格であり無駄な血を流すことを好まない。偉大な聖闘士である兄を深く敬愛しており彼に少しでも近付こうと精進を怠らない。また公平な性格であり自ら敵に真っ先に突っ込むことから部下達からもかなり慕われている。

乙女座のシャカ

処女宮を守護する黄金聖闘士。その小宇宙は若手の黄金聖闘士達の中で際立って高く彼等の誰もが一目置いている。「最も神に近い男」と呼ばれ仏陀の転生とも言われている。普段は目を閉じているが目が見えないわけではない。その超能力も他の世界まで巻き込む術もまた他の黄金聖闘士達ですら比較にならず時空すら超えることが可能。だがあまりにも神に近い性格の為か積極的に動くことは少なくその実力を見せることも少ない。教皇シオンの相談役でもある。

天秤座の童虎

天秤宮を守護する黄金聖闘士。前の聖戦であるハーデスとの死闘を現教皇シオンと共に生き抜いた伝説の聖闘士。天秤座の聖闘士であるが天秤宮を主語してはおらず前の聖戦で封印したハーデスと百八の冥闘士達を監視する為に五老峰にいる。その為聖域に来ることはない。しかしその小宇宙はかなりのものを持っており黄金聖闘士達を育て上げたのも彼である。その為多くの聖闘士が彼には頭が上がらない。その実力は黄金聖闘士の中で最強とも言われている。

設定資料その五

蠍座のミロ

天蠍宮を守護する黄金聖闘士。普段は冷静さを保っているが時として激情を見せる時もある。また情に篤い一面がある。

山羊座のシュラ

磨羯宮を守護する黄金聖闘士。その両手と両足がとてつもなく鋭利なものになっており鋭さは黄金聖闘士達の中でも最強のものとなっている。とりわけ右手の手刀の威力は凄まじくそれを最も多く使用する。武人気質の男であり正義は貫くものであると考えている。その為時として力こそ正義という考えにもなり必要とあらばどの様な者でも一撃で切り捨てる覚悟も持っている。しかしその心はあくまでアテナの聖闘士である。

水瓶座のカミュ

宝瓶宮を守護する黄金聖闘士。氷と水を操る術を得意としておりとりわけ氷を使った術を駆使する。クールな性格をしており常に冷静であり戦闘においてもそれは遺憾なく発揮され相手を倒していくがその心の底には熱いものも存在している。戦闘においては時として非情とも取れる行動に走り犠牲も時としては止むを得ないとも考えている。その時もクールに徹しているが心の中では違う。

魚座のアフロディーテ

双魚宮を守護する黄金聖闘士。十二宮最後の宮殿の守護者としてどの様な力にも属さず最後の護りを務める。その信念は力であると

いう考えもあるがそれ以上に美に強い信念を持っており最高の美を持つ者こそが真の強者と考えている。様々な薔薇を駆使して戦う。一見すると女にも見える美しい外見を持っているがその心は紛れもなく男のものであり闘いにおいては静かだが強い闘志をも見せる。相手の実力は素直に認める。

設定資料その六

白銀聖闘士

聖闘士のランクでは第二に位置する白銀の聖衣を身に纏う二十四人の聖闘士。一般の白銀聖闘士の速度は、音速にして二から五程度である。聖域からの勅命で動くのは白銀聖闘士であり実戦においての指揮官としての黄金聖闘士の補佐や前線での指揮及び戦闘といった佐官的役割や青銅聖闘士の育成及び監督、青銅聖衣の管理も行う。白銀聖闘士は青銅聖闘士よりもさらに上の実力を持っておりその差は天と地程まで開いているとされている。中には第七感や光速の動きこそないものの黄金聖闘士達も認める実力者達も存在している。

白銀聖衣

白銀の輝きを放つ聖衣。黄金のそれとは違い聖衣自体には一部を除き特別な能力はない。しかし青銅聖衣と比べてガードする部分が多く聖衣としての防御力も高くなっている。それが青銅聖闘士との実力を分けるものにもなっている。

青銅聖闘士

青銅聖衣を身に纏う聖闘士。そのまま前線で戦うことも多いが基本的には雑兵の直接の指揮官や上の位置にある白銀聖闘士の補佐がその主な仕事である。その速度は音速かそれより上程度である。小宇宙の強さも黄金や白銀のそれと比べると実に弱いものである。

青銅聖衣

青銅聖闘士が身に纏う聖衣。そのガードの範囲も強度も一番劣る。

だが中には特別な能力を持つものもある。またそのカラーリングは聖衣によって異なっている。雑兵の鎧とは全く違い確かな強さがあるのはアテナの戦士である証である。

設定資料その七

星座名	装着者
白銀聖闘士	
蛇遣い星座	シャイナ（女）
鷲星座	魔鈴（女）
蜥蜴星座	ミスティ
白鯨星座	モーゼス
猟犬星座	アステリオン
ケンタウルス星座	
烏座	バベル
ペルセウス座	ジャミアン
御者座	アルゴル
地獄の番犬座	カペラ
ヘラクレス星座	ダンテ
銀蝿座	アルゲティ
巨犬座	ディオ
ケフェウス星座	シリウス
孔雀座	ダイダロス
蓮座	シヴァ
矢座	アゴラ
琴座	トレミー
南十字星座	オルフェ
楯座	不在
三角座	不在
コップ星座	ノエシス
牛飼座	不在
祭壇星座	タントス
	アラミス（女）

星座名	装着者
天馬座	不在
龍座	不在
白鳥座	不在
アンドロメダ座	不在
鳳凰座	不在
一角獣星座	不在
子獅子星座	不在
海蛇星座	不在
大熊星座	不在
狼星座	不在
カメレオン星座	ジュネ（女）
子狐星座	スカーレット（女）
旗魚星座	ゾルダ
巨嘴鳥星座	ブラウ
彫刻具星座	ライマン
彫刻室星座	オズ
子馬星座	シオン
蛇星座	ラシャー
カシオペア星座	クレウサ（女）
風鳥星座	カサンドラ（女）
麒麟星座	チク
鳩星座	グリーザ
鶴星座	メビウス
飛魚星座	シュミット
海豚星座	パラオ

小熊星座
兎星座
インディアン星座
テーブル山星座
南魚星座
南冠星座
冠星座
南三角星座
オリオン座
定規星座
コンパス星座
顕微鏡星座
望遠鏡星座

アクタイオン
　ジャッカー
イロコイ
山鬼
クルト
オックス
ベルリーニ
ミナクス
シフォン
カービル
マクベス
キラ
ブリット

時計星座
炉星座
ポンプ星座
画架星座
レチクル星座
六分儀星座
八分儀星座
帆星座
山猫座
船尾星座
羅針盤星座

ニコライ
ペテル
クリス（女）
ワルター
サミュエル
ザンドルフ
レッシュ
　アンタス
レツ
　不在
　不在

謎の聖衣
竜骨座
髪の毛座

設定資料その八

アーレス

戦いを司る神。でありオリンポスの神々の一人とはまた異なる。戦皇と称されアテナが正義と防御を旨とする戦いとは反対に、血と虐殺、闘争と暴力を好む傾向にある。その気性の為他の神々から疎まれ孤立した存在であるが冥皇であるハーデスとは友好関係にある。

ただし先の聖戦においてアテナの聖闘士達に敗北しその結果冥界に逃げ込みハーデスに保護されていた。

だが長き年月を経て己の軍勢である狂闘士達と共に蘇りこの度世界を征服する為に侵攻を開始した。

紅蓮の衣に身を包み燃える様な紅い瞳と黒い髪を持つ若々しい美男子の姿をしている。だがその瞳からは剣呑な光を放っている。

その宮殿はトラキアにあり聖域のあるアテネとも近い。その為アテナとは古来より衝突を繰り返してきている。狂闘士の他に妹であり参謀でもあるエリス、側近として四人の闘神達を従えている。普段はその紅蓮の玉座に座っている。

エリス

アーレスの妹。彼の側に常に控える白い死者を思わせる肌に黒の髪と燃え上がるような赤い瞳を持つ猛々しい美女。不和と争いを司りアーレスの参謀、巫女を務める。兄の代理として狂闘士達に指示を出すこともある。音楽を愛しそれで奏でる一面もある。

四闘神

アーレスの側近である四柱の神々。戦を司るアーレスの力の一部を担う従神達でありアーレスの側にエリスと共に控える。その立場

はエリスよりも下で彼女の言葉に従うこともある。神でありその小宇宙は人のものとは比較にならないまでに大きい。ハーデスに従うタナトス、ヒュプノスに相当する位置にある。また彼等は兄弟である。だがその性格はかなり違っている。

設定資料その九

デイモス

アーレスの側近である四闘神の一人であり恐怖を司る。銀色の髪と目を持つ若者であり己の戦衣も持っている。精悍で引き締まった顔をしている。人の心に恐怖を与えることができる。アーレスに対して最も強い忠誠心を持っている。

ポポス

アーレスの側近である四闘神の一人であり敗走を司る。金色の髪と瞳を持つ若者であり己の戦衣を持っている。長い髪を持ち穏やかな顔をしている。敵の軍勢をカ敗走状態に陥らせることができる。思慮深く慎み深い性格。

キュドイモス

アーレスの側近である四闘神の一人であり混乱を司る。白い髪と瞳を持つ若者であり己の戦衣を持っている。鋭い目に深い皺が一筋ある顔をしている。相手を混乱させることができる。陰険な策士でもある。

ケーレス

アーレスの側近である四闘神の一人であり戦死を司る。黒い髪と瞳を持つ若者であり己の戦衣を持っている。大柄で獰猛そうな顔をしている。その腕を振るうだけで多くの者が戦場に倒れる。攻撃的で粗暴な性格。

狂闘士（バーサーカー）

アーレス配下の戦士達。火、炎、災難、恐怖の四つの軍団に別れており八人の最高位の戦士達、即ち『八大公』に率いられている。かつてソロモン王に封印され西欧において魔王と恐れられた魔神達がその姿である。爵位による階級制度があり同志達であってもそれが厳しく守られている。とりわけ最高位である八大公の権限は強いものである。また雑兵もおり彼等はインプと呼ばれている。また狂闘士達の中には女性も存在する。軍団はそれぞれ『火』、『炎』、『災難』、『恐怖』の四つの軍団に分けられている。雑兵達は狂闘士によって率いられる。また軍団に所属する者達の他にアーレスの妹であるエリスや四闘神の指示で動くことの多い独立部隊である四騎士も存在する。

設定資料その十

狂闘士達の階級
大公
公爵
侯爵
伯爵
子爵
男爵
公子
雑兵

大公は黄金聖闘士や七大海将軍、冥界三巨頭に匹敵する存在である。その力もかなり強い。また騎士は公子に値する。

八大公

アーレスに従う狂闘士達の最高位に位置する八人の戦士達。狂闘士達を率いて前線で戦う。聖域で言うならばまさに黄金聖闘士と言うべき存在でありその小宇宙も相当なものがある。第七感も持っている。その為光速で動くことも可能。戦闘力も傑出しており他の狂闘士達と比較して隔絶たるものがある。普段はトラキアにあるアーレスの宮殿にいる。大規模な攻勢や特別な場合に限ってアーレスやエリスの命により出撃し軍団の指揮を執る。

戦衣（アーマー）

狂闘士達がその身にまとっている鎧。聖闘士の聖衣や海闘士の鱗衣、冥闘士の冥衣に値するものである。特徴としては赤い血の色の輝きをしており魔神達も姿をしていることである。また各人用の専

用武器があるもののもある。
邪衣には各人用の専用武器がついている狂闘士もある。

狂闘士一覧	
八大公	
戦衣名称	戦衣外観
装着者	
ルキフグス	三つの角を持つ山羊の足と尻尾を持つ男
リーヴェ	
ベルゼブブ	巨大な蝿
カナン	
サタナキア	牛の頭を持ちユニコーンに乗る男
サリア	
アスタロト	ドラゴンに乗る蛇を持った天使
ミシェイル	
ベリアル	炎の戦車に乗る堕天使
レダ	
モロク	牛の頭を持つ大男
ドーマ	
アスモデウス	牛、羊、人の三つの頭と鵞鳥の脚を持つ男
リゲル	
ベール	老人、猫、蛙の頭を持つ蜘蛛
ジーク	

設定資料その十一

火軍団

戦衣名称	爵位	戦衣外観
アロケン	公爵	獅子の頭を持つ鎧に身を包んだ馬に乗る戦士
ザカリア	公爵	グリフォンの翼と蛇の尾を持つ狼
マルコキアス	シエラ（女）	
キメリエス	公爵	甲冑に身を包み馬に乗る騎士
リシュエル		
ナベリウス	侯爵	三つ首の鶴
ヨーダ		
オリアス	侯爵	獅子に乗る馬の顔の男
ハガル		
プルソン	侯爵	獅子の頭の逞しい熊に乗る獣人。
ビルフォード		
ハルパス	伯爵	剣を持った鳩
バド		
ブエル	伯爵	星型のヒトデ
ジュリア（女）		
イポス	伯爵	家鴨の脚に獅子の頭、兎の耳の天使
リベカ（女）		
オロバス	子爵	立ち上がった馬
エゼキエル		
ガープ	子爵	蝙蝠の羽を持つ毛皮の男
パイソン		
ゴモリー	子爵	駱駝に乗ったレースをまとう美女
エンテ（女）		

グシオン　男爵　梟の頭に熊の身体、蛇の下半身
クリシーヌ
サレオス　男爵　鰐に乗る王冠を被った戦士
カムイ
ヴェパール　男爵　長い髪に海草を絡ませた人魚
クレア（女）
ベリス　公子　顎鬚を持つ戦士
ディーン
エリゴル　公子　ランスを持つ鎧の騎士
レネ（女）
ウコバチ　公子　炎に包まれた大きな頭と鼻を持つ
小男　パイソン

炎軍団
戦衣名称　爵位　戦衣外観
装着者
ネビロス　公爵　牛頭に杖を持つ老人
クレーベ
アガリアレプト　公爵　一対の小さな角と蝙蝠の翼を持つ悪魔
レティーナ（女）
アモン　公爵　梟の頭と蛇の尾を持つ狼
マーテル（女）
フォルネウス　侯爵　巨大な目を持ちその脚が武器の烏賊
フォルス
ラウム　侯爵　禍々しい巨大な爪を持つ烏
カトリ（女）
ボティス　侯爵　下半身が蛇で一対の牙と牙、刀を持
つ男　アトラス
アミィ　伯爵　炎に包まれた巨人
バルボ

フラウロス　伯爵　グリフォンの翼を持つ豹
リーリエ（女）
グランシャラボス　伯爵　グリフォンの翼と猟犬の牙を持つ中年
学者リュート
ヴァラク　子爵　双頭の龍に乗る子供の天使
ボーイ
オセ　子爵　二本足で立つ優美な豹
リベカ（女）
カイム　子爵　ツグミの頭と杖を持つ貴族
ロビン
ブロケル　男爵　武装した猫の目の麗人
ティータ（女）
フォカロル　男爵　天使の翼を持つ鱗の男
グレイ
ブネ　男爵　龍、鷲、狼の頭を持つドラゴン
クリフ
アイニ　公子　人、蛇、牛の頭を持ち蜥蜴に乗る松明
の男レオ
ロノベ　公子　木と合わさった腹が樽のドワーフ
シルク（女）
マステマ　公子　蝙蝠の翼を持つ天使
デューテ（女）

設定資料その十二

災難の軍団

戦衣名称　爵位　戦衣外観
　装着者

バシン　公爵　死んだような馬に乗る尾が蛇の死人
　セーバー

ザガン　公爵　鷲の翼の牡牛
　ジェシー

ヴィネ　公爵　毒蛇を持ち馬に乗った獅子頭の貴族
　ジュリア（女）

アガレス　侯爵　鰐に乗る年老いた賢者
　フォルス

ガミギン　侯爵　不気味な驢馬
　ナロン

レラジエ　侯爵　弓矢を持った猟師
　アーキス

シャックス　伯爵　コウノトリ
　ケイト（女）

ビフロンズ　伯爵　牛の角を持った犀
　ガロ

フールフール伯爵　鹿の頭と脚を、蝙蝠の翼を持つ男
　ラフィン

マルバス　子爵　長い鬣の獅子
　ヴェーヌ（女）　マルパス　子爵　烏
　フラウ（女）

ハゲンティ　子爵　牛の頭と鷲の翼の男
　バーツ

ヴァッサゴ　男爵　骸骨の顔の鰐に乗った老人

ラケル（女）　人型で武装した獅子
サブナック　男爵　グリフォンに乗った騎士
ヴェガ
ムールムール男爵　バイオリンを持った悪魔
マルジュ
アムドシアス公子　メル（女）　馬に乗った王
ベレス　公子　ノートン
フールカス　公子　馬に乗り大鎌を持った冷酷な老人
トムス

設定資料その十三

恐怖軍団

戦衣名称	爵位	戦衣外観
装着者		
サルガタナス	公爵	三つの角と長い鼻を持つ貴族
ロジャー		
パイモン	公爵	駱駝に乗った王
ゼノ		
フルーレティ	公爵	ドラゴンの頭に剣と斧を持った男
ユニ（女）		
バラム	侯爵	熊に乗り蛇を持つ人、牛、羊の頭の男
メリエル		
アンドロマリウス侯爵		駝鳥の脚を持つ梟
ナルサス		
アンドラス	侯爵	梟の頭をした剣を持ち狼に乗る男
シャロン		
バルバトス	伯爵	マントと大きな帽子の猟師
サン（女）		
デカラピア	伯爵	五芳星型をした人間
ミンツ		
シトリ	伯爵	豹の頭を持つ天使
リィナ（女）		
アンドレアルフス子爵		立ち上がった孔雀
エリシャ（女）		
モラクス	子爵	牛頭の学者
シゲン（女）		
フォラス	子爵	年老いた学者
サムソン		

セエレ　男爵　鷲の翼を持つ馬に乗った長髪の男

ライネル

ストラス　男爵　ツグミ

アトロム

フェニックス　男爵　フェニックス

レニー（女）

ダンタリアン　公子　辞書を持った老人

シロウ

ヴァレフォル　公子　驢馬の頭の獅子

レオンハート

ヴァピュラ　公子　グリフォンの翼を持った獅子

ロファール

四騎士　爵位

戦衣名称　戦衣外観

メフィストフェレス　騎士　正装をした小粋な悪魔

ファウスト

ベルフェゴール　騎士　便器に座った翼のない悪魔

イシュティス

バフォメット　騎士　女の上半身に蝙蝠の翼を持つ山羊

メンデス（女）

アリオク　騎士　剣を腰に下げた貴公子

エノク

設定資料その十四

リーヴェ

八大公の一人でありルキフグスの戦衣の男。八大公のリーダー的存在。女にも見える中性的な顔と長い金髪を持っている。冷静沈着で思慮深い性格であり穏やかな物腰である。だが闘いにおいては絶大な小宇宙を見せる。その小宇宙は何者をも包み込みそこに引き擦り込む。ブラックホールを思わせるものがある。恐怖の軍団を率いる。

カナン

八大公の一人でありベルゼブブの戦衣の男。黒い髪に深い湖を思わせる青い目を持っている。冷酷非情であり他人を完全に手駒とみなしている。また目的の為には女子供とて平然と手にかける。死を当然のものと考えておりそこに予断はない。死を操る術や死体を動かすことを得意としており自らを地獄の主と称している。恐怖の軍団を率いる。

サリア

八大公の一人でありサタナキアの戦衣の男。柔らかな物腰と少女に見える顔を持っている。八大公の参謀的存在でありエリスからの信任も篤い。言葉使いも穏やかなものであり八大公の中で一番年下に見える。狂闘士でありながら闘いを最低限に抑えようとする傾向がある。流星を操ることができる。災難の軍団を率いる。

ミシェイル

八大公の一人でありアスタロトの戦衣の男。白く長い髪に瞳を持っている。青年めいた顔立ちをしている。表面上は精悍に見えるが感情が昂ぶると狂闘士達の中で最も残虐な男になる。その口から恐ろしい毒を吐くことができまた氷の術を使うことを得意としている。災難の軍団を率いる。

レダ

八大公の一人でありベリアルの戦衣の男。黒い目と瞳を持っており堕落した耽美的な雰囲気を漂わせている。卑劣な手段も平然と行い策略も得意としている。だが戦闘においては逃げることがなく黒い炎を使って攻撃する。八大公の中では何かと他者をからかうことも多い。炎の軍団を率いる。

ドーマ

八大公の一人でありモロクの戦衣の男。くすんだ金髪と鳶色の目をしている頑健な大男。力技を何よりも得意としており豪放磊落で器の大きい男。部下を何よりも大事にしておりアーレスを戦いの神であると純粋に崇拝している。その為レダやカナンからはからかわれることもあるがサリアからは高く評価されている。炎の軍団を率いる。

リゲル

八大公の一人でありアスモデウスの戦衣の男。蜂蜜色の髪と若々しい顔に茶色の瞳。クールで自信に満ちた性格であり他者を見下すことも多いがその実力はしっかりしたものである。拳を使った闘いを行い実戦での戦闘で全てを解決することこそが狂闘士だと考えている。一匹狼的存在であり狂闘士を率いることは少ない。火の軍団

を率いる。

ジーク

八大公の一人でありベールの戦衣の男。銀色の髪と瞳を持っているがその瞳は白い部分が黒くなっている。狂闘士で最も優れた剣術を誇っており何者も切り裂く。ニヒリズムを漂わせているが仲間内においてはその付き合いは深い。剣を抜いた時は相手を必ず倒そうとする性格である。火の軍団を率いる。

第一話　狂闘士強襲その一

第一話　狂闘士強襲

聖域。普通の者はその存在すら知ることのない隠された場所に彼はいた。黄金の眩い鎧と白いマントを羽織った男だった。

その身体は均整がとれ美しくまるで彫刻の様だ。髪は長く白い。その白い髪を腰まで伸ばし顔は秀麗でやはり彫刻を思わせる。その彼が今神殿を思わせる巨大な宮殿の中を進んでいた。彼は大理石の床に敷かれた紅い絨毯の上を歩き灰色の石柱の間を進んでいた。その中を進んでいたのであった。

「サガ様」

その彼に左右にいた衛兵達の中の一人が声をかけてきた。彼等は褐色の鎧に槍を持っている。

「ようこそ来られました」

「教皇からの直々の御呼びとのことだが」

「はい」

彼をサガと呼んだその衛兵は彼の言葉に応えて一礼した。それからまた述べてきた。

「その通りでございます」

「そうか。それで急いでここに来たのだが」

「双児宮からですか」

「そうだ」

サガは彼の問いに答えた。硬い、それでいて澄んだガラスを思わせる声だった。

「危急のお呼び出し、一体何事か」

「申し訳ありませんがそこまでは」

だが衛兵は彼のその問いには顔を曇らせて答えるだけであった。

「私ではとても」

「そうか」

「申し訳ありません」
「いや、謝る必要はない」
サガはそれをよしとして咎めはしなかった。
「私が教皇に直接御聞きすればいいのだからな」
「左様ですか」
「そうだ。では失礼する」
こうして彼は宮殿のさらに奥に向かった。奥まで辿り着くとその先に玉座を思わせる座があった。赤絨毯はその座が置かれた場をつなげている階段にまで続いている。座には白い法衣と黄金の兜の仮面の男がいた。兜の装飾が輝き眩い光を放っている。
「教皇」
サガは彼の前まで来るとその片膝をついた。そしてその姿勢で一礼するのだった。
「ジェミニのサガ、只今参上しました」
「うむ、サガ」
教皇はまず彼に対してよく来てくれた。
「まずは顔を上げよ」
「はい」
こう告げて彼に顔を上げさせる。サガもまたそれに応える。
「今日御前に来てもらったのは他でもない」
「といいますと」
「まずはだ」
教皇はここで一旦言葉を止めた。そしてサガから顔を離し彼のさらに後ろを見たのであった。
彼はそこにサガと同じだがその形が大きく異なる翼を生やした黄金の鎧とこれは同じ白いマントを羽織った若者を見ていた。引き締まった精悍な顔をしており茶色の髪は燃え上がる炎を思わせる形をしている。彼はサガの横に来ると彼と同じように片膝をつき教皇に対して一礼したのであった。
「教皇、サジタリアスのアイオロス、只今参上しました」

「御前も来たな。これでよい」
「教皇、何があるのでしょうか」
サガが怪訝な顔で教皇に対して問うた。
「黄金聖闘士が一度に二人も呼ばれるなぞ」
「そうです」
アイオロスもまたそれを教皇に問うのだった。
「私達一人が呼ばれるだけでも何かがあるというのに二人までとは」
「一体何が」
「二人では済まない」
しかしシオンはここでこう二人に告げてきた。

第一話　狂闘士強襲その二

「二人ではと」
「それは一体」
「昨日スターヒルに上がった」
教皇はまず昨夜のことを二人に話した。
「スターヒルに」
「そうだ。そして私は見た」
サガに答える。
「赤い禍々しい星が輝きを増しているのをな」
「赤い星」
「まさか」
「そうだ」
また二人の言葉に答える。
「御前達が思っている通りだ。大きな戦いがはじまろうとしている」
「では我々にその戦いに赴けと」
「そう仰るのですね」
「今はいい」
それは否定した。
「今はこの聖域を護っているのだ。今聖域にいる黄金聖闘士は御前達二人だけだ」
「はい」
二人は同時に教皇のその言葉に頷いた。今黄金闘士は三人いる。だがもう一人のライブラの童虎は特別な任務により聖域を離れ今ここにはいない。従って今聖域にいる黄金聖闘士は彼等二人だけなのだ。
「だからだ。今は」
「この聖域を護っていろと」
「そうだ。そしてアイオロス」

「はい」
今度はアイオロスに声をかけた。彼もそれに応える。
「アイオリアはどうか」
「既にレオの黄金聖衣を身に着ける資格を備えました」
「セブンセンシズに目覚めたのだな」
「そうです。これで」
「十二人全員揃った」
教皇はアイオロスの言葉を聞いてあらためてこう述べた。
「遂にな。では新たに黄金聖闘士となる者達がこの聖域に来るまでは」
「私達はここを離れるなと」
「そうだ。よいな」
あらためて彼等に命じる。
「あの者達に備えてだ。また各地に散っている白銀聖闘士や青銅聖闘士達も呼び寄せる」
「彼等は既にそこまで」
「そうだ。目覚めようとしている」
また二人に告げた。
「既に多くの者達が」
「では我々は他の黄金聖闘士達がここに入るまで」
「今聖域にいる白銀聖闘士や青銅聖闘士達を指揮し備えるのだ。いいな」
「わかりました。それでは」
「そのように」
二人は教皇の言葉に一礼しそれに従うのだった。この時聖域のあるアテネから離れたトラキアの地において赤い禍々しい巨大な宮殿が姿を現わしていた。
壮麗ではなかった。床も天井も石柱も全てが赤くそれは血の色に似た赤だった。殺伐とした禍々しい雰囲気を漂わせておりその赤の中に眩い黄金が散りばめられているがそれがかえってこの宮殿の禍

々しさを映し出していた。その宮殿の中を翼を持つ赤い鎧とそれと同じ色の三叉の槍を持つ者達が動き回っている。その彼等に対して青い長い服を着た赤い髪の女が問うのであった。

「皆集まっておるか」

「はい」

その兵士の中の一人が女の問いに対して答えた。

「既に皆封印から復活しこの宮殿に集まっております」

「左様か」

女はそれを聞いてまずは満足したように頷いた。そのうえでまた言うのだった。

「それでは全軍で一気に攻めるぞ」

「聖域にですか」

「左様。今はまだ奴等の要たる黄金聖闘士が二人しかおらぬ。そこを突く」

「そうして勝利を収めるのですね」

「その通りだ。よいな」

「はい、それでは」

女の言葉に頷くと彼だけでなく他の兵士達も動きだした。それは戦場に向かう者達の動きであった。女はそれを眺めながら一人呟いた。

第一話　狂闘士強襲その三

「アーレス様が復活されるまでもない」
静かで美麗だが何処か血に塗れたものを思わせる声であった。
「ここで陥落させてみせる。聖域をな」
最後にこう呟くと踵を返し何処かへと去るのだった。彼女もまた何処かに向かおうとしていた。
聖域。今ここに多くの聖闘士達が集まっていた。青銅聖闘士もいれば白銀聖闘士もいる。彼等は聖域のコロシアムに集まりそこで待機していた。コロシアムの中はローマにあるそれと酷似しておりかなりの大きさだ。しかし今ここにいるのは聖闘士達だけであり他の者達はいなかった。
その中で白銀の聖衣を着ている者達の中で話す者達がいた。隻眼の大きな男が女と見紛うばかりの美麗な顔の男に声をかけていた。
「ミスティ」
「どうした、モーゼス」
「この度の召集はどう思うか」
ホエールのモーゼスはリザドのミスティに対してそれを問うのだった。彼は怪訝な顔でミスティに問うていた。
「この度の召集か」
「そうだ。突如として全聖闘士を集めた」
「しかも噂によればだ」
もう一人出て来た。精悍な顔をした男だ。
「サガ様とアイオロス様も直々に出られるらしい」
「何っ！？」
ミスティもモーゼスもサガとアイオロスの名を聞いて思わず声をあげた。
「黄金聖闘士も出るというのか」
「しかも二人もか」

「まだ噂だがな」
その男セントールのバベルはこう二人に述べた。
「どうやらな」
「馬鹿な。黄金聖闘士が二人もだと」
「今聖域にいる御二人がか」
「これは間違いなく何かあるな」
次に出て来たのはやや小柄な男だった。ハウンドのアステリオンである。
「サガ様もアイオロス様もその御力は歴代の黄金聖闘士の中でもかなりのものだという」
「うむ」
それだけサガもアイオロスも力はかなりのものがある。しかも黄金聖闘士は一人だけでもそれこそ世界を左右できるだけの力があり聖域にとっては最後の切り札だ。その黄金聖闘士が二人も出るということはこれまでの聖域の長い歴史でも滅多になかったことだったのだ。それこそ聖戦でもない限りは。
「その御二人が出られるとは」
「しかも我々を全員集める」
「あたし達だけじゃないよ」
赤い髪をした仮面の女が出て来た。服はスパッツ状のレオタードになっている。
「魔鈴か」
「黄金聖闘士が全員揃ったね」
「あ、ああ」
「そうらしいな」
四人は魔鈴のその言葉に応えた。
「連中も全員来るさ」
「黄金集結か」
「そうさ。確か前の聖戦以来だったね」
冥皇ハーデスとの聖戦のことだ。その殆どの聖闘士が倒れたとい

う。
「全員集結するっていうのは」
「いや、一人おられん」
だがここでアステリオンが言う。
「ライブラの老師だけはな」
「そうだったね」
魔鈴もそれは気付いていなかった。不意にそれに気付いて言う。
「それは済まない」
「だが。私達と同じくあの方々も確か」
「そうさ。聖闘士になって間もない」
今度はミスティに答えた。

第一話　狂闘士強襲その四

「ここにいる多くの奴と同じさ。なりたてさ」
「そうだったな。それで満足に戦えるのかどうか」
「おいミスティ」
バベルはふと弱気なように見えたミスティを咎める。
「そんなことを言っているとそれこそ」
「むっ、そうだな」
ミスティ自身もそれに気付いて言葉を訂正した。
「できるかどうかではなく果たさなければならないのだったな」
「その通りだ。だからこそ」
また一人白銀聖闘士が出て来た。今度はペルセウスのアルゴルであった。
「私達は聖闘士になったのだ。違うか」
「御前の言う通りだ、アルゴル」
ミスティはアルゴルのその言葉に頷いた。
「では。私達もまた」
「この力の限り戦うよ」
「ああ」
皆魔鈴の言葉に頷く。彼等はコロシアムで待機を続ける。このことは教皇の耳にも届いていた。
「ほぼ全員集結しました」
「白銀及び青銅の者達はか」
「はい」
教皇の前にはサガがいる。片膝をつき報告をしていた。
「今聖衣を纏っている者は全員」
「よし。あちらにはアイオロスを向かわせた」
「アイオロスをですか」
「彼に白銀及び青銅の指揮を執ってもらう」

教皇の考えはこうだったのだ。その為にコロシアムに集結させたのである。
「そしてサガ」
「はっ」
今度はサガに声をかけた。サガもそれに応える。
「御前はこの十二宮の守護を頼む」
「ここのですか」
「間も無く来る」
教皇は言う。
「彼等がな」
「彼等が」
「感じないか」
声が鋭いものになる。その声でサガに問うのだった。
「今聖域に迫るこの幾多の血に餓えた小宇宙を」
「小宇宙を・・・・・・むっ!?」
「・・・・・・感じたな」
「・・・・・・はい」
その瞬間に顔色を変え今は。冷や汗を一筋流しながら教皇の言葉に頷くのだった。その整った顔が強張っていた。
「今確かに」
「すぐに十二宮の入り口に向かえ」
あらためて指示を出す。
「よいな」
「はっ、それでは」
すくっと立ち上がり教皇に一礼してからその場を後にする。教皇はサガのその後姿を見ながら呟くのだった。
「あの者達がここに着くまで。持ち堪えてくれるな」
サガとアイオロスに期待する言葉だった。彼は二人に重い任務を与えながらもそれでも彼等を暖かい目で見ているのだった。教皇として。

サガが十二宮の入り口に立って暫くすると。彼の目の前に異様な集団が姿を現わしたのだった。

「むっ！？」

「ジェミニのサガだな」

見れば彼等は赤い、血の色の輝きを放つ鎧に身を包んでいる。そして蝙蝠の翼を生やし三叉の槍を手にしている。全体的に聖域の雑兵達よりも重武装である。

「その聖衣を見る限り」

「聖衣を知っていると見えるが」

「如何にも」

彼等の中の一人が答えた。小柄で卑しい顔をしている。

「聖衣のことは既に知っている」

「先の戦いのことも知っているからな」

「先の戦いか」

サガはその言葉を聞いてまずはその目を僅かに鋭くさせた。だが赤い鎧の者達の大群を目の前にしても全く臆するところはなかった。

第一話　狂闘士強襲その五

「遥かな神話の時代の話だったな」
「その通りだ」
「もっと我等とてその時代の戦いは知らないがな」
それは彼等も知らないことであった。当然と言えば当然だが。
「しかしだ」
「しかし！？」
「先の聖戦での恨みはわかっている」
「今度こそ貴様等聖闘士を倒し地上の覇権を」
「愚かな」
サガは彼等のそんな言葉を一蹴した。
「地上は貴様等の世界ではない。貴様等は本来オリンポスにいるのではないのか」
「黙れ！」
「オリンポスの名は出すな！」
彼等はサガの口からオリンポスという言葉を耳にしてすぐに攻撃的な態度を見せた。
「あの様な場所我等にとって未練はない」
「そうだ、我等に必要なのは地上の覇権」
「それは先の聖戦で否定された筈だが」
サガはあえて冷徹に彼等に告げるのだった。
「そして冥界に逃げ込んでもまだ飽き足らぬというのか」
「戦皇アーレス様は間も無く冥界から出て来られる」
彼等は言う。
「その時こそ我等が地上を支配する時」
「我等狂闘士がな」
「自分達から名乗ったか」
サガは狂闘士という名を聞いて目を閉じて呟いた。

「では御前達が着ているその鎧こそ」
「そうだ、戦衣だ」
自分達の赤く輝く鎧をサガに誇示するかのように見せつけての言葉だった。
「これこそアーレス様の象徴」
「戦場での美しき血の色だ」
「その血でこの聖域を染めるとでもいうのか？」
「聖域だけで済むものか」
サガの言葉をせせら笑いつつ語る。
「我等はこの世界全てを赤く染め上げるのだ」
「戦いの、アーレス様の力でな」
「そうか。では私は」
サガは彼等のその言葉に応えるかのように身体に力を溜めはじめた。するとその全身から気高さと強さを感じさせる黄金色の小宇宙を出すのだった。
「！？こ、こいつ」
「この小宇宙は」
「一つ言っておく」
サガは小宇宙をみなぎらせながら狂闘士達に対して問うた。
「な、何だ！？」
「何を言うつもりなんだ、こいつ」
「命が惜しいのならすぐにここを立ち去れ」
こう彼等に告げるのだった。
「た、立ち去れだと」
「俺達にかよ」
「そうだ。このサガ」
あえて己の名を口にした。
「人々の敵、アテナの敵に対しては容赦せん。命が惜しければすぐにここを立ち去れ」
「生憎だがなあ」

だからといってはいそうですか、と引き下がる彼等でもなかった。逆に槍を手に皆ジリ、と前に出て来た。やるつもりであった。
「俺達だって狂闘士、インプの誇りがあるのよ」
「インプ・・・・・小悪魔か」
「そうよ」
サガの言葉に対して答えた。
「その俺達が黄金聖闘士を倒してやるぜ」
「覚悟するんだな」
「そうか。ならば」
彼等のその言葉を聞いてさらに小宇宙を高めさせた。
「来るのだ。このジェミニのサガの力、今ここで見せてくれよう」
「よし、皆やるぜ！」
「おうよ！」
インプ達は一斉にサガに向かって踊りかかる。
「ここで黄金聖闘士を倒せば」
「大金星だぜ！」
「確かにな」
サガも自分を倒せば大きいのはわかっている。言葉でそれを認めた。

第一話　狂闘士強襲その六

「しかしだ」
「何だ！？」
「覚悟決めたのかよ」
「言い忘れたことがある」
小宇宙をその全身に漂わせたまま両手を悠然と構えてきた。
「このサガ、黄金聖闘士だ」
「それがどうしたっていうんだよ！」
「だからやってやるんだよ！」
「人々と世界、そしてアテナを守護する最後の切り札。その力・・・・・今ここに！」
その両手をかざし。今動いた。
光が動いた。一瞬だった。サガはその場にいた。だが彼に向かおうとしたインプ達は一人残らず地に伏した。残っていたのは後に続こうとしていた者達だけであった。
「なっ、一瞬で！？」
「馬鹿な、あれだけの数のインプをか」
「言った筈だ」
サガは目を閉じ立った姿勢で驚くインプ達に対して述べた。
「私は黄金聖闘士。平和を守る最後の切り札だと」
「ちっ、それが黄金聖闘士の力かよ」
「聖闘士の中で最強の十二人の力」
「言い忘れていたことがある」
サガはまた言ってきた。
「何っ！？」
「黄金聖闘士は皆光速の動きを持っている」
「光速！？ということはつまりだ」
「そうだ。光と同じ速さだ」

こうインプ達に対して答えた。
「このサガもまた。その速さで動ける」
「なっ、そんな動きができるなんて」
「俺達狂闘士でもそれこそ」
「あ、ああ」
彼等は光の速さを見せたサガを前にして顔も声も震わせながら彼等の中での話をはじめた。
「八大公しか」
「あの方々しか」
「八大公だと」
サガはその名を聞いて眉をピクリと動かした。
「まさかあの者達もまた」
「へっ、誰が御前に言うもんか」
「そうだそうだ」
だが彼等はそれを言おうとはしない。だがここでふと口を滑らすようにして述べた。
「ただしだ。一つ言っておくぜ」
「むっ!?」
「御前等じゃあの方々には勝てないぜ。
「そうさ、特にアーレス様とその」
「これ」
しかしここで。彼等の後ろから声がした。
「戦の中ぞ。お喋りは止めよ」
「そ、その声は!」
「まさか!」
「左様、そのまさかだ」
「皆の者!」
ここで周囲を圧する様な声が場に響いた。
「頭が高い!ひれ伏せ!」
「エリス様の御前なるぞ!」

「はっ、ははっ！」
「申し訳ありません！」
「エリスだと」
インプ達が驚き慌てた後で慌てて平伏する。その中でサガは一人今の事態を掴めず呆然としていた。その彼の後ろからアイオロスの声がした。
「サガ！」
「アイオロスか」
後ろを振り向くと確かに彼がいた。多くの白銀聖闘士や青銅聖闘士を引き連れて来ている。
「やはりここだったか」
「殆どの白銀及び青銅の聖闘士を引き連れて来たのだな」
「いや、全てのだ」
アイオロスはサガの横に来てこう述べた。
「小宇宙がここに全て集まっているのを感じてな」
「そうだったか」
「そうだ。それよりもだ」
アイオロスは怪訝な顔で前を見る。するとそこには。
インプ達に囲まれ多くの異形の戦衣を身に着けた戦士達がいた。男もいれば女もいる。そしてその彼等の中心に燃える様な赤い髪に蒼白の肌を持つ女がいた。美しいが何処か猛々しくかつ陰惨なものを漂わせている女だった。その女が狂闘士達の中心にいたのだった。

第一話　狂闘士強襲その七

「あの者達は」
「うむ。その通りだ」
サガはアイオロスに対して答えた。
「狂闘士達だ」
「そうか。ではあの中心にいる女は」
「な、何だこの恐ろしい小宇宙は」
「強大なだけではない」
二人の後ろにいる白銀及び青銅の聖闘士達の中には女とその周囲の異形の戦衣の者達を見て怯えている者達さえいた。聖闘士である彼等ですら怯える小宇宙を放っているのは紛れもなくその女だった。
「全てを殺戮せんとする様なこの殺気」
「ここまで邪悪な小宇宙は感じたことがない」
「エリスか」
サガは女を見て言った。
「これだけの小宇宙を持ち狂闘士達を従える女といえば」
「ほう、流石はジェミニのサガ」
エリスと呼ばれた女は鮮血を塗った様な赤い唇に笑みを浮かべてサガの言葉に応えた。
「私の名を知っているな」
「復讐の女神エリス」
サガはあらためてエリスの名を言う。
「貴様が復活したということはやはりアーレスが」
「答えるつもりはない」
しかしエリスはサガの言葉に答えるつもりはなかった。あえてそれを無視するのだった。
「だが。私がここに狂闘士達を連れて来た意味はわかるな」
「言われるまでもない」

サガの返答は毅然としていた。
「この聖域を一気に陥落させるつもりだ」
「その通りよ」
その血塗られた笑みを浮かべながらサガの言葉に答えるのだった。
「ここで一気にな。それをアーレス様の手土産にしてくれる」
「ならばだ」
今度はアイオロスがエリスに対して言う。彼もまた闘志を見せていた。
「私達を倒して行くがいい。我等聖闘士をな」
「言っておくが我等聖闘士は」
サガもまた静かな闘志を全身にまとわせてエリスに言葉を続ける。
「狂闘士が幾らいようとも神がいようとも」
「地上の平和、アテナの為ならば退くことはない」
「言うたな」
エリスは二人の言葉をここまで聞いたうえでまた笑みを浮かべてみせた。
「それでこそアテナの聖闘士。しかもその頂点に立つ黄金聖闘士だ」
それは認めるのだった。
「だが」
しかしそれで終わりではなかった。周りにあるその血塗られた猛々しい小宇宙を感じながら二人に対して告げるのだった。
「その二人を倒せば後はどうとでもなる。覚悟するのだな」
「誰が二人だと言った？」
サガは。ここでこうエリスに告げた。
「何っ！？」
「誰が二人だと言ったのだ」
この言葉をまた繰り返すのだった。
「その様なことは言ってはいないが」
「後ろの者達か」
「彼等もそうだ」

まずは後ろの白銀及び青銅の者達について言及する。
「しかしだ。彼等だけではない」
「戯言を。今ここに全ての聖闘士を集めたと言った筈」
エリスはそれをまた言うのだった。
「戯言を言うか。聖闘士らしくないぞ」
「神ですら感じぬというのか」
しかしそれでもサガは言うのだった。
「この小宇宙を」
「小宇宙!?」
「そうだ、我等と同じ」
ここでサガが言った言葉が。エリスの耳に残った。
「黄金のこの小宇宙を」
「黄金だと!?まさか」
「そうよ!」
何処からか声が響いた。
「むっ!?」
「我等の気配。感じぬというのか」
「復讐の神エリス、その力は偽りのようだな」
「我が力が偽りというか」
神だけありそのプライドはかなりのものだ。それを刺激され顔を強張らせる。そして声がした方を見ると。
「見よ」
サガがエリスに言うのだった。ここで。
「あの者達の姿をな」
「な、あれは」
「あの者達は・・・・・・」
「まさか」
エリスだけでなく他の狂闘士達も声をあげる。彼女達が見たものは。

第一話　完

2008・3・8

第二話　黄金集結その一

「ば、馬鹿な」
「どうしてここにあの者達が来ているのだ」
「まだ。聖衣を身に着けてもいないのではなかったのか」
エリスだけでなく狂闘士達も口々に言う。彼等が見た方にいた者達は。それまで対峙していたサガやアイオロスと同じ黄金色の聖衣に身を包んだ少年達だったのだ。
九人いた。彼等は高台の上におりそこからエリスと狂闘士達を見ている。その高台からまた言ってきた。
「話には聞いている」
「狂闘士だな」
その黄金聖衣には白いマントを羽織っている。これはサガやアイオロスと同じだった。その黄金と白の対比がまるで太陽のようであった。
その太陽の如き九人の戦士が揃っていた。彼等はそれぞれ狂闘士達を不敵な笑みを浮かべて見下ろしている。そのことに屈辱を感じてかエリスが彼等に対して問うた。
「名を知っておこう」
まず問うたのは名であった。
「答えよ。何というか」
「名前か」
「左様」
また彼等に対して述べた。
「それぞれ名乗れ。何というか」
「いいでしょう」
その中の一人が言ってきた。
「まずは私から」

優美で優しげな笑みを浮かべた少年だった。眉は丸くその顔は全体として中性的な面持ちがあった。その彼が最初に名乗るのだった。
「ムウ」
「ムウとな」
「そうです。アリエスのムウ」
「アリエス・・・・・・牡羊座か」
アリエスと聞いてすぐにそれを理解した。
「アリエスの黄金聖闘士。それが御主か」
「その通りです。そして」
「アルデバラン。タウラスのアルデバランだ」
一際大柄で太い眉を持ちいかつい目をした男だった。
「牡牛座だ。覚えておくのだな」
「キャンサーのデスマスクだ」
鋭い目にとりわけ不敵な笑みを浮かべている。その髪はまるで炎のようである。
「御前等を一人残らず地獄に落としてやるからな」
「アイオリアだ」
見ればアイオロスによく似た少年だった。精悍な顔に熱いものを見せている。
「レオのアイオリア。この拳で貴様等を倒す！」
「シャカ。バルゴのシャカ」
豊かで流麗な金髪に女性の如き整った顔を持っている。しかし何故かその目は閉じており何も見ようとはしていない。しかしそれでも狂闘士達を見ていた。
「ここで出会うというのも運命ということでしょう」
「スコーピオンのミロだ」
長い癖のある髪に整った顔をした少年だった。
「覚悟しろ。ここで」
「シュラ。カプリコーンのシュラ」
剣を思わせる目であった。癖のある短髪が特徴的だ。

「貴様等を倒し正義を貫くのみ」
「カミュという」
クールな瞳だった。それは氷と水を思わせる静かなものだった。
「アクエリアスのカミュ。私の名だ」
「ピスケスのアフロディーテと申します」
口に紅い薔薇を咥えている。妖艶な美女にしか見えないがその声は紛れもなく男だった。
「聖闘士の美。見せて御覧に入れましょう」
「左様か。それがそなた達の名か」
エリスは彼等の名乗りを聞き終えてから述べた。
「黄金聖闘士。十一人か」
「で、どうするんだ?神様よ」
デスマスクがエリスを見下ろしながら問うてきた。
「ここで戦うかい?俺はそれでもいいけれどよ」
「そうだな」
デスマスクのその言葉にシュラが同意して頷く。
「敵を倒すのなら早い方がいい。ならばここで」
「その通りです」
アフロディーテもまた二人と同じ意見だった。薔薇をその右手に持ち替えた。

第二話　黄金集結その二

「聖域を汚す者を許すわけにはいきません」
「よし。それならばだ」
次に動いたのはカミュだった。
「一気に決める。苦しまないようにな」
「やるか」
「ならば我等も」
狂闘士達も身構える。両者一触即発の状況になろうとしていた。
サガもアイオロスも身構える。他の黄金聖闘士達も白銀や青銅の聖闘士達も。今まさに聖闘士と狂闘士の全面戦争がはじまろうとしていた。しかしその時だった。
「待て」
エリスがここで己の下にいる狂闘士達を制止するのだった。
「エリス様！？」
「何故ここで」
「ここには八大公がおらぬ」
彼女はこう言ってまだはやる彼等を再び制止した。
「宮殿に置いてきたのは失敗だったが。それならば仕方がない」
「では今は」
「そうだ。お互い名乗りは終わった」
彼等だけではなく聖闘士達にも告げていた。静かに目を閉じたうえでの厳かな調子の言葉だった。
「ここは退く。よいな」
「はっ、それでは」
「その様に」
彼等はここでエリスの言葉に従うのだった。平伏し頭を垂れていた。
「聖闘士達よ」

「何だ」
サガがエリスの言葉に応える。
「また近いうちに会おう。今は退いてつかわす」
「聖域を汚してこのまま帰るつもりか」
「戯言を。ここはあくまで貴様等にとってだけの聖域」
完全にアーレスの配下としての言葉だった。
「我等にとっては聖域でも何でもない」
「確かにその通りです」
その言葉を認めたのはシャカだった。
「シャカ」
「しかし貴方達を放っておくこともできません」
ミロの問いに答えるよりも前にエリスに再び言うシャカだった。
「この世に戦乱を巻き起こし災いを招く貴方達を」
「そうです。シャカの言う通りです」
シャカの言葉と共に一歩前に出たのはムウだった。
「戦皇アーレスとその配下である狂闘士」
「かつてこの世を破滅寸前においやった魔神達」
彼等を魔神と呼んだのはアルデバランだった。
「ここで倒しておかねば」
「死にたい者から出て来い」
アイオリアは彼等に対してこう言い放つ。
「このアイオリア、容赦はしない」
「だから言っておるであろう」
しかしエリスは彼等の言葉を受けはしなかった。
「ここで貴様等を相手にするつもりはないとな」
「では帰るのか」
「それも言った通り」
今度はアイオロスに答えた。
「戦いは次からだ」
「馬鹿を言え！」

「そうだ！」
エリスの今の言葉に白銀や青銅の聖闘士達が一斉に声をあげた。
「貴様等から出向いて来ているのではないか！」
「それでどうして下がってやるなどという態度を取るのだ！」
「黙るがよい」
「うっ・・・・・・！」
今のエリスの威圧感に満ちた言葉と聖域すら覆いかねない凄まじい小宇宙を感じ彼等は黙った。黄金の聖闘士達も前に出ることを躊躇った。
「神の言葉に逆らうことは許さぬ、人間共よ」
「神だと」
今のエリスの言葉に黄金の聖闘士達は誰もが顔を顰めさせた。不快なものを感じた顔そのものだった。
「ふん、言ってくれるな」
「全くだ」
デスマスクの言葉にシュラが頷く。
「神様がそんなに偉いっていうのかよ」
「神とはその心で神となるもの」
二人が言うとアフロディーテもそれに続く。

第二話　黄金集結その三

「戯言ですね。神に逆らうことが許されないとは」
「戯言だと」
「違いますか？神が何故偉いか」
「それは心によってだ」
カミュは己の考えを今エリスに投げた。
「神だからというものではないのだ」
「神を。否定するというのか」
「神を否定してはいませんよ」
シャカがエリスに答えた。
「ただ。貴女の仰る神は正しい神ではないということです」
「・・・・・機嫌が悪ければここで聖域ごと破壊しているところぞ」
エリスは黄金聖闘士達の言葉に怒りを露わにさせていた。
「運がよかったな、人間共」
「それがやれるならばな」
次にエリスに言い放ったのはアイオリアだった。
「我等を前にして」
「人間なぞ幾らいても同じこと」
エリスの考えは変わらない。変えようともしていないことがはっきりとわかる。
「貴様等にしろな」
「そうであればいいがな」
だがアルデバランはそれを聞いても動じた様子一つ見せはしない。
「果たしてそう上手くいくかどうか」
「ですが。今はいいでしょう」
ムウはこれ以上エリスの言葉を聞こうとも彼からも話そうともしなかった。ただ一言言うのだった。

「また御会いしましょう」
「そうか。では今度会った時がうぬ等の最後だ」
こう言い残すとそのまま姿を消した。それに他の狂闘士達が続く。インプ達も消えた後で残ったのは聖闘士達だけだった。彼等は狂闘士達が姿を消した後でまずは待機していた。しかしその彼等に対してアイオロスが指示を出した。
「白銀及び青銅の聖闘士達はそれｚれ持ち場に帰っていい」
「それで宜しいのですね」
「既に狂闘士達は去った」
ケルベロスのダンテに対して答える。
「だからだ。今はそれぞれの持ち場に帰っていい」
「わかりました。それでは」
「アイオロス様、また」
彼等は姿を消しそれぞれの持ち場に戻った。だがそれで話が終わったわけではなくアイオロスは今度は今その場に残っている黄金聖闘士達に対して声をかけるのだった。
「まずはよく来てくれた」
「はい」
ムウが彼等を代表して応える。彼の側に他の黄金聖闘士達も集まっている。
「聖域に不穏な小宇宙を感じて急いで来たのですが。やはり」
「まさかここで来るとは思わなかった」
サガもこう告げる。
「しかもエリスがだ」
「争いの女神エリス」
シャカがその名を口にする。
「あれがですか。先の狂闘士達との戦いは知っていましたが」
「いけ好かない女だな」
デスマスクはその感情を素直に見せてきた。
「何様だと思っているんだ」

「神というがな」
アルデバランは少し考える目をしてから述べた。
「だが。アテナとは完全に違う存在だ」
「ところでです」
アフロディーテはエリスから話を変えた。
「先程八大公という言葉が出ましたが」
「そうだったな。そういえば」
アイオリアもそれを思い出した。
「狂闘士達の中でもそうした存在があるのか」
「大公か」
シュラは暫し考え込んだ。
「その名称からかなり高い位にあるようだが」
「とりあえずここで話していても仕方がない」
カミュはこう一同に対して告げた。
「一度教皇の御前に拝謁しよう」
「その通りだ」
サガはカミュのその言葉に賛同を示して頷いた。
「では今から一同で行こう」
「そうだな」
それにミロが頷く。

第二話　黄金集結その四

「ではここにいる我等で」
「参ることにしよう」
こうして彼等は教皇の間まで共に入ることになった。一同はサガとアイオロスを中心として横一列に並びそれぞれ片膝をつき拝謁するのだった。シオンは彼等の拝謁を受けた後で厳かな声で告げた。
「よくぞ集まった」
「はっ」
サガが彼等を代表して応える。
「まずは顔を上げよ」
「わかりました」
一同それに応えて顔を上げる。シオンはあらためて彼等の顔を見回すことになった。彼はその並んでいる顔を見てまずは言葉を止めたのであった。
「教皇」
その彼にサガが声をかける。
「どうされましたか」
「むっ」
サガに言われてようやく我に返ったようであった。
「いや、少しな」
「少し」
「何でもない。それよりもだ」
彼はあらためて黄金聖闘士達に言葉を告げた。
「十二宮の前に来たそうだな」
「はい」
今度はアイオロスが答えた。
「争いの女神エリスが狂闘士達を連れて」
「エリス自らか。やはりな」

シオンはアイオロスのその言葉を聞いて納得したようであった。
だがその顔は仮面で覆われその表情を伺い知ることはできなかった。
「あの強大で禍々しい小宇宙は人のものではなかったが」
「それで教皇」
サガがシオンに問うてきた。
「あのエリスは確か戦皇アーレスの実の妹であった筈」
「その通りだ」
サガの問いに答えた。
「ではアーレスもまた既にトラキアに」
「いや、それはおそらくまだだ」
しかし彼はそれは否定したのだった。
「まだですか」
「小宇宙を感じぬ」
彼がアーレスの降臨を否定した根拠はこれであった。
「アーレスは戦皇。オリンポスの神々の一人」
「はい」
それは紛れもない事実だった。アーレスはゼウスとヘラの嫡子だ。
従って神としての地位も力もかなり高いのだ。だからこそ戦皇とさえ呼ばれているのである。
「それだけにその小宇宙も強大なもの。だがそれはまだトラキアには現われてはいない」
「左様ですか」
「だがアーレスの宮殿には八人いた」
「八人」
「そうだ」
黄金聖闘士達に対して答える。
「では教皇。その八人こそが」
「わかるか、サガ」
「ええ。八大公」
サガは先程のエリスの言葉を思い出した。そう、八人だったのだ。

「その八人ですね」
「その八人が何故ここに出なかったか」
「おそらくここで決着をつけるつもりはなかったのだろう」
シオンはこう読んでいた。
「おそらくだがな」
「そうだったのですか。それで今はただの雑兵達を主力にして」
「狂闘士達も見たな」
「はい」
今度は一同で頷いた。
「あの赤く血の色を思わせる衣」
「あれが戦衣」
「あれこそがアーレスの戦士である証だ」
また黄金聖闘士達に対して答えた。

第二話　黄金集結その五

「魔神達の姿を形どった衣こそがだ」
「戦衣」
「我等の聖衣と同じように」
「戦衣を纏う狂闘士達は皆同志達だがその爵位により階級が分けられてもいる」
「爵位」
「貴族の階級があるな」
シオンはこう説明した。
「上から公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵、公子」
こう告げていく。
「おおまかに分けてこれがそれぞれ三人ずついる」
「三人ずつですか」
「そうだ。それで合計十八人、四つの軍団にいる」
「四つの軍団と申しますと確か」
サガは知っているアーレスの狂闘士達の知識について述べた。
「火、炎、災難、恐怖の四つだ」
「そしてその四つの軍団を率いるのが」
「狂闘士達の中の頂点に立つ八大公だ」
「彼等が狂闘士達を率いているのですか」
「わかり易く言えば御前達と同じだ」
「我々と同じ」
こう言われるとわかるのだった。八大公は聖域で言うならば黄金聖闘士と同じなのだ。こう言えば安易にわかることだった。
「これでわかるな。八大公に対抗できるのは」
「我々のみだと」
「今回の戦いでは白銀及び青銅の聖闘士達には主に聖域の警護を命じる」

「聖域の。では我等で」
「御前達で彼等の主な相手を頼む。わかったな」
「わかりました。それでは」
こうして今回の戦いのことまでわかった。何もかもがわかったのだ。しかしであった。まだ彼等は全てを知ってはいなかった。これからの戦いのことが。
アーレスの宮殿。エリスはそこに戻っていた。その周りには多くの狂闘士達が集っていた。エリスは控える彼等を前にして言うのだった。
「黄金聖闘士達が集まった」
「はい」
彼等はエリスの言葉に頷く。
「これで黄金聖闘士は全員揃ったことになる」
「全員ですか」
「ライブラの童虎」
エリスはその名を告げた。
「奴もいる。これで十二人だ」
「十二人」
「そして白銀及び青銅の聖闘士達だ。その勢力はかつてのハーデス様との聖戦にも匹敵する」
「あのハーデス様との時よりも」
「それでは。かなりの力が」
皆そのことを知り顔を曇らせる。その彼等に対してエリスはさらに告げるのだった。
「左様。従って迂闊に攻めることはできんぞ」
「ではどうすれば」
「案ずることはない。狂闘士は戦皇アーレス様の戦士」
狂闘士ならば誰もがわかっていることをあえて告げた。
「敵と戦い、それを滅ぼす為だけの戦士だ。そうであろう」
「その通りでございます」

「アーレス様の為に」
「そう。だからその力はかなりのものだ」
こうも言ってみせた。彼等に対して。
「例え黄金聖闘士がいようとも八大公もおる。勝つのは我等よ」
「ではエリス様」
「次の行動は」
「ローマよ」
古におけるローマ帝国の都にして今も繁栄する街だ。その名を告げた。
「ローマに兵を進める。そこで彼奴等を迎え撃つ」
「わかりました」
「ではその指揮官は」
「八大公よ」
ここでエリスは。八大公の名を口にした。
「おるか」
「こちらに」
「お側に」
エリスのその問いに応えるかのように彼女の後ろから八つの影が姿を現わした。それは禍々しく輝く赤い戦衣を着ていた。
「御前達が行くのだ」
「我等全員でですか」
「それはまた大儀な」
「大儀ではない」
エリスは真剣な顔で彼等に対して告げた。
「一つ言っておこう」
「何でしょうか」
「黄金聖闘士達を倒さなければ我等の勝利はない」
鋭い声で彼等にまた告げる。

第二話　黄金集結その六

「決してな。あの者達を誘い出し。そして」
「そして」
「倒せ」
今度は一言であった。
「わかったな。では行くがいい」
「わかりました。それでは」
八人の中の一人がエリスのその言葉に応えた。
「では我等は今よりローマに向かい」
「そこに来た黄金聖闘士達を迎え撃ちましょう」
「頼むぞ。他の者は今はこの宮殿に待機しておけ」
「はっ」
「それでは」
他の者達はエリスのその言葉に応えて頭を垂れるのであった。
「全員が出るわけではあるまい」
「全員がですか」
「聖域にも何人かが残る筈だ」
エリスは鋭くそれを読んでいた。
「聖域にいる今の教皇はシオン」
「シオン」
「あの男ですか」
「先のハーデス様との戦いの生き残りの一人」
エリスはそのことをよく知っていた。決して侮っている声ではなかった。
「その程度は読んでおろう。だからだ」
「左様ですか。それでは」
「ここで一気に倒せ。できればな」
「できれば？」

「エリス様、それは」
八大公の方から意見が出た。
「我等が彼等を倒せないと」
「そう仰るのですか！？」
「いや、そうではない」
エリスはそれは否定する。
「しかし。実力はかなり近い」
「それは確かに」
「聖域から感じる小宇宙。これは」
「わかるな。とりわけ強大な小宇宙を二つ感じるな」
「おそらくこれはジェミニのサガと」
「サジタリアスのアイオロス」
二人の名があがった。しかし出て来たのは彼等だけではなかった。
「もう一人いる」
「確かに。これは処女宮から」
「そうだ。バルゴのシャカだな」
既に黄金聖闘士全員の名前はわかっている。その顔も。エリスは己の頭の中でそれを思い出し符合させたのだ。そしてそれに終わりはしなかった。
「私はあの四人を呼び出す」
「なっ！？」
今のエリスの言葉を聞いて八大公だけでなく他の狂闘士達も声をあげた。尋常ではないものを聞いた顔であった。顔もあげていた。
「あの方々をもですか」
「まさか。それは」
「いや、呼び出す」
エリスの言葉には迷いはなかった。
「必ずな。わかったな」
「何もそこまでは」
「我等だけで」

「御主等を信じていないのではない」
エリスはそれははっきりと述べた。
「だが。あの者達はだ」
「油断はできないと」
「八大公の相手は八人」
はっきりと述べた。
「その八人を完全に潰せ。よいな」
「はっ、それでは」
「我等の力をもってしてその八人を」
彼等は今ここでエリスに対して誓う。そのうえでアーレスの宮殿を出た。今八人の戦士が今出陣した。それはすぐにシオンにも察知されローマで最強の戦士が対峙するのだった。

第二話　　完

２００８・４・１２

第三話　ローマへその一

ローマへ

シオンはまた黄金聖闘士達を己の前に集めていた。そのうえで彼等に語るのだった。

「ローマだ」

「ローマですか」

「やはり」

彼等はそれを聞いてそれぞれ述べるのだった。

「御前達も感じていたか」

「はい」

サガがシオンに対して答えた。

「この小宇宙はやはり」

「あの時エリスが言っていた」

「そうだ。間違いない」

こうも彼等に対して述べた。

「八大公。彼等が出た」

「じゃあ。俺が先陣になりましょう」

デスマスクが自信に満ちた声で述べてきた。

「その八大公、全員討ち取ってみせましょう」

「いや、御前でも一人が限度だ」

「何、俺が負けるっていうのかよ」

「違う」

シュラは言うのだった。

「俺でも一人だ。一人を相手にするのが精々だ」

「御前でもかよ、シュラ」

「それは御前もわかっている筈だ。あれだけの小宇宙ならばな」

「ちっ」

その通りだった。デスマスクにしろ今のシュラの言葉は認めるし

かなかった。言葉を止めたのが何よりの証拠だった。
「そうだな。俺一人でも限度があるか」
「だとすると。八人ですか」
アフロディーテが口を開いた。
「それぞれ一人が相手をするとなると」
「こちらも八人出す必要がある」
カミュが述べた。
「八人。では残るは三人」
「誰が残るかだな」
「ですね。おそらく黄金聖闘士がこれだけ出撃することは今までなかったでしょう」
「その通りだ」
シオンは今のアフロディーテの言葉に対して頷いた。
「先の聖戦においてもそれはなかった」
「やはり」
シャカはそれを聞いて頷く。
「左様でしたか」
「だが。相手は八大公。彼等も本来はアーレスの切り札であり一人で出れば相当なこと」
「それが八人も一度に」
アルデバランも言う。
「それだけ御前達を警戒しているということだ」
「我々を」
「そうだ。だからこそこちらも八人出す」
シオンはそれを今正式に決定した。
「いいな。八人だ」
「わかりました」
黄金聖闘士達はシオンのその言葉に頷くのだった。彼等は教皇の命で動く、それならば彼の言葉に対して頷くのもまた当然のことであった。

「まずはムウ」
「はい」
最初に名前を告げられたのはムウであった。
「御前が行け」
「わかりました」
「アルデバラン」
「はっ」
続いてアルデバランが。
「デスマスク、アイオリア、ミロ」
「わかりました」
「それでは」
「いざ」
三人も応える。
「シュラ、カミュ、アフロディーテ」
「了解」
「では」
「只今より」
「御前達八人だ」
こうしてまずはその八人に告げた。
「わかったな」
「はい」
「では今よりローマに」
「サガ、アイオロス、シャカ」
シオンは今度は残ることになった三人の名を呼んだ。
「御前達は残ることになるがだ。特にシャカ」
「何でしょうか、教皇」
「御前には今後も聖域の防衛を特に頼みたい」
「私がですか」
「そうだ」
特別にシャカに声をかけるのだった。

第三話　ローマへその二

「御前のその力でだ」
「わかりました。それでは」
「サガ、アイオロス」
二人にも声をかける。
「御前達はこれまで通り全ての聖闘士達の指揮にあたれ」
「はっ」
「わかりました、教皇」
「今は聖域に残るのだ。八大公が出撃したとはいえ」
シオンはまた言葉を続ける。
「多くの狂闘士達がいる。だからだ」
「わかりました。では我々は今は」
「この聖域に残りましょう」
「頼むぞ。では御前達は」
「はっ」
ムウ達八人がまたシオンの言葉に応える。
「すぐにローマに向かえ。いいな」
「わかりました」
「それでは今より」
こうして八人の黄金聖闘士達がローマに向かうことになった。その前に彼等は準備を整えそれから会合の時間を持った。これには全ての黄金聖闘士が集まっていた。無論サガやアイオロスもである。これはアイオロスが提唱したのであり彼等が出るのも当然のことだった。
場所は双児宮だった。そこに十一人の黄金聖闘士が集まっている。宮殿の外の庭に大きな円卓を置きそこに座っていた。テーブルの上には様々な料理が置かれている。
皆私服姿だ。それぞれラフな格好だ。アルデバランがそこに鉄の

串に突き刺した大きな牛肉の塊を持って来た。それを切っていって皿に置いていっている。
「シェラスコだ」
アルデバランは笑顔と共に一同に述べる。
「俺の故郷の料理でな。美味いぞ」
「ほう、御前料理ができたのか」
デスマスクはその牛肉を見て楽しそうな声をあげていた。顔には笑みがある。
「しかもかなり美味そうだな」
「こう見えても料理には自信があってな」
アルデバランもまんざらではない笑みを浮かべていた。その笑みで応えるのだった。
「特に肉料理は得意だ」
「そうなのか」
「デスマスク、御前もかなり美味いな」
「特にパスタは好きだぜ」
見ればテーブルにはスパゲティにラザニア、マカロニグラタンがある。どうやらこれ等はデスマスクが作ったものらしい。
「お袋が得意でな。見よう見まねで作っているうちにな」
「そういうことか」
「シュラ、このパエリアは御前のだよな」
デスマスクはシュラに顔を向ける。シーフードのパエリアとガスパチョが置かれていた。
「そうだ。俺も料理はする」
「切るのはその手でですか？」
「いや」
アフロディーテのその言葉には首を横に振る。
「ちゃんと包丁を使っている。安心しろ」
「そうですか」
「このパエリアは炭火で焼いている」

どうやらこれはシュラのこだわりらしい。
「美味くない筈がない」
「それは期待させて頂きます」
「この薔薇を使ったエティックス＝グルガやクラーブラックスは」
前者は胡瓜の酢漬け、後者は生鮭の押し漬けであった。どちらにも紅の薔薇がふんだんに使われている。
「はい、私です」
アイオリアの言葉にそのアフロディーテが答える。
「薔薇は食べられますので。他には薔薇のプティングも作っておきました」
「薔薇のプティングもか」
「実に興味深い話だ」
カミュが述べた。
「私もデザートは作るが」
「御前はフランス人だったな」
「そうだ」
カミュはアイオリアの言葉に応えた。
「一応料理は心得ているつもりだ」
「これですね」
ムウが言った。
「子羊のソテーにブイヤベース」
「フランス料理だ」
やはりこれだった。
「とりあえず作ってみた。食べてみてくれ」
「私も料理はします」
シャカもここにいた。私服は彼だけがインドのそれであった。洋服ではなかった。

第三話　ローマへその三

「カレーですが」
「やっぱりそれかよ」
「それしかないと思っていたが」
デスマスクとシュラはそれを聞いてやけに納得した様子であった。
「しかもこれは」
「鶏のものと羊のものだな」
「その通りです」
アフロディーテとカミュに答える。
「インドでは牛肉は食べませんので。ですからシェラスコは」
「そう言うと思って羊のシェラスコも用意しておいた」
何気に気の利くアルデバランであった。
「それを食ってくれ」
「わかりました」
「私はあまりこれといって作れないのですが」
しかしムウはムウで色々と作っていた。
「一応作らせて頂きました」
「何か黄金聖闘士は料理ができる奴が多いんだな」
「貴方はどうですか、アイオリア」
ムウはそのアイオリアに対して問うた。
「ギリシア料理は」
「一応はな」
あるというのだった。
「だが俺のそれは。まあ」
「男の料理か」
アルデバランはすぐに察しをつけてきた。
「いや、これだ」
「これ？」

一同が見たのは茄子と挽肉の重ね焼きとグリーンサラダだった。
サラダはオリーブとワインビネガーをふんだんに使っていて快い香りを出していた。
「美味ければいいが」
「少し胡椒が強いと見受けますが」
ムウはそのグリーンサラダ、ギリシアサラタを見て言った。
「ですがそれでかなり味がよさそうですね」
「香辛料はいいんだな」
「はい」
ムウはミロの問いに答えた。
「ネパール生まれですので」
「そうか、御前はネパール出身だったな」
「そうです。ですから」
インドの影響があるので。香辛料が強いのはいい国なのだ。
「大丈夫なのです。カレーもいけます」
「そうなのか」
「ところでミロ」
アイオロスがミロに問うてきた。
「何か」
「御前の料理はないのか？」
「ない」
何の隠し事もない言葉だった。
「そんなものはできない」
「料理はできないのか」
「そうだ」
本当に隠しはしない。
「今も天蠍宮では宮殿の者達が作ってくれている」
「おい、それは駄目だろう」
アルデバランがすぐに突っ込みを入れてきた。
「自分で作らないと」

「その通り」
シャカもそれに賛同する。しかし目は開けない。
「私も既に弟子を持っているが私の分は自分で作っている。時として弟子達にもな」
「目を閉じていてか」
「どうということはない」
シャカにとってはということだった。なお十二宮にはそれぞれ専属の人員がいる。彼等が黄金聖闘士達の世話をしたり宮殿の雑務を行っているのだ。
「私には何も見えているからな」
「そうなのか」
「それよりもだ」
アルデバランはまだミロに言う。
「ミロ、御前も料理をだな」
「だから俺は料理は駄目なんだ」
意外な話だった。そもそも黄金聖闘士が料理をするということ自体が中々ないことであろうが。しかしそれでも彼等が料理をしているのは事実だった。
「悪いがな」
「そうか」
「そうだ」
またアルデバランに答える。

第三話　ローマへその四

「悪いがな」
「そうか」
「そうだ」
またアルデバランに答える。
「他のことならできるがな」
「洗濯は？」
「できない」
シュラに答えた。
「掃除は？」
「しない」
デスマスクへの返事だ。
「食器洗いは？」
「何だそれは」
アフロディーテへの言葉はこうであった。
「何だ、御前は家事は何もできないのか」
「聖闘士にそれは必要なのか？」
「できた方がいいです」
ムウがミロに告げた。
「料理にしろそうですが」
「俺はそうは思わないが」
「俺もあまり家事は得意ではないが」
アイオリアは複雑な顔をしていた。
「しかし。それでもしないというのは」
「駄目だな」
カミュは一言だった。
「そんなことではな」
「しかし。俺は闘うのが仕事だ」

また言うのだった。ミロはあくまで言う。
「だからそんなものができなくとも」
「いや、それは違うぞ」
今度はサガがミロに話す。
「そうしたことはできた方が遥かにいい」
「そうか」
「そうだ。御前も何時かわかる」
「ううむ。だとするとこれから俺も」
ミロは首を傾げる。しかしそれにまたアイオリアが話を打ち切った。
「今はそれよりも食べないか」
「食べるのか」
「そうだ。とにかく食べなければ冷えるぞ」
シャカにも答える。
「違うか。何はともあれ食べないとな」
「そうだよ、御前いいこと言うな」
「アイオリアだ」
デスマスクに述べた。
「今後長い付き合いになる。憶えておいてくれ」
「そうだな。宜しくな」
「ああ。とにかく食べよう」
「その為に集まった」
シュラは冷静に一同に告げた。
「それならば食べないとな」
「ましてやこれ等は私達が作った料理」
アフロディーテは実際に自分の作った料理を見ていた。その生の鮭と薔薇を。
「食べなければなりません」
「ミロの料理はまた今度だ」
カミュにとっては実際どうでもいいことだったのだ。

「折角のブイヤベースが冷めてしまう」
「カミュの言う通りだ。これを食べ終わればローマに行くのだろう」
サガは八人に問うた。
「ならば食べるのだ。いいな」
「英気を養う為ですね」
「その通りだ」
今度はムウに答えた。
「わかれば食べるのだ。いいな」
「わかりました」
「それとシャカ」
サガは次にシャカに顔を向けて述べた。
「御前はこの宴の後で教皇のところへ来るようにとのことだ」
「教皇のところに」
「先程実際にそう言われていたな」
「はい」
サガの言葉に正直に答える。その通りだった。
「ならば行け。いいな」
「わかりました」
「しかしだ」
アイオロスはここで八人を見回す。それからサガに顔を向けて言った。

第三話　ローマへその五

「こうして全ての黄金聖闘士が揃った」
「老師を含めてな」
「確か先の聖戦以来だったか」
冥皇ハーデスとの戦いだ。この戦いではシオンと童虎以外全ての聖闘士が倒れた。それは黄金聖闘士達とて例外ではなく次々と壮絶な最期を遂げたことが知られている。それ以来黄金聖闘士が全て揃うことはなかったのだ。この時までは。
「ということはだ」
アルデバランが言った。
「我々はこの聖戦の為にここにいるのか」
「だったらいいじゃねえかよ」
デスマスクは軽い調子だった。
「戦うことが俺達の仕事なんだからよ」
「それはその通りだが」
しかしカミュは引っ掛かるものを感じていた。
「だが。それだけか」
「それだけといいますと」
ムウはカミュのその言葉にその流麗な眉を顰めさせた。
「他に何かが」
「アーレスは確か」
アフロディーテがここで思い出した。
「冥界に逃げ込んだ筈。先の聖戦で」
「それではハーデスも」
アイオリアの顔に不吉なものが浮かび上がった。
「そうなるのか」
「出て来るというのか？」
「現にアーレスが出て来た」

ミロに対して述べた。
「それならばだ」
「いや、それはない」
それはシャカが否定した。
「何故そう言える、シャカ」
「ハーデス及び彼の配下である冥闘士達の封印は解かれる時ではない」
「そうなのか」
「そうだ。彼が出て来るのはまだ先だ」
シャカの言葉は断言に近い。そうさせるものが彼の言葉にはあった。
「私達の相手は。アーレスのみだ」
「じゃあ楽なもんだぜ」
デスマスクはマカロニグラタンを食べている。彼自身が作ったものだ。それを食べながら話をしていた。グラタンにはタバスコがかけられている。
「あいつ等だけだったらな」
「我々の相手になるのは八大公か」
シュラはワインを飲んでいる。赤ワインだ。ワインの豊穣かつ甘美な味を楽しみながらの言葉だった。
「八人だ」
「それに対して我々は十一人」
アフロディーテが言う。しきりに薔薇を食べている。
「聖闘士の数はともかくとして我々の数では有利」
「しかし。彼等にはアーレスがいます」
ムウは彼等の主であるアーレスの存在を強く意識していた。
「その力は圧倒的なものであります」
「しかも。エリスだ」
アルデバランはその巨体に似合わず繊細な動作でフォークとナイフを使っている。それでシェラスコを切っている。肉にはオニオン

ソースがかけられておりその場を肉とソース、それにそのオニオンの三つが合わさった美味な味で支配していた。それはアルデバランの口の中にも及び彼は今は舌も満足させていた。
「アーレスの妹。その力はかなりのものだ」
「戦力としてはあちらが有利なのか」
カミュは戦力分析に入っている。それと共にブイヤベースの味の分析もしている。
「神が二人いるだけに」
「二人」
シャカはそれに異議を呈するようだった。
「果たして二人か」
「どういうことだ、シャカ」
「ハーデスには二人の側近である神がいた」
シャカはアイオロスに対して話す。
「タナトスとヒュプノス」
「それとヒュプノス配下の四柱の神か」
サガが言う。
「彼等を倒すのに多くの犠牲を払っていたな」
「蟹座のマニゴルド、山羊座のエルシド」
当時の黄金聖闘士達だ。彼等もまた圧倒的な力を誇っていたがタナトス及び四柱神を倒す時に壮絶な戦死を遂げたと言われている。またタナトスとの戦いでは先の教皇セージも命を落としている。このタナトスとヒュプノスにより今までの聖戦で聖闘士達は大きな犠牲を払ってきているのだ。
「彼等の犠牲で」
「人が神を倒すというのはそれだけで無謀だ」
アイオロスは言う。

第三話　ローマへその六

「しかし。我々は彼等に対しても勝たなければならない」
「そうだ。だがまずは八大公だ」
サガはまた言った。
「頼むぞ」
「わかりました」
八人を代表してムウが応えた。彼等は宴を終えるとすぐにローマに向かうのだった。
ローマ。古の都だ。狼に育てられたロムルスとレムスによって築かれたこの街は三度世界を征したと言われている。
一度は力で。一度は法で。そして最後は心で。とりわけ最後の信仰では世界の多くを支配し今に至る。そのローマの郊外の荒野に今無数の悪魔達がいた。
荒野には何もない。ただ荒れ果てた草原と岩があるだけだ。そして遠くには繁栄するローマの街並が見える。インプ達はそのローマを見て邪悪と言える笑みを浮かべているのだ。
「よし、今からだな」
「ああ、ローマを死の荒野にしてやるんだ」
彼等は今からローマを侵略するつもりだった。そのうえで街にいる全ての者達を虐殺しようと考えていたのだ。それがアーレスの戦いだった。
「このローマを死の荒野に変える」
「さて、やってやるか」
彼等が前に出ようとしたその時だった。彼等に声をかける者がいた。
「何処に行くつもりだ?」
「ああ?決まってるだろローマだ」
インプの一人がその声に応える。

「ローマを制圧してそこにいる奴等をアーレス様の捧げものにするのよ」
「その血をな」
「そうか。ならば俺もここを動くわけにはいかない」
「ああっ!?」
「手前何だ」
彼等が声の方を振り向くと。そこにいたのは。
「なっ、手前は!」
「ま、まさか!」
そこにいたのは黄金の聖衣に白いマントを羽織った戦士だった。精悍な顔でインプ達を見据えている。その小宇宙は誇り高く、かつ力に満ちたものだった。
「レ、レオのアイオリア!」
「こんなところで!」
「ここで俺に会ったのが運の尽きだったな」
アイオリアは構えをせず仁王立ちで彼等に対して告げる。
「だが。退くのなら何もしない」
「何もだと」
「何を考えてやがる手前は」
「俺の拳は俺の前から向かって来る者に対してだけ向けられるもの」
アイオリアは彼等に対して言うのだった。
「だからだ。命が惜しければ去れ」
「馬鹿か手前は!」
「俺達はアーレス様の狂闘士!」
彼等はアイオリアの言葉に激昂し口々に叫ぶ。
「撤退はないんだよ!」
「特にアテナの聖闘士にな!」
そう叫びながらアイオリアに向かう。扇状に取り囲みそこから一斉に襲い掛かる。
「死ねぇーーーーーーっ!」

「ここでな！」
「愚かな」
アイオリアは彼等の一斉攻撃を前にしても動じてはいない。平然としたまま右手を肩の高さに出し。そして。
「受けてみよ、このアイオリアの拳」
「へっ、聖闘士の拳なんてよ！」
「痛くとも何ともねえんだよ！」
「ならば痛いかどうかは受けてから知れ」
彼等の言葉を受けても動じてはいない。
「この拳をな。ライトニングボルト！」
声と共に右手から無数の光が放たれた。その光はそれぞれ複雑な動きを示しインプ達を切り裂いた。それと共に彼等を吹き飛ばしてしまった。
「うわあああああーーーーーーーっ！！」
インプ達はその戦衣を砕かれつつ吹き飛び地に叩き付けられた。光が消えた後に戦場に残っているのはアイオリアだけだった。
「だから言ったのだ」
アイオリアは倒れ伏す彼等を前に右手を下ろし目を閉じて述べるのだった。
「このライトニングボルトを受けて立っていられる者なぞいはしないのだ」
「確かにな」
ここでまた声がした。何者かの。
「レオのアイオリア。黄金聖闘士の名に恥じない強さだ」
「あれだけの数のインプ達を倒すとはな」
しかも声は一つではなかった。複数だった。
「流石だと褒めておこう」
「しかしだ」
荒れ果てた荒野に。彼等は姿を現わした。
「それが果たして我等に通用するか」

「是非見せてもらいたいものだ」
「貴様等は」
アイオリアは彼等の姿を認めて今度は身構えた。身構えずにはいられなかったのだ。
「聞くまでもないと思うが、それは」
「どうかな」
「確かに」
アイオリアも彼の言葉に頷いた。
「貴様等は」
「そう、我等こそ」
「アーレス様の戦士である狂闘士達の頂点に立つ」
彼等は口々に言う。
「八大公よ」
八人の男達がいた。恐ろしいまでの禍々しい小宇宙を発しながら。
今アイオリアの前に立っているのだった。

第三話　完

２００８・４・１７

第四話　八大公その一

八大公

アイオリアの前に姿を現わした八人の男達。彼等は恐ろしいまでの禍々しい小宇宙を放ちつつ彼と対峙している。アイオリアはその中で彼等に対して問うた。

「聞こう」

「何だ？」

「何故地上を狙う。オリンポスにいればいいものを」

「オリンポスだと？」

中の一人がオリンポスと聞いてせせら笑う声を出してアイオリアに応えた。

「オリンポスが何だというのだ」

「あの様な場所」

「あの様な場所か」

「そうだ。アーレス様はあの様な場所には興味はおありではない」

「アーレス様に相応しい場所。それは」

「地上だというのだな」

アイオリアが彼等に対して問う。

「そうだな」

「その通り、この地上だ」

「戦いに明け暮れ血に染まっているこの地上こそがアーレス様に相応しい」

彼等の弁ではそうである。

「だからこそ君達聖闘士は邪魔なのだよ」

「わかったな」

「悪いが俺は物分りの悪い男でな」

アイオリアは目を閉じた姿勢で彼等に応える。

「はいそうですかとわかるわけがない」

「ほう」
八大公は彼のその言葉を聞いて面白そうに声をあげた。
「レオのアイオリア。力はかなりのものだが」
「聞いた話程分別があるわけではないようだな」
「分別なぞ俺にとっては不要だ」
アイオリアはまた言葉を返す。
「それよりも俺に必要なものはアテナへの忠誠心」
「アテナへのか」
「そうだ。その為に今ここにいる」
今度は狂闘士達を見据えての言葉だった。
「このローマにな」
「生憎だがこのローマはアーレス様の地」
「知らぬとは言わせぬぞ」
「ロムルスとレムスか」
これについてはアイオリアも知っていた。ローマの伝説である。
「そうだな」
「如何にも」
「わかったならばそこをどけ」
彼等は口々に言う。
「今は捨て置く。いいな」
「嫌だと言ったらどうするのだ?」
「ほう、やはり貴様は分別がないな」
「ならば」
八大公は散ってアイオリアを半円状に取り囲んだ。そのうえで彼に対峙する。
しかしアイオリアは彼等に囲まれても臆するところはない。闘志をそのままに見据えたままだった。
「八対一だ。勝ち目はないぞ」
「それでもいいのだな」
「誰が一人だと言った?」

アイオリアは強い目で彼等を見据えたままこう言い返す。
「何っ、それでは」
「御前達も」
「この小宇宙、感じている筈だ」
アイオリアは言う。
「御前達も」
「むっ、これは」
「この小宇宙は」
「その通りですよ」
「その声は！」
「やはり！」
彼等がその声に気付いたその時だった。まずはムウの声がした。
そしてその声と共にアイオリアの周りに七人の男達が姿を現わした。アイオリアと同じ黄金聖闘士達だった。
「黄金聖闘士、やはり」
「ここに来ていたのか」
「アイオリア、先に行くなと言った筈ですが」
ムウはアイオリアの横でまずは彼を注意した。
「何故先に行かれたのですか」
「放ってはおけなかったのだ」
アイオリアはこうムウに答える。
「敵の雑兵達がローマに攻め入ろうとしていた。それを防いだのだ」
「そうでしたか」
「そうだ。見ろ」
ここで回りに転がるインプ達の躯を指し示す。
「この者達を倒した。その為に先に向かったのだ」
「そうでしたか。それは失礼しました」
「言っておくが我々はこう見えても同志を大事にする」
八大公の中の一人が黄金聖闘士達に告げてきた。
「この言葉の意味が。わかるな」

「面白い。ならやるか」
デスマスクが不敵な笑みを浮かべて前に出た。
「何なら俺一人で御前等全員を葬ってもいいんだがな」
「キャンサーのデスマスクだな」
八大公の中の一人がデスマスクの姿を認めて彼に名を問うてきた。
「確か」
「その通りだ。俺がデスマスクだ」
デスマスクも自分からそれを認めた。
「それで御前は誰だ？八大公の一人なのはわかるんだがな」
「カナン」
彼は自身の名を名乗った。

第四話　八大公その二

「ベルゼブブのカナンだ。憶えておくのだな」
黒い髪に深い湖を思わせる青い目を持っている男だった。その目は醒めており酷薄な青を漂わせている。その青でデスマスクを見据えていたのだ。
「地獄を司る男だ」
「地獄の主というわけか」
「如何にも」
デスマスクに対して答える。
「アーレス様より地獄を任されている者だ」
「ほう、俺と似てるな」
デスマスクはカナンを見据え返してまた不敵な笑みを浮かべてみせてきた。
「俺もデスマスクって名前でな。死を司る」
「死をか」
「死と地獄。どちらが上か試してみるか」
「面白い。ならここでまず黄金聖闘士が一人消える」
「どうかな。消えるのは案外手前かも知れないな」
二人は対峙しそれぞれ地を覆わんばかりの小宇宙を放つ。しかしそこで水を差す者が出た。
「待て、カナン」
「ジーク」
銀色の髪と目の険しい顔の男だった。その目は白目の部分が黒くなっておりそれが銀色の目をさらに強く浮かび上がらせていた。手には巨大な剣を持っている。
「御前だけ戦いを楽しむのはどうかな」
「御前もやるというのか」
「そうだ。このベールのジークの剣」

赤い血塗られた光を放つ巨大な剣を前に構えた。
「これで断ち切られたい者はいるか」
「断ち切られたいかどうかはともかくとしてだ」
黄金の方から出て来たのはシュラだった。
「剣ならばこのシュラも負けてはいないが」
「カプリコーンのシュラか」
「如何にも」
ジークに対して答える。
「この俺の剣と貴様の剣。どちらが上か試してみるか」
「面白い」
ジークもまたその言葉を受ける。身構えたまますっと一歩前に出た。
「では。どちらが倒れるか今ここで見極めるか」
「勝負でな」
両者もまた睨み合う。こちらでも戦いがはじまろうとしていた。
そしてまた。八大公の中からまた一人出て来たのだった。
「貴方は」
「レダ」
彼はアフロディーテを見ていた。そのうえで名を告げた。黒い目と瞳を持っており何処か堕落した耽美的な雰囲気を漂わせている。一見すると女と見紛う。しかしその小宇宙は不気味であり女のものとはまた違うものだった。それをアフロディーテに向けているのだった。
「ベリアルのレダ」
「そうですか。ベリアルのレダ」
「ピスケスのアフロディーテか」
「はい」
アフロディーテはレダの言葉に頷く。頷きながらその手に持っている紅の薔薇を動かす。
「その通りです」

「成程。その名は伊達ではないな」
アフロディーテの美しい顔を見ての言葉だった。
「美の女神にも匹敵する」
「私より美しいのはアテナのみ」
これがアフロディーテの言葉だった。
「そして美こそが全てを司るものです」
「確かに。しかしその美は」
レダは言う。
「アテナの美ではない。アーレス様の美」
「アーレスの」
「そう。鮮血の美」
耽美な美貌をたたえたその顔に凄みのある笑みが浮かんだ。
「それこそが美だ。この世にあるべき」
「どうやら。美という観念について齟齬があるようですね」
アフロディーテの目が動いた。
「ならばどちらが正しい美なのか」
「決めるか」
三人の黄金聖闘士と狂闘士達の戦いがはじまろうとしていた。だがここで一人の狂闘士が出て来た。彼は自身の同志達を止めたのだった。
「止めておきましょう」
「リーヴェ」
三人に名を呼ばれたその男は女にも見える中性的な顔と長い金髪を持っている。穏やかな物腰だがその威圧感は。他の八大公よりも上だった。
「今ここで彼等を全員倒したとしてもこちらもただでは済みません」
「確かにな」
「それはな」
これは彼等もわかっていた。しかしここでジークがそのリーヴェに対して言う。

「しかしだ。リーヴェよ」
「何でしょうか」
「我等狂闘士は闘いを楽しむもの」
「如何にも」
ジークの言葉に対して頷く。それに関しては異論がないようだった。
「それに関してはその通りです」
「では何故止める」
ジークが問うのはそこだった。

第四話　八大公その三

「我等が闘うことを」
「これからがあるからです」
「これからか」
「そうです」
ジークの言葉に答えた。
「ここで闘いを終わらせるのも何です。楽しみが減ります」
「確かにな」
「それは」
リーヴェの言葉にカナンとレダが頷いた。
「この連中を放っておけば今後も楽しめる」
「最初で終わらせては面白くないということか」
「その通りです。だからこそここは」
「わかった」
「それでいい」
カナンとレダはそれでよしとしたのだった。リーヴェの言葉に従い後ろに戻った。だがジークはまだ前に出たままだった。リーヴェはその彼に声をかける。
「貴方は退かれないのですか」
「俺としては。このカプリコーンが気になる」
「気になるというと」
「面白いのだ」
これが彼の言葉だった。
「この男。どうやらかなりの剣技の様だ」
「確かに」
リーヴェは目を閉じてジークのその言葉に頷いた。
「カプリコーンからはかなりの小宇宙を感じます。鋭い小宇宙を」
「この鋭さ。俺が望むものだ」

赤い剣に主の顔が映されている。表情は変わっていないが赤く光っていた。
「闘いもまたな」
「では。闘われますか」
「いや」
しかしジークもまたそれをしようとはしなかった。
「ここは御前の言葉に従っておくとしよう」
「有り難うございます」
「それではな」
「はい」
こうしてジークもまた退いた。こうして八大公は全て退いた。だが黄金聖闘士達と対峙しているのは相変わらずだった。その中でリーヴェは彼等に対して告げた。
「私ですが」
「リーヴェですね」
ムウが彼の名を呼んだ。
「確か」
「そう。ルキフグスのリーヴェ」
狂闘士の戦衣も名乗った。
「それが私の名です」
「リキフグスのリーヴェですか」
「八大公の一人」
これもまたあらためて名乗る。
「以後お見知り置きを」
「もう一つ聞きたいことがある」
黄金聖闘士達の中からアルデバランがリーヴェに対して問うてきた。
「何でしょうか」
「ルキフグス、ベリアル、ベールゼブブ、ベール、そしてアスモデウス」

今ここで名乗った八大公の者達だ。
「残りの三人の名を聞いておこう」
「よかろう」
「それでは」
アルデバランの言葉を聞いて残り三人が一歩前に出て来た。そうして銘々に名乗るのだった。
「ミシェイル」
白く長い髪に瞳を持つ青年めいた顔立ちの男だった。
「アスタロトのミシェイルだ」
「モロクのドーマ」
くすんだ金髪と鳶色の目の頑健な大男である。
「覚えておいてもらおう」
「サリアです」
癖のある蜂蜜色の髪と青い瞳の少女めいた美貌の顔の少年だった。物腰もその身体つきもまるで女性だ。
「サタナキアの狂闘士です」
「サタナキアのですか」
「これで八人」
ムウとカミュが言う。
「全てがわかった」
「ではそういうことでまた」
リーヴェが黄金聖闘士達に告げる。

第四話　八大公その四

「御会いしましょう」
「おい、言っておくぜ」
デスマスクが去ろうとする彼等に対して言う。
「何だ？」
「御前等今度俺に会った時が最後だ」
デスマスクに応えたのはカナンだった。
「憶えておくんだな」
「忘れはしないでおいてやろう」
カナンの言葉はあえて傲慢さを装ったものだった。
「次に会う時まではな」
「ジーク」
シュラはジークを呼び止めた。
「その剣、俺が断ち切ってやろう」
「貴様にそれができるか？」
ジークは氷の如き目でシュラを見つつ言葉を返す。
「このジークの剣を折ることは。誰にもできはしない」
「私の美を否定したのは貴方がはじめてです」
アフロディーテはレダを見据えていた。
「そのことをお忘れなきよう」
「それは私もだ」
レダもまたアフロディーテを見ていた。そのうえでの言葉だった。
「どちらの美が正しいか。決めてやろう」
「これで終わりか」
アルデバランが最後に述べた。
「奴等の名乗りは」
「そうですね。これでまずは終わりです」
ムウがそのアルデバランの言葉に応えた。

「ですが。これは」
「はじまりに過ぎないというのだな」
「はい、その通りです」
アイオリアにも言葉を返す。
「それだけに過ぎません」
「あの小宇宙」
カミュは姿を消した八大公の小宇宙をまだ見ていた。
「我々に匹敵するものがある」
「その通りです。これは間違いなく激しい戦いになります」
「だとしても。やるだけだ」
ミロの考えはこうであった。
「アテナとこの世界の為にな」
彼等は八大公の小宇宙をまだ見据えていた。ローマでは戦いにはならなかったがこれがギャラルホルンの響きとなった。今戦いが本格的に幕を開けたのだった。
トラキア。八大公は黄金聖闘士達に宣戦布告を終えた後でアーレスの宮殿に戻っていた。ここでまずはエリスの前に全員で拝謁するのだった。
「只今戻りました」
「御苦労」
エリスは一同を代表して挨拶をしたリーヴェに言葉を返した。
「して。どうであった」
「黄金聖闘士達ですか」
「そうだ。その感触は」
「面白いものでした」
こう答えたのはミシェイルであった。
「是非。このミシェイルの手で全員」
「悪いがそれはない」
「何っ!?」
カナンの言葉に顔を向けた。

「それはどういう意味だ、カナン」
「知れたこと。奴らは全員このカナンが血祭りにあげるということよ」
酷薄な笑みをミシェイルに告げる。
「一人残らずな」
「さて、そう上手くいくか」
「レダ」
次に声をあげたのはレダだった。
「カナン、貴様は確かに強い。だが」
「だが。何だ」
「美しさを知らないのだ」
その美しい顔に凄みのある笑みを浮かべての言葉だった。
「ただ勝てばいいというわけではないのだ」
「戯言を。勝たなければ何の意味もない」
カナンもまた凄みのある笑みを浮かべてみせる。レダに対するように。
「しかもこちらは傷つかずにな」
「それはどうかと思うが」
カナンに今度反論したのはリゲルだった。
「貴様は拳で解決するのだな」
「そうだ。この拳でだ」
実際に右手を拳にしてそれを見据えながら語る。
「全てをな。勝ってみせる」
「それもまた愚かだ」
そのリゲルに言ったのはジークだった。
「拳での戦いなぞ。空しいだけだ」
「では本当の戦いは何だ」
「剣しかない」
目に切れ長の光が宿った。
「斬る。それこそが戦いだ」

「まあ待て」
はやる彼等をドーマが宥める。
「ドーマ」
「口出しは無用ぞ」
「戦について話すのはいい」
彼とて狂闘士だ。戦いは好むところだ。しかしここであえて言うのだった。

第四話　八大公その五

「しかしだ。今はエリス様の御前だぞ」
「むっ」
「よい」
エリスはここで彼等を許した。
「その方等の心意気を知ることができたのだからな」
「申し訳ありません」
「有り難き御言葉」
「してだ」
エリスは彼等の言葉を受けながら目を閉じていた。そのうえで今度はサリアに顔を向けた。この場では今まで一言も話さなかった彼に。
「サリアよ」
「はい」
「策はあるか」
「まず今聖域を襲撃しても何の意味もありません」
彼はまずはこう述べた。
「若し勝利を収めたとしてもこちらの損害は計り知れません」
「その通りだな」
「それよりも今は」
そのうえで彼はエリスに告げる。
「四闘神を復活させられるのですね」
「そのつもりだ」
「今その準備をしているが」
「それならばです」
ここでサリアは言った。
「このサリアに考えがあります」
「考えだと」

「はい」
またエリスの言葉に頷いてみせた。
「申し上げて宜しいでしょうか」
「うむ」
エリスもまた彼のその言葉に応えるのだった。
「申してみよ」
「彼等には今アテナがいません」
まずはこれを指摘するのだった。
「それはもう言うまでもないと思うが」
「そこなのです」
しかサリアはしまだそれを言うのだった。
「まだ復活の時ではありません。しかし我々は」
「アーレス様がおられるか」
「まだ復活されてはいませんが」
「アーレス様の復活を早めるというのか」
「如何にも」
彼が言うのはそれであった。
「それを考えていますが」
「どのようにしてだ」
「八つの封印です」
「封印だと」
「左様です」
今度は封印という言葉を出してきた。
「それを一つずつ解いていくことを考えています」
「アーレス様を封印していた。その様なものはない筈だ」
「いえ、違います」
サリアはいぶかしむエリスに対してまた述べた。
「確かにアーレス様は冥界においてまだ眠られております」
「そうだ」
エリスこそそれを最もよく知る者だった。アーレスの妹にして今

はその兄に代わってこのアーレスの宮殿を取り仕切る者だからだ。
知らない筈がなかった。
「冥界の奥深くにな」
「あの。最深部」
彼等の言葉のトーンが低くなる。
「人の中でも最悪の者達が落ち生きながら喰らわれているというあの氷の世界において」
「眠っておられる」
「そのアーレス様をこちらに御呼びするのです」
「その為の八つの封印か」
「左様です」
そういうことだった。
「そこに軍を向けましょう」
「それはわかった」
エリスは一旦はそれは認めた。
「しかしだ」
「はい。何でしょうか」
「問題はその封印だ」
彼女が言うのはそれであった。
「封印とは何ぞや」
「そうだな」
「確かに」
ここで他の八大公達も声をあげだした。エリスにもわからないし彼等にもわからなかったのだ。口々に言い合いながらサリアに顔を向ける。
「サリア、封印とは何だ」
「我等もそのようなものは知らないが」
「それにだ」
彼等は口々に言う。
「アーレス様は封印されているわけではない。眠っておられる」

「その通り。それでどうして」
「封印などと」
「詭弁ではないと思うが」
「御安心下さい。詭弁などではありません」
彼にしては珍しく自信に満ちた声になっていた。

第四話　八大公その六

「エリス様」
「うむ」
「同志達」
「何だ」
それぞれにまず声をかけてきた。
「封印とはつまり」
「つまり？」
「何なのだ」
「アーレス様の好まれるものです」
「好まれるものだと、アーレス様の」
「如何にも」
少女と見紛うその顔に。また笑みを浮かべている。その笑みはある種の邪悪なものも見られた。
「それこそがある場所です」
「ふむ。それではだ」
エリスはそこまで聞いて再びサリアに問うてきた。
「それを申してみよ。封印を」
「はい、それは」
それについて話す。終わってから。エリスと他の八大公達の間に同じ笑みが宿っていた。戦いを好む凄みのある笑みであった。
「流石ですね、サリア」
「有り難うございます、リーヴェ」
まずはリーヴェがサリアを褒め称えた。
「成程、それならアーレス様が望まれる」
「まさにその通りだ」
レダとカナンが言い合う。
「そういう意味の封印ならな」

「こちらとしても楽しみがいがある」
「それでだ」
ジークがサリアに対して問う。
「我等は何をすればいいのだ」
「簡単なことです」
こうジークに言葉を返す。するとドーマがサリアに問うのだった。
「簡単なことだというのか」
「はい。私もまた向かわせてもらいますが」
「向かう。ふむ」
ドーマは彼の向かうという言葉を聞いて自分の右手を口に当てた。
他ならぬ彼自身の。
「ということはだ。我等がそこに向かい」
「そうです」
サリアはミシェイルの問いに答える。
「そのうえで」
「わかった。ならば我等は」
最後にリゲルが言う。
「貴様の言う通りに動こう」
「御願いします」
「さすれば我等の策は決まった」
エリスはあらためて八大公に告げる。厳かな声で。
「八大公よ」
「はっ」
彼等もエリスのその声に応える。一斉に頭を垂れ片膝をついて。
「そなた等に命ずる。八つの封印に向かえ」
「畏まりました」
「その際には軍勢も連れて行け」
こうも述べる。
「よいな。そしてそこで」
「封印を」

「そうだ。戦うのだ」
こう八大公に告げたのだった。
「アーレス様の為に」
「アーレス様の為に」
この言葉が繰り返される。彼等は血の色の衣の光を受ける顔に戦いへの予感を楽しむ笑みを浮かべて応えるのだ。彼等は戦いの予感に喜びを見出していたのだった。
その頃聖域では。シャカが教皇の前にいた。彼の前に片膝をつき畏まっていた。
「シャカ、只今参上しました」
「うむ、それでだシャカよ」
シオンはすぐにシャカに尋ねてきた。その座に座りながら。
「わかったことはあったか」
「まずローマに向かったムウ達が八大公と会いました」
「そうか。ロムルスとレムスの街でか」
「そして」
「そして」
気を張り詰めてシャカの話を聞いているのがわかる。仮面の下の顔は真剣な面持ちである。

第四話　八大公その七

「トラキアのアーレスの宮殿から四つの強大な小宇宙が感じられます」
「四つのか」
「まだそれは実体化していませんが」
「そうか」
それを聞いて静かに頷いた。
「では御前は今後もトラキアへの監視及び聖域の防備に当たってくれ」
「わかりました」
「護りなくては戦いはない」
シオンは言う。
「だからだ。よいな」
「はっ、それでは」
「他に何かわかったことはあるか」
「これは私が感じ取ったことです」
こう前置きしてから述べる。
「それは何か」
「申し上げて宜しいですか」
「うむ、構わぬ」
シオンもそれを許す。聞かずにはいられないことだった。
「はい、それでは」
「そして。何だ」
それをシャカに問うのだった。シャカはそれを受けて彼に話を聞くのだった。
「狂闘士達の動きです」
「彼等の動きがか」
「そうです」

シオンに対して頷いて答える。
「どうやら彼等は封印を探しています」
「封印を？」
「これは彼等の話を聞いてのことです」
「話をだと」
これはシオンにも出来ぬことだった。彼の力をもってしてもトラキアのアーレスの宮殿のことを知ることはできない。しかしシャカにはそれができたのだ。これはシオンにとっても驚くべきことだった。だからこそまずはそれを聞かずにはいられなかった。
「どの様にしてその様なことを」
「このシャカは幼き頃より神に近い存在と言われてきました」
「うむ」
またシャカの言葉に頷く。これもまたシオンがよく知ることだった。彼の小宇宙が今聖域に集う黄金聖闘士達の中でも際立って強大なものであることもまた知っていた。しかしそれでも彼がアーレスの宮殿のことまで知っているというのは驚くべきことだったのだ。
「ですからこの六道で知らぬことはないのです」
「六道か」
「はい。天道、人道、修羅道」
まずはこの三つの世界を述べる。
「畜生道、餓鬼道、地獄道」
「仏教の六つの世界だな」
「左様です。この六つの世界でおおよそのことを聞けぬことはありませぬ。だからこそ」
「そこまで知ることができるのが御前の力の一つだというのだな」
「その通りです。ですから」
シャカは言葉を続ける。
「知ることができたのです」
「わかった。そしてだ」
それを聞いて納得したうえであらためてシャカに問う。

「彼等は一体どの様にして来るのか」
「世界に八つの封印があるそうです」
「封印がか」
「それを解くか何かするなりしてアーレスをこの世界に呼ぶそうです」
「そうなのか」
「はい」
またシオンの言葉に頷く。
「些細なことまでは流石に知ることができませんでした」
「そうか。だが八つの場所だな」
「そうです」
「問題はそこが何処かだが」
「既にそれはわかっています」
だがシャカはその言葉にも応えることができた。
「それはまことか」
「はい。まずはドイツです」
「ドイツか」
「ドイツのライプチヒ」
東ドイツの都市の一つである。音楽家ワーグナーの生誕地でもある。
「そこです」
「そこに狂闘士達が向けられる」
「指揮官として八大公の一人も出るようです」
「八大公か。ならば」
シオンはそれを聞いてさらに判断を下すのだった。
「こちらも黄金聖闘士を出さなければならないな」
「そうあるべきかと」
こう述べてシオンの言葉に賛同する。
「よし、それではだ」
「ではライプチヒには」

「黄金聖闘士達を集めよ」
まずはこう述べた。
「そのうえで送る者を決める。それでよいな」
「御意」
こうして聖域としても方針が決まった。アーレスの狂闘士とアテナの聖闘士の戦いが遂に本格的なものとなろうとしていたのだった。聖域の空に戦雲が立ち込めそのさらに上には赤い凶星が禍々しく輝いていた。まるで血の色の様に。

第四話　　完

２００８・４・２２

第五話　デスマスク出陣その一

デスマスク出陣

シオンの言葉を受けて教皇の間に黄金聖闘士達が集められる。彼等はサガとアイオロスを前列にし横に並んで片膝をついて控えている。その彼等にシオンが告げる。

「まずはローマでの件御苦労だった」

「はっ」

「有り難うございます」

ムウ達八人がシオンのその労いの言葉に応える。

「そしてだ。この度ここに集まってもらったのは他でもない」

「狂闘士達のことですね」

「そうだ」

サガの問いに厳かに答える。

「彼等の行動がわかった」

「行動が」

「それは一体」

「八つの封印を解きアーレスを一刻も早くこの地上に降臨させるつもりらしい」

「冥界に逃げ込んでいるアーレスを」

「そうなれば」

どうなるかは彼等が最もわかっていることだった。今聖域にはアテナはいない。神に対抗できるのは神だけだ。つまりそれだけで聖闘士達は絶望的な危機に晒されるのだ。

それが嫌になる程わかっている。だから彼等の顔が曇る。その彼等に対してシオンはさらに告げる。

「シャカの力でわかった。彼等はそうすることによりアーレスの力を得、それによりこの地上を彼等のものとするつもりなのだ」

「その様なこと、許すわけには」

アイオロスがここで声をあげた。
「教皇、それを防ぐ為にもここは是非」
「我等黄金聖闘士に出陣を」
「わかっている」
サガも提案したところでそれに応えた。
「無論そのつもりだ。白銀及び青銅の聖闘士達も行かせるが黄金聖闘士も行かせる」
「わかりました」
「そして誰が」
「既に誰を行かせるかも決めている」１０シオンは二人に対して答えた。それを聞いて黄金聖闘士達の間に緊張が走る。言葉にこそ出さないがその緊張はかなりのものだった。
「では一体」
「誰を」
「デスマスク」
呼んだのはデスマスクだった。
「はっ」
「すぐにライプチヒに向かえ」
「わかりました。それでは」
「間違いなく八大公の一人もいる」
こうデスマスクに告げる。
「心して行くようにな」
「御安心を、教皇」
デスマスクは頭を垂れたまま自信に満ちた声でシオンに応える。
「このデスマスク、必ずやその八大公の一人の首を持参して聖域に戻って参ります」
「以上だ」
デスマスクに出陣命令を下すとこれで話を終えるのだった。
「白銀及び青銅の聖闘士達の人員はおって伝える。ではそれぞれ持ち場に戻るがいい」

「わかりました」
「ではこれで」
こうしてデスマスクの出陣が決定し黄金聖闘士達はそれぞれの持ち場に戻ったサガとアイオロスも戻ろうとするがここでシオンは二人を呼び止めた。
「待て」
「何でしょうか」
「教皇、まだ何か」
「御前達に少し話しておくことがある」
立ち上がりその場を去ろうとした二人に対して言うのだった。
「この度の聖戦だが」
「はい」
「それにおいて何か」
「おそらく激しい戦いになる。確かに我々には十二人の黄金聖闘士達がいる」
彼等が聖域の切り札であり主力であるのはもう言うまでもない。
「しかしその多くはまだ若い」
「左様ですか」
「今出陣を命じたデスマスクにしろだ」
デスマスクについても言及する。
「まだ若い。だから御前達二人には」
「彼等のフォローをせよと」
「そうだ。まずはサガ」
「はい」
サガはシオンの言葉に応えた。

第五話　デスマスク出陣その二

「そなたがデスマスクのフォローに当たれ」
「私がですか」
「御前達二人には八つの封印にそれぞれ向かう黄金聖闘士達のサポートを頼むのだ」
「では我々の任務は」
「八大公だけではない。彼等にはあのエリスがいる」
シオンは彼女の力を恐れていた。復讐の女神である彼女の力を。
「だからだ。用心に用心を重ねておくのだ」
「はっ、それでは」
「その様に」
「では行くのだ、サガよ」
あらためてサガに指示を出す。
「デスマスクの影となり戦え。よいな」
「畏まりました」
こうしてサガの出陣も決まった。だがそれはデスマスクには伝えられなかった。デスマスクは白銀及び青銅の聖闘士達を何人か連れてライプチヒに向かった。そうして空港を降り立ちそこに来たのだった。
かつて東ドイツにあった静かな街だ。繁栄はしているが穏やかで至る所にワーグナーやゲーテの記念碑がある。今デスマスク達はライプチヒ大学の前にいた。
「そうそう、ここですよ」
クロウのジャミアンが大学の校内を指差しながらデスマスクに語る。
「ここにゲーテがね」
「ゲーテ？ああ、あいつか」
デスマスクはそれを聞いて何かを知っているかのように応えた。

「俺の国にしょっちゅう来ていた奴か」
「御存知だったんですか」
「イタリアにはしょっちゅうドイツ人が来るんだよ」
デスマスクはこうもジャミアンに述べる。
「それこそ昔からな」
「そういえばそうですね」
それに他の者も応える。そこにはムスカのディオもいる。
「イタリアに来るドイツ人って多いですよね」
「食い物が美味いし気候もいいからな」
さりげなく祖国の自慢をするデスマスクだった。
「だからだな。それで」
「そうですか、やっぱり」
「ここ、寒いだろ」
デスマスクは顔を顰めさせて一同に言ってきた。
「こんな寒い国にいれば自然と暖かいところが恋しくなるさ」
「それがイタリア」
「ワーグナーだって度々来ていたよな」
今度はワーグナーの名前が出る。ライプチヒ出身なのだ。
「そうでした、ワーグナーも」
「何かっていうとイタリアに来ていたが。で、ここにゲーテが通っていたのかよ」
「そうですよ」
ジャミアンはそれをまた告げる。
「この大学に」
「まあかなり古そうな大学だな」
デスマスクは大学の中を覗いて述べる。古い建物が立ち並びそれだけで絵画になるような見事な風景だ。特に幾つかの建物がデスマスクの目に入った。彼等それ等を見て呟く。
「まあ悪くはないな」
「ですか」

「ああ。それはそうと腹が減らねえか？」
彼は今度は食事について言ってきた。
「腹がですか」
「そうだよ。ここに来てから何も食ってねえだろ」
「確かに」
「だからだよ」
ここでまた一同に言う。
「何か食おうぜ。腹が減ってたら勝てるものも勝てなくなるからな」
「そうですね。それでは」
「ドイツ料理でも」
「ソーセージにジャガイモか」
デスマスクはまずこの二つを話に出した。

第五話　デスマスク出陣その三

「ドイツつったら」
「お嫌いですか？」
「いや、結構好きだな」
まんざらでもないといった顔でジャミアンに言葉を返した。
「イタリアでも結構食うからな」
「そうですか」
「ああ。で、どの店に行くんだ？」
デスマスクは次にそれをジャミアンに問うた。
「御前が知ってるのか」
「ええ、まあ」
「確かだろうな」
何故か彼はここでジャミアンに懐疑の目を向けるのだった。他の聖闘士達も同じだった。ジャミアンにしてみればそれが何故か不服だった。
「何で俺をそんな目で見るんですか」
「御前イギリス人だろ」
デスマスクはそこを指摘した。
「イギリス人ならやはりな」
「味がわからないっていうんですか！？」
「違うか？」
デスマスクはそれを真顔で問うのだった。
「まずいので有名だろ、イギリスは」
「確かにそうですけれど」
ジャミアンにしろそれは否定しない。できないと言ってよかった。
「それでも。ちょっとは信じて下さいよ」
「デスマスク様」
ここでディオがジャミアンに助け舟を出した。

「一応こいつは味がわかりますよ」
「本当か？」
「これで料理も得意ですし」
「嘘だろ！？」
「ジャミアンが」
青銅の面々もこれには驚きだった。今回参加しているのは旗魚星座の　ゾルダと巨嘴鳥星座ブラウ、それに八分儀星座のレッシュと帆星座のアンタスの四人である。
「イギリス人なのに」
「料理が得意なのか」
「あのなあ、御前等」
いい加減ジャミアンもうんざりしてきて彼等に対して言う。
「幾らイギリス人でも料理はするぞ」
「それでも」
「イギリスといえば」
「イギリス人でも味に五月蝿い奴はいるんだ」
こう四人に述べる。
「俺みたいにな」
「にわかには信じられんがな」
しかしデスマスクはまだ信じようとはしない。
「まあ味が悪かったら全額御前が出すってことでいいな」
「あれっ、巨蟹宮からそういった経費は全部出るんじゃ」
「馬鹿言え」
それはその巨蟹宮の主であるデスマスクによってすぐに否定された。
「そんな訳ねえだろうが」
「そんな訳ないって」
「聖域だって金が無限にある訳じゃないんだぞ」
「あれっ、そうだったんですか」
実はそのことについてここにいる誰も実感がなかったのだ。デス

マスク以外は。
「金なら腐る程あるとばかり」
「あるにはあるさ」
それはデスマスクも知っている。
「けれどな。かなりの部分が人件費やら神殿とかの維持費に消えるんだよ」
「えっ！？」
「そんなので！？」
「兵隊だけで何人いると思ってるんだ」
デスマスクの言葉はかなり現実的であるがかなり夢のないものでもあった。少なくともあまり聖域にとっては見て欲しくはない現実である。
「十二宮にしろだ」
「はい」
「あれだけのものを維持するんだぞ。相当な金がかかってるんだぞ」
「そういえば俺達も」
「生活に困ったことはないよな」
生活は完全に保障される。聖闘士ならば。

第五話　デスマスク出陣その四

「俺達の宮殿なんて金は完全にガラス張りだぞ」
「ガラス張りですか」
「無駄金なんぞ一銭もねえ」
また実にはっきりとした言葉だった。
「そういうところは厳しいんだ。金の管轄は全部教皇がしておられるからな」
「教皇が」
「何なら直接教皇にお話してみろ」
かなりきつい言葉であった。素っ気無いにしろ。
「何言われるかは保障しねえがな」
「わかりました。じゃあ」
「そういうことで」
「それでも金は困らないだけあるさ」
それは保障するデスマスクだった。
「飯食う分位はな」
「あと泊まる場所と」
「で、それでだ」
デスマスクは話を戻してきた。
「おい、ジャミアン」
「はい」
ジャミアンはあらためてデスマスクの言葉に返事をした。
「それでその店は何処なんだ？」
「ここをまっすぐに行ったビアホールです」
「ビールもあるのか」
「ええ、酒はいけますよね」
「まあな」
とりあえず年齢のことは誰も言わない。話さなければ誰にもわか

らないからだ。特にジャミアンやディオはそれに関してはかなりのものだった。
「じゃあゾルダ、ブラウ、レッシュ、アンタレス」
「何でしょうかデスマスク様」
「行くぞ」
「あっ、はい」
「それだけですか」
何しろ乱暴なところがあると噂になっているデスマスクだ。実際修行中にはかなりの無茶をする暴れ者でそのことでも有名だった。その彼に声をかけられて四人は心の中で身構えていたのだ。
「それだけって他に何があるんだよ」
デスマスクはいぶかしむ目で四人に問うた。
「何もないだろうが。まだ敵もいないぞ」
「ま、まあそうですけれど」
「あはは」
「わかったら行くぞ」
あらためて四人に告げる。
「いいな、戦いの前に栄養を摂っておけ」
「わかりました」
「それじゃあ巨蟹宮のお金で」
「あんまりふざけてっと蟹の餌にするぞ」
最後のデスマスクの言葉は半分本気だった。何はともあれ彼等はビアホールでソーセージとビールを楽しむのだった。それはジャミアンが勧めるだけに絶品だった。この日の一行はまずは陽気にライプチヒでの旅を過ごすことができた。
その翌日。デスマスクは一人ライプチヒの街中を歩き回っていた。派手で赤と黒の目立つ服を着ている。周りのドイツ人達とは明らかに雰囲気が違う。ドイツの街にもいささか不釣合いであった。
だが彼はそれに構わずに街中を歩き回っている。そこにゾルダがやって来た。彼も私服だ。

「見つかったか」
「はい」
ゾルダはデスマスクの顔に自分の顔を寄せて頷いた。目が鋭くなっていた。
「いました」
「狂闘士の奴等か？」
「雑兵でした」
ゾルダはこうデスマスクに答えた。
「狂闘士の連中は見なかったんだな」
「はい、主立った連中は」
「そうか。だがいるな」
「いますか？」
「感じないか、この小宇宙」
真剣な顔になっている。普段の余裕綽々な態度が殆ど消えていた。

第五話　デスマスク出陣その五

「十人、ってとこだな」
「十人、ですか」
「何だ、びびってるのかよ」
「いえ、それは」
「だったらいいがな。いいか」
ここでまたゾルダに対して言うのだった。
「はい」
「聖闘士の仕事は戦うことだ」
聖闘士ならば誰もがわかっていることだ。ゾルダは何故デスマスクがここでこんなことを言うのかわからなかった。しかしデスマスクはそれでも言葉を続けてきた。
「逃げることは許されないからな。それはいいな」
「わかっていますけれど」
「ならいい。他の奴等にも声をかけろ」
あらためてこう言う。
「わかったな」
「はい、じゃあすぐに」
「急げよ。敵は待ったりはしないからな」
「ええ、それは」
「わかってるな。場所はだ」
「はい」
「この街の外だな」
デスマスクの目が光った。
「そこから来る。今から全員でそこに向かうぞ」
「この街の外ですか」
「記念碑があるか」
デスマスクはそれも見ているようだった。これも黄金聖闘士の力

であろうか。ゾルダはそれを見て心の中で思うのだった。
「そこにかなりの小宇宙が集まってきているぞ」
「記念碑ですか」
「広くて開けた場所だ。そういえばあれだったな」
デスマスクはあることに気付いたのだった。
「ここじゃ派手な戦争あっただろ」
「ああ、ナポレオンが負けた」
所謂ライプチヒの戦いだ。シベリアで政治的に致命的なダメージを受けたナポレオンに止めをさした戦いだ。この敗北でナポレオンは終わったのだ。ドイツにとっては誇るべき戦いだ。
「その戦いだったよな」
「はい、ここです」
「その古戦場に集まってるぜ。連中らしいな」
今のデスマスクの言葉はゾルダにはわからなかった。ついつい怪訝な顔になる。
「連中らしいといいますと」
「おい、わからないのかよ」
デスマスクはゾルダのその顔を見て眉を顰めさせてきた。
「狂闘士は誰の手下だ？」
「アーレスのです」
「だからだよ。戦場が好きなんだろ」
「ああ、そういうことですか」
こう言われてやっとわかるゾルダだった。
「それでしたら」
「わかったな。じゃあそっちに行くぞ」
「はい、わかりました」
「やっとわかったな。まあいいさ」
デスマスクはそれでもういいとした。
「とにかくだ。戦場跡に向かうぞ」
「はい」

こうしてデスマスクと他の聖闘士達はライプチヒの古戦場に向かった。既に古戦場にはインプ達が大勢集まっていた。彼等はそのままその場所で集結していた。
「さて、後はだ」
「狂闘士の方々の御指示を待つだけだが」
「あの方々はどこだ?」
彼等の中の一人が周りを見回しつつ仲間に問うた。
「見かけないが」
「こちらに向かっておられる」
仲間の一人が彼に答えた。
「だから安心しろ。必ず来られるからな」
「そうか。ならいい」
「さて、それでだ」
また別の一人が仲間達に問うてきた。
「封印は何処だ?そんなもの見掛けたか?」
「いや」
「そんなのないぞ」
誰もがこう答える。
「封印封印っていうが」
「ここにあるんだよな」
「エリス様はそう言っておられた」
今実質的に狂闘士達を仕切っているのがエリスだ。だからこそエリスの言葉は今は彼等にとっては絶対のものになっている。疑うことすら許されない。
「では間違いがないな」
「しかし。何もない」
「記念碑はあるがな。こんなもの見てもな」
一人が忌々しげにライプチヒの戦いの戦勝記念碑をその手に持つ三叉の槍で壊そうとする。しかしこの時に急に彼は吹き飛ばされた。

第五話　デスマスク出陣その六

「なっ！？」
「誰だ！」
「何処から来やがった！」
「その前に歴史の記念碑を壊すような無粋な真似は止めろよ」
敵を吹き飛ばしたその者の言葉だった。
「御前等は戦うが仕事なんだろ？御前等の神様の為によ」
「貴様、その聖衣は」
「まさか」
「ああ、そのまさかだよ」
太陽の黄金色の光をそのまま反射させて立っている。背には白いマントをたなびかせるその男は。最早誰なのか言うまでもなかった。
「デスマスク！」
「キャンサーの黄金聖闘士！」
「ああ、その通りだ」
デスマスクは不敵な笑みを浮かべて彼等の前に立っていた。見ればいるのは彼だけだ。
「俺の名前は覚えておけよ。勲章になるぜ」
「勲章？そうだな」
彼等のうちの一人がデスマスクのその言葉に表情を鋭くさせた。
「黄金聖闘士を倒せば我等にも」
「栄誉が与えられる」
「この上ない栄光が」
「おう、俺を倒せればな」
デスマスクは不敵な笑みを浮かべ続けながら彼等に言葉を返す。
「そうなるな。ただし」
「ただし。何だ？」
「何が言いたい」

「御前等に俺が倒せるかってことだよ」
デスマスクが言うのはそこであった。
「雑兵にな。どうだよそこは」
「ふざけるな」
「我等とてアーレス様の戦士」
デスマスクのその挑発めいた言葉に一斉にいきり立つ。
「聖闘士なぞに遅れは取らぬ」
「覚悟しろ、この数なら」
「悪いが数は問題にならねえんだよ」
しかしデスマスクの余裕は変わらない。またこう言葉を返すだけだった。
「御前等程度じゃな」
「我等が烏合の衆というのか！」
「聞き捨てならんぞ！」
「烏合の衆も何もその通りだろうが」
デスマスクは口の両端をわざと歪めて笑ってみせて彼等を挑発してきた。
「雑兵が偉そうに能書き垂れてるんじゃねえ」
「貴様ァ！」
「もう許さん！」
それを聞いてインプ達はさらに激昂するのだった。
「最早ここで倒してくれる！」
「その首アーレス様の手土産に！」
「だからそんなのできるわけねえって言ってるだろうが」
彼等が一斉に向かって来てもデスマスクは平然としている。そのうえでまた彼等に告げてきた。
「あんまり数多いから纏めて相手にしてやるぜ」
「ほざくな！」
「聖闘士ごときか！」
「聖闘士ごときか。じゃあ地獄にいるアーレスに伝えておきな！」

言いながら右手を掲げてきた。
「本来なら拳で始末してやるけれどよ。今回は特別だ！」
「むっ！」
「喰らえこのデスマスクの奥義！」
言いながらその右手を前に出して人差し指を出してきた。そこから白い光を放ちインプ達を全て包み込んでしまった。
「積尸気冥界波！」
「何っ、積尸気冥界波だと！」
「まさかそれは！」
「そうよ、このデスマスクの星座キャンサーの中にある積尸気は冥界のこと。つまりキャンサーは死を司る！」
このことを言うのだった。
「だからこそ使える技だ。覚悟しやがれ！」
「た、魂が！」
「こ、この世から！」
「さあ、全員そのまま地獄へ戻りな！」
またインプ達に対して叫ぶ。
「うざいからよ！」
「うわあああああーーーーーーーっ！」
叫び声と共に彼等はその魂を乖離させられそのままそれを消えさせていく。デスマスクの積尸気冥界波により一斉にその魂を冥界に送られたのだった。
「へっ、他愛のねえ」
デスマスクは彼等がそのまま地に倒れ伏しそのまま動けなくなったのを見届けてまた余裕の笑みを浮かべてみせたのだった。

第五話　デスマスク出陣その七

「所詮雑兵だな。積尸気冥界波を使うまでもなかったかな」
「そうだな。それは我々にこそ使うべき技」
「前座が終わって本隊登場ってわけか」
「キャンサーのデスマスクだったたな」
「もうわかってると思うがな」
その声達に対して応える。
「違うか？」
「ふっ、確かに」
「その通りだ」
禍々しい赤い鎧にその身体を覆う者達が姿を現わす。まずは大柄な男が名乗った。
「俺は子爵フォラスのサムソン」
「男爵ストラスのアトロム」
今度は青い目の優男が。その髪はかなり長い。
「公子ヴァピュラのロファール」
少年だった。まだ幼さの残る顔だ。
「我等三人がまず相手をしよう」
「三人がかりってわけかよ」
「その割には不敵そうだな」
アトロムがデスマスクの顔を見つつ問う。
「しかも至ってな」
「余裕があるというのか、まさか」
ロファールはそのことに不安を感じているようだった。
「我等三人を前にして」
「ああ、生憎だがその通りだぜ」
デスマスクは楽しげに笑ってロファールのその不安に答えるのだった。

「悪いが俺も実力じゃかなり自信があるんだ。負けはしねえぜ」
「言ってくれるな。まさに大言壮語だ」
サムソンは一言でこう言い捨てた。その言葉と共にゆっくりと前に出る。
「かつて聖戦で御前達聖闘士を圧倒した我等狂闘士、しかも三人を前にして」
「それが言えるとはな」
「この男、頭がおかしいのか」
アトロムとロファールはこう思ったのだった。
「キャンサーの黄金聖闘士は他の者とはかなり違っていると聞いたが」
「おう、そこのガキ」
デスマスクはそのロファールに対して言葉をかけてきた。
「何だ？」
「もうママにお別れの挨拶は済ませたんだろうな」
「何っ！？」
「戦争をやるんだ」
デスマスクが言うのはそれであった。
「例えガキだろうが爺だろうが女だろうがな。攻撃は避けちゃくれねえぞ」
「無論そのつもりだ」
何故か言葉に強がりが見えるロファールだった。
「我等はアーレス様の狂闘士。戦場で戦うことこそがその責務」
「それを愚弄するというのか」
「馬鹿か、御前等」
ロファールも問い詰めてきたところで軽い言葉を出してみせてきた。
「戦場で戦うのは当然なんだよ。このデスマスクはな」
「御前がどうしたのだ？」
「相手が誰だろうが容赦しねえってことだ。アルデバランやアイオ

リアとは違ってな」
「違うというのか」
「そうさ、誰だろうがぶっ殺してやるがそれでもいいな」
「望むところだ」
アトロムが前に出る。やはり血気盛んな感じだ。
「御前は俺が倒す。狂闘士の力見せてやる」
「何か知らねえが随分気合の入ったガキだな」
デスマスクが彼から受けた印象はその程度だった。それ以上でもそれ以外でもない感じなのがその表情からも容易に見て取れる。

第五話　デスマスク出陣その八

「初陣で気が立ってるのか？」
「うっ、言わせておけば」
「よせ、アトロム」
激昂しかけた彼をロファールが制止する。
「今迂闊に前に出たらそれで取り返しのつかないことになるぞ」
「けれどロファール」
自分を制止したロファールに対しても言うのだった。
「このままこいつに言わせておけば」
「あれは挑発だ」
「へえ、やっぱりわかるんだな」
平然とその指摘を認めてみせるデスマスクだった。腕を組んで平気な顔をしている。
「まあこっちもわかってやってるんだがな」
「貴様！」
「だから待てと言っている」
ロファールはまたアトロムを制止する。
「迂闊に動けば死ぬだけだぞ」
「くっ！」
「で、どうするんだ？」
デスマスクはあらためて三人に問うてきた。
「誰が最初に来るんだ？俺は別に三人がかりでもいいんだがな」
「三人がかりでもな」
「さっきの雑魚共よりはずっと楽しませてくれるんだろうな」
今度はサムソンに対して問う。
「どうなんだよ、そこんところは」
「あの者達は雑兵などではない」
サムソンは今のデスマスクの言葉には不快を感じたようであった。

言葉がくぐもっていたのがその証である。
「あの者達は我等の同志」
「それでも階級があるじゃねえか。御前等も男爵だのそんなの名乗ってるじゃねえか」
これは実際のことだった。狂闘士達は八大公を頂点として爵位が存在する。それは欧州等の貴族の爵位と大体同じ階層になっており彼等はそれぞれに位置しているのだ。
「それで同志なのかよ」
「そうだ。確かに階級はある」
それはサムソンも認めるところだ。
「だがそれ以上にアーレス様の為に戦うという共通の志がある。それによって我々は深く結ばれているのだ」
「だから同志ってわけかよ」
「その通りだ」
これこそが彼の言いたいことであった。
「貴様はそれを罵倒するというのか」
「四の五の言うのはな、弱い奴のすることなんだよ」
だがデスマスクはサムソンの静かな怒りを前にしても態度をそのままにしていた。
「何だと貴様！」
「我等狂闘士の誇りまで嘲笑うというのか」
これにはアトロムだけでなくロファールも怒りを見せてきた。
「そこまで言うのなら容赦はしない」
「やはりここで」
「おう、さっさと来な」
またしても余裕綽々といった様子で三人を挑発してみせる。
「纏めて相手してやるからよ。四人でも五人でもな」
「四人？五人？」
「馬鹿な、貴様何を言っている」
三人は今のデスマスクの言葉には顔を顰めさせた。

「我等は三人だ」
「それを何故四人だ五人だのと」
「後ろを。見てみるんだな」
腕を組んで三人に告げてみせてきた。
「御前等の後ろをな。その目をよおく見開いてな」
「後ろを・・・・・むっ！？」
「この小宇宙は」
三人は後ろに凄まじいまでの、自分達を合わせたよりも強大な小宇宙を感じた。見れば後ろからまた二人姿を現わしたのだった。
「続々とおいでなさるな」
デスマスクはその二人の姿を見てまた楽しそうに笑う。それは戦いとそれに伴う死をも楽しむ戦士の顔であった。まるで狂闘士の様な。

第五話　　完

２００８・４・２９

第六話　恐怖軍団その一

恐怖軍団

新たに現われた二人の者達。見ればその二人もまた血塗られた赤の衣を身にまとっていた。
「また狂闘士ってわけか」
「ま、まさか」
「貴女達までもう到着されるとは」
三人はその二人の狂闘士達の姿を認め驚きの色を隠せなかった。
「ここは我等だけで充分です」
「そうです、たかだか聖闘士の一人」
「いえ、それはなりません」
二人のうちの一人が三人の言葉に対して答えてきた。
「そこにいるキャンサーは黄金聖闘士。ならば」
「相当の実力があると見なければなりません」
もう一人も言ってきた。見たところこの二人は狂闘士の中でもかなりの高位のようだった。しかも片方がより位が高い。デスマスクは一人が先に進んでいるのを見てそこまで見抜いていた。
「何か随分と偉いさんが来たみたいだな」
「いえ、私達はただアーレス様にお仕えするだけ」
「そして我等を率いるカナン様の手足となる者達」
「カナン！？ああ、あいつか」
デスマスクはその名を聞いてすぐにそれが誰か思い出した。
「ローマで俺につっかかってくれたあのキザな蝿野郎か」
「カナン様への罵倒は許しません」
その上位と思われる者がデスマスクの今の言葉を咎めてきた。
「例え誰であろうと」
「それが聖闘士ならば尚更のことです」
「といっても俺にはアーレスも蝿野郎も関係ねえんだがな」

あくまでアテナの聖闘士であることを言外で言っていた。
「それにだ。御前等ならよくわかるだろ」
「何がですか？」
「御前等に俺をどうこうすることは言えねえんだよ」
不敵に笑い小宇宙を増大させてみせてきた。
「強い奴が絶対に正しい、これはわかるよな」
「力こそは正義だと」
「そう言いたいのですね」
「その通りだ、そして俺は御前等より遥かに強い」
こう断言してきた。
「だったら言う資格はねえよな。違うか？」
「確かに貴方はお強いでしょう」
「ですが」
今のデスマスクの言葉を受けてか二人の小宇宙が増大してきた。
「私達もまた狂闘士」
「そうおいそれとは敗れることはありませんよ」
「そうかい。じゃあ五人纏めて相手してやるよ」
やはり五人を前にしてもデスマスクの自信は揺るがない。
「来な。一撃で地獄に送り返してやるぜ」
「果たしてそう上手くいきますか？」
「私達五人を相手にして」
二人を中心にして五人はそれぞれ構えを取って来た。
「名乗りましょう」
「私達の名を」
構えたうえでまた言ってきたのだった。
「ほお、見たところ女だが何ていうんだ？」
「私は公爵、フルーレティのユニ」
薄緑のショートヘアに同じ色の目を持つ白い肌の少女だった。小柄であどけない印象を与える。だがその小宇宙は狂闘士の禍々しいものだった。

「私は伯爵、シトリのリィナ」
もう一人も名乗ってきた。こちらは褐色の肌に黒い目に黒のショートヘア、やはり少女であるが活発な印象を与えていた。何と二人共少女だったのだ。
「以後お見知り置きを」
「キャンサーのデスマスクよ」
「女かよ」
デスマスクの二人の名を聞いた最初の感想はこうであった。
「狂闘士は女も多いって聞いていたけれど早速出て来るとはな」
「生憎ですが女といっても」
「私達を侮らないことです」
「ああ、それは安心しな」
心まで身構えてきた二人に対して左手を軽く、スナップさせるようにして横に振ってから答えてきた。

第六話　恐怖軍団その二

「俺にはそんなのはねえからよ」
「ないのですか」
「男だろうが女だろうが構わないってことだ」
そのうえでの言葉だった。
「構わないのですか」
「俺はどっちでも相手してやるよ」
ユニに対して言葉を返してみせてきた。
「男でも女でも年寄りでもガキでもな。敵なら殺してやるさ」
「そうですか。それが聖闘士ですか」
「アテナの聖闘士もやはり。所詮は私達と同じで」
「おい、そこは勘違いするなよ」
だがデスマスクは今の二人の言葉にはすぐに突っ込みを入れてきた。
「!?違うとでも」
「他の聖闘士ならいざ知らずな、黄金聖闘士は違うんだよ」
「どう違うと」
「黄金聖闘士が出るってことはそれだけで聖域にとっては切り札なんだよ」
デスマスクの言葉の調子が変わった。険しく鋭いものになっている。その顔もまた同じだった。
「こっちだってな。本気なんだよ」
「それは我等とて同じこと」
しかしユニはデスマスクの言葉にもすぐに返すのだった。
「アテネに黄金聖闘士あらばトラキアには八大公あり」
「その通り。我等とて負けるつもりはありません」
「そうかよ。じゃあ退くつもりはないってことだな」
「如何にも」

リィナが答え続ける。
「キャンサーよ、ここで」
「死んでもらいます」
「じゃあ。来い」
その余裕綽々の態度はそのままだったが小宇宙が増大した。それは五人の狂闘士達を前にしても全く臆するところがなかった。
「どいつが来るんだ?それとも一度に来るか?」
「ユニ殿、ここはこのサムソンが」
「いえ、ロファールが」
二人が名乗り出る。
「お任せ下さい」
「この男、先程から我等を嘲り続けていますので」
「いえ、ここは私が行きます」
しかしリィナが名乗り出るのだった。
「このシトリのリィナがキャンサーの首を挙げて御覧に入れましょう」
「リィナ」
「貴女がか」
「貴方達やユニ様の手を煩わせることはありません」
こう述べて前に出て来た。
「ですからここはこの私が。ユニ様、それで宜しいでしょうか」
「はい」
ユニはリィナのその言葉を受け止めて頷いた。
「では貴女に任せます。そのシトリの力で」
「有り難うございます。ではキャンサーよ」
「ああ、手前が相手かよ」
「その命、貰い受けます」
こう言ってデスマスクと対峙する。リィナの小宇宙もまた増大していく。だがデスマスクの余裕は全く変わらない。
「さて、どう来るんだ?一対一で俺に勝てると思ってるのか?」

「我等狂闘士を前にしてまだそのような」
「言った筈だがな。こっちも本気なんだよ」
しかし態度からはそれは見えない。
「だから来な。女だからって遠慮はしねえからな」
「その大口、今すぐ二度と言えないようにして差し上げます」
そう言うとすぐに前に出た。右手の爪でデスマスクに襲い掛かって来た。
「爪か」
「我が戦衣であるシトリは豹の頭を持つ魔神」
リィナはデスマスクにその爪で襲い掛かりながら言う。
「ならば爪があるのも当然です」
「まあそうだな」
「この爪を受けて。倒れるのですキャンサー」
上から大きく振り被り爪を繰り出してきた。
「パンサーファング！」
技の名を叫びながらデスマスクを引き裂かんとする。右斜め上から左斜め下に一気に切り裂いた。しかし。デスマスクはそこにはいなかった。
「何っ、いない」
「まあ確かに鋭そうだな」
何処からかデスマスクの声がした。
「ただし。当たればの話だがな」
「くっ、何処に」
「ああ、ここだ」
リィナの後ろにいた。既にそこに移っていたのだった。

第六話　恐怖軍団その三

「悪いがな。もうわかっていたんだよ」
「わかっていた!?馬鹿な」
「馬鹿なじゃねえんだよ。言っただろ、黄金聖闘士だってな」
背中合わせになっている。そこから左に顔を向けてリィナを見ている。表情には相変わらずの余裕があった。
「伯爵だか何だか知らねえけれどな。そんな前座みてえな技でこのデスマスクは倒せねえぞ」
「くっ、リィナ！」
「気をつけろ！」
サムソンとアトロムが同時にリィナに叫ぶ。
「来るぞ！」
「一撃が！」
「死にな」
振り向きざまに左手から横に手刀を放つ。しかしリィナは姿を消した。それでデスマスクの動きをかわしたのだった。
「くっ！」
「まあ今のはかわせて当たり前だな」
今の手刀をかわせても動じてはいなかった。
「仮にも狂闘士ならな」
「だが。何という速さと威力だ」
「やはり黄金聖闘士。尋常なものではない」
「これが黄金聖闘士」
リィナはデスマスクの正面に姿を現わした。ダメージこそ受けてはいないがその顔には冷や汗が流れている。
「私も。油断できません」
「油断？油断しても同じなんだよ」
首を鳴らすようにして動かしながらリィナに告げる。

「御前等程度じゃ幾らいても俺は倒せねえんだよ」
「おのれ、言わせておけば！」
「やはりここで我々が！」
「確かに。ここは」
ユニがここで言うのだった。
「ユニ様」
「それではここは」
「リィナ、私も参加しましょう」
「ユニ様、それは」
「私だけではありません」
ユニはさらにリィナに言う。
「サムソン、ロファール、アトロム」
「はっ」
「ではユニ様」
「そうです。やはりここは」
ユニは真剣だった。最早これしかない、追い詰められたものがその顔にあった。
「五人で。かからなければ」
「最初からそうしておけばいいんだよ」
今度は右手を動かして鳴らしている。
「じゃあさっさと来な。早くな」
「キャンサー、その実力はやはり見事です」
ユニは四人を後ろに従えながらデスマスクに言う。
「だからこそ。我等は」
「弱い奴は数なきゃ勝てないってな」
「何っ！？」
「言っておくぜ。御前等が何人いようが俺には勝てないんだよ」
傲然とした態度で言い切ってきた。
「黄金聖闘士と御前等じゃそこまで実力差があるということだよ。それわかってかかって来るんだろうな」

「貴様！」
「まだ言うか！」
またサムソンとアトロムが激昂する。しかしデスマスクはそれを見てもやはり態度を変えない。
「だから何度でも言ってやるって言ってるだろ。御前等馬鹿か？」
「くっ、最早容赦はならん」
「だったら来いよ。俺は手加減は一切しねえぜ」
不敵な笑みのその周りに。青い燐が起こっていく。それは粉のようだがそれでいて。何処か人の魂のようにくらいでもいた。
「御前等に対してはな。一撃で仕留めてやるぜ」
「ならば・・・・・見せてもらいましょう」
ユニが意を決した顔でデスマスクに応えてきた。
「貴方のその一撃を。今から」
「来な」
右手で手招きさえしてみせる。
「五人まとめて冥界に送り返してやるさ」
「ならば今こそここで」
ロファールが身構える。

第六話　恐怖軍団その四

「貴様こそその冥界に」
「じゃあ貴様を最初に送り返してやるか」
青い燐の数が増えていく。それが周囲を取り囲もうとしたその時に。デスマスクは突如としてまた何者かの強大な小宇宙を感じたのだった。
「!?この小宇宙は」
「まさか!?」
狂闘士達もまた同じものを感じていた。その強大な小宇宙の持ち主は。
「ほう、やっぱり出て来たか」
「カナン様!」
「どうしてこちらに」
「気になって来てみればやはりな」
カナンが戦場に姿を現わしていた。冷静な顔でデスマスクと狂闘士達を見ているのだった。
「キャンサー、やはり貴様か」
「へえ、蝿野郎のお出ましか」
デスマスクは彼の姿を見てもまだ余裕綽々の様子だった。
「で、この連中にかわって御前が相手をしてくれるのか?」
「残念だがそのつもりはない」
しかしカナンはそれを断るのだった。
「こちらの戦力がまだ揃っていないからだ」
「へっ、五人もいてしかもうじゃうじゃ雑兵もいたのにかよ」
「少なくとも今は攻める時ではない」
「だから帰るっていうのか?」
「その通りだ。明日また来る」
「へっ」

今のカナンの言葉にまた軽く笑ってみせた。
「まあ俺はどっちでもいいぜ。御前等が死ぬことは変わらないんだからな」
「その自信、覚えておこう」
こうデスマスクに告げて姿を消していく。五人もそれに続く。
「キャンサーよ、明日また会おう」
「今度会った時が御前の最後だ」
一瞬目を鋭くさせてから述べた。
「それはいいな」
「覚えておこう。貴様がそうなるとな」
デスマスクに言い返して戦場から消えた。ちょうど彼等が消えたその時にジャミアン達がやって来た。白銀二人、青銅四人のあのメンバーである。
「デスマスク様！」
「御無事でしたか！」
「馬鹿、遅いんだよ」
まずは彼等にこう告げる。顔を向けながら。
「今頃来てどうするんだよ」
「す、すいません」
「小宇宙を感じてすぐに来たのですが」
「まあいいさ。雑魚はかなりやったからな」
「あっ」
「確かに」
見れば下にインプ達がまだ大勢転がっている。皆ピクリともしない。
「随分倒されましたね」
「こんな連中は幾らいても相手にはならねえな」
余裕に満ちた表情で首をわざと揺らしながら答えてみせる。
「所詮な」
「やっぱりあれで倒されたんですか？」

「ああ、あれだ」
ディオに答えた。
「積巳気冥界波でな。一撃でまとめてやってやったぜ」
「やはり」
「流石はデスマスク様」
「といっても褒めても何も出ねえぜ」
笑って青銅達に応える。
「それはあらかじめ言っておくぜ」
「何かケチですね」
「そうですよ。仮にも黄金聖闘士なんですから」
「だから言ってるだろ、金はねえんだよ」
今度は言葉が少し怒っていた。だが本気ではないのがわかる。
「あったらしてるさ、立場上な」
「立場ですか」
「結構五月蝿いんだよ、そういうところがな」
何か聖域の内部事情めいてきた。
「黄金聖闘士ってやつはな、聖闘士の頂点だ」
「はい、ですから」
「どうか貧しい我々にも」
「御前等も充分給料貰ってるだろうが」
デスマスクはそれを突っ込む。
「人の財布あてにするんじゃねえよ」
「厳しいですね」
「ムウ様だったら穏やかに微笑んで、なのに」
「ムウと一緒にするな」
これは本音だった。

第六話　恐怖軍団その五

「あいつはまた優し過ぎるんだよ」
「確かに」
「アイオリア様もそうですけれど」
「アイオリアよりも優しいな」
デスマスクはそう見ていた。
「あれで聖闘士になれるのかね。まあそれでもな」
「それでも」
「俺達の中で教皇やれるとしたら・・・・・・まあいいさ」
最後は言わなかった。
「帰るぞ、いいな」
「あっ、はい」
「わかりました」
六人もそれに応える。
「明日だ、明日はガチでやり合うことになるからな」
「ええ、では今日は」
「これで」
聖闘士達も姿を消した。最後にデスマスクが姿を消す。しかしこの時彼はふと右肩越しに後ろを振り向いた。だがそれは一瞬のことですぐに首を元に戻し彼も消えたのだった。
「気付いているのかもな」
物陰に隠れている一人の男が呟いた。彼もまた戦場に到着していた。しかし今は動かない。デスマスク達の活躍を見守るだけだった。
デスマスクと狂闘士達の前哨戦はすぐにシオンの耳に入った。彼の前にはシュラとアフロディーテ、それにカミュが控えている。
「まずは上々といったところか」
「はい」
「デスマスクならば当然かと」

シュラとアフロディーテがシオンに対して答える。
「ですがそれでも」
「どうした、カミュ」
「デスマスクには悪い癖があります」
カミュはシオンに対して述べた。
「悪い癖か」
「確かに実力はかなりのものです」
仮にも黄金聖闘士だ。その実力は認める。しかしそれと共に危惧するものがある。カミュが言うのはそういうことだった。
「ですが。相手を侮りますので」
「それはよい」
「よいのですか」
「そうだ」
シオンははっきりと言い切った。
「デスマスクはあれで相手の実力を的確に見抜く」
「的確に、ですか」
「それは前世から同じだ。御前達もまた」
「前世!?」
「教皇、それは一体」
今のシオンの言葉にシュラもアフロディーテも顔をあげた。そのうえで彼に問う。
「いや、これは何でもない」
だがシオンはそれは彼等には答えようとはしない。言葉を打ち消してきた。
「御前達には関係のないこと。忘れよ」
「左様ですか」
「それでは」
「そしてだ」
シオンはさらに三人に言ってきた。
「いずれ御前達にも出陣してもらう」

「はっ」
「わかりました」
三人は彼の今の言葉に頷いた。
「ではその時は」
「狂闘士達を一人残らず」
「倒して御覧にいれましょう」
「頼むぞ。彼等は手強い」
これは忠告だった。
「用心してかかるようにな」
「はっ、確かに」
「それはもう」
「そしてだ」
「そして？」
シュラとアフロディーテが応えたところシオンはまた告げてきた。
「シャカ」
「はい」
「何っ！？」
「何時の間にそこに」
見れば三人の後ろにシャカが立っていた。相変わらず目を閉じている。それはまるで彼が盲目のようにも見える。しかしそれは違うのは誰もが知っていた。
「先程からいましたが」
「嘘だ。気配は感じなかったぞ」
カミュがその彼に言う。
「それで何時の間にそこにいたと言えるのだ」
「いや、これはまさか」
「そうです。まさか彼は」
だがシュラとアフロディーテはここであることに気付いたのだった。それは。
「その小宇宙は私達のものよりもまだ」

「そうか。伊達に神に最も近い男と言われている訳ではないな」
カミュも二人の言葉を聞いてそれを認めるのだった。
「このカミュにすら気付かせなかったか。見事という他ない」
「シャカ、御前にはこの聖域の守りに専念してもらいたい」
「はい」
シャカはあらためてシオンのその言葉に頷く。

第六話　恐怖軍団その六

「承知しています」
「シャカを守りにですか」
「では我等は」
「何が任務なのでしょうか」
「御前達も普段は聖域に留まっていてもらいたい」
シオンは三人の問いに対して答えた。
「この聖域にですね」
「そうだ」
またカミュの問いに答える。
「頼むぞ。狂闘士だけではないだろう」
「エリスもまた来るのでしょうか」
「それはだな」
「教皇」
だがここでシャカが出て来た。
「少なくともそれに関しては黄金聖闘士が全て集まっている中でお話すべきかと」
「そうだな、確かにな」
「そういうことで。デスマスクが戻りましたなら」
「デスマスクが戻ってからか」
「では暫く先ですね」
シュラとアフロディーテが述べた。
「それまで我々は」
「聖域の守りというわけですね」
あらためてそのことに頷くのだった。カミュもまた。
「さて、そのデスマスクだが」
カミュは言う。
「相手は確かベルゼブブのカナンだったな」

「そうです」
シャカがカミュの言葉に答える。
「魔神の中では地獄の主とされ蝿の王であるとされています」
「蝿か」
それを聞いたシオンがピクリと動いた。
「そうだったな。ベルゼブブといえばそうだ」
「はい、そうです」
シャカはシオンの言葉にも答えた。
「その蝿で恐ろしい攻撃を仕掛けて来るかと」
「だが。デスマスクにとっては楽な相手の筈だ」
「楽な！？」
「まさか教皇」
「仮にも相手は八大公」
カミュ達は口々にそれには疑問の声をあげた。
「如何にデスマスクといえどやはり」
「苦戦は免れません」
「ましてや彼の配下の狂闘士達も何人も来ておりますが」
「それでもだ。少なくともデスマスクに蝿は通用しない」
それでもシオンは言うのだった。
「あの男にはな。完全にだ」
「そうなのですか」
「そうだ。必ずやってくれる」
デスマスクを完全に信頼している言葉だった。
「前世から。そういう男だった」
また前世という言葉を出してみせる。
「だからこそ。必ず」
「では我々はここで」
「デスマスクの戦いを見ていればいいのですね」
「そういうことだ。ではこれで話を終わる」
「はっ」

「それでは」
三人はその言葉を受け最後に頭を垂れる。シオンはそれを見届けてから席を立つ。そのうえで四人に対して告げるのだった。
「下がれ。そしてそれぞれの宮殿に戻れ」
「わかりました」
こうしてこの話は終わった。四人は去りシオンもまたその場から姿を消した。しかし彼は宮殿の奥の鏡の間に入るとその鏡の中の一つに顔を向けた。そのうえで鏡に対して問うたのだ。
「いるか」
「うむ」
声が返って来た。出て来たのは小さな、顔中髭だらけの老人だった。服は中国のもので木の傘を被っている。
「久しいの。最近ここに来ることはなかったのう」
「一つ聞きたいことがあって来た」
シオンはその老人に対して言う。
「聞きたいことか」
「そうだ。デスマスクを向かわせた」
「ふむ。デスマスクをか」
「どう思うか」
「よいのではないか。あの男はあ奴の生まれ変わり」
老人は言う。
「その強さは間違いない」
「だが。心がな」
シオンが気にしているのはそれだった。
「力を絶対視している。それはどうかと思うのだが」
「確かにそれはある」
老人もそれは認める。
「力こそ正義だとな」
「それは聖闘士としてどうなのか」
シオンはまた言う。

「ましてや黄金聖闘士となると余計にだ。あの男はあ奴の生まれ変わりだがあまりにも」
「だが。あの男もまた正義の根は同じぞ」
「同じ！？」
「そうだ」
老人はこうシオンに告げた。

第六話　恐怖軍団その七

「デスマスクもまた人の正義じゃ」
「人の正義か」
「左様。シュラもアフロディーテもな」
「あの二人もまた」
シオンはその二人の名を聞いてある名を口にした。
「エルシド、そしてアルバフィカの魂が今に蘇ったもの」
「そうだな、それは」
シオンもわかっていた。
「ならば同じか」
「そういうことじゃ。あの者達は最後には」
「最後には」
「一つになる運命じゃ」
老人は言った。
「わしもまたな」
「御前もか」
「左様、わしもまた同じなのだからな」
「そうか、そうだったな」
シオンは彼の言葉に納得する。納得して頷くものがあった。
「御前もまた。そうだったな」
「その時に御前がどうなっているかはわからんが」
「いや、私にはもうわかっている」
「むっ！？」
老人は今のシオンの言葉に目を動かした。その大きな目が光った。
「星を見たのか」
「そうだ。この戦いの直後に私は死ぬ」
シオンは己の運命を知っていたのだ。だがだからといって取り乱した様子もない。至極平静にそれを受け止めていたのだった。

「殺されてな」
「教皇である御前を殺すというのか」
「それが誰かはわからない」
シオンもまだそこまではわかっていなかった。教皇といえど知ることができることには限界があるのだった。神ならぬ人であるからだろうか。
「しかし。そう出ている」
「ふむ。それが運命か」
「そうだ。そして御前とあの者達の運命は」
「次の聖戦の時だ」
今のアーレスとの戦いとはまた違う戦いがあると、はっきりと言っていた。
「おそらくその時こそ」
「ハーデスか」
「左様、これまでになく激しい戦いになる」
老人は強い言葉で断言した。
「その時に我等は一丸となって嘆きの壁に当たり姿を消すことになる」
「嘆きの壁。それでは」
「そうだ、エリシオンだ」
この世ではない世界のことだった。
「そこに攻め入る若者達の為にな。消えることになる」
「そうか。その時にか」
「うむ。それはもうわかっていることだ」
老人もまたそれを受け入れていた。それは達観だった。
「ハーデスとの最後の聖戦になる。おそらくな」
「ハーデスとのか」
「思えば不思議なことだ」
老人の言葉に感慨が加わった。
「あの戦いで命を落とした者達がまた聖域に集っている」

「うむ」
「二人しか生き残らなかったあの戦いからな」
「誰もが壮絶に戦い、壮絶に散った」
シオンにも老人にもその時の記憶が蘇る。ハーデスと彼の配下の冥闘士達との激しい戦闘により聖域は荒れ果て聖闘士達の殆ど全てが倒れた。黄金聖闘士達も一人また一人と倒れていき残ったのは二人だけだったのだ。白銀聖闘士も青銅聖闘士も全滅してしまった。殆ど誰も残らなかったのだ。

第六話　恐怖軍団その八

「しかし今」
「その通りじゃ。これもまた運命」
老人がまた告げた。
「あの者達がまた集うのもな」
「アーレスとの戦い、激しいものとなるだろうな」
「だが。まだ二つの戦いを経なければならぬぞ」
「二つか」
「そう、二つだ」
二人の会話は次第に深いものとなっていく。その深ささえも二人にしかわからない。運命を知る者達でなければわからない話だった。
「まずはアーレス。そして」
「あの古の神々か」
シオンはここで気付いた。
「ティターンだな」
「その時に御前はいないのか」
「しかし。あの者達がいるのだな」
「そうだったな」
「ならいい。安心して死ぬことができる」
シオンは己の死を完全に受け入れていた。そうして動じるところがなかった。
「デスマスクにしろな」
「あの者とシュラ、それにアフロディーテは確かに危ういところがある。しかし」
「しかし」
「前世の魂がある。安心してよい」
「そうだな。ならば」
「マニゴルドもエルシドもアルバフィカもその命を正義に捧げた」

かつてのハーデスとの聖戦の時のことだった。彼等は果敢に戦いそして散っていった。その魂が三人にも受け継がれているというのだ。

「安心せよ」

「そして今度は嘆きの壁でか」

「そうだ。ペガサスの為にな」

「ペガサスか」

ペガサスの聖衣のことだ。その聖衣のことはシオンにとっても老人にとっても特別な意味を持っているものだった。

「また。あの聖衣が世に出るのだな」

「今あれが何処にあるか」

「聖域にある」

シオンは老人のその問いにも答えた。

「聖域にか」

「魔鈴に渡してある」

シオンはこうも言う。

「わし座の聖闘士のな」

「そうか。ならばよい」

「いいのか」

「おそらく今度のハーデスとの聖戦の時にそれが世に出る」

「そうだな」

老人とシオンはそれぞれ言葉を交えさせる。

「あのテンマがな」

「さて、今度はどういった姿になるかだが」

「楽しみか？それは」

「楽しみといえば楽しみだ」

老人もそれは認める。

「聖戦とは別にな。テンマはわしに多くのものを見せてくれた」

「私にもな」

これについてはシオンも同じだった。それを言うのだ。

「見せてもらったものだ」
「そうだな。それでだ」
「うむ」
「トラキアから感じるか」
「次第に強くなってきている」
シオンだけではなかった。老人もまたそれを感じていたのだ。
「そこからも感じるか」
「これ程まで巨大な小宇宙、感じぬ筈がなかろう」
見れば老人の顔は先程までとは違っていた。強張りがあった。
「禍々しい、まさに血に餓えた小宇宙だ」
「かつてのタナトスやヒュプノスのそれとはまた違う」
「左様」
ハーデスの側近であった二柱の神々だ。彼等により先の聖戦でもその前の聖戦でも聖域は大きな損害を受けている。彼等にとっては忌まわしい記憶だ。

第六話　恐怖軍団その九

「それが四つだ」
「あの者達だな」
それが誰であるのか、老人にもわかるようだった。シオンの言葉に頷くのがその証拠だった。
「必ず出て来るだろうな」
「敵は狂闘士だけではない」
シオンの言葉に憂いがそのまま篭る。
「だからこそ。我々は」
「あの者達を信じるのだ」
だが老人は憂いを含ませたシオンに対して言ってきた。
「信じるのか」
「そうだ。信じきれるな」
「無論だ」
今度のシオンの言葉には憂いがなかった。曇りもまた。
「あの者達を信じずして誰を信じるというのだ」
「答えはそこだ」
老人はシオンの今の言葉を指摘した。
「かつて共に戦ってきた彼等だからこそな」
「それを知っているのは我等だけか」
「いや、シャカもひょっとしたら」
「シャカもか」
「あの男には特別な任務を与えているようだな」
老人は今度はシャカについて尋ねてきた。
「どうなのだ、それは」
「シャカでなければできぬことがある」
シオンもまたそれを認める。
「神に最も近い男でなければな」

「やはりそれがあるか」
「ある。あの男にはこの聖域の護りを任せる」
「シャカに」
「あの男ならば問題はない」
彼のシャカに対する信頼は絶大なものがあった。それは老人をしても目を見張らせるものがあった。
「かつて。冥闘士達の魂を封じ込める数珠を作った程の男だからな」
「己の命を引き換えにな」
「あの時彼等はそれぞれ己の全てをかけて戦った」
「そして散った」
話は再びそこに至る。
「彼等ならばか。やはりな」
「そうだ、そういうことだ」
「わかった。ではデスマスクと」
「サガか」
「二人に全て任せる」
彼はここに至り遂に全てを決断した。
「今後もだ。彼等に任せる」
「その魂を見てだな」
「そうだ。信じられる」
言葉が断言になっていた。
「あの時から。彼等は彼等なのだからな」
「失いたくはないな」
「今度は失わせぬ」
シオンの言葉が強いものになった。
「何があろうとも」
「最後は太陽になろうとも今はか」
「それが運命ならば致し方ない。しかし今は」
「だからこそ信じるのだな」
「その通りだ」

二人は鏡の間で言葉を交わせていた。デスマスクのライプチヒでの戦いはまずは最初の前哨戦が終わったところだった。しかしカナンが姿を現わした今それが決戦になるのは明らかだった。その決戦の時が迫ろうとしていたのだった。

第六話　　完

２００８・５・８

第七話　恐怖の集結その一

恐怖の集結

前哨戦を終えたデスマスクは指揮下にある聖闘士達を集めてまずはライプチヒの市街に戻っていた。そこで彼等と街の食堂で食事を摂っていた。食べているのはドイツ料理だ。

「しかしドイツ人っていうのはな」

「どうしました、デスマスク様」

「あれだな」

こうディオに答える。樫の木で作られた椅子とテーブルに座ってソーセージやアイスバインやギドニーパイを食べている。それとやはりジャガイモも。

「痛風になりそうな食い物だな」

「ビールですか？」

「ソーセージにしろそうだろ」

それも指摘する。

「あとアイスバインにこのジャガイモだってな」

「ジャガイモもですか」

レッシュに対して答える。見れば今あるのはマッシュポテトとジャガイモのパンケーキである。ドイツ料理としては実にオーソドックスな組み合わせだ。他にはザワークラフトもある。

「バターつけて食うだろ」

「はい」

「それもたっぷりとな。だから危ないんだよ」

デスマスクはそれも危ないと言うのだった。

「ビールに豚肉、それにバター。これぱっかりだと確実に痛風になるぞ」

「確かに」

「そういえば」

ジャミアンとゾルダがそれに答えた。
「そういう組み合わせですね」
「じゃあ食べ過ぎたら」
「実際痛風多いだろ」
デスマスクはそれも知っていた。話しながら黒ビールを口に含む。普通のビールよりも濃厚な味が口の中を支配する。それを味わいながらの言葉だった。
「ドイツってよ」
「そうらしいですね」
今度答えたのはアンタスだった。
「やっぱり。デスマスク様の仰る通り」
「ならない方がおかしいんだよ」
デスマスクはこうも言う。
「ビールばっかりだとな。余計にな」
「じゃあワインは」
「ワインの方がいいんだ」
だが今飲んでいるのはビールだった。矛盾してはいる。
「健康にはな」
「そうですか、やっぱり」
「ドイツも結構ワイン飲んでるけれどな」
「ええ、確かに」
「それは」
これについては他の面々も知っていた。モーゼルワインはあまりにも有名だ。彼等が今いるギリシアではそもそも昔からワインが好まれている。神話の時代から。
「それでもビールが一番多いな」
「やっぱりそれですか」
「ああ」
ここでデスマスクはその黒ビールをまた一杯やるのだった。結構なハイペースだ。

「ビールだな、とにもかくにも」
「ビールですか」
「昔はこれをパン代わりにしたらしいしな」
「ああ、それは知ってます」
アンタスが答えてきた。
「知ってたか」
「麦ですからね、やっぱり」
「そういうことだ」
デスマスクも答える。飲むパンと呼ばれる時もあるのは今も同じである。これは有名だ。
「だから朝とかにな。卵を入れてグイッとな」
「卵をですか」
「これはこれでコレステロールが溜まるよな」
そのうえでまたコレステロールの話をする。
「だからドイツ人っていうのはな。痛風が多いわけだ」
「ビールって危ない飲み物なんですね」
「酒は全体的にそうだって言われているけれど」
「何事も程々なんだよ」
そうは言いながら当人はとことんまでそのビールを飲んでいるデスマスクだった。言動と行動が見事なまでに一致していない。

第七話　恐怖の集結その二

「ビールにしろな」
「そうですか」
「ルターっていただろ」
「ああ、あの」
ジャミアンがその名前に応える。
「プロテスタントでしたっけ」
「あいつも痛風だったんだよ」
「というとやっぱりビールで」
「ビールの害毒を何時間も講義してその後に美味そうに何杯もな」
「そりゃ駄目ですね」
それを聞いたゾルダが言う。
「やっぱりそうですか」
「まあ無理もないけれどな」
しかしデスマスクはここでそれを肯定してみせた。
「それもな」
「仕方ないですか」
「実際美味いだろ」
デスマスクは言う。
「特にこのソーセージとの組み合わせはな」
「確かに」
「何かこの二つがあればかなり」
「それだよ。実は俺もな」
「好きなんですね」
「元々ドイツは好きなんだよ」
意外な好みだった。生粋のイタリア人であるデスマスクだがドイツが好きらしい。皆それを聞いて意外といった顔でデスマスクを見るのだった。そのうえでディオが彼に言ってきた。

「ドイツがお好きとは思いませんでした」
「何だかんだでドイツ人が来るんだよ」
デスマスクはこう言ってきた。
「イタリアにな」
「ああ、そうですね」
それにアンタスが応える。
「イタリアに観光旅行で随分来るんですね」
「凄いぞ。毎年毎年わんさと来る」
「どれだけですか？」
「一千万は来るな」
「一千万・・・・・・」
レッシュはそれを聞いて呆然となる。
「それはまた随分」
「やたらとでかいからすぐにわかるんだよ」
イタリア人に比べるとドイツ人はかなり大柄である。例えば小柄だと言われていたヒトラーがムッソリーニと並ぶとヒトラーの方が大きかった。ただしヒトラーが小柄だというのは多分に伝説であり実際は一七〇を超えていた。均整の取れた体格であったのだ。
「服装もな。違うからな」
「そうですか」
「そうなんだよ、あちこちにいつもいるぜ」
「それはまた随分」
「だからもう知ってるんだよ」
こう六人に語る。
「ドイツ人はな」
「ドイツ料理もですか」
「そういうことさ。もっとも一番好きなのはやっぱりな」
「イタリアですか」
やはりこれが出るのだった。
「そういえばデスマスク様は」

「ああ、パスタにピッツァも作れるぜ」
六人に対して誇らしげに笑って答える。
「それこそ何でもな」
「意外とお器用なんですね」
「美味いものを食おうって思ったら自分で作るのが一番だからな」
一理ある。それを考えると彼はかなり味に五月蝿いようである。
「だからだよ」
「そうですか」
「それで」
「黄金の奴等は料理美味い奴多いがな」
また言う。
「アルデバランにしろな」
「あの方は確かに美味いですね」
「肉料理が」
ジャミアンとディオが言う。
「それもかなり」
「ワイルドの中に繊細さがあって」
「牛が牛を食うんだよ」
デスマスクは笑ってこう表現してみせた。
「俺も蟹は好きだがな」
「ではシュラ様やアフロディーテ様はやはり」
「山羊やお魚を」
「そうだぜ。あいつ等もあれで味には五月蝿いからな」
中々料理に造詣の深い人間が集まっているのが今の黄金聖闘士らしい。何かにつけ仰ぎ見られることの多い彼等だがやはり人間なのだ。

第七話　恐怖の集結その三

「ああ、ただしだ」
「ただし？」
「ミロはどうかな」
ミロの話も出た。
「蠍はまず食わないからな」
「確かに」
「そういえばミロ様のお話はあまり聞きませんね」
「俺もあいつとはあまり話したことがねえ」
意外な真実だった。
「シュラやアフロディーテとかとはよく話すがな」
「左様ですか」
「あとカミュとな」
黄金聖闘士達の間でもそれなりにグループや交流があるらしい。
普通は滅多に顔を合わせることがないとされている彼等ではあるが。
「シャカについては全く知らねえな」
「シャカ様といえば」
「そういえば」
「そういえば。何だ？」
ゾルダとレッシュに対して問うた。
「いえ、教皇様から特命を帯びておられるらしく」
「特命か」
「はい、今回の戦いでは聖域の防衛に専念されるそうです」
「それで出撃されることは」
「そうか、教皇直々にか」
デスマスクは彼等からその話を聞いて考える顔になった。その間もソーセージにビールを楽しんでいるのは流石であるが。
「あいつの小宇宙は桁違いだしな」

「黄金聖闘士の中でも差があるのですか？」
「確か黄金聖闘士同士は」
「そうさ、絶対に私闘は避けられてる」
デスマスクは今度は真顔になっていた。
「闘えばお互いとんでもねえことになるからな」
「千日戦争ですか」
「それだけ実力が」
「それでもやっぱり差があるんだよ。サガやアイオロスは俺達より遥かに上だぜ」
傲岸不遜な彼ですら二人の強さは素直に認めていた。やはり別格だった。
「あと老師もな。洒落にならないものがあるな」
「そうですか。やはり」
「あの方々は」
「それでシャカだが」
話はシャカに戻った。
「それこそあいつ一人いたら聖域は安心だな」
「御一人で、ですか」
「だからこうして俺が出撃できるんだよ」
守りがしっかりしているからだった。そういう戦略的な事情もあるのだった。
「そういうことなんだよ」
「そうだったんですか」
「ああ、そうだ」
またジャミアンに対して答えた。
「俺だけじゃない。他の黄金の面子もだ」
「じゃあまた誰か出られますか」
「今後次第だろうな」
あえて深くは話すことはなかった。ここでは。
「それはな」

「そうですか」
「それでだ」
「はい」
そのうえでここで話を変えてきた。
「デザートどうするんだ？」
「デザートですか」
「ああ、飯を食った後はデザートだ」
デスマスクはそれを言う。
「違うか？俺としてはジェラートがいいがな」
「ドイツでジェラート」
「何かそれは」
「おかしいか？」
あらためて六人に対して問うてきた。
「ドイツでジェラートっていうのは」
「やっぱりイタリアのものじゃないんですか」
「そうですよ、やっぱり」
レッシュとゾルダがこうデスマスクに述べる。
「ですからやっぱりここは」
「ビールとソーセージですし」
「じゃああれか」
デスマスクはそれを聞いてわかった。
「ケーキだな」
「何かビールと合いませんね」
「ビールは元々菓子には合わないんだろうな」
それでも頼むのがデスマスクであるが。
「だがそれでもだ。俺は頼むぞ」
「そうですか」
「それで何を」
「そうだな。ケーキにしておくか」
少し考えた顔になってから六人に述べてきた。

「ここはな」
「わかりました。じゃあケーキですね」
「ああ」
ディオの問いに頷く。

第七話　恐怖の集結その四

「それにしておくぜ」
「それでどのケーキにします？」
「ええとだ」
メニューを手に取って中身を見る。するとすぐにあるケーキが目についた。それは。
「ああ、これがいいな」
「どれですか？」
「これだよ、このケーキ」
そう言って指差しているのは赤いケーキだった。
「人参のケーキ、これだな」
「人参ですか」
「いいだろ、これ」
楽しげに笑って六人に問う。
「このケーキ。どうだ？」
「確かに」
「これはかなり」
「よし、じゃあ決まりだな」
六人の反応も見て全てを決めたのだった。
「デザートはこれにするぞ」
「ええ」
「それでは」
「それで食後の一杯はだ」
そちらにも話をやる。
「俺はコーヒーだ」
「やはり」
「おっ、わかってたか」
「イタリア出身ですから」

わかるというのだった。イタリアといえばコーヒーである。ドイツもそうだが。

「やっぱりそれかな、と思ったのですが」

「そうですか、やはり」

「それで御前は紅茶だろ」

デスマスクはジャミアンに顔を向けたうえで話を振ってきた。

「やっぱり。違うか？」

「いえ、その通りです」

そして本人もそれを認める。少し照れ臭そうに笑ったうえで。

「やっぱり俺は。紅茶で」

「そうか。それか」

「ええ」

あらためてデスマスクの言葉に頷いてみせる。

「それがいいです」

「他の奴等はコーヒーか」

「はい、それで」

「御願いします」

これはデスマスクの予想通りだった。皆頷くのだった。デスマスクはそれを見てあることを思い出した。それが何かというと。

「そういえば黄金の奴等も」

「どうされました？」

「あれだ。コーヒー党が多いんだよな」

「そうなんですか」

「お茶の奴はムウとシャカだけだ」

またシャカの名前が出る。

「特にシャカはな。絶対にお茶だ」

「やはり」

「インド出身だけあって」

「あいつには。これからも助けられるだろうな」

そのうえでポツリと言ってきた。

「ムウもそうだがな」
「ムウ様もですか」
「あいつは聖衣を修復できる」
そのことも言った。
「それもあるな」
「じゃあ俺達も何かあった時には」
「ムウ様に」
「あいつもいる。聖域は今かなり充実しているな」
デスマスクは空になったジョッキを片手に真剣な顔で呟いた。
「後は。俺達次第か」
「じゃあ頼みますよ」
「人参のケーキとコーヒー」
「俺は紅茶だぞ」
「ああ、頼む」
こう六人に答える。
「それ食ったら一旦帰るぞ」
「わかりました」
「それで一休みした後で」
「作戦会議だ」
今度の話はそれであった。
「わかったな」
「はい」
「それじゃあ」
とりあえず食事が終わるとホテルに戻り作戦会議となった。その頃ライプチヒ郊外のある荒地にてカナンがユニ達を前に話をしていた。五人はカナンの前に控えていた。皆戦衣をその身に纏ったままだ。
「ユニ」
「はっ」
まずはユニに声をかけ彼女もそれに応える。

第七話　恐怖の集結その五

「まずはここまで来てもらい御苦労だった」
「有り難き御言葉」
「だが。あそこでキャンサーと闘おうとしたのは頂けぬな」
「申し訳ありません」
「他の聖闘士ならばともかくあの男は別だ」
「別ですか」
「そうだ」
ユニだけではなく他の四人に対しても厳しい声で述べる。
「あの者と互角に闘うにはまだ戦力が不充分だ」
「といいますと」
「あと四人」
カナンは言った。
「彼等が来るまで待たなければならない」
「同志達の到着をですか」
「そうだ」
カナンの言葉は続く。冷徹な響きだがはっきりとしたものだった。
「あと四人。そしてそれは」
「それは」
「間も無くだ」
五人を前にして言い切ってみせてきた。
「そしてインプ達も来る」
「インプ達も」
「まさか。あれだけの数のインプ達が瞬く間に倒されるとは」
アトロムが忌々しげに呻いて述べてきた。
「思いも寄りませんでした」
「思わなかったというのか」
「はい」

その忌々しげな呻きはさらに続く。
「あれだけいればライプチヒなぞものの数ではありません。それが」
「聖闘士を侮るなということだ」
カナンのアトロムに対する言葉はこうであった。
「侮るな、ですか」
「これは私にも言えることだ」
カナンはあえて自分自身に対してもだと述べた。
「私もまたインプはあれだけでいいと思っていた」
「左様ですか」
「キャンサー。やはり尋常ではない」
「そういえばデスマスク様」
今度はリィナがカナンに問うてきた。
「どうした」
「キャンサーといえば気になることがあります」
「気になることだと」
「はい、あの男が身の回りに漂わせていたあの青い炎」
「うむ」
リィナが言うのはそれだった。
「あれは一体」
「それは私にもわからない」
カナンもそれについては答えられなかった。
「しかし」
「しかし？」
「あの男の不敵な笑み。何かあるのは間違いないだろう」
「そうですか。やはり」
「まだ攻撃には出ない」
カナンはあらためて言う。
「聖闘士の要である黄金聖闘士」
「はい」
ここではデスマスクのことであるのは言うまでもない。やはり彼

だった。
「あの男を倒せる確かな戦力が揃うまではな。動かぬ」
「ではカナン様」
今度言ってきたのはサムソンだった。
「同志達が来たその時こそ」
「我々が動く時だ」
「わかりました。それでは」
「ではカナン様」
ロファールも言う。
「私がこれより」
「同志達を呼びに行くというのか」
「はい、それで如何でしょうか」
「待て」
だがここでカナンはロファールのその言葉を制止した。
「何か」
「御前一人で行くつもりだな」
「はい、その通りです」
ロファールは何でもないといった様子でカナンに答えた。
「それが何か」
「一つ考えがある」
ここでカナンの目が光った。鋭く、かつ剣呑な光だった。
「考えですか」
「そうだ。まず御前はそのまま行くのだ」
あらためてロファールに言う。
「私はそのままですか」
「呼びに行きそのまま同志達と合流する」
「そして」
「問題はその後だ」
話の重点はそこにあった。カナンの言葉がここでさらに強いものとなる。

「我々は身を隠し御前の後を追う」
「カナン様達も」
「御前が動けば聖闘士達もおそらく気付く」
「確かに」
その言葉に最初に気付き頷いたのはリィナだった。
「彼等も愚かではありません。それならば」
「必ず御前に気付き動いてくる」
「追撃を仕掛けて来ると」
「そして御前が同志達と合流したその時に彼等は出て来るだろう。そこを」
「攻めると」
「そうだ」
また彼等に対して答える。

第七話　恐怖の集結その六

「挟み撃ちとなる。どうだ」
「成程、それは」
「確かに宜しいかと」
ユニとリィナが話を聞いたうえで述べる。
「ではカナン様、それで」
「作戦を行われるのですね」
「ロファール、わかったな」
「はい」
ロファールは毅然とした声でカナンの言葉に応えそのうえで頷くのだった。
「喜んで受けさせて頂きます」
「頼むぞ。御前に全てがかかっている」
「わかりました」
「他の者達は私と共に動く。いいか」
カナンはまた五人に告げる。
「見つかればそれで作戦は失敗だ」
「失敗、ですか」
「その場合は同志達と本当に合流したうえで戦う」
その場合の作戦も考えておいている。非常に慎重かつ理知的であると言えた。
「その場合は、だが」
「わかりました。それでは」
「その二段構えで行くぞ」
「はっ」
五人はそれに頷く。これで話は終わりとなった。まずはカナンが告げた。
「それでだ」

「まずは私が出て」
「我々は姿を隠しつつ」
「くれぐれも慎重にだ」
話をあえて繰り返して彼等の心に刻み込むのだった。
「わかったな」
「はい」
彼等の作戦は決まった。それに基き作戦が進められる。しかし聖闘士達はまだそのことを何一つとして知らない。だがロファールの動きは伝わったのだった。
「ほう、あの小僧が動いたか」
「小僧ですか」
「所詮狂闘士の中で最下級の公子だろうが」
デスマスクはそうブラウに答えていた。彼等はホテルの一室で待機していたのだ。それなり以上に立派だ。広いだけでなく絨毯もソファーも見事なものでありどう見てもロイヤルスイートだ。部屋を見る限りこれはデスマスクの為に用意された部屋であるらしい。やはり黄金ともなればその待遇はかなりのものになっている。
「そんなのを小僧って言わないで何て言うんだ?」
「それは」
「ああ、答えなくてもいいぜ」
別にそれは求めてもいないのだった。あえて止めさせる。
「別にな」
「はあ」
「問題はだ」
そのうえで話の本題に入るのだった。デスマスクは言う。
「あいつが何を考えて動いているから」
「何かですか」
「まず。奴等のボスは既にここにいる」
これが前提としてあった。デスマスクはあえてそれを大前提としてきた。今いる他の聖闘士達の頭の中にそのことを刻み込むかのよ

うであった。
「ベルゼブブのカナンが」
「そうだ。そいつはいるな」
「はい、そうです」
「それは」
彼らもその言葉に対して頷く。確かにその通りだ。
「ただし。全員はいない」
「全員？」
「奴等は六人だけじゃないな」
「そうですか」
「ああ。それでおそらくその新手の奴等と合流する筈だ」
その鋭い目をさらに細くさせている。明らかに考え、読んでいる目であった。
「他の狂闘士達とですか」
「そうだ。そいつが動いているのはそれだな」
「ではデスマスク様」
すぐにゾルダが言ってきた。
「すぐに彼等を追いましょう」
「ゾルダの言う通りです」
ゾルダの言葉にレンタスも同意して頷く。そのうえでの言葉だった。
「奴を追い新手と合流したその時に」
「まず奴等を倒しそのうえで」
「今いる奴等を倒すってことだな」
「はい、その通りです」
「それです」
ゾルダとレンタスはそれぞれそれを述べるのだった。
「それで如何でしょうか」
「そして返す刀で残った奴等を」
「そう簡単に行くか？」

しかしそれに異議を呈する者がいた。彼等の同僚のアッシュとブラウだった。
「罠じゃないのか」
「そうだな」
二人はその可能性を疑っていた。この場合この読みは当たっていた。
「我々をおびき出しそのうえで」
「挟み撃ちにして倒す。よくある戦術だ」
「罠か」
「その可能性は否定できないぞ」
「その場合どうするのだ？」
二人はこう彼等に問う。ジャミアンとディオも二人の話を聞いているうちにそれぞれ分かれていた。ジャミアンはゾルダとレンタスの慎重案に、ディオはブラウとレッシュの積極案に乗っていたのだった。そのうえで二人も議論をはじめていた。

第七話　恐怖の集結その七

「やっぱりここは動くべきじゃないだろ」
「いや、動くべきだ」
向かい合って言い合っている。
「動かないとこの場合何にもならないぞ」
「下手に動いてどうするんだ」
聖闘士達は完全に二つに分かれた。だが肝心のデスマスクはそれを周りに置いても平然としていた。暫く何も言わずただ話を聞いているだけだった。しかしやがて耳穴を小指でほじりながらゆっくりと口を開いたのだった。
「まあ動くのがいいな」
「それではデスマスク様、すぐに」
「いえ、それは」
ディオとジャミアンがそれぞれデスマスクに対して言った。
「行きましょう」
「ここは様子見を」
「罠でも何でもな。安心しろ」
小指についていた耳垢を息を吹いて吹き飛ばす。そうしながらの言葉だった。
「大丈夫だからよ」
「ですがこちらより数が多ければ」
「ましてや敵にはおそらく無数の雑兵が」
「ああ、関係ねえ」
ゾルダとレンタスに対して答えた。
「雑魚は幾らいても雑魚なんだよ」
「雑兵は、ですか」
「安心しろ、あいつ等なら御前等でも平気で潰せる」
「御前等でもって」

「ちょっとデスマスク様」
流石に今の言葉にはクレームをつけるのだった。デスマスクも笑ってそれに返す。
「何だ？けれどそうだろ」
「いや、俺達でもですね」
「やっぱり聖闘士ですから」
「まあ御前等の出番は多分そいつ等の相手だけだ」
しかしデスマスクは彼等にこう告げてそれで終わらせようとしてきた。
「狂闘士のうち何人かは俺が相手する」
「じゃあ残りは」
「最低六人位は」
「ああ、残らねえだろうな」
実にあっけらかんとした返答だった。
「間違いなくな」
「えっ、けれど何人かなら」
「やっぱり残る筈じゃ」
「御前等には残らないんだよ」
「残らないって何故？」
「その時になったらわかるさ」
やはりそれ以上は言おうとしないデスマスクだった。
「その時にな」
「そうですか」
「まあとにかくだ。行くぞ」
ここまで話して立ち上がってきた。
「もう居場所はわかってるんだよな」
「あっ、はい」
ブラウがデスマスクのその言葉に答える。
「それはもう」
「じゃあそこに案内しろ。こっちは派手に動くぞ」

「派手にですか！？」
「追跡なのに」
「馬鹿、もうこっちのことは読まれてるんだよ」
デスマスクは怪訝な顔になった六人に告げた。
「俺達が追うってことはな」
「それ込みで、ですか」
「そういうことだよ。これでわかったな」
「まあそういうことなら」
「そうなりますね」
彼等もデスマスクの話に納得した。言われてみればその通りである。デスマスクの読みがここでは最大の武器となっていた。
「わかったらすぐに全員で出るぜ」
「ええ」
「七人で、ですね」
「ここでの戦いはこれで決めるからな」
こうも六人に対して告げた。
「そのつもりで行くぞ。いいな」
「了解」
「それじゃあすぐに」
こうしてデスマスク達はロファールの追撃にかかった。彼等はわかってのことである。またカナン達も彼等の動きを正確に把握したうえで動いていた。
「来たな」
「はい」
「今確かに」
ユニとリィナがカナンに対して述べる。彼等はライプチヒ郊外の森に待機している。そこにはサムソンとアトロムもいる。やはり戦衣で既に武装している。
「出たのは七人」
「ここに来ている聖闘士全員です」

「そうか、全員か」
カナンは二人の話を聞いてまずは左手の指を口に当てた。その姿で思索に入った。
「一人は予備で残すと思ったのだがな」
「キャンサーも来ております」
「あの男もか」
リィナの言葉を聞いてまた考える顔になる。
「はい、彼等の先頭にいます」
「そのうえでロファール追撃の指揮を執っています」
「ふむ」
ここでカナンは右手を掲げた。するとそこに水晶を思わせる球体の透明の画面が現われた。見ればそこにデスマスク達が映っている。彼等も森の中を進んでいた。針葉樹林から成るドイツの森の木々の間を縫いながら先を行くロファールの追撃を仕掛けていた。

第七話　恐怖の集結その八

カナンだけでなく他の狂闘士達もそれを見ている。アトロムがそれを見て言った。
「本当に全員で来ていますね」
「まさかとは思いましたが」
「そうだな。だがこれはこれで好都合だ」
サムソンも言いカナンはこれを好都合だと述べた。
「好都合ですか」
「そうだ。キャンサーだ」
彼はデスマスクを凝視していた。強い視線には凄まじいまでの闘志が宿っていた。
「黄金聖闘士の一人。ここで倒させてもらおう」
「ここでですか」
「まずはあの男を全力で倒す」
彼はこう宣言した。
「向こうにいる同志達と協同でだ。いいな」
「十人がかりで、ですか」
「いや、御前達は他の聖闘士達を狙え」
しかし彼は同志達はデスマスクには向かわせないと言った。五人はそれを聞いて誰もが目を顰めさせた。そのうえでカナンに対して問うのだった。
「カナン様、それは一体」
「どういうことですか？」
「あの男、間違いなく相当な力の持ち主だ」
カナンはデスマスクをこう評していた。
「そして誰であろうが躊躇なくその手にかけることができる。そうした意味で我々と同じだ」
「我々とですか」

「そうだ。だからだ」
彼はそれを理由としていた。
「あの男は私が相手をする」
「左様ですか」
「黄金聖闘士といえど一人ならばだ」
カナンはその冷徹だが戦いに燃えた目で言う。
「どうとでもなる。二人ならば変わったが」
「その場合はどうされていたのですか？」
「御前達五人をキャンサーに向かわせ後の四人をもう一人に向かわせていたか」
カナンはここでも二段構えの作戦を考えるのだった。これが実に用意周到であると言えた。
「インプ達を他の聖闘士達に向け私は指揮にあたっていた」
「そうなりましたか」
「黄金聖闘士は確かに強力だ。しかし一人だ」
彼はそれを指摘する。
「一人ならば。勝つことができる」
「それではカナン様」
「そのように」
「うむ。我等も動くぞ」
デスマスク達を映し出していたその映像を右手を一閃させて消す。
そのうえでまた言うのだった。
「戦場に行くぞ」
「はっ」
五人は頭を垂れ左手を拳にしそれを胸のところにやって一礼したうえで応える。それが済むと一斉に姿を消す。彼等もまた動きだしたのであった。
その頃デスマスク達は。予定通りロファールを追っていた。
「いいか」
「はい」

ジャミアンがデスマスクに応える。デスマスクは彼等の先頭にいる。
「つかず離れずだ」
「つかず離れずですか」
「見られてるぞ」
そのうえでこうも言った。
「あいつ等からな」
「へっ！？」
「まさか」
それを聞いてディオも声をあげる。彼等は慌てて周りを見回す。
「何もいませんけれど」
「小宇宙さえも」
「もう見ちゃいないさ、安心しな」
だがそれはすぐに打ち消してこう述べたのだった。
「今のところはな」
「そうですか。ならいいんですがね」
「驚きましたよ」
「蝿を使ったんだよ」
デスマスクは言う。
「蝿をな」
「蝿を！？」
「まさか」
六人は皆それを否定しようとする。だがデスマスクはその六人に対して言うのだった。
「相手は何だ？ベルゼブブだぞ」
「ええ、そうですが」
「それで蝿ですか」
「ベルゼブブの姿はな、巨大な蝿なんだよ」
デスマスクは語る。
「蝿ですか」

「元々はな、メソポタミア辺りの神様だったんだよ。それが変わり果ててそうなったんだ」
「そうだったんですか。神様ですか」
「あの連中は大概そうさ」
狂闘士達をさしての言葉だった。
「元々は神様や天使だのでそれが変わり果ててな」
「ああなっていると」
「それでアーレスの下にいるってわけだ。戦いにだけ己を見出してな」
「何か俺達とは全然違うんですね」
「そこんところは」
「あの戦衣か」
デスマスクはそれについても言及する。
「見ればわかるだろ。あの赤をな」
「血塗られた赤」
「それが奴等の象徴そのものだ。戦いに餓えている証拠だ」
「そして血に」
「アーレスは戦乱と流血を司る神様だよな」
「はい」
これはもう言うまでもなかった。それが為に知られておりそのうえ忌み嫌われている神であるからだ。とりわけアテナとの対立は有名である。彼等が仕えているそのアテナに。
「だからだよ。あいつ等はその身を落としてもまだ戦いを忘れちゃいない」
「それでですか」
「また出て来たのは」
「いいか」
デスマスクの言葉が引き締まったものになった。
「気を抜くんじゃねえぞ。死にたくなかったらな」
「ええ、それは」

「絶対に」
「そういうことだ。じゃあ追撃を再開するぜ」
デスマスクの指示の下で彼等は進む。それが罠であると知りつつ。
今はライプチヒの森を進むのだった。

第七話　　完

２００８・５・１７

第八話　罠その一

罠

聖域において。シオンは己の部屋に今聖域に残っている黄金聖闘士達を集めていた。いるのは九人であり出撃中のデスマスクともう一人が欠席であった。
「サガは」
それについて声をあげたのはアイオリアであった。
「どちらに」
「今サガは特命を与えている」
「特命を!?」
「そうだ。だから今ここにはいない」
シオンはこうアイオリアに対して答えた。
「これについてはこれ以上は言わぬ。よいな」
「はっ、それでは」
アイオリアは教皇の言葉を受けて頭を垂れた。それ以上は言わないのだった。
「その様に」
「うむ。それでだ」
そしてシオンはあらためて一同に対して述べてきた。
「今ライプチヒに出撃しているデスマスクだが」
「何かあったのでしょうか」
「ライプチヒには今禍々しい六つの小宇宙がある」
まずはこれについて述べた。
「六つだ」
「六つですか」
「そしてさらに四つの禍々しい小宇宙がライプチヒに向かっている」
そのうえでこのことも一同に対して述べた。
「間も無く到着する」

「教皇、それでは」
それを聞いてムウがシオンに問うてきた。
「デスマスクが危険です。そして彼と共にいるジャミアン達もまた」
「確かに」
アルデバランもムウのその言葉に頷く。
「ただでさえあそこには既に八大公の一人ベルゼブブのカナンがいます。七人では」
「案ずることはない」
だがシオンは二人に対してこう述べたのであった。
「御前達は全くな」
「宜しいのですか？」
「例えデスマスク達といえど」
「今後こういった戦いが続く」
シオンはあえてそれも言ってみせてきた。今ここに集っている九人に対して。
「御前達にしろだ」
「我等にしろですか」
「そうだ」
今度はミロの問いに答えていた。
「御前達にも出撃してもらうことになるのは間違いないからな」
「左様ですか」
「だがシャカ」
「はい」
しかしここであえてシャカに声をかけるのだった。
「御前は基本として聖域に残るように。以前から言っているようにな」
「わかりました」
目を閉じたままシオンのその言葉に頷くのだった。
「アーレスは戦いを好む。またエリスが一度ここに来ている」
「はい。だからこそ私が」

「聖域を守っていてくれ。よいな」
「無論。このシャカ何があろうともこの聖域を守り通してみせます」
「そのうえでだ」
シャカに告げた後でまた残る八人に声をかけてきたのだった。
「御前達は私の指示があればすぐに出撃してくれ」
「聖域を離れてですね」
「その通りだ、シュラよ」
シュラに声をかけた。
「その時にはデスマスクの時と同じく白銀及び青銅の聖闘士を何人かつけよう」
「彼等をですか」
「彼等もまた今は聖域に集結させてある」
やはりトラキアにあるアーレスの宮殿を見据えてのことであった。目と鼻の先にあるだけあってすぐに対応できるように戦力を集結させているのである。
「その彼等を出すからな」
「その際は彼等を率いてと」
「アフロディーテよ」
今言葉を出したアフロディーテにも声をかける。
「何でしょうか」
「教皇の間を守る最後の宮殿である双魚宮の主」
それが魚座の黄金聖闘士だ。それだけにかなりの重みがある存在である。
「御前にも出撃してもらう時が来るだろう」
「なっ、教皇」
それを聞いて思わず顔をあげたのはアルデバランであった。
「最後の守りをもですか」
「相手は狂闘士だ」
シオンのアルデバランへの返答はまずこれからであった。
「そしてアーレス。悠長なことを言っていられる相手ではない」

「ですが魚座は」
「わかっている。しかしだ」
「しかし！？」
これには他の黄金聖闘士達も耳をすませる。シオンの言葉に全ての神経を集中させていた。

第八話　罠その二

「かつてアルバフィカも出撃し全てをかけてミーノスを倒した」
「ミーノス。確か」
ムウがその名に反応を示した。
「冥界三巨頭の一人」
「冥闘士の中でも随一の実力者の一人」
カミュも言う。
「伝説にある名前です」
「そのミーノスと相打ちになった。先の聖戦においてな」
「左様ですか。ではアフロディーテもまた」
「出撃の覚悟はしておけ」
あらためてこう告げる。
「わかったな」
「御意」
そのアフロディーテがシオンの言葉に頷く。教皇であるシオンに対して。
「さて。それでデスマスクだが」
「はい」
「安心していい」
「安心して宜しいのですか」
「実力は御前達が最もよくわかっている筈だ」
今度の言葉は黄金聖闘士達全員に告げた言葉だった。
「他ならぬ黄金聖闘士である御前達自身がな」
「確かに」
「それは」
今のシオンの言葉には誰もが納得した顔で頷く。獅子のことを知る者は獅子である、そういうことであった。
「口では言っていてもな。だからこそ私は御前達を安心して出撃さ

せることにしたのだ」
「そうだったのですか」
鏡の間での話は今はしなかった。あえてである。
「では話は終わりとする」
「はっ、それでは」
「これで」
「デスマスクの帰還後にあらためてまた作戦を伝える」
既にデスマスクが帰って来ると確信していた。彼は。
「出撃する者もな」
「御意」
こうして黄金聖闘士達とシオンの話は終わった。話が終わると彼等はそれぞれの宮殿に下がる。その途中でムウがシャカに対して声をかけてきた。
「シャカ」
「ムウか」
「はい。貴方に一つ御聞きしたいことがあります」
こう前置きしてから彼に声をかけてきたのである。
「私に？何を」
「貴方は今何を感じておられますか」
シャカに尋ねたのはこのことだった。今黄金聖闘士達は教皇の間から階段を下りつつそれぞれの宮殿に戻っている。双魚宮から教皇の間にある紅薔薇は今はない。アフロディーテがその薔薇をどけさせたのである。薔薇は全て彼の術中にあるのである。
「この戦いに関して」
「激しい戦いになるのは間違いないでしょう」
「そうですか。やはり」
「ですが」
「ですが？」
またシャカの言葉を聞く。
「この戦いは私達にとってはこれからの重要な戦いの一つに過ぎま

せん」
「一つの戦いに過ぎない」
この言葉はムウにとっては心外のものだった。女性的ですらあるその流麗な顔に懐疑を浮かび上がらせたのが何よりの証拠であった。
「戦皇との戦いでさえも」
「私達の敵は彼等だけではないのです」
シャカはまたムウに言ってきた。
「かつて聖闘士達が地上を巡って戦ってきた神々」
「海皇ポセイドンに」
「そう。冥界ハーデス」
彼等の名を出すのだった。かつてアテナと戦った大いなる力を持つ神々である。彼等のことは最早伝説になっていた。とりわけハーデスとの数多くの戦いは。
「他にも古の神々との戦いもあるでしょう」
「私達の戦いは数多いのですね」
「黄金聖闘士は何の為に存在しているか」
シャカは言う。

第八話　罠その三

「それは何があろうとも地上を守り抜く為です」
「人々と。そして」
「アテナの為に」
こうムウに対して言い切ってみせたのだ。
「私達は存在しているのです。無数の転生を経て」
「転生を」
「私もまた同じ」
シャカはムウを見てはいなかった。目は閉じられている。しかしその言葉は確かにムウの心の中に入り込むのだった。まるで神の言葉のように。
「幾度もの転生を経てここにいるのです」
「では他の黄金聖闘士達も」
「そうです」
今のムウの言葉を認めた。
「ムウ、貴方にも前世がありました」
「若しかしてそれは先の聖戦の」
「さて。そこまでは」
言わないのだった。あえて。
「そして運命に導かれて戦っています」
「聖闘士としての運命に」
「運命の為に死ぬことはできますね」
「無論」
その言葉には偽りはなかった。ムウもまたアリエスの黄金聖闘士だ。だからこそその言葉には誇りがありまた心もそこにあったのである。
「人々とアテナの為なら」
「私もです。そしてそれは今出撃しているデスマスクも同じです」

「デスマスクもまた」
「ああした御仁ですので口には出しません」
とかくデスマスクの口や態度の悪さは聖域でも言われているのだ。ムウの様に生真面目かつ温厚な男ではないのは確かでそれが対比されて言われることもあるのだ。
「ですがそれでも」
「そうですか」
「貴方も何時かそれがわかります」
こうも言ってみせた。
「それは」
「そうですか」
「黄金聖闘士となるには聖衣に選ばれるのとは別に運命もあるのです」
「やはり運命ですか」
「黄金聖衣を纏う運命です」
言葉が続く。
「最初から聖衣に選ばれ見出されているのです」
「生まれた時からですね」
「その通りです。私は最初にこのバルゴを身に纏った時に懐かしさを感じました」
「そういえば」
その言葉にはムウも実感するものがあった。
「私も。何か」
「そうですね。それは他の黄金聖闘士達も同じでしょう」
「ですか」
「おそらく私は教皇の御言葉通り聖域から出ることはほぼない筈です」
あくまで守りとしてなのだ。教皇からそれは強く言われている。
「しかし貴方は」
「出る機会もあるということですか」

「貴方は白羊宮を守る聖闘士」
羊宮は双魚宮と共に十二宮の中でも特別な宮であるとされている。何故なら聖域の最初の守りだからだ。それだけに白羊宮を守護する聖闘士は特別な存在と見る傾向がある。代表的な例としては今の教皇であり先の聖戦で最後まで生き残ったシオンがそうである。
「その貴方が出られること自体がかなりのものです」
「相手が戦皇アーレスですから」
ムウもまたそれを覚悟しているのだった。
「それもまた当然でしょう」
「そうです。後ろはお任せ下さい」
「シャカ、貴方は」
「私は神に最も近いと言われる者」
それがシャカを評する言葉である。それだけに彼の小宇宙はかなりのものだ。黄金聖闘士達の中でもとりわけ大きいとさえ言われている。
「この私の力。貴方達の為に使いましょう」
「御願いします。では私は」
「時を待つのです」
こう告げるのだった。
「貴方が出られる時を」
「私が出られる時ですか」
「それは必ず訪れますので」
「確かに。その時は」
必ず来る、これはムウもまた確信していた。戦いの流れから見ているのではなかった。今は八大公との対峙からそれを見ているのであった。出撃の時を。
「その時まで英気を養っておいて下さい。いずれはアーレスの本拠地にも出向くことになるでしょうし」
「トラキアにですか」
「戦いが進めばそうなるでしょう」

「今はまだ想像もつきませんね」

ムウはまだそこまでは考えていなかった。今はただアーレスの軍勢である狂闘士、とりわけその頂点にいる八大公にどう立ち向かうのかを考えているだけだった。敵の本拠地に向かうということまではとても考えられなかった。そこまで考えられるシャカに驚いている程だ。

第八話　罠その四

「そこまでは」
「ですが。その時は貴方も」
「はい、その場合は必ず私達の出番になるでしょう」
これは安易に答えることができた。
「私達黄金聖闘士の。ですが」
「これからの戦いで誰か欠けるとでも」
「戦いとは命を賭けるもの」
ムウは言う。
「ならばそれも当然ではないかと」
「案じることはありません。貴方は死にません」
「私は！？」
「そして私もまた」
ムウに対して告げたうえで自らに対しても述べてみせた。
「黄金聖闘士はこの戦いでは誰も欠けません」
「そうなのですか」
「先に申し上げた通りです。私達には戦い抜くべき多くの戦いがあります」
「その戦いの為に死ぬことは許されないと」
「運命がそうさせているのです」
シャカはそれはあくまで運命だと言うのだった。
「私達の運命が」
「そうですか。私達は運命により多くの戦いを繰り広げる運命なのですか」
「不服ですか？」
顔を強張らせたムウに対して問う。
「それは。貴方は本来戦いを好まれない方ですので」
「いえ、それは違います」

ムウは目を閉じて一礼するようにしてシャカに言葉を返した。
「私が望まないのはあくまで無益な戦いです」
「無益な戦いをですか」
「そうです。しかしそれが誰かを守る為なら喜んで戦います」
「左様ですか」
「我々の力は知っています」
ムウはこうも言うのだった。
「我々が出る時はまさにこの世界の危機」
「はい」
黄金聖闘士とは言うまでもなく聖域にとって切り札である。その切り札を出すということはやはりその時は地球規模の危機でありそうした事態に出るということは最早多少の犠牲は止むを得ないと判断される場合なのだ。そしてその場合で起こることは。
「技を出すだけで多くの命が失われるでしょう」
「それは貴方にとって耐え難いことでしょうか」
「素直に申し上げます」
「ええ」
「耐え難いことです」
ムウはそれを正直に述べた。
「それを受け入れられる者、受け入れられない者がいるでしょうが」
「貴方は受け入れ難いですか」
「私の力はこの世を護る為の力」
そのことをあえて再び言う。
「それにより止むを得ないとはいえ多くの無辜の人々がなくなるというのは」
「ですがそれもまた受け入れなければならないもの」
今のシャカの言葉は峻厳ですらあった。
「そうではないのですか」
「わかっています。その時は背負ってみせます」
ムウはまた目を閉じて述べた。

「その時には」
「それでなくては黄金聖闘士には選ばれないのです」
「時として犠牲も厭わず、ですか」
「非情にならなくてはならない時もあるということです」
それがシャカの言いたいことであった。
「おわかりですね」
「わかりたくはないです」
それでもこう前置きするムウであった。
「ですが私達の力は」
「伊達に光の速さを誇っているわけではありません」
シャカはまた言う。
「ですから」
「ええ。私もまた戦う時は」
「時として非情にならなければなりません」
ムウの性格、気性はわかっている。しかしそれでも言うのだった。
これはシャカの思惑あってのことなのだ。黄金聖闘士としての思惑が。
「それはおわかり下さい」
「我が師、いえ教皇にも言われたことがあります」
ムウは己の師でもあるシオンのことにも言及した。
「そのことは」
「そうでしたか。では」
「やはりわかってはいます」
ムウはまた答える。
「ですから」
「わかりました。では貴方は」
「ただ。出来るだけ犠牲は避けたいものです」
それでもやはりこう言うのがムウであった。

第八話　罠その五

「それだけは何としても」
「最低限で、若しくは何の犠牲もなしと」
「あくまで出来るだけですが」
「甘いという意見もあるでしょう」
シャカはこう言い捨てていた。
「それに関しましては」
「ですが」
「しかしそれもまた考えの一つ」
そのうえでの言葉であった。
「それでいいと思います」
「そうですか」
「貴方の優しさもまた必要なのです」
シャカは言う。
「時として」
「時としてですか」
「何故黄金聖闘士が十二人いるのか考えられたことはありますか」
「私達が何故十二人いるか」
「そうです」
今度はそれに関する話であった。
「一人いればその一人の正義があります」
「はい」
ムウはまたシャカの言葉に頷いた。
「それは確かに」
「つまり十二人いれば」
「十二人の正義ですか」
「正義は一つではないのです」
シャカはあえてこう述べるであった。

「ですが」
「ですが？」
「それでいて一つでもあります」
「一つでもあると」
「そうです」
これは決してムウを煙に巻く言葉ではなかった。シャカにとってみれば真実なのである。
「一つなのです」
「十二ありながら一つでもある」
ムウはその言葉を自分の口で反芻した。
「それは何なのか」
「つまりです。私達は聖闘士です」
話は一旦そこにまで戻る。
「正義はアテナを護り」
「人を護る」
既に語り合っている言葉だ。ムウは今更といった感情が己の中に宿ったのを否定できなかった。
「そういうことです」
「あっ・・・・・・」
その言葉を聞いてはっとしたムウだった。シャカが言いたいのはそれだったのだ。
「つまり私達の正義は根は同じだということなのです」
「そうでしたか」
「はい。私達十二人はだからこそ黄金聖闘士となった」
こうも述べてみせてきた。
「そうなのです」
「わかりました。それでは」
「私達の正義は根は同じです」
そのことをまたムウに告げる。
「それをお忘れなきよう」

「ええ」
これでムウとシャカの話は終わった。ムウにとってはかなり重要な話になった。彼は己の守護する宮に戻ってからもこのことを考え続けることになるのであった。
その頃デスマスクは。ジャミアン達を連れてロファールを追撃していた。ライプチヒ郊外の森を聖衣を着て進んでいた。
森は木々の間も結構あり下には落葉も少なく進み易いものだった。デスマスクを先頭として遠くに見えるロファールを追っていた。
「いいか」
デスマスクはジャミアン達に声をかける。
「絶対に見失うなよ」
「はい、それはもう」
ジャミアンがデスマスクのその言葉に応える。彼等は慎重にロファールを見つつ進んでいる。
「それでデスマスク様」
「何だ？」
ゾルダの言葉に応えて顔を向ける。
「これで追いついたらですね」
「ああ」
「やっぱりその時は合流しようとしている狂闘士の奴等をですね」
「そういうことだ、一気にやるぞ」
軽い調子でゾルダに答えてみせていた。
「いいな、それでな」
「一気にですか」
「ああ、ただな」
「ただ！？」
「御前等の出番はないかもな」
やはり軽く笑ってこう言ってきたのだった。
「ひょっとしたらな」
「ひょっとしたらって」

「じゃあ俺達は」
ブラウとレッシュがそれを聞いてデスマスクに問う。
「いる意味ないじゃないですか」
「狂闘士と闘うのが仕事なのに」
「ああ、それは安心しろ」
しかしデスマスクはこうも告げるのだった。

第八話　罠その六

「出番はちゃんとあるからな」
「あるんですか」
「ああ、間違いなくな」
安心させるような言葉ではなかった。当然といった感じの言葉だった。
「闘う相手はいる、確実にな」
「頼みますよ」
「俺達だって折角来ているんですし」
「まあそれでもだ」
デスマスクは彼等の言葉を聞きながら顔を前に戻した。やはりロファールを見ている。
「メインは俺だがな」
「黄金聖闘士には誰も勝てませんよ」
「一人いたらそれこそ」
「一人！？」
しかしデスマスクはここでのディオとゾルダの言葉に何故か声をかけてきたのであった。
「一人か」
「って一人じゃないですか」
「黄金聖闘士でここに来られているのはデスマスク様御一人ですよ」
「さて、どうかな」
楽しげに含み笑いを浮かべての言葉だった。
「それはな」
「って実際になあ」
「そうだよな」
ジャミアンとディオはデスマスクの今の言葉を聞いて彼の後ろで怪訝な顔を見合わせ合ってひそひそと話をするのであった。

「デスマスク様しかおられないし」
「そもそも黄金聖闘士が出撃すること自体が」
「結果はおいおいわかるがな」
デスマスクは答えようとはしなかった。
「それはな。じゃあよ」
「はい」
話は戻った。
「このままあいつを追うからな」
「はい、それはもう」
「このまま」
彼等も今の言葉にはすぐに答えることができた。
「追いましょう」
「しかしそれでも」
「もうすぐだぞ」
デスマスクは彼等が言う前にこう言ってきた。
「あいつが仲間と合流するのは」
「そうですか」
「ああ、四つの小宇宙を感じる」
既にそれを察知していたのだ。流石は黄金聖闘士と言うべきであった。
「向こうは合計十人か」
「十人か」
「一人が確か八大公の一人ベルゼブブのカナン」
ゾルダとブラウが述べる。
「でしたよね、確か」
「ああ、そいつだ」
デスマスクは既にこのライプチヒで彼と対峙している。だからよく知っていた。
「そいつもいる。だが相手は俺がしてやる」
「デスマスク様が」

「俺じゃなきゃ相手にならないだろうが」
余裕を漂わせる言葉をかけるのだった。
「黄金聖闘士の俺じゃなきゃな」
「確かにそれは」
「相手も確か」
「そうだ、光の速さで動ける」
まずはそれだった。
「それにセブンセンシズも持っているな」
「じゃあまず俺達じゃ敵いませんよ」
「絶対に」
「オルフェとかだといけそうだぞ」
琴座の白銀聖闘士の一人だ。その実力は白銀聖闘士随一とも噂されている。
「あいつだとな」
「あの人はまた別ですよ」
「そうそう」
ブラウとレッシュがそれを聞いて言う。
「実力だけじゃなくて音楽の才能も」
「天才的じゃないですか」
「あいつだったら一人でもいけるか」
デスマスクは二人のその言葉を聞きながら呟く。
「俺がいなくてもな」
「けれどデスマスク様」
アンタスが言ってきた。
「何だ？」
「どっちにしろデスマスク様はここに来なければならないんですよね」
「ああ、そうなるよな」
「結局はな」
今のアンタスの言葉を聞いてジャミアンとディオも言ってきた。

第八話　罠その七

「相手が相手だし」
「それも教皇直々の御命令だし」
「ああ、それはわかってるさ」
さも当然といった調子で彼等に言葉を返してみせた。
「それはな」
「それじゃあやっぱり」
「楽しませてもらうさ」
ここでデスマスクの顔に凄みのある笑みが浮かんだ。
「だから俺もここに来ているんだしな」
「楽しませて、ですか」
「そろそろだぜ」
ここで六人に対して告げる。
「いるぜ。前にな」
「むっ！？」
「遂にか」
デスマスクが言ったその瞬間だった。ロファールの前に四人の狂闘士達が並んでいた。見れば彼等のいずれも禍々しい赤い戦衣を身に纏っていた。それが何よりの証拠だった。
「狂闘士！」
「やはりここに」
「騒ぐなよ、まだな」
デスマスクははやり立つ彼等に対して告げた。
「ここで騒いでも何にもならねえからな」
「そうですね、それは確かに」
「わかりました」
「わかればいいんだよ」
前を向きつつ彼等に言葉を返す。

「わかればな。さて」
そのうえで一歩前に出た。
「まずは話を聞くか」
こう言ってロファール達を見るのだった。見ればロファールはその四人に対して色々と話をしているようであった。
「そういうことだ」
「そうか。ではカナン様は」
「ああ、まだここには到着されぬ」
こう同志達に話していた。
「今俺以外の四人を連れてな。聖闘士達を探し回っている」
「そうか、それでか」
「ロファール、御前を向けてきたのだな」
「その通りだ」
こう同志達に答えてみせる。
「これでわかってくれたな」
「ああ、了解した」
「そうか。我等の到着だけは御存知なのだな」
「それは承知しておられる」
ロファールはこうも答える。
「だがな」
「我々と今合流はできない。そうだな」
「そういうことだ。今聖闘士達に見つかればことだ」
ロファールの声が鋭くなった。
「だからな。すぐにここを去るぞ」
「わかった」
「それではな」
「ああ、その必要はないぜ」
しかしここで彼等とは別の声がその場に加わったのだった。
「むっ！？」
「何者！？」

「何者も彼の者も御前等に対してこんな口を聞くのは一つしかねえと思うがな」

声の主はこう言いつつ姿を現わしてきた。

第八話　罠その八

「違うかい？」
「なっ、貴様は！」
「まさか！」
「ああ、そのまさかさ」
デスマスクであった。彼は悠然とロファールの右斜め後ろから姿を現わしてみせた。その顔に余裕に満ちたいささか歪んだ笑みを浮かべながら。
「キャンサーのデスマスクだ。名前は知っているな」
「黄金聖闘士だと」
「まさかここで」
「俺が来ているのは知ってる筈だがな」
驚く彼等に対して悠然とした態度を保ちながら言う。
「違うかい？」
「むむっ、だが」
「どうしてここに」
「それは簡単だよ。こいつをな」
ロファールを指差してみせてきた。
「追ってきたんだよ。簡単な話だろ」
「俺をだと。馬鹿な、小宇宙は」
「感じなかったってか！？当然だな」
ロファールの驚愕を聞いても表情は変えない。
「消していたからな、そういうのは」
「小宇宙の気配を隠していたというのか」
「簡単に言えばそうだな。それでだ」
彼はさらに言葉を続ける。
「それは俺だけじゃないぜ」
「何っ、まさか」

「他にも」
「その通りさ。おい」
デスマスクは首を回しながら辺りに声をかけた。
「出番だ。出て来い」
「はっ、デスマスク様」
「それでは」
それに応えて六人の聖闘士達が姿を現わした。そして口々に名乗るのだった。
「クロウのジャミアン！」
「ムスカのディオ！」
「旗魚星座のゾルダ！」
「巨嘴鳥星座のブラウ！」
「八分儀星座のレッシュ！」
「帆星座のアンタス！」
その六人だった。今それを名乗ったのである。
「俺を入れて七人だ。御前等は五人だな」
名乗りが終わってからまた狂闘士達に言ってきた。
「数は俺達が優勢でしかも俺がいる。分が悪いなあ」
「ふっ、それはどうだか」
しかし彼等の中の一人が平然と笑ってきた。
「優勢かどうか。わからぬぞ」
「何っ！？」
彼の今の言葉にデスマスクの顔が歪んだ。
「どういうことだ、一体よ」
「簡単なことだ。貴様等は罠にかかったのだ」
「罠！？」
「そうだ」
彼等は言うのだった。
「我々のな」
「我々だと！？」

「まさか」
「そう、そのまさかだ」
彼等は他の聖闘士達に対しても告げる。
「我々が貴様等に対して何もしないと思っていたか」
「その声は」
デスマスクもその声に反応した。それは後ろからだった。
「貴様は」
「私だ」
後ろからゆっくりと姿を現わしたのは。また闘いがはじまろうとしていた。

第八話　完

２００８・６・３

第九話　知っていた罠その一

知っていた罠

デスマスク達の前に姿を現わしたのはカナンであった。彼はデスマスクを見てまずこう言ってきたのだった。

「また会ったな、キャンサーよ」

「会うのは可愛い娘ちゃんだけでいいんだがな」

「ふっ、こんな時でも軽口か」

「軽口叩くのは誰にも邪魔されない筈だがな」

「確かに」

カナンもデスマスクのその言葉には頷いてみせた。

「どのみちもうすぐそれも聞けなくなるしな」

「つまり俺達を倒すってことか」

「そう言ったのだが聞き間違えるような言葉だったかな」

「いや」

デスマスクは今の言葉はすぐに否定した。

「わかるさ、すぐにな」

「ならいい」

「それでだ。わかったうえでだ」

彼はまた言う。

「俺達を罠にかけたってなどういうことだ？まあそれも予想はつくんだがな」

「ここに今来たのは私だけではないということだ」

カナンはこうデスマスクに告げた。

「つまりだ」

「デスマスク様、この小宇宙は」

「やはり」

「つってもこいつが出て来た時点でわかるだろ？」

デスマスクもジャミアン達に対して告げた。

「一人で出て来ないってだけでな」
「そうですか、やっぱり」
「それじゃあ」
「つってもあれだがな」
「あれ!?」
「わかってたんだよ」
また軽口だが今度はその内容がより深いものになっていた。
「実際のところはな」
「何っ!?」
カナンも今のデスマスクの言葉に目の動きを止めた。
「今何と言った」
「だからわかってたんだよ」
彼はまた言ってみせた。
「手前等のやりそうなことはな。俺もわかってるんだよ」
「馬鹿な」
「そんな筈がない」
今いる狂闘士達が今のデスマスクの言葉に声をあげる。
「我等の策を知っていただと」
「何故だ」
「何故だも何も簡単な策略だろうが」
デスマスクの彼等への言葉は醒めたものであった。
「違うか?こんなのガキの悪戯じゃねえか」
「子供だと」
「我等が」
「囮で誘き寄せて大勢で倒す」
デスマスクは簡単にその策を説明してみせた。手振りも交えず素っ気無くすらあった。
「こんなの誰でも考え付くんだよ」
「では聞こう」
カナンはデスマスクのその言葉を聞いたうえでまた彼に問うてき

た。
「何だよ、今度は」
「我等を。倒せるというのか」
「そうです」
ここでリィナが出て来た。その後ろにはアトロム達もいる。
「やっぱりいたか」
「小宇宙は嘘はつかないか」
聖闘士達は彼等の姿を認めて言う。
「私達を倒せるなどと」
「僅か七人で」
「おいおい、お嬢ちゃん達」
デスマスクは馬鹿にしたような目でそのリィナやゼノの言葉を聞きつつ彼女達に対しても言葉を告げてきた。やはり余裕のある態度は変らない。
「俺を誰だと思ってるんだ？キャンサーの黄金聖闘士だぞ」
「例えそうだとしても」
「私達を相手に」
「しかもだ」
ここでまたカナンが言ってきた。
「我々だけではない」
「御前等・・・・・ええと」
その余裕のまま彼等の数も数えてみせる。
「十人か。まだ他にいるのかよ」
「インプ達がいる」
カナンが言った。
「我が軍の兵士達がな」
「へっ、雑魚か」
雑兵と聞いてデスマスクは一笑に伏してみせた。
「雑魚がどれだけいても同じなんだがな」
「ぬかせ聖闘士風情が！」

「貴様ごときに我等を愚弄することなぞ！」
「許さねえってか？」
何時の間にか周りを取り囲んできている彼等を見てその右手をゆっくりと挙げるデスマスクだった。人差し指を上に掲げている。

第九話　知っていた罠その二

「だったら。全員纏めて相手をしてやってもいいんだがな」
「まさかこいつ」
「あの技は」
「知ってるんなら話は早い」
インプ達の声を聞きつつまた笑ってみせる。
「死ぬか、また何百人単位で」
「やれるものならやってみるがいい」
そのデスマスクに対してカナンが告げる。
「その技を出した瞬間に貴様は我々の技の前に倒れる」
「一斉攻撃ってわけかよ」
「最強の黄金聖闘士」
最早これが前提となっていた。
「貴様を倒せばそれで決着がつくのだからな」
「よし、わかった」
デスマスクはカナンのその言葉を聞くと右腕を下ろした。するとそこに宿りだしていた燐気までもが霧消してしまった。蛇の様なそれまでもが。
「ならこうしようか。おい」
今度はジャミアン達に声をかけた。
「はい？」
「雑魚は御前等がやれ」
「へっ！？」
「雑魚っていいますと」
彼等はいきなりこういわれてキョトンとした顔になった。しかしその彼等にデスマスクはさらに言うのだった。
「だからだよ。雑魚の兵隊共だよ、御前等でやりな」
「それはいいんですけれど」

「あの、それだとですね」
「何だ？何かあるのか？」
「デスマスク様が」
彼等が言うのはそこであった。
「大変じゃないかなと」
「ひょっとしてですね」
「ああ、この連中は俺が一人でやってやるよ」
何でもないといったような言葉だった。
「それがどうかしたの？」
「あのですね」
ゾルダも今のデスマスクの言葉には引きつつ彼に言ってきた。
「相手は十人ですよ。しかも相手に八大公までいて」
「それデスマスク様御一人とは」
ディオも言うのだった。
「幾ら何でも無理じゃないんですか？」
「馬鹿、俺を誰だと思ってるんだ」
しかし彼等の忠告をデスマスクは軽く笑い飛ばしたのだった。
「黄金聖闘士だぞ。そうそうやられるかよ」
「ですから十対一ですよ。それは流石に」
「無理はされない方が」
「うだうだ言ってもラチがあかねえ。さっさとやるぜ」
彼は遂には周りの意見をシャットアウトして強引に終わらせてしまった。そのうえでまた言う。
「御前等雑魚相手な、これで決定だ」
「決定、ですか」
「文句あるなら今から聖域に帰るまで飯代も旅費も全部なしだ」
「わかりました、そこまで仰るのなら」
「もう何も言いません」
露骨な圧力までかけられては彼等も従うしかなかった。もっともデスマスクの本心はわかっているのだが。

「じゃあそっちは頼みますよ」
「くれぐれも御注意よ」
「楽勝で帰って来るさ」
インプ達に向かう彼等に対して告げる。こうして聖闘士達は二つに分かれデスマスクはカナン達と対峙する。合流した四人は既に合流しカナンの後ろにいた。デスマスクは彼等を見据えてつつ問うのだった。
「で、新たに四人だったな」
「そうだ」
「如何にも」
その四人がデスマスクの問いに答える。彼等の目は銀色の光を放っている。
「それなら話は早い。名前を聞いておくぜ」
「名前か」
「誇り高い狂闘士が名乗れないっていうわけねえよな?」
余裕に満ちた表情のまま彼等に問う。
「どうなんだ?そこんところは」
「安心しろ、我等とて名乗らぬことはない」
「むしろ喜んで名乗らせてもらう」
これが彼等の返答であった。
「そうかい、じゃあ聞くぜ」
デスマスクも彼等の言葉を聞いてあえてニヤリと笑ってみせた。一目でわかる好戦的な笑みであった。それが彼に非常によく似合っていた。

第九話　知っていた罠その三

「何ていうんだ？」
「公爵、サルガタナスのロジャー」
長く黒い髪に落ち着いた面持ちの男が名乗る。
「子爵、アンドレアルフスのエリシャ」
鋭めの目をした黒く長い髪の美女だった。
「男爵、セエレのライネル」
短い金髪に眉と近い細めの目の精悍な男だ。
「公子、ダンタリアンのシロウ」
まだ幼さが見える少年だ。小柄で鬣に似た髪を持っている。
「我等四人、援軍として参った」
「キャンサーの黄金聖闘士よ、いざ勝負」
ロジャーとエリシャが言ってきた。彼等はリィナ達と共に横一列に並んでデスマスクに名乗りをあげてみせた。デスマスクは彼等のその名乗りを聞いても余裕の笑みを浮かべ続けている。そのうえでの再びの言葉だった。
「じゃあ、十人纏めてあの世に送ってやるぜ」
「この男、まだ」
「我等を見てもその態度のままか」
「俺はいつもこの態度なんでな」
狂闘士達の怒りを前にしてもやはり平然としている。
「まあ気にするな」
「ふん、まあいい」
アトロムが言ってきた。
「まずはこの俺が相手をしてやる。覚悟しろ」
「馬鹿か御前は」
だがデスマスクはアトロムに対して言った。その前に出て来た彼に対して。

「一変に来いと言った筈だぜ。もう忘れたのかよ」
「馬鹿な、まだ言っているのか」
「その余裕は何処から」
「余裕ってのはな、実力から自然と出て来るものなんだよ」
語るその周りにまたあの青い燐が浮かびあがってきていた。
「それが俺と御前等の差なんだよ。わかったら早く来な」
「カナン様」
ユニがカナンに声をかけてきた。
「何だ」
「この不埒者許してはおけません」
どうやらデスマスクの今までの言動に本心から怒りを覚えたようである。
「是非我等にお任せ下さい」
「見ていろというのか」
「宜しいでしょうか」
あらためて彼に対して問う。
「それで」
「自信の程は」
「なければこの様なことは言いませぬ」
これが彼女の返答であった。
「決して」
「そうだな。それではだ」
「はい」
カナンの言葉に対して頷く。
「任せよう。頼むぞ」
「有り難きお言葉。それでは」
「何だよ、ボスはお休みかよ」
デスマスクは今の二人のやり取りを見たうえで茶化すように言葉をかけてきた。
「何だか面白くねえな」

「いい加減に軽口を止めたらどうか」
ロジャーの言葉には苛立ちが僅かではあるが混ざっていた。
「さもなければ楽には死ねんぞ」
「ほお、じゃあどういう死に方なんだ？」
「我等全員の手によって」
ロジャーの言葉に合わせて全員の手がデスマスクに対して向けられる。
「貴様を冥界に送ってくれる」
「全身を血塗れにさせてな」
「言ってくれたな。じゃあこっちもその言葉だけの礼はさせてもらうぜ」
「！？またあの青い燐が」
「あの燐は一体」
「さて、御前等の魂はどんな燃え方をしてくれるかな」
青い燐が次第に九人を包んでいく。デスマスクはそれを見つつ余裕に満ちた笑みをさらに深いものにさせていた。
「ああ、冥界がどうとか言っていたな」
「それがどうした？」
「それを聞いて思い出したんだよ」
「思い出しただと！？」
「ああ、そういえばこの技はな」
「！？まさか」
ここでカナンが声をあげた。

第九話　知っていた罠その四

「この青い燐は」
「カナン様、何か」
「いかん」
カナンはすぐに眉を顰めさせた。そのうえで九人に声をかけるのだった。
「御前達、今は下手に動くな」
「動くな!?何故」
「この青い燐こそがキャンサーの技だ」
「へっ、気付いたみたいだな」
デスマスクはカナンの声に従い九人が動きを止めたのを見て余裕の笑みで笑ってみせてきた。
「そうさ、この技はあれなんだよ」
「あれだと?」
「冥界の炎よ。貴様等を送り返す案内の火だ」
「どういうことだ、一体」
「知りたければ動きな」
平然とした態度でまた言ってきた。
「そうしたらわかるぜ」
「馬鹿な、罠なのを知っていて」
「我等が動くとでも」
狂闘士達は動かなかった。カナンの言葉に従い今は様子を見るだけなのだった。
だがデスマスクはそれでも。また新しい技を出そうとしていた。
「じゃあ今度はこれだな」
「その技はわかる」
カナンはデスマスクが人差し指を立てた右手をゆっくりと上に掲げるのを見て述べた。

「積尸気冥界波だな」
「わかるか。まあわかっていてもよけられるものじゃないぜ」
「さて。それはどうか」
しかしカナンはここでデスマスクに対して言ってきたのだった。
「そう上手くいけばいいがな」
「へえ、じゃあそっちに秘策があるんだな」
「一つ言っておく」
カナンの言葉が鋭くなった。
「このベルゼブブのカナン、アーレス様の下では死を司っている」
「死をかよ」
「そうだ。蝿は死の使者」
言うまでもなくベルゼブブの姿のことを言っているのだ。ベルゼブブは巨大な蝿の姿をした魔神であるからだ。カナンの戦衣の姿もそうなっている。
「これだけ言えばわかるな」
「じゃああれか」
デスマスクはカナンの今の言葉を聞いてあることを悟った。
「俺の積尸気冥界波を受けても平気ってわけだな」
「少なくとも自力でこちら側の世界には帰って来ることができる」
穏やかだが絶対の自信を含んだ言葉だった。
「それは言っておこう」
「じゃあこの技は貴様には通用しないってことだな」
「そう考えるのが普通だな」
「まあ今はそういうことにしておくぜ」
デスマスクはここでは結局技を収めるのだった。右手を下ろす。
「まあ真っ当に九人相手してやるか。来な」
「言われずとも・・・・・・！」
「その減らず口ここで」
彼等はジリ、と前に出た。その時に。
「待て、デスマスク」

「おっ！？」
デスマスクはその声がした方に顔を向けてみせた。
「ちぇっ、いい時に出てきやがるぜ」
「御前一人では流石に負担が大きい」
「大きくても充分にやれますよ」
何故かデスマスクの言葉遣いが急に丁寧になった。
「あんたの力をお借りしなくてもね」
「そうもいかん。こちらも教皇の御命令だ」
「御命令ってまさか」
「貴方までここに」
ジャミアンとディオがここで驚きの声をあげる。彼等は今インプ達と闘っている最中だった。
「ああ、気付いていなかったか」
「気付いていなかった！？」
「じゃあデスマスク様は既に」
「わからなかったのも当然だな」
彼等の驚きを見ても特に何も思わないようだった。

第九話　知っていた罠その五

「黄金聖闘士が小宇宙を隠せば見つけ出すのはそう簡単じゃねえしな」
「ではやはり」
「前からここに」
「悪いが味方にも悟られるわけにはいかなかった」
姿を現わしたサガはこうジャミアン達に答えるのだった。ヘルメットだけ着けていないジェミニの黄金聖衣を着た姿で森の中に立っているのだった。
「こちらとしてもな」
「俺はわかっていましたがね」
「流石に黄金聖闘士に悟られないようにするのは無理か」
「まあ他にはわからなかったからいいでしょ」
「そうか」
「それで。サガ」
あらためてサガに対して問うてきた。
「教皇の御命令でこちらにですか」
「そうだ、サポートを命じられてな」
サガはこうデスマスクの問いに対して答えた。
「ここに来た。そういうことだ」
「そうですか」
「助太刀させてもらう」
単刀直入に言ってきた。
「それでいいな」
「俺だけで充分なんですけれどね」
デスマスクはそれを強調してみせた。
「十人全員仕留めてやるつもりでしたが」
「強情だな」

「闘うのは好きなんでね」
彼が求めているのはそれであった。
「だからですよ」
「しかしだ。こちらも是非闘わせてもらう」
「その為に来たからですか？」
「断るというのならそれでいいが」
「渋々ですがいいですよ」
一言多いが意外にもそれを認めるのだった。
「それでね」
「そうか。それなら」
「黄金聖闘士が一度に二人も出ますか」
デスマスクはそのことを考えながらサガが自分の背に近付いて来るのを感じていた。
「そんなことは先の聖戦でも殆どなかったそうですがね」
「それだけ今回は特別ということだ」
サガはデスマスクと背中で向かい合わせになったうえで言ってきた。
「この聖戦はな」
「そうですか」
「そうだ。ではいいな」
「一度言った言葉はそのままやる主義でしてね」
自分の背中にいるサガに対して述べる。
「それでいいですよ」
「わかった。それではな」
「で、何人相手にするんですか？」
「それはわからないが」
サガもそれに関しては即答はできなかった。
「ただ」
「ただ？」
「そちらの相手はもう決まっているようだな」

「ごもっともで」
狂闘士達はサガというもう一人の黄金聖闘士が戦闘に参加したことにより自然と二手に分かれてデスマスクとサガを囲んでいた。デスマスクの方には五人がいた。
「行きます、キャンサー」
「貴方の相手は私達です」
「まずは二人ってわけか？」
「違う」
「我等もいる」
ユニとリィナに顔を向けているとそこからサムソン達も言ってきたのだった。
「キャンサー、今までの愚弄許せぬ」
「その始末、つけさせてもらう」
「覚悟しやがれ」
アトロムとロファールもいた。彼等は怒りに燃える瞳でデスマスクを見据えつつ彼と対峙していた。
「つまり俺は五人ってわけですね」
「私が四人か」
「まあ平等ってわけじゃないのは悪いんですが」
「何、それはいい」
サガもそれはいいとしたのだった。

第九話　知っていた罠その六

「それはな。私は残る四人との勝負をさせてもらう」
「ってことでいいんですね」
「そうだ。でははじめよう」
あらためてデスマスクに対して言ってみせた。
「聖戦の本格的なはじまりだ。いいな」
「その幕開けが俺ってのは何か嬉しいものですね」
「いいのか？命を落とすとしても」
「生憎俺は死神がスポンサーについてますんで」
デスマスクの不敵な言葉はサガに対しても遺憾なく述べられた。
「全然平気ですよ」
「そうか。なら心配はいらないな」
「そういう貴方はどうですか？」
デスマスクは逆にサガに対して問い返してみせた。
「四人ですよ、相手は」
「私のことも心配無用だ」
サガは落ち着いた声でデスマスクに言葉を返した。
「私は。ジェミニのサガはここでは敗れぬ」
「じゃあ。フォローの必要はないですね」
「既に背中合わせになっている。それだけで充分だ」
「そういうことですか」
「では。行くぞ」
自分の目の前にいる四人の狂闘士達を見ての言葉だった。
「地上とアテナの為の戦いにな」
「まあそういう御大層な言い方は苦手なんですがね」
それでもデスマスクもまた戦いに目を向けるのだった。今聖闘士と狂闘士の本格的な戦いが幕を開けたのだった。まずはロファールが動いた。

「キャンサー！」
「何だ、小僧」
デスマスクはその彼に応えて言葉を返してみせた。
「手前が相手か？」
「その通りだ、このヴァピュラのロファールの力見せてやる」
「俺の力もだ」
「俺も」
サムソンとアトロムも彼に加わってきた。
「三対一だ。何なら一対一でもいい」
「好きなのを選べ、キャンサー」
「生憎俺は面倒臭いことは嫌いでな」
またしても余裕に満ちた笑みを浮かべて三人に告げた。
「敵が多いんなら纏めて来てくれた方が有り難いな」
「ふん、それ程早死にしたいか」
ロファールはデスマスクの言葉を受けて血気にはやるようにして言葉を返した。
「ならば望み通りにしてやる」
「戦いの場においてこそその力を最も発揮する我が狂闘士」
「今その恐ろしさを見せてやろう」
「まずは三人だな」
デスマスクの余裕は相変わらずだった。まるで九人から五人になっても楽しめることに変わりはないのだと言わんばかりである。
「くたばるのは」
「死ぬのは貴様だ！」
「今ここで！」
三人はデスマスクの言葉が言い終わらぬうちに攻撃を浴びせてきた。まずはロファールからだった。
「インフィネットタスク！」
「むっ！？」
両手から無数の爪による攻撃を繰り出してきた。

「この攻撃を受けて生きていられるか！」
「次は俺だ！」
今度はアトロムが動いた。デスマスクを掴んで大きく放り投げる。
「ヘルズフラップ！」
デスマスクはそのまま為す術もなく上に投げ出された。その彼の上にサムソンが姿を現わし空中において彼の技を繰り出してきた。
「俺もいるということを忘れるな！」
「律儀なもんだな」
「ほざけっ、受けろ！」
彼の技は。
「クラッシュピストン！」
右の拳を連打で打ち込んできた。それでデスマスクを地に叩き付ける。筈だった。
「やった！」
「間違いない！」
三人もそれを確信していた。ところが。

第九話　知っていた罠その七

「そう思っただろ」
「何っ！？」
「今の言葉はまさか」
「ああ、そのまさかさ」
言葉が返って来た。それと共に地面に叩き付けられるデスマスクの姿が消えたのだった。
「じゃあな」
「消えただと！？」
「一体何処に」
三人はデスマスクの姿が消えたのを見て一旦一つの場所に集まる。そのうえで周囲を見回すが彼の姿は何処にもなかった。
「まさか技の一つなのか！？」
「これもまたキャンサーの」
「おいおい、こんなのは技のうちには入らないぜ」
だがここで。そのデスマスクの声がしたのだった。
「キャンサー！」
「何処だ、何処にいる！」
「そんなに俺のことが気になるか」
今度のデスマスクの声は如何にも楽しげなものだった。
「人気者も辛いものだぜ」
「ほざけ！まだ言うか！」
「その軽口今度こそ！」
「言われなくても出て来てやるさ」
その言葉と共だった。
「安心しな、そこはな」
「何処だ！」
「何処からだ！」

「だからな」
またしてもデスマスクの声だけが聞こえる。
「すぐそこにいるんだよ、俺はな」
「くっ、ならば！」
「今すぐ姿を見せよ！」
「ああ、いいぜ」
その自信に満ちた声と共に。デスマスクは再び姿を現わしたのであった。彼が出て来た場所は。
「よお」
「なっ・・・・・・！」
「そこにいたというのか！」
五人の狂闘士達はデスマスクの姿を認め。思わずそれぞれ声をあげてしまっていた。
「馬鹿な、どうして我等に気付かれずに」
「そこにいたというのだ」
「だからよ。わからねえのか？」
悠然と狂闘士達に対して告げてみせてきた。
「格だよ」
「格！？」
「そうさ、俺は黄金聖闘士」
また自分のことを言ってみせる。しかも誇らしげに。
「御前等並の連中とは違うってことさ」
「我等が並だと！またしても！」
「愚弄するか！」
アトロムとロファールが激昂する。デスマスクに対して。
「じゃあ聞くぜ」
「むっ！？」
「今のこの事実だ。御前等は正面にいた俺に気付かなかった」
その事実を言うのだった。そう、デスマスクは五人の正面にいたのである。このことだけは否定しようのない事実だった。デスマス

クにとっても五人にとっても。
「これはどう弁明するつもりだい？」
「くっ、それは」
「我等は」
「言い繕いはみっともないぜ。だから実力差なんだよ」
デスマスクの余裕は続く。
「これがな。わかったらさっさと逃げな」
今度は余裕の言葉ではなかった。明らかな挑発だった。顔にもそれは出ている。
「死ぬぜ。下手しなくてもな」
「愚弄を。我等は誇り高き狂闘士」
「アーレス様の忠実にして勇敢なる僕」
サムソンとアトロムが忌々しげに、いや怒りと憎しみに満ちた目でデスマスクに言葉を返した。
「退くということなぞ有り得ん！」
「ましてや聖闘士が前にいるのならな！」
「忠告はしたぜ」
それぞれ一歩前に出て来た三人に対した言葉だ。
「それを聞く聞かないは別だからな」
「ほざけ！」
「今度こそ貴様を！」
「一応最後に忠告しておくぜ」
デスマスクは身動き一つせず三人に告げた。
「それ以上動いたら命はないからな」
「まだ言うか！」
「今度こそ！」
「まずは三人だな」
三人がデスマスクの今の言葉にさらに激昂して跳んだところで。
彼は呟いたのだった。

第九話　知っていた罠その八

「残り六十九人か。軽いな」
「何っ！？計算もできぬというのか」
「我等狂闘士は八大公の方々を抜けば七十二人」
それだけ八大公が別格ということであった。
「何を間違っている」
「それだけ焦っているということか」
「生憎俺は焦っちゃいなくてな」
その言葉と共に。またあの青い燐が出て来た。
「またか」
「これは」
「いかん・・・・・」
カナンはその青い燐を見て顔を顰めさせる。
「だが。手遅れか」
「さて、終わりのはじまりだぜ」
青い燐は忽ちのうちに周りを覆っていく。自然と三人の狂闘士達の周りも。
「御前等のな」
「さっきも見たがこの青い燐は一体」
「何だ？」
「最後に教えておいてやる」
デスマスクはやはり一歩も動かない。その代わりと言わんばかりに悠然と述べる。
「俺の守護星座である蟹座にある積尸気はな。死を司るんだよ」
「死をだと」
「そうさ。だから俺の技も死を司る」
「では先程のあの言葉は」
「まさか」

「そう、あのまさかだ」
その言葉が続けられていくと共に。青い燐は三人を完全に包み込んだのだった。
「受けな、このデスマスクの技の一つ」
「おのれ・・・・・・」
「まさかここで」
青い燐が次第に集まり炎となっていく。それが三人を包み込み。
「積尸気蒼鬼焔！」
その技の名前を叫んだ。
「身体どころか魂まで燃やし尽くす冥界の焔さ。くたばれ！」
「お、おのれ！」
「まさか。冥界から出て来た我等が！」
「だから言っただろ。格が違うんだよ」
その蒼い焔に包まれ燃やされていく三人を見つつデスマスクは相変わらずの悠然さをもって告げる。
「御前等と俺じゃな。さて、後は」
デスマスクは最早勝負がついた三人を見てはいなかった。三人はもう焔に包まれその中に消えようとしていた。彼が見るのは別の相手だった。
「御前等だな」
「はい、その通りです」
「キャンサーのデスマスク」
リィナとユノだった。二人は毅然とした顔でデスマスクを見据えている。
「三人の仇は」
「貴方の命で償ってもらいます」
「いいねえ、第二ラウンドってやつか」
二人の敵意と憎悪を前にしても。デスマスクの余裕は変わらない。
「いいぜ。ただし一つ言っておくぜ」
「何をですか？」

「俺は女でも容赦はしねえ」
余裕の中に鋭さを宿らせてきた。
「そこんところはわかっておくんだな」
「こちらこそ戦場にいれば」
「男も女もありません」
二人もまたその毅然とした態度のままで。デスマスクに対して言葉を返したのだった。
「覚悟するのです、キャンサー」
「今こそ貴方を」
「まあ仇討ちってやつは嫌いじゃないさ」
燃え尽き消えてしまった三人に代わって前に出て来た二人を見て呟く。
「ただしな」
そのうえで一言付け加えるのだった。
「格実にそれができればの話だがな」
「ならば果たしてみせましょう」
「今ここで貴方を討ち」
二人は流石に挑発には乗らない。慎重に前に出て来ただけである。
「三人の仇を」
「無念を晴らしましょう」
「無念をかよ」
「また一つ言っておくことがあります」
リィナはここでまたデスマスクに対して言うのであった。
「我等狂闘士の掟を」
「掟！？」
「我等はアーレス様に絶対の忠誠を誓う者」
「それこそが狂闘士」
ユノも言葉を発してきた。
「そしてそれにより」
「随分とごちゃごちゃ言うな。狂闘士ってのはかなり血の気が多い

っていうか血に餓えた奴等ばかりだって思っていたんだがな」
　これはデスマスクの挑発であった。彼はここでもまた相手を怒らせる言葉をあえて発することによって向こうの冷静さを殺ごうとしていたのであった。しかし二人はそれに乗らない。その辺りは流石であると言うべきか。
「違うようだな」
「話を聞かれることです」
　やはりリィナの言葉の調子は変わらなかった。
「そして」
「そして？」
「そこにある絆もまた絶対のもの」
　言いながらデスマスクを見据えていた。表情こそは変わらないがそこにある目の光ははっきりとわかるものがあった。それは怒りという感情であった。

第九話　知っていた罠その九

「我等狂闘士の絆は絶対のもの」
「それを断ち切る者がいたならば」
ユノの目にもまたリィナと同じものがあった。
「何処までも追い討ち倒す」
「例え誰であろうとも」
「で、俺をぶっ殺すってわけかよ」
デスマスクはここまで聞いても態度を変えないのであった。やはり軽口である。
「てっとり早く言えばそうなんだろ？」
「貴方という人は何処までも」
「ならばその軽口こそを」
「待ちなさい、ユノ」
激昂しかけたユノだったがここではリィナによって止められた。
「リィナ」
「怒ればそれだけキャンサーの思う壺です」
「そうでした」
すぐに冷静さを取り戻したユノであった。言葉にもそれが出ていた。
「そうなればそれこそ」
「まあどっちでも同じなんだがな」
デスマスクは己の耳穴をほじる仕草を見せながら相変わらずの調子であった。
「戦うんなら俺は女でも容赦しねえぜ」
「私達を女と思わないことです」
女と言われようが二人には動揺はなかった。むしろそこにはこれまでよりも強いはっきりとした気迫があった。それをデスマスクに対して向けているのである。

「狂闘士は男でも女でも変わりはありません」
「それもまた」
「まあそれはいいんだがな」
今度のデスマスクの目は醒めたものだった。今回もやはりあえてそうしているような素振りであった。まるで全てを芝居だとわかっているかのように。
「じゃあはじめるんだな」
「来なさい」
「あらためて三人の仇を」
二人はその赤い小宇宙を放ちつつデスマスクに対して向けていた。デスマスクの次の相手は他ならぬこの二人であるのはもう明白であった。
「取らせて頂きましょう」
「アーレス様の戦士としての誇りにかけて」
「誇りねえ」
デスマスクもまたゆっくりと構えてはいた。
「俺もちょっとはあるんだがな」
「戯言を」
リィナは今のデスマスクの言葉は即座に否定したのだった。
「おいおい、即答かよ」
「貴方の様な不真面目な人物がどうして誇りなぞと」
「そもそもです」
ユノも続く。
「黄金聖闘士とは思えないその軽さ」
「貴方の様な者が黄金聖闘士とはアテナの聖闘士も落ちたもの」
今度は聖闘士への侮辱になっていた。
「それはこちらとしてはよいことでしょうが」
「アテナも大したことはありませんね」
「おいおい、また随分と言ってくれるじゃねえか」
デスマスクはすぐに二人に対して言い返してきた。

「アテナの聖闘士が落ちたものだってか」
「違いますか？」
「そしてアテナも大したことはないってか」
口の端を歪めて二人に言葉を返していた。
「そりゃ全然違うな。零点の返答だぜ」
「違うと」
「ああ、そうだ」
また言うデスマスクであった。
「何ならだ」
「何なら？」
「それについてもはっきりと答えてやるぜ。今からな」
あの青い燐が再び沸き起こってきた。彼の周りに。
「よおくな」
「一度見た技なぞ今更」
「やはり貴方は所詮」
「だからよ」
今度のデスマスクの言葉はこれまでとは少し違っていた。
「話は聞けよ」
「話を」
「そうだよ。学校で言われなかったか？」
二人の女を見ての言葉が続く。
「人の話は聞きましょうってな。特に格上の人の話はな」
「まだその様なことを」
「だからだよ。答えてやるって言ってるんだよ」
その青い炎を漂わせながら悠然と述べ続けていく。
「俺の答えってやつをよ」
今度は二人の美女との戦いがはじまろうとしていた。だがそれを前にしてもデスマスクの余裕は変わりはしない。それどころか今度の戦いもまた楽しむふうであった。余裕に満ちた態度で。

第九話　完

2008・8・5

第十話　サガの力その一

第十話　サガの力

「デッドエンドフライ！」
ディオの蹴りがインプ達を撃っていた。両足で後ろに蹴り飛ばしている。その動きは到底インプ達の手に負えるものではなかった。
「くっ、こいつ！」
「何て強さだ！」
「おいおい、俺だって聖闘士なんだぜ」
その強さに唖然とし己の周りを取り巻くインプ達に対して告げた言葉だ。
「御前等が幾らいてもどうってことはねえんだよ」
「どうということはないだと！？」
「我等を前にして」
「聖闘士の動きは最低で音速だ」
青銅聖闘士である。
「だが白銀はそれの二倍から五倍」
「五倍だと！？」
「それでは」
「そうさ。それだけ強さに差があるってことさ」
それが青銅と白銀の差であるのだ。同じ聖闘士とはいってもその戦力の差はかなりのものなのだ。まさに天と地程の差があるのだ。
「わかったか？これが」
「くっ、だがそれでもだ！」
「我等もまたアーレス様の戦士！」
インプ達も引かない。ディオを囲んで言葉を続ける。
「そうおいそれとはやられんぞ！」
「覚悟しろムスカ！」
「どれだけ覚悟しようと勝手だがな」

彼等の言葉を聞いてもディオの余裕は変わらなかった。
「御前等俺にやられるだけだぜ。それはわかってるのかよ」
「おいディオ」
だがここでもう一人の声がしたのだった。
「あっ！？」
「御前一人でここの連中全員やるつもりか？」
「だったどうなんだ？」
いささかぞんざいなディオの返答だった。
「御前には関係ねえだろうがよ」
「あるに決まってるだろ」
言葉は抗議めいたものだったがその色は笑っているものだった。
「俺だっているんだぜ。ちょっとは回せよ」
「回せか」
「そうさ。このクロウのジャミアン様にな」
ディオの後ろからジャミアンが笑いながら出て来た。その全身には何かしら不気味な小宇宙を帯びさせていた。まるで冥府にいるような。
「いいな」
「早い者勝ちだ」
ジャミアンに対するディオの返事はこうだった。
「それでいいな」
「ほう、じゃあ俺が勝つな」
ジャミアンは今のディオの言葉に笑いながら述べた。既に彼の横にまで来ている。
「何しろ俺は強いからなあ」
「髪の毛がないぶんな」
「うるせえっ」
髪の毛のことを言われるとどうやら立腹するようだった。少し怒った声になってディオに反論するのがそれの何よりの証であった。
「俺のこれは禿じゃねえって何度も言ってるだろうが」

「じゃあ何なんだ？」
「ヘアスタイルだ」
本人の言葉である。
「グラード財団の辰巳さんと同じなんだよ」
「あの人剃ってるのかよ」
「ああ、何でもそうらしいな」
二人は敵と対峙しながら辰巳という男について話をはじめたのだった。
「だからあれは禿じゃないらしいな」
「そうは見えないんだがな」
ディオはそう見ているのだった。
「あの輝きはな」
「それ言ったら怒るから気をつけろよ」
ジャミアンは同僚に対して忠告をした。
「それもかなりな」
「御前と同じだな」
「十代で禿げるか、馬鹿」
流石に怒ってきたジャミアンだった。
「あの人だってそこまで老けてねえだろうが」
「あれっ、もういいおっさんだろ」
ディオはこうジャミアンに反論した。
「あれはもう」
「ところがまだ若いらしいな」
「そうなのかよ」
「あそこの総帥だってな」
話はグラード財団全体に及びだした。
「元気だしな」
「元気っていうか異常じゃねえのか、ありゃよ」
見ればジャミアンの顔が苦笑いになっていた。

第十話　サガの力その二

「子供何人いるんだ？」
「さてな」
ディオもジャミアンの問いに首を捻るだけである。
「ありゃ百人いくだろ」
「百人かよ」
「やっぱすげえよなあ」
「すげえなんてもんじゃねえぞ」
ジャミアンの突っ込みももっともであった。
「俺なんかとても」
「俺もだ」
流石にディオも不可能なことであった。
「まあ百人のこの連中を倒すのはできるけれどな」
「ああ。おい御前等！」
ジャミアンはあらためてインプ達に声をかける。
「容赦はしねえからな。覚悟しやがれ！」
「くっ、こいつ等！」
「ならば！」
「俺の烏受けてみやがれ！」
「俺の蹴りもな！」
二人の白銀聖闘士達はここぞとばかりに暴れていた。そしてそれは四人の青銅聖闘士達も同じでありそれぞれ必殺技を放ってインプ達を倒していた。
「ヘブンズアローッ！」
アンタスが右手から凄まじい拳を繰り出しインプ達を倒していた。
「青銅聖闘士だからといって甘く見るな！」
技を放った後で周りにいるインプ達に叫ぶ。
「このアンタス、貴様等がどれだけいようが敗れはしない！」

「おい、御前だけ格好つけるな」
ここでブラウが出て来た、
「俺もいるんだぞ」
「ブラウ」
「確かにこのアンタスは強い」
前に出つつ後ろに位置するようになったアンタスを右の親指で指し示してみせる。
「だがな。このブラウも強いってことを教えてやるぜ」
「ふん、言ってくれるな」
アンタスはそんなブラウに対して悪態をつく。
「貴様はそれだけ強いっていうのか」
「俺が強いかどうかは」
ブラウもまた不敵に笑ってアンタスに言葉を返す。
「御前が一番知っている筈だがな」
「忘れたな、そんなことは」
ここでは彼もまた少し不敵に笑ってブラウに言葉を返した。
「貴様の技を見れば思い出すだろうがな」
「わかった。それではだ」
ブラウはその言葉を受けて身構えだした。
「このブラウの技、今こそ見せよう」
「ふざけるな聖闘士共が！」
「調子に乗るのもいい加減にしろ！」
しかしインプ達は彼の構えを見ても侮り続けていた。
「聖闘士が我等狂闘士の相手になるなぞ」
「有り得んのだ！」
「戯言だな」
ブラウは彼等の言葉を一笑に伏した。
「とりわけ雑兵でしかない貴様等が言ってもな」
「雑兵雑兵と馬鹿にするがな」
「我等はアーレス様の兵士」

戦皇アーレスの忠実な兵士だというのだ。それこそが彼等の誇りの拠り所なのだ。そういう意味ではアテナに仕えることを誇りの拠り所とする聖闘士と同じである。

「戦場で敵に背を向けることはない」

「必ず勝つのだ！」

「敵に背を向けぬのは見事と言っておこう」

ブラウはそれは認めた。

「だが」

「だが？」

「それだけで勝てはしない」

構えるその身体に青い少宇宙が帯びられていく。

「勝利を掴むものは実力」

そしてこう言った。

「今それを見せよう。喰らえ！」

「むうっ！」

「このブラウの技！ブルーサンダークラッシュ！」

技の名前を叫ぶと共に両腕を交差させそこから激しい青い雷を放つ。雷は四方八方に飛び散りそれでインプ達を襲った。忽ちのうちに多くのインプ達を倒してしまったのである。

第十話　サガの力その三

「ば、馬鹿な・・・・・・」
「強い・・・・・・」
「強いと言った筈だ」
雷に打たれ黒焦げとなり地面に倒れ伏す彼等に対してかけた言葉だ。
「先にな」
「ああ、思い出したぜ」
ここで後ろからアンタスの声がした。
「そうだったな、ブルーサンダークラッシュだ」
「やっと思い出したか」
「相変わらずと言って欲しいのか？」
からかうように笑いながらブラウに問う。
「ここで。どうなんだ？」
「そう言いたいのなら言うといい」
ブラウもまた少しシニカルに笑って彼に言葉を返した。
「御前がそうしたいのならな」
「じゃあそうさせてもらう」
こう言葉を返すアンタスであった。
「相変わらずだな」
「そうだ。いや、違うな」
「違う？」
「俺は修行時代とはまた違うぜ」
不敵な笑みになってアンタスに言葉を返してみせたのだ。
「あの時よりも。強くなってると思うんだがな」
「少なくともあの時よりはな」
アンタスはまた笑って彼に言葉を返した。
「強くなっているだろうな」

「御前よりもな」
「おいおい、それはまた大きく出たな」
そうは言っても悪い気はしていないアンタスであった。
「俺よりもな」
「違うっていうのか？」
「当たり前だろ。じゃあ見せようか？」
「是非見てみないな」
さりげなくアンタスを煽ってみせる。
「それも是非な」
「じゃあ見せてやるさ」
その言葉に乗ってまた構えに入る。
「俺の本当の実力ってやつをな」
「楽しみにしているぜ」
「ふん、こいつ等」
「いきがっていられるのも今のうちだ」
インプ達はそんな彼等を取り囲んでまた言うだった。
「所詮数が違う」
「二人ではな」
「二人か」
「それはどうかな」
しかしここでまた声がしたのであった。
「二人だけとは限らないぞ」
「むしろだ」
その声はさらに続けられていく。
「俺達もいる」
「それを忘れていないか」
「何っ、まさか」
「くっ、迂闊だったか」
インプ達はようやく自分達のミスを悟った。そうだったのだ。ここには聖闘士達がまだいたのだ。その彼等とは。

「旗魚星座のゾルダ」
「八分儀星座のレッシュ」
それぞれ名乗りつつインプ達の前に姿を現わしたのであった。
「そこにいる馬鹿共の同僚だ」
「知らなかったわけではあるまい」
「だが貴様等は」
「我が同志達に取り囲まれていた筈。それがどうして」
「ふん、あの程度の数なぞ」
ゾルダがまずインプ達の問いに対して冷笑で返した。
「俺達にとっては大したことではない」
「朝飯前というやつだ」
「何っ、朝飯前だと!?」
「我等に対して何という侮辱」
今の二人の言葉にさらに激昂するインプ達であった。赤い鎧がさらに禍々しく輝いてみるのがことさらに不気味さを映し出していた。
「貴様等、こうなっては」
「最早容赦はせんぞ」
「おいおい、最早かよ」
アンタスが今のインプ達の言葉に笑って突っ込みを入れる。

第十話　サガの力その四

「そりゃちょっと違うんじゃないのかい？」
「何っ！？」
「最初からだと」
その笑いのまま彼等に告げた。
「違うか？最初から容赦するつもりはないだろ」
「我等聖闘士と御前達狂闘士は相容れぬもの」
レッシュも言う。
「それは最早知らぬ者はない」
「我等がアテナとアーレス」
ブラウも続く。
「神話の時代よりはじまる因縁だったな」
「その因縁が言っている」
最後に語るのはゾルダだった。
「俺達と貴様等は最後まで戦うしかないとな」
「だからだよ。容赦はねえだろ容赦は」
「貴様等とて降伏するつもりはあるまい」
「無論だ」
「戯言を」
憎しみに満ちた目と声で聖闘士達に応える。その手の槍を輝かせながら。三叉の槍もまた赤く禍々しい光を放っているのが見える。
「我等は誇り高きアーレス様の下僕」
「もとより降伏なぞない」
「戦えばその時は」
口々に言う。
「血に染まり何処までも戦い」
「勝利の美酒を味わうか死ぬまで」
「それがアーレス様の戦いだ」

「貴様等とは違うのだ」
「よし、ならば話が早い」
「ゾルダ」
今度はゾルダが出て来た。仲間達が彼の名を呼ぶ。
「今度は俺が相手をしてやろう」
「私もだ」
レッシュもまた出て来た。二人であった。
「先にかなり倒させてもらったが」
「どうやら貴様等はまだまだ戦いたいようだからな」
「おのれ、我等を愚弄するというのか」
「その態度」
態度からそう受け取ったのであった。
「許せぬ」
「やはり貴様等は」
「話はもう終わりだ」
「行かせてもらう」
二人の全身に小宇宙が宿った。
「さて、と」
まずはゾルダの技であった。
「俺の技もかなり凄いぜ」
「何っ!?」
「俺の名はゾルダだ」
己の名を告げてみせた。
「この名前の意味がわかるよな」
「ドイツ語だったな、確か」
インプの一人が答えた。
「違うか?」
「そうさ、これはドイツ語なんだよ」
また不敵に笑って答える。
「ドイツ語で兵士って意味だ」

「兵士か」
「兵隊の仕事は戦うことだ」
最早自明の理である。
「だからよ。それで」
「むっ！？」
「この小宇宙は」
「受けな、俺の技！」
小宇宙が爆発したその時であった。その全身が輝く。
「バーニング＝ブラスト！」
「なっ、これは！」
「小宇宙が！」
「俺の技はそのまま小宇宙を放つ！」
小宇宙を無数の小さな矢にして四方八方に放ちながら叫ぶ。
「つまりだ。爆発ってわけだ！」
「う、うわあああっ！」
「これは！」
「逃げられはしない！」
爆発の中で叫ぶゾルダであった。

第十話　サガの力その五

「貴様等程度ではな！」
その言葉通り凄まじい光の矢でインプ達を撃つ。それに撃たれ貫かれたインプ達が無残に倒れ亡骸を晒す。まさに爆発であった。
それが終わってからゾルダは。レッシュに顔を向けて声をかけるのだった。
「今度は貴様だな」
「そうだな」
その言葉に静かに頷くレッシュであった。
「それでは。行かせてもらう」
「いつもながら冷静なものだな」
今のゾルダの言葉は皮肉ではなかった。落ち着いた目がそれを何よりも物語っていた。
「貴様は」
「私は私だ」
レッシュもまた冷静に彼に言葉を返すのだった。
「いつも通りだ。だからこそ」
「この連中を倒すだけか」
「そう、いつも通りだ」
目を閉じた表情になっていた。
「変わることはない」
「ではいつも通りの貴様の闘いを見せてもらう」
ゾルダはそう言いつつその身体をそっと退けるのだった。
「果たしてそれが本当なのかどうかな」
「私を疑うというのか？」
「いや」
それは否定するゾルダであった。
「そのつもりはない。ただ」

「ただ？」
「見ておきたいのだ。貴様の力をな」
「そういうことか」
「そうだ、今の貴様の力」
こう言い換えるゾルダであった。
「是非見せてもらおう」
「では遠慮なく見せてやろう、このレッシュの技」
今の言葉と共にその身体に小宇宙が宿る。
「いつも通りな」
「野郎、俺達のことは眼中にねえっていうのかよ」
「ふざけてるんじゃねえぞ」
「無論ふざけてはいない」
それはすぐに否定するレッシュであった。やはり冷静に。
「私は本気だ。それに」
「それに！？」
「何だってんだ！？」
「私の辞書に手を抜くという言葉もまたないとだけ言っておこう」
言いながらその両手をゆらりと動かしていく。まるでそうしながら何かしらの力を蓄えていくように。そんな感じの動きであった。
「今ここでな」
「それは俺達だって同じことだ！」
「これ以上聖闘士にやられてたまるかよ！」
またしても叫びながら槍を手に襲い掛かるのであった。
「くたばれ！」
「この槍で串刺しにしてやる！」
「槍か」
レッシュはその言葉に反応して目をピクリと動かしたのだった。
「今槍と言ったな」
「それがどうした！」
「まさか槍も知らねえのか！」

「槍なら私も持っている」
彼は相変わらず落ち着いた声で答えるのだった。
「ここにな。受けよ、私の槍」
「むっ！？」
「うっ！？」
「グローランス！」
技の名を叫びながら右拳を思いきり突き出す。
「この突きで滅びよ！」
「なっ、この拳は！？」
「ただもんじゃねえ！！」
その突きを受けたインプ達が吹き飛ぶ。その槍は明らかにインプ達のそれとは比較にならない速さと威力を持っていたのであった。
「どうだ、私の槍は」
槍を繰り出した後で言うレッシュであった。
「貴様等の槍とは全く違う筈だ」
「ううう・・・・・・」
「私の槍は一突きで勝利を決定する」
こうまで断言してみせるのだった。
「貴様等のそれとは根本から違うのだ」
「確かにな」
ここでゾルダがまた出て来てレッシュに告げた。
「それはその通りだ」
「どうだ、ゾルダ」
レッシュはそのゾルダに対して問うた。
「今の私の技は。貴様のそれと比較しても遜色はあるまい」
「さて、それはどうかな」
しかしゾルダは今のレッシュの言葉には懐疑的に笑ってみせるのであった。

第十話　サガの力その六

「どうにもな。さっきのはな」
「何が言いたい」
そのゾルダに対して問い返す。
「貴様は」
「もう一度見ないとわからないということだ」
今度の笑みは何かを期待するような笑みであった。
「貴様のその槍をな」
「そうか。ではまた放とう」
「俺もだ」
何とここでまた出て来たゾルダであった。
「貴様だけにやらせるつもりはない。いいな」
「勝手にしろ」
そしてそれを拒むことはないレッシュであった。しかも彼だけに言うのではなかった。
「御前達もそうなのか？」
「御呼びとあらばな」
「行かせてもらう」
アンタスとブラウであった。当然ながら彼等もここにいたのである。
「よし、では四人でだ」
「行くぞ」
「誰が最も多く倒せるか」
「勝負！」
「ふざけるんじゃねえ！」
「そうだそうだ！」
インプ達も負けてはいられなかった。彼等にも意地がある。だからこそまたしても一斉に襲い掛かるのであった。今度は四人に対し

て。
聖闘士達とインプ達の戦いの中で。デスマスクは二人の女狂闘士達と対峙しサガは。四人と対峙し続けていたのであった。
「御前達が狂闘士だな」
「もうそれはわかっていると思うがな」
「確認したまでだ」
今度はこう答えたのであった。
「貴様等のことをな」
「言っておく」
ロジャーがそのサガに対して告げる。
「我等は魔神の力を持っている。例え黄金聖闘士だとしてもだ」
「負けはしないというのだな」
「如何にも」
「我等を愚弄しないことです」
エリシャも前に出て来て言った。
「我が狂闘士、決して貴方達に遅れは取りません」
「その通り。ジェミニよ」
ライネルはサガを星座で呼んだ。
「貴様が我等が倒す。この手でな」
「まずは俺だ」
最初に名乗りをあげたのはシロウであった。
「この俺の手で。ジェミニ、御前を倒す！」
「ダンタリアンだったな」
サガは己の前に出て来たシロウを見てまずはその司る魔神の名を口にした。
「確か。百の顔を持つ魔神だったな」
「俺のことを知っているんだな」
「如何にも。先の戦皇との聖戦でも暴れ回ったと聞いている」
「！？この男」
エリシャは今のサガの言葉からあることを察し目の色を変えたの

だった。
「我等のことを知っている!?シロウ」
「何だよ、エリシャ」
「気をつけなさい」
そしてこうシロウに言うのであった。
「この男、既に私達のことを」
「知ってるから気をつけろっていうんだな」
「そうです。どうやら事前に私達のことを研究しています」
サガを警戒する目で見つつ述べたのだった。
「ですからここは」
「知っていたから何だっていうんだよ」
しかしシロウはエリシャの今の言葉を軽く笑い飛ばした。その様子は実に少年らしいものではあった。無鉄砲な趣があるのもまた事実であるが。
「それでこのシロウの技を止められるかってんだ」
「いや、待て」
今度はロジャーが出て来た。
「シロウ、やはりここはエリシャの言うことを聞け」
「ロジャー、あんたまで」
「そうだ、やはり気になる」
彼もまた言うのだった。その目はサガを見据えている。
「この男は。尋常ではない」
「じゃあどうするんだ?」
「ライネル」
「ああ」
ロジャーはここでライネルの名を呼んだ。ライネルはすぐにそれに応えて来た。
「行くぞ」
「うむ」
「何だよ、俺をさしおいて二人で行くのかよ」

「いや、違う」
むくれるシロウの言葉はすぐに否定するのだった。

第十話　サガの力その七

「御前もだ。戦いに参加しろ」
「三人がかりってわけかい？」
「それもまた違います」
「エリシャ」
「シロウ」
見ればエリシャも前に出て来ていた。そのうえでシロウの名を呼ぶのだった。
「四人です」
「ここにいる全員かよ」
「黄金聖闘士の中でもこの男は違う」
ロジャーは今はサガの小宇宙を見ていた。その恐ろしいまでの質と量を誇る黄金色の小宇宙をだ。
「先程のキャンサーもかなりのものだったがこの男もな」
「確かにそれは凄いさ」
伊達に魔神ではない。ロジャーもそれはわかってはいた。
「けれど。それでも俺がいれば」
「駄目だ」
ロジャーははやるシロウをまた制止したのであった。
「シロウ、下手をすれば死ぬぞ」
「死ぬ！？俺が」
「そうだ」
険しい顔でそのシロウに答える。
「下手をすればだ」
「馬鹿言えよ、ダンタリアンだぜ」
ここで己が司る魔神の名を出すシロウであった。
「先の戦いでも聖闘士の雑魚共を散々倒した俺が。やられるかよ」
「何度も言う。侮るな」

それでもロジャーの言葉は変わらない。
「わかったな」
「ちぇっ、じゃあ四人がかりかよ」
「そうだ」
「ライネル」
今度はエリシャがライネルの名を呼んだ。
「貴方も。それでいいですね」
「俺は構わない」
ライネルは至って冷静にエリシャに言葉を返す。その態度はまさにシロウのそれとは正反対であった。
「全くな」
「そうですか。それでは」
「シロウ」
ロジャーがシロウに声をかける。
「何だよ」
「私と御前は正面から攻める」
こう彼に告げるのであった。
「そしてエリシャとライネルは側面からだ」
「わかりました」
「それではな」
二人はロジャーの言葉を受けそれぞれ左右に散った。サガから見てエリシャが右手、ライネルが左手に位置している。そして正面にはロジャーとシロウであったのだ。
「これでいい」
ロジャーは布陣を終えてから満足そうに答えた。
「これでな。ではジェミニよ」
「来るというのだな」
「そうだ」
サガに対して答えるのであった。
「四人だが。不服か」

「構わん」
サガは至ってクールに返事をした。
「何人いようがな。私は闘うまでだ」
「流石と言っておくか」
それを利いたロジャーの目が光る。
「黄金聖闘士。覚悟はできているか」
「覚悟、違うな」
サガは今のロジャーの言葉は否定したのだった。
「私は相手が誰だろうと何人だろうと戦う。それだけだ」
「そうか。それではな」
ロジャーはこれ以上は聞こうとはしなかった。彼の判断でもう話をしても得られるものはないと判断したのである。だからであった。
「戦わせてもらう。いいな」
「参ります」
エリシャも言う。シロウ達ももう身構えている。
「ジェミニのサガ、今ここで」
「倒す」
「覚悟しろ」
ライネルとシロウもまた。赤く禍々しい光を放つ戦衣が輝く。その瞬きが辺りを覆ったかと思うと。一斉に宙に跳んだのであった。
「まずは俺だ！」
シロウが蹴りを繰り出してきた。
「インフィニティ＝フェイス！」
蹴りは一つではなかった。無数の蹴りから同じく無数の禍々しい顔が放たれそれがサガを襲う。これがダンタリアンの顔であったのだ。
続いてライネルが。攻撃を繰り出してきた。
「シャドークローーーーーッ！」
彼は爪であった。その爪から黒い影の衝撃波を出しサガに放っていた。

エリシャは空中で身構えそこから身体を拡げる。すると彼女の周りに無数の目が発生していてそこから黒い光を放つのだ。
「エビルアイ！」
「最後は私だ」
そしてロジャーもまた動いた。一旦着地しそのうえでサガに一直線に向かいそのうえで横薙ぎに必殺の一撃をサガに撃つのだった。
「ミッドナイトアクス！」
彼のは渾身の一撃だった。四人の攻撃はそれぞれサガに向かって放たれていた。しかしそれを受けてもサガは身動き一つできなかったのだ。
「やったな！」
シロウは着地してサガが死んだと確信していた。
「これでジェミニも終わりだ！」
「いえ、まだ油断はできません」
しかしその彼にエリシャが言うのであった。
「相手は黄金聖闘士です」
「何だよ、エリシャ」
彼にとってはエリシャの慎重は臆病にすら見えるのだった。
「黄金聖闘士ってばかり言ってな。幾ら何でも今の攻撃で」
「ですから。安心するにはまだ早いのです」
だがそれでもエリシャの言葉は変わらないのだった。

第十話　サガの力その八

「まだ。彼の完全な死を確かめるまでは」
「完全な死ってよ」
「シロウ、わかっている筈だ」
ロジャーも再びシロウに言ってきた。
「先の我々と彼等の戦いでも。黄金聖闘士がどうであったのかな」
「あの時かよ」
シロウはロジャーの言葉を聞き顔を顰めさせた。
「アテナを追い詰めたその時だったな」
「あの時もまた黄金聖闘士達がいた」
やはり彼等は聖域にとって最大の戦力であり切り札なのだ。言うならば聖域の象徴とも言っていい。そうした存在なのである。
「そして彼等がライブラの武器を手にしたその時に」
「くっ」
ここまで聞いたシロウの顔が歪む。
「忘れる筈がねえ。あの時の悔しさはな」
「そうだ。それで戦局が一変した」
この時アテナの軍勢はアーレスの軍勢に最後の一分と言ってもいいような状況にまで追い込まれていたのだ。敗北は目の前であり聖域の陥落も時間の問題と思われたのだ。しかしここでライブラの武器の使用が認められ戦局が一変してしまったのである。
「武器を持った十二人の黄金聖闘士達により我々は」
「俺もまた敗れた」
ライネルも言うのだった。
「あの時にな」
「俺達魔神全員がたった十二人に敗れちまった」
シロウはその時のことを忌々しげに語る。
「それだけでな。あいつ等が武器を持っただけで」

「その時を思い出すのだ」
ロジャーも言う。
「ならば。迂闊なことをするな。いいな」
「わかったさ。じゃあ」
「むっ！？」
ここでエリシャの顔色が変わった。そのうえで今までサガがいた場所を見るのだった。
「やはり」
「生きているのだな」
「はい」
ロジャーに対してもその顔で答えた。
「この小宇宙は。紛れもなく」
「俺の爪を受けても生きているか」
ライネルは表情を変えずに述べるのだった。
「やはり黄金聖闘士だけはあるか」
「先程と同じ陣を組め」
ロジャーはこう指示を出した。
「戦闘態勢でだ。いいな」
「ああ、わかったぜ」
「わかりました」
シロウとエリシャがそれに頷く。ライネルは既に動いている。サガがいた場所を囲んでまた身構える。するとそこに黄金色の小宇宙が沸き起こりそこから彼が出て来たのであった。
「やはり生きていましたね」
エリシャが彼に対して言う。
「ジェミニのサガ。あの程度では」
「見事だと言っておこう」
そのサガの声も聞こえてきた。だがまだ小宇宙が沸き起こっているだけである。その黄金色の小宇宙が。
「このサガに拳を放てることをな」

「ふざけるんじゃねえ」
シロウはその彼に剥き出しの敵意を見せていた。
「手前をやるのに。何でそこまで言われなきゃならねえんだよ」
「だから待てシロウ」
無意識のうちに前に出ようとするシロウを止めたのは今度はライネルだった。
「一人で出るには危険な相手のようだ」
「何っ！？」
「見ろ」
サガを見るように言った。
「今のジェミニを」
「あいつをかよ」
「そうだ」
わかっていたのであった。彼が今どうなっているのか。その小宇宙を感じて。
そして出て来た。全く無傷のサガが出て来たのを。サガは毅然とした顔で立っていたのだった。
「生きていたか、やはり」
「死ぬと思っていたわけではあるまい」
「確かにな」
ロジャーが彼に対して答えた。
「この程度で死ぬとはな。仮にも黄金聖闘士で最強とも言われる貴殿がな」
「最強かどうかはわからないが現に私は今ここにいる」
これがサガの返答だった。
「ただそれだけだ」
「そうか。では再び我等の攻撃を」
「一つ言っておく」
「むっ！？」
「貴様等の技は見せてもらった」

まずはこう告げるサガであった。
「今度は。私が技を見せる番だ」
「!?こいつ」
「来るな」
シロウとライネルはそれぞれサガの小宇宙が高まるのを感じていた。これまでになく大きな小宇宙を。まるで銀河そのもののような。
「来る・・・・・この小宇宙は」
「いかん!」
エリシャもロジャーもまた言う。
「散れ!」
ロジャーが他の三人に告げた。
「来るぞ、ジェミニの攻撃が!」
「ちいっ!」
「受けてみよ、このサガの技」
サガが構えを取ってきていた。今まさにその技を放とうとしている。
「アナザーディメンション!」
今その技が放たれたのだった。遂に。四人を忽ち彼等が今まで見たこともない世界が包み込んだのだった。

第十話　完

２００８・８・３１

第十一話　異空間その一

第十一話　異空間

今サガの技が放たれた。それが放たれた瞬間ロジャー達四人を彼等が今まで見たことのないような凄まじい世界が包み込んでいたのであった。

「な、何ィ！？」

「こ、これは！」

「これこそがこのジェミニのサガの技の一つ」

サガが四人の狂闘士達に語る。

「アナザーディメンションだ」

「アナザーディメンションだと」

「そうだ。この技は相手を異次元空間に送る技」

「何っ！？では我々は」

「如何にも」

やはり答えは同じであった。

「今異次元空間にいる。そして」

「そして」

「ここから出たいのならばこのサガを倒すことだ」

見れば四人とサガは宙に浮かんでいる。周りには隕石や太陽、そして異形の物質が見える。少なくともここは正常な世界ではなかった。

「さもなければ貴様等は」

「くっ、やってやろうじゃねえか」

「うむ」

ライネルはシロウの言葉に頷いた。

「じゃあよジェミニ！」

「貴様を倒して我等は」

「待って下さい」

しかしここでまたエリシャが制止するのだった。
「エリシャ」
「迂闊な行動はいけません」
ここでもそれを止めるのであった。
「そうすればそれこそ彼の思う壺です」
「ちっ、じゃあよ」
それを聞いて舌打ちしながらも動きを止めるシロウだった。しかしそれでも彼は言う。
「こうして見てるしかないのかよ」
「そうではありませんが」
「けれどよ」
またエリシャに言い返してきた。
「このままだとどの道周りの隕石やらにやられてよ」
「同じ結果になる」
ライネルもそれを危惧していたのであった。
「それでもいいというのかエリシャ」
「だから。そうではありません」
サガと彼等を交互に見つつ述べるのであった。
「ですが。迂闊な行動は」
「そうだな。一人では動くな」
ロジャーもまた今までと同じように慎重論であった。
「どうやら。一人では到底勝てる相手ではないな」
「異次元空間まで引き寄せることができる小宇宙」
エリシャはこのことを注視しサガを警戒していたのだった。
「ジェミニのサガ。何という」
「それではだ」
またライネルが言ってきた。
「やはり四人でか」
「それしかないかと」
エリシャが出せる結論はこれしかなかった。苦い顔になっていた。

「ここは。やはり」
「じゃあよ、ロジャー」
シロウはロジャーに対して問うた。
「やっぱりさっきと同じかよ」
「いや、そうはいかん」
ロジャーもまた異空間を漂いつつシロウに答える。
「それでジェミニは倒れなかった。ならば」
「どうするんだよ」
「集中攻撃だ」
意を決した顔で告げた言葉だった。
「一点をそれぞれの技で集中して攻撃する。いいな」
「集中攻撃だったらさっきと同じじゃねえか」
「いや、違う」
今のシロウの言葉はすぐに否定した。
「それは違う。先程のそれは囲んでの攻撃だったな」
「ああ」
「だが今度は。敵の一点に集中させたうえで倒す」
「なら。正面からだな」
「私がまず仕掛ける」
真剣そのものの顔でサガを見据えつつ言う。

第十一話　異空間その二

「そして。それからだ」
「いえ、ロジャー」
しかしここでエリシャが話に入ってきた。やはり彼女もサガを見据えている。
「それはどうかと」
「何故だ」
「攻撃も合わせるべきです」
彼女が言うのはこれであった。
「そうして真の意味で一斉攻撃を仕掛けるべきかと」
「おい、そこまでやるのかよ」
「相手を侮ってはなりません」
真剣な顔でサガを見据えたままシロウに答える。
「あのジェミニのサガは。特に」
「エリシャの言う通りだ」
ロジャーは彼女の言葉に全面的に賛成であった。
「ここは何としてもあの男を倒しこの空間から帰らなければならん」
「そうだな」
彼の言葉に賛同し頷いたのはライネルだった。
「何があろうともな。もう一人相手がいるしな」
「あいつかよ」
それが誰なのかシロウにはすぐにわかった。
「あの蟹野郎かよ」
「キャンサーのデスマスク」
エリシャは彼の名も口にした。
「彼には五人の同志が立ち向かっています。ですが」
「こちらの数が多ければ多いにこしたことはないな」
「その通りです。だからこそ」

ライネルにも言葉を返すのだった。
「ここは。何としても彼を倒して」
「かかるぞ」
四人が一斉に並んだ。サガの正面に集まっている。そのうえでそれぞれ構えを取り。今一斉にその技を繰り出そうとする。しかしこの時サガが言った。
「確かに見事だ」
「むっ！？」
四人はサガの言葉に思わず声をあげた。だが技を繰り出そうというその動きは止めてはいなかった。この辺りは実に的確であった。
「一斉攻撃を浴びせるというのはな」
「これなら手前だってどうしもうもねえ筈だ」
シロウがそのサガを見据えて言う。
「黄金聖闘士でもな」
「黄金聖闘士か」
シロウの今の言葉に反応するサガだった。
「黄金聖闘士と言ったな」
「それがどうしたってんだ！」
「一つ言っておこう」
「何ィ！？」
「いや、見せた方がいいか」
何故かここでは積極的に話そうとはしなかったサガであった。
「その方がわかり易いな」
「！？この男」
ライネルは今の彼の言葉に眉を顰めさせた。
「何が言いたい、一体」
「まさか何か策が」
エリシャも不穏なものを感じてはいた。
「あるというのですか？」
「よし、ならばだ」

ロジャーはここでまた決断を下した。
「ここで完全に決める。全ての小宇宙を注ぎ込んでもな」
「後はいいのだな」
ライネルはそのロジャーに冷静に問うた。
「この異次元から抜け出られなくとも」
「おそらくその心配は無用です」
しかしその彼にエリシャが告げる。
「このアナザーディメンションはおそらく」
「あの男を倒せばそれで技が解けるのだな」
「技はすべからくそうです」
こうも述べるエリシャであった。
「ですから。やはり」
「ならよ。ありったけの小宇宙をぶつけてやるぜ！」
シロウはもう戦闘態勢に入っていた。激しい闘志をみなぎらせている。

第十一話　異空間その三

「ジェミニ！覚悟しやがれ！」
「我等の最大の小宇宙で」
「貴方を倒します」
「受けよ！」
四人はそれぞれ叫びつつその技をサガに向かって一斉に繰り出す。
だがサガは微動だにしない。まるで完全に受け止めたいように。
その四つの技がサガを直撃した。しかしだった。サガは何のダメージも受けてはいなかった。そのままの顔で宙に立ち続けていた。
「何っ、そんな」
「馬鹿な、今の攻撃で」
エリシャとロジャーが無傷のサガを見て驚愕の顔になった。
「全く無傷とは」
「黄金聖闘士の力も聖衣の強度もわかっている。だが」
「まさかこの野郎」
シロウも今目の前で傷一つ受けていないサガの状況が信じられなかった。
「幻術でも使っているっていうのかよ」
「いや、待て」
だがその彼にライネルが告げる。
「あのジェミニは。本物だ」
「幻じゃねえっていうのかよ」
「如何にも」
その証拠の様にそのサガが言ってきた。
「その証拠に私は今ここにいる」
「くっ！」
「どういうことだよ、無傷なんてよ」
「今そのことを言おう」

サガの声は至って冷静なものであった。
「聖闘士に一度見た技は通用しない」
「何ィ！？」
「だからだ。貴様等の技は既に見切った」
目を閉じてその彼等に語るのだった。
「そしてだ」
「そして！？」
「今度は私が技を見せる番だ」
「何っ！？これは」
サガの黄金色の小宇宙が沸き起こるのを見てロジャーが声をあげる。
「この小宇宙、今まで感じたこともない」
「受けてみよ、このジェミニのサガ最大の技」
両手を己の頭の上でクロスさせた姿勢で言う。
「ギャラクシアンエクスプロージョン！」
「なっ、銀河が！」
「割れた！」
「このギャラクシアンエクスプロージョンは銀河ですら破壊し尽くす！」
サガのあまりにも巨大な小宇宙はそこにあったのだ。
「今それを受けて・・・・・・散れ！」
「な・・・・・何だよこれ」
シロウがその破壊されていく星達と迫り来る衝撃の前で呟いた。
「これだけの技、あの方々ですら」
これが彼の最期の言葉であった。そして他の三人の狂闘士達も。
ギャラクシアンエクスプロージョンで吹き飛びそのまま絶命したのであった。四人は森の中に倒れ伏していた。
「さて」
倒れ伏し動かなくなった四人を見つつサガは呟く。
「後はデスマスクだが。様子を見に行くとするか」

彼はすぐにまた戦場に向かった。この時デスマスクと二人の女狂闘士の闘いもまた頂点に達しようとしていた。
「おいおい、俺はここだぜ」
「わかっています」
デスマスクの言葉にユニが応える。彼女はリィノと共にデスマスクに攻撃を加えているがそれでも彼の動きの前にそれを全てかわされてしまっているのだ。
「貴方が調子に乗るのもこれまでです」
「その通りです」
リィノも言ってきた。
「私達二人の力、侮らないことです」
「何としても。同志達の仇を」
「ほお、また随分と仲間思いだな」
二人の言葉を聞いてもデスマスクの軽い調子は変わらない。
「御前等のことだから仲間の命なんてどうでもいいと考えているって思ってたぜ」
「戯言を」
攻撃を繰り出しながらユニが述べる。
「我等はアーレス様の下に集う同志達」
「その志は同じ」
「魔神共は皆アーレスに仕える戦士ってわけかよ」
「如何にも」
「その同志達の仇である貴方は。何としても」
相変わらず二人で果敢に攻撃を仕掛けるが全てデスマスクの前にかわされる。彼はその身のこなしと超能力である瞬間移動を使って攻撃をかわすのだった。今は二人の拳を瞬間移動でかわしてみせた。

第十一話　異空間その四

「くっ！？」
「またしても」
「実を言えばな」
彼等から少し離れた場所にデスマスクが姿を現わした。彼は二人の前にいる。
「俺達黄金聖闘士はどいつもこいつも個人主義者なんだよ」
「個人主義者ですか」
「そうさ。俺達が顔を合わせる時は非常時だけさ」
これは事実だった。今はアーレスとの聖戦だけあって特別なのだ。そうした意識は彼自身にもはっきりと存在しているのであった。
「だからだ。お互いのことには不介入さ」
「不介入ですか」
「意外と言って欲しいのですか？」
「いや、それは違うさ」
遊ぶように二人の言葉は否定してみせる。
「悪いがな」
「何が違うのか」
「意味がわかりませんね」
怪訝な顔になってデスマスクに問う。
「不介入、即ち個人主義」
「同志達の死には何も感じないと」
「残念だがそれもまた違うんだよ」
「むっ！？」
「また」
デスマスクは再び姿を消した。それを見て二人は周囲を探った。
「また姿を消したというのですか」
「小癪な」

「黄金聖闘士限定だが言っておくぜ」
姿を消したデスマスクの声は笑っていた。
「俺達はな」
「貴方達は」
「強いんだよ」
デスマスクの声は笑ったまま言葉を続けてくる。
「わかるか？強いんだよ」
「それがどうしたというのですか」
「貴方はまだ。そうして我々を愚弄するのですか」
「愚弄じゃねえよ」
言葉の調子は笑っているがそれでも否定するのだった。
「事実さ」
「事実だと」
「そうさ。俺達が出て来る時は聖域がとっておきの切り札を出す時だ」
「だから何だというのですか」
リィノは周囲を探りつつ剣呑な顔で問うた。彼女の焦りはもうかなりのものになっている。
「貴方がその黄金聖闘士であることはもう承知しています」
「何度も言わせる気ですか」
「そうやって怒ってなかりいると奇麗な顔が歪むぜ」
またしても軽口である。
「聞くんだよ。ちょっとしたことさ」
「聞けと」
「ではどういうことなのですか」
「俺達は強いんだよ」
言葉は複数形であった。
「だからだ。強いのさ」
「強ければどうだというのですか」
ユノもまた苛立ちを隠せなくなっていた。

「貴方が強いのは何度も言いますが既に」
「強いからな。やられるとは思っちゃいねえんだよ」
「また過信を」
「過信じゃねえんだよ、これがな」
姿を消したままのデスマスクの言葉はやや真剣味を増してきていた。
「俺達はお互いの強さがわかっている。それでだ」
「それで？」
「お互いを心配することがないのさ。絶対に大丈夫だってわかってるからな」
「倒されることがないと」
「その通り」
言葉の笑みが会心のものになっていた。
「同志が死ぬとかな。そんなのは有り得ねえことなんだよ」
「では貴方が最初に倒れるのです」
「その高慢な神の如き自信を失い」
「神様ねえ」
ふとデスマスクの言葉にシニカルな笑み以外のものが宿った。

第十一話　異空間その五

「悪いが俺はアテナの聖闘士なんだよ」
「何を今更」
「一応な。そしてだ」
言葉を続ける。今の言葉には何かを嫌悪するものが宿っていた。
「俺の一番嫌いなものはな」
「貴方の嗜好は聞いてはいませんが」
「まあ聞けって」
少しだけ言葉に笑みを戻してみせた。
「俺が嫌いなのは人を見下ろすような神様なんだよ」
「神とはそういうものの筈」
リィノの言葉は何を今更といった感じであった。
「神は人を統べるもの。だからこそ」
「それを否定するなどとは。貴方は何もわかっておられません」
「わかってるわかってねえってのはいいんだよ」
リィノの言葉だけでなくユニのそれも否定してみせた。
「そんなのはよ」
「いいとは」
「また戯言を」
「俺はな、嫌いなんだよ」
声にはっきりと嫌悪感を入れてきていた。
「そういう神様ってのがな。それも何よりもな」
「神が嫌いだと」
「またおかしなことを」
「神様だって色々いるだろうがよ。違うか？」
ここでもデスマスクと二人の美女の言葉は食い違っていた。
「こっちの神様と御前等の神様とじゃな」
「我等の神アーレス様こそ至高の神」

「それを否定するというのなら」
「少なくとも俺は嫌いだな」
デスマスクはここでも嫌悪感を見せる。
「人を見下すような神様はな。俺の神様じゃねえんだよ」
「ではどうするというのですか？」
「我等が神、アーレス様を」
「答えなんて決まってるだろうがよ」
今度は二人に対してかけた言葉であった。
「倒すんだよ。このデスマスクがな」
「我等への戯言だけでも許し難いというのに」
「アーレス様への暴言」
今の言葉で二人の忍耐が完全に切れてしまった。表情に凄みが宿る。
「最早許せません」
「キャンサーよ」
動きさえ止めた。そのうえでまたデスマスクに告げる。
「最早隠れていても無駄です」
「私達の最大の技で貴方を倒します」
「ほお、どんな技だい？」
デスマスクは二人の言葉を受けて姿を現わした。二人の上に浮かんで宙を漂っている。そのうえで二人を見下ろしていたのであった。
「見せてもらいたいものだぜ。女二人の技をよ」
「女といえど侮らないことです」
「我等は狂闘士」
このことをあえて強調しつつ構えを取る。構えを取りながらデスマスクが前にゆっくりと降りて来るのを見ていた。彼もまた見下ろしたままでいる気はないようであった。
「戦いの中の鮮血に美を求める者」
「今その技を」
「では私からです」

ユニが構えに入った。デスマスクを見据えつつその両手を悠然と動かしていく。
「一つ言っておくことがあります」
「んっ、何だ？」
「我が魔神フルーレティは戦いの魔神」
「魔神は全員そうじゃねえのか？」
「その中でも特に戦いを好む魔神です」
語るその全身に赤い小宇宙が宿っていく。それはまさに狂闘士、アーレスの戦士の小宇宙であった。デスマスクが今放っている黄金色のそれとは全く違っていた。
「血を好み殺戮を愛する」
「アーレスの戦い方そのものってわけかよ」
「倒した敵が最も多いのもまたフルーレティです」
こうもデスマスクに告げるのであった。
「そう、多くの聖戦においても」
「で、俺もまた倒すってわけかよ」
「その通りです。アーレス様を愚弄した罪」
目が赤く輝いた。既に両手を半ば開いて前に構えそこから技を放とうとしていた。

第十一話　異空間その六

「これで償ってもらいます。受けなさい！」
「むっ！？」
「このフルーレティのユノ最大の技」
叫びながら攻撃に入る。
「デスドラゴンクラッシュ！！」
技の名を叫びつつその両手から何条もの鋭い真空波を放った。それは一度ではなく何度も放つ。真空波は何度もデスマスクの身体を撃った。
「くっ、鎌ィ足かよ！」
「ただの鎌ィ足ではありません」
ユノは攻撃を放ちつつデスマスクに告げる。
「我が小宇宙も込めた鎌ィ足。威力はまるで違います」
「ちっ、確かにな」
「そして私も」
今度はリィナも攻撃に入るのだった。彼女は両手を己の胸の前で大きくクロスさせている。
「我が魔神シトリの力をここで」
「へえ、二人一度にかよ」
「そうです。これで貴方を」
今度は飛び上がる。そしてそこから交差させた両手を思い切り前に振りそのうえで無数の羽根の手裏剣をデスマスクに放つのであった。
「エビルエンジェルダスト！」
「今度は天使の羽根かよ！」
「さあこの羽根を受け死ぬのですキャンサー！」
技を放ったうえでデスマスクに対して告げる。
「これで・・・・・終わりです！」

「ちいいっ！！」
デスマスクは無数の真空波と羽根の中に消えようとしていた。しかしここでデスマスクの声が聞こえてきたのであった。
「丁度いい感じだぜ」
「！？まだ生きているというのですか」
「我等の攻撃を受けてもまだ」
「生憎だがマントも破れちゃいねえぜ」
あの余裕に満ちた言葉であった。それと共にまたあの青い燐が出て来ていた。
「確かに凄い攻撃だがそれだけで俺は倒せはしねえんだよ」
「生きているだけでも驚きだというのに」
「まだ。その様な減らず口を」
「減らず口でもねえんだよ」
その燐がデスマスクのいる場所に集まっていく。それで鎌ィ足も羽根も燃やしていく。
「！？またあの技を」
「まさか」
「安心しな」
無数の青い炎を回りに浮かび上がらせつつ悠然と笑ってみせる。笑みと共に黄金色の小宇宙がさらに沸き起こってきていた。
「もうあれは出さねえからよ」
こう述べるのであった。
「積尸気鬼蒼焔はな」
「青い炎を出さないと」
「そうさ。俺はこう見えても飽きっぽくてな」
悠然と笑いつつ述べた言葉であった。
「同じ技は続けて出さねえのさ」
「では一体」
「まさか積尸気冥界波を」
「それもねえぜ」

積尸気冥界波もまた使わないというのであった。
「俺の技は結構色々あってな。そう」
「むっ！？」
ここでデスマスクは拳を思い切り出してきた。右の拳を前に撃ったのだ。
「喰らいな、このデスマスクの技の一つ！」
「これは・・・・・・」
「何を」
「積尸気魂葬破！！」
技の名前を叫ぶと同時に。辺りに激しい爆発が起こった。ユニとリィナは忽ちのうちにその爆発の中に飲み込まれてしまった。
「なっ、馬鹿な！」
「よけられない！」
「よけられるわけがねえんだよ」
デスマスクは勝ち誇った声で二人に告げた。
「この積尸気魂葬破は積尸気鬼蒼焔とまた違ってな」
二人は既にその爆発により大きく吹き飛ばされている。あまりにも衝撃が大きかったせいだ。従ってデスマスクが一人で語る形となっていた。
「相手の霊気や小宇宙を糧に爆発するんだよ。鬼蒼焔が燃やすのと違ってな。だからよ」
今地面に叩き付けられた二人に対してまだ述べる。

第十一話　異空間その七

「御前等の小宇宙が強ければ強い程威力は増すんだよ」
「くっ、そうでしたか」
「抜かりました。まさかこの様な技を使えるとは」
「言ったろ?俺は強いってな」
勝ち誇った余裕に満ちた様子で二人に述べる。
「御前等もそれなりにやるようだが所詮俺の相手には不足だったな」
「くっ、ならば」
「カナン様」
二人は今にも倒れ伏しそうな声でカナンの名を呼んだ。そのうえで彼に告げる。
「我等と同志達の仇」
「どうか・・・・・・」
こう言い残し事切れるのであった。最早戦場に立っている狂闘士はそのカナン一人だけとなっていた。赤黒く禍々しい輝きを放つ戦衣を着てそこに立っている。
「で、残るは御前だけってわけだな」
「如何にも」
冷徹そのものの目でデスマスクを見つつ応える。
「まずは見事と言っておこう」
「俺の強さがか?」
「そうだ。貴様は我が同志のうち五人を倒した」
やはりこのことであった。
「それは見事だった」
「褒めてもやるものは何もねえぜ」
「心配するな。私もそういったものは求めてはいない」
ここでも冷徹な態度を崩しはしない。
「しかしだ」

「しかし？」
「同志達の言葉は受け取った」
デスマスクを見据えつつ述べる。
「キャンサーのデスマスク」
「ああ」
名前を呼ばれそれに返すデスマスクであった。
「シトリの言葉は受けた。貴様を倒す」
「そうかよ、狂闘士八大公の一人が直々にお相手下さるってわけか」
「貴様の強さは見せてもらった」
相変わらず表情も目も声も何もかもが冷徹なままであった。それが彼の個性であるかのように。
「そして今度は私がこの強さを見せる番だ」
「俺にだよな」
「覚悟せよ。このベルゼブブのカナン」
己の名を告げてみせてきた。
「伊達にアーレス様から軍団の指揮を任されているわけではないぞ」
「ああ、そういや聞いているぜ」
デスマスクは赤黒いかつ強大な小宇宙を前にしてもいつもの余裕綽々といった態度を崩さない。その態度でカナンにも告げる。
「御前等は四つの軍団に分かれていて」
「如何にも」
「それで指揮は八大公がそれぞれ執っているんだったな。つまり聖域で言えば俺達と同じってわけかよ」
「おそらくはな。我等が動く時は大きな戦いの時のみ」
ここも黄金聖闘士と同じであった。
「そしてそれが今というわけだ」
「で、俺ともってわけか」
「五人の仇は取らせてもらう」
それははっきりとデスマスクに対して告げるのであった。
「そしてだ」

「後はあの雑魚共か？」
「インプ達の分もある。しかしだ」
「何だよ、俺が倒したのは五人の筈だぜ」
「今来た男」
だがカナンはここでデスマスクの後ろに目をやった。デスマスクもそれを受けて視線だけを後ろにやる。流石に顔を後ろに向ける無謀はしない。八大公を前にして。
「貴様もまた。倒す」
「私もか」
「ジェミニのサガだったな」
彼の名も言ってみせたのだった。
「貴様は」
「如何にも」
「へえ、あんたも勝ったのかよ」
デスマスクは己の横に姿を現わしてきたサガを見て述べる。見れば無傷なままでデスマスクとカナン、それぞれの前に姿を現わしてきたのであった。
「どうやら楽勝だったみてえだな」
「そうもいかなかったがな」
こうデスマスクに述べる。
「狂闘士、やはり手強い」
「だが我が同志達を倒したのは事実」
カナンが問題とするのはあくまでこのことであった。
「何なら二人一度に相手をしてもいい」
「俺達二人をかよ」
「そうだ。聖闘士の中で最強の黄金聖闘士」
また二人に告げる。
「二人を倒せば後の戦いも楽になるしな」
「悪いがそれには及ばねえよ」
しかしここでデスマスクが一歩前に出てカナンに告げた。

「手前なんざ俺が一人で倒してやらあ」
「まずはキャンサー、貴様か」
「だからまずはじゃねえって言ってるだろ」
またカナンに言い返す。

第十一話　異空間その八

「手前は俺が倒すんだからな。黄金聖闘士、いやこのデスマスク様に倒されることを光栄に思うんだな」
「まずは五人の仇か」
デスマスクの挑発の言葉を受けてもその冷徹な態度は変わらない。ここが今までの五人とは違っていると言えた。八大公故の余裕であろうか。
「面白い。まずは貴様からだな」
「御指名ってわけか。じゃあサガよ」
「うむ」
「こいつの相手は俺がするぜ。いいな」
「わかった。しかしだ」
ここでサガはデスマスクに対して言うのであった。
「気をつけるのだ。このベルゼブブのカナンという男は」
「手強いってか？」
「そうだ。尋常な小宇宙ではない」
それはサガもはっきりと感じているのであった。
「この小宇宙。デスマスク、御前も感じている筈だ」
「まあな」
笑いながらだが答えるのだった。
「こんな小宇宙。それこそ俺達でもなければな」
「出せはしない」
「けれどよ」
しかしそれでも彼は言うのであった。
「サガ、あんた助っ人だったな」
「むっ！？」
「だったらもういいぜ」
こう言うのである。

「休んでおいてよ。まあソーセージでも食っておきな」
「御前一人で倒すつもりか」
「聖闘士ってのは本来そうだろ？」
またサガに言葉を返して告げる。
「一対一が基本だよな」
「だからこそか」
「そういうわけさ。何、あれだよ」
その余裕綽々の態度は相変わらずであった。
「俺は負けねえからよ。安心しな」
「むう」
「あんたはジャミアンだのディオだのと一緒に下がって俺の勝利の凱旋を待っておいてくれ」
「また随分と余裕だな」
「俺一人で充分ってわけだよ」
こうも言うデスマスクであった。
「だからよ。いいな」
「決意は変わらないな」
サガはデスマスクの言葉の裏を取って問い返す。
「それで」
「決意決意ってよ。そんなのねえさ」
軽く笑ってサガに述べる。
「全くな。わかったらよ」
「そうか。ならいい」
ここまで聞いてサガも遂に納得した。もう言葉はなかった。
「デスマスク、ここは貴様に任せる」
「任せるとかそんなのじゃねえだろ？」
ここでも余裕の笑みのデスマスクであった。
「俺がこいつに楽勝で勝つだけなんだからな」
「なら退こう」
サガは前を見据えたまま一歩退いた。

「これでな。待っている」
「おうよ。じゃあベルゼブブよ」
「うむ」
カナンはデスマスクを見据え続けていた。そのうえで彼に応える。
「一人で来るというのか」
「手前なんざ俺一人で充分過ぎるぜ」
カナンを見返してそのうえで言葉も返してみせる。
「手前なんざな」
「あのジェミニは」
サガのことを言うカナンであった。
「黄金聖闘士の中でもかなりの力を持っているな」
「かもな」
あえて答えはしないデスマスクであった。
「まあ俺程じゃねえな」
「いいのか？あの男を帰らせて」
カナンが彼に問うのはそこであった。
「貴様一人で私に立ち向かうなどと」
「おいおい、人の話聞いてねえのかよ」
今のカナンの言葉には声だけでおどけてみせる。
「御前なんざ俺一人で充分だって言ってるだろうがよ」
「慢心か。いや」
カナンにとってはそうとしか思えないことであった。嘲りはないが明らかにデスマスクの行動をよしとはしていないものであった。
「私の強さをわかっていないのだな」
「じゃあ御前も俺のことがわかっていねえな」
あっさりとカナンの今の言葉に返してみせる。
「それも全くな」
「では。どうするというのだ」
「俺の力を見せてやるぜ」
不敵な笑みと共に全身に小宇宙を高まらせるのだった。黄金色の

その小宇宙を。
「このキャンサーのデスマスクのな」
「面白い。では私もまた」
カナンも彼のその言葉を受けて赤い小宇宙を全身に高めさせていく。
「見せよう。ベルゼブブのカナンの力を」
「見せてもらうぜ、それじゃあよ」
今二人の戦いがはじまろうとしていた。黄金聖闘士と狂闘士八大公、双方の最強の戦士同士がこの聖戦においてはじめて行われようとしていた。

第十一話　完

２００８・９・６

第十二話　ベルゼブブのカナンその一

第十二話　ベルゼブブのカナン

対峙をはじめたデスマスクとカナン。デスマスクは不敵な笑みこそ浮かべているが前に出ようとはしない。カナンはそれを見て彼に言ってきた。

「どうした」

「どうしたって何がだよ」

「何故来ない」

このことをデスマスクに対しても直接問う。

「先程までの威勢はどうした」

「へっ、その手には乗らねえぜ」

しかしデスマスクはここでも軽く笑って動かないのであった。

「残念だがよ」

「ふむ。挑発を得意としているだけはある」

カナンもまたこれ以上言おうとはしなかった。

「自分が受けても動かぬか」

「わかってるんだよ」

そしてこうも言うデスマスクであった。

「もうな。手前は確かに強え」

「私は確かに強い」

カナンは謙遜するでもなく今のデスマスクの言葉に応えた。

「それがわかっているからこそ動かぬか」

「迂闊に動いたら死ぬのは俺だ」

これまでとはうって変わって慎重なデスマスクであった。

「お互いにな。そうだろ？」

「確かにな。だが」

「だが。何だ？」

「ベルゼブブという魔神について知っているか」

目を閉じたうえでデスマスクに対して問うのであった。
「我が魔神ベルゼブブについては。知っている筈だ」
「蝿かよ」
嘲るようにして笑ってカナンに答えてみせた。
「巨大な蝿の魔神だったな。違うか？」
「かつては神だった」
「それも知ってるぜ」
すぐに答えるデスマスクであった。
「確かバール神だったよな」
「それも知っているか」
「それが転じて魔神となった」
「そう。だがその力衰えているわけではないと言っておこう」
「へえ、面白いねえ」
こう言葉を返しはするが目も顔も全く笑ってはいなかった。
「手前が神だとでもいうのかよ」
「私は神ではない」
だがカナンは今のデスマスクの言葉は否定した。
「それは言っておく」
「じゃあバール神は何なんだ？」
「あくまで魔神。仕えるべき神がおられるのだから」
「アーレスってのは好きじゃねえな」
今度は嫌悪感を露骨に見せてきた。
「俺はよ。威張り腐った神様は嫌いなんだよ」
「神というものを理解していない愚か者が」
カナンにしてみればデスマスクはどうしてもこう思えるのであった。これは彼とデスマスクの大きな、そして決定的な違いであった。
「貴様とこのことについてこれ以上話をしても何の意味もない」
「そうだよな。早くはじめようぜ」
「安心しろ。私は動かん」
「慎重策ってわけかよ」

「何とでも言うがいい」
こう言ってやはり動かないのだった。
「といっても貴様は何かするつもりか」
「さてな」
不敵に笑って今は答えないのだった。
「それはどうかな。俺は何分不器用でねえ」
「ふむ」
ここでカナンは周囲を見てあることに気付いてはいた。
「既に仕掛けているというわけか」
「何のことかねえ」
口の両端を歪めさせて笑うだけのデスマスクであった。
「さっぱりわからねえな。俺にはな」
「ではこの青い粉は何だ」
「んっ！？」
「私が気付かないと思っているのか」
こうデスマスクに対して告げる。

第十二話　ベルゼブブのカナンその二

「同志達を屠ってくれた青い炎だな」
「気付いてたのかよ、おいおい」
「この程度の小細工にかかる私ではない」
静かにデスマスクに対して述べる。述べながらも動かない。あくまで静かな態度を崩さずその場に立っているだけだ。まるで何事もないように。
「この程度ではな」
「悪いが小細工じゃねえんだよ」
しかしデスマスクはこう言葉を返したのだった。
「これはよ」
「何だと？」
「俺は大物狙いなんでな。そういうことはしない主義さ」
「ではこれは何だ」
その周りに舞っている青い粉を横目で見つつデスマスクに問う。
「この青い粉は小細工ではないのか」
「だから小細工じゃねえんだよ」
デスマスクはまたこのことを小細工ではないと主張する。
「これはよ」
「では何だ？」
「大技なんだよ。その証拠に見な」
「むっ！？」
「その青い粉の数をよ」
見れば青い粉はカナンの周りに漂っているのではなかった。デスマスクの周りは無論のことサガの周りにまで舞っていた。そしてその数は桁外れであった。
「これまでの青い燐の比じゃねえだろ」
「どういうことだ、これは」

「後な、一つ言っておくぜ」
またカナンに対して告げる。
「この青い燐はな」
「これがどうかしたら」
「ただ舞うだけじゃねえんだよ」
「舞うだけではない。ではまさか」
「おっ、気付いたか」
今のカナンの言葉に興味深そうに声をあげてみせる。
「流石八大公ってところか？」
「冗談はいい」
デスマスクにこれ以上は言わせなかった。
「つまりだ。貴様の意志に従い動き相手を攻めるのだな」
「その通り。御前さんもう逃げられねえぜ」
見れば粉はもう燐になっていた。無数の夥しいまでの数の燐がカナンを包み込もうとしていた。
「これでな。終わりだよ」
「果たしてどうかな、それは」
だがカナンはこの状況でも態度を変えないのであった。
「貴様の思い通りに行くかどうか」
「へえ、じゃあどうするんだい？」
デスマスクもやはり動かない。余裕に満ちた態度でいるだけだった。
「この青い焔が御前さんを焼き尽くすにはもうそんなに時間は残ってねえぜ」
「一つ言っておく」
ここでカナンの目の光が変わった。
「我が名はベルゼブブのカナン」
またしても己の名を名乗ってみせてきた。
「そう、ベルゼブブのな」
「んっ！？」

「ベルゼブブは地獄を統率する者」
欧州の悪魔学ではこう定義されているのである。やはり強大な存在であるのだ。
「そして蝿を支配する者」
「蝿！？」
「そうだ、では今見せよう」
言葉と共にカナンを何かが覆った。それは黒い雲に見えた。
「このカナンの技の一つ」
「来たかよ」
「ヘルズフライ！！」
技の名を叫ぶとそれと共にその黒い雲が動いた。そうしてデスマスクが放っていた青い燐を瞬く間に打ち消していくのであった。青と黒が相殺し合っていた。
「俺の焔を消しに来たのかよ」
「それだけではない」
カナンは冷徹な態度を崩すことなくデスマスクに対して告げた。
「それだけではな」
「そうかよ。つまりだ」
「貴様もまた気付いたようだな」
「俺の技と似てるからな」
こう述べるデスマスクだった。
「その黒い雲はよ」
「似ているか」
「つまりあれだろ？蝿だろ？」
デスマスクは笑ってカナンに告げた。

第十二話　ベルゼブブのカナンその三

「その黒い雲はよ」
「その通りだ」
そしてカナンもそれは否定しないのだった。完全に肯定していた。
「ベルゼブブは蝿の主なのだからな」
「蝿に蟹かよ」
いささか自嘲もあるようなデスマスクの言葉であった。
「何かな。面白いって言えば面白いな」
「面白いか」
「蝿と蟹がそれぞれ八大公と黄金聖闘士ってわけだ。もっとも」
「もっとも？」
「勝つのは俺だけれどな。これは決まっていることだ」
自信だけは変わらなかった。これについては。デスマスクの自信は彼の技を目にしてもいささかも揺らぐことはなかったのであった。
その自信のまま青い炎でカナンの蝿を消していく。消していっているというよりは相殺であり激しい攻防であった。焔と蝿がせめぎ合っていた。
デスマスクとカナンはその中で睨み合っている。もうそこには笑みがなかった。デスマスクはその激しい視線をカナンに向けていたのである。
そしてその中で彼は。またカナンに言ってきた。
「これで終わりか？」
「何が言いたい」
「蝿で終わりかって聞いてんだよ」
カナンを睨み据えたまま問うてきたのだ。
「これでな。どうなんだよ」
「貴様はこれで終わりではあるまい」
「わかってると思うがな」

既に技は見せている。だから動ずるところはないのだった。
「それはな」
「無論これで終わりではない」
カナンはまたしてもこのことを認めてきた。
「蝿だけではな」
「やっぱりな。じゃあこっちもやりがいがあるってもんだ」
「青い炎も蝿も」
カナンは周りの攻防を見ることなくデスマスクに告げた。
「それぞれ尽きようとしているな」
「確かにな。もう飽きたな」
「飽きたか」
「ああ、そうさ」
今の言葉は強がりだった。だがそれは表には出さない。
「飽きたな、いい加減」
「小宇宙を無駄に消耗したくないのではないのか？」
「何っ！？」
「私も同じだからだ」
デスマスクに対して言うのだった。
「それはな」
「ほお、無駄に小宇宙を消耗したくないか」
「私にはわかる。貴様の小宇宙はかなりのものだ」
「俺の方が御前よりずっと強いんだがな」
「勝つのは私だ」
カナンもまた己に絶対の自信があるのだった。
「貴様にもな」
「じゃあ見せてもらうか？」
周りはもう青い炎も蝿も消えていた。その二つの攻防はとりあえずは引き分けだった。しかしそれで終わりではなかったのだった。
デスマスクもカナンも互いに手を繰り出してきた。そうして次の技を繰り出すのであった。

「行くぞ、キャンサーよ」
カナンはその右手に何かを漂わせてきた。
「このカナンの次の技」
「むっ！？」
「先程言った筈だ」
デスマスクに対して語る。
「ベルゼブブは地獄を司る魔神とな」
「そういやそうだったかな」
惚けたのは言葉だけだった。今はその顔も真剣だった。
「忘れたぜ」
「ならば思い出させてやろう」
右手に集まっていたのはまた黒い何かだった。それはデスマスクもはじめて見るものだった。
「何だそれは」
「黒い光だ」
「黒い光！？」
「見たことはあるまい」
表情はない。声だけで笑っている。
「この光はな」
「噂には聞いていたがな」
その光を見ながら答えるデスマスクだった。
「この目で見るとは思わなかったぜ」
「そうか。やはりな」
「それではだ」
黒い光が次第に集まっていく。今それをデスマスクに向けていた。
しかしデスマスクはそれを見ても悠然としていた。余裕を変えはしていなかった。

第十二話　ベルゼブブのカナンその四

「受けてみよ、この黒い光」
「来るかよ」
「ブラックエンドライト！」
黒い光が帯となり放たれた。それが一直線にデスマスクに向かって来た。
「来たかよ」
「一つ言っておく」
光を放ちながらデスマスクに告げる。
「この光を受けて生きていた人間はいない」
「ほお、いないってか」
「そうだ。誰一人としてな」
デスマスクに言い続ける。
「いはしないのだ。つまり貴様もまた」
「果たしてそいつはどうかな」
「生きているというつもりか？」
「じゃあ見せてやるぜ」
笑っていた。しかし今度の笑みはいつもの余裕はない。真剣な面持ちでの笑みであったのだ。その笑みでカナンと彼の黒い光に対していたのである。
「俺がどうやってそれの最初の人間になるかな」
「面白い男だ」
カナンもまた笑ってはいなかった。
「だが。それでも言おう」
「俺が死ぬってか」
「そうだ。生憎俺は不死身でなあ」
この言葉ははったりだった。
「俺を殺したきゃそのまま冥府に蹴り込むんだな。それでも這い上

がってきてやるぜ」
「這い上がるか」
「何かおかしいかよ」
「いや」
カナンはその言葉自体は悪いとはしないのだった。
「別にな。それはな」
「そうかよ。じゃあ見てみるんだな」
「私のこのブラックエンドライトを破るのをか」
「そうさ。見なこのデスマスクの技！」
叫びながら技を放ってきた。それは。
「積尸気魂葬破！」
「何だとっ！？」
デスマスクがここで積尸気魂葬破を放ってきたのを見てカナンは思わず驚きの声をあげてしまった。今までの冷徹そのものの顔も微かに崩れていた。
「ここで積尸気魂葬破だというのか」
「そうさ、これでな」
いつもの不敵な笑みがそこにはあった。
「破ってやるんだよ、手前のその技をな」
「果たしてそう上手くいくかな」
「じゃあ見てみるんだな」
ここでもその自信は変わらない。
「貴様のその積尸気魂葬破で。私のブラックエンドライトを破れるのかどうかをな」
「それは早速はじまってるぜ」
積尸気魂葬破を放ったその腕を前に突き出しつつカナンに述べる。
「どうだ？さっきまで俺に間近に迫っていた手前の光がよ」
「むう」
見ればその通りだった。黒い光は次第に押されていっている。デスマスクの積尸気魂葬破が彼のその光を次第に焼き尽くしていって

いたのだ。
「さあ、どうだよ」
「次第に押していっているというのか。私の光を」
「こんなのははじめてだよな」
口元に笑みを浮かべて彼に問う。
「違うか？そうだろ」
「その通りだ」
冷徹な顔に戻ってデスマスクの言葉に答える。
「それはな」
「そうだろ。じゃあ俺がはじめてになるな」
「だが。それはどうかな」
しかしカナンはこれについては懐疑的な様子を見せるのだった。
「私のこの技が破られたことがないのもまた事実」
「だから俺が最初になってやるって言ってんだよ」
「では。これでどうだ」
カナンの小宇宙が増してきた。その赤い小宇宙が。
「小宇宙を込めてきたってことかよ」
「そういうことだ。これならばどうだ」
「じゃあよ、こっちだってよ」
デスマスクもまた小宇宙を増してきた。

第十二話　ベルゼブブのカナンその五

「こうしてやるぜ。どうだよ」
「貴様もこう来たか」
「必然的に勝負ってわけだな」
積尸気魂葬破とブラックエンドライトのぶつかり合い、赤い衝撃と黒い閃光を挟んで今両者がせめぎ合っていたのであった。両者の小宇宙が。
「どっちかが怯んだその時で決まるっていうのかよ」
「これでわかったな」
カナンの冷徹な言葉がまた出される。
「何故私が今までこの技を出して破れたことがなかったのかを」
「ああ、よくわかったぜ」
目の前の赤と黒の光を見つつカナンに答える。
「よくな」
「それではだ」
ここでカナンはさらに力を入れてきた。小宇宙を増してきたのだ。ここでも。
「これならばどうだ」
「まだ小宇宙があるってことかよ」
「キャンサー、貴様はどうだ」
そのうえでデスマスクに対してまた問うてきたのだった。
「もうそろそろ。小宇宙が尽きるのではないのか」
「俺の小宇宙がかよ」
「そうだ」
これもまたカナンの狙いであったのだ。
「如何に黄金聖闘士といえどそろそろ限界ではないのか。小宇宙は」
「おいおい、甘く見るなよ」
軽い口調だったが決して笑ってはいなかった。

「俺だって黄金聖闘士だ。この程度だと思うなよ」
「まだ小宇宙があるというのか」
「そうさ。どうだ」
デスマスクもまた小宇宙をさらに高めさせるのだった。黄金の小宇宙がさらに彼の全身を覆いそれが積尸気魂葬破にもまた影響するのであった。
「これならな」
「やはり。まだ小宇宙があるのか」
「まだまだあるぜ」
さらに小宇宙を高めてみせるデスマスクであった。
「俺の小宇宙は。まだな」
「それは私も同じだ」
「おいおい、手前はもう終わりじゃねえのかよ」
「それは本来は私の言葉なのだがな」
「面白いぜ、何かどんどん面白くなってきたぜ」
「そうだな」
ここでは二人の言葉の意味は同じであった。
「しかしだ」
「勝つのは自分だって言いたいんだな」
「如何にも。私は八大公の一人」
このことに絶対の自信があるのだった。
「決して負けはしない。何があろうとも」
「それは俺も同じなんだよ。負けるかよ！」
叫びつつ小宇宙をさらに増してきた。それはカナンもまた同じだった。
「喰らえ、この俺の渾身の技をよ！」
「それは私とて同じ」
二人の小宇宙が今最高潮に達した。
「死にやがれ！」
「受けて消えよ！」

互いに力を込めつつ叫ぶ。
「積尸気魂葬破！」
「ブラックエンドライト！」
またしても技と技の衝突が最高潮に達する。それは遂に二人の間で爆発し。全てを赤と黒に包み込んだのであった。
「むっ、これは」
今まで闘いを見守っていただけだったサガが声をあげる。
「小宇宙が消えた。しかもどちらのものも」
デスマスクの小宇宙もカナンのそれも消えてしまっていたのだ。とりわけデスマスクのそれが感じられるサガは顔を顰めさせたのであった。
「まさか。デスマスク」
「おいおい、生憎だけれどよ」
赤と黒の衝撃が消え去った後は白い煙が辺りから立ち起こっていた。その中でデスマスクは何とか戦場に残っていたのであった。
「俺は生きているぜ」
「無事だったか」
「言ったろ？俺は不死身なんだよ」
サガに対してもこの態度は変わらない。

第十二話　ベルゼブブのカナンその六

「この程度で死ぬかよ」
「そうか。まずは安心した」
今のサガの言葉は彼の本心そのものだった。
「生きていて何よりと言っておこう
「まずはそれはいいんだがな」
しかしここでデスマスクは言う。
「どうやら。喜んでばかりもいられないぜ」
「うむ」
このことはサガも把握しているようである。静かに頷いたのがその証だった。
「そのようだな。それはな」
「いるんだろ、おい」
デスマスクはこれまでカナンがいた場所に顔を向けて問うた。
「違うか？死んだなんてのは全く思っちゃいねえぜ、俺はな」
「ふむ、気付いていたか」
デスマスクの予想通りだった。不意にカナンの声が聞こえてきた。
「やはりな」
「気付かねえ筈ねえだろ？」
やはり見ているのはそれまでカナンがいた場所であった。
「それだけ小宇宙を撒き散らしておいてな」
「小宇宙か」
「そうさ。お互いな」
口元に笑みさえ浮かべての言葉だった。
「あの程度で死ぬわきゃねえんだよ」
「その通りだ」
ここでそのカナンが姿を現わした。やはり今までいたその場所にだ。

「私は健在だ。この通りな」
「だと思ったぜ。ベルゼブブの名は伊達じゃねえってことかよ」
「貴様も。流石は黄金聖闘士の一人」
また睨み合う。しかしそれでも今は二人共動こうとはしていない。
「さあ、仕切りなおしといくか？」
「そこまでわかっているのなら言う必要も無いと思うが」
「へっ、確かにな」
デスマスクは笑うだけで構えを取ろうとはしていなかった。それはカナンも同じだった。
「生憎だがもう闘うだけの小宇宙はねえな」
「私もだ」
「残念だが後日再戦ってわけだな」
見ればカナンも構えを取ってはいない。二人共小宇宙はかなり減ってしまっていた。
「その時こそ手前を完全に潰してやるぜ」
「それはこちらとて同じこと」
デスマスクを見据えているがそれでも動こうとはしない。
「キャンサー、今度こそ貴様を倒す」
「じゃあまたな」
おどけて右手を振ってみせての言葉だった。
「手前を面白い場所に案内してやるぜ」
「ふむ。楽しみにしていよう」
ここまで言って姿を消してきたカナンだった。
「その時のことをな。同志達の仇はきっと取る」
「ああ、あの五人かよ」
デスマスクはそこまで聞いても平然とした様子だった。
「あの連中もまあ大したことはなかったな」
「大したことはなかったか」
「そうさ。俺の相手は手前だけだ」
カナンを指差して言う。

「それは覚えておけよな」
「覚えておくまでもない」
姿は完全に消えつつあるがそれでも応えはするのだった。
「貴様は同志達の仇だからな」
「案外狂闘士ってのはしみったれた連中だな」
「果たして我等だけかな」
「何っ！？」
「それは貴様等聖闘士とて同じだと思うが」
「へっ、少なくとも俺は全然違うぜ」
今のカナンの言葉に口の左端を歪めさせるデスマスクだった。
「俺だけはな。このデスマスク様はな」
「果たしてどうかな」
また言うカナンであった。
「貴様とて。そこのジェミニに加勢を頼まなかったのはそうではないのか」
「何をだよ。意味がわかんねえな」
「貴様一人で私に対することでジェミニに余計な負担を欠かせまいとした。違うか」
「さてな」
とぼけるデスマスクだった。

第十二話　ベルゼブブのカナンその七

「何のことだかな」
「しかもだ。最初は九人を一度に相手にするつもりだったな」
「俺の実力じゃ当然のことだがね」
「どうかな。もっとも言うつもりはないようだがな」
「俺は別に何も言ってねえぜ」
軽口は相変わらずだった。
「最初から言うつもりもねえがな」
「では聞かないでおこう」
言葉と共に姿を完全に消した。
「もうわかっていることだしな」
「随分と買い被ってくれてるのか誤解しているのか知らねえがな」
「まあいい」
話を切ってきたカナンだった。
「どちらにしろまた会うことになる」
「だからその時こそ決着の時だって言ってんだがな。手前がかなり変なこと言うからよ」
「言うから。何だ？」
「変なことになったんだろ。まあどちらにしろだ」
姿を消してしまったカナンに対して最後に告げた。
「勝つのは俺達だからな」
最後の言葉はカナンの耳には入っていなかった。カナンは何処かへと姿を消した。後に残ったのはデスマスクとサガの二人だけであった。
その中で。サガはデスマスクの横に来た。そうして彼に声をかけてきた。
「とりあえずドイツでの戦いは終わりだ」
「ああ、ここではな」

「そして御前の任務も終わりだ」
「そうなるか。じゃあ聖域に帰っていいんだな」
「そうだ。初陣だが随分と活躍したな」
「実力ってやつさ」
軽くサガに言葉を返すのだった。
「これがな。俺の実力ってやつさ」
「そうだな。これからもその実力を発揮する時が来る」
「あいつをぶっ倒すことか」
言うまでもなくカナンについてのことだった。
「それならよ。何時でもできるぜ」
「それだけではない」
しかしサガは今のデスマスクの言葉はこう言って否定する。
「この聖戦だけではないのだ」
「勿論これで戦いが終わりとは思ってねえぜ」
「最後の最後までだ」
サガの言葉は少し厳しい感じになっていた。
「我等の戦いは続くからな」
「最後の最後までねえ」
「そうだ、少なくとも」
サガの目が光る。
「この戦いだけではない」
「アーレスだけじゃないってことか」
「それはわかっていると思うがな」
「まあ頃合いかな」
ふと思い出したように語るデスマスクだった。
「あの戦いの」
「先の聖戦から二百年が過ぎた」
サガはまた言う。
「そろそろだな」
「もっともで。今度はどうなるんですかね」

「どうなるかというと？」
「いや、あれだろ」
サガに顔を向けて問うてきた。
「前の聖戦じゃ残ったのは」
「教皇と五老峰の老師だけだ」
「十二人全員いた黄金聖闘士も他の奴等も全員戦死ときたもんだ」
デスマスクの言葉は確かに軽い調子ではあったがそれでも言っていることは真剣そのものだった。彼としてもこのことに関してはいつもの態度とは違っていた。
「その時の蟹座の黄金聖闘士は随分活躍したそうだけれどな」
「その前の聖戦もな」
さらに前の聖戦の話にもなる。
「蟹座の黄金聖闘士は見事な活躍をした」
「先の聖戦の教皇セージってわけだな」
「そうだ。だからこそ御前も」
「まあやるだけやってやるぜ」
先輩であり歳も離れているサガにもいつもの態度だった。

第十二話　ベルゼブブのカナンその八

「精々派手に冥界に叩き込んでやるぜ」
「冥界にか」
「伊達に黄金聖闘士じゃないんだ」
そのことに誇りを見せている。それは間違いなかった。
「今やってる奴等も。これから戦う奴等も俺一人で叩き潰してやるぜ」
「期待している。その力にな」
「力こそが正義さ」
今度はうそぶいていた。
「それもはっきりと見せてやるぜ、俺の前に立ちはだかる奴にはよ」
「わかった。それでだ」
「んっ！？」
「まだいるな」
ふと思い出したようにしてデスマスクに言ってきたのだった。
「どうやらな」
「おっ、そういえば」
デスマスクもおどけた調子でそれに返す。
「まだ雑兵が山みてえに」
「ジャミアン達が随分相手にしている筈だが」
「新手ってやつでしょ」
自分達の周りに出て来たインプ達を見つつ述べる。
「よくあるパターンで」
「そうか」
「さて、それじゃあ」
デスマスクの方から声をあげてきた。
「先に言っておいてくれていいぜ」
「残念だがもう包囲されているが」

「じゃあ。そこにいてくれ。俺が片付けておくからな」
「御前一人でか」
「任せておきなって」
楽しそうに笑いながら一歩前に出てみせた。
「こうした連中にはな。おあつらえ向きの技があるんだよ」
「では。任せるぞ」
「その方が嬉しいね。おい雑魚共」
サガの言葉を受けつつインプ達に対して声をかける。
「覚悟はできてんだろうな、おい」
「何ィ！？キャンサーだな」
「その減らず口は」
「減らず口ってのは実力のねえ奴が言う台詞だ」
そのインプ達にまた述べた。
「それはよく覚えておきなよ。あの世で役に立つぜ」
「おのれ、リノ様達の仇が！」
「カナン様が去られても我等がいるということを忘れるな！」
一斉に前に出てデスマスクに殺到してきた。
「ここで貴様を討てばそれだけ！」
「聖域の戦力が！」
「減るのは手前等だぜ」
デスマスクの右手の人差し指に不気味な光が宿っていた。
「このデスマスクのこの技でな」
「むっ！？」
「何を使うつもりだ」
「青い炎か！？それとも」
「爆発か」
「それでもいいんだが今回は違うぜ」
余裕の笑みと共に彼等に告げた。
「とはいっても前にも使ってるんだがな。手前等それ位調べておくんだな」

「この数を前にして小手先の技ならば！」
「何の意味もないことを知れ！」
「また一つ言っておくぜ」
ここでもデスマスクの余裕は変わらない。
「俺達黄金聖闘士はな、手前等がどれだけいようが平気なんだよ」
「まだ言うか！」
「じゃあ今から見せてやるぜ」
人差し指の光がさらに強まった。そして。
「受けな、このデスマスクの技の一つ」
最早その顔には今までの軽いものはなかった。
「積尸気冥界波！」
技の名前を叫ぶと共に指から光が放たれた。そうしてその光がインプ達を撃っていく。一瞬のきらめきが終わったその後には技を放ったデスマスクとサガ以外には誰もいなかった。
「じゃあ、帰るか」
「積尸気冥界波か」
サガは動かなくなったインプ達を見下ろしつつ今のデスマスクの技の名を呟いた。
「恐ろしい技だな。これだけの数の相手を一度に葬り去るとはな」
「あんたもそうだと思うがな」
「恐ろしい男だ」
デスマスクの言葉には返さずに彼を称賛してみせた。
「味方とはいえな」
「それは俺の台詞なんだがな」
マントを翻し歩きだす。サガに背を向けた時に言った言葉だ。
「あんたとは。やり合いたくはねえな」
「黄金聖闘士ならばお互いにな」
「そういうことだな」
今度はにこりともしていなかった。
「もっとも。最強はこの俺、デスマスク様だがな」

「その自信は買おう」
最後は笑顔だった。かくしてドイツでの聖闘士と狂闘士の戦いは終わった。しかしそれで終わりではなかった。戦いはまだ続くのだった。

第十二話　完

２００８・９・１９

第十三話　帰還してその一

第十三話　帰還して

「そうか、では残ったのはベルゼブブだけだな」
「はい」
デスマスクは教皇の間で戦いの顛末を教皇に報告していた。その隣にはサガが控え二人は片膝をついて教皇の前に控えつつ報告をあげていたのだ。
「その通りです。申し訳ありませんがあいつだけは取り逃しました」
「それはいい」
シオンはそれは気に留めていなかった。
「ベルゼブブのカナンは八大公の一人」
そしてこのことを言う。
「ならば相当の実力者だ」
「何、大したことはなかったありませんでした」
「軽口はいい」
流石にシオンにはデスマスクの軽口も通用しなかった。
「あの男の実力は他ならぬ御前自身がよくわかっている筈だ」
「・・・・・確かに」
彼にこう言われてはデスマスクもその軽口を止めるしかなかった。沈痛な顔になり彼の言葉に頷くのだった。そうするしかないのだった。彼といえど。
「御前の技を相殺したな」
「その通りです」
このことも述べた。
「こんなことははじめてですよ。俺の技を相殺するなんてね」
「それだけの相手ということだ」
やはりシオンは冷静にデスマスクに告げた。
「これで他の九人も全て相手にしていたならば御前は無事では済ま

なかった」
「ええ、それは」
このこともまた認めるしかなかった。自信家のデスマスクが。
「あの男の実力を考えればな。やはりサガよ」
「はい」
ここでサガに声をかける。サガもそれに応える。
「御前を行かせて正解だったか」
「おそらくは」
「戦皇アーレスはかなりの実力者」
このことはシオンもよく認識していた。
「その配下である狂闘士もかなりの力を持っている。少なくとも」
そしてまた言った。
「白銀聖闘士や青銅星闘士では及ばぬ」
「つまり俺達しかいないってことですね」
「そう、その通りだ」
そしてデスマスクの言葉に声で頷いたのだった。
「白銀や青銅の者達は雑兵達を相手にしてもらう」
「ああ、全員無事ですよ」
デスマスクはこのことを思い出したように教皇に報告した。
「ピンピンしてますよ、全員ね」
「それは何よりだ」
シオンは仮面の裏でそのことを喜んだ。
「あの者達に死なれては困る」
「俺としちゃ結構足手纏いでしたけれどね」
ここではいつものデスマスクになっていた。
「まあそれでも。一人旅よりは面白かったですよ」
「そうか」
「あの連中は雑兵の相手でしたよ。まああいつ等なりにやってはいましたね」
「それは何よりだ」

「あと教皇」
デスマスクはまたシオンに述べる。
「敵の雑魚ですけれどね」
「インプ達か」
「ええ。数はこっちの兵隊よりずっと多いですよ」
このことをシオンに述べたのだった。
「それこそね。湧いて出て来ますよ」
「御前も随分と倒したそうだな」
「ええ、その通りです」
このことは軽く笑って認めた。
「数で来られても俺は苦労しませんでしたけれどね」
「流石に兵相手に御前が倒されるとは思っていない」
彼は彼でデスマスクの実力を完全に把握していた。
「しかし。八大公なら別だ」
「実力が桁外れってことですね」
「その通りだ。そして」
「そして？」
「おそらく彼等だけではない」
こうも言うシオンだった。
「彼等だけではな」
「それはわかっていますよ」
シオンの言葉にすぐ返したデスマスクだった。
「あのエリスって女神とボスのアーレスですよね」
「いや、それだけではない」
だがシオンは何故かここではデスマスクの言葉は否定した。

第十三話　帰還してその二

「あの二柱の神々だけではない」
「あの連中だけじゃない？」
「冥皇ハーデスのことは知っているな」
「ハーデス」
その名を聞いたデスマスクとサガの目の色が一変した。
「あいつですか」
「我等の宿敵」
「そうだ。あの冥皇ハーデスの側近である二柱の神」
その二柱の神のことを二人に告げた。
「あの二柱の神の様な存在もまた考えられる」
「ですが教皇」
今度口を開いたのはサガだった。
「先にもアーレスとの聖戦がありました」
「うむ」
「しかしあの時姿を現わした神はアーレスとエリスのみ」
サガが知っているアーレスとの聖戦ではそうなっている。
「二柱だけでしたが」
「私も今それを調べている」
シオンもまだいささか懐疑的なようだった。
「神話の時代までな」
「そういえば教皇」
デスマスクはここで教皇に述べてきた。
「先の戦いまであのハーデスの側近の二柱の神」
「うむ」
「タナトスとヒュプノスの正体を捉えることはできませんでしたね」
「その通りだ」
先の聖戦の生き残りであるシオンが最もよくわかっていることだ

った。
「その為にも。多くの犠牲を払った」
「はい、そう聞いています」
「しかしだ」
シオンはさらに二人に言ってきた。
「当時のキャンサーの黄金聖闘士であるマニゴルドとカプリコーンのエルシド、教皇セージ、ハクレイ達の命を賭けた戦いにより」
「奴等の居場所がわかり封じられた」
「確かそうでした」
「その通りだ」
シオンは二人の言葉に頷いた。
「しかし。その戦いで彼等は全て戦死し」
「はい」
名誉の戦死である。
「その後の戦いでも多くの聖闘士が倒れ」
「その結果残ったのは」
「そうだ」
シオンは二人の言葉に答えた。
生き残った聖闘士は僅か二名、今二人の目の前にいる現教皇であるシオンと現在もライブラの黄金聖闘士である童虎の二人だけだったのだ。これは聖闘士なら誰もが知っていることだ。
「冥皇ハーデスを封じたその代償として」
「生き残ったのは貴方と老師のみ」
「俺達だったらもっと上手くやれますがね」
「果たしてそうか」
シオンはデスマスクに対して問い返した。
「デスマスクよ、それは御前もよくわかっている筈だが」
「それは」
「今回の聖戦も決して油断はできない」
シオンはまた言った。

「違うか。それは御前も同じの筈だが」
「全てはお見通しってわけですか」
「御前の考えは全てわかる」
流石は教皇だと言えた。伊達に聖域を統括しているわけではないのだ。
「御前程素直な者もいないからな」
「俺が素直ですか」
「そうだ」
彼にとって見ればそうなのだった。教皇である彼から見れば。
「言葉が少し捻くれているだけだ。ただそれだけだ」
「買い被って下さってどうも」
「とにかくだ。まずは九人だったな」
「はい」
デスマスクはあらためてシオンの問いに頷いた。

第十三話　帰還してその三

「その通りです。少し調べておきますが」
「調べておくのか」
「俺の技は知ってますよね」
楽しげな軽い笑みを浮かべてシオンに問う。
「キャンサーの黄金聖闘士の技は」
「無論だ。確かにあると思うがな」
「こうご期待ってわけですね」
「そうだな。おそらくあのベルゼブブの八大公は再び御前の前に現われる」
「今度こそ仕留めてやりますよ」
いつものデスマスクの言葉の調子になっていた。
「確実にね」
「期待している」
「では教皇」
デスマスクとシオンの話が終わったところでサガがシオンに声をかけてきた。
「続きまして」
「うむ。デスマスク」
「はい」
サガの言葉を受けたうえでデスマスクに声をかけ彼もそれに返すのだった。
「御前は巨蟹宮に下がれ」
「巨蟹宮にですか」
「そうだ。この度の任務ご苦労だった」
「はっ」
「また指示を出す。それまでは巨蟹宮の護りに当たれ」
「わかりました。それでは」

シオンの言葉に一礼してそのうえで姿を消す。後にはサガとシオンだけが残ったのだった。
「デスマスクはよくやってくれたな」
「流石と言うべきでしょう」
頭を垂れてシオンに述べる。
「キャンサーの黄金聖闘士の実力は確かです」
「そうだな。あの男と同じだ」
「あの男？」
「いや、何でもない」
ここから先は打ち消したシオンだった。
「それはな。それでだ」
「はい」
シオンはさらに話を続ける。サガもそれに片膝をついたまま顔を上げて応える。
「次はシュラに行ってもらう」
「あの男にですが」
「そしてサガ」
それを告げたうえでまたサガに対して言うのだった。
「御前には次も行ってもらう」
「わかりました」
「次もおそらく八大公が出て来る」
「それは間違いないかと」
サガもそれは読んでいた。やはり黄金聖闘士として年長であるだけはある。やはり彼とアイオロスが今の聖域の聖闘士達の柱なのだった。
「御前にはシュラのフォローを頼む」
「デスマスクの時と同じですね」
「そうだ。御前には負担をかけるが」
「いえ、構いません」
だがサガはシオンにこう答えた。

「教皇、私はアテナの聖闘士です」
「だからよいというのか」
「はい、アイオロスも同じでしょう」
彼のことはよくわかっているのだった。同じ黄金聖闘士として親友の関係にある。だからこそよくわかるのだった。心と心のつながりがそうさせているのだ。
「それにつきましては」
「済まんな。あの者達の実力は確かだが」
「それでも。まだ若いということですね」
「その通りだ。やはりまだ若い」
シオンもまたこのことを言う。
「だからだ。御前とアイオロスには彼等の補佐を頼むのだ」
「承知しております」
「狂闘士の強さはかなりのものだ」
シオンはこのことを誰よりもよく認識していた。
「だからだ。常に二人の黄金聖闘士を向けたいのだ」
「ええ。向こうもまた八大公もまた出して来ているのでしょう」
「そうだな。しかし」
「しかし？」
ここでシオンは言葉を変えた。サガもそれに気付く。
「どうされたのですか」
「いや、まだわからないか」
シオンはすぐに己の考えを打ち消したようだった。

第十三話　帰還してその四

「まだな。決め付けるのはかえって危険か」
「狂闘士達の動きがですか」
「そうだが。まだ最初では何も言えないな」
「お言葉ですがその通りだと」
「やはりな。よし、サガよ」
あらためて彼に声をかけた。
「御前も下がれ。次の任務まで双児宮の護りについていてくれ」
「はっ、それでは」
サガもまた一礼して教皇の前から姿を消す。一人になったシオンは暫く考えていたがやがて退室した。後には誰も残ってはいなかった。
己の巨蟹宮に戻りに教皇の間を出ようとするデスマスク。しかし彼のところにジャミアン達がやって来た。そしてデスマスクに対して声をかけてきた。
「あの、デスマスク様」
「御前等かよ」
「ええ、まあ」
少し腰を低くさせてデスマスクに応えるのだった。
「何だ?もう教皇への挨拶は終わったぜ」
「いえ、そうではなくてですね」
「あの、仕事終わりましたよね」
「ああ」
彼等の言葉に頷く。見れば彼等はまだ聖衣を着てはいるがそれでもかなりリラックスしだしていた。そうしてデスマスクの前に来たのだ。
「今な。しかしそれがどうしたんだ?」
「仕事終わりましたんならその」

「俺達とまあ」
「一杯ってわけかよ」
「ええ。どうですか？」
ジャミアンが申し出てきたのだった。
「デスマスク様さえよかったらですけれど」
「いい店知ってるんですけれどね」
「いい店か。聖域にか？」
「いえ、アテネにです」
ディオが言う。言うまでもなく聖域はアテネにある。しかしアテネの市民達の殆どはこの聖域の存在を知らない。何故なら聖域は言うならばアテネの裏、普通の人々が決して入ることができない場所にあるからだ。教皇の存在も大国の限られた者達しか知らない。
「アテネにあるんですよ、いい店が」
「和食の店でしてね」
「和食か」
デスマスクは和食と聞いて少し微妙な顔になった。
「っていうとあれか？グラード財団のやってる店か」
「ええ、そうです」
「あそこなんですけれどね」
「あのタコ親父が出て来るのか」
デスマスクは腕を組んで述べた。
「辰巳のおっさんもなあ。日本とこっちをあれこれ行き来してるよな」
「ええ、そのおっさんが支配人ですよ」
「自分でも包丁振るっていますし」
「あれだけ忙しいのによくやるよ」
減らず口めいて言うデスマスクだった。
「全くな。しかしあのおっさんの料理か」
「どうですか？刺身とか天麩羅とか」
「寿司もありますよ」

「日本に行った時はいつも食ってるけれどな」
イタリア人らしくそういうことには造詣の深いデスマスクだった。
顎に右手を当てて考える顔になっている。
「そういうのはな」
「じゃあいいですよね」
「行きます？」
「後でな」
しかしここでこう彼等に返すのだった。
「後で行く。ちょっと寄る所がある」
「寄る所って？」
「何処ですか？」
「馬鹿、一つしかないだろ」
ここで彼はこう六人に返すのだった。
「俺は何処の黄金聖闘士だ？」
「蟹座ですけれど」
ブラウが答えた。
「けれどそれがどうしたんですか？」
「それが一体」
「だからよ。一旦戻るんだよ」
また六人に言葉を返したのだった。

第十三話　帰還してその五

「俺の巨蟹宮にな」
「ああ、そういうことですか」
「それで」
「わかったな」
ここまで話してあらためて述べたデスマスクだった。
「これでな。御前等と飲むのは後だ」
「そうですか」
「まずは巨蟹宮に戻ってな。あそこの連中に声をかけないといけないからな」
「ああ、そういえばそうですね」
「十二宮にはそれぞれ人がついてきてるんですよね」
黄金聖闘士がそれぞれ守護する十二宮には人が配されている。黄金聖闘士の付き人達であり彼等の身辺の世話や宮の管理運営を行っている。基本的に女人禁制なのは聖闘士と同じである。だからデスマスクの周りも男ばかりであったりする。
「だからですか」
「黄金聖闘士は基本的にそれぞれの宮を護るんでしたよね」
「知ってるだろ、それはよ」
レッシュに対して答えるデスマスクだった。
「御前も聖闘士の端くれならな」
「まあ確かに」
「そうですけれど」
他の面々もデスマスクの言葉に応える。
「けれどそれでもデスマスク様が主ですか」
「何かそれって」
「御前等俺を何だと思ってるんだ？」
怪訝な顔をする彼等のそれぞれの顔を見て問うた。

「一体何だと思ってるんだよ」
「まあそれはその」
「おっかないっていうか？」
「馬鹿、本当のこと言ってどうするんだよ御本人の前で」
「殺されるぞ御前」
「ああ、それはもうわかってるからよ」
しかし彼等の言葉を聞いても特に動じたところのないデスマスクだった。六人はデスマスクの今の言葉にギョッとした顔になって彼を見る。
「げっ、それじゃあやっぱり」
「俺達を」
「殺したりも何もしねえよ」
また言うデスマスクだった。
「俺は闘う相手以外には何もしねえさ」
「そ、そうなんですか！？」
「本当にですか！？」
「俺はアテナの聖闘士だぞ」
ここを強調して言ってきた。今度は。
「しかも黄金聖闘士だぞ。それで何で闘い以外で技を出すんだよ。違うか？」
「まあそれはそうですけれど」
「けれど」
「大体な、相手の考えてることはちょっとした相手ならわかるんだよ」
「げっ、どうしてですか」
「黄金聖闘士は全員それなり以上の超能力を持ってるんだよ」
今黄金聖闘士の力の一部を明かすのだった。これは他の聖闘士が持っていない場合もあるものであった。
「その中には当然テレパシーだってある」
「そうだったんですか」

「そうだよ、御前等の中にもそういうのいるだろ？」
「ええ、まあ」
「そういう奴もいますけれど」
「そういうことなんだよ」
これがデスマスクの説明であった。
「だからな。俺達なんかは特にだよ」
「そういう力は強いんですか」
「当然俺だけじゃない」
こうも言う。
「さっきも言ったが他の奴も全員使えるぜ」
「ですよね。それだと」
「あの筋肉馬鹿だって使えるさ」
「筋肉馬鹿！？」
「アイオリアだよ」
彼のことであった。
「あのライオン野郎な。あいつとかアルデバランやミロだって得意じゃないにしろ使えることは使えるんだぜ」
「あの人達を言われると」
「本当に使えるんですね、何か」
「意外か」
「はい」
本人達がいないこともあってはっきりと答えた面々だった。

第十三話　帰還してその六

「アイオリア様っていえばどうにも」
「真正面から拳で向かうだけっていうイメージがありまして」
「ああ、その通りだぜ」
デスマスクもそれは否定しない。
「あいつは小細工とかは使わないんだよ、絶対にな」
「そうなんですか」
「馬鹿だからな」
やはりこう言うのだった。あくまできつい。
「もっともあいつにはそういうのは合わないがな」
「どう考えてもですね」
「それだけは」
「だからまあいいんだよ」
不意にアイオリアを認めるようなことも言い出した。
「あいつはそれでもな」
「そうなんですか」
「そうさ、大体あいつにせこいことが似合うか？」
「いえ、間違えてもそれは」
自然と答えが出ていた。ジャミアン達もそれは想像すらできなかった。
「有り得ませんね」
「どう考えても」
「そうだろ？だからいいんだよ」
「そうですか」
「人それぞれ、個性ってやつだ」
こうも言ってみせるデスマスクだった。
「あいつにはあいつの、俺には俺のな」
「そういうことですか」

「もっとも一番強いのは俺だがな」
自信家なのは相変わらずであった。
「このデスマスク様がな」
「それはまあ確かに」
「けれど確か黄金聖闘士はそもそも互いに闘ったら千日間戦争になるんですよね」
「ああ、それは確か」
「実力が拮抗しているから」
最強の者同士だからこそだった。彼等もそれはよく知っていた。
「だったらデスマスク様、最強とかというのは」
「この場合ないんじゃないんですか？」
「御前等も随分と変なところで詳しいな」
その通りなので返答に窮するデスマスクであった。
「まあそうだよ。その通りだ」
「そうですか、やっぱり」
「ただ、得手不得手はあるんだよ」
このことだけは言っておきたいようであった。
「アイオリアは拳でな。俺はあの世にってやつなんだよ」
「そういうことですか」
「それに超能力なら俺の次位に凄いのがいるぜ」
「誰です？それって」
「ムウとかシャカだよ」
この二人の名前を出したのだった。
「あの連中はそれこそな。かなりの超能力の使い手だぜ」
「御二方ですか」
「そういえばシャカ様は教皇様のお傍によくおられるそうで」
「あいつは特別だ」
何故かシャカには普段の毒舌がないデスマスクだった。
「いいか、一つ言っておく」
「はい！？」

「何をですか？」
「あいつだけは怒らせるな」
真顔でこう彼等に告げるのだった。
「あいつだけはな。いいな」
「怒らせるなって」
「そもそもあの方に御会いすることすら稀ですし」
「なあ」
そもそも黄金聖闘士は普段はそれぞれの守護する宮にいるのだ。
だから聖闘士達が会うことも滅多にないのだ。今回のデスマスクのように出撃することはあってもだ。
「ですからあの方を怒らせるなんて」
「ないですけれど」
「だったらいいんだよ」
それを聞いて安心したような顔になるデスマスクだった。
「相手が相手だしな」
「そうなんですか」
「とにかく忠告はしたぜ」
やはり真顔のデスマスクだった。
「いいな、あいつだけは怒らせるな」
「わかりました」
「よくわかりませんけれど」
「そういうことだ。じゃあ後でな」
ここまで彼等に言うと踵を返しそのまま何処かへと向かいだした。
「あのおっさんの禿頭を月に見立てて飲もうぜ」
「ええ、まあ」
「それなら」
彼等は今の辰巳をさす言葉に思わず笑ってしまった。
「是非共」
「行きましょう」
「しかしあのおっさんもな」

また辰巳のことを言うデスマスクだった。
「意外と若いんだろ？確か」
「そうらしいですね」
「まだ四十にもいっていませんよ」
「それであれか」
それについて色々と思うところのあるようなデスマスクだった。
「これ以上言ったら店に行った時に楽しみがなくなるから止めておくか」
「言うんですか」
「あのおっさんはいじるのが楽しいんだよ」
意外と趣味が悪い。
「今度は黄金の奴等全員で顔を出すのもいいな」
「それについてはまあ」
「お好きなようにとしか」
「さて、まあ話はそれ位にしてだ、本当にな」
「ええ。ではまた」
「あのおっさんの処で」
こう言い残して巨蟹宮に向かうデスマスクだった。デスマスクはまずは彼の仕事を終えた。しかしそれはまた新たな戦いのはじまりでもあった。

第十三話　完

２００８・９・２５

第十四話　死者の顔その一

第十四話　死者の顔

トラキアにあるアーレスの宮殿。そこの奥深くでカナンはエリスに対して述べていた。彼は他の八大公達の先に片膝をついて座りそのうえで彼の前に立つエリスに対して述べているのであった。後ろの八大公達はただ頭を垂れそこに控えているだけである。

「我等は九人の狂闘士達を失ったのだな」

「申し訳ありません」

こう述べて詫びるカナンであった。

「全ては私の責任です」

「いや、よい」

しかしここでのエリスの言葉は意外なものであった。

「それはいい。構わぬ」

「同志達の犠牲は構わないと」

「そうだ。彼等は死んだのではない」

「死んだのではない」

「わかっている筈だ、カナンよ」

その炎を思わせる目でカナンに言ってきた。

「我等狂闘士のことはな」

「無論です」

「ならば何も思うことはない」

また言うエリスであった。

「このことにはな」

「有り難き御言葉」

「そしてだ」

カナンに対して言い終えるとここで話を変えるエリスであった。

「皆の者」
「はい」
八大公は全員でエリスの言葉に応えた。
「まずはドイツでの戦いは終わりました」
「ではエリス様」
「次は」
「アメリカです」
次の場所を指定するエリスだった。
「そしてそこに向かうのは」
「誰か」
「私か？それとも」
「私なのか」
八大公達は急に色めき立った。既に顔を上げている。そのうえでお互いの顔を見合う。エリスはその彼等を見て女神らしい厳かな声で告げるのだった。
「ベール」
「はっ」
ベールのジークがエリスの言葉に応える。
「次は貴方です」
「わかりました。それでは」
「今回も向かうのは貴方と九人の狂闘士です」
「わかりました。それでは」
ジークはエリスの言葉を慎んだ様子で受けている。
「是非共。お任せ下さい」
「向こうも間違いなく黄金聖闘士を出して来る筈」
「相手にとって不足はありません」
何でもないといったようなジークの返事だった。
「誰であろうが。ただ」
「ただ？何ですか」
「相手は望みたいものです」

これがジークの望みであるようだ。
「このジークとしましては」
「誰なのですか、それは」
「カプリコーン」
静かな言葉だった。
「あの男こそを」
「そうですか。カプリコーンをですか」
「確かカプリコーンはその手に剣を持つ聖闘士」
ジークが言うのはそのことだった。
「ならば。このジークの相手にこそ相応しいです」
「では。そうなることを私からも祈りましょう」
エリスはジークの戦意を見て満足そうに微笑んでいる。
「より激しい戦いの為にも」
「有り難き御言葉」
こうしてジークが出陣することとなった。彼が宮殿を出る時に他の八大公達が見送っていた。神殿を思わせる柱が並ぶその前に集まり今その階段を降りようとするジークに声をかけたのである。
「ジークよ」
「何だ、カナンよ」
「一つ言っておく」
彼は冷静な声でカナンに告げてきた。
「わかっていると思うが黄金聖闘士の強さはかなりのものだ」
「そのようだな」
既に知っていると言わんばかりの口調であった。
「貴様程の男が分けるのだからな」
「キャンサーのデスマスク」
カナンの脳裏に実際にデスマスクの顔が浮かぶ。あの不敵な笑みと共に。
「その強さは尋常なものではなかった」
「同志達のうち五人が瞬く間にあの男によって倒されたのだったな」

「そのうえで私と分けたのだ」
「面白い話だ」
ここでジークは笑ってみせてきた。クールな笑みだった。

第十四話　死者の顔その二

「実にな」
「面白いというのか」
「そうだ」
その笑みでまた答えてみせる。
「戦いがいがある。違うか」
「そうだな。ジークの言う通りだ」
彼の言葉に賛成してきたのはドーマであった。
「我等狂闘士にとっては強い相手と戦うことこそが本望なのだからな」
「ふん、ドーマよ相変わらずだな貴様は」
「何っ！？」
ドーマは今の言葉に顔を顰めさせてきた。
「何が言いたい、貴様」
「今言ったまでのことよ」
彼に言ったのはレダだった。嘲笑うような笑みをドーマに対して向けている。
「貴様の闘い方は狂闘士のそれではない」
「この俺を愚弄するのか」
「愚弄！？残念だがそれは違う」
せせら笑いつつそれは否定してみせた。
「何故ならな」
「むっ！？」
「私が言っているのは本当のことだからだ」
堂々とドーマを馬鹿にしてみせたのであった。
「本当のことだからな。貴様のそれは狂闘士のそれではないのだ」
「それは一体どういう意味だ」
レダのからかいに対して真剣に返すドーマだった。

「レダよ、からかうのも大概にしておけよ」
「からかいか」
「違うのか？」
「では聞こう」
その笑みのままドーマに対して問う。
「ドーマよ、貴様は戦いを何だと心得ているのか」
「それは決まっている」
ドーマの言葉は何を言っているのか、と言わんばかりのものだった。
「相手を倒しその勝利をアーレス様に捧げるものだ。違うのか？」
「それが違うというのだ」
相変わらず相手を馬鹿にしたようなレダの笑みであった。
「それがな」
「ではどう違うのだ」
「確かにアーレス様に捧げはする」
「その通りではないか」
「捧げるものが違うのだ」
レダが言うのはこうだった。
「捧げるものがな。我等が捧げるべきものは」
「何だ？」
「血だ」
笑みが不敵なものになっていた。
「血こそだ。血こそアーレス様に捧げるものに相応しいのだ」
「勝利ではないのだな」
「勝利は最早当然のものだ」
今度は平気な笑みになっている。やはりその目の光はドーマを馬鹿にしたようなものであった。
「それだけではないというのだよ」
「血をか」
「より多くの血を捧げる」

レダはまた血という言葉を出してきた。
「この我等の戦衣と同じ色の血をな」
「確かにな」
レダの今の言葉に賛同してきたのは八大公のリーダー格であるリーヴェだった。彼は冷静な様子でレダとドーマを同時に見つつ答えたのである。
「その通りだ。我等の戦いは血塗られたもの」
「流石にわかっているようだな、リーヴェは」
「そのつもりだ。そしてだ」
「そして？」
「ジーク」
今度はジークに顔を向けるリーヴェだった。
「この度の戦いでは」
「わかっている」
応えるジークの目が鋭くなる。そのうえで言うのだった。
「必ず。聖闘士達の血をアーレス様に捧げようぞ」
「是非な。もっとも」
しかしここでリーヴェは少し考える顔を見せた。
「今はそこまでしなくともよいな」
「はい、そうです」
今述べたのはサリアであった。
「今は。戦えばそれでいいのですから」
「そうだったな、今はな」
ミシェイルがサリアの言葉に頷く。
「それだけでよかったな。むしろだ」
「アーレス様がお目覚めになられるその時だ」
今度言ったのはリゲルだった。

第十四話　死者の顔その三

「その時の攻勢だが」
「その時こそ我等の覇権が確立される時」
リーヴェの言葉はこれまでになく強い、確かなものだった。
「この地上においてな」
「ではジーク」
サリアがジークにかけた言葉は優しいものであった。
「この度の戦い、御願いしますね」
「わかった。では吉報を待っていろ」
「はい、是非」
微笑んでジークの言葉に頷く。ジークは彼のその顔を見届けるとまた背を向けて階段を降りていく。その彼の下に九人の異形の戦衣の者達が影の様に現われ左右には無数のインプ達が整列した。八大公の出陣の儀式であった。
「ジーク様御出陣！」
「火軍団よ集まれ！」
「いよいよだな」
「うむ」
彼の同僚であるほかの八大公達はその光景を見下ろしつつまた話しはじめた。
「奴の戦い振り、見せてもらうか」
「存分にな」
「では皆さん」
サリアが同志達に声をかけてきた。
「私達も去りましょう。自分達の場所に」
「そうだな。それではな」
「行くとしよう」
「はい、八魔神の間」

この名前を出すサリアであった。
「そこに。今から」
「行くとするか」
「それではな」
「そしてサリアよ」
リゲルが彼に声をかける。
「次は誰だ」
「次ですか」
「そうだ、次に出陣する八大公だ」
鋭く燃え上がる目でサリアを見つつ問う。
「それは誰だ。わかるか」
「そこまではわかりませんが」
一旦言葉を濁すサリアだった。
「ですが。ジークの相手になるであろう黄金聖闘士は察しがつきます」
「ではそれは誰だ」
「カプリコーンです」
こうリゲルに答えた。
「おそらくは、ですが」
「成程、カプリコーンか」
「あの男か」
それを聞いた八大公達の目がそれぞれ光る。
「ジークの相手には相応しいと言うべきか」
「思えばだ」
ここで彼等は先に出陣していたカナンを見る。
「カナン、貴様の相手はキャンサーだったな」
「如何にも」
同志達の言葉に冷徹なまでに落ち着いて答えてみせてきた。
「手強い相手だ」
「貴様と五分に渡り合うのだからな」

「それは当然だな」
このことは他の八大公にも容易にわかることだった。
「ではカプリコーンもだな」
「かなりの強さか」
「そうだろうな」
「それではだ」
彼等はシュラとジークの闘いについても予想を立てだした。
「我々は様子を見ておくとしよう。今度の戦いも期待できるな」
「我々と奴等の闘いから全てがはじまる」
「うむ」
めいめい頷く。頷きつつ次の戦い、そして自分達の戦いにも思いを馳せるのだった。来たるべき彼等自身の戦いにもであった。
その頃デスマスクは巨蟹宮に入ろうとしていた。その入り口に達したところでふと足を止めることになった。
「!?御前等」
「お疲れ様でした」
「どうやら何の傷もないようだな」
「おいおい、随分と俺を見くびってくれているようだな」
デスマスクは彼等に対してこう返した。やはり軽口と余裕の笑みは変わらない。
「あんな連中なんてな。どうってことはないぜ」
「そうですか」
ムウは微笑みと共に彼の言葉を受けた。見ればそこには他の黄金聖闘士達が集まっている。

第十四話　死者の顔その四

「それならいいのですがね」
「そうさ。しかし御前等」
ここでデスマスクは言うのだった。
「何でこんなところにいるんだ?持ち場には戻らねえのかよ」
「少し。時間ができまして」
こう返すムウだった。
「それでなのですよ」
「そうかよ。そういえばあいつはいねえな」
デスマスクは今度は彼等の顔触れを見回した。
「アイオロスの兄貴とサガの旦那はわかるとしてあの乙女座の野郎はいねえな」
「シャカは教皇の間に行っている」
カミュがデスマスクに答えた。
「何でも教皇に直接呼ばれたそうだ」
「またかよ。あいつ何かっていうと教皇の前に行っているな」
「シャカにはシャカの都合があるのだろう」
アルデバランは冷静にデスマスクに告げた。
「だから。そんなに気にすることはない」
「おめえの兄貴とサガの旦那はわかるんだよ」
デスマスクは今度はアイオリアに顔を向けた。
「わかるのか」
「何かと忙しい御仁だしな」
「!?どういうことだ」
アイオリアは今のデスマスクの言葉に眉を動かした。
「それは一体」
「御前もそのうちわかるさ」
しかしこれには答えようとしないデスマスクだった。

「そのうちな」
「そうか」
「それでだ。デスマスクよ」
「ああ」
シュラの言葉にはすぐに応える。
「中に入るのだな」
「当たり前だろ。ここは俺の宮殿だぞ」
このことははっきりと告げるデスマスクだった。
「俺が入らなくてどうするんだよ」
「それもそうだな」
「ですがデスマスク」
アフロディーテはここでデスマスクを見た。
「入ってもいいのですね」
「だから当たり前だろ。俺が入らなくてどうするんだよ」
「それはそうですが」
「では。今からだな」
ミロもデスマスクに問うた。
「行くか。いよいよな」
「よし、それじゃあな」
デスマスクは己の宮に入ろうとする。しかしここで何故か他の黄金聖闘士達も彼の後について行くのだった。デスマスクはその彼等に顔を向けてまた問うのだった。
「何で御前等まで来るんだよ」
「少し。思うところがありまして」
まず答えたのはムウだった。
「それでですが。いけませんか」
「他の黄金聖闘士が入って来るっていうのかよ」
「別に入ってはいけないということはない筈だが」
カミュは逆にデスマスクに問うた。
「違うか」

「まあそうだがな」
デスマスクもそれには異を唱えない。
「それはそうだ」
「ではよいのだな」
「ああ」
アルデバランに対して頷いたのは彼に対してだけではなかった。
「御前等も随分と物好きだな」
「どうにもな。自分でもそう思う」
アルデバラン自身もそれは認める。
「しかし。デスマスクよ」
「何だ、シュラ」
今度はシュラとの話になる。
「御前が一番わかっていると思うが」
「おいおい、何をだよ」
「貴方御自身のことです」
アルロディーテもまた言う。
「このことは。他ならぬ貴方が最も」
「どいつもこいつも色々と言ってくれるがな。俺は黄金聖闘士だぜ」
デスマスクの声と表情が強いものになった。
「俺が俺を認めなくてどうするんだよ」
「なら。いいのだな」
「俺がいいって言えばいいんだよ」
アイオリアに対しても返事は変わらない。
「このことじゃ御前等に言われても変わりはしねえぜ」
「そうか。ならいい」
「それではだ」
ミロが最後に言った。

第十四話　死者の顔その五

「入るぞ」
「ああ」
こうしてデスマスクを先頭に巨蟹宮に入る。そして中に入ると。ギリシアの神殿を思わせる巨大な宮殿の中を不気味な呻き声が響いていた。それは明らかに人の声だった。
「これは一体・・・・・・」
「何だ？」
アルデバランとアイオリアがまず顔を顰めさせた。
「人の呻き声が聞こえる」
「何故この様な場所に」
「すぐにわかるさ」
デスマスクは振り向くことなく二人に対して述べた。
「すぐにな」
「すぐにだと」
「デスマスク、まさか貴様」
「ほら、見えてきたぜ」
二人の言葉を遮るようにしてまた言った。
「あれだよ。見てみな」
「なっ、これは」
今度声をあげたのはミロだった。
「何と恐ろしい・・・・・・。これはどういうことだ」
「俺の技のことは知ってるよな」
「う、うむ」
ミロは異様なまでに落ち着いたデスマスクの声に対して言葉を返した。
「冥界の技だったな。代々のキャンサーの黄金聖闘士と同じく」
「それだよ。特に積尸気冥界波だな」

「あれか」
「あれを使ったらこうなるんだよ」
こうミロに言うのだった。
「こうな」
「だからなのか。それでは」
「これは貴殿が倒した狂闘士達の顔だな」
カミュは冷静さをここでも崩してはいない。
「そうだな」
「知ってるのかよ、カミュ」
「話は聞いていた」
やはり振り向かないデスマスクに言葉を返す。
「積尸気の技で死んだ者はその者の側で死者の顔となりその者が倒れるまで永劫に呻き声をあげ続けるとな。それは聞いていた」
「そういうことさ。だからだよ」
やはり振り向かないデスマスクであった。
「これはな」
「そうだったのか」
「多いな」
シュラはその死者の顔を見ながら言った。見れば宮の床や壁、柱、天井にまであるその顔は既に数え切れない程あった。その顔達を見ての言葉だ。
「どれだけあるかわからん」
「そうだろうな。随分殺してやったからな」
「そうか」
「全部インプ共だぜ」
「見れば女もいるぞ」
シュラはこのことをデスマスクに指摘してきた。
「そしてまだ子供も」
「そうか」
「老人もだ。全員インプだな」

「だったらまだいいさ」
デスマスクはここで意外な言葉を口にした。
「まだな」
「!?どういうことですかそれは」
アフロディーテが今のデスマスクの言葉に問い返した。
「デスマスク、まだいいとは」
「俺達は黄金聖闘士だ」
またこのことを言うデスマスクだった。
「俺達が出る時はどういう時だ?」
「世界に危機が訪れた時」
アフロディーテだけでなくここにいる全ての者がわかっていることだった。
「その時にこそ我々は」
「そうだよな。そういう時に多少の犠牲がどうとか言っていられるか?」
「何っ!?」
「デスマスク、何が言いたい」
今のデスマスクの言葉に言い返したのはアイオリアとアルデバランだった。
「犠牲だと」
「それはつまり」
「俺達の技はどれもこれもかなりのものだ」
「それはそうだが」
「しかし今の犠牲というのは」
「使えばどうなる?」
ここでも彼等の方を振り向かないデスマスクだった。

第十四話　死者の顔その六

「犠牲を出さないとか悠長なこと言っていられる状況じゃねえだろ。俺達が出るような事態はな」
「しかしだ」
ミロは少しムキになってデスマスクの今の言葉に反論する。
「我等はそれでもだ」
「いや、ミロよ」
「残念ですがそれはどうでしょうか」
シュラとアフロディーテがまずミロに反論する。
「我々の技は大地はおろか星さえも砕く」
「街一つ消し去るなぞ何ともないものなのですよ」
「しかしだ。それでも」
「関係ない者達を巻き込むというのはだ」
あくまでそれを受け入れようとしないアイオリアとアルデバランだった。二人の側にはミロもいる。
「聖闘士としてどうなのだ」
「如何なる状況とはいえ」
「それも仕方あるまい」
カミュはシュラ達の方についた。デスマスクも入れれば四人だ。
「我々が出るその時はこの大地を賭けなければならない時。その時に多少の犠牲は止むを得ない」
「そうだ、俺もまた同じだ」
「私もです」
シュラとアフロディーテは完全に意見を同じにしていた。
「悠長なことを言っていればより多くの犠牲が出るような場合ならば」
「多少の犠牲は。仕方ないことなのです」
「くっ、しかしだ」

「それでも」
「ムウ」
反論に窮するアイオリアとアルデバラン。しかしここでミロはこれまで沈黙を守っているムウに対して声をかけるのだった。
「貴様はどう思っているのだ」
「私ですか」
「そうだ、貴様はだ」
必死になりかけている。
「これについてどう思うのだ。犠牲は止むを得ないのか」
「デスマスク」
しかしムウはミロには答えずに前を向いたままのデスマスクに対して問うのであった。
「貴方はそれでいいのですか」
「何がだよ、ムウ」
「この死者達のことです」
彼が言うのはこのことだった。
「彼等は貴方が倒してきたもの」
「ああ」
「彼等の命のことはわかっていますね」
「嫌でも見ることになるさ」
ここでも前を向いたままだ。
「これからずっとな」
「その通りです。これこそが」
「わかってるんだよ、全部」
言葉は外観は居直りだったが意味は違っていた。
「全部な。キャンサーの黄金聖闘士になった時にな」
「黄金聖闘士になった時にですか」
「そうさ。これ位背負えなくて聖闘士なんかやってやれないんだよ」
ここでもデスマスクは言った。
「おめえ等だってそうだろ?そこんところはな」

「確かにな」
「その通りだ」
アルデバランとシュラがデスマスクの今の言葉に頷いた。
「敵を倒すのが聖闘士だ」
「その中で犠牲が出るのも止むを得ない」
「まあそういうことさ。俺はそういう考えさ」
「そして貴方は」
またムウがデスマスクに声をかける。
「それを背負っていかれるのですね」
「軽いもんだぜ」
ここではこう返してみせてきた。
「そんなもんな。一向にな」
「そうですか。わかりました」
「話は終わりか？じゃあ何か食うか？」
「何かですか」
「とりあえずな。一旦辰巳のおっさんの店に行って来るぜ」
「辰巳さん！？ああ、あの人だな」
アイオリアは少し考えたがすぐにそれが誰かわかった。
「日本から来ているグラード財団の」
「厳しい爺さんが会長やってるあそこだよ」
「そういえばあの御仁は」
カミュがふと気付いたように述べた。
「奥方はおられなかったな」
「確かそうでしたね」
アフロディーテもそれに頷く。

第十四話　死者の顔その七

「あの方は。独身でした」
「しかし。噂によればだ」
ミロが顔を顰めつつ言う。
「世界各地に愛人を持っているらしいな」
「おいおい、またそりゃすげえな」
デスマスクはそのことを聞いて意地悪そうな笑顔になった。
「じゃああれか？ガキが百人程いるっていうのかよ」
「デスマスク、それは幾ら何でも非常識ですよ」
ムウは笑ってその可能性は否定した。
「百人の子供なぞ。作れる筈がありません」
「普通はそうだな。まあちょっと行って来るぜ」
「そのお店にですね」
「何でも和食の店らしい」
このことはもうジャミアン達から聞いているのだった。
「結構楽しめそうだぜ」
「わかりました。それでは」
ムウが彼の言葉に応えた。
「事前偵察を御願いします」
「俺は味には五月蝿いからな」
これには自信のあるデスマスクだった。
「ちょっとやそっとじゃ合格点は出さねえぜ」
「しかし。和食か」
アルデバランは和食という部分に少し反応を見せていた。
「箸は使えるが。それでも」
「どうした？アルデバラン」
「牛肉は出るのだろうか」
「すき焼きがあるぜ」

デスマスクはすき焼きのことをアルデバランに話した。
「牛を薄く切ってな。そこに豆腐やら葱やら糸こんにゃくやらふやら入れてな。食うんだよ」
「そうか、すき焼きか」
「御前牛食うよな」
「うむ」
そのことは否定しなかった。
「御前と同じだ。俺の星座だがそれでもな」
「そういうのにこだわっていてはいられません
アフロディーテは冷静に述べる。
「それを言えば私は魚を食べることができません」
「俺もだ。山羊を食えなくなる」
シュラも同じ事情を抱えているのだった。
「それは困る」
「その通りです。和食は魚が有名だというとに」
「そういえばシャカは」
カミュはふとシャカについて考えた。
「ここにもいないな」
「彼は瞑想中です」
ムウがカミュに告げる。
「ですから今は」
「そうか。では仕方がないな」
「一応声をかけておくか」
ミロはさりげなく彼を気遣った。
「サガとアイオロスにも声をかけてな」
「そうだな、それがいい」
アイオリアが彼の意見に賛成する。
「一人でも多い方が楽しいものだからな」
「そういうことだな。じゃあそれでいいな」
「ええ。それで」

「辰巳さんのお店で」
「あのおっさんのことだ。出す料理は想像がつくな」
デスマスクはまた意地悪そうな笑みになった。
「蛸出して来るぜ、多分」
「蛸、といいますと」
「だからよ。あのおっさんの頭だよ」
ムウに対して言葉を返す。右手の人差し指を指し示すようにもしている。
「あのおっさんの頭。ほれ」
「ああ、そういうことですね」
「そうだよ。何なら俺が注文してやろうか？」
「それは悪趣味ではないのか？」
カミュがデスマスクを咎めるようにして声をかけてきた。
「あの人にも悪いぞ」
「何、ほんの挨拶ってやつだ」
彼にしてはその程度のことでしかないのだった。
「ほんのな。じゃあ今から行って来るからな」
「明日だな」
「明日聖域の入り口で集まるのですね」
「ああ、そこでいいな」
シュラとアフロディーテに対しても問う。

第十四話　死者の顔その八

「集まるのはな」
「わかった。それではな」
「そこでな」
他の黄金聖闘士達も彼の言葉に頷くのであった。
「じゃあな。話は終わったな」
「はい」
ムウが一同を代表して答えた。
「これで。終わりです」
「ならさっさと帰りな」
デスマスクは彼等にそれぞれの宮に帰るように促した。
「何時狂闘士共が来るかわからねえんだ。用心しねえとな」
「ふふふ、そうですね」
ムウが彼の言葉に楽しそうに笑った。
「その通りですね。確かに」
「何かおかしいのかよ」
「いえ」
それは否定するムウだった。
「では明日楽しみにしていますので」
「で、ここにはいねえけれどな」
デスマスクは最初からいなかった一人についても言及した。
「シャカの奴も誘うぜ」
「シャカか」
カミュはシャカの名を聞いて少し微妙な顔を見せた。
「あの男は来るのか。誘っても」
「どっちにしても声はかけねえと駄目だろ」
これはデスマスクの考えだった。
「一人でも抜けたらそれだけ寂しくなるからな」

「それはそうだな」
アルデバランはデスマスクのその言葉には納得する。
「やはりシャカがいなくてはな。最後はな」
「そうだな。やはり」
シュラもデスマスクの考えに賛同した。
「声だけは誘わなくてな」
「ただ。サガとアイオロスは来ないでしょう」
アフロディーテはこう読んでいた。
「それでも御二人にもですね」
「それが礼儀だからな」
アイオリアが述べた。
「やはり。全員に声をかけるべきだな」
「そういうことだ。まあ詳しい話は後になるな」
デスマスクは彼等の話をまとめて述べた。
「それでいい。全てな」
「よし。それではだ」
ミロが最後に応えた。
「明日楽しみにしておく」
「じゃあな」
去っていく仲間達に対して背中越しに声をかける。最後に声をかけた彼はそのまま巨蟹宮の中に残った。そこで鈴を鳴らし人を呼んだ。
「おい、誰かいるか」
「はい」
「デスマスク様何か」
「少しここを離れるぜ」
こう彼等に告げるのだった。
「ジャミアン達とちょっと行って来る」
「左様ですか、それでは」
「どうぞ」

「御苦労だったな」
聖衣の兜の部分を脱いだ。
「俺がいない間この巨蟹宮をよく守ってくれた。礼を言うぜ」
「いえ、それはまた」
「我等の責務ですので」
従者達は畏まってデスマスクに告げる。
「お気遣いなく」
「それは」
「まあ今は休んでろよ」
軽く彼等に告げた。
「ゆっくりとな」
「はあ」
「そう仰るのなら」
「ワインは届いたか？」
今度は彼等にこう問うてきた。
「モーゼルワイン。どうだ？」
「はい、今日」
「あれは一体」
「差し入れだよ」
宮の奥に向かいながら彼等に話した。擦れ違ってからだった。
「御前等にな。好きなだけ飲め」
「それも宜しいのですか？」
「ワインも」
「ソーセージやハムも届いてただろ」
このことも彼等に問うた。
「それで楽しくやりな」
「わかりました。それでは」
「御言葉に甘えて」
「俺も楽しんでくる」
また従者達に言う。

「御前等もな。息抜きをしときな」
「有り難うございます」
「背負うのは俺一人でいい」
今の言葉は従者達には届かなかった。
「俺一人でな。黄金聖闘士だけがな」
この言葉と共に宮の奥へと姿を消した。デスマスクはその背に死者達の呻き声を聞いていた。しかしそこに彼が知っている顔が五つだけないことには気付いていなかったのだった。

第十四話　　完

２００８・１０・５

第十五話　第二の戦いへその一

第二の戦いへ

「で、ここだよ」
「ここですか」
「そうさ」
私服姿の黄金聖闘士達が和風の木造りの店の前にいた。同じく木の看板には太く黒い文字で大きく店の名前が書かれていた。ムウはその文字を見て言う。
「風魔ですか」
「風魔！？」
皆ムウのその言葉を聞いて顔を顰めさせた。とりわけ店を案内したデスマスクはそうだった。
「また随分変わった名前だな」
「待て、デスマスク」
その彼にアルデバランが声をかけた。
「貴様店の名前は知らなかったのか」
「ああ、見ていなかったな」
彼もそれは認めた。
「店の名前より味が大事だったからな」
「味か」
「そうだろ？店にとって大事なのはまずそれだろ？」
こうアルデバランに問い返していた。
「だからだよ。位置は覚えたしそれでいいと思ったんだよ」
「そうだったのか」
「それでだ」
今度はカミュが彼に問う。見れば彼等はどれも端整なスーツを着ているが彼がとりわけその着こなしが端整である。
「この店は何がいいのだ？」

「何がって何がだよ」
「だからだ。料理だ」
彼が問うのはこのことだった。
「何がいいのだ、一体」
「とりあえず刺身と天麩羅はよかったな」
デスマスクは顎に右手を当ててこう述べた。
「悪くねえぜ。蕎麦だってな」
「そうか」
「とりあえず酒は日本酒だな」
デスマスクは酒についても言及する。
「それが駄目なら白ワインもあるぜ」
「ワインがあるのならな」
ミロはワインに注目していた。
「それでいい。日本酒はまだ飲んだことはないが」
「米から作る酒だ」
アルデバランがそのミロに説明する。
「あれはあれで美味いものだ」
「そうか。では一度飲んでみるとするか」
「それでだ。デスマスク」
「ああ」
デスマスクは今度はシュラの言葉に応える。
「やはり海の幸だな」
「別にそれでもいいだろ？」
「それどころか願ってもないことだ」
シュラは表情は変わらないがそれでも声は楽しそうなものだった。
「俺は海のものは好きだ」
「そうかい、じゃあ願ったり叶ったりだな」
「うむ」
「では入るとしましょう」
アフロディーテが店に入るように促す。

「まずは注文してからです」
「そうだな。確かにな」
アイオリアアフロディーテのその言葉に頷く。
「それでは入るとするか」
「それはそうとムウ」
「何でしょうか」
デスマスクの言葉に応えるムウだった。
「シャカは来るのか？」
「彼ですか」
「そうだよ。あいつにも声はかけたんだろ？」
「勿論です」
静かにデスマスクの問いに答える。
「行くとは言っていましたが」
「忘れたんじゃねえだろうな」
デスマスクは顔を顰めさせて呟いた。
「まさかとは思うけれどな」
「有り得るでしょうか」
「普通にあると思うぜ」
デスマスクはシャカについてこう見ていたのだった。
「あれで結構世間ずれしたところがあるからな、あいつは」
「確かにな」
「そういうところはありますね」
シュラとアフロディーテがデスマスクの言葉に頷く。

第十五話　第二の戦いへその二

「サガとアイオロスは来なかったようだな」
「御二人は無理でしたか」
「教皇に呼ばれているとのことだ」
二人にアルデバランが答える。
「それに聖域に黄金聖闘士が一人もいないという事態はまずいだろう。アテネにいるといってもな」
「言われればその通りだ」
カミュは自分達がそれぞれの宮を離れている今の事態に今更ながら気付いた。
「教皇はよしとして下さっておられるが」
「いざとなれば戻ることはできるがな」
ミロは自分達の動きから述べた。黄金聖闘士は全員が光速の動きができるのと共に瞬間移動も可能だ。つまり危急の際には瞬時にそれぞれの持ち場に戻ることができるのだ。
「まあいいじゃねえかよ」
デスマスクは強引に話をいいことにした。
「教皇が許して下さってるんだからな。たまには羽目を外さねえとな」
「御前はまた外し過ぎではないのか？」
アイオリアは真面目にデスマスクに問う。
「少しばかり」
「やる時はやるさ」
しかしデスマスクはアイオリアにこう返す。
「そういう御前だって来てるじゃねえか。ここまで来たらもう言いっこなしだぜ」
「それもそうか」
「そうだよ。じゃあ入るぜ」

こうして一同は店の中に入った。店は純和風で白く明るい光に照らされている。そしてテーブルや椅子は木造りでこれも白い光沢を見せている。白い壁には紙で色々と書かれている。見ればそれは日本語だった。

「本格的ですね」

「そうだろ」

入り口を通って最初に言ったのはミロだった。デスマスクがそれに応えている。

「完全に日本の雰囲気さ。和食はやっぱりまず雰囲気だよな」

「ええ、確かに」

「料理もそうだぜ」

笑って後ろにいる仲間達に告げる。

「完全に和風さ。いい感じにな」

「そうなのか」

「おい、親父」

顔を前に戻して前にいるカウンターのところにいる男に声をかけた。

「八人だ、いいか？」

「いえ、九人ですよ」

しかしここで急に声が聞こえてきた。

「九人です。お間違えなきよう」

「むっ！？この声は」

「まさか」

「はい、私です」

見ればカウンターに一人の男が座っていた。それは何とシャカだった。相変わらず目を閉じ物静かで何かを悟ったような表情でそこにいた。

「お待ちしていましたよ、皆さん」

「それはいいが」

「何故ここにいるのだ？」

ミロとカミュは怪訝な顔でそのシャカに問うた。
「待ち合わせの場所にはいなくて」
「どうしてここに」
「これもまた運命です」
二人の問いに対してシャカはこう返してきたのだった。
「私がここにいるのも」
「意味がわかりませんが」
「全くだ」
アフロディーテとシュラは彼の言葉の意味が理解できなかった。
「先にいずに場所も聞かずにどうして」
「お店の中に」
「私にわからないものはありません」
また訳のわからないことを言うシャカだった。他の者にとっては。
「誰が何処に行くのかさえも」
「その前に集合場所と時間言わなかったか？」
デスマスクは率直な部分を指摘した。
「ムウ、御前ちゃんと伝えたよな」
「はい」
ムウは静かにデスマスクに答えた。
「勿論。それはまず」
「じゃあ御前は人の話聞いてなかったのかよ」
「聞くまでもありません」
やはりシャカに普通の話は通用しない。
「わかっていたのですから」
「訳がわからないのだが」
「とにかくだ、シャカ」
シュラは首を捻りアイオリアはめげずにシャカに声をかけた。

第十五話　第二の戦いへその三

「御前も宴に参加するんだな」
「はい、そうです」
返答はもう決まっていた。
「これで九人ですね。楽しくやりましょう」
「そうだな。それではだ」
カミュがシャカの言葉に頷く。
「この店のオーナーはだ」
「おられますよ」
アフロディーテはシャカが座るそのカウンターを見た。
「あちらに。ほら」
「ああ、おっさん」
デスマスクが早速彼に声をかける。
「今日も来たぜ。宜しくな」
「・・・・・デスマスクか」
割烹着を着た辰巳がそこにいた。忌々しげな顔で彼を見ている。
「また来たのか、御前は」
「来ているも何も伝えておいただろ？」
ジロリと睨んできた辰巳のその視線はあっさりとスルーしている。
「今日も来るってな」
「来るなと言った筈だが」
「デスマスク、御前何をやったのだ？」
ミロは今の辰巳の言葉を聞いて目を顰めさせてデスマスクに問うた。
「辰巳さんかなり怒っているぞ」
「怒っているも何もだ。この男はな」
「ええ」
「何をしたんだ？こいつは」

「俺を蛸だ蛸だと散々言ったんだ」
やはり言わなくていいことを好き放題言ったデスマスクだった。
「しかも今日蛸の刺身と酢蛸を用意しておけとな」
「やはりそうだったか」
アルデバランはそれを聞いて納得したように頷く。
「そういうことをしたのだな」
「友好的に言ってたじゃねえか」
「貴様は人の気にしていることをよくも！」
やはり気にしていた辰巳だった。
「俺は禿ではない！禿ではないのだ！」
「じゃあ何なんだよ」
デスマスクは顔を真っ赤にさせる辰巳にまた言う。
「まだ若いんだろ？それで髪の毛が一本もないっていうはよ」
「これは髪型だ」
こう力説してきた。
「禿ではない。よく覚えておけ」
「んっ！？髪型かよ」
「そうだ」
胸を張って主張する辰巳だった。
「あえて剃っているのだ。心を引き締める為にな」
「何だ、そうだったのかよ」
「これでも大変なのだぞ」
辰巳はさらに力説する。
「毎日剃ってな。しかも肌に栄養を与えて」
「どうやって与えているのですか？」
「卵の白身をだ」
真剣にムウに答える。
「毎朝塗ってだ。これでも大変なのだ」
「何だよ、随分凝ってるんだな」
デスマスクはそこまで聞いてからまた頷く。

「髪型なら髪型ってちゃんと言えよ、おっさん」
「言ってそれでからかうのを止める貴様か？」
「それはないな」
アイオリアがデスマスクにかわって断言する。
「この男がそんなことで止める筈がない」
「そういうことだ。全く昨日は」
「私には見えます」
シャカが目を閉じつつ述べる。
「デスマスク、貴方はジャミアンやディオ達が止めるにも関わらず辰巳さんを散々からかい尽くしていましたね」
「何でわかるんだよ、そんなところまで」
「私にわからないことはありません」
まだ強引に主張するシャカだった。
「過去の出来事も。頭に入って来ます」
「何かすげえな、そりゃ」
「その結果です。そして」
「そして？」
デスマスク以外の七人がシャカに問う。

第十五話　第二の戦いへその四

「それでどうなったのだ？」
「何があった？」
「今日の予約をされましたね」
こう述べるシャカだった。
「私達九人の分も」
「九人分ですか」
「それではだ」
「一体それが何か」
「それこそが問題だ」
「ではデスマスクよ」
「教えてもらおう」
「それは何ですか？」
シャカからはじまりムウ、後は星座の順番でデスマスクに対して問う。デスマスクは丁度彼等全員を向こうに回す形になっていた。
「だからあれだよ」
「あれとは？」
「蛸だよ、蛸」
軽く笑いながら仲間達に述べた。
「茹蛸に蛸の刺身に酢蛸にな。蛸の天麩羅に唐揚げにわさび漬けにな」
「蛸ばかりではないか」
「他にはないのか？」
「他にもあるぜ」
これは保障するデスマスクだった。
「けれどな。メインは蛸で予約したんだよ」
「成程、そうなのか」
「そうさ。蛸っていえばよ」

ここで一面をまた見る。
「まあ食う奴ばかりだな」
「ギリシアでは普通に食べられる」
ギリシア出身のアイオリアが答えた。
「食べたことがある筈だが」
「まあな」
ギリシアは海に面している。だから蛸も普通に食べられるのだ。
当然ながらデスマスクもこのことはよく認識している。だから決してゲテモノではないのだ。アテネにおいては。
「それでも和食としてはどうだ？」
「少なくとも俺は食べたことがない」
「私もです」
アルデバランとシャカが答える。
「だから楽しみでもある」
「一体どの様な味なのか」
「それは食ってからのお楽しみってわけだ」
デスマスクは二人にこう返すだけだった。そのうえでまた言う。
「それじゃあよ。奥に座敷の部屋取ってあるからな」
「用意がいいな」
シュラがそれを聞いてデスマスクに言う。
「部屋まで取っておいたのは」
「こういうことの基本さ」
デスマスクにとってはこの程度はどうということはない。言葉にそう含まれていた。
「基本中の基本だぜ。こんなのはな」
「そうだな。それではだ」
「参りましょう」
カミュとアフロディーテが言う。
「その奥座敷にな」
「畳の部屋ですね」

「ああ、そうさ」
アフロディーテの質問に答える。
「メニューは向こうが運んでくれる。俺達はそれを待つだけさ」
「よし、わかった」
ミロが今のデスマスクの言葉に頷く。
「では蛸料理を楽しませてもらおう」
「日本の蛸料理」
ムウが呟く。
「楽しみですね」
こうして一同はその奥座敷に入った。そこはやはり畳の部屋であり木造の足の短い卓を中央にそれぞれ座布団が置かれている。程なくしてまずは蛸わさびに蛸の塩辛が運ばれてきた。酒はデスマスクが言っていた日本酒である。
「これは飲んだことあったか？」
「一応はな」
皆その手に杯を持っている。その中でアルデバランがデスマスクの問いに答える。杯はその巨体に比べてあまりに小さく見える。

第十五話　第二の戦いへその五

「あることはあるが米で作った酒か」
「珍しいっていうのか？」
「ギリシアではな」
「まあここはワインばかりだからな」
「ワインも用意してあるのだろう？」
「ああ」
カミュの問いに答える。
「白ワインさ」
「そうか。ならいいが」
「魚介類には白です」
アフロディーテがここで言う。
「やはりそれに限ります」
「そういうと思ってそっちも用意してあるさ」
「ではどちらに」
「そこさ」
ムウの問いに応えて部屋の端を指差す。そこにボトルが何本も氷に入れられて置かれている。銘柄を見ればどれもよいものばかりである。
「そこに置いてもらってるさ」
「それも用意してあるということですか」
「どっちでも好きなの選びな」
こう言って早速一杯やるデスマスクだった。
「美味いぜ、この酒はよ」
「ああ、確かにな」
次に飲んだのはシュラだった。
「では早速」
「やるぜ。全員でな」

こうして彼等は日本の蛸料理を楽しんだのであった。美酒がそれを助け宴は楽しく過ごされた。そしてその宴の次の日。黄金聖闘士達は教皇の前に集まっていた。
「まずはデスマスクよ」
「はい」
「御苦労だった」
一同の目の前で再び彼の功を労うのだった。
「これでまずは一つだ」
「一つですか」
「そうだ。ベルゼブブのカナンは退けた」
ここで重要なのは退けただけでまだ滅んではいないということだ。
「しかしまたすぐに狂闘士が出陣した」
「もうですか」
「そしてその場所は」
「アメリカだ」
教皇は彼等の問いに応え戦場を述べた。
「アメリカに向かっている。狂闘士の数は魔神達が十人」
「やはり」
サガはその数を聞いて述べた。
「十人ですか。彼等は」
「これは前と同じだ」
静かにサガの言葉に答える。
「そして八大公はだ」
「どの者ですか？」
「ベールだ」
教皇はまずはその司る魔神の名で告げた。
「ベールのジークが出陣している」
「あの男がですか」
「そうだ」
そのうえでまた黄金聖闘士達に対して告げてきた。

「相手は狂闘士きっての剣の使い手だ」
「確かに」
「そもそもベールは魔神きっての剣の使い手でした」
このことは黄金聖闘士達は皆把握していた。
「それでは教皇」
「この度我々が誰が」
「出陣するのでしょうか」
「それはもう決定している」
教皇は厳かな声で彼等に告げた。
「シュラよ」
「はっ」
名を呼ばれたシュラがすぐに教皇に応えた。
「御前に行ってもらう。いいな」
「有り難き御言葉」
シュラは片膝をついたまま教皇に対して頭を垂れて返礼した。

第十五話　第二の戦いへその六

「それではすぐにでも」
「まずは共に行く白銀及び青銅の者も選ぶか」
「それはお任せ願えますか」
「うむ、それは任せよう」
即答であった。
「デスマスクの時と同じくな」
「はっ、それでは」
「そしてだ」
教皇はさらに言ってきた。
「アメリカだが」
「存じています」
シュラはすぐに言葉を返してきた。
「既に。あの国のことは」
「以前に行ったことがあったな、確か」
「はい、あれはシカゴでしたが」
「うむ、そうだった」
教皇はシュラの言葉に頷く。
「あの時か」
「はい。聖域に到着する前に」
「あれは御苦労だった」
あらためてシュラに礼を述べてきた。
「急なことだったがな」
「そういえば教皇」
アイオロスがふと曇った顔で述べてきた。
「聖戦直前に世界各地で異変が起こりました」
「そうだ」
今度はアイオロスの言葉に応える教皇だった。

「それはシュラだけではない」
「シュラだけではなく」
「ここにいる九人全てに向かってもらい収めたのだ」
「左様でしたか」
「御前達には今まで内密だったな」
「何かありましたか？」
「あの時考えたのだ」
こうアイオロスに返す。
「そのまま向かわせてはだ」
「ええ」
「アーレスの軍勢と衝突してしまうと思ってな」
「アーレスのですか」
「その各地での天災だが」
このことについても話す。
「あれはアーレスの軍勢の仕業だったのだ」
「やはり」
それを聞いたサガの目が光る。
「左様でしたか」
「察しはついたようだな」
「はい、それは」
静かに教皇に答えるサガであった。
「つきました」
「そうか、やはりな」
「では教皇」
またアイオロスが教皇に問うてきた。
「それを引き起こしたのは」
「インプ達だ」
「雑兵達ですか」
「その通りだ。しかしそれでもだ」
「黄金聖闘士が向かわなければならない程のものを引き起こすとい

うのですか」
「それはまた」
それを聞いたアイオロスの目も動く。
「侮れませんね」
「いや、大したことはねえぜ」
しかしここでデスマスクが軽口を言ってきた。
「この俺がよ。皆殺しにしてやったぜ、ドイツじゃよ」
「果たしてそうか？」
その彼に教皇が直接問うてきた。
「果たしてそれ程余裕だったか、デスマスクよ」
「教皇、それは」
「本来の御前ならば技を使う必要もなかった筈だ」
彼がデスマスクに問うのはこのことだった。
「雑兵相手ならばな。違うか」
「それは」
「そうだな。御前に技を使わせた」
黄金聖闘士に技を使わせる、それだけでも驚くべきことなのだ。
光の動きと第七の感を持つ彼等をして技を出させるというその強さは。

第十五話　第二の戦いへその七

「それだけでもだ。侮れないのだ」
「それでは教皇」
その出陣するシュラがここでまた口を開いてきた。
「あの時の雑兵達もまた」
「それは当然のことだ」
言うまでもない、そう言ってきた。
「出て来るぞ。それもかなりの数がな」
「わかりました。それでは」
「それも用心しておけ、そのうえでだ」
「八大公の一人ベールのジーク」
この男の名前も告げられた。
「あの男もですね」
「そして魔神が九人」
彼の配下である。
「これが彼等の基本戦力だ」
「左様ですか」
「あれだぜ」
またデスマスクが言う。今度はシュラに顔を向けてきている。
「御前なら苦戦かもな」
「苦戦か」
「俺は楽勝だったがな」
「デスマスクよ」
また教皇が彼を注意する。
「それは技を使わないで済んでから言える言葉だ」
「わかってますよ。教皇は厳しいな」
「口は慎め」
流石の彼も教皇には勝てなかった。

「よいな」
「はい」
頷いたのが何よりの証拠であった。
「ではシュラよ」
「はっ」
デスマスクを黙らせてまたシュラに声を掛ける。シュラもそれに応える。
「頼むぞ」
「わかりました」
こうしてシュラの出陣となった。彼の出陣の際にはデスマスクの時と同じように他の黄金聖闘士達が見送るのだった。
「精々頑張るんだな」
まずはデスマスクが彼に告げた。
「死なないようにな」
「俺は死なん」
そのデスマスクに対して一言で返す。
「必ず。狂闘士達を一人残らず切り捨てる」
「貴方の実力なら大抵の相手は退けられるでしょう」
アフロディーテも彼の実力はよくわかっていた。だがそれでも言うのだった。
「ですが。油断はなさらぬよう」
「油断はか」
「八大公がいる」
カミュの目は冷静だった。
「既に出ているな」
「俺の相手は」
「ベールのジーク」
ムウもまた彼の名を出した。
「貴方が剣ならば。彼もまた剣ですから」
「ベール。魔神の中でも随一の剣の使い手だったな」

シュラはそのベールという魔神を知っていた。彼等はアーレスの下でかつてこの地上を支配下に収めんと聖闘士達と戦いあと一歩まで追い詰めた歴史があるのだ。その時そのベールは剣で聖闘士達を圧倒しているのだ。

「ならばやはり」

「御前が出て来るとわかればあの男で間違いないな」

アルデバランも言う。

「それでな」

「そうなればこちらとしてもいいことだ」

「勝てるというのか」

「聖闘士に敗北はない」

こうミロに返す。

「特に我々黄金聖闘士にはな。そうだったな」

「確かにな」

「だからだ。では行こう」

ここまで話して向かおうとする。その彼にアイオリアが声をかける。

「待て、シュラ」

「何だ？」

「御前が行くのはアメリカだったな」

「そうだ」

こうアイオリアに返す。

「グランドキャニオンだ」

「荒野です」

シャカが彼に告げる。

「そこでの戦術もお考え下さい」

「わかっている。そのことは同行する白銀及び青銅の者達にも告げておく」

最後にこう返してアメリカに向かうシュラだった。その彼を見送ってからサガとアイオロスは二人だけで話をするのだった。場所は

人馬宮だった。

第十五話　第二の戦いへその八

「では今度も私が行こう」
「また君が行くのか」
「そうさせてもらいたい」
サガはこうアイオロスに言うのだった。
「シュラは御前に遠慮しているところがあるようだからな」
「それでか」
「シュラの正義は貫く正義だ」
サガはシュラの考えを見抜いていた。
「その手に持つ剣でな」
「私の考える正義と似ているのかも知れないな」
アイオロスは彼の話を聞いてこう思ったのだった。
「若しかしてな」
「そうかも知れない。だから教皇は私に任じられた」
黄金聖闘士の出陣を決めるのは教皇だ。このことにおいては黄金聖闘士といえど白銀や青銅の者達と全く同じである。権限はまるで違うにしろだ。
「私はそう見ている」
「教皇。あの方が考えておられることなら間違いはあるまい」
アイオロスは教皇に対して信頼の言葉を述べた。
「それならばな」
「伊達に先の聖戦を生き残られたわけではない」
サガは言う。現教皇であるシオンは元々はアリエスの黄金聖闘士だった。彼は冥皇ハーデスとの戦いに生き残ったたった二人の聖闘士の一人であり教皇となってから聖域の復興に尽くしてきた人物だ。それだけに聖域での信頼も絶対的なものがあるのだ。
「それだけのものはある」
「そうだな。ではサガよ」

「うむ」
「デスマスクの時と同じく」
ドイツでの時のことが言及された。
「頼むぞ」
「この戦い敗れるわけにはいかない」
答えるサガの言葉が強くなる。
「我々にとってな」
「そうだ。アーレスはまだ目覚めてはいない」
このこともまた言う。
「目覚めさせれば我々にとって絶体絶命の危機となる」
「狂闘士達だけでなくあの争いの女神エリスもいる」
彼女の存在もまた彼等にとっては大きな脅威であった。
「この戦い。それでも勝たなければならない」
「だからこそ。アメリカでの戦いも頼んだ」
「行かせてもらう」
サガは一人出陣した。今出陣したそのことを知る者は教皇とアイオロスだけだった。しかし聖域の打つ手は着実にアメリカに向けられていたのだった。
アーレスの宮殿ではエリスが彼女自身の座にいた。そのうえで自身の前に控えるインプ達に対して問うていた。
「ジーク達はもうアメリカに発ちましたね」
「はい、既に」
「行かれました」
彼等は静かにエリスに答えた。
「やはり行かれたのは十人です」
「ドイツの時と同じく」
「ドイツではキャンサーのデスマスクにしてやられました」
その時のことを思い出した声が忌々しげなものになる。
「ですがそれでも」
「はい、封印がまずは一つ」

「解けたのはいいとしましょう」
エリスの声はすぐに元に戻った。
「それで。倒れた狂闘士達もアーレス様の御力があればまた立ち上がります」
「そうですね。あの方々はそれで立ち上がられます」
「ですから」
「犠牲を恐れないことです」
エリスの声が強くなった。
「既にジークはこのことをわきまえています」
ジークに対して強い信頼があるのがわかる言葉だった。
「ですから。アメリカでの戦いは彼に任せています」
「左様ですか」
「そしてそのうえで」
エリスの言葉はさらに続く。
「アーレス様の股肱の者達」
「あの方々ですか」
「左様。あの者達だ」
インプ達への返答は鋭いものだった。

第十五話　第ニの戦いへその九

「この戦いは我等にとって何か」
「何かですか」
「そうだ。かつて我々はこの地上を手に入れんと聖域に戦いを挑んだ」
その過去の聖戦のことである。冥皇ハーデスとの聖戦に匹敵するとまで言われたその激しい聖戦であったと伝えられている。
「だが。我々は敗れ冥界に逃げ込むことになった」
「無念なことに」
「しかし今はこうしてようやく」
「左様。再び地上に戻っては来れた」
しかしそれで終わりではないのだ。彼等にとっては。
「だが。戦いで勝利を収めるには狂闘士達とあの者達の力が必要なのだ」
「あの者達の」
「ではいずれは」
「あの方々の封印も」
「これは私が解放しよう」
エリスは厳かな声で告げた。
「この力でな。あの者達とアーレス様が戻られれば」
「アーレス様が戻られる」
「さすれば。我々の勝利はなったも同じ」
インプ達はアーレスの言葉を聞いてそれぞれの顔を晴れやかなものにさせた。
「ではこれまで通り戦いを続けるのですね」
「アーレス様の為に」
「アーレス様は血を好まれる」
まさにそれがアーレスなのだ。彼は同じ戦いを司るとはいっても

アテナとは全く違っていた。アテナの戦いはあくまで護る為のものでありそこには知性があるのに対してアーレスのそれはただ殺伐としているだけである。彼の戦いは攻めただひたすら殺戮を貪るものなのだ。

「だからこそ。戦いを行うのだ」

「この戦いはアーレス様の為の戦い」

「そうしてアーレス様が戻られれば」

「この世はアーレス様のものとなる」

語るエリスのその顔に凄みが宿った。

「この世は戦いに彩られ」

「血に染まる世界となる」

「アーレス様の好まれる血生臭い世と」

「ではそなた達は今はこのトラキアを守っているのだ」

今己の前にいるインプ達にはこう告げた。

「よいな。時が来れば動くがよい」

「はっ、ではそれまでは」

「今は。城を守らせて頂きます」

「アーレス様が戻られるこの城に」

「八大公達も力を尽くしてくれている」

エリスはそのことに満足していた。

「そして狂闘士達もな。よいことだ」

彼女は既に多くの狂闘士達を失っているがそれでも今は余裕を見せていた。まるでそれはどうとでもなるように。そのうえで今トラキアのアーレスの宮殿における己の座から全てを見渡すのだった。

争いを司る女神として。

第十五話　　完

2009・2・27

第十六話　西部にてその一

西部にて

シオンは己の前にシャカを呼んでいた。そしてそのうえで彼に問うていた。

「シュラはもうアメリカに着いたな」

「はい、今しがた」

シャカはシオンの問いに静かに答える。片膝をつきそのうえで目を閉じたまま彼に答えるのだった。

「アメリカに着きました。そのまま連れている白銀及び青銅の者達と共に然るべき場所に向かっています」

「アメリカは広い」

シオンは言った。

「だが。既にその場所はわかっているのだな」

「狂闘士達の小宇宙を追って」

「その場所にだな」

「はい。八大公の一人ベールのジークはニューヨークから南西に下っています」

「南西というとだ」

シオンの頭の中でアメリカの地図が描かれた。彼はそこからある場所を見出した。

「あの場所か」

「そうです、あの場所に向かっています」

シャカは答えた。

「まるでシュラ達を誘い込む様に」

「ドイツでの戦いと同じだな」

シオンは彼の話を聞いて述べた。

「聖闘士達を引き寄せそこで戦うか」

「どうやら彼等には何らかの考えがあるようです」
「そのようだな」
シャカもシオンも同じものを見抜いていた。両者共流石であった。
「それが何かはまだわからないが」
「少なくとも八大公をそれぞれ出陣させています」
「彼等にとっての切り札だ」
聖域においては十二人の黄金聖闘士がそうである。彼等を出陣させる時は世界にとって危機が迫っている時だ。それだけに彼等が出陣した時は多少の犠牲は止むを得ないともされる。それ程の重いものも備えているのだ。
その黄金聖闘士達と同じ位置にいるのはポセイドンの海闘士達では七大海将軍達でありハーデスの冥闘士達では三巨頭だ。そして今彼等が対峙しているアーレスの狂闘士達では八大公だ。その力は間違いなく黄金聖闘士に匹敵するものがある。それはデスマスクとカナンの闘いで既に実証されていた。
「その彼等をそれぞれ出している」
「何かあります」
「今彼等には主がいない」
シオンは今度はこのことを述べた。
「戦皇アーレスがな」
「今アーレスは冥界の奥深くにいます」
「先のあの神との聖戦以来な」
シオンはシャカに応えて述べた。
「そこにいる。実質的に封印されていると考えていい」
「封印、ですか」
シャカは教皇の言葉にふと言葉を止めた。
「だからこそ今この聖戦に姿を現わさないのですね」
「そうだ。我等にとってはそれが救いだがな」
「確かに」
「しかし。油断はできない」

流石に教皇としてそれはなかった。
「狂闘士達はあまりに強い」
「はい」
「戦いだけを求める血塗られた戦士であるだけはある」
こう評した。
「その彼等に対することができるのはやはり御前達だけなのだ」
「我等だけですか」
「シャカ、御前にはこの聖域の護りを頼む」
彼はそれに専念させることにしたのである。これは教皇としての彼の判断である。
「そして他の者達を随時出陣させていく」
「黄金聖闘士を一つの戦場に同時にですか」
「あの冥皇ハーデスとの戦いでもなかったことだ」
シオンが生き抜いたあの時の戦いである。あの時の戦いで彼は多くの仲間達を失いまた自身も多くの死線を潜り抜け血と屍を見ていた。だからこそ知っていた。
「それはな」
「しかし今はそれをあえてですか」
「それだけアーレスの軍は強い」
だからなのであった。
「だからだ。サガとアイオロスには負担をかけるがな」
「そのことですが」
シャカはここでまた教皇に対して言ってきた。
「教皇」
「うむ」
「どうやらアーレスの軍勢は彼等だけではないようです」
「言い伝えに残っているな」
シオンは静かに述べた。

第十六話　西部にてその二

「四柱の神々だな」
「そうです。まだ目覚めてはいませんが」
「目覚めればその時は大きな脅威となる」
シオンは言う。
「確実にだ。ただでさえ狂闘士達に対しても激しい戦いを繰り広げているというのにだ」
「その通りです。しかし敗れることはできません」
シャカの言葉も何時になく鋭いものになっていた。
「何があっても」
「今出陣しているシュラもだ。決してな」
彼等はシュラの勝利を願っていた。その時彼はニューヨークから陸路で南西部に向かっていた。当然ながら狂闘士達を追ってのことだ。
「それでシュラ様」
「狂闘士達の行く先ですが」
「小宇宙は感じている」
シュラがサジッタのトレミーとハウンドのアクテリオンに応えていた。今彼等は聖投資の一人が運転するマイクロバスに乗っていた。そのうえで話をしていた。
「確かにな」
「それで今こうして南西部に向かっているわけですが」
「しかしです」
トレミーとアクテリオンは難しい顔をしてシュラに述べた。見ればトレミーは細身で鋭利な顔をしておりアクテリオンは何かを見抜くような目をしている。
「果たして何処に行くかですね」
「まずそれがわかりません」

こうシュラに言うのだった。彼等は今は私服姿でありズボンだ。
「一体何処に行くのかが」
「南西といえばテキサスの辺りですが」
「テキサスか」
シュラはテキサスという地名を聞いてまた考える顔になった。そのうえでまた述べる。
「あの場所は独特の場所だったな」
「一面見渡す限りの荒野です」
「それこそ決闘に相応しい場所です」
「決闘か」
シュラはアクテリオンの言葉を聞きそのうえで述べた。
「だとすればそれを考えてのことかも知れない」
「それとは？」
「一体」
「狂闘士は闘いにより生きている」
その血の色の戦衣にもそれは現われている。
「その彼等が我等を導く場所といえば」
「やはり戦場ですね」
「それ以外はありません」
二人もそれはよくわかっていた。
「ではやはり彼等は我々を闘いに相応しい場所に誘い込んでいると」
「そういうことになりますが」
「それならそれで好都合ではある」
シュラは二人の言葉を聞きながら言った。
「このシュラの剣で一人残らず斬り捨ててやろう」
「我等もまた」
「及ばずながら」
ここで青銅の者達にシュラに対して言ってきた。彫刻具星座のライマンと彫刻室星座のオズがまず声をかけてきた。ライマンは黒い髪の優男でオズは銀色の髪を持つ何処か神秘的な少年だった。

「闘わせて頂きます」
「ですから。御安心下さい」
「油断はするな」
シュラはその二人にも沈着な声をかけた。
「決してな」
「はい、それはわかっています」
「ドイツでもデスマスク様が苦戦されたそうですし」
「ベルゼブブのカナン」
シュラはそのデスマスクと闘った男の名を口にした。
「あのデスマスクと闘い生きているとはな」
「黄金聖闘士といえば聖域の象徴とも言える存在」
「その方と分けられるなぞ」
「俺の相手はベールのジーク」
シュラは己の相手が誰かよくわかっていた。
「この男は。倒しておこう」
「今後の戦いの為にも」
「そうですね」
次に言葉を出してきたのはレチクル星座のサミュエルと六分儀星座のザンドルフだった。サミュエルは車を運転しており険しい顔立ちの赤髪の男だ。ザンドルフは癖のある髪をしている小柄な男だった。

第十六話　西部にてその三

「そして狂闘士は九人ですか」
「八大公の一人を入れて十人」
ドイツでの戦いと同じ数であった。
「対するこちらは七人です」
アステリオンが述べた。
「全員で」
「そして狂闘士には無数の兵達がいます」
トレミーはその狂闘士の兵達について言及した。
「インプ達が」
「その兵達の相手は御前達に任せる」
シュラはインプ達の名を聞いてこう言った。
「狂闘士達はこのシュラが相手をする」
「シュラ様御一人でですか？」
「それは」
「構うことはない」
驚きの声をあげるサミュエルとザンドルフに返す。
「奴等は魔神だ」
「はい、そうです」
「その戦衣にあるのは」
またトレミーとアステリオンが応える。彼等の戦衣は古の魔神達のものだ。すなわちそれを身に纏う彼等こそ魔神なのである。
「その十人の魔神達の相手を御一人で為さるのは」
「どうも」
「黄金聖闘士を甘く見ないことだ」
オズとライマンに返す声は先程よりも鋭いものになっていた。
「その覚悟なくしてなれるものではない」
「覚悟なくしてですか」

「そういうことだ。そして」
「そして？」
「まずはここで来たか」
シュラの言葉が短いものになった。
「思ったより早かったな」
「むっ！？」
「この小宇宙は」
アステリオン達も気付いたのだった。車の周りに無数の小宇宙が集まっていることに。そしてその小宇宙はどれも殺気に満ちたものだった。
「貴様等、まさか」
「アーレスの者達か」
「如何にも」
彼等は車から出て来たそのアステリオン達に対して答えた。
「我等はインプ」
「この戦衣を見ればわかるな」
「ふん、雑兵か」
トレミーは彼等の名を聞いてあえて挑発するように言葉を出した。
「雑兵共が我等を防ぐつもりか」
「ただの雑兵とは思わないことだな」
「少なくとも聖域の兵隊共とは違うぞ」
「何っ！？」
「聖域を愚弄するのか」
今のインプ達の言葉に青銅の者達も反応を示した。
「ならば相手になるぞ」
「いいか？」
「いいかも何もここで貴様等を倒すつもりだ」
「我等でな」
「愚かな」
アステリオンは彼等のその言葉を受けてそのうえで彼等に対して

冷笑を与えた。
「このアステリオンの速さに貴様等程度が適うと思っているのか」
「ハウンドのアステリオンか」
「如何にも」
また彼等に対して答えた。
「その通りだ。名前は知っているようだな」
「ここで白銀聖闘士を倒せば」
「今後の戦いが有利になる」
インプ達は三叉の槍を手にジリ、と前に出たのだった。
「覚悟するのだ、ハウンドよ」
「他の聖闘士達もな」
「トレミー」
アステリオンは目を一旦閉じて傍らにいるトレミーに声をかけた。

第十六話　西部にてその四

「御前は休んでいていい」
「一人で闘うつもりか」
「そうだ。青銅の者達も休んでおけ」
「えっ、いいのですか！？」
「アステリオン。しかし」
「このアステリオンの敵ではない」
戦う前からそれがわかっているといった言葉だった。
「だからだ。ここは」
「いや、待て」
しかしここでまた声がした。
「アステリオン。御前も休んでいるのだ」
「！？シュラ様」
「まさか」
「そう、そのまさかだ」
そのシュラがアステリオンより前に出て来たのだった。
「御前達は今回の出陣の準備に追われ続けていた。今はまだ休んでいることだ」
「ですがそれは」
「構うことはない。俺が行く」
こう言ってアステリオン達に対して言わせない。
「このインプ達の相手をさせてもらう」
「左様ですか」
聖域において最高位にありその言葉は教皇に続いて絶対の言葉を持っている黄金聖闘士の言葉に従わないことはできなかった。アステリオン達も彼の言葉に頷くのだった。
「それでは。シュラ様ここは」
「お任せします」

「そういうことだ。狂闘士達よ」
シュラはさらに彼等の前に出た。
「ここはこのシュラが相手をしよう。それでいいな」
「カプリコーンのシュラがここでか」
「まさかここで」
インプ達も黄金聖闘士が前に出て来て臆するものがあった。
「だがここで黄金聖闘士を倒せば」
「これでジーク様を安心させることができる」
こう言って彼等は槍を手にそのうえで前に出た。彼等も。
「その為にもカプリコーンよ」
「覚悟するのだ」
「では。行くぞ」
シュラの言葉がここで鋭くなった。そして。彼の頭上に黄金の箱が姿を現わしたのだった。
「あれは!?」
「まさか」
「そうだ。そのまさかだ」
シュラはその箱を見て驚きの声をあげるインプ達に対して告げた。
「これこそがカプリコーンの聖衣だ」
「あれが・・・・・・」
「それでは今から」
箱が開きそこから聖衣が姿を現わす。そうして空中でそれぞれのパーツに別れシュラの身体を包んでいく。マントまでそこにはありこうしてカプリコーンの聖衣を纏ったシュラが姿を現わしたのであった。
「カプリコーンの聖衣!」
「遂に出て来たか!」
「では行くぞ」
シュラは右手を手刀の形にしたうえでインプ達に対して言う。
「このシュラの剣。受けてみるがいい」

「ほざけ、黄金聖闘士といえど！」
「この数の我等に対して勝てると思うか！」
少なくとも彼等は臆病ではなかった。黄金聖衣を身に纏ったシュラを前にしてもそれでも果敢に武器を手に彼に対して向かう。
シュラはその彼等を冷静に見ていた。右手は手刀のままだ。そうしてその手刀を縦横無尽に振ってきた。
「エクスカリバー！」
それと共に技の名を叫ぶ。
「この剣を受けて生きていられた者はいない！」
「なっ、これは！」
「我等の戦衣が！」
シュラのエクスカリバーはインプ達の戦衣をも切り裂く。そうして彼等自身も切り刻みそこに倒れさせたのだった。
一瞬だった。そこにいたインプ達は一人残らず倒れてしまった。その中のまだ息のある一人が荒野に倒れながらもそれでも断末魔の呻き声をあげるのだった。
「これが黄金聖闘士の力なのか・・・・・・」
「この力、今見た筈だ」
シュラはその彼に対して述べた。既に立っているインプはいない。
「このシュラのエクスカリバーをな」
「まさしく聖剣」
そのインプは言った。
「ジーク様・・・・・・その魔剣でこの男を」
彼はシュラの剣を聖剣と言ったうえでジークの剣についても言いそのうえで事切れた。この言葉はシュラ達の耳にも入った。

第十六話　西部にてその五

「魔剣・・・・・・」
「それがベールのジークの剣なのか」
「そのようだな」
シュラはアステリオンとトレミーに対して述べた。
「あの男の剣はそれか」
「そしてそのジークはこれから先にいる」
「我等を戦場で待つ」
「問題はそれが何処かですが」
「そうだな。おそらくはだ」
シュラはここで彼等の小宇宙を探ると共に己の考えを述べるのだった。
「グランドキャニオンか」
「グランドキャニオン！？」
「そうだ。あそこでの闘いになる」
こう述べるのだった。
「おそらくはな」
「成程、グランドキャニオンなら」
「闘う場所に相応しい」
サミュエルとザンドルフがそれぞれ言う。
「ではそこに向かいましょう」
「今から急行して」
「いや、それには及ばない」
彼等の案はここでは退けた。
「それにはな」
「ではシュラ様」
「どうされるおつもりですか？」
オズとライマンが怪訝な顔になって彼に問うた。

「このままでは彼等は我々への迎撃態勢を整えますが」
「それでもですか」
「それならばそれでいい」
やはりそれをいいとするのだった。
「それでな」
「宜しいのですか」
「このシュラ、狂闘士がどういった策を仕掛けようともそれを断ち切ってみせる」
その右手を再び手刀にしながらの言葉だった。
「ただしだ」
「ただし？」
「あのジークという男」
今回の彼等の指揮官である八大公の一人であるあの男だ。
「おそらく下手な小細工は弄してはこない」
「それはありませんか」
「あの男の手にあるのは剣」
シュラのそれとは違うが同じ剣なのは事実である。
「ならばその剣で勝負を挑んでくる筈だ」
「ではグランドキャニオンでの闘いは」
「正面からのものになりますね」
「そうなるだろう」
アステリオンとトレミーの言葉にも答えた。
「だからこそ御前達をこの戦いに連れて来た」
「我等をですか」
「特にアステリオンとトレミー」
「はっ」
「我々ですか」
白銀の二人に対して声をかけたのだった。彼等もそれに応じる。
「そうだ。御前達のその力こそが重要だ」
「そういうことですか」

アステリオンは彼の言葉がどうしてなのかすぐに察したようであった。
「だからこそこのアステリオンを」
「!?アステリオン」
だがトレミーは彼が何故今納得した顔になったのかわからなかった。怪訝な顔を向けて彼に対して問うたのだった。
「何故そこで納得したのだ」
「何故か」
「そうだ。何故シュラ様がこの度の戦いに我等を御呼びしたのか」
彼はまだわかっていなかった。
「御前はわかったようだが。何故だ?」
「トレミー」
アステリオンは冷静な調子で彼に声をかけてきた。
「御前は自分のことを知るべきだ」
「俺の?」
「そうだ、御前自身のだ」
こう彼に言うのであった。
「知ることだな。そうすればすぐにわかる」
「わかるのか?それで」
「その通りだ。御前の力がこの戦いにおいては役に立つ」
彼はまたトレミーに告げた。

第十六話　西部にてその六

「それもかなりな」
「かなりか」
「御前達もだ」
アステリオンは今度は青銅の者達にも顔を向けて言った。
「御前達の力もこの戦いでは存分に発揮される」
「我々もなのか」
「アステリオン、そうなのですか」
「狂闘士達はこのシュラに任せるのだ」
シュラは彼等に対しても告げた。
「御前達は俺のフォローを頼む」
「無論それだけではない」
アステリオンはシュラをフォローするようにしてまた口を開く。
「我等の役目はな。まあそれは戦いになればわかる」
「その時にか」
トレミーは今度は特に何も言うことなく彼の言葉を聞いた。
「わかるというのだな」
「その通りだ。さて」
アステリオンはここまで話したうえで話題を変えてきた。
「戦いは終わった」
「そうだな。それはな」
トレミーはアステリオンの言葉に頷いた。
「では。また車に戻るか」
「シュラ様」
オズがシュラに声をかけた。
「ではまた車にお乗り下さい」
「出発しましょう」
サミュエルも彼に対して声をかける。

「そして暫くしたら宿を見つけ休みましょう」
「それで宜しいですね」
「宿がなければテントになるな」
シュラは彼等の言葉を受けて静かに述べた。
「それならそれでいいのだがな」
「いえ、やはり黄金聖闘士ともあろう方に野宿していただくわけにはいきませんし」
「もうすぐ街があります」
ライマンとザンドルフが述べてきた。
「ですからそこで休みましょう」
「食事も」
「アメリカの料理は噂程酷くはないな」
シュラは今度はアメリカの料理について言及した。
「思ったより遥かにいい」
「そうですね。それは」
「量はかなりですが。甘いものが以上に多いですし」
「我等にとってそれは大した問題ではない」
それは気にしていないシュラであった。
「栄養さえあればな」
「それは確かにそうですね」
「我々にとっては」
彼等もシュラのその言葉に納得した顔で同意するのだった。何故なら聖闘士は音速や超音速、黄金聖闘士に至っては光速で動く。それだけ多くのエネルギーを消耗するということでもあるのだ。
「ではそういうことは意識せずにいきましょう」
「俺は甘いものは好きだ」
シュラはここで意外な言葉を口にしたのだった。
「だからそういうことは気にしなくてもいい」
「そうなのですか！？」
「甘いものも」

これは他の聖闘士達にとっては意外なことだった。シュラはその顔から甘いものがいけるとはとても想像できなかったからである。
「大丈夫なのですか」
「それならそれでいいですが」
「とにかく食べに行くぞ」
シュラは少し急かした感じになっていた。
「わかったな」
「はあ。それでは」
「行きましょう」
何はともあれ車に乗りそのうえでまた進む。夜の前に街に入りそのうえでその街のレストランに入った。街は内陸だが河港にありかなり大きな街であった。
レストランもまた立派なものだった。白を基調とした南部の古い様式のそのレストランでステーキやサラダを食べている。そのステーキはどれもかなり大きい。
「これがアメリカのティーボーンステーキか」
「案外いけますね」
「そうだな」
シュラはトレミーの言葉に対して頷きながら食べていた。彼は今巨大なステーキをフォークとナイフで食べている。ステーキは湯気を出し上に乗せてあるバターが程よく溶けている。客は彼らの他にも数人いる。アメリカらしく白人もいれば黒人もいる。ただし白人は白人同士、黒人は黒人同士で固まっている雰囲気はあった。

第十六話　西部にてその七

「固くてとても食べられたものではないという噂だったがな」
「それがどうして」
「いけますね」
「うむ」
青銅の者達の言葉にも頷いていた。
「スープもな。あれは七面鳥か」
「そうですね。魚もいいものでしたし」
「パンも」
見ればパンも白い上等のものであった。
「どれもかなりのものです」
「アメリカの食べ物は案外いけると」
「正直に言うと何が出るのか怖く思っていた時もあった」
シュラはステーキをさらに食べながらまた述べた。
「だが。来てみると安心できた」
「ええ。アメリカは元々素材がいいですし」
「調味料も調理具も最高のものが揃っていますし」
とにかく何でも揃っているのがアメリカなのである。だから美味いものを作ろうと思えば好きなだけ作れるのである。そういう国でもあるのだ。
「それを考えれば当然ですね」
「これだけの味のものが出せるのも」
「俺も料理は得意だ」
シュラの意外な一面であった。
「スペイン料理をな」
「えっ、シュラ様がお料理をですか」
「本当ですか！？」
オズもサミュエルもこれには目を大きく見開いた。

「まさかとは思いましたが」
「本当なのですか・・・・・」
「そんなに驚くことか」
表情も声の色も変わっていないが不機嫌そうな雰囲気を出してきていた。
「俺が料理をすることが」
「いえ、決してそうではないですが」
「ただ。少し」
ライマンとザンドルフも同じ意見であった。
「何ていいますか。想像がつきませんで」
「シュラ様がですか」
「俺も他の黄金聖闘士達も全員料理をする」
シュラは淡々とした調子で述べた。もうステーキは一枚食べ終えたがそれでももう一枚頼んでいた。早速湯気を出している分厚く大きなティーボーンステーキが運ばれてきた。
「全員な」
「ではアルデバラン様やアイオリア様も」
「それにデスマスク様やアフロディーテ様もですか」
「アイオリアの料理はかなり武骨だがな」
シュラはそのまた運ばれてきたステーキにフォークとナイフを入れながら述べるのだった。他の聖闘士達もまたステーキを頼んでいる。食べながら赤ワインも飲んでいる。
「だが。作ることはできる」
「ううむ、アルデバラン様まで」
「何と」
「アルデバランの料理はかなりいい」
シュラの言葉はさらに衝撃的なものであった。
「ブラジル料理だ。特に肉を使ったものが得意だ」
「ああ、それはわかります」
「アルデバラン様が料理を作られるとなるとやはり」

「それですね」
これは完全にイメージ通りであった。彼等も頷く。
「しかしデスマスク様やアフロディーテ様となると」
「やはりイタリアやそういったそれぞれの祖国の料理なのですか」
「俺もスペイン料理が得意だ」
その通りであった。
「とにかく全員料理を作る」
「そうですか。そうした趣味がおありなのですね」
「わかりました」
とりあえずここまで聞いて頷く彼等であった。
「では今日はですね」
「うむ」
シュラはあらためてトレミーの言葉に応える。もうその二枚目のステーキは殆ど食べてしまっている。
「これを食べ終えたらそれで休憩にしますが」
「わかった」
シュラは静かに彼の言葉に頷いた。今はデザートのアイスクリームを食べている。そのアイスもまたかなり大きなものである。
「ではこれでな。今日は休むとしよう」
「はい、そういうことで」
応えて頷くトレミーであった。
「また明日です」
「今我々はメンフィスにいます」
今度はアステリオンがシュラに述べてきた。
「テネシーの西端です」
「まだグランドキャニオンには遠いか」
「はい、グランドキャニオンはアリゾナにあります」
既にアメリカの地図は彼の頭の中に入っていた。そのうえで述べている言葉だ。
「そこまではまだかなりです」

「暫くはこうして車での旅が続くな」
「ですね」
「それは確かに」
このことには誰もが頷いた。
「何かと疲れることもあるでしょうがやはり」
「そうなるでしょう」
「たまにはいいものだ」
周りの者達は申し訳なさそうだがシュラはこう言うのだった。
「こうして様々な土地を見ていくのもな」
「いいものですか？」
「そうだ。いいとは思わないか」
シュラはまたトレミーやアステリオン達に対して述べる。
「旅というものを楽しむことが」
「それでは。その様にですね」
「グランドキャニオンまで」
「また狂闘士達が来るかも知れない」
その危惧は抱いていた。
「しかしその都度倒していく。そうしてグランドキャニオンまで向かうぞ」
「わかりました」
「それでは」
彼等はシュラの言葉に頷き今は旅に向かうのだった。そうして今は夕食を楽しむのだった。その途方もない量のアメリカの食事を。

第十六話　完

２００９・３・５

第十七話　グランドキャニオンへその一

グランドキャニオンへ

「そうか、今のところはその様子か」
「はい」
教皇の間において。シャカがシオンの前に片膝をついて報告していた。その周りには他の黄金聖闘士達もそれぞれ片膝をついて控えている。
「車でグランドキャニオンまで向かっています」
「狂闘士達は決戦の場にそこを選んだのだな」
「その通りです」
またシャカは答える。
「そこにシュラ達を誘い込むつもりです」
「グランドキャニオン」
シオンはその場所に注目したのだった。
「そこか」
「何かありますか？」
「グランドキャニオンに何かが」
「いや」
黄金聖闘士達への返答は今一つ要領を得ないものであった。
「別に。それはないが」
「ありませんか」
「前の戦場はシュッツットバルトだった」
「ええ。木が邪魔でしたね」
デスマスクがここで顔を上げてシオンに述べてきた。
「まあそれでもあの蝿野郎以外は全員ぶっ潰してやりましたよ」
「それはいい」
そのこと自体はいいというのだった。
「だが」

「だが？」
「森の次は荒野」
このことについても考える。
「これに関連はあるのか」
「それはどうでしょうか」
今度はムウがシオンに対して言ってきた。
「私はそうした地理的条件は関係がないように思います」
「関係がない」
「はい、そうです」
こう述べるのだった。
「そのように思います。あくまで私見ですが」
「そうか」
「むしろ」
そしてさらにシオンに対して言うのだった。
「シュツットバルトでの時といい」
「うむ」
「そしてこれから行われるであろうグランドキャニオンといい」
ムウは言う。
「我等を誘い込んでいます」
「そのうえで戦いになっているな」
「はい」
ムウが言うのはこのことだった。
「これはやはり奇妙です。狂闘士は極めて好戦的だとあります」
「そうですね。それは」
ムウの言葉にアフロディーテが頷いた。
「先の戦皇アーレスとの戦いでは彼等はかなり積極的に聖域に攻撃を仕掛けてきたと文献にあります」
「そのことは間違いない」
シオンも教皇として当然ながらそのことを知っていた。
「そして最後はライブラの武器を使用した」

「その通りです」
アフロディーテはシオンの言葉に頷いた。
「それによりようやく勝利を収めることができました」
「だが今彼等はその時程積極的には仕掛けてきてはいない」
「最初だけでした」
今度述べたのはカミュだった。
「我が聖域に争いの女神エリスが兵を連れて来ただけです」
「それだけだ。やはり彼等にしては大人しい」
「アーレスがいないからでしょうか」
カミュはその根拠を彼等の主に答えを求めた。
「だからこそ。彼等は」
「確かにアーレスはいない」
このことは今の聖戦において絶対の前提となっていた。聖域も聖闘士達もこのことを前提として戦略を立てている一面があるのである。

第十七話　グランドキャニオンへその二

「彼は今冥界の奥深くにいる」
「そして出ることはない」
「そうですね」
「その通りだ。しかし彼等を指揮する者はいる」
このことも把握して戦略を立てているのであった。
「その聖域にやって来た争いの女神エリスだ」
「あの女ですか」
アルデバランがエリスという名に反応を見せた。
「そういえばあの女はアーレスの妹であり第一の腹心でした」
「先の聖戦においても猛威を奮った」
そのこともわかっているのだった。
「だが」
「はい。それでも今はあの時の様に仕掛けてきません」
アルデバランもそのことを奇妙に思っているのだった。
「あの女もまた」
「まだこれといってわかるものはないか」
シオンはこれまでの話を振り返り多少残念な声を漏らした。
「まだな」
「判断する材料が乏しいと」
ミロが問う。
「そういうことですね」
「そうだ。まだ確かな判断はできかねる」
シオンの結論はこれであった。
「だからだ。様子を見ておくとするか」
「はい。それでは今は」
「その様に」
「そして教皇」

アイオリアもまたここで顔をあげてきた。
「そのシュラへの援軍ですが」
「サガか」
「はい。サガもまたグランドキャニオンのことは把握しているのでしょうか」
「無論だ」
シオンの返答は即座だった。
「それはもう伝えてある」
「そうですか」
「このことについて御前達が不安に思うことはない」
「ないと!?」
「そうだ。あの男ならば問題はない」
サガに対して絶対なまでの信頼さえ見せていた。
「何もな」
「では教皇」
最後にアイオロスがシオンに対して述べてきた。
「後は」
「そうだ。これで話は終わりだ」
こう黄金聖闘士達に告げた。
「御苦労だった。下がっていいぞ」
「はっ、それでは」
「これで」
黄金聖闘士達はシオンの言葉を受けてその場で一礼した。そしてそのうえで立ち上がり教皇の間を後にしそれぞれの持ち場に戻ることになった。
だがここで。アイオロスはふとシャカに声をかけたのだった。
「シャカ」
「何か?」
シャカはすぐにアイオロスに応えて顔を向けた。今彼等は人馬宮に入るところだった。

「アーレスのことだが」
「まだ冥界の奥深くにいます」
こうアイオロスに対して答えるだけだった。
「それはもう教皇が話された通りです」
「今のところはな」
しかしアイオロスはこんなことを言ってきた。
「そうだな」
「今のところは？」
「そうだ。あくまで今はだ」
何処か引っ掛かる言葉であった。
「だがこれからは」
「アーレスが出て来るということも有り得ると」
「アーレスは神だ」
このことは最早言うまでもないことだった。彼等が仕えるアテナとそういう意味では同じだ。しかしその性質は全く異なるのだった。

第十七話　グランドキャニオンへその三

「その力は絶大だ」
「その力で冥界から出て来るというのですか？」
「おそらくそれはない」
その可能性は否定するアイオロスだった。
「しかしだ。若し何らかの手段でこの世界に出て来たならば」
「我々にとって大きな脅威になります」
それは脅威どころではなかった。彼等にとっては。
「若し出て来るのならばそれより前に戦いを終わらせなければなりません」
「トラキアのアーレスの宮殿を攻めてか」
「今はまだその時ではありませんが」
シャカは時も見ていた。
「いずれは」
「私もまたそう考えている」
このことについて考えている内容は彼もシャカも同じだった。
「無論教皇もそうであるし他の黄金聖闘士達も同じだろう」
「あの宮殿を攻め落とさなければ戦いは終わりません」
シャカはそれを実際に言葉に出してみせた。
「最後には」
「それならば彼等も同じだ」
アイオロスは今度破鏡闘士達と自分達の立場を入れ替えて考えたうえで述べた。
「彼等もすぐに聖域を攻めればいい筈だ」
「最初にそうしたように」
話が教皇の間でのそれと同じものになっていた。
「しかしそれをせずに彼等は今こうして各地に兵を送っています」
「そして我々を誘い込み戦いを挑んでいる」

「やはり奇妙ですね」
またこのことについて考えて述べたシャカだった。
「彼等の今の行動は」
「この戦いには大きな謎がある」
アイオロスはそのことを感じていた。
「彼等にとって。戦うことでだ」
「今彼等が戦っているその場で」
「それが何かはまだわからないが」
「そうですね。それに」
「それに？」
今度はアイオロスがシャカの言葉に問い返した。
「今トラキアにいる神は争いの女神エリスだけです」
いるのは今は彼女だけであった。
「他のアーレスに仕える神々はまだいません」
「！？そういえば」
アイオロスもそのことに気付いた。
「アーレスには争いの女神エリスの他に腹心となる四柱の神がいたな」
「そうです。先の我等との戦いでも猛威を奮った彼等が」
そのかれらとの戦いもまた聖域にとっては凄惨なものであった。
アーレスは狂闘士達だけでなくそうした己に従う神々も使い聖域を攻めていたのである。
「その彼等もいません」
「確か彼等は」
アイオロスは先のアーレスとの聖戦の話を思い出していた。
「アーレスと共に冥界に逃げ込んでいた」
「そうです。ですから彼等もいません」
それが彼等がいない理由であった。先の聖戦での敗北は彼等狂闘士達にもかなりのダメージを与えておりそれはまだ完全には癒えていないのだ。

「その彼等がいないことは我々にとっては有り難いことですが」
「今は戦力的には互角か」
アイオロスは冷静に戦略的状況を分析していた。
「彼等がいないだけ」
「はい。そしてそれがどう移るかはこれから次第です」
シャカはこう言った。
「我々の戦い次第です」
「その通りだ。私も時が来れば出陣することになる」
そのことは既にシオンから言葉を受けていた。
「その時は聖域を頼む」
「わかっています。それでは」
「うん。また話そう」
二人はこの言葉を別れの挨拶としてその場を後にしそれぞれの持ち場についた。聖域ではアーレスの軍勢の今後の動きに注視していた。
アメリカでは。シュラ達はようやくアリゾナ州まで辿り着いた。
あとはその場所に向かうだけであった。

第十七話　グランドキャニオンへその四

「しっかし。この国は」
「また随分と広いもんですね」
聖闘士達は車窓からアリゾナのその風景を見て話していた。そこは赤い岩山が連なる荒野だった。見渡す限りその赤い岩と大地がある。
「しかも色々な場所があって」
「アリゾナはこんな場所ですしね」
「アメリカの凄さの一つだ」
シュラもまたその車の中にいた。そのうえで彼等の話を受けて言うのだった。
「この広さと多様さもな」
「そうですね。確かに」
「アメリカはやっぱり広いですね」
「この広い場所で戦うんですか」
彼等は既に何時狂闘士達が出て来てもいいように聖衣を身に着けている。当然ながらシュラも己のカプリコーンの黄金聖衣を装備させている。
「何か今にでもあの連中が出てきそうですね」
「あの岩山の向こうにいるとか」
「いや、あの場所にはいない」
シュラはそれは否定した。
「しかしだ」
「いますか」
「そうだ。間違いなくここにいる」
後ろに続く聖闘士達に対して述べるのだった。
「ここにな」
「それで何時仕掛けて来るかですね」

「そして何処にいるか」
彼等も周りに警戒を払っていた。当然ながら。
「何時出て来てもいいように」
「気構えだけはしていますがね」
「御前達は雑兵達を頼む」
その彼等に対してまた言うシュラだった。
「それはいいな」
「ではシュラ様がやはり」
「狂闘士達を御一人で」
「俺だけではない」
このこともまた言うのであった。
「俺だけではな」
「！？といいますと」
「やはり前と同じく」
既にドイツでの戦いにおいてサガがデスマスクの助っ人に来ていたことは白銀や青銅の者達も知っているのだった。
「サガ様かアイオロス様が来られるのですか？」
「今回も」
「今それを話すつもりはない」
しかしシュラはそれはここではあえて言わないのだった。
「ここではな」
「ああ、そうですね」
最初にそれが何故か気付いたのはアステリオンだった。彼が最初に納得した顔になりそのうえでシュラの今の言葉に対して頷いた。
「今ここではですね。確かに」
「言うことは危険だ」
シュラは目の前に広がるそのグランドキャニオンを見て述べた。赤い岩山と途方もない崖が何処までも続いている。広大であるが荒涼とした世界だ。
「今ここは狂闘士達の庭なのだからな」

「そうですね。庭ですね」
トレミーはあらためてシュラの言葉をその心の中に刻み込んだ。
「ここは今はあの連中の」
「何かそれ考えたら」
「今にでも来るか？」
「なあ」
青銅聖闘士達はさらに警戒する顔になって周囲に顔を向けて見回す。
「あの連中が一気に」
「俺達に」
「小宇宙は感じない」
シュラは周りを見てはいなかったがこう言ったのだった。
「今の我々の周りにはな」
「じゃあ今は敵襲は安心していいんですね」
「とりあえずは」
「そうだ。だが奴等は必ず仕掛けて来る」
シュラはそのことは間違いないと確信していた。
「ここでな。必ずな」
「ではシュラ様」
「お話通り我等は」
「そうだ。このシュラに任せておくのだ」
またこの話であった。
「彼等はな」
「先に行きましょう」
オズが言ってきた。
「そして敵の前にあえて出るんですよね」
「少なくとも奇襲は通用しない」
この場合はこちらからという意味である。既にここは彼等のテリトリーになってしまっているからだ。それでどうして奇襲が仕掛けられるのかということだった。

第十七話　グランドキャニオンへその五

「そして我等もそれを許さない」
「敵の奇襲をですか」
「このシュラに気配を読ませない者なぞいない」
シュラは断言するのだった。
「例え誰であろうとな」
「正直頼みますよ」
サミュエルは彼の今の言葉に対して返した。
「八大公とかがいきなり出て来たらと思うと」
「そうだよな。八大公っていえば」
ザンドルフも戦友の言葉に応えて述べる。
「こっちの黄金聖闘士と同じだからな」
「そうそう滅多なことじゃな」
「勝てる筈がないっていうのかよ」
ライマンはそれが不満のようである。
「俺達があいつ等によ」
「考えなくても無理だろ」
しかしオズはその彼に対して言うのだった。
「御前黄金聖闘士に勝てるか？」
「えっ、シュラ様達にか？」
「ああ。勝てないだろ」
「無茶言うなこの野郎」
これが彼の返答であった。
「どうやってシュラ様達に勝てるんだ。勝てる筈ないだろうが」
「そういうことだよ。冗談抜きで八大公と戦えるのは黄金聖闘士のみ」
オズは断言する。
「それ考えたらシュラ様が出られて当然なんだよ」

「そうなるか。そういや狂闘士の世界ってあれだよな」
オズはここで彼等のことであることに気付いたのだった。
「俺達は黄金、白銀、青銅に分けられてるよな」
「ああ、そうだな」
「それはな」
サミュエルとザンドルフが彼の今の言葉に応える。
「俺達は三つだな」
「大きく分けてな。そうだな」
「けれど連中は違うんだよな」
そしてまた彼等について言及した。
「八大公が一番上にいて？」
「後は爵位だよな」
「そうなってるな」
言うのはこのことだった。
「まず上が公爵で？」
「次が侯爵だったな」
オズとライマンが言い合う。その爵位について。
「それで伯爵、子爵ときて」
「男爵。最後に公子か」
狂闘士達の階級はこうなっているのだった。
「けれど何かあれらしいな。公爵と公子でも間の言葉遣いは普通らしいな」
「俺達が白銀聖闘士と話すのと同じか」
サミュエルとザンドルフはこう話す。
「そういうものか」
「大体そうみたいだな」
その白銀のトレミーもその青銅の者達に対して述べるのだった。
「それを考えたら強さに差はあっても話し方までは変わらないようだな」
「まあそこは人によるな」

アステリオンも言う。
「あと関係もな」
「確かに。白銀聖闘士が青銅聖闘士の師匠であった場合は敬語になる」
「しかしそれ以外は」
特に変わらないのである。この辺りはわりかしフランクなのが聖域なのである。
「特に変わらないな」
「そうだな」
「しかし兵隊と俺達じゃな」
オズが言った。
「話し方も全然違ってくるな」
「その通りだな。流石に兵士とはな」
ライマンも彼のその言葉に頷く。
「変わってくるな」
「そういうことだな。そして」
「やっぱりな」
サミュエルとザンドルフがここでシュラを見るのだった。
「黄金聖闘士は別格だな」
「向こうも八大公はそうか」
「八大公は向こうでは様付けのようだ」
アステリオンがまた述べた。
「それもかなりの待遇だ」
「じゃあやっぱり黄金聖闘士みたいなものか」
「そう考えていいな」
あらためてそう認識する彼等だった。こう考えれば確かにわかりやすかった。

第十七話　グランドキャニオンへその六

そんな話をしながらさらに先に進むのだった。するとやがて。シュラが不意に立ち止まった。
「!?シュラ様」
「まさか」
「そう。そのまさかだ」
こう後ろの聖闘士達に言うのだった。シュラのその細い目がさらに鋭いものになっていた。今彼等は左手に崖を置いている。そこで立ち止まったのである。
「狂闘士がいるな」
「なっ、それでは遂に」
「闘いが!?」
聖闘士達はシュラの言葉に一斉に身構える。シュラもまたその右手を手刀にしている。敵はまだいないというのに一触即発の状況になろうとしていた。
そしてトレミーが。ここでシュラに対して問うのであった。
「で、シュラ様」
「うむ」
「その狂闘士は何処に?」
やはり彼もそのことが気になっているのだった。
「いるのですか。まさか」
「その崖ではない」
左手の崖については否定するのだった。
「そこではない」
「というと一体」
「何処に」
「目の前だ」
何とシュラはここでこう言うのであった。

「我々の目の前にいる」
「目の前!?」
「まさか」
「そう。そのまさかだ」
だがシュラは己の言葉を全くぶれさせることはなかった。
「そのまさかだ。目の前にいる」
「ですがシュラ様、我々の目には」
「狂闘士なぞ一人も」
彼等はその自分達の目の前を見てやはり何も見えはしないのでいぶかしむのだった。シュラの言葉を疑ってはいないがそれでもであった。
「しかしいるということは」
「それでは」
「そこだ」
言いながらその手刀を左から右に軽く一閃させたのだった。
「隠れても無駄だ。出て来い」
「ふふふ、確かに」
するとここで声が聞こえてきたのだった。
「流石は黄金聖闘士の一人カプリコーンのシュラというわけか」
「!?この声は」
「まさか」
「そう、そのまさかだ」
声は聖闘士達の言葉にも応えるのだった。不敵な笑みを含ませて。
「我が名はバド」
「バド!?」
「何者だ、貴様は」
「火軍団、伯爵にしてハルパスの狂闘士」
こう名乗ってきた。
「以後覚えておくことだ」
「狂闘士の一人が遂にか」

「我等の前に」
聖闘士達はその声を聞いて身も心もさらに身構えるのだった。しかしであった。
「だが。声はすれど」
「まだ姿を現わさないとはどういうことだ?」
彼等はまだそのバドが姿を現わさないことに気付いて言うのだった。
「ハルパスといったな」
「早く出て来い」
こう彼に対しても言う。
「まさか怖気付いたとでもいうのか?」
「アーレスに仕える狂闘士ともあろう者が」
「案ずることはない」
やはりバドの声だけが聞こえてくる。
「既にカプリコーンの目には私の姿は見えている」
「シュラ様には!?」
「それでは貴様はやはり」
「このシュラの目を誤魔化すことはできはしない」
シュラは冷静そのものの声で正面に対して言うのだった。
「今の手刀はほんの余興。次は手加減はしない」
「ふむ。噂に聞こえたカプリコーンのエクスカリバー」
声と共に聖闘士達の目の前で何かが出て来た。
「やはりその鋭さは侮れぬか」
「むっ!? 出て来たか」
「そうか。それが貴様の姿か」
「如何にも」
赤黒く輝く戦衣を全身に纏った男がそこに現われたのだった。
黒く長い波がかった髪に細面の尖りきみの顔に大きいが切れ長の目をしている。その彼が今シュラ達の前に姿を現わしたのだった。
何よりも目立つのはその右手に持つ剣だった。戦衣と同じその剣

は禍々しい光を放ちつつその巨大な姿を誇示しているのだった。
「私がここにいるのは何故だと思うか」
「それは最早言うまでもないことだな」
アステリオンが彼の言葉に応える。
「貴様等狂闘士が我々の前に現われる理由はな」
「それではだ。話は早い」
バドはその右手の剣をゆっくりと持ち上げてきた。そうしてまた言うのであった。
「ここで貴様等聖闘士達全員倒してみせよう」
「このシュラもだな」
「まずは貴様からだ」
シュラに対しても臆することなく言葉を返すのだった。
「カプリコーン。貴様を倒せばそれだけジーク様の御苦労も減る」
「あの男のか」
「八大公の方の御手をわずらわせることもない。私のこの剣でな」
構えながらさらに言うのだった。今アメリカにおける聖闘士と狂闘士の最初の戦いがはじまろうとしていた。双方互いに激しい小宇宙を燃え上がらせるのだった。

第十七話　　完

２００９・３・１１

第十八話　炎の剣その一

炎の剣

バドはその右手に持つ剣でシュラを指し示す。そのうえでさらに言ってきた。

「では。覚悟はいいな」

「闘うということだな」

「如何にも。既にわかっている筈だ」

少なくとも彼はそのつもりだった。激しい小宇宙はまさに殺気そのものであった。

「私のこの剣で貴様を倒す」

「そのハルパスの剣でか」

「言っておくがこの剣はただの剣ではない」

その言葉がさらに鋭いものになる。まるで剣そのもののように。

「このハルパスは炎の魔神」

「むっ！？そういえば」

オズが今のバドの言葉からあることを思い出したのだった。それはすぐに顔に出た。そうしてシュラに対して言うのであった。

「シュラ様、ハルパスといえば」

「わかっている」

そしてシュラもそれはわかっているというのだった。

「炎の魔神だったな」

「そうです。その手に持っている剣から炎を起こし」

「考えてみれば奇妙なものだ」

シュラはそのハルパスという魔神について述べるのだった。

「ハルパスの姿は鳩」

「はい」

その姿をした魔神なのである。

「それは本来平和の象徴なのだがな」

「それが黒くなると共に破壊の化身となる」
オズはシュラに応えて述べる。
「考えてみれば妙な話です」
「その通りだ。黒き邪悪な鳩か」
「我等が邪悪だというのか」
だが当のバドは彼等の言葉に対して心外といった顔を見せるのだった。
「この我等が」
「違うというのか？」
「我等がどうして邪悪なのだ？」
さらに問うてきたのだった。やはりその顔は心外といったものであった。
「我等狂闘士が。そして我等がお仕えするアーレス様もまた邪悪だとでもいうのか？」
「ふん、戯言を」
「邪悪でなくて何だというのだ」
彼の言葉をサミュエルとライマンが即座に否定した。
「貴様等は闘いにおける鮮血を愛する筈だ」
「その赤い戦衣が何よりの証拠」
そのうえで今バドが身に着けている赤いハルパスの戦衣を指し示すのだった。
「違うか？その戦衣は闘いに酔う貴様等の象徴だ」
「嘘とは言わせんぞ」
「それが悪だというのか」
バドはなおも聖闘士達に問い返す。
「闘いのその中で酔うことが」
「ふん、まだわからんと見えるな」
今度はザンドルフの言葉だった。
「どうやら貴様等狂闘士にはそれが普通のようだからな」
「普通なのは確かだ」

それは彼もまた認める。
「しかしだ」
「しかし？」
「アーレス様は戦いの神」
「それはもう知っているが？」
「貴様等の主であるアテナと同じものを司っている」
これもまた言うまでもないことであった。アーレスといえば戦いと司る神だ。しかしアテナがそれは護りの為の戦いでありそこには知と美がある。しかしアーレスは侵略の戦いであり彼は破壊と血を欲する。それだけの違いが両者には存在しているのである。
「そう、同じものをだ」
「だから邪悪ではないとでもいうのか？」
「血は悪ではない」
アステリオンに対しても述べるのだった。
「アーレス様はれっきとしたオリンポスの神々の御一人。そして天皇ゼウスとその后であるヘラの嫡子。その血筋もまた悪しきものではない」
「それは確かにその通りだ」
トレミーも認めるしかない言葉だった。
「アーレスはゼウスとヘラの子。数少ないな」
「そのうえで戦いを司っておられる。戦いは神々の間で認められた神聖なもの」
バドの主張は続く。

第十八話　炎の剣その二

「そうした意味では貴様等と同じだ。血は決して悪ではないのだ」
「神により認められているからか」
「そして人間に本質的に備わっているものでもある」
シュラに対しても相変わらず臆するところはない。
「闘いにおいて破壊と血を欲するものは。我等はそれに基き闘いを行うのだ」
「そうか」
「その為に我等は今アーレス様の為に闘う」
言葉の中の決意がさらに強いものになった。
「ここで貴様等を倒すのだ」
「貴様等の正義は人間の本質の一つ」
シュラはこれまでのバドの言葉を総括して述べた。
「そしてオリンポスの神々の一人であるアーレスが司っているものでもある」
「アーレス様こそこの世で最も尊い御方」
アーレスに仕える者として当然の言葉であった。
「そのアーレス様の為に。今貴様等をここで」
「話はわかった」
シュラはバドのここまでの話を聞き終えたうえで述べた。
「それではだ。闘うとするか」
「私の言うことを否定しないのか？」
「それは力によって決まるもの」
シュラは冷然なまでに落ち着いた声で言葉を返すのだった。
「それはな」
「力か」
「何者をも断ち切る力」
シュラはその力のことを口にしてみせた。

「それこそが正義の源であるものだ」
「力か」
そしてバドもまたその力という言葉に興味深そうに反応するのだった。
「面白いな。それは」
「面白いだと？」
「そうだ。力こそ正義」
バドはその不敵な笑みと共に言う。
「それはアーレス様の御考えであるからだ」
「そうした意味で俺と貴様等は同じだというのか」
「何故それで狂闘士にならないのか不思議だがな」
「知れたことだ」
今のバドの問いにはすぐに言葉を返したシュラだった。
「それは既にはっきりとしていることだ」
「はっきりとしているというのか」
「その通りだ。このシュラはアテナの聖闘士」
こう言うのであった。１０
「それ以外の何者でもない」
「だから狂闘士にはならないというのか」
「如何にも。確かにこのシュラとキャンサーのデスマスク」
デスマスクの名も出すのであった。
「そしてピスケスのアフロディーテの三人は力を尊ぶ」
「では我等と同じだ」
「しかし。それは人としての正義だ」
「人としてだと！？」
これはバドにはわからない言葉であった。その証拠に今のシュラの言葉に対して眉を顰めさせ怪訝な声を出した。それこそが何よりの証拠であった。
「人としてのだ。貴様等とは違う」
「戯言を。アテナは人間を認めているというのか」

「その通りだ。アテナは人間の守護神」
シュラは言う。
「我等人と共にあられる御方。貴様等の主のように支配しようと考えてはおらん」
「馬鹿なことを言う。アーレス様は神であられる」
「我等が神アテナもまた同じだが」
「しかし神であることをわかってはいない」
こう言ってシュラの言葉と彼が仕えるそのアテナを否定するのだった。
「それがな。わかってはいないな」
「どういう意味かわからない言葉だな」
シュラは冷静な口調で今のバドの言葉に返した。
「神であることがわかっていないとはな」
「神は人を支配する存在」
これがバドの神に対する考えであった。
「そして戦皇アーレス様こそが愚かな人間達を治めるに相応しい御方なのだ」
「では貴様は何だ?」
シュラは今度はバド自身のことに対して問うた。
「貴様は。人間ではないのか」
「確かに私もまた人間だ」
口の端だけで笑いながらの言葉である。自信がそこには見える。

第十八話　炎の剣その三

「戦いを愛するな」
「戦いたいが故にアーレスに仕えているというのか」
「この世を鮮血と戦乱で覆い尽くす」
今バドの脳裏には戦乱と破壊、そして鮮血により彩られた世界が映し出されていた。逃げ惑い死んでいく人々のこともまたそこにはありそうした光景を思い浮かべて楽しげに笑っていた。
「その為にだ」
「シュラ様、やはりこの男」
「我等とは」
「わかっている」
聖闘士達はバドの表情から彼の考えを読み取り嫌悪感を露わにさせたうえでシュラに対して囁いた。シュラもまたそれを受けて言うのであった。
「アーレスの治める世界では人は生きてはいけぬ」
「弱い者はな」
バドは今度はシュラにこう告げた。
「確かに生きてはいけぬ。だがそれがどうした」
「弱い者は必要ないというのか」
「その通りだ。闘いは強い者だけが生き残るものだ」
ここではバドは頭の中に人々が互いに争い合い殺し合う姿を想像していた。
「その中でどうして弱い者が必要なのだ。不要でしかない」
「つまり平和は不要か」
「如何にも」
はっきりと言い切ったのだった。
「その通りだ。アーレス様の治められる世界ではな」
「よくわかった。貴様等の考えはな」

シュラはここまで聞いてもまだ冷静さを全く失ってはいなかった。
まさに剣の鋭さを見せそのうえで話を聞いていたのであった。
「よくな」
「では。どうするというのだ？」
「知れたこと。闘うまでだ」
右手のその手刀を前に出しながら述べた言葉だ、
「今ここで貴様とな」
「ふむ。それでははじめるというのだな」
「このシュラのエクスカリバー」
手刀に光が宿ったように見えた。
「切れぬものはないとだけ言っておく」
「では私も言おう」
バドは右手に持つその鮮血の色の剣をシュラに突きつけて言ってきた。
「このハルパスのバドの剣で焼けぬものはない」
「全てのものを焼き尽くすというのか」
「その通りだ。ハルパスは炎の魔神」
自らをこう名乗る。
「それに焼けぬものはないということだ」
「それでは。それを見せてみるのだな」
シュラはバドの誇らしげな名乗りを聞いても動じてはいなかった。
「今ここでこのシュラにな」
「では。退かぬのだな」
「もとよりそのつもりはない」
シュラは最初からそう決めているのだった。
「聖闘士が敵に背を向けることは有り得ないのだからな」
「それでは正面を向いたまま焼き尽くされるといい」
バドの笑みは凄惨なものにさえなってきた。
「私の手によってな」
「！？この小宇宙」

「ああ、確かにな」
アステリオンとトレミーがそれぞれバドの全身から湧き起こる小宇宙を感じ取り顔を見合わせて話す。
「尋常なものではない」
「闘いに餓えていて。それでいて」
二人はそこまで感じ取りながらさらに言葉を続けていく。
「かなりの強さの小宇宙だ」
「これは。我等よりも遥かに上か」
「白銀聖闘士よりも遥かに」
「それでは」
青銅の者達もここで気付いたのだった。
「やはり我等では狂闘士の相手はできないというのか」
「忌々しい話だ」
「ここはシュラ様にお任せするしかない」
アステリオンはこう決断を下した。
「それしかな」
「我等では役不足か」
「忌々しいことだがな」
実際にその感情を見せながらトレミーにも言葉を返すのだった。

第十八話　炎の剣その四

「だがそれよりもトレミー」
「うむ」
また顔を見合わせて頷き合う二人だった。
「来ているようだな」
「そうだな。今すぐではないがな」
「来ている！？」
「まさかまた一人ここに」
「そうだ」
アステリオンは今の自分達の言葉を聞いて一斉に警戒しだした青銅の者達に対して告げたのだった。それはトレミーもまた同じ顔をしていた。
「狂闘士がまたここに来ようとしている」
「この殺気に満ちた小宇宙」
それこそが彼等狂闘士の特徴となっていたのだった。聖闘士のそれとは違う攻撃的でかるあまりにも刺々しい小宇宙、それこそが狂闘士の小宇宙となっていた。
二人はその小宇宙を感じていたのだった。だからこそ今警戒していたのだ。それに備えて。
「シュラ様、ですからここは」
「お急ぎを」
「わかっている」
シュラは二人のその言葉を背中で受けながら静かに頷いたのだった。
「それでは。ハルパスを倒しそのもう一人も」
「あいつか」
バドはバドでその小宇宙を感じ取っているようであった。顔が如何にも面白くなさそうなものになっていた。

「余計なことを。だがいい」
「いいというのか」
「あいつが来る前にカプリコーン」
シュラに対して言うのだった。
「貴様を倒せばそれで済むのだからな」
「そうか。それではだ」
「受けるがいい。このハルパスのバドの炎」
言いながら右腕に持つその剣を振りかざしてきた。そして。
「ゴルドファイエル！」
「むっ、やはり炎が！」
「しかもただの炎ではない！」
シュラの後ろにいる聖闘士達はそれぞれその炎を見て声をあげた。
その炎は。
何と黄金色の炎であった。黄金色の炎がバドの剣から放たれそのうえでシュラに向かう。炎は黄金色の帯となり一直線に彼に向かって来たのだった。
「さあ、カプリコーンよ！」
バドは己の炎を放ったうえでシュラに対して問う。
「このバドの炎、どう防ぐ！」
「防ぐかというのか」
「炎は何もかもを焼き尽くすもの」
己が操るものだからこそ絶対の自信を持っているのがわかる言葉だった。
「これを防ぐことはできまい。如何に黄金聖闘士であろうとも！」
「できると言えば？」
「何っ！？」
今のシュラの言葉に対して眉を動かした。
「できるというのか？私のこの炎を防ぐことが」
「俺には俺の防ぎ方がある」
彼は言うのだった。

「このシュラのな」
「面白い。なら見せてもらおう」
バドも彼の言葉を不敵に受けたのだった。
「貴様のその防ぎ方をな」
「では見せるとしよう」
今シュラは己のその右腕を構えるのだった。
「このシュラの防ぎ方をな。見るのだ」
言いながらその右腕を再び手刀にしてそのうえで前に突き出した。
それは丁度バドの炎が彼に襲い掛かる直前のことであった。
「何っ、手刀で炎を!?」
「まさか」
アステリオンもトレミーもそれはまさかと思った。手刀で炎を防ぐことなぞできはしないと思っていたからだ。しかしそれはあくまで彼等の常識の中だけのことであった。
シュラはその剣で炎を受け止めた。そして。
何と炎を突いただけでその炎を打ち消したのだった。たったそれだけであった。
「何っ、それだけだというのか」
「そうだ」
炎を消してもそれで平然としたままだった。笑いも余裕も見せはしない。

第十八話　炎の剣その五

「これだけだ。これが俺の防ぎ方だ」
「まさか今ので私の炎を消すとはな」
バドにしろまさかと思うことであった。
「やはり。黄金聖闘士ということか」
「それだけではない」
今度はシュラから言って来た。
「ハルパス」
「何だ？」
「貴様のことはわかった」
こう言うのだった。
「貴様の実力はな。貴様は確かに強い」
シュラもそれは認めた。
「しかしだ」
「しかし。何だ？」
「このシュラには遠く及ばない。白銀の者達は遥かに超えていてもだ」
「戯言を。私が貴様に劣るというのか」
「一つ言っておこう。一人ならば貴様は倒れる」
これは忠告であった。
「確実にな。このシュラに敗れる」
「・・・・・私を愚弄するというのか？」
狂闘士としてのプライドを持つバドにとって今の言葉は看過できないものであった。すぐにその目を鋭くさせて問うてきたのであった。
「このハルパスのバドを」
「愚弄はしていない。ただ事実を述べたまでだ」
シュラにとってはまさにただそれだけであった。悪意も挑発する

意志もない。
「ただ。それだけだ」
「・・・・・生憎だが私はそうは考えはしない」
やはりバドはそうは受け取らなかったのだった。
そして。再びその右手に持つ剣を構えたうえでシュラに対して言ってきたのだった。
「カプリコーン、やはり貴様はここで倒す」
「いいのか。死ぬことになるぞ」
「死ぬのは貴様だ」
やはり彼は引こうとはしなかった。
「ここでな。私が焼き尽くしてやる」
「ならば。受けてみるがいい」
シュラがその手に剣を握った。
「このシュラの剣。そうして死ぬがいい」
「シュラ様の小宇宙が高まっている」
「ああ」
「確かに」
聖闘士達もそれははっきりと感じ取っていた。そしてその小宇宙は。
「何という凄さだ」
「これが黄金聖闘士の小宇宙なのか」
彼等をして絶句させるものがそこにはあった。
「一人で今いる白銀、青銅の全ての聖闘士を合わせたよりも遥かに上だ」
「まさに。これこそが最強の聖闘士」
唖然とするまでに黄金聖闘士の力を認めるしかなかった。
「この小宇宙。これならば」
「如何にあの男とて」
「行くぞ」
今まさにシュラの剣が抜かれようとしていた。

「このシュラの剣。受けるのだ」
その剣がどういったものか。今それを見せようとしていた。シュラの力が今放たれようとしていた。

第十八話　完

２００９・３・２３

第十九話　剣と剣その一

剣と剣

「受けろ」
シュラの右手が高々とあげられた。
「これがこのカプリコーンのシュラの奥義」
「むっ！？」
「エクスカリバーだ」
声は激しいものではなかったが強いものだった。その強い声と共に振り下ろされる剣は光の速さであった。そしてその剣が振り下ろされると。
「何だとっ！？」
バドは思わず声をあげた。今までその剣を包んでいた炎が瞬く間に打ち消されてしまったのだ。
「馬鹿な、私の炎を打ち消しただと。しかも完全に」」
「この程度の炎なぞ」
シュラは振り下ろしたその剣を元に戻したうえで驚きを隠せないバドに対して告げる。
「エクスカリバーの前では敵ではない」
「敵ではないというのか」
「一振りで充分だ」
こうも言うのだった。
「打ち消すにはな」
「くっ、これが黄金聖闘士の力か」
「そういうことだ。それにハルパスよ」
シュラはバドに対して言ってきた。
「これが貴様の実力ではあるまい」
「何が言いたいのだ？」
「貴様は今加減をしていた」

シュラはここでも冷静な声で彼に述べる。
「そうだな。貴様の炎はあの程度ではあるまい」
「わかっていたのか」
「黄金聖闘士を甘く見ないことだ」
シュラは尚もバドを見据えていた。
「この程度。容易にわかる」
「確かにな。その通りだ」
まるで仮面を剥ぎ取ったかのようだった。今のシュラの言葉を受けてそれまで怒りと狼狽に包まれていたその顔を先程までのような余裕のあるものになっていた。
「先程の私の炎は全力ではない」
「そうだな。それでは今見せるのか」
「如何にも。私も遂に全力を出す時が来た」
言いながらその剣に再び黄金の炎を宿らせる。それは先程の炎よりも遥かに大きく勢いよく燃え盛っていた。全くの別物であった。
「どうやら。貴様は私が全力を出すに値する相手だな」
「それは違う」
バドの言葉を訂正させてきた。
「貴様が幾ら全力を出そうともだ」
「勝てはしないというのか？」
「そうだ。貴様ではこのシュラに勝つことはできない」
述べながらまた剣を構えてきた。その右手の剣をだ。
「少なくとも一人ではな」
「ならば見せてもらおう」
売り言葉に買い言葉の形になっていた。
「果たして。私を倒せるのかな」
「では行くぞ」
シュラの剣が黄金色に煌いた。
「苦しむことはない。一瞬で終わる」
「またエクスカリバーが放たれるな」

「ああ」
闘いを見守る聖闘士達の間に緊張が走る。
「今度こそ決着をつけるか」
「シュラ様が。勝たれる」
彼等はシュラの勝利を確信していた。彼が先程見せたその圧倒的な剣の力を見たからだ。それを再び見るということに緊張を覚えていた。しかしその時だった。
「待て、バド」
「貴方か」
「そうだ。私だ」
ここでまた一人の声がしたのである。
「何故ここに来たのかわかるか」
「来る必要はないと言った筈です」
まだ声の主の姿は見えない。しかしバドは忌々しげな顔で言うのだった。
「私一人で充分だと」
「悪いがそうはいかない」
声の主はまたバドに言ってきた。
「そうはな。予定が変わった」
「変わっただと？」
「ジーク様の御命令だ」
ここでこの名前が出て来た。
「ここは退けとな」
「ジーク様の！？」
「そうだ。カプリコーンだけではない」
声の主はまた言ってきた。

第十九話　剣と剣その二

「もう一人近付いている。その者に対抗する為にもな」
「もう一人か」
「それにおそらく貴様一人ではカプリコーンに勝てはしない」
「貴方も言うのか」
今の言葉はバドにとっては実に癪に触るものであった。実際にそれで表情を嫌悪感を見せるものにさせていた。
「私一人で。カプリコーンなぞ」
「果たしてそうか？」
遂に崖の方から影が出て来た。
「それは貴様が最もよくわかっている筈だがな」
「私自身がか」
「そうだ」
その影はまた言ってきた。
「貴様自身がな。違うか」
「くっ・・・・・・」
バドは遂に歯噛みの言葉を出した。
「認めるしかないというのですね」
「その通りだ。ここは退け」
影は次第にその姿を見せてきた。やはりそれは赤く輝く鎧を持つ狂闘士の戦衣を身に纏っていた。紫の髪に穏やかそうに見える中性的な顔の男だった。
「私と共にな」
「わかりました、ビルフォード」
バドはその男の名を呼んで頷いた。
「ではここは退きましょう」
「ジーク様のところへ戻るぞ」
そのビルフォードと呼ばれた狂闘士はあらためてバドに告げた。

「今すぐにな」
「わかりました」
「そういうことだ。カプリコーンよ」
ビルフォードは宙に浮かんだまま今度はシュラに顔を向けてきて声をかけてきた。
「ここは我等が退こう」
「勝手な理由だな」
「それは謝罪する」
ビルフォードはそれについては謝罪の言葉を述べた。
「この侯爵、ナベリウスのビルフォードの名にかけて」
「ナベリウスのビルフォード」
「如何にも」
シュラの問いに応える形になっていた。
「これが私の名だ。覚えておいてもらおう」
「わかった。それでだ」
シュラは彼の名を聞いたうえでさらに問うた。
「貴様は何故ここに来た」
「何故というのか」
「闘いを止める為に来たというのか？」
「そうだ。今ここでバドを失うわけにはいかない」
そのバドの前に立ち彼を守る形になったうえでの言葉だった。
「だからだ。ここは退かせてもらおう」
「そうか」
「追いはしないのか」
「必要とあらば追う」
シュラは今のビルフォードの問いにこう答えた。
「しかし。今はそうではない」
「我々を追うべき時ではないというのだな」
「そういうことだ。退きたいのなら退くといい」
あえて淡白なまでにその追撃の姿勢を見せないシュラであった。

「どちらにしろ。御前達はこのシュラによって倒されることになる」
「自信があるというのか」
「その通りだ」
そしてその自信をあえて隠さないシュラだった。
「わかったな。それではだ」
「うむ。退かせてもらおう」
これで話は終わりだった。少なくとも彼等の間ではそうであった。
話を終えたビルフォードはまたバドに顔を向けた。そうして彼に対して告げる。
「それではだ。下がらせてもらうぞ」
「わかりました」
憮然としているがそれでも頷くバドだった。
「下がるとしましょう」
「ジーク様が待っておられる」
ビルフォードはまた彼にジークという名前を出した。
「そこに向かうぞ」
「うむ。ではカプリコーンよ」
シュラに対してここでも激しい敵意に満ちた目を向けてきた。
「また会おう。その時は貴様の最後の時だ」
こうして彼等は姿を消した。後に残ったのは聖闘士達だった。とりあえず闘いが終わったと見てアステリオンはシュラの側に来て言ってきた。

第十九話　剣と剣その三

「シュラ様、とりあえずはですが」
「闘いは終わったな」
「はい、そうです」
それはわかるのだった。
「ですが。まだそれでも」
「また闘うことになる」
それまでバドやビルフォードがいた場所を見て言うのだった。
「先に進めばな。では先に進むとしよう」
「闘いにですね」
「その為にここに来た」
彼はこうも言うのだった。
「だからだ。向かうぞ」
「わかっております」
「それでは」
シュラ達はさらに先に進むことになった。撤退したビルフォードとバドは同志達と共にいた。そうして二人の前にはジークが立っていた。
「ジーク様。只今戻りました」
ビルフォードがジークに対して一礼してから述べた。
「バドもこの通り」
「まず無事でよかった」
ジークはビルフォードの話を聞いたうえでこう言うのだった。
「ハルパス。御前が無事でな」
「有り難き御言葉」
「そしてだ」
ジークは静かだが確実に言葉を進めるのだった。
「貴様の炎を打ち消したというのだな」

「その通りです」
バドは畏まった調子でジークの問いに答えてきた。
「ただ一突きで。そしてその剣の一振りで」
「剣の炎すら打ち消したか」
「その通りです」
「貴様はあの時確かに加減していた」
ジークもそれはわかっていた。
「だが。それでもだ」
それを踏まえたうえでさらに言うのだった。
「貴様の炎を打ち消した者は神話の時代よりいはしなかった」
「そうです。私の炎を消せる者がいるとは」
このことはバドにとってもはじめてのことだったのだ。あの時はあえて表面に見せてはいなかったがそれでも今は驚きの感情を見せているのだった。
「これまでの幾多の戦いでもはじめてのことでした」
「やはり。一人では無理か」
ジークは誰に対して言うまでもなく述べた。
「黄金聖闘士の相手は。一人では無理か」
「ではジーク様」
「どうされますか？」
周りの狂闘士達がそれぞれ彼に問うてきた。
「先のドイツでの戦いと同じようにされますか？」
「ここは」
「そうだ。やはりそれしかない」
ジークは彼等の言葉を受けたうえで言うのだった。
「貴様等とて一人では相手にはならない」
「黄金聖闘士相手ではですか」
「我等といえど」
「向かうのだ」
彼は言う。

「御前達全員でな。そうしてカプリコーンを倒せ」
「はっ」
「畏まりました」
ジークの言葉を受けたうえでそれぞれ頷く。
「何なら俺が最初に向かおう」
「ジーク様がですか」
「黄金聖闘士に一人で対抗できる狂闘士は八大公のみ」
彼は言った。
「ならば。これも当然の選択肢の一つだ」
「いえ、それには及びません」
「まずは我等が」
だがこれは狂闘士達が止めるのだった。
「我等がカプリコーンを倒します」
「そして他の聖闘士達もまた」
「倒すというのだな」
「まずはお任せ下さい」
「是非」
「よし」
ジークは彼等の言葉を受けたうえで頷いた。そしてまた言うのだった。

第十九話　剣と剣その四

「では。御前達に任せよう」
「有り難うございます」
「有り難き幸せ」
「話はこれで終わりだ」
ジークは己の述べたいことを全て述べたうえでこう言った。
「後は。皆休むといい」
「休息ですか」
「戦いまで時間がある」
彼は言う。
「それまでゆっくりと休み英気を養うことだ」
「それでは。その様に」
「御言葉に甘えまして」
「インプ達にも告げよ」
兵士達のことも忘れてはいなかった。
「暫くしたら聖闘士達が来る」
「はい」
「その時まで休むようにとな。いいな」
「はっ、それでは」
彼の周りにいる狂闘士のうちの一人が応えた。彼もまたその戦衣は禍々しいものだった。
「その様に命じておきます」
「では今から」
「休むことだ。俺も休むとしよう」
こう告げて自ら踵を返し場を後にした。狂闘士達は一礼して場を後にするジークを見送った。そのうえで彼等も場を後にするのだった。
一人になったジークは一人剣を振るっていた。場はグランドキャ

ニオンの荒野の中だった。荒涼として周りには岩山がビルの様に連なり崖が散見される。その中で一人剣を振るっていた。
その彼のところに一つの影が現われた。それは。
「エリス様」
「また剣を振るっているのだな」
エリスの姿は透き通り何処か虚ろだった。その彼女の姿に対してジークは片膝をつきそのうえで彼女に対して言うのだった。
「いつもと同じように」
「剣を振るっていると心が落ち着きます」
彼は言うのだった。
「それで。つい」
「剣を振るうのはいいことだ」
エリスは彼のその言葉を受けてまた言ってきた。
「それはな」
「左様ですか」
「そしてその剣でだ」
「はい。カプリコーンを倒しましょう」
今このことをエリスに対して誓うのだった。
「是非。楽しみにお待ち下さい」
「わかった。してジークよ」
エリスはまた彼の言葉を受けたうえで言ってきた。
「このグランドキャニオンにおいてだが」
「はい」
「わかっているな」
己の前に片膝で跪く彼に対してまた言ってきたのだった。
「封印を解くのだ」
「わかっております」
「戦いこそアーレス様の最も好まれるもの」
戦いの神であるからこそだったがそれは明らかに同じ戦いの神であるアテナのそれとは違っていた。それがここでもわかった。

「だからだ。ここはだ」
「はい。戦いにより小宇宙を巻き起こし」
「アーレス様に届けるのだ」
こうジークに告げる。
「今も冥界の奥深くに封じられてしまっているアーレス様にな」
「ではカプリコーンは」
「倒すに越したことはない」
このことは言うまでもないといったようであった。
「だが。それでもだ」
「それでも。つまりは」
「カナンとキャンサーの闘いの時と同じだ。倒せなくとも闘えばいい」
妙な言葉であったが言うのだった。しかも語ると共に何故か口元に何かを考える笑みを浮かべていた。それは彼女の青い顔をさらに凄みのあるものにさせていた。
「闘えば。それで小宇宙が発する」
「闘いの小宇宙が」
「それを発するのだ。八大公であるそなたと」
まずはジークだった。
「そして黄金聖闘士であるあのカプリコーンがな」
「我々が激しい小宇宙を発すればそれにより」
「アーレス様の元に届く」
エリスの言葉は続く。
「だからだ。よいな」
「はっ、ではこの戦いもまた」
「カナンと同じだ」
そのドイツでデスマスクと激しい戦いを演じたカナンの名前を出し続ける。
「あの様にな」
「畏まりました。では」

「闘うのだ」
エリスの言葉にはさらに凄みも宿った。
「よいな」
「御意」
彼等はこう話を交えるのだった。それと共に赤い闘争心に満ちた小宇宙が燃え上がる。それは荒野を焼け焦がしさらに赤くせんが如くだった。

第十九話　　完

２００９・３・２５

第二十話　力と正義その一

力と正義

バド及びビルフォードとの出会いを終えたシュラ達はさらに先に進む。既に聖衣を着ており何時でも闘えるようにしている。そのうえで先に進んでいた。

「高まっていますね」

「そうだな」

シュラは周りを警戒しているアステリオンの言葉に応えていた。

「一歩ごとにな」

「はい、小宇宙が高まっています」

「この刺々しく戦意に満ちた小宇宙」

トレミーもまたアステリオンと同じく周囲を警戒する目で見回していた。そのうえでの言葉だ。

「間違いありません」

「狂闘士だ」

彼は言った。

「いるな。もうすぐだ」

「それではいよいよですね」

「闘いですね」

「兵達は任せた」

シュラは聖闘士達の先頭を進みながら後ろの彼等に対して告げた。

「狂闘士達は俺が相手をする」

「シュラ様がですか」

「そしてサガがだ」

シュラはもう一人の聖闘士の名前も出した。

「我等二人で相手をしよう」

「黄金聖闘士が二人か」

「それはやはり」

「この地上で相手をできる者はいない」
シュラはこうまで言うがこれは決して慢心や驕りではなかった。
「我等にな」
「そうですね。ですが言い換えれば」
「そうだな」
青銅の者達は彼の言葉を聞きながらまた言うのだった。荒野には今は彼等以外には誰も見えない。しかしえも言われぬ刺々しい気が辺りに満ち続けているのだ。
「相手もそれだけ手強い」
「狂闘士。やはりそれだけのものがあるか」
「わかっているならば余計にだ」
シュラはまた聖闘士達に対して告げてきた。
「手出しはするな。いいな」
「我々としては不本意ではあります」
「それは」
「わかっている」
シュラも聖闘士、しかもその最上位にある黄金聖闘士である。ならば彼等の今の心がわからない筈がなかった。だがそれでもなのだった。
「しかしだ。御前達では勝てはしない」
「くっ・・・・・・」
「わかりました」
「そうだ。だからこそだ」
「ええ。それでです」
サミュエルが今度言った聖闘士だった。
「シュラ様、この気配は」
「そうですね」
「これは」
他の青銅の者達も感じ取っていた。そうして今一斉に身構えるのだった。

身構えた彼等の周りに姿を現わしたのは無数の者達だった。一体何人いるかわからない。それぞれ赤い鎧に身を包みその手にはあの三叉の槍を持っていた。

「ふん、やはり気付いたか」

「聖闘士達も愚かではないか」

「雑兵程度が我等をたばかれると思っているのか」

「それだけ小宇宙を発していればな」

「わかるというのだな」

「そういうことか」

インプ達だった。彼等は聖闘士達を完全に取り囲んでいた。一体何人いるのか、数えることは不可能な程大勢集まっていた。

「だが。如何にアテナの聖闘士といえどだ」

「果たして我等に勝てるか？」

インプ達はそれぞれが手に持っているその槍を手に前に出て来た。

「この数の我等に」

「聖域の雑兵達と一緒にしないことだ」

言いながら前に出て来る。雑兵ながらその小宇宙は侮れないものがあった。

「まずはカプリコーン、貴様だ」

「覚悟しろ」

そして彼等はまずシュラを見据えてきたのだった。

第二十話　力と正義その二

「貴様を倒せば聖闘士の力は落ちる」
「だからこそ。ここでな」
「先にあのハルパスも言っていたが」
「バド様が？」
「何とだ」
「このシュラを倒すと」
　このことを彼等に対しても告げたのだった。
「そう言っていた」
「バド様を退けたのは見事だ」
「だが。バド様のその御無念晴らしてやろう」
　言いながらさらに前に出るインプ達だった。その声も小宇宙も殺気に満ちていたものだった。その小宇宙から彼等もまた狂闘士であることがわかる。
「では。行くぞ」
「苦しませることはない。ただ血を流させるだけだ」
「それだけだ」
「そうか」
　シュラは彼等の言葉を受けたうえで気配を確かなものにさせた。それはまるで剣を鞘から抜いたようなものだった。
「シュラ様の小宇宙が」
「高まったか」
　聖闘士達もそれを感じ取った。シュラはその彼等に対して言ってきた。
「御前達は今は動くことはない」
「！？シュラ様」
「それでは」
「そうだ。この場も任せてもらう」

こう彼等に対して告げたのだった。
「このシュラにな。俺に戦いを挑んできたのだからな」
「そうですね。それでは」
「我等は今は」
「それでいいな」
インプ達自身に対して問うた。
「貴様等の相手はこのシュラ一人だ」
「ふん、大きく出たものだ」
「確かに我等は雑兵だ」
彼等もそれは自覚しているのだった。狂闘士の世界は聖闘士のそれよりも上下関係が厳しく雑兵はとりわけその立場に置かれているからだ。だからこそだった。
「しかし。それでもだ」
「我等を侮るな」
今まさに攻撃を仕掛けんとする。その時に彼等の中の一人がシュラに言ってきた。
「カプリコーン、貴様の技はわかっている」
「それは既にな」
「わかっているというのか」
「そうだ」
このインプは強がりを多分に含み顔に汗を流しながらもそれでも彼に言ってきた。
「貴様の技はエクスカリバーだな」
「如何にも」
「手刀から発される」
このことはもう彼等も知っているのだった。
「それはな。既にな」
「だからどうしたというのだ?」
「手刀で発せられるならばその攻撃範囲は限られている」
「!?そうか」

「そうだな」
これまで黄金聖闘士とあって幾分怯むところが流石にあったインプ達も同僚のこの言葉を聞いてそれがかなり楽になった。
「手刀ならばその範囲は限られている」
「キャンサーのようにはいかん」
「そうだ、その通りだ」
「ならば」
まさに集団心理だった。彼等はその動きを大胆なものにさせてきていた。
「我等も攻撃の合間をつけば」
「それこの男を倒せる」
「間違いない」
「そう考えるのか」
シュラはその大胆に前に出だした彼等を見ても冷静なままでありまた落ち着きを保ったままだった。その研ぎ澄まされたものは変わることがなかった。
「このエクスカリバーを。そう」
「違うとは言わせないぞ」
「手刀ならばキャンサーの一連の攻撃のようにはいかん」
「我等とて。隙があらば」
「ならば見せよう」
シュラはその右手をまた手刀にして彼等に言ってきた。

第二十話　力と正義その三

「このシュラのエクスカリバーが果たして貴様等の思うようなものかどうか」
「戯言を。強がっても無駄だ！」
「我等のこの槍を受けて死ね！」
「今ここでな！」
インプ達は一斉に飛び上がりそのうえでシュラに襲い掛かった。
しかしシュラはその彼等をまだ見ている。だがやがてゆっくりとその右手を動かすと。剣を遮二無二切り回しだした。
「何っ！？」
「手刀をそのように！？」
「言っておく」
シュラは技を放ちながら彼等にまた告げた。
「このシュラの剣はただ一回斬るだけではない」
「何だと！？」
「まさか」
「そう、そのまさかだ」
今まさにエクスカリバーが唸る。
「このエクスカリバー、こうすることもできる」
「なっ、シュラ様のエクスカリバーが」
「乱舞した！？」
「受けてみよ、このシュラの奥義の一つ」
今まさに技の名前を口に出す。
「エクスカリバー、乱舞！」
「う、うわあああああっ！」
「剣が！」
その乱舞させ放った剣がインプ達を襲う。それは彼等が避けられるものではなくただ散り散りに切り裂かれたのだった。そうしてイ

ンプ達の屍が大地に次々と落ちていった。それはまるで雨が降るようだったが実際に血の雨がアリゾナの荒野に降り注いでいた。
「ば、馬鹿な」
「エクスカリバー乱舞だと」
倒れたインプ達の中でまだ息のある者が死ぬ間際に呻いていた。
「その様な使い方があるとは・・・・・・」
「嘘ではないのか・・・・・・」
「このシュラ、決して嘘をつくことはない」
シュラはエクスカリバーを放ち終えてからいつものように沈着な声で告げた。
「これが現実だ」
「これがエクスカリバーだというのか」
「その通りだ」
また彼等の言葉に答えた。
「身体は切り裂いてはおかなかった」
「衝撃波で斬ったというのか」
「そうだ。エクスカリバーは光の剣」
光速で放つからだというのである。
「貴様等の戦衣では護れぬ」
「くっ・・・・・・」
「この世で切れぬものはないのだからな」
「おのれ、カプリコーン」
「我等の怨み・・・・・・」
彼等は断末魔の中でまだ言っていた。
「きっとジーク様が晴らしてくれる」
「覚えておくことだ」
こう言い残して息絶えていった。シュラはその息絶えた彼等を見下ろしていた。その目はやはり沈着で冷酷なものさえ見られた。
「何故このインプ達が俺に敗れたかわかるか」
「インプ達がですか？」

「そうだ」
不意に他の聖闘士達に対して問うてきたのだった。
「この者達がだ。何故かわかるか」
「それはこの連中が邪悪だからではないのですか？」
「そう、悪だからこそ」
彼等は聖闘士として模範的な答えを述べたのだった。
「だから負けたのではないですか？」
「違うのですか？」
「では問おう」
シュラは彼等のその返答に回答することなくまた問い返すのだった。
「その正義とは何だ」
「正義？正義は」
「やはり。人を護ることが」
「世界を護ることではないのですか？」
「それに必要なのは何だ」
シュラはまた答えずに問い返してきた。
「それは何だ。答えられるか」
「それは・・・・・・」
「そう言われましても」
彼等は今度こそ返答に窮してしまった。実はそこまでは考えられなかったのだ。正義とは何かということを答えることはできなかったのだ。

第二十話　力と正義その四

「正義とはその」
「つまり」
「力だ」
シュラはここで遂に答えた。
「正義とは何かだな」
「はい」
「それですよね」
「ならばそれだ。力が正義なのだ」
「力が正義ですか」
「そうだ」
こう彼等に告げ続ける。
「力がだ。全てを貫くことができる力こそが正義なのだ」
「そうなのですか」
「それが正義なのですか」
「人の世を護りそうして貫き通すことのできる力」
ここでも力という言葉を出す。
「それこそが正義なのだ。わかったか」
「!?そういえば」
「ああ、そうだな」
彼等はシュラの話を聞いているうちにあることを思い出したのだった。
「デスマスク様やアフロディーテ様も仰っていたな」
「そうだな。力こそが正義だと」
「確かに」
彼等は二人の言葉を思い出したのだった。
「デスマスク様はどんな物事でも絶対にする力こそが正義だと」
「アフロディーテ様は絶対の美である力こそ正義だと」

「仰っていたな」
「そしてシュラ様は」
あらためてシュラの言う力について考えて述べたのだった。
「全てを貫き通す力こそ正義だと」
「今仰いましたね」
「人を護るには力が必要だ」
シュラはまた力と正義を口にした。
「それならば。力が正義だな」
「はい、そうなります」
「ならば」
ここで彼等はわかったのだった。シュラの言うことがだ。
「そういうことですか」
「ですから。力が正義なのですか」
「アーレスを倒す正義だ」
また述べたシュラだった。
「今のそれはな」
「ですがシュラ様」
ザンドルフが彼に問うてきた。
「それでは」
「何だ？」
「アーレスもまた正義になるのではないですか？」
こう問うのだった。
「力が正義ならば」
「そういえば」
「そうなるのか？」
他の青銅の者達も彼の言葉に考える顔になった。
「アーレスは確かに強い」
「それならば」
「いや、違う」
しかしシュラはそれは否定したのだった。それは声の色にはっき

りと出ていた。
「アーレスは正義ではない」
「強くとも、ですか」
「アーレスは力によって何を求めている」
こう彼等に対して問うのだった。
「その力で。求めているものは何だ」
「それはやはり」
「己の世界です」
「血塗られた、破壊と闘争の世界です」
彼の戦いとはそれである。ならば必然的に彼が治める世界もそうなってしまう。少なくともアテナが今いるこの世界とは完全に別のものになってしまうのは間違いなかった。
「そうなるとしか思えません」
「それは」
「そこに人は住めない」
シュラは言うのだった。
「弱き者は住むことができない。そうだな」
「確かに」
「その世界になれば」
彼等も容易に想像のつくことだった。確かにアーレスが治める世界になれば力のない者は住むことができない。力のある者だけが思うがままにできる、そうした世界なのだ。

第二十話　力と正義その五

「ですがそうではないのですか？」
「力が正義ならば」
「俺もデスマスクもアフロディーテも」
二人の名前も出して話してみせた。
「確かに力は正義だと考えている」
「はい」
「しかし。アーレスの世界には正義はない」
「ないのですか」
「我等はその力で弱き者を討ったりはしない」
これは断言だった。
「決してな。聖闘士が戦う相手は」
「はい」
「それは決まっています」
彼等の返答もはっきりとしたものになった。
「戦士です」
「衣をまとっているか武器を持っているか」
そうした限定がつくのだった。聖闘士は決して武器を持たない者と戦ったりはしない、これは絶対の掟である。一般市民は狙わないのだ。
「そうでなければ戦いません」
「例え何があろうとも」
「答えはそれだ」
出ているというのだった。
「確かに黄金聖闘士の力は絶大だ」
「それはその通りです」
それもまた事実だった。
「そして戦場に出ればだ」

シュラはまた語る。
「そして技を放てばそれだけで多くの犠牲が生じてしまう」
「犠牲がですか」
「我等が出る時は。犠牲が覚悟される時」
この技の絶大な威力故にだ。黄金聖闘士の技はそのどれもが異常なまでの広範囲に恐ろしいまでの、それこそ一つの国なぞ簡単に吹き飛んでしまうような力を放つ。そうした技を放てばそれだけで関係のない者まで巻き込んでしまう。これは神話の時代からなのだ。
「デスマスクの巨蟹宮の死者の顔だが」
「あの顔ですか」
「ただ奴が倒した者だけが入るとは限らない」
「デスマスク様の技に巻き込まれそのうえで命を落とした者達もですか」
「そうなると」
「このシュラも然りだ」
自分自身もだというのだった。
「エクスカリバーを放てばだ。それだけで多くの者が巻き添えになる」
「そうですね。今は荒野ですが」
「それでも。他の場所で攻撃を放てば」
「それで終わりだ」
こういうことだった。
「多くの関係のない者まで巻き込んでしまう。だが」
「だが？」
「それもまた覚悟のうえだ」
腹を括った言葉だった。
「我等黄金聖闘士は誰もがそれを覚悟して戦っているのだ」
「そうなのですか」
「その覚悟があればこそ、ですか」
「それが力だ」

だというのである。
「力には重みがある」
「ではアーレスはその重みは」
「断言できる。感じてはいない」
シュラはまだ会ったこともない、この世界にもまだ姿を現わしていないアーレスという神についてここまで断言した。しかもそれは偏見などでもなかった。
「ただ。己の力で。その望むことをしようとしているだけですか」
「それだけなのですか」
「それは正義ではない」
ここまで話したうえでそこに至るのだった。
「決してな」
「正義ではありませんか」
「だからこそ」
「そうだ」
シュラはまた彼等に対して断言したのだった。
「力に溺れているだけだ。それは正義とはならない」
「力が正義であってもですか」
「それを向ける相手によって力は正義となる」
シュラの自説だった。

第二十話　力と正義その六

「傲慢な神は決して正義とはならないのだ」
「そういえば冥皇ハーデスの腹心の兄弟神の一人タナトスは」
「死神だったな」
「ああ、そうだ」
アステリオンがトレミーに対して答えたのだった。
「あの死神だ。かつての聖戦で猛威を奮ったな」
「あの神もまた傲慢極まりない神だったという」
「人を虫けらや小石のように見下していたそうだな」
「それは正義ではないのだ」
シュラはあくまでそうした存在を正義とは認めないのだった。
「決してな」
「ではアテナことが正義となるのですね」
「それならば」
「そして人がだ」
シュラはアテナの他にも人間もまた正義だとしたのであった。
「人が正義となる」
「人がですか」
「ですが人といっても」
聖闘士達は言うまでもなく人間である。人間だからこそ同じ人間のことがわかっているのだった。それは。
「様々な者がいます」
「中には邪悪な者もまた」
「いますが」
「そうした者はまた別だ」
シュラは彼等、そういった邪悪な者達に対しても答えた。
「またな。人間ではあってもだ」
「はい」

「邪悪な者には正義はない。それは道理だ」
「道理ですか」
「正義は邪悪な者にはない」
正義と邪悪は相反するものである。それならばこの論理も当然のことだった。その正義に対してのシュラの言葉はさらに続くのだった。
「それは言うまでもないことだ」
「そうなりますか」
「そして傲慢な神にもないものだ」
ここでシュラは傲慢な神という新たな存在が言葉に出た。
「それもな。また違うものだ」
「傲慢な神というとこの場合は」
「やはり」
「そうだ。アーレスだ」
その展開になるのはここでは自然だった。やはり話の流れでアーレスこそ傲慢な神となる、誰もがわかっていた展開だった。
「アーレスには正義はない。それは覚えておくことだ」
「左様ですか」
「では。先に進むぞ」
ここまで話したうえでさらに先に進むように周りに告げた。
「先にな。いいな」
「はい、それでは」
「また先に」
聖闘士達はシュラの言葉に対して頷き彼に続いた。
「進みましょう」
「敵はまだいます」
「はい、先に」
こうして先に進む彼等だった。シュラは彼等の先頭に立ち先に進む。その頃シオンは教皇の間にいた。そしてそこでシャカと話をしていた。

「ではシャカよ」
「はい」
「あの四人の神々の小宇宙はまだ感じないのだな」
「はい、私もまだ感じません」
このことをはっきりと答えたシャカだった。彼は今はシオンの前に片膝をついて控えていた。今シオンの前にいるのは彼だけだった。
「彼等の小宇宙は」
「あの四人の神々はだ」
シオンは教皇の玉座に座ったままま述べてきた。厳かな雰囲気が辺りを支配している。
「エリスと並ぶアーレスの側近だ」
「その通りです」
シャカはシオンの問いに対しえ答えた。
「あの神々が復活したならば」
「今よりも困難な戦いになる」
シオンは静かだがそれでもその声は鋭いものだった。

第二十話　力と正義その七

「今よりもだ」
「今アーレスの軍勢の戦力は狂闘士だけです」
「今のところは、だな」
「その通りです。そしてアーレスの第一の腹心であり実の妹である争いの女神エリス」
エリスの存在もまた語られる。
「彼女もいますが」
「エリスは実質的にはそれ程動きはしない」
そのことがわかっているといった今のシオンの口調だった。
「あの時は聖域に来たが」
「あの時はおそらく特別でしょう」
シャカはそう読んでいるのだった。
「我々を。一気に倒す為に」
「あえて来たというのですね」
「私はそう見ている」
シオンはまた述べた。
「そのようにな」
「そうですね」
そしてその見方はシャカも同じだった。
「エリスは今アーレスに代わりトラキアを治めています」
「あの時はまず一気に我々を倒すつもりでした」
そうだったというのである。
「聖域にはまだ充分な黄金聖闘士がいませんでした」
「いるのはサガとアイオロスだけだった」
その二人だけだったというのだった。これは事実だった。シャカ達が聖域に到着するその時まで聖域にいる黄金聖闘士はこの二人だけだったのだ。

「あの時攻められればだ」
「かなり苦しかったのは間違いなかったかと」
「だがそれは果たせなかった」
他ならぬシャカ達が聖域に到着したからだ。そのときはそれにより一気に戦局が逆転した。彼等はその時のことを話すのである。
「そしてエリスはトラキアの宮殿に戻った」
「その通りです」
その時のことも話す彼等だった。
「従ってこれからはです」
「動くことはない」
このように話が進んでいく。
「従ってな」
「そうなります。今我々はエリスが動くことだけは安心することができます」
「若し動けばだ」
シオンの声がまた険しいものになった。
「我々は今まで以上に辛いことになるだろう」
「その通りです。またあの四人の神々が蘇れば」
「エリスが動き出した場合以上に厄介だ」
シオンはこう分析していた。
「かつてのアーレスとの聖戦において我々は彼等にもかなり苦しめられた」
「その様で」
「伝承に残っている通りだ。ハーデスとの戦いに匹敵する激しい戦いだった」
そう言い残されている。文献にも書かれているのである。
「そして最後は」
「ライブラの十二の武器をはじめて解放し」
「そのうえで勝利を収めた」
聖闘士は武器を持つことが許されない。アテナは素手で戦うこと

をよしとしている。しかしその彼女がそれを許可したということはそれだけ事態が深刻だったということに他ならない。
「それだけの激しい戦いだった」
「それをそうさせたのが彼等です」
「そう、あの四人の神々だ」
また彼等のことを話す。
「彼等の力。決して侮ることはできない」
「では教皇」
シャカの目は閉じられたままだった。しかしその小宇宙が黄金色に沸き起こっているのが見える。
「若し彼等が出て来た場合には」
「頼めるか」
「無論です」
シャカの返答はすぐだった。
「それが私の務めです」
「そうか。頼めるか」
「より言わせて頂ければ私達のです」
シャカはすぐに己の言葉をこう言い替えてきた。
「私達の務めです」
「黄金聖闘士のだな」
「はい」
シャカはまたシオンに対して答える。
「その通りです。それこそが我々の」
「そうだったな。その為に御前達がいる」
己に向けて顔をあげてきたシャカに述べたのだった。
「そして私もな」
「教皇もですか」
「そうだ。私もだ」
己もだという。その言葉は決して嘘ではなかった。嘘の響きはそこにはなかった。

「私もまた。その為にいるのだ」
「教皇もなのですか」
「前教皇セージは先代キャンサーであるマニゴルドと共に死神タナトスと闘い壮絶な戦死を遂げられた」
その時のことは彼が最もよく覚えていることだった。この時聖域は彼と童虎の二人しか生き残らなかった。そこまで激しい戦いだったのだ。
「そして私もまた」
「命を捨てる覚悟がおありなのですね」
「その通りだ。御前達と同じだ」
またシャカ達と同じだと告げた。
「私もまた。必要とあらば闘う」
「では。その時には」
「いいか。くれぐれも言っておく」
シオンのシャカへの言葉はまだ続いていた。
「これから私に何があろうとも」
「教皇、その時は」
「この世界とアテナを頼む」
こうシャカに告げたのだった。
「くれぐれもな。いいな」
「はい、わかりました」
「それではだ」
シャカは物静かにシオンの言葉に頷いた。そうしてそれに応えたシオンは最後に彼に告げたのだった。
「処女宮に戻るといい」
「それでは」
「何時アーレスの軍勢が来てもいいようにな」
「御意」
シャカは最後にシオンに頭を垂れて場を後にした。シオンは一人で暫く考えごとをしていたがそれも終え玉座から姿を消した。こう

して彼等はそれぞれの場所に戻ったのだった。

第二十話　　完

2009・3・30

第二十一話　火の軍団その一

火の軍団

ジークをはじめとした狂闘士達はグランドキャニオンにおいてとりわけ高い岩山の上にいた。そこに集まりそのうえで今後のことを話していた。

当然ながらその中央にはジークがいる。他の狂闘士達は彼を囲んでそれぞれ言葉を述べていた。

「インプ達の軍勢がまた全滅しました」

「カプリコーンのエクスカリバーにより」

「またか」

ジークはインプ達が敗れたという報告を静かに聞いていた。それだけだった。

「また敗れたのか」

「今回は包囲でしたがそれでも」

「あえなくでした」

「当然だな。剣はただ一閃させるだけではない」

ジークは既にシュラが何をしたのかわかっているかのようだった。

「乱舞させ。それによって断ち切ることも可能だ」

「はい、その通りです」

バドが忌々しい口調で述べてきた。

「カプリコーンはその剣を乱舞させそれにより」

「やはりそうか。それによってだな」

「一瞬でした」

バドはこうもジークに告げた。

「一瞬でエクスカリバーを乱舞させそれによりでした」

「あの男はただ取り囲んでもそれで勝てる相手ではない」

ジークは言った。

「数だけではな」

「勝利を収めるのは無理ですか」
「やはり。俺が行く」
今度の言葉はこうだった。
「このジークが相手をする。御前達は他の聖闘士と闘え」
「いえ、それは」
「ジーク様、ここは」
だが狂闘士達は今のシュラの問いには従おうとしなかった。それぞれ必死に拒む顔でジークの今の言葉に対して言い返したのだった。
「我等にお任せ下さい」
「カプリコーンの首。必ずや」
「取れるというのだな」
「その通りです」
「ですから」
「私もまた」
バドもまた前に出てジークに対して言ってきた。岩山の上に立つ十人の狂闘士達が動いていた。
「カプリコーンに対して雪辱を挑みたくあります」
「どうしてもか」
「はい、どうしてもです」
また答えるジークだった。
「どうかここは。狂闘士の誇りにかけて」
「狂闘士の誇りか」
この言葉を聞くとジークの態度が少し変わった。
「そうだな。それではだ」
「行かせて頂けるのですね」
「我々に」
「行くがいい」
静かに彼等に対して言うジークだった。
「御前達が行きたいのならな」
「有り難き御言葉。それでは」

「我等が必ず」
「行け」
今度のジークの言葉は先程のそれよりもさらに簡潔なものだった。
「そして必ずカプリコーン及び他の聖闘士達をだ」
「無論です。それでは今より残るインプ達を連れて」
「我等も」
彼等はすぐに姿を消し何処かへと向かった。後に残されたジークは一人岩山の上から荒野を見下ろしていた。荒野には底知れぬ崖と赤い乾いた大地が広がっていた。彼はその二つのものを見下ろしながら今は静かにその上に留まっているのであった。
聖闘士達はさらに進み九つの岩山に囲まれた場所に出た。そこに入るとまずシュラの足が止まった。
そのうえで。彼は言った。
「来たな」
「ここでですか」
「遂に」
「出て来るといい」
声をあげた後ろの聖闘士達には応えずにこう言ったシュラだった。
「いるのはわかっている。遠慮することはない」
「ふふふ、流石はカプリコーン」
「既にわかっていたというのか」
「貴様等の小宇宙はわかりやすい」
こう彼等に対して告げるシュラだった。

第二十一話　火の軍団その二

「殺気と闘争心に満ちている。それだけでな」
「確かにな。それはその通りだ」
「それこそが我等の小宇宙」
それぞれの岩山の頂上に彼等が姿を現わしてきた。
「だが。それだけでは我等に勝つことはできはしない」
「今からそれを教えてやろう」
「くっ、囲まれていた！」
「しまった！」
アステリオン達は彼等に囲まれてしまっている状況に気付き呻いた。
「しかもこの者達だけではないぞ」
「雑兵達も」
周りにはインプ達がいた。彼等に完全に囲まれてしまっていた。
「シュラ様ここは」
「我等が」
「何度も言うが御前達は雑兵達の相手だ」
ここでもこう言うシュラだった。
「そして狂闘士達をだ」
「左様ですか」
「それでは」
「このシュラが受け持つ」
この意志に変わりはなかった。まさに不変だった。
「そういうことだ。では頼んだぞ」
「はい、それでは」
「そのように」
彼等はこのようにして役割分担をした。そのうえで彼等はそれぞれの相手に向かう。修羅は今己の上に位置するその九人の狂闘士に

顔を向けたのだった。
「闘いだが」
「カプリコーンよ」
当然その中にはバドとビルフォードもいた。バドが彼に対して言ってきた。
「私がここにいるからにはだ」
「決着をつけるというのだな」
「そうだ」
彼ははっきりとした声で答えた。
「今からそちらに行く。覚悟するがいい」
「私もだ」
その後にビルフォードも続いた。二人でシュラの前に降り立ったのである。
「さて、二人だが」
「まずは私が行こう」
バドが前に出ようとする。シュラはそのバドに対して言ってきた。
「二人で来い」
「二人でだと?」
「馬鹿な、我等を一度に相手にするというのか」
「その通りだ」
その言葉には何の淀みもなかった。
「さあ、来るのだ」
「まさか。死ぬつもりか?」
「死ぬのが怖くないというのか」
彼等はシュラの今の言葉を聞いて我が耳を疑っていた。彼等は自分達の実力では個々でシュラを倒せると信じ込んでいるのだ。
「だが。我等を愚弄するというのなら」
「容赦はしない」
バドはその剣を前に出しビルフォードも身構える。それぞれ左右からシュラに襲おうとする。

「先の炎を私の炎と思わないことだ」
バドは鋭い目でシュラを見据えながら言ってきた。
「私の真の炎、今こそ受けよ」
「私もだ」
そしてビルフォードもまた今まさに攻撃を仕掛けんとしていた。
「狂闘士の力。今こそ見せよう」
「では。来るがいい」
彼等の言葉を受けても冷静なままのシュラだった。
「このシュラもまた最大の力を以って貴様等に応えよう」
「言ったな。ならばだ」
「受けるがいい！」
二人は同時にそれぞれ左右から攻撃にかかった。まずはバドがその炎の剣を前に突き出しビルフォードが大地を打った。そして。
「ゴルトファイエル！」
「ヘルズベアークローーーーッ！」
それぞれの技の名を叫び技を繰り出す。彼等にとっては渾身の攻撃だった。
「どうだ、これならばだ！」
「カプリコーン、貴様とて！」
技を放ったうえで叫ぶ。
「よけられはしまい！」
「これで最後だ！」
彼等は勝利を確信していた。この技で決まったと思った。黄金の炎と大地を切り裂く爪が彼を襲う。今まさにその二つで断ち切られんとしていた。しかしその時だった。

第二十一話　火の軍団その三

「何っ！？」
「何だとっ！？」
シュラは両手を横に一閃させた。左右に剣の衝撃波が走る。その衝撃波によって彼等の渾身の攻撃を何なく打ち消してしまったのだった。
「馬鹿な、私の渾身の炎を」
「私の爪を消したというのか？」
二人はその消えてしまったそれぞれの攻撃を見ながら唖然としていた。
「これがエクスカリバーだというのか」
「何という衝撃だ」
「剣は攻めるだけではない」
シュラは攻撃を打ち消したうえで冷徹な声で述べてきた。
「こうして守ることもできるのだ」
「それが今だというのか」
「今のエクスカリバーだというのか」
「そうだ。そして」
シュラはまた言ってきた。
「このシュラのエクスカリバーは一振りだけではない」
「何っ！？」
「するとまさか」
「そうだ。右手にもあるが左手にもある」
こう言うのだった。
「この両手にな。備わっているのだ」
「くっ、だからこそか」
「我等の攻撃を同時に防げたというのか」
「その通りだ。それではだ」

敵の攻撃を打ち消したうえでまた言ってきた。
「今度はこちらの番だ」
「来るか」
「貴様が」
「参る」
その声の鋭さが増した。
「このカプリコーンの剣」
言いながらその剣をかざす。両手の剣を。
「今見せよう。ツインエクスカリバー！」
言いながらその両手を再び一閃させてきた。それぞれ左右に繰り出した攻撃が彼等を襲う。だが二人はその剣に対して再びその技を放ったのだった。
「やらせん！」
「我等とて狂闘士！」
その誇りが彼等をそうさせていた。
「この程度の攻撃ならば」
「退けてみせる！」
叫びながらそれぞれ技を放った。
「ゴルトファイエル！」
「ヘルズベアークローーーーッ！」
その技でシュラのエクスカリバーを退けようと仕掛けた。
技と技が今ぶつかる。凄まじい衝撃が場を覆い轟音が響き渡る。
勝ったのは。
シュラのエクスカリバーだった。その二条の剣が二人の技を退けそのうえで彼等自身をも撃った。その凄まじいまでの衝撃を受け二人は吹き飛んだ。
そのうえで地面に叩きつけられる。頭から血を流しつつそれでも顔をあげる。しかしだった。
「おのれ、これ程までとは」
「それがカプリコーンの力だというのか」

「最早長くはあるまい」
シュラは彼等のダメージをも正確に把握していた。
「そのダメージではな」
「わかっているというのか・・・・・・」
「我等は確かに」
それはダメージを受けた彼等が最もわかっていることだった。何とか顔をあげたがそれでもそのダメージは相当なものだった。シュラの言う通りだ。
「最早。これで終わりだ」
「見事だと言っておこう」
バドもビルフォードもそれぞれシュラに対して告げた。
「しかしだ」
「しかし？」
「我等狂闘士の実力はこの程度ではない」
バドは倒れ伏しながらも顔をあげてシュラに言った。
「それはよくわかっておけ」
「この程度ではないというのか」
「そうだ」
彼はまた言った。
「この程度ではない」
「そしてだ」
今度はビルフォードが言ってきた。
「狂闘士には絶対の掟がある」
「掟だと」
「そうだ。仲間を倒した者は何処までも追い詰めその仇を取る」
彼の言うことはこれであった。

第二十一話　火の軍団その四

「それが我等の絶対の掟だ」
「確かに我々はこれで終わりだ」
このことは認めるしかなかった。今の彼等では。
「しかし。それでも」
「我等の同志がいる」
彼等がいるというのだった。
「必ずこの仇を取ってくれる」
「冥界で待っている」
そのハーデスの治める世界である。アーレスと親密な関係にあるとされている数少ない神でもある。
「またそこで戦おうぞ」
「楽しみにしている」
こう言い残して事切れる二人だった。こうしてまずは二人倒れた。しかしであった。まだ狂闘士達は健在であり彼等はそれぞれの岩山の上で赤い戦衣と彼等自身の目を輝かせていた。
「まさかあの二人が敗れるとはな」
「予想外だったな」
彼等はそれぞれシュラを見下ろしながら言ってきた。
「だが。それでもだ」
「二人の仇は取らせてもらう」
彼等はシュラに対して言うのだった。
「今ビルフォードが言った通りだ」
「それがこの狂闘士の掟」
やはり彼等もこのことはよくわかっているのだった。
「ここで貴様を倒す」
「何があろうともな」
「ならば来るのだ」

シュラは彼等に目を向けることなく告げた。
「このシュラ。逃げも隠れもしない」
「流石に黄金聖闘士と言っておこう」
「敵に背は向けないということか」
「背を向ける必要もない」
上を見上げることもしなかった。彼等がいるその上をだ。
「何故なら貴様等は皆このシュラに倒されるからだ。今からな」
「ならば参る」
「覚悟するがいい」
今のシュラの言葉を受けて七人が一斉に降り立った。七つの禍の星達がシュラを取り囲んだ。
「我等全員を一度に相手にするならば」
「必ずや後悔することになる」
「果たしてそうか」
シュラは彼等を前にしてもまだ落ち着いたものであった。
「このシュラを貴様等で倒すことができるか」
「ビルフォードが言った筈だ」
狂闘士の中の一人が言ってきた。赤い戦衣の中で目だけが不気味に光っている。
「狂闘士は同志を倒した者を何があろうとも倒す」
「それが我等だ」
言いながらシュラとの間合いを狭めようとする。
「それだけだ。行くぞ」
「ここで」
「来い」
今まさに闘いが再びはじまろうとしていた。
「バドとビルフォードの仇」
「取らせてもらうぞ」
今両者の闘いがはじまろうとしていた。しかしだった。
「待ってもらおうか」

「何ィ！？」
「この小宇宙は」
狂闘士達は突如として感じたそのあまりにも強大な小宇宙に対して声をあげた。
「カプリコーンと同等、いや若しかするとそれ以上の」
「この強大な小宇宙は」
それぞれ感じ取りながら驚きの声をあげるのだった。
「まさか、もう一人来たというのか」
「黄金聖闘士が」
小宇宙の強大さからそれを察していた。
「まさかここでもう一人来たというのか」
「貴様は・・・・・・一体」
「私だ」
そして彼が出て来たのだった。

第二十一話　火の軍団その五

「私もまた戦わせてもらおう」
「ジェミニのサガ」
狂闘士の一人が彼の名を呼んだ。
「貴様も来たというのか」
「このグランドキャニオンに」
「元よりこのつもりだった」
サガはシュラを取り囲む狂闘士達を前にして言うのだった。
「御前達を相手にする為にここに来たのだ」
「黄金聖闘士がもう一人だと！？」
「そして戦うというのか」
「そうだ。御前達を倒す」
サガは今このことを彼等にはっきりと告げた。
「さあ。かかって来るのだ」
「いや、ここは俺に任せてもらおう」
だがその彼に対してシュラは言った。
「例え貴方の申し出といえどだ」
「引き受けるというのか」
「この狂闘士達は俺が倒す」
何者でも動かし得ることのできない言葉の響きがあった。
「貴方は安心してそこにいるのだ」
「御前がそう思っていてもだ」
だがここでサガはシュラに言ってきた。
「どうもそうはいかないようだ」
「何っ！？」
「彼等は私にも向かってきている」
見ればその通りだった。狂闘士達はシュラだけでなくサガに対しても激しい闘志を向けてきていた。その刺々しさは相変わらずだっ

た。
「だからこそな」
「ならば。仕方がない」
シュラもそれで諦めたのだった。
「貴方もまた。戦うといい」
「その言葉、感謝する」
サガは彼の今の言葉を受けて述べた。
「それではだ。このジェミニのサガ、御前達に最大の力を見せよう」
サガの小宇宙が高まっていく。それは戦いの合図でもあった。その後ろではアステリオンやトレミーといった面々がインプ達と闘っていた。
「それではだ」
「うむ」
シュラとサガを取り囲む狂闘士達はここでそれぞれ顔を見合わせ話をした。そのうえで言うのだった。
「カプリコーンには我等三人が」
「そしてジェミニには四人だ」
役割の分担がすぐに決まった。
「それでいいな」
「よし、それならだ」
「カプリコーンよ」
三人の狂闘士がシュラの前に出て来た。そのうえでシュラと対峙する。
「貴様の相手は我等が三人だ」
「それでいいな」
「三人でも四人でも構うことはない」
シュラはその三人を前にしても動じているところはなかった。
「ただ。貴様等を倒すだけだ」
「バドとビルフォードの仇」
「ここで取らせてもらう」

三人の狂闘士達は彼と対峙するとさらにその禍々しい小宇宙を増大させていく。全身から赤い気が沸き起こっているようにさえ見える。

「では名前を聞いておこうか」

「名前だと」

「そうだ、名前だ」

シュラは彼等に対して言ってきた。

「貴様等の名前をだ。聞いておこう」

「よし」

それを受けてまず一人が出て来て名乗ってきた。

「私は公爵」

まず出て来たのは女だった。強い目をした黒く長い髪の美しい女だった。

第二十一話　火の軍団その六

「マルコキアスのシエラ」
こう名乗るのだった。
「女といえど侮らないことだ」
「安心することだ」
シュラはそのシエラと名乗った狂闘士に対しても感情を動かしはしなかった。
「俺は相手が女であろうと構うことはない」
「そうなのか」
「敵ならば倒す」
一言で言い切った。
「それが俺の闘いだ。これが揺らぐことはない」
「わかった。では相手をさせて頂こう」
「そして」
次に出て来たのは小柄な男だった。彼もまた名乗る。
「我が名はパイソン。子爵、ガープのパイソンだ」
「そうか」
「ビルフォードとバドとは親友だった」
先にシュラに倒された二人のことを語ってきた。
「その仇、必ず取らせてもらう」
「仇を取りたければ来ることだな」
「言われずとも」
「最後になるな」
最後に出て来たのは女に見える程流麗な顔をしていた。しかし声は男だった。何処か中性的な雰囲気を醸し出す彼は名乗った。
「はじめまして」
まずは深く一礼をしてシュラに挨拶をする。
「私は男爵、グシオンのクリシーヌです」

「グシオンか」
「そうです。今から貴方を倒す者の名」
彼は言った。
「最後に覚えておいて欲しいです」
「私達三人が相手をする」
中央にいるシエラが言ってきた。右手にはパイソン、左手にはクリシーヌがいる。そのうえで三人でシュラに対して激しい敵意に満ちた目を向けてきていた。
「今からな」
「では来ることだ」
シュラは背を向けはしなかった。
「このシュラ、受けて立とう」
「かつてシュバルツバルトではキャンサーとジェミニの前に多くの同志達を失った」
「このこと、忘れてはいない」
忘れる筈がなかった。だからこそ今その小宇宙をさらに激しくさせているのだから。
「その首倒れた同志達に対して捧げる」
「そしてアーレス様にも」
「ならば俺は」
シュラは三人の今の言葉を受けてから言ってきた。
「このエクスカリバーで貴様等を倒し平和への礎としよう」
「平和ですか」
その平和という言葉に冷笑で応えたのはクリシーヌであった。
「この世で最も下らないものですね」
「下らないものだというのか」
「人は戦いの中で栄えるもの」
こうシュラにさらに言うのだった。
「それでどうして平和なぞ」
「御前達の言うことはわかっている」

シュラはその彼等の言葉を受けて述べた。
「そしてその考えもな」
「わかっているのなら何故聖闘士なのです？」
「わかってはいるが受け入れられるものではない」
シュラはこうクリシーヌに述べた。
「そういうことだ。御前達の考えも言葉も人を認めてはいないものだ」
「人なぞ。アーレス様の僕に過ぎぬもの」
「何を戯言を」
「戯言かどうか」
シュラの言葉に剣が宿った。今はっきりと。
「それを見せてやろう。来るがいい」
「言われずとも」
「倒させてもらう」
「我等の手で」
三人はそのまま構えを取ってきた。三人でシュラに向かわんとする。しかしシュラは彼等を前にしてもやはり退くような素振りは見せない。そして。
剣が光った。それが再び闘いの合図となるのだった。

第二十一話　完

２００９・４・３

第二十二話　返し技その一

返し技

「ミリオンゴーストアターーーーーーーーーック！！」
アステリオンは無数に分身しそのうえでそれぞれインプ達を蹴っていた。インプ達はそれを受けて無残に倒れそのまま動けなくなってしまった。
「ファントムアローーーーーーーーッ！」
続いてトレミーが矢を放つ。それは次々とインプ達の胸を貫き倒していく。白銀聖闘士達はそれぞれ持てる最大の力で闘っていた。
「くっ、これが白銀聖闘士の力だと！」
「何という力だ！」
インプ達も彼等の闘いを見て思わず悲鳴をあげた。
「強い、半端ではないぞ」
「こうなってはまずは」
「おっと、青銅もな！」
「貴様等には遅れは取らん！」
まずはブラウとゾルダが動いた。
「フライングウィンド！」
右手から繰り出した風がインプ達を吹き飛ばす。
「ランブルフィッシュ！」
続いてゾルダが八方に爪を放つ。それで敵達を切り裂いていく。
青銅の者達は二人だけではない。サミュエルとザンドルフも。その攻撃を放った。
「アナザーデビル！」
「レジェンドクロス！」
それぞれ鎌の様に左手を唸らせ、十字の形で手刀を繰り出す。それ等の技もインプ達を撃つ。インプ達はその攻撃を受けても吹き飛ばされていく。

「これが青銅か！？」
「こいつ等もこれだけ強いのか」
「貴様等は所詮は雑兵」
ゾルダが彼等に対して言った。
「その程度だ。しかし」
「しかし？」
「我等は聖闘士だ。このことを覚えておけ！」
「どういうことだ！」
「聖闘士は皆音速の拳を持っている！」
ブラウも言ってきた。
「それだけの速さと威力があるということだ！」
「貴様等がどれだけいようとも！」
ザンドルフの言葉である。
「俺達の相手ではない！」
「シュラ様の御命令だ」
サミュエルも攻撃を放つ。
「ここで貴様等を。倒す！」
彼等は六人で圧倒的な数のインプ達を倒していた。そしてシュラとサガは。それぞれ狂闘士達と対峙しているのだった。
その対峙の中で。クリシーヌはシエラに顔を向けて問うてきた。
「ではシエラ様」
「はい」
「三人一度にですね」
「そうです。あのビルフォードとバドを破ったこと」
シエラはそのことを忘れてはいなかった。
「それを考えれば」
「成程。それではです」
「三人一度にかかります」
「わかりました」
「それでは」

パイソンも彼女の言葉に応える。
「三人で一度に。それで」
「はい。カプリコーンよ」
シエラは今度はシュラを見据えて言ってきた。強い目であった。
「これで貴方を。覚悟するのです」
言いながら構えに入った。そしてそのうえで跳ぶ。まずはシエラが仕掛けた。
「行きます」
シエラは下にいるシュラを見据えながら両手を重ねそれを前に突き出してきた。そして」
「レインボーファイアーーーーーーッ！」
技の名前を叫んだ。すると両手から虹色の炎が放たれた。それは帯状に広がりそのうえでシュラに対して襲い掛かってきた。
「虹色の炎だと」
「マルコキアスは炎を使う狼の魔神」
他ならぬこのシエラの魔神である。
「その炎こそがこの虹色の炎なのです」
「ただの炎ではないな」
「如何にも」
そのことを隠すことはなかった。
「さあ、受けるのです」
炎を放ちながらまた言う。

第二十二話　返し技その二

「そしてこの炎を受けて！」
「むっ！？」
「シュラ！？」
四人の狂闘士達と対峙しているサガがシュラがその虹色の炎を浴びるのを見て声をあげた。
「まさかその炎は」
「流石はジェミニのサガ」
シエラはまだ炎を放っていた。その虹色の輝きがその秀麗な顔を照らす。
「御存知でしたか」
「魔神達のことは知っている」
サガは彼女の言葉に答えてきた。
「その力はな」
「ですがもう手遅れです」
今度はこう言った。
「これでカプリコーンは動けません」
「むう・・・・・」
ここでそのシュラの声がしたのだった。
「かろうじてかわした筈だったが」
「くっ、やはり黄金聖闘士ということですか」
シエラはその声をあげたシュラを見て歯噛みする声をあげた。三人はまずシュラの前に一旦着地していた。
「私のレインボーファイアーを受けても完全ではなかったと」
「そう、完全ではなかった」
シュラもそのことを認める。
「足は。かわしきれなかった」
「本来ならば完全に石になっているところです」

苦々しい顔でシュラを見据えながらの言葉だった。
「それをさせなかったということが。やはり」
「ですがシエラ様」
彼女の左にいるパイソンが言ってきた。
「カプリコーンの足はもう動けません」
「そうです」
クリシーヌも彼女に言うのだった。彼等はそれぞれの顔をシエラに向けている。
「ですから。最早後は我々にお任せを」
「手筈通り」
「次は貴様等が来るというのか」
「勿論私もです」
シュラの正面に立つシエラは再び身構えてきていた。
「再び三人で」
「念入りなことだな」
「貴方の力がわかっているからこそです」
シエラの今の言葉には遊びの類は一切なかった。
「だからこその三人です」
「そうか。ならば来るのだ」
足を止められている者の言葉ではなかった。
「俺を倒せるというのならな」
「戯言を言う」
パイソンはシュラの今の言葉をそう捉えたのだった。笑みが侮蔑したような笑みになる。
「シエラ様の炎はただの炎ではないのだぞ」
「それはわかっている」
やはりシュラの言葉はここでも動じたものではなかった。
「虹色の炎。確かに見せてもらった」
「それならばだ」
「覚悟するのですね」

パイソンだけでなくクリシーヌも言ってきた。
「ここで貴様は死ぬ」
「我等の手によって」
「ではパイソン、クリシーヌ」
シエラが二人に対して声をかけた。
「行きます。宜しいですね」
「はい。それではシエラ様」
「ここで一気に」
「行きます」
シエラの言葉には迷いはなかった。
そして三人は一斉にシュラに対して襲い掛かった。まずはクリシーヌが技を放ってきた。
「ダークブリザード！」
右手を思いきり前に突き出す。すると黒い吹雪が起こりそれがシュラを襲った。
そしてパイソンもだった。両手から無数の蝙蝠に似た気を放った。
「バットウィング！」
その気でシュラを攻める。二人が左右から攻めそのうえでシエラも攻撃を放つのだった。やはりそれは先程放ったあの炎だった。
「レインボーファイアー！」
虹色の炎が再び放たれる。それでまたしてもシュラを石にしようとする。今度は彼の身体全体をだ。

第二十二話　返し技その三

「この三人同時の攻撃なら」
「如何にカプリコーンといえど」
パイソンとクリシーヌが言う。攻撃を繰り出しながら。
「防げるものではない」
「ましてや下半身は石になっている」
それがわかっているからこその強気であるのだった。
「それでどうして逃げられようか」
「しかも」
二人は同時に中央のシエラに目を向けた。
「シエラ様が再び炎を放たれた」
「これでカプリコーンは。例え攻撃から生き残っても」
「石になります」
そのシエラの言葉だった。
「今度こそ貴方は完全に」
「石か」
シュラは三人の攻撃を前にしてもまだ平然としていた。
「俺が石になっているというのだな」
「違うというのですか？」
シエラはその黒い目を鋭くさせてシュラに対して問うた。
「その下半身は間違いなく」
「生憎だがこの程度では石にならない」
「何っ！？」
「精々。薄皮程度だ」
シュラは下半身を黄金ではなく石の灰色にしてもこの言葉を出すのだった。
「その証拠にだ。見るのだ」
「むっ！？」

「一体何を」
「このシュラに小細工は通用しない」
その言葉と共にだった。
「この通りだ」
不意に石から黄金色の光が沸き起こったように見えた。その光が石の間からそれぞれ飛び出てそれと共に石は薄皮の如く弾け跳んだ。そこから出て来たのは黄金聖衣だった。
「馬鹿な、私の炎が効かなかった!?」
「並の者ならいざ知らず」
シュラは言った。
「黄金聖闘士であるこのシュラには通じぬ」
「馬鹿な、私の炎を」
シエラは己の技が効かなかったのを見て唖然とした声をあげた。
「そうまで簡単に」
「そしてだ」
シュラは石を退けたうえでまた言った。
「その吹雪も蝙蝠も通用することはない」
「何っ、吹雪が!?」
「蝙蝠が」
何とシュラの身体をすり抜けていくのだ。まるで幻のように。
「このパイソンのバットウィングがすり抜けただと!?」
「私の吹雪が。何故」
「よけたのですね」
シエラは何故攻撃がすり抜けたのかすぐに察した。
「光速の動きで。見切ったうえで」
「そうだ」
シュラは二人の攻撃をそうしてかわしたうえでシエラに対して述べるのだった。
「見切った。ではどうということはない」
「確か日本の武道の見切り」

シエラは言った。
「それを。使ったというのですか」
「武道のことは詳しくはないが見切ったのは事実だ」
これがシュラの返答だった。
「そういうことだ」
「何と・・・・・・」
「もう一つ言おう」
そのシュラにまた虹色の炎が迫っていた。しかしシュラはその炎を全く恐れてはいなかった。平然と目だけで見ているだけであった。
「聖闘士に」
「聖闘士に？」
「同じ技は通用しない」
こう言うのだった。
「決してな。それを今から見せよう」
その炎もすり抜けたのだった。シュラは三人の攻撃を見切り完全に防いだのだった。そこから一歩も動いていないように見える程に。
「おのれ、我等の技を見切ったというのか」
「それもかすり傷一つ負うことなく」
パイソンとクリシーヌは歯噛みせずにはいられなかった。

第二十二話　返し技その四

「シエラ様、ですがまだ」
「我等の拳が」
「わかっています」
シエラもまた苦い顔をしていた。しかしそれでも彼女は二人に比べて遥かに冷静であった。公爵の爵位が彼女をそうさせるのか。
「まだ敗れたわけではありません。だからこそ」
「カプリコーン、我等を侮るな」
「我等は敵に背を向けることはない」
また二人はシュラに言ってきた。しかし今度は先程までとはうって変わって余裕なぞ微塵もない、そうした言葉になってしまっていた。
「だからだ。今度は」
「我等の拳で」
言葉と共に間合いを狭めていく。そして。
「行くぞ！」
「死ぬのです！」
パイソンとクリシーヌが叫んだ。続いてシエラも。
「このマルコキアスのシエラの拳」
言葉と共に技を放つ。
「見せてあげましょう」
言いながら三人同時に拳を繰り出した。だがシュラはここでも動かずそのまま攻撃を受け止めた。かのように見えたのであった。
「受けるのです！」
シエラの言葉と共に三人一斉に攻撃を放っていた。それが今まさに迫らんとする。拳がシュラを撃たんとしていた。シュラはここで遂に動いたのだった。
右足を下から上に放つ。しかしそれは放ったのではなかった。敵

の攻撃を受け流しそれを跳ね返したのだった。それが今の攻撃だった。

「ジャンピングストーン！」

技の名前を叫んだ。シエラ達三人は天高く吹き飛ばされそのうえで地面に叩きつけられた。シュラは三人の動きを逆に跳ね返して技を繰り出したのである。

「な、何だ今のは」

「我等の攻撃を跳ね返したというのか？」

「そうだ」

シュラは地面に倒れ伏しながらもそれでも声をあげるパイソンとクリシーヌに対して告げた。三人のダメージは先程のバドやビルフォードと同じだった。かなりのものだった。

「このシュラの技はエクスカリバーだけではない」

「そのジャンピングストーンもだったか」

「如何にも。技は斬る、突くだけではない」

倒れ伏す三人に対して告げた。

「ただな。それだけではないのだ」

「技を跳ね返すというのも」

シエラもまたシュラに対して言っていた。そのダメージの中で。

「あったのですか」

「わかったな。わかったらそのまま倒れているのだ」

既に三人のダメージを見切っていた言葉だった。

「最早その命長く持ちまい」

「くっ、確かに」

「我等はもう」

パイソンもクリシーヌも苦悶の中で言葉を出した。

「これ以上動くことは適わん・・・・・・」

「無念・・・・・・」

「己の技を受けたのだ」

シュラの声がまた彼等に降りかかった。

「ならば。その傷は己にとって危険なものとは必定」
「しかし。それには」
シエラもまたその苦悶の中でまたシュラに言ってきた。三人共今にもそのまま事切れそうだがその中で最後の力を振り絞っているのだった。
「技を受け止め完全に見切る必要がある」
「如何にも」
シュラはこのことを隠さない。

第二十二話　返し技その五

「そのうえで技を跳ね返す技だ」
「我等の攻撃を完全に見切るとは・・・・・・」
「この狂闘士の攻撃を最初から」
「流石と言うべきですね」
三人はまだ何とか言葉を出すことができていた。
「どうやら。最初から相手にはならなかったか」
「我等の力の及ぶところではなかった」
「これが黄金聖闘士の力・・・・・・」
そのことを遂に悟ったのだった。
「恐ろしい男だ」
「しかし。我等にはまだあの方がおられる」
「そう、あの方が」
シエラが死の間際の声でその男の名を出すのだった。
「ジーク様が」
「ジーク様ならば仇を取って下さる」
パイソンもまたジークに対して絶対の信頼を見せるのだった。
「あの方なら。間違いなく」
「カプリコーンよ」
クリシーヌも最後の言葉を出した。
「冥界で会おうぞ」
この言葉を最後にして三人も事切れたのだった。これでシュラは五人の狂闘士を倒した。しかし彼の警戒の念はまだ解かれてはいないのだった。息絶え横たわる彼等を一瞥してからそのうえで正面に向き直りそうしてそこにいる者に対して告げるのであった。
「あとは貴様だけか」
「やはり無理だったか」
ジークだった。彼は己が率いていた狂闘士達の敗北を見たうえで

シュラに告げた。
「あの者達では」
「少なくともこのシュラの敵ではなかった」
シュラは感情を見せない、それでいて鋭い目でジークに言葉を返した。
「ただそれだけだ」
「そうだな。しかしだ」
ジークは彼のその言葉を受けてから言ってきた。
「狂闘士の掟は知っているな」
「先程この者達から聞いた」
ここでまた横たわる彼等を一瞥した。
「貴様等の絶対の掟だな」
「そうだ。仲間の仇は何処まで追い詰めても取る」
ジークは言った。
「それが我等の掟だ。覚悟するのだな」
「それではだ。用意はいいな」
「それはこちらの台詞だ」
ジークは既にその手に剣を持っていた。鞘から抜かれその紅い禍々しい輝きを見せていた。狂闘士の禍々しい輝きをそこに見せていたのだ。
「カプリコーン、貴様に見せよう」
その剣でシュラを指し示しながらまた言ってきた。
「この八大公の一人ベールのジークの剣をな」
「ベール」
シュラはその魔神の名前に反応を見せた。
「魔神の中で最も剣の技に優れた者だったな」
「そうだ。その剣は全てを切り裂く」
こうも言うのだった。
「魂であろうと。黄金聖衣であろうともな」
「一つ言っておこう」

黄金聖衣を切り裂くという言葉に反応してだった。
「黄金聖衣は神話の時代より破壊されたことはない」
「誰にもか」
「そうだ。誰にもだ」
こうジークに告げるのだった。
「誰にもな。神であろうともだ」
「面白い。それでは俺がその最初の一人になろう」
その禍々しい剣を手にしての言葉であった。
「今ここでな」
「貴様にそれができるというのか」
「俺は八大公の一人」
言わずと知れた狂闘士の最高位である。
「その俺に切れぬものはない」
「それはこのシュラのエクスカリバーのことだな」
シュラも負けていなかった。
「切れぬものがないというのは」
「面白い。それではだ」
「うむ」
「どちらがまことに切れぬものがないか」
ジークは言った。
「確かめよう。それでいいな」
「望むところだ。それではだ」
両者はそれぞれ構えを取った。そうしてそのうえでまた対峙する。
今まさに両者の対決がはじまろうとしていた。剣と剣の対決が。

第二十二話　　完

２００９・４・６

第二十三話　セブンセンシズその一

セブンセンシズ

シュラが今まさにジークと対峙せんとしていたその時。もう一人の黄金聖闘士であるサガは四人の狂闘士達と対峙していた。サガは彼等に対して言っていた。

「まずはだ」

「何だ？」

「御前達の名前を聞いておこう」

まずは名を聞くのだった。

「御前達の名をだ。聞いておこう」

「我等の名か」

「そうだ」

サガは彼等の問いに対して答えた。

「御前達も狂闘士ならば名前がある筈だ」

「如何にも」

「その通りだ」

そして彼等もそのことを隠しはしなかった。

「我等は誇り高き狂闘士だ」

「名前がないということはない」

「だからこそ問おう」

サガはまた彼等に対して言った。

「御前達の名を。何という」

「では名乗るとしよう、ジェミニのサガよ」

まずは一人の長身の男が彼に応えてきた。

「私は侯爵、フォルネウスのフォルス」

その禍々しい様々な武器が見える戦衣を輝かせつつの言葉だった。

「それが私の名だ」

「俺の名はバルボ」

大柄で筋骨隆々とした厳しい顔の男だった。
「伯爵、アミィだ」
「私はリベカ」
まだ幼さの残る美しい少女だった。あどけなくさえある。
「オセ、子爵よ」
「レオ」
精悍な顔の赤毛の青年だった。
「公子、アイニだ」
「それが御前達の名か」
「如何にも」
フォルスが彼に対して応えてきた。
「これで覚えたな。我々の名を」
「うむ、確かにな」
サガも表情こそないが納得した声を出してそれで頷いてみせた。
「御前達の名と顔、確かに覚えた」
「それではジェミニよ」
バルボはその岩のような巨体を前に出しながらサガに言ってきた。
「いいな。闘うぞ」
「女と思って侮らないことね」
リベカはその目を鋭い、猫を思わせるものにさせていた。
「私も狂闘士なのだから」
「我等は魔神の力を持っている」
アイニも言うのだった。
「その力。見せてやろう」
「それでは。参る」
フォルスもまたバルボに続いて前に出るのだった。
「ここでジェミニ、貴様を倒す」
「覚悟するのだな」
まずは彼とバルボが前に出るのだった。そのうえでサガを倒そうとする。しかしここでリベカが二人の横に来て言うのだった。

「御気をつけ下さい」
「ジェミニの技か」
「はい、シュバルツブルグでの戦いの時のことです」
彼女が言うのはその時のことだった。
「あの時我等が同胞達は彼のアナザーディミションで異次元に送られ」
「そうだったな」
「そこで倒された」
二人はリベカの言葉を受けてその顔を鋭いものにさせた。
「この男、黄金聖闘士達の中でも際立って強大な小宇宙を持っているという」
「その力、決して侮れん」
「四人一度に向かうのも愚です」
リベカはまた二人に対して告げた。
「ですからここは」
「一人か？」
バルボは己の三分の一程度の大きさしかないその小さな少女を見下ろして問うた。

第二十三話　セブンセンシズその二

「一人で向かえというのか。一人ずつで」
「リベカ、それはどうか」
彼女の言葉にレオが言ってきた。彼もまた前に出て来ているのだ。
「一人でそれぞれ襲えばそれこそ」
「そうだ。ジャミニに各個撃破されるだけだ」
またフォルスが言った。
「それではな」
「無論そうでもありません」
リベカはそれも否定した。そのうえでまた言うのだった。
「ですからフォルス」
「うむ」
「ここは貴方の御力を」
フォルスに顔を向けての言葉だった。
「お借りしたいのです」
「私の力をか」
「はい」
また声をかけて頷いた。
「このジェミニとの戦い、まさに貴方のその御力がです」
「ふむ。そういうことか」
フォルスは彼女の言葉から何かを察したようであった。その察した顔で頷きながらバルボとレオに対して言ってきたのである。
「それではだ」
「はい」
「どうするのだ？」
バルボとレオはそれぞれフォルスに対して応えた。
「私が軸になる」
まず彼はこう二人に告げた。

「軸にな」
「わかりました」
「軸にだな」
「そのうえで散れ」
次に告げた言葉はこれであった。
「散るのだ。いいな」
「はっ、それではそのように」
「ではそうさせてもらおう」
「リンデよ」
フォルスは二人に告げたうえでまたリンデに顔を向けて問うてきた。
「これでいいのだな」
「はい、その通りです」
そのリンデが彼に答えて頷く。
「これで。作戦は宜しいかと」
「そうか。それではだ」
「行くか」
レオは威勢のよさを見せていた。
「派手にな」
「ならばだ」
まず動いたのはバルボだった。その巨体で両手を動かしながら構える。
「このアミィのバルボの力ここで見せよう」
「アミィか」
サガはそのアミィという魔神の名に反応を見せた。
「確か炎の巨人だったな」
「そうだ。それがアミィの姿」
彼自身もその通りだと言うのだった。
「それが俺の力でもある」
「そして俺はだ」

今度はアイニが言う。
「アイニだ。俺の力もこれでわかるな」
「御前達のことは文献にある」
サガは二人がそれぞれ左右から自分に対して仕掛けようとしているのを見つつ答えた。
「先の戦皇との戦いにおいての文献においてな」
「そうか。それならば話は早い」
「覚悟はいいな」
「私もまた」
リンデもまたその小柄な身体を豹のようにさせていた。立ち上がった豹のようである。
「貴方を倒す」
「三人だけではないな」
「流石に我等といえど三人で貴様を倒せるとは思っていない」
フォルスがサガの今の言葉に返してきた。

第二十三話　セブンセンシズその三

「それだけではな」
「では。どうするのだ？」
「知れたこと。我等は四人」
フォルスも構えていた。その背にある烏賊の足から無数の武器が出ている。そしてそれは生き物のように蠢いていたのであった。
「四人の力を全て合わせて貴様を倒す」
「そう来るのか」
「本来は一人で向かうところだ」
バルボがまた彼に告げた。
「だが。貴様は黄金聖闘士の中でも際立って強大な小宇宙を持っている」
「俺達は勝利する義務がある」
レオも言う。
「その為には。四人でかかろうともだ」
「恥ではないわ」
リベカの声はここでも必死のものであった。
「決して。勝利の為には」
「確かにな」
サガもそれは否定しなかった。
「勝利の為にはだ。ならばだ」
「行くぞ」
フォルスが構えに入った。
「我等四人の力今ここで」
「受けるがいい」
フォルスとバルボが言った。そして最初に技を繰り出したのはバルボだった。
「受けろ、このアミィのバルボの拳」

「来たか」
「エトナヘル！」
右手の拳に炎を帯びさせそれでサガを下から上に吹き飛ばした。
サガはそれを受けた高々と天高く舞った。
「なっ、これは」
「俺の力を甘く見るな」
バルボは技を繰り出したうえで言った。
「このバルボ、狂闘士の中でも屈指の力の持ち主だ」
「そのようだな」
「そして火は我等火の軍団の証」
このことも彼に告げる。
「その二つを浴びて。死ねジェミニ！」
「次は俺だ！」
次に来たのはレオだった。
「俺達はアーレス様に絶対の忠誠を誓う者」
「我等と同じか」
「だが。違う」
サガの言葉にこう返してきた。
「違うのは。俺達は何があっても勝利を目指すということだ」
「何があろうともか」
「例えこの首が飛ぼうとも」
言いながら構える。空中において。
「敵を倒しアーレス様の為に勝利を収める！それを今見せよう！」
「来たか」
「デッドヒートボム！」
彼は上から下に蹴りを落とした。踵落としの要領だった。それも
受けたサガは今度は地面に叩き付けられようとなった。だがサガは
空中で一回転しそのダメージを和らげようとする。しかしここでリ
ベカが来て彼にその鋭い二つの爪を剥くのだった。
「このオセは恐怖の魔神と言われているわ」

「恐怖のか」
「そうよ。その力だけでなく」
彼女は言う。その爪を見せながら。
「相手に恐怖を与えその身体を腐らせるこの爪で」
「爪か、その爪でか」
「そうよ。ジェミニよ、この爪を受けて死になさい！」
それぞれ右斜め上、左斜め上から一直線に爪を振り下ろして叫んだ。
「ホラーポイズンクロウ！」
「むっ！」
サガは咄嗟にその爪を右手に小宇宙で作った盾を出しそれで防いだ。鋭い金属音にも似た音が響く。しかしこの三人だけではないのであった。
「生憎だがまだ私がいる」
「そうだったな」
「私の足を受けるのだ」
先程から蠢いているその足をサガに向けてきていた。

第二十三話　セブンセンシズその四

「ここでな。さあ受けるのだ」
「ジェミニよ、今再び！」
「我等の技を！」
「受けてここで！」
三人がそれぞれ言う。そして今フォルスもまたその技を放ったのだった。その技の名は。
「死ね！デビルエンド！」
三人の技と共にその無数の武器が彼に迫る。それで貫かんとする姿が見えた。しかしそれはならずサガの姿は何処かに消えていたのだった。
「！？馬鹿な」
「ジェミニがいないだと！？」
「どうして」
三人は驚いた顔になって周囲を見回した。当然先程までサガがいたその場所もだ。
「何処だ、近くにいる筈だ」
「そうだ、遠くに行っている筈がない」
「けれど小宇宙は。まだ」
「何処に消えた？」
三人が必死の顔で周りを見回す中でフォルスも怪訝な顔を見せていた。
「ジェミニ。一体何処に」
彼はその場にいて小宇宙を探っていた。言うまでもなくサガの小宇宙をだ。しかしそれは見当たらない。だがここで上から声が聞こえてきたのだった。
「ここだ」
「この声は！？」

「ジェミニ！」
「そうだ。私はここだ」
「くっ・・・・・・」
「まさか」
その声がする上を見上げる四人だった。するとそこに彼がいたのだった。
「空に浮かんでいるだと！？」
「まさか。そうした力まで使えるというのか」
「その通りだ」
サガはこのことを隠しはしなかった。宙に浮かんだままマントをたなびかせ四人を見下ろしてきていた。
「黄金聖闘士はただ光速の動きを持っているだけではない」
「何っ！？」
バルボは彼の今の言葉を聞いて目を顰めさせた。
「では何を持っているというのだ、他に」
「第七の感覚」
サガは言った。
「セブンセンシズだ。我々は全員このセブンセンシズを持っているのだ」
「セブンセンシズ！？」
「それは一体」
レオだけでなくリベカにもわからないことであった。
「第七の感覚だと」
「馬鹿な。人間が持っている感覚は六つしかないというのに」
「いや」
だがここで声をあげた者がいた。フォルスだった。
「そういえば聞いたことがある」
「フォルス」
「それは一体」
「八大公の方々も持たれているという」

その彼等を率いる狂闘士で最強の者達である。このグランドキャニオンにおける戦いにおいてもベールの戦衣をまとうジークが来ている。

「あの特別な感覚のことか」

「そうだ。それこそがセブンセンシズ」

サガは彼の今の言葉に対して答えた。

「私達は皆それを持っているのだ」

「それに目覚めれば超能力も使えるというのか」

「如何にも。こうして宙に浮かぶだけではない」

サガはまた四人に対して告げた。

「このようにして」

「なっ!?」

「岩が」

四人の周りの大地が動いた。そうして岩が次々と浮き上がっていく。

「何かを動かすこともできる」

「それが黄金聖闘士の力・・・・・・」

「何という力か」

「選択だ。選ぶのだ」

サガは己の力を見せたうえでまた四人に対して言うのだった。

「闘うか。それとも」

「それとも?」

「退くか」

二択であった。サガは四人にそれを提示してきたのだった。

「どちらか。選ぶのだ」

「退けというのか」

「我等狂闘士に対して」

「御前達では私に勝つことはできない」

冷徹までに現実を言った言葉だった。

第二十三話　セブンセンシズその五

「決して。退くのならば何もすることはない」
「馬鹿にするな！」
サガに対してまず叫んだのはレオだった。
「俺達を何だと思っている！狂闘士だ！」
「何度も言おう。狂闘士は敵に背を見せることはない！」
バルボもサガに対して叫んだ。
「そう、決してだ！」
「決してか」
「それは貴方もわかっている筈」
リベカも決して退く素振りを見せようとはしない。
「貴方が神であろうとも何としても倒す」
「そういうことだ。ジェミニよ」
最後にフォルスが言ってきた。
「闘え、我等を愚弄するな！」
「そうか。ならばだ」
彼は四人の言葉を受けた。そしてそのうえで今大地にゆっくりと降りた。そのうえで向かって来る四人を見据えて言うのだった。
「では見せよう、ジェミニのサガ最大の奥義」
「見せてもらおう！」
「その黄金聖闘士の技！」
四人は一直線にサガに対して突き進む。最早そこには戦術も防御もなかった。ただ彼に対して突き進む、それだけであった。
サガはその彼等を前にして両手を交差させた。その瞬間銀河を破壊せんばかりの強大極まる小宇宙が生じた。そしてその両手を上にして叫んだのだった。
「ギャラクシアネクスプロージョン！」
銀河が割れ星達が砕け散る。その凄まじいばかりの破壊の衝撃を

受けて四人は吹き飛ばされた。そうして無残に大地に叩き付けられたのだった。

「これが・・・・・・」

「ジェミニの最大の奥義だというのか」

「この技を受けて生き残った者はいない」

サガは戦衣さえ破壊され倒れ伏してしまった四人に対して告げた。

「そう、誰であろうともな」

「恐ろしい男・・・・・・」

「ジェミニのサガ・・・・・・・」

「静かに眠るがいい」

サガは今まさに息絶えんとする四人に対してまた告げた。

「冥界でな」

この言葉を彼が言った時四人はもう息絶えていた。こうしてサガは四人の狂闘士達を倒したのだった。そして闘いを終えたのは彼だけではなかった。

「サガ様」

「お見事でした」

アステリオンやトレミー達であった。彼等もまたインプ達との闘いを終えたのであった。白銀の者も青銅の者も皆無事であった。

「あれがサガ様の技ですか」

「ギャラクシアンエクスプロージョン」

彼等はその技を見たのだ。その圧倒的な力を。

「黄金聖闘士はあれだけの力をお持ちなのですね」

「何という力」

「ですがこれで」

彼等は明るい顔になっていた。もう何もかもが終わったと言わんばかりの。

「戦いは終わりました」

「もうこれで」

「いや、それはまだだ」

だがサガはその安堵している彼等に対して言うのだった。
「まだ闘いは終わってはいない」
「というと」
「シュラ様が」
「そうだ。見ろ」
ここで前を指差す。見ればそこには対峙するシュラとジークがいた。
「あの闘いがまだだ」
「八大公のジーク」
ゾルダがその名を呼んだ。
「何という禍々しい小宇宙だ」
「あれが八大公の小宇宙だというのか」
「そうだ、あれこそがだ」
サガも彼等に告げる。
「あれが八大公のな」
「我等の適う相手ではない」
「あれはまさに」
アステリオン達にもはっきりとわかるものであった。その恐ろしいまでの小宇宙は。
「だが。案ずることはない」
「案ずることはないのですか」
「シュラならば闘える」
こう周りの聖闘士達に告げるのだった。
「シュラならばな」
「シュラ様ならばこそですか」
「あの男もまた黄金聖闘士だ」
彼が言うのはこのことだった。修羅が黄金聖闘士だと。
「必ずやってくれる」
「必ずですか」
「そうだ、必ずだ」

こう言ってこれからはじまる闘いを見るのだった。シュラとジークの闘いは今はじまろうとしていた。剣と剣の正面からの闘いが。

第二十三話　　完

２００９・４・９

第二十四話　剣の魔神その一

剣の魔神

シュラはジークと対峙を続ける。しかしまだ彼もジークも動こうとはしない。睨み合ったままでそのまま時だけを過ごしているのだった。

「来ぬのか」

「そちらこそな」

シュラはジークにこう言い返した。言い返しはするがやはり動かない。

「まだ仕掛けないというのか」

「お互い隙を探っているようだな」

ジークは表情も声のそれも変えることなくシュラに告げた。

「どうやらな」

「そうだな。先に動いた方が斬られる」

シュラは言った。

「それが今の闘いだ」

「その通りだ。しかし貴様のエクスカリバーと俺の剣」

彼はここで言うのだった。

「どちらが上かはもうわかっている」

「わかっているだと」

「そうだ。ベールは魔神達の中で随一の剣の使い手」

彼が言うのはまたこのことだった。

「だからだ。貴様のエクスカリバーよりも上回っている」

「根拠のある言葉には聞こえないがな」

シュラはこう言って今のジークの言葉を受け流した。

「とてもな」

「そう思うのならそう思えばいい」

ジークはシュラの今の言葉に対してこう言い返した。

「だが」
「だが。何だ」
「このジークの剣を只の剣と思わないことだ」
今度はこのようなことを言うのだった。
「決してな」
「どういうことだ」
「言った筈だ。魔神の中で随一の剣だと」
言うのはまたしてもこのことだった。
「そしてだ。その切れ味もだ」
「随一だというのか」
「こうしたこともできる」
ジークは身動きしなかった。確かに。
しかし目の前から何かを出してきた。それは鎌ィ足だった。
「ソードウィング」
技を放ってからその名を告げる。鎌ィ足は一直線にシュラに対して向かう。しかしシュラはそれを見ても身動き一つすることなかった。
「馬鹿な、かわさないだと!?」
「あれをかさわなければ」
聖闘士達はシュラがジークのソードウィングを前にしても身動き一つしないのを見て思わず声をあげた。それはほぼ悲鳴であった。
「断ち切られるぞ」
「黄金聖衣を着ていたとしても」
「案ずることはない」
だがサガはその悲鳴にも似た声をあげる彼等に対して告げるのだった。
「シュラはあの技を防ぐ」
「防がれるのですか」
「あの程度。シュラにしてもベールにしても技のうちには入らない」
サガはこうまで言った。

「あの程度はな」
「技にも入らないのですか」
「遊戯に過ぎない」
言葉は続く。
「所詮はな」
「そこまでですか」
「だからだ。安心して見ているのだ」
サガはここまで語ったうえであらためて彼等に告げた。
「シュラの今の闘いをな」
「わかりました。それでは」
「その様に」
サガに言われており月を取り戻した。そうして実際に再びその闘いを冷静に見守り出した。ソードウィングはシュラの前にまで迫った。しかしそこで急にその姿を消したのだった。
「消えた!?」
「消したのだ」
またサガが他の聖闘士達に対して告げた。

第二十四話　剣の魔神その二

「今のはな。シュラが消したのだ」
「左様ですか」
「シュラ様が」
「やはりこの程度は効かぬか」
ジークは己の技が何事もなかったかのように消されてしまったのを見ていた。しかしだからといってそれで落ち着きを失う様子もなかった。
「貴様にはな」
「今の技は居合いだな」
シュラはジークに対して言葉を返した。
「居合いで技を放ったな。そうだな」
「見えていたのか」
「見えていたとわからなかったとは思えぬが」
またジークに対して言葉を返した。
「貴様程の腕があれば」
「確かにな」
ジークもまたその通りだと返すのだった。
「貴様に見えていないとは全く思っていなかった」
「やはり。そうか」
「見えていた!?今のが」
「居合いだというのか」
「そうだ、居合いだ」
サガはいぶかしむ他の聖闘士達に対してまた話した。
「今ジークは光速で横薙ぎに剣を放ったのだ」
「横薙ぎにですか」
「それにより鎌ィ足を作りシュラに向けて放った」
技の説明を進めていく。

「それがあの技の正体だ。居合いで鎌ィ足を作ったのだ」
「そうだったのですか」
「それがあの技の正体なのですか」
「その通りだ」
また彼等に対して答えた。
「あれこそがな」
「光速の居合いだと」
「それで鎌ィ足を起こすとは」
「それは大したことではない」
しかしサガはそれを完全に軽く見ていた。
「あの男にとっては造作もないことだ」
「ですがサガ様」
ブラウが怪訝な声でサガに問うてきた。
「あの鎌ィ足は只の鎌ィ足ではありません」
「光速だったな」
サガは彼に対してこう言葉を返した。
「あれは光の鎌ィ足だ」
「それが。大したことはないと」
「八大公だ」
一言だがそこにはえも言われぬ絶対の説得力があった。
「八大公だ。それならばだ」
「光速の鎌ィ足も当然だと」
「そう仰るのですか」
「その通りだ。何でもないことだ」
彼はまた言った。
「あの男の実力を以ってすればな」
「シュラ様はそれ程までの男と」
「闘っておられるというのか」
ここで彼等は危惧を覚えたのだった。そのような男が相手ではシュラとて危ういのではないかと。しかしサガはここでこうも言うの

だった。
「だが。案ずることはない」
「案ずることはないと」
「そうだ。シュラもまた黄金聖闘士」
先程の八大公と対比させるような言葉であった。
「これだけでわかるな」
「我等の頂点に立たれる方」
「まさしく聖域の象徴」
聖域を護る絶対の存在でありその象徴ともなっているのが黄金聖闘士達なのだ。その強大な小宇宙を知らぬ者は誰もいない。少なくとも聖域においては。
「そのシュラが敗れる筈がない」
サガは確信していた。
「必ず。生きる」
「生きますか」
「そうだ。だから安心して見ているのだ」
サガは再び彼等に対して告げた。
「ここでな」
「はっ、それでは」
「そのように」
彼等はサガの言葉に従い見守ることにした。もっと言えば見守ることしかできなかった。黄金聖闘士、そして八大公の力を何よりも感じていたからだ。

第二十四話　剣の魔神その三

シュラとジークはソードウィングの攻防の後本格的な闘いに入ろうとしていた。最早守ろうともせずシュラは右手の手刀を、ジークはその手の剣をそれぞれ構えて今まさに仕掛けんとしていた。
「面白いことを教えよう」
「何だ？」
「何故このベールのジークが最強の剣の使い手と言われているかだ」
その剣を右手に構えながらの言葉だった。
「それが何故かというとだ」
「面白い話のようだな」
シュラはジークの言葉に絶対の自信を感じ取って述べた。
「どうやら」
「面白いかどうかはわからん。だが教えてやろう」
またシュラに対して言うのだった。
「このジークの剣はただの剣ではない」
「ただの剣ではないというのか」
「そうだ。見るのだ」
言いながら突進してきた。そのうえで剣を突き出す。すると剣は瞬く間にフェシングのあの細いスピアに変形しシュラに襲い掛かったのだった。
「剣が変形しただと」
「この剣は変幻自在」
ジークは突進しつつその剣を繰り出しながらシュラに告げる。
「このジークが願う形になるのだ」
「それではだ」
「そうだ。見よ」
シュラがスピアの突きを全てかわしたと見るやその剣を右斜め上に振り上げた。するとまた剣の形が変わったのだった。今度の形は。

刀だった。巨大な、太い片刃だった。まるで中国の青竜刀であった。

それを右斜め上から左斜め下に振り下ろす。それで一気に両断せんとする。しかしシュラはそれもまた見切ったように身体をすり抜けさせたのであった。

「見切ったか」

「確かに驚きはした」

シュラもそれは認める。

「しかしだ。その形の剣の動きは必然的に決まっている」

「それがわかっていればか」

「そうだ。かわすのは容易い」

こう言うのだった。

「容易にな」

「ふむ。それではだ」

またしても剣を変えてきた。今度は途方もなく巨大な両刃の剣だった。形は十字架を思わせるものであった。刃の大きさはジークの背丈をも優に超えるものであった。

「これは・・・・・どうだ」

その巨大な剣を片手で縦横無尽に振り回す。今度ばかりはシュラも駄目かと思われた。

しかしシュラはそれを右手で受け止めたのだった。そのエクスカリバーでだ。

「受けたか」

「その形の剣はとても片手では振れないのだがな」

しかしジークはそれを容易に振り回しているのであった。

「まさかとは思ったがな」

「そのまさかができるのがこの剣だ」

受け止められながらもまだ負けてはいなかった。

「これこそがな」

「貴様、ただ自由自在に形が変わる剣を持っているだけではないな」

「今ようやくわかったようだな」
ジークの声が笑っていた。顔には出てはいないが。
「その通りだ。何故ベールが最強の剣の使い手か」
またこのことを言う。
「それはこの俺が最強の剣の使い手でもあるからだ」
「だからか」
「そうだ。だからこそカプリコーン」
また剣の形を変えた。今度は元のあの両刃の普通の形の剣である。
「貴様には敗れることはない。このジークはな」
言いながら牛とに跳んだ。そのうえで今度はソードウィングを無数に放ってきた。それでシュラに対して攻めさせない。
「むうっ！？」
「ではそのジークの奥義」
着地してからその剣を構えなおしてまた言ってきた。
「見せよう。ストームブリンガーーーーッ！」
「何っ、剣から」
振り上げたジークの剣が唸った。そうしてそれを突き出すとそこからブラックホールを思わせる赤黒い竜巻を放ってきた。それでシュラを倒さんとしてきたのだ。
「剣から竜巻が生じたというのか」
「そうだ。このジークの剣の腕をもってすればそれも容易いことだ」
ジークはその赤黒い竜巻を放ったうえでシュラに言ってきた。
「これもな。さあどうするカプリコーン」
そのうえでシュラに対して問うてきた。
「このストームブリンガー。どのようにしてかわす」
「まずいぞ」
「ああ、これは幾ら何でもな」
聖闘士達はその竜巻を見てまた不安な声を出したのだった。

第二十四話　剣の魔神その四

「あれだけの竜巻となると」
「大きさこそ小さいがな」
それは微々たるものだった。しかしであった。
「あの威力、あれは」
「そうだ、普通の台風なぞ比べ物にならない」
それは見るまでもないことだった。小宇宙からわかることだった。
「あれだけのものになると」
「シュラ様は一体どのようにして防がれるのか」
「剣には剣と言うが」
「その通りだ」
しかし彼等の中で唯一冷静さを保っているサガがブラウの今の言葉に対して答えてきた。
「剣には剣だ」
「剣には、ですか」
「となると」
「そうだ。シュラにはその剣がある」
これはもう言うまでもないことだった。しかしサガはここでもあえてそれを言うのだった。
「だからだ。安心して見ているのだ」
「ここでもですか」
「しかしだ。ベールのジーク」
サガはシュラに対して絶対の信頼を持っているがそれでもジークに対して的確な見方をしていた。それだけの目は備えているのだ。
「あれだけの攻撃を放つとは。やはり八大公ということか」
「さあ行けストームブリンガーよ」
ジークはその己が放った赤黒い嵐に対して告げる。
「その凄まじい力で今カプリコーンを切り裂くのだ！」

「切る。そうだな」
シュラはジークの今の切るという言葉に反応してその鋭い目をさらに鋭くさせた。
「貴様の剣から出されたものだからな」
「その通りだ。ストームブリンガーはあらゆるものの命を吸い取る魔剣」
古の世界に伝わる伝説の魔剣、それがストームブリンガーなのだ。彼の技もこの名を関しているだけはあるのだ。それだけのものなのだ。
「俺のこの技は命は吸い取りはしない」
「それでもだな」
「そうだ。貴様を切り裂きそのうえで倒す」
こうシュラに告げるのだった。
「これでだ。さあカプリコーンよ、覚悟するのだ」
今その竜巻が彼に迫ってきていた。
「この嵐を受けて。死ぬがいい！」
「残念だがそうはいかない」
その嵐の先遣を受け身体を吹き飛ばされそうになりながらも踏ん張りそのうえでの言葉だった。マントは思いきり後ろにたなびいている。
「剣ならば」
「どうしたというのだ？」
「剣だ。見よベールよ」
言いながらその両手を掲げた。右手は上に、そして左手は横に。それぞれ掲げてきたのだ。
「この二刀のエクスカリバー、これでだ」
「どうするつもりだ？」
「斬る、見るがいい！」
今その二振りのエクスカリバーをそれぞれ放ったのだった。
右手のそれは上から下へ、左のそれは左から右に。十字を描いて

放ったのだった。
「エクスカリバー、グランドクロス！」
「何、グランドクロスだと！？」
「ストームブリンガーは魔剣」
これは動かすことのできない事実である。
「それに対してエクスカリバーは聖剣。魔剣には聖剣だ」
こう言うのだ。
「それがこの技だ。これならばだ！」
十字の聖なる気が放たれそれは十字を描いて飛ぶ。そしてそれにより竜巻とぶつかり合った。
「俺の竜巻とカプリコーンの十字がぶつかり合うだと」
「これならどうだ」
シュラは己が放ったそのエクスカリバーグランドクロスを見ながらジークに対して問う。
「貴様の魔剣は。どうなる」
「どうなるかか」
ジークはそれを聞いてもまだ余裕を見せていた。
「それは決まっている」
「何っ！？」
「勝つのは俺だ」
ジークは己の勝利を確信しているのだった。

第二十四話　剣の魔神その五

「このベールのジークがだ。必ず勝つのだ」
「己がか」
「そうだ。このジークの魔剣に勝てる者はいない」
己の出した竜巻を見据えながらの言葉だった。
「貴様といえどだ」
「では俺もまた言おう」
シュラもまたジークに対して言葉を返すのだった。
「このシュラのエクスカリバー」
「その聖剣がか」
「そうだ。両方を抜いて負けたことはない」
こう言うのである。
「今までな」
「面白い。それでは俺がその最初の男になろう」
ジークはその顔に微かな笑みを浮かべて述べてきた。微かであるが確かな自信がそこにはあった。
「貴様に二刀の剣を出させたうえで勝利を収めた最初の者にな」
「ならば見せてみるのだ」
シュラの自信はまだ揺るがない。
「貴様のその力をな」
「行くのだ、ストームブリンガーよ」
竜巻と気はまだ競り合っていた。
「そしてカプリコーンを破るのだ。いいな」
「聖剣よ、貴様の力ならばだ」
シュラもまた言うのだった。
「魔剣を破る。安心するのだ」
互いの小宇宙がそれぞれぶつかり合った。そして凄まじい衝撃が起こった。赤黒い竜巻と黄金の気がそのせめぎ合いから遂に周りに

衝撃を放ちだしたのだった。そして辺りをまるで地球が砕けたかの如き衝撃が襲った。
「なっ、どうなる!?」
「どうなった!?」
「シュラ様は」
「あのベールは」
聖闘士達はその衝撃の中でシュラ達の姿を探す。彼等もまた吹き飛ばされそうになるがそれに必死に耐え踏み止まりながら。
「どうなったのだ!?」
「御無事か!?」
「ベールは。倒れたのか」
「見るのだ」
その中で一人完全に踏み止まっていたのはサガだった。彼はここでも落ち着き払った声で他の聖闘士達に対して告げたのであった。
「それを」
「それを!?」
「どうなった!?それでは」
サガの言葉を見てその衝撃の中央に目を凝らす。
「シュラ様は御無事か!?」
「まさかとは思うが」
生きているとは思うが。だが不安もあるのは確かだった。そしてそれを見た時だった。彼の姿は確かにそこにあるのだった。
「よし、御無事だ!」
「生きておられるぞ!」
その衝撃の中で踏み止まっているシュラの姿を認めて喜びの声をあげずにはいられなかった。
「シュラ様はおられる!」
「御健在だ!」
しかしであった。
ジークもまたいた。彼もまた生きている目でそこに立っていたの

だった。
「くっ、ベールもか」
「生きているだと」
「やはり八大公。存外にしぶといな」
やがて衝撃は完全に消え去った。その中でシュラとジークは相変わらず立っている。その中でジークはシュラに対して言うのだった。
「貴様の実力はわかった」
「そうか」
「完全にだ。やはり見事なものだ」
その鋭い目で彼に告げる。
「黄金聖闘士だけはあるということだな」
「俺もまたわかった」
そしてシュラもまた言うのだった。

第二十四話　剣の魔神その六

「貴様の力がな」
「ほう、それは聞いているが」
「完全にだ。俺が闘うに相応しい相手だ」
だというのである。
「間違いなくな。それではだ」
「うむ。今はこれで終えておこう」
ジークはここで剣を収めてしまった。鞘の中に入れそのうえで背に戻した」
「何っ、剣を収めただと」
「ベール。何故だ」
聖闘士達は彼の今の動きを見ていぶかしむ声をあげずにはいられなかった。
「何故ここで退く？」
「何を考えている？」
「そうか」
しかしサガはそれを見て冷静な言葉を出すだけだった。
「ここで退くか。的確だな」
「的確なのですか？」
「退くことが。ここで」
「そうだ。最早闘っても意味はない」
サガは両者を見ながら述べた。
「どちらにもな」
「どちらにも意味がない」
「ではシュラ様にとっても」
「その通りだ。最早意味はない」
サガは言うのだった。
「闘えば双方決着がつかないまま」

「つかないまま？」
「千日間戦争になる」
そしてこの言葉を出すのだった。
「実力が伯仲する者同士だからなるその戦争にな」
「それになるというのですか」
「これ以上のここでの闘いは」
「そういうことだ。だからこそベールは今退いた」
サガは全てがわかっているのだった。
「ここでな」
「左様でしたか」
「それで」
彼等もそれを聞いて今わかったのだった。何故闘いがここで終わったのかを。
「ではシュラ様もまた」
「ここは」
「動くことはない」
サガは全てを呼んでいた。
「決してな」
「そうですね。それではこの闘いは」
「これで」
終わりだというのだった。
「しかし。それでもまた互いに」
「睨み合っているとは」
それはまだだった。シュラもジークもまだお互いを見据えそのうえで対峙していた。それはまだ続けられていたのであった。
そしてその中で。シュラはジークに対して告げた。
「ベールよ」
「うむ」
「次だ」
シュラの言葉は一言だった。

「次に決着をつける」
「それは俺も同じこと」
そしてジークもまたそれに言葉を返してきたのだった。
「また会おうぞ」
「そしてその時こそ」
「決着をつける」
今度はジークが言うのだった。
「それでよいな」
「では。俺もまた」
シュラはその手刀を収めたのだった。
「これで退こう」
「わかった。ではな」
こうしてジークは去り闘いは終わった。聖闘士達はシュラの下に集まる。そしてまずサガが闘いを終えたシュラに対して声をかけるのだった。
「次か」
「そうだ。次だ」
シュラはサガの今の言葉に頷いた。
「次であの男を倒す」
「そうか。ならばだ」
サガは今のシュラの言葉を受けてまた言ってきた。
「その次の闘いで必ず倒すのだ」
「そのつもりだ」
シュラの考えはそれしかなかった。
「必ずな。それではだ」
「闘いは終わった」
サガはまた言った。
「ここでの闘いはな」
「うむ」
「しかし。まだ闘いは続く」

そのうえでこうも言うのだった。
「それに備えてだ。今は」
「帰るのだな」
「そういうことだ。次の戦いに向けてだ」
サガの言葉を受けて聖域に戻る聖闘士達だった。戦いは終わった。
しかしそれはこのグランドキャニオンだけのことであり狂闘士達との闘いはまだ続くのだった。

第二十四話　　完

２００９・４・１３

第二十五話　一人の帰還その一

第二十五話　一人の帰還

闘いが終わった後ジークは一人でトラキアに帰還した。そのうえで戦況報告をエリスに対して行った。

彼はエリスの部屋において座する彼女の前で片膝をついて。そうしてそのうえで報告するのだった。

「九人の同志達を失いました」

「またしても九人か」

「はい」

ジークはエリスの言葉に対して静かに頷いた。頭は垂れたままだ。そのうえで柱も床も壁も赤い神殿を思わせるその部屋の中でエリスに述べているのだった。

「このジーク以外は」

「そしてその者達だが」

エリスはジークの報告を聞いたうえでその九人に対しても問うのだった。

「どうであった」

「どうであったか、ですか」

「そうだ。狂闘士として相応しい闘いをしたか」

問うのはこのことだった。

「如何であったか」

「はい」

ジークはまず一呼吸置いてからそのうえで神の問いに対して答えるのだった。

「誰もが。最後まで闘いました」

「そうか」

「狂闘士に相応しく」

こうも述べるのだった。

「最後まで闘いました。逃げることなく」
「ならばよい」
エリスはそれを聞いてまず満足した顔を見せた。
「それでな」
「宜しいのですか」
「そうだ。それこそがアーレス様の糧になる」
エリスは声まで満足させていた。
「だからだ。最後までそうして闘えばな」
「左様ですか」
「その通りだ。当然兵卒達もか」
「はい」
彼らもだと答えるジークだった。
「無論です。あの者達もまた」
「狂闘士とは何か」
エリスはここで言うのだった。
「それは闘うこそだな」
「はい、そうです」
「その通りです」
ジークだけでなく他の八大公の面々も答える。見れば彼等もまた片膝をついてエリスの前に控えていた。報告するジークを先頭にしてだ。
「それこそが我等の誇り」
「決して死を恐れず戦うことこそが」
「それが我等の強さの源である」
エリスもそれははっきりとわかっていた。
「だからこそよいのだ」
「左様ですか」
「ジークよ」
そしてまたジークに声をかけてきた。
「御苦労であった」

「はい」
「暫くゆっくりと休むがいい」
「有り難うございます」
「まずはこれで二つ」
エリスはここでさらに言った。
「二つだ」
「二つですか」
「そうだ。そしてだ」
その目が光った。赤い目が禍々しい光を放つようになっていた。
「次の闘いであるが」
「誰が行くのでしょうか」
サリアが彼女に対して問うてきた。その少女と見まごうばかりの麗しい顔をあげて。
「次の闘いは」
「ミシェイルよ」
「はっ」
彼女が呼んだのは彼だった。その当人もすぐに応えてきた。
「次はそなたが行くのだ」
「わかりました。それでは」
「聖域もまた黄金聖闘士を出してくる」
それはもう言うまでもなかった。八大公に対するのは黄金聖闘士である、既に聖域での最初の対峙においてもうそれは定まっていることであった。
「さて、誰が出て来るであろうな」
「ピスケスではないかと」
ミシェイルもまたその精悍な顔をあげてエリスに述べた。

第二十五話　一人の帰還その二

「おそらくは」
「ピスケス。あの者か」
ピスケスと聞いてエリスはそれが誰かすぐに解したのだった。そのうえで脳裏にその顔を思い浮かべつつ述べるのだった。
「あの女の如き顔の者だな」
「はい、あの者ではないかと」
「それもまたよしか」
エリスはミシェイルの言葉を聞きつつふと述べもするのだった。
「そなたとあの者の闘いでな」
「そうなのですか」
「あの者は確かに美しい」
エリスは言いながらアフロディーテの美貌そのものと言っていい顔を思い出していた。やはりそれは一見では男には見えないものである。
「しかし。それで黄金聖闘士になれるわけではない」
「それはその通りです」
最早誰もがわかっていることであった。
「あの小宇宙。あれだけのものは」
「そなた等に匹敵するものよのう」
エリスの声が若干苦いものになった。
「あの者達の小宇宙は」
「ですから。次の闘いの場所では」
「ピスケスを倒すというのだな」
「必ず」
ミシェイルの声が強いものになっていた。
「御期待下さい。黄金聖闘士を一人確実に減らして御覧に入れます」
「期待しておるぞ。それではだ」

エリスは話が終わったとみるとすぐに八大公達全員に声をかけてきたのだった。
「話は終わりだ。しかし」
「しかし？」
「エリス様、何かあるのでしょうか」
「ある。その通りよ」
笑みが変わってきた。それまで血塗られたかのような笑みであったのが急に何かを用意してそれでもてなすような。そうした笑みになったのであった。
そのうえでさらに八人に対して告げてきたのだった。
「丁度今八人いる」
「はい」
「それが何か」
「宴を用意しておいた」
こう言うのだった。
「そなた達の為にな」
「なっ、まことですか」
「我等の為にですか」
八大公達はそれを聞いて思わず声をあげた。エリスは彼等にとってはアーレスの妹だけではなく崇めるべき神の一人でもある。その彼女から宴に誘われ驚かない筈がなかった。
「そうだ。まずはカナンとジークへの労いだ」
「我々の為にですか」
「しかし我々は」
二人は今のエリスの言葉には思わず言い返したのだった。
「多くの同志達を失っています」
「その我々が労いなどと」
「それについては思うことはない」
だがエリスはそれをよいとしたのだった。
「それはな」

「？何故ですか」
「同志達のことがいいとは」
「それはいずれわかる」
エリスはここでは答えようとはしないのだった。あえて何も言わない感じであった。
「いずれな。それよりもだ」
「宴ですか」
「ミシェイルの為でもあるのだ」
「出陣する私の為にですか」
「吉報を待っている」
悠然と微笑んでの言葉だった。
「それではな。宴だが」
「はい、それでは」
「我等全員ですか」
「無論だ。そなた達の為の宴なのだからな」
エリスもこのことをあらためて八人に述べた。
「いいな。それでな」
「はい、それでは」
「御言葉に甘えまして」
八大公達はそれを受けてそのうえで従者でもあるインプ達が用意してきた席に座す。そしてそこにみらびやかな水晶のグラスや銀の皿に美酒や馳走が用意されていく。彼等はそれを次々に口に入れていくのだった。

第二十五話　一人の帰還その三

「ふむ、これは」
「鶯の舌ですな」
「そうだ。他にもあるぞ」
エリスは八人の上座にいた。やはり神だけありその座は上座になるのだった。神に相応しく。
「この孔雀の脳味噌だが」
「これもですか」
「ふむ、これは中々」
大公達はその孔雀の脳味噌を煮たものを食べながらまた述べた。
「美味ですな」
「思いも寄らない料理ですが」
「思いも寄らぬか」
エリスはその右手にワインを持っていた。それを飲みつつ悠然と大公達に対して言うのだった。
「この馳走は」
「はい、こうしたものは」
見れば鶯や孔雀だけではない。他にも子牛の丸茹でやヤマネ、兎の丸焼き、他には猪等もある。肉料理と果物を中心としたかなり風変わりなものであった。
「ありませんが」
「これは一体」
「これはローマのものだ」
エリスはこう大公達に言うのだった。
「ローマ帝国の馳走だ」
「ローマのですか」
「これは」
見れば猪は周りに小さな猪の形のビスケットがあり牙にはナツメ

ヤシを入れた小枝細工の籠があり見事に飾られている。そしてその猪の腹を開けばそこには野菜やソーセージが煮て入れられていた。彼等はその野菜やソーセージも食べるのだった。

「こうしたものを当時食べていたのですか」

「成程」

「こうしたものを食するのも久し振りだ」

エリスはその猪の中のソーセージを食べつつ言う。

「そして食するかいがあるというものよ」

「食するですか」

「左様。宴は戦いと同じもの」

今度はこうしたことを言うエリスだった。

「華やかでかつ血に満ちたものでなければならぬ」

「そういえばこの牛から流れる血は」

「まことに美味ですな」

彼等はその中で焼けた牛を食べていた。そこから流れる血を見てそれを食べながら言うのだった。

「この味。実に」

「さあ。遠慮せず食べるがいい」

エリスは今度は兎の血をパンに浸して食べていた。白い見事なパンである。

「皆でな」

「はい、それではです」

「喜んで頂きます」

「風呂も用意してある」

それもあるというのだった。

「遠慮せず入るがいい。よいな」

「風呂もですか」

「それもあるのですか」

「宴の後で入り気持ちをすっきりさせるのもよいことだ」

エリスは風呂についても語った。

「さあ、今は全てを心ゆくまで楽しむがいい」
「有り難うございます。それでは」
「この宴。心おきなく」
こうして彼等はこの華やかかつ血もある宴を楽しむのだった。そしてそのうえで次の戦いに向けて英気を養うのだった。
狂闘士達が宴を行っているその時に黄金聖闘士達も集まっていた。今度はシュラの磨羯宮において彼等も宴を開いていたのだった。
「まずは御無事で何よりです」
「全くだ」
ムウとアルデバランがまずシュラに対して言っていた。
「ベールの小宇宙もまたかなりのものでしたが」
「それと互角だったそうだな」
「一歩間違えればどちらかが倒れていた」
シュラはこう二人に述べる。彼等は宮殿の緑と小さな花々が咲き誇る庭において円卓を置きそれを囲みつつ酒と馳走を楽しんでいるのだ。
「俺も。一歩間違えればだ」
「ほお、御前がそう言うのか」
デスマスクは大きい焼けた羊肉にかぶりつきながらシュラに問うた。
「やっぱりあの野郎も尋常な奴じゃねえみてえだな」
「そうだ。御前が闘ったベルゼブブと同じだ」
「へっ、今度会った時が奴の命日だぜ」
デスマスクはここではあえて本心を語らなかった。既に誰もが知っているとしてもだ。
「この俺の力じゃよ。あんな蝿野郎確実にな」
「そうですね。貴方のその意気があれば」
ムウはそんなデスマスクの心を汲み取ってあえて微笑んで言ってみせた。
「次こそは必ず果たしてくれますね」

「そんなの当然だろうが。俺を誰だと思ってるんだ」
デスマスクもまたムウのその言葉に合わせて言うのだった。
「キャンサーの黄金聖闘士だ。忘れるんじゃねえぞ」
「ええ、それは勿論」
ムウは微笑んで彼の言葉に応えた。

第二十五話　一人の帰還その四

「わかっていますよ」
「ならいいんがな。それにしてもだ」
デスマスクはマカロニを食べながら話を続ける。大蒜とトマトをふんだんに使った如何にも地中海らしい見事なマカロニであった。
「シュラ、御前もよくやったな」
「俺は俺のやることをやったまでだ」
しかしシュラの返答は冷静なものだった。
「確かに手強い相手だったがな」
「何だ、それだけかよ」
「相手の強さはわかった。それに」
「それに？何だ？」
「次がある」
彼が次に述べたのはこのことだった。
「また闘わせてもらう。そして次こそはだ」
「あの男を倒すのだな」
「その通りだ」
今度はカミュに対して述べた。
「次こそはだ。何があろうともだ」
「ならそうするといい」
カミュもまたその言葉は極めて冷静なものだった。
「貴様の望むようにな」
「そうさせてもらう。そしてだ」
ここでシュラは話を変えてきた。
「この料理だが」
「ふむ、これか」
アルデバランは今はステーキを食べていた。大蒜をかなり効かせたソースをかけている。

「このステーキだな」
「あとはパエリアだが」
それもあるのだった。
「そしてパスタもだが」
「全部御前が作ったのか」
「その通りだ」
アイオリアの問いに対して答えた。
「これはな。全てこのシュラが作った」
「そうか。意外だな」
ミロは彼のその言葉を聞いて述べた。
「御前が全部作ったとはな」
「意外なのか」
「俺はそう思うがな」
己の思っていることをそのまま述べるミロだった。
「何かおかしいか」
「いや」
何故かこれ以上は言おうとはしないシュラだった。しかしそれでも少し話題を変えて自分の料理の話をするのだった。密かにミロから言われたことは置いておいてである。
「そしてこのステーキだが」
「羊ですね」
シャカは目を閉じたままだったがそれはわかっているようだった。
「この肉は」
「その通りだ。今度は羊の肉を使った」
「またそりゃ何でだ？」
デスマスクは今度はそのステーキをぱくついていた。とにかく何でもよく食べている。
「羊にしたのはよ」
「俺の故郷でもよく食べられるからだ」
だからだというのだった。

「この羊のステーキもな」
「そういえばそうですね」
アフロディーテはシュラの今の言葉に対して静かに頷くのだった。
「貴方の御国はスペインでしたね」
「そうだ」
彼はスペイン出身である。イタリア出身のデスマスク、ブラジル出身のアルデバラン、フランス出身のカミュと同じくラテン系なのである。
「そこで子供の頃から食べていたものだ」
「だから作れられるのですね」
「そういうことだ。そしてだ」
仲間達にさらに問うのだった。
「この味はどうだ」
「味ですか」
「そうだ。気に入ったか」
「どれも大蒜が効いていていいですね」
ムウは大蒜が聞いていることをよしとした。
「おかげで肉の味も引き立っています」
「パエリアもだな」
アルデバランは今度はパエリアを食べていた。

第二十五話　一人の帰還その五

「この味、見事だ」
「そしてトマトを意識している」
シュラはそれも意識して使っているのだった。
「やはり。大蒜とトマトだ」
「ほお、わかっているな」
デスマスクは今のシュラの言葉を聞いて明るい顔になった。
「そうなんだよ、要はトマトと大蒜なんだよ」
「それとオリーブだな」
「おうよ、この三つだよ」
デスマスクの顔がさらに明るくなる。明るい顔でまたシュラの作ったそのマカロニを食べるのだった。
「このマカロニだってな。おかげでいい味になってるぜ」
「マカロニは貴様のそれを見て覚えた」
そうだと言うのである。
「味付けは俺の国のそれにしたがな」
「成程ね。いい感じだぜ」
「気に入ってもらったようで何よりだ」
「そうか。大蒜にトマトか」
アイオリアはここにかなり注目するのだった。
「それとオリーブだな。どれもギリシアでもかなり使うが」
「アイオリア、貴方料理はできるのですか」
「いや」
シャカの問いに首を横に振るアイオリアだった。
「俺はそういうのは全く駄目だ」
「そうですか」
まずはそのことを静かに聞いて頷くシャカだった。そしてそのうえでまた言うのだった。

「やはり」
「やはりなのか？俺は」
「貴方はそういうことはできないと確信していました」
シャカも実に情容赦のないことを言う。
「予想通りでした。私の」
「残念だが俺は料理は駄目だ」
アイオリアはシャカの痛い言葉に内心汗をかきながらまた述べた。
「全くな」
「そういえばです」
ムウは今のアイオリアの言葉であることに気付いた。
「聖域でギリシア料理をよく食べるのは当然ですが」
「ああ」
「まあそれはな」
「当然です」
デスマスクとシュラ、アフロディーテが彼の今の言葉に頷いた。
「ですが。アイオリアもミロもあまり作られませんね」
「実は俺もな」
ここで今度はミロが難しい顔を見せてきた。
「料理は駄目だ」
「何だ、御前もか」
「残念だがそうだ」
アイオリアの問いにその難しい顔で答えるのだった。
「俺も料理は駄目だ」
「おい、じゃあ御前のところじゃこんなの食えないっていうのかよ」
「ミロのところもか」
アイオリアの今の言葉を聞いたデスマスクとアルデバランがそれぞれ言った。
「やれやれ、まあその時はまた辰巳のおっさんのところだけれどな」
「あそこの和食はいいものだったな」
二人はまた言うのだった。

「まあ今はこのシュラの作ったスペイン料理を食うか」
「ワインはどうだ?」
シュラは今度は出されているワインに関して言った。
「このワインは」
「はい、見事なものです」
丁度そのワインを飲んでいたアフロディーテが答える。
「この味は。ギリシアのものではありませんね」
「俺の国のものだ」
これもなのだった。
「スペインのだ。味はいいか」
「うむ。安心して飲める」
カミュもまた気分よく飲んでいる感じだった。表情には出さないが。

第二十五話　一人の帰還その六

「この味は。気に入った」
「そうか、ならいいがな」
「しかし。あれですね」
ムウはここで言った。
「スペインもまた御馳走とワインには困っていないのですね」
「スペインは何でもある」
シュラはムウに応えるようにしてまた言うのだった。
「こうして美酒も馳走も。素晴らしい気候も美しい国土もだ。全てあるのだ」
「俺の国みたいだな」
デスマスクはここでさりげなく自慢した。
「ってことはだ」
「そうか。わかったか」
「政治は、って来るんだよな」
デスマスクはシニカルに笑ってシュラに問うてきた。
「そうだろ？違うか？」
「そうだ。その通りだ」
そしてシュラもそれを認めるのだった。
「それは仕方ないことだ。スペインでは国民を満足させられる政府だけがない」
「それだけはですか」
アフロディーテはシュラの言葉をそのまま受け止めていた。
「どうにもならないのですか」
「残念ではあるがな」
「人だけはどうにもならない」
カミュも言った。
「そういうものだ。世の中は」

「しかしその人を護るのが我々だ」
アルデバランがここで言い切ってきた。
「その全てをな」
「人が為したことは善にもなれば悪にもなる」
ムウもまた言うのだった。
「善を為さんとして悪になる時もあります」
「しかし」
不意にここでシャカが言った。
「それを善にするのが我々である」
「シャカ・・・・・・」
ムウはシャカの今の言葉にすぐに顔を向けた。見れば他の黄金聖闘士達もだ。彼等もここでシャカに対して一斉に顔を向けたのだ。
「悪を善に変える。我々の手で」
「つまり絶対な力でな」
「そういうことだな」
「確かに」
ここでそれは力だと考えたのはデスマスクとシュラ、アフロディーテだった。
「結局あれだ、力だ」
「その人を護るものはな」
「そうでなくては護れませんから」
「そうかも知れない」
カミュもどちらかというと三人の考えに傾こうとしていた。
「人を護る為には。力は必要だ」
「さて、それはどうでしょうか」
「いささか違うと思うが」
「そうだな。俺は力ではないと思うが」
それに反論するのはムウ。アルデバラン、アイオリアであった。
「それを為すのは心だと思いますが」
「そうだ。力ではなく正しい心だ」

「それがなくて人の正義を護れるとは思えないが」
「心か。確かにな」
ミロはこちら側に傾こうとしていた。
「それも一理あるな。力ではなく心がなくては」
黄金聖闘士達は二つに分かれようとしていた。お互いに何かしらの壁が出て来ようとしていた。しかしここでシャカが言うのだった。
「同じことです」
「!?同じこと?」
「シャカ、それは一体」
「同じというのです。つまり人としての正義」
シャカは双方に対してこの言葉を出してきた。

第二十五話　一人の帰還その七

「力も心も。人としての正義なのです」
「意味がわからんが」
「力も心も同じ！？」
「しかも人の正義と」
「即ちアテナの正義」
彼は今度はこう言った。
「アテナの正義であるのだから」
「つまりです」
ムウは頭の中でシャカのここでの言葉を整理しながら述べた。
「人を護るのはアテナの正義であるというのですか」
「如何にも」
目を閉じたままだが確かにムウに対して頷いてきた。
「それこそが我等のよって立つものではないのですか？」
「そんなの言うまでもねえだろ」
「全くだ」
デスマスクとアイオリアがまずそれに応えた。
「俺達は痩せても枯れても聖闘士だぜ」
「それで何故アテナを忘れる」
「それだけは絶対にない」
「全くだ」
今度はカミュとミロが言った。
「ましてや我等は黄金聖闘士」
「言うならばこの聖域の象徴」
その誇りもあるのだった。伊達に黄金の聖衣を身に着けてはいないということだ。流石に今彼等は私服ではあるが。それぞれ銘々の個性が出ている私服を着ている。
「それで何故アテナの正義を忘れるのか」

「それだけはありません」
シュラとアフロディーテも断言する。
「何度生まれ変わってもそれは言える」
「私もです」
「しかしシャカ」
最後にアルデバランが彼に問うてきた。
「何故今それを？」
「それでですか」
「そうだ。言うまでもないことだ」
彼は少し首を傾げさせてシャカに告げた。
「アテナの為にということはな」
「そうだな。それはな」
「その通りだ」
デスマスクとシュラもまたここでも意見を同じにさせていた。
「何度も言うが俺達はアテナの聖闘士だ」
「わかりきっていることではないのか？」
「確かにその通りです」
シャカもまたそれは否定しない。
「ですが。何度生まれ変わっても」
「はい、偽りではありません」
アフロディーテが述べた。
「これは誓って言えます」
「前と同じだと思いまして」
「前とだと！？」
カミュは今のシャカの言葉にその眉を顰めさせた。
「どういうことだ、それは」
「前とだと。俺達は今までと変わらないが」
ミロも今のシャカの言葉の意味はわからなかった。
「前とは。一体」
「かつての聖戦において」

シャカの言葉はここで一気に遡った。
「同じだと思い」
「さらにわからないな」
アイオリアは首を傾げるばかりだった。
「かつての聖戦といえばハーデスとの戦いの時だが」
「その時と同じとは」
ムウにもシャカの言葉の意味はわからない。
「どういうことなのでしょうか」
「少なくともそれで安心はしています」
やはりシャカの言葉は彼等には容易にわからないものであった。
「それでです」
「それで？」
「次の戦いですが」
話はシャカによりそちらに移った。何時の間にかシャカの主導で話は進んでいた。
「誰が行くかですが」
「それだな」
アルデバランは今のシャカの言葉に気付いたような顔になった。
「果たして誰が行くかだが」
「まだ誰にも話は来てねえのかよ」
デスマスクは他の黄金聖闘士達を見回して尋ねた。

第二十五話　一人の帰還その八

「とりあえず俺とシュラは出たから出番はなしだろうけれどな」
「そうだな。俺もだ」
シュラもデスマスクの今の言葉に頷いた。
「おそらく。それはない」
「だとすれば我々からか」
カミュはここで自分である可能性も当然ながら考慮に入れていた。
「さて。誰がなるかだな」
「狂闘士も誰が出て来るかですね」
ムウはそこも注視していた。
「果たして誰が」
「それにより出陣する黄金聖闘士も決まります」
アフロディーテはこう見ていた。
「それが誰かにより」
「俺としては誰でもいいがな」
ミロは言葉に少しばかり自信を漂わせていた。
「誰であろうが倒す」
「俺は。あの男だろうか」
アイオリアは脳裏に八大公のうちのある男を思い浮かべていた。
「アスモデウス。何故かあの男が思い浮かぶ」
「例え誰であろうと我等の運命は決まっています」
またシャカの言葉が告げられた。
「戦い。そして」
「アテナと人々と護る。それだけです」
「その通りです」
ムウの言葉を受けて頷くシャカだった。このように美酒と馳走を囲んで話をする八人だったがここでムウはふとあることに気付いたのだった。

「そういえばサガとアイオロスが」
「そうだな。いないな」
「一体何処に？」
アルデバランとミロもその言葉を受けて周囲を見回した。
「確か声はかけた筈だがそれでも何処に」
「昼寝は・・・・・ねえな」
デスマスクはそれはすぐに否定した。自分で言ってすぐにだ。
「幾ら何でもあの二人にはな」
「流石にそれはない」
カミュもそれは否定した。
「そうだな。おそらくは」
「おそらくは？」
アフロディーテが今のカミュの言葉に問うた。
「心当たりがあるのですか？」
「あるとすれば教皇の御前か」
シュラはそう察しをつけてきた。
「そこになるか」
「はい、そうです」
またシャカが一同に述べる。
「二人はそこにいます」
「また何のお話でしょうか」
ムウもそこまではわかりかねた。今ここにいる八人と二人は年齢が離れているせいかどうしても分かれてしまうところが出てしまっているのだ。
「まあそれは考えても仕方ないですね」
「その通りです。ですから今はこの宴を楽しみましょう」
シャカは相変わらず目を閉じて物静かに同僚達に述べる。
「次の戦いへの暫しの休息として」
彼等はシャカの今の言葉に応えるようにしてこの時は宴を楽しんでいた。そしてその時教皇の間では。黄金聖闘士達の予想通りサガ

とアイオロスが教皇の前に控えそのうえで彼に対して話をしているのだった。
「まずはサガよ」
「はい」
教皇シオンは最初にサガに対して声をかけた。
「ドイツに引き続きアメリカでも御苦労だった」
「有り難き御言葉」
サガは片膝をつき頭を垂れたうえで目を閉じた顔でシオンの今の言葉に答えた。
「そして悪いが次も出陣してもらう」
「わかりました」
サガは不平一つ言わずシオンの言葉に頷いた。
「それでは」
「敵の八大公もまた感じ取った」
これはシオンの小宇宙が感じ取らせたものだった。伊達に教皇ではなかった。
「出て来るのはアスタロトだ」
「アスタロトですか」
「あの」
それを聞いてサガだけでなくアイオロスも述べてきた。
「冷気を操り八大公の中でもとりわけ冷酷だという」
「あの男ですか」
「そうだ、そのアスタロトのミシェイルが出陣する」
また二人に対して述べたシオンだった。
「そしてそれに対して我々はだ」
「私と」
「もう一人は」
「あの男に行ってもらう」
ここでシオンはまた言った。
「あの男にな」

「といいますとどの者を行かせるのですか」
「うむ、それはだ」
その者の名を二人に対して告げるのだった。それが誰なのか、今それを知っている者はシオンと二人の他には誰もいなかった。

第二十五話　　完

２００９・４・１８

第二十六話　薔薇の聖闘士その一

薔薇の聖闘士

シオンはサガ、アイオロスの二人と話した翌日全ての黄金聖闘士達を己の宮殿に呼んだ。そうして教皇の間の玉座の前に彼等を集めそのうえで告げるのだった。

「また狂闘士達が出陣した」

「はい」

黄金聖闘士達は彼の言葉に対して頷く。彼等はサガとアイオロスを先に横一列に配しその後ろにその他の九人が控えている。そういう形になっていた。

「そしてだ。我々も聖闘士を送ることにした」

「わかりました」

またシオンの言葉に対して応える。

「まずはサガ」

「はっ」

サガの名を呼ぶとすぐに応えたのは本人であった。厳かな態度で片膝をつきそのうえで頭を垂れて控えそのうえで応えたのである。

「御前だ」

「わかりました」

「そしてもう一人だが」

既に二人の黄金聖闘士を送るのは規定事項であった。

「誰に行ってもらうかだが」

「それは一体」

「誰でしょうか」

サガとアイオロスの他の九人が顔をあげシオンに対して問うてきた。

「今度はこのアルデバランでしょうか」

「それともこのミロが」

「いえ、このアイオリアが」
彼等はそれぞれシオンに対して問う。シオンはその彼等に対して答えるのだった。
「アフロディーテ」
「はい」
呼んだのは彼であった。
「御前に行ってもらおう」
「わかりました。それでは」
アフロディーテもまた片膝をついた姿勢でシオンの言葉に応えた。
「言って参ります」
「場所は中国だ」
シオンは場所も告げた。
「そこに行ってもらう」
「中国ですか」
アフロディーテはその国のことを聞いてまずはその目に考えるものを浮かべさせた。
「といいましてもかなり広いですが」
「武漢だ」
シオンはここで場所も述べた。
「そこに行ってもらう」
「武漢といいますと」
アフロディーテはその都市の名を聞いてあることに気付いたのだった。
「水の多い場所ですね」
「そのことに気付いたか」
「はい、僭越ながら」
畏まった態度で教皇に対して答えた。
「そこでの戦いになりますか」
「狂闘士達を率いるのはアスタロト」
次に八大公のことも告げてきた。

「アスタロトのミシェイルだ」
「アスタロトがですか」
「だからこそ御前に行ってもらう」
「私だからこそですか」
「そうだ。アスタロトの相手は御前がするのだ」
シオンはその理由が何故かを述べずこうアフロディーテに告げるのだった。アフロディーテはここでは表情を変えることなくその言葉を聞いていた。
「それでよいな」
「わかりました」
今はただシオンの言葉に頷くだけであった。
「それでは。今すぐに」
「中国に経ってくれ。よいな」
「はい」
「それで教皇」
デスマスクが顔をあげてシオンに対して問うてきた。
「中国ですが」
「うむ、そうだ」
「五老峰の老師には何も」
「気にすることはない」
シオンはそれはいいというのだった。
「童虎には童虎のすべきことがある」
「だからですか」
「そうだ。だから今は気にすることはない」
今度はシュラに対して述べた。

第二十六話　薔薇の聖闘士その二

「今はだ。わかったな」
「はっ、それでは」
「その様に」
「話はこれで終わりだ」
ここまで話したうえであらためて彼等に告げた。
「下がれ。そしてそれぞれの任に戻るのだ」
「はい」
黄金聖闘士達は頭を垂れ教皇に礼をした。そうして教皇の間を後にする。アフロディーテはそのまま教皇の宮殿の入り口から出陣するのだった。
「では。今からですね」
「そうです、今からです」
斜め後ろから声をかけてきたムウに対して応えるのだった。
「中国に行って参ります」
「そうですか。それではその間はお任せ下さい」
ムウは厳かな声でアフロディーテに言葉を返した。
「貴方がおられないその間は我々が必ず聖域を護りますので」
「お任せしました。今はこの教皇の間までの道も」
そこは紅く染まっていた。まるで紅の河であった。
「只の道になってしまいますが」
「そうか。そうだったな」
アイオリアも今の言葉でそのことに気付いたのだった。
「双魚宮から教皇の宮殿までの道はな」
「そうです。私の薔薇により護られています」
こう述べるアフロディーテであった。
「この紅の薔薇によって」
「そうだったな。それがなくなるのだな」

「この薔薇は教皇の間までの最後の護り」
彼はまた言った。
「それがない間。宜しく御願いします」
「わかった」
アルデバランが彼に対して頷いてみせた。力強く。
「我等が死力を尽くして必ず護る。それは安心していろ」
「わかっています。貴方達なら」
彼等のことがよくわかっている。だからこその言葉であった。
「必ず私がいない間この聖域を護り通してくれます。ですから安心して」
「行くというのだな」
「そうです。それでは」
最後にアイオリアの言葉に応える。そうして。
道を染め上げていた紅の薔薇が消え去り白い道が姿を現わした。
それと共にアフロディーテもまた何処かへと姿を消した。後に残っているのは他の黄金聖闘士達だけであった。
その残った彼等がだ。ここで言うのだった。
「今度はあの男か」
「ピスケスのアフロディーテ」
ミロとカミュが言った。
「十二宮最後の宮を護る男」
「聖域の最後の備え」
「あの顔に惑わされてはいけません」
ムウもまた彼をしかと見てそのうえで言葉を出していた。
「その小宇宙は紛れも無く黄金聖闘士のものですから」
「その通りです。彼に関しては全く何の不安もありません」
シャカまでもが太鼓判を押す程だった。
「見ているだけでいいのです」
「またえらく安心しているな、おい」
「確かにアフロディーテの小宇宙はかなりのものだが」

デスマスクとシュラは今のシャカの言葉に驚いたような、それでいて少し冷やかすような顔をして述べた。特にデスマスクはそうした顔になっている。
「相手もやばいんじゃねえのか？」
「アスタロトといえば魔神の中でもかなりの存在の筈だ」
既に彼等も魔神にるいてはある程度以上知っていた。
「氷を操るんだったな、確か」
「魔神の中でもとりわけ残虐だとも言われているが」
「それは貴方達と全く同じ条件です」
シャカは二人に対して表情を変えることなく告げた。
「それに関して言えば」
「俺達とか」
「同じだというのか」
「ベルゼブブもベールもどちらも魔神の中で最も恐ろしい者達です」
彼は言った。
「いえ、八大公全てがです」
「だからこそ八大公になっているというのだな」
カミュは冷静に述べた。
「狂闘士の中の最高位である彼等に」
「その通りです。だからこそです」
また言うシャカであった。

第二十六話　薔薇の聖闘士その三

「彼等に対抗できるのもまた貴方達だけでした」
「へっ、俺だったら奴等全員冥界に送り返してやるぜ」
「俺も。次は斬る」
デスマスクもシュラもその自信は隠さないのだった。それは彼等もまた黄金聖闘士であるという自負があるからだ。だからこそなのである。
「八人だろうか何人だろうがな」
「臆するところはない」
「その心意気です。そして」
「そして？」
「何だシャカ」
アルデバランとアイオリアがまた彼に問うた。
「それはあの人にもあるのです」
「ピスケスのアフロディーテ」
「その美貌は全ての聖闘士の中でも頂点にあると言っていい」
だからこそ美貌を司る女神の名を冠しているのである。それは伊達ではないのだ。
「しかし。それだけではないか」
「あの男もまた」
「では。見せてもらおう」
ミロは今までアフロディーテがいた場所と白くなった道を見て言うのだった。
「その戦いをな」
「既に同行する白銀及び青銅の者達も選ばれている」
カミュはこのことも述べるのだった。
「おそらくな。そしてアフロディーテと合流する筈だ」
「さて、誰がなるのでしょうか」

ムウはここでそれが誰なのかを考えてそのうえで述べるのだった。
「ここは。誰なのか」
「まず一人はほぼ決まりだろう」
アルデバランはその重厚な顎に手を当てて考える声を出した。
「リザドのミスティだ」
「あいつか」
「あの白銀きっての腕利きだという」
アイオリアとシュラはミスティの名を聞いて言うのだった。
「かなり癖のある奴だがな」
「ナルシストと言うべきか」
また言う二人であった。そしてデスマスクとカミュはそれぞれ眉を顰めさせていた。
「あのナルシストぶりはまた異常だがな」
「実力はあるにしろだ」
「まああれだな。アフロディーテには合ってるがな」
「それもそうか」
「それでもう一人は誰だ？」
ミロはもう一人についても考えるのだった。
「白銀は二人の筈だが」
「もう一人は。さてな」
アルデバランにも予想がつかないようであった。
「予想ではな。ペルセウスのアルゴルだが」
「彼ですか」
「これは俺のただの予想だ」
こうムウにも前置きする。
「果たしてそれがどうなるかはわからないがな」
「あとそれに青銅が四人です」
シャカは落ち着いた顔で述べた。
「合計七人でまた向かうのです」
「それでは。我々はここで待ちましょう」

冷静に述べるムウだった。
「ゆっくりと」
「そうだな。それではだ」
アルデバランがムウの今の言葉に頷いた。
「ここは待たせてもらおう。あの男の無事な帰還をな」
黄金聖闘士達はこう言いながら教皇の間の前においてアフロディーテが守護している双魚宮を見るのだった。そこには今主がいない。しかしその毅然とした気品のある小宇宙は残っているのだった。
アフロディーテが今聖域を発とうとしている時だ。後ろから彼を呼ぶ声がした。
「アフロディーテ様お待ち下さい」
「我々も」
「そういえばそうでしたね」
アフロディーテは立ち止まり彼等の方を振り向いて言うのだった。
「この聖戦においては黄金聖闘士が出陣する時は」
「はい、白銀及び青銅もまたそれぞれ出陣する予定になっています」
「そうなっています」
こう彼等はアフロディーテに対して告げるのだった。合わせて六人いる。
「まずはこのミスティと」
「アルゴルが御供させて頂きます」
最初に名乗ってきたのは女と見まごうばかりの淡い色の豊かな髪を持つ男とそれに反比例するかのように精悍な顔の二人の男であった。

第二十六話　薔薇の聖闘士その四

「白銀は貴方達二人ですか」
「はい、そうです」
「我々です」
「わかりました」
アフロディーテは彼等の言葉はまずは受け入れるのだった。
「それでは。御一緒に」
「そして我々も」
「及ばずながら」
今度は四人が名乗り出てきたのだった。
「御供させて頂きます」
「それで宜しいでしょうか」
「貴方達は確か」
アフロディーテはその四人を見て言うのだった。少し何かを思い出すような顔になっている。
「青銅の」
「はい、私はです」
まずは黒い髪の童顔で小柄の少年が名乗るのだった。
「子馬星座のシオンです」
「蛇星座のラシャーです」
長い赤い髪の少年も名乗ってきた。
「俺は画架星座のワルター」
「炉星座のペテル」
続いて何処か氷を思わせる澄んだ目の白銀の髪の少年と彼とは逆に金髪の少年も名乗ってきた。
「我等四人です」
「アフロディーテ様の御供は」
「宜しいでしょうか」

「構いません」
アフロディーテは彼等の言葉を聞いてまずはこう述べるのだった。
「教皇の命ですね」
「はい」
「その通りです」
今のアフロディーテの問いにも頷いて答えるのだった。
「では私に拒むことはできません」
黄金聖闘士といえどもである。教皇の命に逆らうことができないのだ。教皇はまさにアテナの代理人でありその言葉こそアテナの言葉であった。
「それに」
「それに？」
「貴方達の目を見れば」
彼等を見てもなのであった。
「どうして断れましょう。その目を見て」
「有り難うございます」
「それでは御一緒に」
「しかしです」
ここでアフロディーテの言葉は強くなった。
「一つ申し上げておくことがあります」
「一つですか」
「そうです」
また言うアフロディーテであった。
「一つ。これだけはです」
「？それは一体」
「何でしょうか」
これはミスティにもアルゴルにもわからないことだった。彼等は怪訝な顔をしてそれぞれの眉を顰めさせわからないといった顔を見せるのだった。
「死なないことです」

アフロディーテが言うのはこのことだった。
「死なないことです」
「我々がですか」
「死なないことですか」
「そうです」
また言うアフロディーテであった。
「死ぬことは私が許しません」
アフロディーテはさらに述べてきた。
「そう。何があろうとも」
「何があろうともですか」
「その通りです。聖闘士はアテナと人々の為に闘うのが務め」
これはもう言うまでもないことであった。
「しかし今は死ぬ時ではありません」
「では生きよと」
「闘い。そして生きる」
こうも言うアフロディーテだった。
「私が言うのはそれだけです。宜しいですね」
「はい、それでは」
「そのように」
彼等もその言葉に頷くのだった。

第二十六話　薔薇の聖闘士その五

「何があろうともここでは」
「死ぬことはありません」
「そのうえで闘います」
「私の薔薇はです」
その彼等に対してまた告げるのだった。
「敵を葬送するものです」
「敵をですか」
「そしてアテナと人々を護るもの」
言葉を変えてきた。
「決して聖闘士を送るものではありません」
「だからですか」
「我等に。死ぬなと」
「その通りです。ではおわかりになられましたね」
「はい」
「これでもう」
六人はアフロディーテの今の言葉にも頷くのだった。
「ではここで誓います」
「我等は戦いに向かいます」
それぞれの口で話していく。
「しかし何があろうと死にません」
「生きます」
誓うのはこのことであった。
「勇敢に戦いそのうえで」
「生きてみせます」
「そういうことです。それではです」
アフロディーテはここまで話したうえで一旦彼等に背を向けそうして言うのだった。

「では参りましょう」
「中国にですね」
「そうです」
背中越しに彼等に答える。
「戦場に」
こう言いそのうえで聖域を発つのだった。また戦いがはじまろうとしていた。
シオンは一人になるとまた鏡の間に入っていた。そうしてそのそれぞれ無数の合わせ鏡がある中の中央に座しそのうえで話をしていた。
「そうか。中国にか」
「そうだ。御前が今いるその国にだ」
こう鏡の向こうにいる相手に話すのだった。
「向かった」
「あの男がのう」
「同じだ」
シオンはここで同じと言うのだった。
「あの時とな」
「そうだな。デスマスクとシュラも同じだった」
鏡の中にいるその男はデスマスクとシュラも話に出してきた。
「そしてあ奴もか」
「皆同じだ」
シオンはこうも言うのだった。
「私達以外はな」
「ははは、わし等はあの頃からいるからな」
鏡の中の男の声がここで笑ったものになった。
「考えてみればそれも道理だ」
「そうだな。そしてアフロディーテだが」
「うむ」
「外見も中身も全く変わらない」

「ではその強さもか」
「そうだ。気概も同じだ」
それまで同じだと言うシオンだった。
「だからだ。安心している」
「そうか」
「あの男はやり遂げる」
アフロディーテに対して絶対の信頼を見せるシオンであった。
「必ずな」
「あの時と同じくか」
「そうだ、あの時と同じくだ」
「それはよくないのう」
ところが鏡の男は彼の言葉を聞いて声を曇らせるのだった。
「どうもな」
「あの時のことがあるからか」
「そうだ。あの時あの者はだ」
そして言うのだった。

第二十六話　薔薇の聖闘士その六

「それで命を落とした。覚えているな」
「忘れる筈がない」
シオンの返答の言葉もまた非常に苦いものになってしまった。
「決してな」１０
「あの時の戦いで生き残ったのはわし等二人だけだった」
「他は全てな」
「そしてあの男もだ」
「見事だった」
シオンはこう言いはする。
「しかしだ。だからといってだ」
「いい思い出ではないのう」
「誰もが命を賭けて闘いそうして散っていった」
「わしと御前以外はだ」
「あの男もそうなるかというとだ」
「しかしだ」
だがここで鏡の男は言うのだった。
「今はその時ではない」
「そうだ」
シオンは顔をあげて彼の今の言葉に頷いてみせた。
「今はその時ではない。私の運命の時は間も無く近付こうとしているがだ」
「わしはやがてあの者達と共に」
「そうだったな。光になる」
鏡の男にこう言うのだった。
「少年達に未来を託しだ」
「それが御前の運命だな」
「その通りだ。だからここで死ぬことはない」

「しかし命は賭けるだろう」
それはわかっているのだった。
「あの顔とは裏腹に。凄まじい闘志を持っているのだから」
「全く。そこは変わらない男だ」
鏡の男は今のシオンの言葉に呆れたような、それでいて褒め称えるような笑みを浮かべるのだった。何処となく優しい笑みでもあった。
「それはあの者達全てか」
「そうだな。デスマスクもシュラも」
その二人も同じだというのである。
「同じだった。そしてアフロディーテもだ」
「他の者達もだな」
「そうだ。何もかもが同じだ」
こう言うシオンだった。
「あの者達はな。誰もが」
「思えばこれが因縁か」
鏡の男は話をしながらこうも言うのだった。
「あの時から続く」
「そちらの封印はどうなっている？」
シオンは鏡の男に今度はこうしたことを聞いてきた。
「封印は。どうなっている」
「あと十三年じゃ」
鏡の男の言葉は深刻なものはそのままだが色は変わった。
「十三年といったところじゃ」
「そうか。では遂にか」
「そういえばペガサスの男も転生してきたそうじゃな」
「どうやらな。あの方の息子の一人として」
「百人の子の一人としてか」
「ユニコーンもだ」
彼もなのだった。

「既にな」
「では。時が来たのは間違いない」
鏡の男はまた言った。
「わしも時が来れば」
「その時は頼む」
シオンは男に頼み込んできた。頭は下げずそのまま立ったまま鏡のうちの一つ、男がいるその鏡と正対しながらだがその鏡に対して言うのだった。
「是非な」
「わかっておる」
男の言葉は微笑んでいた。
「その時はな。任せておけ」
「黄金聖闘士達も全員預ける」
彼等に関してもなのだった。聖域の象徴でありまさに切り札とも言うべき彼等もだ。
「存分に戦ってくれ」
「あの時まだあの神を完全に抑えることはできなかった」
「そうだ。完全にはだ」
先の聖戦のことであるらしい。

第二十六話　薔薇の聖闘士その七

「二人になり多くの犠牲を払っても」
「それは適わなかった」
勝利は収め多大な犠牲を払ってもそれでもだったのだ。彼等はその勝利は完全なものではなかったのである。決して。
「だが今度こそはだ」
「わかっておる。黄金聖闘士が十二人全員揃う時」
「うむ」
シオンは鏡の男の言葉に頷くのだった。
「聖戦が起こる」
「それこそが運命なのだからな」
「このアーレスとの戦い」
「ポセイドンも予言されているな」
「そしてあの神との戦いだ」
アーレスだけではないというのだ。
「あるのだから。だからこそ」
「運名とは残酷なものだ」
男はふとこんなことも言うのだった。
「あの者達は既に一度若い命を散らした」
「うむ」
頷くシオンの言葉が苦いものになる。
「そして今もか」
「聖闘士は全てそれが宿命だとしてもだ」
「かつてそうであり今もそうなる」
男の声も苦々しいものになっていた。
「思えば惨い話だ」
「我々だけで済めばいいことだというのにな」
「わしはもう思う存分生きた」

男はまた言ってきた。
「御主はどうだ?」
「私もだ」
シオンもそうだと言うのであった。
「二百五十年、いやな七十年はあったか」
「そうじゃな。八十一年じゃったか」
そこまで覚えていられない程の長い時間だというのである。
「思えばのう」
「長いものだった」
「そしてそれだけの時間を生きた我等が」
彼の言葉は続く。
「やらなければならないのだが」
「だが仕方がない」
彼は言うのだった。
「それが運命だ」
「運命か。そうだな」
運命と聞いてシオンは言葉をその止めるのだった。
「それが運命ならばだ」
「あの者達はその為に再びこの世に現われた」
男はこうも言うのだった。
「そしてわし等もな」
「わかった。それではだ」
「うむ」
男は今度はシオンの言葉にそのまま頷いた。
「それに従おう。そのうえで私もまた」
「闘うつもりか」
「教皇はただそこにいるわけではあるまい」
声が笑っていた。穏やかであったがそれでもそこには確かなものが備わっていた。
「かつての教皇セージ様のように」

「自らもというわけだな」
「それは私とて同じだ」
こう言うのだ。
「その時は。自ら闘おう」
「ではわしもだ」
シオンの言葉を聞いて鏡の男の声を微笑んだものになった。
「おそらくわしのところにも来るだろうからな」
「その時はか」
「うむ、闘う」
迷いなぞ微塵もない言葉であった。
「私もまた」
「相変わらずだな」
今のシオンの言葉にさらに笑う男だった。
「御前も。あの時と同じだな」
「それは御前もではないのか？」
シオンも声を微笑まさせて彼に応えた。
「そうではないのか？」
「そうかもな。それではだ」
「うむ」
「また。共に闘うとしよう」
こうシオンに告げるのだった。
「この闘いでもな」
「そうするとしよう。それではだ」
「またな」
「また会おう」
最後にこう言葉を交えさせて別れるのだった。男は鏡から姿を消した。シオンもまた暫くはその部屋に留まっていたがやがて立ち去った。部屋にはもう誰も残ってはいなかった。

第二十六話　完

2009・4・22

第二十七話　紅の毒その一

紅の毒

アフロディーテ達は聖域を発ち程なく中国に辿り着いた。最初に辿り着いた街は上海であった。丁度長江の入り口にある街である。今では高層ビルが立ち並び様々な人が行き交っている。独特の形の塔があり何処か異国情緒がある。そこに聖闘士達が入ったのである。

「ここからです」

「はい」

アフロディーテは港でミスティの話を聞いていた。彼等はそれぞれの私服で港にいた。港からは船が行き交うのが見え時折汽笛が聴こえてくる。

「長江をのぼって武漢に向かいましょう」

「船でなのですね」

「そうです」

ミスティは一人スーツであるアフロディーテに対して答えるのだった。彼は淡いクリーム色のスーツに赤いタイを身に着けていた。

「それで如何でしょうか」

「いいと思います」

そしてアフロディーテにも異論はなかった。

「それで」

「そうですか。それでは今からすぐに」

「いや、ミスティ」

「それよりもだ」

しかしここで青銅の者達が彼に声をかけてきたのだった。

「もういい時間ではないのか？」

「そうだな。もうな」

「いい時間！？」

だがミスティは彼等の言葉の意味がわからずその整った、美女のそれにさえ見える眉を微かに顰めさせるのだった。今は街に並ぶ霞がかって見えるビルは見ていない。
「いい時間とは。何だ？」
「だからだ。昼ではないか」
「そうだ、昼だ」
ここでアルゴルもミスティに対して言ってきたのだった。
「昼だ、もうな」
「ふむ。そうか」
彼にも言われてやっと気付いたミスティだった。
「昼食の時間だな」
「そうだ、まずは腹ごしらえといかないか」
こうミスティに提案するアルゴルなのだった。
「まずはな。中国に着いたのだしな」
「そうだ。中国だぞ」
「蟹を食わないか？」
青銅の者達はここぞとばかりにもの欲しげに言ってきた。
「是非な。ここはな」
「蟹をだ」
「そういえば上海といえばだ」
ミスティもまたここで気付いたのだった。彼等が今いるのは中国だ。食の源とさえ言われている中国なのである。そこにいることに気付いたのだ。
「蟹だったな」
「それに上海料理だ」
「そうだろう？どうだ」
「悪くはない話じゃないか？」
「確かにな」
ミスティもそれを認めて頷いた。
「それではだ。アフロディーテ様」

「はい」
ここでまたアフロディーテに声をかけるのだった。そのうえで彼に対して問うのだ。
「それで宜しいでしょうか」
「はい、私はそれで」
彼は言うのだった。
「構いませんが」
「そうですか。それでは」
「あれっ、アフロディーテ様って」
「結構食い物に造詣があるのか？」
「そうみたいだな」
青銅の者達はここで顔を見合わせて言い合うのだった。
「どうやらな」
「そういうものには関心のない方だと思ったけれどな」
「違うみたいだな」
「ああ」
「意外と柔軟性があるっていうかな」
「だよな」
皆彼のことを何処か誤解していた。
「黄金聖闘士だからな」
「もっと。何ていうか神々しいっていうかな」
「そうした人だと思っていたけれどな」
そういうイメージがあるのだった。
「けれど黄金の方々も人間か」
「そうみたいだな」
「諸君等は何を勘違いしているのだ？」
青銅の者達の今の言葉を聞いて眉を顰めさせたのはミスティだった。

第二十七話　紅の毒その二

「黄金の方々といえど人間だぞ」
「それはわかっているつもりだったけれど」
「まあ。何ていうか」
「考えてみればそれも無理もないことか」
ミスティはここで考えを少し変えるのだった。
「それもな」
「そうだな。黄金の方々といえばだ」
アルゴルもここで言うのだった。
「聖域の頂点に立つ方々だ」
「そうそう。だからどうしても」
「俺達なんて教皇に滅多に御会いできないのに」
「それは我々もだがな」
ミスティはこれは言ってきた。実際に黄金と白銀では最早途方もないだけの差があるのだ。
「しかしだ。それでもだ」
「黄金の方々を誤解することはないと」
「そういうことか」
「そうだ。その通りだ」
こうシオンにも述べるのだった。
「わかったな。黄金の方々も人間だ」
「何となくわかった」
「俺もだ」
「俺も」
シオンの言葉にワルターとラシャが頷いた。そして今度はペテルが言ってきた。
「まあとにかく。話はこれ位にして」
「そうだな。昼食だな」

「それそれ。早く何か食わないと死んでしまうよ」
「それはわかっている。ではアフロディーテ様」
アルゴルはペテルのその言葉を聞きながらそのうえでアフロディーテに対して話すのだった。
「この者達もこう言っていますし」
「わかっています。では蟹を食べに行きますか」
「はい、是非」
こうして彼等はある店に蟹を食べに行くのだった。赤と黒の独特の天井と柱を持っているその店の中を見ながらそのうえで丸い七人が座れる席に座しそこで次々と出される料理を食べるのだった。
店の柱の赤が中華の情緒を醸し出していた。そうしてそこにかけられてある布もまた赤でそれが壁の黒とよく合っていた。テーブルの中央には回転する台がありそこに料理が次々と置かれていく。まずは蒸し餃子や饅頭といった点心からであった。
「やっぱり中国は最初はこれですね」
「そうだよな。これだよな」
「そうそう」
まず青銅の者達がその餃子や饅頭を食べていく。餃子の透き通った皮から赤いものが見えている。それが何かというと最早言うまでもなかった。
「蟹餃子か、やっぱりな」
「上海だからな」
「後でその上海餃子の酒蒸しも来る」
ミスティは麺を食べていた。海鮮麺でありこれにも蟹が入っている。とろりとしたスープの中に麺と蟹だけでなく海老や貝、それに椎茸や筍といったものが入っている。
「それもあるからな」
「この小龍包も美味いな」
「これも蟹だよな」
「ああ、しかしこれな」

「熱いな」
青銅の者達はその小龍包をはふはふ言いながら食べていた。
「このスープがかなりな」
「きついっていうかな」
「そうだな」
アルゴルもまたその小龍包を食べながら語る。
「この熱さがまたいい」
「中のスープがまた」
「あとピータンも中々」
「このクラゲも」
蟹の他にも色々と頼んでいるのだった。そういったものを食べながらそのうえで蟹を待つ。やがて大きな蟹が丸ごと運ばれてきたのだった。
「お待たせしました」
「おお、やっとだよ」
「来た来た」
青銅の者達がその蟹を見て思わず声をあげた。
「じゃあ早速ここで」
「頂くか」
「それはいいがだ」
ミスティがここであまり機嫌のよくない声を出してきた。
「御前達少しはだ」
「少しは？」
「何かあるのか、ミスティ」
「落ち着いて食べたらどうか」
その機嫌は顔にも出ていた。少し憮然としている。

第二十七話　紅の毒その三

「落ち着いてな。アフロディーテ様もおられるのだぞ」
「あっ、そうか」
「そうだった」
言われてやっとそれに気付く始末だった。
「すいません、アフロディーテ様」
「それじゃあ」
「いえ」
だがアフロディーテの言葉は穏やかなものだった。
「構いません。それにしても」
「それにしても？」
「この小龍包ですが」
彼はまだそれを食べているのだった。右手に箸を持ち前には醤油が入った白い小皿がある。それに料理をつけて食べているのだった。
「実にいいですね」
「あっ、それですね」
「確かに。美味いですよね」
「はい」
青銅の者達の言葉に対して静かに応えるのだった。
「聖域でも食べたいものです」
「けれどアフロディーテ様」
「平気なんですか？」
ここで彼等の声が怪訝なものになった。
「あの、一個丸ごと普通に食べておられますけれど」
「中、熱くないですか？」
「熱いです」
アフロディーテもそれは認めるのだった。
「ですが」

「ですが？」
「それがまたいいですね」
こう言うだけであった。
「この熱さが」
「そうですか」
しかしここで青銅の者達は顔を見合わせ合ってそのうえで話すのだった。
「本当に平気みたいだな」
「この熱さでな」
「どうなってるんだ？」
アフロディーテがその小龍包を食べて全く平気なのを見ての話であるのは言うまでもない。
「アフロディーテ様は」
「まさか黄金聖闘士だからか？」
「馬鹿を言え。黄金聖闘士でも人間だぞ」
「それはわかっているが」
「ふむ」
彼等の話をよそに店の者が丁寧に出してくれたその蟹の肉を食べたアフロディーテがまた言ってきた。
「この味は」
「美味いですか」
「はい、とても」
こう他の聖闘士達に対しても答えるのだった。
「ですから貴方達も是非」
「ええ、それでは」
「今から」
アフロディーテの言葉を受けて彼等も食べはじめる。食べてみると実際に非常に美味だった。酒の香りと味が蟹をさらにいい具合に味付けしていたのだ。
「確かに。これはまた実に」

「いいものですな」
「これが上海蟹ですか」
「流石です」
アフロディーテは中国産白ワインを飲みながら語った。
「知られているだけはあります」
「それだけのものがあるというのですね」
「そうです。名前はただ伝わるのではありません」
彼は言うのだった。
「そこに確かなものがあってはじめてです」
「だから広まるというのですね」
「その通りです。これは」
言いながらさらに蟹を食べるのだった。
「この蟹は普通に出せる味ではありません」
「普通では、ですか」
「上海蟹の中でとりわけ厳選されています」
少し食べただけでそれを見抜いているのだった。
「この蟹は」
「そういえば普段食べる蟹より美味いな」
「そうだな」
アフロディーテの言葉を受けて聖闘士達も言い合う。

第二十七話　紅の毒その四

「ギリシアの蟹よりもな」
「こう言ったら何だが蟹限定だったら辰巳のおっさんの店よりもな」
「ああ、全くだ」
「ほう」
アフロディーテは今度は彼等の言葉に対して目を向けるのだった。
「貴方達も辰巳さんのお店にですか」
「はい、まあ」
「安いしサービスもいいですし。それで」
「時々は」
外見に似合わず意外と心配りができる辰巳なのであった。
「行っています」
「いや、あそこの和食はいいものですね」
「全くです」
「実は私達もです」
アフロディーテは相変わらず蟹を食べながら彼等に応えて述べる。
「あの店には時々行きます」
「えっ、そうなのですか！？」
「あの蛸親父の店に」
「おい」
今の青銅の者達の言葉はすぐにアルゴルに注意された。
「幾ら何でもその言い方はないぞ」
「あっ、すいません」
「ついつい。普段仲間内で言っていますから」
「全く。あの親父さんもボロクソだな」
「確かに」
ミスティも蟹を食べながら話に加わっていく。
「蛸だの何だのと」

「いい店だがな」
「あの店でまた和食を食べようと思っています」
アフロディーテはまた言うのだった。
「この戦いが終わりましたら」
「中国の戦いがですね」
「その通りです。それが終わってからです」
また述べるのだった。
「また行きます」
「何か黄金の方が行かれるとなると」
「そうだよな。行きにくいな」
「また日をあらためるか」
青銅の者達はアフロディーテがその店に通っていると知ってまた言い合うのだった。
「また別の日にな」
「そうしよう」
「それでです」
アフロディーテはここで蟹を食べ終えるのだった。
「次ですが」
「ああ、蟹も終わりですね」
「メインディッシュも」
丁度いいタイミングだった。皆蟹を食べ終えてしまった。ついでに言えば酒も全部飲んでしまった。今残っているのは茶だけだった。白と青の如何にも中華といった趣のその陶器の湯飲みに入った茶を飲みながらここで彼等は手もちぶたさになってしまったのだった。
「なら後は」
「デザートだが」
「確か果物を頼んでいたよな」
「はい、それに杏仁豆腐もです」
またここでアフロディーテが話してきた。
「もうすぐ来ます」

「杏仁豆腐はわかるが」
「問題は果物だな」
「何が出るかな」
ここでまた皆顔を見合わせた。
「中国の果物といえば」
「ライチか？」
「そうだよな」
彼等の脳裏に真っ先に思い浮かんだのはやはりこれであった。
「それが出て来るのかな、やっぱり」
「そうじゃないのか？」
「どうやらそのようです」
ここでまたアフロディーテが述べた。するとここで赤いチャイナドレスを着た艶やかな美女がやって来て実際にそのライチを置いてきたのだった。杏仁豆腐もだ。

第二十七話　紅の毒その五

「ああ、やっぱりな」
「これか」
「ライチか」
皆そのライチを見て言うのだった。赤紫の固い皮が水滴を跳ね返して白い皿の上に置かれている。
「それに杏仁豆腐」
「定番だけれどそれがいいな」
「そうなんだよな」
皆何だかんだで気に入っているようである。
「これがまたな」
「食べやすくてな」
言いながら中華風のスプーンで食べはじめる。そのまろやかな甘さが口の中を支配していく。えも言われぬ感触に覆われていく。
「そうそう、この甘さがなんだよ」
「病み付きになるよな」
「ライチもですね」
ここでまたアフロディーテが言った。彼は自分の手でライチを剥いていた。その赤紫の皮から白いミルク色の実が姿を現わしていた。
「これもまた実に」
「ええ、勿論それもですよ」
「もう最高っていうか」
「やっぱり中国ですよね」
青銅の者達はもう上機嫌であった。
「料理は」
「そりゃギリシアもいいですけれど」
「スウェーデンは」
しかしアフロディーテはここでぽつりと言うのだった。

「如何でしょうか」
「スウェーデンっていうと確か」
「アフロディーテ様の」
「だったよな」
「確かな」
皆顔を見合わせ合ってこのことを思い出したのであった。
「そういえばスウェーデンって言ったら」
「あの最終兵器か？」
「缶詰であるのですが」
アフロディーテ自身も言ってきた。その最終兵器のことを。
「シュールストレミングといいまして」
「げっ、やっぱり」
「それですか」
皆その缶詰の名前を聞いて顔色を一変させた。白銀のミスティ矢アルゴルにしろその顔を強張らせて硬直してしまっているのだった。
「御存知でしょうか」
「まあ一応は」
「名前だけは」
皆本当は知っているのだがこう答えるのだった。あえて。
「聞いたことはありますが」
「それが何か？」
「聖域に戻った時は取り寄せようと思っています」
そしてこんなことを言い出すのであった。
「少し。如何でしょうか」
「で、それは」
「誰が食べるので？」
皆怪訝というか死を前にしたような顔でアフロディーテに問うのであった。
「そのシュールストレミングを」
「誰が」

「黄金の仲間達です」
皆この言葉を聞いてまずは内心胸を撫で下ろした。
「そうですか。我々でないのですか」
「それは何よりです」
「何より？」
アフロディーテはその言葉にすぐに顔を向けてきた。
「何よりとは？」
「あっ、何でもないです」
「気にしないで下さい」
アフロディーテの今の言葉に咄嗟に表情を慌てたものにさせながらも打ち消すことに躍起になるのだった。それぞれの両手を出して必死に横に振りながら。
「別にまあ。そうした食べ物があるとは」
「聞いてはいますが」
「スウェーデンは寒いです」
これはもう言うまでもないことであった。北欧なのだから。

第二十七話　紅の毒その六

「ですが魚をよく食べまして」
「日本みたいにですか」
「はい。ですから辰巳さんのお店は気に入っています」
彼をしてもそうなのだった。
「魚介類が非常に美味しくて」
「では帰られたらそこにされては」
「まあそのシュール何とやらもいいでしょうけれど」
名前はあえて言わないのだった。
「とにかく。これを食べ終えたらです」
「はい」
アフロディーテは表情を切り替えて真面目になってミスティの言葉に顔を向けた。
「武漢に向けて発ちましょう」
「はい、すぐに」
こうした話をしながら食事を楽しんでいた。そうしてすぐに船を借りそれで武漢に向かった。長江をのぼっていく形になっていた。
船は青銅の者達が交代で動かしていた。ある程度自動でもいけるので船の操縦自体は楽であった。まずは気楽な船旅であった。
長江は雄大であり岸と岸が見えない。穏やかな流れの川は青というよりは黒でアフロディーテ達の周りも様々な船が行き交っている。それはまるで。
「海みたいだな」
「ですよね、これは」
「本当に」
シオンとラシャーがアルゴルの言葉に頷く。今彼等は甲板に出てそのうえで長江の雄大な眺めを楽しんでいるのだった。そこにはアフロディーテもいる。

「ヨーロッパにも大きな川はありますけれどね」
「ラインとかドナウとか」
どちらも欧州を代表する大河である。
「けれどこの長江はその上いってますね」
「本当に海みたいですよ」
ワルターとペテルも感嘆めいた言葉を出さずにはいられなかった。
「これはまたね」
「何ていうか」
「その通りだな。ここまで大きな川はない」
ミスティもまたその言葉をうっとりとさせたようなものにしていた。
「見事なものだ」
「これで戦いじゃなくて旅行なら最高ですけれどね」
「全くですよ」
青銅の者達はついついこんなことも言うのだった。
「まあ言っても仕方ないですけれどね」
「俺達はそれで来ているんだし」
「わかっていればいい」
アルゴルは彼等の話をここまで聞いたうえでまた述べた。
「我々は戦いに来ている」
「はい」
「アーレスの奴等と」
「そうだ。そしてその強さは尋常なものではない」
船の上で目を閉じて立ち言うのだった。
「あのハーデスの軍勢にも匹敵する」
「みたいですね」
「前の聖戦じゃ相当だったらしいですしね」
青銅の者達の顔も見る見るうちに強張り蒼ざめたものになっていく。
「そんな奴等ですからね、相手が」

「油断はできませんね」
「その通りだ。わかっているならだ」
「ええ」
「何時仕掛けてくるかわかりませんからね」
今度はミスティの言葉に応える彼等だった。
「警戒は怠らずに」
「そういうことですね」
「警戒される必要はありません」
しかしここでアフロディーテが彼等に告げた。彼もまた甲板に出てそのうえで長江の雄大な景色を眺めてそのうえで楽しんでいるのであった。その中での言葉であった。
「貴方達は別に」
「いえ、そういうわけにはいきませんから」
「俺達もそれが仕事ですし」
言おうとしたその矢先だった。
「来ました」
「来ましたって!?」
「一体何が」
今度もまたアフロディーテの言葉に声をあげてしまった。そうして何事かと思っていると。

第二十七話　紅の毒その七

「狂闘士達がです」
「ええっ!?」
「何時の間に!?」
白銀の者達も青銅の者達も咄嗟に辺りを見回す。しかし彼等は何処にも怪しいものは見なかった。そう、何処にもであった。
「あれっ、いませんけれど」
「誰も。何も」
「そう。ここからは見えません」
アフロディーテは悠然と立ち上がりそのうえで紅薔薇を咥えていた。そうしてそのうえでまだ周囲を見回している彼等に対して告げたのだ。
「ここからは」
「っていいますと何処に」
「どちらに」
「御覧なさい」
また言うアフロディーテであった。
「そう、河を」
「河っていいますと」
「この長江ですか」
「そう、長江をです」
彼等はアフロディーテの言葉を聞くとすぐに長江の水面を見た。するとそこは。
「一面が紅く?」
「長江の水は黒いのに」
「いや、これは」
ここで彼等はわかったのだった。どうして水が紅く見えるのか。それは。

「そうか。これは薔薇だ」
「アフロディーテ様の薔薇だ」
彼等はここでわかったのだった。何故今水が紅く見えたのか。それはアフロディーテが彼の使う紅薔薇の花を散らしていたのである。
「けれど何故？」
「ここで紅薔薇を」
「すぐにわかります」
「わかりますってしかも」
「また何時の間に」
見れば彼は既にあのスーツではなかった。ピスケスの黄金聖衣を身に纏っていたのであった。しかも黄金聖闘士にだけ許されるあのマントまで。
「黄金聖衣まで」
「何故ですか？」
「出て来るのです」
アフロディーテはその黄金聖衣を纏ったまま悠然と言うのだった。
「隠れているのはわかっています」
「ふふふ、流石はピスケスの黄金聖闘士」
「わかっていたのか」
「はい」
彼はその声に告げるのだった。
「最初から。貴方達が来ていたのは」
「わかっていた？」
「最初から？」
聖闘士達はそれを聞いてまた驚きの声をあげた。
「どういうことだ？まさか」
「狂闘士達が」
「そうだ、その通りだ」
「貴様等は今気付いたようだな」
また声達が言ってきたのだった。

「やはり。ピスケスに比べると落ちるな」
「白銀や青銅の者達だ」
「うるせえ！」
「だからって俺達を舐めるな！」
青銅の者達は今の彼等の言葉を聞いて反射的に怒りの声をあげた。
「俺達だってな。聖闘士だぞ！」
「御前等になんか負けるかよ！」
「じゃあ俺達が何処にいるのかわかるか？」
「わからないだろ」
声達が聖闘士達の言葉を聞いてせせら笑うように言い返してきた。
「その辺りは」
「どうせな」
「私がわかっていれば問題はありません」
しかしここでまたアフロディーテが言うのだった。
「それで貴方達は何もできませんから」
「何もできない？馬鹿を言え」
「現に俺達に対して何もできないではないか」
「それ程言うならです」
また彼等に言葉を返すアフロディーテであった。

第二十七話　紅の毒その八

「早く出て来るのです」
「早く！？」
「じゃあすぐ側に」
「わからないのも当然です」
アフロディーテはこれまた驚きの顔で周囲を見回す聖闘士達を見ながら話した。
「何故なら」
「何故なら？」
「これには八大公の一人が関わっているからです」
「えっ、八大公！？」
「まさか今ここで！？」
「出て来てはいません」
アフロディーテはそれは否定した。
「しかしです」
「しかし？」
「それでもですか」
「そうです。その力で彼等の小宇宙を消していたのです」
こう述べるのだった。
「だからわからなかったのです」
「配下の小宇宙を消してみせる」
「何という恐ろしい力だ」
「それがアスタロトなのか」
青銅の者達はアフロディーテの言葉を聞いてまた驚くばかりだった。
「ですがそれでアフロディーテ様」
「敵は一体何処にですか？」
「そうです。まだ何処にも」

「さあ。出て来るのです」
アフロディーテは彼等の問いに応えるようにして述べた。
「早く」
「ふむ。やはりな」
「我等が何処にいるのかわかっているのか」
「無論」
一言で彼等に答えるのだった。
「その小宇宙で」
「そうか。ならば話は早い」
「それではだ」
ここで彼等が一斉に姿を現わした。それが驚くべき場所からであった。
「何っ、水面から!?」
「河の中に隠れていたというのか」
「その通りだ」
インプ達であった。彼等は水中から姿を現わしそのうえで驚く青銅の者達に対して悠然と笑ってみせたのであった。
「このようにしてな」
「我等はただ陸にいるわけではない」
こうも言うのだった。
「水の中にいることもできるのだ」
「迂闊だったな」
「では。覚悟はいいな」
ここまで言ったうえでそれぞれ何時の間にか出してきていた赤い小舟にそれぞれ乗り込んでいた。そうしてそこから今まさに攻め込まんとしていた。
「ここでだ。死んでもらう」
「貴様等全員にだ」
「さて。それはどうでしょうか」
しかしここでアフロディーテがまた彼等に対して言うのだった。

「死ぬのは我々だというのはいささか性急な考えと思いますが」
「ふん、何を言うか」
「この数の我等を前にしてまだそんなことを言えるのか」
「勿論です。何故なら」
「何故なら?」
「勝負は既に決まっているからです」
言いながら口に咥え続けていたその紅薔薇を右手に持つのだった。
そのえうでさらに言葉を続ける。
「貴方達の運命もまた」
「戯言か?」
「死ぬ前の負け惜しみというのか」
「黄金聖闘士の言葉に負け惜しみはありません」
しかしアフロディーテはこう言うのであった。
「それだけは言っておきます」
「では何故今貴様は何もしない?」
「そうだ、その通りだ」
インプ達はアフロディーテの言葉を聞いてさらに激昂した感じであった。

第二十七話　紅の毒その九

「何故今何もしないのだ？」
「我等の運命が決まったと言っておきながら」
「それこそが負け惜しみである何よりの証拠」
少なくとも彼等はそう思い込んでいた。
「戯言とはな」
「どうやら黄金聖闘士も大したことはない」
「そこまで言うのならです」
アフロディーテは一歩も動くことなくその彼等に対して告げるのだった。
「動いてみれば如何でしょうか」
「動くだと」
「我等がか」
「そうです。是非」
彼は言うのであった。
「そうすればおわかりになられますから」
「ふん、言われずともだ」
「こちらから出向いてくれる」
言いながら今ここにいる全てのインプ達がその身体に力を込めた。
そうして。
そのうえで一斉にアフロディーテ達に飛び掛かろうとする。その殺気に満ちた小宇宙が動く。しかし動いたのはその小宇宙のみであった。
「な、何っ！？」
「これは」
彼等は動くことができなかった。動こうとしたその瞬間に全身の力がガクリと落ちそのうえでそれぞれ小舟の上に崩れ落ちてしまった。中には河の中に再び戻ってしまった者すらいた。

「どういうことだ。身体に力が入らん」
「それどころか。目が」
次は目であった。
「目が見えなくなってきたぞ」
「耳もだ」
「そして息が。これは」
「薔薇です」
アフロディーテは彼等に告げるのだった。
「何故私が紅薔薇を河に敷いたのかおわかりでしょうか」
「薔薇！？それではあの薔薇にはまさか」
「毒が」
「ロイヤルデモンローズ」
彼は言った。
「私の紅の薔薇は相手を穏やかな死に誘い込みます」
「薔薇の毒だというのか」
「それでは」
「その通りです。奇麗な薔薇には毒があります」
こうも言うのだった。
「ですから。貴方達はもう」
「くっ、何という男だ」
「毒を仕込んだ薔薇を使うとは」
ここでようやくアフロディーテの恐ろしさを知った彼等であった。
「ピスケスの黄金聖闘士アフロディーテ」
「恐ろしい男だ・・・・・・」
「安らかに眠るのです」
アフロディーテは崩れ落ちていく彼等に対して告げた。
「そのまま穏やかな死へ」
こうしてインプ達は誰もが崩れ落ち倒れてしまった。中国における聖闘士と狂闘士の最初の闘いはアフロディーテがその薔薇を使い完璧な勝利を収めたのであった。

「お見事です」
闘いの一部始終を見ていたミスティがアフロディーテに対して告げた。
「まさかここで技を使われていたとは」
「何事も事前にわかっていれば対処は容易いです」
「事前にですか」
「そうです。先程も言いましたが小宇宙でわかっていました」
彼はこうミスティに述べるのだった。
「ですから。それはもう」
「だからですか」
「後は置いておくだけでした」
そしてこんなふうにも言うのだった。
「紅薔薇を」
「まさか薔薇に毒が仕込んであるなんて」
「噂には聞いていたがな」
「ああ、そうだな」
青銅の者達はここでまた顔を見合わせ言い合うのだった。
「ピスケスの黄金聖闘士は花を使うってな」
「それはこういうことだったのか」
「そしてそれで教皇の間までの最後の部屋を護る」
「だよな」
「教皇の間に邪な者が辿り着くことはできません」
アフロディーテの今度の言葉は断言であった。
「何人たりともです」
「この紅薔薇によってですね」
「そうです。では」
ここで話が終わったのだった。
「また。向かいましょう」
「はい、それでは」
「また」

インプ達をそのロイヤルデモンローズで一蹴したアフロディーテは他の聖闘士達を連れまた武漢に向かうのだった。戦いはまだはじまったばかりであった。

第二十七話　　完

２００９・４・２８

第二十八話　船の上にてその一

船の上にて

「そうか、インプ達はか」
「はい」
ミシェイルに対して周りにいる者達が告げていた。彼等は今川辺におりそこから長江の雄大な景色、水墨画の如き川と山の風景を眺めながら話をしていた。
「あえなく。ピスケスにより」
「そうか。だが」
「だが？」
「ピスケスの技はわかったな」
ミシェイルはこのことを周りにいる者達に対して問うのだった。
「そうだな。わかったな」
「まあそれは」
「あの紅薔薇の技のことは」
「ロイヤルデモンローズ」
彼は言った。
「あの技だな」
「その通りです。あらかじめ水面に紅薔薇を配しておき」
「その毒でインプ達をです」
「かつての聖戦と同じだな」
ミシェイルはここでまた言った。
「かつてのな」
「かつでのですか」
「そうだ。冥皇ハーデス様との戦いがかつてあった」
ミシェイルがここでハーデスを尊称で呼んだのは彼等の神であるアーレスとハーデスが友好関係にあるからだ。冥界を司るハーデスにとって死者を増やしてくれるアーレスは有り難い存在なのだ。そ

の殺伐とした性格も気に入っていると共に死者の数はそのままハーデスの富になるからだ。
「その時にもピスケスの黄金聖闘士がいた」
「確かその名は」
「あれは」
「アルバフィカといった」
ミシェイルはその時のピスケスの黄金聖闘士の名も知っているのだった。
「その男もまたロイヤルデモンローズを使っていた」
「そうだったのですか」
「あの時から薔薇を使っていたのですか」
「それどころか今まで見たところだ」
ミシェイルはまた言ってきた。
「キャンサーにしろカプリコーンにしろだ」
「あの者達もですか」
「そうだ。使っている技は同じだ」
彼は言うのだった。
「技はな。同じだ」
「同じなのですか」
「この時代の者達もあの時代の者達も」
「そういうことだ。まだ見ていく必要はあるが」
ミシェイルはさらに言葉を続けていく。
「同じ技ならば。闘い方もおのずとわかってくる」
「そうですね。それは」
「使う技が同じならば」
「そしてもう一人いる」
ミシェイルはさらに言うのだった。
「ドイツでもアメリカでもあの者が来たな」
「ジェミニですね」
「そうだ。あの者も来る」

それも読んでいるのだった。
「間違いなくな」
「ジェミニがですか」
「そうでなくてはサジタリアスだろうな」
「サジタリアス？」
「確かアイオロスでしたな」
既に黄金聖闘士の星座と名は全て把握しているのだった。
「サジタリアスは」
「そうだ。ジェミニが来なければその者が来る」
シズカにこう言うミシェイルだった。
「どちらにしろ黄金聖闘士はもう一人来るのだ」
「それではです」
「そのもう一人に対しても」
「そちらにはまず四人向ける」
ミシェイルは周りの者達をここで見回しそのうえで告げた。
「四人だ。そして五人はだ」
「五人は」
「私と共にピスケスに向かう」
今度はこう告げたのだった。

第二十八話　船の上にてその二

「よいな。五人はだ」
「では先にピスケスを倒すのですね」
「その通りだ。確かにピスケスも手強い」
黄金聖闘士とあって流石に侮る言葉はなかった。その強さは最早神話の時代より語り継がれ聖域そのものといった面さえあったからだ。
「しかしだ。私が行き」
「そのうえで五人で以ってピスケスを倒すと仰るのですね」
「アテネに黄金聖闘士あらばトラキアには八大公がある」
彼は言った。
「そう、私もな」
「黄金聖闘士に対するのは八大公」
「ですがミシェイル様」
しかしここで周りの者達がミシェイルに対して言うのだった。真剣そのものの声で。
「我等もおります」
「まずは我等が」
「行くというのだな」
「無論です」
「お任せ下さい」
彼等は口々にアーレスに対して言ってきた。
「ピスケスの首、必ずやこの私が」
「いえ、この私が」
戦う前から功を争うとする。しかしミシェイルはそうした彼等をここで窘めたのだった。
「待て」
「待てというのですか」

「そうだ。焦っては何にもなりはしない」
そしてこう告げるのだった。
「何もだ。だからだ」
「だから」
「ここは私の指示に従え」
あらためて周りの者に対して声をかけるのだった。
「私にな。よいな」
「そうですか。それでは」
「ミシェイル様、何なりと命じて下さい」
「どうか我等に」
態度をあらためてそのうえで礼をする仕草で彼に対して述べるのだった。
「まずは待て」
「待てと」
「そうだ。焦ってはならない」
彼は言うのだった。
「焦ってはな。何もならないな」
「それはその通りです」
「確かに」
周りの者達も彼のその言葉は認める。
「では。ここは」
「様子をですか」
「御前達に出てもらうのはまだ先だ」
彼は周りの者達に対してこうも伝えるのだった。
「まだな。それよりも今はだ」
「今は？」
「インプ達を出す」
その言葉が冷徹なものになった。
「あの者達にな。言ってもらう」
「インプ達をですか！？」

周りの者達はそれを聞いて目を顰めさせずにはいられなかった。
「あの者達をまたですか」
「出されるのですか」
「何か言いたいことがあるな」
彼等の問いに対して顔を向けて問うのだった。
「私の今の考えに対して」
「御言葉ですが」
一人が実際に答えてきた。
「その通りです」
「私もです」
「私もまた」
「それだけは」
見れば全員であった。九人全員で彼の今の考えには反対の意を示したのだった。
「インプ達は先にピスケスのロイヤルデモンローズの前に敗れています」
「それを見ますと。やはり」
「どうかと思いますが」
「そうだな。確かに勝てるものではない」
彼もまた言うのだった。

第二十八話　船の上にてその三

「あの者達ではな」
「では何故」
「どうしてあの者達を」
「戦術だ」
彼の今出した言葉はこれであった。
「戦術を知る為だ」
「戦術をですか」
「そうだ。あの男の闘い方をな」
言いながらその男の顔を脳裏に思い浮かべるのだった。
「より知る為だ」
「というとピスケスのですか」
「あの男の」
「それも一度ではない」
一度ではないとも周りに告げた。
「何度か送る。ここに連れて来たインプ全員を注ぎ込むつもりだ」
「そこまでされるのですか」
「インプ達では勝てる筈がない」
それはわかっていた。所詮雑兵達では聖域最強の存在である黄金聖闘士達に対して勝てる筈もない。当然と言えば当然のことである。
「だが。技はわかる」
「ピスケスの技がですか」
「おそらくあの紅薔薇だけではない」
言いながら目を鋭く光らせるミシェイルだった。
「先の聖戦でもピスケスの黄金聖闘士は複数の薔薇を使っていた」
「複数のですか」
「それだけの薔薇を持っているというのですね」
「そうだ。だからこそそれを知る為にだ」

インプ達を送り出すというのだった。
「わかったな」
「それはわかりましたが」
「しかしそれは」
だが彼等はまだ言うのだった。
「インプ達は捨石ですか？」
「それですと」
「それをそう言うのならそうだろうな」
彼等の問いに対して平然と答えたのだった。
「確かにな」
「何と・・・・・・」
中には絶句する者すらいた。
「捨石にされるとは」
「インプ達を」
「全ては勝つ為だ」
しかし彼は傲然さえ聞こえる言葉の響きで述べた。
「全てはな。あの男に勝つ為だ」
「ピスケスに対して」
「何度も言う。黄金聖闘士の強さは尋常なものではない」
これを熟知しての言葉である。
「敵を知り己を知らば」
「百戦危うからず」
一人が続いた。
「それですね」
「わかっているな。全てはあの男を知る為だ」
彼は言う
「その為の戦略だ」
「戦略ですか」
「戦略は知ることだ」
確かにその通りの言葉であった。

「その為にだ。彼等には犠牲になってもらう」
「左様ですか」
「御前達も。そして」
ここで彼は驚くべきことを言った。
「私もまた」
「ミシェイル様も！？」
「まさか」
「何を驚く必要がある？」
今度の彼の言葉は平然としていた。
「何をだ。我等はアーレス様にお仕えしているな」
「は、はい」
「それはその通りですが」
驚きながらも答える彼等だった。
「ですがミシェイル様御自身までとは」
「それは幾ら何でも」
「だから何故驚くというのだ」
また彼等に対して言葉を返すのだった。

第二十八話　船の上にてその四

「我等はアーレス様の為に命を捨てるな」
「無論です」
「それは」
狂闘士ならばそれは絶対のことであった。
「アーレス様の為ならばこの命」
「喜んで」
「私もまただ」
そしてここでまた言うミシェイルだった。
「アーレス様の為にだ。狂闘士として」
「だからですか」
「御命を」
「私もまたここに来たからには」
長江のその雄大な景色を見ながら語る。
「命を賭けて闘う」
「はっ、それでは」
「我等も」
「ではまずはだ」
ここまで話したうえでまた言うミシェイルだった。
「言った通りだ。彼等をな」
「はい、それでは」
「送りましょう」
こうしてまたインプ達が送られることになった。しかしアフロディーテ達は今はそのことを知らなかった。彼等は相変わらず船で武漢に向かっているのだった。
その武漢に向かう中で。彼等はこの長江の景色を眺め続けていた。
その雄大な風景をだ。
「何ていうかな」

「そうだな」
その景色を見ている青銅の者達が話をしていた。
「幾ら見ても飽きないな」
「そうだな」
こう言い合うのだった。
「何かな。見ているだけでな」
「落ち着くしな」
「それだけじゃないな」
こんなことも言うのだった。
「何か何時までもこうしていたいよな」
「ずっとここにいてな」
「見ていたいな」
「そうだな」
話をさらに続けていく。
「酒でも飲んでのどかにな」
「全くだ」
「お酒ならありますよ」
ここで甲板の上に出した安楽椅子に座っているアフロディーテが彼等に告げてきた。
「それなら」
「あっ、あるんですか？」
「酒も」
「はい、紹興酒です」
出してきたのはこの酒であった。
「それがあります」
「へえ、紹興酒ですか」
「当地ものですね」
「そうです。中国では中国のものを飲む」
こう話すのだった。
「他にも中国のワインがありますが」

「どうする？」
シオンがそれを聞いて仲間達に問うた。
「紹興酒にワインか」
「そうだよな」
「他にもあるかな」
「ありますよ」
また彼等に告げるアフロディーテであった。
「桂花陳酒が」
「それもあるんですか」
「何か結構あるな」
「お酒は好きですので」
だからだというのだった。
「ですから」
「だからですか」
「三種類も」
「私も今飲んでいます」
見れば安楽椅子に座るアフロディーテの右手にはグラスがあった。
そこには氷とオレンジ色の酒があった。
「紹興酒を」
「ああ、今飲んでおられるのそれですか」
「それだったのですか」
「はい、そうです」
また答えるアフロディーテだった。

第二十八話　船の上にてその五

「如何ですか？かなりありますので」
「そうですか。それじゃあ」
「御言葉に甘えまして」
青銅の者達はアフロディーテの言葉を受けようとする。しかしここでアルゴルがその彼等の前に出て来て顔を顰めさせて言うのだった。
「おい、あまり飲むのもな」
「あっ、アルゴル」
「慎むようにな。何時奴等が出て来るかわからないのだぞ」
こう言ってその彼等を注意するのだった。
「何時な。出て来るかな」
「それはわかってるけれどさ」
「俺達もな」
こうは言うが言葉の歯切れはいいものではなかった。
「けれどな。何かこの風景見てるとな」
「どうしてもな」
「飲むなとは言わない」
アルゴルもそこまでは厳しくなかった。
「しかしだ。それでもだ」
「飲み過ぎ注意ってことか」
「結局は」
「しかもだ。御前達船酔いは大丈夫なのか？」
アルゴルが次に彼等に問うたのはこのことだった。
「それは大丈夫なのか？」
「ああ、まあそれはな」
「全然な」
「だよな」

彼等はここでその船酔いに気付いたといった感じであった。
「そんなの全然ないぜ」
「安心してくれよ」
「それならいいがな」
アルゴルはそれはいいとした。
「しかしだ」
「しかし？」
「それでも飲むのは程々にな」
「ああ、それはわかってるさ」
「充分な」
これは彼等もわかっていることであった。少なくとも口では。
「だから早速」
「飲もうぜ、あんたも」
「いや、私はいい」
しかし彼はそれは断るのだった。
「今はな。遠慮しておく」
「あれっ、何でだ？」
「折角だからいいじゃないか」
「なあ」
「少しな」
だがここで彼は言うのだった。
「船酔いしかたも知れん」
「あんたがか」
「その顔でか」
「顔は関係ないと思うが」
驚く彼等に対してむっとした顔で言い返す。
「それはまた別の話だ」
「しかし。船酔いか」
「こんな時にまた狂闘士達が来たら大変だな」
「そうだな」

青銅の者達はここでも顔を見合わせ口々に言い合うのだった。
「ペルセウスのあんたが動けないとな」
「いざっていう時にな」
「いや、その時は私がいる」
しかしここでミスティが出て来るのだった。
「アルゴル、今は少し休んでいるといい」
「いいのか。それで」
「案ずるな。雑兵が何百人来ようと私の敵ではない」
悠然とした物腰で彼に語るのだった。
「それこそ何千人とな」
「そうだよな。白銀聖闘士が一人いたらな」
「もう大体いけるよな」
「なあ」
なお雑兵と聖闘士の力の差は聖域においてはあまりにも歴然としている。そして青銅と白銀ではその力の差は天と地程の差があると言われているのである。

第二十八話　船の上にてその六

「だったらここはミスティがいれば大丈夫か」
「俺達は安心して飲むとするか」
「そうだな」
「生憎だがその論理にはならない」
しかしミスティもまた彼等を止めるのだった。
「酒は飲んでもいいが」
「そうだろ？だったらよ」
「ここはもうパーーーーーッとよ」
「今我々は何時戦闘になってもおかしくはない」
ミスティは何としても羽目を外そうという彼等に対して告げるのだった。
「それで酔いしれてどうするつもりだ？私だけで闘えというのか？」
「あれっ、そうじゃないのか？」
「ここは白銀のあんたが」
「馬鹿を言え」
ミスティは真面目な声でまた彼等に告げた。
「私一人だけで闘えない場合もある。そうした時に御前達もいる」
「あらっ、じゃあ馬鹿騒ぎはできないんですか」
「それじゃあ」
「当たり前だ。わかったら程々にしておけ」
またこう告げるのだった。
「いいな。それではな」
「ちぇっ、まあ飲めるだけでもいいか」
「そうだな」
とりあえずはそれで納得することにするのだった。彼等は早速アフロディーテから紹興酒を貰い甲板の上で車座に囲んで飲みだす。つまみは何処からか干し肉を出してきてそれで一杯やるのだった。

アルゴルはその横でゆったりとした椅子に座り休んでいた。その彼に対してミスティが声をかけてきた。
「それで大丈夫か？」
「ああ、安心してくれ」
こう彼に返すアルゴルだった。
「少し休めばよくなる。その程度だ」
「そうか。ならいいがな」
ミスティは彼の確かな言葉を聞いてとりあえずは安心した。
「では何かあればすぐに動けるな」
「それは安心してくれ」
微笑んで言葉を返すアルゴルだった。
「それはな。もうすぐにな」
「そうか。それではな」
「しかし。武漢までは長いな」
そしてこうしたことも話すのだった。
「かなりな。長いな」
「それも当然だ。長江は世界でも屈指の長河だ」
中国はもう一つ黄河がある。どちらも極めて長大で有名な河だ。
この二つの河が中国という口を形作ったと言っても過言ではない。
「普通の長さではないからな」
「それもそうだな」
ミスティの言葉を聞いてあらためて頷くアルゴルだった。
「では腰を据えて武漢に向かうか」
「そうするしかない。それでアルゴルよ」
「うむ」
「何か持っているか？」
不意にこんなことを彼に尋ねるミスティだった。
「本か何か。持っているか？」
「小説ならあるが」
こうミスティに答えるアルゴルだった。

「長旅に備えてな。持ってきている」
「そうか。ではよかったら一冊貸してくれないか？」
「ああ、いいぞ」
応えながら懐から一冊の本を取り出してきた。
「よかったら読んでくれ。日本の本だ」
「日本のものか」
「とはいっても書かれているのはギリシア語だ」
聖域はギリシアにあるからこれは当然のことだった。
「それでいいな」
「構わん」
それでいいと答えるミスティだった。
「とりあえず気分転換が欲しい。だからな」
「そうか。では読むといい」
あらためてその本を彼に差し出すのだった。
「ゆっくりとな」
「悪いな。しかし今後だが」
「武漢に着いたらだな」
「そうだ。激しい戦いになるだろうな」
ミスティはこう予想していた。
「八大公もいれば狂闘士達もいる」
「先日のようなインプ達だけではなくな」
「所詮雑兵は雑兵だ」
ミスティはこうも言うのだった。
「やはり。狂闘士達とは比較にならない」
「その通りだ。それはな」
もうわかっていることだった。彼等にしろ聖域の雑兵達とは比較にならない強さだ。自分達に置き換えて考えてみれば答えは容易に出るものだった。

第二十八話　船の上にてその七

「何人いるかだがな、問題は」
「ドイツやアメリカでは九人だったが。八大公の下にな」
「では今回も九人か」
アルゴルはこう予想してきた。
「いるのは」
「おそらくな。八大公も入れれば十人だ」
「そして無数の雑兵達か」
「その通りだ。それだけの戦力だ」
ミスティはここまで冷徹なまでに落ち着いて述べたのだった。
「さて、それに対して我々は七人だ」
「アフロディーテ様を入れてな」
「そして雑兵もいない。戦力としてはこれだけだ」
「数のうえでは劣っているな」
「数の問題ではありません」
しかしここで不意に言葉を出してきた者がいた。
「そう、数では」
「アフロディーテ様」
それは彼であった。彼が安楽椅子から起き上がりまた言うのだった。
「数の問題ではないのですか」
「それでは」
「雑兵達は貴方達に任せます」
起き上がった彼はこう二人に告げてきた。
「そう、貴方達にです」
「いえ、そうは参りません」
「そうです。我々もまた」
だが二人は彼の言葉を受けようとはしない。強い声で己の考えを

示そうとする。
「それでは示しがつきません」
「聖闘士として」
「いえ、狂闘士達は常に私を狙ってきます」
アフロディーテはこのことをわかっているかのようだった。
「この私を」
「アフロディーテ様をですか」
「その通りです。私をです」
彼はまた言った。
「デスマスクやシュラと同じく」
「あの方々と同じですか」
「アフロディーテ様を狙ってくると」
「その通りです。私に対してです」
アフロディーテの言葉が続く。
「必ず来ます。ですから私が彼等の相手をします」
「左様ですか」
「だからこそですか」
「狂闘士達だけではありません」
しかしアフロディーテはまだ言うのだった。
「雑兵達に対してもです」
「インプ達に対してもですか」
「そうです。彼等であっても」
黄金聖闘士としての言葉が続く。
「私に向かって来るのなら相手をしましょう」
「ではそれでは」
「アフロディーテ様はあくまで」
「はい、そうです」
答える言葉ははっきりとしていた。
「私に向かって来るのなら必ず退けてみせましょう。それだけです」

そこまで話すとまた安楽椅子に身体を伏せた。そうしてそのうえでまた休むのだった。そのうえで眠りにも入る。しかしそれで終わりではなくアルゴルとミスティはさらに話すのだった。

「中々お話する機会がなかったが」

「うむ」

彼等はアフロディーテの話を聞いてからまた言葉を交えさせるのだった。

「アフロディーテ様もまた」

「毅然とされた方だな」

「そうだな」

二人で言い合うのだった。

第二十八話　船の上にてその八

「お顔に似合わずその御心には武がある」
「やはり。聖闘士ということか」
「そうだな。デスマスク様やシュラ様と同じく」
「聖闘士であられる」
またこのことを話すのだった。
「そして最強の黄金聖闘士であられる」
「そうだな。ではこの度の戦いもだ」
「激しい戦いになる」
まずこのことは察知していた。
「我々も含めてな」
「そしてその中心におられるのはアフロディーテ様だな」
「あの方以外におられぬ」
その圧倒的な強さは既に見た。ロイヤルデモンローズでインプ達を一掃したその時にだ。その時にこそ彼の真の強さを見たのである。
「黄金聖闘士。聖域の象徴にして切り札」
「その強さは尋常ではない」
「その通りだ」
ミスティはアルゴルの言葉に対して頷く。
「教皇はそれを知っておられてその為にアフロディーテ様を」
「送られたのだな。我等以外に」
「この戦い、おそらくはだ」
ミスティはまたアルゴルに話す。
「黄金聖闘士がその中心になっていくだろうな」
「あの方々がか」
「この武漢ではアフロディーテ様がだ」
まずは彼であった。
「そしてトラキアもまた八大公をそれぞれ出してくる」

「あちらにとっては八大公がその切り札か」
「うむ」
彼等はまた話していく。
「そこに我等が入る余地はない」
「そうだ。我々はだ」
彼等自身についても話す。
「あの方の闘いに入る余地はない」
「そうだな。我々にはな」
そのこともよくわかっていた。そうして眠っているアフロディーテを見るのだった。
「あの方にはあの方の闘いがある」
「うむ」
「そして我等はだ」
今度はアルゴルが話すのだった。
「我々は我々の闘いを果たす。よいな」
「そうだな。それではな」
「そのようにな」
二人で話す彼等だった。そうしてそのうえで頷き合いそうして。また顔をあげるのだった。
「この闘いを進めていこう」
「我等の責務を果たしてな」
彼等もまたこの闘いでの自分達のあり方を確認するのだった。そのうえで敵が待つ武漢に向かう。そこを決戦の地と見定め。そのうえで向かうのだった。

第二十八話　　完

２００９・５・２

第二十九話　アフロディーテの闘志その一

アフロディーテの闘志

この時シオンはまたしても教皇の間において黄金聖闘士と会っていた。しかし今彼の前にいるのはアイオロスのみで彼だけが片膝をつき教皇の前に控えていた。

「ではアイオロスよ」

「はい」

「御前も感じたのだな」

「その通りです」

アイオロスはまずシオンに告げた。

「何か四つ、禍々しい小宇宙がを感じます」

「小宇宙をだな」

「八大公のそれよりも遥かに強大です」

アイオロスはまた言う。

「そして禍々しく」

「そうだな。尋常な小宇宙ではない」

シオンもまた話すのだった。

「あの四つの小宇宙は」

「エリス程ではありませんがそれに匹敵します」

「そこに答えがある」

シオンは今のアイオロスの言葉に対して話してきた。

「そこにな」

「といいますと」

「そうだ。戦皇アーレスには妹であり時として己のかわりを務めるエリスの他に四柱の神々が存在しているのだ」

「四柱のですか」

「そうだ。彼等がいる」

こうアイオロスに話すのだった。

「おそらくは彼等だな」
「アーレスに仕える四柱の神々がですか」
「冥皇ハーデスの側近であるタナトスとヒュプノス程ではないが」
どちらもこれまでの聖戦において聖闘士達を苦しめ抜いた相手である。先の聖戦においては教皇セージとその兄祭壇座の白銀聖闘士ハクレイ、それにキャンサーのマニゴルド及びカプリコーンのエルシドを彼等とヒュプノス配下の四神との戦いで失っている。聖域にとっては痛恨の痛手となった戦いであった。
「彼等もまた神だ」
「ではやはりその力は」
「そうだ。かなりのものだ」
また告げるのだった。
「その彼等が出て来るのか」
「御言葉ですが教皇」
アイオロスはここで顔をあげシオンに対して声をかけてきた。
「一つ御聞きして宜しいでしょうか」
「うむ」
シオンもまたそれをよしとするのだった。
「よい。言ってみよ」
「その四柱の神々とは一体」
「火、炎、災難、恐怖」
ここでシオンはこの四つの言葉を出してきた。
「これは知っているな」
「アーレスの下にあるそれぞれの軍団ですね」
アイオロスにもそれが何かすぐにわかった。
「そしてそれぞれの軍団を八大公が率いる」
「その四つの軍団及びそこにいる狂闘士達を操る者達だ」
「それが彼等ですか」
「四闘神」
シオンはここで言った。

「それが彼等だ」
「それがですか」
「そうだ。その四闘神が出て来ようとしているようだな」
「では教皇」
アイオロスはまたシオンに対して言ってきた。
「彼等が出て来るとなると」
「聖戦はさらに激しいものとなる」
シオンの言葉は厳しい響きのものになった。
「これまで以上にな」
「左様ですか」
「だがアイオロスよ」
しかしここでシオンは絶望を食い止めるようにして彼に対して言ってきた。
「一つ言っておくことがある」
「何でしょうか」
アイオロスは今のシオンの言葉を聞いてまた顔をあげた。

第二十九話　アフロディーテの闘志その二

「それは。一体」
「冥皇ハーデスとの戦いにおいても我等は確かにタナトスとヒュプノスに対して苦戦した」
「はい」
多くの犠牲を払ったうえでようやく封印した。これは言われている通りである。
「しかし封印することができた」
「それでもですか」
「そしてだ」
彼はさらに言うのだった。
「御前達はこの聖戦では死なない」
「この聖戦では？」
「このことは。多くの者には言えぬ」
そうした縛りが加えられる言葉であった。
「決してな。御前とサガ」
「はい」
「そしてシャカにだけ言える。いや」
ふとここで言葉を変えてきた。
「シャカのことだ。もう知っているのかもな」
「シャカはですか」
「そうだ。運命はこの戦いで御前達を死なせはしない」
シオンはまたアイオロスに対して告げてきた。
「決してな」
「決して、ですか」
「死ぬのは先のことになる」
彼はまた告げてきた。
「御前達は一つになり死ぬ」

「一つになり、ですか」
「その通りだ。若き者達の光となりな」
「それは光栄の極み」
アイオロスは今のシオンの言葉を最後まで聞いてそのうえで微笑んでみせた。
「それにより世界が救われるならこれ以上の喜びはありません」
「そうか。そう言ってくれるか」
「私は聖闘士です」
言葉の根拠はこれであった。
「それ以外の何の理由がありましょうか」
「それにより死を受け入れるのだな」
「如何にも」
彼の言葉には迷いはなかった。
「このアイオロス、喜んでそれを受けましょう」
「このシオン、歴代の教皇の中でも」
シオンはアイオロスの今の言葉を聞いて静かに言ってきた。
「最も幸福な者だろう」
「最もですか」
「そうだ。かつて多くの素晴らしい仲間達を持ち」
先のハーデスとの聖戦のことである。
「そして今御前達と出会えたのだからな」
「有り難き御言葉」
「再びな」
「!?」
アイオロスは今のシオンの言葉を聞いてまたしても顔をあげた。
「再びとは」
「むっ、これはだ」
シオンは今の自分の失言に気付いて慌てて言葉を打ち消してきた。
「何でもない。気にするな」
「左様ですか」

「それよりも今の話だが」
そしてまた話を戻してきたのだった。
「よいな」
「他言無用とのことですね」
「白銀や青銅の者達には残念だが言ってもわからぬことだ」
この辺りは仕方がないとするシオンだった。
「しかしだ。黄金ともなるとだ」
「はい」
同じ黄金だからこそそれがわかることだった。
「そうはいきません」
「その通りだ。すぐに察しがつくことだ」
「だからこそですね」
「そうだ。言うことはない」
シオンの言葉は念押しに近いものになっていた。

第二十九話　アフロディーテの闘志その三

「決してな。よいな」
「わかりました。それでは」
「誰にも言う必要はない」
また言うのであった。
「サガやシャカは。もうわかっているだろうしな」
「既にですか」
「そして他の者達も」
彼等についてもここで言及してきた。
「やがて察する筈だ」
「左様ですか」
「もう気付いているのかもな」
そしてこうも思ったりもしたようである。
「既にな。何人かは」
「ムウ等はですか」
「他の者達もだ。セブンセンシズは何の為にあるか」
黄金聖闘士をして黄金聖闘士たらしめているものである。その光速の動きと共にこの第七の感覚により彼等は通常は到底感じることのできないものを感じ取ることができるのである。
「それを考えたならばだ」
「それも有り得るということですね」
「そうだ。充分に有り得る」
シオンはあらためて彼等のことを話した。
「それもな」
「ですがそれでも教皇」
アイオロスは彼の言葉を聞いたうえでまた言った。
「この話は」
「あの者達が知っていようといまいと話す必要はない」

「左様ですね」
答えとしてはそれしかないことであった。
「やはり」
「だからだ。覚えておいてもらいたいが他言は無用だ」
また念押しになっていたがそれでも言うシオンであった。
「よいな、それは」
「わかっております。肝に銘じて」
「御前ならば大丈夫な話だ」
アイオロスに対する信頼も見せる。
「このことはな。それに」
「戦いのこともですか」
「その通りだ。次はおそらく」
シオンはふと己の中のセブンセンシズを働かせた。それは黄金聖闘士達のそれと比べるとかなり大きいものであることは言うまでもない。
「出て来る八大公はモロクだろうな」
「モロクですか」
「そうだ。八大公随一の強力の持ち主だったか」
彼についても言及するのだった。
「モロクといえばな」
「ゲヘナの魔神だったでしょうか」
アイオロスもまたふと己の記憶を辿りそのうえでシオンに告げてきた。
「何万もの子供をその中に入れ焼き殺して食ったという」
「そうだ。そしてある書では強力の魔神とされている」
シオンはまた語った。それはミルトンの失楽園のことである。十七世紀前半のイギリスの詩人ミルトンが書いたこの作品は不朽の名作となっている。
「それが出て来るだろう」
「だからこそこちらはあの男をですか」

「そうだ、アルデバランだ」
彼だというのである。
「あの男に行ってもらう。どうだ」
「宜しいかと」
そしてアイオロスもそれに賛成し頷くのだった。
「あの男なら問題はないかと」
「そうだな。実はだ」
「はい」
「既に読んでそのうえで送り出しているのだ」
シオンは言った。
「こちらはな。八大公によってだ」
「そうだったのですか」
「最初から運命により決められていたのかも知れん」
そしてこんなことも言うシオンだった。
「この闘いの相手はな。若しかするとな」
「決められていたと」
「そうだ。まずデスマスクにはベルゼブブ」
まずはこの組み合わせであった。

第二十九話　アフロディーテの闘志その四

「そしてシュラにはベール」
「アフロディーテにはアスタロト」
「既に運命によって定められているのかも知れぬ」
シオンはこうも思っているようである。
「だが。私もまた選ばせてもらった」
「左様ですか」
「ベルゼブブは冥界にとりわけ縁の深い魔神だ」
シオンはそのことについても述べた。
「蝿は死者の魂の化身なのだからな」
「だからこそデスマスクをですか」
「あの男しかいない」
今度は断言であった。
「冥界の者を相手にするのはな」
「確かに。デスマスク、いえキャンサーの黄金聖闘士は常に聖闘士でありながら冥府とも深く関わってきました」
「うむ」
これは聖闘士としてはかなり異色である。異端であると言ってもいい。何故ならそこは他ならぬハーデス、冥皇の司る世界であるからだ。
「ならば。やはりベルゼブブの相手となると」
「あの男しかいないのだ。やはりな」
「その通りです」
「そしてだ」
シオンの言葉は続く。
「ベールは魔神きっての剣の使い手」
「だからこそシュラですね」
「シュラでなければ闘える相手ではない」

こうまで言うのだった。
「あの者もな」
「だからこそシュラをでしたか」
「アスタロトについても同じだ」
彼についてもなのだった。
「あの男はだ」
「確か魔神の中で最も冷酷な者だとか」
アイオロスは既にこのことを知っていた。
「残忍だとも聞いております」
「あの男はおそらく残忍ではない」
シオンはそれについてはそうではないと言うのだった。
「あくまで冷酷だ」
「冷酷なのですか」
「冷徹と言うべきか。全ての存在を駒として扱える男だ」
「駒！？」
「そう、駒だ」
シオンはさらに言う。
「駒として扱う男なのだ」
「といいますと」
「己を含めて勝利の為なら捨てることができる」
シオンはこう彼について評するのだった。
「それがあのアスタロトなのだ」
「あくまで冷徹にですか」
「それだけアーレスへの忠誠心が強いということでもある」
言葉を裏返しにすれば、ということだった。
「それだけな」
「その者がアフロディーテの相手ですか」
「アフロディーテに相応しいとも言える」
「そうなのですか？」
これには疑問を呈するアイオロスだった。

「アフロディーテは」
「あの男は変わらん」
こう言うシオンだった。
「いざとなれば凄まじいまでの闘志を見せる。そういう男だ」
「アフロディーテがですか」
「あの者は己を語ることはない。しかしそこにあるのは確かなものだ」
「闘志がですか」
「アスタロトの冷徹さに勝てるのはあの男の熱さだ」
シオンはあくまでアフロディーテの熱さについて述べる。
「必ずな。やってくれる筈だ」
「では教皇」
アイオロスは述べるのだった。
「アフロディーテならばですか」
「そうだ。任せておいてよい」
また言うシオンだった。
「アフロディーテとサガにな」
「わかりました。それでは私はこれで」
「御前は今から次の戦いの準備をしておくのだ」
そうしてアイオロスに対して告げた。

第二十九話　アフロディーテの闘志その五

「アルデバランのフォローの為にな」
「はい」
こうしてアイオロスは一礼してからそのうえでその場を後にした。
そうしてシオンは一人になるがここでまた言うのだった。
「アフロディーテ。アルバフィカの時と同じならばだ」
またここで彼が知っている名前を出した。
「その熱さ。見せてもらうぞ」
こう言いアフロディーテの戦いについて思いを馳せるのだった。
そこにあるものを見ているようであった。
アフロディーテは舟で武漢に向かっていた。その時に周りの聖闘士達が相変わらず適当に舟の旅を楽しみながら過ごしていた。その中でであった。
「何か退屈ですけれどね」
「それでも狂闘士の奴等いるんですよね」
「やっぱり」
青銅の者達は甲板で中国将棋をしていた。それをしながらアフロディーテに対して尋ねていた。
「そうですよね」
「武漢に行ったら」
「今更何を言っている」
ミスティはアルゴルとポーカーをしていたがその中で彼等に対して言うのだった。
「二日前に雑兵達に囲まれたな」
「忘れたわけではあるまい」
アルゴルも彼等に対して言う。
「あの時のことは」
「忘れたのか？」

「いえ、勿論覚えていますよ」
「それはもう」
忘れている筈がなかった。それは。
「ですけれどね。何かこんな平和なことが続けば」
「いい加減だれてきません？」
「そうそう。平和に越したことはないですけれど」
「今は何かね」
こんなことを言いながら将棋を続ける。本当にかなり緊張が緩んでいた。
「舟でゆったりしてますから」
「そうそう、まあたまにはこんなのもいいですけれど」
「そうやってたるんでいるとどうなっても知らないぞ」
「急に狂闘士達が来るぞ」
また言う白銀の者達だった。その穏やかな中でアフロディーテがふと起き上がった。
「あっ、アフロディーテ様」
「どうされました？」
「来ます」
起き上がった彼の声は鋭いものだった。
「またあの者達が」
「っていいますとやっぱり」
「連中ですか」
「その通りです。来ます」
その言葉と共にであった。またあの小舟達が来た。
「げっ、また来やがった！」
「何時の間に！？」
「ふふふ、アテナの聖闘士達よ覚悟はいいな」
「先に倒された仲間達の仇取らせてもらうぞ」
「ふざけるな、そうそう上手くいくか！」
「俺達が御前等雑兵に負けるか！」

既に聖闘士達は聖衣を装備していた。何時でも闘える状態になっている。
「何時でもな。やらせるか！」
「今度は俺達が御前等を倒す！」
そしてこうも言うのだった。
「覚悟しやがれ！」
「このシオンの拳見せてやる！」
「いえ、案ずることはありません」
しかしここでまたアフロディーテの声がした。
「私が行きましょう。また」
「えっ、アフロディーテ様」
「今度ばかりは我々が」
彼等は黄金聖衣を着たアフロディーテを見て言う。流石に今度ばかりは彼等も闘わなくては申し訳がないと思ったのである。
「ですからお気遣いなく」
「どうか」
「いえ、そういうわけにはいきません」
しかし彼はこう言って彼等の言葉を退けるのだった。右手に薔薇を持ち。
「ここは是非闘わせてもらいます」
「是非ですか」
「はい、是非共」
あくまでこう言うのだった。
「私にやらせてもらいます」
「そうですか。それでは」
「そこまで仰るのなら」
彼等も黄金聖闘士がそこまで言うのなら従うしかなかった。黄金聖闘士の言葉は聖域においては教皇のそれに次ぐものであるからだ。
「我等はこれで」
「アフロディーテ様、どうぞ」

「はい。それでは」
アフロディーテは悠然と立っていた。その彼を囲むようにしてインプ達は剣呑な笑みを浮かべてきていた。
「ピスケスか。先のことは知っているからな」
「そうだ。仲間達の仇」
その剣呑な顔で言ってきた。
「ここで取らせてもらう」
「覚悟はいいな」
「覚悟ですか」
アフロディーテは彼等の言葉を聞きながら静かにその言葉を出してきた。
「確かに覚悟はできています」
「とはいっても死ぬ覚悟ではないな」
「違うか？」
「如何にも」
それではない、最早インプ達にもわかっていることだった。
「それは有り得ません。私にある覚悟とは」
「何だ？それは」
「言ったところで貴様を倒すことには変わりはないがな」
「戦う覚悟」
彼の言う覚悟とはそれであったのだ。
「それはできています」
「やはりな。ならばだ」
「その覚悟をそのままにして死ね」
三叉の槍をそれぞれ手にしての言葉だった。
「何度も言うが仲間の仇」
「ここで取らせてもらおう」
またアフロディーテとインプ達の闘いがはじまろうとしていた。
そうしてその中で彼等は舟の上でそれぞれ対峙し激しい小宇宙を見せていた。

第二十九話　完

2009・5・6

第三十話　黒薔薇の香りその一

黒薔薇の香り

アフロディーテは己の船の船首に立っていた。そうしてそこから船を完全に取り囲んでいるインプ達の夥しい数の舟と対峙していた。
「ピスケスよ、今度は仕掛けていないようだな」
「あの紅い薔薇は」
「ロイヤルデモンローズのことですか」
アフロディーテもまたその紅薔薇という言葉だけでわかった。
「あの薔薇のことですね」
「そうだ。あの薔薇のことは聞いている」
「その恐ろしさもだ」
彼等はそれは既に知っているのだった。仲間達の犠牲によって。
「それにより確かに多くの仲間を失った」
「しかし。それでもだ」
「今はその紅薔薇はない」
そこに勝機を見ているようであった。
「ならば幾ら貴様とてだ」
「この数の我等を前にして勝てる筈がない」
「馬鹿か、こいつ等」
しかしそれを聞いたシオンが言った。
「幾ら何でも雑兵が束になってかかっても黄金聖闘士に勝てる筈がないだろ」
「だよな、確かに」
「その通りだけれどな」
シオンの今の言葉にワルターとラシャーが頷く。
「こいつ等ひょっとしてそれもわかってないんじゃないのか？」
「だとしたら相当な馬鹿なんだがな」
「だが馬鹿は馬鹿でもな」

ペテルも言ってきた。
「ここまで勇猛なのはある意味凄いな」
「確かにな。うちの雑兵達よりも凄いかもな」
「全くだ」
そんな話をしながら見ていた。そしてその間にもインプ達は間合いを詰めんとしてきた。やはりアフロディーテが紅薔薇を出していないのを見て勝てる可能性を感じているようだった。
「ではピスケスよ」
「死ぬのだ、せめて苦しまないようにしてやる」
今にもそれぞれの舟から飛び上がり襲わんばかりであった。
「血は流させてもらうがな」
「それでもだ」
「私は紅薔薇を出していなくとも」
しかしここでアフロディーテは彼等に告げてきた。
「だからといって恐れることはありません」
「何っ、死を恐れていないとでもいうのか!?」
「まさかと思うが」
「死は最初から恐れてはいません」
このことはそのまま答えてみせた。
「ですが」
「ですが?」
「それだけではありません。私の薔薇は」
「何っ!?」
今声をあげたのはインプ達だけではない。聖闘士達もだ。
「紅薔薇だけではないというのか?」
「まさかとは思うが」
「いえ、そのまさかです」
しかし彼は悠然としたままでまた告げてきた。
「そう、私の薔薇は」
「!?そういえばだ」

ここでミスティはふと声を出してきた。
「聞いたことがある」
「ミスティ、何をだ？」
アルゴルがその彼に問うてきた。
「何かあるのか？」
「うむ、確かにピスケスの黄金聖闘士は紅薔薇を使う」
「教皇の間までのあの薔薇の園だな」
「そうだ。あれは教皇の間までの最後の護り」
だからこそピスケスの黄金聖闘士は黄金聖闘士達の中でもとりわけ重要な存在だとも言われるのである。最後の護りとしてだ。
「それは確かに紅の薔薇だ」
「そうだな。それは聖域では誰もが知っていることだ」
「しかしだ。ピスケスの黄金聖闘士が操る薔薇はそれだけではない」
彼はまた言うのだった。

第三十話　黒薔薇の香りその二

「先の聖戦でのピスケスの黄金聖闘士はだ」
「確かアルバフィカ様だったか」
遥かな過去の黄金聖闘士だがそれでも尊称なのだった。
「確か」
「そうだ。そのアルバフィカ様だが」
ミスティは語るのだった。
「紅薔薇とその他にも薔薇を使っておられた」
「他の薔薇もか」
「そう。そして」
ミスティはさらに語っていく。
「その薔薇の色は」
アフロディーテがここで静かに手を動かしてきた。そうして出してきたものは。
紅薔薇ではなかった。黒い何処か闇を思わせる、その薔薇だったのだ。
「何っ、それは」
「黒薔薇か！？」
「如何にも」
アフロディーテはインプ達の言葉に対してここでも静かに述べてきた。
「これは黒薔薇です」
「そうだな、黒薔薇だな」
「確かにな」
それは彼等もよく認識できた。
「しかしその薔薇は何だ？」
「一体何なのだ？」
「紅薔薇は穏やかな死をもたらすもの」

アフロディーテはその薔薇をゆっくりとたずさえながら彼等に告げる。
「しかしこの黒薔薇は」
「何だというのだ？」
「速やかな死をもたらすもの」
こう告げるのだった。
「そう、この花びらによって」
「何っ、黒薔薇が散った！？」
アフロディーテが持っていたその黒薔薇が散っていった。そうして無数の花びらが宙に舞いだした。その黒薔薇の花びらがであった。
「まさか。ここで」
「技が放たれるというのか」
「如何にも。そしてこの技は」
アフロディーテは言う。
「ピラニアンローズ！」
「なっ、何っ！？」
「身体が！」
インプ達は突如として崩れ落ちたのだった。
「う、動かん・・・・・・」
「これが速やかな死というのか」
「そうです。これこそがピラニアンローズの力」
崩れ落ちていく彼等に対して告げるのだった。
「苦しまず。死になさい」
「紅薔薇だけでなく黒薔薇まで操るとは」
「しかもこれ程までの力とは」
彼等は崩れ落ち朦朧とする意識の中で最後に呟く。
「ピスケスのアフロディーテ」
「何という恐ろしい男だ・・・・・・」
こう言い残して倒れていくのだった。アフロディーテはそうした彼等を見送りつつ述べた。

「安らかに眠るのです。そのまま」
「それが黒薔薇ですか」
「今の技が」
ここでミスティトアルゴルがアフロディーテに対して声をかけてきた。今しがた技を放ち闘いを終えた彼に対して。
「ピラニアンローズというのですか」
「そうです。今のがピラニアンローズです」
彼はまた述べた。
「ロイヤルデモンローズとはまた対極に位置する技です」
「紅薔薇とは対極の」
「今の技が」
「そうです。この技を闘いに使ったことはここではじめてです」
そしてこうも言うのだった。

第三十話　黒薔薇の香りその三

「できれば。紅薔薇で済ませたかったのですが」
「では何故」
「あえて紅薔薇を使わずにそれを」
「考えあってのことです」
ここでは目を閉じ静かに述べるのだった。
「私なりに」
「お考えがですか」
「それにより」
「そうです。さて、先を急ぎましょう」
闘いを終えたならばもうここに留まっている理由はないということだった。
「武漢に。彼等が待つ武漢に」
「ええ、そうですね」
「それじゃあ」
シオンとラシャーがそれに応える。
「先を急ぎましょうか」
「敵は待ってくれないですしね」
「じゃあアフロディーテ様」
「出発しますね」
今度はワルターとペテルが言ってきた。
「俺達が操縦しますんで」
「早いうちに」
「はい、御願いします」
アフロディーテも彼等に対して頼むのだった。
「それで」
「では出発しましょう」
ミスティが最後に言いそうして向かった。アフロディーテはまた

しても彼等を退けた。そうしてそのうえで武漢へと船を進めていくのだった。

その頃武漢近辺の山の上で。またミシェイルを囲んで彼等がいた。

そうして彼に対して報告していた。

「そうか、今度はか」

「はい、黒薔薇です」

「それを使いました」

彼に早速ピラニアンローズのことを話していた。

「技の名前はピラニアンローズといいます」

「それでインプ達を一瞬のうちに」

「今度は速やかな死だな」

ミシェイルはそのことも確かめるのだった。

「ロイヤルデモンローズとはまた違い」

「はい、その通りです」

また一人が彼に答える。

「まさに一瞬でした」

「そうか。一瞬か」

「ロイヤルデモンローズが穏やかな死を迎えるのと正反対に」

「黒薔薇の花びらが舞ったかと思うと」

「わかった」

ミシェイルはそこまで聞いたうえで頷くのだった。

「次の技はそれか。黒薔薇か」

「これでピスケスの技は二つですね」

また別の一人が言った。

「紅薔薇と黒薔薇」

「その二つですか」

「いや」

「その二つだけとは限らない」

「といいますと」

周りの者達は今の彼の言葉に対して問うた。

「まだあるのだと」
「そう仰るのですね」
「そうだ。まだある可能性がある」
彼は言うのだった。
「黄金聖闘士は多くの技を持っているのが普通だ」
「そうですね。キャンサーやカプリコーンを見ていると」
一人がそこに気付いた。
「多くの技を持っていて普通です」
「それを考えれば」
「そうだ。まだあると考えるのが自然だ」
ミシェイルは言う。
「あの男ならばな」
「それではミシェイル様、ここは」
「どうされますか？」
「ピスケスも愚かではない」
彼はこのことも読んでいた。

第三十話　黒薔薇の香りその四

「仮にも黄金聖闘士だ。愚かで務まるものではない」
「ではどうされますか？今度は」
「またインプ達をでしょうか」
「いや、インプ達を送るのは止めだ」
それはこれで止めておくとするのだった。
「彼等はこれからの為に置いておく」
「これからといいますとこの武漢での戦いに備えてですね」
「ここでの戦いに備えて」
「そうだ。だからこそ置いておく」
彼は言うのだった。
「彼等はな。それに他の聖闘士達もいる」
「ああ、白銀や青銅の者達ですか」
「あの者達ですね」
彼等はここではじめて白銀や青銅の者達についても考えるのだった。
「そういえばあの者達もいました」
「彼等も」
「確かに黄金聖闘士と比べればその力は微々たるものだ」
確かにその実力は黄金聖闘士と比べるとかなり落ちる。しかしそれでもその実力はかなりのものだ。少なくとも彼等もまた聖闘士なのだ。
「あの者達に戦力を割く必要がある」
「ですがミシェイル様」
「確かに黄金聖闘士以外の聖闘士は我々の敵ではありません」
狂闘士の実力は公子であっても白銀聖闘士よりも遥かに上なのだ。
このことは先にあった彼等と聖域の聖戦でもはっきりしていることだ。

「ですがそれでも雑兵は雑兵です」
「聖闘士の相手は」
「わかっている」
ミシェイルはここでも冷徹に述べた。表情も変わらない。
「所詮は足止めに過ぎない」
「足止めですか」
「しかしだ。あの者達が他の聖闘士達を足止めしている間に我々でピスケスを倒す」
「我々でですか」
「我等十人で」
「そうだ。ジェミニも来るならば彼にも戦力を割く」
このことも計算に入れているのだった。
「しかしだ。優先させるのはピスケスだ」
「ピスケスですか」
「そうだ。ピスケスに戦力を優先させ先に倒しそのうえでジェミニだ」
アフロディーテを先に倒すというのだった。サガよりも先にだ。
「ジェミニの強さは圧倒的だ。まずは四人で足止めをし」
「はい」
「それでですね」
「そうだ。残る五人と私でピスケスを倒す」
これが彼の考えであった。
「六人でピスケスを倒しそのうえでジェミニを十人で倒し」
「そうしてその後で」
「最後の聖闘士達を倒す」
こう順番をつけていたのだ。彼は何処まで冷静に戦略を立てていた。そうしてそのうえで戦いを考えているのだった。
「これでどうだ」
「そうですね。それで宜しいかと」
「やはり黄金聖闘士を先に倒すべきです」

聖域の象徴である。それをまず倒そうというのは妥当であった。
「ですからここは是非」
「まずはピスケスを」
「うむ。ではそうしていく」
彼も考えを決定させた。

第三十話　黒薔薇の香りその五

「ドイツでもアメリカでも我々は敗れている」
「はい、無念ながら」
「多くの同志達を失っております」
周りの声が無念に満ちたものになる。
「この怨み、是非ここで晴らしましょう」
「何としても」
「それではだ。予定通り進める」
「はい」
「それでは」
「しかしだ。一つ言っておく」
ミシェイルの言葉はここでも鋭いものであった。
「ピスケスの薔薇には注意するのだ」
「薔薇ですか」
「紅薔薇と黒薔薇がまずある」
まずはその二つの薔薇だった。
「どちらも無数のインプ達を瞬く間に殲滅する程恐ろしいものなのを忘れるな」
「どちらもですね、確かに」
「あの威力は恐ろしいものがあります」
「そして間違いなく他にも薔薇がある」
それはもうあるのが前提での話だった。
「それを出してくることが考えられる。注意しておくことだ」
「それですがアフロディーテ様」
九人のうちの一人が名乗り出て来た。
「ピスケスのその毒ですが」
「うむ。御前が対するというのだな」
「はい、毒ならばお任せ下さい」

彼はこう言うのだった。
「私に。是非共」
「そうだな。毒ならば確かに御前だ」
ミシェイルもまた彼の言葉を受けて頷いていた。
「貴様ならばできる。間違いなくな」
「少なくともその浸透を遅らせることができます」
彼はまた述べる。
「それも確実に」
「そうしてその間にピスケスを倒す」
その毒の進行を遅らせている間にということだった。
「それでいくぞ」
「わかりました。それでは」
「我々もそのように」
「ピスケスのアフロディーテ」
ミシェイルは最後にアフロディーテの名前まで告げた。
「必ず倒す。何があろうとも」
「そうです。ここで必ず」
「あの男を倒しましょう」
周りの者達も彼の言葉に応える。
「アーレス様の為にも」
「アーレス様は必ず降臨される」
ミシェイルの言葉はこれまでになく強いものであった。
「そしてその時にこそだ」
「我等の時代がはじまります。左様ですね」
「その通りだ。我等はアーレス様の為の忠実なる僕」
このことも確認するのだった。
「その為にだ。わかってるな」
「はい、それでは」
「その通り」
「武漢で戦いとなる」

それは既に決まっていることであった。彼等はそれを意識しながら聖闘士達を待ち受けていた。彼等もまた己の神に対して絶対の忠誠を持っておりそれにより戦いに向かうのだった。

第三十話　　完

２００９・５・９

第三十一話　武漢にてその一

武漢にて

アフロディーテ達は遂に武漢に着いた。しかしそこはごく普通の河の港町でありおかしなところは何もなかった。しかし勿論それで終わりではなかった。

「とりあえず小宇宙は感じませんね」

「隠れてるみたいですね」

ラシャーとワルターがまずそれを述べた。少し古さも感じられる港町は活気に満ちていた。しかしそこに行き交う人々にはおかしなところは何も見られなかった。

「どうやらこの中に」

「密かに」

「いえ、ここにはいません」

だがアフロディーテは警戒する顔で周囲を見回す彼等に対して告げるのだった。

「彼等はここには」

「いないのですか？」

「街には」

「はい、いません」

今度はペテルとシオンに対して告げた。

「武漢の街の中にはいません」

「といいますと」

「彼等がいる場所は」

彼の今の言葉にミスティとアルゴルが考える顔になって述べた。

「武漢の外に」

「そこにいるのですか」

「はい、そちらに感じています」

アフロディーテは白銀の者達に対しても答えた。

「そう、武漢の南西。黄鶴楼のさらに行った場所にです」
「というと湖がまだある場所に」
「そこにですか」
「そうです、そこに感じます」
彼はまた言ったのだった。
「そこに彼等がいます」
「ではそこに向かいましょう」
「すぐに」
六人はすぐさまそこに向かうことを提案した。
「戦いは迅速にいくべきです。ですから」
「行きましょう」
「それはその通りです」
アフロディーテも彼等の言葉を受けて頷いた。
「ですが。警戒することです」
「策をですか」
「そうです。何といっても相手は狂闘士」
まずは彼等のことを警戒するように話した。
「何をしてくるかわかりません」
「そうですね。それは確かに」
「しかも今いる八大公は」
その八大公が誰なのかも問題なのだった。それは。
「アスタロトのミシェイル」
「八大公、いえ狂闘士の中で最も冷徹な男が」
「その彼がいます」
アフロディーテは彼を念頭に考えているのだった。
「彼が何をしてくるかが問題ですから」
「ですね。まさにその通りです」
「あの男が何をしてくるか」
「それに気をつけて進みましょう」
そうしてまた言うのだった。

「湖に」
「はい。それでは」
「警戒しながらそちらに」
こうして彼等はその湖に向かうのだった。彼等の動きは既に狂闘士達の目と耳に入っていた。ミシェイルは話を聞いたうえで静かに述べるのだった。
「そうか。来ているのだな」
「はい、ここに来ています」
「一直線に」
「予想通りだ」
彼等は今は湖のほとりにいた。湖は長江とは違い青い色を見せていた。その青い鏡に彼等の血塗られた赤い色が映っていた。全部で十あった。
「ここに来るとはな」
「そうですね。やはりここに来ています」
「一直線に」
「いいことだ。ならば予定通りここで戦う」
ミシェイルは湖を見ながら告げた。その青い湖をだ。

第三十一話　武漢にてその二

「この湖でな」
「ではミシェイル様、ここで我等も」
「そして残っているインプ達も」
「そうだ。決戦だ」
彼は言うのだった。
「この湖でな」
「しかしここで戦うには」
狂闘士のうちの一人が怪訝な声で言ってきた。
「いささか地の利がありませんが」
「そうです。水で戦うには向こうも不得手ですが」
別の狂闘士も語る。
「こちらもです。何かと制約があります」
「しかもそれは意味のないものです」
そのことも話されるのだった。
「ですからここで戦うとすると」
「効果的な戦いはできないものと思われますが」
「案ずることはない」
だがミシェイルの言葉は冷静なままであった。そこには微動だにしないものがあった。
「それはな。案ずることはないのだ」
「ではやはりお考えがあるのですね」
「ここでも」
「考えがなくして戦いの場を選ぶことはない」
ミシェイルの言葉は変わらない。全てを計算している、そうした言葉だった。
「少なくともこのミシェイルはな」
「そうですね。それではここは」

「ミシェイル様の考えられるままに」
「全て任せておくのだ」
言葉はそのままだった。
「このアスタロトのミシェイルにな」
「畏まりました」
九人全てが中心にいるミシェイルに対して恭しく頭を垂れるのだった。そうしてそのうえで今聖闘士達を待ち受けていた。決戦を。
その彼等が来た場所は周りが緑の原に覆われているその青い湖のほとりだった。青い湖は何処までも澄んでおり草は緑の絨毯となっていた。しかしそこにあるのは清々しさではなかった。
「感じますね」
「もう隠す必要もないってことですね」
「その通りですね。ひしひしと感じます」
アフロディーテもそれは既に感じていた。聖闘士は皆聖衣をその身にまとっている。彼等もここが決戦の地とはっきりと認識している証拠である。
「今にも襲ってきかねないばかりのものを」
「来ますね、絶対に」
「もうすぐそこにいます」
アフロディーテはここでまた言った。
「彼等はもう」
「！？」
他の聖闘士は今の彼の言葉に顔色を一変させた。
「もうですか」
「ここにいるのですか」
「そうです、います」
アフロディーテは冷静に言葉を出す。しかしその小宇宙は既にかなりのものでありそれを周囲にもはっきりと向けているのだった。
「すぐそこに」
「というと今にも」

「出て来ると」
皆身構える。そしてここでであった。
「何っ、見ろ！」
ラシャーが叫ぶのだった。
「湖を！」
「何っ、水が！」
「凍っていくだと！」
ワルターとペテルもまた叫んでしまった。何と彼等の右手に広がっている湖の水が瞬く間に凍っていったのである。そう、一瞬にであった。
「凍った、まさかこれは」
シオンはその凍ってしまった湖を見ながら呆然としつつ言葉を出す。
「狂闘士の仕業か」
「だが。これだけの湖が凍るとなると」
「しかもこの氷はかなりの厚さだ」
ミスティトアルゴルもそれぞれその湖を見て言う。

第三十一話　武漢にてその三

「狂闘士の中でもかなりの小宇宙の持ち主」
「だとするとやはり」
「そうだ。その通りだ」
その氷の上から声がした。すると凍りついた湖の上にその男がいた。禍々しい赤い鎧に身を包んだ彼がそこにいるのだった。
「私が凍らせた。この湖はな」
「まさか貴様は」
「間違いない、この凄まじいまでの小宇宙は」
聖闘士はその桁外れの小宇宙からわかったのだった。今目の前に姿を現わしたその禍々しい小宇宙を放つその男が誰か。わかったのだ。
「狂闘士の中でも頂点に立つ」
「八大公か」
「如何にも」
彼は冷徹なまでに落ち着いた声で聖闘士達に告げた。
「我が名はアスタロト」
「アスタロト・・・・・やはりな」
「八大公の一人である」
「アスタロトのミシェイル。それが私の名だ」
この名を自ら名乗るのだった。
「私のな。アスタロトのミシェイルだ」
「貴様がここに一人で来たのか」
「我等の相手を一人でするつもりか」
「残念だがそのつもりはない」
彼等はそれも否定するのだった。
「私の相手はピスケス」
「私ですか」

「そうだ、貴様だ」
今度はアフロディーテを見据えての言葉だった。鋭くかつ冷たい氷の如き目で。
「貴様を倒すことが私の役目だからな」
「そうですか。それでは」
「しかしだ。私だけではない」
ここでミシェイルの言葉の調子が変わってきた。
「私だけではない。それも言っておく」
「といいますとやはり」
「そうだ、出て来るのだ」
ミシェイルは湖の真ん中から呼び掛けた。
「我が同志達よ、ここに」
「はっ、ミシェイル様！」
「ここに！」
ミシェイルの言葉に応え一斉に姿を現わすのだった。インプ達が既に湖を、そして聖闘士達を完全に取り囲みそのうえで構えを取っていた。
「仲間達の仇、ここで」
「取らせて頂きます」
「御前達はピスケス以外の聖闘士の相手をするのだ」
ミシェイルは彼等にはこう命じた。
「よいな。他の者のだ」
「はい、わかりました」
「それでは」
彼等もその言葉を受けて頷く。そしてそれに静かに頷き動きだしてきていた。
「来たな」
「へっ、雑兵が俺達の相手かよ」
青銅の面々はまずは自分達の相手を見て声をあげた。
「まあ相手の質じゃなくて数を考えたらな」

「それでいいか」
「それではアフロディーテ様」
「雑兵達は我等が」
ミスティトアルゴルもその動きだしたインプ達を見てアフロディーテに対して告げてきた。
「アフロディーテ様はアスタロトに専念して下さい」
「ここは我等にお任せ下さい」
「それでは。頼みました」
アフロディーテもまた彼等の言葉を受けて頷くのだった。
「私は彼等の相手をしますので」
「彼等！？」
「ではまさかまだ狂闘士達がここに」
「そうです。ここに来ています」
彼はそれも既に察しているのだった。

第三十一話　武漢にてその四

「まだ姿は見えませんが」
「そうですか。ではその者達の相手は我々が」
「雑兵達は青銅の者達に任せますので」
「いえ、それはなりません」
だがアフロディーテはそれは断るのだった。しかもそこには強いものもあった。
「雑兵達も決して侮れない数と強さです。ですから」
「我々はそちらにですか？」
「ですがそれではアフロディーテ様は」
狂闘士達を一人で相手にすることになる。それを心配しているのである。
「構いません。私は一人で闘えますので」
「そうですか。そこまで仰るのなら」
「我々としましてはそれで」
彼等はこれで引き下がるのだった。やはり黄金聖闘士の言葉は彼等にとって絶対ということだった。
こうして六人の白銀及び青銅の聖闘士達がインプの大軍に対して向かう。皆それぞれまずは高々と跳びそのうえで向かうのだった。
「よし、手前等の相手は俺達だ！」
「覚悟しやがれ！」
「倒してやるからな！」
彼等はそれぞれインプ達に向かう。彼等の闘いもまたはじまったのだった。
そしてアフロディーテは十人の狂闘士達と対峙している。一人であっても臆するところは全く見られなかった。その小宇宙は強さを増す一方ですらあった。
「さて、それではです」

「何だ？」
「貴方達の名前を聞いておきたいのですが」
アフロディーテが彼等に問うのはこのことだった。
「それは宜しいでしょうか」
「ふむ。よかろう」
彼等の中の一人が応えてきた。
「それではだ。まずは私が名乗る」
「その貴方は？」
「公爵、バシンのセーバー」
鋭い目をした隻眼の男だった。右目に眼帯がある。
「同じく公爵、ヴィネのジュリア」
女だった。流麗な顔をしており目は湖の色だ。だがその唇が禍々しく紅く見えていた。
「侯爵ガミギンのナロン」
大男だった。しかも髪が黄金に波立っている。
「伯爵ビフロンズのガロ」
精悍な顔をした麻色の髪をした青年だった。
「同じく伯爵フールフールのラフィン」
赤い目をしたやや小柄な男である。
「子爵、ハゲンティのバーツ」
牛を思わせる小山の如き男だった。
「男爵、ヴァッサゴのラケル」
小柄だが鋭利な少女だった。
「公子、ベレスのノートン」
大柄な少年だった。
「同じく公子フールカスのトムス」
スキンヘッドの男だ。合計九人の狂闘士達であった。
「我等がいる。九人の狂闘士達がだ」
「ピスケス、そして」
セーバーとジュリアがそれぞれ言うのだった。

「そこにいるジェミニ、貴様等もだ」
「倒してやる」
「ジェミニ。そうですか」
アフロディーテはジェミニと聞いて静かに頷くのみだった。
「サガ。来ているのですね」
「その通りだ。今来たばかりだ」
アフロディーテの後ろに今また一人の黄金の聖衣がいた。それは確かにサガだった。今彼もまた戦場に姿を現わしたのである。
「丁度いいタイミングだったか」
「私は一人でも充分なのですが」
「いや、そうはいかないだろう」
だがサガはそれは否定するのだった。
「御前は八大公の一人と闘わなくてはならない」
「それはその通りですが」
「それならだ。私も協力させてもらう」
教皇であるシオンの言葉を忠実に守っているのだった。

第三十一話　武漢にてその五

「彼等の相手をな」
「十人を一度に相手にすることも可能ですが」
「案外強情だな」
サガはあくまで自分一人で闘おうとするアフロディーテを前にして思わず苦笑いを浮かべた。
「外見に似合わずな」
「外見。それだけではありません」
彼の言葉は変わらない。
「私が求めるものは」
「求めるものか」
「その通りです。今それを確かに見せましょう」
アフロディーテの小宇宙がこれまでになく高まってきた。
「貴方に対して」
「ピスケス。貴様の心は見た」
ここでミシェイルが彼等の間に入るように言ってきた。
「それはな。しかしこちらにも作戦がある」
「作戦ですか」
「そうだ。いいか」
彼はここで周りにいる九人の狂闘士達を一瞥してからまた述べた。
「五人はピスケスに向かえ」
「はい」
「それでは」
彼等はそれぞれミシェイルの言葉に対して頷く。そしてそのうえでアフロディーテを見る。見ながらその目は次第に鋭さを増してきていた。
「そして四人はだ」
「私にか」

「そうだ。ジェミニよ」
ミシェイルは今度はサガに対して言うのだった。
「貴様もまたここで死んでもらう」
「アフロディーテよ。聞いたな」
サガは彼の言葉を聞いてからそのうえでアフロディーテに対して告げた。
「私もまた相手に選ばれた」
「仕方ありませんね」
彼はその言葉を残念そうに受けた。しかしそれは確かに残念さはあっても受け入れるものだった。相反するものは同時に備わっている言葉だった。
「それでは貴方に四人でしたね」
「任せてもらおう」
「それでは私は」
小宇宙がさらに高まっている。
「貴方達を倒します」
「ピスケス、相手にとって不足はない」
「貴様を倒しその首をアーレス様の玉座の前に献上してみせよう」
「ミシェイル様」
彼等はアフロディーテを激しい殺意と敵意に満ちた目で見据えながらもミシェイルに対しても告げるのだった。
「まずは我等にお任せを」
「宜しいでしょうか」
「行くがいい」
そしてミシェイルはそれを認めるのだった。
「私も行くより勝利は確実なものになるだろうからな」
「はい、我々が若し敗れたとしても」
「ピスケスの技は確かになります」
これもまた彼等の狙いであるのだ。
「ですからここはです」

「まずは我等が」
「では行くのだ」
ミシェイルはまた彼等に命じた。
「そして闘え。貴様等の力の限りな」
「有り難き御言葉。それでは」
「我等の力、思う存分ここで」
「ピスケスよ。そういうことだ」
まずは五人、アフロディーテの前に出て来るのだった。
「最初は我等が相手だ。そして貴様にとって最後の相手だ」
「最後ですか」
「その通り。この我等の手で」
「倒してみせよう」
五人がアフロディーテの前に立ちそうして。今まさに闘いがはじまらんとしていた。
「アフロディーテよ」
「はい」
サガは既に四人の狂闘士達と対峙している。そうしてそのうえでアフロディーテに対して声をかけるのだった。彼もまた冷静な顔のままであった。
「御前の腕ならばだ」
「どうだというのですか？」
「安心していい」
こう彼に告げるのだった。
「安心してな。闘え」
「言われずともそのつもりです」
そしてアフロディーテの言葉は揺れ動くところのないものだった。
「私は。アテナの為に」
「アテナの為にか」
「この世で絶対の美の為に」
アテナこそそれだというのだ。

「勝利を収めますので」
「そうだな。では私もまた」
サガはここで己の前に立つ四人の狂闘士達を見据えた。
「闘おう。アテナの聖闘士として」
「サガ、貴方の美しさも見せてもらいます」
アフロディーテは静かに五人の狂闘士を見据えた。そうしてそのうえで。闘いに対して向かうのだった。

第三十一話　　完

２００９・５・１３

第三十二話　災難の軍団その一

災難の軍団

ミスティ達はインプ達と闘っていた。それは湖を取り囲むようにして広がっていた。

「ミスティよ」

「何だ？」

アルゴルはミスティと背中合わせになっていた。そのうえで彼に対して告げていた。

「私の方を見るな」

「わかっている」

ミスティは背中合わせになったまま彼の言葉に頷くのだった。

「それはな。安心しろ」

「幸いにして青銅の者達もここにはいない」

彼はこのことにも安心していた。

「ならば。あれを使う時だ」

「そうだ。使えばいい」

ミスティもそれを使うことを勧めた。

「貴様の好きなようにな」

「わかった。それではだ」

「一体何を言っているのだ？」

「確かペルセウスだったな」

インプ達は二人の言葉の意味がわからず首を傾げていた。

「どうやら技のことを話しているようだが」

「それは何なのだ？」

「見ればわかる」

アルゴルは彼等にはこう返すだけであった。

「しかしだ」

「しかし。何だ？」

「何だというのだ?それで」
「忠告しておこう」
アルゴルの言葉が強いものになった。
「私が今から出す技を見て生きていた者はいない」
「その通りだ」
背中合わせになったままのミスティがそれに応えて頷く。
「アルゴルのそれを見たならば私とて生きていることはできない」
「何を言っているのかわからぬが」
「ハッタリなのか?」
彼等はアルゴルの言葉をそうだと見なしていた。
「だとすればどうということはない」
「ペルセウス、貴様もその程度の男ということだ」
「私は嘘を言うことはない」
しかしアルゴルはなおも彼等にこう返すのだった。
「そしてだ」
「そして?」
「忠告はした」
目を閉じて述べるのだった。
「今な。それを聞くか聞かないかは御前達の自由だ」
「こちらも言うが我々もまたアーレス様にお仕えする狂闘士だ」
「雑兵といえどもな」
言いながらアルゴルとの間合いをじり、と狭めてきた。
「だからこそ戦いを恐れることはない」
「この命が消えようともだ」
「それが答えか」
彼等の言葉を聞いて静かに述べたアルゴルだった。
「御前達の」
「その通りだ。わかったならば見せてもらおう」
「貴様のその技をな」
言いながらさらに間合いを狭めてきた。

「そのうえで満足して死ぬのだな」
「我等の手で」
「いいだろう」
最早アルゴルにも言葉はないようだった。
「では来るがいい。そして見せよう」
「いよいよか」
ミスティは背中越しに彼の言葉を聞いていた。
「あれがまた。放たれるのか」
「さあ、見せてみろアルゴル！」
「そして死ね！」
インプ達が一斉に動いた。そうして手に持っている三叉の槍を突き立ててきた。それにより彼を串刺しにせんというのだ。
その数はあまりにも多い。しかし彼はあえて動かず。そのうえで目を開き言うのだった。
「では見るのだ！」
「何っ！？」
「このメデューサの盾をな！」
言いながらその左手の盾を彼等の前に出して見せ付けてきた。するとそこにあった蛇の髪を持つ女の目が見開かれ牙のある口が裂け。そのうえでインプ達を不気味な光が貫いたのだった。

第三十二話　災難の軍団その二

「な、何ィ！？」
「これは！」
その光が貫いた直後。そこには石像達があるだけだった。インプ達はそのまま石になりそこに立っているだけになってしまっていた。
「このアルゴルの盾はメデュ－サの盾」
その盾を設けてある左手を下ろしてまた言うのだった。
「それを見れば石になるのは必定。私の司る星座からそれを察しないのは迂闊だったな」
「相変わらずの威力のようだな」
ミスティはそのアルゴルに対して告げてきた。背中合わせのまま。
「これでインプ達は全員石か」
「そうだ。そしてミスティ」
今度はアルゴルから彼に声をかけてきたのだった。
「次は御前の番だな」
「わかっている」
ミスティは彼の言葉に静かに応えた。
「では私も見せよう」
「リザド、貴様の相手は我々だ」
「何度も言うが容赦はしないぞ」
当然ながらインプ達は彼も取り囲んでいた。そうしてそのうえで言ってきたのだった。
「貴様の小宇宙がどれだけ凄まじいものであってもだ」
「我等は臆することはない」
「だからだ。死ね」
言いながら今まさに突っ込まんとする。しかしここでであった。
「ならば来るのだ」
ミスティはその彼等に対して告げるのだった。

「このリザドのミスティの技、貴様等に見せよう」
「ふん、ならば貴様のその技」
「見せてみるのだ」
言いながらその間合いを次第に狭めてきた。そうしてそのうえで今まさに突っ込んできたのだった。
だがミスティはいまも動かない。だがインプ達が迫ってくるにつれて。彼等のその動きを見つつだった。己の右手をゆっくりと挙げそうしてその人差し指と中指を前に出し叫ぶのだった。
「マーブルトリパー！！」
その言葉と共に凄まじいばかりの衝撃波が放たれインプ達を撃った。それを受けた彼等は瞬く間に吹き飛ばされるのだった。
「な、これがリザドの技だというのか」
「何という威力だ、この恐ろしいまでの衝撃は・・・・・・」
「私は白銀聖闘士だ」
ミスティは彼等に対して攻撃を放ち終えてから告げるのだった。
「貴様等に遅れを取ることはない」
「くっ、しかし」
「これだけの小宇宙を持っているとは」
彼等が言うのはこのことであった。
「その顔に似合わず何という恐ろしい男だ」
「恐るべし白銀聖闘士・・・・・」
インプ達は口々にこう言って倒れていった。ミスティはその彼等を静かに見下ろしていた。そうしてそのうえで背中越しのままであるアルゴルに告げた。
「さて、我々の周りにいる雑兵達は倒したが」
「うむ、そうだな」
「だがそれでもだ」
ミスティはさらに言葉を続けるのだった。
「まだ多くの雑兵達がいる。どうする？」
「青銅の者達の助けに行くということか」

「如何にも」
彼が言うのはまさにそのことだった。
「どうする？行くか？」
「いや、それには及ぶまい」
しかしアルゴルはここで動こうとはしないのだった。
「それにはな」
「何故だ？まだ敵は多くいるのだぞ」
「あの者達なら心配することはない」
こう言ってやはり動こうとはしない。
「あの者達も聖闘士だ」
「だからか」
「そうだ。聖闘士ならばやってくれる」
またこうしたことを言うのであった。
「それならばだ。ここは任せていればいい」
「では我等はこのまま迫って来る雑兵達の相手をすればいいというわけか」
「そういうことだ。あの者達にはあの者達でやるべきことだ」
突き放しているようだがそれでいて信頼している言葉だった。

第三十二話　災難の軍団その三

「ならば。安心して任せていればいい」
「そうか。では我々はだ」
「来るぞ」
また言うアルゴルだった。
「その雑兵達がな」
「早いものだ。もう来たのか」
ミスティもそれを感じ取った。気付けばもうかなりの数のインプ達が再び彼等の前に出て来ていた。そうしてそのうえでまた彼等に攻撃を仕掛けんとしていた。
「同志達の仇だ！」
「覚悟しろ！」
「では。やるとするか」
「そうだな」
二人はそれぞれまた身構えながら言葉を交えさせた。
「我々は我々の闘いをする」
「やるとするか」
彼等はまたメデューサの盾をかざしマーブルトリパーを放つ。それによりインプ達を石に変え蹴散らしていく。彼等の闘いはそのまま続いていた。
白銀の者達だけでなく青銅の者達も闘っていた。その圧倒的な数を前にしても臆することなくそれぞれの技を放っているのだった。
「バウンディングショット！」
シオンが音速の跳ね飛ぶ様な突進を仕掛けそのうえで居並ぶインプ達を蹴散らしていた。
「うわっ！」
「ぐわっ！」
「俺達を甘く見るな！」

シオンは攻撃を放ったうえで言うのだった。
「貴様等程度にやられるものか！」
「その通りだ！」
そして次がラシャーが攻撃を放とうとしていた。
「シャドープラズマ！」
凄まじい雷に似た黒いプラズマを拳から放ちそれでインプ達を吹き飛ばしていた。これこそが彼の持っている技であったのだ。
次はワルターだった。彼の技は。
「グランドクロス！」
十字に拳を撃ちそれで敵を倒す。接近してきたインプ達がそれぞれ十次の傷を受け吹き飛ばされるのだった。
最後はペテルだった。彼の技は。
「バーニングファイアー！」
炎のアッパーカットでインプ達を吹き飛ばす。やはりかなりの威力だった。彼等も彼等でそれぞれ攻撃を放ちそのうえでインプ達を倒していた。彼等も健闘していた。
「意外とやるな」
「御前こそな」
ペテルは不敵に笑いワルターに応えていた。
「このままいけるか？」
「馬鹿を言え、確実にいける」
ワルターの言葉にラシャーが言い返す。
「この程度ではな。何ということはない」
「何ということはか」
「そうだ、所詮は雑兵だ」
こう言ってまた攻撃を放ちインプ達を吹き飛ばすワルターだった。
「俺達の相手じゃない」
「その通りだ。この程度の数はな」
シオンも闘い続けている。やはち敵を寄せつけない。彼等も僅か四人であるがそれでも圧倒的な数のインプ達を圧倒していたのだ。

「どうということはない」
「しかしだ」
だがここでペテルが言うのだった。
「あとはアフロディーテ様だがな」
「あの方がどうされたのだ？」
「あとサガ様もだが」
二人の黄金聖闘士について言うのだった。
「大丈夫だな」
「まさかと思うが疑っているのか？」
シオンがそのペテルに対して問うてきた。
「御二人が敗れるなどと」
「敗れはしないだろうが苦戦されるかも知れん」
その可能性は否定できないというのだった。
「あれだけの数の狂闘士が一度に相手になるとなると」
「しかし敗れることはない」
「そうだ、それは有り得ない」
他の青銅聖闘士達は口々に言うのだった。
「敗れることはな」
「それだけはな」
それは確信していたがそれでも苦戦は危惧していたのだった。その一人であるサガの周りにいる四人の狂闘士はまず名乗ってきた。

第三十二話　災難の軍団その四

「このバシンのセーバーとだ」
「ブロンズのガロ」
「ハゲンティのバーツ」
「フールカスのトムス」
「ジェミニよ」
四人を代表してセーバーがサガに対して言ってきた。
「我等四人が貴様を倒す」
「覚悟するのだな」
「名前は聞いた」
サガは四人の言葉を聞いたうえで述べてきた。
「そして覚えた。今な」
「覚えてもらってまずが礼を言おう」
バーツはそれを聞いてまずはこう言ってきた。しかしだった。
「しかしだ」
「しかし。何だ？」
「これが貴様が覚える最後の名前になる」
「つまり御前達がこの私を倒すということか」
「その通りだ」
バーツはこうサガに告げたのだった。
「我々がだ。覚悟するのだ」
「いいな」
ガロも殺気を込めて言ってきた。
「貴様を倒す。ここでだ」
「行くぞ」
トムスはもう身構えていた。その右手を半ば開いて前に出し左手を少し引いている。そうしてそのうえで小宇宙を高めさせてきていた。

「いいな」
「では。来るがいい」
サガは目を閉じて彼等に言い返した。彼はまだ構えを取ってはいない。至って冷静な顔でそこに立ち彼等の動きを計っているようであった。
「このサガ。一歩も退くことはない」
「既に貴様には八人の同志達を倒されている」
彼等の中心的位置にいるセーバーが応える。
「それを忘れたことはない」
「それでどう攻めるつもりだ?」
「いいな」
「はい」
「わかりました」
他の三人はセーバーの言葉に対して応えるのだった。そしてそれぞれ四方に散りサガを取り囲んできた。セーバーがサガの正面に立っている。
「囲んだか」
「これならばだ」
「ジェミニ、貴様といえどだ」
サガの左右に位置するバーツとガロがそれぞれ言ってきた。
「四方から同時に攻められればひとたまりもない筈だ」
「これでならばだ」
「違うとは言わせぬぞ」
トムスは彼の後ろから言ってきた。
「いかなる者とて四方から攻めれば全てを防ぎきることは無理だ」
「違うか?」
彼等を代表してまたセーバーが言ってきた。
「これならば貴様とてだ」
「何度も言うがこのサガは一歩も退くことはない」
ここでもこのことを四人に対して告げるのだった。

「全くな。だから来い」
「遠慮はしないぞ」
「その言葉、確かに受けた」
四人は今まさにこうげきを仕掛けんとしていた。サガと四人の闘いが今幕を開けようとしていた。
そうしてだった。アフロディーテもまた五人の狂闘士達と一人で対峙していた。凍てついた氷は狂闘士達の赤い小宇宙で燃え上がっているようだった。
「ピスケスよ、一つ言っておく」
「よいか」
狂闘士達はアフロディーテに対して告げてきた。
「貴様の技は既にわかっている」
「その毒もな」
「私の薔薇の毒にですか」
アフロディーテはその右手に紅薔薇を持ちそうしてその薔薇を胸の前に位置させてそのうえで彼等の言葉に応えていた。至極冷静な声で。

第三十二話　災難の軍団その五

「気付かれたのですね」
「そしてインプ達の仇を取らせてもらう」
「それもだ」
彼等はまたアフロディーテに対して言ってきた。
「貴様のその薔薇の毒の為に犠牲になったな」
「あの者達の仇をだ」
「取らせてもらう」
言いながら憎しみの小宇宙を増してきていた。その憎しみは目にもはっきりと出ていた。
「では行くぞ」
「貴様の首、アーレス様に献上させてもらう」
「そうですか」
アフロディーテは彼等の言葉に応えながら冷静にその右手の紅薔薇を前に動かしてきた。するとその紅薔薇の花びらが散り辺りに散った。氷の上は忽ちのうちに紅薔薇で覆われてしまった。
しかしであった。五人の狂闘士達は己の足元さえ覆ってしまったその紅薔薇を見ても余裕の表情であった。その口元には笑みさえ浮かんでいる。
「私の薔薇のことは御存知の筈ですが」
「そう、確かに知っている」
「それはな」
彼等はそれはよく知っているといった態度で言葉を返すのだった。
「知っているのだ、確かにな」
「よくな。よく知っている」
「では何故」
アフロディーテは問うがその顔は全く変わってはいない。
「そこまで落ち着かれているのですか。私の薔薇を知っていて」

「知っているからこそだ」
「だからだ」
彼等の反論はこうであった。
「だから我々は平気でいられるのだ」
「それを言っておこう」
「そうですか。つまりは」
「そうだ、私だ」
ここで名乗りをあげてきたのは。
「私の手によるものだ」
「そうですか。やはり貴方が」
「私はアスタロトの戦衣を着る男」
それはミシェイルだった。今は後方にいて闘いを見守っている彼であった。
「アスタロトが操るのは冷気だけではない」
「毒もですね」
「ほう、知っているか」
アフロディーテの今の言葉に笑った声を出してきたのだった。
「それは何よりだ」
「アスタロトの吐く息は毒の息」
アフロディーテもまた言うのだった。
「それはもう知っています」
「そうか。ならば説明は不要だな」
「如何にも。それで私の毒は効かないというのですね」
「少なくともその威力はかなり減殺される」
それを読んでの毒であったのだ。
「貴様を倒すそれまでの間はな」
「私は毒がなければ闘えないと」
「その光の拳も確かに脅威ではあるがな」
黄金聖闘士を黄金聖闘士たらしめているものの一つだ。それこそがである。

「しかしだ。貴様の最大の武器である毒は封じた」
彼はまたこのことを言った。
「これで大きく違うな」
「さて、ピスケスよ」
「それでだ」
ここでその五人がまた言うのであった。
「その光速の拳で我等を倒せるか」
「証明してみせよ」
「生憎ですがそのつもりはありません」
しかしアフロディーテはその彼等にこう返すのだった。
「それはありません」
「何っ!?どういうつもりだ?」
「光速の拳を使わないだと」
「そうです。私がそれを使うのは最後です」
彼は言うのだった。

第三十二話　災難の軍団その六

「最後ですから」
「どういうことだ。薔薇の毒は封じられたというのに」
「まだ何かあるというのか？」
「ピスケスの武器は毒のみにあらず」
彼はまた言った。
「そういうことです」
「！？まだあるというのか？」
「毒以外にもまだ」
「どういうつもりだ」
ミシェイルもまた今の彼の言葉にはいぶかしむのだった。
「まだあるというのか？ピスケスに」
「しかしだ。ピスケスよ」
「それでもだ」
狂闘士はいぶかしみはしたがその戦意は決して衰えてはいなかった。
「だからといってもだ」
「何度も言うが我等は狂闘士」
「決して退くことはない」
こう言って確かに決して背を向けようとはしない。それこそが誇りであるかのように。
「ここで貴様を倒すのみ」
「我等の最大の力でな」
「いいでしょう」
また彼等に対して応えるアフロディーテだった。臆するところも怯むところもなく。その美しい顔で穏やかなまでに言葉を返すのであった。
「では私もまたそれに応えて」

「闘うというのだな」
「我等と」
「私が薔薇を敷く時それは私の闘いがはじまる時」
これが今の彼の言葉であった。
「そして勝利の時ですから」
「ふっ、ならばどちらが最後に戦場に立っているか」
「それを今はっきりとさせようぞ」
「いいな、ピスケスよ」
五人が一斉にそれぞれの構えを取った。
「どちらが最後までここに立っているか」
「勝負だ」
「いいでしょう。私としても異論はありません」
紅薔薇はもうない。しかしそれでも彼の態度は変わっていなかった。
「それでは。いざ」
「勝負だ」
「ただ。一つ言っておきます、いえ二つでしょうか」
身構える狂闘士達を前にしても構えを取らず言うのだった・
「先にも言いましたが私が光速の拳を使うのは最後です」
「それは確かに聞いている」
「では今がその最後の時だな」
「しかし。もう一つあるのです」
やはりまだ構えを取ってはいない。悠然としてそこに立っているだけである。そのうえでさらに彼等に対して言っているのであった。
「私の薔薇は毒だけではありません」
「何っ！？」
「毒だけではないというのか？」
「それもまた御見せしましょう」
言葉は相変わらず悠然としていた。
「今から」

表情を焦ったものは何一つとしてなかった。澄み切ってさえいる。その澄み切った顔で言葉を出しながら対峙し続けている。まるで既に勝利が決まっているかのように。

第三十二話　　完

２００９・５・１６

第三十三話　白薔薇その一

白薔薇

アフロディーテとサガがそれぞれ複数の狂闘士達と対峙している。その中でもサガは四方を完全に囲まれてしまっていた。劣勢は明らかにあるように思われた。

「さあ、ジェミニよ」

「行くぞ」

セーバーとトムスがそれぞれ前と後ろから彼に言ってきた。

「ここで遂に貴様を倒す」

「我等の手で」

「そうだ。こうして完全に取り囲んだならば」

「如何に貴様とて」

ガロとバーツも言うのだった。

「防ぎきることはできない」

「何があろうともな」

「そうか。私を倒すことに絶対の自信を持っているのか」

サガは彼等の言葉を聞いて述べた。

「その技と戦術により」

「闘いにおいて戦術を使うのは常道」

セーバーは鋭い目をして彼に告げた。

「そうではないのか？ジェミニよ」

「確かに。それに戦略もあるもの」

サガはそうしたことも把握していた。聖闘士、しかもその頂点に立つ黄金聖闘士ともなればただ強いだけではなれはしないということであった。

「それは当然のことだな」

「その通りだ。ではわかればだ」

「死ね」

ガロとバーツが言った。そして今四人は一斉にそれぞれの技を放ったのだった。
「まずはだ」
最初に仕掛けんとしたのはガロだった。
「受けよ、この剛の技」
「剛の？」
「ファイアーアクス！！」
思いきり右の手刀を上から下に振り下ろしてきた。それは凄まじい炎と共にサガに降りかかりまさに叩き切らんとしてきていた。
「この手刀は」
「そうだ、ただの手刀ではない！」
ガロは技を放ったうえで言い切る。
「これこそがこのガロ最大の技、受けてみよ！」
「くっ！」
「ガロだけではないぞ！」
次に来たのはバーツだった。
「次はこのバーツの番だ。このバーツの技は」
「来るか」
「フライングオックス！！」
一旦上昇してから急降下しそのうえで両手の拳を放つ。それが彼の技だった。
「このハゲンティは有翼の牛！」
バーツは己の戦衣の魔神のことも話した。
「だからこそ放つこの技だ！」
ガロもまた言う。
「そしてこのガロのビフロンズは炎を操る魔神」
「それならばこそこの技だ。受けてみろジェミニ！」
「二人だけではないぞ」
次はトムスが来た。
「フールカスは死の鎌を持っている」

「鎌を」
「その通りだ、この鎌は絶対の死をもたらすもの」
まさに死神の鎌というわけである。
「この鎌の攻撃を。受けよ！」
左腕を左から右に横に一閃させ。巨大な鎌ィ足を放ってきた。
「デスサイズ！！」
その三つの攻撃が同時にサガを撃つ。凄まじい衝撃がサガを覆い姿が完全に見えなくなってくる程だった。しかしまだ彼等の攻撃は終わらない。
「セーバー様！」
「次は！」
「わかっている」
その鋭い目で告げるのだった。
「ジェミニよ、これで終わりではないぞ」
言いながら彼も技を放とうとする。サガの上空に位置しそのうえでそこから右手を不気味に動かし。そのうえで技を放ってきたのだった。
「このセーバーの魔神はバシン」
彼もまた己が司る魔神のことを言う。
「その蛇を持つ魔神。だからこそこの技を使えるのだ」
言いながらであった。今その不気味に動かし唸りさえしている右手から放ったのだった。
「インフィニティファング！！」
その右手からうねりながら動く無数の拳が放たれる。それは様々な動きを見せつつサガに襲い掛かる。その衝撃の中に消えたかに見えるサガにだ。

第三十三話　白薔薇その二

「さあ、どうだジェミニよ」
まず言うのはセーバーだった。
「これだけの攻撃を受け。倒せるか！」
「そうだ、我等のこの攻撃を受けてだ」
「無事ではいられないな！」
彼等は自分達の渾身の攻撃を放ち終えそのうえで会心の笑みを浮かべていた。その攻撃によりサガは倒れたと確信していたのだ。
だからこそそれぞれ着地し勝利の笑みを浮かべているのだ。しかしであった。彼等が着地したその場所はこれまでの氷の世界ではなかった。
「何っ！？」
「ここは」
「銀河か！？」
「どうやら私の放った技には気付かなかったようだな」
そしてその衝撃の中からサガの声がしてきた。
「自分達の攻撃に夢中でな」
「何だとっ！？」
セーバーが今の言葉に眉を動かした。
「馬鹿な、何時の間に！？」
「我等が気付かないうちにだと！？」
「私は既に技を放っていた」
彼は言うのだった。
「御前達が動くその前にな」
「くっ、もう既ににか」
「技を放っているというのか」
「それに気付かないのは迂闊だったな」
次第にサガの姿が見えてくる。彼は確かに四人の渾身の攻撃を受

けた。しかしそれでもであった。何とその彼の姿は。
「な、何ィ！？」
「無傷だというのか！」
それは確かにその通りだった。何と彼は傷一つ受けてはいなかった。黄金聖衣も傷一つなくマントまで無事だった。何一つ傷付いてはいなかった。
「我等の攻撃をあれだけ受けて」
「傷一つ負っていないのか」
「他の者ならいざ知らずこのサガを倒そうと思えば」
彼は目を閉じその顔で告げるのだった。
「銀河を破壊せんとすることだな」
「おのれ、何という男だ」
「ならば。再び我等の渾身の攻撃で」
「それで今度こそ倒してやろうぞ」
彼等はその無傷のサガを見ても戦意を衰えさせなかった。そして今また技を放とうとする。しかしそれはできなかった。
「むっ！？」
「なっ、身体が」
「動かないだと！？」
「一つ言っておくがこの銀河はジェミニが導く世界」
サガは銀河の中で語る。紫に限りなく近い美しい漆黒の世界の中に星雲が瞬き星達が輝いている。そして太陽が輝き星が壊れていく。流星が漂うその美しくも恐ろしい世界の中で彼は言うのだった。
「アナザーディメションで導かれる世界だ」
「アナザーディメションだと！？」
「では我々はまた」
「そうだ。ここは私の操る世界」
彼はまた言うのだった。
「その動きを封じることはできはしないが鈍らせることはできるのだ」

「くっ、何ということを」
「ジェミニのサガ、我等を出し抜くなどとは」
彼等は己の動きが鈍くなっていることに歯噛みした。しかしやはりそれでも彼等は戦意を衰えさせずそれならばとそれぞれの小宇宙を燃え上がらせるのだった。
「しかし。闘いはだ」
「これで終わりではないのだ」
その燃え上がる赤く禍々しい小宇宙でサガの術を解き放ちそのうえでまた攻撃を仕掛けんとする。
「行くぞ、これで」
「今度こそ貴様を倒す」
「私の術を受けてなおそれを剥がし闘おうとするその意気」
サガはまずそれを見ていた。
「それはよし」
「ぬかせ。それで終わりではない！」
「今度はだ！」
「それではだ」
四人が声をあげる中でだった。
サガはその両手をゆっくりと己の胸の前で交差させてきた。そして。
「このジェミニのサガ最大の技をまた」
「むっ！？それは」
「その技は」
「受けてみるがいい」
凄まじい小宇宙が起こりそして。交差させた両手を上に掲げて叫ぶのだった。

第三十三話　白薔薇その三

「ギャラクシアンエクスプロージョン！」
「ぎ、銀河が！」
「割れただと！」
その銀河を割らんばかりの凄まじい攻撃が彼等を襲った。そうして一瞬のうちに彼等を撃ってしまった。やはり彼等もまたサガに敗れてしまった。
そしてアフロディーテは。五人の狂闘士達を前にしてそのうえで悠然としていた。
「何度も言うがピスケスよ」
「毒は最早効果がない」
彼等は言うのだった。
「そうだ。貴様のその光速の拳でなければな」
「我等は倒せはしない」
「それともだ」
ここで彼等はまた言うのだった。
「その拳使えぬか？」
「まさかと思うが」
「無論そのようなことはありません」
アフロディーテは自分からそれは否定した。
「私とて黄金聖闘士。ならば」
「それではその光速の拳、見せてみよ」
「我等に対してな」
「しかしです」
だがここで彼はまた言うのだった。
「それには及ばないのも事実です」
「何っ！？」
「戯言か？」

「私は嘘は言いません」
その言葉の調子も変わらない。
「黄金聖闘士は決して。その誇りにかけて」
「ならばそれを見せてみよ」
「我等に光速の拳を見せぬ理由をな」
「そしてその前にだ」
五人はジリ、と一歩前に出て来た。
「我等の技を受けてみるのだ」
「それに耐え切ることができればな」
「それを見せてみるのだ」
殺気に満ちた声での言葉であった。
「いいか、我等五人の今からの攻撃」
「全てしのげるのならばな」
「参られるのですね。今から」
「如何にも」
また答える彼等だった。
「まずはだ」
「我々からだ」
最初に動いたのは二人だった。
「このヴァッサゴのラケルと」
「ベリスのノートンがだ」
「まずは貴方達からですか」
「安心しなさい、私達だけではないわ」
「俺達は五人で貴様と闘うと言った筈だ」
ラケルとノートンはここでまたアフロディーテに告げてきた。
「まだいるわ、安心しなさい」
「続くんだ、そして貴様を倒す」
「わかりました。それではです」
アフロディーテは彼等の言葉も受けそれでもその態度を変えないのだった。

「来るのです、今から」
「言われなくとも」
「行くぞ！」
前から一斉に跳んできた。まずはラケルが技を放つ。
「このヴァッサゴのラケル細大の技」
左腕が今禍々しい青い光に包まれそして。
「ブルーシャイニングビット！」
そこから数多くの青い光が放たれた。それは全て一直線にアフロディーテに向かう。
「この光を受けて生きていた者はいないわ。ピスケス、例え貴女でも！」
「次は俺だ！」
そしてノートンもまた仕掛けてきた。彼はその両手に巨大な剣を握っていた。
「俺の魔神ベリスは剣を持つ魔神」
己が司る魔神のことも言うのだった。
「その剣で今貴様の首を切ってやる！」
この言葉と共にだった。剣を突き出し凄まじい気を放った。
「ソードレクイエム！」
それはそのまま剣の形となりアフロディーテを襲う。そして続いて三人も動いた。

第三十三話　白薔薇その四

「ではジュリア様、我等も」
「参りましょう」
「はい」
ジュリアは己の左右で動きはじめた二人の男に応えて述べた。
「では我々もまた」
「五人で攻撃すればピスケスとて」
「倒すことができます」
つまり数であった。圧倒的な強さを持っていることが間違いない黄金聖闘士に対してその数で挑むというのである。彼等も考えてのことだ。
「ではいざ！」
「行くぞピスケス！」
ナロンとラフィンがまず同時に出た。ナロンはその手に棍棒を出しそれを振り下ろし地が裂けんばかりの地震を引き起こしてきた。
「デモンズアースクイエイク！」
彼が地震を起こすとだった。ラフィンは天高く飛んでいて両手に雷を宿らせ。それを放ってきた。
「デッドエンドサンダーーーーー！！」
二人の地震と雷がそのままアフロディーテを襲う。最後に仕掛けてきたのはやはりジュリアだった。彼女は悠然と構えそのうえで。
「さあ、受けるのですピスケスよ」
その場に立ったまま両手を動かしていた。
「このヴィネは破壊を司る魔神」
己の魔神のことを彼女もまた言う。
「その衝撃を受けて今！」
身体全身の禍々しい赤い小宇宙を今全てアフロディーテに放った。
「ブレイクトルネード！」

それは無数の赤い竜巻となってアフロディーテに迫る。五人の凄まじい攻撃が今彼を撃つ。これで流石に立っていられないだろうと誰もが思った。

しかしであった。その五つの攻撃による衝撃が終わったその時。アフロディーテはそこに立っていた。聖衣もマントさえも傷つくことはなく。そこに立っているのだった。

「なっ、何ィ！？」

「無傷だというのか！！」

「言った筈です」

アフロディーテはその傷一つない姿で五人に告げてきたのだった。

「私が拳を出すのは最後だと」

「最後だというのか」

「それでは何故」

「我等の攻撃を防いだ？」

「これによってです」

見ればであった。そのアフロディーテの右手にあったのは。薔薇なのはこれまでと変わらないがそれは紅薔薇でも黒薔薇でもなかった。それは。

「白薔薇だと！？」

「まさか白薔薇も持っていたのか」

「如何にも。そして」

言葉を続けてきた。

「この薔薇には毒はありません」

「毒のない薔薇だと」

「そうした薔薇も持っていたのか」

「この薔薇を使うことがあるとは思いませんでした」

その白薔薇を構えながら悠然と言葉を出し続けていく。

「ロイヤルデモンローズにピラニアンローズ」

その紅薔薇と黒薔薇である。

「その二つだけでなく」

「白薔薇、どういったふうに使うのだ？」
「毒ではないにしろ」
「薔薇にあるものは毒だけではなく」
アフロディーテは五人に応えてまた言った。

第三十三話　白薔薇その五

「棘もあります。そして」
「そして？」
「何なのだ？」
「白薔薇は染まるもの」
こうも言うのである。
「今それを見せましょう」
「むう・・・・・・」
「では何を」
「白薔薇を染める」
ミシェイルもまたその言葉を聞いていた。そうしてそのうえで考え込むのだった。
「どういうことだ」
白薔薇とアフロディーテをここで重ね合わせた。
まずはその紅薔薇だ。彼の象徴とも言ってもいい。
「紅か」
このイメージは鮮烈だった。今も氷の上にその紅薔薇があり続けている。その毒は彼の毒により抑えている。それもまたわかっていることだった。
しかしだった。その紅はそれだけではないと察しもした。そう、白から紅をイメージしたのだ。
「白を紅に染めるには」
ミシェイルはさらに考えていく。
「それに必要なのは」
ここで答えが出た。するとその瞬間にミシェイルは顔の色を変え。五人に対して言うのだった。
「いかん！」
「いかん！？」

「ミシェイル様、どうされたのですか？」
「その薔薇は受けるな」
何とか声の色を冷静なものに戻してまた五人に告げた。
「いいな、絶対にだ」
「絶対に？」
「何故ですか？」
「言いはした。受けるな」
それでも表情は強張り警戒するものであり続けていた。
「わかったな、絶対にだ」
「一体何を」
「この白薔薇に一体何が」
「では。お見せしましょう」
アフロディーテはその白薔薇を己の顔の前で掲げてきた。そうしてそのうえで目の光を強くさせる。
「我が白薔薇の技」
「むっ！？」
「来た！？」
「ブラッディローズ！」
技の名前を叫ぶと同時にその白薔薇を放った。すると薔薇は忽ちのうちに一つから五つになりそれぞれ五人に向かった。五人はその薔薇を見て一斉に技を放った。
「ミシェイル様の御言葉。どういう意味かわからぬ。だが」
「それでもだ！」
拳を放ちそれで薔薇を砕かんとした。
「その薔薇。間違いなく剣呑なもの！」
「ならばここで散らしてくれる！」
「無駄です」７２
だがアフロディーテはこう彼等に告げるのだった。
「このブラッディローズ放たれたなら」
「何だというのだ？」

「かわすことはできません」
こう言うのだった。
「そして散らすことも」
「馬鹿なそんなことが」
「そんなことは有り得ない」
彼等はそれを否定しようとする。
「薔薇が散らないなどと」
「そんなことが」
「では。現実に見てみるのです」
アフロディーテの言葉は変わらないのだった。
「私のブラッディローズを」
「くっ、無理か！」
ミシェイルがここでまた叫んだ。
「最早。これであの者達は・・・・・・」
呻いたその時だった。五人の胸にその白薔薇が突き刺さった。アフロディーテのその言葉通りに。

第三十三話　白薔薇その六

「馬鹿な、我等の技を受けてなお」
「薔薇が胸に」
「私の薔薇を散らすことは誰にもできません」
アフロディーテの言葉は変わらないままであった。
「残念ながら」
「くっ、薔薇が」
「紅に染まっていく」
ミシェイルの言葉通りであった。まさに。
白薔薇を染めるのは鮮血であった。五人の鮮血こそがその薔薇を染めていたのであった。
「こういうことだったのか」
「つまり我等の血で」
彼等は急激の血の気が引いていく顔で述べていった。
「白薔薇を染め上げると」
「そういうことだったのか」
「そうです、その通りです」
アフロディーテはまた答えたのだった。
「それがこのブラッディローズ。美しき死の薔薇です」
「迂闊だったわ」
ジュリアは今にも倒れ伏すの中でアフロディーテに述べるのだった。
「貴方のこの白薔薇のことに気付かないで」
「迂闊ではありません」
しかしアフロディーテはそれはそうではないと言う。
「何故なら」
「何故なら？」
「では一体」

「私は黄金聖闘士」
ここでこのことを言うのであった。
「それだけです」
「くっ、恐るべし黄金聖闘士」
「それがこの強さだというのか」
「静かに。眠りなさい」
今まさに倒れようとする彼等に対しての言葉であるのは言うまでもない。
「紅と白の薔薇に見送られて」
この言葉を聞くか聞かないかのうちに五人は前のめりに倒れ事切れた。そして後に残ったのはその他ならぬアフロディーテと彼であった。
「まさか白薔薇まで持っているとはな」
「貴方もまた意外だと仰っていましたね」
「意外と思っているのは事実だ」
ミシェイルはアフロディーテを見据えつつ述べた。
「それはな。しかしだ」
「しかし？」
「その白薔薇も今見せてもらった」
こう彼に言うのだった。
「紛れもなくな。見せてもらった」
「そうですか」
「聖闘士は一度見た技を見破るというが」
次に彼が言うのはこのことだった。
「それは狂闘士もまた同じだと言っておこう」
「それでは。このブラッディローズも破られるというのですね」
「白薔薇だけではない」
それに留まらないというのだ。
「紅薔薇も黒薔薇もだ」
「つまり私の三つの薔薇を全てですね」

「他に薔薇があるとしても」
彼の言葉がさらに強いものになる。
「私には効かない。それを見せてやろう」
「それでは。次のお相手は貴方ですね」
「私以外にいると思うか？」
既に後ろには何もないような。そうした言葉になっていた。
「それはどうだ」
「確かに。問うまでもありませんでしたね」
ここで自分の言葉についても述べるのだった。
「では。はじめますか」
「一つ言っておく」
ミシェイルの小宇宙が沸き起こった。それはやはり赤く禍々しい狂闘士の小宇宙であった。
「先に倒れた五人、そして多くのインプ達のだ」
「仇を取るというのですね」
「そういうことだ。では行くぞ」
今ここでアフロディーテとミシェイルは完全に対峙した。そうしてそのうえで今この中国における最後の闘いに入るのだった。

第三十三話　　完

２００９・５・２０

第三十四話　氷と毒その一

氷と毒

アフロディーテとミシェイルは今まさに激突せんとしていた。まずはミシェイルが言ってきた。
「五人とインプ達の仇だが」
「その割には随分と簡単に手駒にされていたようですが」
しかしここでアフロディーテは彼にこう言うのだった。
「違いますか？」
「手駒にしたのは事実」
彼もまたそれは認めた。
「それはな」
「では何故仇などと？」
「手駒なのはあの者達だけではない」
そして今度はこう言うのだった。
「私もまた手駒なのだからな」
「貴方も手駒だと？」
「何かおかしなことがあるか？」
「また奇妙なことを仰いますね」
今は紅薔薇を右手に持っている。その紅薔薇を顔の左の方に持って来ての言葉である。
「貴方もまた手駒とは。彼等を使ってきた貴方が」
「当然のことだ。私はアーレス様の僕」
彼が言うのはこのことだった。
「それならばだ。手駒なのも当然」
「アーレスの手駒ということですか」
「その通りだ。これでわかったな」
ここまで話しての言葉だった。
「これでな。そして私は同志達の仇は必ず討つ」

言葉に殺気がこもってきた。
「ピスケス、貴様を倒す」
「そうですか。同志達の仇としてですか」
「そしてアーレス様の敵としてだ」
また言うのであった。
「行くぞ」
「ならば私も」
紅薔薇を今度は前に掲げてきた。
「参りましょう」
「ピスケスよ。さっきも言ったが」
ミシェイルは闘いがはじまったがまずは動かなかった。
「私にその紅薔薇は効きはしない」
「貴方の毒によってですね」
「そうだ。私の毒は全ての魔神達の中でも最も強い毒だ」
こう告げるのだった。
「ありとあらゆるものを死に至らしめる。そういう毒なのだ」
「では。その毒を私がはじめて打ち消してみせましょう」
アフロディーテは引かなかった。その毒のことを聞いても。
「今ここで。この美しい薔薇達によって」
「ほう、紅薔薇だけではないか」
ここでミシェイルは周囲を、足元だけでなく空にまで舞いはじめたその薔薇の花びらを見て言うのだった。見れば確かにそこにあるのは紅薔薇だけではなかった。
「黒薔薇もか」
「ロイヤルデモンローズだけでなくピラニアンローズも」
アフロディーテはその薔薇の霞の中でミシェイルに対してまた言ってきた。
「この二つならばどうです？」
「ふむ。ならば私もだ」
ミシェイルはここでまた言うのだった。

「己の技を見せよう」
「むっ！？」
「見るがいい。八大公の一人アスタロトのミシェイルの技の一つ」
悠然と笑いながらその身の回りに黒い霧を漂わせてきた。
「ポイズンミストをな」
「ポイズンミスト？毒の霧ですか」
「そうだ。何度も言うが私の毒は全ての魔神達の間で最も強い毒だ」
またこのことを言ってきたのだ。
「そして毒を自在に操ることもできる」
「だからこそ毒の霧を」
「さあ、見るのだピスケスよ」
ミシェイルはその毒霧の中で言うのだった。
「この毒の恐ろしさはな」
「さて、それはどうでしょうか」
しかしここでアフロディーテは穏やかだが確かに言葉を返してきた。

第三十四話　氷と毒その二

「貴方の毒の霧。私に効くでしょうか」
「効かないというのか？」
「では勝負になりますね」
彼は紅と黒の薔薇の中にその身を置いていた。
「貴方の毒と私の毒。どちらがより強いのか」
「それならもう決まっている」
ミシェイルは冷酷なまでに静かな声を出してきたのだった。
「このミシェイルが勝つ。アスタロトのな」
「アスタロト。そういえばです」
ここで彼はふと言うのだった。
「かつてはイシュタルでしたね。バビロニアの女神の」
「そういうことになっているな。アスタロトはかつては女神だった」
このことは彼も知っているのだった。
「バビロニアの美の女神イシュタル。このアスタロトの前身はそうとされている」
「ベルゼブブ然りベール然り」
これまで戦場に出て来た八大公の名前もアフロディーテの口から出される。
「貴方達はかつては神でありましたね」
「そういうこともあったかも知れない。しかしだ」
ミシェイルは自らの口から言うのだった。
「今は我々は完全な魔神だ。アーレス様にお仕えするな」
「戦いに心を奪われてしまったようですね」
「最早それを消すことはしない」
戦いの魅力に心を奪われ魔神になった、そういうことだった。だからこそ彼等は今はアーレスの下におり戦いを楽しんでいるのである。

「さあピスケスよ話は終わりだ」
黒い毒霧がさらに濃くなってきた。
「これで死ぬのだ。私の毒の中でな」
「イシュタルは美の女神」
だがここで彼はまた言うのだった。
「美の。しかし私もまた美を重んじます」
「美をか」
「そうです。美は必ず裏切らないもの」
彼はこのことを述べてきた。
「私はその為に敗れることはありません」
「つまり貴様が勝つということか」
「そうです。この世で最も美しいもの。それは」
「それは？」
「アテナの御心です」
それだというのだ。彼は。
「それを心に持っている私が敗れることはないのです」
「ではそれを今はっきりさせよう」
ミシェイルもこの言葉を受けて退くことはなかった。
「どちらがより美しいのかな」
「いいでしょう。それでは」
「受けるがいい」
毒の霧と薔薇の毒がそれぞれぶつかり合う。まずは薔薇の花びら達が毒の霧に触れ次々としおれ消えていくのであった。
「どうやら私の霧の方が上だな」
ミシェイルはその消えていく薔薇達を見てほくそ笑んできた。
「既に勝負はあったか」
「さて、それはどうでしょうか」
だがアフロディーテは自分の薔薇たちがしおれ消えていってもその自信を変えない。
「まだわかりませんよ」

「戯言を。既に貴様の薔薇達は現にこうして消えていっている」
ミシェイルはそれをあえて指摘してみせる。
「これが貴様の敗北でなくて何だというのだ」
「では。御覧になられるのです」
しかしアフロディーテの言葉にある自信は変わらない。
「よく。薔薇だけでなく全体を」
「全体をだろ？」
「そうです。確かに私の薔薇達は消えてはいっています」
彼もそれは認めるようだった。
「ですが貴方の霧は。進んでいますか」
「私の霧がだろ」
「そうです。よく御覧になって下さい」
またこのことを言うのだった。
「よく。さあどうですか」
「むっ！？」
アフロディーテに促されるようにして実際に戦場全体を見る。すると霧と薔薇の境界は全く動いていなかった。そう、全くであった。

第三十四話　氷と毒その三

「馬鹿な、私の霧が動いていないだと」
「そうです。最初の位置から全く動いていませんね」
アフロディーテが言うのはこのことだった。
「こういうことです」
「くっ、では貴様の薔薇の毒と私の霧の毒は」
「そうです。相殺されています」
今度はかなり具体的に述べてみせてきた。
「ですから進まないのです。全く」
「まさか私の毒が相殺されるとは」
ここでミシェイルの顔が苦々しげに歪んだ。
「ピスケスの薔薇の毒、そこまでの威力があるというのか」
「私も今薔薇を出せるだけ出していますが」
確かにアフロディーテの周りの薔薇の多さは尋常ではない。最早その霞によりアフロディーテ自身の姿が見えなくなってしまっている程である。
「それでも貴方を攻めきれないとは」
「毒と毒は互角だというのか」
「さあ。どうされますか」
アフロディーテはその薔薇の霞の中でまた問うてきた。
「このまま勝負を続けられますか？それとも」
「毒が互角ならばだ」
しかしここでミシェイルは言うのだった。
「それはいい」
「といいますと」
「むん！」
言葉を一閃させた。すると毒が一斉に散った。そうしてそれにより毒の霧も薔薇も消え去ってしまった。何とその毒を周囲に吹き散

らさせてアフロディーテの薔薇も相殺してしまったのだ。
「これでな」
「毒の勝負はもう終わりというわけですね」
「そうだ。だが案ずることはない」
ミシェイルは毒の霧の中から己の姿を現わしつつまたアフロディーテに述べた。
「私は毒だけを使うのではないのだからな」
「氷ですか」
「そうだ、氷だ」
それだと言うのだった。
「私は氷においても魔神で随一の使い手だ」
「この湖を凍らせたように」
「こんなものは何でもない」
平然と言い切ってきた。
「何でもな」
「そうですか。貴方にとってはですか」
「黄金聖闘士にもいたな」
ミシェイルはここでアフロディーテ以外の黄金聖闘士についても言及してきたのだった。
「氷を自在に操る聖闘士がな」
「カミュのことですか」
当然ながらそれはアフロディーテにもすぐにわかることだった。
「それは」
「そうだ。アクエリアスだ」
やはり彼のことであった。
「私の氷はあの男以上だ」
「カミュを侮っては大変なことになりますよ」
アフロディーテはミシェイルのその自信に対して言葉を加えるのだった。
「カミュの氷に勝てる者はいません」

「ほう、仲間を庇うわけではないな」
「カミュは庇われる程弱くはありません」
だからだと言うのだった。
「貴方達を倒すにあたってもです」
「そうか。アクエリアスもまたそれだけの力があるのだな」
「そうです。貴方に遅れを取るようなことはありません」
「それはわかった」
アフロディーテの言葉をここまで聞くのだった。
「しかしだ。ピスケスよ」
「はい」
「貴様はどうかな」
またアフロディーテに対して目を向けて問うのであった。
「貴様はこのミシェイルの氷を防ぐことができるか」
「私に貴方の氷をですか」
「そうだ。できるか」
あらためて彼に対して問うてきた。
「私の氷を。どうだ」
「当然です」
彼はそれを怯むことなく返すのだった。

第三十四話　氷と毒その四

「私もまた黄金聖闘士。貴方の氷、防いでみせましょう」
「そうか。それではだ」
ミシェイルはそれを受けて遂に冷気を出してきた。それは一瞬のうちに彼の周りを凍気で覆いそのうえでそれをアフロディーテの方にも向けてきた。
「聖衣といえど凍る筈だな」
「それがどうかしましたか？」
「言ったまでだ。貴様の聖衣もまた凍らせるだけだ」
言いながらであった。その凍気が遂にアフロディーテにも及ぼうとする。だがここで彼はその薔薇を出したのだった。あの紅の薔薇の花びらを己の周りに漂わせてきたのだった。
「薔薇か」
「そうです、薔薇です」
アフロディーテは薔薇を放ったうえでまた言うのだった。
「私の薔薇は攻防一体。貴方の氷を防ぐこともできるのです」
「そうか。やはりその薔薇は攻めるだけではない」
彼は言った。
「守ることも可能か」
「そういうことです。さあ、どうされますか」
薔薇は確かにミシェイルの氷を防いでいた。花びらの一枚一枚は凍りそのうえで砕けていくがそれでもだった。アフロディーテの身体は守っていた。
「貴方の氷はこれで終わりではないでしょう」
「わかっているのか」
「はい、貴方のカードはこれで終わりではない」
その紅の薔薇の中での言葉だった。
「そうですね。貴方にはまだ余裕があります」

「流石だな。そこまで見抜いているのか」
ミシェイルもそれを隠そうとはしなかった。また悠然とした笑みを見せてきたのだ。
「ピスケス。やはり黄金聖闘士ではないな」
「では貴方の技を見せてもらいましょう」
アフロディーテもまた冷然としていた。
「その技を」
「いいだろう。では見るのだ」
それに応えてその両手をゆっくりと、広く左右に拡げてきた。そうしてそこから技に入るのだった。
「受けてみよ。このミシェイルの氷の技」
「来ましたか。遂に」
「ダイアモンドブリザード！！」
技の名前を叫ぶと彼の全身から凄まじいまでの吹雪が放たれた。それはまさに。
「何っ、この吹雪は」
それはアフロディーテをしてみせて驚きの声をあげさせるのに充分であった。
「あのカミュに匹敵する」
「どうだ、私の吹雪は」
ミシェイルはその吹雪を放ちながら再び不敵な笑みを見せてきていた。
「貴様に防ぐことができるか？」
「くっ・・・・・・」
「できるのなら見せてみよ」
吹雪は激しさを増してきていた。
「私の吹雪を防ぐことをな」
「このままでは」
アフロディーテの顔にも焦りが出て来た。
「それならば」

「ほう、やはりそう来たか」
アフロディーテが薔薇を増やしそのうえで黒薔薇も含んできたのも見て言うのだった。
「先程と同じだな」
「言った筈です。この薔薇は攻防一体です」
だからだというのである。
「貴方の氷もまた」
「確かにな。防いではいる」
まさにそうだった。薔薇はやはり彼の吹雪を防いでいた。
「だが。守るだけだな」
ミシェイルが今度言うのはこのことだった。
「貴様ができているのは。違うか」
「確かに」
当然ながらアフロディーテ自身もそれはわかっていた。だからこそ今度は白薔薇を出してきたのだった。

第三十四話　氷と毒その五

「ならば今度は」
「その白薔薇か」
ミシェイルは先程彼の同志達を倒したその白薔薇を見るのだった。
「それで攻めるというのか」
「その通りです」
アフロディーテは右手にその白薔薇を見せそのうえで言ってきた。
「これで今度は貴方と」
「それならばやってみせるといい」
ミシェイルはその白薔薇を見ても臆するところはなかった。
「貴様の思うままにな」
「随分と余裕ですね」
「当然だ。既にその技は見た」
彼は言った。
「ならば。それがどういったものかもわかった」
「一度見た技はということですか？」
「それが聖闘士だけの専売特許とは思わないことだ」
ミシェイルは吹雪を放ち続けながらまた言うのだった。
「そういうことだ」
「どうでしょうか。それは」
しかしアフロディーテもまた引くものはない。
「私もまた。それがわからないとでも」
「というと私が読んでいるのを既にわかっているというのか？」
「さて」
ここではあえて答えないのだった。
「それはどうでしょうか」
「まあいい。とにかくだ」
ミシェイルの出す吹雪がさらに強くなってきていた。

「私のこの吹雪と貴様の薔薇。その勝負も続いているのだぞ」
「それもわかっています。ですが」
アフロディーテはさらに言う。
「この私の白薔薇を防いだ者は今までいないのですが」
「ならば放ってみよ」
ミシェイルの言葉はまた不敵なものになってきていた。
「私にな。そこまで言うのならばな」
「では。遠慮はしません」
アフロディーテも退くつもりはなかった。実際にその白薔薇を構えてだった。そのうえで今それをミシェイルに向けて放ったのだった。
「ブラッディローズ！」
白薔薇が放たれミシェイルに向かう。薔薇は冷気に穴を開けそのまま向かう。今まさにミシェイルの胸に突き刺さろうとするその時だった。
「何ィッ！？」
「残念だったな」
白薔薇は彼の左胸の前でその動きを止めた。そうしてそのうえで凍っていき粉々に砕けそのうえで落ちていった。薔薇を凍らしそのうえで防いだのであった。
「この私に薔薇は通じない」
「貴方の冷気もまさに攻防一体というわけですね」
「その通りだ。さてピスケスよ」
ミシェイルは砕け散った薔薇には目もくれずまたアフロディーテに対して声をかけてきたのだった。

第三十四話　氷と毒その六

「薔薇は砕けた。貴様に残されたのはだ」
「拳だけだと仰るのですね」
「そうだ。違うか」
まるでその拳を見たいかのような言葉であった。
「既に薔薇は防いだ。それともまだ薔薇があるというのか？」
「いえ」
しかしアフロディーテはその問いには首を振ることなく静かに述べて返すのだった。
「これで終わりです」
「紅、黒、そして白の三つの薔薇でか」
「その通りです。これで終わりです」
彼はまた述べるのだった。
「これで」
「そうか。ならば拳だけだな」
ミシェイルはそこまで聞いて確信したのだった。
「最早貴様は」
「いえ、まだです」
だが彼はそれもまた否定するのだった。
「私には拳よりも強い切り札がありましてね」
「切り札だと？」
「そうです。このピスケスのアフロディーテ最大最後の技」
こう言ってきた。
「それがまだあります」
「ではそれを今ここで見せるというのか」
ミシェイルは何時しかその吹雪を止めていた。そうしてそのうえでの言葉だった。アフロディーテもまたその薔薇を止め両者は攻防を中止していた。

「私に対して」
「必要とあらば」
カードを切ろうとしたそこで止めてきていた。
「お見せしますが」
「ならば見せてもらおうか」
ミシェイルはあえてカードを見させようとしてきた。この辺りは慎重にそれぞれカードを切ろうとして駆け引きを行っているのだった。
「貴様のその技をな」
「では今から」
「しかしだ。それならばだ」
ミシェイルもまたここでカードを見せようとしてきた。
「私もまた見せる必要があるのかもな」
「貴方も？」
「そうだ。私もまだ技はある」
彼は次第にカードを懐から出してきていた。
「このアスタロトのミシェイル最後の技をな」
「そして最大であると」
「その通りだ。必要とあらば見せる」
彼はまた言う。
「どうだ。見たいか」
「貴方が出すならば私も」
駆け引きはいよいよ静かにだが激しくなってきていた。そうしてその中で探り合いそのうえでお互いに勝とうとしているのだった。
「出しますが」
「面白い。ならばその技に勝利を収めた方が生き残る」
「その通りです」
「言った筈だが」
ミシェイルの言葉は氷の刃になった。
「私はアーレス様に貴様等の首を捧げるつもりだ」

「私もまたアテナに平和を捧げる身」
互いの仕える神も話に出された。
「それではいよいよ」
「決着をつけるとするか」
二人の小宇宙がまた激しくなってきていた。両者は互いに隙を窺い合いそのうえで決着をつけようとしていた。武漢での闘いは最後になろうとしていた。

第三十四話　　完

２００９・５・２３

第三十五話　持ち越される決着その一

持ち越される決着

二人の技が今まさに出されそれにより決着が着けられんとするその時だった。不意に戦場にあの女の声が届いたのであった。
「待て。ミシェイルよ」
「!?その声は」
二人はほぼ同時にその声に反応した。しかしそれはミシェイルの方が強かった。
「エリス様ですか」
「左様だ」
やはりそうだった。それはまさにエリスの声だった。
「私だ」
「何故ここに」
ミシェイルはその顔を上にあげていた。そうしてそのうえで彼女に対して問うのだった。
「お声を」
「そなたのことは見ていた」
エリスは次にはこう彼に告げるのだった。
「最初からな」
「左様でしたか」
「まずは見事な闘いぶりだった」
彼に対して労いの言葉も出すのだった。
「流石だ。アーレス様の翼に相応しい」
「有り難き御言葉」
ミシェイルは彼女のその労いの言葉に対して静かに礼を述べた。
「このミシェイル、恐悦至極です」
「だからこそ言う」
エリスはここでまた彼に言うのだった。

「そなたは下がれ」
「ここではですか」
「そうだ。わかったな」
その言葉は変わらない。
「ここはな。よいな」
「ではピスケスとの決着は」
「案ずることはない」
そのことについても確かに言うエリスだった。
「ピスケスの相手はそなただ」
「私ですか」
「そなた以外にはない」
こうまで言い切ってみせるのだった。
「それは絶対に保証する。この私がな」
「エリス様が」
「私はアーレス様の実の妹」
それだけにその言葉には絶対のものがある。彼女の言葉はアーレスの言葉でもあるのだ。つまり彼の名代ともなっているのである。
「わかるな」
「無論です」
そしてそれもわからないミシェイルではなかった。
「それでは。私は」
「他の者はピスケスには向けぬ」
これがエリスの彼への約束だった。
「わかったな」
「はい、それも」
「神が嘘を言うことはない」
彼女もまた神である。神としての誇りに基く言葉であった。
「これが私の意志だ」
「では。ここは」
「わかるな。安心して退け」

エリスは重ね重ね彼に告げてみせた。
「よいな」
「有り難き御言葉。それでは」
「ピスケスよ」
エリスはミシェイルを完全に説き伏せそのうえでアフロディーテに対しても声をかけるのだった。彼にも彼女の言葉ははっきりと聞こえていた。
「そなたもわかったな」
「面妖なことを」
しかしアフロディーテはエリスの言葉に対してこう返すのだった。
「私はアテナの聖闘士です」
「それはわかっている」
「いえ、わかっておられません」
彼は言うのだった。

第三十五話　持ち越される決着その二

「私がお仕えしているのはアテナただ御一人」
「それを知らないというのか？この私が」
「そうです。アテナの御言葉ならいざ知らず」
彼の言葉は続く。
「何故貴女の言葉なぞ」
「案ずるな。これは命令ではない」
エリスの方も彼に対してそれはできないのはよくわかっていた。
「そなたに命令することは私ではできない」
「その通りです。闘われるというのならいざ知らず」
さりげなく挑発も入れるアフロディーテだった。
「そのようなことは」
「しかしだ。ミシェイルは下がらせた」
だがエリスはこのことは確かに言ってきた。
「こちらはな。そなたには相手はもういない」
「確かに」
一方が下がればそうなるのは当然であった。最早自明の理というのすらおこがましい。
「それはその通りです」
「ではそなたも下がるしかないな」
ここまで話して見越したようにまた彼に述べてきたのだった。
「そうだな」
「はい、それでは私は今は」
「下がれ」
また彼に対して言ってきたのだった。
「命令でなくともな。よいな」
「わかりました。それではです」
「ミシェイル。下がれ」

「はい」
ミシェイルはまたエリスに対して言葉を返した。その際一礼することも忘れてはいない。
「それでは私はこれで」
「うむ。よいな」
「ピスケスよ」
彼はエリスに応えた後でアフロディーテに対しても言ってきた。
流石に今はあの全てを覆い尽くすような禍々しい小宇宙はない。しかしそれでも殺気ははっきりとあった。だが今はそれをあえて放つことはなく。己の中に入れてそのうえで彼に対して話すのだった。
「今はこれで終わりだ」
「仕方ありませんね」
アフロディーテも相手がこう言うのならば受けるしかなかった。
追撃をしようにもそれが果たせるような相手ではないこともわかったうえでだ。
「貴方とはまた」
「そうだな。しかしだ」
だがここで彼はまた言うのだった。
「覚えておくことだ」
「何をですか？」
「エリス様も認めて下さった。貴様を倒すのは私だ」
彼が言うのはやはりこのことであった。
「私だ。このことは覚えておくことだな」
「それは私もです」
アフロディーテもこう言い返してきた。
「私もまた。貴方を倒します」
「そうか。貴様もか」
「私の薔薇を破ったのは貴方がはじめてです」
闘いは終わったが隙は見せない。そのうえでの言葉だった。
「このことは決して忘れません」

「私の毒と氷もだ」
しかしミシェイルも言うことは同じであった。
「破ったのは貴様がはじめてだ」
「それではそれをはっきりさせる為に」
「貴様を倒す」
お互いにこの意志は変わらないのだった。決して」
「わかったな。それではだ」
「はい、また御会いしましょう」
言葉は丁寧だがそれでもそこにあるものは激しく剣呑である。
「その時は」
「最早言わぬ」
言う言葉はもう一つしかない、そういうことだった。
「それではな」
「ではピスケス、それに」
「私か」
「そうだ」
エリスは今度はサガに対して言ってきたのだった。

第三十五話　持ち越される決着その三

「ジェミニ、貴様に対してもだ」
「私まで言われるとは思わなかったがな」
「貴様だからこそ告げるのだ」
しかしエリスはこう彼に告げるのだった。
「貴様に対しても。またな」
「アフロディーテの相手はアスタロトの狂闘士」
サガもそれははっきりと聞いていた。
「それでは私の相手は。神だというのか？」
「そうだな。何なら私が相手をしてもいい」
エリスもそれは否定しない。むしろ乗り気なのを見せるのだった。
「私もまた闘いは好きだからな」
「そうか。では今ここで」
サガもまた己の小宇宙を隠さない。隠さないばかりかさらに増大させてきていた。それでこの場を完全に覆わんばかりの凄まじい小宇宙だった。
「決着をつけるか」
「それも面白いがだ」
だがエリスはここでこう言うのだった。
「私は今ここでは実体ではない」
「そうか。ならばいい」
サガもまた己の言葉を引っ込めた。そうしてそのうえで目を閉じて顔をやや俯けた。
「また会おう。その時の機会を待っている」
「ジェミニ。貴様はどうやら」
「何だというのだ？」
「面白い。やはりジェミニ」
不意にエリスの言葉が笑ってきた。

「貴様は一つの顔を持っているだけではないな」
「どういうことだ？」
「貴様もいずれわかる」
だがエリスはここではこう言うだけであった。
「貴様自身によってな」
「何を言っているかはわからないがこれだけは言っておく」
サガは冷静にエリスに返した。
「私はアテナの聖闘士」
「それはもう聞くまでもないが」
「それを言っておく。覚えておくことだ」
「話がわからんな。だが私にあるのはアテナへの心のみ」
それだけだと言うのである。
「それ以外にはない」
「それはどうかな」
「おかしなことを仰いますね」
アフロディーテもまた今のエリスの言葉に対して言ってきた。
「サガはアイオロスと並んでアテナへの忠誠心が最も強い聖闘士です」
「ピスケスよ、貴様もそう思っているだけなのだな」
「だけと限定するのがわかりません」
アフロディーテはエリスの言葉にあえて突き放したように返した。
「私でなくとも他の誰が見てもサガにあるのは正義のみ」
「正義か」
「そうです。アテナに捧げる正義」
それだけだと言うのである。アフロディーテはあくまで。
「それを否定しているわけではないようですが」
「もう少し考えてみることだな」
エリスの声には含み笑いがあった。
「ジェミニ、貴様自身がな」
「言っている意味がわからぬ」

サガはエリスの言葉をこうも言ってなお否定した。
「神ともあろう者が戯言を言うとも思えぬが」
「安心するがいい。私は戯言は言わぬ」
彼女自身もそれは否定するのだった。
「ただ真実だけを言うのだ」
「では今の言葉は一体」
「よく考えてみるのだな」
やはりこう言うだけであった。
「よくな」
「わかりはしないがわかったと言っておこう」
サガの返答はこれであった。
「それではな。私から話すことはもうない」
「私もだ」
サガだけでなくエリスもであった。
「ではこれで。去らせてもらおう」
「それではエリス様」
ミシェイルがまたエリスに対して一礼した。上にその思念を漂わせている彼女に対して。

第三十五話　持ち越される決着その四

「私もまた」
「トラキアで待っておるぞ」
「はっ、ではピスケスよ」
最後にアフロディーテに顔を向けて述べるのだった。
「また会おう」
「はい。それでは」
両者は互いを一瞥した。ミシェイルはそれが終わるとそのうえで姿を消したのであった。彼の姿はそのまま霧のように消えていく。これが闘いの終わりを告げた言葉であった。
エリスの小宇宙も消えていた。残っているのはアフロディーテとサガだけである。二人はそのまま氷の上に立ち続けていた。
「終わりましたね」
「とりあえずはな」
「はい、あくまでとりあえずです」
アフロディーテはこうサガに言葉を返したのだった。
「この武漢での戦いが終わっただけですから」
「これで三つの戦いが終わった」
サガは静かに述べた。
「ドイツ、アメリカ、中国でだ」
「そのそれぞれの戦いでお互い黄金聖闘士と八大公を出しています」
双方切り札を出しているというわけである。これが持つ意味はかなり大きい。
「そして激しい戦いが行われました」
「只それだけなのだろうかな」
サガはここでこう言った。
「果たして。戦いが行われているだけなのか」
「何かあるというのですね」

「我々の知らない何かがだ」
サガはまた言った。
「あるのかも知れないな」
「ですがそれを知ることはまだできません」
アフロディーテはサガに己の言葉を言いはしなかった。こう言うだけであった。
「我々には」
「察したとしてもそれは真実ではないだろう」
「おそらくは。それよりもです」
アフロディーテはここではサガに顔を向けて述べてきた。
「サガ」
「先程のエリスの言葉か」
「そうです。貴方の顔は一つではない」
アフロディーテもまたこのことを彼に対して言うのだった。
「そう言っていましたね、確かに」
「確かに私の星座はジェミニだ」
これはサガが最もわかっていることだ。
「顔は二つだが」
「どういうことでしょうか、それは」
「わからん。だが私自身がわかることか」
サガも考える顔になっていた。
「他ならぬ私自身が」
「エリスは戯言を言いませんが」
それもまたわかることだった。何故かというとエリスは己のプライドにかけて言っていたからだ。神にとって誇りとは絶対のものであるからだ。
「ですが惑わすことはあるかと」
「いや、あれは惑わしでもない」
サガはそのこともまた見抜いているのだった。
「まず間違いなくな」

「では何なのでしょうか」
「やはりわからない。しかしだ」
「それでも戦うしかありませんね」
「その通りだ。中国での戦いは終わった」
サガはこのことは静かに述べた。
「間違いなくな」
「ではこれで」
「そうだ。白銀に青銅の者達はだ」
「はい、サガ様」
「ここに」
まずミスティとアルゴルの二人の白銀の者達が前に出て来た。
「そして青銅の者達もまた」
「全員います」
「では安心していいのだな」
「はい、それは御安心下さい」
「我等もまた無事でした」
「ならばいい」
サガはそれを聞いてまずは安心したように応えたのだった。
「御前達も大変だったな」
「いえ、我等もこれが務めなので」
「全く」
「そうか。それならいいがな」
それでも彼等への労いも忘れないサガだった。

第三十五話　持ち越される決着その五

「御苦労だった。それでは聖域に戻る前にだ」
「はい、その前に」
「どうされるおつもりですか」
青銅の者達も戻ってきていた。そうしてそのうえでサガに対して言ってきていた。
「私が御馳走しよう」
「御馳走ですか」
「サガ様が」
「そうだ。我々はここから香港を経て聖域に戻る」
そうなっている予定だったのだ。
「そのうえでだ。いいな」
「我々もですか」
「聖域に戻る前に」
「御前達も闘った」
自分やアフロディーテだけではないというのだった。二人だけではないと。
「ならば当然のことだ」
「ですが我々は」
「雑兵の相手をしただけですが」
白銀の者達も青銅の者達も言うのだった。彼等の言葉は謙遜だった。
「それでもですか？」
「それだけなのですが」
「闘ったことに何の変わりがある」
サガはその彼等に対してまた告げた。
「違うか。御前達もよく闘った」
「では我々もまた」

「甘えて宜しいのですか？」
「甘えるも何も闘ったことは事実だ」
サガは何度もこのことを言うのだった。
「それでどうして謙遜する必要がある」
「その通りです」
ここでアフロディーテも言うのだった。
「貴方達は充分に闘いました」
「アフロディーテ様も」
「そう仰るのですね」
「闘ったことに何の違いがありますか？」
彼等にしてもそれは同じだというのだ。アフロディーテの言葉にしろサガのそれと同じだった。そうした意味で二人の言葉は同じであるのだ。
「魔神も雑兵も何の違いもありません」
「そうなのですか」
「それで我々も」
「何の遠慮もいらない。それに金もある」
「お金もですか」
「そうだ」
また答えるサガだった。
「だからだ。安心して食べるがいい」
「そこまで仰るのなら」
「我々も」
「よし。話はこれで決まりだ」
サガはまた静かに述べた。
「八人だ。いいな」
「はい、それでは是非」
「喜んで」
こうして彼等の中国での戦いは完全に終わった。そうしてそのうえで聖域に戻る前に馳走を楽しむのだった。戦いが終わったことは

聖域にもすぐに伝わった。
「そうか。アフロディーテもサガも無事だったか」
「送り出した白銀や青銅の者達もです」
またシャカが教皇の間においてシオンに対して答えていた。
「皆無事です」
「それは何よりだ。しかし八大公の一人である」
「アスタロトのミシェイルですか」
「そうだ。あの男の前にエリスが姿を現わしたか」
彼がここで言うのはこのことだった。
「争いの女神エリスが」
「そのようです」
シャカもまた冷静な声でシオンに述べた。
「どうやら八大公は全員温存させているようです」
「しかし多くの狂闘士達がまた倒れた」
ドイツ、アメリカでの戦いに続き中国においてもであるのだ。
「これは非常に大きいと思うのだがな」
「いえ、それはどうでしょうか」
しかしここでシャカはシオンに対してその言葉の色を変えてそのうえで述べてきた。

第三十五話　持ち越される決着その六

「教皇、かつての冥皇ハーデスの軍勢ですが」
「冥闘士達か」
「そうです。彼等は不死だったと聞いています」
そのアーレスと縁の深い彼等のことである。アーレスとハーデスの関係は深い。アーレスはアテナとの戦いに敗れた時に冥界に逃れている程である。そして今も冥界の奥深くに封印されているというのである。
「ですから狂闘士達もまた」
「不死だというのか」
「若しくはアーレスの力により再び立ち上がる」
シャカはこうも言った。
「その可能性は否定できませんが」
「むう、そうだな」
シオンもシャカの言葉を聞いて静かに頷く。その表情は仮面の下に隠れており決して見えることはないがそれでもである。
「それはその通りだ」
「そうです。我々としてはアーレスの復活は何としても阻止しなければなりません」
これは言うまでもないことである。それも絶対にだ。
「ですがそれをどのようにしてするかは」
「それもまたわかってはいない」
「その通りです」
アーレスの復活を阻止する方法もまだ今一つわかっていないのである。
「どうもこうして戦っていること自体が妙ですが」
「トラキアの策に嵌っているというのか」
「そこまではわかりませんが」

また言うシャカであった。
「ですがそれでもです」
「戦わなくてどうにもならない」
シオンはまた言った。
「どうにもな。そして次の戦いはだ」
「はい」
「既に送るべき黄金聖闘士は定めている」
既に決定しているのだった。
「既にな」
「ではすぐにでも戦いに」
「その通りだ。戦いがまた行われる」
シオンの言葉は続く。
「すぐにな」
「わかりました。それでは」
「そしてシャカよ」
シオンはあらためてシャカに対して告げてきた。
「御前はだ」
「何でしょうか」
「このまま聖域の護りを頼む」
彼への言葉はこれであった。
「わかったな」
「わかりました。それでは」
「黄金聖闘士が一人出陣すればそれだけ聖域の護りが弱くなるのは確かだ」
これはまさにその通りだった。聖域の護りはそのまま黄金聖闘士に直結する。しかしである。彼等はこの度の聖戦では常に二人を出陣させている。その分の護りが必要なのである。
「だがそれを埋める為にはだ」
「私がですか」
「その通りだ。御前には聖域にいてもらわなければ困るのだ」

シオンは彼をあくまで聖域の護りと考えているのだった。
「何があろうとも」
「では私はこの聖域を」
「護るのだ。よいな」
「はい、それでは」
「狂闘士達は油断できぬ」
シオンは彼等を決して侮ってはいなかった。
「だからこそだ。備えは用意しておくことだ」
「そしてその備えこそがこのシャカであると」
「聖域の護りは御前に任せる」
こうまで言うのだった。
「よいな。護るようにな」
「はい、わかっております」
シャカは静かに頭を垂れそれに応えるのだった。
「それはもう」
「頼むぞ。ではな」
「わかりました。そういえば教皇」
話は終わりではなかった。ここでシャカの方から教皇に対して言ってきたのだった。

第三十五話　持ち越される決着その七

「一つトラキアの方から感じ取ったものがあります」
「感じ取ったものだと？」
「そうです。トラキアには今現在多くの禍々しい小宇宙が集まっていますが」
「狂闘士達のだな」
「そうです。それです」
彼が言うのはまさにこのことであった。
「それが四つ増えたようであります」
「四つか」
「そしてその四つが何やら不穏な動きも見せています」
こう話すのである。
「どうやら」
「妙だな」
シオンはシャカの話をここまで聞いたうえで述べたのだった。
「それはまたな」
「どう思われますか、これは」
「まずその小宇宙はただの小宇宙ではない」
これは言うまでもないことであった。すぐに見抜けるものであった。
「魔神を司る者達のものか」
「その通りかと」
やはりそれしかなかった。考えられることは。
「それが四つ生じております」
「そうか。四つか」
「まず八大公のものと思われる強大な禍々しい小宇宙が感じ取られ」
シャカの言葉は続く。
「そして数は減りましたがそれに続く小宇宙が感じられ」

「その他にその四つか」
「そうです。その四つの小宇宙です」
付け加えてであった。
「四つの小宇宙が感じ取られているのです」
「魔神がここであらたに四柱か」
「何かがあるのは間違いないな」
「ですが問題はです」
シャカの言葉はさらに続けられた。
「この魔神達はどうやら出陣はしないようです」
「出陣はしないというのか」
「まだトラキアに留まっています」
今も彼等の小宇宙を探り続けている。そのうえでの言葉だ。
「そうしてあのエリスの周りに主に集っているようです」
「エリスか」
「そうです。小宇宙がそこに集まっています」
シャカだからこそ感じ取れることであった。
「間違いなく」
「エリスの指示の下で動くか」
「それでは一体何を」
「出陣はさせている」
これは聖域の方も同じである。
「しかしそれとは別にか」
「老師を狙っているでは？」
シャカは不意にこうしたことも言うのだった。
「まさかとは思いますが」
「狙っているのならそれはそれで結構なことだ」
だがシオンはそれを聞いても動じたところはなかった。
「あの男はそう簡単にはやられはしない」
「だからですか」
「そうだ。だからあの男に関しては何の問題もない」

だからこそよいということであった。
「気にすることもない」
「では。教皇を」
「私をか」
「はい。御言葉ですがその御命を狙っているのではないでしょうか」
シャカはここでも言葉の調子を変えない。あくまで淡々としている。それが実にシャカらしい、そうしたことを思わせる口調であった。
「聖域に潜入したうえで」
「その為に御前がいる」
しかしシオンはここでまたこのことをシャカに告げた。
「御前がな」
「だからこその護りですか」
「そして常に数人の黄金聖闘士達がいる。皆に全てを任せる」
実に思い切った言葉であった。彼は聖域も己もその護りを全て彼等に任せているからである。
「全てをな」
「では教皇、私が」
「頼むぞ。それにだ」
「それに？」
「アーレス、そして狂闘士は多くの戦力で攻めることを好む」
彼が次に言うのはこのことだった。
「多くのな。暗殺も考えられるがそれよりも正面からだ」
「そのうえで戦いを挑むというのですね」
「私はそう見る」
これがシオンの読みであった。
「そうな」
「左様ですか」
「少なくとも暗殺で倒されるような者はいない」
シオンの読みにはそうした裏付けもあるのだった。

「黄金聖闘士にしろ」
「我々全員がですか」
「そうだ。そして私もだ」
シオン自身もだと言う。
「私もだ」
「そうですね。確かに」
シャカは世辞を言う男ではない。これはシオンの実力を知っての言葉である。シオンとてただ教皇になった男ではないのだ。先の聖戦で生き残ったアリエスの黄金聖闘士である。
「それは」
「だからだ。暗殺が通じる我等ではない」
シオンは確信していた。
「間違ってもな」
「だからこそ正面からですか」
「来る。そして我等はそれに備えてだ」
「正面から戦うというと」
「そういうことだ。ではそれでだ」
「はい」
「アフロディーテが戻り次第黄金聖闘士達を招集する」
再び彼等を集めるというのだった。
「すぐにな」
「それではそのように」
「そしてそのうえでまた集める」
こう話をしていくのだった。中国での戦いは終わった。しかしそれはまた新たな戦いのはじまりであった。今またそれがはじまろうともしているのだった。

第三十五話　　完

2009・5・28

第三十六話　四つ目の戦場その一

四つ目の戦場

まずはトラキアにミシェイルが帰還した。彼は程なくしてアーレスの宮殿にあるエリスの間に招かれた。そこには既に同僚である八大公達が集まっていた。

「よくぞ戻った、ミシェイルよ」

「はい」

まずは片膝をつきそのうえで頭を垂れている。他の八大公達の中に入り。

「御苦労であった」

「多くの同志達を失ってしまいました」

だがその労いの言葉に対してはこう返すミシェイルだった。

「申し訳ありません」

「よいのだ」

しかしエリスはそれをよいとするのだった。

「それはな」

「よいといいますと」

「御前達が気にしなくてもいいことだ」

ミシェイルだけではなく八大公全員への言葉だった。

「これはな。そういうことだ」

「左様ですか」

「御前達はよくやってくれている」

エリスの言葉は続く。

「それによりまた一つ我等の目的に近付いた」

「有り難き御言葉」

「あそこで御前を下がらせたのもその一環なのだ」

今度はミシェイルに向けた言葉だった。彼女はあくまで狂闘士達に対しては鷹揚であり公平な態度を崩さない。しかも声は血塗られ

た色ではあったが穏やかなままだった。
「それはな」
「そうだったのですか」
「御前の相手は既に決めておいた」
話は中国におけるものそのままになってもいた。
「それは安心しておくのだ。よいな」
「はい、それではそのように」
「今は身体を休めよ」
エリスはまたミシェイルに対して労いの言葉をかけた。
「よいな」
「はい、それではそのように」
こうしてミシェイルとの話は終わった。しかしエリスの話はこれで終わりではなくあらためて八大公全員に対して声をかけるのであった。
「それでだ。まずは中国での戦いも終わった」
「はい、それは」
「これで三つ目の戦いがです」
「そして次は」
「四つ目の戦いだ」
話はそこに及ぶのだった。その四つ目の戦いに。
「それだがな」
「はい、それです」
「場所は一体」
八大公達はそれぞれエリスに問う。エリスはその彼等の問いに答えこう述べたのだった。
「メソポタミアだ」
「メソポタミアですか」
「今はイラクと呼ばれるあの国だ」
その国だと今彼等に話すのだった。
「あの国に向かってもらう」

「そうですか。あの国に」
「我等もよく知るあの場所に」
ここで彼等はこうしたことも言うのだった。
かつてギリシア時代にはギリシア人達はメソポタミアにも行くことがあった。アレクサンドロス大王の時代はそこも勢力圏内だった。そしてローマ帝国時代はこの地で宿敵ペルシアと長きに渡って戦ってきていた。だが彼等にとってはそれだけではないのである。
「我等の故郷の一つとも言うべきあの場所に」
「そこに向かうというのですね」
「その通りだ。今度の戦いはな」
こう述べていくのだった。
「それでよいな」
「はい、是非共」
「栄誉なことです」
彼等の声はこれまでよりもうわずったものであった。彼等にとってメソポタミアや小アジアはその戦衣になっている魔神達の故郷であるのだ。だからこそその思い入れはかなり強いのである。
「それは」
「そうであろう。そしてそこに向かうのはだ」
「はい、それは」
「誰でしょうか」
彼等の声がさらにうわずったものになった。
「一体どの者があの地に向かうのでしょうか」
「一体」
「ドーマよ」
エリスがここで呼んだのはこの男の名だった。

第三十六話　四つ目の戦場その二

「御前が行くのだ」
「私がですか」
「そうだ」
あらためて彼に告げる。
「御前が行け。よいな」
「有り難き御言葉」
「御前の軍団を率いてな」
こうも彼に告げるのだった。
「行くのだ。いいな」
「はい、それではそのように」
「これで四つだ」
またここで四つという数字が出された。
「四つ目の戦場となる」
「残るはあと四つ」
「そしてそれが全て終われば」
「そうだ。その時こそだ」
エリスの声もまた変わってきていた。その声の調子が。
「我等の望みが果たされる」
「そうです。その時こそ」
「我等がこの地上を支配できます」
「そして他にもだ」
エリスの言葉はこれで終わりではなかった。
「用意がある」
「といいますと」
「あの方も」
「そうだ。あの者達もだ」
エリスは彼等に告げるのだった。

「間も無くこの世に出るのだ」
「あの方々も来られるとなればまさに我等にとっては」
「水を得た魚も同じ」
八大公の言葉は笑みを浮かべたものになっていく。
「そして聖域を倒すことがほぼ確実になるのですね」
「その二つが合わされば」
「その通り。我等の勝利は確実なものとなる」
また言うエリスだった。
「それでよいな」
「わかりました。それでは」
「我等はアーレス様の為に」
「闘うのだ。それではだ」
エリスはここでまた彼等に対して言う。そしてドーマに顔を向け
彼の名を呼んだ。
「ドーマよ」
「はい」
「ではすぐにここを発つのだ」
こう彼に告げるのだった。
「すぐにな。その軍勢を連れてだ」
「わかりました。それでは」
「他の者はこのトラキアに留まっているのだ」
彼等に対しても告げるのだった。
「このトラキアでな。よいな」
「はい、わかっております」
「では今は」
「戦いは続く」
このことは間違いないといった口調であった。
「わかったな。それではだ」
「わかりました」
こうして今は彼等は控えるのだった。程なくしてドーマがその軍

勢と共にトラキアを発つ。戦いがまたはじまろうとしていた。メソポタミアにおいて。

そして聖域でも。黄金聖闘士達がシオンの前に集っていた。皆片膝をつきそのうえでシオンの前に控えている。彼等の先頭にいるのはアフロディーテであった。

「アフロディーテよ」

「はい」

彼は静かな声でシオンの言葉に応えた。

「よくぞ戻ってきた」

「有り難き御言葉」

「中国での戦い御苦労だった」

彼は次に労いの言葉をかけた。

第三十六話　四つ目の戦場その三

「サガもだ。実によくやってくれた」
「かたじけのうございます」
サガもまたその言葉に応える。
「その御言葉。実に」
「今は休むことだ」
次にシオンはこう二人に声をかけた。
「そのうえで戦いの疲れを癒せ。よいな」
「わかりました。それでは」
「御言葉に甘えまして」
「それでだ」
シオンは二人に声をかけ終わると今度は黄金聖闘士全員に対して声をかけた。
「次の戦いだが」
「はい」
「次は」
「今トラキアから小宇宙が発つことを感じ取った」
こう彼等に告げるのだった。
「トラキアからな」
「ではやはり」
「またしても戦いが」
「そうだ。すぐに行われる」
それしかなかった。今まで通りであった。
「すぐにな」
「してその場所は」
「この度は何処へ」
「イラクだ」
狂闘士達の動きをこのうえなく読んだうえでの言葉であった。

「イラクに向かっている。十の巨大な禍々しい小宇宙と無数の小宇宙がな」
「では今度はイラクですか」
「戦いの場は」
「そして出陣した八大公だが」
シオンはこのことも感じ取っていた。その小宇宙から何処までも深く感じ取っているのだった。伊達に先の聖戦を生き残り教皇を務めているわけではなかった。
「モロクのドーマだ」
「モロクですか」
「そうだ。モロクのドーマだ」
再度この名前を彼等に告げた。
「あの男が出て来た」
「モロクのドーマですか」
「モロクといえば」
「そうだ。魔神の中で最も強力に秀でた者だ」
それだというのである。
「その者が出て来る」
「魔神の中で最も力が強いのですか」
「そういえばあの男は」
彼等はここでローマにおける対峙を思い出した。あの時のことを。
「八大公の中で最も大柄でした」
「その巨体を使ってですか」
「そうだ。その男が来るのだ」
このころを強調するシオンであった。
「だからこそこちらもだ」
「誰を出すのですか？それで」
「この度は」
「アルデバラン」
彼が呼んだのはこの男であった。

「よいか」
「はい」
名を呼ばれたアルデバランはすぐに応えた。
「このアルデバランがイラクになのですね」
「その通りだ。御前に命じる」
また彼に対して告げた。
「イラクに行け。いいな」
「わかりました」
アルデバランは断ることなく彼に対して頷いてみせた。
「それではすぐに」
「何度もいうがモロクは強力の魔神だ」
このことを本当に何度も告げるのだった。
「その強さはよく認識しておけ」
「わかっております」
「そしてだ」
そしてそれだけではないのであった。

第三十六話　四つ目の戦場その四

「モロクは力だけの魔神ではない」
「といいますと」
「かつてモロクはゲヘナで崇拝されていた」
シオンが次に言ったのはこのことだった。
「このことも覚えておくことだ」
「ゲヘナにおいてですか」
「その通りだ。では行くがいい」
シオンはこれ以上は言おうとはしなかった。
「イラクにな。そして戦って来るのだ」
「はい」
また頷くアルデバランであった。彼は重厚な態度でそれに応えていた。
「それでは今より」
「うむ、行くのだ」
また告げるシオンだった。
「御前もまた聖闘士達を連れてな」
「はい、それでは」
「では。これで話を終える」
シオンはアルデバランに告げ終えると他の黄金聖闘士達に対しても告げた。
「皆御苦労だった。下がっていいぞ」
「はっ、それでは」
「わかりました」
こうして話は終わった。アルデバランは程なくして出陣することになった。彼は出陣する前に金牛宮において他の黄金聖闘士達の言葉を受けるのだった。
「で、イラクだったよな」

「そうだが」
金牛宮の入り口においてだった。彼はまずデスマスクの言葉を受けた。彼等の後ろにある金牛宮はあくまで巨大であり勇壮なその造りはアルデバランに相応しい。そしてその下には白く長い階段が続いている。その遥かな先に白羊宮が見える。彼方にだった。
「それがどうかしたか」
「土産は何かねえのかよ」
「イラクといえばだ」
アルデバランはデスマスクの言葉を受けて真面目な顔になった。そうして顎に手を当てて熟考しそのうえで彼に答えるのだった。
「楔形文字だが」
「生憎だが遺跡は間に合ってるぜ」
デスマスクはそれは一笑で以って返したのだった。
「この聖域そのものがそうだしな」
「そういえばそうか」
「イラクといえば砂漠だ」
シュラは戦場について述べた。
「あの国はやはり砂漠だ」
「では砂漠での戦いだな」
「そうだ。戦い方には気をつけておけ」
彼が言うのはやはりこのことだった。
「砂漠での戦いは独特だからな」
「うむ、わかっている」
「そして八大公はモロクのドーマ」
アフロディーテは戦う相手のことを述べた。
「魔神の中で最も力に秀でた者です」
「そのようだな。そしてゲヘナで崇拝されていた」
「はい」
アフロディーテは頷いてもみせる。
「それもまた何かあるようです」

「ゲヘナといえば小アジアにある地の名前だが」
シュラはそれは知っていた。
「だが。イラクとはまた離れた場所にある」
「そうだな。あそこはあそこでややこしい場所だがな」
デスマスクは小アジアと聞いて眉を顰めさせていた。
「何かとな。物騒な場所だぜ」
「私もあの地のことは知っている」
今度口を開いたのはカミュだった。
「だが。ゲヘナか」
「カミュ、何か気付いたか？」
「いや、残念だが」
アルデバランの問いにも空しく首を横に振るだけだった。
「ゲヘナ。気になる名前だがな」
「しかしそこに何かがある」
アイオリアが言った。

第三十六話　四つ目の戦場その五

「間違いなくな」
「それはわかるのだが。ゲヘナか」
アルデバランはまた深い思索に入った。
「やはり何かがあるのだがな。その地には」
「しかしここで考えていてもだ」
今度言ったのはミロだった。
「行くしかないな。時間だ」
「その通りだ。間も無く俺はイラクに発つ」
アルデバランは上を見た教皇の間のところにある時計台を。聖域の時計台には十二の星座それぞれの輝きがある。その輝きを見ながら話すのだった。
「それはな」
「では行くのだ」
またアイオリアが彼に告げた。
「後のことは我々に任せてな」
「そうさせてもらう。それではな」
これでアルデバランは発とうとする。そこに最後に声をかけたのはシャカだった。
「アルデバラン」
「どうした、シャカ」
「貴方はただ力があるだけではありません」
このことを言うのだった。
「力だけではありません」
「俺は力だけではないか」
「そうです。そして技だけでもありません」
そしてこうも告げたのだった。
「貴方にあるものは」

「そして小宇宙だけでもだな」
「その通りです。それをよく承知しておくことです」
アルデバランに言う言葉はこれであった。
「よく」
「正直なところよくわからん」
アルデバランは実直な男である。わからないものはわからないと言う。その隠し事のない性格は同僚である黄金聖闘士達だけでなく聖域の多くの者の人望を集めている。
「だが。その言葉心に留めておく」
「心に留めておけばやがてわかる時が来ます」
シャカはこうも彼に告げた。
「それをよく御存知下さい」
「わかった。それではな」
「はい」
シャカはまた彼に対して告げた。
「御武運を御祈りします」
こうしてアルデバランは他の黄金聖闘士達に別れを告げそのままイラクに向かった。聖域の出口のところで六人の聖闘士達が彼を出迎えたのだった。
「アルデバラン様」
「お待ちしていました」
「俺と共に行くのは御前達か」
「はい、そうです」
「我々です」
こうアルデバランに返すのだった。聖域の門のところは白い柱や石の道がある。彼等はその中で話をしているのである。
「それで宜しいでしょうか」
「我々で」
「頼むぞ」
それを拒むことのなかったアルデバランだった。

「それではな」
「有り難き御言葉、それでは」
「御願いします」
まずは白銀の二人が彼に答えるのだった。
「このホエールのモーゼスと」
「ヘラクレスのアルゲティが」
隻眼の大男とその彼よりも大柄の岩の如き顔の男が名乗ってきた。
それが彼等の司る正座と名前であった。このことをアルデバランに対して告げたのだ。
「わかった、ではイラクだ」
「狂闘士達は我等にお任せを」
「是非」
「無理をすることはない」
アルデバランは彼等の申し出にはすぐに答えはしなかった。
「無理はな」
「いえ、ですが」
「それでもです」
しかしここで二人の聖闘士達は言うのだった。

第三十六話　四つ目の戦場その六

「アルデバラン様に負担をかけるわけには」
「その通りです」
「御前達には御前達がするべきことがある」
だがそれでもアルデバランは彼等にこう述べるのだった。
「決してそれを忘れるな」
「といいますと」
「我々は」
「それを忘れずに戦うのだ」
あくまでこう言うのだった。
「よいな」
「我等の為すべきことをですか」
「それを」
「そして俺は俺の為すべきことをする」
アルデバランはその言葉を自分自身に対してもかける。
「わかったな」
「わかりました。それでは」
「そのように」
「では。行くぞ」
ここまで言ってあらためて彼等に告げた。
「白銀はまずは御前達だな」
「その通りです」
「我等二人です」
「そして青銅は」
当然ながら彼に同行するのは白銀の二人だけではない。青銅の者達もだ。
「誰が来るのだ？そして何人だ？」
「はい、我々です」

「我々が御供します」
こうして出て来たのは四人だった。四人の聖闘士達が彼の前に姿を現わしたのだった。
「是非我等も」
「行かせて下さい」
「御前達は」
アルデバランはまずは彼等の言葉を受けてそれぞれ名乗ってきたのだった。
「麒麟座のチク」
赤茶色で精悍な顔の少年だった。明るく微笑んでいる。
「鳩座のグリーザ」
チクよりは若い少年だった。黒髪が長い。
「時計座のニコライ」
白い肌に青い目の少年である。四人の中で最も背が高い。
「望遠鏡座のブリット」
金髪に緑の目の細い身体の少年である。この四人だった。
「我等が御供させて頂きます」
「それで宜しいでしょうか」
「うむ」
そしてアルデバランは静かに彼等の言葉を受けるのだった。
「それでは。行くか」
「我等もまた力を尽くします」
「御期待下さい」
「その言葉受けた」
アルデバランの言葉は白銀の二人に向けたものとほぼ同じになっていた。
「しかしだ。わかるな」
「己の分を尽くせ」
「我等もですか」
「決して無理はするな」

あくまでこう四人にも言うのだった。

第三十六話　四つ目の戦場その七

「いいな。それでな」
「ですがそれは聖闘士としてあまりにも」
「そうです」
チクとグリーザがここでアルデバランに告げてきた。
「そんなことではなりません」
「その通りです」
「我等もまた死力を尽くし」
「戦わせて頂きます」
「それはいいのだ」
アルデバランは今度はニコライとブリットの言葉を受けたがそこにも何かを含んでいた。
「それはな」
「宜しいのですか、それは」
「では」
「しかしだ。決して無理はするな」
それでもこのことを何度も念を押して告げるアルデバランだった。
「決してな」
「では」
「命を賭けよ」
これはいいとする。
「しかしだ。命を粗末にはするな」
「？仰る意味がわかりませんが」
「どういうことですか？」
「言葉はそのままだ。命は粗末にするな」
いぶかしむ青銅の者達に対してまた告げるのだった。
「決してな。よいな」
「はあ」

「粗末にするなですか」
彼等はアルデバランの言葉の意味がどうしても理解できなかった。
「命は賭けても」
「粗末にするなとは」
「アルデバラン様、それは」
「どういうことですか？」
白銀の二人もそれはわかりかねた。それで彼等もまたいぶかしむ顔になりアルデバランに対して問うのだった。問わずにはいられなかった。
「いずれわかる」
「いずれですか」
「では今は」
「少なくとも俺は御前達を死なせるつもりはない」
彼の本音であったがそれでもそこにあるものを理解できるのは六人の聖闘士の中にはいなかった。やはりいぶかしむばかりであった。
「それはわかっておけ」
「そうなのですか」
「死なせるつもりはない」
「それは有り難いのですが」
このこと自体は、であった。
「ですがアルデバラン様」
「我等も聖闘士です」
このことを忘れてはどうにもならない。彼等が聖闘士だからこそその誇りがあり全てがある。だからこそ忘れることはないのだった。
「それから外れることはありません」
「そう、決して」
「それもまたわかっている」
アルデバランはあくまで彼等の言葉を受けていた。しかも正面から。
「では。そのうえでだ」

「はい、イラクに」
「今こそ」
六人全員で述べる。そしてだった。
「狂闘士達を倒しましょう」
「あの地で」
「うむ。では行くぞ」
今アルデバランが最初に一歩を踏み出した。
「戦場にな」
「はい、それでは」
「我等も」
今七人の聖闘士達が戦場に足を踏み出した。そうしてそのうえで戦いに向かう。四度目の戦いが再びはじまろうとしているのだった。

第三十六話　　完

２００９・５・３１

第三十七話　砂漠においてその一

砂漠において

闇の中で。今彼はいた。

そこにあるのは闇だけだった。音も何もない。ただ無限に広がる虚空の中に彼はいた。

しかし彼は孤独ではなかった。その無限の闇の中にふと。彼に声をかける者がいたからだ。

「元気か」

「叔父上か」

若い男の声だった。しかも端整であり張りもある。その声で応えていた。

「何用だ」

「貴殿に仕える者達が今必死に動いている」

「そのようだな」

男の声はそれを聞いて微笑むのだった。

「どうやらな」

「嬉しいか？」

声はまた楽しそうに男に問うてきた。

「そのことが。貴殿の為に動いているということが」

「嬉しくない筈がない」

男の声は微笑んでいた。

「それがな」

「そうか。やはりな」

「私の愛する者達だ」

そして今度は愛とも言うのだった。

「その者達が働いてくれているのだ、私の為にな」

「そして貴殿が欲する世界の為にだ」

「そして私はそれに応える」

男はまた言った。
「必ずこの世界から出る。叔父上」
「うむ」
話をさらに続けていく。
「今までのこと礼を言う」
「礼には及ばん」
それはいいとするのだった。声の主は。
「こちらとしても貴殿の世は臨むことだ」
「だからか」
「戦いがあればそれだけ多くの死す者が出る」
声は笑っていた。
「それは私にとっても非常に有り難いことだからな」
「死者は叔父上のもの」
男はこうも言った。
「そしてこの世は私のものとなる」
「お互いにとって実に素晴らしいことだ」
「しかしだ」
だがここで男はふと声に対して己の声をかけてきたのだった。
「叔父上に一つ聞きたいことがある」
「何だ？」
「叔父上も地上を欲しているのではないのか」
こう彼に問うのだった。
「違うか。それは」
「私がか」
「叔父上は過去幾度もアテナと聖戦を経ている」
「その通りだ」
そのことは隠しはしないのだった。声もまた。
「それがどうかしたか」
「叔父上もまた地上を欲しているということだな」
男はそのことを問うのだった。

「違うか。それは」
「だからどうだというのだ？」
声はそのことを隠そうともしなかった。
「それで。どうだというのだ」
「先に奪った方がということか」
「貴殿の信条ではないのか」
声は楽しそうな含み笑いと共に男に問うてきた。
「それは」
「力か」
男は声が何を問いたいのかわかっていた。だからこそすぐに応えることができたのだった。
「力こと正義ということだな」
「力を持つ者が全てを手に入れる」
声はまた言ったのだった。
「そうだったな」
「そう、その通りだ」
声はまた楽しそうに笑いながら応えてきた。

第三十七話　砂漠においてその二

「だからだ。私もまたそれに従っているだけだ」
「それはもう一人の叔父上も同じか？」
ふと問うてきたのだった。
「それは」
「おそらくな」
声の返答は断言こそはしていなかった。だがわかってはいるようだった。
「我が兄とはいえ。あの男の野心は始末に終えぬものがある」
「そして我が父上もだな」
男はまた楽しそうに笑ってきたのだった。
「父上も。地上を欲している」
「我等が兄弟はそれぞれの世界を持っている」
声はそれも言った。
「しかしだ。それだけでは足らないのだ」
「地上もということだ」
「その通りだ。貴殿が地上を望むのはよい」
「しかし私に隙があればということか」
「それもまた貴殿にとって悪いことではあるまい」８６
声はまた楽しそうに男に語っていた。
「違うか」
「私のこの世で愛するものは」
男の声もまた楽しそうに笑っていた。その声で語る言葉だった。
「私に仕える者達と」
「そして何だ」
「戦い」
「ほう」
「そして血だ」

この三つだというのであった。
「戦いと血をもたらせてくれるのならばそれでよいのだな」
「それが叔父上であろうともな」
「よい。それでこそ貴殿だ」
声は男のその言葉をここまで聞いて納得したようだ。そうしてそれでこそなのだった。
「私が好む貴殿だ」
「その時になれば好きなだけ戦おうぞ」
声に対しても臆するところはなかった。そこに有り得ないまでの小宇宙を感じてはいてもだ。彼自身も星を包み込まんばかりの小宇宙を放っていた。
「それでよいな」
「望むところだ。それではだ」
「うむ、では間も無くだな」
「私は地上に戻る」
男の声は確信であった。
「そして私が地上をこの手に収めたそのうえはだ」
「私もまた向かうとする」
「その時を楽しみにしているとだけ言っておこう」
「既に私のこの度の身体は用意しておいた」
「ふむ」
男は声の今の言葉に応えてまた頷く声を出すのだった。
「そうなのか」
「本来の身体は相変わらずこの世界にあるが」
「叔父上も変わっているな」
男は声の言葉をここまで聞いてまた述べた。
「本来の身体を使わず常に仮の身体を使うとは。何故だ」
「私の身体は私が最も愛しているものだ」
超えは語るのだった。
「それが傷付くことはだ。何としてもあってはならない」

「だからこそか」
「神話の時代より護ってきたあの身体はな」
「だが叔父上」
男は声に対してまた問うた。
「それでは叔父上の本来の力を出し切れないのではないのか」
「私のか」
「そうだ。力は本来の身体にあってこそ完全な力を発揮する」
男が言うのはこのことだった。
「それであえてか。叔父上は仮の身体を使うのだな」
「何があろうともな」
声の決意は絶対のものだった。そこから感じられるものは。
「それは変わらない」
「考えてみれば本来の身体であったならばだ」
男の言葉は考える色も入ってきた。
「アテナに傷付けられる恐れもあるな」
「その心配はない」
声はその件については頭から否定するのだった。有り得ないといったように。

第三十七話　砂漠においてその三

「私がアテナに敗れる筈がない」
「それだけの力があるからこそか」
「その通りだ。私はこの世界を統べる者」
声は誇らしげに語ってみせてきた。
「その私がアテナなぞに遅れを摂るはずがない」
「本来の姿ならばだな」
「言ってくれるな。次にはだ」
「その時を楽しみにしている」
男もまた実に楽しそうに声に返すのだった。これからのことを心から期待しているかのような声で。
「叔父上と手合わせするその時をな」
「我が僕達は不死身だ」
声の声に闇が混ざった。いや、それはむしろ本来からあったものだが今それをあえて出したかのような。そうした闇が混ざった声であった。
「それをよく覚えておくようにな」
「それは私の僕達もだ」
男も言葉を返す。
「不死身と不死身か。面白い」
「楽しい戦いになりそうだな」
「ではだ。その戦いの為にだ」
男の声が起き上がったようになった。
「私は間も無く地上に戻る」
「うむ」
「そしてアテナの軍勢を蹴散らしてくる」
「そうして私の元に多くの死者達がやって来る」
また声が闇を露わにさせた声を出してきた。

「いいことだ」
「それではだ」
男はこれで話を終わらせようとしてきた。
「これから二人で食事とするか」
「食事か」
「そうだ。たまには二人でどうだ」
こう声に対して提案するのだった。
「共にな。叔父上の僕達でも交えて」
「いいな。貴殿と共に食事を摂るのもな」
彼もそれをいいと言うのだった。
「ではだ。ネクタルとアンブロシアはあるか」
「無論」
既に用意されていたかのような質問であった。そう、既に。
「ではそれでな」
「楽しくやるとするか」
「そうだな。そうしよう」
彼等はこう言葉を交えさせていた。そうしてそのうえで何処かへと小宇宙を消したのだった。彼等もまた何かを話し合いそうして何かを期待していた。
その頃アルデバラン達はイラクに着いていた。しかしそこはイラクはイラクでもまだ砂漠ではなかった。
そこは岩山だった。草木一つとしてなく黒い岩と枯れた土があるだけである。そしてその荒涼とした岩山が高くそびえ連なっている。彼等はそこにいるのだった。
「あれっ、イラクっていっても」
「砂漠じゃないんですか？」
「とはいってもここは随分と荒れてますね」
「何か人っ子一人いませんし」
「ここは国境だ」
アルゲティが重い声で辺りを見回し声をあげる青銅の者達に対し

て告げた。
「国境のな」
「ああ、っていうとあれだよな」
「つまりここはだ」
「イラクとトルコだのシリアだのの国境か」
「そうだよな」
「その通りだ」
今度はモーゼスが彼等に答えた。
「ここはな」
「っていうとクルド人自治区か」
「つまりここがか」
「その通りだ」
アルデバランは後ろにいる彼等を振り向かなかった。しかしそれでも彼等に対して告げるのだった。
「とはいってもここは居住地域ではないがな」
「サダム＝フセインが滅茶苦茶やってましたからねえ」
「あの独裁者が」
青銅の者達は今度は口を歪ませてかつてこの国にいた所謂独裁者に対しての批判をはじめた。それは彼等にとっては常識の話であった。
「あいつがクルド人を弾圧して虐殺していましたからね」
「それだけは何とか終わったんでしたっけ」
「それがあったのは事実だ」
アルデバランもそのことは否定しなかった。

第三十七話　砂漠においてその四

「しかしだ」
「しかし？」
「何かあるのですか？アルデバラン様」
青銅の者達は今のアルデバランの言葉に怪訝な顔になった。そうしてそのうえで彼に問うのだった。
「フセインっていったら完璧に独裁者じゃないですか」
「贅を極めて国民を弾圧してきた」
「しかしそれだけではなかった」
だがアルデバランはこう言うのだった。
「だからこそ聖域も彼に対しては動かなかったのだ」
「そうだったのですか？」
「それで」
「我々が動く時は完全な災厄、そして悪が動こうとした時」
その時だというのだ。
「その時なのだ」
「ではフセインは完全な悪ではなかったと？」
「そうなのですか」
「そうだ。フセインといえどだ」
彼はまた言った。
「完全な悪ではなかった」
「じゃあ何が悪なんですか？」
「それじゃあ」
「己しか考えずその為に手段を選ばぬ者」
まずはこう言うアルデバランだった。
「そして卑劣を極める者」
「そういうのが悪なんですか」
「まあそうですよね」

「息を吐くように嘘をつく者、他人の善意を逆手に取っても何とも思わぬ者だ」
「そういうのは邪悪って言いますよね」
「たしかに」
青銅の者達はアルデバランの言葉に納得した顔で頷いていくのだった。
「そういう連中は確かに」
「まさに悪ですよね」
「そういう者達をだ。悪と呼ぶのだ」
「ではフセインはそこまでは至ってなかったと」
「そう仰るのですね」
「そして地球を脅かすような存在でもなかった」
所詮はその程度と言えばそれまでである。しかしフセインがそこまで邪悪な存在ではなかったのも事実だと。アルデバランは言うのだった。
「邪悪は必ず罰せられる」
「ええ、それは」
「その通りです」
今度の言葉は青銅の者達も頷くことができた。すぐに。
「その裁きを下すのがアテナであり」
「実行するのが我々です」
「そして世界の平和を守ることもだ」
そうしたことこそが聖闘士の務めだ。やはりアルデバランはよくわかっていた。
「それをわかっておくことだ」
「はっ、それでは」
「そのように」
またアルデバランの言葉に対して頷いてみせる青銅の者達だった。
「ではアルデバラン様、これから」
「とりあえずはバグダートに向かいますか」

「そうだな。まずは首都だ」
首都には最もよく情報が集まる、それを頭に入れての言葉である。
「それでいいな」
「はい、それでは」
「このまま」
「それでアルデバラン様」
アルデバランと青銅の者達の会話が終わったところでであった。
モーゼスが口を開いてきた。
「既に車は用意してあります」
「速いな」
「聖域を発つ前に金牛宮の者達が手配してくれていたものです」
こうアルデバランに話すのだった。
「実は」
「何っ、そうだったのか」
これはアルデバランも知らないことだった。話を聞いて驚きの声をあげたのがそれの何よりの証拠であった。やはり彼はこのことを知らなかったのだ。

第三十七話　砂漠においてその五

「あの者達がか」
「費用は聖域全体からのものですが」
「そんなものは金牛宮から出せないのか」
「その辺りは複雑なのですよ」
アルゲティは微笑んでアルデバランに話した。
「アルデバラン様だけでしたら費用は金牛宮から出ますが」
「うむ」
「ですが我等もいますので」
「そういえば今回俺達の分もだよな」
「そうだよな」
ここでまた青銅の者達が言葉を出す。顔を見合わせながら。
「聖域から出てるんだよな」
「俺達のじゃなくて」
「出張という扱いになるからな」
モーゼスがその彼等に対して説明した。
「世間で言うところのな」
「そうか、出張か」
「仕事なんだな、本当に」
「そういうことだ。これでわかるな」
モーゼスはその右目を彼等に向けながらまた述べた。
「その辺りの事情は」
「ええ、まあ」
「それなら」
「アルデバラン様も同じです」
またこうアルデバランに話すアルゲティだった。
「あくまで出張ですので費用は聖域から出ます」
「俺一人の場合と違ってか」

「移動費や食費は聖域から出ます」
この事情も話された。
「御一人で行かれる場合とは違って」
「では俺一人の場合は聖域からは費用は出ないのか」
「はい、そうなります」
こう話されるのだった。
「その辺りはです」
「何で黄金聖闘士一人だとそうなるんだ？」
「ちょっとおかしいよな」
「訳わかんねえっていうかよ」
「それは黄金聖闘士だからだ」
モーゼスがまた青銅の者達に述べる。
「黄金聖闘士はこうした場合には我等を指揮するな」
「ああ、まあな」
「何せ黄金聖闘士だからな」
最早理由はこれで充分であった。
「俺達を指揮するからか」
「それで一人の時とは違うのかよ」
「そうなるのだ。もっとも黄金の方々が出陣されるということはだ」
モーゼスはさらに彼等に対して語る。
「そのこと自体が滅多にないことだがな」
「じゃあ今もか」
「それでか」
このことにも気付く彼等であった。
「けれどそれだけ旅行の時好き勝手金を好き勝手使えないよな」
「聖域自体から出ているんだからな」
事情はさらに複雑なものになった。余計にだ。
「けれどそれでも金牛宮が手配してくれてるなんてな」
「親切だよな」
「あの者達には礼を述べなければな」

アルデバラン自身もこのことはよくわかっているのだった。
「気付かなかったのは俺の迂闊だ」
「左様ですか」
「それではだ」
ここまで話してまた述べるアルデバランだった。
「モーゼス、その車だが」
「はい」
「もうすぐ来るのだな」
「はい、そうです」
すぐに答えるモーゼスだった。

第三十七話　砂漠においてその六

「間も無くです」
「そうか。わかった」
アルデバランはあらためて彼の言葉に頷いた。
「それではだ。それでまずはバグダットまでだな」
「えっ、首都までですか！？」
「ここから」
青銅の者達はそれを聞いて皆驚きの声をあげた。
「それはかなり辛いのでは？」
「そうです」
「ここまでバグダットですと」
「かなりの距離がありますが」
こうそれぞれ言うのであった。
「それでも車ですか」
「それはかなり」
「費用節約だ」
だがモーゼスはこう言うのだった。
「何なら音速で歩くか？」
「いえ、それはちょっと」
「遠慮するぜ、悪いがな」
青銅の者達はモーゼスには比較的身近な言葉だがそれでも言うことは同じだった。
「じゃあやっぱり車か」
「これでバグダットまでか」
「空で行くことも考えたがな」
ここでアルゲティも言ってきた。
「飛行機かヘリでな。一気に行くこともだ」
「じゃあ何でそれをしなかったんだよ」

「そうだよ、それだったらすぐだったのによ」
「では聞くがだ」
アルゲティと入れ替わりのようになってまたモーゼスが彼等に告げる。
「空にいる時に敵に襲われたらどうするつもりだ？」
「敵っていうとやっぱり」
「あの連中だよな」
「そうだ、狂闘士だ」
やはり彼等であった。
「奴等が空から来たらどうする？」
「どうかですか」
「それは」
「そうなったら終わりだな」
真顔で彼らに対して問うモーゼスだった。
「そうなったらな」
「確かに。そうなったら」
「俺達もとても」
彼等はそれを聞いて顔を曇らせるのだった。
「その時はな」
「覚悟を決めるしかないよな」
「覚悟を決める前にそういうものには乗らないことだ」
そしてこう言うモーゼスだった。
「いいな、それでな」
「わかったさ、それじゃあよ」
「ガタゴトと揺られてくか」
「長旅をよ」
「まあ乗り心地は安心しろ」
アルゲティはここでこんなことも言ってきた。
「今はな。いいな」
「乗り心地はいいのか？」

「そんなに」
「日本車だ」
それだと青銅の者達に告げるのだった。
「乗り心地はいいぞ」
「おっ、日本車か」
「だったら結構期待できるよな」
「だよな」
顔を見合わせて言い合う青銅の者達だった。
「日本車だったらな。それでな」
「そうだな。じゃあ辿り着いたのを待ってな」
「行くとするか」
「おそらくバグダットに辿り着くまでに仕掛けてくる」
アルデバランは敵の動きを既に読んでいた。
「必ずな」
「必ずですか」
「来ない筈がない」
そしてこうも言うのだった。

第三十七話　砂漠においてその七

「奴等がな」
「そういえばこれまでの戦いも」
「決戦までに仕掛けてきていますね」
「報告ですと」
青銅聖闘士達はここでまた述べた。
「まずは雑兵達が」
「それもかなりの数だそうで」
「そうだ。絶対に来る」
彼は断言した。
「奴等はな」
「じゃあその時は俺達が」
「露払いは任せて下さい」
青銅の者達は洸申し出てきたのだった。
「そういうことで御願いします」
「それで」
「いや、それには及ばん」
だがアルデバランはその彼等に対してこう言うのだった。
「それにはな」
「！？といいますと」
「まさかアルデバラン様が」
「そうだ、奴等が狙っているのは俺だ」
アルデバランはこのこともわかっているのだった。
「それならばだ。俺が出るだけだ」
「雑兵達にもですか？」
「それは」
「御前達は御前達で働いてもらう時が来る」
しかしアルデバランは彼等に対してこう返すのみだった。

「その時に。頼むぞ」
「どうする？」
「そうだよな」
だがここで彼等は顔を見合わせて難しい顔をするのだった。
「そうは言ってもな」
「俺達だってここに来たからにはな」
「それだよな」
「いや、アルデバラン様の仰る通りだ」
またモーゼスが言ったのだった。
「我々はアルデバラン様の指揮下にあるな」
「あ、ああそれはな」
「その通りだけれどな」
黄金聖闘士と他の聖域の者達の間には隔絶たる差がある。青銅聖闘士でさえ雑兵達とはかなりの差がある。しかし黄金と彼等のそれはまさに天と地程どころではない差があるのだ。
「じゃあやっぱり」
「アルデバラン様の仰る通りにか」
「そういうことだ。わかったな」
こう彼等に告げるのだった。
「ここはな。いいな」
「わかったぜ、それじゃあな」
「それに従うさ」
彼等もそれで納得したのだった。
「俺達も聖闘士だ。それならな」
「それでいい」
「納得してくれて何よりだ。それではだ」
「おっと、そういえばだ」
「なあ、モーゼスちょっといいか？」
「聞きたいことがあるんだけれどよ」
ここでまた青銅の者達が彼に対して言うのだった。

「その日本車のことだけれどな」
「いいか？」
「何がだ？」
「あのさ、運転するのは」
「誰なんだ？」
「俺だ」
まずはモーゼス自身が名乗り出た。

第三十七話　砂漠においてその八

「それでこの俺だ。御前達は車に乗れる年齢だったか？」
「ま、まあそうだけれどな」
「まだそれにはな」
彼等はまだ若い。車の免許を取れる年齢にはまだ達していなかったりするのだ。これは多くの青銅の者達に共通して言えることであった。
「実はまだ免許持っていないんだよな」
「悪いな」
「だから俺達が運転する」
アルゲティがあらためて述べる。
「それでいいな」
「別に問題はないと思うが」
「いや、それはわかったんだけれどな」
「二つ程気になることがあるんだよ」
しかし彼等はまだ言うのだった。
「ちょっとばかりな」
「それ、言っていいかい？」
「！？何のことだ？」
「何でもいいから言ってみろ」
二人は彼等の戸惑うような声にいぶかりながらもこう返した。
「別に怒ることはない」
「だからだ。何だ？」
「あんた達物凄くでかいからさ」
「アルデバラン様もそうだけれど」
実はこの二人は白銀聖闘士達の中で屈指の巨体の持ち主である。アルデバランに至っては黄金聖闘士、そして聖域で最も大きな男である。

「車に乗れるよな」
「日本車って結構小さいけれどよ」
彼等が言うのはこのことだった。車に乗れるかどうかということなのだ。
「乗れるんだよな、本当に」
「俺達も」
「それは安心しろ」
モーゼスは穏やかに彼等に答えるのだった。
「キャンピングカーを頼んでおいた」
「あっ、そうなのか」
「だったらいけるな」
「そうだよな」
「心配しなくていいな」
青銅の者達はキャンピングカーと聞いて顔を見合わせて明るい声になった。
「何だ、だったら安心していいな」
「それはな。だよな」
「よかったよかった」
「この俺が普通にワゴン車に入ればだ」
アルデバランの言葉だ。
「残念だがそれだけで一杯になってしまうからな。身体が大きいというのも考えものだ」
「まあアルデバラン様が悩まれることじゃないですけれど」
「それは」
彼が言葉を出すと青銅の者達も恐縮するしかなかった。
「別に気にされることじゃないですよ」
「そうそう」
「これはそういうことだ」
アルゲティがまた彼等に告げる。
「しかしもう一つあったな。それは何だ?」

「そうそう、それそれ」
「それなんだけれどな」
彼等はここでまた言うのだった。
「ここに車が来るんだよな」
「そのキャンピングカーが」
「そうだが」
アルゲティはそれがどうかしたのかといった口調だった。

第三十七話　砂漠においてその九

「その通りだが」
「だったら。どうやってなんだ？」
「運転するあんた達はここにいるけれどさ」
「今運転しているのは誰なんだ？」
彼が今度尋ねるのはこのことだった。
「運転してここに車を運んでくるのは」
「誰なんだよ、一体」
「あんた達がここにいるのにさ。誰なんだよ」
「そのことも心配する必要はない」
だがまたモーゼスが彼等に答えるのだった。
「それもな。抜かりはない」
「あれっ、じゃあ超能力か？」
「それで動かしてるのか？ひょっとして」
聖闘士の中には超能力を使える者もいる。とりわけ黄金聖闘士になるとセブンセンシズに目覚めているだけあってその超能力はかなりのものであるのだ。
「まさかとは思うけれど」
「アルデバラン様が。ひょっとして」
「いや、俺は今は何もしていない」
その本人の言葉だ。
「超能力もだ。使ってはいない」
「あれっ！？それじゃあやっぱり」
「モーゼスかアルゲティがか？」
「そうなるよな」
彼等はこう考えた。しかしすぐに気付いたのであった。
「けれどよ、二人共超能力そんなに得意か？」
「だよな、あまり聞かないよな」

「なあ」
二人は白銀聖闘士達の中ではパワーファイターとして知られている。超能力を使うことでは殆ど知られていないのである。
「確かに俺は超能力は得意ではない」
「俺もだ」
そして二人もそれを認めた。
「そういうものはな」
「あまりな」
「まあそうだろうな」
「そんな感じだからな、どう見てもな」
「なあ」
そして青銅の者達もそれで納得するのだった。そして納得したここでその車が来たのだった。見れば見事な白いキャンピングカーだった。
「で、運転してるのは？」
「誰なんだよ」
「実は人を雇っていた」
答えたのはアルゲティだった。
「俺とモーゼスで手配をしていた」
「実はな」
「ああ、そうだったのかよ」
「何だ、何かって思えばよ」
「そんなことだったのだよ」
「当たり前だ。幾ら何でも超能力をわざわざここで使うものか」
モーゼスが彼等に答えた。
「狂闘士達に見つかってしまうだろうが」
「まあそうか」
「そういえばな」
言われてそのことに気付く彼等だった。今更だが。
「とにかくこれでバグダットまでだよな」

「じゃあそういうことでな」
「さて、では乗り込むぞ」
アルデバランが彼等に告げてきた。
「暫く車での生活になる。いいな」
「ええ、わかりました」
「それじゃあ」
彼等はそれに頷きそのうえで乗り込み発進するのだった。ここまで車を持って来た現地の人とはお金を渡した上で別れた。そうして遂に彼等も進みはじめた。

第三十七話　　完

２００９・６・６

第三十八話　牛の角その一

牛の角

アルデバランが出陣した後の聖域では。残った黄金聖闘士達がまた集まりそのうえでテーブルを囲んで座っていた。今度は双魚宮の庭だった。

宮殿のすぐ外に緑の庭がある。そしてその上には様々な色の薔薇達が咲き誇っている。紅もあれば白もあるし紫もある。そして桃もあれば青も黒もある。実に見事な咲き誇りだった。

「で、この薔薇は毒はないんだな？」

「はい」

アフロディーテがデスマスクの言葉に答えていた。彼等は白い円卓を囲みそこにいる。

「この薔薇達にはありません」

「じゃああれか」

デスマスクはその言葉を聞いて述べた。

「あの薔薇はあくまで特別な薔薇なんだな」

「そうです。私の咲かせる馬鹿には二つあります」

こう言うのだった。

「毒のある薔薇とない薔薇がです」

「そうだったのか」

「はい、ですからこの薔薇達は安心して下さい」

ここまで話したうえでの言葉であった。

「安全ですから」

「それはわかった」

シュラもまたその言葉を受けて頷いた。

「ではこの料理にあるものもか」

「はい」

アフロディーテはここでグラスを手に取った。見ればそのグラス

には紅のワインがある。そしてその中には白い薔薇の花びらが漂っていた。
「その通りです。薔薇は食べられますが」
「そうだったな」
「この薔薇にも毒はありません」
「それなら心ゆくまで楽しませてもらおう」
シュラのワインにもまた白薔薇が入っていた。そのワインを薔薇ごと飲むのだった。
「ふむ、いい味だ」
「喜んで頂き何よりです」
アフロディーテもまた彼のその飲む姿を見て微笑みを浮かべた。
「他の料理も楽しんで下さい」
「薔薇のサラダに薔薇が飾られたムニエルか」
アイオリアがその薔薇で飾られた料理を見る。サラダやスープには紅の、ムニエルには白の薔薇の花びらがある。やはり食べられるものだ。
「どれも確かによさそうだな」
「そうだな。それにデザートは」
ここでカミュはそのデザートを見る。それは。
「紅の薔薇が入ったプティングか」
「そうです」
デザートはそれなのだった。パンは普通の白いパンであるがやはりそこにも紅や白の薔薇のジャムが添えられていた。やはり薔薇づくしである。
「それもまたお楽しみ下さい」
「中々いい趣向だ」
クールなカミュもそれを見て楽しそうに微笑んでいる。
「楽しめそうだな、今日もな」
「確かにな。いい味だ」
アイオリアは早速サラダを食べていた。緑のレタスに赤いキャベ

ツとラディッツ、そしてそこにアップルと薔薇がある。そこにオリーブのドレッシングをかけているのだ。
「この味は。食べやすいな」
「薔薇は案外癖がないのだな」
ミロもその薔薇を食べていた。
「これは。かなりいい」
「そういえばです」
今度口を開いたのはムウだった。
「アフロディーテ、一つ御聞きして宜しいでしょうか」
「何でしょうか」
「かつてのピスケスの聖闘士アルバフィカですが」
「はい」
言わずと知れた先の聖戦での英雄の一人だ。単身薔薇の園を築き冥闘士の大軍に向かい命を賭けて戦った勇敢な男である。
「あの方は確かその血に毒が流れていましたね」
「そのようですね」
「毒のある薔薇を操るが為に」
ムウはこのことを知っているのだった。
「その血には毒がありました」
「というと」
シャカは目を閉じたままその話を聞いて述べた。
「アフロディーテ、貴方にもまた」
「おそらくはそうでしょう」
そしてアフロディーテもそのことを認めるのだった。

第三十八話　牛の角その二

「私も薔薇の毒を操るのですから。ですが」
「ですが？」
「どうやらそれは私が念じた時以外は出ないようです」
こう仲間達に答えるのだった。
「現に今こうして薔薇の御馳走を振舞っていますが」
「ああ、俺は何ともないな」
「俺もだ」
デスマスクとシュラが言った。
「毒だったらとっくに死んでる筈だけれどな」
「何ともないな」
「毒を無意識のうちにコントロールできるようです」
また言うアフロディーテだった。
「どうやら」
「そうなのか」
「毒をか」
「そのようです」
今度はアイオリアとカミュに対して述べたのだった。
「私は」
「そこがかつてのアルバフィカとは違うようですね」
アフロディーテはそこまで話をして述べた。
「それは」
「そのようです。それが何故かはわかりませんが」
「私が毒を操る術を身に着けた」
彼は言った。
「それもまた何かあるのでしょうか」
「教皇が言っておられました」
ムウはここでシオンの話をするのだった。

「かつてアルバフィカは人と触れ合うことはできませんでした」
「そうだな」
ミロが今の彼の言葉に頷いたのだった。
「毒があればそれはな。できはしない」
「その通りです。だからこそ彼は孤独でした」
あくまでこれはムウが彼から聞いた話である。しかしそれでも教皇の言葉であるだけに真実であることがわかる話だ。教皇だからこそだ。
「ですから」
「しかし私はこうして人と会える」
アフロディーテは今度はこのことを話したのだった。
「これはかつてのアルバフィカの願いだったのでしょうか」
「おそらくは。そして」
「そして？」
「それは貴方だけではないようです」
今度はこう話すのだった。
「私達全員がです」
「俺達全員が？」
「というと一体」
「どういうことなんだ？」
ムウの言葉に他の黄金聖闘士達がいぶかしむ顔になった。シャカですから目を閉じたままであるがそれでも話すのだった。
「それは」
「俺達がかつての彼等の願いを適えていると」
「そのようです。それがどうしてかはわかりませんが」
ムウもそれはわからないようである。
「しかしそれも何かあるのでしょう」
「何か？」
「それは」
「ですからそれはどうもわからないのです」

やはりそれもわからないというムウだった。
「しかしです。私達は彼等の願いを適えている」
「その願いを」
「そうして今ここに」
「何か話がわからなくなってきたな」
デスマスクも首を傾げるばかりだった。
「俺達があの時の黄金聖闘士達の願いを適えてるってか」
「エルシドだったか」
シュラはその彼の名を知っていた。当然ながら。
「俺は彼の願いを適えているのか」
「俺もなのか？」
ミロもこの話を聞いたうえで述べた。
「やはり。あの時のスコーピオンの願いを」
「私もそうなるのか」
カミュも言った。
「彼の果たせなかったものをか」
「あの時代の聖戦は激しいものだった」
アイオリアはその時のことは文献で読んでいた。そのことを知らない黄金聖闘士はいない。いや、聖域にいる者ならば誰でもであった。

第三十八話　牛の角その三

「その中で生き残った者は二人だけだった」
「教皇と老師のみ」
シャカが言ったその二人だけであるのだった。
「御二人だけだったな」
「はい、御二人にとってあの時の黄金聖闘士達はです」
ムウはまた述べた。
「まさに盟友でした」
「その盟友の願いを私達が果たしているのですか」
アフロディーテもまた言うのだった。
「思えば不思議なことですね」
「そうですね。どうやら私達は何か運命の中にいるようです」
ムウは話しているうちにそのことに辿り着いたのだった。
「何かを果たす為に」
「ではムウ」
シャカが彼に声をかけてきた。
「これからですが」
「これから？」
「私達は多くの戦いを経ていきます」
このことは確かに言えた。何故ならそれが聖闘士の務めだからだ。特に彼等は黄金聖闘士だ。それならば余計に戦いが増えるのも当然だった。
「ですからまた」
「そうですね。確かに」
そしてムウも彼のその言葉に頷くのだった。
「そうなっていくでしょう。その中で私達は多くのものを見る筈です」
「死人の顔が増えていくだろうな」

デスマスクはあえて軽口で述べていた。
「俺の場合はよ」
「しかしそれでいいみたいですね」
「構わないさ、わかってることだからな」
そしてこうムウに返すのだった。
「もうよ。増えるのなら増えればいいさ」
「増えればですか」
「そうさ。死んだ奴の言いたいことは聞いてやる」
いつもデスマスクの言葉とは微妙に変わっていた。
「ちゃんとな。聞いてやるさ」
「そうですか」
「俺もだ」
今度言ったのはシュラだった。
「俺にあるのは剣だが」
「はい」
「この剣でこれからも多くの者を切り捨てていく」
彼もまたそれはわかっているのだった。
「ならばだ。その切り捨てた者の命は受けていく」
「貴方もなのですね」
「私もですね」
そしてそれはアフロディーテも同じなのであった。
「それは」
「では貴方の薔薇で見送った者も」
「その通りです」
彼もまたムウに答えるのだった。
「背負っていっています」
「だからですね」
ムウは三人の言葉を聞いてから静かに述べるのだった。
「貴方達が彼等の願いを適えているのは」
「それが全部じゃねえだろうな」

「そうだな」
「はい、確かに」
しかし三人はそれだけではないともここで言った。
「俺達はそれだけのものを背負わないといけないんだろうな」
「聖闘士としてな」
「この手で敵を倒すからこそ」
「それならばだ」
アイオリアはこれまで出陣したその三人の言葉を受けてまた述べた。
「俺達もそうなる。聖闘士である俺達もだ」
「その通りだな。私も御前達と同じだ」
カミュはその三人を見て告げていた。
「この手で戦うからには」
「その通りです」
ここで彼等に告げたのはムウだった。
「その手で戦うならばそれだけのものを背負わなければなりません」
「そうでなければ戦うなということか」
ミロがやや俯いて述べた。
「聖闘士として」
「そうなります。さて、アルデバランは」
「彼ならば問題はありません」
シャカは目を閉じたままだった。しかしそれでいて全てを見ている、そんな言葉だった。

第三十八話　牛の角その四

「それについては何も」
「心配無用ということですね」
「彼は全てわかっています」
ムウに対して述べた。
「だからです。心配は無用です」
「では。ここで見せてもらいましょう」
ムウはシャカの言葉を聞いて静かに言葉を出した。
「彼の戦いを」
「そうですね」
ムウの今の言葉に頷くアフロディーテだった。
「では皆さん、今は」
「ああ、そうだな」
「頂かせてもらう」
デスマスクとシュラが彼等に対して答えた。
「この薔薇づくめの料理をな」
「遠慮なくもらおう」
「はい、どうか遠慮なく」
アフロディーテもまたそれを勧めるのだった。
「召し上がって下さい」
こうして彼等は今はアフロディーテの作った馳走を食べる。そうしてそこでイランでのアルデバランの戦いを見守るのだった。静かに。
アルデバラン一行はバグダットに進んでいっている。周りにあるのは荒野と畑、それに街。しかしそれのどれもがギリシアのものとは全く違っていた。
「何ていいますかね」
「如何にもイスラムって感じですね」

「そうだな」
アルデバランはニコライとチクの言葉に応えた。彼等はキャンピングカーの席に座っている。そこでコーヒーを飲み菓子を食べながら話をしていた。
「それにこの菓子も」
「何か変わった菓子ですね」
蜜をたっぷりとかけた焼いた三角のドーナツだった。それを食べているのだ。
「何ですか？これ」
「結構美味いですけれど」
「アラビアンナイトにあった菓子だ」
アルデバランはグリーザとブリットの言葉に対して返した。
「それを作ってみた」
「へえ、アルデバラン様料理上手なんですね」
「そういえばシェラスコとか得意でしたよね」
「牛料理は得意だ」
アルデバランは彼等の言葉に応えて述べた。
「他にはな。菓子も得意だ」
「へえ、それでこれですか」
「このドーナツですか」
「そうだ。どうだ」
彼もまたその巨大な手でドーナツを手に取りながらその言葉に応える。応えながらドーナツを食べると蜜の甘みとドーナツの香ばしさが同時に口の中を覆っていく。菓子を食べているということを教えてくれる実に素晴らしい感触を彼も楽しんでいるのだった。
「このドーナツは」
「ええ、いいですね」
「美味いですよ」
青銅の者達はそのドーナツを食べながら笑顔になっている。
「ただ。手を汚すのが問題ですね」

「それでフォークで取ってますけれど」
「そうだな」
だがアルデバランは手に取って食べていた。蜜がその手に付いている。
「しかしだ。そんなこともあろうかと」
「何かあるんですか？」
「それで」
「これを用意しておいた」
そう言って出してきたのはウェットティッシュだった。それを彼等に対して見せたのである。
「これをな」
「それで手を拭くんですか」
「そのティッシュで」
「少し考えた」
また述べる
アルデバランだった。
「この辺りは水が貴重だな」
「そうですね。それは確かに」
「砂漠ですし」
これは当然のことだった。イランは砂漠地帯が多い。それならば水が貴重になる。これはイラクだけでなくイスラム圏全体に言えることだった。

第三十八話　牛の角その五

「それじゃあそれで」
「出来るだけ水を使わずにですね」
「そういうことだ。それではだ」
アルデバランは食べ終えるとそのティッシュで手を拭くのだった。
「食べ終えたならば拭いてくれ。いいな」
「はい、それじゃあ」
「それで」
青銅の者達は彼等の言葉に応える。そうしてそのうえでドーナツとコーヒーを楽しんでいた。暫く食べているとだった。前にいたモーゼスとアルゲティがアルデバランに言ってきた。
「!?アルデバラン様」
「前に」
「わかっている」
アルデバランはすぐに言ってきたのだった。
「ならばだ」
「敵ですね」
「狂闘士。来ましたね」
青銅の者達もその表情を一変させた。
「どうやら」
「案外早かったですね」
「全員出るぞ」
アルデバランは次にこの言葉を彼等に告げた。
「いいな、すぐにだ」
「はい、わかってます」
「それじゃあ」
彼等はすぐに車から出た。出た時には全員聖衣をその身に纏っている。とりわけアルデバランは黄金聖闘士の証の一つであると言っ

てもいいマントさせその身に纏っていた。その姿で車から出て戦闘態勢に入っているのであった。既に戦う気に満ちていた。
「狂闘士だな」
「そうだ」
車の前に立っていた巨人がアルデバランの問いに答えてきた。
「俺のことは知っているな」
「無論だ」
アルデバランは鋭い声で彼に返した。
「八大公、モロクのドーマだな」
「如何にも」
男はアルデバランを見据えて答えた。
「タウラスよ、久し振りだな」
「そうだな。貴様が来るとはな」
「八大公モロクのドーマだと！？」
「この男がそうだというのか」
アルデバラン以外の聖闘士達は彼の言葉を聞いてその顔を一斉に険しくさせた。既に戦う気に満ちていたがそこにある警戒の色がさらに強まっていた。
「狂闘士達の頂点に立つ八大公の一人」
「この男がか」
「それだけではない」
モーゼスはとりわけ驚きを隠せない青銅の者達に説明してきた。
「モロクとはどういった魔神か知っているか」
「モロク！？」
「いや」
彼の問いには青銅の者達は誰も答えられなかった。
「そういえばだ。一体どんな魔神なんだ？」
「かなり位が高いのはわかるけれどな」
仮にも八大公である。位が低い筈がないのはわかることだった。
これについては最早説明不要と言ってもいいことであった。

「しかし。どんな奴なんだ？」
「ゲヘナがどうとかっていうのは聞いたけれどよ」
「多くの魔神達がそうだったようにモロクもかつては崇められていた」
モーゼスはいぶかしむ彼等に対してまずはそこから話すのだった。
「そのゲヘナの地でな」
「何だよ、神様だってのかよ」
「ってことは」
「その通りだ。モロクはかつては神だった」
魔神ではなく神だったのだ。そういうことだったのだ。
「しかしだ。その加護の見返りに生贄を要求していたのだ」
「生贄！？」
「そんな神だったのかよ」
青銅の者達は生贄と聞いて顔を曇らせた。それは彼等にとっては最も忌むべきものの一つだった。彼等聖闘士、そしてアテナにとっては。

第三十八話　牛の角その六

「そうだ。そしてその生贄に求められるのは子供だった」
「子供だって！？」
「何てこった」
皆それを聞いてさらにその顔を顰めさせた。
「とんでもねえ奴じゃねえか」
「何なんだよ、それはよ」
「信者達はモロクを形どった巨大な金属の像の中に炎を燃やし」
「炎を」
「そしてその中に子供達をってわけかよ」
「それにより多くの子供達が生きながら焼かれた」
それがモロクへの崇拝だったのだ。生贄への。
「その断末魔の悲鳴を打ち消す為に太鼓が叩かれた。凄まじいまでにな」
「ちっ、そんな野郎かよ」
「とんでもねえ奴じゃねえかよ」
「これは言い訳になるが」
ドーマはその彼等の言葉を聞いて述べるのだった。
「俺は生贄なぞ望んではいなかった」
「ふざけるな！」
「現に貴様の為に多くの子供達が犠牲になったんだぞ！」
青銅の者達はこう言って彼を批判する。
「それで何でそんなことが言えるんだ！」
「事実だろうが！」
「確かに事実だ」
ドーマもそれは認める。
「俺は生贄は欲してはいなかった。そしてそれは今もだ」
「そうだな」

彼のその言葉に頷いたのはアルデバランだった。
「貴様はそうした者ではない」
「タウラス、貴様にはわかるのか」
「わかる」
彼はドーマを見据えてはっきりとした声で答えるのだった。
「貴様から感じられる小宇宙は確かに禍々しい」
「禍々しいか」
「狂闘士の小宇宙だ。しかし」
「しかし。何だ?」
「そこには邪悪なものはない」
こうドーマに告げるのだった。
「決してな。それはない」
「それでわかったのだな」
「そうだ。貴様は生贄なぞ欲してはいなかった」
アルデバランだからこそわかる、まさにそうしたことだった。
「貴様が欲しているのは力。そうだな」
「その通りだ」
まさにそれだというのだった。ドーマ自身も。
「俺が求めているのはそれだけだ。豪の力だ」
「そうだったな」
「だが。生贄の者達の心は忘れてはいない」
ドーマの言葉がここで変わった。
「俺の為に死んだ者達の心はな」
「!?こいつまさか」
「生贄なぞ望んじゃいなかったっていうのか?」
「そうだ」
アルデバランはドーマ自身の言葉を聞きいぶかしむ彼等に対して告げた。
「その通りだ。狂闘士といえど決して邪悪な者ではない」
「俺が欲するものは二つだけだ」

ドーマは堂々として言い切ってきたのだった。
「一つはアーレス様が治められる世界だ」
「まずはそれか」
「アーレス様こそがこの世を治められるのに相応しい御方」
如何にも狂闘士という言葉だった。
「だからだ。我等はその為に戦っているのだからな」
「だからこそなのだな」
「そしてだ。もう一つはだ」
彼はさらに言ってきた。
「力だ」
これだというのだ。

第三十八話　牛の角その七

「アーレス様のその世界を支えるだけの力。それを求めているのだ」
「その為の力をか」
「そうだ。アーレス様の世界を支え敵を倒す力をだ」
それこそが彼が求めている力だというのだった。
「俺はそれを求めているだけだ」
「わかった。貴様の心はな」
アルデバランはまた彼の言葉に頷いてみせた。
「それではだ。話はいいな」
「うむ」
ドーマもまたアルデバランの言葉に応えた。
「それではな」
「行くぞ」
二人の小宇宙がそれぞれ高まっていく。荒野の中で。モーゼス達はその彼等の小宇宙の高まりを見てそのうえで言うのだった。
「いよいよだな」
「そうだな。早いがな」
アルゲティがモーゼスの今の言葉に頷く。
「黄金聖闘士と八大公の戦いだ」
「ここでだな」
「何てこった」
「ここでかよ」
青銅の者達はこの事態に驚きを隠せないでいた。
「アルデバラン様と八大公がかよ」
「あのモロクの野郎とか」
「いや、案じることはないぞ。御前達もな」
「!?モーゼス」
「それは一体どういう意味だ?」

彼等は今度はモーゼスのその言葉に顔を向けた。
「来たのはモロクだけではないということだ」
「他の者もだ」
「っていうと奴等もかよ」
「ここに来たのだな」
「ふふふ、その通りだ」
「如何にも」
そしてここで。新たな声がしてきた。
「我等もいるのだ」
「ドーマ様だけではなくな」
「それだけ禍々しい小宇宙を放っていればわかる」
モーゼスはその声に対して述べたのだった。
「狂闘士達、そうだな」
「そうだ」
「我々こそドーマ様と共にこの古の地に来た狂闘士」
その声と共にであった。今彼等の前にまた新たな戦士達が姿を現わしたのだった。ドーマの後ろに控えるようにして現われた九人の戦士達、彼等もまた姿を現わしたのだった。
「さて、聖闘士達よ」
「覚悟はいいか？」
彼等はその目から禍々しい殺意に満ちた光を放ちながら聖闘士達に問うてきた。
「ここでこの地での決着を着ける」
「それでな」
彼等はそれぞれ身構える。そうしてそのうえで今向かおうとしていた。
「アルデバラン様」
「それでは我等も」
「いや、駄目だ」
しかしだった。彼はここで。モーゼス達の言葉を退けるのだった。

第三十八話　牛の角その八

「御前達はこの者達と戦うな」
「!?どういうことですか?」
「俺達はその為にいるんじゃないんですか!?」
青銅の者達が今の彼の言葉を聞いて怪訝な顔で返した。
「それでどうしてそんなことを仰るんですか?」
「そうですよ、おかしいですよ」
「おかしくはない」
だがそうではないと返すのだった。
「何故ならだ」
「何故なら?」
「どうだっていうんですか?」
「御前達では勝てはしない」
だからだというのだった。
「御前達ではこの者達にはな」
「狂闘士には勝てない!?馬鹿な」
「そんなことないですよ」
「そうですよ」
青銅の者達がやや感情的になってアルデバランに反論した。
「俺達だって聖闘士なんですよ」
「だからいけます、こんな奴等」
「ならん」
だがアルデバランは意固地なまでに。彼等の言葉を退けるのだった。
「御前達はこの者達と戦ってはならん、断じてだ」
「断じてですか」
「そうだ、絶対にだ」
アルデバランの言葉はあくまで強いものだった。

「御前達は戦うな。これは命令だ」
「じゃあアルデバラン様が御一人で」
「その連中全員とですか」
「魔神達と戦えるのは俺だけだ」
アルデバランはこうも彼等に告げたのだった。
「だからだ。このアルデバランが今こそ」
「来るか、タウラスよ」
「今我等に対して」
「そうだ。行くぞ」
アルデバランの言葉がこれまでで最も強いものになった。
「それでいいな」
「うむ、来るがいい」
「我等が相手をしよう」
九人の狂闘士達も身構える。そうして今アルデバランと狂闘士達の戦いがはじまろうとしていた。草木のない何処までも続く荒野の中で。

第三十八話　　完

２００９・６・１０

第三十九話　炎の魔神達その一

炎の魔神達

アルデバランは狂闘士達と対峙を続ける。そしてその中で彼等に対して問うのだった。
「それではだ。まずは」
「まずは。何だ？」
「御前達の名前を聞いておこう」
こう彼等に対して問うのだった。
「その名をな。よいか？」
「うむ、それではだ」
「名乗ろう」
既に名乗っているドーマ以外の九人がそれに応えるのだった。
「我等は炎の軍団だ」
「ここにおられるドーマ様とベリアルのレダ様が率いられるな」
「そうか、炎の軍団だ」
「そう、そしてだ」
アルデバランの言葉に応えながらそのうえで名乗ってきた。
「私は公爵、アモンのマーテル」
右目が青、左目が緑の美しい小柄な少女だった。
「侯爵、ナベリウスのヨーダ」
黒いさらりとした短髪の隻眼の男だった。右目が潰れている。
「侯爵、ボティスのアトラス」
黒い肌の大男だった。
「伯爵、ブエルのジュリア」
白い、いや銀の髪と目の女だった。
「子爵、カイムのロビン」
赤い髪の小柄な少年だ。
「子爵、オセのリベカ」

緑の髪と目の猫を思わせる女だ。
「男爵、フォカロルのグレイ」
灰色の瞳の長身の少年だ。
「公子、ベリスのディーン」
青い目の精悍な男だ。
「公子、マステマのデューテ」
紫の目に紅く長い髪の少女だった。
「我等九人」
「今ここで貴様を倒す」
「このアルデバランをだな」
「そうだ」
マーテルが彼に対して言葉を返した。
「我々がだ。行くぞ」
「来るがいい」
アルデバランはマーテルのその言葉に返す。
しかしであった。彼は腕を組んでいるだけである。そのうえで仁王立ちして動こうとはしない。その姿勢で狂闘士達と対峙しているのであった。
そしてそのことに。狂闘士達も気付いたのだった。
「何っ！？これは」
「どういうことだ？」
アトラスとロビンがそれを見て言った。
「タウラス、闘う気がないのか？」
「まさかとは思うが」
「ない筈がない」
だがアルデバランはそれを否定するのだった。
「このアルデバラン、戦場に出たからには必ず戦う」
「そうだな。だからこそ」
「我々もここで」
「しかしだ」

今度はヨーダがその左目で見据えながら言ってきた。
「やはり動かないのか。何故だ？」
「タウラスよ。何を考えているのだ」
「一体」
狂闘士達は彼の真意がわかりかねていた。その目をいぶかしげなものにさせている。しかしであった。彼等も動かないつもりはなかった。
「行きますよ」
「はい」
「それでは」
八人がマーテルの言葉に頷くのだった。
「すぐにあのタウラスを」
「この手で」
彼等はすぐに散開しそのうえでジリ、と前に出る。そのうえでそれぞれアルデバランに向かおうとする。しかしここで、であった。
「！？」
「何だこの小宇宙は」
「これは一体」
彼等は進もうとしたところで足が止まった。止めたのではない、止まったのである。
「この圧倒的な小宇宙は」
「まるで壁だ」
彼等はそのアルデバランの小宇宙を感じて言うのだった。

第三十九話　炎の魔神達その二

「流石は黄金聖闘士というだけはある」
「しかしだ」
彼等が感じたのはそれだけではなかったのだ。アルデバランから感じられるもう一つの気配だ。それもまた彼等を押し止めているのだった。
「何だ？これは」
「これ以上前に進めば。どうなるのだ？」
「いや、そんなことを言う必要はない」
ディーンが仲間達に告げた。
「我等は狂闘士だ。ならば」
「そうだ。前に進むだけだ」
「退くことは有り得ない」
無論彼等も黄金聖闘士だ。ならば答えは出ていた。彼等の誇りが彼等自身を進めようとしていた。そうしてそのうえでまだ進もうとするが。
「ならば」
「進む！」
彼等は一斉に進みだした。そのうえでそれぞれの拳をアルデバランに放とうとする。しかしここで、であった。
何かが煌いた。そうしてそれが狂闘士達を退けた。彼等は致命傷こそ受けなかったがそれでも大きく退くしかなかった。吹き飛ばされかろうじて空中で態勢を立て直し着地したのだった。
「な、何だというのだ！？」
「あの技は」
驚愕と共に述べるのだった。
「見えなかった！？この我々が」
「しかしあの強さは」

剛の技である、それはわかった。しかしわかったのはそれだけだった。
「あれがタウラスの拳だというのが」
「今のが」
「グレートホーンだ」
アルデバランは腕を組んだまま彼等に告げた。
「これこそがこのアルデバランの技だ」
「あの巨体であそこまでの速さの拳を出すとは」
「流石はタウラス」
デューテは無意識のうちにアルデバランを賞賛する言葉を出していた。
「これだけのものを瞬時にして放つとはな」
「だが」
今度はグレイが言った。
「これで勝利を収めたとは思わないことだ」
「そうだ。我等はまだ技を出してはいない」
「その技で」
彼等自身の技を今放とうとする。それにより彼等とアルデバランの決戦がはじまろうとしている。しかしここで。ドーマが出て来たのだった。
「待つがいい」
「なっ、ドーマ様!?」
「何故ですか!?」
狂闘士達は前に出て来た彼を見て驚きの声をあげた。
「ここは我等が」
「ですからドーマ様はここは」
「タウラスの今の技見せてもらった」
ドーマはそのアルデバランを見ながら話を続ける。
「だからこそだ」
「だからこそとは?」

「まさかドーマ様も」
「そうだ。戦いたくなった」
アルデバランを見据えながら表情を消しての言葉だった。
「この男とな」
「それでは我々は」
「共に」
「いや、それはならん」
だがドーマは彼等が己と共に戦おうという申し出は断るのだった。
「このドーマ、一人で戦う」
「御一人で、ですか」
「それでは」
「このドーマ、戦う時は常に一人」
また言うのだった。
「だからだ。御前達は下がっていろ」
「はっ、それでは」
「そのように」
そしてその言葉に静かに頷く彼等だった。

第三十九話　炎の魔神達その三

「ドーマ様心ゆくまでお楽しみ下さい」
「我々はこれで」
彼等はそのまま下がる。そのうえで両者の戦いを見守ることにしたのだった。そうしてそのうえで後ろに控えるようになっていた。
「ふん、俺達と同じだな」
「観客になったってわけかよ」
「そういうことだな」
アトラスが聖闘士達の問いに答えてきた。
「御前達とは戦うことはないようだしな」
「もっとも。貴様等では我々の相手は務まらないだろうがな」
彼等は聖闘士達を挑発はした。しかし動くことはなくそのうえで戦いを見守るのだった。その間にアルデバランとドーマはそれぞれ激しい小宇宙を見せていた。
「では、行くぞ」
「まだ腕を組んだままでいるのか」
「そうだと言えばどうするのだ？」
アルデバランはドーマに対して言い返した。
「ならば。無理にでもこじ開けるつもりか」
「いや、その必要はない」
しかしドーマはそれはしないというのだった。
「俺には。その必要はない」
「必要がないというのか」
「そうだ。俺はこのまま押し潰す」
こう言うのだった。
「正面からな。このようにしてだ」
「むっ！？」
「受けるがいい、タウラス」

ドーマは右手を思い切り振り上げてきた。それはまさに巨大な鎚でありその鎚でアルデバランを上から潰さんとしているかのようだった。

「このドーマの剛の技」

「それがか」

「そうだ。ゲヘナハンマーーーーーーッ！！」

技の名前を叫びながらその鎚を振り下ろしてきた。

凄まじい衝撃が上からアルデバランを襲う。その衝撃は離れた場所から見ていた他の聖闘士や狂闘士達からも感じられるものだった。

「な、何ィ！！」

「この衝撃は！」

まずは青銅の者達が驚きの声をあげた。

「これが八大公の技だというのか！？」

「これだけの技を持ってるっていうのかよ」

彼等はその衝撃を前から受け吹き飛ばされそうになるのに必死に耐えながら言うのだった。そうしてそのうえで言うのだった。

「八大公、何という力の持ち主だ」

「俺達じゃとても」

「アルデバラン様に匹敵するな」

「うむ」

モーゼスとアルゲティも言うのだった。

「これだけの強さはな」

「ただ力があるだけではない」

彼等もそのことがよくわかった。白銀聖闘士の彼等からはドーマのその技が力だけではないということがわかったのだった。ここに青銅の者達との違いが出ていた。

「小宇宙もかなりのものだ」

「その通りだ。この小宇宙」

彼等はドーマの小宇宙についても話をした。

「尋常なものではない」

「まさに黄金聖闘士に匹敵する」
それだけのものだというのだった。
「だからこそ八大公なのか」
「狂闘士達の頂点なのか」
そのことがわかるドーマの攻撃だった。それがアルデバランを襲っていたのだった。
「ふふふ、さあタウラスよ」
「どうする?」
聖闘士達とは逆に。狂闘士達は余裕の笑みであった。その笑みでドーマの繰り出したそのゲヘナハンマーを見ているのだった。
「ドーマ様の力は全ての狂闘士達の中で随一」
「如何に黄金聖闘士とはいえ防げるものではない」
「それをどうするのだ?」
こう言いながらアルデバランを見ていた。
「避けるといっても光速の拳」
「貴様もまた光速の動きだが」
黄金聖闘士だからこその動きである。
「はたしてそれでもかわせるか?」
「この衝撃を」
「しかし」
だがここで。彼等の中で最も階級の高いマーテルが怪訝な顔を見せた。

第三十九話　炎の魔神達その四

「妙ですね」
「妙とは？」
「マーテル様、何かあるのですか？」
「本来ならば防ごうとするかかわそうとします」
彼女はこう他の狂闘士達に対して言うのだった。
「しかし。タウラスは」
「！？そういえば」
「あの男」
他の狂闘士達もここで気付いたのだった。
「かわそうとも防ごうともしない」
「一体何故だ？」
「どういうつもりだ？」
そのアルデバランを見て眉を顰めさせるのだった。
「何もしないというのか？」
「まさか」
「このアルデバランの戦いを見せてやろう」
そのアルデバランがここでこう言ってきた。
「今からな」
「！？何を考えているのだ？」
「アルデバラン様、一体何を」
狂闘士達だけではなかった。聖闘士達も言った。
「何をしようとしているのだ？」
「このままではモロクの攻撃を受けて」
倒されてしまう、誰もがそう思った。それぞれいぶかしむ表情を浮かべながらアルデバランの今の行動を見る。ドーマの技が今にも迫ろうとする。しかしここで。アルデバランは腕を組んだままであったがそれでもここでまたあの技の名を叫ぶのだった。

「グレートホーーーーーーン！」
「グレートホーンだと！」
「先程の技か！」
狂闘士達はその技の名を耳にして言った。
「その技でドーマ様の攻撃を弾き返そうというのか！？」
「まさかとは思うが」
「いや、そのまさかだな」
「そうだな」
だがそれを見たモーゼスとアルゲティが言う。
「アルデバラン様はそれで防がれるおつもりだ」
「モロクの技をな」
彼等はわかったのだった。しかしそれでもだった。安心することはできなかった。
「しかし大丈夫か？」
「今のモロクの技はかなりのものだ」
だからなのであった。
「如何にアルデバラン様の拳といえど」
「果たして」
彼等も流石に危惧していた。果たしてアルデバランがドーマの攻撃を防げるのかどうか。しかしアルデバランはそれを前にしてもいつもと変わらない。
そうしてだった。ドーマのゲヘナハンマーに対して。あの技で弾き返したのだった。
「何っ！？」
「何だと！？」
狂闘士達はそれを見て驚きの声をあげた。
「ドーマ様の技をだと！？」
「弾き返しただと！」
「やった、やはりアルデバラン様の技は」
「モロクの攻撃に対しても効果があったのか！」

聖闘士達はそれに対して喜びの声をあげる。この辺りは正反対であった。
「疑って申し訳ありませんでした」
「やはりアルデバラン様だけはあります」
「謝る必要も驚く必要もない」
アルデバランだけが冷静であった。
「これが現実だからな」
「現実、ですか」
「攻撃を弾き返したのが」
「そうだ。それこそがだ」
それが現実だろいう冷静な言葉であった。
「見ての通りだ。俺はモロクの技をグレートホーンで防いだのだ」
「くっ、見事と言うべきか」
「おのれタウラス」
狂闘士達は忌々しげに声をあげる。だがどうにもならなかったのだった。
「だが。それでもだ」
「これで終わりではないぞ」
それも彼等は顔をあげていた。それはやはりドーマを知っているからだった。自分達を率いるその八大公の実力を知っていたからである。

第三十九話　炎の魔神達その五

「我等狂闘士の強さはだ」
「まだだ」
「確かにその通りだ」
そのドーマもまた言ってきたのだった。
「この程度ではないぞ。俺の強さは」
「今の技はまだ小手調べだというのだな」
「そうだ。俺はまだ最大の技を出してはいない」
右手を構えながらの言葉だった。
「まだな。それを見せてやろう」
「来るか？ならば」
「受けてみよ、このモロクのドーマの技を再び」
言いながら再び攻撃に入ろうとする。
「ゲヘナハンマーに続くこの技をな」
「ならば来るのだ」
そしてアルデバランも小宇宙を再び燃え上がらせてきた。
「俺もそれに相応しい技を見せよう」
「そのグレートホーンだけではないというのだな」
ドーマはアルデバランの今の言葉を聞いて述べた。
「まだあるというのか」
「そうだと言えばどうする？」
腕を組んだままだったがそれでも何かが違っていたのだった。
「攻めてくるか？それとも」
「攻める」
ドーマが選んだ選択肢はやはりこれであった。
「何度も言うが我等狂闘士は敵に背を向けることはないのだからな」
「それではだな」
「行くぞ。このモロクのドーマのさらなる技」

今度は両手から何かを放とうとしてきた。それは炎であった。
「全てを焼き尽くすこの炎の鎚をな！」
「むっ！？」
「グレートクエイク！」
何とその炎と共に地震が起こった。そうしてそれによりアルデバランを包み込もうとする。そうしてそのうえで闘いを終わらせようとしてきたのだった。
「なっ、今度は地震だというのか！」
「まさか！」
聖闘士達はその技を見てまた驚きの声をあげた。
「モロクは剛の技だけではないのか」
「まさか。地震まで使うというのか」
「それにしても。何というパワーだ」
彼等はドーマのそのパワーを見てあらためて驚きの言葉をあげるのだった。
「ここまでの攻撃を放つとは。何と恐ろしい男だ」
「一体。何処まで」
「しかし。アルデバラン様は」
アルデバランを見ると。また驚かざるを得なかったのだった。
「動かれない！？何故だ」
「あの状況でまだ動かないというのか」
そのことに驚かざるを得ないのだった。
「やはり。何かあるようだな」
「そうだな」
今度はもう疑わなかった。
「どうやら。それではだ」
「ここは見ようぜ」
「ああ」
青銅の者達の心はこれで決まっていたのだった。
「もうな。アルデバラン様ならば」

「絶対にやってくれるな」
「うむ、その通りだ」
「そうすればいい」
モーゼスとアルゲティも彼等のその言葉を聞いて安心した顔で頷いたのだった。
「ここはアルデバラン様の御考え通りだ」
「信じていればいい」
彼等は既にアルデバランをわかっていた。そうしてそのうえで見ているのだった。しかしであった。ドーマの攻撃は恐ろしい威力を既に見せていた。
「何という力だ」
「あれがドーマ様の真の御力か？」
「いえ、これだけではありません」
マーテルが驚く仲間達にまた言ってきた。

第三十九話　炎の魔神達その六

「これだけではありません、ドーマ様の御力は」
「何っ!?ではマーテル様」
「ドーマ様の最大の技はこれだけではないと」
「そうです」
こう言うのだった。
「まだ。これより凄まじい技があります」
「何と、これ以上の技を持たれているというのか」
「ドーマ様は」
彼等はこのことに衝撃を覚えずにはいられなかった。
「何という方だ」
「しかしそれも」
ないと。言ったのはロビンだった。
「ドーマ様のこれで終わるからな。あのグレートクエイクで」
「いえ」
マーテルはすぐにそのロビンに対して告げてきた。
「それはどうでしょうか」
「!?マーテル様」
「というとまさか」
ロビン以外の者もこれには目を動かしてきた。
「タウラスもまだ何かあるというのですか!?」
「あのグレートホーンでしょうか」
「それとは限りません」
マーテルはこう彼等に答えるのだった。
「黄金聖闘士の技は一つとは限りません」
「一つとは、ですか」
「そうです。これまでの黄金聖闘士達にしろ」
彼等のことも話されるのだった。

「複数技を持っていましたね」
「確かに」
「キャンサーにしろカプリコーンにしろ」
誰もがその複数の技のことは知っていた。
「ピスケスにしろそうですね」
「ではあのタウラスもまた」
「はい。あると考えるのが自然です」
こう答えるのだった。
「私はそう思います」
「そうですね。確かに」
「言われてみれば」
彼等もその言葉に頷くのだった。
「ではタウラス、まさかここで」
「仕掛けて来るのか！？」
「だとすれば何を」
「それはわかりません」
マーテルもそこまではわからなかったのだった。
「しかし。あるとすればです」
「ドーマ様のあの技を防げる」
「そういったものですか」
「私はそう思います。ならば」
あらためて彼等を見るのだった。
「どう来るか！？タウラス」
「そうですね。一体どうしてくるか」
「あいつの動きを見ましょう」
彼等はそれで決まった。今は闘いを見守るのだった。そしてそれは聖闘士達も同じだった。彼等もまたアルデバランの動きに注目していた。
「アルデバラン様、今度は」
「どうされるのですか？」

何処かアルデバランに対して期待していた。
「それを見せて頂きますよ」
「ここで」
「モーゼス」
アルゲティはモーゼスに声をかけてきていた。
「感じるか？」
「いや、感じぬ」
彼の問いに首を横に振るだけだった。
「しかしだ。何かされるのは間違いない」
「そうだな。確かにな」
「それが何かだが」
後ろからアルデバランの背を見つつ言葉を出していく。
「果たしてモロクのあの技に対抗するものはな」
「一体な。何だというのだ」
彼等は闘いを見守っていた。そして今遂に。アルデバランがその技を繰り出しそのうえで叫んできたのであった。その技の名前をだ。

第三十九話　炎の魔神達その七

「タイタンズノヴァ！！」
「何っ！？」
「タイタンズノヴァだと！？」
聖闘士達も狂闘士達もその名を聞いて声をあげた。
「それがその技の名前だというのか！？」
「見ろ！」
双方それぞれまた叫ぶ。
「大地が再び揺れているぞ！」
「しかもだ。揺れているだけではない」
「うむ」
そう、大地は確かに揺れていた。しかしそれだけではなかったのだ。
大地が割れそして凄まじい衝撃が沸き起こる。その強さはドーマが放ったそのグレートクエイクに匹敵する程のものだったのだ。
それによりグレートクエイクの動きを止めてしまった。完全に中和してしまったのだ。大地で衝撃と衝撃が激突し。そしてかえって全てを鎮めてしまったのだ。
「何という技だ」
「あれがタウラスの第二の技か」
まずは狂闘士達が驚きの声をあげた。
「恐ろしいまでの威力だ」
「大地を揺らすというのか」
「それだけではない」
しかも、であった。
「その力はドーマ様のそれに匹敵するということか」
「恐るべし、タウラス」
そしてこうした言葉も出された。唖然とした顔と共に。

「そこまでの技を持っているとはな」
「やはり。黄金聖闘士ということはあるか」
「やっぱりな」
「ああ、流石だ」
そして聖闘士達は笑顔で言っていた。
「アルデバラン様の御力、やはりな」
「あの技を防ぐだけのものがあった」
「その通りだ」
やはり信じている者の言葉であった。
「これで互角だな」
「ああ、完全にな」
笑顔で顔を見合わせる彼等だった。
「互角の土俵にあがったら最早聖闘士に負けはないぜ」
「そういうことだな」
「少なくともだ」
モーゼスがここでまた言うのだった。
「状況はアルデバラン様にとって決して悪いものではない」
「その通りだ」
アルゲティも彼のその言葉に頷く。
「何があろうとも万全に闘える」
「退くことなくだ」
「じゃあこのまま押し切れるってことだよな」
「アルデバラン様がな」
「その通りだ。このままいけばな」
「やれる」
二人もそれを確信していた。
「イラクでの戦い、ここでな」
「終わらせることもできるな」
しかしだった。ここで。またあの女が姿を現わしたのであった。
「待つのだ、ドーマよ」

「!?この声は」
「エリス様ですか」
「そうだ」
狂闘士達の問いにも答えてきた。
「私だ。元気そうで何よりだな」
「は、はい」
「お久しゅうございます」
「よい」
エリスの声は狂闘士達が畏まろうとするのは制止した。そうしてそのうえで次第にその姿を出してきた。だがそれは実体ではなく透き通っていた。
「それよりもだ。ドーマよ」
「はい」
「今は決戦の時ではない」
こう彼に対して言うのだった。
「今はな。止めておくのだ」
「といいますと」
「言った通りだ。今はこれ以上の戦いは止めておくのだ」
彼への言葉はこれであった。

第三十九話　炎の魔神達その八

「よいな」
「それでは」
狂闘士達にとってエリスの言葉はまさにアーレスの言葉である。それならば逆らえる筈もなかった。それはドーマにしろ同じであった。
「わかりました」
「よいな。今はその時ではないのだ」
エリスはまた彼に告げた。
「その時になれば思う存分戦うがいい」
「ではエリス様、ここは」
「撤退ですか」
「そうだ。下がれ」
他の狂闘士達にも告げた言葉だった。
「下がってその時を待て。いいな」
「はい、畏まりました」
「では」
狂闘士達もそれに応えて頷くのだった。とはいってもやはり畏まってはいない。そうしてそのうえで静かにエリスに対して応えるのであった。
「この度の黄金聖闘士はだ」
「むっ！？」
アルデバランは自分達に顔を向けてきたエリスを見た。青い肌に赤い髪を持つその彼女は確かに美しいがやはり異形のものであった。
「タウラスだったな」
「そうだ」
彼女の言葉にも答えてみせるアルデバランだった。
「それがどうかしたというのか？」

「ふむ」
アルデバランの問いには応えずにまずは彼をまじまじと見るのだった。
「貴様もまた見事な戦士であるようだな」
「俺を認めるというのか」
「敵といえど認めることにやぶさかではない」
エリスはこうアルデバランにも言った。
「強ければ強い程な」
「だというのか」
「その通りだ。そして」
エリスはさらに言ってきた。
「強い相手程倒しがいがあるというものだ」
「それが俺だというのだな」
「如何にも。貴様のその力」
血塗られたような声で彼に告げるのだった。
「存分に発揮するがいい」
「言われずともな」
アルデバランにとってそれは最初から決めていることだった。
「それは見せてやろう」
「そうだ、それでいい」
エリスはアルデバランの今の言葉に満足したような声を出した。
「それでな。いいのだ」
「いいとは？」
妙に不穏なものを感じ声をあげたアルデバランだった。
「どういうことだ。それは」
「貴様が知らなくてもいいことだ」
しかしエリスはその問いには答えなかった。
「別にな」
「いいというのだな」
「問わぬのか？」

「一度問うて言わなかった相手にそれ以上問うつもりはない」
この辺りはやはりアルデバランであった。彼は黄金聖闘士達の中でもアイオリアと並んで最も男らしく毅然とした性格として知られているからだ。
「これでな」
「ふむ。それでいいのだな」
「いい。では話は終わりだな」
「如何にも」
話が終わったことも認めるエリスだった。
「それではだ。これで私も消えるとしよう」
「あれが争いの女神エリスだというのか」
「戦皇アーレスの妹にして今のトラキアを治める者」
彼等はエリスをこう考えていたのだ。そしてそれはその通りだった。エリスはまさにアーレスの名代であり実質的にトラキアを治めているのである。

第三十九話　炎の魔神達その九

「それだけのものはあるな」
「うむ」
このことも確かめ合うのだった。
「あれだけの小宇宙を出しているとは」
「まさに神の小宇宙だ」
それもはっきりと感じ取っていた彼等であった。エリスの小宇宙は実体でなくともそこに圧倒的な、まさに神のそれをはっきりと見せていたのである。
「果たして。勝てるというのか」
「神に」
「人が神に勝つだと？」
エリスは彼等の言葉を聞いて冷然とした笑みを浮かべてみせてきた。
「戯言を」
「戯言だというのか」
「それが戯言でなくて何という」
またアルデバランにも返すのだった。
「人が神に勝つとはな」
「確かにな。人の力は神のそれに劣る」
アルデバランもそれは認めるのだった。
「しかしだ」
「しかし。何だというのだ」
「人には心がある」
彼は言うのだった。
「心がな。それを覚えておくことだ」
「心があれば何だというのだ」
エリスはその言葉を受けても平然としていた。やはり余裕に満ち

た、相手を見下す笑みを浮かべてアルデバランを見下ろしていたのである。

そしてそのうえで。また言うのだった。

「それだけで神に比肩するというのか」

「比肩ではない」

アルデバランはそれは否定する。

「倒すのだ」

「倒すというのか」

「そうだ」

彼が言うのはそれであった。

「まつろわぬ神ならば倒す。それは覚えておくことだ」

「感謝するがいい。忘れておく」

だがエリスはこう彼に返すだけだった。その笑みで。

「その無礼はな」

「無礼か」

「私は慈悲深い」

余裕はまさに彼女が神だからであった。だからこそアルデバラン達をたかが人間と見ている。だからこそ余裕に満ちているのであった。

「だからだ。忘れておくのだ」

「それもいいだろう」

そしてアルデバランもその余裕を受けて言った。

「しかしだ」

「ふむ。まだ何か言いたいのか」

「その余裕が時として油断を生む」

彼が言うのはこういうことだった。

「それは覚えておくことだな」

「安心することだな。それも忘れておく」

やはりこう返すエリスだった。余裕もそのままだった。

「では。御前達もだ」

「はい、それでは」
「これで」
「私も去ろう」
エリスもここを去る告げた。
「この場をな」
「それでは。エリス様」
「イラクでの戦いはトラキアでお楽しみ下さい」
「見させてもらうぞ。楽しくな」
最後にこう告げて姿を消すのだった。そしてすぐに狂闘士達も姿を消すのだった。その時にドーマがアルデバランに対して告げてきた。
「ではな。タウラス」
「うむ」
「次に会ったその時がだ」
「我等が決着を着ける時」
「そういうことだ。いいな」
こう告げてそうして姿を消すのだった。後には誰も残ってはいなかった。残っているのはアルデバラン達聖闘士達だった。彼等だけであった。

第三十九話　炎の魔神達その十

アルデバランは彼等だけになると。すぐに後ろに顔を向けて言うのだった。
「それではだ」
「はい、それでは」
「どうされますか？」
「車に戻る」
厳かかつ重厚な声で告げたのだった。
「いいな。そして旅を再開するぞ」
「えっ、それだけですか？」
「他には何か」
「他に何か言うことがあるのか？」
逆にこう問い返してくる程だった。
「まだ何かあるのか？」
「いえ、まあそう言われますと」
「ちょっと」
問い返されてみると返答に窮する聖闘士達だった。
「それはありません」
「俺もです」
青銅の者達は彼等の間でそれぞれ顔を見合わせながら言うのだった。
「別に何も」
「ありませんけれど」
「そうか、ないのか」
「ええ、特にありません」
「そういうことです」
やはりこう言う彼等だった。彼等には何もないのだった。
「別に雑兵達もいないようですしね」

「特に」
「まあいずれわんさと出て来るでしょうけれど」
それは彼等も予想しているのだった。既に三つの地域での戦いで常に圧倒的な数の雑兵達を前に出してきているからだ。それはもうわかっているのだ・
「今は出て来ないみたいですしね」
「ですから」
「何も言うべきことはないか」
ここでも念を押すように彼等に問いはした。
「そういうことだな」
「はい、その通りです」
「じゃあ俺達はそれで」
彼等の言葉は変わらなかった。
「車に戻って旅を再開しましょう」
「楽しんで」
そんな話をしていくのだった。アルデバランは彼等の言葉を聞くと次には白銀の者達に顔を向けた。そうして今度は彼等に対して問うたのだった。
「御前達はどうだ？」
「俺はあいつ等と同じです」
「俺もです」
モーゼスもアルゲティも同じことを言うのだった。
「今は言うことはありません」
「別に」
彼等もそうなのだった。
「今はすぐに行くことがいいかと」
「敵も出て来ないでしょうし」
「そうか。それではだ」
彼等の意見が同じなのを全て聞いたうえで言うアルデバランだった。

第三十九話　炎の魔神達その十一

「また車に戻ろう」
「はい、それで」
「また旅に戻りましょう」
彼等が言うのは旅に戻ることであった。
「先はかなり長いですし」
「そうしましょう」
「そうだな。では車の中に入ろう」
「はい」
六人がほぼ同時にアルデバランに答えた。
「そして後は」
「またゆっくりとコーヒーとお菓子でも」
「俺の分もあるのだろうな」
アルゲティはここで青銅の者達に問うた。
「まさか全部食べたのではないだろうな」
「いや、流石にそれはないからさ」
「あんたとモーゼスの分もちゃんとあるからよ」
「ならいいがな」
アルゲティはそれを聞いてまずは安心したようであった。
「安心して運転させてもらおう」
「眠気覚ましにガムもあるからさ」
「よかったらそれもな」
青銅の者達は笑ってその話もするのだった。
「噛んでくれよ、好きなだけな」
「あんたガムもいけるだろ？」
「嫌いではない」
「俺もだ」
そしてそれはモーゼスも同じだった。どちらもガムは嫌いではな

いのだった。
「やはり。眠気が運転には一番の難敵だからな」
「あれば喜んでいただこう」
「種類も結構あるしな」
「ブルーベリーもあればコーヒーもあるしな」
青銅の者達は今度はガムの種類も述べるのだった。
「好きなの噛んでくれよ」
「遠慮せずにな」
「コーヒーもあるのか」
モーゼスはコーヒーガムに反応を見せた。
「ではそちらを貰おう」
「俺はストロベリーがいいが」
「ああ、ストロベリーもあるよ」
「そっちもな」
青銅の者達はアルゲティにも応える。
「じゃあ悪いけれど運転はな」
「頼むな」
「うむ、コーヒーガムさえあれば」
「ストロベリーがあればな」
彼等はいいというのだった。戦いは終わりまた旅がはじます。しかしそれは終わりではなくただの息抜きに過ぎないのであった。

第三十九話　　完

２００９・６・１７

第四十話　揺れる大地その一

揺れる大地

またしても車での旅を続けるアルデバラン達。キャンピングカーの中はかなりリラックスして楽しげな雰囲気のまま旅を進めていた。

「いや、イラクもな」

「中々いいか？」

ブリットとチクがまたお茶菓子を食べながら楽しく談笑していた。

「羊美味いしな」

「なあ」

「イスラムはやっぱり羊だよ」

ニコライも笑って話す。

「それに香辛料をたっぷりと効かしてな」

「ああ、それいいよな」

グリーザもこれには笑顔で頷く。

「程よくな。ワインにも合うしな」

「だよなあ、本当に」

「結構いい場所だよな」

「まあそうだな」

車を運転するモーゼスも彼等に応えてきた。ガムを噛みながら前を見ている。

「最初はどれだけ荒れ果てた場所かって思っていたな」

「ああ、まあな」

「砂漠ばかりかって思ってたぜ」

彼等もそれを認める。実は本当にそう思っていたのだ。

「けれど実際はこれで結構」

「歴史的なものもあるしな」

「だよな」

「ここは古代より様々な国家が興亡してきた」

アルデバランがケーキを食べながら述べてきた。チョコレートケーキである。途中でわざわざ買った洋風のケーキなのである。
大きな手でその不釣り合いなまでに小さなケーキを食べつつ話に加わっていた。
「実に多くのな」
「バビロニアとかペルシアですよね」
「あとシュメールとかアッカドとか」
「ヒッタイトとかアッシリアもありましたよね」
「本当に多いな」
青銅の者達はとりあえず思い出せる限りのこの一帯に興亡した国家を思い出す。確かに実に多くの国家がここで栄え滅んできているのだ。
「ローマ帝国もここに来たことがある」
「へえ、ローマもですか」
「ここまで来たことがあるんですか」
「そうだ。ビザンツ帝国の時にはペルシアと激しい攻防も繰り広げている」
両国の争奪の地でもあったのである。チグリス＝ユーフラテスの二つの川があるこの一帯はそれだけで恵みが約束され争奪の地になってきたのである。
アルデバランはその歴史を語るのだった。その悠久の歴史を。
「そしてイスラム帝国が誕生してからもだ」
「結構以上に国家が移ってますよね」
「オスマン＝トルコが支配していた時もありますし」
「それだけのものがあるのだ」
アルデバランはまた言った。
「この国にはな」
「戦乱と争奪の場所ですか」
「そして繁栄と興亡の」
「そういうことだ。だから見るべきものも多い」

アルデバランはまた述べた。
「ここはな」
「そうですね。何かそれを考えるとこうして車で旅をするのも」
「少し残念なような」
「それは仕方がない」
それまでベッドで休んでいたアルゲティが起き上がって彼等に告げてきた。
「それはな」
「仕方ないんですか」
「それは」
「そうだ。俺達は観光に来ているのではないのだぞ」
今更の言葉であったがそれでも青銅の者達は少しばかり忘れてしまっていた。
「それはわかっているな」
「あ、ああ。まあな」
「それはな」
それを言われるといささか苦しい青銅の面々だった。額に汗が出ている。

第四十話　揺れる大地その二

「俺だってわかってるさ」
「俺も」
「俺もだ」
「だといいのだがな」
やはりまだ疑っているアルゲティだった。不審な目であった。
「それだとな」
「そうだよ。俺達だって聖闘士だからな」
「ちゃんとしてるさ」
彼等はあえてこう言うのであった。
「だからあんたは心配しなくていいさ」
「これでも真面目にやってるんだからな」
「それでだ」
アルデバランは彼等の言葉をそのまま聞いてからまた述べてきた。
「今夜は街に入る」
「街にですか」
「そうだ。街に入る」
また彼等に告げた。
「今夜は」
「またどうしてですか？」
「まだガソリンはたっぷりありますし」
「それに食い物だって」
青銅の者達は怪訝な顔になってアルデバランに問うのだった。
「それでどうしてですか？」
「街に入るって」
「たまにはそれもいい」
だからだというアルデバランだった。
「そこでゆっくりと休むのもな」

「ゆっくりとですか」
「休む為に」
「そうだ。その為にだ」
彼はまた他の聖闘士達に対して話した。
「幸い時間にも余裕がある。今夜はそうするぞ」
「わかりました」
運転をしているモーゼスがそれに答えてきた。
「それでは街に入りましょう」
「街はわかっているな」
「はい」
モーゼスの返事は既に、といったものであった。
「それはもう」
「ならいい」
「けれどアルデバラン様」
「どうしてなんですか？」
ここでまた青銅の者達が問うのであった。
「休むっていっても」
「今まで普通に休んでるよな」
「なあ」
「車の中では限度がある」
しかしアルデバランは彼等にこう返すのだった。
「休むのにな」
「そうなんですか？」
「限度があるんですか」
「疲れは知らず知らずのうちに蓄積されていく」
そこまで考えているのであった。
「それはいざという時に出て来るものだ」
「戦いの時にですか」
「その時にですね」
「その通りだ。だからこそだ」

こうも彼等に告げるのだった。真面目な顔で。
「今日は街で休む。いいな」
「はい。それじゃあ」
「わかりました」
「特にだ」
アルデバランはまた言うのであった。
「御前達にしろ俺にしろまだいい」
「俺達はですか！？」
「それってどういうことですか？」
青銅の者達はそれを聞いただけではわかりかねていた。
「俺達だけじゃないっていうと」
「やっぱりモーゼスとアルゲティですか」
「あの二人は運転をしているな」
「あっ、はい」
「そうですね」
ここで青銅の者達も気付いたのだった。

第四十話　揺れる大地その三

「運転すればそれだけ」
「疲れが溜まりますからね」
「それでですか」
「そうだ。特に二人のことを考えてだ」
そうであったのだ。
「今日はだ。街で休む」
「はい、わかりました」
「それじゃあそういうことで」
「既に宿も用意してあるな」
「はい」
アルゲティが今のアルデバランの問いに対して答えた。
「それはもう。今夜に泊まると」
「ならいい。それではな」
「そこにですね」
「今夜はイラク料理尽くしになるな」
「まあそれは今までもですけれどね」
「だよな」
こうは言うが困った顔はしていない青銅の者達であった。
「けれど結構豪勢なんだろうな、やっぱり」
「そうだよな」
しかしこの期待はあるのだった。
「とにかく。腹一杯食うか」
「それができたら文句はないよな」
「だよな」
「待て」
今の彼等の言葉はモーゼスによって突っ込みを入れられてしまった。

「腹一杯食えればいいというのか」
「そうだけれどよ」
「モーゼス、何かあるのかよ」
「それは普段は食っていない者の言葉だ」
こう言うのであった。
「それはな」
「あれっ、そうか！？」
「そうだったか？」
青銅の者達はそれを言われてもわかっていないようであった。首を傾げてさえいる。
「別にそんなつもりはなかったけれどな」
「なあ」
「しかしそう聞こえた」
モーゼスはまた彼等に告げた。
「そうな。大体だ」
「わかってるって。いつも腹一杯食ってるってな」
「それを言いたいんだろう？やっぱり」
「その通りだ。御前達は多少食べ過ぎではないのか？」
こうも彼等に言うのであった。
「普段から。確かに聖闘士は相当な体力を使うがだ」
「だからその分食ってるんだけれどな」
「なあ」
「それでも食べ過ぎだ」
モーゼスも意外と口煩いようである。
「俺も言えた義理ではないがな」
「そういやあんた昨日の夜な」
「シシケバブ一キロ、もっと食ってたよな」
「二キロか？」
彼等は昨夜のモーゼスの食事についても述べた。
「それだけ食っていたぜ」

「なあ」
「そうだ。だからあまり言えはしないがだ」
それだけ負い目はあるのだった。
「しかし。それでもな」
「食い過ぎですかね」
「俺達って」
「やはり控えるべきだ」
結局これを言いたいのであった。
「少しはな」
「けれど育ち盛りだしな」
「だよなあ」
しかし彼等もまだ言うのだった。

第四十話　揺れる大地その四

「食わないともうな」
「身体がもたないんだよな」
「少なくともその分身体を動かせば問題はない」
アルデバランはどちらかというと青銅の者達を擁護していた。
「その分はな」
「ええ、動いてますよそれは」
「ちゃんと」
彼等はそれについてはにこりと笑って答えることができた。
「やっぱりね。そうしないと」
「いざって時に動けませんからね」
「それがわかっていればいい」
やはりアルデバランは彼等を擁護していた。
「それでな」
「じゃあ今夜も」
「もう派手に飲み食いして」
「楽しくやるか」
「だよなあ」
「全く」
モーゼスはそんな彼等の声を呆れた顔で聞いていた。
「よくこんなことで聖闘士が務まるものだ」
「まあそう言うな」
その彼にアルゲティが告げるのだった。
「この連中はこの連中で真面目にやっているのだからな」
「だからか。大目に見るということか」
「この程度はな。そうするべきだな」
こう言ってモーゼスを宥めるのだった。その日彼等は街に入りそのうえで酒場に繰り出した。イスラム圏であったが酒場があったの

だった。
「あれっ、イスラムなのにな」
「こんな店があるのかよ」
「何かすげえ場違いだな」
青銅の者達はその酒場に入っても怪訝な顔で見回していた。そこは少し古い石造りの店であり椅子やテーブルは木であった。店の中にはもう大勢の客達がいてそのうえでがやがやと酒を飲み肴を食ってそれぞれ楽しく遊んでいるのであった。
「けれど何か自然に皆な」
「楽しくやってるよな」
「何でだ？」
「それは国による」
アルデバランがその彼等に話した。
「国によるのだ」
「酒を飲んでもいいかっていうのは」
「そうなんですか？」
「そうだ。このイラクは比較的そうしたことには緩やかだ」
このことも話すのだった。
「女性の権利拡大にも熱心だしな」
「へえ、独裁政権でもですか」
「それでもですか」
彼等もこの国のことは知っていた。イラクは所謂独裁政権であったのだ。しかしそれでもそうした一面もまた実際にあるのであった。
「意外ですね」
「緩やかな部分もあるんですね」
「色々と理由があるにはあるがな」
また言うアルデバランだった。
「それでもだ。実際に酒場が存在しているのは事実だ」
「そういうことですか」
「だからなんですか」

「その通りだ。それではな」
「ええ、堅苦しい話はこれ位にして」
「一杯やりますか」
「そうだよな」
「一杯ではないな」
ここでまたしてもモーゼスが彼等に言った。私服姿ではあるがその大柄な身体と隻眼により嫌が否でも目立つ姿をそこに見せていた。周りもその彼に注目している。しかし彼はそれに構うことなく言うのであった。
「それはな」
「一杯ではないと」
「それは一体どういう意味かな」
「とぼけても無駄だ」
今のモーゼスの言葉は中々鋭く手厳しいものがあった。

第四十話　揺れる大地その五

「御前達は一杯は一杯でも腹一杯だな」
「だから一杯なんだけれど」
「だよなあ」
「まあいいが」
モーゼスはここで言葉を変えてきた。
「それもな」
「じゃあそういうことで」
「楽しくやるか」
「俺も飲もう」
そしてこうも言うモーゼスだった。
「今日はな」
「そうそう、楽しくな」
「それで英気を養おうって」
「なあ」
「では。頼むとするか」
モーゼスに匹敵する巨体を見せているアルゲティも言ってきた。
しかしその彼等よりもあるデバランはまだ大柄であり実によく目立っていた。
その筋骨隆々の青年を見て。店の親父が声をかけてきた。
「いやあ、あんた」
「何だ？」
「ここの人間じゃないね」
まずはこう彼に言うのだった。
「他の連れの人達も。そうだよな」
「その通りだ」
アルデバランもそれは否定しない。
「俺達は旅で来た」

「だよな。そこまででかい奴はこの街にはいないからな」
それはその巨体でわかったのだった。
「筋肉だって凄いしな。兵隊さんでもそこまででかいのはいないからな」
「兵隊さんね」
「まあ近いかな」
「だよな」
青銅の者達は親父の今の言葉に少しばかり笑った。
「まあそれはいいとしてな」
「親父さん」
「何だい？」
親父は今度は青銅の者達の言葉に応えた。屈託のない明るい笑顔である。それでムスリム特有の口髭が形よく曲がっていた。
「ここでお勧めの料理は何だい？」
「あと酒は」
「お勧めはあれだね」
親父は少し時間を置いてから彼等の言葉に答えた。
「やっぱりね。羊料理だよ」
「やはりそれか」
「そうだ。丸焼きにしたのはどうだい？」
明るい笑顔をそのままに彼等にまた言ってきた。
「実は丁度焼いているのがあるんだよ。こっちで間違えてね」
「間違えてか」
「そうさ。よかったらどうだい？」
アルデバランにも勧めてきた。
「よかったらな。安くしておくよ」
「本当か？」
だがアルゲティはその安くしておくという言葉には疑問符を見せてきた。
「その言葉は」

「おいおい、信じないのかい？」
親父はアルゲティのその言葉には少しばかり悲しそうな顔を作ってみせた。
「それはよくないな。人の好意は信じないとな」
「そもそも店のメニューの値段も知らないからな」
意外と慎重なアルゲティだった。
「それを確かめなければな」
「だよなあ。ぼったくりとかなあ」
「されたら洒落にならないからな」
「なあ」
青銅の者達もアルゲティの言葉を聞いて話した。
「それで親父」
「わかってるさ。ほら」
渋々ながら丁度側の空いているテーブルにあったそのメニューをアルゲティに渡すのだった。アラビア語であったがそれでもアルゲティはある程度は読めた。
「そこに書いてあるよな、羊の丸焼きな」
「ああ」
「その値段で出すからな」
あらためて言う親父だった。

第四十話　揺れる大地その六

「それでいいな」
「わかった」
アルゲティは真面目な顔で頷いた。
「それで頼む」
「ちぇっ、しっかりしてるねえ」
この言葉から親父が実際にぼるつもりなのがわかった。
「あんた達もぼんくらじゃないってことかよ」
「こうしたことには慣れているのでな」
アルゲティはこう彼等に返すのだった。
「それでな。やり方はわかっている」
「本当にしっかりしてるね。まあこれで終わりさ」
親父はあらためて言った。
「それでだ。飲み物はどうするんだい？」
「ビールはあるかい？」
「あと他には何があるんだよ」
青銅の者達がまた彼に尋ねる。
「とにかくあるのもらうからよ」
「何があるんだよ」
「ビールなら一杯あるぜ」
親父が明るい顔で話してきた。
「あとワインもな」
「では両方貰うか」
アルデバランが彼のその言葉に答えた。
「両方な。それでいいか」
「あいよ。じゃあどんどん持って来るな」
「よし、じゃあ頼むぜ」
「どんどん貰うからよ」

こうして彼等はこの羊の丸焼きを食べていくのであった。そうしてそのうえで食べていく。そのうえで街で最もいいホテルに入る。そこで休むがアルデバランだけは。一人夜の街に出るのであった。

「流石だな、タウラスよ」

「わかっているのだな」

街を一人歩く彼の上から声がしてきた。その石の建物の上からの声であった。道も白くそういったものが全て白銀の月に映し出されていた。

次はその柔らかな光で街を照らしている。その世界の中で声がしたのであった。

「我等が来ているということが」

「既にな」

「その通りだ」

アルデバランもまた彼等に告げた。

「それだけの気を出していればな」

「ふむ。それでわかったのか」

「我等の気配で」

「小宇宙を隠すことは容易ではない」

アルデバランはこうも言うのだった。しかし顔は上にはやらない。その影は白銀の光によって緩やかに映し出されていたのだった。

「誰であろうとな」

「ではだ。話は早いな」

「そうだな」

彼等はあらためて言ってきた。

「我等の相手をするというのだな」

「一人で」

「その通りだ。見よ」

アルデバランがこう言うとだった。すぐに宙にタウラスの黄金聖衣が現われた。それは瞬時にして分かれアルデバランの全身を覆ったのであった。

「これでよいな」
「闘うつもりだというのだな」
「だからこそだけここに来た」
また言うアルデバランだった。
「貴様等と闘う為にな」
「それではだ。我等も」
「今ここに姿を現わそう」
こう言って姿を現わしてきた。それはインプ達であった。無数の彼等が既にアルデバランを取り囲みそのうえであの三叉の槍をかざしていた。
「では。よいな」
「タウラス、貴様を倒す」
「来い」
アルデバランの方からも彼等に告げてきた。
「このアルデバランが相手をしてやる」
「そうか。しかしだ」
「どういうつもりだ？」
ここでインプ達は怪訝な声で彼に問うのであった。

第四十話　揺れる大地その七

「腕を組んだままだとは」
「まさかと思うがそれは」
彼等も馬鹿ではない。ここに派遣される時に既に階級を持つ狂闘士達から聞いているのであった。アルデバランが一体どんな技を使うのかを。
「グレートホーンか？」
「若しくはタイタンズノヴァか」
「安心しろ」
しかしここでアルデバランは言ってきた。
「ここではタイタンズノヴァは使わん」
「それは何故だ？」
「何故それを使わん」
怪訝な顔で彼に対して問うのであった。
「ここで使わぬとはどういうつもりだ？」
「それで我等を一度に倒さんというのか」
「街の中だ」
アルデバランは彼等の問い対して場所を出すのであった。
「ここで使えば街の者達に犠牲が出る」
「だからだというのか」
「その技を使わぬというのは」
「その通りだ。このアルデバラン無駄な犠牲は好まん」
これはまさにアルデバランの倫理観であった。彼は闘いであっても極力犠牲を出さないように心掛けているのであった。この辺りが実に彼らしいと言えた。
その彼らしい言葉を述べたうえで。さらに言うのであった。
「だからだ。タイタンズノヴァは使わんのだ」
「それはわかった。しかしだ」

「それならばだ」
彼等はそれを聞いてまた言ってきた。
「そのグレートホーンとやらだけで我等を倒せるのか？」
「我等全員を」
その槍を構えながらの言葉であった。
「ここで倒せるというのか」
「全てをな」
「倒してみせる」
今の言葉には絶対の自信があった。
「ここでな。それを見せてやろう」
「面白い。それならばだ」
「見せてもらおう」
一斉に槍を突き出しそのうえで殺気に満ちた小宇宙を発してみせてきた。
「ここでな」
「そして死ぬがいい」
「来るのだ」
また挑発してきたアルデバランだった。
「見せてやろう、このタウラスのアルデバランのグレートホーンをな」
「よし、見てやろう！」
「行くぞ！」
彼等もまたその言葉を受けて一斉に動いてきた。
そしてその槍で正面から、上から、横から、後ろから襲い掛かる。
だがアルデバランはまだ腕を組んだままだ。
そうしてその状態で。彼は叫んだ。
「グレートホーン！！」
「むっ、来たか！」
その瞬間だった。彼等全員を凄まじい衝撃が襲った。
「う、うわあああああっ！」

「何だとっ！」
全員その衝撃に吹き飛ばされてしまう。そうしてそのうえで地面に叩き付けられる。彼等の戦衣はどれも粉々になってしまっていた。
「ば、馬鹿な」
「我等を一度にだと・・・・・・」
「そうだ」
アルデバランは倒れ伏す彼等に対してこともなげに告げた。
「グレートホーンは一撃とは限らないのだ」
「何度でも出せるというのか」
「くっ、抜かったわ」
「このタウラスのアルデバランを甘く見てもらっては困る」
アルデバランはこうも返した。
「この程度のことは造作もないこと」
「そして我等を倒すこともか」
「くっ・・・・・・」
彼等は断末魔の中で無念の声をあげるばかりであった。それしかできなかった。
「流石だと言うべきか」
「黄金聖闘士だからこそか」
彼等はその中でまた呻いた。

第四十話　揺れる大地その八

「恐ろしい男だタウラス」
「そして黄金聖闘士達よ」
「それではだ」
アルデバランは彼等が全て立ち上がれないのをわかったうえで立ち去ってみせた。
「さらばだ」
「うぐっ・・・・・・」
インプ達のうちの一人が最後の言葉を出して事切れた。こうしてアルデバランと彼等の戦いは終わった。しかしこの戦いは誰も知らないというわけではなかった。
「流石だな」
「そうじゃな」
シオンがこの戦いを遠く離れた聖域から見ていたのであった。そして彼の側にある鏡からもう一人この戦いを見ていた者もいた。
「アルデバラン、やはり見事じゃ」
「魂はそのままだな」
シオンは安心したように述べた。
「やはりな」
「そうじゃな。これまで四人の者が出陣したが」
「うむ」
鏡の中の男の言葉に応えるシオンだった。
「四人共。見事なものじゃ」
「あの時と同じだ」
シオンは玉座に座っている。そうしてそのうえで今度は安堵したように述べるのだった。
「実にいいことだ」
「名前こそは違うがのう」

「アルデバランは名前も同じだ」
シオンはこのことは言い加えたのだった。
「それは忘れたか？」
「おっと、そうだったのう」
鏡の中の男は今のシオンの言葉を受けてまた笑った。
「ほっほっほ、これは失態じゃ」
「いや、本当はわかっているな」
「いやいや、本当に忘れておったのじゃよ」
顔を崩しながら笑い続けている。しかしそれが本当のことかどうかはわからないことであった。彼のその皺だらけの顔からは何も読み取れなかった。
「実際にのう」
「そう言うのならそう受けておく」
シオンはその彼に対してこう言うに留めた。
「しかしだ。アルデバランもだ」
「うむ」
「やはり。前と同じだ」
こう言うのであった。
「あの時とな」
「技もじゃな」
男はそれもだというのだった。
「同じじゃ。しかしじゃ」
「その強さもキレもよくなっているな」
「あの時よりものう」
二人はアルデバランを知っているかのように話していた。
「よくなっておる」
「デスマスクもだった」
シオンは次に彼の名前を出した。
「そしてシュラもだ」
「そうじゃな」

「アフロディーテも。あの時よりもまだ強くなっている」
「あの時は。無念じゃった」
男はここで苦い言葉を出したのだった。
「わし等以外皆死んでしもうた」
「次の聖戦もだ」
既にそこまで考えているシオンだった。
「次のハーデスとの聖戦だが」
「うむ」
「私はいない」
それはもう規定事項だと言わんばかりの言葉であった。シオンは己に対することをここまで平然と述べてみせたのであった。何でもないといったように。
「その時は御前に任せるが」
「すまんのう」
「それは私の言葉だ」
今の男の言葉にはこう述べた。
「私がいないのだからな」
「そうなるか。しかし他の者達もハーデスとの戦いでは最後のあの門をじゃ」
「それこそがだ」
だがシオンはこう男に返すのだった。

第四十話　揺れる大地その九

「それこそが最も重要なのだ」
「それこそがか」
「あの者達にしかできぬ」
彼は言った。
「そして御前にな」
「御主はその時にはおらんからか」
「それが運命だ」
やはりわかっている者の言葉であった。
「それがな」
「左様か。では引き受けた」
「済まない」
「しかし。アルデバランじゃが」
話はアルデバランに関するものに戻った。また彼等の目が鏡にいく。
「やはり強くなったのう」
「そうだな。だが性格は少し違うな」
「優しくなったようじゃな」
「そうだ。以前も実はそうだったが」
彼等はこのことを話していくのだった。
「今はそれが表に出ておるのう」
「そこが違う」
シオンは指摘した。
「そこがな。かなり違ってはいる」
「性格は変わってきておるか」
「全てが同じというわけではない」
そしてシオンはこうも話すのだった。
「前世からの宿命といってもな」

「そういうことか」
「だが。それでも懐かしいものだ」
不意にシオンの言葉が温かいものにもなった。
「彼等がいるというのはな」
「そうだな。あの者達が知らぬとはいえ再び揃ったのじゃ」
男の言葉も微笑んでいるものになっていた。
「善き哉善き哉」
「そうだな。ところでだ」
ここでシオンは話題を変えてきた。
「感じるものはないか」
「感じるものというと」
「御前は感じないか？何か」
シオンの言葉がここで何か剣呑なものを感じ取ったようなものになった。そうしてその声でさらに彼に対して告げるのであった。
「何かが出て来ようとしているものが」
「ふむ。何かがか」
「アーレスもまだ出て来ていない」
シオンはこのことにも言及した。
「必ず姿を現わすと思うがな」
「アーレスは間違いなく出て来る」
男はアーレスについてははっきりとわかっていた。わかっていない筈もないといった声であった。そしてそれはシオンも感じ取っていた。
「間違いなくな」
「そうだな。だが」
「だが？」
「アーレスにはエリスの他にも側近達がいた」
この話をしてきたのだった。
「あの争いの女神の他にもな」
「そうじゃったな。四人の神々がおったのう」

「あの者達がまだいないようだが」
「出て来るやも知れぬというのじゃな」
「それについてはどう思うか」
仮面の下に表情は隠していた。しかしそれでも真剣な声で男に対して問うてきていた。
「これは」
「そうじゃな。あの者達も出て来るじゃろ」
男はシオンのその言葉に応えて述べたのだった。
「いづれはのう」
「やはりそう思うか」
シオンもそれを聞いて納得した声で頷いた。
「御前も。そのように」
「出て来ぬ筈がない」
男はこうも話した。

第四十話　揺れる大地その十

「ここで敗れた方が地上を去らなければならんのじゃからな」
「その通りだな。ならばやはり」
「アーレスとその四柱の神々は出て来る」
彼はまた言った。
「間違いなくのう」
「その通りだな。ではその相手はだ」
シオンの言葉がここでさらに強いものになった。
「御前にも頼むかも知れないが」
「ほっほっほ、むしろ向こうから来てくれるかも知れんぞ」
「あちらからか」
「我等の戦力の核は黄金聖闘士じゃ」
聖域といえばやはり黄金聖闘士である。その彼等なくして聖域は語れないと言ってもいい。そこまで重要な戦力となっているのである。
「それならばやはりな」
「御前の方にも来るか」
「その時は相手をしてやるつもりじゃ」
男も素っ気無い調子で述べた。
「神であってものう」
「頼むぞ。おそらく私のところにもだ」
シオンの言葉がまた変わった。
「神の一人が来る。誰かがな」
「おそらくそれはじゃ」
男は鏡の中からシオンを見ながら話した。それは年齢以上に何かしらの深さを感じさせる叡智をたたえた瞳の光を見せていた。
「エリスじゃぞ」
「あの争いの女神がか」

「そうだ。あの女神がやって来る」
彼はシオンに対して告げた。
「間違いなくのう」
「そうだな。私の相手をするならばだ」
シオンはその右手を顎に当てた。そうしてそのうえで語った。
「やはりな。あの女神か」
「そう思うぞ。その時は腹を括ることじゃな」
「私の最後の戦いになるな」
シオンはふと達観したように述べた。
「それがな」
「最後か」
「最後の相手にとって不足はないと言うべきか」
彼はこうも言った。
「神ならばな」
「そうじゃな。わしとてもそれは同じ」
男もまたその言葉を真剣なものにさせた。
「やらせてもらうぞ」
「そしてあの者達がいる」
シオンの脳裏にまた彼等の顔が浮かび上がった。
「彼等がな」
「そうじゃな。あの者達ならばやってくれる」
男もまた彼等のことをその脳裏に思い浮かべた。
「必ずのう」
「私は彼等を信じている」
シオンの声は穏やかなものに戻っていた。
「私の後もな」
「わしもじゃ。それではじゃ」
「今まで悪かったな」
男への言葉が親しげなものになっていた。
「こうして話に駆り出して」

「よいよい。ここはとにかく暇でのう」
飄々とした声で語ってみせてきた。
「こうして話をするのもいいものなのじゃよ」
「そうか」
「そういうことじゃ。ではそれでな」
「うむ。ではまたな」
「話し合おうぞ」
こう話してそのうえで鏡から消えるのであった。シオンはそれを見届けるとやがて玉座から立ち上がり姿を消した。そうして今は休むのであった。

第四十話　　完

２００９・６・２２

第四十一話　再襲撃その一

再襲撃

「そうか。第一陣が破られたか」
「はい」
「残念ですが」
ドーマに対してマーテルとヨーダが答えていた。
「タウラスのグレートホーンにより全員」
「倒されてしまいました」
「そうか」
ドーマは二人の報告を聞いてまず唸るように述べるのだった。
「そうなってしまったか」
「ですがドーマ様」
「そうです」
しかしここでグレイとデューテが言ってきた。
「まだ第二陣がおります」
「あの者達にお任せ下さい」
「それはわかっている」
彼は向かわせたインプ達に対して継げるのだった。
「あの者達に任せる」
「有り難き御言葉」
「そうして頂けるとあの者達も名利につきます」
リベカとディーンが彼等にかわって述べてきた。
「ではまずはあの者達に今の攻撃は任せて」
「我々は今は」
「ここでの戦いの備えをしておく」
これがドーマの考えであった。
「あの者達がここに来た時に備えてな」
「はい、それでは」

「このまま予定通り」
今度はアトラスとジュリアが応えた。
「我等もまた」
「ここで備えておきます」
「いいか、敵は一人と考えるのだ」
「一人！？」
ロビンが一人と聞いて声をあげた。
「ドーマ様、一人といいますと」
「タウラスだ」
彼だというのである。そのアルデバランだと。
「あの者だけと考えるのだ」
「タウラスを倒せばですか」
「それで戦いの決着がつくというのですね」
「その通りだ。まずはあの男だ」
このことを強調もするのだった。本当に敵がアルデバランだけであると言わんばかりであった。少なくともドーマは彼だけを見ていると言ってよかった。
そしてその目のまま。彼は言葉を続けてきた。
「あの男を倒す」
「そうですか。まずはあの男を」
「倒せばそれで我等の敵はいなくなりますね」
「その通りだ。あの男を倒せば勝利を得たことになる」
やはり黄金聖闘士は聖域の、聖闘士達の象徴である。その一人であるアルデバランを倒せばそれで戦いの決着はつく、そういうことであった。
「いいな。それはな」
「はい、それではそのように」
「タウラスを集中して狙います」
「この我等が」
「他の聖闘士達はだ」

当然彼等のことも忘れてはいない。しかしそれでもドーマは彼等に対してはあまり見ているとは言えなかった。度外視している傾向があるのは確かであった。
「インプ達で足止めしておく」
「そして我等でタウラスを」
「そういうことですね」
「そうだ。その通りだ」
やはりそうであった。ドーマが考えている戦術はそれであった。
「俺が出向いて倒してもいいが」
「いえ、それはお待ち下さい」
「どうかそれは」
だがそれは九人の狂闘士達が出て来て止めるのであった。彼等は一斉に声をあげて今のドーマの言葉を制止するのであった。
「我等もまた戦いをしとうございます」
「ですから是非」
こう言うのである。
「ここは我等も戦わせて下さい」
「御願いします」
「狂闘士の血だな」
ドーマはその彼等の言葉を聞いて述べた。
「それがそうさせるのだな。やはり」
「はい、その通りです」
「この我等の血が」
狂闘士は戦いを求める存在だ。そしてその時の破壊と流血を愛する。それこそがまさにアーレスの戦いに他ならないからです。

第四十一話　再襲撃その二

それを求める狂闘士達だからこそ。彼等は言うのであった。
「是非そうさせて下さい」
「タウラスとの戦いを」
「では戦うのだ」
彼もそれを許した。しかしであった。
「だが」
「だが？」
「何かあるのですか？」
「この戦いにはもう一人黄金聖闘士が来るだろう」
このことを周りの狂闘士達に対して話すのだった。
「それはおそらく」
「おそらく？」
「サジタリアスだ」
その者が来ると告げるのだった。
「サジタリアスのアイオロスがな」
「サジタリアスといえば」
「確か」
ヨーダとアトラスがその名を聞いて述べた。
「ジェミニのサガと並ぶ黄金聖闘士の中でも最強の者でしたね」
「全てにおいて完璧な存在だとか」
「そうだ。その者が来るだろう」
ドーマはこう予想しているのだった。
「今その小宇宙がこちらに向かって来ている」
「タウラス達だけではなくですね」
「その者も」
「そうだ。御前達のうち何人かはそのサジタリアスに向かってもらうことになる」

彼等に顔を向けての言葉である。
「それはいいな」
「はい、わかっております」
「それは」
ジュリアとロビンが勢いよく彼の言葉に応えた。
「サジタリアスもまた獲物として相応しい存在」
「喜んで」
「その言葉、確かに受けた」
ドーマは実際に彼等のその言葉を聞いて頷いていた。
「確かにな」
「それではです」
「サジタリアスの相手も」
今度はリベカとグレイが応えた。
「まずは我等にお任せを」
「必ずや二人の首を挙げてみせます」
「その言葉、確かに受け取った」
ドーマは彼等の言葉を実際に受け取ったのであった。
「その言葉な」
「有り難き御言葉」
最後にマーテルが答えたのだった。
「それでは。まずは聖闘士を待ちましょう」
「然るべき場所で」
「その通りだ。では待とうぞ」
「はい」
彼等は今はアルデバラン達を待っていた。今は動きはしない。しかしその牙は着々と研がれていたのであった。その鋭い牙が。
そしてそれは聖闘士達も同じであった。彼等もまた戦場に向かいながらその心をそちらに向けていた。まさに戦いの時が迫ろうとしていた。
「やっぱり近付いていますよね」

「その通りだ」
今回はアルデバランが車の運転をしていた。そうしてそのうえで戦場に向かっているのであった。しかし場所まではわかってはいない。
不意にモーゼスが。アルデバランに対してその場所を問うのであった。
「それでアルデバラン様」
「どうした？」
「運転の件ですが」
まずはこのことを問うのであった。
「本当に宜しいのですか？」
「構わん」
アルデバランは運転を続けながら彼のその問いに答えた。
「それは気にするな」
「ですが黄金の方が運転なぞ」
「そうです」
アルゲティもこのことに言及してきたのだった。

第四十一話　再襲撃その三

「やはり僭越に過ぎます」
「ここは俺達が」
「だからいいのだ」
しかしその彼等に対してまた言うのだった。
「それはな。構わないのだ」
「何故ですか？」
「どうして御自身で」
「俺も運転をしたくなる時がある」
彼が言うのはこのことだった。
「だからだ。それが今だ」
「だからですか」
「それで」
「その通りだ。しかしイラクでのドライブも」
アルデバランの視線は正面に向いたままであった。そこに見える風景は確かに砂と岩ばかりである。しかしそれでもそれはそれで風情のあるものであった。
それを見ながら彼は言うのであった。このことを。
「中々いいものだ」
「はい、それは確かに」
「その通りです」
これは白銀の者達も認めるところであった。まさにその通りであった。
「このイラクもイラクでドライブするにはいいものです」
「面白いものです」
やはり彼等は言うのであった。
「ですから運転は苦になりません」
「面白いものです」

こう話すのだった。
「もっとも戦いは忘れていませんが」
「それだけは」
「それは俺も同じだ」
そしてそれはアルデバランも同じであった。やはり運転を続けている。運転を続けながらそのうえで今はガムをその口の中に入れたのであった。
そのガムはコーヒーガムであった。ガムを食べながらまた話した。
「このガムだが」
「はい、コーヒーガムですけれど」
「どうですか？」
「美味いな」
そのガムを食べながら素直に述べたのであった。
「これはまたかなり」
「日本のやつですよ」
「聖域で今かなり人気なんですよ」
「そうだったのか」
アルデバランは青銅の者達の言葉から今それを知ったのであった。
「このガムが今人気だったのか」
「あれっ、知らなかったのですか？これ」
「アルデバラン様ひょっとしてガムは」
「殆ど口にしない」
こう答えるのであった。
「ガムはな」
「そうだったんですか。てっきり菓子好きだから」
「これもって思ったんですけれど」
「なあ」
青銅の者達は顔を見合わせて意外といった顔をするのであった。
実はアルデバランがガムを食べないとは思っていなかったのである。
「しかし。それでもだ」

「はい、美味いですよね」
「それもかなり」
「うむ。美味い」
アルデバランの言葉は満足しているものであった。
「コーヒーの味だけでなく甘みもいいな」
「そうでしょ！？だから大人気なんですよ」
「とにかく滅茶苦茶美味いですから」
人気があるのには理由があるということだった。
「俺達も食べてますし」
「なあ」
「これからはこのガムも時々口に入れよう」
アルデバランはまた述べた。
「気に入った」
「そう言ってもらえて何よりですよ」
「辰巳のおっさんも喜びますよ」
「辰巳！？」
アルデバランは辰巳と聞いてまたしても声をあげた。

第四十一話　再襲撃その四

「あの御仁がこのガムを売っているのか」
「ええ、これグラード財団のものですよ」
「日本から輸入してきたんですよ、あの人が」
「そうだったのか」
アルデバランは今そのこともまた知るのであった。
「あの御仁も何かと忙しいな」
「そうですよね、全く」
「あんないかつい顔して結構気が利きますし」
「少なくとも悪い男ではない」
アルデバランもそれは感じ取っていることであった。確かに辰巳という男は顔は怖いがその心根は真っ直ぐであり好感が持てるものである。
「アイオリアともよく気が合うしな」
「アイオリア様とですか」
「そういえば」
青銅の者達はアイオリアの名前を聞いてまた話すのだった。
「あの人とは気が合う感じだよなあ」
「確かに」
「まっすぐだしな」
「髪の毛はないけれどな」
「それは言うな」
髪の毛についてはアルゲティが注意した。
「それだけはな」
「おっと、そうだったな」
「あとあれだよな。ジャミアンも」
「ジャミアンの前でそれ言ったら速攻で殺されるぞ」
そんな話もされるのだった。実際にジャミアンはそう言われてそ

の相手を即座に殴り飛ばしたことがある。それだけ頭にきたということなのだ。
「だからそれはやるなよ」
「ああ、わかってるさ」
「それはな」
青銅の者達もそれはわかっているのだった。
「しかしな。それでもな」
「髪の毛はなあ」
髪の毛については誰もが注意がいくので仕方がなかった。そう言えた。
「これぱっかりはな」
「どうしても目立つからな」
「しかしそれでも言わないに越したことはない」
アルデバランも注意する。
「それが気遣いというものだ」
「いえ、わかってますけれどね」
「それは」
わかっていても、ということである。ついつい言わずにはいられないのである。そういうことだった。所謂悪戯心というものである。
「けれどまあ」
「止めるように努力はします」
あまり信用できない言葉であった。しかしそれでも言うことは言ったのだった。
「それでアルデバラン様」
「やっぱり辰巳さんとお知り合いなんですね」
「店にも行った」
デスマスクに連れられて黄金全員で行ってからそれなりに馴染みの店となっているのである。だから結構顔見知りになっているのだ。
「美味いな」
「和食ですか」

「美味いんですか、あれって」
「そうだ、美味い」
はっきりと答えるアルデバランだった。
「身体にもいいしな、あれは」
「ああ、和食ってかなり身体にいいそうですね」
「魚に大豆ですよね」
「魚は刺身や天麩羅にする」
アルデバランはまずはそちらから話した。
「海老や貝もな。魚介類は全部そうしていく」
「生で食べるっていうのも」
「俺達はあまり抵抗ありませんけれどね」
この辺りは彼等が海の国であるギリシアにいるからであった。海に多く面している国にいればそれだけ海のものを食べるようになる。これは常識であった。
「けれどやっぱり凄い食べ方ですよね」
「日本人っていうのは」
「そして大豆は豆腐等にする」
そして大豆はそうして調理するのであった。

第四十一話　再襲撃その五

「これもまた非常に美味い」
「そうですか。そんなに」
「そんなに美味いですか」
彼等はその話を聞いてまた言い合うのだった。
「その豆腐っていうのも」
「和食全体が美味いんですか」
「そうだ。健康的でもある」
しかもこれがプラスアルファされるのであった。
「食べて損はない」
「そうですか。じゃあ俺達も今度食べてみます」
「あのおっさんのところに行って」
「行ってみるといい。決して後悔はしない」
アルデバランはかなり率直に彼等に辰巳の見せに行くように勧めた。やはり本気である。
「是非共な」
「わかりました。それじゃあ是非」
「行ってみます、この戦いが終わったら」
「俺も行ってみるとしよう」
アルデバランもその気になってきた。
「今度またな」
「黄金聖闘士の方々も馴染みなんでしたね、そういえば」
「あのおっさんのお店に」
そういうことなのだった。
「だからまた行くがだ。しかしそれもまた」
「そうですね。今の戦いが終わってからです」
モーゼスが真面目に行ってきた。
「その店に行くのは」

「その通りだ。そして今は」
「今は？」
「どうするんですか？」
「また街に辿り着いた」
丁度今街に入ることができた。いいタイミングであった。
「休むとしよう」
「あれっ、今回もですか！？」
「街で休むんですか」
「間も無く決戦の時だ」
アルデバランは驚きの声をあげる青銅の者達に告げた。
「その為には英気を養っておくことが必要だ」
「だからですか」
「それで今回も」
「そういうことだ。ではそれでいいな」
街の中に入ったところで再度彼等に対して問うた。
「街で休むということでな」
「わかりました。それじゃあ」
「また美味いものを食って飲みましょう」
「しかし待て」
だがここでアルゲティがはしゃぐ彼等に言ってきたのだった。
「そろそろ決戦だぞ」
「ああ、わかってるさそれは」
「よくな」
「わかっていたら節制を忘れないことだ」
今度言うのはこのことだった。
「それはいいな」
「わかってるって」
「それはな」
青銅の者達は能天気にアルゲティが刺してきた釘をあっさりと抜いてしまった。そうしてそのまま釘を放り捨てて終わりにしてしま

ったのだった。
「だから心配無用」
「心配無用か。じゃあまあ」
「今日も楽しくやるか」
「話を聞いているのか？全く」
そうは言ってもこれ以上は言わないモーゼスとアルゲティだった。
アルデバランはあるホテルの駐車場に車を入れた。そうしてそこから街に出るのであった。
「泊まるのはあのホテルですよね」
「あそこですよね」
「そうだ」
アルデバランが青銅の者達の問いに答える。

第四十一話　再襲撃その六

「手続きをしたのも見たな」
「ええ、それも」
「じゃあ今日はあそこですか」
「ゆっくりと休むことだ」
またこう彼等に話すのだった。
「今はな。そしてだ」
「そして？」
「やっぱり戦いのことですよね」
「そうだ。戦いは間も無くだ」
これは間違いなかった。確かに戦いが迫っていることは誰もが感じ取っていた。彼等とて伊達に聖闘士ではない。感じ取らない筈もなかった。
そうしてそれを感じ取りながら今は街に出る。夕刻であり夕陽が今まさに落ちようとしていた。その中を七人で歩くのであった。
「それで何します？」
「飲むのもいいですけれど」
「いや、飲むのよりもだ」
だがアルデバランはここで言うのだった。
「映画館に行かないか」
「映画ですか？」
「それですか」
「そうだ。たまにはいいと思うが」
それを提案するのだった。
「映画をな。どうだ」
「映画ですか」
「そうですねえ」
まずは青銅の者達がアルデバランの言葉に応えた。

「言葉が問題ですけれど」
「アラビア語わかりにくいですし」
「だよなあ」
やはりそこが問題であった。彼等はアラビア語があまり得意ではないのだ。だからいざ映画を観るとなるとそのことを戸惑うのであった。
「そこがネックだからな」
「英語の映画ならともかく」
「日本語の映画はどうだ？」
アルデバランが勧めてきたのはそれであった。
「日本語ならどうだ」
「あれっ、日本語の映画あるんですか！？」
「イラクなのに」
「イラクは親日の国の一つだ」
アルデバランは今度はこのことを彼等に話すのだった。
「それは知らなかったのか」
「っていうかそうだったんですか」
「イラクが」
やはり知らなかったのだった。イラクがどの国を好きなのかは。とりあえず隣国であるイランやトルコ、サウジアラビアとはあまり仲がよくなさそうなのは感じていた。
「日本が好きだったなんて」
「意外ですね」
「当の日本はそのことにあまり気付いていないようだがな」
これはよくあることだった。日本という国の変わったところは何故か自分を好きな国が何処なのか今一つはっきりとわかっていないのである。
「だがこの国が親日なのは事実だ」
「それで日本の映画もやるんですね」
「成程」

「日本語はわかるか」
そしてあらためてこのことを彼等に問うのであった。
「わかるのならそれを観るが」
「はい、辰巳のおっさんとの付き合いで覚えました」
「話してまあ映画を観る位には」
わかるようになったというのであった。
「じゃあそれで御願いします」
「日本の映画で」
「わかった。では行こう」
「それでアルデバラン様」
「どういった映画ですか？」
モーゼスとアルゲティはそのことを尋ねるのだった。
「映画といいましても色々ありますが」
「どういった映画ですか？」
「時代劇だ」
それだというのである。

第四十一話　再襲撃その七

「それを観に行く」
「時代劇!?」
「何ですかそれは」
白銀、青銅含めた六人の中で誰も時代劇が何か知らなかった。
「今を舞台にした劇じゃないですよね」
「じゃあ何なんですか？」
「日本の江戸時代を扱ったものだ」
こう話すのだった。
「主にな」
「ええと、江戸時代っていうと」
「確か」
青銅の者達は江戸時代と聞いてふと思い出すものがあった。
「あれですよね。ちょんまげをして」
「それであの細長い刀振り回すんですよね」
「あとあの変わった服？袴だったか？」
「他には忍者か」
「その通りだ」
アルデバランは青銅の四人の言葉に応えて言うのだった。
「それだ。そういったものが出て来るものだ」
「そうですか。それですか」
「何かギリシアでも観たことがありますよ」
「あの辰巳のおっさんに紹介されて」
そしてここでまた彼の名前が出て来るのだった。
「結構観ましたよ」
「面白いですよね、あれ」
「確か地雷夜だったか」
アルデバランはその映画のタイトルのことも話した。

「そういったな。確かな」
「ジライヤですか」
「何か凄いタイトルですね」
「それでいいか」
また彼等に対して問うアルデバランだった。
「観るのは」
「はい、じゃあそれで御願いします」
「どんな映画かわからないですけれど」
そこまではよくわからない彼等だった。しかしタイトルを聞いて面白そうだとは思っていた。これは予感からそう思っているのであった。
「面白そうですね」
「楽しませてもらいます」
こんな話をしてそれから映画館に入るのだった。そうして映画で休息の時を過ごすのだった。それが終わった時には夜になっていた。彼等は今は夜の街では遊ばなかった。ホテルに入り休んだ。そうして朝になって外に出る。だがその駐車場に七人で来たその時だった。
「アルデバラン様、どうやら」
「来たようです」
彼等は一斉に足を止めアルデバランに告げるのだった。
「奴等が」
「どうやらこれは」
「そうだな」
そしてアルデバランもそれを感じ取っているのだった。
「来ているな。奴等が」
「はい、間違いなく」
「どうしますか？」
「すぐに聖衣を装着しろ」
アルデバランはすぐに彼等に命じたのだった。

「いいな、すぐにだ」
「はい、それでは」
「今すぐに」
こうして彼等はすぐにその場で聖衣を装着した。するとすぐにだった。
「ほう、もう聖衣を身に着けているのか」
「流石と言うべきか」
インプ達が彼等の周りを取り囲んでいた。相当な数が存在している。
「聖闘士、その名は伊達ではないな」
「見事なものだ」
「褒め言葉はいいんだよ」
クリーザが彼等に対して言い返した。

第四十一話　再襲撃その八

「おためごかしにもなりゃしねえ」
「ふふふ、確かにな」
「それはその通りだ」
インプ達も笑いながらだがそれは認めるのだった。
「しかしだ。我等もそうはいかない」
「生憎だがな」
「それはもうわかってるさ」
今度はチクが彼等に言い返す。
「俺達を倒すのが御前等の仕事だからだろう？」
「簡単に言えばそうなる」
「我等にとって貴様等は永遠の敵」
彼等はここでも槍を手に次第に間合いを詰めていく。今にも聖闘士達に対して襲いかからんばかりである。狂闘士独特のあの禍々しい小宇宙も見られる。
「ならばな。それではだ」
「行くぞ」
「来い」
アルデバランが彼等に対して告げる。
「しかしだ」
「しかし？」
「何だ？」
「ここでは場所が悪い」
こう彼等に対して言うのであった。
「ここではな。場所を変えるぞ」
「場所を？では何処に場所を変えるのだ？」
「一体何処にだ？」
「場所はここではない」

こう言って両手を拳にしてそれを胸の前で合わせた。するとそこから光を発した、すると聖闘士達も狂闘士達もある場所に移動したのだった。そこは。

「むっ！？ここは」

「街の郊外ではないか」

まずはインプ達がその場所を見て言うのであった。

「ここで戦うつもりか？ひょっとして」

「この場所でか」

「そうだ」

こう答えるアルデバランだった。態度を崩さずに。

「ここで戦う。それでいいな」

「そうだな。ここでいい」

「戦うのならばな」

「そうか。わかった」

アルデバランは彼等の言葉を聞いたうえでまた頷いたのだった。

「御前達の考えをな」

「そうか。それはわかった」

「ならばだ」

「よし、それじゃあよ」

ニコライが前に出た。

「派手にやらせてもらうぜ。覚悟しなよ」

「待て」

だがその彼をアルデバランが制止したのであった。

「御前達は手を出すな」

「えっ、ではまた」

それを聞いたブリットが声をあげた。

「アルデバラン様がまた戦われるんですか？」

「そのつもりだ」

こうブリットだけでなく他の聖闘士達にも述べるのであった。

「ここも俺が戦わせてもらう」

「何か俺達出番ないなあ」
「そうだよなあ」
青銅の者達はそれを言われてぼやくがそれでも納得はしたのだった。
「まあ決戦の時にやらせてもらいますけれどね」
「その時に」
「すまんな。それではだ」
「はい」
「どうされますか？」
「御前達は今いる場所から動くな」
こう彼等に告げるのであった。
「そこからな。いいな」
「？ではまさか」
「あれを使われるおつもりですか？」
モーゼスとアルゲティもまたアルデバランに対して問うた。

第四十一話　再襲撃その九

「あの技をここで」
「お使いになられるのですか」
「そのつもりだ」
やはりこう答えるアルデバランであった。
「今回はな」
「わかりました。それでは」
「そのように」
彼等もそれに頷くのであった。そうして今度は青銅の者達に顔を向けて述べるのであった。
「御前達もそこから動くな」
「動くと命の保障はない」
「どうやらそうみたいですね」
「確かに」
青銅の者達もアルデバランが何をするつもりなのかわかった。グリーザとニコライがまず彼等の忠告に対して真剣な面持ちで頷くのだった。
「じゃあ俺達はここで」
「静かに見させてもらいますよ」
「俺達もです」
「そうさせてもらいます」
チクとブリットもそれは同じであった。
「さて、それじゃあ」
「アルデバラン様の技、見せてもらいますよ」
「済まぬな。出来る限り御前達に負担はかけたくはない」
これがアルデバランの本音であった。
「だからだ。ここではまた俺が戦わせてもらう」
「ふん、心優しいのだなタウラスよ」

「その心は」
インプ達はまずは皮肉をアルデバランに対してかけた。シニカルな笑みで。
「だが今度もそう上手くいくとは限らないぞ」
「それはわかっているか？」
「わかっている」
アルデバランの彼等への返答は冷静沈着そのものであった。
「では。来るのだ」
「ならば。行くぞ！」
「仲間達の仇！」
こう言いながら一斉にその手にある三叉の槍を手に襲い掛かってきた。
「グレートホーンで来るか！？」
「どうする！？」
「グレートホーンは使わん」
アルデバランはそれは否定するのだった。
「それは言っておく」
「グレートホーンを使わないだと？」
「では一体何を使うというのだ？」
インプ達は彼に迫りながらそれを問うのであった。
「まさかとは思うがあれか」
「タイタンズノヴァか」
「そうだ」
やはりそれだというのである。
「このタイタンズノヴァ、受けてみるのだ」
「ははは、馬鹿なことを言え！」
「大地を揺らし破壊するのならばだ！」
彼等はそれを聞いてそれでもであった。
「我等がこうして跳んでいればそれは効果がない！」
「それでどうするつもりだタウラスよ！」

「そう思うのか」
アルデバランはそれを聞いても平然としていた。
「果たしてタイタンズノヴァが地にいる相手だけのものと思うのか」
「違うというのか？それで」
「どうなのだ、タウラスよ」
「では見るがいい」
ここではあえて答えようとはしないのだった。
「このタイタンズノヴァが果たしてそうか」
「ほざけ、それはもうわかっている！」
「覚悟しろタウラス！」
彼等は一旦着地して再び跳びそのうえで急降下攻撃に入る。アルデバランはそれを見てそのうえで技を放ったのであった。

第四十一話　再襲撃その十

「タイタンズノヴァ！」
今その技を放った。それが空にいるインプ達に対して襲い掛からない筈だった。しかしであった。その技がどうなったかというと。
「な、何ィ！」
「まさか！」
衝撃と粉々になった大地から無数の岩石が彼等を襲う。そうして瞬く間に彼等を撃ちそうして地面に叩き落してしまったのであった。
「ち、宙にいる我等までか」
「倒せるというのか」
「タイタンズノヴァが壊すものは大地だけではない」
技を放ち終えたそのアルデバランの言葉である。
「宙にいる相手も大海原にいる相手も倒すことができるのだ」
「やはり黄金聖闘士ということか・・・・・」
「それだけの技を持っているというのか」
「その通りだ」
アルデバランはまた彼等に対して告げた。
「これでわかったな」
「そうだな。見事だ」
「流石は黄金聖闘士・・・・・」
インプ達はこう言い残してそのうえで倒れるのであった。倒れた彼等はそれで事切れた。戦いは終わりそのうえで後ろにいる他の聖闘士達に対して話すのであった。
「さて、それではだ」
「ええ。街に戻りますか」
「そうしましょう」
「そうだ。ここでの戦いは終わった」
聖衣は外れ箱に戻っていた。私服に戻ったうえでまた話す彼等で

あった。
「それではだ。行くとするか」
「はい、いよいよですね」
「奴等がいるその場所に」
「既に場所はわかっているな」
アルデバランは青銅の者達の言葉を聞きながら白銀の者達に対して問うのであった。
「何処に行くかは」
「はい、勿論です」
「それは」
モーゼスもアルゲティもそれに答えるのであった。
「あの場所ですね」
「古の伝説のあの場所ですね」
「そうだ。そこに向かう」
こう言うのである。
「そこにな。それでいいな」
「はい、それではそこに」
「参りましょう」
そうして街に戻りそれから戦いに向かうのであった。彼等の戦いはここでもアルデバラン達の勝利に終わった。しかしそれだけではないのであった。
「来たな」
「はい、そうです」
「遂にここに迫っています」
また狂闘士達がドーマに告げていた。
「インプ達の第二陣はもう破られました」
「彼等もまた」
「見事な最期だったようだな」
インプ達の悲報を聞いてこう問うたドーマであった。
「あの者達は」

「はい、そうです」
「皆立派な最期でした」
彼等はこのこともまたドーマに告げるのであった。
「誰一人として背を向ける者はいませんでした」
「そのうえで見事に散りました」
「ならばそれでいい」
ドーマはその報告を聞いて満足した顔で頷くのであった。
「それでな。それでいい」
「はい、後は我等が」
「あの者達の仇を取りましょう」
彼等が出した今度の言葉はこれであった。
「我等の手で」
「そうですね」
「その通りだ。狂闘士は同胞の仇は何としても取る」
ドーマの言葉が強いものになった。
「それはわかっているな」
「無論です」
「ではそのように」
彼等は言葉を合わせてドーマに頷く。彼等もまた意を決するのであった。
「さて、それではです」
「聖闘士達がいよいよ来ます」
今度はまたこのことに関しての言葉であった。
「我等の決戦の時ですね」
「間も無くです」
「来るのはタウラス」
まずはアルデバランであった。
「そしてサジタリアスだ」
「黄金聖闘士の中でもジェミニのサガと並んで最強の存在であるあの男がですか」

「いよいよ我等の前に姿を現わすのですか」
「あの男が」
「そうだ。それはいいな」
あらためて彼等に対して告げるのであった。
「あの男の相手もだ」
「何、腕がなりますよ」
「そういうことです」
そして彼等の返答は実に狂闘士らしいものであった。
「サジタリアスの相手もまた」
「楽しみなことです」
「そうか。それでは何も言うことはない」
ドーマは彼等のその言葉を聞いて安心したようであった。
「俺からはな。御前達がそう言うのならばだ」
「はい、それではドーマ様」
「我等はここで待ちましょう」
そうしてまた言うのであった。
「彼等が来るのを」
「そして決戦を」
彼等は今からはじまろうとしている決戦を楽しみにしていた。両者の決戦はいよいよ幕を開けるのだった。

第四十一話　完

２００９・６・２９

第四十二話　空中庭園その一

空中庭園

「面白いことになりそうじゃな」
「はい」
「まさに」
八大公達がエリスに述べていた。
「ドーマもあれでどうして」
「場所を選びます」
「あの場所とは」
「私も思っていなかった」
エリスもこう言うのだった。
「ドーマがあの場所を決戦の場に選ぶことはのう」
「そうなのですか」
「エリス様も」
「武骨とばかり思っていたが」
「エリス様」
ここでエリスに言ってきたのはカナンであった。
「ドーマはあれで繊細な感性を持っているのです」
「繊細というのか」
「花を愛することもあります」
このことをエリスに対して告げるのであった。
「その心もあるのです」
「そうであったか」
これはエリスも気付かないことであった。今カナンの話を聞いてそのうえで応えるのであった。やはり意外といったような顔を見せてはいた。
「これからはそのことも見ておくべきか」
「そうして頂けると。それでです」

「うむ」
ここで話は変わった。今度はミシェイルが彼女に告げてきたのであった。
「あの方々はまだでしょうか」
「あの者達か」
「はい、そうです」
ここでエリスと八大公の間の違いが言葉に出た。
「あの方々の封印はまだ解かれないのでしょうか」
「それは間も無くじゃ」
エリスはこうミシェイルに対して答えた。
「それはもう少し待っておくのだ」
「左様ですか」
「あの者達が戻ってくれれば」
エリスの言葉がここで笑った。
「我等の力はさらに強いものになる」
「ええ、それは確かに」
「あの方々の御力があれば」
八大公達の言葉からその者達が彼等よりも上位の存在であることがわかる。だがそれがどういった者達であるかまでは話してはいなかった。
「まさに我等にとっては鬼に金棒です」
「戻って来られれば」
「案ずることはない」
エリスの言葉がまた笑ったものになった。
「あの者達の帰還は間も無くだ。何故なら」
「何故なら」
「何かあるのですか？」
「あの者達の封印も解かれようとしているからだ」
こう述べるのであった。
「今な」

「？といいますと」
「あの者達がでしょうか」
八大公はそれぞれいぶかしみながらエリスに問うてきた。
「もう動いているのですか」
「それによってですか」
「その通り。そしてアーレス様の封印も」
「はい、そうですね」
「それもまた」
八大公はそれを聞いてまた微笑むのであった。
「全て解かれようとしております」
「まずは三つ」
数字まで出るのであった。
「そしてまた一つ」
「解かれますね」
「封印がそうして一つずつ解かれていく」
エリスは楽しそうに述べた。

第四十二話　空中庭園その二

「そして八つ全てが解かれた時に」
「その時にこそアーレス様が」
「再び降臨される」
「その通り。アーレス様の降臨こそが今の目的」
エリスの言葉が強いものになる。
「だからこそ。そなた達にはだ」
「はい、わかっております」
「それは」
最早答えるまでもないといった様子であった。
「だからこそ我等も」
「今ここに」
「既に次に行ってもらう者も決めている」
エリスは彼等にこうも告げるのであった。
「既にのう」
「といいますと」
「それは誰でしょうか」
「そなたじゃ」
ここで一人を指差したのであった。
「そなたに行ってもらう」
「私がですか」
「おそらく向こうもある程度決めてはおるじゃろうな」
エリスはそのうえで聖域についても考えるのであった。
「当然のう」
「ではその黄金聖闘士は」
エリスの指を向けられたその八大公が楽しそうに笑って述べる。
「私が倒して御覧に入れましょう」
「頼むぞ。そして」

「はい」
「封印も頼んだぞ」
「わかっております」
彼はこの言葉にも頷いた。
「それにつきましても」
「もっともそれについては」
エリスはここで悠然と笑ってみせたのであった。
「そなた達がやるべきことをしていればそれでよいのだがな」
「はい、その通りです」
「それについてはまさにその通りです」
八大公達はそれぞれこう述べて彼女に応えるのだった。
「では我等はこのまま」
「己の為すべきことをして」
「アーレス様の御降臨の地均しをしておきます」
こう言ってそのうえで微笑むのであった。彼等もまた彼等の思惑の中で動きそのうえで目的を果たそうとしていた。彼等の目的を。
アルデバラン達が目指すのはある場所だった。グリーザが地図を見ながら言うのだった。この時も全員でキャンピングカーの中にいる。
「アルデバラン様、この道って」
「何だ？」
「あれじゃないですか」
やはり地図を見ながら言うのだった。
「バビロンに行く道ですよね」
「バビロン！？」
「っていうとよ」
チクとニコライがバビロンと聞いて声をあげた。
「あれか！？あの世界七不思議の」
「空中庭園があった」
ブリットがここでこれを言葉に出したのであった。

「そうだな。あのバビロンだな」
「そうだ。間違いない」
グリーザは相変わらず地図を見ていた。キャンピングカーのその椅子にそれぞれ座ってそのうえで仲間達に対して言うのであった。
「まさかここで戦うことになるとはな」
「面白い場所ではあるな」
モーゼスもバビロンという場所を聞いて述べた。
「戦う場所としてはな」
「その通りだ。空中庭園があるとは思えないが」
アルゲティの目は現代にあった。
「しかしそれでもだ」
「そうだ。面白い場所だ」
モーゼスはまたこう言った。

第四十二話　空中庭園その三

「戦う場所としてはな」
「その通りだ。しかしだ」
ここでアルデバランも口を開いてきた。また彼が運転している。
「そこで戦うということにこそ何かがあるようだな」
「何かがですか」
「あるというのですね」
「そうだ。思えばこれまでの戦いの場も何かと興味深い場所だった」
アルデバランは運転を続けながらこう述べるのだった。
「黒い森、グランドキャニオン、そして長江のほとりだ」
「そうですね。面白そうな場所です」
「戦う場所としては」
「だが。果たしてそれだけか」
アルデバランの言葉には疑念も含まれてきていた。
「果たして。それだけなのか」
「といいますと」
「何かあるのですか、やっぱり」
「まだはっきりわからないがな」
アルデバランは断定を避けているのだった。
「そう思えてきた」
「ではアルデバラン様」
「それを見極める為に」
他の聖闘士達がそれぞれの口で彼に告げてきた。
「ここは戦いましょう」
「最初からそのつもりでしたが」
「戦うことによりそこから何かが見えてくる」
アルデバランはまた言った。
「何かがな」

「それではいよいよ」
「バビロンですね」
話をしている間にも車は先に進んでいく。それは当然ながらバビロンに近付いているということだった。つまり彼等の決戦の場にである。
「行きますか。それじゃあ」
「どうします？奇襲を仕掛けますか？」
「ここは」
ブリットとニコライが威勢のいいことを提案してきた。
「それで一気に破って」
「そうしますか？」
「いや、それはしない」
アルデバランはそれは却下した。
「奇襲を仕掛けたとしても見破られる。おそらく無数の雑兵達を四方八方に潜伏させているだろうからな」
「それが偵察と警戒にあたっていますか」
「だからですね」
「見つかればそれで終わりだ」
アルデバランは冷静に戦局を見ているのだった。
「それでな。だからそれはしない」
「わかりました」
「じゃあ奇襲はなしですね」
「じゃあどうします？」
「まさかと思いますけれど」
今度言ってきたのはグリーザとチクだった。
「正面からですか？」
「堂々と攻めるんですか？」
「その通りだ。正面から攻める」
それがアルデバランが今回考えている作戦だった。
「わかったな」

「一見何もないようですが」
「それが一番でしょう」
モーゼスとアルゲティはアルデバランのその策に賛成の言葉を述べるのだった。
「おそらくそれが一番問題がありません」
「俺もそう思います」
「ではそれで決まりだ」
アルデバランはそこまで聞いて頷くのだった。
「このまま堂々と正面から攻撃を仕掛ける」
「了解です」
「それでいいです」
青銅の者達も笑顔でそれに賛同した。
「ではそのように」
「いきましょう」
「よし。ではそれで全ては決まった」
アルデバランは青銅の者達も賛同したのを聞いてあらためて頷いた。

第四十二話　空中庭園その四

「行くぞ。このままな」
「はい」
そうして彼等はバビロンに到着した。するとそこにあったのは。
「むっ！？」
「まさかとは思ったが」
「これは」
それは空中庭園であった。あの。
高いバビロニア風の塔を思わせる建物の頂上に緑の庭園がある。
それこそまさに伝説の時代に伝わっていると言ってもいいバビロンの空中庭園であった。
「バビロンの空中庭園か」
「ということはまさか」
「おそらくな」
アルデバランは驚く他の者達に対して告げた。
「あの場所で戦うことになるのだ」
「そうですか。凝ってますね」
「まさかバビロンの空中庭園で戦うなんて」
「しかし」
だがここでモーゼスが顔を曇らせてきた。
「アルデバラン様」
「何だ？」
「この庭園ですが」
「罠があるというのか」
「御言葉ですが」
彼はそれを危惧しているのであった。
「有り得ることです」
「そうだよな。確かにな」

「あるよな、それは」
青銅の者達も彼のその言葉を聞いてそれぞれ言うのであった。
「やっぱり奴等が築いたものだからな」
「それはあるよな。やっぱりな」
「いや、それはない」
しかしアルデバランはそれを否定するのだった。
「それは。有り得ない」
「有り得ないのですか」
「絶対にない」
完全否定さえしてみせたのだった。
「罠なぞというつまらんことはしてはこない」
「左様ですか」
「だからだ。安心して中に入るぞ」
こう言って自分から足を踏み出しさえするのであった。
アルデバランが先に進めば他の者達も進むしかない。しかしであった。
今度はアルゲティが。アルデバランに対して問うのであった。
「あの、アルデバラン様」
「何だ？」
「一つ御聞きして宜しいでしょうか」
怪訝な顔で彼に対して言うのであった。
「それで」
「うむ。何だ」
そしてそれを退けるアルデバランではなかった。しっかりと聞く素振りを見せるのだった。
「それで。何だ」
「今の御言葉ですが」
それを問うのであった。
「罠はないと仰いましたね」
「その通りだ」

アルデバランもそれを否定しなかった。
「絶対にない。それはな」
「何故そう言えるのでしょうか」
さらに問うアルゲティであった。
「そこまで断言される理由は」
「狂闘士達を率いているのはだ」
アルデバランはそこから話すのだった。
「誰だ」
「誰だといいますと？」
「そうだ。誰だ」
今度はアルデバランから問うてきていた。

第四十二話　空中庭園その五

「誰だ、ここにいる狂闘士達を率いているのは」
「モロクです」
アルゲティはそのアルデバランの問いに対してすぐに答えた。
「あのモロクのドーマです」
「そうだ。あの男だ」
ここでまた言うアルデバランであった。
「あの男は罠なぞ一切仕掛けはしない」
「断言しますね、また」
「敵だっていうのに」
青銅の者達にはそれは疑問を抱くべきものにも思えるのだった。
「どうしてそこまで言えるんですか？」
「敵だったら何をしてくるかわかりませんよ」
「では聞こう」
今度は青銅の者達に対して問うアルデバランであった。
「御前達は俺をどう思うか」
「俺っていいますと」
「アルデバラン様ですか」
「そうだ。この俺だ」
他ならぬ彼自身のことであった。
「俺が罠を仕掛けるように思えるか」
「いえ、まあそれは」
「全然ですけれど」
彼等は口々にこう述べたのだった。
「アルデバラン様が罠なんて」
「絶対にないですよ」
「それと同じだ」
ここでまた言うアルデバランだった。

「俺は戦うにあたって決して罠は使わない」
「そうですね。それは」
「有り得ませんよ」
彼等もそれはよくわかることであった。何故ならアルデバランのことをよく知っているからである。だからこそわかることなのである。
「それよりも正面から戦われますよね」
「それも堂々と」
「姑息な策なぞ何の役にも立ちはしない」
これこそがアルデバランの考えであった。
「圧倒的な正面からの力の前にはな」
「だからですか」
「罠は用いられないと」
「姑息は力に敗れる」
まさにアルデバランそのものの考えであった。
「何にもならないものだからな」
「ふむ。確かに」
「アルデバラン様ならば」
策を弄しても何の意味もない、確かにそう思えるものがあった。
「その通りですね」
「それはわかります」
「それはあの男も同じだ」
またこう言うアルデバランだった。
「それはな」
「!?というとあのモロクは」
「アルデバラン様と同じく」
「そういうことだ」
アルデバランの言葉には何の疑念もなかった。ドーマという男を完全にわかっている、そのことまでもがはっきりとわかるものであった。

「だからこそだ。行くぞ」
「はい、それでは」
「戦いの場へ」
「うむ」
彼等が足を踏み出す。すると。
「待つのだ、聖闘士達よ」
「理由は言わずともわかろう」
狂闘士達、それもインプ達であった。今まさに空中庭園に入ろうという彼等の前に夥しい数の彼等が姿を現わしてきたのであった。
「ここで貴様等を食い止めてみせる」
「覚悟するのだな」
「生憎だが」
その彼等に対してまず応えたのはモーゼスであった。

第四十二話　空中庭園その六

「それはできないとだけ言っておこう」
「俺もそれは同じだ」
そして次はアルゲティが彼等に応えてみせた。まずは白銀の二人であった。
「貴様等の考えはわかっている。アルデバラン様を行かせはしないつもりだな」
「ふん、当然だ」
「言わずもがなだ」
インプ達は幾分か虚勢が入った言葉で彼等に応えた。自然とその手に握り締めている槍が揺れ動いた。見ればその手も力が篭り白くなっている。
「タウラスさえ食い止めればだ」
「我等の勝利は約束されたも同じこと」
だからだというのである。
「さあタウラスよ」
「ここは通さんぞ」
「悪いがそうはいかねえぜ」
今度出て来たのはニコライ達青銅の者達であった。彼等は威勢のいい調子でインプ達の前に出て来てそのうえで言うのであった。
「俺達だっているんだ、それを忘れるなよ」
「聖闘士達がな」
「ほざけ、貴様等如きが何を言うか」
「貴様等なぞ所詮は雑魚だ」
だがインプ達はその彼等に対して侮蔑と嘲笑で応えるのであった。
「我等の相手が務まるとでも思っているのか」
「だとすれば愚かなことだ」
「愚かかどうかはな」

グリーザがその彼等に対して応えて述べてきた。既に全員聖衣を身に着けている。アルデバランに至っては黄金聖闘士にのみ許されているマントまで身に着けている。全員戦闘用意は充分ということだった。彼等もまた決戦に対して身構えているのであった。

「それは戦ってみないとわからないな」

「その通りだな」

今度はチクが楽しく笑いながら言ってみせた。

「俺達が御前等の相手になるかどうかはな」

「まあアルデバラン様」

ブリットはわざと明るい調子でアルデバランに対して言ってみせてきた。

「ここは俺達に任せてくれますよね」

「それでいいのだな」

「是非共」

「お任せ下さい」

白銀の者達の声は謹厳なものであった。この辺りに白銀と青銅の差がはっきりと出ていると言えた。

「ですからアルデバラン様は空中庭園に」

「安心して行かれて下さい」

「うむ」

そして、であった。アルデバランもまた。彼等のその言葉に対してはっきりとした調子で頷くのであった。その表情こそ変えはしないが。

「わかった。では行かせてもらおう」

「へへっ、今まで出番がなかったからよ」

「思う存分やらせてもらうぜ」

青銅の者達は今にも指を鳴らさんばかりであった。

「俺達の力が手前等の思っている通りのものかどうかな」

「見てみるか？」

「ほざけ、雑魚共が」

だがインプ達は彼等の声を聞いてもその態度を崩すことがなかった。相変わらずその三叉の槍を手にして今にも襲い掛かろうとしている。

そして遂に。聖闘士達に対して一斉に襲い掛かるのだった。

「よし、今だ！」

「貴様等は全員ここで倒してやろう！」

上と正面から一斉に攻撃に入る。彼等はとりわけアルデバランにその攻撃を集中させていた。やはり彼を狙うことを第一にしていた。

「タウラス、覚悟！」

「貴様だけは！」

「来たか」

アルデバランはその彼等を一瞥して一言呟いた。

「ならばだ」

「いえ、アルデバラン様」

「それには及びません」

しかしであった。その彼の前に二人の聖闘士達が出て来た。見ればそれは白銀の二人、他ならぬモーゼスとアルゲティであった。

「ホエールとヘラクレスか！」

「ならば貴様等から！」

インプ達は彼等の姿を認めるとすぐにその考えを変えた。アルデバランを倒す前に彼等を倒すことを決定したのである。それは一瞬のことだった。

第四十二話　空中庭園その七

そのまま二人の白銀聖闘士達に向かう。数では圧倒していた。しかしだった。

「一つ言っておく」

「貴様等に最期にな」

モーゼスとアルゲティはその彼等に対してそれぞれ告げた。

「我等聖闘士は数で戦うのではない」

「これを言っておこう」

「ほざけ！数では戦わないだと！」

「では何で戦うというのだ！」

インプ達は口々にその彼等の言葉に対して言い放った。

「戦いは数だ！」

「数こそが全てを決める！」

これが彼等の考えであった。この考えを隠そうともしない。

「貴様等は所詮二人だけだ」

「ならば最早答えは出ている」

「確かに数は力だ」

「その通りだ」

二人もそれは認めるのだった。今彼等自身の口から出した言葉を否定するようなものだったが。それでもあえて言うのであった。

「だが。それは質が伴ってこそだ」

「それを見せてやろう」

「何っ、質だと！？」

「では貴様等の方が我々よりも質において上回っているというのか」

「その通りだ」

まず応えたのはモーゼスだった。あくまで冷静な声で。

「では我がホエールのモーゼス最大の技」

「出すというのか」

「それを」
「そうだ。受けてみよ！」
今ここでようやく叫んだモーゼスだった。
「カイストスパウティングボンバーーーーーーーーーッ！」
技を叫ぶと同時に右腕を下から上に一気に振り上げる。すると。
それでインプ達がまとめて吹き飛ばされる。凄まじい威力であった。
「何っ、一撃だと！？」
「一撃で吹き飛ばしたというのか」
「驚くことはない」
驚くインプ達に対して当のモーゼスは至って落ち着いたものであった。
「これが実力だ」
「実力だと！？」
「貴様等聖闘士のか」
「そうだ。これがだ」
そうだとも言うモーゼスだった。
「これこそが我々の実力ということだ」
「くっ、侮れぬということか」
「しかしだ」
モーゼスのそのカイトススパウティングボンバーを見てもまだ強気である彼等だった。そして決して引こうとはしないのであった。
「手強いのはホエールだけだ」
「このヘラクレスはどうだ」
「俺か」
アルゲティはその彼等の言葉に応えた。
「このアルゲティの強さも見たいといのか」
「そうだ。見せられるか？」
「俺達に対して」
モーゼスに対するのと同じようにジリジリと間合いを詰めてきて

いた。
「見せられないというのならばだ」
「ここで死んでもらう」
「生憎だが死ぬつもりはない」
アルゲティは至って冷静に彼等にまた言葉を返してみせた。
「そして貴様等に見せよう」
「貴様の技をか」
「見せるというのだな」
「そうだ」
その通りだというのだった。
「今ここで見せよう、このアルゲティ最大の技をな」
「よかろう。では見せてみよ！」
「そして死ね！」
インプ達はこう叫んで一斉に襲い掛かる。アルゲティはその彼等に対して右腕を下にやった。そうしてモーゼスと同じように一気に下から上に振り上げたのだった。

第四十二話　空中庭園その八

「コルネホロス！」
「なっ、これは！」
「あのホエールの技と同じか！」
「このアルゲティ、侮るな！」
ここではじめて叫び声をあげるアルゲティだった。
「白銀聖闘士、その力をな！」
「う、うわあああああーーーーーーーっ！」
アルゲティの技もかなりのものだった。インプ達はそれを受けて天高く吹き飛ばされる。そうしてモーゼスの技を受けた同胞達と同じように地面に叩きつけられるのだった。
「くっ、何て技だ」
「これが白銀聖闘士の力だというのか」
「そうだ。これこそが聖闘士の力だ」
アルゲティもまたこう言うのだった。
「わかったな、これで」
「おのれ、何という力だ・・・・・・」
「無念・・・・・・」
インプ達の多くがこれで倒れた。そうして技を繰り出しているのは彼等だけではなかった。青銅の者達もまたその技をそれぞれ繰り出していたのだった。
「受けやがれ！」
「行くぜ！」
グリーザとチクがそれぞれ技を放とうとしていた。
「ラングート！」
「マッハスペシャル！」
グリーザは手刀を一閃させチクは無数の拳を繰り出していた。それで多くのインプ達を倒していた。

次はニコライとブリットだった。彼等も技を放っていた。
「ブルーブリザード！」
「ホワイトファング！」
ニコライは吹雪を放ちブリットはその両手を爪のようにさせて風で切っていた。彼等もまた自分達が持っているその技を出しているのだった。
「何だとっ！？これが青銅の者達の力か！」
「聖闘士として最下級にあるのではなかったのか！」
「おいおい、何度も言うが馬鹿にするんじゃねえよ」
グリーザが苦笑いを浮かべて驚く彼等に対して言った。
「俺達は最悪でも音速の動きができるんだぜ」
「音速だと！？」
「そこまでの速さでか」
これはインプ達にとっては想像もできない速さであった。この辺りに所詮は雑兵でしかない彼等と聖闘士達の違いが出ていると言えた。
「動けるというのか」
「そしてその技は」
「そうだ」
今度はニコライが彼等に答える。
「聖闘士にはそれぞれ独自の技があるのだ」
「それがその技か」
「ここまでの威力があるというのか」
「だから馬鹿にするなって言ってるだろ？」
チクもまたそこを強調する。
「聖闘士は黄金の方々だけじゃないんだよ」
「わかったら潔く死ね」
最後はブリットが締めた。
「戦ってな」
「ほざけ、我等狂闘士に逃亡はない！」

「戦いを恐れることはない！」
こうして聖闘士達とインプ達の激戦がはじまった。アルデバランはその中で空中庭園に向かう。インプ達は彼の前に立ちはだかろうとするがそれは適わなかった。
「アルデバラン様ここは！」
「俺達が！」
六人がそのインプ達を倒していくのだ。そうして彼の道を開けるのだった。
「ですからどうかそのまま」
「空中庭園にお向かい下さい」
「済まぬ」
アルデバランは目の前で戦う彼等に対して礼を述べる。
「では。行かせてもらうぞ」
「はい、それでは」
「ここは俺達に任せて」
「空中庭園にいる十人の狂闘士達」
そこにはドーマも入っていた。
「全て倒してやろう」
「それができるのはアルデバラン様だけです」
「ですから」
「よし」
今度は一言であった。
「では行くぞ」
「はい、勝って下さい」
「どうかこの戦い」
「黄金聖闘士に敗北はない」
これがアルデバランの返答だった。
そうしてそのまま空中庭園に入った。いよいよ空中庭園での死闘がはじまろうとしていた。

第四十二話　完

2009・7・31

第四十三話　アイオロス見参その一

アイオロス見参

空中庭園の中は螺旋状の階段になっていた。アルデバランは今その入り口にいた。

「ここを登っていくのだな」

「その通りだ」

階段を登ろうとするアルデバランに声をかけてきた者がいた。

「ここを登れば空中庭園だ」

「そうか」

「しかしだ」

ここで声はさらに言ってきたのだった。

「タウラス、貴様が空中庭園に行くことはできない」

「それは何故だ？」

「それは決まっている」

悠然とした声でアルデバランに返してきた。

「貴様がここで倒されるからだ」

「だからか」

「そうだ。このフォカロルのグレイによってな」

その言葉と共にアルデバランの前の階段のところに一人の鮮血の色をした戦衣を身に纏った男が現われた。彼はグレイだった。

「倒されるからだ」

「だからだというのか」

「そしてここにいるのは俺だけではない」

グレイは不敵な笑みと共にさらに彼に告げてきた。

「我が同志達もいる」

「ここで貴様を倒す」

「覚悟はいいな、タウラスよ」

見ればグレイの他に三人いた。合計四人の狂闘士達がアルデバラ

ンの前にその姿を現わしたのであった。
「カイムのロビン」
「ブエルのジュリア」
「ボティスのアトラス」
彼等はそれぞれ名乗るのだった。
「我等四人で貴様の相手をする」
「不足か？」
「いや」
アルデバランはその彼等に問いに対して普段の沈着な態度で返すだけであった。
「俺は例え誰であろうと戦う。それだけだ」
「ふむ。その心意気は変わってはいないのだな」
「流石はタウラスだ」
彼等はまずはアルデバランを認める発言を出すのだった。
「しかしだ。それだけでは勝てはしない」
「特に我等狂闘士にはな」
そしてそのうえでこうも言う。
「さて、それではだ」
「覚悟はいいな」
「戦う覚悟はできている」
アルデバランはあえてこう言ってみせたのだった。
「貴様等とな」
「死ぬ覚悟ではないというのか」
「我等の手によって倒れるつもりはないと」
「そうだ、ない」
これまたはっきりとした言葉であった。
「全くな」
「だがそうはいかん」
アトラスが彼に告げた。
「貴様はここで死んでもらう」

「我等の手によってな」
「いいな」
四人は階段を離れ宙に漂いそのうえでアルデバランを取り囲み出した。階段にいたままのアルデバランを上から見下ろす形にさえなっていた。
「これならばタイタンズノヴァは使えまい」
「そうだな」
彼等は悠然としてアルデバランに問うてみせた。
「グレートホーンがあるがそれだけではだ」
「我等の相手はできまい」
彼等はそう考えていたのだった。
「違うか？それは」
「違うというのなら見せてみるがいい」
「よかろう」
アルデバランはその彼等の言葉を受けた。そうしてそのうえで自身の両手をゆっくりと掲げだし身構えさえしてみせてきたのであった。
「では。見るがいい」
「むっ！？宙でもタイタンズノヴァを」
「使えるというのか」
「おそらくは」
ここでまた一人の声がしてきた。

第四十三話　アイオロス見参その二

「そのようね」
「!?マーテル」
「貴女もここに」
「ええ」
今度姿を現わしたのはマーテルだった。アモンのマーテルもまたこの螺旋階段の戦場に姿を現わしてきたのであった。
「タウラスを侮ってはいけないわ」
「それはわかっている」
「私も」
グレイとジュリアがそれに応える。
「だが。ここには大地がない」
「それでもタイタンズノヴァを使えるかどうか」
アトラスとロビンはそこを疑問視するのだった。
「どう考えても無理ではないのか？」
「そうだ。大地がなければ」
「普通に考えればね」
だがマーテルは考える顔で四人の同志達に述べるのだった。
「その通りよ」
「ではタウラスは普通ではないと」
「その危険もまた」
「黄金聖闘士だから」
マーテルが危惧するのはこのポイントだった。
「若しかすると」
「確かに」
アトラスがマーテルのその言葉に頷いた。
「キャンサーもカプリコーンもピスケスも思いも寄らぬ技で同志達を倒してきている」

「そうだったわね」
ジュリアはアトラスのその言葉に頷いた。
「ジェミニもまたそうだったわ」
「じゃああれか」
グレイは二人の話を聞いてそのうえで述べた。
「使えると思っていいってわけかよ」
「そうなるな」
ロビンは冷静にこう判断した。
「結局はな。黄金聖闘士だからな」
「少なくともグレートホーンはあるわ」
マーテルはアルデバランのこの技のことは忘れてはいなかった。
「その圧倒的な角は確実に健在よ」
「それならよ」
グレイはそれを聞いて一つの判断を下した。
「一気にやるか」
「一気にか」
「倒すというのだな」
「そうさ」
不敵な笑みは出て来た時と同じであった。
「技を出す前にな。これでどうだよ」
「そうね」
マーテルが彼のその言葉に頷いてみせた。
「それが一番いいわね」
「よし、それならだ」
「ただし」
グレイが前に出ようとするところでマーテルが制止してきた。
「まだ駄目よ」
「攻撃するなっていうのかよ」
「ええ。一人一人がめいめい勝手に動いては駄目よ」
それを禁じるのだった。個人行動を、であった。

「それはね」
「じゃあどうするってんだよ」
「五人一度に攻めましょう」
彼女の考えはこれであった。
「五人で一度にね」
「つまりあれですね」
「一斉攻撃を仕掛ける」
「それでタウラスを倒すと」
グレイ以外の三人がこう返した。
「それでいくのですか」
「ええ。さもなければタウラスは倒せない」
アルデバランを決して過少評価しない、マーテルの考えは慎重であった。
「だからこそ」
「よし、それならな」
グレイが笑いながらマーテルの言葉に賛同した。

第四十三話　アイオロス見参その三

「それでいいぜ」
「俺もだ」
「私も」
「俺も」
他の三人も賛成した。これで決まった。
マーテルは彼等の言葉を受けてすぐに目で指示を出した。他の四人の狂闘士達はその目での合図を受けて静かに動きアルデバランを取り囲んだ。そして。
「行くぜ、タウラス！」
「私達のこの技で」
「貴様を葬る」
「覚悟しろ！」
それぞれ叫びながら技を繰り出しに来た。まず仕掛けてきたのはグレイだった。
「ウォータークラッシャーーーーッ！！」
凄まじい水圧を両手から放つ。それはまさに激流だった。
グレイが激流を放つと次はジュリアだった。彼女はその背に炎を背負っていた。
「このブエルは炎の魔神」
「そうだったな」
アルデバランは彼女が飛翔しながら構えを取っているのを見ていた。
「だからこそ今見せるというのか」
「そうよ。さあ受けなさい」
気迫に満ちた声でアルデバランに告げる。
「このブエルのジュリア最大の奥義」
「むうっ！？」

「ローリングファイアーーーーッ！！」
彼女の技は回転する炎の渦だった。それを右手の平から一気に放ったのだった。
「よし、次はだ！」
「我等だ！」
今度はロビンとアトラスだった。
「このカイムの技もな！」
「ボティスの技、見るがいい」
彼等もまた攻撃態勢に入る。そのうえで放つ技は。
「ブレイキングボイス！」
「アックスクラッシュ！」
ロビンは超音波を放ちアトラスはその両腕を斧の様に振り下ろした。四人が一度に攻撃を放つが彼等だけでは留まらなかった。
「さて、次は」
「貴様か」
「ええ。このアモンのマーテル」
最後は彼女なのだった。
「最大の奥義も合わせて」
「来るというのか」
「受けなさい」
今その両手を鋭い爪にさせ牙を生やしたように見えた。
「アモンは狼の魔神」
「貴様はそれか」
「その通りよ。その狼の爪と牙で貴方を倒す」
鋭い二つのものを見せながらの言葉だった。
「受けよタウラス」
高らかに宣言さえしてみせた。
「ドゥームズウルフ！！」
無数の狼の爪と牙が襲い掛かるような攻撃だった。こうして五人の攻撃が一斉にアルデバランに襲い掛かる。まさにそれはこの世の

終わりのような攻撃だった。
「さあタウラス！」
「この攻撃どうかわすのかしら」
五人は確信の笑みを浮かべながらアルデバランに尋ねた。
「我等五人の攻撃をこのまま受ければ貴様とて命はない」
「さあ、どうするのかしら」
「では見るのだ」
アルデバランは五人の攻撃の渦の中心にいる。しかし腕を組み立っているだけだった。まるで攻撃も何も受けることがないようにだ。
「このアルデバランが貴様等の攻撃をどのようにして防ぐのかを」
「防ぐ！？」
「その体勢で！？」
五人の狂闘士達は今のアルデバランの言葉に眉を顰めさせた。攻撃の渦の中心にいてどのようにしてそんなことができるのかとさえ思ったのだ。
「戯言！？いや違うな」
「タウラスはそのようなことは言わない」
アルデバランのことは既にわかっている彼等だった。

第四十三話　アイオロス見参その四

「ではどのようにして防ぐのだ？」
「これだけの攻撃を」
「見るのだ」
アルデバランは尚もその両腕を組んだままである。
「このアルデバランの戦い方をな」
「むっ！？」
「これはまさか」
「そうだ。見るのだ！」
今あるデバランは高らかに叫んだ。
「タイタンズノヴァ！！」
腕を組んだまま技を繰り出した。するとその場を凄まじい衝撃が襲った。
確かにアルデバランの足元には何もない。あるのは階段だけである。だがその階段は崩れず凄まじい衝撃が下から上に放たれたのだった。
「な、何っ！！」
「地震だと！！」
「大地がないというのに！」
「タイタンズノヴァは確かに地震を起こす」
アルデバランは驚きを隠せない彼等に対して告げた。
「しかしだ」
「しかし！？」
「まさかこれは」
「そう、そのまさかだ」
既に五人の攻撃も打ち消されていた。アルデバランのその圧倒的な攻撃の中に。完全に消されてしまったのであった。
「タイタンズノヴァは大地を破壊して地震を起こすのではない」

「その小宇宙でか」
「貴様のその小宇宙で」
「その通りだ。例え大空にいようとタイタンズノヴァは敵を倒す」
そこまで強力な技なのだった。
「貴様等とてだ」
「くっ、この衝撃・・・・・・・」
「これ以上は・・・・・・・」
凄まじい衝撃に五人の狂闘士達は耐えられなくなっていた。そうして遂に下から上に吹き飛ばされるのだった。
「う、うわあああああああーーーーーーーーっ！！」
「ぐわあああああああーーーーーーーーーーっ！！」
そのまま天井まで吹き飛ばされそこから叩き付けられた。勝負ありだった。
「おのれ、まさか小宇宙で地震を起こすとは」
「タウラス、そこまでの力を持っていたとは」
「恐るべき男・・・・・・」
彼等のダメージは既にかなりのものだった。今まさに倒れ伏そうとする。その中で何とか声だけは出して呻いているのであった。
「やはり我々では」
「適わなかったというのか・・・・・・」
「黄金聖闘士の力は惑星に匹敵する」
アルデバランはその彼等に対して告げた。彼等の方は見てはいないが。
「それならば。この程度はな」
「見事。しかし」
その中でマーテルが言ってきた。彼女もまた致命傷を受けていた。
「まだ四人いる」
「貴様等の同志達か」
「そうだ。そしてドーマ様もだ」
そのモロクの男である。

「モロク様ならば我等の仇を取って下さる」
「タウラス、貴様がどれだけ強かろうとも」
「ドーマ様には勝てない」
狂闘士達は今にも事切れようとする中でこうした言葉を出すのだった。
「そう、決してだ」
「冥界で会おう」
これが彼等の最後の言葉になった。
「それではな」
「会うのを楽しみにしている」
ここまで言って彼等は事切れた。アルデバランは彼等の小宇宙が完全に消え去ったのを感じながら階段を進みはじめた。暗闇の円筒を思わせる空間に螺旋状に続くその階段を登り遂に。彼は空中庭園に出たのだった。
そこには緑の木々と色とりどりの様々な花々があった。砂漠の中にあるそれはまさにオアシスであった。実際に水も豊かに流れ川や池を造っていた。アルデバランはその中に出たのであった。
「ここがバビロンの空中庭園か」
「その通りだ」
ここでまたしても何者かの声が聞こえてきた。
「そうだ。こここそがバビロンの空中庭園だ」
「その声は」
アルデバランはその声の方に顔を向けた。するとそこにはやはりあの男がいた。
「よくぞ来た」
ドーマだった。重厚な姿を庭園の中に見せていた。

第四十三話　アイオロス見参その五

「タウラスよ。待っていたぞ」
「モロクか」
「貴様がここに来たということはだ」
ドーマの声に鋭いものが宿った。
「あの五人は倒れたのだな」
「見事だった」
これがアルデバランの返答だった。
「アーレスの戦士に相応しい戦いぶりだった」
「そうか。ならばよい」
ドーマはアルデバランのその言葉を聞いてまずは安堵したような言葉を出した。
「狂闘士に相応しい戦いをしたのならばな」
「そしてモロクよ」
アルデバランはこのことを伝え終えてからあらためてドーマに対して言ってきた。
「今度の俺の相手は貴様か」
「いや、残念だが違う」
しかしドーマはそれはそうではないというのだった。
「貴様の相手は他にいる」
「残る狂闘士達か」
「そうだ、その通りだ」
「タウラスよ」
その残る四人もまた空中庭園の緑と色とりどりの花の世界にその鮮血の鎧を見せてきたのだった。華やかな場所にあえて流す鮮血のようだった。
「貴様の次の相手は我々だ」
「マーテル達の仇、取らせてもらう」

こう言ってアルデバランの前に姿を現わし。そのうえで名乗りをあげてきた。
「ナベリウスのヨーダ」
「オセのリベカ」
「ベリスのディーン」
「マスマテのデューテ」
この四人だった。彼等は闘志と憎悪に燃える目でアルデバランを見据えてきていた。
「我等がマーテル達の仇を取る」
「それでいいな」
「いいだろう」
アルデバランもまたその彼等の言葉を退くことなく受けるのだった。
「では。来るがいい」
「よし、それではだ」
「ここで貴様を倒す」
四人はそれぞれ身構えアルデバランの相手をしようとしだした。彼等自身でアルデバランを倒すつもりだった。だがここでまた。新たな俳優が登場するのだった。
「やっと間に合ったな」
「むっ!?」
「この小宇宙は!?」
狂闘士達は一斉に今姿を現わした強大な小宇宙に顔を向けた。そこにいたのは。
黄金の翼を持つ男だった。精悍な顔立ちには気品も併さっている。黄金の聖衣を身にまとっている。その彼が今空中庭園にその姿を現わしてきたのであった。
「貴様はまさか」
「サジタリアスか」
狂闘士達はすぐに彼が何者かを察した。

「サジタリアスのアイオロス」
「来ているとは感じていたがここで姿を現わすというのか」
「アルデバランよ、済まない」
空中庭園に姿を現わしたアイオロスはまずアルデバランに謝罪の言葉を述べてきた。
「遅れてしまった。ようやく到着することができた」
「いや、いい」
だがアルデバランはそれをいいとするのだった。
「貴方には貴方のやることがあったのだろう」
「別になかったのだがね」
そのことは笑って否定、若しくは隠すのだった。
「ただ。遅れただけだ」
「ならそれでいい」
やはり小さなことは気にもかけないアルデバランだった。
「それよりもだ。ここに来たということはだ」
「そうだ。私も戦わせてもらう」
アイオロスは本題に入った。
「私も。それでいいか」
「それでは俺の相手は」
アルデバランはアイオロスのその言葉を受けてドーマと四人の狂闘士達を相互に見た。そのうえで考えるものをその顔に浮かべるのだった。
「どちらになるか」
「君はモロクに向かうといい」
アイオロスはそう勧めるのだった。

第四十三話　アイオロス見参その六

「モロクにな」
「あの男にか」
「私は彼等の相手をしよう」
アイオロスが見たのは四人だった。
「それでいいか」
「貴方が言うのならそうすればいい」
アルデバランはあえてアイオロスにそれを許すかのようであった。
「それでは俺はだ」
「頼む」
アイオロスの声が真剣なものになった。
「それでな」
「わかった。それではだ」
アルデバランもアイオロスのその言葉を受けた。そのうえでまた言うのだった。
「そうしよう」
「これで決まりだな」
アイオロスは微笑んでいた。そうしてそのうえで四人の狂闘士達に顔を向けて告げた。
「では御前達の相手は私だ」
「サジタリアスのアイオロスか」
「黄金聖闘士の中でもジェミニのサガと並んで随一の実力を誇ると言われる」
彼等はアイオロスのこともよく知っているのだった。既に。
「それではだ。その実力」
「見せてもらおう」
「流石は狂闘士達だ」
アイオロスは怯むことなく闘志を見せる狂闘士達を見て述べた。

「決して敵にその背を向けることはないか」
「我等は戦いこそ全て」
「その我等がどうして敵に背を向けるのか」
これが彼等の言葉であった。
「それを今見せよう」
「サジタリアス、貴様にな」
「よし、見せてもらおう」
アイオロスもまた退くことはなかった。
「そして私もこの力を見せよう」
「望むところだ」
「それではだ」
双方いよいよ戦いに入ろうとしていた。まず前に出たのはリベカとデューテの二人であった。
「女か」
「女だからといって甘く見ないことね」
「いいわね」
アイオロスの女という言葉にきっとした顔を見せる二人だった。整ったその顔が戦衣の赤い鏡の中にも映し出されていた。
「狂闘士に男も女も関係ない」
「だから」
「私も戦い相手が男であろうとも女であろうとも」
アイオロスはその場に立ったまま二人に告げた。
「あえて意識しないようにしている」
「あえてなのね」
「意識しないようにしているというのね」
「戦う者ならばそれだけで戦う」
また述べるアイオロスだった。
「それだけだ」
「聖闘士は女に手を挙げようとしない者がいると思っていたけれど」
「それはどうやら違うようね」

「そうした聖闘士もいる」
アイオロスはこう二人に答えた。

第四十三話　アイオロス見参その七

「アルデバランも本来はそうだ」
「タウラスもだというの？」
「けれどタウラスは」
先程マーテルも倒している。このことを言おうとした。しかしそれより前にアイオロスの方から言ってきたのだった。彼の方が早かった。
「それを押し殺しているのだ」
だからだというのだった。
「女に拳を振るわない、その考えを押し殺してな」
「だからだというのね」
「マーテルを倒したことは」
「そうだ。我等黄金聖闘士は時として望まぬことをしなければならない」
アイオロスのその声が険しいものになっていた。
「一度技を出せばそれに巻き込まれる者もいる」
これも彼自身が黄金聖闘士だからよくわかっていることだった。
「そう。罪もない者がな」
「それが戦いではなくて？」
「そうね」
だが二人の狂闘士はそれを聞いてもこう返すだけだった。
「何ということはないわ」
「戦いで人が死ぬのは当然だから」
「御前達にしてみればそうだ」
狂闘士のその考えはわかっていた。彼等は血生臭い流血の戦いと破壊こそがその本分だ。それならば今のアイオロスの言葉がわからないのも当然だった。
「だが。我等は違うのだ」

「そうなの」
「だからこそ」
「そうだ。聖闘士は誰であろうとも罪のない者の血が流れることは好まない」
それが聖闘士だというのだった。
「アルデバランは。特に敵が女であってもだ」
「甘いわね」
「タウラス。そうは見えなかったけれど」
「何度も言うがそれを押し殺しているのだ」
だからだというのだった。
「そしてだ」
「そして？」
「まだ何かあるというの？」
「四人で来てもいい」
今度は狂闘士達自身に告げた言葉だった。
「二人だけでなくな」
「言ってくれるな」
それに反応を見せたのはヨーダだった。
「貴様もまた我等を一度に相手にするというのか」
「それは好きにするがいい」
一旦突き放したようなことも言うアイオロスだった。
「だが私は四人であろうとも戦ってみせよう」
「ヨーダ」
「どうするの？」
リベカとデューテは今のアイオロスの言葉を聞いてヨーダに顔を向けて問うた。
「そしてディーン、あんたは」
「それでいいのかしら」
「俺はいいぜ」
ディーンは不敵な笑みでこう応えた。

「サジタリアスがそれで死にたいっていうんならな」
「そう。それでいいのね」
「それじゃああんたはそれでね」
「私もだ」
ヨーダも言ってきた。
「サジタリアスがそう言うのならな」
「そうね。じゃあこれで決まりね」
「サジタリアス、言う通りにしてあげるわ」
二人は再びアイオロスに顔を向けて告げた。
「四人で相手をしてあげるわ」
「それでいいわね」
「よし」
アイオロスは二人の言葉を受けてまた言ってみせたのだった。
「ならば戦おう。このサジタリアスのアイオロス」
言いながらその全身に小宇宙をみなぎらせるのだった。
「今ここで」
こうしてアイオロスと四人の狂闘士達との戦いも幕を開けた。それと共にアルデバランもドーマと対峙していた。イラクでの戦いはいよいよ佳境となろうとしていた。

第四十三話　　完

２００９・８・４

第四十四話　無限の剛力その一

無限の剛力

アイオロスは空中庭園において四人の狂闘士達と対峙し続けている。四つの禍々しい小宇宙がまるで紅蓮の炎の如く燃え盛っていた。
「それではだ」
その中の中心人物であるヨーダが彼に言ってきた。
「サジタリアスよ、行くぞ」
「容赦はしないぜ」
ディーンも言うのだった。
「例え一人でもな」
「貴様を倒す」
「一対一ではないがな」
このことも言う狂闘士達だった。
「それでも闘う。それが狂闘士の流儀だ」
「だからこそ」
「いいだろう」
そしてアイオロスも彼等の言葉を受けるのだった。
「では来るがいい」
「受けて立つというのだな」
「他の黄金聖闘士達と同じく」
「私もまた聖闘士ならば」
アイオロスは狂闘士達の問いに応えて述べる。
「逃げることはない。正面から戦うのみだ」
「そうか。それならばだ」
「今こそここで」
いよいよ攻撃に入ろうとする。まず動いたのは。
「まずは私達が」
「行かせてもらうわ」

リベカとデューテだった。二人の女狂闘士達だった。
「ヨーダ、ディーンそれでいいわね」
「私達が先で」
「うむ。それで構わない」
まずはヨーダが落ち着いた様子で二人の言葉に頷いてみせた。
「御前達が先に行きたいというのならな」
「そう。それじゃあ」
「ディーン。貴方はどうなの？」
「俺もそれでいい」
ディーンもおおむねヨーダと同じ意見であった。
「それでな。先に攻撃を仕掛けてな」
「これでサジタリアスを倒すわ」
「私達で」
二人の小宇宙はさらに高まっていた。それはまさしく炎だった。
禍々しく赤く燃え盛るまさに戦場で何もかもを焼き尽くす炎であった。
「我が魔神オセの力」
「このマステマの力」
二人がそれぞれ身に着けている戦衣の魔神達のことだった。
「見せてあげるわ」
「今こそ」
「ならば見せてもらおう」
やはり逃げようとも隠れようともしないアイオロスだった。悠然と構えたままである。
そしてその彼に対して。今二人がその技を放ったのだった。
「ブレイクメイルストローム！」
「デッドクライム！」
リベカの両腕から黒い嵐が放たれデューテの左手から赤い衝撃が放たれる。その二つの技が同時にアイオロスを襲ったのであった。
「どう？これなら」

「黄金聖闘士といえど」
「いや、油断は禁物だぜ」
しかしここで二人に対してディーンが言ってきた。
「これでもまだな」
「倒れないというの？」
「まさか」
「だから油断禁物って言ってるだろ」
彼が言うのはあくまでこのことだった。
「だからだ。次は俺だ」
「貴方が」
「サジタリアスに対して次の攻撃を」
「そうさ。見てな」
黒と赤の嵐と衝撃の中で今は姿が見えないアイオロスを見据えるディーンだった。
そして一旦高く跳びそのうえで。右手から鋭く長い紅蓮の気を出したのだった。見ればそれはまさに巨大な槍そのものであった。

第四十四話　無限の剛力その二

「槍ね」
「貴女の槍なのね」
「そうさ。ベリスは槍を持つ魔神」
彼が司っている魔神はそのベリスなのだった。全身を武装した戦士である。
「だから今この槍でな」
「そう。それじゃあその槍で」
「サジタリアスを貫きなさい」
「言われずともな。サジタリアス！」
下にいるそのアイオロスを見下ろしながらの言葉だった。
「受けるんだな。グローランス！」
この言葉と共に紅蓮の槍を投げた。槍は凄まじい唸り声をあげながらアイオロスに向かいそのうえで恐ろしい衝撃を引き起こしたのであった。
「さて、これでどうだ！？」
着地したディーンはその衝撃をまず見て言った。
「これなら流石のサジタリアスもな」
「待て、ディーン」
しかしヨーダがここで彼に対して言うのだった。
「自分の言葉を覚えているか」
「おっと、そうだったな」
言われて気付いたような顔を作ってみせるディーンだった。
「油断大敵だったな」
「そうだ。まだこのヨーダがいる」
彼は悠然と前に出ながら述べた。
「ナベリウスのヨーダがな」
「じゃあ最後はあんたってわけだ」

ディーンは楽しそうな笑みを浮かべて彼に告げた。
「それじゃあ頼むぜ」
「サジタリアスよ」
今だ衝撃の中に包まれているアイオロスに対する言葉だった。
「止めだ。受けるのだ」
彼の言葉は簡潔だった。
「このナベリウスのヨーダ最大の奥義」
言いながら構えに入る。両手を胸の前でクロスさせる。
「トリプルヘッドアタック！」
その両手から立て続けに三撃放った。その三つの攻撃が忽ちのうちにオレンジの不気味な光となる。その不気味な光がアイオロスを襲った。
「この攻撃を受けて生きていた者はいない」
ヨーダは技を放ってから言った。
「サジタリアスよ、貴様はどうだ」
「さて、どうなのかしら」
「私達の攻撃も受けたけれど」
リベカとデューテは言いながら再び構えに入っていた。
「これでも立っていられるというのなら」
「まさに神に等しいわ」
「へっ、俺達の崇める神様はアーレス様だけだぜ」
ディーンがここでまた軽口を叩いた。
「そしてエリス様と四柱のあの方々だな」
「そうだ。あの方々こそがだ」
ヨーダはディーンのその言葉に応えて述べた。
「我等にとっての神々だ」
「アテナなんてのはあれだぜ。何もわかってないんだよ」
ディーンはアテナに対して辛辣な言葉で評価した。
「この世の中のことがな。とんだ甘ちゃんだぜ」
「全くね」

「戦の女神でありながら平和を愛するなぞ」
戦いの世界にしか生きていない彼等に理解できる筈がないことだった。
「とんだ戯言だ」
「出来る筈がないわ」
「それはどうか」
しかしであった。ここで声がした。
「戦いを知るからこそ平和を知るものだ」
「何っ、その声は」
「サジタリアス。生きているのか！」
「如何にも」
声は余裕があるものだった。
「この程度で私は倒れはしない」
「くっ、やはり黄金聖闘士ということか」
「我等四人の攻撃を受けてそれでも声をあげられるとは」
「声だけではない」
だがアイオロスは言葉は終わりではなかった。

第四十四話　無限の剛力その三

「私はまだ充分に戦える」
「!?何と!」
狂闘士達は衝撃が消え再び姿を現わしたアイオロスを見て今度は驚きの声をあげた。何と彼自身も聖衣も傷一つ負ってはいなかったのだ。
黄金聖闘士だけが身に着けることを許されるマントもであった。健在であった。彼は全くダメージを受けてはいないのであった。
「あれだけの攻撃を受けてもダメージを全く受けていないというのか」
「黄金聖闘士の中で随一の強さを誇るだけはあるということか」
「そう思うのならそう思ってもらっていい」
アイオロスもその考えを打ち消さそうとはしなかった。
「ただ。一つ言っておく」
「何だ?」
「何が言いたいというのかしら」
「アテナは。そしてそのアテナに仕える我々聖闘士は」
アテナと自分達のことだった。
「戦いを知っている」
「今更の言葉だな」
「何を言うかと思えば」
狂闘士達はアイオロスの今の言葉を聞いてまずはせせら笑うような笑みで返した。
「そうした意味では我等と同じ」
「戦いの中でしか生きられないのだから」
「しかし我々はそれと共に平和もまた知っている」
だがここでアイオロスはまたこう言うのだった。
「平和もだ」

「平和もだと？」
「戯言を。戦いがあれば平和はない」
何処までも狂闘士として語る四人だった。
「平和なぞ。全く不要のもの」
「そんなものを知って何だというのだ」
「戦いと破壊、そして殺戮だけに生きる御前達にはわからないことだろう」
アイオロスもそれ以上は聞こうともしない。
「だが」
「だが！？」
「我々はそれを護る為に戦っている。だからこそ私も今ここにいるのだ」
「面白い。それならばだ」
「今ここでその平和を護る為に我等四人を倒すというのか」
「その通りだ」
アイオロスは構えを取った。さながら誇り高いケンタウロスの賢者の様に。その両腕を悠然と構えてみせたのであった。
「今ここでその平和を護る技を見せよう」
「サジタリアスの技」
「それは一体」
「これがその技だ」
今アイオロスの右腕に光が宿った。それは黄金色の雷だった。
「受けよ、我がサジタリアスのアイオロスの技！」
「むっ！」
「雷か！」
「そうだ。光速の雷！」
叫びながら今その雷を宿した右腕を前に突き出しその技の名前を呼んだ。
「アトミックサンダーボルト！」
「来たか！」

「これは！」
一瞬であった。アイオロスの右腕から放たれた無数の雷達が四人を通り過ぎた。それと共に凄まじい雷撃と衝撃が四人を襲った。
「ぐうう・・・・・・」
「これがサジタリアスの技だというのか」
「そうだ」
技を放ち終えたアイオロスは雷と衝撃を受け今まさに崩れ落ちんとする四人に告げた。彼等のその全身はあちこちが焦げ黒い煙さえ沸き起こっていた。
「これがこのアイオロスの技だ」
「強い・・・・・・」
「それも尋常なものではない」
四人はその崩れ落ちようとする中で呟いた。

第四十四話　無限の剛力その四

「やはりサジタリアス。只者ではない」
「黄金聖闘士の中でも最強格と言われるだけはある」
「苦しまないようにしておいた」
アイオロスは目を閉じてその四人にまた告げた。
「ゆっくりと眠るがいい」
「む、無念・・・・・・」
「何と恐ろしい男・・・・・・」
四人はそれぞれ最後の言葉を出しそのうえで遂に崩れ落ちた。アイオロスと四人の狂闘士達の戦いは彼の勝利に終わった。だがこれで戦いは終わりではなかった。
「さて」
アイオロスは目を開いてある場所を見るのだった。
「ここでの最後の戦いはどうなるか」
見ればアルデバランはドーマと対峙を続けていた。まだお互い動いてはいなかった。
アルデバランは腕を組んだままでドーマは構えてさえいない。お互いその姿勢で睨み合ったまま動こうとはしないのであった。
「どうした、タウラスよ」
ドーマがその腕を組んだアルデバランに対して問うてきた。
「攻めては来ないのか」
「そういう貴様はどうなのだ」
問われたアルデバランは逆に彼等に問い返した。
「貴様は攻めはしないのか」
「俺の技を見たいというのか」
「貴様が見せるというのならな」
今度はこう返すのだった。
「見せてもらおう」

「俺の技をか」
「そうだ。どうするのだ」
ドーマに対してまたしても問うた。
「貴様の技を。俺に見せるのかどうか」
「既に貴様の技は見ている」
ドーマはアルデバランに匹敵するその巨体を誇示しながら言葉を出した。
「そして今度は俺の番だ」
「それならばか」
「そうだ。では見せよう」
ドーマの動かないうちから強大な小宇宙がさらに高まった。
「このモロクのドーマの技をな」
「むっ！？」
「一つ言っておく」
ドーマは沸き起こる己の小宇宙の中でアルデバランに対して告げてきた。
「この俺の力を甘くみないことだ」
「貴様の力をか」
「タウラス。俺は貴様の力もまた甘く見てはいない」
このこともまた言うのだった。
「それと同じだ。俺の力も甘く見ないことだ」
「それは安心していい」
ドーマの言葉に対して表情を変えず返すアルデバランだった。
「既にわかっていることだ」
「既にか」
「貴様のその強大な小宇宙」
彼が言うのはこのことだった。
「それでわかる」
「俺の小宇宙でだな」
「それだけの小宇宙を持っている者はそうはいない」

アルデバランはそのことがよくわかっているのだった。
「今まで俺が対峙したどの狂闘士達よりも遥かに強大だ」
「それでわかったのならばいいことだ」
それでいいとしたドーマだった。
「俺は八大公の一人」
「狂闘士達の頂点に立つか」
「それと共にアーレス様を御護りする最後の護りでもある」
アーレスの名前も出してきた。
「最後のな」
「それだけにということか」
「そういうことだ。それではだ」
ドーマの小宇宙はさらに高まりを見せてきた。

第四十四話　無限の剛力その五

「行くぞ。いいな」
「来るがいい」
アルデバランはここでまたドーマの言葉を受けて返した。
「貴様のその力。見せてもらおう」
「では。今からだ」
その剛の小宇宙がさらなる高まりを見せる。それは。
「むう・・・・・・」
「俺の技の一つ」
言いながらドーマは両腕をかざしてきた。まるで牛の角のように。
「それがこれだ」
「剛の力か」
「受けてみよ、この技」
その両腕に強大な小宇宙が宿り。そこから放つのだった。
「インフィニティホーン！」
「むうっ！！」
その強大な剛力がアルデバランを襲った。それは凄まじい衝撃となり彼を正面から撃つ。
「これだけの力があるというのか」
「そうだ。どうだタウラスよ」
ドーマは技を放ったうえでアルデバランに対して告げてきた。
「このインフィニティホーンの力は」
「剛力をそのまま放ったものか」
「その通りだ」
まさにそれだというのだった。
「これこそがだ。どうだ」
「確かに凄まじい威力だ」
アルデバランもそれは認める。

「これまでの狂闘士のどの技よりもな。遥かに」
「あの者達の仇も取らせてもらう」
ドーマはこのことも忘れてはいなかった。
「同胞の仇は何処までも追いそのうえで討ち取る」
言葉に剣呑なものも宿っていた。
「それが狂闘士の掟だ」
「それもまた、か」
「そういうことだ。狂闘士は互いに強い絆を持っている」
彼はアルデバランにこのことを話してきた。
「だからこそ。仇は必ず取るのだ」
「では。取ってみるのだな」
アルデバランはその衝撃を正面から受けながら言葉を返した。
「このアルデバランからな」
「それももうすぐだ」
ドーマは今勝利を確信しようとしていた。
「タウラス、貴様はこれで倒れる」
「いや、そうはいかん」
だがアルデバランはここでこう言うのだった。
「そうはな」
「その状態で言えるのか」
ドーマは技を繰り出したままアルデバランに問うた。
「貴様にはまだ技があるのだな」
「如何にも。確かに貴様の力は強大極まる」
このことは充分過ぎる程感じ取っていた。
「だが」
「だが。何だ？」
「剛には剛だ」
これが今のアルデバランの言葉だった。
「ならば俺は」
「貴様は」

「この技を出そう。見よ」
今ここでアルデバランは言った。
「貴様のそのインフィニティホーンに対する技」
「まさかそれは」
「そうだ。その通りだ」
見ればアルデバランはもう腕を組んでいた。その組む理由は。
「グレートホーン！」
腕を組みそのうえで技の名を叫んだ。すると彼からも凄まじい衝撃が起こりそれがドーマから放たれている衝撃を打ち消してしまったのだった。
双方の衝撃は完全に消えた。もう何処にもなかった。ドーマはそれを見てすぐに察した。アルデバランはそのグレートホーンで何をしたのかを。
「そう来たのか」
「剛には剛だ」
実にアルデバランらしい言葉であった。
「そういうことだ」
「確かにな。やはり貴様は恐ろしい男だ」
ドーマはアルデバランのその力を見たうえで述べた。
「俺のこの技を打ち消したのは貴様がはじめてだ」
「俺もはじめてだ」
そしてアルデバランも言うのだった。
「俺の技が完全に打ち消されたのはな」
「全くの互角か」
ドーマはここでお互いの実力を完全に見極めた。
「面白い。完全に互角ならばだ」
「どちらが勝つかわかりはしない」
「いいことだ。ではタウラスよ」
またしてもここで言葉を出すドーマだった。
「今よりそれをはっきりさせよう」

「どちらが勝つのかな」
「力と力」
やはりドーマが求めるのはそれだった。
「剛と剛。どちらが勝つのかな」
「それがはっきりする」
二人の対決は正念場を迎えようとしていた。空中庭園は二人の凄まじい小宇宙で完全に覆われていた。バビロンでの戦いは最後の局面の大詰めを迎えているのだった。

第四十四話　完

２００９・８・７

第四十五話　激突の果てにその一

激突の果てに

対峙を続けるアルデバランとドーマ。その中でドーマがまたアルデバランに対して言ってきた。

「インフィニティホーンは破られた」

「だがそれだけではないというのだな」

「そうだ」

彼は言うのだった。

「モロクの力はそれだけではない」

「力だけではないというのか」

「また言っておくことがある」

ドーマの言葉が少しあらたまったものになった。

「モロクのことは知っているだろう」

「無論だ」

アルデバランは当然といった調子で彼に言葉を返してみせた。

「かつてゲヘナの地で崇められていた魔神だな」

「その通りだ。そして多くの子供達が生贄に捧げられていた」

キリスト教ではそれを恐るべき悪魔の行いとしてきた。その為にモロクは魔神であるとされてきたのである。モロクにはそうした信仰があったのだ。

「その生贄の子供達は炎に焼かれてきた」

「そうか。炎か」

「その通りだ。このドーマは炎も使う」

ここでまた言うドーマであった。

「司る魔神モロクの力としてな」

「炎を使う魔神モロク」

アルデバランは今モロクについて述べた。

「それが貴様だというのだな」

「如何にも。それではだ」
「炎の力を使う」
アルデバランの目が次第に再び鋭くなってきていた。
「今ここでか」
「行くぞ」
またこの言葉を出すドーマだった。
「我が炎。受けてみるのだ」
「来るか」
アルデバランは逃げようとはしなかった。腕を組んだままそこに仁王立ちしているだけである。これまでと同じ様に立っているだけである。
「ならば」
「今度は先程のようにはいきはしない」
ドーマはこのこともアルデバランに対して告げてきた。
「それもわかっておくことだな」
この言葉と共にであった。彼の両腕に今度は炎が宿った。そのモロクの炎が。
「受けてみよ。我がもろくのドーマの次の奥義」
「次のか」
「ゲヘナインフェルノ！」
技の名前を叫ぶと共に両腕を前に突き出す。するとそこから凄まじい炎が沸き起こり嵐の様にアルデバランに対して襲い掛かったのであった。
「むうっ！」
「衝撃を打ち消すことができてもこれはどうか」
ドーマは技を繰り出したうえでアルデバランに対して問う。
「タウラスよ、貴様のグレートホーンもこれは打ち消すことはできない」
彼はこのことも考慮に入れているのだった。
「さあこの炎を受けて死ぬのだ」

そしてこうも彼に告げた。
「生贄達と同じようにな」
「この炎」
アルデバランは既に炎の渦の中にあった。もうその姿は見えはしない。
「確かに恐るべきものだ」
「受けてみてわかったか」
「いや、既にわかっていた」
それはもうわかっているというのだ。
「だが」
「だが？」
「受けてみてわかることもある」
そのうえでこうも言うのだった。
「これがゲヘナの炎か」
「幾万もの命を焼き尽くした炎」
やはりそれも生贄達のことである。
「受け。そして倒れるがいい」
「確かに恐ろしい炎だ」
アルデバランはまたこの炎を恐ろしいと表現した。
「俺もまたこの中で焼かれるだろう」
「逃げはしないのか」
「俺は逃げはしない」
アルデバランはそれは否定する。
「だが」
「だが。何だ？」
「この技もまた打ち消すことができる」
しかしここでこう言ってみせたのだった。

第四十五話　激突の果てにその二

「この技もまた」
「戯言ではないか」
それはもうわかるドーマだった。
「その言葉は」
「俺は戯言は言わん」
これはまさに絶対のことだった。アルデバランにとっては。
「そしてだ」
「そして」
「俺は今真実を言った」
こうドーマに告げるのだった。
「真実をな。今その証を見せよう」
「すると」
「その通りだ。炎とて無敵ではない」
彼は言う。
「それを打ち消すこともできるのだ」
「ならばそれは」
「見よ！」
アルデバランがここで叫んだ。
「我が炎を打ち消す力。ここでな！」
「ぬうっ！」
「タイタンズノヴァ！」
アルデバランがここで放った技はこのタイタンズノヴァであった。
「これこそが貴様の地獄の炎を打ち消すものだ！」
「地震の力で俺の炎を打ち消すか」
ドーマはまずはそう思った。しかしすぐにその考えを変えた。
「いや、違う」
彼はすぐに気付いたのだ。

「そうではない。ただ地震を使うだけではない」
「気付いたのだな」
「貴様はただ何も考えず技を出す男ではない」
このことを先程のグレートホーンで己の技を打ち消してみせたのでわかっていた。
「ならば今も」
「そうだ。俺は打ち消す為に呼んだ」
彼は言った。
「これをな。見よ！」
荒れ狂い崩壊する庭園から噴き出たものは。
「これだ！」
「やはりそれか！」
「そうだ。この水こそがだ！」
彼が叫ぶその周りを恐ろしい数の滝の逆流が包んだように見えた。
それが瞬く間に彼と庭園を包んでいた炎を打ち消していくのであった。
庭園の木々や花々を焼き尽くさんとしていた炎がその滝の逆流により次々と消えていく。水は全てを包み込み消してしまっていた。
さながら豪雨であった。そしてその豪雨が消えてしまった時。ドーマが放ったその炎は何処にも消えてしまっているのだった。
「俺の炎をこうして消すとはな」
「火には水だ」
アルデバランはまた言った。
「そういうことだ」
「その通りだ。炎は水に敗れる」
これはドーマもわかっていることだった。
「だが。その様にして呼び出すとはな」
「もう一度放ってくるか」
「いや」
だがドーマはそれは断るのだった。

「今はもうこれで終わりだ」
「技を放たないというのか」
「ここでは俺の炎は消された」
そしてこのことをまた言う。
「ならばだ。もう出すことはない」
「インフィニティブレイクもだな」
「そうだ。ここではもう出すことはない」
その技もであった。
「最早ここではな」
「それではどうするのだ」
技を出さないと聞いて再度問うアルデバランであった。
「まだ技があるとでもいうのか」
「ある」
今度は実に簡潔ながら確実な言葉であった。

第四十五話　激突の果てにその三

「それはある」
「そうか。あるのか」
「俺の切り札とも言うべき技」
そしてこうまで言ってみせてきた。
「それがある」
「しかしそれは出さない」
アルデバランはここでドーマの言葉をいささか先読みしてみせてきた。
「そういうことか」
「その通りだ。タウラスよ」
あらためてアルデバランを見据えての言葉であった。
「ここではな」
「次に我々が闘う時にか」
「その時は必ずやって来る」
確信している言葉であった。
「その時にあらためて見せよう」
「いいだろう」
そして今の言葉も平然と正面から受けるアルデバランであった。
「それではその時に見せてもらおう」
「俺はその時に貴様を必ず倒す」
ドーマはそのアルデバランを見据えて断言してみせた。
「必ずな」
「それはこちらも同じこと」
アルデバランも返してみせてきた。
「モロクよ、貴様はこのアルデバランが倒す」
「貴様程の相手にはこれまで会ったことがない」
やはりドーマはアルデバランを高く評価していた。少なくとも戦

士として敬意は持っている。それを出してみせてさえいる言葉であった。
「だからこそだ」
「それは俺も同じことだ」
また言葉を返すアルデバランであった。
「では。その時にこそ」
「貴様を倒す」
決着をつける、ではなかった。
「必ずな」
「ではまた会おう」
アルデバランは断言したドーマに対してまた告げた。
「別の場所でな」
「それが聖域かそれとも」
「トラキアか」
彼等のそれぞれの本拠地である。
「どちらかで会おう」
「その来たるべき時に」
ここまで話を終えるとドーマは。轟音と共に慌しく姿を消そうとしていた。
「この勝負は引き分けだな」
「それしか判断しようがないだろう」
この意見は二人共同じであった。
「我々はどちらも傷付けることができなかったのだからな」
「その通りだ。どちらもだ」
そうなのであった。彼等は技を打ち消しあった。そしてお互いに対してダメージを与えることができなかった。まさに引き分けとしか言いようのない状況であった。
「そういうことだな。ではな」
「うむ」
これでドーマは姿を消した。後には二人の激闘の後で完全に崩壊

した空中庭園があるだけだった。その有様が戦いのことを物語っていた。
「終わったか」
「これでな」
後ろにはアイオロスが来ていた。アルデバランは彼に少し顔を向けて述べた。
「ここでの戦いは終わった」
「そうか。ここではだな」
「戦いはまだ終わってはいない」
アルデバランはドーマとの会話からこう言わざるを得なかった。
「まだ。これからと言ってもいいかも知れない」
「その通りだ」
そしてアイオロスはアルデバランのその言葉に対して頷いてみせた。
「狂闘士達との戦いはまだまだこれからだ」
「まだまだか」
「その通りだ。既に四人の黄金聖闘士が出陣した」
アルデバランも入れて、ということである。
「だがそれでも尚だ」
「まだトラキアにはエリスが控えている」
今そのトラキアを取り仕切る復讐の女神のことだ。あの聖域に乗り込んできた赤い髪に青い肌の恐ろしい美しさを持つ女神である。

第四十五話　激突の果てにその四

「それにまだ多くの狂闘士達もいる」
「いや、彼等だけではない」
今度のアイオロスの言葉はアルデバランの言葉を打ち消すものだった。
「彼等だけではな」
「というとまだいるのか」
「そうだ、いるのだ」
そのうえでこう彼に述べるのであった。
「まだな」
「というと誰だ」
アルデバランはアイオロスに問い返した。
「誰がいるのだ」
「神話の時代に語り継がれている神々だ」
「神話の時代に」
「アーレスに仕える神々はエリスだけではない」
そのエリスだけではないというのである。
「彼女だけではな」
「というとだ」
アルデバランはアイオロスの今の言葉を聞いて察するものがあった。そしてその察したものを実際にその口に出してみせたのである。
「あの古の四柱のか」
「彼等も出て来るかも知れない」
アイオロスが言うのはそのことだった。
「若しかするとな」
「そうか。あの神々もか」
「今我々は狂闘士達だけを相手にしている」
これは事実だった。あくまで人が人を相手にしているだけなので

ある。
「だがそこに神々が加われば」
「冥皇ハーデスとの戦いと同じになるか」
「その通りだ。ハーデスとの戦いでは」
アイオロスも知っていることであった。かつてハーデスと彼が率いる冥闘士達との戦いは幾度か行われている。その激しさは記録に残されている。その中でハーデスの側近達である眠りの神ヒュプノス、死の神タナトスによる被害は甚大なものであったのだ。
「ヒュプノスとタナトスの二柱の神々だけで我々は相当な損害を被っている」
「キャンサーのマニゴルドと教皇セージがタナトスを封印し」
アルデバランが今言ったのは先の聖戦のことである。
「そしてカプリコーンのエルシドがヒュプノスの配下の四柱の神々を倒し」
それと共にマニゴルド、エルシド、そしてセージも倒れている。黄金聖闘士二人に教皇をなくす程の被害を出してようやくであったのだ。
「そしてヒュプノスには」
「教皇セージの兄であり次の教皇となったハクレイが向かい」
アイオロスも再び言うのだった。
「結果としてハクレイも倒れた」
「だがそれによりヒュプノスも封印された」
結末としてはそうなのだった。
「それにより我々は勝利に大きく近付いたのだったな」
「それだけの力があるのだ」
アイオロスの言葉があらためて強いものになった。
「神という存在にはな」
「それではだ」
アルデバランはここまで話してさらに言うのであった。
「その四柱の神々が復活すればやはり」

「あの神々はアーレスの側近でもある」
それでもあるというのだった。
「従ってその力はだ」
「ヒュプノスやタナトスと同じか」
「少なくともそう考えておいた方がいい」
アイオロスはここでは悲観論を述べてはいなかった。現実を述べているのだった。神という存在と戦うというその現実をである。
「わかったな。それは」
「わかった。それではだ」
「帰るとしよう」
ここでは微笑むアイオロスだった。アルデバランに対して。
「聖域にな」
「そうだな。モーゼス達も待っているか」
「既に下での戦いは終わっている」
その戦いはもう終わっているというのである。
「もうな」
「終わっているのか」
「あの六人も奮闘してくれた」
アイオロスはさりげなく六人のことも褒める。
「そのおかげでだ。下にいる狂闘士の雑兵達も全て倒された」
「それでは」
「後は帰るだけだ」
それだけなのだった。

第四十五話　激突の果てにその五

「では。行こう」
「うむ」
彼等は破壊され半壊状態となった空中庭園を降りた。その彼等を六人の聖闘士達が出迎える。イラクでの戦いもこれで終わったのであった。
イラクでの戦いは終わった。しかしであった。既に四つの地域での戦いが行われた。トラキアではそのことについてエリスと八大公達の中で話し合いの場が持たれていた。
「まずは四つだ」
「はい」
「これでもう四つです」
エリスの前に片膝をつく八大公達はそれぞれ彼女の言葉に応えた。
「残るはあと四つ」
「半数の封印が解かれました」
「まずはドーマよ」
エリスはここで既にトラキアに戻ってきているドーマに対して声をかけた。見れば彼もエリスの前にその片膝をついているのであった。
「この度の戦い御苦労であった」
「有り難き御言葉」
ドーマはエリスのその言葉に対してその重厚な声で礼を述べた。
「そなたの戦いによりまた一つ封印が解かれた」
「はい」
ドーマはエリスに対して一言で応えた。エリスはここでさらに言うのだった。
「この四つの封印が解かれたことによりあの者達が出られることになった」

「はい、遂に」
「あの方々が」
八大公達の声がここでいささか弾んだようなものになっていた。
「戻って来られるのですね」
「このトラキアに」
「左様。あの者達が戻って来る」
エリスの声も笑ったものになっていた。
「そうなればだ」
「我等の力は大きくあがります」
「聖域を圧倒できるようになります」
「だが」
しかしであった。ここでエリスの言葉は制止するようなものになるのだった。
「問題はだ。あの者達が封印されている場所がわからん」
「その場所がですか」
「わからないと」
「その魂は冥界にある」
魂はそこにあるというのだ。
「ハーデス様とは離れてな。あの場にある」
「しかし現身はこの世にあられる」
「封印されたばかりに」
「その通りだ。思い返すだけでも忌々しい」
エリスの声は今度は怒ったようなものになった。忌まわしい思い出を思い返しそのうえで怒りを感じている、まさにそうした声であった。
「あの時の教皇によってな」
「あの方々は封印されました」
「忌まわしいことに」
八大公達の声もエリスのそれと同じ色になっていた。やはり忌まわしさを深く感じその中で怒りを見せるものになっているのであっ

た。
「ではその現身を探し出し」
「そのうえでこちらに戻って頂くことに」
「それにはだ」
エリスはまた言ってきた。
「既に探し出すべき者達を選んでいる」
「といいますと」
「どの者達でしょうか」
それはまた八大公達も知らないことであるらしい。エリスに対して今ここで怪訝な声をかけたのがそれの何よりの証拠となっていた。
「狂闘士の者と思われますが」
「それは一体」
「安心するのだ」
ここでこうも彼等に告げるエリスであった。
「そなた達の戦力を削るようなことはせぬ」
「それはですか」
「ないというのですね」
「ということは」
何人かはこれで気付いたのだった。

第四十五話　激突の果てにその六

「あの者達ですか」
「彼等を送ると」
「左様、四騎士を送る」
こう言うエリスだった。
「あの者達をだ。それでどうだ」
「はい、それで宜しいかと」
最初に言葉で応えたのはサリアであった。
「あの者達ならば」
「そうか。それならばだ」
エリスはそのサリアの言葉を受けて満足した顔になった。
「あの者達を送る」
「そうですね。あの者達なら」
「私も異存はありません」
「それで宜しいかと」
他の八大公達もそれでいいとするのだった。これで話はおおよそ決まったのだった。だが話はそれでもまだ続くのであった。まだ話すべきことがあるからだ。
「次はだ」
「はい」
「次の戦いですね」
「その通りじゃ」
そのことであった。エリスは八大公達の言葉に応えた。
「既に聖域は四人の黄金聖闘士を出してきた」
「まずはキャンサー」
デスマスクである。
「そしてカプリコーン、ピスケス」
「タウラス。この四人です」

「ジェミニとサジタリアスも来てはいますが」
この場合は将として出陣した黄金聖闘士という意味であった。そういった意味でサポート的役割であるサガとアイオロスは数に入れていないのであった。
「まずはこの四人ですね」
「あの者達が出て来ました」
「それに対して我等も八大公のうち四人を既に出した」
「カナン、ジーク、ミシェイル」
その者達の名も他ならぬ彼等の中から挙げられる。
「最後にドーマ」
「この四人ですね」
「左様。その者達を出した」
エリスはその四人の名を聞いたうえでまた彼等に述べてきた。
「残る四人からまた出すことになるが」
「その者は一体」
「誰なのでしょうか」
「次の封印の場所は北になる」
北だというのである。北と聞いて八大公達は凍えるものをすぐに感じ取ったのだった。これは本能的に感じ取ったものである。北といえば寒さと連想したからだ。
「北となれば聖域が出してくる黄金聖闘士は」
「水と氷の魔術師」
「あの男ですか」
「間違いなくあの男を出してくるであろうな」
エリスはここでまた彼等に対して告げた。
「だとするとこちらもじゃ」
「それに対抗できる者を出す
「となると」
「その者は」
「レダよ」

エリスが呼んだのはこの名であった。すぐに退廃的な雰囲気を醸し出している黒い髪と目の男が顔をあげてきた。
「私ですか」
「そう、そなたにする」
顔をあげたそのレダに対して告げるのだった。
「ベリアルの魔神を司るそなたに対してな」
「有り難き幸せ。それでは」
「すぐに北に向かう用意をすることじゃ」
レダにこうも告げるのだった。
「すぐにな」
「はい、それでは」
「そなたの黒い力ならばあの男を退けることができるだろう」
レダに対する絶対の信頼を思わせる言葉であった。
「少なくとも封印はのう」
「それはお任せ下さい」
封印という言葉にはその退廃的な顔を笑わせて応えるレダだった。
その笑みは何処か邪悪さを感じさせる、そうした笑みであった。

第四十五話　激突の果てにその七

「このレダ、必ず封印を解いて御覧に入れましょう」
「封印もまたあと四つ」
封印の数も言うエリスであった。
「その全てが解かれるその時こそ」
「はい、我等の彼岸が適えられます」
「あの方が戻られ」
八大公達の言葉に喜びがこもってきていた。
「それと共に我等がこの地上を支配する時が来るのです」
「その時にこそ」
「そもそもじゃ」
エリスもまた述べてみせた。
「この世界はアーレス様のものになるべきもの」
「その通りです」
「戦いに彩られた世界」
それこそがまさに彼等の理想とする世界である。やはり狂闘士達は破壊と殺戮なしでは生きることができないのである。そういった者達なのだ。
「だからこそ是非封印を」
「八つ。全て解きましょう」
「頼んだぞ」
エリスは八大公全員に声をかけた。
「これからのことをな」
「お任せ下さい」
「あと四つです」
「いや、三つだ」
しかしここでレダが仲間達に対して。不敵な笑みと共に告げるのだった。

「あと三つだ」
「三つ！？」
「それは何故だ」
「私が封印を一つ解くことが決まっているからだ」
だからだというのである。
「だからだ。三つだ」
「そうか。だからか」
「だから三つなのか」
「そういうことだ」
まだ不敵な笑みを浮かべてみせていた。
「これでわかったな」
「わかった。それではだ」
「行くがいい」
「うむ」
今度は仲間達の言葉に頷くレダだった。そうしてそのうえで立ち上がり。目の前の玉座に座っているエリスに対して一礼したうえで告げるのであった。
「それではエリス様」
「行くのじゃな、今から」
「左様です。この八大公の一人」
まずは名乗りを挙げるのだった。
「このベリアルのレダ、出陣します」
「連れて行く狂闘士達は既に決めているか」
「無論です」
今エリスに応える笑みは悠然としたものであった。
「それももう」
「そうか。では行くがいい」
それを聞いて安心したように返すエリスであった。
「それではな」
「はい、それでは」

その悠然とした笑みで頷くレダであった。
「今から出陣します」
「吉報を待っている」
エリスはレダに対してまた告げた。
「それではな」
「はい、それでは」
こうしてまた狂闘士達が出陣するのであった。次の戦場も既に決まっていた。戦いは果てることなく続いていた。まさに戦いの神の思惑通りであるかのように。

第四十五話　　完

２００９・８・１０

第四十六話　第五の戦場その一

第四十六話　第五の戦場

聖域ではまずはアルデバラン達の帰還が伝えられた。彼等は帰還を祝われそのうえでそれぞれの持ち場に戻った。だがそれで全てが終わりではなかったのである。

「まずはよく戻ってくれた」

「はい」

アルデバランは教皇の前で応えていた。そこにいるのは他の黄金聖闘士達も同じだ。彼等はいつものように教皇の前に集いそのうえで片膝を折っているのである。

そうしてそのうえで。教皇の言葉を聞いていた。教皇もまたその教皇の間の己の玉座に座りいつものように彼等に対して述べるのであった。

「御苦労であった。何もなかったか」

「モロクは取り逃しました」

アルデバランはこのことも教皇に述べた。

「申し訳ありません」

「いや、それはいい」

そのことはいいとする教皇であった。

「そのことはな」

「宜しいのですか」

「そうだ。モロクをあの場で倒すのは至難だった」

だからだというのである。

「おそらくあの男とは別の場所で戦うことになるだろう」

「別の場所で、ですか」

「その時にだ」

やはりあの時ではなかったというのである。

「決着をつけるのだ。いいな」

「はい、それでは」
アルデバランは教皇のその言葉に応えて頷いた。
「その時にこそ」
「少なくとも聖闘士達に犠牲はなかった」
教皇はこのことも言うのであった。
「それで万全だ。私からは何も言うことはない」
「有り難き御言葉」
「そしてアイオロスよ」
教皇はアルデバランに告げ終えた後で今度はアイオロスに対して声をかけてきた。
「御前も今回出陣してもらったが」
「はい」
「見事だった」
彼にもねぎらいの言葉をかけるのだった。
「四人の狂闘士達を倒したこと。実に見事だった」
「有り難うございます」
「だが御前は次の戦いでは休んでもらう」
次の戦いでは、ということだった。
「いいな」
「次の戦いでは、ですか」
「次の戦場はだ」
教皇は戦場についても黄金聖闘士達に話してきた。
「北に行ってもらう」
「北!?」
「北ですか」
「そうだ。コラ半島だ」
そこだというのである。
「ソ連のコラ半島だ。そこに行ってもらう」
「コラ半島というとだ」
「そうだな」

デスマスクとシュラが顔を見合わせて話をはじめた。
「相当寒い場所だったな」
「何もかもが凍る世界だ」
「花といえど凍ってしまいます」
アフロディーテはその寒さをこう表現した。
「その様な場所です」
「だとするとその場に向かうのは」
「一体誰だ?」
アルデバランとアイオリアも話をはじめていた。
「一体誰が向かうのか」
「教皇、次に出陣する者は誰でしょうか」
「カミュよ」
教皇が名前を呼んだのは彼であった。
「御前に行ってもらいたい」
「私にですか」
「そうだ」
彼だというのである。

第四十六話　第五の戦場その二

「アクエリアスの黄金聖闘士である御前にだ。よいか」
「謹んで御受け致します」
これがカミュの返事であった。
「コラ半島に行かせて頂きます」
「既に狂闘士達は出陣している」
「次に出た八大公は誰なのでしょうか」
ミロはそれを問うのだった。
「既にベルゼブブ、ベール、アスタロト、モロクが出陣していますが」
「おそらくはベリアル」
ムウがそのミロの問いに答えた。
「ベールのレダが出陣してきたのでしょう」
「ベールのレダというと」
「そうです」
ムウは今度はカミュに対して答えていた。
「魔神達の中で最も熱い炎を使う魔神です」
「その者が出陣したのか」
「コラに対して」
「そうです。教皇、だからこそなのですね」
ムウもまた教皇に対して問うのであった。玉座に座す彼に対して。
「カミュを行かせたのは」
「そうだ。炎に対して氷を向かわせる」
教皇は厳かな声で述べた。
「それで対する」
「炎に対して氷で」
「それで」
「わかりました」

やはりそれを謹んで受けるカミュであった。教皇の今の言葉も。
「それでは。御期待下さい」
「白銀の者は二人だ」
教皇はまた告げてきた。
「青銅の者は四人。いつも通りだ」
「はい」
確かにこれはいつも通りであった。出陣の際に共に向かう白銀及び青銅の者達は。合わせて六人なのは今回も同じであった。
「そしてだ。サガよ」
「はい」
サガにも声をかける。彼もまた教皇のその言葉に応えるのであった。
「御前にも出陣してもらう」
「わかりました」
「御前はカミュのサポートに回ってもらう」
それだというのである。
「これまで通り。よいな」
「畏まりました」
やはりサガも教皇の今の言葉をそのまま受けるのであった。ここでもいつも通りであった。
「ではカミュ、そしてサガよ」
「はっ」
「それでは」
また教皇の言葉に応える二人であった。
「北のコラ半島に向かうがいい」
こうして今回出陣する者が決まった。すぐにカミュは出陣の準備に入る。だがその前にまた黄金聖闘士達で集まって宴を開くのであった。
「今日はここか」
「はい、ここです」

ミロにムウが答えていた。今彼等は南欧風の店の中にいた。聴こえてくるのはフラメンコである。店の内装はスペイン風で明るくそれでいて堅固な造りとなっている。舞台では若い娘達がそのフラメンコを踊っている。黄金聖闘士達はこの店に集まっていたのである。

「シュラの勧めでこのお店にしました」

「そうか。シュラのか」

「俺の故郷の味だ」

シュラがここで仲間達に告げてきた。

「この店の味はな」

「ああ、そうだったな」

アイオリアはシュラの今の言葉から察した。

「御前の出身はスペインだったな」

「そうだ」

これはもう聖域にいる者なら誰でも知っていることであった。彼の出身については。

「ピレネーの生まれだ」

「だったよな。しかしな」

ここでデスマスクは言うのだった。

第四十六話　第五の戦場その三

「この店のフラメンコはあれみたいだぜ。セヴィーリアかどっかのだな」
「そうだな。セヴィーリアのだ」
それももうわかっているシュラであった。
「この音楽は。そして店の味もだ」
「セヴィーリアですか」
アフロディーテはセヴィーリアと聞いてその街の名を言葉に出した。
「あの港町ですね」
「セヴィーリアでも暮らしたことがある」
シュラはこんなことも言った。
「だから。この店の味も気に入っている」
「そういうことか。それではだ」
「うむ」
シュラは今度はアルデバランの言葉に頷いた。
「食べるとするか」
「そうしよう」
既にスペイン風の石焼きステーキや茸や野菜も入った鶏肉のパエリア、それに生ハムに小海老のガーリック炒め、トマトをふんだんに入れたサラダ等がテーブルを埋めている。そしてワインは当然ながらスペインの赤ワインであった。彼等はそういったスペインの御馳走を次々に食べていくのであった。
その御馳走を食べながらシャカがカミュに声をかけてきた。
「カミュ」
「うむ」
「貴方の相手であるベリアルのレダですが」
「狂闘士の中で最も強大な炎を使う男だったな」

「それだけではありません」
だがシャカはそれだけではないとも言うのであった。
「それだけでは」
「というと」
「はい。あの男の武器は炎だけではありません」
それだけではないというのだった。
「その奸智もまた有名なのです」
「奸智か」
「彼が司るベリアルは魔神の中で最も堕落していると言われた者」
そうだというのである。
「その彼に対して迂闊な行動はできません」
「そこを付け込まれるか」
「それだけではありません」
シャカは目を閉じたままワイングラスを口に近付けその中にある赤ワインを飲んでいる。そうして飲みながらまた語るのであった。
「彼は罠を仕掛けることも得意です」
「罠もか」
「その力も強大ですか奸智も恐るべきものです」
このことを強く言うのであった。
「ですから御気をつけて」
「心得ておく」
カミュはシャカのその言葉に対して頷いたのだった。
「そのことはな」
「そうして頂けると何よりです」
シャカもカミュが己の言葉を受けてくれたと見て述べるのだった。
「くれぐれも御気をつけて」
「しかしよ。ベリアルだったよな」
「そうだ」
「そのベリアルです」
シュラとアフロディーテがデスマスクの言葉に応える。彼等もパ

エリアやステーキを食べそのうえでワインを飲みながら話をしていた。
「そのベリアルがどうかしたのか」
「何かありますか」
「あいつの姿は天使だったけれどな」
デスマスクが言うのはこのことだった。ベリアルの姿は燃え上がる戦車に乗った天使なのである。それが彼の姿なのである。
「その割にはあれだな。アーレスなんぞに従ってるんだな」
「それを言えば他の狂闘士達も同じだが」
「その通りです」
シュラとアフロディーテはこうデスマスクの今の言葉に突っ込みを入れるのであった。
「多くの狂闘士達の戦衣が天使の姿をしている」
「そうですが」
「それがよ。どうにも腑に落ちないんだよ」
デスマスクは二人の言葉を受けてからもさらに言うのであった。
「天使が何でアーレスなんぞについたのかがな」
「それはわかっています」
ムウがここでデスマスクの疑問に答えてきた。

第四十六話　第五の戦場その四

「そのことにつきましては」
「わかってるのかよ」
「はい。アーレスには確かにカリスマ性があります」
ムウが言うのはこのことだった。
「それに多くの者が惹かれ」
「中にはエンジェルだった者もいた」
「天闘士だった者も。そういうことか」
「いえ、そうではありません」
ムウは今度はアイオリアとアルデバランの言葉に応えていた。
「天使、即ち天闘士達の中でアーレスに惹かれた者が狂闘士となったのです」
「アーレスに惹かれた者が」
「そうなったと」
「我々アテナに仕える者達は聖闘士」
ムウは今度は自分達のことを述べた。
「海皇ポセイドンに仕える者は海闘士、冥皇ハーデスに仕える者は冥闘士」
「そうだったな」
「そして天皇ゼウスに仕える者が天闘士だ」
アイオリアとアルデバランはムウの話を聞きながらまた述べた。
「その天闘士達の中でアーレスの考えに賛同した者達が狂闘士となったのです」
「するとあの者達はあれなのだな」
ミロはムウの話をここまで聞いたうえで述べた。
「言うならば堕落した天闘士達なのか」
「堕落と言うのかどうかはわかりませんが破壊と殺戮を選んだのは確かです」

それは間違いないというのであった。
「それだけはです」
「ゼウスではなくアーレスを選んだのか」
カミュもまたここまで聞いて述べた。
「あの者達は」
「それも自分の意志で、です」
「自分の意志でか」
「アーレスを選んだというのか」
「そういうことです」
今度は今ここにいる仲間達全員に対して告げたムウであった。
「彼等は自らの意志でアーレスを選んだのです」
「それだけ戦いたかったということか」
「だからこそアーレスに」
「そして誰もがアーレスに対して絶対の忠誠を誓っています」
ムウはこのことも話したのだった。
「全員がです」
「そういえばそうだな」
「ああ」
「確かにそうですね」
今のムウの言葉に頷いたのはシュラ、デスマスク、アフロディーテの三人であった。既に狂闘士達と激しい戦いを繰り広げた三人が今のムウの言葉に頷くのであった。
「狂闘士達はアーレスに対して強い忠誠心を持っている」
「そんなのが何になるかって思うんだがな」
「絶対と言っていいまでの」
「そうだな」
アルデバランもまた三人と同じく頷いたのだった。
「我等がアテナに誓っている忠誠と同じ強さだ」
「アーレスには確かにカリスマがあります」
ムウはまたアーレスのカリスマ性を指摘した。

「それによってです」
「狂闘士達はアーレスに従っている」
「そういうことか」
アイオリアとミロもここで頷いた。
「我等が平和を願っているように」
「あの連中はあの連中で破壊と殺戮を願っているのか」
「しかしだ」
だがここでカミュが言うのだった。
「租の破壊と殺戮を許すつもりはない」
「どうしてもですね」
「当然だ」
カミュの言葉はそれが当然といったものであった。至極冷静でもあった。
「平和を守る。それが我等聖闘士の義務だからな」
「その通りです。我々は平和とこの地上にいる人々を守ることが責務です」
ムウの言葉もその中に強さを含んだものになっていた。
「だからこそ。アーレスの正義を認めるわけにはいきません」
「その通りだ。では私も行くとしよう」
カミュは言った。
「ここでの宴の後でな」
「おう、最後まで食うんだな」
「このスペイン料理を」
今のカミュの言葉にデスマスクとシュラが応えた。デスマスクは笑顔になっている。

第四十六話　第五の戦場その五

「じゃあよ。このスペインのワイン飲めよ」
「シグロだ」
シュラはそのワインの柄も話してきた。
「いいワインですね」
「そうだな」
アフロディーテとアルデバランもそのワインを楽しんでいた。
「スペインのワインは安いうえに」
「それでいて飲みやすいな」
「確かに」
シャカはその二人の言葉に目を閉じてはいるが納得している顔で頷くのだった。
「この味は。いいものです」
「本当にそう思っているのか？」
ミロは今のシャカの表情からそうは思えなかったのである。
「シャカ、本当に」
「そうですが」
シャカ本人の弁ではそうなのであった。
「そう見えませんか」
「ちょっとな」
「俺もあまり」
それはアイオリアも同じであった。彼もまたいぶかしむ顔になっていた。
「御前が美味いと思うのならそれでいいがな」
「ですが実際に美味しいですよ」
ムウは素直にそのワインを飲んで穏やかな笑みになっていた。
「このワインは」
「そうだな。それにスペイン料理も」

カミュはワインだけでなく料理も楽しんでいた。パエリアもトマトのサラダも充分過ぎる程楽しんでいた。表情にはあまり出てはいないがそれでもだった。
食べていた。食欲からそれがわかるのであった。それを見てまた周りの面々が言うのであった。
「あれっ、よく見たらカミュ御前」
「かなり食べていないか？」
デスマスクとアイオリアが言うのだった。
「何か澄ました顔でよ」
「食べるのだな」
「そうだな。俺もかなり食べているが」
「俺と同じ程度食べている」
シュラとアルデバランもそのカミュの食欲を見ていた。
「確かに御馳走もお酒もかなりありますが」
「意外ですね」
今度言ったのはアフロディーテとシャカであった。
「貴方がそこまで食べられるとは」
「健啖家だったのですか」
「食べることも飲むことも好きだ」
カミュ自身もこのことを隠さなかった。
「私の趣味の一つだ」
「そうですね」
ムウはカミュのその言葉を聞いて既に知っているように述べた。
「カミュは色々な趣味を持っていますね」
「そうだったのか！？」
ムウのその言葉を聞いて驚いた顔になるミロだった。
「そんなに趣味が多かったのか、カミュは」
「食べることと飲むだけでなく」
ムウはミロの言葉を受けてそのうえで述べるのだった。
「絵画に彫刻に詩に読書に音楽鑑賞に演奏と。色々ありますね」

「ただの暇潰しだ」
本人はこう言うだけであった。
「ただそれだけだ」
「俺そんなの全然趣味じゃねえぞ。パスタ作り位か？あと歌だな」
「俺はフラメンコギターと闘牛だが」
「私は薔薇の栽培とサウナですが」
「俺は大工と放牧だが」
他の面々はこうした趣味であった。
「そんなに色々趣味があるのかよ」
「意外というものではないな」
「確かに。その通りです」
「カミュ、見直したぞ」
彼等はそれぞれ言いもした。
「俺の趣味は・・・・・ない」
「俺はボクシングと陸上競技だ」
ミロに至ってはこれといってなかった。アイオリアは如何にもアイオリアらしいと言える趣味であった。誰もがそれぞれの個性も見せていた。

第四十六話　第五の戦場その六

「私も演奏と詩をしますが」
ムウの趣味はこの二つであった。
「そして聖衣の修復ですね」
「それじゃあ最後はシャカだけれどよ」
「一体趣味は何だ？」
「何なのですか？」
デスマスクとシュラ、アフロディーテの三人がシャカに対して尋ねた。
「私の趣味ですか」
「そうだ」
アルデバランも答える。
「趣味はあるな」
「はい」
それは当然といった返答だった。
「あります」
「ではそれは一体」
「何なのだ？」
今度はアイオリアとミロが彼に尋ねた。そしてシャカは彼等の問いに対して静かに答えてきたのであった。それは至って静かな様子であった。
「私の趣味は」
「趣味は」
「それは何だ？」
「睡眠です」
まずはこれであった。
「そして瞑想です」
「睡眠と瞑想が趣味」

「それだけなのか」
「はい、それだけです」
本当にそれだけだというのである。目を閉じたままの静かな言葉であった。
「その二つです」
「睡眠が趣味なのか？」
「さて、それは」
「あまりどうとは」
「言えないが」
「どうなんだ？」
黄金聖闘士の面々も今のシャカの返答にはどう答えていいかわからなかった。それでそれぞれ顔を見合わせて怪訝な顔になって話をしていた。
しかしそれがどうなのかというと誰にもはっきりとは言えなかった。それでいい加減困っていたがここでまたムウが言うのであった。
「さて皆さん」
「んっ！？」
「何だムウ」
「デザートですが」
彼が今ここで言ったのはこのデザートのことだった。
「どれが宜しいですか？」
「デザートといっても」
「そう言われても」
「アイスクリームは如何でしょうか」
にこりと笑う彼が勧めてきたのはそれであった。
「アイスクリームはどうでしょうか」
「アイスクリームか」
「悪くないですね」
「確かに」
他の面々もアイスクリームと聞いて特に悪い顔をしなかった。む

しろそれを聞いていいといったような顔をして頷いてすらいた。
「最後の締めとしては」
「いいデザートだな」
「ではこれで決まりですね」
誰も反対する者がいないのを見て早速決めてしまったムウであった。
「それではそういうことで」
「よし、じゃあ最後はアイスクリームだ」
「それにしよう」
「この特別アイスにしましょう」
ムウはメニューを開いてそれで決めていた。彼は迅速にそうしたことも決めているのだった。それはさながら彼がまとめ役であるかのようだった。
「バニラにチョコレートにストロベリーにブルーベリーの四つがあり」
「おっ、豪勢じゃねえか」
「確かに」
「そしてフルーツも添えてあります」
それもあるのだというのだ。

第四十六話　第五の戦場その七

「これは如何でしょうか」
「よし、それだ」
「それでいい」
誰も反対しなかった。それでいいというのだった。
「では。この特別アイスで」
「わかった」
最後にカミュが頷いた。こうして最後にその特別アイスを食べてそのうえで店を後にするのだった。次の日カミュは己の聖衣を持って聖域を後にしようとしていた。
その彼に対してすぐに何人から歩み寄ってきた。そうして丁寧な態度で言うのであった。
「カミュ様、それでは」
「御供させて頂きます」
「御前達がか」
カミュはその彼等の姿を見て言うのだった。
「御前達が私と共に出陣するのだな」
「その通りです」
「我々ではいけませんか」
「いや」
カミュは駄目であるとは決して言わなかった。
「こちらこそだ。来てもらいたい」
「カミュ様」
「それでは」
「そうだ。共に行こう」
こうも彼等に告げるカミュであった。
「戦場に」
「有り難き御言葉。それでは」

「参りましょう」
彼等はカミュの言葉を受けて笑顔で述べるのだった。
「いざ」
「戦場はわかっているな」
カミュは彼等に対してこうも告げてきた。
「我々が向かうその戦場は」
「コラ半島ですね」
「ソ連の中でも北方の」
「そうだ。あの場所だ」
これは教皇との会話そのままのことであった。
「あの場所に今から向かう。それでいいな」
「はい、わかっています」
「ではコラへ」
彼等もそれはわかっているのだった。カミュに対して恭しく応えてみせた。
「そして狂闘士達を倒しましょう」
「では行くぞ」
カミュは彼等に対して告げた。
「バベル」
「はい」
ケンタウロスのバベルであった。精悍な顔をしている。
「オルフェ」
「はい」
琴座のオルフェだった。優美な顔をした青年だ。
白銀はこの二人だった。そして青銅は。
「シュミット」
「はい」
神秘的な雰囲気の黒い髪の少年だった。彼は飛魚座である。
「パラオ」
「ええ」

元気のよさそうな黒い肌の少年だ。彼は海豚座だ。
「マクベス」
「ここに」
金赤の髪のやや背の高い少年がいる。コンパス座の少年だ。
「キラ」
「いますよ」
明るい黒い目と茶色の髪の少年がいた。顕微鏡座である。
「我等六人が」
「カミュ様と共にコラに参りましょう」
「寒いがそれでもいいな」
カミュが次に述べてきたのはこのことだった。
「どれだけ寒かろうがな」
「それはもう承知のこと」
オルフェは目を閉じてそのうえでやや俯いたようになってカミュの今の言葉に答えたのだった。
「それに寒さなぞ我等にとって問題ではありません」
「問題はないというのだな」
「そうです。鍛え上げられた我等には」
自分達のことであった。他ならぬ。
「その程度のこと何でもありません」
「それよりも狂闘士達です」
今度カミュに言ってきたのはバベルであった。
「あの者達のことですが」
「気をつけておくのだ」
カミュは狂闘士についてまずはこう告げた。
「今度の狂闘士達もかなりの強さだ」
「確かベリアルのレダ」
「あの男が来るのですね」
「八大公はな」
バベルとオルフェに答えたのはまず彼のことだった。狂闘士の頂

点に立つ八大公のうちの一人である彼のことを述べたのである。
「まずはあの男だ」
「そして他の者達もですね」
「いると」
「そしてインプ達もかなりの数がいる」
その雑兵達のことだ。彼等も当然としているというのである。
「それでもいいのだな」
「無論です」
「全ては覚悟のうえです」
「そうか。ならばいい」
カミュは彼等の言葉を受けてその心も見た。そのうえで述べたのであった。
「では。行くぞ」
「はい。それでは」
「戦場に」
こうしてカミュもまた六人の聖闘士達を連れて戦場に向かうのだった。再び戦いがはじまろうとしていた。次の場所はコム、第五の戦場であった。

第四十六話　完

２００９・８・１６

第四十七話　北の大地その一

北の大地

まずはソ連に降り立った七人の聖闘士を出迎えたのは。その寒さであった。

「やっぱりそうでしたね」

「噂通りですね」

マクベスとキラが先頭にいるカミュに対して言ってきた。まず彼等はレニングラードにいた。そこはソ連第二の街であり北海の経済の中心地である。

フランス風のオレンジや白の建物が立ち並び無数の運河が街を走りそこには船達が通っている。そして街はその運河をまたぐ橋もありそれがまた街を飾っている。実に美しい街であった。

「この寒さはやっぱり」

「ロシアですね」

「けれどな。俺達にはな」

「それ程辛いものじゃないな」

今度はシュミットとパラオが言ってきた。見れば彼等はかなり分厚い帽子とコートにその身を包んでいる。それはまさにロシア人そのものの格好であった。

「聖闘士になる時の修行を思えばな」

「こんなものじゃなかったからな」

「そうだな」

彼等の言葉に対してカミュが応えた。彼もまた帽子にコートで全身を覆っている。

「まだシベリアの寒さに比べればな。この程度のことは」

「問題ないんですか」

「ここ北極圏ですけれどね」

「それでもだ。まだ人が住める」

それは確かにその通りであった。レニングラードはロシア第二の都市である。それだけの人口がいるのもまた事実なのである。
「この街はな」
「かなり北にありますけれどね」
「それでもですね」
人口が多いのは事実だった。なおこの街は帝政ロシアの時代にはペテルブルグ、第一次大戦中にはペテログラードといって国の首都でもあった。
「人は多いですよね」
「賑やかなものです」
そのレニングラードを歩きながらの言葉であった。
「この街は」
「活気がありますね」
「その活気のせいでまだ暖かい」
カミュは人の熱気も頭の中に入れていた。
「まだな」
「そうですか。それもありますか」
「それでまだ暖かいんですね」
「そういうことだ。さて、それではだ」
カミュはここで六人の聖闘士達にあらためて声をかけてきた。
「コムに向かう前にまずは英気を養うとしよう」
「英気っていいますと？」
「あったまりでもするんですか？」
「そうだ。まずは食事だ」
食べるというのである。
「コムに向かう前にな」
「それじゃあわかりました」
「けれどソ連での食事っていいますと」
彼等もおおよそ察しのつくことだった。ソ連での食事といえばだ。
「ロシア料理ですよね」

「それですよね。やっぱり」
「そうだ」
やはりそれであった。カミュの返答には何の淀みもなかった。
「いいな、それで」
「ええ、ロシア料理もあったまりますしね」
「それじゃあ」
彼等にも異論はなかった。彼等もソ連に着いたのならばやはり本場のロシア料理を食べてみたいと思っていたのである。この辺りは彼等も人間であった。
「ボルシチですか？それともピロシキですか？」
「両方だ」
カミュはこう青銅の者達の問いに答えた。
「それは両方だ」
「両方ですか。それはまた豪勢ですね」
「確かに」
「とにかく食べないと身体がもたない」
今のカミュの言葉はかなりシビアなものがあった。
「ここはソ連だからな」
「あまりにも寒いからですか」
「我等聖闘士でも」
「人であるからには食べなければ生きられない」
今のカミュの言葉はまさにその通りの言葉であった。
「そういうことだ。それではな」
「ええ。じゃあロシア料理を」
「皆で」
こうして彼等はカミュに案内されてそのロシア料理の店に向かうのであった。そこはレニングラードでもかなり高級な部類のロシア料理のレストランであった。そこに入るのであった。

第四十七話　北の大地その二

「ではこちらに」
「うむ」
カミュが店員に案内されその後に他の者達がついて行く。店の中はかなり豪奢なものでそれこそ宮殿を思わせる。そのレストランの廊下を進んでいくのであった。
店の奥はとりわけ豪奢な部屋であった。まるで屋敷の主のそれのように。七人はその中央にある大きな黒檀でできたこれまた豪奢なテーブルに座るのだった。
そのうえで運ばれてきたのはジャガイモの料理に羊肉を焼いたもの、それにクレープを使ったものにきのこの酢漬けサラダ、それとボルシチにピロシキであった。デザートはフランス風のケーキでありワインも同時に出されている豪勢なものであった。
「あれ、クレープですか？」
「それも蕎麦粉ですよね、これ」
「そうだ」
カミュが青銅の者達の言葉に答えた。
「クレープは本来は蕎麦粉で作られるのは知っているな」
「ええ、それはまあ」
「知っています」
それは青銅の者達も知っていた。これは知っているのだった。
「本格的なものはそうでしたね」
「フランスでも」
「ロシア料理はフランス料理の影響を強く受けている」
カミュはここでロシア料理についても話すのだった。
「フランス料理も同じだがな」
「ああ、そうですね」
バベルがここで気付いて言うのだった。

「ロシアは西欧文化をフランスから学びましたし」
「ピョートル大帝だったな」
オルフェが彼に応える。
「確か」
「そうだ。そしてロシアの一品ずつ出すことをフランス料理も取り入れた」
「フランスとロシアの縁は深い」
また言うカミュだった。
「長い間同盟関係にあったからな」
「今もですよね」
「結構仲いいですよね、フランスとソ連」
この両国の関係は比較的良好であったのだ。フランスはドイツやイギリスと対抗する為にロシアの力を必要としてロシアもまた同じだったのだ。また同じ様な理由でロシアはオーストリアとも長い間友好関係にあった。この関係もかなり深いものがあったりする。
「それでですか」
「クレープも」
「このクレープはブリヌイという」
カミュはそのクレープを見て述べた。
「これはな」
「そうですか。ブリヌイっていうんですね」
「何か一気にロシア風になりましたね」
名前からであった。名前もまた料理を作るのだった。
「その名前を聞くと」
「じゃあこのサラダは」
「グリブイ＝マリナートだ」
カミュはその茸の酢漬けサラダの名前も述べたのだった。
「茸はロシアで比較的よく食べられる」
「それで茸なんですね」
「成程」

「それで後はボルシチにピロシキに」
「ジャガイモですか」
「それと肉は羊」
それがここにある料理なのだった。
「何か一気に出してきてますね」
「デザートまで」
そのフランス風のケーキまであるのだった。七人分であるがその分量はそれぞれがかなりのものであった。しかもワインは二本ずつだった。
「ワインも二本ですし」
「ボリュームもありますね」
「食べて飲まなければ身体がもたない」
カミュはまたこう言うのだった。
「ロシアの大地ではな。わかったな」
「ええ。それじゃあ早速」
「食べますか」
こうして彼等は食べはじめたのであった。誰もがかなりの健啖家で瞬く間に食べていく。とりわけボルシチの味を楽しんでいた。

第四十七話　北の大地その三

「いや、このボルシチって」
「美味いですね」
「やっぱり本場だけはありますね」
誰もがボルシチの味を褒めていた。
「かなりのもんですよ、これって」
「本当に」
「そうだな」
当然ながらカミュもそのボルシチを食べている。銀色のスプーンを右手にその独特の酸味があるシチューを食べているのであった。
「この味は。素朴でありながら」
「しっかりしていますね」
「何かロシアって感じですね」
「このワインも」
既にワインを飲んでいる者もいた。
「いい味ですよ」
「何かロシアでワインっていうのも妙ですけれど」
「ソ連、そしてロシアでもワインは飲まれる」
カミュは今いる場所はロシアであると認識しながら述べた。ロシアはソ連の中にあるのである。ソ連は共和国連邦でありロシア共和国はその中にあるのである。
「れっきとな」
「まあウォッカだけじゃないですよね」
「考えてみれば」
それも当然だった。確かにロシア人にとってウォッカはまさに魂の酒であるがそれだけを飲むわけではないのだ。他の酒もしっかり飲んでいるのである。
「それでワインもってわけですね」

「ビールもよく飲む」
それもなのだった。
「そちらもな」
「結局酒なんですね、この国は」
「それがないとですか」
「ソ連で酒を規制すれば暴動が起こる」
カミュの今の言葉は完全な真顔で話された言葉である。
「多少食料がなかろうが給料の支払いが遅れようがソ連にいる者はその程度で怒ることはない」
「気が長いんですね、つまり」
「そして我慢強いと」
ロシア人の長所である。気が長くそして我慢強いのである。そのうえ素朴で親切である。ロシア人一人一人の人柄のよさはかなり有名である。
「けれど酒は別ですか」
「規制すれば暴動ですか」
「だからこの国で酒は絶対のものだ」
何につけてもまずは酒なのである。
「だからワインも当然の様に飲まれる」
「まあ確かに美味いですけれどね」
「いい感じですね」
彼等はそのワインも楽しんでいた。それは赤ワインである。
「それでこのデザートも」
「フランス風なのに結構似合うのはやっぱり」
「フランス料理の影響を受けているからだ」
またこう答えたカミュだった。今彼はその赤ワインを飲んでいる。グラスを右手に持ちそのうえで貴族然とした面持ちで飲んでいた。
「これもな」
「ええ。上品な味ですね」
「このケーキは」

デザートまで辿り着いた面々が言うのだった。
「他の料理は素朴さも強いのに」
「ケーキだけは」
「ロシアのしゃれっ気だ」
それをこう評するカミュだった。
「このケーキはな」
「しゃれっ気なんですか」
「このケーキって」
「確かにロシアは武骨な国だ」
ロシアに対してこう評しもするカミュだった。
「それもかなりな」
「まあそうですね」
「大地っていいますか」
他の聖闘士達もカミュの言葉に応えて言う。実際にロシアといえば大地でありその味が何処までも滲み込んでいるとさえ言っていい。それがロシアなのだ。
「けれどこのケーキはしゃれっ気ですか」
「そのロシアの」
「言うならばチャイコフスキーだ」
ロシアで最も高名な音楽家の一人である。

第四十七話　北の大地その四

「このケーキはな」
「チャイコフスキーっていいますと」
「それは一体」
「つまりだ。西欧文化を取り入れて完全に西欧化した部分もあるということだ」
ロシア土着のもの以外にということだった。
「変わってしまったり新たに根付いたりもしているがな」
「それがこのケーキですか」
「フランス風の」
「このケーキはフランスのそれよりもさらにフランス的だ」
カミュは評しながらケーキを食べるのだった。そのケーキを。
「フランス風だ」
「そういうものなんですか」
「このケーキは」
「何かそう思って食べると」
他の者達も皆ケーキを食べるようになっていた。その中でそれぞれ語るのだった。
「面白い味っていいますか」
「美味いですね」
「そうだな。見事な味だ」
カミュはまた頷いてケーキを食べ続けている。
「ロシアの中に根付いた西欧の味だ」
「そういうことですか。じゃあ最後は」
「やっぱりこれですよね」
聖闘士達が最後に出したものは紅茶だった。ロシアンティーである。あまりにも有名な紅茶の中にジャムを入れたその紅茶である。
それを手にするのだった。カップは白地に青の奇麗なものだった。

「何かこのカップも西欧風ですけれど」
「それでいて、ですね」
「やっぱりロシアですね」
見ればカップの底にはロシアの民族衣装の女の子の絵があった。白地にあるのは青だけではなかったのだ。少女もいたのである。
「成程、こういうことですね」
「これがロシアか」
「そうだ。ではこの紅茶でもロシアを味あおう」
「はい」
「それじゃあ」
皆ロシアの馳走と美酒の最後にその紅茶を楽しむのだった。こうして英気を養いそのうえでレニングラードを発ちさらに北に進むのであった。
進むのは橇で進んでいた。多くの犬に橇を引かせそれで進むのだった。
「犬橇っていうのもまた」
「やっぱりロシアだよな」
「全くだな」
彼等は橇に乗りながらこんな話をするのだった。レニングラードにいた時よりもさらに厚着になっている。周りは見渡す限りの銀世界でまるで雪の海である。
その白銀の海の中を進んでいく。その中でカミュは言うのだった。
「周りに気をつけることだ」
「周りにはですか」
「何時連中が来てもいいようにですね」
「その通りだ。何時来てもおかしくはない」
カミュはまた言った。
「だからだ。警戒を怠るな」
「ええ。わかりました」
「本当にそうですね」

彼等もカミュのその言葉に頷いて答えるのだった。
「隠れる場所はないですけれど」
「連中にとっちゃそんなのあまり意味ないですからね」
「そうなんだよな」
青銅の者達がそれぞれ話していく。そのうえで実際に周囲に小宇宙が存在しているのかを探っていた。しかしそれは何も感じられなかった。
「まあ今のところはありませんね」
「誰もいないですよ」
「雑兵一匹もね」
探ったうえでカミュにも述べた。
「穏やかなものですよ」
「狼とか狐はいるみたいですけれどね」
「動物だけか」
カミュは彼等の話を聞いて述べた。当然ながら彼もまた櫂に乗っている。何台かの櫂に分かれそのうえで北へと進んでいるのである。
「今いるのは。確かにその通りだ」
「やはり察しておられますか」
「周りのことは」
「おのずと感じる」
こうバベルとオルフェに述べるカミュだった。

第四十七話　北の大地その五

「その気配はな。殺意が高ければ高い程だ」
「成程。流石は黄金聖闘士です」
「我々は意識しなければ感じ取ることがないというのに」
「褒める必要はないが」
「いえ、事実です」
「バベルの言う通りです」
しかし彼等はそれを世辞ではないと返すのだった。そしてそれはその通りだった。
「セブンセンシズからですか。それは」
「おのずと感じ取れるのは」
「それもあるがやはり自然と感じ取れるのだ」
だからだというのだった。
「辺りに何かがいればな」
「では今は何もいないというのですね」
「狂闘士達は」
「今は来ない」
カミュは断言さえした。
「今はだ。しかし彼等は必ず来る」
「まあそうでしょうね」
「絶対に来るでしょうね。そりゃ」
「間違いなく」
青銅の者達はそれはわかっているのだった。来ない筈がないとさえ思っていた。
「さて、それが何時かですけれど」
「とりあえず何時来てもいいように心構えはしていますんで」
「そうしているといい。それではだ」
「ええ。身体を冷やさないように」

「これを時々飲んで、ですね」
彼等はカミュに応えながら懐から何かを取り出してきた。それは。
「このウォッカ飲んであったまって」
「そういうことですね」
「そうだ。そして時々橇を止める」
カミュはこうも言った。
「橇を止める。いいな」
「何でですか？」
「また冷えるからですか？」
「冷えたらそれで凍傷になる恐れがある」
カミュは何処までもそうしたことを警戒していた。ロシアの寒さの中では当然として考えられることだった。
「聖闘士はそこまでならないがそれでもだ」
「いざという時に冷え切っていたら身体を満足に動かせない」
「そういうことですか」
「常に満足に戦える状態にしておく」
ここでもカミュの言葉は冷静沈着なものだった。
「そういうことだ」
「ですね。それじゃあ」
「慎重に気をつけてですね」
「コムはさらに北だ」
今度はその頭の中に地図を置いているカミュだった。
「それだけに寒くなる。視界にも注意が必要だ」
「おっとっと」
「これを忘れたらいけませんね」
皆それぞれサングラスやゴーグルをかけた。カミュもである。
「雪の光で目をやられますからね」
「これも気をつけないと」
「雪と氷は最も恐ろしいものの一つだ」
カミュは己が使うものについても言った。

「それも忘れるな」
「狂闘士の前に自然が相手ですか」
「随分と厄介な場所なことで」
「厄介でもそれでも進むしかない」
その言葉は絶対の響きがあるものだった。
「それでもだ」
「そこに狂闘士がいるなら」
「そういうことですか」
「何かがあるようだ」
こうも言い加えたカミュだった。
「ここにもな」
「ここにもっていいますと」
「これまでの戦いにも何かがあったんですか？」
「はっきりと断定はできないが」
こう前置きはするのだった。
「だがそれでも。何かあるのは間違いない」
「そういえば何か狂闘士の連中はいつも俺達を誘い出すようにして戦いを挑んできますね」
「そうやって」
「今回も何か」
「だからだ。何かある」
そこから言うのだった。
「おそらくはな。しかしそれにあえて入る」
カミュは前を見据えて言った。
「いいな。それで」
「ええ。飛び込んでやりましょう」
「そのうえで散々に破ってやりましょう」
青銅の者達は明るい笑顔で話すのだった。

第四十七話　北の大地その六

「聖闘士の強さ見せてやりますよ」
「思う存分ね」
「その意気だ。それでは北にだ」
今のカミュの言葉にバベルとオルフェが応える。
「それならばカミュ様」
「このまま北に向かいます」
「そういうことだ。進路はこのままだ」
「了解です」
「わかりました」
また応えるバベルとオルフェだった。彼等はそれぞれの櫂の手綱を握っていた。
「まっすぐにですね」
「進めます」
「犬達に曳かれて進むのは」
カミュは今度は一人呟いた。
「戦場ということか」
そんなことを呟きながら今戦場に向かう。その頃彼等が目指す北には既に狂闘士達が集まっていた。
「そうか。レニングラードを発ったか」
「はい、今しがた」
「そして犬橇でこちらに向かっています」
周りの狂闘士達が口々にレダに対して報告する。
「どうされますかレダ様」
「これについては」
「そうだな」
レダは彼等の言葉を受けてまずは考える顔になった。そうしてそのうえで言うのだった。

「まずはインプ達を向けよう」
「あの者達をですか」
「まずは向かわせるのですか」
「そうだ。まずはだ」
彼はこう言うのだった。
「そのうえでだ」
「そのうえで」
「どうされるのですか」
「罠も用意しておこう」
ここで邪悪な笑みを見せるのだった。
「罠をな」
「罠といいますと」
「それは一体」
何かと。問う他の狂闘士達だった。
「その時になればわかる。しかしそれは今ではない」
「今ではない」
「そうなのですか」
「そうだ。今ではない」
またこう言うレダだった。
「今ではな。しかしインプ達は向かわせる」
「はっ、わかりました」
「それでは士気は我等が」
「罠は私が張る」
それについては自身が行うというレダだった。
「だからだ。私も行こう」
「ですがレダ様」
「レダ様恩自ら動かれるというのは」
彼等はそれには怪訝な顔になった。彼等はまだレダが動きべきではないと考えていたのだ。
「どうかと思われるのですが」

「それでもですか」
「そうだ。それでもだ」
こう返すレダだった。
「私自ら行こう」
「では我等も」
「御供します」
「私もです」
他の狂闘士達も次々に名乗り出た。八大公ともあろう者を一人で行かせるわけにはいかない、そういうことだった。彼等の世界もかなり複雑なものがあるようだ。
「それは御願いできるでしょうか」
「是非」
「いいだろう」
レダはその彼等の言葉を受けたうえで頷いてみせたのだった。
「御前達がそれを望むのならばな」
「はっ」
「有り難き幸せ」
彼等はレダの言葉を受けてすぐにこう返したのだった。
「それでは我等も」
「御供致します」
「これでいい」
レダは彼等のその言葉を受けながらあらためて言うのだった。
「アクエリアスよ。今から貴様と会いまみえよう」
「あの男とですね」
「そして」
「その通りだ。見せてもらう」
声が楽しげな笑みを含んだものになっていた。
「その技もな」
今カミュとレダが再び会おうとしていた。北の大地は氷と炎で彩られようとしていた。

第四十七話　完

2009・8・20

第四十八話　幻影の罠その一

幻影の罠

トラキアにあるアーレスの宮殿。そこでエリスは今も八大公の面々を前にして話をしていた。
「さて。それではじゃ」
「はい」
「レダは上手くやっているのだな」
「どうやらそのようです」
彼女のこの問いに答えたのはミシェイルだった。
「今のところアクエリアスを順調に北に誘い込んでいるようです」
「左様か。順調にか」
その言葉を聞いて満足そうに笑うエリスだった。
「ではそろそろよのう」
「おそらくは」
今度はリーヴェが答えてきた。
「レダが罠を仕掛ける時かと」
「あの罠は絶品じゃ」
エリスはこう言ってレダを賞賛する。
「まさに狂闘士、いや八大公随一よのう」
「はい、それにつきましては」
「確かに」
他の八大公達も今のエリスの言葉に異論はなかった。
「レダはただ強いだけではありません」
「その奸智もまた恐ろしいものがあります」
「技と頭脳」
エリスは彼の二つの武器をこう称した。
「それを今再び見られるとはのう」
「対するはアクエリアスのカミュです」

「黄金聖闘士の中で最も冷静沈着とされるあの男です」
「ふむ。アクエリアスか」
エリスはこのアクエリアスという単語に反応を見せた。まるで過去から知っているかのように。表情もそうしたものになっていた。
「アクエリアスの者も先の聖戦から変わっておらんようじゃのう」
「その通りです」
「そしてそれはアクエリアスだけではありません」
ここでカナンが言うのだった。
「キャンサーも同じです」
「カプリコーンも」
「ピスケスもまた」
「タウラスも然りです」
続いてジークにミシェイル、ドーマも言うのだった。
「かつて我等と戦った時と同じです」
「おそらく魂は同じかと思われます」
「あの時から」
「ふむ。左様か」
エリスはそれを聞いて考える目になった。
「あの時からか」
「先のハーデス様との戦いですが」
今度言ってきたのはリゲルだった。
「どうやらあの者達はその時も」
「同じ魂だったのじゃな」
「御言葉ですが」
こう恐縮もするリゲルだった。
「そのようです」
「あの時の聖戦ではあの者達は皆戦死しております」
サリアはそのハーデスとの聖戦のことを述べた。
「その魂かと」
「そして我等を忌まわしくも敗北せしめたのも」

エリスは続いてこう述べた。
「あの魂だというのじゃな」
「間違いありません」
「あの小宇宙は」
「面白いことじゃ」
エリスはここまで話を聞いてこう述べたのだった。
「それでは今度はその魂を我等が退けるということじゃな」
「はい」
「その通りです」
八大公達もその考えであった。
「是非。それは我等にお任せを」
「どうか」
「それはもう最初から決めておる」
これが今の彼等の言葉に対するエリスの返答だった。

第四十八話　幻影の罠その二

「それはのう」
「左様ですか。それでは」
「あの者達は我等の手で」
「黄金聖闘士の者達は御前達に任せる」
エリスはまた告げた。
「思う存分戦うがいい」
「有り難き御言葉」
「それでは」
「相手にとって不足はあるまい」
エリスは彼等にこうも告げた。
「そうであろう」
「その通りです」
「あの者達ならば」
「ならばよい」
エリスも彼等のその言葉を受けて満足なようであった。
「それではじゃ」
「はい」
「心ゆくまで戦いを楽しませてもらいます」
こうエリスに答えるのであった。彼等の言葉を受けたうえでエリスはさらに言うのだった。
「それではじゃ」
「次は何を」
「四騎士達はそろそろ動かすべきであろうな」
このことを彼等に問うのだった。
「それについてはどのように思うか」
「そうですね」
最初にこの考えに応えたのはリーヴェだった。

「まだそれは尚早かと存じます」
「早いと申すか」
「はい、まだいいと思います」
こうエリスに述べるのだった。
「それは」
「左様か」
「まだ封印は全て解かれていません」
リーヴェはこうもエリスに告げた。
「あの者達を行かせるのは封印が全て解かれてからでもいいと思います」
「そうか。まだよいのか」
「あの方々に来て頂くにもかなりの労力が必要になると思われます」
「そうじゃな」
ここで思い直したエリスだった。
「アテネの者達も愚かではない」
「そうです」
「私もそう思います」
「私もです」
このことに対して否定的な者は少なくとも八大公の中にはいなかった。彼等はいずれも真剣な面持ちでエリスに対して述べたのだった。
「既に気付きはじめているでしょう」
「あの方々のことにも」
「それならやはり慎重に行うべきじゃな」
エリスは鋭い目になって述べた。
「ここはのう」
「だからです」
ここでまた言うリーヴェだった。
「今動くのは得策ではありません」
「そなた達が全て動けるようになってからか」

「おそらくその時は黄金聖闘士の者達も総出となるでしょうが」
「黄金聖闘士に対することができるのは八大公のみ」
このこともよくわかっているエリスだった。
「他の者達ではできぬからのう」
「だからこそです」
「その時のことは考えておこう」
また言うエリスだった。
「それから。アーレス様をじゃ」
「はい」
「我等の主を」
まさに彼等にとっては絶対の存在であるそのアーレスのことだ。
エリスにしろ八大公達にしろアーレスに対しては絶対の信頼を抱いているのである。
「ここにお招きする為にも」
「まずはあの方々を」
「あの者達の帰還はわらわにとってもよきこと」
エリスの言葉はここでも真剣なものだった。

第四十八話　幻影の罠その三

「そのうえでアーレス様が戻られればだ」
「そうです。我等の勝利はなったも同然です」
「この地上は我等のものとなります」
「では今はあの者達は動かさぬ」
この決断を下したエリスだった。
「よいな」
「有り難き御言葉」
己の意見を容れられたリーヴェは満足した面持ちで答えた。
「それではそのように御願いします」
「今は封印を解くことに専念する」
あらためて告げるエリスだった。
「それにかかるのだ」
「はっ」
「それでは」
その指揮にあたる八大公達の返事だった。
「そうします」
「それでは」
これで話は決定された。八大公達は再びエリスの言葉に頷く。このようにして今現在の彼等の行動が決定されたのであった。
だがそれでもエリスの言葉は続く。彼女はさらに八大公達に対して告げるのだ。
「そしてだ」
「はい」
「次は何でしょうか」
「聖域にいる黄金聖闘士は十一人だったな」
「左様です」
「その通りです」

エリスのその言葉に答える八大公達だった。
「今はライブラ以外の者が聖域にいます」
「アクエリアスが出陣していますが」
「だが十一人か」
このことをあらためて確認するエリスだった。
「残る一人のライブラじゃが相変わらずか」
「この状況でも動きません」
「やはり。あの五老峰に留まったままです」
「ハーデス様の軍勢の監視を続けておるのじゃな」
既にこのことは知っているエリスだった。話を聞いてすぐにこう述べるのだった。
「今だに」
「その通りです」
「我等がこのトラキアに現われようとも動きません」
「我等を無視するというのか」
エリスはまずその可能性を考えた。
「もしや」
「そうではないと思いますが」
「ですが小宇宙はこちらには向けられておりません」
「そうじゃな」
伊達に神ではない。エリスもまたその小宇宙のことはよく感じ取っていた。神である彼女が黄金聖闘士とはいえ人に過ぎない彼の小宇宙を感じない筈がないのだ。
「それは感じぬのう」
「やはり今聖域にある黄金聖闘士の小宇宙は十一」
「それに教皇のものがあるだけです」
「教皇は先のアリエス」
エリスはまた言った。
「あの者は我等を常に見ておるな」
「常になのですか」

「そうじゃ。気をつけることじゃ」
エリスの言葉は警戒するものであった。その警戒する言葉で八大公達に対して告げたのだ。
「あの者は常に我々を見ておるぞ」
「そうだったのですか」
「それは」
「気付かぬのも道理じゃ。あちらもあえて気付かれぬようにしておる」
シオンはそうしているのだと。既に見抜いているエリスだった。
「我等の動きを常に見ておるのじゃ」
「だからこそ迅速に動いてくるのですね」
「我等を見ているからこそ」
「そういうことじゃ。あの者も先の聖戦、ハーデス様との戦いでの生き残り」
このことはあまりにも有名であった。シオン、そして童虎は先の聖戦で僅かに生き残った者達なのだ。彼等の他は皆壮絶な戦死を遂げたのである。
「あの者の小宇宙はじゃ」
「どれ程に達するというのですか」
「若しかするとじゃ」
こう前置きしてからまた述べるのだった。

第四十八話　幻影の罠その四

「わらわに匹敵するやものう」
「何と」
「エリス様にもですか」
「そうじゃ」
彼等に告げる言葉に偽りはなかった。
「若しやじゃがな」
「教皇、そこまでの力を持っているというのか」
「恐るべし」
「油断してはならん」
エリスの言葉は険しい。
「決してな」
「その通りですね」
「確かにあの者達は」
女神の言葉を心に刻む彼等であった。
「ではこれからの戦いも」
「常に」
「勝利は最後の最後までわからぬとも言われている」
エリスは最後にその勝利について言及した。
「どうなるかわからぬ故じゃ」
「わかりました」
こうして話を終える彼等だった。トラキアでもこれからのことについて様々な話が為される。戦いは彼等もまた気を引き締めさせるものだったのだ。
カミュは犬橇で北に向かい続ける。しかしまだコラに着いてはいなかった。
「広いっていうのは聞いてましたけれど」
「想像以上ですね」

その橇の中で青銅の者達がその中でぼやくようにして言うのだった。
「これだけ進んでも辿り着かないなんて」
「どうなってるんですかね」
「これがソ連だ」
カミュはそのぼやく彼等に対して告げるのだった。
「これがな」
「ただ広いだけで雪ばかりですか」
「何か凄い飽きるんですけれど」
シュミットとパラオがここでぼやくのだった。
「っていうか人の家見ないんですけれど」
「もう二日も」
「それもまたソ連だ」
カミュはこの二人に対してまた言うのであった。
「それだけ同じ風景が続いて人家も見えないのがな」
「凄いですね」
「こんな国ソ連だけですよ」
マクベスとキラは呆れた声であった。
「それも雪ばかりなんて」
「大変な国ですね。まともな道もないですし」
「この大地に道なぞ必要ない」
カミュはその彼等に対しても告げた。
「必要なのはだ」
「橇ですか」
「それなんですね」
「道なぞあっても雪の中に消えてしまう」
カミュはこうも言った。
「瞬く間にな。凍りそして雪の中に消える」
「全てが雪の中って」
「洒落にならないんですけれど」

「河も海も凍てつく」
まさに全てが凍てつくというのである。
「あらゆるものがだ。そして雪が全てを覆い尽くす」
「やれやれですよ」
「全く」
カミュの話をここまで聞いてまたぼやく青銅の者達だった。
「他の連中がドイツだのアメリカだの中国だので」
「それでメソポタミアにも行っているっていうのに」
ぼやく言葉は続くのだった。
「俺達はこんな雪だけしかないところですか」
「あるのはウォッカだけですね」
「っていうかこれないと死にますしね」
「俺達でも流石に」
「寒さを感じたらできるだけ飲むことだ」
カミュもそのウォッカを飲むことを勧めるのだった。
「さもなければいざという時に満足に戦えないものだ」
「それでやっぱり死ぬんですね」
「やっぱり」
「戦いに負けて」
「それで簡単に」
敗北はそのまま死である。それが彼等の戦いだった。彼等の戦いはまさに生きるか死ぬか。あくまでそうした戦いなのである。

第四十八話　幻影の罠その五

「じゃあ飲んでおきますね」
「いざって時に動けるように」
「けれど飲み過ぎても」
「やっぱり終わりなんですね」
しかしこれも言えることなのだった。このウォッカにおいては。
「ちょっと飲み過ぎると酔い過ぎますからね」
「このウォッカだけは」
こう話しながらまた飲む彼等だった。しかしそれはあくまでちびちびとである。決して一気には飲もうともせずゆっくりとなのだった。
「殆どアルコールですからね」
「飲み過ぎたらそれで」
「それには注意してくれ」
「くれぐれも」
バベルとオルフェもそこを彼等に注意するのだった。当然彼等も犬橇に乗っている。
「本当にだ。いざという時にだ」
「戦うことができなくなる」
この辺りの調整が実に複雑なのだった。
「飲むのがいいがな」
「それでも。頼む」
「わかってるって」
「本当に気をつけてるからな」
彼等は白銀の二人に応えながら飲むのだった。やはりゆっくりと。
彼等はこうしてウォッカで身体を温める。そのうえで進む。しかしその途中で。不意にカミュが言うのだった。
「来たな」

「来た！？」
「まさか」
「そうだ。そのまさかだ」
カミュはこう他の者達に告げた。
「来たぞ」
「へっ、いよいよかよ」
「それじゃあな」
「全員櫂を止めるのだ」
カミュはすぐに彼等に命じた。
「わかったな」
「わかりました」
「それじゃあ」
皆カミュの言葉に従いそのうえで櫂を一斉に止めた。そうしてそのうえで立ち上がるのだった。
その彼等を取り囲むようにして。今白い雪の中に無数の血塗られた影が現われたのだった。
「ふふふ、聖闘士達よ」
「やはり我等のことに気付いたようだな」
彼等は楽しげに笑いながらカミュ達に対して告げてきた。
「まずは流石と褒めておこう」
「これから死ぬ者達にな」
「死ぬ、か」
カミュは櫂から降りたうえで彼等に対して言葉を返すのだった。
「それは我々のことを言っているのだな」
「貴様等以外に誰がいるというのだ？」
「この雪の大地に」
「いや、いる」
だがカミュはそれでも言うのだった。
「それは御前達だ」
「何っ！？」

「我等だというのか」
「そうだ」
今度はよりはっきりと答えたカミュだった。
「御前達のことだ、それは」
「戯言を」
「何を言うかと思えば」
インプ達はカミュのその言葉に対して口の端を歪めさせて返した。
「我等が貴様等に倒せるものか」
「どうしてもというならばだ」
「それを見せてみるのだ」
「我等を倒してな」
「よかろう」
カミュはその彼等の言葉にも応えてみせた。
「ならば見せてやろう。このアクエリアスのカミュがな」
「黄金聖闘士を倒せばそれで聖域は戦力を失う」
「こちらとしても望むところだ」
インプ達は今のカミュの言葉を受けてじり、と前に出てみせた。
「ならばだ」
「アクエリアス、まず貴様の首を挙げてやる」
「おいおい、御前等がカミュ様の相手をするな」
「面倒臭いが仕方がねえ」
その彼等に対して青銅の者達が向かおうと一歩前に出た。

第四十八話　幻影の罠その六

「俺達が相手してやるよ」
「精々頑張ってくれよ」
「待て」
しかしカミュは。その彼等に対してこう告げた。その動きを止めたのであった。
「御前達は今回は動く必要はない」
「動くなって」
「じゃあカミュ様が戦われるっていうんですか？」
「そうだ」
そしてその通りだと答えてみせたのだった。
「私が戦う。言い出したのだからな」
「けれど何も雑兵程度に」
「黄金聖闘士ともあろう方が」
「構わない」
それもいいというのだった。
「私は相手が誰であろうともだ」
「戦われるんですね」
「そういうことですね」
「そうだ。だから動くな」
また彼等にこう告げるのだった。
「いいな」
「わかりました。それじゃあ」
「ここはカミュ様にお任せします」
黄金聖闘士であるカミュに言われてはこう答えるしかなかった。彼等はこれで今回は引き下がることにしたのだった。そのうえでカミュを見守ることにした。
それは青銅の者達だけではなかった。白銀の二人も同じだった。

「ではカミュ様」
「ここはお任せ致します」
「うむ」
彼等に対しても言葉を返すカミュであった。
「それでは。やらせてもらう」
「御健闘を御祈りします」
「それでは」
こうしてインプ達に対するカミュだった。完全に包囲している彼等は余裕綽々といった態度でその彼に対して告げるのであった。
「じゃあよ、アクエリアスよ」
「覚悟はいいな」
勝利を確信していた。そこに下卑たものも含ませた声だった。
「貴様を倒せばそれでよ」
「俺達の株もあがるってもんだ」
「その首。貰うぜ」
「私の首、貰いたくばだ」
カミュは一歩前に出た。すると。
不意にその身体が黄金色に輝いた。その黄金の光はまさにこの雪の大地を照らす太陽の如くだった。
「な、何だこの光は!?」
「太陽だっていうのかよ!」
「いや、違う」
インプ達は思わずその光から目を遮らせた。しかしその余りにも眩い光がすぐに太陽のものではないということを知ったのだった。
「この光は聖衣だ」
「聖衣!?ならば」
「ああ、間違いない」
光は次第に弱まってきた。そして見られる時が戻ってから。彼等は見たのだった。
黄金聖衣にマントをまとったカミュを。黄金聖闘士の正装に身を

包んだ彼こそがまさに。全ての聖闘士達の頂点に立つ黄金聖闘士であった。

「アクエリアスのカミュか」

「それが貴様の戦う姿か」

「そうだ。このアクエリアスの黄金聖衣をまとったからにはだ」

「どうだというんだ？」

「我等に勝てるとでもいうのか」

「その通りだ」

まさにその通りだと返すカミュだった。

「御前達に負けることはない」

「何度も言うがそれを見せてもらおう」

「その黄金聖闘士の力をな」

こう言ってさらに前に出る彼等だった。

「行くぞ！」

「死ね！」

今一斉に雪原を蹴った。そのうえで一斉に襲い掛かる。

第四十八話　幻影の罠その七

「カミュ様！」
「来ました！」
それを見て青銅の者達が一斉に叫ぶ。
「このままじゃ」
「危ないです！」
「わかっている」
カミュはその彼等の方を振り向かずに返すだけだった。
「それはな」
「ではどうされるんですか？」
「一体」
「見るのだ」
こう言うのだった。言うだけだった。
「このアクエリアスのカミュの技の一つ」
「むっ！？」
「動いたか」
「フリージングコフィン！！」
右腕を前に突き出し技の名前を叫ぶ。すると。
インプ達の周囲を瞬く間に氷が覆っていく。そうして一瞬に。彼等は氷の中に閉じ込められてしまったのだｔった。
「こ、氷が俺達を！？」
「まさかこれが」
「そうだ。このアクエリアスのカミュの技の一つ」
カミュは言うのだった。
「フリージングコフィンだった」
「くっ、逃げられん・・・・・・」
「このままでは」
インプ達は氷の棺の中に閉じ込められていく。そうして遂に。彼

等はその氷の棺の中で動かなくなってしまったのであった。
「全ての雑兵達が氷漬けに」
「これが黄金聖闘士の技だっていうのかよ」
それを見た青銅の者達はそれを見て思わず驚きの声をあげた。
「すげえ・・・・・」
「俺達とは比べ物にならねえ」
「これで終わりではない」
だがカミュはまだ言うのであった。
「これでな」
「といいますと」
「一体」
「今はただ封じただけだ」
それだけだというのである。
「しかしこの氷はさらにその温度を下げていく」
「ってことはつまり」
「あの連中は」
「そうだ。この氷の中で完全に死に至る」
それだというのである。
「マイナス二〇〇度の中でな」
「マイナス二〇〇ですか」
「そこまでの寒さなら絶対に助かりませんね」
「幾ら連中でも」
青銅の者達はその温度を聞いて思わず唸ってしまった。そこまでの冷気になると彼等とてすぐに息絶えてしまう程のものである。だからだ。
「じゃあカミュ様、今回はこれで終わりですね」
「カミュ様の勝利ですか」
「いや、まだだ」
カミュは勝利だとは言わなかった。
「まだだ」

「まだ！？」
「ですがもう狂闘士達は今は」
「くっ、遅かったか」
ここで一人来たのだった。それは一人の狂闘士だった。
「インプ達は全員倒されてしまったか」
「んっ！？貴様は」
「その赤黒い鎧を見たところ」
「そうだ。狂闘士だ」
彼もまた青銅の者達の問いに対して答えるのだった。
「伯爵、グラシャラボラスのリュート」
彼は名乗った。
「以後知っておけ」
「グラシャラボラスの魔神か」
カミュはその名乗りを受けて彼にその目を向けるのだった。
「何故ここに来た」
「この者達の指揮を執る為に来たが」
氷の棺の中で息絶えている彼等を見て忌々しい声を出すのだった。
「くっ、もう全員倒されているとは」
「そして貴様はどうするのだ？」
カミュは氷の中のインプ達を見るリュートに対して告げた。

第四十八話　幻影の罠その八

「戦うのか。それとも」
「狂闘士に逃げるという言葉はない」
リュートはきっとした顔でカミュに対して告げた。
「そして同胞の仇は何処までも追い詰めて倒す」
「ならば戦うというのだな」
「無論だ」
リュートはその両手をゆっくりと動かしてきた。そのうえで攻撃に入ろうとしている。
「このグラシャラボラスのリュートの技、見せてくれる」
「面白い。ならばだ」
カミュもまた身構えてきた。そのうえで狂闘士の相手をしようとする。
「私もまた受けるとしよう」
「アクエリアス、貴様を倒す」
憎しみに満ちた目で告げるのだった。
「いいな」
「来い」
今両者はまさに戦いに入ろうとする。しかしだった。ここで不意に犬橇の犬達が吠えだした。そしてその姿が瞬く間に。
「なっ！？」
「な、何だ何だ！？」
「犬達が！」
青銅の者達はその犬達の姿を見て声をあげた。
「でかくなった！？」
「しかもそれだけじゃねえ！」
「頭が！」
何と彼等は仰ぎ見るまでに大きくなりそのうえでそれぞれ頭が三

つになってしまった犬達の禍々しい姿をその目に見たのであった。
「しかもそれだけじゃないぞ！」
「尾が蛇になった！」
「しかも」
ただ尾が蛇になっていただけでゃないのだった。
「背中からも蛇が」
「何匹生えていやがるんだ」
この上なく禍々しい姿だった。彼等はそれを見て思わず動きを止めてしまった。
「ケルベロスか」
「ああ、間違いない」
「それだ」
彼等はその犬達を見て言った。
「地獄の番犬というあの」
「まさかこんなところで出て来るっていうのかよ」
「しかも一匹じゃねえのかよ」
「何匹いやがるんだ」
こう言って唖然としていた。だがリュートはそれを見ても冷静なものだった。
「そうか。ならばここは」
その地獄の番犬達を見て言うのだった。
「私はアクエリアスにだけ向かえばいいな」
これが彼の判断だった。彼はその判断を下すとあらためてカミュに向かい合うのであった。
その間に青銅の者達は素早く聖衣を身にまとっていた。白銀の者達も同じだ。
「どっちにしろこの化け物共」
「出て来たからには容赦はしねえ」
「見せてやるぜ聖闘士の力」
ケルベロス達を前にして戦闘態勢に入っていた。

「今ここでな」
「食らって死にやがれ」
今まさに攻撃に入ろうとする。だがしかしだった。ここでカミュが今まさに戦いに入ろうとする彼等に対してこう告げたのだった。
「待て」
「待て！？」
「待てというのですか」
「そうだ」
また彼等に告げるカミュだった。
「ここはだ。待て」
「何故ですか？」
「こんな化け物共を相手にして」
「小宇宙を感じない」
カミュは言った。
「ここは仕掛けるな」
「仕掛けるなっていっても」
「どうすれば」
「オルフェ」
カミュは今度はオルフェに声をかけた。
「いいか」
「はい。では私は」
「そうだ。竪琴を使うのだ」
こう彼に命じるのであった。
「いいな」
「わかりました。それでは」
「竪琴！？」
「何故竪琴なんですか今」
「すぐにわかる」
青銅の者達にもすぐに返した。
「すぐにな」

「すぐにですか」
「じゃあここは」
カミュにこう言われてはだった。彼等もこう返すだけだった。
「カミュ様、お任せします」
「オルフェ、頼むな」
「わかっている。それではだ」
オルフェはその手に持っている竪琴を奏ではじめだした。その清らかな音が雪原の中に聴こえだした。

第四十八話　　完

２００９・８・２５

第四十九話　竪琴の力その一

竪琴の力

オルフェはカミュの言葉に従いその手に持っている竪琴を奏ではじめた。
清らかな声が聴こえてくる。しかしリュートはそれを聴いても特に変わったところはなかった。
その平然とした態度で。言うのだった。
「この竪琴の音は確かに素晴らしい」
「そうか、グラシャラボラスよ」
カミュはリュートのその言葉を聞いて自身の言葉を返した。
「貴様にもそれがわかるのか」
「音楽については私も解する」
余裕さえ持っている笑みで返すリュートだった。
「だが」
「だが？」
「それに惑わされることはない」
こう返すのだった。
「この音にはな」
「音に惑わされることはないというのか」
「そうだ。私を音で惑わせるつもりなら無駄なことだ」
彼はまた告げてきた。
「その様なことをしてもな」
「安心しろ。そのつもりはない」
だがカミュはその彼にこう返すのだった。
「この音は貴様に対するものではない」
「では何に対するものだというのだ？」
「すぐにわかる」
カミュはまた言ってきた。

「すぐにな」
「？それでは一体何の為の音だというのだ」
リュートはカミュのその言葉を聞いて怪訝な顔になった。
「この竪琴の音は」
「見るのだ」
「何をだというのだ？」
「今から起こることをだ」
カミュが言うとだった。それまで地獄の業火の如く荒れ狂っていたケルベロス達が急に大人しくなった。そしてそのうえでうずくまりだしたのだ。
「馬鹿な、ケルベロス達がだと！？」
リュートはその大人しくなったケルベロス達を見て驚きの声をあげた。
「静まり返った。どういうことだ」
「オルフェウスの話を思い出すのだ」
カミュはその驚くリュートに対して告げた。冷静そのもの態度でだ。
「あの伝説の竪琴の使い手オルフェウスのことをだ」
「オルフェウスだと！？まさか」
リュートは今のカミュの言葉を聞いてはっとなった。
「あの竪琴でケルベロスを静まらせることができたというあの」
「そうだ。オルフェは竪琴座の聖闘士」
カミュは彼のことを言うのだった。
「その彼の竪琴の音ならばだ。ケルベロス達を静まらせることもだ」
「できるというのか」
「それだけではない」
だが。それだけではないと付け加えるのだった。
「御前達の術も破ることができる音だ」
「術！？」
「術っていうと」

青銅の者達は今のカミュの言葉にはっとした顔になった。
「どういうことですか!?」
「術っていいますと」
「ケルベロス達を見るのだ」
カミュはこうその彼等に述べた。
「ケルベロス達をな」
「この化け物達をって」
「どういうことですか?」
彼等は訳がわからずカミュの言葉に問い返した。
「見たって何も」
「変わりませんけれど・・・・・・いや」
「なっ!?これは一体」
「どういうことなんだ」
そのケルベロス達を聞いて唖然とした顔になるのだった。何と静まったケルベロス達はその身体をみるみるうちに小さくさせた。そして。
犬達に戻ったのだった。あの橇を曳いていた犬達に戻ったのだった。そこにいる彼等はこれまで聖闘士達と共にいた頼りになる友人達だった。
「元の犬達に戻りましたけれど」
「どうなってんだ?こりゃ」
「幻術だ」
カミュはここで言った。

第四十九話　竪琴の力その二

「これは幻術だったのだ」
「幻術！？」
「まさか。俺達を騙す程の幻術なんて」
使える人間がいたのかと、青銅の者達は言う。しかしカミュはその驚く彼等に対して再び言うのだった。その冷静そのものの声でだ。
「出来る者はいる」
「出来る奴！？」
「っていいますと」
「そうだな。グラシャラボラスよ」
今度はリュートを見ての言葉だった。
「私の言葉に誤りはあるまい」
「流石はアクエリアスの黄金聖闘士」
リュートの今の言葉は返答であった。
「そこまでわかるか」
「仕掛けてきた者は八大公の一人」
カミュはさらに言ってきた。
「ベリアルのレダ。いるな」
「如何にも」
ここでだった。新たな声が聞こえてきた。それと共に八人の異形の衣をまとった者達を従えた男が。リュートの後ろに姿を現わしたのであった。
「何だっ！？あの禍々しい小宇宙の連中は！」
「そしてその中央にいるあいつは」
「まさかあれが」
「八大公の一人」
「そうだ。あの男だ」
カミュは驚く青銅の者達に対して述べた。

「あの男がベリアルだ」
「ベリアルのレダですか」
「あの男が」
バベルとオルフェも彼の姿を認めて言うのだった。
「これ程禍々しい小宇宙を放つとは」
「八大公。話以上ですね」
「アクエリアスだな」
その男が今カミュに対して声をかけてきた。
「そうだな。間違いないな」
「そうだ」
カミュはその男に対して言葉を返した。
「私がアクエリアスのカミュだ」
「やはりな。私がベリアルだ」
そして彼もまた自らの名を名乗るのだった。
「アーレス様にお仕えする八大公の一人。ベリアルのレダだ」
「ケルベロス達を見せてくれるとはな」
「ケルベロス達を打てばその衝撃が御前達自身に返るようにしてあった」
レダはここで種明かしをしてみせてきたのだった。
「それも見抜いていたのだな」
「目では誤魔化せることはできる」
カミュがここで言うのは目のことだった。
「しかしセブンセンシズは誤魔化せない」
「ふふふ、セブンセンシズか」
レダはそのセブンセンシズという言葉に目を向けた。
「それを持っているからこその黄金聖闘士だったな」
「そして八大公もそうだな」
カミュは今レダに告げた。
「セブンセンシズを持っているな」
「如何にも」

レダもまたそれを否定しなかった。
「アーレス様の八大公もまた全てそのセブンセンシズを持っているのだ」
「ならば私が読んだのもわかるのだな」
「如何にも。やはりこの罠は見抜いたか」
「そういうことだ。そしてだ」
さらにレダに対して言うのだった。
「これで終わりというのか」
「罠は破られた」
レダの声はまずは平然としていた。
「そうなれば今は退くつもりだった」
「だった、か」
「安心しろ。今もそのつもりだ」
レダは退くと告げた。

第四十九話　竪琴の力その三

「しかしその前にだ」
「何をする気だ？」
「この者達がいる」
今ここで。己の左右に控える狂闘士達を見回した。そのうえで言うのだった。
「貴様等をここで倒す者達だ」
「まずは私だ」
またリュートが言ってきた。
「最早私のことは知っているな」
「如何にも」
こう静かに返すカミュだった。
「もう知っている」
「ならば私の名乗りは終わった」
リュートは何時の間にかレダの左右にいた。そこで同志達と共に控えているのだった。
「では他の同志達の名乗りを聞くのだ」
「いいだろう」
カミュはリュートのその言葉を受けて頷いた。
「それではだ。名乗るがいい」
「公爵、ネビロスのクレーベ」
背の高い精悍な若者だった。
「公爵、アガリアレプトのレティーナ」
赤い目と髪の女だった。燃えるような赤だった。
「侯爵、ラウムのカトリ」
小柄な銀髪の少女である。
「伯爵、フラウロスのリーリエ」
鋭い青い目と白い髪の女だ。

「子爵、ヴァラクのボーイ」
巻き毛の長い茶髪の中性的な男であった。
「男爵、ブロケルのティータ」
長い紫の髪に黄金の目の女だった。
「男爵、ブネのクリフ」
青い短い髪の若者だ。
「公子、ロノベのシルク」
小柄で可愛らしい少女である。以上八人だった。
「我等九人がレダ様と共に」
「御前達の相手をする」
こう聖闘士達に告げてきたのだった。
「覚悟はいいな」
「それで」
「戦う覚悟は最初からできている」
カミュはここでも冷静であった。
「だが」
「だが？」
「敗れる予定はない」
ここでも冷静なままだった。
「それは最初から今でもない」
「ないというのか」
「我等に敗れる予定は」
「そういうことだ。何ならここで見せてもいい」
言いながら己の周りに軽い吹雪を出してみせてきた。
「どうするのだ」
「面白い。ならば」
「我等の力。見せてくれよう」
狂闘士達はカミュの言葉に対してそれぞれジリ、と前に出た。しかしここでレダがその彼等に対して告げるのだった。
「待て」

「レダ様」
「それでは」
「そうだ。ここは戦うことはない」
こう彼等に告げるのである。
「いいな」
「ではアクエリアスは今は」
「その命を預けておくというのですね」
「そういうことだ。今はこれで終わりだ」
これ以上仕掛けないというのである。
「わかったな」
「はっ、それでは」
「その様に」
レダの言葉には礼儀正しく従う彼等だった。

第四十九話　竪琴の力その四

「ではアクエリアスよ」
「今はその命預けておく」
「今度の機会にしておく」
それぞれカミュに告げた。
「ではレダ様」
「それでは」
「うむ」
そのレダの言葉にまた従うのだった。
「ここは一時撤退だ」
「了解です」
「それでは」
「アクエリアスよ」
彼等の中心に位置したままでレダは。最後にカミュに対して声をかけるのだった。その目は笑っていたがそれと同時に炎が燃え盛っていた。
「いずれわかることになる」
「何がだ？」
「貴様の氷が上か私の炎が」
その燃え盛る炎の中での言葉だった。
「それがわかることになる」
「炎とて凍る」
カミュは一言で返した。
「それを覚えておくことだ」
「逆に覚えておこう。それではな」
彼の最後の言葉と共に狂闘士達は姿を消した。後に残ったのはカミュ達聖闘士だった。彼等は今は静かにその場に残っていた。
「あれが狂闘士の連中ですね」

「それに八大公ですか」
「噂以上の小宇宙ですね」
青銅の者達はその顔に冷や汗をかいていた。凍てつくような冷気の中だったがそれでも汗をかいていたのだった。
「何て禍々しい」
「殺意とかそういうのに満ちていますね」
「あの男の相手は私がする」
カミュはその彼等に対して告げた。
「そうさせてもらうぞ」
「そうですか。八大公はですか」
「カミュ様御自身で、ですか」
「向かって来る狂闘士達もだ」
彼等もだというのである。
「向かって来るのなら容赦はしない」
「無理は為さらずに」
「我々がいますので」
バベルとオルフェがここでカミュに告げてきた。
「いざという時は」
「お任せ下さい」
「期待している」
その彼等にも言葉を返すカミュだった。
「その時はな」
「はい、その時は是非」
「私達も」
「何はともあれ今は終わった」
カミュは彼等との話が終わるとあらためて告げた。
「これでな」
「ではカミュ様、聖衣を脱ぎ」
「また先に進まれるのですね」
「そういきたいのだが」

だがここでカミュは青銅の者達に対して微妙な顔を見せるのだった。
「そうもいかないようだ」
「といいますと」
「何か問題でも」
「我等は健在だ」
まずは自分達のことを話すのだった。
「しかしな。犬達がな」
「むっ、そういえば」
「寝ていますね、幻術から覚めた後で」
「しかもどの犬も」
「これでは先に進みたくても進めはしない」
カミュはこう一同に告げた。
「だからだ。今は少し無理だ」
「そうですね。全部寝ていますしね」
「起こすのもあれですし」
「我々も休憩しよう」
カミュはまた一同に対して告げた。
「今はな」
「とはいっても辺りには民家も何もありませんし」
「どうします？」
「テントでも張りますか？」
そういったものも持って来ているのであった。備えは怠ってはいなかった。

第四十九話　竪琴の力その五

「ここは」
「そうしますか」
「そうだな。テントを張ることにする」
カミュはテントを張ることを選んだのだった。
「それで今日はここで休むか」
「そうしますか。少し早いですけれど」
「今日はこれで」
「犬達の傍に火を置いていてやれ」
「はい」
バベルがカミュの言葉に応えて頷く。
「それではこの俺の炎で」
「頼んだぞ。ではテントを張る」
「ええ、もう出してますよ」
「お任せ下さい」
青銅の者達が早速テントを出しそのうえで張っていた。その動きは聖闘士故のものもあるがかなり素早かった。あれよこれよという間にテントが出来上がっていた。
「じゃあ入りましょう」
「防寒の備えは万全ですし」
「よし。では入るぞ」
あらためて一同に告げるカミュだった。
「今日はこの中で休む」
「はい、カミュ様」
一同を代表する形でオルフェが彼の言葉に応えた。
「では中へ」
「わかった。それではな」
最高位である黄金聖闘士のカミュがまず中に入った。それから白

銀、青銅と続く。この順番でテントの中に入るとすぐにバベルが炎を出し中を温めた。彼等はその温もりの中で持って来ている黒パンや燻製、それにお茶やウォッカを取り出して口の中に入れていくのだった。

その質素だがそれでいて温もりのある食事を口に入れながら。彼等は話をするのであった。

「まあ狂闘士の奴等は退けましたけれど」

「寒さだけは相変わらずですね」

「全くですよ」

「俺達は大丈夫ですけれど犬達はどうですかね」

青銅の者達はここでは犬の心配をするのだった。

「この寒さですし」

「下手したら凍死する奴がいてもおかしくないですけれど」

「それは大丈夫なんですか？」

「どうなんですか？」

「心配は無用だ」

カミュはその彼等の危惧に対して答えた。

「あの者達はまず集まって寝ているな」

「ええ、そういえば」

「丸まって寝ていますね」

青銅の者達はカミュの言葉を聞いてこのことに気付いたのだった。確かに彼等は今もそうやって集まって丸くなって寝ていた。

「散らばるより集まってですか」

「そういうことですね」

「その通りだ。それにあの犬達はロシアに住んでいてしかも狼の血を引いている」

「狼のですか」

「あの」

「この程度の寒さで倒れたりはしない」

カミュはまた言った。

「それにバベルが彼等の周りに決して消えることのない炎を置いて温もりを与えている。これで彼等が凍えることは決してなくなった」
「それじゃあ大丈夫ですね」
「あの連中は」
「うむ。凍死することは絶対にない」
断言であった。
「それは十二分に考えてある」
「わかりました。じゃあ犬達のことは安心します」
「俺達よりずっと大丈夫ですね」
こう言ってその心配を打ち消した彼等であった。だがそれでも話は続くのだった。
「まあ俺達はここでずっとですね」
「炎と酒であったまりながら」
「何かかなり厳しい状況ですけれど」
「これはこれで楽しいっていうか」
「修行の頃に比べればだ」
「まだこの程度は」
ここで言ったのはバベルとオルフェだった。彼等を温めているその炎もバベルが出したものである。白銀聖闘士の中で最も炎を使うことを得意としている彼がだ。

第四十九話　竪琴の力その六

「涼風の様なものだ」
「どうということはありません」
「その通りだ」
カミュも再び言う。
「この程度ならばだ。何にもならない」
「カミュ様の修行の場はシベリアでしたよね」
「ここよりずっと寒いんですよね」
「まだ。温かい位だ」
実際にこう青銅の者達にも答えるカミュだった。
「この程度ならばだ」
「温かいですか」
「これで」
「まだな」
カミュの表情は変わらなかった。
「温かいものだ」
「シベリアってのはつくづく凄いところなんですね」
「ここって北極圏なのに」
青銅の面々はそれぞれお茶やウォッカと一緒に黒パンや燻製を食べながらカミュの話を聞いている。カミュも彼等と同じものを食べながら話している。
「ここよりもですか」
「そりゃ相当なんですね」
「人もいない」
カミュはまた述べた。
「そうした場所だ」
「っていうとここよりもですか」
「本当に想像を絶するところなんですね」

「確か殆ど北極海だったんじゃ」
シベリアといってもかなり北の方なのだった。
「そんな場所で修行されていたんですか」
「アクエリアスの修行を」
「辛かったが懐かしくもある」
ふとカミュの目が懐かしいものを思い出すものになった。
「あの時のことはな」
「カミュ様の青春ってわけですね」
「昔懐かしい」
「そこまで歳は取ってはいないが」
ただこのことは注釈を入れるように言うカミュだった。
「私とてな」
「まあそうですけれどね」
「カミュ様にしろ」
青銅の者達は一応カミュをフォローはした。
「まだまだ若いですよ」
「そういえば黄金聖闘士の平均年齢って」
この話が出ようとした。しかしそれはすぐに引っ込められてしまった。
「いえ、それは」
「何でもありません」
「失礼しました」
こう言ってその話は引っ込めるのだった。すぐにであった。
「老師のことを考えたら」
「それはちょっと・・・・・でしたね」
「すいません」
「あの老師はまた特別な方だ」
だがカミュはその彼等の言葉を遮らなかった。
「先の聖戦からの方だからな」
「そうですよね。長いですよね」

「先の聖戦って」
ハーデスとの戦いのことである。あの戦いから相当な歳月が流れている。聖域はその間復興に務めていたのだ。それだけの期間がかかったのである。
「生き残られたたった二人の方ですからね」
「教皇と合わせて」
「教皇も老師も偉大な方々だ」
カミュはその二人については素直に賞賛した。
「あそこまでの方々がおられればこそだ」
「聖域は安泰だと」
「そう仰るのですか」
「老師はあの場所から動かれることはないがだ」
彼いるのは中国の五老峰である。そこに留まり続けているのだ。

第四十九話　竪琴の力その七

「教皇は聖域におられる」
「はい」
「その通りです」
「先の教皇もまた偉大な方であられたという」
「セージ様ですか」
「あの」
この名前は彼等もよく知っていた。
「死の神タナトスを封じられた」
「御自身の御命とひきかえに」
「その方と同じだ。素晴らしい方だ」
カミュは実に率直にシオンを賞賛していた。
「あの方がおられる限りはだ」
「ええ、聖域も安泰ですね」
「カミュ様達もおられますし」
「言ってくれるな」
カミュの顔が微かに笑ったように見えた。
「褒めたところで何も出ないが」
「いえいえ、お世辞じゃなくてですね」
「その通りですよ」
「言ったまま」
「なあ」
青銅の者達は笑ってこうカミュの言葉に述べた。
「さっきだってフリージングコフィンで雑兵達を全部凍らせましたし」
「ああいうの見ていたらやっぱり」
「頼りになりますよ」
陽気に笑ってカミュに告げるのだった。

「しかも罠も見破られましたし」
「その犬達に火も用意してやってるし」
「凄いですよ」
「あの罠を破ったのはオルフェだ」
だがここでカミュはこう言うのだった。
「そして火はバベルのものだ」
「ですが見破られたのはカミュ様です」
「火のことを仰ったのも」
その二人の白銀の聖闘士達がカミュに告げてきた。
「私はただ竪琴を弾いただけです」
「俺は炎を出しただけです」
「それだけだというのか」
「はい」
「その通りです」
彼等の今の言葉は謙遜ではなかった。
「カミュ様がおられればこそです」
「我等は危機を脱することができました」
「そういうことですよ」
「その通りです」
青銅の者達がまた告げるのだった。
「それでカミュ様」
「皆食べ終わりましたし」
「適度に飲みましたし」
気付けばそうなっていた。皆もう食事を済ませたのだった。
「何はともあれですね」
「まだ先はありますし」
「これで休みますか」
「そうだな」
カミュは彼等の今の言葉にも頷いてみせた。
「それではそうするか」

「はい、それじゃあ」
「休みますか」
カミュのその言葉を受けてのものだった。
「寝袋もありますし」
「それに入って」
それも出しているのだった。寝袋は人数分あった。実に用意がよかった。
「寝ましょう」
「明日はまた吹雪の中で進みますからね」
「その通りだ。では寝るぞ」
「はい」
「それじゃあ」
こうして彼等は休息に入った。寝袋の中は温かく彼等に心地よい休息を与えた。レダ達とのはじめての対面を終えた彼等は今はゆっくりと休むのだった。

第四十九話　　完

２００９・８・２８

第五十話　雪原の中でその一

雪原の中で

カミュ達はそのまま雪原を進んでいた。犬橇は順調に北に進んでいる。

「やれやれ」

「変わらないな、おい」

こう言って愚痴を言い合うのだった。

「幾ら進んでもな」

「見渡す限り雪か」

「もうどれだけ民家見てない？」

「さあな」

こんな話をしている中でも犬橇は進んでいく。止まる気配は全くない。

それと共に場所も変わっている筈であった。だが幾ら進もうとも彼等が見るのは。見渡す限りの銀世界であり雪ばかりなのであった。

「雪以外見えるか？」

「いいや」

「何もな」

「だよな」

そうなのだった。彼等はもう何日も。雪ばかりを見ているのである。

食料はありテントもある。犬達も全て健在だ。しかしそれでも彼等はその果てしない銀世界にいい加減飽きというものを感じだしていたのである。

「雪以外のも見たいよな」

「見渡す限り白でな」

「他にないからな」

「わかってはいたけれどな」

それでもなのだった。いい加減何日もだと飽きるというのだ。
その中を進みながら彼等は。うんざりとした表情で言うのであった。
「風呂入りたいよな」
「ああ」
「そう言えば風呂もな」
「全然入ってないよな」
このことも言い合うのだった。
「何日入ってない？」
「さあ」
「もう忘れたぜ」
こんな有様だった。とかく何日も雪だけを見てその中を進んでいるだけなのだった。
それで愚痴も出る。しかしそれでも見られるのは相変わらず雪の世界ばかりだ。ぼやいてもどうしようもないものがそこにはあった。
「けれど汗もかかないからな」
「寒いからな、何せ」
何といってもこれであった。
「汗もかかないし」
「来る日も来る日も雪か」
「いい加減に嫌になってきたな」
そう言ってもやはり見えるのは雪だけである。他には何もなかった。
「なあ犬達何でこんなに元気なんだ？」
「そりゃあれだろ。犬は喜びってな」
「雪が好きか」
「そうなんだろ」
日本の童謡の話もするのだった。
「おまけにあれだろ？狼の血を引いていてロシア生まれの連中だからな」

「別に雪はどうってことないか」
「きっとそうなんだろ」
そしてこんな話をする。
「やれやれ。喜ぶのは犬だけか、全く」
「馬だと流石に無理だしな」
「雪の中はな」
馬は雪を進むのに向いてはいない。だからロシアのこの辺りでは馬を使う人間は非常に少ないのである。大抵がこうした犬やムースの橇なのだ。
「犬と俺達の楽しい旅」
「そういうことにしとくか」
「そうしとくか」
最後には開き直るのだった。そうしてそのまま進み続ける。ある程度行ったところで全員にカミュが告げてきた。
「よし、一時休憩だ」
「了解」
「わかりました」
カミュの言葉を受けて橇を一斉に止める。犬達も動きを止めた。
「それじゃあ昼飯ですね」
「いつもの燻製と黒パンと」
「あとザワークラフトですね」
「何か全然変わらないですけれど、これも」
「仕方のないことだ」
カミュはここでも不満の言葉を出す青銅の者達に告げた。

第五十話　雪原の中でその二

「我々は旅行に来たのではない」
「ええ、わかってますよ」
「それはね」
わかっていてもなのだった。
「けれど。何ていいますかね」
「食事まで同じものばかりっていうのは」
「しかも三度毎日」
全部同じなのだった。
「飲むのはお茶かウォッカばかりですし」
「これも全然変わらないですからね」
「けれどザワークラフトって」
「ああ、これな」
その中でザワークラフトの話もするのだった。
「これ持って来ましたけれど」
「中々美味いですよね」
「カミュ様これ絶対持って行くって言ってましたけれど」
これを持って行くように言ったのは他ならぬカミュであったのだ。
「何でですか？」
「何でザワークラフトを」
「壊血病だ」
ここでカミュが出したのはこの病気の名前であった。
「壊血病を防ぐ為だ」
「壊血病っていうとあの」
「歯茎とかが腫れて足もむくんでくるっていう」
「それを防ぐ為だ」
だからだというのである。
「だからザワークラフトを持って来させたのだ」

「だからですか」
「それでこれを」
「ザワークラフトにはビタミンが豊富にある」
カミュはこのことも知っていたのであった。
「そして酢に漬けてあるからそれが破壊されることもない」
「ああ、そうですね」
「キャベツの酢漬けですしね、これ」
このことに青銅の者達も気付いたのだった。
「だからですか。それで持って来た」
「そういうわけですか」
「味の関係もあるが」
それもあるというのである。
「パンや燻製ばかりだとだ」
「ええ、飽きますね」
「確かに」
皆このことにはすぐに頷くことができた。
「やっぱり野菜っ気がないと」
「困りますね。それに酸っぱいのも」
「それも考えて持って来た」
そこまで考えているカミュだった。
「ザワークラフトもな」
「成程、それ考えると凄いですね」
「この組み合わせは」
皆雪の上で立ち止まったうえでそのうえでそれぞれ食べている。
その中でザワークラフトも食べながら話をするのであった。その中で話がふと変わった。
「それで犬達ですけれど」
「ずっとこのままですか」
「このままとは？」
「ですから。ずっと全部に橇曳かせるんですか？」

「どうするんですか？その辺りは」
「そのつもりだ」
すぐにこう答えるカミュだった。
「それがどうかしたのか」
「数は減らさないんですか」
「そっちは」
「何故減らす必要がある」
そう言われても全く言葉を変えることのないカミュだった。
「犬の数を。何故だ」
「ですから。食うものも食って荷物も減っていますし」
「その分犬が必要ならなくなっていませんか？」
「いや、全くそうは思わない」
しかしカミュはこう青銅の者達に言葉を返すのだった。

第五十話　雪原の中でその三

「全くな」
「全くですか」
「じゃあ本当に犬達はこのまま全部で」
「我々はアムンゼン探検隊とはまた違うのだ」
彼はここで南極点に到達したその偉大な探検家の名前を出したのだった。南極点に向かう際に犬橇を使ったことで有名である。
「彼等とはな」
「やっぱり御存知ですか」
「あの探検隊のことを」
「そのことを言っているのだな」
カミュは既に彼等が何を言いたいのか読んでいるのだった。
「その通りだな」
「はい、そうです」
「その通りです」
すぐにこう答える彼等だった。やはりそれを考えていたのである。
「その様に数を減らさないのですね」
「そのままですか、やはり」
「そうだ。減らしはしない」
また答えるカミュだった。
「このままで目的地まで行く」
「そして帰りもですね」
「行かれると」
「犬達は一匹も減らさずに」
青銅の者達はそれぞれカミュに問うのだった。
「じゃあそれでですね」
「行きますか」
「それでいいのだな」

カミュは今の彼等の言葉を納得したものだと認識した。
「それで」
「はい、カミュ様がそう御考えなら」
「俺達に別に反論はありません」
「そういうことです」
にこりと笑ってカミュに答える青銅の者達だった。
「それに俺達は探検隊じゃないですからね」
「聖闘士だからですね」
「それならですよ」
こう口々に言うのであった。
「別に犬を減らしていくことはないですね」
「そういえば犬の分の食料も」
「十二分に持って来た」
そちらも用意してきたカミュなのだった。
「既にな」
「じゃあ何の問題もありませんね」
「犬達にも」
「そういうことだ。犬達も私達もこのまま行く」
カミュのこの考えはまさに不変であった。
「わかったな」
「ええ、聖闘士として」
「行きましょう」
にこりと笑って述べる彼等であった。
「さて、先はまだありますけれど」
「この連中にはお世話になっていきますか」
「そうだな」
にこりと笑って述べていく彼等であった。
「飯も食べ終わりましたしね」
「また行きますか」
「どうします？カミュ様」

「いや」
しかしここでカミュは先に行こうとはしなかった。
「それは少し待ってくれ」
「待てっていいますと」
「何かあるんですか？」
「先程飽きてきたと言っていたな」
その言葉をはっきりと覚えていたカミュなのだった。
「そうだったな。違うか」
「え、ええまあ」
「それはその通りですけれど」
青銅の者達もそのことは認めて幾分申し訳なさそうに応える。

第五十話　雪原の中でその四

「ちょっとした愚痴ですし」
「気にしないで下さい」
「申し訳ありませんでした」
「いや」
しかしカミュはまた言うのだった。
「ここはだ」
「ここはっていいますと」
「オルフェ」
「はい」
カミュはオルフェに声をかける。するとオルフェはすぐにその言葉に応えた。
「それでは」
「わかりました」
それだけでもうわかったようだった。
「早速奏でさせて頂きます」
「えっ、カミュ様オルフェのですか」
「オルフェの音楽をここで」
「そうだ。それを奏でる」
青銅の者達に対して述べるのだった。
「それでいいな」
「は、はあ」
「何と」
カミュの今の言葉に驚きの声をあげる青銅の者達だった。
「あのオルフェの竪琴を俺達にですか」
「本当に宜しいのですか？あの、その」
「俺達がって」
「何を謙遜する必要がある」

カミュは申し訳なさそうに言ってきた彼等に対して言うのだった。
「何かそうしなければならない理由があるのか」
「いえ、まあそれは別に」
「ないですけれど」
そう言われるとこう返すのだった。
「けれど何ていうか」
「俺達みたいなのがって」
「本当に」
「誰であろうとも」
オルフェ自身の言葉である。
「私の竪琴は聴くことはできる」
「誰でもって」
「いいのかな、いや本当に」
「オルフェは人を分け隔てすることはない」
カミュがこう彼等に告げるのだった。
「だからいいのだ」
「そういうものなんですか」
「それじゃあ」
「聴くのだ」
あらためてまた告げるカミュだった。
「喜んでな」
「じゃあまあそういうことなら」
「御言葉に甘えて」
彼等もようやく頷いた。ここでようやくだった。
「じゃあオルフェ」
「頼むぜ」
「それではだ」
早速その手に竪琴を持ったオルフェだった。そのうえで奏ではじめる。その音は。
「すげえ」

「これが琴座のオルフェの竪琴か」
「噂には聞いていたけれどな」
「こんなのだったのかよ」
青銅の四人も思わず呆然となる程だった。オルフェの竪琴はそこまで素晴らしかったのだ。
「いや、聴いてるとな」
「これまで色々愚痴言っていたのが馬鹿らしくなるな」
「全くだ」
そういう気持ちになるのだった。
「まるであのギリシア神話のな」
「ああ、オルフェウス」
「それだな」
ここまで称えられるのだった。ギリシア神話にその名前を残る伝説の英雄の一人だ。
「その竪琴の音ってこんなんだったんだな」
「そうだろうな」
「何処まで凄いんだよ」
彼等は口々に言うのだった。

第五十話　雪原の中でその五

「ではこれを聴いてだ」
「はい」
「力も出て来ました」
優れた音楽は人に活気を与える。それもあったのだ。
「じゃあオルフェ、これからな」
「一気に北まで行くか」
「ああ、そうしようぜ」
「今からな」
「いや、待て」
しかしここでもう一人の白銀聖闘士であるバベルが彼等に告げるのだった。
「別に焦ることはない」
「焦ることはって」
「っていうとまだ何かあるのかい？」
「飯も食ったし元気も出たってのによ」
「見るのだ」
ここで彼が指差したのは。聖闘士ではなく他の仲間達だった。彼等は。
「あれっ、この連中も聴いてたのかよ」
「犬も音楽わかるのかよ」
「まさかとは思うけれどよ」
「ケルベロスを思い出すのだ」
カミュはここでそのオルフェウスが眠らせた地獄の番犬のことを話した。
「ケルベロスをな」
「そういえば前のベリアルの幻術もケルベロスだったな」
「ああ、そうだったな」

彼等はここでこのことを思い出すのだった。
「あいつも一応犬だし」
「それなら」
確かに三つの首を持ち首に無数の蛇を生やし尾も蛇でありおまけに毒まで持っているがそれでもケルベロスは犬なのにハ間違いないのだ。
「この連中が聴き惚れても当然か」
「そうなるな」
「そういうことだ。この連中にも聴かせてやれ」
またこう述べるバベルだった。
「最後までな」
「ええ、それじゃあ」
「ここは」
彼等もそれで微笑むのだった。こうして彼等にもオルフェの竪琴を心ゆくまで聴かせる。それが終わってからゆるりと進みはじめたのだった。
それからの旅は気持ちのいいものだった。オルフェの音楽がそうさせた。そしてまたかなり進んだその時に。周りに林が出て来たのだった。
「林！？」
「何か別のものが出て来ましたね」
「そうだな」
青銅の者達はその木々を見てそれぞれ言う。その木々はどれも雪で白く化粧されていた。
「何か出て来そうだな」
「警戒しておくか」
「ああ」
こう言い合い警戒の念を抱いた。そしてカミュも言うのだった。
「ここだな」
「ここ！？」

「じゃあやっぱり」
「そうだ。来る」
カミュはまた言った。
「ここで来る」
「じゃあ今度こそ俺が」
「いや、俺だ」
「俺が行く」
それぞれ戦う用意をしようとする。しかしここでもカミュは言うのだった。
「いや、今回も私にやらせてもらう」
「えっ、ですが」
「今回もっていうのは」
青銅の者達はそれを聞いていささかいぶかしむ顔になってしまった。
「幾ら何でも俺達にやらせてもらわないと」
「最近全然仕事してないですし」
「いいのだ」
だがカミュはそれをいいとするのだった。あえて彼等に告げてだ。
「また罠が来るだろうしな」
「罠ですか」
「また仕掛けて来ますか」
「そうだ。来る」
それをもう読んでいるのだった。

第五十話　雪原の中でその六

「必ずな」
「あのベリアルも働き者ですねえ」
「確か魔神の中で一番怠け者だったんじゃないんですか？」
「そうだよな」
彼等もベリアルのことは知っていた。魔神の中で最も怠惰な存在とされているのがベリアルなのだ。
「それで何でこんなに働くんだ？」
「何でなんだ？」
「ベリアルとはそうした魔神だ」
「そうした魔神っていいますと」
「どういうことですか？」
「何に対して怠惰かだ」
カミュはこう言うのであった。
「何に対して怠惰かというとだ」
「何に対してですか？」
「アーレスに対するものでないことには怠惰なのだ」
その場合はというのであった。
「だがアーレスの為になるならばだ」
「勤勉なのですか」
「そういうことですね」
「その通りだ。ベリアルはそうした意味で怠惰であり」
カミュはさらに述べる。
「そして勤勉なのだ」
「つまり俺達を倒す為には勤勉ってわけですか」
「わかりやすいですね」
「そのわかりやすい魔神が何を仕掛けて来るかですね」
彼等は口々に言うのだった。

「さて、どうしてきますかね」
「ベリアルは」
「既に何かを企んでいるだろう」
カミュはもうそれは察していたのだった。
「必ずな」
「そうですね。前もそうでしたし」
「雑兵共を送ってそれと同時でしたし」
そのことも確かめ合う彼等だった。
「じゃあ何時何を仕掛けてきても」
「対応できるように」
「心構えはしておきますか」
「そういうことだ。それではだ」
「はい」
「また。行きましょう」
ここまで話したうえでカミュの言葉に頷く。こうして彼等は戦う気構えを再び結ぶのだった。
聖闘士達がレダについて警戒を持ったその時。レダは雪原にいた。そこで後ろに狂闘士達を従えそのうえで立っているのであった。
その彼に対して。狂闘士達が言うのだった。
「ではレダ様」
「またインプ達を送ります」
「それで宜しいですね」
「今こそその機会だ」
彼等の言葉にこう返すレダだった。
「今こそな」
「そうですか。それでは」
「今から送らせて頂きます」
「それで」
「頼むぞ。ではすぐにな」
また彼等に述べるのだった。

「向かわせるのだ」
「そしてです」
「インプ達の他には誰が」
「誰が行くのでしょうか」
「御前達はここで待っているのだ」
名乗り出ようとする彼等を制する形になった。
「ここでな。待っているのだ」
「何とっ、レダ様がですか」
「レダ様御自らが」
「また仕掛ける」
楽しむような笑みを浮かべての言葉であった。
「あの者達にな」
「罠をですね」
「再び聖闘士達に」
「そういうことだ。とりわけ」
レダの脳裏にある男の顔が思い浮かんだ。それは。

第五十話　雪原の中でその七

「アクエリアスに対してな」
「あのアクエリアスですか」
「あの男に対して」
「ここでの戦いは私とアクエリアスの戦いでもある」
それでもあるというのだった。彼の言葉は遠くを見ていた。
「あの男を負かせてみせよう」
「アクエリアスのカミュ」
「思った以上の切れ者ですな」
「確かに」
このことは狂闘士達も嫌になるまでにわかっていることだった。
そう、まさに嫌になるまでだ。
「あの者を出し抜かないならば」
「我等にとっても」
「黄金聖闘士は全てそうだがな」
レダは彼だけではないとも話した。
「全て。我々に対する最大の障壁だ」
「瞬く間にインプ達を全て氷漬けにしましたし」
「あの実力を見ればその通りです」
「黄金聖闘士は」
「そして我々の前にいるのはだ」
レダの言葉はさらに続くのだった。
「あのアクエリアスというわけだ」
「はい」
「だからこそですね」
「そういうことだ。それではだ」
一歩前に出たレダであった。そのうえで後ろにいる同志達に対して振り向かないままで告げるのだった。

「いない間は頼む」
「わかりました」
「それでは」
彼等も今のレダの言葉に頷いて答えたのだった。
「後はお任せ下さい」
「留守の間は」
「それではな」
そのまま前に進むレダだった。そしてその背に何かが宿った。
一瞬だったがそれは確かに宿った。残る狂闘士達はそれを見て言うのだった。
「どうやらレダ様は」
「ああ」
「そうだな」
「本気だ」
彼等はそれを見て確信したのである。
「間違いなくな」
「アクエリアス。ならば」
そしてそのうえで話を続ける。
「倒されるな」
「他の聖闘士達もな」
「八大公」
その彼の位置だ。狂闘士達の中で最高位の。
「その称号は伊達ではないか」
「その強さもまた」
「我等にとってはこの上なく頼もしく」
彼等にとってはまさしくそういった存在なのだ。八大公とは。
「そして敵にとっては」
「これ以上はない恐怖」
「それこそが八大公だ」
こういうことだった。

「その力、発揮されるというのだな」
「このロシアの大地で」
白い雪の世界に何か黒いものが漂おうとしていた。それはただ黒いだけではなかった。白を全て溶かしてしまうような、そうした黒さであった。

第五十話　　完

２００９・９・１

第五十一話　黒い炎その一

黒い炎

「それではベリアルというのは」
「そうした力を持っているのですね」
「そうだ」
また教皇の間においてシオンが黄金聖闘士達に対して告げていた。
黄金聖闘士達は今日もまた彼の前に片膝をつき集っているのだった。
「炎を使うのだ」
「炎といいますと」
「カミュの逆ですか」
シュラとアフロディーテはそれを聞いてすぐに述べた。
「そうなりますね」
「まさに」
「そうだ。両者はまさに対極にある」
シオンは今度はカミュも指し示して言うのだった。
「まさにな」
「へっ、それでもカミュなら負けませんよ」
「確かに」
デスマスクとアルデバランがそれぞれ言ってきた。
「あれで存外しぶとい奴ですしね」
「倒されることはありません」
「その通りだ。おそらくカミュは敗れはしない」
それはシオンもわかっているようだった。ここでこうした言葉を出せるというのはそうしたことを見ているからに他ならないことだった。
「何があろうともな」
「ですが教皇」
「勝利は」

アイオリアとミロが危惧するのはそちらだった。
「どうなるでしょうか」
「勝たなければ。この戦いは」
「いや、それはまだいい」
だがこの二人に対してアイオロスが告げる。
「勝つのは今でなくともいい」
「今ではない？」
「それは何故」
「今はお互いのことがわかっていない」
いぶかしむ声を出す二人に今度はこう告げるアイオロスだった。
「我々にしろあちらにしろな。まだよくわかってはいない」
「その通りですね」
アイオロスの今の言葉に応えて頷いたのはムウだった。
「我々は彼等狂闘士達のことをよく知りません」
「敵を知り己を知れば百戦危うからずという」
アイオロスは今度は中国の古典にある言葉を出してみせた。
「そうした状況で戦ってもだ。完全な料理は得られないものだ」
「アイオロスの言う通りだ」
シオンはアイオロスが正しいとした。
「今は生き残ればそれでいいのだ」
「カミュがですか」
「それで帰って来ればいいと」
「今まで出陣した者も同じだが」
ここでは先に出陣した四人のことも話に出してみせる。
「私はあれでいいと思っているのだ」
「左様ですか」
アルデバランがシオンの言葉を聞いて重厚な声を出した。
「我々が生きて帰れただけで」
「俺はかなり不満ですがね」
デスマスクはあえてこう言ってみせてきた。

「あの蝿野郎を潰しておきたかったですがね」
「俺もまた」
それはシュラも同じなのだった。
「ベール。あの時に倒しておけば」
「全くです。あれは私の不覚でした」
アフロディーテも二人と同じ言葉を出す。
「アスタロトは今後我々の禍根になりかねません」
「だが御前達もわかっていた筈だ」
シオンはその悔しがるような言葉を出した三人にも言葉をかけた。
「あの場所では彼等は決して倒せはしないということはな」
「残念ですけれどね」
「確かに」
「その通りです」
そして三人もまた。教皇である彼の言葉に頷くのだった。だがここでは彼が教皇だからその言葉に頷いたのではなかった。事実に対して頷いたのである。

第五十一話　黒い炎その二

「あそこじゃまずは」
「お互いその技がわかりませんでした」
「そうした状況では」
「倒せはしない」
また言うシオンだった。
「あれだけの実力の持ち主ならばな」
「では教皇」
これまで沈黙を守っていたシャカがここで口を開いたのだった。
そのうえでシオンに対して問う。
「今現在の八大公達との戦いは」
「できるならばやはり倒しておきたい」
こうした希望は言う。
「だが。それは実際にはだ」
「難しいからですか」
「だからこそ」
「そうだ。相手の力を知りそのうえで御前達が生きて帰ればいい」
それでいいとするのだった。
「それでだ」
「あまりそれは積極的とは言えませんが」
シャカはあえてシオンに対して反論するように言ってみせた。
「積極的に攻めるのもまた方法だと思いますが」
「おそらく今の戦いには何かがある」
だがシオンはこうそのシャカの言葉に返すのだった。
「トラキアの方で何か企んでいるな」
「トラキアから」
「それは一体」
シャカとアイオロス以外の黄金聖闘士達がトラキアと聞いて多少

ざわめき立った。言うまでもなくアーレス、そして狂闘士達の本拠地だ。アテネにある聖域と今現在対峙する形になっているのだ。
「企んでいるのですか」
「今の戦いに」
「まだ彼等の神は姿を現わしてはいない」
シオンはこのことを彼等に告げた。
「まだな」
「今いるのはエリスだけ」
「そういうことですか」
「アーレスがいない」
アイオリアがこの名前を今出した。
「そういうことですね」
「アーレスだけではないのかも知れない」
だがシオンはこうも言うのだった。
「若しやな」
「アーレスだけではない」
「まだ他に神々が」
「気をつけるのだ」
シオンは今己の前に集っている黄金聖闘士全員に告げた。
「まだトラキアについてはわかっていないことが多い」
「まだですか」
「あの連中については」
「先の聖戦は確かに激しいものだった」
この場合はアーレスとの、という意味である。聖域は過去ハーデスやポセイドンだけでなく彼等とも激しい戦いを繰り広げてきているのである。そのことを言っているのだ。
「だが。それでも彼等の全てはわかっていないのだ」
「確かに」
彼の今の言葉に頷いたのはムウだった。
「あくまで魔神達の数位です」

「その力もあまりわかってはいない」
しかもそうなのだった。彼等は知らないのだ。
「それは向こうもだがな」
「ということは」
アイオロスはそれを聞いてシオンの言葉を確信ことになった。
「我等はこのまま暫くは睨み合うように戦っていくだけなのですね」
「だがそれはそのまま終わりではない」
シオンはここでこうも述べたのだった。
「そのままではな」
「というとこの後で」
「戦いが動くと」
「永遠に止まったままのものなぞない」
シオンはまたその言葉を変えてみせた。
「何時かは動くものだ」
「ではその時こそ」
「我等は」
「そうだ。その時にこそだ」
あらためて黄金聖闘士達に告げた。

第五十一話　黒い炎その三

「頼むぞ」
「はい、わかりました」
「それでは」
その言葉に従いそのうえで彼等は一斉に一礼した。そうしてそのうえでシオンの前から立ち去った。お互いにまずはそれで別れたのだった。
シオンは黄金聖闘士達を去らせてから一人になった。一人になった彼はすぐに人を呼んだ。
「誰かいるか」
「はい」
「教皇、御呼びでしょうか」
すぐに彼の従者達が来た。畏まって一礼してから述べてきた。
「お食事でしょうか」
「それとも御入浴でしょうか」
「いや、どちらでもない」
だがシオンはその双方をまず退けたのだった。
「どちらでもな」
「といいますと」
「一体何を」
「アテネに出る」
彼はこう従者達に告げた。
「そして街で人々に顔を見せるぞ」
「はい、わかりました」
「それでは」
「共の者はだ」
ここで少し言葉を置いた。
「別にいいのだが」

「いえ、それはいきません」
「それは」
だが従者達はそれを一斉に止めるのだった。
「私が参ります」
「いえ、私が」
口々にこう名乗り出る。我が我がと彼の共を申し出るのだった。
「是非共御願いします」
「御供させて下さい」
「わかった」
シオンはは彼等のその申し出を受けた。そのうえでまた言うのであった。
「では皆の者に告げる」
「はい」
「今ここにいる者全て来るがいい」
こう告げるのだった。
「是非な」
「はい、それでは」
「御願いします」
こうして彼等はシオンと共にアテネの街に出た。そうしてそのうえで街でその姿を見せる。それだけで誰もがシオンを崇める声を讃える。
「教皇様万歳！」
「聖域に栄光あれ！」
「アテナは常に貴方達を見ています」
シオンはその彼等に対して告げるのだった。
「そのことをよく心に留めておいて下さい」
さながらローマ教皇のようであった。聖域の教皇はまさに絶対にして聖なる存在だった。それだけのものが備わっているということだった。
だがその実態は誰も知らない。そうした場所だった。そしてその

真の義務も。誰も知ることはないのだった。無論今コムで行われていることも。

カミュ達は相変わらず北へと進んでいた。その途中でカミュは言った。

「また来るな」

「そうですか」

「ここで出て来るのですね」

他の聖闘士達は今のカミュの言葉を聞いて声をあげた。

「そろそろとは思っていましたけれど」

「来ましたか」

「そうだ。来た」

カミュはまた言った。

「それではだ」

「ええ」

「わかりました」

彼等はすぐに犬橇を止めた。カミュはすぐに聖衣を身に着けた。

「よし、戦闘用意ですね」

「それじゃあ」

「御前達はそのままでいい」

カミュは今回も自ら前に出ようとしてきた。

第五十一話　黒い炎その四

「待機しているのだ、ここでな」
「えっ、またですか」
「折角今度こそ俺達の出番だって思ったんですけれどね」
「安心するのだ。御前達の出番はいずれある」
カミュは不平を漏らす彼等にこう告げるのだった。
「いずれな」
「じゃあ今はってことですね」
「待機ってことで」
「来ているのはインプ達ではない」
カミュは既にそのことを察しているのだった。
「来ているな」
「っていうとあの狂闘士の連中ですか？」
「やれやれ、またやって来たんですね」
「連中も好きですね」
「そうだな。しかも」
カミュはここでまた言うのだった。
「これはあの男だ」
「あの男といいますと」
「誰なんですか？」
「それは」
今その男の名を言おうとした。しかしそれよりも前に彼等が姿を現わしてきたのだった。
「覚悟しろ聖闘士達よ！」
「今度こそ貴様等の最期だ！」
インプ達が姿を現わしてきた。彼等は正面からその数を頼みに一斉に襲い掛かってきた。
「死ね！」

「これでな！」
「来たか」
カミュは彼等の姿を認めてあらためて一言呟いたのだった。
「それならばだ」
「アクエリアス！とりわけ貴様だ！」
「仲間達の仇！」
彼等の敵意と憎悪はとりわけカミュに向けられていた。
「ここで倒す！」
「いいか！」
「来るのだ」
カミュは既に聖衣を来ている。マントも身に着けそのうえで彼等と正面から向かい合っていた。
「このカミュのもう一つの技を見せよう」
「もう一つの技だと！？」
「それは一体」
「ダイアモンドダスト！」
左手の拳を前に突き出し叫んだ。すると氷の嵐が一気に起き。
「こ、これは！」
「このロシアの大地をも凍らすばかりの！」
「そうだ。嵐だ」
カミュはその氷の嵐を放ったうえで彼等に告げるのだった。
「このアクエリアスのカミュの技の一つだ」
「あの氷の技だけではなかったというのか」
「まだ持っていたのか」
「言っておこう」
ここでカミュはさらに言うのだった。
「黄金聖闘士の殆どは持っている技は一つだけではない」
「何っ！？」
「一つだけではないというのか」
「そうだ。このカミュもまた然り」

自分自身もだというのである。
「フリージングコフィンの他にもこうした技も持っている」
「氷の嵐を放てるというのか」
「貴様は」
「その通りだ。そして」
カミュの声が強くなった。
「この氷の嵐、貴様等に防げるか」
「何っ、言わせておけば！」
「この程度の嵐で我等が！」
「無駄だ」
カミュはなおも突き進もうとする彼等に対して告げた。

第五十一話　黒い炎その五

「貴様等がそれ以上先に進むことはできない」
「戯言を！」
「この程度の嵐で我等が！」
「見よ」
しかしカミュはここでまた言うのだった。
「この嵐でだ。貴様等の脚がまず」
「な、何っ！？これは！」
「我等の脚が！」
そうなのだった。冷気により凍結してしまい。そのうえで雪原に縛り付けられてしまっていたのである。恐るべき冷気であった。
「こ、これがダイアモンドダストだというのか」
「その冷気で我等の脚を」
「そしてだ」
カミュはさらに告げてきた。
「この冷気はさらに貴様等を覆っていく」
「くっ、おのれ・・・・・」
「冷気が上半身にまで・・・・・」
「これでは」
「眠るがいい」
そしてカミュは最後にこう告げた。
「この雪原で安らかにな」
最後に残ったのはインプ達の数だけの氷の彫像だった。彼等はまたしてもカミュの手によって氷の中に閉じ込められてしまったのであった。
だが戦いが終わってもカミュの表情は鋭いままであった。その鋭い表情でまだ姿を現わしていないその男に対して告げるのであった。
「貴様が出てもいい頃になった」

「ふふふ、その様だな」
「その声は!?」
「貴様は!」
カミュの後ろにいる青銅の者達はその声でようやくわかったのだった。
「ベリアルのレダ!」
「やはり貴様か!」
「どうやら私が来ることは予測していたようだな」
そのレダは聖闘士達の前に出て来た。そうしてそのうえで不遜な笑みを浮かべて告げてきたのであった。
「既にか」
「貴様ならば来ると思っていた」
カミュは普段通り落ち着き払った声でレダに返すのだった。
「必ずな」
「そうか。必ずか」
「最初は予測しただけだった」
カミュはまたレダに対して告げる。
「しかしだ」
「しかし?」
「小宇宙もまた感じた」
それもだというのである。
「貴様のその疑いようもない禍々しい小宇宙をな」
「黄金聖闘士が相手では私も小宇宙を隠せるものではないということか」
「それとも隠すつもりだったのか」
こうも返すカミュだった。
「それだけ禍々しい強大な小宇宙を放っておいて」
「隠しておくつもりだったのは事実だ」
だがレダはこう言うのだった。
「それはな」

「しかし私に対しては無駄なことだ」
カミュの声もまた有無を言わせぬ響きがそこにあった。
「逆に考えて私が隠れていても貴様は見つけ出すな」
「私に対してはどの様な謀も通じぬ」
レダは口の右端を歪めさせてそれを笑みとして言ってみせた。
「そしてアクエリアス、貴様程の小宇宙ならばすぐに察する」
「それと同じだ。だからこそ私にもわかったのだ」
「互いに伯仲した実力者同士だからこそ察することができる」
こうした表現にもしてみせるレダであった。
「そういうことだな」
「そういうことになる。それではだ」
カミュの言葉に剣が宿った。それはまさに氷の剣だった。
「ベリアルよ、この度は何を仕掛けてきた」
「何を、か」
「貴様は謀を巡らす男」
既にのこのこともわかっているということだった。

第五十一話　黒い炎その六

「それで何かを仕掛けてこない筈がない」
「そうだ、あの時のことは忘れてねえぞ！」
「よくもはめようとしてくれたな！」
ここで青銅の者達がレダに対して叫んだ。
「今度何かをしてくれてもな！」
「俺達には通じねえからな！」
「もう幻術なんてな！」
「意味がねえからな！」
「安心しろ」
しかしレダはその笑みを悠然としたものに変えて返すのだった。
「このベリアルのレダ、同じ謀は同じ相手には使わぬ」
「！？というと」
「一体何を」
バベルとオルフェは今のレダの言葉にすぐに身構えた。
「仕掛けてくるというのだ」
「ここでは」
「見るのだ」
その悠然とした笑みのまま再び言ってきた。
「このベリアルのレダの新たな罠をな」
「！？何だこりゃ」
「雪か？」
ここで不意に上から何か降ってきた。それは。
「雪！？」
「いや、違うぞこれは」
すぐにわかった。何故ならその雪は。白ではなく漆黒だったからだ。間違いなくそれは雪などではなかった。
「黒い雪だと！？」

「違う、雪じゃない！」
聖闘士達は柔らかに舞い降りてくるその漆黒のものを見て一斉に身構えた。
「これは一体・・・・・・・」
「つうっ！！」
その漆黒の何かが触れるとだった。焼け付くような痛みが走った。
「これは・・・・・・」
「雪じゃねえ」
「何だこりゃ」
「炎か」
カミュはその黒い何かを横目で見たうえで述べるのだった。
「これは」
「炎って」
「まさか。黒いですよ
「そんな炎って」
「いや、ある」
だがここでカミュはまた言った。それはあるのだと。
「これこそが魔神の真の炎だ」
「魔神の炎」
「これがですか」
「ほう、わかったのだな」
レダがカミュのその言葉に微笑んで返してみせてきた。
「私のこの黒きものが何かを」
「ベリアルは炎の魔神」
カミュはそのレダを見つつ述べた。目は強い光を放っている。
「ならば。使うのもそれしかあるまい」
「確かに。ベリアルといえば」
「その姿は炎に包まれた戦車に乗る堕天使」
ここでまたバベルとオルフェが言った。
「それを考えればこの漆黒のものが炎であるのも」

「当然ですね」
「その通りだな、ベリアルよ」
「隠すつもりは最初からない」
レダの不遜な笑みは相変わらずだった。
「その通りだ。これこそが私の炎だ」
「黒い炎を出しやがるとは」
「何でこんなことができるんだ？」
青銅の者達はその黒い炎を実際にその目で見ても信じられなかった。何故なら炎というものは赤や青、そして白いものと思っていたからだ。これは常識からである。
「今アクエリアスが言った筈だ」
「何っ、じゃああれかよ」
「これが魔神の炎だっていうのかよ」
「その通りだ」
また青銅の者達に話すレダだった。その不遜さは声にも出ていた。

第五十一話　黒い炎その七

「アーレス様が率いる軍団には火の軍団と炎の軍団がある」
「火と炎」
「その二つが」
「そうだ。その下には多くの炎を操る魔神達がいる」
今度は白銀の者達に対して述べるのだった。
「だが。私以外に黒き炎を操る者はいない」
「それができるのは貴様だけということか」
「黒き炎、それこそが我等狂闘士の炎」
言葉は断言であった。
「アーレス様の炎なのだ」
「そしてそれを使えるのは貴様だけか」
「如何にも。八大公の一人このベリアルのレダだけだ」
また言うレダだった。
「この黒き炎、貴様等に敗れるか」
「生憎だが言っておこう」
カミュは絶対の自信を見せるレダに対して言葉を返した。
「私は水と氷を使う。炎を使うことはできない」
「それはもう知っているが」
「まだ言葉は終わってはいない」
カミュはレダのその不遜を遮ってさえみせてきた。
「だが」
「だが？何だというのだ？」
「炎は水に敗れるもの」
それを言うのであった。
「それを今言っておこう」
「面白い。では貴様が私の炎を止めるというのだな」
「その通りだ」

まさにそれだというのである。
「貴様のその炎、このアクエリアスのカミュが消してみせよう」
「私の炎は全てを焼き尽くす」
レダも引こうとしない。
「その私の炎を消せるというのだな」
「貴様のその黒い炎が全てを焼き尽くすというのならば」
カミュも受けていた。しかも正面から。
「私の氷も全てを凍て付かせるのだ」
「面白いそれではだ」
レダの小宇宙が今燃え上がった。
「見せてもらおうか、貴様のその氷を」
「よかろう」
カミュは構えだした。その両手を今。
レダもまた同じであった。彼等は今対峙していた。黄金聖闘士と八大公の闘いが今ここで幕を開けようとしているのであった。

第五十一話　　完

２００９・９・５

第五十二話　地獄の猟犬その一

地獄の猟犬

雪原の中で対峙するカミュとレダ。その中も黒い炎が降り続けている。

しかしその炎は今は効果を見せてはいなかった。何故なら。

「消してくれているな」

「軽いものだ」

カミュがレダのその言葉に返した。

「この程度のことはな」

「何でもないということか」

「見るのだ」

見れば聖闘士達の周りに雪を漂わせていた。その白い雪と黒い炎が触れ合うとそれで相殺され互いに消えてしまっているのであった。

「この雪をな」

「その雪も貴様のものということか」

「言った筈だ。私は水と氷を自在に操れるとな」

彼はこのことをここでも言うのであった。

「この程度のことは造作もないことだ」

「では。この炎は意味がないということか」

カミュのその雪を見てすぐに判断を下したレダだった。すると。

黒き炎が消えた。舞い降りるものがなくなった。瞬く間にであった。

「ではこれは止めよう」

「止めるのか」

「そうだ。そして言い忘れたことがある」

今度はこうも言ってきたレダだった。

「今度の罠だが」

「罠か」

「それは私自身だ」
こう言うのである。
「この私自身がだ」
「それはどういうことだ？」
「こういうことだ」
この言葉と共にだった。聖闘士達を囲む様にして。異形の者達が姿を現わしてきたのであった。
「な、何だ！？」
「何だこの連中は」
聖闘士達はその異形の者達を見て声をあげずにはいられなかった。
「狼！？」
「いや、違う」
狼ではないことはすぐにわかった。
「黒いぞ」
「しかも燃えている」
「まさか」
「そうだ。そのまさかだ」
またしてもレダの不敵な笑みを見ることになった聖闘士であった。そしてその笑みが何を意味するものかということもまた最早明らかであった。
「この猟犬達は私が作り出した猟犬達だ」
「その黒い炎でだな」
「如何にも。名付けてヘルハウンド」
こう言うのである。
「我が黒き炎によって作り出されたアーレス様の猟犬達だ」
「ちっ、炎の猟犬かよ」
「またとんでもねえの作りやがるぜ」
「そしてだ」
レダの不敵な言葉は続く。
「これはただ単に炎で燃え上がっているだけではない」

「ふん、動くのだな」
「自分から」
「その通りだ。この猟犬達は皆我が分身達でもある」
今度は白銀の二人の言葉に応えるレダであった。
「私のな」
「ということはだ」
「貴様のその考えと共に動くというのだな」
「如何にも。だからこそ私の分身なのだ」
だからだというのである。
「私のな。さあ、話はここまでだ」
「来るか」
「受けよ、アテナの聖闘士達よ」
あらためて聖闘士達に告げてみせてきた。
「このベリアルのレダのヘルハウンドをな！」
「くっ、来たか！」
「その地獄の犬共がよ！」
漆黒の猛犬達が地獄の底から響く様な咆哮をあげ聖闘士達に襲い掛かる。その数も勢いも最早黒い吹雪の様であった。それが今まさに彼等を覆わんとしていた。
「くっ、ここは！」
「俺達も！」
「いや、言った筈だ」
戦おうとする他の聖闘士達をここでも止めるカミュであった。

第五十二話　地獄の猟犬その二

「ここは私に任せよとな」
「じゃあカミュ様」
「ここもですか」
「そうだ。見るのだ」
そしてまたこう告げるカミュであった。
「このアクエリアスのカミュの技をな」
「ほう、今度は何だ？」
なおも迫り来る地獄の猟犬達を繰り出しながらカミュに対して問うレダであった。
「フリージングコフィンか？それともダイアモンドダストか？」
「どちらも使えるが」
まずはこう返すカミュだった。
「しかし今はどちらも使わない」
「ほう、面白い」
それを聞いてまた笑うレダであった。
「ではそれを見せてもらおう。今の貴様の技をな」
「見るがいい。このカミュの第三の技」
カミュは静かに構えた。その左手を少し前に出す。
「この技をな」
「その技とは」
「カリツォー」
この言葉と共に左手の人差し指を少し回した。するとそれだけで今まさにカミュ達に襲い掛かろうとしていた猟犬達に氷の輪がかけられたのであった。
「ガウッ！？」
「ガッ！？」
それにかけられ動きを封じられてしまった猟犬達は空しく雪原に

落ちる。全ての猟犬達がその氷により動きを封じられてしまったのであった。
「氷の輪か」
「威力は小さいがこうして敵の動きを止めることはできる」
技を出したうえでこうレダに返すカミュであった。
「そしてだ」
「まだあるというのか」
「こうして続けて出すこともできる」
言いながらその左手の人差し指を再び回した。すると猟犬達を封じている氷の輪が二重になった。もう一度回すと三重になるそれを繰り返すと。猟犬達はその中で消えてしまったのであった。
「そしてこうなるのだ」
「氷により炎を消し去ったのか」
「そうだ。言ったな」
カミュは先程の自分の言葉をここでまた出してみせた。
「氷は炎を打ち消すとな」
「それが今だというのか」
「その通りだ。こうして貴様の炎を消した」
またしても告げるカミュであった。
「さて、次はどうするつもりだ、ベリアルよ」
「面白い。思っていた以上にな」
カミュの言葉を受けたレダの顔が悪魔的に笑った。
「貴様は私が特別に相手をするに相応しい相手の様だな」
「ではここで決着をつけるか」
「そうしたいがそういうわけにもいかぬ」
だがレダはここでの勝負は避けたのだった。
「生憎だがな」
「では次の場所でということか」
「そうだ、来い」
半ば挑発する誘いの言葉であった。

「その然るべき場所にな」
「わかった。では今はここで止めよう」
カミュも今は拳を納めたのであった。
「今はな」
「貴様との闘いがさらに楽しみになってきた」
今のレダの目は燃えていた。己のその炎で漆黒に燃えているようであった。
「だからこそ。来るのだ」
「いいだろう。行ってみせる」
カミュもまた燃えていた。だが彼のそれはさながら氷であった。氷が燃え上がっているような、そうした燃え方を見せているのであった。
「貴様のその場所にな」
「貴様の氷が勝つか私の炎が勝つか」
レダの今度の言葉は心から楽しむものであった。
「見ものだな」
そして最後にこう言って姿を消すのであった。闘いの傷跡も何処にも残っておらず猟犬達も氷の輪も全て消えている。ただ聖闘士達だけが残っていた。

第五十二話　地獄の猟犬その三

「今回も終わりましたけれど」
「何ていいますかね、あれ」
「猟犬ですね」
青銅の者達がカミュの後ろで言うのであった。
「また随分物凄いの出してきましたね」
「まあとんでもない奴だっていうのはわかっていましたけれど」
「あそこまでしますか」
口々にこう言うのであった。
「けれどカミュ様よくあれで止めましたね」
「カリツォーでしたよね、あの技」
「氷の輪は」
「そうだ。あれがカリツォーだ」
実際にそれだと答えるカミュであった。
「あのようにして使う技だ」
「何か氷っていっても色々な使い方があるんですね」
「凍らせるだけじゃないんですか」
「様々な使い方をしてこそだ」
これがカミュの言葉だった。
「氷を完全に使いこなしていると言えるのだ」
「完全にですか」
「何か俺達にはとても無理っぽいですね」
「最初から無理と思っていては何もできはしない」
「まあそうですけれどね」
「それは」
今のカミュの言葉には反論できない彼等であった。
「まずは努力ですか」
「結局のところは」

「その通りだ」
「それなくしては何もできはしない」
白銀の二人も青銅の者達に告げる。
「だが今はそれよりもだ」
「話を終えよう」
白銀の二人はここで話を切ってしまった。
「戦いは終わった。ならばだ」
「後は進むだけだ」
「その通りだ」
カミュもまた彼等の言葉をよしとした。これで決まりであった。
「では行くぞ」
「ええ。それじゃあ」
「わかりました」
青銅の者達も頷く。こうして彼等は再び橇に乗り道を進んでいく。
そのうえで二日後に辿り着いた雪原が台地になっている場所に。彼等はいた。
「いたか」
「来たな、聖闘士達よ」
「待ちかねていたぞ」
そこには既に狂闘士達がいた。そうしてそのうえで彼等に対して告げてきたのであった。
「貴様等の相手は我々だ」
「覚悟はいいな」
「覚悟も何よりもだ」
「御前等にやっと会えて嬉しいんだよ！」
こう狂闘士達に返すのだった。犬橇は後方に置きそのうえで聖衣を着ている。既に戦いがあることは察している様子であった。
「じゃあな。早速はじめるぜ！」
「準備体操は終わったな！」
「準備体操も何も全て整え終わっている」

「よかったな。すぐにはじめられるぞ」
狂闘士達は笑って彼等に言葉を返す。そこには当然ながらレダもいる。レダを中央に置きそのうえで横並びになって聖闘士達と対峙していた。
当然ながら聖闘士達の中にはカミュもいる。彼等もまたカミュを中心として白銀の二人が彼の左右にいる。そうしてその横に青銅の者達が配され横一列になっていた。
「それではだ。御前達も出て来るのだ」
「いいな」
「はい」
「それでは」
狂闘士達の言葉に応えると共にだ。インプ達が出て来たのだった。カミュ達を取り囲むようにしてそのうえで姿を現わしてきていた。
「聖闘士達よ仲間達の仇だ！」
「ここで貴様等を全て倒す！」
こう言いながら全員槍を持ち向かおうとする。バベルとオルフェはそれを見てカミュに対して告げるのであった。

第五十二話　地獄の猟犬その四

「ではカミュ様」
「ここは我々が」
「止めてくれるのだな」
「はい、そうです」
「お任せ下さい」
彼等がインプの相手をするというのである。
「我等ですからカミュ様は狂闘士達の相手を」
「是非」
「そうか。わかった」
カミュは彼等の言葉を受けて静かに頷いてみせた。
「それでは。頼んだぞ」
「それに俺達もいますし」
「安心して下さい」
「そうそう」
「俺達もやらせてもらいますよ」
青銅の者達も名乗りをあげてきた。
「ですからカミュ様は気兼ねなく」
「向かって下さい」
「それでは私は御前達の相手をさせてもらう」
カミュは一歩前に出て狂闘士達に告げた。
「さあ、何処からでもかかって来るのだ」
「貴様一人で我等十人を相手にするというのか」
「魔神の力を持つ我等を」
「不服か？」
彼に問うてきた狂闘士達に対して言い返す。
「それでは」
「見事なものだな」

カミュのその言葉を聞いて声をあげたのはここでもレダであった。
「その心意気。そうでなければ黄金聖闘士にはなれないということか」
「それだけではない」
こうも返すカミュであった。
「私の力もまたそれに見合うものだ」
「ふん、貴様一人でレダ様の御力をお借りするまでもない」
「我等が相手をしてやる」
「それでいいか」
レダ以外の九人が前に出る。そのうえでカミュに対して告げたのであった。
「九人だ。だがアクエリアスよ」
「この九人の実力、甘く見るなよ」
「我等もそれぞれ魔神の力を宿している」
彼等はそれぞれ言うのであった。
「さて、このクレーベの手で倒れるか」
「それともこのカトリの技を受けるのか」
「好きな相手を選びなさい」
「苦しまずに死なせてやろう」
「いいだろう。では九人全員で来るのだ」
カミュはその九人が全員で来ても臆してはいなかった。
「このカミュの技、ここで見せてやろう」
「待つのだ、カミュよ」
しかしここで声がした。
「御前一人で戦っては私のやることがなくなってしまう」
「もう一人来たか」
九人の後ろにいるレダがその声を聞いて述べた。
「また一人。黄金聖闘士がか」
「黄金聖闘士がもう一人!?」
「まさかそれは」

「そうだ。あの男だ」
声をあげる四人に対して答えるレダだった。
「あの男が来たか」
「貴方か」
「遅れて申し訳ない」
声はカミュの後ろからだった。そこから彼に語り掛けていた。
「ようやく間に合った」
「ここは私一人でできるが」
「無理はしないことだ」
後ろにその男が姿を現わした。ゆっくりとカミュの方に歩いてくる。
「まだ戦いは長いのだからな」
「だからだというのか」
「そうだ。ここでも全力は出すべきだ」
男はこのことは問題ないと言う。
「しかし。死すべき時ではない」
「それで無理をするなというのだな」
「その通りだ。ではカミュよ」
男はここで遂に彼の横に来たのであった。

第五十二話　地獄の猟犬その五

「私も共に闘わせてくれ。仲間としてな」
「貴方の言葉を拒む理由はない」
カミュは彼に対して一歩退いた形になった。
「その申し出。受けさせてもらおう」
「有り難い。それではだ」
サガであった。彼も今また。戦場に姿を現わしたのであった。
「やはり出て来たか、ジェミニのサガ」
「サジタリアスのアイオロスと並んで居間聖域にいる黄金聖闘士達の中で最強を謳われている男」
「貴様もまた」
「私が来ることは予期していたようだな」
サガは彼等のその言葉を聞きながら静かに言葉を返した。
「既に。その通りだな」
「如何にも」
「前の戦いのことがある」
「だからだ」
狂闘士達はそれぞれの口で彼の言葉に答えた。
「だが。それもまた好都合」
「貴様にも既に多くの同志達を倒されている」
「それならば。わかるな」
「では来るのだ」
サガはその彼等に対してまた告げてみせたのだった。
「私に対してもな」
「望むところだ」
「それではアクエリアス共々この雪原を墓場とさせてやろう」
「覚悟はいいな」
彼等はさらに前に出た。そのうえで睨み合う。レダは今の状況を

見てそのうえで判断を下したのであった。
「よし、まずは五人だ」
「五人！？」
「五人といいますと」
「アクエリアスには五人だ」
こう九人の狂闘士達に告げたのである。その右手を右に切るようにして横にやったうえで指示の言葉を出してだ。そのうえでの言葉であった。
「五人行け。そしてジェミニには四人だ」
「四人ですか」
「まずはそれだけで相手をしろ」
こう彼等に命じるのだった。
「それでいいな」
「はっ、レダ様の御言葉ならば」
「そのように」
彼等は逆らうことなくその指示を受けたのだった。そしてその指示のまま動きそれぞれカミュ、サガと対峙するのであった。戦場はこれで二つになった。
「私には五人か」
「不服だというのか？」
「我等五人では」
「いや」
カミュはその言葉は否定してみせた。言葉だけで。
「このカミュ、相手がどれだけいようがそれについて不服を言うことはない」
「そうだったな」
「先程もそうだった」
それはまさにその通りだった。カミュは己の言葉に対して嘘を言うことはなかった。そのことは紛れもなかった。彼が嘘をつくような男ではないということも。

「では我等五人がだ」
「貴様の首をあげる」
その五人から禍々しい赤い小宇宙があがった。カミュの出す黄金聖闘士の黄金の小宇宙とは全く違う、まさに狂闘士の小宇宙であった。
「まずは貴様からだ」
「そしてそのうえで聖闘士全ての首をだ」
「ならばあげてみることだ」
その禍々しい小宇宙を見てもカミュの態度は変わらない。
「今ここでな」
「相変わらずの自信か」
「その自信も切ってやる」
「この我等が」
今まさにカミュと彼等の戦いもはじまろうとしていた。そしてもう一つの戦いもまた。サガも今雪原において四人の狂闘士達と対峙しているのであった。

第五十二話　地獄の猟犬その六

こちらも今まさに激突しようとしていた。四人は同志達と同じく燃え上がる小宇宙をその全身から放っていた。戦いに燃える激しいそれを。

「ここで仇を取る」

「同志達の仇をな」

「それにより私と戦うというのだな」

憎悪の炎をその全身だけでなく目にも宿らす彼等への言葉であった。

「復讐の為に」

「知っている筈だ、狂闘士は同志の仇は何があろうとも討つ」

彼等はこのことを断言さえしてみせた。

「例え相手が誰であろうとだ」

「何処までも追いそのうえで討つ」

こうも言ってみせる者がいた。

「それこそが我等の掟だ」

「狂闘士のな」

「そうだったな。貴様等も己の為に戦っているのではないのだな」

そのことはよく感じ取っていたサガであった。

「その拳、私利私欲の為ではないのだな」

「ほざけ、我等はアーレス様に仕える者」

「この拳はアーレス様の為にあるのだ」

このことは彼等の中ではまさに絶対のことであった。それは何故かというと答えは簡単なものであった。彼等が狂闘士であるからだ。だからなのだ。

「それで何故己の為に振るう」

「アーレス様の為、そして」

ここで言うのであった。

「同志達の為だ」
「だからこそジェミニよ」
彼等の憎悪は今まさに一点に集中していた。
「貴様の首アーレス様に献上させてもらう」
「何があろうともな」
「ではそのつもりで来るのだ」
サガは決して背を向けようとはしなかった。
「私の首が欲しいのならばな」
「では行くぞ」
「いざここで」
彼等もまた戦おうとしていた。それをレダは今は後ろで見ている。しかしその小宇宙は決して弱いものではなく彼のそれもまた燃え上がっていた。
「よし」
まずは一言出した。
「私が戦うべきはだ」
そのうえで見るのはやはり彼だった。
「やはり貴様だな」
彼を見る。しかし今は動かない。
その彼に対してだった。狂闘士達は振り向くことなく告げるのであった。
「ではレダ様」
「そこで御覧になっていて下さい」
まずはこう告げるのであった。
「我等がこの者達を倒すその一部始終を」
「どうかそこで」
「わかった」
レダは今は彼等の言葉に頷くだけであった。それ以上は動こうとはしなかった。だがここで彼はこう彼等に対して告げるのであった。
「多くは言わん。勝て」

「はい」
「無論です」
彼等はここでも振り向くことなく答えたのだった。
「ですからそこで御覧になって下さい」
「是非共」
「アクエリアス、若しもの時はだ」
レダは鋭い目で呟いた。
「私が貴様の相手をしてやる。ジェミニの相手もな」
彼もまた彼の意を決していた。そのうえで戦いを見ていた。そのうえで今そこにいるのであった。

第五十二話　完

2009・9・9

第五十三話　氷の妙技その一

氷の妙技

「フライングアタック！」
シュミットは高く跳ね続けながら着地と同時にインプ達に蹴りを放っていく。飛び跳ねそのうえで攻撃を浴びせるそれはまさに飛び魚であった。
「シーハリケーーーン！」
パラオは嵐を起こしそれで周りの敵を倒している。その嵐はインプ達を巻き込み次々に倒していく。
「セットオンクライム」
マクベスの言葉と共にインプ達の心臓に拳が打たれ吹き飛ばされる。彼の拳は一つ一つを的確に打ち抜きそのうえで倒していた。
「ダイアモンドアイ！」
インプ達をその鋭い眼光で見据えるとそれだけで彼等は動きを止める。キラはそこに突っ込みその拳で動けない彼等を薙ぎ倒していく。
「何っ、今度の青銅の連中も！」
「これだけ強いっていうのかよ！」
「馬鹿にするなよ！」
「俺達だって聖闘士だからな！」
彼等は必殺技を放ったうえで驚くインプ達に告げた。
「貴様等程度に遅れを取るかよ！」
「次から次に倒してやるぜ！」
「くそっ、このままじゃ」
「やばいな」
青銅の聖闘士達を相手にしているインプ達は自分達の劣勢を悟らざるを得なかった。しかも戦いはそれだけでなく白銀の者達もいるのだった。

「気をつけろよ」
「ああ」
「ライラがいる」
白銀の二人と対するインプ達は警戒する目でオルフェを見つつ慎重に間合いを詰めていた。
「あの男の実力は相当なものらしいからな」
「噂によるとだ」
インプ達のうちの一人が言うのだった。
「その実力は黄金聖闘士に匹敵するらしい」
「黄金聖闘士にだと！？」
「まさか」
それを聞いた他のインプ達は一斉に怪訝な顔になった。
「それだけの実力者だというのか！？」
「白銀聖闘士でありながら」
彼等はそれを聞いてもまだ信じられなかった。
「それだけの実力があるだと」
「まさか」
「いや、まさかではない」
しかしここでそのインプは言うのであった。
「その実力は少なくとも白銀聖闘士達の中でも一、二を争うらしい」
「そうか。そこまでか」
「そこまでの実力者だというのか」
彼等はそれを聞いてもここで怯むことはなかった。どれだけの相手を目の前にしてもそれでも怯むことがないのが戦いに生きる狂闘士達なのだ。
「ならばだ」
「我等が倒す価値はあるな」
「ああ」
血に餓えた獣の笑みを浮かべながら間合いを詰めていく。しかしここでバベルがその彼等に対して言うのであった。

「貴様等はオルフェだけだと思っているな」
「セントールか」
「貴様もか」
「俺もまたいるということを忘れるな」
彼はまた言うのであった。
「このセントールのバベルをな」
「ふん、貴様も倒してやる」
「安心しろ」
彼等はバベルに対してもその目を向けるのだった。その目もまた激しい闘争心に燃えたものであった。まさに狂闘士そのものの目であった。
「貴様の首も貰っておこう」
「今ここでな」
「そうか。ならば見せよう」
バベルはここで構えた。左手を上に、右手を下にして。そのうえで自身の身体に黄金の小宇宙を帯びそのうえで今攻撃に入ろうとしていた。
「このセントールのバベルの技をな」
「ならば見せてみろ！」
「その技をな！」
インプ達は口々に叫びそのうえで三叉の槍を手に突き進む。バベルは今その彼等に対してその炎を放ったのだった。
「フォーティアルフィフトゥラ！！」
「何っ、この炎は！」
「炎の渦か！」
突き進む彼等をその炎が包み込んだ。そして一瞬のうちに焼き尽くすのだった。
「ば、馬鹿な・・・・・・」
「セントールの炎、これまでとは」
「聖闘士を侮らないことだ」

バベルはその炎の中で事切れていくインプ達を見て言うのだった。

第五十三話　氷の妙技その二

「前にした時は命を覚悟することだ」
「おのれ・・・・・・」
最期に呪詛の言葉を出し事切れる彼等であった。そしてオルフェもまた彼等と対峙していた。その琴を手にして今対峙しているのだった。
「その黄金聖闘士に等しい実力、見せてもらうぞ」
「そのうえで貴様を倒す」
このインプ達もまた戦いに燃えている瞳であった。
「いいな」
「我等の手でだ」
「わかった」
オルフェは彼等のその言葉を静かに聞いていた。だが彼からは動こうとはしないのだった。
「では来るのだ」
「そうか。ではな」
「倒してやろう」
言いながら今一歩前に出た。そうしてそのうえで突き進む。その槍でオルフェを貫こうとする。しかしそれで彼を貫くことはできなかった。
「デストリップセレナーデ！」
「な、何っ！」
「この旋律は！」
それを聞いたインプ達の動きが止まった。そして。
「ば、馬鹿な」
「身体が」
彼等は動きを止められそのうえで今全身から力が抜ける感触も味わうのだった。

「ストリンガーフィーネ」
「う、うう・・・・・」
「何なのだこの旋律は・・・・・・」
「これこそ死への旋律」
オルフェの竪琴の音が響き渡る。彼はその中で言うのだった。
「この旋律の中で旅立つのだ」
「ううう・・・・・これがライラの技だというのか」
「竪琴の聖闘士の」
「何も拳を使うだけではない」
オルフェはその死の旋律を奏でながら彼等に告げていく。
「こうして音を使うこともまた技なのだ」
「お、恐ろしい男・・・・・・」
「その様な技を使うとは」
「さあ。痛みはない」
見ればその通りだった。インプ達は苦しんではいなかった。むしろ断末魔の言葉こそあげているがそれでもその表情は穏やかなものであった。
「死ぬ時位は。苦しまずに死ぬのだ」
「ううう・・・・・・」
「ライラよ・・・・・・」
彼等はそれぞれゆっくりと倒れ眠るようにして死んでいった。残った者は誰もいなかった。皆彼の竪琴の前に倒れてしまったのであった。
「さて、後はだ」
「そうだな」
彼に対してバベルが応える。彼もとりあえず目の前の敵は全て倒していた。
「他にもまた敵のインプ達がいる」
「彼等のところに行くか」
「その通りだ。それではな」

「うむ」
青銅の者達も戦っている。彼等の戦いも終わろうとはしなかった。
そしてカミュとサガもまた。それぞれの相手と対峙しているのであった。
「ここでの私の相手は御前達だな」
「その通りだ」
「覚悟はいいわね、ジェミニ」
四人の狂闘士達がそれぞれ彼に告げる。
「アガリアレプトのレティーナ」
「フラウロスのリーリエ」
「グラシャラボラスのリュート」
「ブネのクリフ」
この四人だった。女が二人に男が二人であった。
「私達が相手をしてあげるわ」
「覚悟しなさい」
まずは女である二人が身構えるのであった。そして指示を出したのはレティーナだった。
「いい、三人共」
「ええ」
「わかってるよ」
リーリエとクリフが彼女の今の言葉に応える。
「貴女の指示に従うわ」
「だから何でも言って」
「有り難う。それじゃあ」
「アガリアレプトか」
サガはここでそのレティーナが司る魔神のことを言葉に出してみせたのであった。
「確か魔神の中での参謀の一人だったな」
「その通りよ。私は八大公の方々に策を献上する参謀の一人」
レティーナもそのことを自負するようにして答えてきた。

第五十三話　氷の妙技その三

「それがこの私なのよ」
「そうだったな。アガリアレプトはそうした魔神だな」
「そして」
レティーナはさらに言うのであった。
「ただの参謀ではないということも覚えておくことね」
「ただの、か」
「アガリアレプトもまた魔神の一人」
今度はその魔神ということを強調してきた言葉であった。
「戦うこともまたするのよ」
「だからこそ今こうしてここにいるというのだな」
「ジェミニ、貴方を倒す為に」
サガを名指しさえしてきた。
「今ここにいるのよ」
「ではレティーナ」
リュートが彼女に声をかけてきた。
「仕掛けるとしよう」
「ええ。それじゃあ」
「行こうよ」
クリフも応える。そうして彼等はまずは飛び上がるのであった。
「飛んだか」
「アガリアレプトは空を舞う魔神の一人」
サガの上に舞いながら上を見上げてきた彼に告げるレティーナだった。
「そして私達もよ」
「我等全員」
「空を舞う魔神なんだよね」
彼女だけでなくリーリエとリュート、クリフも言ってきたのであ

った。見れば彼等は確かにその背にあるそれぞれの翼の形の戦衣を使うか様に空を舞っていた。それはさながら赤い翼であった。
「だからこそ、ジェミニ」
「空を飛べない貴方をここから倒す！」
「私が空を飛べないというのか」
サガは彼等のその言葉に対して反応を見せた。
「何時誰がそう決めた」
「戯言を」
リュートは今の彼の言葉を聞いて嘲る笑みを浮かべた。空を舞いつつ彼の隙を徐々に窺いながら。
「今そうして地にいることが何よりの証」
「その通りだね」
クリフも言うのであった。確かに今サガは雪原の上に立ったままである。白い世界にその黄金の聖衣は何よりも目立っていた。
「それとも飛べるというのかい？翼がなくても」
「飛べるといえばどうする」
こう彼等に返すサガであった。
「その時はどうするのだ？一体」
「では飛んでみせるといいわ」
レティーナもまた彼がそんなことができるとは夢にも思っていなかった。何故ならサガに翼がないのは明らかであるからだ。それでどうして飛べるかというのである。
「そうしたら信じてあげるわ」
「わかった」
レティーナのその言葉に頷くサガであった。そうして。
「では参ろう」
「何ィ！？」
「何ですって！？」
狂闘士達はそのサガを見て驚きの声をあげた。何と彼はそのままの姿勢でゆっくりと空中に浮かびだしたのである。

そのまま悠然と彼等の前にまで来た。翼は使っていないがそれでも宙を舞ってみせたのである。
「ど、どういうことなんだ!?」
「これは一体」
「セブンセンシズを使えばどうということはない」
驚く彼等に対してこう告げるサガだった。平然とした顔で。
「宙を舞うことも他の技を使うこともな」
「ま、まさかこれも黄金聖闘士の技のうちだというの!?」
「セブンセンシズの」
「その通りだ。どうやら御前達はセブンセンシズについてあまり知らないようだな」
サガは完全に己のペースで話すのだった。
「それを使えば。宙をこうして舞うことも造作もないことなのだ」
「くっ・・・・・・」
「まさかこんな」
「それではだ」
今度は歯噛みした彼等に対して告げたサガだった。
「行くぞ」
彼は言うのであった。
「このジェミニのサガの技、受けてみるのだ」
「くっ、その前に!」
だがレティーナはサガが動こうとしたところで他の三人を見つつ声を出した。完全に流れを掴まれてしまったがそれでも臆してはいなかったのだ。

第五十三話　氷の妙技その四

「行くわよ、皆！」
「え、ええ！」
「宙に浮いたからといえ！」
「俺達の技を受ければ！」
そう叫びながらまずはリーリエ、リュート、クリフが動き。そのうえで攻撃を繰り出したのであった。
「クリムゾンランブル！」
「エンドレスタスク！」
「ドラゴンサンダー！」
リーリエはその両手か赤い無数の鱗形の刃を放つ。リュートは両手の爪を振るいそこから衝撃波を出す。そしてクリフは黄色い稲妻を放った。
三人の攻撃がそれぞれ宙に浮かぶサガに襲い掛かる。
「このフラウロスは海においても力を発する鱗を持つ魔神」
リーリエは攻撃を放ったうえで言うのだった。
「だからこそこの技なのよ」
「グラシャラボラスは知恵と猛々しさを持つ犬の魔神」
そしてリュートもだった。
「だからこそ爪から牙の力を放てるのだ」
「竜の中には稲妻を扱える者もいる」
ボーイもまた己の技について語った。
「この僕もそうなのさ」
「私達三人の攻撃ではないわ」
ここでさらに言うリーリエだった。彼等の攻撃は今まさにサガに向かおうとしていた。
その中で言うリーリエだった。そしてその言葉に応えてだった。
「最後は私よ」

「やはり貴様か」
「そう。アガリアレプトのレティーナ」
己のことを言うレティーナだった。
「この力見せてあげるわ」
言いながらだった。今開いた両手を重ねて前に出して。その技を放った。
「ブルーブレス！」
「青い炎か」
「そうよ。レダ様の炎には劣るけれど」
その炎が劣っている自覚はあるのだった。
「この炎を受けてもそれでも無事でいられるかしら」
「それに私達の攻撃もあるわよ」
リーリエも語る。
「さあ。どうするのかしら」
「普通に考えれば俺達の攻撃を受ければ」
「黄金聖闘士といえど生きられるものではないよ」
リュートとクリフもサガを倒せる絶対の自信があった。
「さて、これまで貴様に倒された仲間達の仇」
「今ここで討てるというわけだね」
そのサガに四人の攻撃が迫る。サガはその四つの攻撃に対して今右手を前に出した。するとそれだけで。その四つの攻撃が消え去ったのであった。
「何ですって！？」
「私達の攻撃が！？」
レティーナとリーリエは彼のその右手の中に消えた自分達の攻撃を見て驚きの声をあげた。
「どういうことなの、これは」
「右手だけで私達の攻撃を」
「このサガは異次元を自由自在に操れることができる」
ここでこう言うサガであった。

「そうしてこの様にして。攻撃をその異次元に移すことができるのだ」
「それによって私達の攻撃を防いだと」
「そういうことなの」
「確かに受けていれば危うかった」
サガもそれは認める。
「しかしだ」
「しかし？」
「この様にしてかわすことができる」
異次元に移してということだった。
「わかったな」
「おのれ、何という男だ」
「それによって僕達の攻撃を」
「ならば」
レティーナはここで焦りを生じさせていた。そしてそれにより今ミスを犯してしまっていた。
三人に対してすぐに。こう告げたのだった。
「散って」
「散る！？」
「散るんですか」
「そうよ、散るのよ」
こう三人に言うのである。

第五十三話　氷の妙技その五

「それでもう一度攻撃を仕掛けるわ」
「わかりました」
「それじゃあ」
三人もそれでいけると思っていた。彼等にしろ自分達の攻撃が思いも寄らぬ方法で無効化され焦りを感じていた。その為すぐにレティーナの言葉に頷いたのである。
それですぐに散った。上下と左右にだ。そのうえで再び自分達の攻撃を放った。
「今度こそ！」
「これなら！」
四人の攻撃が再びサガに襲い掛かる。サガは今度もその攻撃を見ている。そしてそのうえで今こう言うのだった。
「聖闘士に同じ技は通用しない」
「戯言を」
「戯言ではない」
それを否定しようとするレティーナに返した。
「その証拠にだ」
背中のマントを左手に持ってそのうえでその左手を一閃させた。するとだった。
それで四人の攻撃を消し去ってしまった。左手だけでは。
「今度は攻撃を消し去った」
「そんな・・・・・・」
「ましてや最初の攻撃よりも弱かった」
サガはこのことも見抜いていたのだった。
「そしてだ」
「そして！？」
「今度は一体」

「私の番だ」
サガは言った。悠然と構えて。
「この技を受けるがいい」
「な、何っ!?」
「この小宇宙は!」
四人が急激に高まるサガの小宇宙を感じた時にはもう手遅れだった。今サガの交差させた両腕が胸から頭上にあがり。そのうえで銀河が砕けた。
「ギャラクシアンエクスプロージョン!!」
その攻撃が彼等を直撃した。四人をしても耐えられるものではなかった。
勝負はこれで決した。四人は雪の大地に叩き付けられそのうえで事切れたのであった。
「くっ、これが」
「ジェミニのサガ最大の奥義」
「ギャラクシアンエクスプロージョン・・・・・・」
彼等はその雪の上にうずくまりながら呟いた。その傷が致命傷なのは明らかだった。
「何という恐ろしい威力・・・・・・」
「我等をしても・・・・・・」
「安らかに眠るがいい」
そこにサガが降り立ち告げた。
「苦しまずにな」
「無念・・・・・・」
最後にレティーナが言った。
「だが」
「だが。何だ?」
「狂闘士はアーレス様の御力を受ける存在」
今息絶えようとしている中での言葉だった。
「そのことを忘れないことね」

「アーレスのか」
「アーレス様に栄光あれ・・・・・」
頭から血を流していたレティーナはこれで息絶えた。その時には他の三人も同じく息絶えていた。サガはこの戦いにおいても勝利を収めたのだった。
しかしだった。サガの顔は喜ぶものではなかった。むしろ緊張しているものであった。
「さて。次はだ」
その顔で呟くのだった。
「カミュだが。どうか」
そのカミュは五人の狂闘士達と対峙し続けている。彼に対してもその禍々しい紅蓮の小宇宙が向けられ激しい戦いがはじまろうとしていた。
「さて、アクエリアスよ」
「我等五人が相手ならば」
「その命運は決まったも同じ」
カミュを前にしてそれぞれ言う彼等であった。
「特にだ」
「貴様は確か」
カミュは今一歩前に出た男を見て声をあげた。
「確かネビロスの」
「そうだ。ネビロスのクレーベ」
ここで自ら名乗ってみせたのであった。
「私のことを知っているとは殊勝なことだ」
「名前は一度聞けば覚えることができる」
静かな言葉でこう返したカミュであった。
「それだけでな」
「そうか。では他の者達のことも覚えているというのだな」
「無論」
今度は一言での返答だった。

第五十三話　氷の妙技その六

「それでもう充分だ」
「そうか。それでは最早説明は不要だな」
クレーベはカミュの今の言葉を受けて満足した笑みを浮かべてみせ。そのうえで言葉を変えてきたのであった。
「だが私のことは知っているか」
「ネビロスか」
「そうだ、ネビロスは魔神の中でアガリアレプトと並ぶ軍師なのだ」
それだというのである。そのネビロスとは。
「私に対しては如何なる幻もまやかしも通用しない。全て見抜くことができる」
「全てか」
「まずそれを言っておく」
強い、自信に満ちた言葉であった。
「貴様がどういった術を使おうともだ。私がいる限り一切通用しないということをだ」
「安心しろ。それはない」
しかしカミュは相変わらずの落ち着いた態度でこう返すだけだった。
「私は今はそういった術は使わない」
「賢明だな。ではどうするつもりだ？」
「私の技だけで戦う」
こう言うのだった。
「このアクエリアスのカミュのな」
「それでは」
「それを見せてもらおうか」
それを聞いたカトリとボーイの言葉だった。
「このラウムのカトリに」

「ヴァラクのボーイに」
「勿論この私にも」
「見せてもらうわ」
次に言ったのはブロケルのティータにも」
「ノロベのシルクにも」
「それが私と戦う五人だな」
「如何にも」
クレーベが五人を代表する形で言葉を返してみせたのであった。
「不服か？この顔触れで」
「何も不服とは言ってはいない」
そうではないというのである。
「来るがいい。私の技、ここで見せてやろう」
「いいだろう。それではだ」
ここでクレーベの周りに無数の屍達が姿を現わしてきた。どれも腐り朽ち果てていた。
「戦い、楽しむとしよう」
「死者。冥界の亡者達か」
「その通りだ。ネビロスは死者を操ることもできる」
自信に満ちた笑顔と共の言葉であった。
「本来はハーデス様が治められる亡者であろうとも。この様にしてだ」
「それでなのか。だからこその死霊使いというわけか」
「その通りだ。そして」
「私達もいるのよ」
「それはわかっているな」
他の四人もここで出て来たのだった。カミュの前に。
「この五人の攻撃で」
「アクエリアス、貴様を倒す」
「覚悟！」
そして一斉にであった。その攻撃を放ってきたのであった。

まずはカトリであった。右から左に激しく回転してそのうえで無数の赤い羽根を放ってきたのであった。
「フェザーハリケーーーーン！」
「むっ、この羽根は」
「ただの羽根ではないわ」
技を放ったうえでの言葉であった。
「全てを貫くこの羽根、受けてみなさい！」
「俺の攻撃もだ！」
続いて来たのはクリフだった。一気にカミュに突き進みそのうえで両手の拳の一撃を次々に繰り出してきた。
「ツインドラゴンヘッド！」
その技の名前通りまさに双頭の竜の頭が襲い掛かって来るような攻撃であった。それをカミュに対して繰り出してみせたのである。
二人の攻撃をかわすその時に。今度はティータが来た。
左手に持っているその剣を上から下に一閃させる。すると凄まじい圧力の水圧が地面を走り一直線にカミュに対して襲い掛かるのだった。
「ウォータープレッシャーーーーッ！！」
これがこの技の名前であった。
「さあ、どうかしらアクエリアス」
技を放ったうえでにやりと笑ってみせたティータであった。整ったその顔に凄みのある笑みが宿った、まさにそうした顔であった。

第五十三話　氷の妙技その七

「この攻撃は。避けられるかしら」
「そしてかわせたとしても」
四人目はシルクであった。
「私がいるのよ。受けなさい！」
彼女が叫ぶと巨大な木の蔦が次々と雪原の中から出て来た。そしてそれぞれ複雑な動きを示しそのうえでカミュに突き進むのであった。
「ウッドウィップ！」
技の名前を叫ぶ。四人の攻撃が一度にカミュに襲い掛かる。
そして最後の一人であった。クレーベが今。己の周りにいるその亡者達に対して告げるのであった。
「行け！」
こう命じた。
「そしてアクエリアスを冥府に連れ込むのだ。ヘルズダンス！」
冥府の亡者達はわらわらとカミュのいる方にそれぞれ向かいその爪と牙で引き裂かんとする。今五人の攻撃がそのままカミュにぶつかろうとしていた。
しかしであった。ここでカミュは。この技を放ったのであった。
「フリージングコフィン！！」
「何っ！？」
「そこでその技を使うというの！？」
「どういうことだ？」
五人はカミュが今その技を使ったのを見て声をあげた。
すると忽ちのうちにカミュの周囲を氷の障壁が守り。それに触れた羽根や亡者、それに蔦や水までもが次々に凍てつきその動きを止めたのであった。
「ちっ、やばい！」

それを見て接近攻撃を仕掛けていたボーイもすぐに飛び退いた。
それにより氷にされることから避けて見せたのであった。まさに間一髪であった。
「危ないところだったぜ」
「そうね」
彼に対してシルクが応える。
「あと一歩で、だったわ」
「それで我々の技を防ぐとは」
クレーベはカミュのそのフリージングコフィンを見て言うのだった。
「アクエリアス、予想以上か」
「いや、予想以上ではない」
カミュはここでこうクレーベに対して返してみせたのだった。
そしてそのうえで。こう言った。
「私はそれより遥か先を読んでいる」
「先をだと？」
「そうだ。見るのだ」
言いながらだった。今まさに右手の人差し指を回してみせた。するとだった。
「くっ」
「これは」
「カリツォーだ」
その氷の輪で狂闘士達を動けなくしての言葉だった。氷の輪は彼等の腰と両腕を捉えそのうえで動きを完全に防いでみせているのだった。
「私のこの技のことは知っている筈だが」
「ふん、その通りだ」
「この程度ならっ！」
狂闘士達はそれぞれ力を込めてみせた。するとそれだけで氷の輪は壊れて消えてしまった。しかしその時既にカミュはあらたな攻撃

に移っているのであった。
「何っ！？」
「もうだというの！？」
「言った筈だ」
カミュはここでまた言うのだった。
「私は御前達のさらに先を読んでいるとな」
「くっ、アクエリアス」
「そこまでとは」
「受けるがいい」
今まさにその技を放とうとしていた。そのうえでの言葉だった。
「この技をな」
言いながら右腕を出し。その技を繰り出すのだった。
「ダイアモンドダスト！」
氷の輪を断ち切ったばかりの彼等に対して今技を放った。動きをそこに集中させていた彼等に今の攻撃をかわすことはできなかった。
吹雪が彼等を襲い一瞬のうちに吹き飛ばしてしまった。そしてそのうえで。彼等を倒してしまっていたのであった。
「ううう・・・・・」
「まさかそう来るとは」
「アクエリアス、ただ攻めるだけではないのか」
「無論だ。氷はただ攻めるだけではない」
倒れ伏し雪の上で事切れようとする彼等に対しての言葉であった。
「この様にして。凍らせることもできるのだ」
「そうなのか。それで」
「我等を倒したと」
「そういうことか」
「安らかに眠るがいい」
その彼等に告げた言葉であった。
「いいな」
「怖ろしい男・・・・・」

「これ程度までとは」
今五人は雪の上で事切れた。カミュもまた敵を倒したのだった。
しかし彼の戦いはこれで全て終わりではなかったのであった。
「来たか？」
「わかっていた筈だ」
既にレダが来ていた。そのうえでカミュに対して告げてきたのである。
「次に私が来ることはな」
「確かにな。それではあの時の続きだな」
「そうだな。だが」
レダはここで言葉を付け加えてきた。
「一つ言っておく」
「何をだ？」
「狂闘士は同志の仇は必ず討つ」
彼がここで言うことはこのことだった。
「アクエリアス、貴様もだ」
「そういうことか」
「言うことは。それだけだ。では」
その全身に赤い小宇宙をみなぎらせる。そのうえで。
今二人の闘いがはじまろうとしていた。両者は睨み合ったまま最初にそれぞれの小宇宙を高め合いそのうえではじめようとしているのであった。
「私が予想していた以上の小宇宙だな」
「侮ってもらっては困る」
こう返すレダだった。
「八大公の一人である私をな。侮ってもらってはな」
「そうだな。御前達八大公もまたセブンセンシズに目覚めていたな」
「その通りだ。それもまた見せよう」
レダの今の言葉は完全に本気のものであった。
「今ここでな」

氷と炎の激突であった。今まさにカミュとレダはそれをぶつけ合おうとしていた。北での戦いはいよいよ佳境に入ろうとしていたのであった。

第五十三話　　完

２００９・９・１３

第五十四話　氷の世界と炎の世界その一

氷の世界と炎の世界

「よし、大体終わったな」
「ああ」
「そうだな」
青銅の者達は周囲を見回しながら話していた。既に戦場に立っているインプ達はいなかった。
「雑兵だって思ってたんだけれどな」
「案外骨があったな」
「聖域の連中より強いんじゃねえのか？」
こうした意見まで出ていた。
「まあとにかくこの連中は倒したけれどな」
「カミュ様はどうなったんだ？」
「待っていることだ」
ここでバベルとオルフェが彼等の前に出て来て告げてきた。どうやら彼等も彼等の前にいたインプ達を全て倒してしまったようである。
「今はな」
「カミュ様が戻られるのをな」
「まあカミュ様だったら問題はないですけれどね」
「確かに」
彼等はそう言って特に問題視はしていないのであった。それは表情にも出ていて実にすっきりとした顔にさえなっている状況であった。
「それじゃあ今は」
「待ちますか」
「そうしておくことだ」
こう言って今やることを決めた彼等に対してサガが来て告げるの

だった。
「今はな」
「あっ、サガ様」
「来られていたんですか」
「間に合って何よりだ」
今度はこう彼等に告げるサガだった。至って落ち着いた顔をそこに見せている。
「御前達も全員無事のようだな」
「ええ、まあ」
「一応敵は全部倒しましたよ」
誇らしげに笑ってサガに告げるのだった。
「それでカミュ様は今は」
「どうされているんですか？」
「ベリアルと闘っているところだ」
それを行っているというのである。
「おそらくは今はじまったばかりだ」
「そうですか」
「今ですか」
「そうだ。まさに今だ」
サガは言うのであった。
「しかしだ。この闘いに我々が入ることはできない」
「あくまでカミュ様の闘いなのですね」
「そしてベリアルの」
「その闘いに入ることは決して許されない」
動くことのない言葉だった。今のサガの言葉は。
「わかったな」
「はい、それは」
「俺達も聖闘士です」
青銅の者達もそれはわかっているのだった。彼等自身の言葉通りやはり彼等は聖闘士だからだ。だからこそ言えた言葉だったのであ

る。
「じゃあ俺達はここで、ですね」
「カミュ様を待つんですね」
「それが一番だ。わかったな」
「ええ。そうですね」
「腹を括って待ちますか」
「待つことも務めのうちだ」
こんなことも言うサガであった。
「同志が帰って来るのを待つこともな」
「サガ様・・・・・・」
「貴方もまた」
「私もまた聖闘士だ」
彼もまたこの言葉を言うのだった。出してみせるのだった。
「わかっていなくてどうしてここにいられようか」
「そうですね、確かに」
「聖闘士なら」
バベルとオルフェがサガの今の言葉を受けて頷いたのだった。その表情は実にはっきりとしたものになっていた。わかっている者の顔になっていた。
「では我々はここで」
「カミュ様を待ちましょう」
「ただですね」
「あれですね」
「ええ、あれですよ」
しかし青銅の者達はここで苦笑いを浮かべて言ってみせたのである。砕けた仕草になっていてリラックスしているのがわかる様子の中での言葉だった。

第五十四話　氷の世界と炎の世界その二

「寒いですね、ここは」
「やっぱりウォッカが欲しいですね」
「まあカミュ様はそんなこと言っていられる状況じゃないですけれどね」
「友を待つ時はその友と同じ姿でいる」
今度のサガの言葉はこうしたものだった。
「だからこそ我々はだ」
「ええ、それもわかってますし」
「じゃあやっぱり」
「当然飲まずに待つ」
当然の形として出された言葉であった。
「いいな」
「はい、じゃあそういうことで」
「待たせてもらいますよ」
「カミュ様をね」
こうして彼等はそのままの姿でカミュを待つのだった。そのカミュは今静かにレダと対峙していた。小宇宙だけが燃え上がっていた。
「この前は私の猟犬達を見事封じてくれたな」
「あの程度は造作もないことだ」
こうレダに返すカミュだった。
「私の氷を以ってすればな。それにだ」
「それに。何だ？」
「貴様もあれで私を倒せるとは思っていなかっただろう」
こうもレダに対して告げるのだった。
「それは違うか。どうなのだ」
「隠せはできないようだな。その通りだ」
そのことを認めもしてみせたレダだった。目はその中で鋭いまま

であった。
「アクエリアス、あの程度で貴様を倒せるとは考えていなかった」
「そうか。やはりな」
「そしてもう一つ言っておこう」
言葉をさらに踏み込ませてもみせたのであった。
「私の技はあの程度ではない」
「猟犬達はただの小手調べということか」
「その通りだ。それを今ここで見せよう」
「来るか」
「見よ、ベリアルのレダの炎」
言いながらその両手をかざしてみせた。そしてそのうえで。
その両手を重ね合わせ黒い炎の渦を放ってきたのであった。その技の名前は。
「ソドムインフェルノ！」
「黒い炎の渦か」
「そうだ。これならばどうだ」
技を放ったうえで言うレダだった。
「この炎、避けられるのか」
「避けずとも」
カミュは退くことはしなかった。正面からその炎の渦を見ているのだった。
その渦を見据えながら今。彼はここでもその右腕を構えたのだった。そしてあの技を繰り出したのであった。
「ダイアモンドダスト！」
「その技か」
「貴様が炎で来るのならば私は氷を繰り出すまでだ」
それで対するというのである。
「炎は氷に敗れるものだからな」
「さて。それはどうかな」
レダは今のカミュの言葉に対して不敵に笑って返すのだった。

「確かに氷は炎を封じ込める」
「わかっているようだな、それは」
「現に私は貴様の氷に我が猟犬達を封じられた」
またこのことを話すのであった。
「それはその通りだ」
「ではわかる筈だな」
「いや」
しかしであった。否定する言葉も出してみせたのであった。
「残念だが私のこの炎は違うのだ」
「あの猟犬達ともか」
「言った筈だ。あれはただの小手調べだ」
あくまでそれだというのである。
「しかしこの炎の渦は違う」
「ありとあらゆるものを焼き尽くすというのか」
「アーレス様の炎、甘く見ないことだ」
その漆黒の炎のことに他ならなかった。
「それは言っておく」
「そうか。それならばだ」
カミュもまた。レダのその言葉を受けて言い返すのだった。それは。

第五十四話　氷の世界と炎の世界その三

「アテナの氷、侮らないことだ」
「言うな、やはり」
「貴様もな」
両者まさに譲らずであった。氷と炎もまた同じであった。
青い氷と黒い炎がぶつかり合いせめぎ合っている。どちらがより退くか、まさにわからない状況であった。
カミュもレダも己の技に小宇宙を込め続けている。彼等はその全身に汗さえかいていた。
その攻防の中で、であった。彼等は互いも見据え合っている。やはり今も一歩も引かない、そうした中でせめぎ合うのであった。
「どうやら」
その中でレダが言った。
「力は完全に互角の様だな」
「黄金聖闘士同士が争うとなるとだ」
カミュはここで自分達に例えて話をしてみせてきたのであった。
「実力が拮抗している為終わることがない」
「ほう。面白い話だな」
レダは今のカミュの言葉を受けて面白そうに口元を歪めてみせた。
「それは我々とてもおそらく同じだ」
「貴様等狂闘士もだというのか」
それを聞いてまた言ったカミュだった。
「千日間戦争に至るというのだな」
「千日かどうかはわからぬが互いが何時果てるともなく闘い合うことになるのは事実だ」
レダは千日間戦争をこう言い変えていた。どちらにしろその示す意味は同じであった。
「それはな」

「そうか。同じか」
「我等八大公の実力は伯仲している」
このことは確かだというのである。
「だが」
「だが。何だ」
「それは貴様等に対してもそうだったようだな」
カミュを見据えての言葉に戻っていた。攻撃をせめぎ合わせながらもカミュを見ているのであった。その強い闘いに燃えた目で。
「黄金聖闘士に対してもな」
「今まで四人の黄金聖闘士が貴様等八大公と闘ってきた」
デスマスク、シュラ、アフロディーテ、そしてアルデバランの四人である。彼等はそれぞれの全力を見せながらも相手を倒すことができていないのである。カミュはそこにあるものを見ているのだ。
「しかし一人として倒すことはできないでいる」
「それは我々とて同じことだ」
レダはカミュの言葉をそのまま言い返す形となっていた。
「貴様等黄金聖闘士を一人も倒せてはいない」
「そうだな。一人としてな」
「黄金聖闘士を一人倒せばそれだけで聖域の戦力は大きく減退する」
レダはこのことを把握していた。黄金聖闘士こそは聖域の象徴でありそしてその力そのものであると言っていい。そこまでの存在なのである。
「だが。我等をしても一人として倒せないとはだ」
「それはトラキアでも同じだったな」
カミュもまらレダの言葉をそのまま言い返すことになった。
「御前達八大公の一人を倒せばそれで随分と違うのだがな」
「倒せていないな、まだ」
「だがここで貴様を倒す」
カミュの言葉がここで強いものになった。
「ベリアル、貴様はこの私の手でだ」

「面白い。私も同じことを考えていた」
再びレダの口元に邪な笑みが宿った。
「アクエリアス、貴様を倒しておけばこれからのアーレス様の覇業が大いに楽になる」
「覇業か」
「そうだ。覇業だ」
まさにそれだと言い切るレダだった。アーレスの戦いを。
「アーレス様ことがこの世のありとあらゆるものを支配されるべき方だ。考えてもみるのだ」
「何を考えよというのだ、一体」
「アーレス様は天皇ゼウスの子であられる」
海を治めるポセイドン、冥府と治めるハーデスと並び天界を治める存在こそがゼウスである。オリンポスにおいて彼が率いる神々と共に天界を治めているのである。それが天皇ゼウスなのだ。
「正妻であるヘラとの間に産まれた方であるぞ」
「つまり血筋から言って正統であるというのだな」
「その通りだ」
まさにそうだというのであった。

第五十四話　氷の世界と炎の世界その四

「アテナなぞが何だというのだ?アーレス様こそは天皇ゼウスとその正妻ヘラから産まれた嫡子であられる。そのアーレス様が地上を治めて何が悪いというのだ」

「戯言を言うものだ」

カミュは今のレダの言葉を戯言として終わらせてしまったのだった。

「血筋を言うならばだ」

「何だというのだ。アーレス様の高貴を否定するというのか」

「それは否定しない」

しかし肯定もしないといった今のカミュの口調であった。

「しかしだ」

「しかし。何だ?」

「我等の神アテナもゼウスの子である」

「だが正妻ヘラの子ではない」

「その力はまさにゼウスより認められたものだ」

カミュが言うのはこのことだった。アテナは産まれる前に母メティスから産まれたならば父であるゼウスを凌ぐと言われゼウスに飲まれたうえでその額から出て来た女神だ」

ギリシア神話にある通りである。そうして飲まれたアテナはゼウスに激しい頭痛を与えそのうえで兄であるヘパイストスがゼウスの頭を割るとそこから産まれ出たのである。これがアテナの出生である。

「そしてメティスはゼウスの最初の妻だった」

「だからこそ何だというのだ?」

レダはカミュの今の言葉に不機嫌を露わにさせていた。自らが仕えるアーレスの高貴さを否定されたとみなしたからに他ならない。

「それでアーレス様の地上を治める義務を否定するというのか」

「義務か」
「そうだ、義務だ」
今度はこの話に至っていた。レダはアーレスがこの地上を治めることを当然のことを考えているのだ。これは狂闘士ならば誰もが持っている考えであるがレダはその考えが特に強いと言えた。
「アーレス様がこの地上を治められることはだ」
「そうした義務は聞いたことがない」
カミュは真顔でレダの今の言葉に返す。やはりその表情は変えない。そうして相変わらず氷と炎のせめぎ合いを続けているのであった。
「全くな」
「聞いたことがないのなら覚えておくことだ」
カミュの今の返答に臆することもなくこう返したレダだった。
「それでいいな」
「私にそれを言うつもりか」
「何度でも言おう。アーレス様こそが地上を治められる方だ」
まさに彼こそがというのである。
「アテナなどではなくな」
「血筋だけでそれをできるとは考えているわけではあるまい」
「その通りだ。アーレス様の御力を知ればだ」
言葉と共に再び口元に笑みが浮かび出た。今度のその笑みはアーレスに対しての心酔そのものを見せている笑みであった。
「アクエリアス、貴様もひれ伏すことになる」
「アーレスにひれ伏すことはない」
カミュはそれはないと言い切ってみせた。
「その前にアーレスを倒すだけだ」
「言うものだ。人が神を倒せるものか」
カミュの今の言葉はまさに一笑に伏してしまったレダだった。
「ましてやアーレス様をとなると」
「ではそれをしてみせよう」

カミュの言葉には何も偽ることも虚勢もなかった。
「この聖戦においてな」
「ではまず私を倒すことだな」
レダの言葉はこれまでとはうって変わったものだった。完全にカミュに向いている声であった。
「このベリアルのレダをな」
「無論貴様も倒す」
「今の言葉、捨ておくことはできぬ」
カミュのそのアーレスを倒すという言葉のことである。
「アーレス様を害する者は我等狂闘士が命にかえても倒す」
「その為にまずは貴様を倒さねばならないということだな」
「その通りだ。アーレス様を倒そうとするならば」
レダの言葉にはさらに力が含まれていく。
「我等が必ず立ちはだかる」
「御前達もそうした意味では我々と同じだということだな」
カミュはそのことがよくわかった。
「仕える神の為に戦うというのだ」
「その様だな。しかしだ」
だがここでさらに言うレダであった。
「貴様等に敗れることはない」
「アーレスの世界の為にか」
「そうだ。御前達はこの世界の平和の為だったな」
「それこそがアテナの願い」
アテナとは平和を守る為に戦う女神である。それに対してアーレスはまさに破壊と流血の為に戦う神だ。同じ戦いの神でありながらあくまで両極にあるのである。

第五十四話　氷の世界と炎の世界その五

「だからこそだ」
「ならばアクエリアスよ」
レダはそのカミュに対してまた告げてきた。
「その平和、我等から守ってみせるのだな」
「言われずともだ」
そうする、カミュは言うのだった。
「例え相手が誰であろうとだ」
「その言葉確かに受けた」
レダの目の光も声もこれまで以上に強いものとなった。
「ならばだ」
「むっ！？」
「このレダ、だからこそここで貴様を滅ぼす」
言いながらその炎にさらに小宇宙を込めていくのだった。
「この漆黒の炎でな」
「そうか。炎にさらに己の力を込めるか」
「どうだアクエリアスよ」
そうして炎に己の小宇宙を込めながらまたカミュに対して問うてきた。
「このベリアルのレダの炎は」
「確かにかなりのものだ」
それはカミュもまた認めるものだった。これについては先程と同じであった。
「しかしだ」
「しかし。どうしたというのだ？」
「それは私も同じこと」
こう言うカミュであった。
「このアクエリアスのカミュの氷もまたな」

「それではだ。貴様の氷もまた」
「その通りだ。見るがいい」
ここで実際に彼もまたその放って氷に対して己の小宇宙を込めていく。すると彼の氷の嵐もまたその力を増していくのであった。
「この私の氷の強まりをな」
「ふん、確かに見事なものだ」
レダの炎が黒い渦ならばカミュの氷はさしづめ青い嵐だった。渦と嵐が二人から放たれそのうえでせめぎ合っているのである。
「貴様の氷もな」
「さて、どちらが勝つか」
カミュはその氷を何時の間にか両手を重ね合わせて放っていた。本来は右手だけで放つそのダイアモンドダストを両手で放つ形となっていたのだ。
「私の氷と貴様の炎、どちらかがな」
「さてな」
レダは不敵な、楽しむ様な笑みと共に彼の今の言葉に応えてそのうえで言うのだった。
「先程は私が勝つと思っていた」
「そうなのか」
「だが。今はだ」
ここでレダは己の言葉を変えてきたのであった。その言葉は。
「わからない」
こう言うのだった。
「こうなってはな。どうやら我々は真の意味で実力が伯仲しているようだな」
「我等もまた千日間戦争となるということか」
カミュは再び千日間戦争という言葉を口に出した。

第五十四話　氷の世界と炎の世界その六

「このままだと」
「だが」
また言うレダだった。
「勝つのはやはり私だ」
「それは私の言葉だ」
この時も負けてはいないカミュだった。すぐにこう言い返してみせる。
「言っておくがな」
「ふふふ、さらに面白くなってきたものだ」
表情を変えないカミュに対してレダは比較的よく変えてきていた。今度はまた楽しむような笑みを浮かべてみせての言葉であった。
「アクエリアス、貴様との戦いがこれ程まで面白いとはな」
「そしてその楽しみの中で勝利を収めるというのだな」
「その通りだ。それこそが狂闘士だ」
言い切ってみせた言葉であった。
「戦いを楽しみそうして勝つのがな」
「やはり我等とは全く考えが違うな」
「戦いの中で破壊と殺戮を楽しみ」
それが彼等の楽しみなのであった。そういったものこそがだ。
「アクエリアス、そして貴様等聖闘士達全てをその破壊し尽くされた世界の中で葬ってやろう」
「それはできないだろうがな」
「そう言うのはわかっていた」
既にカミュがどう言うのかもわかってきていた。もっともそれは彼だけでなくカミュにしてもそうだった。二人はもうお互いのことがわかっているのであった。
「それもな」

「では。私はここで貴様を」
「倒す」
両者の言葉が完全に重なった。
「遠慮せずにな」
「この私の命にかえてもだ」
二人は己の小宇宙をあるだけそれぞれの炎と氷に含ませてきた。するとどちらも途方もないまでに荒れ狂うようになってしまったのだった。
「このレダの炎、これならば凌ぎきれまい」
「カミュの氷、これならばどうだ」
その炎と氷はそれでもせめぎ合っていた。両者の顔もそれぞれの衣も黒に青に禍々しく清らかに照らし出しながら。そのうえでせめぎ合っていた。
そしてその中で互いに一歩も引かない。まさに攻防であった。だがここで。僅かにだがカミュの氷が揺らいだのだった。
「むっ！？」
そしてだった。その揺れを見逃すレダであった。そのほんの微かな、動いたと見間違えても不思議ではない揺れを見た彼はここで動いたのであった。彼自身が。
「よし、もらったぞアクエリアスよ」
そこに勝利を見て仕掛けるのだった。
「この炎が勝つ、ベリアルの炎がな！」
「くっ！」
「さあ死ぬのだ！」
レダの炎がさらに勢いを増してきた。カミュのその綻びに乗じたのである。
「もらった！」
「おのれ、まだだ！」
だがカミュも踏ん張ろうとする。小宇宙をさらに込めてそれで防ごうとする。彼等の闘いは今レダに傾こうとしているかのようであ

った。

第五十四話　完

2009・9・16

第五十五話　痛み分けその一

痛み分け

レダは今まさにであった。カミュをその自らの炎で押し潰そうとしてきた。

「さあアクエリアスよ」

そのさらに勢いを増した漆黒の炎を見据えながらここでもカミュに言ってきたのだった。

「この炎で焼き尽くしてくれるわ」

「抜かった、ほころびが生じてしまったか」

「ほころびがあればそこに入ることができる」

レダはそれを見逃さなかったのである。そういうことだった。

「それこそが千日間戦争を終わらせることができるただ一つのポイントだ」

「それでは貴様はそこに付け入るか」

「その通りだ。それではだ」

ここでまた言うレダであった。

「最後だ、これでな」

「しかしだ」

それでもだった。カミュの目はまだ死んではいなかった。確かに劣勢に陥ってもだ。それでもその目は生きているのであった。

「劣勢になったからといって諦めることは聖闘士の辞書にはない」

「ではどうするというのだ。この状況で」

「知れたこと。覆すだけだ」

それだというのだった。

「それだけだ」

「覆すというのか」

「おかしいとでもいうのか？」

「ではやってみるのだな」

レダは今は勝利が間近にあると感じていた。その為今の笑みに勝ち誇ったものが生じていた。
「この状況でどうやって覆すのかをな」
「では見るのだ」
ここでまた冷気が起こった。さらに強くなったのだ。
そしてその冷気が黒い炎の周りを覆ってきた。そうして。
「炎の周りを？」
「そうだ。炎に対するにはこうした方法もある」
言いながらレダのその炎を冷気で覆っていく。すると炎は全体から弱ってきたのだった。
「その様にして弱めてくるか」
「氷はただ正面から攻めるだけではない」
カミュは言うのだった。その表情はクールなままである。
「こうした方法もあるのだ」
「成程な。それで劣勢を覆すのか」
「そういうことだ。確かに正面から攻めるより冷気は限られている」
カミュはそれはわかっていた。しかし今回はそれがかなりの効果があるのだった。
「しかしそれでもだ。その周囲からの冷気によって貴様の炎は弱められた」
「考えたものだな。私が予想したよりも上ということか」
「これで互角に戻った」
カミュの言葉通りだった。弱められた炎は退けられ再び互角の位置にまで追いやられた。カミュの作戦勝ちとも言っていい状況であった。
「これでな」
「やるものだ」
レダはそうしたカミュの手腕を賞賛してみせたのだった。
「どうやら我々はここではお互いを倒すことはできないらしいな」
「だとすればどうするのだ？」

「止めるとしよう」
不意にこう言うレダだった。
「今はな」
「止めるというのか」
「そうだ。私は降りる」
言うと共にだった。炎からその両手を離したのだった。
それを見てカミュも氷から両手を離した。するとそれにより氷と炎は互いにぶつかり合うのみとなり最後にはお互い消え去ってしまったのだった。青と黒の激突はこれで終わった。
その闘いを降りたレダだったが。彼は構えを解いてそのうえでカミュに対して告げるのだった。
「今回は引き分けとしておこう」
「引き分けか」
「決着は次の機会にしておく」
彼からの言葉であった。
「次にな」
「再び我等が闘うことになるというのか」
「運命が導けばだ」
彼が言うにはそうであるというのであった。
「そうなる。それにだ」
「それに。今度は何だというのだ」
「私は黄金聖闘士達の中では貴様とだけ闘うつもりだ」
そうだというのであった。今のレダは。

第五十五話　痛み分けその二

「貴様とだけな」
「そうするというのか」
「他の八大公達も同じだ」
彼等もだというのである。
「それぞれが決めた相手でなければ闘うつもりはない」
「考えてみれば私もだ」
カミュもまたレダのその言葉と同じ様なことを口にしたのだった。
「そうでなければな」
「そうか。貴様も私でなければか」
「他の八大公達には興味がない」
やはりレダと同じような言葉であった。
「興味があるのはベリアル、貴様だけだ」
「面白い。それではだ」
「また会うとしよう」
カミュがそのレダに向けた言葉だった。
「その時にこそだ」
「決着をつけよう」
こう言い合うとレダは姿を消していった。まるで煙の様にその姿を消していく。
「帰るのか」
「また会おう、アクエリアスよ」
その姿を消していく中での言葉だった。
「決着をつけるその時にな」
「私もまたその氷の技を再び見せよう」
「漆黒の炎で焼き尽くしてみせよう」
レダの消えていくその身体に炎が見えたような気がした。今のカミュは。

「その時のことを楽しみにしておくがいい」
「そうなればいいのだがな、とだけ言っておこう」
こう言葉を交えさせたのが終わりだった。レダは戦場を去った。
後に残ったのはカミュだけだった。彼一人が雪原に立っていた。
その彼のところにサガ達が来た。そうしてそのうえで彼に声をかけてきたのだった。
「ベリアルはどうなった」
「去られてしまった」
こうそのサガに対して告げたのだった。自分の横に来た彼にだ。
「申し訳ない」
「いや、今回の戦いはこれでいい」
しかしサガはそれでいいというのだった。
「他の狂闘士達を倒せただけでな」
「それでいいというのか」
「そうだ。ベリアルを倒すのは次の機会でいい」
サガは教皇であるシオンと同じようなことを述べていた。
「次でな」
「その次こそトラキアとの決戦になるか」
「そうかも知れない」
カミュもその可能性を否定しなかった。
「戦いの行方次第ではな」
「そうなるかもか」
「何はともあれここでの戦いは終わった」
サガは今度はこのことをカミュに告げた。
「これでな」
「終わりか。それは確かだな」
「我等の戦いも既に終わっている」
このこともカミュに対して告げたサガであった。
「だからだ。最早何もすることはない」
「そうだな。しかし」

だがここでカミュはいぶかしむ顔になった。そうしてそのうえで今は誰もいなくなったその雪原に目をやりそのうえで述べるのであった。

「これで五つ目の戦いだが」

「うむ」

「何故狂闘士達はそれぞれの場で戦うのか」

彼がわからないことはこのことだった。何故彼等が世界各地で自分達聖闘士を誘い込む様にして戦うのか。それがどうしてもわからないのであった。

「何故だ。それは」

「それは私にもわからない」

このことに対してはサガにしてもわかりかねることであった。それで首を傾げさせてそのうえでカミュに対して述べることしかできなかった。

「どうにもな」

「そうか。貴方がわからないのなら誰にもわからないな」

「済まない」

「いや、いい」

謝る必要はないと返しもしたのだった。

「それはいい」

「そうか。済まないな」

「それよりもだ」

カミュはさらに考えているのだった。何故彼等がそれぞれの場所であえて戦うのか。そのことをまだ考えているのだがどうしても答えが出なかったのだった。

第五十五話　痛み分けその三

それで結果として諦める様に。こう述べたのだった。
「今は考えても仕方のないことの様だな」
「その通りだな」
サガも彼の言葉に対して頷いてみせた。
「今の時点で考えても仕方のないこともある」
「一つ思うのは一気に聖域に攻めて来ないのは何故かだが」
それでもこのことについても考えもするのだった。
「それは何故か」
「一度総力を挙げて聖域に攻め寄せてきたな。そういえば」
サガは今のカミュの言葉からこのことも思い出したのだった。考えてみればそうしたこともかつてはしてきた。しかし今はそれをしないのである。
サガにとってみても今こうして狂闘士達が各地で自分達を誘き出す様にして戦う理由がわからなかった。そのことの戦略的必然性がどうしてもわからなかったのである。
それで彼も考えてみたが。やはり答えは出なかった。
「やはりわからないな」
「そうか。貴方もか」
「やはりもう一度聖域に攻撃を仕掛けるのが妥当だ」
彼は言うのだった。
「若しくはだ。誘き出すにしてもだ」
「あえて街や一般市民を狙いそのうえで我等を誘い出す」
「自分達の有利な場所でだ。そうすることも可能だ」
サガはそうしたやり方についても述べた。
「むしろその方が彼等に相応しいと思うのだが」
「破壊と殺戮こそを無上の喜びとするならば」
「それならば妥当だ。しかし今はどの場においてもただ誘い出すだ

けだ」
「それがわからない」
「私もだ」
カミュにしてもサガにしてもどうしてもわかりかねることであった。
「それについてはな」
「何かあるのは間違いないが」
それは察しがつくことだった。何もないのに戦うということは有り得ないからである。
「しかし。それにしてもだ」
「考えても今はわからないであってもな」
「考えてしまうか」
「あの、それでですけれど」
「ここで考えても仕方ないですし」
考え続けようとする彼等に対して青銅の者達がそれぞれの後ろから告げてきた。
「もう帰りませんか」
「戦いも終わったことですし本当に」
「むっ、そうだな」
「確かにな」
二人も彼等の言葉に気付いて顔を向けるのだった。戦いは終わったがついつい話に夢中になってしまっていたのである。やや迂闊なことに。
「それでは戻るとするか」
「ここに居続けても仕方のないことだ」
「ええ。それじゃあ」
「帰りましょう」
青銅の者達は笑顔で二人の黄金聖闘士達にまた告げた。
「それで帰ったらですけれど」
「途中サンクトペテルブルグにも寄りますか」

「いや、フィンランドから帰るつもりだ」
しかしカミュはこう彼等に告げたのだった。
「そこから空で帰るつもりだ」
「あれっ、じゃあ犬達は」
「どうなるんですか？」
「空からロシアの持ち主に返す」
空輸ということである。
「そこからだ」
「空からですか」
「それでなんですか」
「海を使ってもいいのだがな」
カミュは海路についても述べた。サンクトペテルブルグは港町である。しかしこの港町には一つ大きな問題もある。彼はそれについても言うのだった。
「しかしだ。今の季節はな」
「そうですね」
「それは無理かと」
ここでバベルとオルフェが彼のその言葉に応えて述べるのだった。
「今の時期北海は凍りますので」
「そこを進むとなりますと」
「だからこそ空なのだ」
その根拠を理由としてのことなのであった。

第五十五話　痛み分けその四

「フィンランドからそうして戻り犬達を送るのはな」
「空から犬ですか」
「何か大掛かりですね」
「何、大したことはない」
こう青銅の者達に述べるカミュだった。
「輸送機を使えば案外楽にいける」
「そうだな。それぞれ檻に入れて運べばな」
サガも話を聞いて理解したのであった。
「そういったことも存外容易に進めることができる」
「その通りだ。ではフィンランドに向かおう」
ここまで話して全員に告げるカミュだった。
「そこで少し骨休めをしてから聖域に戻る」
「ええと。フィンランドっていうと何かあったか？」
「オーロラとサウナか？」
「それ位じゃないのか？」
彼等はフィンランドというとそういったものしか思い浮かばなかった。彼等のうち誰もその国とは馴染みがなかったのである。だからである。
「まあサウナであったまってな」
「それで帰るか」
「そうだな。フィンランドもサウナだしな」
「そうそう」
「案外よく知っているな」
サガは彼等の話を聞いて言った。
「フィンランドのことを」
「まあこれ位は知ってますよ」
「フィンランドに行ってなくてもね」

「そうなのか。ただし食べ物はあまり聞かないことは言っておく」
　このことは言い忘れないサガだった。
「それはな」
「あっ、そういえば食べ物と言われてもあまり」
「そうだよな」
　青銅の者達は彼に言われてこのことに気付いたのだった。確かにフィンランドと言われてもこれといって思い浮かべる食べ物はなかった。
「何もないよな」
「だよなあ。酒もな」
「食べるものはやはりロシアの方がいいのかね」
　こんな言葉まで出て来ていた。
「料理とかは」
「そうかも知れないな」
「しかし今は別に食べ物はいいだろう」
「食べるのならギリシアに帰って懐かしいものを食べるのもまたいい」
　バベルとオルフェは少しぼやいている青銅の者達に対して言った。
「だからだ。今は別にな」
「食べ物にはこだわらなくていいだろう」
「それもそうか」
「ギリシアでゆっくり食べればいいよな」
「だよな」
　青銅の者達も二人の言葉に頷きもした。言われてみればであった。
「それじゃあ今は食べ物はギリシアまで置いておいて」
「それからだよな」
「ああ、それじゃあサウナでも楽しむか」
　これは忘れないのだった。長い間寒い場所にいた為か彼等はやたらとサウナに入りたがっている。しかしこれも無理のないことであった。

「そこであったまって」
「ギリシアに帰るか」
「だよな」
彼等は笑顔であった。今から楽しみにしているのである。
「さて、それじゃあカミュ様、サガ様」
「まずはフィンランドに入って」
「それから帰りましょう」
「うむ。それではだ」
カミュが彼等に対して応えた。
「帰るとしよう。フィンランドからな」
「サンタクロースに会えればいいんですけれどね」
「それは無理か」
冗談めかした言葉も出された。
「まあまずはフィンランドに入って」
「そこから聖域に帰って一件落着ってことだな」
「そういうことだな」
こう話してそのうえで戦場を後にする彼等であった。ロシアでの戦いはこうして終わった。この戦いのことは程なくして聖域にもトラキアにも伝わった。

第五十五話　痛み分けその五

「そうか。カミュがか」
「はい」
シャカがシオンの前に片膝をついて控えていた。そうしてそのうえで彼に対して報告しているのだった。
「ベリアルと分けました」
「そうか。ならばいい」
それを聞いて納得したように頷くシオンであった。
「分ければな」
「それで宜しいのですね」
「そうだ。いい」
あらためていいと答えるシオンであった。
「それでな。今はそれでいいのだ」
「左様ですか」
「シャカよ」
ここまで話したうえであらためてシャカに対して言う。
「今回の戦いではまずは御前には聖域の護りに就いてもらっているが」
「はい」
「やがて御前にも出てもらう時が来る」
厳かな声であった。
「その時まで頼むぞ」
「わかっております」
シャカの言葉は静かなものであった。それと共による肯定の返答であった。
「そのことは」
「そうか。もうわかってくれているのだ」
「問題はです」

今度はシャカから言うのであった。
「これからのトラキアですが」
「トラキアか」
「一つ気になることがあります」
シャカはさらにシオンに対して述べる。
「デスマスクに倒された五人の狂闘士達のことですが」
「死者の顔になかったのだな」
「そうです。デスマスクに倒されたならばです」
このことについてさらに言うシャカであった。そこにこそ何かがあるというのは明らかな言い振りであった。
「その顔が巨蟹宮に出る筈ですが」
「しかしそれはない」
「デスマスクは既に気付いているでしょうか」
「あの男が気付かずして誰が気付くのか」
こう言うシオンであった。
「間違いなく気付いている。あの男も愚かではない」
「はい、その通りです」
シャカにしろデスマスクのことは知っていた。知らない筈がなかった。そしてその評価も決して低いものではなかった。彼を知っているからこそである。
「しかしあえて言いません」
「多くを語る男ではない」
当然ながらシオンも彼のことを知っていた。
「言うべきことはな。あえて言いはしない」
「自分からは中々」
「それを言わせること自体が中々厄介なことだ」
やはりデスマスクのことを知っているのであった。そうしてそのうえで今シャカと話をしている。シャカもまた彼について知っていることを踏まえてである。
「しかしだ」

「しかしですか」
「おそらく黄金聖闘士ならば殆どの者が気付いているだろう」
このこともわかっているシオンであった。
「やはりあえて口には出さないが」
「私もそう見ています」
そしてそう見ているのはシャカも同じだった。彼等はわかったうえで話をしているのである。
「やはり狂闘士達は」
「死んではいる」
それははっきりと感じ取っているシオンであった。
「だが」
「だが、ですか」
「そうだ。しかし冥皇ハーデスは死した狂闘士達を蘇らせている」
シオンはこのことも知っているのだった。
「そしてアーレスもだ」
「有り得ますか」
「先のアーレスとの聖戦ではその話はなかった」
「はい、それは確かに」
「だがあれからアーレスは冥界に逃げ込んだ」
彼は言うのだった。

第五十五話　痛み分けその六

「そこで何かしらの力を身に着けていてもおかしくはない」
「冥府の力をですか」
「若しくはその小宇宙で狂闘士達を蘇らせるか」
こうも考えるのであった。幾つか想定できることを考えている。
「それもまた有り得る」
「確かに。アーレスもまた神々の一人」
これは最早言うまでもないことである。アーレスがゼウスとヘラの間の子であるということは最早誰もが知っていることなのだから。
「それだけの力があっても不思議ではありません」
「その通りだ。我等にまだアテナは降臨されてはいないが」
「アーレスは何時冥府から戻って来てもおかしくはないです」
シャカはあえて彼等が最も恐れていることを口にしてみせた。
「何時でも」
「その通りだ。それにだ」
「それに」
「トラキアにすればアーレスが帰還することこそが最も有り難いことなのだ」
このことを言うのであった。シオンもまた。
「神、それもオリンポスにも名を連ねる程の力のある神が降臨するのだからな」
「それだけの神が戻れば」
「彼等の有利は絶対のものとなる」
シオンはさらに言った。
「確実にな」
「では教皇」
シャカは顔を上げた。目を閉じたままであるが。
「今トラキアは」

「間違いなくアーレスの降臨の為に動いている」
シオンもまた読んでいた。彼等の思考は。
「しかしだ。具体的にそれが何かというとだ」
「私にもわかりかねます」
シオンにもシャカにもそこまではわからなかった。彼等が具体的にはどの様にしてアーレスの降臨の為に動いているかとなるとだ。
だがここで。シャカはふとした感じで言うのだった。
「ただ」
「ただ。何だ」
「アーレスは戦いの神です」
彼はこのことを言ってきたのだった。
「破壊と流血を何よりも好みます」
「侵略による戦いの神だな」
「その為ローマで尊ばれておりました」
ローマ帝国は侵略によりその国を大きくさせてきた。それだけでなくローマはそのはじまりをアーレスの子であるロムルスとレムスにあるとされている。だからこそアーレスが尊ばれてきたのである。その名はマルスとなっていたが司っているものは同じであった。
「ですから今の我等との戦いも関係があるのかも知れません」
「今の各地での戦いともか」
「しかしです」
だがシャカはさらに言うのであった。
「例え今の戦いに彼等の思惑があったとしても」
「我等は今の戦いを止めるわけにはいかない」
「その通りです。若し我々が行かなければ彼等はそこで破壊と殺戮を行うでしょう」
「それは目に見えている。彼等は狂闘士だ」
そのこと自体に根拠があることだった。
「破壊と殺戮、そして流血こそが彼等の生きがいでありすべきことなのだからな」

「だからこそ我等が行かなければです」
「その場所を殺戮の場と変える」
「はい、間違いなく」
「どちらにしろ我々は行かなくてはならない」
例えそれが敵の思惑の中にあるとしてもだった。この辺りは実に難しいことであった。何故なら彼等は聖闘士であるからである。
「必ずな」
「ですから」
「わかっている。それでもだ」
「アーレスの復活は果たしてあるでしょうか」
今度シャカはその具体的なことについて言及した。
「それについてはどう思われるでしょうか」
「有り得る」
これがシオンの予測だった。
「充分にな」
「そうですか。そう思われますか」
「シャカ、御前はどうか」
己の考えを述べてからシャカに対して問い返した。

第五十五話　痛み分けその七

「御前はこのことについてどう思うか」
「覚悟しておかなければなりません」
これがシャカの返答であった。
「それにつきましては」
「そうか。御前もまた同じなのか」
「我等にアテナが降臨されなくともアーレスの降臨がだからといってないとは限りません」
シャカは言うのであった。
「ですから」
「その通りだ。常に最悪の事態を想定しておく」
聖域の頂点にある者として相応しい、またそうでなくてはならない言葉であった。
「それもある」
「そしてです」
シャカはここでさらに言うのであった。
「アーレスだけではないかも知れません」
「四柱の神々か」
「先の聖戦において猛威を奮った彼等もまた」
「その通りだ。冥皇には眠りの神ヒュプノスと死の神タナトスがいた」
彼等のことも今尚聖域に伝えられている。彼等の恐ろしさは。
「かつてヒュプノス配下の四柱の神々と彼等の戦いで聖域は二人の聖闘士と教皇とその兄を失っている」
「蟹座のマニゴルドと山羊座のエルシド」
シャカがまず名を挙げたのは彼等であった。彼等の勇名もまた今尚聖域に語り継がれている。
「そして教皇セージとハクレイですか」

「彼等の犠牲がありようやく彼等を封じ退けることができた」
「黄金聖闘士二人と教皇達二人を失いようやく」
「あの四柱の神々もまた同じだ」
シオンの言葉が深刻なものになる。
「それにエリスもいる。神は既に一人いる」
「復讐の女神エリスが」
「あの女神の力もまた尋常なものではない」
それも既にはっきりとわかっていることだった。わからずして今こうしてここにいることはできない。既にその手にかかって倒れているところだ。
「トラキアの力は恐ろしいものがある」
「狂闘士達だけでなく神々までも」
「人だけではない」
シオンは言い切った。
「神々までもいるのだ」
「それに対して我等は」
「御前達だ」
彼等だと告げるシオンであった。
「御前達と。そして私がいる」
「我々と教皇が」
「御前達は今十二人いる」
黄金聖闘士は十二人だ。それが全て揃っているというのである。
「童虎こそ聖域に来られないがな」
「ですが十二人全ております」
「その御前達と私がいる」
また言うシオンであった。
「例え神々がどれだけいようともだ」
「はい。我等は戦うべきです」
目は閉じられたままであったが小宇宙ははっきりと存在しているシャカであった。

「地上の人々の為に」
「そしてアテナの為にだ」
彼等の戦うその目的を確かめ合うのだった。
「それが彼等と我々の違いだ」
「ですから我々は」
そしてまた話すシャカだった。
「戦うのです」
「アーレスを倒さなければこの世の平和は守れない」
シオンはこのことを強く語った。
「シャカよ、そして次の戦いがはじまる」
「次の戦いですか」
「今度は南米になる」
そこだというのである。
「そこでの戦いになる」
「南米ですか」
「間違いなく八大公も出陣する」
そのことは最早言うまでもなかった。彼等の今の行動を考えていくと彼等のうちの誰かが出陣してそのうえで配下の狂闘士達も姿を現わすこともまたそうであった。
「だからこそ我々もまた、だ」
「黄金聖闘士を出陣させますか」
「おって話す」
シオンは言った。
「カミュが帰ってからになるだろう」
「カミュは数日のうちに帰って来ます」
シャカはこのこともシオンに告げたのだった。
「それからですね」
「どうやらトラキアも八大公の帰還を待ってから動くようだ」
彼等の動きもまた読んでいるシオンだった。これもまた彼等の過去の動きからである。それによって分析しているのである。

「だからこそだ。我々もまた」
「彼等の動きを見てからですか」
「厄介なのは今度の戦いは相手の動きを見ての戦いだ」
それだというのである。今の彼等の戦いは。
「先にこちらから手を打つことができないのが厄介な話だ」
「攻撃する側はその攻撃する場所を自由に選ぶことができます」
シャカがここで言う言葉はこうしたものであった。戦略に入る部類の言葉であった。
「この聖戦では攻める側は彼等ですから」
「我々はそこに向かいそのうえで彼等を倒す」
「そうです。我々は護る側です」
「その通りだ。攻める側ではない」
シオンはその玉座から述べたのだった。
「護る側にある」
「ですが教皇」
また言ってきたシャカだった。
「だからといって遅れを取っていてもです」
「遅れを取っていると思うか」
「彼等の思惑が何処にあるかだな」
「それがわからないことが問題ですが」
「今はできるだけのことをしていくしかない」
「はい。耐えていればまた道が開けます」
「そうだな。我々は必ず勝てる」
彼はまた言った。
「その時を待とう」
「はい、それでは」
こう言葉を交えさせる二人だった。彼等は今は座って戦っていた。
しかしそれでも一歩も引いてはいなかった。少なくともその心は。

第五十五話　完

2009・9・21

第五十六話　ミロ出陣その一

ミロ出陣

「教皇、只今戻りました」
「この聖域に」
「うむ」
教皇の間においてだった。シオンはカミュとサガの帰還の報告を受けていた。今回も彼と共に黄金聖闘士達が集いそのうえで報告をしていたのである。
「九人の狂闘士達は倒したのだったな」
「はい」
「そして共にいたインプ達は白銀及び青銅の者達が」
「そうか。全て倒したのだな」
「いえ」
しかしであった。ここでカミュが彼に対して告げた。
「残念ですが八大公であるベリアルだけは取り逃がしてしまいました」
「そうか」
「申し訳ありません」
このことに対して深く頭を垂れるカミュであった。
「全ては私の不手際です」
「謝る必要はない」
しかしここでシオンはこう彼に告げた。
「それには及ばぬ」
「宜しいのですか」
「八大公を倒すのは今ではない」
シオンは彼の謝罪を退けそのうえでこう言うのであった。
「その時でなければ倒せはしないものだ」
「左様ですか」

「だからよい」
またこう告げてカミュのその謝罪を退けるのだった。
「それはな」
「有り難き御言葉」
「それよりも皆無事に帰って来て何よりだ」
彼はそのことを心から喜んでいた。レダに逃げられたことは最初からどうでもいいのであった。少なくとも彼はそうなのだった。
「それでよしとする」
「左様ですか」
「そしてだ」
こうカミュとサガに告げたうえであらためて言うのであった。
「次の戦いだが」
「はい」
「その戦いは」
二人以外の黄金聖闘士達がここで顔をあげる。皆いつも通り片膝をつきそのうえで彼に対してその顔をあげてみせたのである。
「何処でしょうか」
「そして誰が」
「南米だ」
シオンはまずは場所を告げた。
「アンデスでの戦いとなる」
「アンデスですか」
「その地で」
「高山での戦いとなる」
そのアンデスの地形のことも話した。このこともであった。
「そこでの戦いだがな」
「そしてそこに向かうのは」
「誰になるでしょうか」
「既に決めてある」
こう黄金の者達に対して告げた。

「それはだ」
「はい、それは」
「一体誰が」
「ミロよ」
彼がここで名前を告げた黄金聖闘士は彼であった。
「御前が行くのだ」
「わかりました」
「思う存分戦って来るのだ」
こうも彼に告げるのであった。
「いいな」
「御意に」
ミロはすぐに頭を垂れて彼の言葉に応えた。

第五十六話　ミロ出陣その二

「では今よりアンデスに向かいます」
「頼んだぞ。国はだ」
「ペルーでしょうか」
「そうだ、ペルーだ」
ミロの問いに対してその通りだと返すシオンであった。
「その国だ。ペルーだ」
「あの伝説のエルドラドがあったという国」
そのことはミロも知っているのだった。ペルーはそこに多くの今では消えてしまった歴史を内包しているのである。そうした国なのだ。
「あの国に行ってもらいたい」
「そしてそこで狂闘士達を倒して御覧にいれましょう」
「うむ。敵は今回もおそらく十人だ」
「はい」
「こちらもいつも通り出す」
数は変わらなかった。今回も。
「白銀の者が二人に青銅の者が四人だ」
「その者達には休んでもらいます」
だがミロはここでこう言うのであった。
「出陣する必要はありません」
「御前一人で充分だというのか」
「そのつもりです」
「いや、ミロよ」
自信に満ちた声を出してみせる彼に対してだった。アイオロスが声をかけてきたのであった。サガと並ぶ黄金聖闘士達のまとめ役である彼がだ。
「それは駄目だ」

「駄目だというのか」
「そうだ。確かに御前の力はかなりのものだ」
それはアイオロスも認めるところであった。伊達に黄金聖闘士の一人ではないということである。
「しかしだ。敵は十人だ」
「ならば丁度いい数だ」
「いや、貴様の実力は八大公と伯仲している」
「あのうちの一人とか」
「そうだ。御前にはその八大公の相手をしてもらわなければならない」
こうミロに対して告げるのだった。
「無論他の狂闘士達の相手もあるのだがな」
「それをやってみせると言っているのだが」
「焦る必要はないということだ」
アイオロスはこうも彼に言ってみせたのであった。そうしてシオンに対して顔を向けてそのうえでこう申し出てきたのであった。
「教皇」
「うむ」
「今回は私が参ります」
こう告げたのである。
「このアイオロスが」
「言ってくれるか。ミロと共に」
「喜んで」
今度は彼が行くというのである。サガに代わって。
「行かせて頂きます。中東の時と同じように」
「わかった。では頼むぞ」
「畏まりました」
「教皇、別にアイオロスも共に行かずとも」
ミロはそれがまだ不服であった。それでその眉を無意識のうちに顰めさせてしまいそのうえでシオンに対してまた言うのであった。

「このミロ一人で」
「アイオロスも言ったが焦る必要はない」
シオンもまた彼に告げたのであった。
「戦いにおいて焦りは破滅の元なのは知っている筈だ」
「それはその通りですが」
「ではわかったな」
これ以上はミロに言わせない強い口調になっていた。
「ペルーにはミロと。そして」
「このアイオロスが」
「そうだ。当然白銀と青銅の者達にも出てもらう」
「わかりました」
アイオロスが受け答えをする。ミロは今は口を閉ざしていたがその彼に対して再び声をかけるシオンであった。
「ミロよ」
「はい」
「戦いとは御前一人でするものではないのだ」
こう彼に言うのであった。

第五十六話　ミロ出陣その三

「そのことをわかることだ」
「この戦いだけでなく、ですか」
「御前達の戦いはこれからも続く」
今のアーレスとの聖戦だけではないというのである。この言葉はミロだけに向けられたものではなかった。彼以外の他の黄金聖闘士達にも向けた言葉であった。
「だからだ。よいな」
「わかりました」
教皇の言葉はまさにアテナの言葉だ。絶対であると言ってもいい。だからこそもう彼も頷くしかなかった。そして彼は頷いたのであった。
「それでは」
「頼んだぞ。それではだ」
「はい、教皇」
アイオロスが応えた。
「今回は我等が」
「うむ、頼んだぞ」
「わかりました」
「それではこれでこの会議を終わる」
シオンはここまで言うと玉座から立ち上がった。そうして己の前に控える黄金聖闘士達全員に対して厳かに告げるのであった。
「ではミロとアイオロスはペルーに向かう」
「はっ」
「それでは」
「そして他の者はそれぞれの宮殿の護りに就く」
各員が司るその宮殿にだ。普段彼等はそこにいて聖域の護りにあたっているのだ。彼等は聖域の護りの要でもあるのである。

「よいな。では下がれ」
「畏まりました教皇」
「ではこれで」
こうして彼等も立ち上がりそれぞれの持ち場に向かう。教皇の間から双魚宮までは紅の薔薇が敷き詰められている。アフロディーテの薔薇である。
「アフロディーテよ」
「はい」
アフロディーテはアルデバランの問いに対して応えた。
「この薔薇は」
「わかっております。それでは」
彼が右手を下から上に一閃させるとそれで終わりであった。薔薇達は一斉にどきそこに白い道を見せたのであった。これで双魚宮まで行けることになった。
「参りましょう」
「しかしまああれだな」
デスマスクはその薔薇がどけられた長い階段を降りながら言うのだった。
「アフロディーテとはあまりやりたかねえな」
「私とはですか」
「薔薇に見送られて死ぬって言うのは俺の趣味じゃねえ」
だからだというのである。
「そういうのはな」
「だからですか」
「もっとも俺は誰にも負けはしねえけれどな」
密かな自信もここでは見せる。
「あの蝿野郎も今度会ったら叩き潰してやるぜ」
「それは俺も同じことだ」
シュラは既にその剣を輝かせていた。
「ベール。今度こそ会えばその時こそだ」

「貴方達がそこまで認めるとは」
ムウは二人のその言葉を聞いて述べた。
「ベルゼブブもベールもかなりの実力者だったのですね」
「今まで俺の剣を前にして生きた男はあの男がはじめてだった」
これがシュラのあのジークへの賛辞の言葉であった。激しい闘志の中にもそれを忘れてはいないのであった。
「そういうことだ」
「アスタロトも然りです」
アフロディーテも言ってみせた。
「どうやら薔薇だけでは足らないのかも知れません」
「左様ですか。貴方もまた」
「モロクの力、侮れるものではない」
アルデバランもここで同じことを口にする。
「決してな」
「モロクもですか」
「あそこまでの剛の小宇宙はない」
「貴方もまたそう仰るのですか」
「力なら誰にも負けない自信はあった」
多くは口には出さないがである。しかしそれが揺らいでもいたのだ。
「しかしだ。それでもだ」
「モロクもまた侮れませんか」
「その通りだ。手強い相手だ」
その実力をはっきりと認めるアルデバランであった。
「今度会った時は間違いなくどちらか死ぬ」
「貴方に倒れられては困るのですが」
これはムウの本音であった。偽らざる心の言葉であった。
「何があろうとも」
「無論それはないようにはする」
これは当然のことであった。彼にしても倒れるつもりはないこと

だった。

第五十六話　ミロ出陣その四

「それはな」
「そうか」
「ベリアル。策もあるが実力もかなりのものだ」
カミュもまたここで言った。
「その力。尋常なものではない」
「黒い炎でしたね」
ムウは先程彼がシオンに対して報告したことを述べていた。
「それですね」
「私の氷に対抗できるのだからな」
「貴方もまた手強い相手と対峙された」
「次には倒しておく」
クールに述べたカミュだった。
「次に会ったその時にだ」
「そうして下されば何よりです。そしてミロ」
「ああ」
ミロはムウの言葉に対して応えた。その顔を彼に向けもした。
「わかっている。今度のアンデスの戦いではだ」
「無理はされないで下さい」
シオンと同じ言葉を彼に告げたのであった。
「決して」
「俺としては来た八大公を倒したいのだがな」
「それは最高の形ですがそれでも無理はされないで下さい」
こう述べるムウであった。やはりその言葉はシオンと同じものである。
「決して」
「ここで倒せなくともか」
「生きていれば次があります」

だからだというのである。言葉は決して焦ったものではなかった。むしろムウの方が落ち着いている程であった。その落ち着きでの言葉だった。

「必ず次が」

「その時に倒せればか」

「はい。それに今の戦いでは」

ムウは彼自身のセブンセンシズからあるものを感じ取った。そうしてそのうえで言うのであった。

「私達は決定的な勝利を得られないようですし」

「決定的な、か」

「決戦の時が来ます」

また言うムウであった。

「その時にが来ればです」

「わかった。その時だな」

そのムウの言葉に頷くミロだった。

「行って来る。その時の為にな」

「はい。これで残るは」

ムウはここでさらに言葉を続けるのであった。

「アイオリアと私ですね」

「俺か」

「貴方にも出陣の時が来ます」

彼は言うのだった。

「その時に備えておいて下さい」

「俺も行く時が来るのか」

「そうです」

だからだというのだった。

「私もまた同じです」

「それでは俺はその時にだ」

アイオリアの拳が光った。無意識のうちに。

「狂闘士達を倒す」

「まああまり無茶をして怪我をしないようにな」
デスマスクが意気込む彼に茶々を入れてきた。
「こけて怪我をするとかな」
「おい、俺がそんな風に見えるのか」
「少なくとも冷静さには欠けるな」
シュラは実に冷たく言い切ってみせた。
「周りが見えていないことが多い」
「貴方はそれを克服すればいいのですが」
アフロディーテも言う。三人の同時攻撃であった。
「まず無理でしょう」
「何故俺はここまで言われるんだ」
言われるアイオリアとしてはたまったものではなかった。そんな話をしているうちにミロのその宮殿にまで来たのであった。
「では行って来る」
「行くのです、ミロ」
シャカが彼に言ってきた。
「そして見るべきものを見てくるのです」
「見るべきものか」
「はい」
それだというのである。
「それを見て来るのです。いいですね」
「わかった」
シャカの言葉に頷いた。今度は彼に対してであった。

第五十六話　ミロ出陣その五

「それではな。見て来る」
「是非。それでは」
こうしてミロは出陣した。彼は今出陣したのであった。その頃アイオロスも一人出陣した。ミロと共に白銀の者が二人、青銅の者が四人出陣してもいた。
そして同時に。狂闘士達もまた動いていた。八大公達がエリスの前に集いその言葉を受けているのであった。
「レダよ。まずは御苦労だった」
「有り難き御言葉」
レダはエリスの言葉を受けていた。同志達の先頭に片膝をついて座っている。
「アクエリアスの腕はわかったな」
「はい」
このことに対して述べるのだった。
「しかと」
「そうか。ならばよい」
エリスは彼のその言葉を聞いて満足そうに頷いた。
「それならばな」
「有り難うございます」
「では暫く休むのだ」
レダに対して労いの言葉も忘れない。
「よいな」
「はい。それでは」
「これで五つの戦場での戦いが終わった」
エリスはレダに告げた後であらためて他の八大公達に対しても告げた。
「残るは三つだ」

「はい、そして次は」
「アンデスです」
「今はペルーという国になっている」
そこだというのである。シオンと同じ場所を指し示している。
「そこに行ってもらうことになるが」
「そして行くべき者は」
「誰でしょうか」
「サリアよ」
「はい」
呼ばれた彼がすぐに応えて顔をあげる。
「御前が行くのだ」
「有り難き幸せ」
「敵はおそらくスコーピオンか」
彼だと。エリスも呼んだのである。
「あの者が来るであろうな」
「相手にとって不足はありません」
毅然とした言葉で返すサリアだった。
「どれだけの敵が来ようとも」
「そう言ってくれるか」
「例え黄金聖闘士といえども」
そうなのであった。彼にとっては。
「このサリアの敵ではありません」
「では見事戦って来るのだ」
「はい。では今よりアンデスに」
「アンデスか。また面白い場所に行くな」
「確かに」
他の八大公達がエリスが彼に告げたのを見てそれぞれ言ってきたのであった。
「そこで見事戦って来るのだ」
「精々な」

「わかっている。私は決して遅れを取ることはない」
その流麗な顔とは裏腹に強いサリアの言葉であった。
「相手が誰であろうともだ」
「では貴様の帰還を楽しみにしておこう」
「見事スコーピオンの首を手に入れて来るのだな」
「そしてアンデスにおいて」
サリアはさらに言った。その強い言葉で。
「アーレス様に私の戦いぶりを御覧になって頂くとしよう」
「それよ」
まさにそれだと。エリスは彼に告げたのであった。
「サリアよ、そして他の者達もだ」
「はい」
「それですねエリス様」
「そうじゃ。アーレス様は常に見ておられるのだ」
彼等の主であるその戦いの神がだ。しかと見ていると今告げるのである。

第五十六話　ミロ出陣その六

「御前達の戦いをな」
「そしてそれが激しければ激しい程」
「アーレス様の御気に召されれば」
「アーレス様の御力となる」
こうも彼等に対して告げてみせたのであった。
「既に封印を解く用意もしてある」
「それもですね」
「あの方々の封印も」
「その通りじゃ。あの者達が戻ればじゃ」
エリスは声を笑わせてきた。まるで血を飲みその味を楽しんでいるかのような。そうした不気味な笑みを浮かべての言葉を出すのであった。
「我等はまた一つ大きな力を得る」
「そのうえでアーレス様が戻られれば」
「我等の勝利は決まったも同じ」
「天皇ゼウス」
まずエリスが名前を出した神は彼であった。オリンポス、そして天界を治める至高の神の一人であす。
「そして海皇ポセイドン」
「はい」
「あの神もまた」
「そして我等が盟友でもある冥皇ハーデス様」
「その方々にも比肩する御力を」
「アーレス様こそが」
「アテナなぞ」
アテナに対しては忌々しげな口調であった。アーレスの父であるゼウスや叔父であり海を治めるポセイドンに向けたある程度の敬意

は彼女には見せないエリスであった。
「何程のことがあろうか」
「全くです」
「戦いとは攻めそして破壊し尽くすもの」
何処までもそれを追い求める彼等であった。
「そのうえで新たな創造があるものです」
「創造、調和、そして破壊」
ヒンドゥーにもある三つのサイクルであった。インドではこの三つが循環してそれにより世界が成り立っていると考えられているのである。
「我等はその破壊を司るのですから」
「それにです」
彼等のその言葉は続く。
「それから行われる創造こそが至高のものだというのに」
「我等による世界、即ち」
彼等の口元が一斉に笑った。そうして出される言葉は。
「力により治められる世界」
「それこそが至高だというのに」
「アテナには所詮わからぬことなのであろう」
エリスの言葉はここでもアテナを否定しそのうえで嘲笑したものであった。
「調和だけを重んじるあの女神にはのう」
「調和は何も生み出さぬもの」
「そこからは何も生まれ出ることはありません」
彼等はこう考えているのであった。このことに対して他に思うことはなかった。
「ですから」
「我等はここで」
「この世界を一度全て破壊する」
エリスは高らかに八大公達に告げた。

「そのうえでじゃ」
「我等の至高の世界を築きましょう」
「力が支配する世界を」
「即ちアーレス様が治める世界」
とどのつまりはそうなのであった。彼等が崇める絶対の対象はアーレスを置いて他にないからだ。彼等にとってはまさにアーレスこそが至高神なのである。
「その世界が生まれるのじゃ」
「アーレス様が正義であり」
「そして秩序であられる世界が」
「思えば」
ここでふとその目を遠くさせるエリスであった。そこに映っているものは栄誉ではなかった。むしろ過去の屈辱と恥辱であった。
「我等は長きに渡って愚弄されてきた」
「その通りです」
「忌々しいことに」
八大公達の言葉がここで苦いものになったのだった。
「アーレス様は天皇ゼウスとその正妻ヘラの子」
「嫡子と言ってもよいというのに」
「しかし多くの者はアーレス様を愚弄した」
それは神々だけではなかった。人間達もだったのだ。人間達はアーレスのその血生臭く殺伐として直情的な気質を忌み嫌いそのうえ愚弄してきたのである。

第五十六話　ミロ出陣その七

「ニンフ達までもな」
「天界にあっても海界にあっても人界であっても」
「アーレス様は愚弄されてきました」
「アーレス様の御考えがわからぬ故にじゃ」
エリスの言葉がさらに忌々しげなものを語るものになっていた。
「それ故にじゃ」
「オリンポスでも他の神々に愚弄され続け」
「そして天闘士からアーレス様の下へ入った我等も」
ここで狂闘士達の由来も語られた。彼等は元は天界の闘士達だったのである。しかしアーレスの下に参じたことにより狂闘士となったのである。
「また愚弄され続けました」
「愚か者達によって」
「しかし」
ここでエリスの言葉がさらに鋭くなった。
「それも終わりじゃ」
「その通りです」
「今から」
八大公達もそれに続く。エリスと彼等の考えは見事なまでに一致していた。
「破壊され尽くしそのうえで創り出される世界こそが我等の世界です」
「新たな世界こそが」
「まずは聖域を滅ぼす」
エリスの言葉はまさにトラキアの戦略目的そのものだった。
「そのうえであらたな世界をじゃ」
「はい」

「それでは」
「頼むぞ」
一言であった。
「まずはサリアよ」
「はい、私はこのまま行かせて頂きます」
サリアはすっと立ち上がった。エリスはその彼を見て他の者にも告げた。
「それではこれで話を終わる」
「はい、わかりました」
「では」
「それぞれこの城を護るがいい」
「それについてですが」
ここでサリアが言ってきたのであった。その出陣する彼がである。
「エリス様」
「どうしたのじゃ？」
「一つお伺いしたいことがあります」
サリアが問うのはこのことであった。
「これまでトラキアには狂闘士達が全て揃っていましたが」
「うむ」
「ですが今はです」
サリアの言葉が警告する類のものになっていた。それはエリスに対する忠告としての意味だけでなく八大公の同志達にも告げた言葉であった。
「聖闘士達との戦いで多くの者が倒れております」
「そのことか」
「それにより護りがかなり減っていますが」
「確かに」
「それは」
他の八大公達も既に立ち上がっていた。そうしてそのうえで彼の言葉に応えるのだった。

「このままではやがて護りは我等だけになります」
「流石に八人だけでは」
「それもじゃ」
しかしここでエリスは落ち着いた声で彼等に告げるのだった。
「心配することはない」
「心配することはないのですか」
「それでは」
「ハーデス様のことを思い出すのじゃ」
エリスが名前を出したのは彼であった。その冥府の世界の支配者である。
「あの方は死した冥闘士達を蘇らせることができたが」
「それですか」
「それではまさかアーレス様もまた」
「左様、おそらく戻られた時にはじゃ」
言葉が笑っていた。それだけでなく顔もだ。
「これまで倒れた者達も蘇らせることができる」
「そうですか、それでは」
「あの者達が再び」
彼等はそれぞれ笑顔になった。それはこれからのことを思い期待に胸を動かしている笑顔であった。
「現れたとなると」
「我々にとっても願ってもないことです」
「そうであろう。それは我にとってもじゃ」
それが期待すべきことであるのはエリスも同じであった。彼女にとっても狂闘士達は自らの手足でありかけがえのない存在であるからである。
「願ってもないことじゃ」
「ですから。是非共アーレス様を」
「そしてそのうえで決戦ですね」
「如何にも。まずはアーレス様じゃ」

何につけてもであった。アーレスの復活こそだった。
「そうすれば我等の願いは思うがままじゃ」
「では。私はその為に」
ここでサリアはその口元を楽しそうに笑わせていた。
「これからアンデスに向かいます」
「うむ、それではな」
「はい」
こうしてサリアは何の不安も気兼ねもなく意気揚々とアンデスに向かうことができた。戦いは古き世界においても行われようとしていた。

第五十六話　　完

２００９・９・２５

第五十七話　遺跡の中でその一

遺跡の中で

ペルーに降り立ったミロはまず。その首都リマの中を歩いていた。リマの中は雑然としていた。街並みだけでなく道も行き交う人々もだ。全てが雑然として混沌とした有様であった。

その雑然とした中においてスーツ姿のミロはかなり浮いていた。それでその中で後ろにいる聖闘士達に対して声をかけるのであった。

「それにしてもだ」

「ええ」

「どうかしたんですか？」

「話には聞いていたがそれ以上だな」

まずはこう言うミロだった。

「この街はな」

「まあそうですね」

「この街は」

それは彼等も同じことを感じていた。あちこちにゴミの山があればそのすぐ側で遊んでいる粗末な身なりの子供達もいる。そんな街であった。

「何か無茶苦茶っていうか」

「カオスっていいますかね」

「これが南米だというのか？」

ミロはこうも言うのだった。

「これが」

「そうみたいですね」

「良しにつけ悪しきにつけ」

ミロの後ろの聖闘士達がまた口々にミロに答えた。

「国全体が貧しいですし」

「社会の歪みってやつも凄いですし」

「聖闘士はそこまでは介入できない」
ミロは一言で言ってしまった。
「とてもな」
「ええ、残念ですが」
「それは俺達の仕事じゃありませんからね」
聖闘士達は平和を守ることがその義務である。しかし政治のことにはその権限も義務も全くないのである。それは誰もがわかっていることだった。
「そういうのは」
「それよりもです」
「そうだ。平和を守ることだ」
既に彼等の言いたいことはわかっているミロであった。
「その為にここに来たのだからな」
「はい、その通りです」
「ですから」
「まずはだ」
ここでミロはまず最も側にいる二人に対して声をかけるのだった。
「シリウス、カペラ」
「はい」
「何でしょうかミロ様」
「戦場に赴く前にだ」
白銀の二人に対してさらに言う。
「何か食べるか」
「といいますと」
やや大柄な目の鋭い男が述べてきた。彼が大犬座のシリウスである。
「レストランか何処かにですか」
「そうだ。この街にもあるだろう」
ミロはあらためて彼に告げた。
「そういう場所もな」

「それはあるでしょう」
シリウスもそれは当然といった態度で返した。
「やはり。街ですから」
「ではそこに入ろう」
「ですがミロ様」
落ち着いた雰囲気の若い男がここで言ってきた。彼が御者座のカペラである。今回ミロと共に来ている白銀聖闘士はこの二人なのだ。
「ペルーの料理といいますと」
「知らないか」
「申し訳ありませんが」
こうミロに述べるのであった。
「私は」
「そうか。知らないのか」
「しかしカペラよ」
シリウスはそのカペラに対して言うのであった。
「何か食べないと話にならないのだが」
「それはわかっている」
言わずもがなであった。彼等も人間である以上何かを食べないとならない。そうした意味でミロの言うことはまさに正論であった。

第五十七話　遺跡の中でその二

「だからこそ何があるのかと考えているのだが」
「ああ、それならですね」
「俺達が知ってますよ」
ここで青銅の者のうちの二人が言ってきた。黒く長い髪の少年と浅黒い肌の少年である。
「そうした店は」
「キューバ料理でしたら」
「アクタイオン、ジャッカー」
カペラが彼等のその名を呼んだ。小熊座のアクタイオンと兎座のジャッカーであった。
「御前達がか」
「はい、知ってますよ」
「一度ここに来たことがありますから、俺達」
「へえ、そうだったのか」
「初耳だな」
青銅の残る二人が彼等の言葉を聞いて言ってきた。彼等は片方が緑の目をしている少年でもう一人は白い肌に金髪の少年であった。
「御前等ここに来たことがあるのか」
「また何でだ？」
「ああシフォン、カービル」
「実はな」
二人は同僚の名前を呼んでから述べた。彼等はそれぞれオリオン座のシフォン、定規座のカーベルである。この四人が今回ミロに同行してきているのである。
「ここにちょっと地震が起こりそうだったんでな」
「それを止めに派遣されたんだよ」
「へえ、そうだったのか」

「それでか」
二人はそれを聞いて少し驚いた顔をしてアクタイオンとジャッカーに返した。
「このペルーに来たのかよ」
「そういう理由があってだったんだな」
「残念ながら観光じゃなくてな」
「それでも食う時間はあって知ったんだよ」
「そうだったのか」
カペラは彼等の話を聞いたうえで頷いたのだった。
「それでこの国の食べ物のことを知っているのか」
「まあそういうことで」
「あとですね」
ここで、であった。不意に一行の前にやたらと首の長い毛深い生き物が出て来た。駱駝に似ているがそれよりもさらに愛嬌のあるが意見と顔立ちである。
「何だこりゃ」
「駱駝じゃねえな」
「ああ、これな」
「今言おうとしてたんだよ」
アクタイオンとジャッカーは笑ってその生き物を見て少し驚いているシフォンとカーベルに述べた。
「アルパカっていうんだよ」
「ここだけじゃなくて中南米全体にいる生き物でな」
「アルパカ？」
「この生き物の名前か」
シフォンとカーベルもそのことは察したのだった。
「変わった生き物だな、これはまた」
「中南米は独特の場所だって聞いてるけれどな」
「ここじゃ馴染みの生き物さ」
「まあ可愛がってくれればいいさ」

「そうなのか」
今度はシリウスが彼等の話を聞きながら言うのだった。
「別に害はないのだな」
「ああ、全然な」
「安心していいからさ」
二人は笑ってシリウスに対しても告げた。
「毛並みがいいからその為の家畜なんだよ」
「他にはリャマってのもいてさ」
二人のアルパカに対する説明は続く。
「そっちは荷役に使うんだよ」
「そういう生き物なんだよ」
「そうなのか」
シリウスは一通り話を聞いてからまた言うのだった。
「最初はおかしな駱駝だと思ったが」
「そうだよな。駱駝だよな」
「確かにな」
シフォンとカーベルも彼と同じことを思ったのである。実際にそのアルパカはどう見ても駱駝の仲間かそうした類にしか見えないものであった。
「この外見はな」
「まんまだよな」
「実際にそうらしいけれどな」
「駱駝に近いらしいな」
そしてそれはアクタイオンとジャッカーも認めるのであった。

第五十七話　遺跡の中でその三

「生物学的にもそうらしいんだよ」
「駱駝の仲間らしいぜ」
「そうか。やはりな」
カペラは二人の言葉を聞いて納得した顔で頷いた。
「どう見てもそうだな。確かにな」
「まあそうした動物だから」
「特に怖がる必要はないぜ」
「そうだな。だが」
ミロがそのアルパカを見ながら。そのうえで言ってきたのであった。
「駱駝に似ているのならばだ」
「あれっ、ミロ様」
「何かあるんですか？」
「下手にからかったりすれば報復される恐れがある」
いささか剣呑な顔で言うのであった。
「そんなことをすればな」
「下手なことって」
「何なんですか、それって」
それはシフォンとカーベルには全くわからないことだった。
「駱駝って何かするんですか？」
「それって一体」
「駱駝の報復はえげつないものがある」
ここで述べてきたのはシリウスであった。
「実にな」
「そんなにえげつないか？」
「さあ」
青銅の者達は今のシリウスの言葉に首を傾げさせた。

「別にな」
「何もないよな」
「なあ」
彼等にとっては知らない話だった。それでこう首を傾げるのだった。
「駱駝って役に立つしな」
「砂漠じゃ特にな」
まさに砂漠での荷役の為にあると言ってもいい動物、それが駱駝である。だからこそアラブでは昔から愛されてさえいる動物なのである。
「そんなに悪い生き物じゃないよな」
「むしろかなりな」
「少し悪戯をするとだ」
しかしここでシリウスは言うのであった。
「やり返してくる」
「少しでもって」
「例えば小便かけるとか？」
「それもあるがだ。俺がやられたのは」
実体験から来る話であったらしい。それを踏まえると中々説得力のある話である。
「噛まれた」
「噛まれたって」
「あの歯で噛まれたら痛そうだな」
「大きいし鋭いしな」
駱駝といえばまさにそうだった。その歯は大きくしかも鋭いのである。それに噛まれればどうなってしまうかというと言うまでもないことだった。
「そんなのに噛まれたのか」
「大変だな」
「子供の頃に動物園でだ」

今わかるシリウスの少年時代の話であった。
「少し悪戯をして腕を噛まれた」
「へえ、そりゃまた」
「御愁傷様で」
言葉にはあまり同情というものはなかった。むしろ呆れたようなものがあった。
「駱駝にちょっかい出したらそうなるのか」
「成程」
「だからだ。駱駝には注意しろ」
ここまで話してあらためて言うシリウスだった。
「その仲間にもな」
「ああ、そういえばこいつも」
「唾吐くんだったな」
アクタイオンとジャッカーはここでこう一同に話した。
「自分に悪いことをする相手にはな」
「唾吐くんだよ」
「唾をか」
カペラはそれを聞いてすぐにあることを察した。
「というとただの唾ではないな」
「それがまた臭くて」
「まあスカンクとかイタチの屁みたいなのじゃないけれどな」
そこまではいかないというのである。

第五十七話　遺跡の中でその四

「いや、それに匹敵するか？」
「かなり匂うからな」
少し考えてからこう言い替えるのだった。それだけアルパカの唾液というのは匂うというのである。だとするとかなりのものである。
「じゃあやっぱりこいつは」
「用心しておくか」
シフォンとカービルが話した。
「ちょっとな。からかわないようにして」
「大切に扱うか」
「動物を無下に扱うものではない」
ここでミロが言った。
「やはりな」
「まあそうですけれどね」
「大体それ自体が間違ってますけれど」
青銅の者達はミロのその言葉を聞いたうえで頷いた。
「じゃあそうならない為にも」
「アルパカは大事に扱いますか」
「そうだな。考えているのだが」
ミロは少し考えてから周りの聖闘士達に告げてきた。
「今度の旅ではこのアルパカとリャマを連れて行くか」
「両方をですか」
「連れて行くんですか」
「一応アルパカも荷役に使えるな」
ミロはアクタイオンとジャッカーに対して問うた。
「それはそうだな」
「ええ、まあ一応は」
「使えますけれど」

「なら問題はない」
二人の言葉を聞いて納得した顔になるミロだった。そうしてそのうえで述べるのだった。
「両方連れて行く」
「そうですか。それじゃあ」
「両方共連れて行って」
「その話も進めていこう」
ここでまた言うミロだった。
「そしてだ」
「そして？」
「まだ何かあるんですか？」
「食事のことだが」
このことに話を戻してきたのであった。
「いいか、そのことだが」
「あっ、そうですね」
「そういえば忘れてました」
「ペルー料理でしたよね」
青銅の者達は今のミロの言葉を受けてようやくそのことを思い出したのであった。
「ええと、じゃあ」
「とにかくお店を探さないと」
「何処にありますかね」
「とりあえずよさそうな店を探すとしよう」
カペラが青銅の者達に告げてきた。
「そしてそこに入ろう」
「そうだよな。まずは店を見つけて」
「さもないと話にならないからな」
青銅の者達はカペラの言葉を受けてからまたそれぞれ言うのであった。
「さて、そうは言ってみたけれどな」

「何処にあるんだ？」
「んっ、見ろよ」
ここで言ったのはシフォンだった。
「あの店はどうだ？」
「んっ！？」
彼の言葉を受けてカービルが彼が顔を向けたその方を見た。するとそこには。
「あそこか」
「あそこはどうだ？」
「そうだな」
二人の言葉を聞いてまたミロが言ってきたのであった。
「いいかも知れないな」
「ではあの店にしますか」
「ここは」
彼の言葉を受けてシリウスとカペラが問うてきたのだった。
「丁度いい具合にありますし」
「あの店で」
「そうだな」
ミロは二人の言葉に頷くのだった。
「確かにいい場所にあるな」
「ええ、手近ですし」
「味はよくわかりませんが」
「それは入ってからだな」
それからだというのであった。

第五十七話　遺跡の中でその五

「今はわからなくていい」
「そうなのですか」
「今は」
「そうだ。今はわからなくていい」
また言うミロであった。
「美味いかまずいかわからなくてもな」
「そういう考えもあるんですね」
「何ていいますか」
「イギリスとペルーは違うだろうからな」
青銅の者達が言ったところでこんなことも言うミロであった。
「イギリスの料理は何処もかしこも確実に駄目だった」
「まあイギリスはそうですね」
「あの国だけはね」
青銅の者達も苦々しい顔で今のミロの言葉に応えた。実は彼等もイギリスの料理のことは実体験として知っているのである。
「俺一回言ったことありますけれど」
「俺もだ」
「俺二回もだぞ」
「俺なんか五回もだぞ」
「俺も言ったことがある」
そしてミロもだというのであった。
「修行時代にな。いや、あの国はだ」
「そうですよね。何ていいますか」
「酷いなんてものじゃないですよ」
「だがペルーはそうは聞かない」
ミロの今の言葉は毅然としたものであった。
「そうな」

「そうですね。じゃあここは」
「行きますか」
「そうするとしよう」
ミロを先頭としてその店に入った。店はごく普通の、この国の食堂であった。そこに入ると浅黒い肌の者達に一斉に顔を向けられたのであった。
「あれっ、あんた達」
「こっちの人間じゃないな」
「観光客かい？」
「いや、違う」
だがミロはここで身分を隠して彼等に言葉を返すのだった。
「私達は観光客ではない」
「じゃあ何だい？」
「学者さん達かい？随分若い子も多いけれど」
「そうだ」
そういうことにしてしまったのだった。今は。
「我々は学者だ。考古学をやっている」
「ああ、じゃああれか」
「ナスカかい？それとも高原都市かい？」
「アンデスに行く予定だ」
こう彼等に答えるのだった。見れば彼等はそれぞれ実に陽気な顔をしている。ラテン特有の明るさはこの店の中においても健在であった。
「そこにな」
「へえ、じゃあ遺跡派かい」
「インカの」
「そういうことだ。そして今はだ」
学者ということにしてさらに話を続けるミロだった。他の聖闘士達は今は彼と店の客達のやり取りを聞くだけであった。
「ここで食事にしたいのだが」

「ああ、いいぜ」
「どんどん注文してくれよ」
「何でもあるからな」
客達はミロの言葉を受けてこれまた実に明るく言ってきた。
「丁度席もあるし座ってくれよ」
「何人いるんだい？」
「七人だ」
人数についても答えるミロだった。
「七人いる」
「そうかい、七人かい」
「結構多いね」
店の厨房の方からも声がした。見れば太った中年女と彼女とは正反対の痩せた男がいた。どうやら夫婦らしい。彼等が白い粗末な石壁の店の中でせっせと料理を作っていた。

第五十七話　遺跡の中でその六

「席あるかい？」
「ああ、あるぜ」
「運よくな」
「そうかい。じゃあその外人さん達に座ってもらってさ」
「あいよ」
「わかったぜ、おかみさんよ」
客達はこれまた明るい声でそのおかみの高い声に応えるのだった。そうしてミロ達をその空いている席に案内してそのうえで座らせるのだった。
そのうえで。その丸々と太ったおかみが彼等のところに来て注文を確かめるのだった。
「それでだけれど」
「何を食べるかだな」
「この国の料理知ってるかい？」
おかみの方からミロ達に対して尋ねてきた。
「何があるか」
「まあ一応は」
「知ってるぜ」
ここでもアクタイオンとジャッカーが言うのだった。二人はにこにことしながらおかみに対して言ってきた。
そうしてそのうえでミロに顔を向けて彼に対して問うのであった。
「それでミロ様」
「俺達ペルーの料理のこと知ってますんで」
「任せろというのだな」
ミロは彼等が何を言いたいのか。すぐに察したのであった。そうしてそのうえでこう言ってみせたのであった。
「そういうことだな」

「はい、そうです」
「駄目でしょうか」
「いや、ここは任せる」
ミロは二人を見ながらこう述べたのであった。
「御前達がこの国の料理を知っているのならその御前達に任せることがベストだ」
「どうもすいません」
「それじゃあ」
こうして二人が注文することになった。再びおかみに顔を向けてそのうえで告げるのであった。
「まずはアンティクーチョ」
「それとセビチェ」
「わかったよ」
おかみはその二人が告げたメニューを紙に書きながら応えた。
「後は何だい？」
「ニャメ＝コン＝モホ＝クリオージョがいいな」
「そうだな」
このメニューに関しては二人で話したうえでのことだった。
「それと後はパンに」
「トウモロコシとジャガイモを貰おうかな」
それもだった。
「バターたっぷりと乗せてな」
「それぞれ二十人前は欲しいな」
「食うねえ」
「身体は細いのに」
おかみも客達も彼等の言葉を聞いて笑って言うのだった。
「メニュー一つあたり二十人前かい」
「そんなに食って大丈夫なのかい？」
「っていうよりかな」
「それだけ食わないともたないんだよ」

二人は笑って彼等にこう返すのだった。
「俺達の仕事ってな」
「肉体労働だからな」
「まあそうだな」
「アンデスだからな」
高山で有名である。そこを行くのなら、と皆それで納得したのだった。
そうしてそのうえで皆でそういったメニューを食べていくのであった。
まずアンティクーチョだったが。これは。
「あれっ、これは」
「牛肉だな」
シフォンとカービルは食べてみてわかったのだった。
「それも心臓だな」
「それの串焼きか」
「どうだい？美味いだろ」
「これな」
「ああ、結構以上にな」
「いけるな」
彼等もそれをはっきりと認める。認めながら一緒にビールもやるのだった。
「それにこのセビチェは」
「魚や貝のマリネか」
「どうだい？そっちもいいだろ」
「あとこのニャメ＝コン＝モホ＝クリオージョもな」
見ればそれはナガイモであった。それにガーリックソースをかけたものである。
皆それを食べても。納得した顔になるのであった。
「いいじゃないか」
「何かどれも美味いな」

「コーンやジャガイモもだな」
「こちらの味もいいな」
それ等を食べてもだった。実にいい味だったのだ。

第五十七話　遺跡の中でその七

「ギリシアのものとはまた違ってな」
「これもまた」
皆そのトウモロコシやジャガイモを食べても話す。やはりそういったものの味もよかったのだ。
「そういえばアメリカ大陸が本場だったよな」
「ああ、ジャガイモやトウモロコシはな」
シフォンとカービルがここでまた話す。
「それ考えたら美味いのも当たり前か？」
「本場だからか」
「少なくとも美味いのは間違いないな」
「そうだな」
カペラとシリウスもそれは素直に認めるのだった。そうしてそのうえで料理を次々に食べていくのだった。そしてその中で彼等はあることに気付いたのだった。
「このバターは」
「牛のものではないな」
「そうだな」
このことに気付いたのだった。
「この味は」
「山羊か！？」
「それか」
「そのようだな」
食べてみて味わってわかったことだった。トウモロコシやジャガイモの上に乗せているそのバターは牛のものではなく山羊のものであったのだ。
「そうか。高山だからか」
「それでか」

これでわかったのだった。
「高山だと山羊の方が飼育し易いからな」
「それでだな」
「癖はあるがだ」
ミロは黙々と食べている。その中で彼は話すのだった。
「いいものだな。山羊のものもな」
「ええ、確かに」
「それは」
六人はミロのその言葉に頷く。実際に食べてみてそれは中々以上にいいものだった。質素だがそれでいて充実した御馳走になっていた。
「さて、お勘定は」
「どの位かな」
瞬く間にその二十人前を七人で食べ終えてしまった。客達もそれを見て驚きを隠せなかった。それはおかみや親父も同じであった。
「おいおい、食べちまったよ」
「二十人前をよ」
「この店って一人前も相当多いんだけれどな」
「いや、大したもんだよ」
「全くだよ」
実際におかみも親父も厨房から呆れたような、それでいて嬉しそうな顔で七人に告げるのだった。
「本当にね」
「そこまで食えるなんてね」
「だから身体が資本だからさ」
「食わないとやっていけないからさ」
アクタイオンとジャッカーがまた彼等に話すのだった。
「いや、それでさ」
「お勘定は？」
「ああ、これだけだよ」

おかみがすぐにオーダーに書いていたそれを出すのだった。見ればその勘定は。
「これだけか」
「安いですね」
「そうですね」
ミロと白銀の二人はその勘定を見てそれぞれ言うのだった。
「ペルーは物価が安いと聞いていたが」
「それでもこれだけの値段は」
「あれだけ飲み食いしたのに」
「ええ、そうなんですよ」
「ペルーはギリシアよりも食い物安いんですよ」
アクタイオンとジャッカーはここでも二人に話した。
「それでこれだけ飲み食いしてもなんですよ」
「この値段なんですね」
「凄いものだな」
ミロはあらためて言った。
「旅費等は聖域から充分に貰っているのだがな」
「金はあまりますかね」
「どうですかね」
「それはまだわからない」
こうシフォンとカービルに対して返しはした。

第五十七話　遺跡の中でその八

「しかしだ」
「このままいけばですね」
「お金には困りませんか」
「どうやらな。さて」
ここまで話してあらためて全員に告げたのだった。
「英気は養った。では行くか」
「ええ、それじゃあ」
「晴れてアンデスに」
「ミロ様」
シリウスが立ち上がったところでミロに声をかけてきたのだった。
「そして向かうのアンデスの何処に」
「マチュ＝ピチュだ」
そこだというのだ。
「そこに向かう」
「あの遺跡にですか」
「あの場所に」
「小宇宙を感じる」
ミロはそこに向かう理由をそれだとしたのだった。
「十の禍々しい小宇宙と無数のそれをな」
「十のですか」
「そして無数の」
これで六人はわかったのだった。それだけで充分であった。
「ではやはりそこに」
「奴等がいますか」
「少なくともそこにいるのは間違いない」
ミロもまた六人に対して告げたのであった。
「その場所にな」

「では今から」
「マチュ＝ピチュに向かいましょう」
「先程の話通りアルパカとリャマを連れて行く」
このことを話すのも忘れないミロだった。
「あとは。馬は」
「ええ、それもいけますよ」
「とりあえず大丈夫です」
アクタイオンとジャッカーがここでまた話した。
「まあ確かに険しい道ですけれどね」
「馬も何とかいけます」
「そうか。ではいいな」
ミロは彼等のその言葉を受けたうえで納得した顔になって頷いた。
「では馬も借りてだ」
「七頭ですね」
「人数分ですね」
「そうだ、七頭だ」
それでいいというのだった。ミロの言葉はしっかりとしたものだった。
「そしてリャマはだ」
「ええ」
「どれだけ連れて行きますか？」
「最低限でいいのだが」
「テントとかも必要ですよ」
「それも入れますと」
今度はシフォンとカービルが話す。
「かなりの数が必要じゃないんですか？」
「食べ物のこともありますし」
「ではそれはだ」
ここでミロはカペラとシリウスの二人に顔を向けた。そうしてそのうえで彼等に告げた。

「御前達に任せたいが」
「はい、それでは」
「お任せ下さい」
二人はミロのその言葉に応えて頷いたのだった。
「手配はしますので」
「そうしてそのうえで」
「マチュパチュに向かおう」
あらためてその場所を六人に告げるミロだった。
「わかったな」
「わかりました」
「じゃあ今から」
勘定を払いそのうえでマチュパチュに向かう準備に入るのだった。
彼等も戦いに向かおうとしていた。

第五十七話　　完

２００９・９・３０

第五十八話　高山にてその一

高山にて

「ではいよいよか」
「はい」
「動きました」
そこは見渡す限りの山々であった。何処までも連なる高い山のそのうちの一つに彼等はいた。そこから禍々しい赤い小宇宙を放ちながら話をしていた。
「そのうえで向かって来ています」
「マチュパチュに」
「わかった」
彼等の中心には彼がいた。そのサタナキアのサリアが。禍々しい赤い戦衣をその身にまとったうえで彼と同じ様に赤い鮮血の色の戦衣に身を包む彼等の話を聞いているのだった。
「ではすぐに仕掛けよう」
「マチュパチュには行かせないのですね」
「その前に」
「倒せればそれでいい」
サリアもそれでいいと言うのであった。
「しかしだ。黄金聖闘士もいる」
「来ているのはスコーピオンです」
「あの者が来ております」
「これまでの戦いで彼等の実力はわかっている」
サリアは冷静に述べた。
「我等八大公に間違いなく匹敵するものだ」
「それではまさか」
「サリア様御自身が」
「いきなり出向くのも面白いが今は止めておこう」

それはしないというサリアであった。
「それはな」
「お止めになられるのですか」
「それは何故でしょうか」
「御前達に任せたい」
彼等を見回してそのうえでの言葉であった。
「御前達にな」
「といいますと」
「我等にスコーピオンの首を挙げる栄誉を与えて下さるのですか」
「そうだ」
悠然とした笑みを浮かべてみせての言葉であった。
「インプ達を率いてそのうえで向かうがいい」
「はっ、わかりました」
「それでは」
九人の狂闘士達は彼のその言葉にすぐに喜びの言葉で応えたのであった。そうしてそのうえでさらにサリアに対して言うのであった。
「すぐに七人の聖闘士達の首を持って参ります」
「とりわけスコーピオンの首を」
「期待している。しかしだ」
だがここでサリアはこうも言うのであった。
「無理はするな」
「無理はですか」
「そうだ。それはするな」
再び彼等に告げるのであった。
「マチュパチュにまで誘き寄せてもいいのだからな」
「そこにまでですか」
「我等の今の拠点に」
「そうだ。スコーピオンを誘き出してもいい」
サリアの言葉は続く。
「だからだ。今は無理はせずともいい」

「誘い込むのも作戦のうちですか」
「今は」
「そういうことだ。わかったな」
あらためて彼に告げる。
「今は無理をする必要はない。それにだ」
「それに？」
「今度は」
「どうやらマチュピチュで戦った方がいいようだ」
こんなことも言うのであった。
「どうやらな」
「あの場でですか」
「戦うのは」
「戦うことそのものがまずいいのだが」
サリアは言葉を続けていく。
「何よりもだ」
「マチュピチュで戦えば」
「それが
「アーレス様の御為になるのだ」
こう話すのであった。

第五十八話　高山にてその二

「それがな」
「そうですか。それでは」
「誘き出しましょうか、マチュピチュに」
「そうしましょうか」
「そうだな。それがいいだろう」
サリアは彼等の言葉を受けて頷いたのだった。
「それがな」
「ではその様に致しましょう」
「あの場にまで」
「スコーピオンも愚かではない」
彼は決してミロを甘く見てはいなかった。
「そして」
「そして？」
「といいますと」
「他の聖闘士達もだ」
彼等についても言及するのだった。
「愚かではない。むしろ」
「頭は切れますか」
「強さだけではなく」
「仮にも我等と同じく神に仕える者達だ」
サリアの言う通りであった。アテナに仕えているかアーレスに仕えているかの違いはあるが、であった。神に仕えているということは変わりないのである。
「それだけの頭もあって当然のことだ」
「むしろない方がおかしいですな」
「それは」
「そういうことだ。乗ってきてもそれはおそらく承知のことだろう」

「では奇襲や罠の意味は期待できませんね」
「それは」
狂闘士達はサリアの言葉からこう判断を下したのだった。
「残念ですが」
「やはり正面から戦いそのうえで倒すしかありませんか」
「そういうことになるだろう。しかしだ」
サリアは言葉を続けていく。
「戦術は変更しない」
「インプ達を送りのですね」
「我等の指揮により」
「二重に分けて送るとするか」
サリアはしばし考えてから述べたのだった。
「ここはな」
「二重にですか」
「あの者達と我等を」
「第一波と第二波に分ける」
早速こう命じたサリアだった。
「まず第一波はだ」
「はい」
「その指揮は」
彼等はサリアの指示を受けだした。そのうえでミロ達に向かう。
ミロ達は今アンデスの中を歩いていた。見渡す限り高山があるばかりである。
「何ていいますかね」
「凄い場所ですね」
シフォンとカービルが驚いた面持ちで辺りを見回しながら述べる。
木々や動物といったものは遥か下であり彼等が今いる場所には何もなかった。あるのは雪と黒い岩山だけである。
「空も近いですし」
「雲がもうそこまで」

「ははは、凄いだろう」
「これがアンデスなんだよ」
ここでアクタイオンとジャッカーが二人に対して言ってきた。その顔は笑っている。
「もうな。こんな山が南米大陸の北から南にずらって続いていてな」
「凄いんだよ」
「凄いなんてものじゅないぞ」
「こんな山脈がか」
二人はそれを聞いてあらためて唖然となった。そうしてその唖然となってしまった顔でさらにアクタイオンとジャッカーに対して言うのだった。
「馬まで辛そうだしな」
「空気も薄いしな」
「ああ。馬でもギリギリって場所だからな、ここは」
「アルパカやリャマでやっとって場所なんだよ」
こうも二人に話すのだった。
「どうだよ、凄いだろう」
「普通の場所じゃないからな、ここは」
「そしてこうした場所にインカ帝国があったのか」
「あの帝国が」
カペラとシリウスはそちらの方に関心があるようだった。見れば彼等はアンデスの高山の厳しさには全く平気なようである。
「スペインに滅ぼされてしまったが」
「存在していたのだな」
「そうだな」
ミロがその二人の言葉に対して頷いた。

第五十八話　高山にてその三

「あの国が確かにあったのだ」
「そしてその遺跡がですか」
「マチュピチュですね」
「今我々はそこを目指している」
ここであらためてこのことを言うミロだった。
「狂闘士達と戦う為にだ」
「はい、その通りです」
「その為に我々はここに」
「その通りだ。そしてだ」
ミロの言葉は続く。
「狂闘士達は何時来るかわからないぞ」
「ええ、その通りですね」
「今は小宇宙を感じませんが」
二人の白銀聖闘士達は今のミロの言葉を受けてその顔に緊張を漂わせた。
「牙を磨いているのは間違いありません」
「ですから」
「警戒は怠るな」
それは彼自身もだった。
「いいな、決してだ」
「はい、わかっております」
「それは」
そのことに対してすぐに答える二人だった。
「こうして高山を歩いていても」
「何時来るのかわかりませんから」
「今すぐ来てもおかしくはない」
ミロのこの言葉は煽るものでも過敏なものでもなかった。

「そう、今にでもな」
「じゃあミロ様」
「何処から来てもですね」
青銅の者達もここで警戒の色を見せてきた。
「おかしくないってことですよね」
「上や下からも」
「そうだ。何処からでもだ」
「何かそれ考えると山にいるのってやばいですね」
「確かに」
青銅の者達はそれぞれ警戒する顔になった。
「何時何処からでもって」
「しかも上とか下までって」
「案ずることはない」
だがミロはこう言うのであった。
「特にな」
「案ずることはないって」
「またどうしてですか？」
ミロの今の言葉につい問うてしまった彼等だった。
「こんな足場が悪くて空気も薄い場所で戦うってのに」
「案ずることはないって。そうなんですか？」
「すぐにわかるからだ」
青銅の者達への返答はこうしたものだった。
「何時何処から来るかな」
「そういうことがわかるんですか」
「まさかそれは」
「そうだ。まずは小宇宙だ」
聖闘士も狂闘士もその力の源にしているそれであった。これなくして彼等は戦うことができないと言っても過言ではないものである。
「それを感じるからだ」
「ああ、ミロ様ならそうですね」

「感じられますね」
ミロのその言葉を聞いて納得した彼等だった。そういわれてわかったのである。
「黄金聖闘士の感覚は俺達とはまた違いますから」
「それで、ですね」
「このミロが感じられる場所はこの山だけではない」
ミロは言うのだった。
「それよりも遥かに広い。だからだ」
「連中が来ても感じ取ることができる」
「そして対処できる」
青銅の者達は言っていく。
「そういうことですか」
「小宇宙を感じ取れるからですね」
「セブンセンシズからもだ」
次に出て来たのはこれだった。

第五十八話　高山にてその四

「それからも感じ取ることができる」
「黄金聖闘士が持つ第七の感覚」
「それでもですね」
今度問うてきたのはシリウスとカペラだった。
「セブンセンシズについては我等はわかりませんが」
「敵を察することができるのですか」
「このミロと同じ程度の力かそれ以上のものでない限りだ」
ミロは白銀の二人に応える形でゆっくりと話してきた。
「小宇宙や気配を消そうともセブンセンシズから逃れることはできない」
語るミロの言葉が強いものになっていた。
「決してな」
「じゃあミロ様がいれば」
「あの連中もそうおいそれとは奇襲を成功させることはできないってわけですね」
青銅の者達はミロの今までの話を聞いてこう考えたのであった。
「奴等が何を企もうとも」
「安心ってわけですか」
「そう楽観できるものでもない」
しかしミロはこうも言うのであった。
「決してな」
「連中も馬鹿でもなければ間抜けでもないってことですね」
「つまりは」
「その通りだ。狂闘士は侮ることができない」

そのこともよくわかっているミロだった。彼は自分も周りの聖闘士達のこともわかっていたがそれと共に敵のこともよくわかっているのである。

「そのことは忘れないことだ」

「ええ、わかりました」

「油断したり侮れば、ってことですね」

「御前達が死ぬことになる」

今度のミロの言葉は不気味なまでに鋭いものであった。

「それはわかっておくことだ」

「ええ、それはもう」

「よくわかってるつもりですよ」

返事をする彼等の言葉も真剣そのものであった。

「何があってもですね。油断はしませんから」

「連中の禍々しさも強さもわかってるつもりですし」

彼等がこう言う根拠はかつての狂闘士達がエリスに連れられ聖域に来た時にその禍々しさと強大さを併せ持つ小宇宙を感じ取ったからである。だから今こう言えるのである。

「あの連中の強さは尋常じゃありませんからね」

「俺達にしろ。一歩間違えれば」

死、という言葉は出されなかった。しかし誰もがはっきりと感じ取りそのうえで話の中に入れているものであった。

「ですからね。絶対に」

「それはありませんよ」

「よく覚えておくことだ。さもなければ本当に倒れるのは我等だからな」

「ええ」

「今もですね」

青銅の者達は話すその間も周囲に警戒を怠ってはいない。

「来るかわかりませんしね」

「その牙を剥いて」

「戦う場は何処でもいい」
今度はこんなことを言うミロだった。
「何処でもですか」
「こんな足場の悪い山場でもですか」
悪いどころではない。恐ろしく険しい岩屋まで ありまさに一歩踏み崩せばそこからまっ逆様である。そうした危うい場所である。
まさに彼等でも進むだけで用心が必要な場所である。しかしミロはこう言ったのである。
「大丈夫なんですか？」
「まさか」
「そのまさかだ」
ミロの言葉の調子は変わらない。
「俺にとってはだ。戦う場所は何処であろうが問題はない」
「そうなんですか？」
「こんな場所でも」
青銅の者達の言葉は驚いているものだった。それがどうしても信じられないのである。
「いけるんですか」
「本当に一歩踏み間違えればって場所なのに」
「その時になればわかることだ」
ミロは今度はこんなことを言った。

第五十八話　高山にてその五

「その時にな」
「つまり戦う時にってことですね」
「そういうことですね」
「警戒はするべきであり油断してはならない」
　このことは再び言うミロだった。
「しかしだ」
「強張ってもいけないってことですか」
「過剰に」
「そうだ。そして戦う時になればだ」
　ミロの言葉は続く。
「普通に戦うことだ」
「普通に？」
「といいますと？」
「己のその闘い方を忘れるな」
　ミロの言葉がまた変わった。
「わかったな」
「己の、といいますと」
「それは」
「その時になればすぐにわかる」
　やはり今は言わないミロだった。
「戦いになればな」
「そうですか。じゃあ今は」
「わからないってことですね」
「そうだ」
　言葉は変わらなかった。そのままであった。
「それではだ。先を急ぐぞ」
「ええ、わかりました」

「じゃあ」
彼等は山をさらに進んでいく。そうして暫く進むとだった。
途中食事を採った。簡単なものである。この地域のトウモロコシを入れたパンと干し肉だ。それをインスタントのスープやコーヒーで流し込む。馬やアルパカ達にも食事をやることを忘れない。
七人で車座になってそのうえで座って食べている。食べているものは七人共同じだ。丁度山の盆地になっているところで落ち着いて食べている。
その中で、であった。カペラがミロに対して言ってきたのである。
「それで次の村ですが」
「どれ位だ？」
「思ったより順調に進んでいまして」
まずは彼等にとって喜ぶべきことであった。
「それで今日の夕方には到着することができます」
「そうか」
「そこで一泊しまして」
カペラの言葉は続く。
「それからまたマチュピチュにですね」
「向かうとするか」
「また食料を買ったうえで」
「そうだな。馬やアラパカ達のものもな」
「はい」
馬達は今は辺りに生えている草を食べている。今は草がある場所で休息を取れているのが幸いした。馬達にしろ食べなければ身がもたないのである。
「それも忘れないで」
「そうしよう。それでだ」
さらに話すミロだった。
「到着は今日の夕方になるのだな」
「はい、そうです」

ミロの問いにまた答えるカペラだった。
「そうですが」
「そうか。それではだ」
ここでミロの目が鋭いものになった。
「若しかするとだ」
「若しかすると？」
「といいますと」
「来ている」
その鋭い目での言葉だった。
「奴等がな」
「奴等がですか」
「といいますと」
カペラだけでなくシリウスもその言葉に反応を見せた。
「遂に来たのですね」
「そうだ。小宇宙が無数にだ」
まずは小宇宙を感じ取ったのである。
「こちらに近付いて来ている」
「そうですか。近いとは思っていましたが」
「遂に」
「出向くべきか。それとも」
ミロはさらに言う。
「ここで迎え撃つべきか」
「それでどうするんですか？」
「何か今回場所がえらく大事みたいですけれど」
青銅の者達も話を聞いていた。それですぐに気色ばってミロに対して言うのだった。

第五十八話　高山にてその六

「下手したらそれこそ」
「とんでもない場所で戦うってことに」
「その通りだ」
ミロの考えていることは彼等が考えていることと同じだった。むしろ彼等が考えていることがミロと考えていることと同じなのであった。
「今回はな」
「何かここは戦いやすそうですけれどね」
「そうだな」
青銅の者達は周りを見回した。ここは地形も穏やかでありそれなりに広い。確かに戦いやすそうな場所ではある。
しかしだった。周りは山である。彼等はそこを見ても言うのだった。
「ですが。何か」
「この山がやばいですね」
「だよな。高い場所を抑えられたらそれこそ」
「まずいな」
その言葉にも言葉を出す顔にも危惧するものがはっきりと浮かび上がっていた。
「じゃあミロ様」
「場所を変えますか？」
「ここは別に」
「何処か他の場所で」
「いや」
しかしであった。ミロはここで言ったのだった。毅然とした声の色で。
「決めた」

「決められたのですか」
「それは一体」
「戦う場所はここだ」
白銀の者達の言葉に応えたのである。
「ここで戦うこととする」
「そうですか。ここでですか」
「この盆地で」
「その通りだ。まず食事を終える」
そのうえでこうした指示も出した。
「いいな。まずは食え」
「はい、わかりました」
「それでは」
「そしてだ。食事を終えたならばだ」
その鋭い言葉が続けられる。
「全員聖衣に着替える」
「そして戦闘態勢にですね」
「入ると」
「そういうことだ。すぐにだ」
しかもすぐにだというのである。
「入るぞ。いいな」
「了解です」
「じゃあ」
すぐに食べるものを素早く胃の中に入れていく。そうしてそのうえで馬達を安全な場所に隠しそのうえで聖衣を着る。完全に身なりを整えたうえで彼等を待つ。
「さてと、それじゃあ」
「何処から来るかですね。奴等が」
「正面からか。それとも」
「後ろからか」
「囲むつもりか」

ミロがここでまた言ったのだった。
「どうやらな」
「囲む！？」
「それでは」
「いや、動くことはない」
他の者が動こうとするそれは制止するのだった。
「それには及ばない」
「ですがミロ様、それでは」
「むざむざ敵に」
「いいのだ。ここは囲ませる」
しかし彼はこう言うのだった。
「あえてな」
「あえて、ですか」
「囲ませるというのですか」
「敵を包囲するのは戦術の基本だ」
これはもう言うまでもないことである。ありとあらゆる戦いにおいて敵を包囲するということは勝利への最短の近道である。完全に包囲することこそ勝利そのものであると言ってもいい。

第五十八話　高山にてその七

「しかしだ」
「しかし！？」
「そこで何かあるのですか」
「その通りだ。それも後でわかる」
ここでも最後まで言おうとしないミロだった。
「後でな」
「左様ですか」
「後で、ですか」
「そうだ。少なくとも今ではない」
こう言ってそれをよしとするミロだった。
「囲ませるのだ」
「はい」
「わかりました」
黄金聖闘士の言葉は絶対である。それ以上のものは聖域においては教皇の言葉以外にはない。アテナを除いては、であるが。
そしてだった。彼等はそれ以上にミロを信頼していたのだ。黄金聖闘士として以上に彼を聖闘士として、そして人間として。だから頷いたのである。
「それではここは」
「囲ませましょう」
「どうやらインプ達だけではないな」
近付いて来る小宇宙からそのことも察するミロだった。
「四人いるな」
「四人！？」
「といいますとまさか」
「そうだ、そのまさかだ」
ミロの言葉は鋭くなる一方だった。それは明らかに戦う者の言葉

であった。
「狂闘士達もいる」
「その七十二柱の魔神達がですか」
「あの連中も一緒に来てるってわけですか」
「来るのも当然だ」
だからといって驚くことのないミロだった。
「それもな」
「ですがミロ様」
「連中の強さもまた」
「敵がどれだけ強大であろうとも」
だがミロはここでもあえて言うのだった。
「聖闘士は退くことはないな」
「では」
「その者達も共に」
「倒す」
今度は一言であった。
「共にな。そのつもりだ」
「そうですね」
「来るからには」
彼等もミロのその言葉を受けてであった。完全にその意になった。
「やりましょう」
「その四人の狂闘士達もまた」
「そういうことだ。さて」
ミロの言葉の緊張が最高潮になった。するとだった。
周りの岩山のあらゆる場所に彼等が姿を現わしてきたのだった。
禍々しい赤い戦衣をその身にまとった彼等が。遂にミロ達の前に出て来たのであった。
「スコーピオンのミロだな」
「如何にも」
その中にいる一人の殊更に禍々しい形状の戦衣の男の言葉に応え

た。
「俺がそうだが」
「そして他に六人か」
「数は合っているな」
「確かに」
男の横にいる三人も続いてきた。彼等は今その山のところからミロ達を見下ろしている。そのうえでの言葉だった。
「七人の聖闘士」
「そして中心にいるのはスコーピオンのミロ。情報通りだ」
「ただの偵察というわけではないだろう」
ミロはその四人を見上げながら彼等に問うた。それは他の聖闘士達も同じである。
「このミロの首を取りに来た。そうだな」
「ふふふ、そうだ」
その男が不敵な笑みと共に彼に応えてみせてきた。
「その通りだ、スコーピオンよ。しかしだ」
「しかし。何だ？」
「それだけではない」
彼はこうも言うのだった。
「それだけではな」
「どういうことだ、それは」
「スコーピオン、貴様だけではないということだ」
彼はミロ以外の六人も見ているのだった。
「貴様だけではな。つまりはだ」
「俺達もか」
「そういうことかよ」
「その通りだ。貴様等全て討ち取る」
彼は今度は悠然と笑っていた。下からもそれははっきりとわかった。
「それを今告げておこう」

「貴様の言いたいことはわかった」
ミロは一応それは受けた。
「それではだ。今度は俺が貴様等に問う番だ」
「ほう。何を問うというのだ？」
「貴様等の名を聞いておこう」
名前を聞くというのだ。彼等を見上げたうえで。
「その名は。何というのだ」
「我が名か。では名乗ろう」
狂闘士達の中心にいるその男はここで答えてきた。
「我が名はフォルス」
「フォルスというのか」
「そうだ。侯爵、アガレスのフォルス」
今度はその爵位と司る魔神の名も告げてきたのであった。
「その名、よく覚えておくことだ！」
赤い髪に黒い目をした濃い眉の男だった。その男が今ミロに対して答えた。これがこの盆地での戦いのはじまりの合図となった。

第五十八話　　完

２００９・１０・４

第五十九話　盆地での戦いその一

盆地での戦い

フォルスは今高らかに名乗った。しかしそれで終わりではなかった。

「続いてはだ」

「我等もまた」

「名乗らせてもらおう」

「貴様等もか」

ミロは残る三人を見上げながら言った。

「名乗るというのだな」

「冥土の見上げに聞いておくことだ」

「そしてハーデス様に対して告げるがいい」

「我等の名を」

ハーデスは尊称だった。ここに彼等狂闘士とその主であるアーレスとハーデスの密接な関係が見えてもいた。

「いいな、それで」

「いいだろう」

ミロはその彼等の言葉を受けてみせた。

「聞こう。言うがいい」

「伯爵、レラジエのアーキス」

白く鋭い目の男だった。髪も同じ色だ。

「子爵、マルパスのヴェーヌ」

青い髪を後ろで束ね大きな青い目をした女だ。

「男爵、サブナックのヴェガ」

大柄で鬣の如き金髪に黒い目の大男である。この四人だった。

「我等四人がだ」

「貴様等を滅ぼす」

「名前を覚えておくように今告げたわ」

「それではだ」
彼等はそれぞれの口でまた言うのだった。
「死ぬがいい、心置きなくな」
「苦しまずにはしてやる」
「話は聞いた」
ミロは彼等の名乗りと死の宣告を聞いてもその態度は変えなかった。
「これで満足か」
「無論満足する筈もない」
フォルスは酷薄な笑みを浮かべてそのミロに告げた。
「我等の目的は貴様等全員を倒すことだからな」
「それで何故」
「名乗っただけで終わるというの？」
「あまりにもおかしな話だ」
「確かにおかしな話だ」
このことは復唱してみせたミロだった。
「しかしだ」
「しかし？」
「何だ？」
「このミロを倒すというのはそれ以上におかしな話だ」
こうも言ってみせたのだった。
「実にな」
「おかしいというのか」
「我等がか」
「そうだ。実にな」
ミロは彼等を見上げたままだ。それに対して彼等は見下ろしている。しかしミロはその彼等に対して全く臆するところがなかった。
「何故かと問いたいのならば来ることだ」
「面白い」
フォルスはその彼等の言葉を聞いて述べた。

「それならばだ」
「最初に来るのは貴様か」
ミロはそのフォルスの姿を認めて言った。
「アガレス、貴様がだな」
「このフォルスの力、受けるのだ」
フォルスの小宇宙がその言葉と共に強くなっていく。
「そしてそれで終わらせてやろう」
「いや、ここはアーキスが行こう」
「何を言う、俺だ」
ヴェガも出て来た。
「このヴェガがだ。スコーピオンの首を挙げる」
「それはできないわね」
しかし今度はヴェーヌが言うのだった。三人を制するようにして。
「スコーピオンは私が倒すのだから」
「何を言う、それはだ」
「俺がだ」
彼等は獲物を巡って争いをはじめようとしていた。しかしであった。
その彼等に対して周りにいるインプ達が言ってきたのである。
「いえ、御言葉ですが」
「ここはお任せ下さい」
「是非我等に」
自分達が行くというのである。

第五十九話　盆地での戦いその二

「ですからフォルス様達は今は」
「ここでお休みになって下さい」
「御前達がか」
フォルスはその彼等の申し出を静かに受けるのだった。
「スコーピオンの首を挙げるというのだな」
「はい、そうです」
「そして他の聖闘士達も」
また言った。その言葉には強い意志があった。
「ですから。お任せ下さい」
「ここはどうか」
「フォルスよ」
「どうするの？ここは」
三人はそれを聞いてまずは怪訝な顔でフォルスに問うた。
「インプ達に任せるか？それとも」
「俺達が」
「そうだな」
フォルスは彼等の言葉を聞いたうえで。静かに決断を下した。
そしてそのうえで周りに顔を向けて告げた。
「御前達が行くがいい」
「はっ」
「有り難き幸せ」
インプ達に向けた言葉だった。まずは彼等に行かせたのである。
「見事聖闘士達の首を挙げるのだ」
「はい、それではすぐに」
「あの二人を」
「さて、それではだ」
彼等はフォルスに礼を述べすぐに動きだした。そしてそのうえで

ミロ達に対して向かおうとする。山の上でのそれぞれの場所で構えだした。
「スコーピオンよ」
「まずは貴様だ」
「俺だというのか」
「そうだ、聖闘士の中で頂点に立つ黄金聖闘士」
「貴様を倒してからだ」
彼等はそう言いながら三叉の槍を構える。そして一斉に飛んだ。
「いいのか、フォルス」
「インプ達に行かせて」
彼等が動いたのを見ながらフォルスに問う三人だった。
「スコーピオンの強さは尋常なものではない」
「それをわかってのことなのだな」
「無論だ」
フォルスはわかっているというのだ。
「しかしだ。あえて行かせた」
「そうなのか」
「あの者達はどうしてもスコーピオンと戦いたがっていた」
それを踏まえてだというのである。
「だからだ」
「では何があってもいいのだな」
「この戦いにおいて」
「何かあればその時は俺が動く」
彼の言葉はまさに剣だった。
「狂闘士の掟通りにな」
「そうか、ならばだ」
「我等もだ」
彼等もそうだと。はっきりと言うのだった。
「そうさせてもらおう」
「狂闘士だから」

「戦うのだ」
フォルスはミロに殺到するインプ達を見ながら言った。
「そして今はか」
「あえてだな」
「あの者達に任せるというのだな」
「その通りだ。あの者達がスコーピオンの首を挙げればよし」
今も彼等を見ているフォルスだった。そのうえでの言葉である。
「しかしだ」
「若しそれが適わなかったならば」
「その時はだな」
「俺が行く」
フォルスは自分自身のことを出したのだった。
「このフォルスがだ」
「それは止めてもらおうか」
「全くよ」
「それはだ」
しかしここで三人は彼に対してこう言ってきたのだった。その言葉は揺るぎないものだった。

第五十九話　盆地での戦いその三

「何としてもだ」
「貴方だけ行くというのはね」
「いささかずるいのではないのか」
ずるいという言葉さえ出る。そこにははっきりとした批判まであった。
「我等も行かせてもらおう」
「何としてもな」
「御前達もか」
フォルスはその彼等を見回したうえで述べた。
「行くというのだな」
「その通りだ。貴様一人戦いを楽しませてなるものか」
「だからよ。私達もね」
「聖闘士達を倒させてもらおう」
「いいだろう」
その彼等の申し出を受けるフォルスだった。否定することは何一つとしてなかった。
「それではだ。その時は共に行こう」
「ええ、それではね」
「行くとしよう」
今はその機会を待つ彼等だった。ミロとインプ達の戦いを見守りながら。今は動くことはなかった。
「行くぞスコーピオン！」
「我等の手で死ぬがいい！」
「ここが貴様の墓場となる！」
インプ達は口々にこう叫びながらミロに対して上から総攻撃を仕掛けんとする。ミロは地上に留まったまま彼等を見上げているだけである。

「この槍でだ！」
「受けよ！」
彼等は一斉にその槍をミロめがけて投げた。まさに雨の如き有様だった。
しかしミロはその槍が降り注ぐのを見ても動じない。そしてやはり動くことはなかった。
「動かぬのか！？」
「どういうことだ！？」
インプ達もそれに眉を顰めさせる。それには他の聖闘士達も怪訝な顔を見せるのだった。
「どういうことですか！？」
「早く逃げないとこれは」
「逃げることはない」
ミロは上を見上げたままだった。それを変えようとは一切しない。
「その必要は一切ない」
「必要ないとは」
「ですがそれでは」
「見るのだ」
こう言うとだった。右手を上に向けてそのうえで。無数の拳を放ったのである。
「拳！？」
「拳をここで！？」
「しかしこの数の槍にはだ！」
インプ達はミロが拳を放ったのを見てもすぐに余裕を取り戻した。
「その程度では通じん！」
「そう、我等の勝利は揺るぎない！」
こう勝ち誇った声で叫ぶのだった。彼等はまだ空中にいる。
「死ね、スコーピオン！」
「我等のこの槍でな！」
「通じないかどうかはだ」

しかし当のミロは彼等以上に余裕があった。まるで空には何もないかの様に。
「これを見てから言うのだな」
「これとは！？」
「それは一体」
「見るのだ」
ミロの言葉が強くなった。拳はまだ放たれ続けている。
「これをな」
「何っ！？」
「これは・・・・・・」
インプ達は。彼等が放ったその槍達が。まるで岩が砕ける様に粉々になっていくのを。その目で見たのであった。
「馬鹿な、我等の槍が」
「全て破壊されたというのか」
「その拳で」
「そうだ」
まさにその通りだと答えるミロだった。
「御前達の槍は今全てこのミロが砕いた」
「馬鹿な、この様なことが」
「しかも一瞬で」
「我等黄金聖闘士はまず光速の動きを持っている」
黄金聖闘士の強さの象徴の一つだ。セブンセンシズと並ぶその特徴である。
「そしてその拳の強さもだ」
「我等の槍をも砕くというのか」
「まさか・・・・・・」
「そのまさかだ」
そうだというミロだった。

第五十九話　盆地での戦いその四

「そしてだ」
「何っ！？まさか」
「次は」
「そうだ。受けるがいい」
ミロの全身に小宇宙が宿った。黄金の神々しい小宇宙が。
「このミロの拳を御前達自身もな」
「くっ、そうはさせるか！」
「我等とてだ！」
だがここで彼等はそれぞれ意地を見せてきた。
「誇りあるアーレス様の僕」
「その我等がそう簡単に倒されてたまるか！」
「受けよ！」
そのまま急降下しながらミロに対して攻撃を仕掛けんとする。
「我等のこの拳をだ！」
「そして死ね！」
「愚かな」
その彼等の言葉を受けても冷静なままのミロだった。態度は全く変わることがない。
「それではだ。死ぬがいい」
この言葉を出すと右手が光った。そこから無数の拳が雷の速さで放たれインプ達を貫く。
「ぐわあああああーーーーーーーーっ！」
「言った筈だ。黄金聖闘士の拳は光だ」
攻撃を放ったうえでの言葉である。今インプ達はその光の衝撃を受けてそれぞれの戦衣を粉々にさせて宙に吹き飛ばされていた。
「光はまさに神の力」
それだというのである。

「その拳を受けて生きられる者はいない」
インプ達が次々と地面に落ちてきた。重いものが落ちる音がしていく。ミロはそれを俯いて目を閉じたうえで静かに聞くのだった。
「誰一人としてな」
「これがスコーピオンの力だというのか」
「黄金聖闘士の力だと」
インプ達は断末魔の中で呻いていた。
「恐ろしい男だ、スコーピオン・・・・・・」
「我等を全て倒すとはな」
「苦しまないようにはしておいた」
ミロはその彼等に対して静かに告げた。
「そのまま死ぬがいい」
「む、無念・・・・・・」
「我等では無理だったか」
こう言って事切れていく彼等だった。ミロはその彼等を静かに見ていた。
しかしそれで終わりではなかった。今度はフォルス達が彼に告げてきたのだった。
「まずは褒めておこう」
「褒めるというのか」
「インプ達を倒したことはな」
それを褒めるというのである。
「そのことは褒めておく」
「その言葉受けておこう」
フォルス達を見上げて返した言葉だった。
「そのままな」
「受けておくといい。こちらも皮肉で言ったわけではない」
こう返すフォルスだった。
「しかしだ」
「しかし、か」

「狂闘士の掟、既に知っているか」
「狂闘士の掟か」
「そうだ。同志が倒されたならばだ」
この場合の同志とはインプ達のことである。彼等以外の何者でもなかった。
「その仇を何処までも追い詰め倒す」
「それが狂闘士の掟だというのだな」
「わかったならばいいな」
あらためてミロに対して告げるフォルスだった。
「それではだ」
「来るのだな」
「覚悟はいいな」
フォルスは再びミロに告げる。
「スコーピオンよ、インプ達の仇はこのフォルスが取る」
「俺もだ」
「私もよ」
アーキスとヴェーヌも言ってきたのだった。フォルスと同じくミロを見下ろしながら。

第五十九話　盆地での戦いその五

「インプ達の仇を取らせてもらう」
「覚悟はいいわね」
「三人か。違うな」
「そうだ、四人だ」
今度名乗りを挙げてきたのはヴェガであった。
「我等四人でだ。いいな」
「いいだろう。来るのだ」
四人を見上げたまま返した言葉だった。
「このミロも相手をしてやろう」
「行くぞ」
「それとも貴様から来るつもりか」
「そうだな。まとめて来るといい」
ミロはここでも言った。
「まとめてな」
「それではだ。四人一度でだ」
「行かせてもらうぞ」
「四人ではないな」
だがミロは不意にこんなことを言ったのだった。
「貴様等はな」
「!?どういうことだ?」
フォルスは今のミロの言葉に眉を顰めさせた。
「我等が四人ではないだと?」
「一体何を言うのだ?」
「おかしなことを言う」
アーキスとヴェガも今のミロの言葉を聞いていぶかしんでいた。
どうしてもわからないといったものをその顔にそのまま出しているのだった。

「我等は四人だ」
「それで言うのか」
「しかし」
ヴェーヌはこう言った。
「このスコーピオン、伊達も酔狂も見せる男ではない」
「では何だというのだ？」
「それはわからないわ」
フォルスの問いにも怪訝な顔で首を捻るだけだった。
「私にも」
「四人ではないだと」
「その通りだ」
ミロはあくまでそうだと主張するのだった。
「それでも相手をしようというのだ」
「何が言いたいのかはわからんがだ」
フォルスはとりあえず話を打ち切ったのだった。
「スコーピオンよ、いいな」
「来るというのだな」
「そうだ」
まさにそうだというのだった。
「覚悟するがいい」
「まずはスコーピオンを倒した」
「他の聖闘士達も倒す」
「そうしてやろう」
三人もフォルスに続く。そのうえでそれぞれの場所で身構えるのだった。
四人の全身に赤い鮮血を思わせる色の小宇宙が宿る。そして。
「行くぞ！」
「死ぬのだスコーピオン！」
四人は一斉にミロに向かって集中攻撃を浴びせてきた。その拳がミロに殺到する。

「この拳を受けてだ！」
「死ぬがいい！」
「来たか」
ミロはそのままの体勢で彼等と対している。
その彼に四人の狂闘士達の無数の拳が突き刺さろうとする。ミロは相変わらず身動き一つしない。聖闘士達はそれを見て思わず叫んだ。
「ミロ様！」
「そのままでは！」
やられる、そう思っての言葉である。
「早くお防ぎ下さい！」
「それかかわされるか！」
どちらかをしなければというのである。しかしそれでもミロは動かない。
そのミロの身体を今拳が貫く。かに見えた。
だがそうはならなかった。その拳はミロの身体をすり抜けるのだった。透明になったミロの身体を拳がすり抜けていくのだった。

第五十九話　盆地での戦いその六

「何っ、我等の拳が」
「すり抜けられる！？」
「どういうこと！？これは」
「貴様等の拳は見切った」
四人の攻撃を全てかわしてみせてから答えるミロだった。
「ならばだ。こうして紙一重でかわせば済むことだ」
「くっ、それでだというのか」
「我等の攻撃を」
「こうしてかわしたのだ」
そうだというのだった。
「それだけだ」
「やはり黄金聖闘士ということか」
「だからか」
狂闘士達はここでまた言った。
「我等の拳は何の問題もないというのか」
「そういうことだな」
「その通りだ。拳はだ」
あくまで拳に限定した言葉だった。
「どうということはない」
「そうか。ならばだ」
「話は違う」
ミロの前に対峙した四人はミロのその言葉を受けてまた言ってみせた。
「技を見せてやろう」
「それもいいだろう」
ミロは四人の言葉をまずは受けてみせた。
「しかしだ」

「まだ言うのか？」
「何だというのだ、一体」
「来たか」
ミロは今は狂闘士達に対して言ってはいなかった。
「どうやらな」
「来ただと！？」
「何がだ！？」
「御前達の仲間がだ」
それがだというのだった。
「今来たのだ」
「むっ！？」
「御前達は」
「生きていたな、フォルスよ」
ここでフォルスに対して何者かが声をかけてきた。
「四人共健在で何よりだ」
「インプ達は残念だったがな」
「来たというのか」
フォルスはその彼等の姿を確認してその眉をやや顰めさせた。
「御前達も」
「後で来るつもりだった」
「しかしな。嫌な予感がしてだ」
だからだというのだった。
「早く来たが」
「正解だったな」
「力を借りずともいいのだがな」
こう述べたのはアーキスだった。
「別にな」
「まあそう言うな」
「邪険にされる謂われはないわよ」
彼等はアーキスの今の言葉に対して笑ってこう返してみせたのだ

った。
「別にな」
「そうではなくて？」
「確かに」
彼等の言葉に対して頷いたのはヴェーヌだった。
「その通りよ」
「それならばだ」
「我等がここにいてもいいな」
「俺はそれで構わないがな」
ヴェガは彼等を見てもそれで何かを言うことはなかった。
「特にな」
「そうか、それは何よりだ」
「ヴェガはわかってくれているな」
彼等はそれを確認して言葉を微笑まさせていた。そしてそれは彼等全てがだった。
「我等とて悪意で来ているのではないのだからな」
「それはわかるな、フォルスよ」
「確かにな」
フォルスは渋々といった様子ではあったが彼等のその言葉に対して声で頷いてみせた。
「それはわかる」
「では異論はあるまい」
「人の好意は受けるものだ」
彼等はそれぞれ言ってみせた。
「それではだ。あらためてだ」
「スコーピオン達と戦おう」
「俺もそれでいい」
彼も遂に折れた形になった。そしてそのうえでミロに顔を向けて彼に対して問うのだった。
「スコーピオンよ、わかっていたのだな」

「小宇宙の動きを感じた」
だからこそわかったと答えるミロだった。
「それでだ。そしてセブンセンシズでもだ」
「ふむ。やはり黄金聖闘士ということか」
フォルスもまた彼のその言葉を聞いて述べた。
「我々の動きも把握できるということだな」
「九人か」
ミロは再び彼等に告げた。
「いいだろう。まとめて相手をしよう」
「言ってくれるものだ」
「我等九人全員を前にしてそう言えるとはな」
残る五人は山のところにいた。そこで先程までのフォルス達と同じ様にミロ達を見下ろしてそのうえで告げてきているのである。
「流石だと褒めておこう」
「とりあえずはな」
彼等もまたミロの実力は賞賛してみせた。
「だが。我等の力を侮らないことだ」
「それを見せてやろう」
「いいだろう」
ミロは今も彼等の言葉を悠然として受けていた。そのうえで言うのであった。
「それではだ。来るのだ」
「それならばだ」
「参ろう」
九人全員揃ったうえでだった。仕切りなおしの形を経てミロと対峙するのだった。今まさにミロと狂闘士達の戦いがはじまろうとしていた。

第五十九話　　完

2009・10・8

第六十話　着陣その一

着陣

新たに姿を現わした五人の狂闘士達は彼等がいるその山のところから再びミロと他の聖闘士達に対して告げてきたのだった。

「我等の名をな」

「それでいいな」

「俺はそれについては言わない」

その問いにはこう返すだけのミロだった。

「何もな」

「そうか。それならばだ」

「名乗らせてもらうとしよう」

ミロの言葉を受けてからであった。彼等はそれぞれ名乗りをあげた。

「公爵」

最初は左目が十字に潰れた隻眼の男だった。

「バシンのセーバー」

「伯爵」

白い髪のやや鋭い整った顔の女である。

「シャックスのケイト」

「子爵」

緑の長い髪の美女である。瞳も奇麗な緑だ。

「マルパスのフラウ」

「男爵」

濁った灰色の目をした男だ。

「ムールムールのマルジュ」

「公子」

赤い髪の小柄で可愛らしい少女であった。
「アムドゥシアスのメル」
「我等五人」
「フォルス達四人に加勢しよう」
高らかにこう言うのだった。
「それでいいな」
「インプ達はいないのか」
ミロは彼等の名乗りを受けたうえでこのことを問うてみせた。
「あの者達は今はいないのか」
「ふっ、今は置いておいた」
「我等だけで来たのだ」
そうしたというのであった。ミロの予想通りだった。
「この者達が危ないと思ってな」
「それでだ」
「余計なことだがな」
一応こう言いはするフォルスであった。
「だが。有り難く受けておこう」
「相変わらず素直じゃないわね」
その言葉を聞いて悪戯っぽい笑みを浮かべてみせたのはケイトだった。
「けれどそれがらしくていいわ」
「そうだな。フォルスはそうでなくてはな」
「フォルスではない」
セーバーとマルジュも言ってきた。
「しかし。それではだ」
「共に戦おう」
九人が動きを合わせてきた。ミロの前と山の上から。そこから見据えてきたのである。
九人は今まさにミロに向かおうとした。しかしだった。
「九人で一人を狙うとはな」

「何だ？」
「誰だ？」
狂闘士達はその声を聞いてすぐに声をあげた。
「この声は」
「何者だ？」
「アイオロスか」
ミロはその声を聞いてすぐにわかったのだった。
「貴方も来たのか」
「遅れて申し訳ない」
その声と共にだった。今黄金の翼を持つその男が出て来たのだった。それこそまさにサジタリアスの黄金聖闘士アイオロスに他ならなかった。
「ミロ、迷惑をかけたな」
「迷惑ではない」
それはそうではないと返すミロだった。
「むしろだ」
「むしろ？」
「早い位だ」
早いというのである。ミロは。

第六十話　着陣その二

「九人一度でもよかったのだがな」
「まあそう言わないでくれ」
アイオロスはミロの横に来た。そうして気さくな調子で彼に言ってきたのだった。
「私も戦わなくてはならないのだからな」
「だからここに来たというのか」
「その通りだ」
またミロの言葉に答えてみせる。
「共に戦わせてもらえるか」
「拒むつもりはない」
ミロはアイオロスを横目に見てこう述べた。
「それをな」
「そうか。それではいいな」
「うむ。頼む」
二人の黄金聖闘士が並ぶ。その後ろには六人の聖闘士達がいる。しかし狂闘士達は彼等よりもその二人の黄金聖闘士を見て述べるのだった。
「黄金聖闘士が二人か」
「まさかサジタリアスまで来るとはな」
彼等はそれを警戒することこの上なかった。
「しかしだ」
「ここで我等はだ」
言いながら再び構えを取る。そうしてそのうえで攻撃を仕掛けようとする。
だがここで。彼等の前にある者が姿を現わしたのだった。それは。
「なっ！？」
「サリア様」

「作戦を変更する」
姿を現わしたサリアはまずは同志達に述べたのだった。
「御前達は撤退するのだ」
「ですが」
「今こそが」
「いや、今は撤退するのだ」
あくまでこう言うのであった。
「ここで決戦をするつもりはない」
「決戦をですか」
「ここではですか」
「そうだ。だから下がるのだ」
告げる言葉は変わらない。
「わかったな」
「わかりました」
「サリア様がそう仰るのなら」
反論はないということだった。実に狂闘士らしい返答であった。
「その様に致します」
「これで」
こう言ってであった。彼等は構えを解いた。そうしてそのうえでミロとアイオロスに対して告げるのであった。
「スコーピオンにサジタリアスよ」
「この通りだ」
「今は退く」
それぞれの口で告げるのだった。
「命拾いしたなとは言わない」
「また次の機会にだ」
こう言うのである。
「その首貰う」
「他の者達もだ」
白銀や青銅の者達についても告げるのだった。

「それではだ」
「去るとしよう」
「では。去ろう」
サリアがまた彼等に対して声をかけた。
「それでいいな」
「はい、それでは」
「ここは」
こうして彼等は撤退するのだった。その撤退は素早く何一つとして残さなかった。残ったのはミロとアイオロス、そして六人の聖闘士達だけだった。
「さて、それではだ」
「何だ？」
ミロはアイオロスの言葉に対して応えた。
「今こうして合流したことか」
「そのことだ。間に合ったな」
「俺一人では不足だったのか」
ミロはそれがいささか不満な様であった。それは微かに顔にも出ていた。
「あの者達の相手は」
「そうではない」
それは否定するのだった。
「それはな」
「ならいいが」
「ただ。あの者の小宇宙を感じたからだ」
「サタナキアか」
あの者とは誰か。すぐにわかったことだった。

第六十話　着陣その三

「その小宇宙を感じてのことだな」
「その通りだ。サタナキアが来るのを感じたからだ」
「それはあちらもではないか」
ミロはアイオロスの話を聞いてこうも考えたのだった。そしてその考えを実際に言葉に出したのだった。
「貴方の小宇宙を感じて。ここに来たのではないのか」
「そうかも知れないな」
それを聞いてこのことに気付いたアイオロスだった。
「ではお互いが気付いてのことだったか」
「貴方が来なければサタナキアは来なかったかも知れない」
「そして私が来なければあの者もか」
「俺一人で九人と対することになった」
そうなっていたというのである。
「それは間違いのないことだった」
「それだけはな」
アイオロスも言う。
「確実だったな」
「そうなったらばだ」
「御前が勝っていたな」
「それは当然のことだ」
その自信は確かにあるミロだった。
「俺は敗れない。絶対にだ」
「しかしこれもまた運命なのだろう」
アイオロスは今度はこんな風にも言うのであった。
「私とサタナキアが共にこの場に姿を現わしたことはな」
「そして勝負が流れたことはか」
「そう。そして」

アイオロスの言葉はさらに続く。次に彼が言ったことは。
「決戦はあの場で行われることになった」
「あの場といいますと」
「やはり」
「そうだ。マチュピチュだ」
そこだと青銅の者達の問いに答えるアイオロスであった。
「あの場での戦いとなる」
「そうですか。あの古の場所で」
「我等は」
「まずはそこまで行くとしよう」
アイオロスは言った。
「そこまでな。いいな」
「わかった。しかしだ」
「しかし？」
「一つ困ったことができてしまった」
こう言いながらアイオロスに顔を向けるミロだった。
「一つな」
「？何がだ？」
「今テントも食料も七人分しかない」
彼が言うのはこのことであった。テントと食料の問題だったのだ。
「アルパカやリャマの食べるものはどうにかなる」
「それに水もか」
「いや、水もだ」
だがここでまた言うミロであった。
「水には気をつけている」
「気をつけているというと」
「生水は飲まないようにしている」
まずはこのことだった。
「できるだけな」
「それはいい心掛けだな」

「その為に飲むにあたって常に一旦沸かしている」
つまり熱消毒である。そうして湯なり冷えた水なりを飲んでいるというのである。これは衛生を考えるにあたって極めて当然のことである。
「一旦な」
「いいことだ」
アイオロスはミロのその言葉を聞いて感心した声で述べた。
「それはな」
「しかしだ。それだからこそだ」
「それだからこそ？」
「その水を沸かす為の燃料だ」
彼が言うのはこのことだった。水を沸かすのもただそこにあるだけではないというのである。そういうことであった。
「我等の中に火を使える者はいない」
「バベルの様にか」
「だから燃料は必要だ」
あらためて言うのであった。
「それもまた七人分しかないのだ」
「つまり私の分はないのか」
「用意するつもりではあったが」
こう言いはした。

第六十話　着陣その四

「しかし。今はない」
「そういうことだな」
「貴方の分は今のところないのだ。我々の分を切り詰めればそれは充分可能だが」
「ですね。それじゃあ」
「そうしましょう」
青銅の者達がすぐに頷いたのであった。
「俺達の分を少なくしたら充分ですよ」
「それで八人分の食料と燃料が確保できます」
「その通りだな」
「それでいける」
シリウスとカペラもそれでいいと結論を出した。
「ではそういうことでだ」
「アイオロス様の為にな」
「いや」
ところがだった。そのアイオロスがここで言ってきたのだった。
「私のことはいい」
「ですが」
「それはあまりにも」
「実は持って来ているのだ」
ここで微笑んでこう言ってみせたのである。
「既にな」
「えっ！？」
「持って来ておられるのですか」
「既に」
「私の分のテントも食料もだ」
そういったものが全てあるというのである。

「持って来ているのだ」
「そうだったのですか！？」
「もうですか」
「ふふふ、意外だったか」
驚きを露わにさせている青銅の者達に対して微笑んだまま言ってみせるのだった。
「これは」
「ええ、まあ」
「それはその通りです」
「私も手ぶらでここまで来ることはできない」
そうだというのだった。
「だからだ。持って来ている」
「そうですか」
「それなら」
「ただしだ。私のアルパカやリャマ達はまだ遠くにいる」
今ここにはいないということだった。
「合流できるのはまだ先だな」
「それではです」
「待たせてもらいます」
カペラとシリウスがここでアイオロスに対して述べた。
「アイオロス様の荷がここに来るまで」
「我々はここで」
「そうだな、そうするとしよう」
ミロもまたその二人の言葉を受けて頷いた。
「いいな、それで」
「はい」
「それでいいと思います」
青銅の者達も異論はなかった。皆ミロのその言葉に対して頷く。
それが何よりの答えであった。
「これで決まりだ。アイオロスよ」

「申し訳ないな」
ミロのその言葉を受けて微笑むのだった。
「ではすぐに戻りこちらに合流する」
「そうしてくれ。では我々は今はここで休もう」
「ええ。じゃあ」
「合流してからですね」
「戦いはまたそれからだな」
ミロが言ったのだった。
「進んでからな」
「その間に来たら」
「その場合は」
「案ずることはない」
ミロは六人に対して穏やかに返してみせた。
「このミロが警戒に当たる」
「そうか。では頼んだ」
アイオロスがその言葉を受ける。こうして全ては決まった。
アイオロスも合流した。そのうえでマチュピチュに向かうのだった。戦いはまだこれからであった。

第六十話　　完

２００９・１０・１１

第六十一話　対話その一

対話

豪奢な宮殿の中であった。そこで高貴な者達が話をしていた。玉座に座る一人の神々しい男を前にしてそのうえで話をしていた。

「今下界はどうなっているか」

「はい」

「まずは海皇ポセイドンですが」

「間も無く目覚めようとしております」

「まずはあの者だな」

「そしてです」

「次に冥皇ハーデスですが」

次に述べられるのは彼についてであった。

「間も無くかと」

「その封印が解かれるのは」

「間も無くか」

玉座の男はそれを聞いて静かに述べたのだった。

「そういえばもうそれだけの時が経ったのか」

「二百年が過ぎました」

「実にです」

「二百年」

男はその歳月を聞いて述べた。

「その時期か」

「はい、そうです」

「それにより御二方がです」

「面白いことになりそうだな」

男の声がここで笑った。

「これはまたな」

「面白いですか」

「今は」
「そうだ。面白い」
その声はさらに笑みを含ませてきていた。
「あの者達が蘇りだ」
「そして今は」
「アーレスが蘇ろうとしている」
ここでアーレスの名前が出された。
「狂闘士達は既にこの世に出て来ている」
「そしてアテナ側はです」
「黄金聖闘士が全て揃っています」
聖域のことも話されるのであった。
「十二人全てが」
「揃っています」
「そうだ。全て揃っている」
男はこのこともわかっているようであった。返答が強い。
「それが今の聖域の力だな」
「白銀及び青銅の者達もその数は多いです」
「先の冥皇ハーデスとの聖戦の傷は癒えています」
「二百年以上の歳月をかけてだな」
こう言う男であった。
「そうしてだな」
「あの時残ったのは僅か二人でした」
「それがです」
男の前に控えるこれまた神々しい者達の言葉である。
「今やそれ程までにです」
「そのうえでアーレスと」
「アテナはまだか」
男が今度問うた言葉はこれであった。
「アテナはまだなのか」
「はい、それも間も無くです」

「間も無く地上に転生してきます」
「そうだな。聖戦が起こるならばアテナは必ず降臨する」
男はそれもわかっているようであった。そうした言葉であった。
「間違いなくだ」
「では我々もまた」
「アテナと」
「いや、待て」
男は前に控える者達に対して言うのであった。そのうえで制止する。
「まずは彼等とアーレスの戦いがある」
「聖域とトラキアの」
「それですか」
「そうだ。アーレスは確実に冥府から出る」
次にこうも言った。
「確実に地上に戻って来る」
「そうしてそのうえで」
「聖域に対して本格的な戦いを挑むのですね」
「今の聖域とトラキアの戦いは余興に過ぎぬ」
まさに高みにいる、そうした言葉であった。
「所詮はな」
「ではその後で」
「アーレスとの戦いが終わっても」
「ポセイドンもいる」
次にこの神の名をまた出してみせた。
「そしてハーデスもだ」
「その御二方との戦いとなると」
「例えアーレスとの戦いに勝利を収めようとも」
「聖域はもつまい」
男の言葉はここでは極めて冷徹なものであった。

第六十一話　対話その二

「まずな」
「では我等は」
「全てが終わった後で」
「本来は全ては我が治めるべきだったのだろう」
男は言うのだった。
「本来はな」
「はい、それは地上だけでなく」
「全ての世界を」
「少なくとも地上はだ」
そこに限定するが言っていることは変わらない。
「私が治めるべきものであった」
「では今は戦いを見守り」
「最後に残った者を我等で」
「我が戦士達に告げよ」
厳かな声であった。
「今は見ているだけでいいとな」
「はい、そして時が来れば」
「そのうえで」
「アテナが降臨したとしてもだ」
男はあらゆるものを見ていた。そう、今は降臨していないアテナすらもである。
「私に適う筈がない」
「聖闘士達もまた、ですね」
「そうだ。聖闘士達には私の戦士達がいる」
彼等にはそうだというのであった。
「彼等が倒してくれる」
「そしてアテナは」

「御前達もいる」
まずは己の前に控えるその彼等を見ての言葉であった。
「そして私自身もだ」
「そうですね。我等に勝てる筈がありません」
「聖域では所詮は」
「私に対することができるとすれば」
男の声は自身に満ちていた。まるで全てを支配しているかの様に。
「海皇ポセイドンと冥皇ハーデスだけだ」
「あの御二方だけはですか」
「アテナ以上に」
「アテナも確かに強い」
それは認める彼だった。
「しかしだ。アテナが生まれたのは」
「己の母親からではありません」
「若し生まれたならば父を超えたのですが」
「生まれた時から決まっていたのだ」
男は玉座に座りながら左手で頬杖をついていた。そのうえでの言葉だった。
「既にな」
「ではアテナもまた恐れることはありませんね」
「聖域にある全ては」
控える者達は笑っていた。それぞれから放たれているその小宇宙はただそこにいるだけで圧倒的なものがあった。人のそれを寄せ付けないまでに。
「我々はまだ見ているだけでいい」
「動くのは」
「全ての勢力が潰し合い一つになった時だ」
その時だというのである。
「その時に動けばいいのだ」
「では今は」

「動かずに」
「先程も言ったが。そうするべきなのだ」
男はあえて動かないのだった。戦いを見守ると決めていた。
「彼等の潰し合いを見守る」
「果たして誰が、どの勢力が生き残るか」
「それですが」
控える者達はこのことも考えだしていた。戦いの行く末もである。
「誰になるでしょうか、それは」
「どの勢力が」
「戦力を考えれば最も強いのはハーデスだ」
男は彼だと述べた。
「百八の冥闘士達だけではないのだからな」
「タナトスとヒュプノスがいます」
「あの二柱の神々が」
ハーデスの側近として名高い二人である。彼等の強大さは聖域を聖戦の度に苦しめてきた。まさに圧倒的な力の持ち主であった。

第六十一話　対話その三

「彼等がいます」
「トラキアにもエリスと四柱の神々がいますが」
「あの者達の実力はタナトスやヒュプノスに劣る」
男は冷静に述べた。
「エリスはそれと同等なのだがな」
「ではやはり冥皇ハーデスですか」
「最も勝ち残る可能性が高いのは」
「今までもそう思っていたがな」
ここでふとだった。男の言葉が変わった。こう言ってきたのである。
「しかしだ。アテナと聖域は常に生き残ってきたな」
「はい」
「それは確かに」
控える者達がここで言うのだった。
「これまでの聖戦に全て」
「今行われているアーレスとの戦いもまた」
「アーレスは破壊と殺戮を司る戦いの神だ」
まさにそれだと言われた。
「その小宇宙は絶大なのは間違いない」
「確かに殺伐とはしています」
「しかしその小宇宙はアテナのそれに匹敵します」
それは確信されていた。アーレスの小宇宙が恐るべきものであることは彼等もわかっていた。神というのは伊達ではないのである。
「そして腹心にエリスと四柱の神々がいて」
「狂闘士達もいます」
「狂闘士達の力もまた相当だ」
男はまた言った。

「その力は聖域の白銀聖闘士よりも上だろう」
「あの七十二の狂闘士達はですね」
「あの者達もまた」
「そうだ。そして八大公」
狂闘士達を率いる彼等のことである。
「あの者達の実力は黄金聖闘士と互角だ」
「八人と十二人」
「その数は劣勢ですが」
「しかしアテナには仕える神がいない」
男はこのことを指摘したのだった。
「神がだ」
「しかしアーレスには五柱」
「この差は大きいですね」
「だからこそ前のアテナとアーレスの聖戦もだ」
「アーレスが勝つと」
「誰もが思いましたが」
「しかしそうはならなかった」
先のその聖戦のことであった。
「結果としてアテナは勝った」
「そうです。アテナが生き残りました」
「黄金聖闘士達の活躍により」
「そしてアーレスは冥界に逃げ込んだ」
先のアテナとアーレスの聖戦の結末である。全ての狂闘士達を失ったアーレスは彼と唯一親しい神であるハーデスの冥界に入った。
そこで今も封じられているのだ。
「今に至るまでな」
「あれはライブラの武具が使われたからでしたが」
「それ以上に黄金聖闘士達の活躍が」
「あの時の黄金聖闘士達はだ」
男は言った。

「先のハーデスの聖戦の時の者達もであり」
「そしてですね」
「今も」
「そうだ。同じなのだ」
こう話されるのだった。
「同じ魂なのだ」
「そして今もですね」
「彼等は」
「あの者達には何かあるのか」
男の声が考えるものになった。
「果たして何かが」
「わかりません。ですが」
「我等と戦うのは聖域ならば」
「封じておくか」
彼は言った。

第六十一話　対話その四

「あの者達はな」
「はっ、ではその時になれば」
「あの者達をまず」
「聖域は黄金聖闘士あってのものだ」
男はそれを確信していた。
「あの者達がいなければだ」
「後は白銀と青銅の者達だけ」
「何ら恐れることはありませんな」
「その通りだ。恐れることはない」
やはり男はそう見ているのだった。聖域については。
「何もな。それではだ」
「はい、ではその時が来れば」
「まずは黄金聖闘士を」
「そういえばだ」
男はここでふとあることも思い出したのだった。それが何かというとである。
「先のハーデスとの戦いだが」
「あの聖戦ですか」
「あの戦いでは黄金聖闘士達の他に青銅の者が活躍していたな」
このことを思い出したのである。
「確かペガサスの青銅聖闘士だったか」
「青銅がですか」
「聖闘士の中でも最下級の者がですか」
「そうだ。その青銅の者がだ」
活躍したというのである。控える者達にとってはそれは思いも寄らぬ、想像することなぞ全く考えられない、そうした次元の話であった。

「まさか」
「青銅の者がですか」
「確かハーデスを封じるのに決定的な役割を果たした」
それをしたというのである。
「その青銅の者がな」
「それがペガサスですか」
「ペガサスの聖闘士」
「所詮は青銅の者だ」
男はだからといって青銅聖闘士を高く評価していなかった。彼にとっては黄金聖闘士以外の存在は所詮は塵芥の如き存在でしかないのである。
「やはり針の穴程度であろうがな」
「しかし神である冥皇ハーデスに影響を及ぼしたとは」
「信じられません」
「あの戦いにおいては」
控える者達は次々にそれぞれ話していくのだった。
「黄金聖闘士達の命を賭した戦いが残っていますが」
「冥界三巨頭や無数の狂闘士達、そして冥界の神々との」
「その最後の戦いでのことだったようだな」
その時だというのである。
「そのペガサスが活躍したのは」
「最後で、ですか」
「冥皇に対して」
「ハーデスは三つの世界のうちの一つを治める者」
男は言った。
「その力は神々の中でも群を抜いている」
「その通りです」
「海皇ポセイドンと並んで」
「そのハーデスに人が何かをした」
男もそれは信じられないようであった。言葉に懐疑的なものが宿

っている。
「にわかには、というのも無理はない」
「申し訳ありません」
「我々にはその話は」
「しかしだ。ペガサスは今はいない」
男はここまで話したうえでこう述べたのであった。
「今はな」
「いないのですか」
「あの者は」
「そうだ、聖衣は主を持たないままだ」
そうだというのである。
「長きに渡ってな」
「ふむ。左様ですか」
「そういえば青銅の空席が十はあるようですが」
そのことは僅かだが彼等も知っているようである。
「そのうちの一つに入っていますか」
「まあもっとも」
彼等は歯牙にも止めていないといった口調であった。そしてそれはそのまま彼等の青銅聖闘士に対する考えを出しているものであった。

第六十一話　対話その五

「所詮青銅は青銅です」
「冥皇ハーデスも何か間違えたのでしょう」
「本来の身体は冥界にあるままですし」
「その通りだ。ポセイドンもまた本来の身体をこの世に出してはいない」
男はポセイドンもだと述べた。
「ソロ家の代々の者に憑依しているがな」
「ですから本来の力を出せません」
「我等と違い」
「だからこそあの者達は聖域に遅れを取っているのだろう」
男はそう分析したのであった。
「だからこそな」
「本来の身体と魂が合わさっていればどうということはありません」
「ですから我等は」
「最後に勝つのだ」
敗れるとは微塵も思っていなかった。最後に勝つのは自分達だと信じて疑っていない。自分達の力をそこまで高く見ているのである。
「よいな。今はどの勢力にも介入するな」
「今まで通り」
「このままで」
「これまでは聖域と他の神々が聖戦を行ってもすぐに他の勢力が顔を出してきた」
男はこれまでのことを思い出していた。そのうえでの言葉である。
「それにより我等の地上への統治が遅れました」
「忌まわしいことに」
「しかしこれからは違う」
「はい、全ての勢力が倒れ」

「その最後に」
「我等が出るのだ」
そうだというのであった。
「聖域にもアーレスにも精々潰し合ってもらおう」
「今のうちは教皇であるシオンも健在ですが」
「忌まわしいな」
シオンの存在を耳にして眉を顰めさせる男であった。
「あの男は人にしては力があるだけでなく小才も効く」
「はい、先代教皇セージと同じく」
「ですからあの小才を何とかせねば」
「だが。介入するのはやはり止めておく」
シオンについてもそうだというのである。
「それはな」
「されないのですか」
「あの者についても」
「そうだ。出来ればあの者が戦いの中で倒れてくれればいいのだがな」
これは男の願望であった。とはいってもやはり今は動こうとはしないのだった。
「そうも上手くはいかないか」
「まあことの成り行き次第でしょう」
「それによって」
「ギガンテス達も出て来れば面白いのだがな」
ふとこんなことも言った男だった。
「あの者達もな」
「あの者達は死んだのでは？」
「蘇ったのでしょうか」
「いや、それはない」
それはすぐに否定された。
「神話の時代に滅ぼされたきりだ」

「それではあの者達は」
「出て来ないと」
「テューポーン」
古の異形の巨人の名である。
「あの者もまた封印されている」
「はい、シチリアにいます」
「もう二度と出ることは適いません」
「そうだ。この私の手によってだ」
男がまた誇らしげに述べた。
「だから決してあの火山から出ることはない」
「今だに怒り狂ってはいますが」
「それでもですね」
「その通りだ。あの者達の復活は有り得ない」
男はその可能性を完全に否定してみせた。
「何があろうともな」
「それに古の神々も眠りについております」
「とりわけあの大地の女神は」
「ガイアか」
男の言葉の調子が変わった。何か懐かしい、かつての永遠に戻らない甘く優しい日々を思う出す様な。そうした言葉になっていた。

第六十一話　対話その六

「あの女神か」
「あの女神も眠りについております」
「永遠の眠りに」
「その通りだ。あの神もまただ」
男はその懐かしむものを抑えて述べてみせた。
「眠りから覚めることはない」
「今ここにいるのは我等のみ」
「新しく神々だけが」
「その通りだ。そしてだ」
男の言葉は完全に戻っていた。その壮厳かつ豪奢な玉座に座りそのうえで述べていくのだった。全てを見渡しているかの如き声で。
「我々が地上を完全に治める時になろうとしているのだ」
「新しき神々の中で最も力を持つ我々が」
「これより」
「アテナはそれがわかっておらんのだ」
そのうえでアテナを批判するのだった。
「地上は神々のものではないか」
「はい、人のものであると」
「古の時代からそう言い続け」
「あくまで人を護り続けています」
「人は神の僕に過ぎない」
男は一言で言い捨ててみせた。
「所詮はだ。我等に仕える為の存在だ」
「そして我等を崇め」
「その恩恵を受けるだけの存在です」
「しかし。それでもアテナだけは言っていた」
言葉はまた古のものを見る目になっていた。その遠い昔から現在

に至るまでの悠久の記憶をである。彼がその玉座から見てきた全てのものをである。

「地上はあくまで神々の治める場ではないと言い」

「人を護り。そして」

「人をただ慈しんできた」

「人を愛することはいい」

男もそれは否定しなかった。

「ポセイドンもハーデスも人を愛している」

「はい、確かに」

「それは間違いありません」

彼等とて人を愛さないわけではないのである。そしてそれはアテナや彼等だけではなかった。あの血生臭い彼にしろ同じであった。

「アーレスもまたな」

「その通りです」

「あの者も人を愛しています」

「それは間違いありません」

「しかしだ」

男は言葉をまた変えてきた。それもはっきりとである。

「それはあくまで我等を崇める人間だけをだ」

「そうです。他の神を崇める人間なぞ愛するに値しません」

「ましてや我等を信じないならば」

「愛する必要はない」

男もまた冷たく言い切ってみせた。

「全くな」

「ですがアテナは違い」

「そうした人間であっても愛します」

「それがわかりません」

「全くだ」

男もまたアテナのそうした考えを理解していなかった。しようともしなかった。

「あの者の考えることだけはわからん」
「人は所詮人です」
「我等と同等ではないというのに」
「先のハーデスとの聖戦においては」
またその聖戦の話をする男だった。
「とりわけ慈愛をみせた」
「そに人間達に対して」
「聖闘士以外の彼等に対しても」
「しかもだ」
男の言葉はまさに理解できないものに対していぶかしむ声であった。
「その聖闘士達の死に対しても涙を流していた」
「そうでした」
「神が人に対して泣くなどとは」
そうしたことも理解できない彼等であった。何処までもアテナのそうした感情をわかっていなかった。わかろうともしていないのだった。
「愚かしい」
「知の女神であるというのに」
「あの者は確かに戦いの女神であり知の女神だ」
「はい」
「まさにその通りです」
アテナのその司っているものは言及するまでもなかった。

第六十一話　対話その七

「ですが慈愛が強過ぎます」
「しかも無意味な慈愛が」
「ああなったのは何故か」
男の声の色からいぶかしむものは全く消えていなかった。むしろ濃くなっていく一方であった。
「それは。何故か」
「わかりません」
「思えばはじまりから違いましたが」
「我等とは」
「女から、母から生まれたのではない」
それがアテナである。
「それにあるのか」
「わかりません」
「それに生まれてすぐに人との交わりをはじめましたし」
「それもあるのでしょうか」
「どちらにしろだ」
男はまた言うのだった。
「それで我等の前に立ちはだかるのならばだ」
「我等と同じ存在であっても」
「それでもですね」
「そうだ。容赦することはない」
そうだというのであった。
「その時はな。よいな」
「はい、わかっております」
「それは」
控える者達もこう応えるのだった。
「その時はあくまで」

「アテナを倒します」
「我々の手で」
「御前達の手に負えぬのならば」
男はその場合について言及した。
「私が出向いて自らアテナの首を取ってみせよう」
「貴方様がですか」
「御自ら」
「御前達ならばできると信じている」
男はそれは信じると告げた。しかしそれでも言うのであった。
「しかしだ。若し情によりどうしてもというのならば私がだ」
「いえ、それには及びません」
「その通りです」
控えている者達は虚勢を張るようにして次々に述べるのだった。
「我等とてここにいる身」
「最早アテナとは違いますので」
「ですから」
「わかった。では信じよう」
男は彼等のそうした言葉を受けて静かに述べるのだった。
「御前達の今の言葉をな」
「そうして頂けると何よりです」
「我等にとっても」
「では。話はこれで終わる」
男は控えている者達の言葉を聞き終えたうえで述べた。
「これでな」
「はい、それでは」
「我々もこれで」
「いや、待て」
退こうとする彼等を呼び止めもするのだった。そうした意味で話を完全に終えたとは言えなかった。
「話は終わったがだ」

「はい」
「まだ何か」
「食事にするとしよう」
それだというのであった。
「食事にな。丁度いい時間ではないか」
「言われてみれば確かに」
「そうした時間です」
彼等も男の今の言葉に頷いた。するとすぐに彼等が今いる豪奢な部屋に美しく着飾った美女達が静々と出て来た。それぞれ持っている金と銀を合わせたかの如き美しさを持つその盆の上に黄金の林檎を置いている。林檎の他にも様々な馳走を持って来ている。
「では丁度いい。昼食にしよう」
「それでは今ここで」
「我等もですか」
「我が愛すべき戦士達も呼ぶのだ」
男はこうも告げた。
「あの者達もだ」
「それではあの者達も我等の相伴に預からせ」
「我等の慈愛を与えましょう」
「これが愛というものだ」
男はまた言うのだった。
「神の愛だ。アテナの言う愛は誤った愛だ」
「全くです」
「何を間違えたのか、あれは」
「過ちは正さなければならぬ」
男の前にその林檎が出される。まずはそれを手に取るのだった。
「それによりこの場所を去ったというのにそれでもまだ」
「わからぬとは」
「愚かなことです」
「知の女神であっても」

アテナのその司るものに一つについてまた言及した。
「わからぬらしいな」
「はい、それにより過ちを犯したことすら」
「わかってはいません」
「ならばだ。容赦することはない」
話は戻っていた。
「それだけだ。いいな」
「では我等は今は」
「愛する戦士達も呼びそのうえで」
「神の食事を食するとしよう」
その黄金の林檎を手にしての言葉である。彼等は今その特別なものを味わっていた。それは地上にも海界にも冥界にも決して存在し得ないものであった。

第六十一話　完

２００９・１０・１５

第六十二話　マチュピチュへその一

マチュピチュへ

アイオロスと合流した聖闘士達はそのうえでマチュピチュを目指していた。その中でアイオロスがミロ達に対して言ってきたのであった。

「ところでだ」

「はい」

「何かあったのでしょうか」

彼のその言葉にまず白銀の二人が応えた。

「敵ですか」

「また来たのでしょうか」

「いや、強い小宇宙はマチュピチュに留まったままだ」

あの十人のことであった。

「彼等が来ることはない」

「そうですか」

「やはりあの場所から動きませんか」

「それとは別にだ」

また別の話だというのである。

「アンデスを進むのはやはり辛いものがあるな」

「確かに」

彼の今の言葉に応えたのはミロだった。彼がアイオロスの今の言葉に対して応えたのだった。山は何処まで連なり雲までその上の方にかかっている。険しさもかなりのものである。

「この山脈は確かにな」

「ですがあれですよ」

ここで青銅の者達がアイオロスに対して言ってきた。

「昔のインディオ達はここに国を作っていましたし」

「スペイン人達にしても」

そのインカ帝国を滅ぼした彼等である。そのあまりにも徹底した破壊は歴史においても稀に見るものだっとして記録されている。しかも残虐なものであったとも伝えられている。

「この険しい山脈を踏破していますからね」

「流石にマチュピチュは二十世紀まで見つかりませんでしたけれど」

「しかしここを移動していた」

アイオロスが言うのはこのことだった。

「それは間違いないな」

「ええ、それはです」

「ですからマチュピチュもありますし」

そのインカ帝国の滅亡から落ち延びた者達は築き上げたと言われる遺跡である。中南米のインディオ文明の最後の名残とさえ言われているものである。

そして彼等が今目指す場所でもある。そこに狂闘士達がいる。彼等は今戦う為にその場所に向かっているのだ。山を幾つも越えて。

「移動していたのは間違いありませんね」

「ナスカの地上絵にしろです」

「こうした場所にあそこまで高度な文明を築いていた」

アイオロスはまた述べるのだった。

「それは容易には信じられないことではあるな」

「中南米の文明の特徴ですね」

「マヤもそうでしたね、確か」

「そうだ」

青銅の者達に対して述べるアイオロスだった。

「中南米の文明は全てかなりの高度の場所にあった」

「それが不思議だな」

彼の横にいるミロもそれははっきりと感じていることであった。

だからこそ今言葉に出したのであった。

「水も得にくければ流通や交通にも不便だったろうに」

「ですがナスカの地上絵にしろ」

「ピラミッドや石像にしてみましても」
白銀の二人が言ったのはその中南米の驚異的な数々の遺跡のことであった。
「やはり異常なまでに高度です」
「十六世紀においても古代の趣はありましたが」
「そうだ。不自然なまでにだ」
アイオロスもそこを指摘した。
「高度だな。数学技術にしても土木技術にしても」
「特に水晶の髑髏は」
「あれは一体」
マヤにあった謎のオーパーツである。今の技術でもそれを造り上げることは尋常ではない労力と時間を必要とする謎の一品である。
「そうしたことを考えていきますと」
「中南米の文明はあまりにも謎が多いです」
「そうだ」
アイオロスはまた頷いたのだった。
「中南米の技術はだ。あまりにもな」
「マヤにしろアステカにしろ奇怪な文明ですね」
「それを考えたら」
青銅の者達もそれについて言及するのであった。

第六十二話　マチュピチュへその二

「大体その地上絵にしてもですよ」
「何をどうやったらあんなにできるんですか？」
「小さな図面を拡大したにしろ」
「あんな昔にそんな技術が？」
なすかの地上絵は俗に小さな図面を拡大してそのうえで描かれたとされている。しかしそれをできるだけの素養が必要であるしまた目的もわかっていないのである。
「何処までも奇怪ですよね」
「本当にここの文明は」
「今我々はそのことについて知ることはできない」
アイオロスの言葉は無念さが込められていた。
「わかるにはあまりにも知る為の手段が不足している」
「ですよね、本当に」
「何もかもが」
「マチュピチュも然りだ」
彼等が向かうその場所もだというのだ。
「あの場所もまた」
「一体何が」
「確かなことはわかっていない」
マチュピチュにしろそうなのだ。インカ帝国の生き残りが最後の拠点としたという説が有力とされている。しかしそれも確かなことはわからないのだ。
「それにだ」
「それに？」
「まだあるんですか」
「インカ帝国といえば黄金だな」
アイオロスは今度はこのことを仲間達に話した。

「このことは知ってるな」
「ええ、エル＝ドラドですよね」
「それですよね」
青銅の者達がすぐに言ってきた。白銀の者達もアイオロスのその顔を見る。そしてそれはもう一人の黄金聖闘士であるミロもであった。
「その伝説の黄金郷」
「あの話のことですね」
「そうだ。インカ皇帝はスペイン人達の前にとうもろこしの粒がたたえられたその黄金の杯をひっくり返したうえで言ったのだ。
その言葉こそが、なのだ。
「貴方達が奪った黄金このとうもろこしの零れ出た数粒に過ぎないと」
「じゃあ残りは」
「一体何処に」
「全くわからない」
それもなのである。
「スペイン人達は探し回ったがな」
「しかしわからなかった」
「全くですか」
「インカ帝国は滅んだ」
アイオロスの今度の言葉は絶対の響きを持つものだった。
「そして黄金も何処かに消えた」
「ええ、その黄金も」
「何処かに」
「技術も真実もだ」
それは黄金よりも重要だと。アイオロスは言外に述べていた。
「何もかもが今はわからなくなった」
「これからわかっていくでしょうか」
「それは」

「わかればいいのだがな」
アイオロスの言葉は希望を語るものだった。
「何時かはな」
「何時かは、ですか」
「今じゃないんですね」
「今我々が中南米の文明についてわかることは僅かだ」
そのあまりにも独特で魅力的な文明についてはなのだった。
「本当に僅かだ」
「本当にあれですよね」
「とうもろこしの杯の中の数粒ですよね」
「そういうことだ」
まさにそういうことだった。彼等がわかることはだ。
「案外そういうことなのかも知れないな」
「黄金とは知識のことですか」
「そうとも考えられるってことですね」
「そうも思うのだがな。真実は何もわかりはしない」
結局のところ何もかもが謎なのだった。この文明についてはそうであった。
そんな話をしながら先に進んでいく。するとであった。

第六十二話　マチュピチュへその三

ある山を下る途中だった。そこで。
「むっ」
「来たか」
先頭を並んで歩くミロとアイオロスがそれぞれ述べた。
「あの者達が遂に」
「出て来るな」
「出て来るっていいますと？」
「まさか」
「そうだ、そのまさかだ」
「狂闘士達だ」
警戒する顔で後ろの他の聖闘士達に対して告げたのだった。
「出て来るぞ」
「ここでな」
「あの連中がですか」
「マチュピチュから」
「安心しろ」
警戒の念を強めた彼等に告げたのはミロだった。
「あの者達ではない」
「インプ達だ」
彼等だというのだった。
「おそらく第二波だ」
「その者達だ」
「そうですか。インプ達ですか」
「あの連中の中での雑兵ですね」
それを聞いてまずは安心した青銅の者達だった。
「ここで決戦かって思いましたけれど」
「とりあえずはそれはなしですね」

「まあ覚悟している場所で戦いたいですからね」
別に恐れてはいなかった。ただ心構えをしている場所ではないのでそのことに戸惑ってしまっただけのことだったのだ。それだけであった。
「まあ出て来るっていうんなら」
「俺達が相手してやりますよ」
「いや、それには及ばぬ」
しかしであった。今度はアイオロスが出て来たのであった。
「私が相手をする。御前達は休んでいることだ」
「いえ、そう言われましても」
「俺達も。その」
青銅の者達が困った顔でそのアイオロスに対して言葉を返した。
「戦わせてもらいたいっていうか」
「ですから」
「いや」
しかしであった。ここでもう一人出て来たのであった。
「俺が行こう」
「えっ、ミロ様」
「今回もですか」
「そうだ。このインプ達の相手もこのミロがしよう」
実際にこう言ってみせたのだった。
「ここでもな」
「ええと。ですから」
「俺達もですね」
「御前達の出番はマチュピチュに着いてからだ」
そこからだというのであった。
「そこに辿り着いてからだ。いいな」
「そこで、ですか」
「俺達は」
「そうだ。わかったな」

あらためて彼等に告げるミロだった。
「それはな」
「何かやっぱり」
「そうだよな」
しかし彼等はミロに対しても言うのだった。
「俺達も戦いたいっていうか」
「ですから」
「それには及ばないということだな」
ここでアイオロスが彼等に告げてきたのだった。
「そういうことだな」
「っていいますと」
「やっぱり俺達の出番はですか」
「マチュピチュまで待つことだ」
見ればアイオロスもだった。何時の間にかその足の動きを止めていた。そのうえで彼等に対して告げていたのである。
「マチュピチュにいるインプ達の数は相当なもののようだな」
「相当な、ですか」
「そんなにいるんですか」
「そうだ。かなりのものだ」
こう述べるアイオロスだった。

第六十二話　マチュピチュへその四

「小宇宙を感じる」
「それじゃあ俺達はそこで戦うまでは」
「戦力を温存ってことですね」
青銅の者達が納得しかけたそのタイミングで。白銀の二人が言ってきたのだった。
「そういうことだな」
「今は、だ」
こう落ち着きだした青銅の者達に対して述べた。
「マチュピチュまで待つことだ」
「今はな」
「ええ、それじゃあ」
「そういうことで」
ここでようやく頷いた彼等であった。
「今はですね」
「辛抱しますから」
「それではだ」
ここまで話を聞いて話して納得した顔になるアイオロスであった。そうしてそのうえで前に出ていたミロに対して声をかけるのであった。
「頼んだぞ」
「任せてもらおう。それではだ」
スコーピオンの黄金聖衣が来た。そして。
自動的に別れ瞬く間に彼の全身を包んだ。マントも羽織った彼の前に今インプ達が姿を現わしたのであった。
「スコーピオン！まずは貴様からだ！」
「では死ね！」
全員で突進してきた。しかしミロはその彼等を一瞥し。そのうえ

で拳を放ったのだった。
「消えろ」
「うわっ！」
「ぐふっ！」
勝負はまさに一瞬であった。インプ達はミロのその拳が無限に拡がった中で倒れ伏したのであった。
「まさか我等まで」
「こうも簡単に・・・・・・」
「これが黄金聖闘士の全力だ」
ミロは倒れ伏す彼等の前に目を閉じて立っていた。
「そしてだ」
「そして？」
「何だというのだ・・・・・・」
「黄金聖闘士は獅子だ」
こう言うのだった。
「獅子は相手が誰であろうとその全力を出す」
「そういうことか」
「だから今もだというのだな」
「その通りだ。このミロの渾身の拳を受けた御前達はだ」
倒れ伏すインプ達への言葉だった。
「その全力で倒されたことを覚えておくのだ」
「ふっ、ではそれを誇りとして」
「ハーデス様の下に向かうとしよう」
こう言ってであった。彼等は事切れた。この戦いもミロの勝利に終わった。
聖衣は離れた。ミロはそれまでの服に戻りそのうえでアイオロス達に対して告げた。
「それではだ」
「うむ、先へ向かおう」
アイオロスが彼の言葉に頷いた。それからも幾つもの山を越えた

彼等は。その目的地であるマチュピチュに辿り着いたのであった。
「そうですか。ここですか」
「ここがマチュピチュなんですね」
「そうだ」
アイオロスが周囲を見回す青銅の者達に対して答えた。段々になった無人のその場所は階段を思わせる。そして畑の跡や建物が残っておりそのうえ墓地もある。門もかつては立派であったであろう、そうした技術と人々の苦労の跡をしのばせるものであった。
その中を進みながらだった。彼等は警戒の念を解いていなかった。
「何時出て来るか」
「それですね」
「今出て来てもですけれど」
「小宇宙の気配ははっきりしている」
ここでまた言うミロだった。彼はただ正面を見ている。その階段状の廃墟の中を進みながら。
「実にな」
「ええ、それは実にはっきりと」
「感じます」
カペラとシリウスもそれは感じ取っていた。

第六十二話　マチュピチュへその五

「間違い無くここにいます」
「彼等は」
「この禍々しい気配ですね」
「それですね」
そして青銅の者達もであった。
「もう周りからこれでもかっている程度」
「あちこちから」
物陰や建物の中を見てもだった。それははっきりと感じ取れるものになっていた。
「それで何処にですけれどね」
「連中が出て来るのは」
「場所はかなり選ぶ筈だ」
アイオロスの言葉だった。
「それはな」
「選ぶっていいますと」
「そこは」
「戦うのに相応しい場所だ」
アイオロスは言った。
「そこにいる筈だ」
「相応しい場所といいますと」
「そこは一体」
「神の戦士同士が会うべき場所か」
しかしミロはアイオロスのその言葉からすぐにわかった様であった。
「そうなるとだ」
「そうだ、あの場所だ」
アイオロスはそのミロに対して告げた。

「わかったな」
「うむ、あの場所だ」
ミロは彼のその言葉に頷きながら前を進む。そうして辿り着いた場所は。
「あれっ、あそこじゃないんですか？」
「あの神殿じゃ」
青銅の者達は墓地も三窓のある神殿も通り過ぎたので声をあげた。
「墓場じゃないんですか」
「そして神殿でも」
「狂闘士は冥闘士ではない」
ミロはいぶかしむ青銅の者達に対して告げた。
「墓場はあの者達の聖地ではない」
「そうですか。じゃあ墓地じゃないんですか」
「けれど神殿でもないんですか」
「より相応しい場所だ」
少なくともその三窓の神殿ではないというのである。
「そこだ」
「何かこの広場って」
「いいですね」
今度はテラスに似た広場に入った。そこはかなり独特の場所だった。美しく神々しい場所だ。その中に入ると今度は白銀の者達が言うのだった。
「奴等の小宇宙がより」
「さらに高まっています」
こう言うのだった。
「間も無くですね」
「奴等のいる場所です」
「そうだ。そしてそれはここでもない」
この広場でもないというのだった。見晴らしがよく美しい場所だったがそこでもないというのだった。ミロはその足をさらに先に進

めていく。
「ここではな」
「そうですか。ここではですか」
「先ですね」
「間も無くだ」
ミロの言葉は強いものになっていた。
「間も無くその場所に着く」
「そこで奴等とですね」
「会うんですね」
青銅の者達は次第に身構えていた。そうして日時計の場所に辿り着いたのである。するとその日時計の下にあの男がいたのであった。

第六十二話　マチュピチュへその六

「よく来たな、アテナの聖闘士達よ」
「サタナキアか」
「暫く振りだな、スコーピオン」
サリアは不敵に笑ってミロに応えたのだった。
「元気そうで何よりだ。それにだ」
「私か」
「サジタリアスまでいるとはな」
彼は今度はアイオロスに顔を向けて述べた。
「いいことだ。こちらとしても一度に出て来た方がいい」
「そうか。私もいていいのだな」
「貴様も倒しておかなければならない男だ」
まさにそれだというのである。
「黄金聖闘士こそ聖域の象徴なのだからな」
「そうか。それではだ」
その言葉を受けて返すアイオロスだった。
「はじめるとするか」
「いいだろう。出て来るのだ」
「はっ、サリア様」
「それでは」
彼の左右にあの九人の狂闘士達が姿を現わしてきた。そのうえでミロ達を見据える。
「スコーピオン、そしてサジタリアスよ」
「覚悟はいいな」
「ここで貴様を倒す」
こう言うのだった。
「いいな、ここでだ」
「倒させてもらう」

そう言ってであった。それぞれ身構える。そうしてだった。
サリアがまた彼等を見据えて。そのうえで言ってきたのだった。
「聖衣を着けろ」
「聖衣をか」
「まさか着けぬというわけではあるまい」
このことを問うたのだった。今度は。
「戦うのならば」
「如何にも」
ミロが彼の言葉に答えた。
「その通りだ。その時を待つというのか」
「聖衣を身に着けぬ貴様達なぞ戦う価値もない」
サリアはこう返すのだった。
「我等も戦衣を見に着けているのだからな」
「だからか」
「そうだ。早く着けるのだ」
戦衣の赤い禍々しい輝きを見せながらの言葉だった。
「いいな」
「わかった。それではだ」
「そうさせてもらおう」
ミロだけでなくアイオロスがそれに応えたのだった。
「今すぐにだ」
「ここに来るのだ、聖衣よ」
そう言うとだった。それぞれの聖衣が宙に現れ。そのうえで分かれた。すぐに彼等の身体をその聖衣が身を包んでいくのであった。
「これでいいな」
「戦う資格があるな」
「いいだろう」
サリアはミロ達がそれぞれの聖衣を身にまとったのを見てまた述べた。
「それではだ。戦わせてもらおう」

「よし、それではだ」
「インプ達よ。御前達も出るのだ」
「御前達も戦いに加わるといい」
こう言うのだった。
「聖闘士達との戦いにだ」
「加わるのだ」
「はっ、その言葉待っておりました」
「有り難き幸せ」
その言葉と共に十人の狂闘士達の後ろに彼等が出て来た。まるで影の様に急に。
「それでは我等も」
「御相伴に預からせて頂きます」
「スコーピオン、そしてサジタリアスよ」
無数のインプ達をその後ろに控えさせながらサリアが二人に言ってきた。
「よいな。それでは」
「うむ。こちらもだ」
「心構えはもうできている」
二人もまた。彼の今の言葉に応えた。
「行くぞ」
「それではだ」
今まさに戦いがはじまろうとしていた。高き遺跡において神々の戦士がこの地での最後の戦いをはじめようとしていた。

第六十二話　　完

２００９・１０・１８

第六十三話　遺跡での死闘その一

遺跡での死闘

「よし！」
「それならだ」
「やってやるか！」
「おうよ！」
アクタイオン、ジャッカー、シフォン、カービルがそれぞれ叫んだ。
その彼等に対してインプ達が襲い掛かる。しかしであった。
「今まで出番がなくてな」
「身体がなまってたんだよ」
「だからな」
「思いきりやらせてもらうぜ！」
こう叫んでだった。それぞれインプ達に必殺技を放った。
「ベアクラッシュ！」
アクタイオンがその突きでインプ達を吹き飛ばした。
ジャッカーはその蹴りを放った。
「マッハキック！」
その超音速の蹴りが敵を貫く。
まずは二人が攻撃を浴びせる。そしてだった。
次はシフォンとカービルだった。彼等の攻撃は。
「トルネイドアローーーッ！」
「リミットクラッシュ！」
シフォンは一気に無数の拳を叩き込む。カービルは一直線に敵に手刀を浴びせる。そうしてインプ達を薙ぎ倒していくのだった。
「ぐはっ！」
「こ、こいつ等」
仲間達を倒されたインプ達はここであらためて彼等の強さを知っ

た。
「強い、それもかなり」
「最下級の聖闘士じゃなかったのか？」
「おいおい、俺達はアテナの聖闘士だぜ」
「みくびってもらったら困るぜ」
技を放ち終えた彼等は不敵な笑みを浮かべて彼等の驚きに返した。
「御前等程度じゃな」
「幾らいても相手にならねえんだよ」
「くっ、我等を愚弄するか」
「それは許さんぞ」
「許さないとかそういうのはどうでもいいんだよ」
シフォンが彼等に言い返した。
「こっちはな。手前等を倒す為にここにいるんだ」
「だからだ。手前等がどれだけいようよ」
今度言ったのはカービルだった。
「負けるわけにはいかねえんだよ」
「わかったらな」
「さっさとやられちまえ」
アクタイオンとジャッカーも彼等に告げる。
「苦しまないようにしてやるからよ」
「一撃だぜ」
「こいつ等・・・・・・」
「我等を甘く見るなよ」
インプ達はその手に持っている槍を構えそのうえで再び彼等に向かう。しかしインプ達にとっての敵は彼等だけではなかったのである。
「生憎だが」
「我等もいるのだ」
シリウスとカペラが出て来てインプ達に告げる。
「ミロ様とアイオロス様の邪魔はさせん」

「貴様等の相手は我々だ」
「今度は白銀聖闘士か」
「貴様等だというのか」
「そうだ」
「我等だ」
インプ達の言葉にも返すのだった。
「それでは行くぞ」
「いいか」
「おのれ、来るのか」
「我等を倒すつもりだな。させんぞ」
インプ達は彼等に対しても向かう。その槍を手に一斉に襲い掛かる。
「食らえ！」
「これでだ！」
こう叫びながら一斉に槍を突き出す。
そうして二人を貫かんとする。しかしだった。
まずはシリウスだった。その大柄の身体に力を込めそのうえで、だった。
「グレートマウンテンスマッシャー！！」
その技の名前を叫んでとてつもない衝撃を拳から放った。それで目の前に来たインプ達を一斉に吹き飛ばしてしまったのであった。

第六十三話　遺跡での死闘その二

「うわあああーーーーっ！」
「こ、これが白銀聖闘士の力だというのか！」
「そうだ」
まさにそうだと答えるシリウスだった。
「この攻撃こそがだ」
「くっ、カニスマヨル・・・・・・」
「これが白銀聖闘士の力か・・・・・・」
吹き飛ばされたインプ達は地面に叩き付けられる。そうしてそのうえで事切れていく。シリウスの攻撃はとてつもない威力であった。
そしてであった。次は。
カペラだった。その腕にある円盤を放たんとする。
「今度は俺だ」
「むっ！？」
「貴様は」
「アウリガのカペラだ」
あらためて彼等に名乗ってみせた。そうして。
「受けろっ、ソーサー！」
その円盤を放った。円盤はそれ自体が意志があるかの如く複雑な動きを示し。そのうえで襲い掛かるインプ達を薙ぎ倒していくのだった。
「な、何だと！」
「この円盤は！」
「ソーサーは只の円盤ではない」
そのソーサーを放ち終えたカペラはこう彼等に告げた。その間にも多くのインプ達がソーサーにより次々と倒されていっている。
「このカペラの意志に基き音速を遥かに超えて飛ぶのだ」
「くっ、何という攻撃だ・・・・・・」

「まさかその円盤で我等を倒すとは」
またしても倒れ伏していくインプ達だった。
「白銀聖闘士、恐るべき奴等だ」
「これが聖域の聖闘士達か」
「侮ってはいなかったようだが知らなかったな」
カペラはその倒れ伏す彼等を見下ろして言った。
「我々の技は」
「その様だな」
シリウスがカペラの横について応えた。
「どうやらな」
「これでまずある程度は倒した」
カペラはそのシリウスに言葉を返した。
「しかしだ」
「そうだ。まだインプ達は数多くいる」
それもかなりの数がだ。マチュピチュ全体を覆い尽くさんとするかの様である。
その彼等を見てた。二人は身構える。
後ろにいる四人の青銅の者達もだ。彼等も同じであった。
「折角の戦いですから」
「思う存分やってやるぜ」
「それでいいよな」
「あんた達もな」
こう白銀の二人に問うのだった。
「奴等一人残らずぶっ潰して」
「やってやるのな」
「当然だ」
「答えるまでもない」
彼等の返答は決まっていた。
「例えどれだけいようともだ」
「倒してやろう」

「よし、それならだ！」
「本当にとことんやってやらあ！」
こうして彼等はインプ達にまた攻撃を放つ。彼等は今ここで思う存分戦うのだった。
そうしてだった。ミロとアイオロスは。サリアを中心とした十人の狂闘士達と対峙していた。その中でサリアが彼等に対して告げてきた。
「まずはだ」
「何だ？」
「我等が優勢だな」
こう二人に言うのであった。
「数はな」
「確かにな」
ミロが彼の今の言葉に応えて小さく頷く。
「こちらは二人。それに対して」
「我等は十人だ」
サリアは彼自身もその数に入れていた。

第六十三話　遺跡での死闘その三

「この数は大きい」
「さて、それはどうか」
だがミロは今の彼の言葉をあえて打ち消してみせたのだった。
「数の違いが力を見せるかどうかはだ」
「わからないというのだな」
「そうだ。実力が伴っていなければだ」
ミロはさらに言う。
「数が幾ら多かろうとも何の意味もない」
「言ってくれるな」
「面白い」
それを聞いたジェシーとフォルスがまず一歩前に出た。
「ならばだ」
「我等の力、今見せよう」
「望むところだ」
売り言葉に買い言葉の形になっていた。また返すミロだった。
「それではだ。見せてもらおう」
「いいだろう」
「それでは私もだ」
ミロだけでなく彼の横に立つアイオロスも言ってきた。その黄金の翼が黄金聖闘士を象徴する白マントよりも眩く輝き彼を見せていた。まるで神の様に見える程だった。
「戦わせてもらおう」
「よし、その言葉受けた」
「容赦はしないぞ」
サリアの周りにいる九人が一斉に身構えた。そのうえでアーキスがサリアに対して言ってきた。
「サリア様」

「何だ」
「ここは我等にお任せを」
「是非」
「御願いします」
アーキスだけでなく他の者達も彼に言うのだった。
「我等九人でこの二人を」
「倒させて下さい」
「いいだろう」
サリアも彼等のその言葉を受けるのだった。
そうしてだった。彼等に対して告げた。
「それではだ」
「はい」
「何か」
「二手に別れるのだ」
彼が己が率いる狂闘士達に告げたのはこのことだった。
「一方はスコーピオン、そしてもう一方はサジタリアスにだ」
「それぞれ向かえと」
「そうされよと」
「それでよいか」
サリアはミロとアイオロスに対してもこれでいいか問うた。
「そちらはどうだ」
「いいだろう」
「私からは言うことはない」
ミロとアイオロスはそれぞれ彼の言葉に応えた。彼等はまだその構えを取ってはいない。
「誰が来ようとも何人が来ようとも」
「こちらから言うことはない」
「そうか。わかった」
それを聞いて納得した顔で頷いたサリアだった。そのうえでだった。

あらためて己の部下達に対して告げるのだった。
「二手に別れるのだ」
「わかりました」
「それでは」
これで決まりだった。彼等はそれぞれミロとアイオロスに向かった。ミロに向かったのが五人、アイオロスに向かったのが四人、合わせて九人であった。
「さて、それではだ」
「いいかスコーピオンよ」
「貴方の相手は私達よ」
その五人がミロに対して言ってきた。フォルスにケイト、ヴェーヌ、ヴェガ、マルジュ、メルの五人であった。その五人がミロの前に音もなく来たのだ。
「この私達の技を受けて」
「死ぬのよ」
「それではだ」
ミロは落ち着いた様子で彼等の言葉を受けてそれを返してみせた。

第六十三話　遺跡での死闘その四

「来るがいい。このミロも相手をしよう」
「怖気付いてはいないな」
フォルスがそれを確かめた。
「それはないか」
「あると思うか。このミロに」
ミロのその目が強いものになった。
「黄金聖闘士の一人であるこのミロが」
「ふん、確かにな」
「それはないわね」
「間違い無く」
彼等にしてもこのことは言われずともわかることだった。何故ならミロの小宇宙は彼等から見ても増幅してきているのがわかるものだったからだ。それが何よりの証拠だった。
「それではだ」
「行くわ」
五人は一斉に動いた。そのうえで技を放ってきた。
「受けるがいい」
最初に動いてきたのはフォルスだった。
「この狂闘士達を取り締まるアガレスのフォルスの力を」
「取り締まるだと」
「そうだ」
ミロに向かって突き進みながらの言葉である。
「アガレスは魔神の中で憲兵達を率いる。それにより同胞達を取り締まるのだ」
「そうか。そういう意味か」
「そしてだ」
フォルスはさらに言ってきた。

「その取り締まる槍はだ」
「むっ！？」
「この槍だ。受けよ」
左手に持っていた槍を正面に突き出して。そのうえで激しい突きを幾度も繰り出したうえで叫んだのだった。
「ダークスラッシュ！！」
無数の槍の突きでミロを蜂の巣にせんとする。そしてもう一人そこに来た。
「次は私です」
「シャックスか」
「そう。シャックスのケイト」
己の名を名乗りながら空からミロに襲い掛かる。
「シャックスは人の目や耳を食らう魔神。そしてその技もまた」
「来るか」
「受けるのです！」
叫びながら。ミロの目を狙い右手の爪を五本鋭く伸ばしてきた。
「スカーレッドタスク！！」
「今度は爪か」
「この爪を受けて生きた者はいません」
ケイトは技を放ちながら言い切ってみせた。
「誰一人として」
「そして」
また次の狂闘士が出て来たのだった。
「この私だ！」
「貴様は確か」
「マルバス！」
まずは己が司る魔神の名前からだった。
「マルバスのヴェーヌ！」
「貴様だったか」
「この牝獅子の攻撃を受けるのだ！」

叫びながら。その左腕から赤い閃光を放ってきたのだった。彼女も正面からだった。
「スカーレッドオブヘル！」
赤い光もまたミロに対して襲い掛かる。
しかしまだいた。残る二人は。
「受けろ！」
マルジュだった。
「このムールムールのマルジュの攻撃をだ！」
「貴様は空からか」
「我が魔神ムールムールは空を駆る魔神」
それが彼の司る魔神だった。
「その技はこれだ！」
「来たか」
「フライングランス！」
その腕から無数の槍が放たれ降り注ぐ。最後の一人も来た。
メルは動かなかった。だがその手にバイオリンを持っていた。そうしてそこから音楽を奏でてみせたのであった。
「私の技は拳や光を使うのではありません」
「音か」
「そう、この音で」
敵を倒すというのである。
「アムドゥシアスの技。受けるのですスコーピオン！」
「では聴いてみせよう、アムドゥシアスよ」
四人の攻撃を前にしながらもメルに告げてみせる。

第六十三話　遺跡での死闘その五

「貴様のその音をだ」
「いいでしょう。ラストレクイエム！」
その音が奏でられた。それはまさに白い死だった。まるで彼女が持っているそのバイオリンから無数の髑髏が放たれるかの様であった。
「さあ、スコーピオンよ」
「我等のこの攻撃」
「どの様にして防ぐ」
技を放ったうえでミロに対して問うのだった。
「これだけの攻撃を」
「如何にして」
「それは既に行っている」
ミロは身動き一つせずに彼等に言葉を返したのだった。
「既にだ」
「既に！？」
「何を言うのだ」
「戯言か」
彼等はミロの今の言葉をそう受け取ったのだった。
「我等の技を前にして」
「身動き一つせずに言うなぞ」
「狂った？それとも諦めたというの？」
「狂ったのでも諦めたのでもない」
そのどちらでもないというのだった。
「そう、既に御前達の技は見切った」
「何っ！？」
「既にだというの！？」
「そうだ。そしてだ」

身動き一つしないままさらに言うミロだった。
「このミロの攻撃はだ」
「何だ!?」
「それは一体」
「既に放っている」
こう言うのだった。
「そう、既にだ」
「うっ!?」
「何っ!?」
その時だった。五人の身体に激痛が走った。それは。
「うぐっ、これは・・・・・・」
「一体何だというの?」
「激痛が」
その激痛によって身動きが取れなくなってしまっていた。それにより放とうとしていた技も止まった。ミロはこうして身動き一つすることなく攻撃をかわしてしまったのだ。
「何だというのだ、急に」
「この激痛は」
「まるで刺されたかの様だ」
まさにそれだったのだ。その激痛は。
その激痛により動きを止めているとだった。まただった。
彼等の全身に再び激痛が走った。それにより地に落ち倒れ込んでしまった。五人は完全に動けなくなってしまったのであった。
「何だというのだ、これは」
「これ程の痛みは」
「蠍の毒の如き・・・・・・」
「そうだ、蠍だ」
まさにそれだと言うミロだった。
「このミロの司る星座は蠍だ」
「蠍!?」

「それでは」
「そうだ、蠍だ」
ミロは言葉を続ける。
「その蠍座は十五の星よりなる」
「十五の星だと」
「この痛みとどう関係があるというの？」
「この技の名前はスカーレットニードルという」
今度は業の名前を話した。
「スカーレットニードル？」
「その技は一体」
「このミロは十五の星の分だけ放つことができる」
そうだというのである。
「一つ撃つその度に激痛を与える」
「それがこの攻撃だというのか」
「この激痛の」
「その通りだ。ではわかったな」
あらためて言うミロだった。
「これでだ。この攻撃はだ」
「その十五の攻撃を放つ間に」
「どうするというのだ？」
「嬲り殺しにでもするつもりか」
「その趣味はない」
ミロはそれを否定した。

第六十三話　遺跡での死闘その六

「このミロは敵であろうとも人をいたぶる趣味はない」
「それではだ」
「何だというのだ?その十五の攻撃は」
「何の意味があるというの?」
「その攻撃を繰り出す間に問おう」
ミロは五人に対して告げてきた。
「降伏するのか」
「降伏だと?」
「何を言うの?」
「我等狂闘士に対して」
「十五の攻撃を放つそれまでの間にどうするか決めさせてやる」
ミロの言葉は続く。
「降伏か死か。どちらだ」
「戯言を」
「何を言うのか」
言っているその間にだった。ミロはまた撃って来た。
「うぐっ!」
「ぐっ!」
「さあ、どうするのだ」
激痛に必死に耐える彼等にさらに問うてみせた。
「降伏か。それとも死か」
「馬鹿にするなと言っているのだ」
「その通りです」
五人の狂闘士達はその攻撃を受けてもまだだった。何とか耐えていた。
「我等に降伏はない」
「何があろうとも」

「十五撃つ間に激痛が襲い続ける」
ミロの言葉は続く。
「それでもか」
「それだが何だというのですか？」
「我等は狂闘士」
またこのことを言う彼等だった。激痛に苦しみ抜きながらも。
「降伏なぞ有り得ないこと」
「下がることも」
「それではだ」
ミロはそうした彼等の言葉を聞いてまた問うた。
「このまま激痛を味わい続けるというのだな」
「どれだけの痛みを受けようともだ」
「我等は我等」
こう返すのみだった。
「何をされようと下ることはない」
「決してだ」
「そうか」
ミロは彼等の考えを聞いた。そうしてであった。
「それではだ」
「さあ、撃ち込んでいくがいい」
「喜んで受けましょう」
痛みに堪えながらの言葉であった。それはミロにもよくわかる。
「その痛みの中で」
「アーレス様への永遠の忠誠を見せよう」
「それには及ばん」
忠誠という言葉へのミロの言葉だった。
「それにはだ」
「何っ！？」
「どういうこと、それは」
「我等の忠誠を疑うというのか」

「そうではない」
忠誠を疑っているのかというとそれは明らかに否定したミロだった。発するその言葉にも侮蔑といったものは一切見られなかった。
「御前達のアーレスへの忠誠はわかった」
「わかったというのか」
「ならば早く撃て」
「その残りを」
「確かにこのスカーレットニードルは十五の星からなる」
またこのことを告げるミロだった。
「しかしだ」
「しかし？」
「黄金聖闘士の拳は光速だ」
最早言うまでもないことであった。

第六十三話　遺跡での死闘その七

「一度に集めて撃つことができる」
「それがどうしたのだ」
「一体何だというのです」
「話は最後まで聞くことだ」
今はこう返すミロだった。
「つまりだ」
「つまり？」
「一度に放つこともできるのだ」
ミロが言いたいのはこのことだった。このことを狂闘士達に対して言ってみせてきたのである。
「そうだ、一度にだ」
「それではまさか」
「今も」
「このミロ、敵をいたぶる趣味はない」
また告げたのだった。
「それは決してない」
「では何を」
「するというのですか」
「仕える神が違い敵である者達よ」
狂闘士達である。それ以外に有り得ないことであった。
「今その誇りの下にだ」
「誇りの下に？」
「死ぬのだ」
言いながらだった。そのスカーレットニードルを一度に撃ち込んだ。そうして最後の一撃もまた五人に対して放ってみせたのである。
「ぐっ・・・・・・」
「これは」

「アンタレスだ」
それだというのであった。
「蠍座のとりわけ大きな星、スコーピオンの心臓でもある」
「それを撃ち込んだというのか」
「今我々に」
「これは止めの一撃だ」
ミロはまた彼等に告げた。それぞれ心臓を射抜かれた彼等をだ。
「これを撃つまでがスカーレットニードルであり最後の一撃がアンタレスなのだ」
「ではそれを撃ち抜かれた我等は」
「これで」
「安らかに眠るがいい」
こう五人に対して告げた。
「誇りと共にな」
ミロがこう彼等に告げたその瞬間に彼等はゆっくりと崩れ落ちた。
そうしてそのまま静かに息絶えたのであった。
「これでよし」
「礼を言おう」
勝利を収めたミロに声をかけてきた者がいた。
「あの者達に名誉ある死を与えてくれて」
「礼には及ばん」
その声の主にも言葉を返す。
「相手に名誉ある死を与える」
そうしてこう静かに言うのだった。
「それもまた戦士の務めだからだ」
「だがそれを現実に行える者は少ない」
サリアであった。彼がミロに対して言うのだった。
「とてもな」
「それをしたことへの礼か」
「そうだ。あの者達は誇りを抱いて死ぬことができた」

またこのことを言うサリアであった。
「そのことには幾ら礼を言っても足りるものではない」
「そこまで言うのならばその言葉受けよう」
彼の言葉を正面から受けてみせたミロであった。
「しかしだ。それと戦いは別だ」
「わかっている」
サリアはミロを見据えて静かに答えた。
「あの者達の仇は取らせてもらおう」
「いいだろう。それでは次の相手はだ」
「私だ」
ここで名乗りを挙げたのであった。
「このサタナキアのサリアが相手をしよう」
「八大公の一人がか」
「スコーピオンよ」
既にミロと対峙している。鋭く睨み合う。
「私の相手は貴様ではないかと思っていた」
「ローマで会った時からか」
「そうだ。貴様と戦いそして勝つ」
既に勝利も見ているのだった。
「それが私の運命なのだからな」
「運命か」
ミロはその運命という言葉に反応を見せた。
「運命はだ」
「どうしたというのだ?」
「変えられるものだ」
これがミロの運命への考えであった。
「人の手によってな」
「戯言を。運命はそれこそが神の決められたもの」
しかしサリアは運命をそうしたものだと捉えているのだった。
「アーレス様によってだ」

「アーレスが貴様の勝利を約束しているというのか」
「その通りだ。アーレス様こそが至高の神」
アーレスに対する絶対の忠誠、それはサリアにも健在であった。
むしろ八大公だけありそれはかなり強いものであると言えた。
「運命もまた決められるのだ」
「アテナはその様なことは仰られない」
そしてミロが出した神はアテナだった。彼女以外には有り得なかった。
「仰ることはだ」
「どうだというのだ、それは」
「運命は己が切り開くもの」
彼は言った。
「そう仰った」
「ではどちらが正しいか決めるとしよう」
「それではだ」
両者は互いに身構えた。彼等の闘いもはじまろうとしていた。

第六十三話　　完

２００９・１０・２３

第六十四話　サジタリアスの雷その一

サジタリアスの雷

ミロが五人の狂闘士達と対峙している時。アイオロスもまた狂闘士達と対峙していた。

「黄金聖闘士の中でもジェミニのサガと並ぶ実力者サジタリアスのアイオロス」

「ここで倒せるとはな」

「光栄なこと」

四人であった。ジェシー、アーキス、フラウ、ヴェガが彼の前にいた。

「それではサジタリアス」

「貴方の相手は私達が」

「いいだろう」

アイオロスは彼等を前にしてもその冷静さを失ってはいなかった。

「では来るのだ」

「よし」

最初に前に出たのはジェシーだった。

「まずはこのジェシーが相手をしよう」

「いや、このアーキスが」

「四人でも構わないのだがな」

アイオロスはここでこう言ったのだった。

「私としてはな」

「四人でもだと？」

「死ぬ気なのか、まさか」

「死ぬ気なぞ毛頭ない」

少なくともそうした目ではなかった。今のアイオロスは。

その証拠に身構えてきた。四人に対して昂然と。

「さあ、どうするのだ」

「我等四人を一度に相手にするつもりか」
「そうするというのね」
「それでも構わない。どうするのだ」
また彼等に問うのだった。
「いいだろう」
「貴方の望み通りにするわ」
狂闘士達は彼の言葉を受けた。
「我等四人の技」
「受けて死のう」
「それでは」
四人もまた身構えた。そうしてだった。一斉に消えたのだった。
「動いたか」
「まずはだ」
ジェシーの声だった。声だけが聞こえる。
「このジェシーの技を受けてもらおう」
「来るというのか」
「そうだ。行くぞ」
言いながらだった。姿は見えずともその強大な小宇宙を見せた。
「このジェシーの司る魔神はザガン」
「ザガンか」
その魔神の名前を聞いてすぐに察したアイオロスだった。
「鷲の翼を持っている牡牛の魔神だな」
「そうだ」
まさにそうだと答えるジェシーの声だった。
「その力見せよう」
「来るか」
「この牡牛の角をだ」
それだという。
「バニシングタウラス！」
姿は見えないがその二本の角がアイオロスを襲う。そしてそれだ

けではなかった。
また一人来た。それは。
「次は私よ」
「貴様は確か」
「そう、レラジエのアーキス」
彼女は上にいた。そこから弓矢を構えていた。その弓矢は当然の様に下にいるアイオロスに対して向けられていた。外すことはない様にだ。
「この弓で貴方を射抜く・・・・・・！」
そう言って。そうしてだった。
「インフィニティアローーーーッ！！」
その弓から無数の矢を放つ。それがアイオロスを襲う。
二人だけではなかった。フラウとヴェガも来た。
「我等も！」
「サジタリアス！貴様を倒す！」
それぞれ左右に展開しアイオロスに向かう。そのうえで。
「ブラックウィング！」
「デスブリンガー！」
フラウはその左手を一閃させてそこから無数の黒い羽根を放ったのだった。
ヴェガが。右手に持っている剣を上から下に一閃させた。それでそれぞれアイオロスを倒そうとする。

第六十四話　サジタリアスの雷その二

四人の攻撃がほぼ同時にアイオロスを攻めた。だがそこにアイオロスはいなかった。
「消えた!?」
「まさか」
「一体何処に」
四人の攻撃が炸裂したそこにはもうアイオロスはいなかった。誰もいはしなかった。
「いないだと!?」
「何故だ」
「何処にだ」
攻撃を放ち終えた四人はそれぞれの場で動きを止めてそのうえでアイオロスを探す。
だが彼は何処にもいない。その小宇宙さえ感じなかった。
「死んだ!?」
「いや、違う」
今のヴェガの言葉はジェシーが否定した。
「サジタリアスは生きている」
「生きている!?」
「まさか」
彼の今の言葉にアーキスとフラウが疑問の言葉を述べた。
「そんな筈がありません」
「あの男は今ので絶対に」
「いや、見るのだ」
ジェシーは二人に対しても言った。
「あれを」
「あれ!?」
「あれとは」

ジェシーが指差したのは先程までアイオロスがいた場所だった。
しかしそこには何も残っていなかった。何一つとしてだった。
「血の一滴も残っていないな」
「確かに」
「それは」
「死んだのなら、攻撃を受けたのならばだ」
また言うジェシーだった。
「血が必ず残っている筈だ」
「しかしそれはない」
「ということは」
「サジタリアスは生きている」
ジェシーは確信していた。
「それは間違いない」
「ですが一体何処に」
「あの男は」
「いない」
今言ったのはヴェガだった。
「生きているとすれば何処に」
「それはわからない」
それはジェシーにもわからないことだった。彼にしろその目で周りを探っている。しかしアイオロスの姿は何処にも見えなかった。
小宇宙も感じない。
「だがこの近くにいる筈だ」
「そうですね。それは」
「ですが」
他の狂闘士達も探す。だがアイオロスの姿は何処にも見えなかった。
その彼等の前にだった。不意に。
「危ないところだった」
アイオロスは次にこう言った。

「だが私はこうして生きている」
「くっ、何故だ」
「我等の攻撃を受けた筈」
「それが何故」
「翼だ」
アイオロスは目を顰めさせて問う彼等にこれを出した。
「翼によってだ」
「そのサジタリアスの翼か」
「それでなのね」
「そうだ。翼のある黄金聖衣はバルゴとこのサジタリアス」
その二つだというのだ。
「そして身にまとっているのは」
「貴様だけだと」
「そうだというのだな」
「そういうことだ。その翼が私を護ってくれた」
アイオロスはあらためて彼等に話す。

第六十四話　サジタリアスの雷その三

「こうしてな」
「くっ、恐るべしは黄金聖衣か」
「そのサジタリアスの翼か」
「いや、違う」
ジェシーがここでわかったうえで言った。
「その聖衣に認められたサジタリアス、貴様こそがだ」
「私こそがか」
「そうだ、最も恐るべきものだ」
そうだとわかったのだ。彼も。
「まさにな」
「そうか。聖衣もまた心を持っているという」
「我等の戦衣と同じ様に」
他の狂闘士達も今のジェシーとアイオロスのやり取りからこのことを理解した。
「だとすればその聖衣を動かさせたサジタリアスこそ」
「最も恐るべき者」
「まさに」
「少なくとも私はアテナの為に戦っている」
アイオロスは驚愕を露わにさせている彼等に対してこう告げた。
「そしてだ。戦いはまだ続いている」
「来るか！？」
「今度は貴様が」
「そうだ」
まさにそうだと。今確かに言った。
「見せよう、このアイオロスの技」
言いながらだった。その身体に黄金の小宇宙をみなぎらせる。それと共に左手を上に、右手を下にしてゆっくりと動かしてきたのだ

った。
　それを見て四人の狂闘士達はこのままでは敗北することを悟った。恐怖やそうした感情はない彼等だがそうしたことは敏感に感じ取ることができるのだ。
「ならばここは」
「先に」
　彼等はすぐに決断を下した。
　そうしてだった。再び攻撃態勢に入る。それからだった。
「受けろ！」
「今度こそ！」
　四人一度に再び技を放つ。それぞれの技を。
「今度は翼は護ってはくれまい！」
「それならこれで！」
「やれる！」
　彼等は今度こそ仕留めるつもりだった。その考えも確かにあった。しかしであった。アイオロスはその彼等の攻撃を前にしながら。その右手から雷の拳を放ったのだった。
「アトミックサンダーボルト！」
「何っ！」
「その技は！」
　忽ちにして光速の雷を宿した拳が縦横無尽に走る。その拳が瞬く間に四人の技を打ち消してしまった。
「何だと！」
「我等の技を！」
「それだけではない」
　ここでさらに言うアイオロスだった。
「御前達自身もだ」
「何っ・・・・・うわあああああっ！！」
「これは！」
　次の瞬間には四人をその縦横無尽に走り回る雷の拳が襲ったのだ

った。
彼等を瞬く間に吹き飛ばし薙ぎ倒す。それと共に雷が走っていく。
「こ、この技は」
「まさしく」
「黄金聖闘士・・・・・・」
それに値する力だと。受けてわかったのだった。
「恐ろしい男・・・・・・」
「ここまでの力を出すとは・・・・・・」
吹き飛ばされ薙ぎ倒された彼等は地面にたたき付けられた。そのうえで死の間際の言葉を出していた。
「サジタリアスのアイオロス・・・・・・」
「やはり恐ろしい男・・・・・・」
「さて」
その四人を倒し終えたアイオロスは。ここでまた言うのだった。
「ミロも自分の相手は倒しただろう」
そのことを考えていた。ミロのことをである。
「ならばだ。後は」
そうしてだった。次に頭の中に浮かべたのは。
「あの者か。サタナキア」
サリアのことである。
「あの者を倒すか。それとも」
だが今は彼はそちらには向かわなかった。インプ達がいる場所に向かいそのうえでまた戦おうとしていた。そうしたのであった。

第六十四話　サジタリアスの雷その四

ミロはサリアと対峙していた。まずはサリアが言ってきた。
「その実力。流石だ」
「貴様もまた俺を褒めるというのか」
「如何にも」
そうだというのだった。
「その通り。スコーピオン、貴様は確かに強い」
「そうか」
「黄金聖闘士だけはある。しかしだ」
「しかし？」
「その貴様も私に倒されることになる」
こうも言うのであった。
「このサタナキアのサリアによってな」
「サタナキアにか」
「このサタナキアはだ」
今度は己について語るサリアだった。
「術を使うことを得意としている」
「そうだったな。確か」
ミロはそれを聞いてサタナキアという魔神についてあることを思い出したのだった。
「八大公はそれぞれ司るものがあったな」
「そうだ。ベルゼブブは闇、ベールは剣、アスタロトは氷、モロクは剛、ベリアルは炎、アスモデウスは星、ルキフグスは智をそれぞれ司っている」
サリアの言葉によればそうなるのだという。
「そしてだ。このサタナキアはだ」
「術か」
「魔だ」

それだというのである。
「魔を司っているのだ」
「それが貴様の力だというのだな」
「如何にも」
自信に満ちた返答だった。
「その通りだ」
「ではこのミロにもその魔の力を見せるというのか」
「私の魔の力を見て生きて帰った者はいない」
次第にその身体を赤い小宇宙と比べて全く遜色ないまでのものであった。
ミロの黄金の小宇宙で覆っていく。その強さも大きさも
「前の聖戦における貴様達以外にはな」
「黄金聖闘士以外にか」
「そうだ。思えばだ」
サリアの目が鋭く光りはじめた。
「あの聖戦においてもだ」
「先の戦皇アーレスとの聖戦か」
「そうだ、その聖戦だ」
まさにその聖戦だというのだった。
「あの時には貴様等をあと一歩まで追い詰めた」
「しかしだったな」
「私の技は貴様等に破られた」
そのことをこれ以上はないというまでに悔しがる言葉だった。
「そのこと、死んでも忘れはしない」
「そして今ここにいるのだな」
「そうだ、スコーピオンよ」
ミロを見据え続けながらの言葉であった。
「私の力、受けてもらうぞ」
「その魔の力をか」
「我がサタナキアの力」
己が司っているその魔神の力である。

「それを今見せよう」
「来たか」
「受けるがいい」
言いながらだった。その左手を前にやる。手は半ば開きその爪が赤く禍々しく光っていた。それはまさに血の色であった。
その血の色の爪を見せてだった。サリアはその左手を前に突き出してきた。
「クリムゾンミスト」
「霧か」
「只の霧ではない」
その濃い独特の赤、いや紅に近いその色を出してだった。サリアが言った。
「この霧はだ」
「その魔の霧か」
「その通りだ。先程も言ったが」
サリアの言葉は冷徹なものだった。
「この霧を破れたのは貴様達だけだ。そう」
「そう？何だ？」
「スコーピオンよ」
ミロを見る目がさらに鋭くなった。

第六十四話　サジタリアスの雷その五

「貴様にだ」
「このミロ!?違うな」
その筈がないのはすぐにわかった。先のアーレスとの聖戦はそれこそ遥か過去のことである。それでサリアと戦っている筈がなかった。
「その時のスコーピオンの黄金聖闘士か」
「貴様であって貴様ではない」
「俺ではないというのか」
「それはわからずともいい」
そこまでは言わないサリアであった。
「だが。この魔の霧」
辺りを覆ってきたその独特の紫がかった紅の霧を見ながらの言葉である。
「どうやって凌ぐか見せてもらおう」
「いいだろう」
ミロはサリアのその挑戦を受けた。
「ではこのミロが貴様の技を。どうやって破るのか見るのだ」
「あの時は貴様に破られた」
不思議とその時のスコーピオンの黄金聖闘士と今のミロを同じものだとするサリアだった。
「しかし。今度はどうするのだ?」
「むう」
霧は次第に深まっていく。するとだった。
周囲に瘴気が漂ってきた。そしてあらゆるものが禍々しく変わってきた。
「岩や草までか」
「この霧の世界の中ではあらゆるものが私のものとなる」

サリアはまたしても静かに言った。
「そうしてだ。我が敵を倒すのだ」
「それが貴様の魔の力か」
「魔の力の一つだ」
あえて一つと言ったのであった。
「これもまたな。さあどうするスコーピオンよ」
無数の魔物と化した岩や草達をミロに向かわせながらまた問う。
「私のこの技、破ってみせるのだ」
「俺がこの技を破るのを期待しているようだな」
「この技は私にとっては技の一つに過ぎない」
サリアはまた言ってみせてきた。
「一つにな」
「その技を破れずして貴様を倒すことは適わないのだな」
「さあ、どうするのだ?」
問うその目が次第に強くなってきている。
「どの様にして破る」
「では。見せよう」
ミロは右手を前にゆっくりと出してきた。
「このミロの技もな」
「先程のスカーレットニードルだが」
既にその技は知っているサリアであった。
「先の聖戦でも見せてもらって知っている」
「そうなのか」
「今更出してもこの魔物達には通じない」
そのことを前以って告げてみせたのだった。
「これは言っておく」
「安心しろ。ここでスカーレットニードルを使う気はない」
それはないというのだった。
「このミロも他の技を持っていることは教えておこう」
「他の技をか」

「それで退けてみせる」
ミロはまた言った。
「これからな」
今まさにその技を使おうとしていた。ミロの右手の人差し指が赤く光った。するとだった。
「では見るのだ。このミロの新たな技」
「むっ！？」
「カルディアタカケオ！」
その言葉と共に爪から一条の赤い光を放つ。するとだった。
それで先頭にいた魔物の心臓を貫く。それでまず一体倒した。
倒された魔物はすぐに炎となって紅蓮の中に消えた。そしてまた同じ様にして魔物を焼く。そうして魔物達を次々と倒してしまったのだった。

第六十四話　サジタリアスの雷その六

「炎を使ったか」
「このミロ、ただ弱点を攻めるだけではない」
それだけではないというのである。
「こうしてだ。炎を使うこともできるのだ」
「蠍の尾から炎も放つというのだな」
「如何にも。そしてだ」
さらに言う彼だった。
「魔物を倒すのは炎と決まっている」
「降魔の炎というわけか」
「御前達狂闘士が使う炎は全てを焼き尽くす戦火」
まさにそれである。アーレスの炎はそれなのだ。
「だが我等聖闘士の炎は邪悪を焼き尽くす炎というわけだ」
「我等を退ける炎というのだな」
「その通りだ。デスマスクの炎ともまた違う」
それはその通りだった。ミロの今の炎とデスマスクがドイツでの戦いで見せたあの青い炎は全く別だった。あれは魂を焼く炎であった。
「それを見せたのだ」
「それではだ」
技は破られた。しかしサリアはまだ負けてはいなかった。その心は。
「私もまた技を見せよう」
「来るのか」
「言った筈だ。今の技は私の持っている魔の技の一つに過ぎない」
こう言うのである。
「だからこそだ。再び見せよう」
「ならば再びだ」

再度対峙する両者であった。
「俺も闘おう」
「ここで貴様が倒れるか」
「それとも貴様か」
両者は互いの目を見据え合っている。そこから目を離そうとしない。
「それを決めるのが今だ」
「ならば」
「行くぞ」
再び技を放つサリア。次の技は。
右手に何かを出して来た。それは。
「それは」
「杖だ」
そうだった。彼はその手に杖を出して来たのである。そしてその右手に持っている杖を今ミロに対して投げたのだった。まるで投擲の様に。
「デモンズロッド！」
「悪魔の杖だというのか」
「そうだ、このサタナキアのサリアの杖だ」
杖を投げたうえでの言葉であった。
「それがこの杖だ」
「くっ、この杖は」
技を放たれてからすぐに気付いたミロだった。
「やはり普通の杖ではないか」
「このサリアの杖が普通の杖である筈がない」
こう言葉も返すサリアであった。
「スコーピオンよ、その杖を受けてだ」
「むう・・・・・」
「今度こそ倒れるがいい」
杖を放ったうえでの言葉であった。今まさに杖が放たれた。ミロ

はその杖を前にしてその魔からどう身を護るか選択をさせられていた。

第六十四話　　完

２００９・１０・２６

第六十五話　魔性の杖その一

魔性の杖

サリアのデモンズロッドが迫る。しかし音はない。
そのかわりに周囲をまたしても恐るべき魔が支配していく。今度は瘴気の中で全てを異様な空間の中に導いてきていたのである。
「この杖は俺を倒すのではないのか」
「そうだ。デモンズロッドはその周囲を魔界とするのだ」
それがこの杖だというのである。
「そしてだ。その魔界こそがだ」
「貴様の力が最も強くなるというのだな」
「その通り、それが魔界だ」
彼は紫の黒の中で歪に曲がっていく世界の中でミロに告げた。
「私の世界なのだ」
「ではこのミロの力はだ」
スカーレットニードルを出そうとする。そのうえでサリアの身体を次々と撃つ。だがそれは全く効果がなかった。彼は何ともない顔をしたままであった。
「効かないというのか」
「普段の貴様ならば効いていた」
それはサリアもよくわかっていた。
「私は今のスカーレットニードルで間違いなく激痛に襲われていた」
「そうだったな」
「そしてそのアンタレスでだ」
この止めの技のこともよくわかっていたのだった。
「私は間違いなく倒れていた」
「だがそうはならないということか」
「この世界では私の力は限りなく増大する」
魔界の中では、というのである。

「貴様の力は変わらなくともだ」
「貴様の力が上がることにより相対的にというのだな」
「その通りだ。スコーピオンよ」
サリアはミロを見据えたうえでまた彼に問うてきた。
「これはどうして凌ぐつもりだ」
「凌ぐ、だと」
「私のあのクリムゾンミストは破った」
このことも言ってみせてきたのだった。
「その貴様がそう簡単に私の技に屈するとは思えないのでな」
「まるで俺が貴様の技を破ることを期待しているようだな」
「そう聞こえるか」
サリアは今のミロの言葉に対して不敵に返してみせたのだった。
「そう思うならそう思えばいい」
「若しそうならばだ」
さらに言うミロであった。
「貴様にはまだ切り札がある」
サリアを見据えながらの言葉だった。
「そうだな。だからこそ俺に技を破られてもいいのだな」
「ふふふ。さてな」
こう言われてもやはり不敵に笑うだけのサリアだった。
「それで破れるのかどうか」
「言っておくことがある」
それについて、ということであった。今のミロの言葉は。
「このミロ、いや聖闘士はだ」
「聖闘士は？」
「最後の最後まで決して諦めないのだ」
強い言葉であった。
「倒れるその瞬間までな」
「ならば私の技を破るというのか」
「破ってみせる。行くぞ」

言いながら拳を数発放った。光速の拳をである。それはサリアに向けられていたが彼はそれを全て受けてもやはり何ともなかった。
「無駄なのはわかっている筈だが」
「やはりな」
それを見ても驚かないミロだった。まるで確かめたかの様である。
「俺の力は変わってはいない」
「確かめたのはそれだというのか」
「そうだ。俺の力を確かめたのだ」
それだというのである。言っている間にサリアはまたクリムゾンミストを出してきた。再び岩や草が魔物に変わりミロの周りを覆ってきた。
その魔物達を向かわせる中で。サリアはまたミロに言ってきた。
「言っておくがこの魔物達もだ」
「力が強くなっているようだな」
「その通りだ」
ミロはまたあの炎を放っていた。しかし先程までとは違い倒すのが鈍くなっていた。

第六十五話　魔性の杖その二

ミロ自身もそれを見て。眉を顰めさせていた。
「事実か」
「さて、どうするのだ」
またミロに問うてきたサリアであった。
「魔物達だけでなく私もいるのだぞ」
サリア自身も拳を放って来た。光速の拳をだ。
ミロはそんでのところで身体を右に捻ってかわした。その威力は尋常なものではなかった。
「確かにな」
「私はこうした場合では嘘をつくことはない」
サリアは拳を放ったうえで冷静に述べた。
「それもこれでわかったな」
「うむ。その通りだな」
「そしてだ」
さらに言うサリアであった。
「スコーピオンよ、何時までもかわせるとは思っていないな。私の拳と魔物達を」
「忌々しいがその通りだ」
構えを取りそのうえで彼と魔物達の両方を前にしながら言葉を返すミロであった。
「このままでは倒れるのはこのミロだ」
「後はないぞ」
サリアは言葉でもプレッシャーをかけてきた。
「さて、どうするのだ」
「また言っておくことがある」
追い詰められてもミロは冷静なままであった。その冷静さによって彼は言うのであった。

「答えの出ない問題はないのだ」
「決してか」
「そうだ、ない」
断言してみせてもきた。
「絶対にだ」
「ではどうして今の私の技を破るのだ」
サリアは楽しむようにして彼に問い返した。
「この魔界を」
「言った筈が、破られない技はない」
ミロはこのことをまた繰り返す。
「そしてだ。造られた世界ならばだ」
「それもまた破られるというのか」
「その通りだ。破ってみせる」
ミロはここで己の決意を見せた。
「何としてもな。そうしてだ」
「来るか」
サリアも身構えた。ミロが何を仕掛けて来てもすぐに対処できるようにしたのであった。この辺りの動きは流石八大公であるだけはあった。
「どう来る?」
「行くぞ、サタナキアよ」
言いながらその拳を繰り出す。繰り出した先は。
サリアを狙ったのではなかった。狙ったのは杖だった。ミロに向けてそのままで宙に浮かび禍々しい妖気を放ち続けているその杖をだ。
「杖をだと!?」
「貴様自身を狙っても今は効果がない」
それはもうよくわかっているサリアだった。
「ならばだ。その杖を崩すのだ」
「何故私の杖を狙うのだ」

「すぐにわかる」
こう言うのだった。
そうして攻撃を放つ。光速の拳を杖の先端に浴びせた。するとだった。
杖は先端から崩れそのまま割れてしまった。光速の拳は杖さえも砕いてしまったのだ。
するとだった。それまで発せられていた妖気が瞬く間に消えていく。そうしてその世界もまた。瞬時にして消え去ってしまったのであった。
彼等は元の世界に戻っていた。魔物達はすぐにミロの指から放つ炎で焼かれていく。瞬く間に形成は互角に戻ったのであった。
「杖を壊しそれにより私の技を破ったか」
「それは考えていなかったようだな」
「確かにな」
それを認めるサリアだった。
「杖を狙いそうして潰すとはな」
「どうやら杖は強くなってはいなかったのだな」
「そこまで考えてはいなかった」
サリアはそのことも認めた。
「杖は戦衣の一部だ」
「そうだったのか」
「アーレス様の御力により創られたもの」
それが戦衣だというのである。
「貴様等の黄金聖衣と同じ強度の筈だがな」
「並の聖闘士で壊せる代物ではない」
ミロもそれはわかっていたことだった。しかし彼はその杖を壊してしまった。そのことは彼が今果たした紛れもない事実であった。

第六十五話　魔性の杖その三

「だが。黄金聖闘士の拳ならばだ」
「戦衣をも壊せるというのか」
「その先端に一点を突けば何とかなるものだ」
その種も明かしてみせたのだった。ミロは力学も応用してそのうえで杖を破壊してみせたのである。彼は頭脳も使ったのである。
「黄金聖闘士の実力ならばだ」
「そうか。そういうことだったか」
「少なくともこれで貴様の技は破った」
あらためてこのことを告げた。
「さて、どうするのだ？」
「ふむ。見事だ」
技を破られたがそれでもだった。サリアはここでもその顔に冷静さを保っていた。それどころか笑ってさえいた。あの楽しむ笑みであった。
「またしても破るとはな」
「そう言えるということはだ」
ここでまたあることがわかったミロであった。それは。
「まだ技を持っているのだな」
「そうだと言えばどうするのだ？」
「また破ってみせよう」
毅然として返すミロだった。
「その技もだ」
「今度の技はそう簡単に破れるものではない」
サリアもまた自信を見せる。
「しかしだ。今は止めておこう」
「止めるというと？」
「貴様の実力はわかった」

サリアは冷静に述べた。
「そして杖だが」
「むっ！？」
あの魔界を創り出したその杖が今再び姿を現わした。何とサリアの左手にその姿を見せていたのである。今壊されたばかりだというのにだ。
「破壊されたのに元に戻るというのか」
「戦衣の特別な力だ」
サリアは言った。
「破壊されても時が来れば自然に修復されていくのだ」
「自己修復の力を持っているというのだな」
「そうだ」
まさにそうだというのである。
「これがその自己修復の力だ」
「そうした力もあるというのだな」
「そのことは言っておこう」
静かだが確かな声で述べたサリアであった。
「覚えておくことだ」
「わかった。それでは覚えておこう」
ミロも頷いて彼に応えた。
「しかとな。ではサタナキアよ」
「また会おう」
その周りに黒と紫のあの歪な空間を漂わせてきた。
「まただ」
「そして次に会う時はだな」
「私の最大の技を見せる」
このことも言うのであった。
「それを見た時が貴様の最後だ」
「それではその技もだ」
ミロもまたここでも負けてはいなかった。

「破ってみせよう」
「楽しみにしておこう。それではだ」
「次の戦いの時にこそだ」
彼等はこう言い合った。サリアはその黒と紫の中に消えていった。
後に残ったのはミロだけであった。だがすぐにそこにアイオロスが来たのであった。
「見事な闘いだったな」
「見ていたのか」
「見させてもらった」
こう述べるアイオロスであった。
「よくな」
「そうか」
「まずは破ることができたな」
「完全ではないがな」
ミロは慢心していなかった。このことは誰よりもよくわかっていた。
「技を二つ破った」
「あれがサタナキアのサリアか」
「恐ろしい男だ」
ミロの表情には油断も余裕も微塵もなかった。
「若し杖を破壊することを思いついていなかったならばだ」
「敗れていたというのだな」
「そうだ」
自分でもそのことをよくわかっているのだった。

第六十五話　魔性の杖その四

「間違いなくな」
「しかし気付いた」
アイオロスはそこを指摘した。
「気付くということはそれだけの力量があるということだ」
「運ではないというのか」
「そうだ。気付けるのにも力が必要だ」
こう言ってミロを認めるのであった。
「御前はそれに気付けるだけのものがあったということだ」
「そう考えていいのだな」
「そうだ」
やはりこう答えるアイオロスだった。
「だからこそ御前は今ここにいるのだ」
「気付くだけの実力がなければ」
「そもそも黄金聖闘士にもなってはいない」
「それもか」
アイオロスの言葉にまた目を動かした。彼にしても感じるところが確かにある言葉であった。
「そういう意味でもか」
「これでわかったな」
「うむ」
今度は確かな顔で頷いたミロだった。
「よくな」
「わかってもらえればいい。それでだ」
「帰るのだな」
次の話はこれであった。見れば戦闘は完全に終わっている。多くの謎をそこに置いている遺跡はその静けさを完全に取り戻していた。
「聖域に」

「最早敵は一人として残ってはいない」
アイオロスはこのことも話してきた。
「敵が一人もいないのならばだ」
「帰るしかないか」
「そういうことだ。それでいいな」
「うむ、わかった」
アイオロスの今の言葉にも頷くミロであった。
「では帰るとしよう」
「さて、残る問題はだ」
アイオロスは戦場となった遺跡を見回した。倒れているのはインプ達ばかりである。しかし彼はそれでもあえて探したのである。探したのは。
「全員残っているか」
こう周りに声をかけた。
「全員。どうなのだ」
「はい、それは」
「何とか」
すぐに声が返って来た。すると所々から青銅の四人が出て来たのだった。
「いやあ、雑兵かと思ったんですが」
「強かったですね」
「冗談抜きでまずい時もありましたよ」
四人全員いた。彼等は一人も欠けたところはなかった。
「傷は負いましたけれどね」
「それでも命に別状はありません」
「一人もです」
「そうか。ならいい」
その報告を聞いてまずは安心するアイオロスだった。
「それならばな。そうしてだ」
「白銀の二人だな」

今のアイオロスの言葉に応えたのはミロだった。相変わらず彼の横にい続けている。そのうえで彼のその言葉に応えてみせたのである。

「カペラとシリウスだが」

「あの二人なら問題はないと思うが」

「小宇宙は感じている」

それはというのだった。

「だが。何処にいるかはだ」

「わかりはしないか」

「この辺りにいるのは間違いないが」

ミロもまた周囲を見回す。しかし二人の姿は見えない。ミロだけでなくアイオロスもこのことに少しいぶかしむものを感じだした時であった。

「アイオロス様、ミロ様」

「こちらに」

その二人の声がした。すると二人の前に控えていたのであった。

第六十五話　魔性の杖その五

「周囲を回って残っている敵がいるかどうか見ていましたので」
「遅れて申し訳ありません」
「いや、いい」
遅れたことは微笑んで許すアイオロスだった。
「それよりも無事だな」
「はい、この通りです」
「何もありません」
こう言葉を返す二人であった。
「確かに戦闘では危ういものも感じましたが」
「こうして生きております」
「よし、全員揃ったな」
ミロはその六人の姿を認めて満足した顔で頷いた。
「それではだ。帰るとしよう」
「はい、それでは聖域にまで」
「リャマやアルパカはだ」
「下に置いております」
「マチュピチュの入り口に」
ミロの言葉にこのことも応えるシリウスとカペラだった。
「荷物はそのままです」
「狂闘士達は一切手をつけていませんでした」
「攻めることもなかったか」
アイオロスはそれも察したのだった。
「見つけていたのかも知れないが」
「だが荷物もそれを運ぶ動物達も健在ならばそれに越したことはない」
「その通りだ」
それはまさにその通りだとミロに返すアイオロスだった。そうし

てそのうえで彼にまた告げた。
「帰ろう」
「うむ、聖域にな」
「この場所とも今はこれで別れることになる」
アイオロスが見回した周囲は何処までも黒い山が続きその上には青い空が広がっている。その黒と青の見事な対比が織り成す雄大かつ幻想的な景色にまずは見惚れたのである。
しかしここに永遠に留まっていることはできない。それもわかっているからこそ。彼は言った。
「また来る日までだ」
「今度来る時は何時になるだろうか」
ミロもまたその黒と青の世界を見ながら呟いた。
「果たして」
「それはわからない。だが」
「だが？」
「次に来る時はだ」
アイオロスはその言葉に感慨を込めていた。その感慨と共に言うのだった。
「戦いで来たくはないものだな」
「そうですよね、こんな場所は」
「やっぱり観光で楽しく」
「そういうようにしていくのも俺達の仕事ですけれど」
「それでもですよね」
青銅の四人はここでまた口々に言った。
「やっぱり観光で明るく楽しく」
「ですよね」
「この辺りって他にも行きたいところがありますし」
「是非」
「その通りだ」
アイオロスは四人のその言葉を受けて微笑んで述べた。

「そうする為にも狂闘士達を倒してだ」
「はい」
「平和を護りましょう」
カペラとシリウスは真面目な面持ちで今のアイオロスの言葉に応えた。
「是非共」
「一刻も早く」
「戦いはまた続く」
アイオロスの言葉が少し変わった。こうしたものに。
「だが。戦いは必ず終わるものだ」
「そうだな。終わらせるものだ」
ミロはアイオロスの今の言葉にこう返したのだった。応えて。
「そしてそれを終わらせるのがだ」
「我々だ」
アイオロスはそれこそが聖闘士の役目だとしたのであった。
「我々聖闘士こそがだ」
「そうですね。だからこそ」
「気合入れていきましょう」
「帰るのもまたその一つだ」
そしてまた言ったアイオロスであった。

第六十五話　魔性の杖その六

「わかったな。だからこそ」
「今は帰るってわけですね」
「そういうことだ」
こうして帰路に着く彼等であった。アンデスでの戦いはこれで終わった。しかしそれはまた新しい戦いへのはじまりでもあったのである。
「サリアよ」
「はい」
アンデスでの戦いを終えたサリアは既にトラキアに戻っていた。そこでエリスの前に控えてそのうえで一連のことを報告していたのであった。
そうしてだった。エリスはそれを聞いて静かに頷いていた。
「わかった」
「宜しいでしょうか」
「よい。御前は御前のやるべきことをやった」
エリスはこれまでの八大公の者達と同じ言葉をかけたのだった。
「それでよいのだ」
「有り難うございます」
エリスのその言葉を受けて頭を下げるサリアであった。そうしてそのうえでまた述べるのであった。
「あの地での戦いに倒れた者達もその言葉で浮かばれます」
「いや」
しかしであった。また言うエリスであった。
「あの者達はまた姿を現わす」
「またですか」
「そうだ、まただ」
こう述べるのだった。

「だからそれは安心していいのだ」
「といいますと」
「何かが起こるのですか」
「アーレス様を信じることよ」
そしてエリスがここで出した名前は自分達の主の名であった。そのアーレスである。
「それだけでよいのだ」
「そうですか。それでは」
「我等は」
サリアだけでなく他の八大公達もその言葉に頷くのだった。
「再びあの者達に会うことを楽しみにしています」
「その時を」
「うむ。そうしてだ」
言葉を続けていくエリスであった。
「次の戦いだが」
「はい、次は」
「どの場所で」
「オセアニアだ」
そこだというのだった。
「オーストラリアになる」
「あの南太平洋の大陸ですか」
「あの地においてですか」
「左様。あの地になる」
そうだと話すエリスであった。
「そこに向かうのは」
「一体それは」
「誰になりますか」
「リゲルよ」
ここでエリスが名を呼んだのは彼であった。
「御前が行くがいい」

「わかりました」
そのリゲルがであった。エリスの言葉に応えたのであった。そうしてそのうえでエリスに対して顔を向けたのだった。
「それではすぐに」
「おそらくは」
また言うエリスだった。
「あの地に向かう黄金聖闘士はだ」
「はい、その者は一体」
「レオになる」
彼だというのである。
「あの者が出て来るであろう」
「面白いです」
リゲルは彼の名を聞いて期待する笑みを浮かべた。今から戦いを楽しむその笑みであった。戦う前からもうそうしているのだった。

第六十五話　魔性の杖その七

「あの者とはローマで会った時から闘うことを予想していました」
「左様か」
「はい、だからこそ」
さらに言うリゲルだった。
「オーストラリアに喜んで行かせてもらいます」
「ではすぐに行くのだ」
「では」
「残るは二つとなった」
エリスはサリアに告げてから今度は封印のことを話したのだった。
「その残る二つのうちの一つを今より解く」
「全ての封印が解かれてから」
「まさに」
「いや、それより先にだ」
エリスは八大公達の上気してきた声に対して制する声をかけてからまた述べた。
「あの者達を呼び戻さなければならん」
「あの方々をですか」
「それからですか」
「左様。アーレス様がお戻り頂くのはそれからよ」
こう言うのである。
「わかったな」
「はい、では」
「我々はその時にも」
「あの者達がここに戻りアーレス様が御自身の玉座に戻られる」
エリスの今の言葉は明らかに両者を分けたものであった。その言葉と共にエリスは静かに言うのであった。今それをである。
「その時こそトラキアの、我等の勝利の時なのだ」

「はい、では」
「その時こそ地上を」
「戦乱により全てが支配される世界」
エリスの青い身体に小宇宙が沸き起こっていた。それは狂闘士達のそれと同じ赤い禍々しい小宇宙だった。その小宇宙は八大公達のそれよりも強大なものであった。
「人はその中で生きることになるのだ」
「互いに争い殺し合い」
「そのうえで己を高め合う」
「我等の理想とする世界が」
「この地上に生まれることになるのだ」
まさにその世界だというのである。
「はい、それでは」
「その世界の為に」
「アーレス様にお戻り頂く。よいな」
こう告げてそのうえでリゲルをオーストラリアに向かわせる。その頃暗闇の中で姿の見えぬ、だが恐ろしいまでに強大な小宇宙を持つ者達がいた。その彼等が何かを話していた。
「いよいよだ」
「そうか、いよいよか」
「いよいよなのだな」
その暗闇の中で言い合っていた。
「我等がこの世界に再び姿を現わす時だな」
「その時が来るのだな」
「エリス様が今動いて下さっている」
エリスの名前が出ていた。
「狂闘士達を使ってだ」
「有り難い」
「我等の為にそこまでか」
「そして我等が出ればだ」

さらに話す彼等だった。
「アーレス様の御降臨も可能だ」
「そしてその時こそだな」
「我等の世界が生まれるのだ」
「アテナ、そして聖闘士達」
アテナと彼等の名前が出た時には憎しみが涌き出ていた。
「あの者達を今度こそだな」
「いや、アテナはこの時代にはいないそうだ」
「いないのか」
「あの女神は」
「そうだ、いない」
こう話される。
「だが。黄金聖闘士達がいる」
「あの者達がか」
「いるというのか」
「あの時と同じだ」
それは同じだというのだった。声の中の一人がだ。
「全て揃っている」
「では教皇もまた」
「あの者か」
「そうだ、あの者だ」
彼だというのであった。彼等は。
「あの者があの時と同じくだ」
「ふふふ、面白い」
「全てはあの時と同じか」
「ならば次こそはだ」
声達はその言葉を受けてだった。明らかに笑った。血に塗れた含み笑いであった。
「あの者達を一人残らず」
「倒してみせよう」

「教皇」
シオンのことであるのは言うまでもない。
「あの者もだ」
「今度こそな」
「そうだ、今度こそだ」
声にさらなる憎しみが宿っていた。まるで燃え上がるような。
「倒してやろうぞ」
「流血の中に沈めてやろう」
「己の血でな」
闇の中で言い合う彼等であった。それは怒りではなく哄笑であった。その言葉を闇の中で出していたのであった。

第六十五話　　完

２００９・１０・３０

第六十六話　獅子出陣その一

獅子出陣

ミロ達は聖域に帰った。彼の帰還にまず喜んだのは聖域の者達であった。
「いや、御無事で何よりです」
「ミロ様なら大丈夫と思っていましたが」
彼等は口々にこう言ってにこやかに彼とアイオロス、それと六人の聖闘士達に対して声をかけるのだった。
「アイオロス様もまた戻って来られましたし」
「本当に何よりです」
「出迎え有り難う」
アイオロスはその彼等に対してにこやかな笑みで応えた。
「聖域も無事な様だな」
「はい、御安心下さい」
「御覧の通りです」
「何ともありません」
笑顔でアイオロスの今の言葉に返す彼等であった。
「それではミロ様、アイオロス様」
「まずは教皇のところへ行かれて下さい」
「教皇がお待ちです」
「わかった」
ミロが微笑んで彼等のその誘いの言葉に頷いて応えてみせた。
「では今から行かせてもらおう」
「それではミロ様」
「我々はこれで」
六人を代表してシリウスとカペラが彼に告げてきた。
「どうぞ教皇の下へ」
「お疲れ様でした」

「うむ、では御前達も休んでくれ」
ミロはこう彼等に対して声を返した。
「御苦労だった」
「じゃあまた」
「一緒に戦わせて下さい」
青銅の者達が応えてその場を後にする。彼等と別れたミロとアイオロスは十二宮に入る。そこで黄金聖闘士一人一人と合流していき全員揃って教皇の前に参上した。そのうえでいつもの様に全員で片膝を折って跪きその態勢で戦いのことを報告するのであった。
「そうか。サタナキア以外はか」
「討ち漏らしてしまいました」
「いや、それは違う」
ミロの今の言葉を玉座に座るシオンは否定した。
「サタナキアは狂闘士の頂点に立つ八大公の一人だ」
「ですが」
「そのサタナキアを倒すことは容易ではない」
このことを言うのである。
「だからだ。ここで倒せずとしても仕方のないことなのだ」
「左様ですか」
「そうだ。まずはこの度の戦いでも犠牲は出なかった」
シオンはそれを言ってきた。
「それを喜ぶとしよう」
「有り難き御言葉」
「ミロよ」
黄金聖闘士の一番前にアイオロスと並んで控えそのうえで報告するミロに対してまた声をかけた。
「御苦労だった」
「返す言葉もありません」
「今は休むがいい。そしてアイオロスよ」
「はい」

今度はアイオロスに声をかけた。彼はすぐに己の言葉を返してきた。
「申し訳ないが御前にはだ」
「再びですね」
「そうだ。また頼む」
彼にはこう告げるのだった。
「またな。戦場に向かってくれ」
「わかりました」
「次の戦場はだ」
今度は黄金聖闘士達全員に告げた言葉である。
「オーストラリアになる」
「あの国で、ですか」
「あの大陸で」
「そうだ。あの場所になる」
黄金聖闘士達に対して告げるのだった。
「あの場所でだ」
「そして次に出陣する黄金聖闘士は」
「アイオロスの他には」
「それはもう決めている」
また彼等に告げたのだった。

第六十六話　獅子出陣その二

「その者はだ」
「といいますと」
「残るは」
黄金聖闘士達のうち既に六人、サガとアイオロスを入れて八人が出陣している。そしてアイオロスは既に出陣が決まっている。そうなると残るは。
「シャカか」
「それともアイオリアか」
「ムウか」
それぞれ顔を上げてその顔を見回す様にして動かしながら言い合う。その彼等に対して再度声をかけるシオンが選んだその者は。
「アイオリアだ」
「アイオリアがですか」
「この度は」
「そうだ。アイオリアよ」
「はい」
そのアイオリアがシオンの言葉に応えた。頭を垂れて礼をする。
「よいな、それで」
「有り難き幸せ」
実直な声でこう返すアイオリアであった。
「オーストラリアへ。すぐにでも」
「その前に向かわせる白銀及び青銅の者達を選んでおく」
シオンはこのことも彼に告げたのだった。
「それもある程度は進めているのだがな」
「そうなのですか」
「そうだ。少し時間がある」
シオンの言葉は続く。

「正式な出陣まで英気を養っておくことだ」
「わかりました。それでは」
「話はこれで終わりだ」
アイオリアに告げ終えると他の黄金聖闘士達に対しても告げた。
「皆下がれ。集まってもらい御苦労だった」
「はっ、それでは」
「これで」
黄金聖闘士達はシオンの言葉に応え彼の前から姿を消した。そうしてそれぞれの持ち場に戻っていく。アイオリアはその中で自身の兄でもあるアイオロスに対して声をかけるのであった。
「兄さん」
「どうした、アイオリア」
「兄さんに苦労はかけさせない」
彼に対しても実直な言葉であった。その表情も。人馬宮の前の階段で彼に対してこう告げたのである。
「何があってもだ」
「ふふふ、相変わらずだな」
弟のその言葉を聞いて微笑むアイオロスだった。
「その気質はな
「昔からだというのか」
「自覚している筈だがな」
「自覚か」
「違うか？」
あらためて弟に問うアイオロスだった。
「それは」
「否定はしない」
そしてこれが弟の返答だった。
「俺もそれは」
「そうだな。そしてそれがいい」
「いいのか、これで」

「御前らしくてな。いい」
またいいと言ってみせたのだった。
「実にな」
「ならいいのだがな」
「そしてだ」
さらに言葉を進めるアイオロスだった。
「オーストラリアでの戦いだが」
「うむ」
話は戦いに関するものに移った。
「相手はアスモデウスだ」
「アスモデウスというとだ」
「知っているな」
「アスモデウスのリゲル」
アイオリアの言葉である。
「あの男だな」
「アスモデウスという魔神のことも知っているな」
「竜に乗った三つ首の巨人だったか」
アイオリアの脳裏にその姿が浮かぶ。禍々しいまさに魔神に相応しい姿だ。

第六十六話　獅子出陣その三

「背には翼を生やし足がガチョウのだったな」
「そうだ、その魔神だ」
「流星に姿を変えるというが」
「アンデスとの戦いの時だ」
先のミロと共に戦ったその時の話もしてみせたのであった。
「その時サタナキアが言っていた」
「あの男がか」
「アスモデウスが司るのは星だ」
まさにそれだというのである。
「それがあの男の力だ」
「そうか、星か」
それを聞いてまずは頷くアイオリアだった。
「やはりそうか」
「わかったな。これで」
「うむ。星を操る魔神か」
「その力、尋常なものではない」
そのうえでこのことも弟に告げた。
「よく覚えておくことだ」
「わかっている。相手は八大公だ」
何といってもここにあった。アスモデウスという魔神のもとは。
「尋常なものではないのはわかっている」
「八大公、まさにトラキアの象徴だ」
「我等と同じくだな」
「そうだ。そして」
「そして？」
「おそらくあの者達以外にもいる」
こうも言うのだった。

「八大公以外にもだ」
「というと一体」
兄の今の言葉に問わずにはいられなかった。
「誰がいるのだ、八大公とエリスの他に」
「先の聖戦でそれが出て来たというが」
アイオロスの顔はここで微かに曇った。
「何者かは文献には残されてはいない」
「そうなのか」
「しかしおそらくいる」
それは察しているアイオロスだった。
「これからのトラキアとの戦いにおいて間違いなく姿を現わして来るだろう」
「というとまさか」
アイオリアの脳裏にある存在が浮かんだ。それは。
「先の聖戦の時のあの」
「タナトスとヒュプノスか」
「あの二柱の神々の様な」
その存在を話に出したのであった。
「そうした存在か」
「そうかも知れない」
その可能性を否定しないアイオロスだった。
「若しかするとだ」
「そうか。まさかか」
「そのまさかであった場合はだ」
話は仮定ではなかった。事実への対処を語るものだった。
「どうするつもりだ」
「倒すしかない」
これまた実にアイオリアらしい返答であった。
「その場合はな」
「そうか。そう言うのか」

「うむ」
兄の言葉に対してまた頷いてみせた。
「俺はそう考えているが」
「正解だ」
「それでいいのか」
「戦うしかないのだ」
そして彼もこう言ったのであった。
「若しアーレスが我々に勝利を収めこの地上を治めるとなるとだ」
「この世に平和はなくなる」
「あるのは破壊と戦乱だけだ」
その二つだけになるというのである。
「火と炎」
そしてこうした言葉を出していく。
「災難と恐怖の四つが荒れ狂うのだ」
「エリスの司る嫉妬やそういったものもだな」
「そうした存在がこれまで以上に世を荒れ狂い」
「人々を戦乱へと駆り立てる」
「それこそがアーレスの世界だ」
彼等にとってはまさに魔界である。アーレスの望む世界とは。

第六十六話　獅子出陣その四

「だからこそだ。勝たなければならないのだ」
「そうだな。だからこそ」
「御前の言葉が正しいのはそれが為だ」
あらためてそうだと告げたのであった。
「だからこそだ」
「わかった」
兄のその言葉に頷く弟であった。
「それではだ。どんな存在が出て来てもだ」
「御前ならばできる。いや」
「いや？」
「御前達ならばだ」
彼に対してだけ告げた言葉ではないのだった。
「御前達ならばな。それができるのだ」
「俺達ならばか」
「御前達あらたに黄金聖闘士になった者達はだ」
具体的には今聖域に集っている黄金聖闘士達の中でサガとこのアイオロスを除いた全ての黄金聖闘士達のことだ。まだ若い彼等のことである。
「誰もがそれができる」
「この戦いに勝つことがか」
「そして」
それだけではないという。アイオロスの言葉はさらに続くのだった。
「その先にある勝利も手に入れることができるだろう」
「この先というと」
「そこまでは私にもわかりはしないがだ」
つまり勘で感じているというのである。

「だが。御前達ならば確実にできる」
「その勝利の先にあるものも手に入れることができると」
「あるいは与えるか」
「与える？」
「いや」
今の自分自身の言葉に戸惑いを覚えてしまったアイオロスだった。言ったそのすぐ側から戸惑いを感じてしまわざるを得ないものであった。
しかしそれを自覚したうえで。さらに言うのであった。
「誰に与えるかというと」
「アテナか」
「そうだろうな」
こう答えはする。しかしだった。
確かにアテナだ。だがそれだけではないような気もするのだ。何故か少年達を思い浮かべてしまう彼だった。それがどうしてなのか自分にもわかりはしないが。
そんな話をしていた。アイオロスは人馬宮に入った。
「ではな。またな」
「兄さんは何時聖域を出る？」
「まだだ」
今ではないというのだった。
「御前が出てからになるな。それを追ってだ」
「そうか。ではオーストラリアでな」
「うむ、また会おう」
こう話をして別れる兄弟だった。次の日にアイオリアのいる獅子宮に教皇からの伝令が来た。伝令は彼の前に来ると一礼してからこう述べてきたのであった。
「アイオリア様と共に出陣する白銀及び青銅の聖闘士達が決まりました」
「その者達はもう出陣の準備は整っているのだな」

「はい」
すぐに答えてきた伝令であった。
「聖域の出口でもう待っています」
「そうか。それではだ」
その話を聞いてすぐに頷くアイオリアだった。
「すぐに行こう。オーストラリアにな」
「では。私はこれで」
「うむ。御苦労だった」
伝令に労いの言葉をかけてそのうえで聖域から出陣しに向かう。
そしてその出口に待っていたのは。
「アイオリア様」
「それでは」
「御前達か」
アイオリアはまずは出迎えてきた二人を見て言った。
一人はがっしりとした身体つきの青年でありもう一人は賢者然とした落ち着いた雰囲気の男であった。アイオリアはその二人を見てそれぞれの名を呼んだ。
「ケルベロスのダンテ」
「はい」
「ケフェウスのダイダロス」
「はい」
二人はそれぞれアイオリアに恭しく一礼してきた。

第六十六話　獅子出陣その五

「我々が御供致します」
「それで宜しいでしょうか」
「まさか御前達だとはな」
アイオリアはその二人を見てまた言うのだった。
「地獄の番犬ケルベロスすら捕らえるダンテと」
「そう言われていますか」
「そして白銀聖闘士でも最強と言われるダイダロスまでか」
アイオリアが特に驚いていたのは彼の存在にだった。
「この戦いそこまで重要だというのか」
「いえ、アイオリア様」
ここでそのダイダロスが彼に対して言ってきた。
「重要でない戦いなぞないかと」
「むっ！？」
「戦いは全て重要なものです」
こう告げてきたのである。
「それにこの度の出陣はです」
「我々白銀聖闘士や青銅の者達も持ち回りになっております」
ダンテもアイオリアに対して告げてきたのであった。
「ですから。誰が出ようとです」
「特に問題はありません」
「そうなのか」
二人のその言葉を聞いて頷いたアイオリアだった。
「だから特別に考えることもないか」
「そしてです」
ダイダロスはまた言ってきたのであった。
「重要でない戦いはないということはです」
「わかった」

彼の言葉にまた頷いたのだった。
「ないな。そういうことだな」
「はい、そうです」
まさにその通りだと述べたダイダロスであった。
「おわかりになられましたら」
「次は青銅の者達ですが」
「そうだな」
ダンテの言葉にも頷くアイオリアだった。
「四人だったな」
「そうです、四人です」
「もう来ていますが」
「誰だ？」
あらためてそれは誰かを問うアイオリアだった。
「俺と共にオーストラリアに向かうのは」
「はい、俺です」
「俺もいますよ」
「宜しくアイオリア様」
「いざオーストラリアへ」
早速だった。元気のいい少年が四人彼の前に出て来たのであった。
「いやあ、出陣の命令を今か今かって待っていましたよ」
「全くですよ」
「けれどやっと出番ですから」
「頑張りますよ」
「こら、何だその挨拶は」
ダンテは四人が出て来たところでまず彼等を叱るのだった。
「アイオリア様の御前だぞ。礼節を守れ」
「って言われてもさ」
「俺達なりに敬意を表してるんだけれど」
「だよなあ。ちゃんと挨拶してるし」
「それで言われるのは」

「それならだ」
ダンテはさらに彼等四人に対して言うのだった。
「もう少しちゃんと挨拶をするのだ」
「申し訳ありませんアイオリア様」
ダイダロスはアイオリアに対して謝罪してきた。
「よく言って聞かせますので」
「いや、いい」
しかしそれはいいとするアイオリアだった。
「俺はそういう堅苦しいことは好きではないしな」
「ですが」
「いいのだ。俺も御前達と同じ聖闘士だ」
だからいいというのである。

第六十六話　獅子出陣その六

「気にすることはない。それよりもだ」
「それよりも？」
「その四人の名前だが」
それを知りたいというのである。
「一体誰なんだ？それなりに聖域で見る顔だが」
「はい、イロコイです」
「山鬼です」
「クルトです」
「オックスです」
それぞれ名乗る四人だった。
「インディアンです」
赤い肌に黒い髪の少年が己の星座を告げる。
「それが俺の星座です」８
「そうか」
「そして俺は」
次に言ってきたのは黒い髪に黄色い肌をした黒い目の少年だ。
「テーブル山座です」
「俺はですね」
クルトだった。黄色い神に青い目を持っている。四人の中で最も小柄である。
「南魚座です」
「このオックスは」
四人の中で最も背が高い。茶色の目と髪を持っている。
「南冠座です」
「この四人が今回出陣する青銅の者達です」
ダイダロスがこうアイオリアに対して告げた。
「それで宜しいでしょうか」

「それは俺の言葉だ」
今のダイダロスの言葉にそのまま返したアイオリアだった。
「俺と共にオーストラリアに行っていいのだな」
「といいますと」
ダンテが今の彼の言葉に問い返した。
「それはどういう意味でしょうか」
「この戦いは命をかけたものだ」
このことを四人だけでなく白銀の二人に対しても告げる。
「それでもいいか。このアイオリアと共に行くことで」
さらに言う。
「このアイオリアに命を預けてくれるか」
「ちょっとアイオリア様」
「その言葉水臭くありませんか？」
今のアイオリアの言葉に対して青銅の者達は笑って返してきた。
「俺達だって聖闘士ですよ」
「それにアイオリア様ならですよ」
「この命喜んで賭けますよ」
「そうそう」
こうアイオリアに言ってきたのだった。
「ですから是非」
「何かあったら俺達に言って下さいよ」
「何の気兼ねもなくね」
「そう言ってくれるか」
今の彼等の言葉をそのまま受けたアイオリアだった。感情がそのまま顔に出てしまいつい綻んでしまっていた。それがアイオリアだった。
「有り難う」
「御礼はいいですよ」
笑って応えてみせた四人だった。
「っていうかアイオリア様に御礼を言われるなんてね」

「恐れ多いですよ」
「そんなことは」
「有り難いな」
アイオリアは今度は礼を言わなかった。しかし彼等の心は確かに受け取ったのだった。
そうしてだった。彼はまた言った。今度の言葉は。
「行くか、オーストラリアに」
「ええ、狂闘士達との戦いに」
「この世界の人達の為に」
「そうだな。この世界の人達とアテナの為にだ」
アイオリアは前を見据えて言う。
「行くとしよう」
「ではアイオリア様」
ここでまたダイダロスが彼に告げる。
「まずは空からオーストラリアに向かいましょう」
「空からか」
「既に空港は手配しています」
それは手配しているというのである。

第六十六話　獅子出陣その七

「ですから。行きましょう」
「もう手配してあるのか」
「はい、そうですが」
「いや、そこまで考えていなかった」
アイオリアはかなり戸惑った顔で述べた。
「そうだったな。それもあったな」
「まさかアイオリア様」
「オーストラリアへはどうやって行かれるつもりだったのですか？」
ダイダロスだけでなくダンテまで呆気に取られた顔になって彼に問い返した。
「ギリシアからオーストラリアまでは空か海でないと行くことはできませんが」
「まさか」
「そうだったな」
また言うアイオリアだった。
「陸からは行くことはできない場所だったな、オーストラリアは」
「アイオリア様ってまさか」
「そういうところは」
「あのですね」
ここで彼の後ろから出て来た者がいた。それは。
「あっ、ムウ様」
「どうしてこちらに」
「アイオリアの戸惑っている声が聞こえましたので」
それで来たというのである。
「実は細かい事務処理は私の担当なのですよ」
「そうだったのか」
ムウの言葉を聞いて大いに驚くアイオリアだった。

「それではこれまでの出撃の時も」
「そうだったのです。手配等は全て私がしていました」
今わかる衝撃の事実だった。事務関係やこうした細かい旅程といったものは全て彼が考えてそのうえで手配をしていたのである。
「特にアイオリア、貴方はですね」
「俺なのか」
「想像はしていましたがやはりそこまで考えておられませんでしたか」
ふう、と軽く溜息すら出す彼だった。
「オーストラリアは他の国からは空か海でないと絶対に行けませんから」
「それは知っていたが」
「知っていてもそこまでは考えておられませんでしたね」
図星だった。ムウの言う通りであった。
「そこまでは」
「実は」
「まあいいです。手配はしましたから」
これで話を終わらせるムウであった。
「ではオーストラリアへ」
「行って来る」
彼に対しては一言であった。
「これからな」
「御気をつけて」
いつもの微笑で送るムウだった。
「そして必ず」
「帰って来いというのだな」
「その通りです。では」
「それではな」
別れを告げて出陣するアイオリアだった。オーストラリアでの戦いが今幕を開けようとしていた。

第六十六話　完

2009・11・3

第六十七話　豪州という地その一

豪州という地

オーストラリアに着いたアイオリア達。まずはシドニーの空港を出てレストランに入る。いきなり木造でログハウスの様なレストランに入った。

外装も内装もワイルドでありしかも広い。中に入ると大柄な男達がこれでもかといる。聖闘士達はまず彼等を見て驚かさせられたのだった。

「でかいですね」

「しかもでかいだけじゃなくて」

「筋肉も凄いですね」

誰もがその巨体を誇示していたのである。

「アルデバラン様程じゃないですけれど」

「モーゼスやアルゲティ程には」

「体格がありますね」

「そうだな」

アイオリアも青銅の者達のその言葉を背中で聞いて応えた。

「確かにそれだけはあるな。全員な」

「オーストラリア人ってそんなにでかいんですか？」

「あれだけ」

「いや、あれはだ」

ここでダイダロスが青銅の者達に話した。

「特別だな。ラグビーをやっているようだな」

「ラグビーか」

「そうだ。ラグビーはオーストラリアで盛んなスポーツだ」

こうダンテにも述べるダイダロスだった。

「だからだ。それをやっている者達だろうな」

「ラグビーはそれだけ体格が必要なのか」

「体当たりに次ぐ体当たりをし合う」
まさにそういうスポーツだというのである。
「それだけのものが必要になる」
「そうか。だからか」
ここまで聞いて納得した顔になるダンテだった。
「では彼等はオーストラリア人達の中でも特別か」
「そう思っていい。それでアイオリア様」
「ああ。食事だな」
「はい。実はこの店はムウ様が手配してくれた店でして」
そこまで気配りを忘れていないムウだった。
「おそらく確かな店かと」
「そうか。ではここでオーストラリア料理をだな」
「そうなります。では席に着きましょう」
やって来た店の者の案内を受けて席の一つに着く。七人どころか十人は座れる見事なテーブルに案内されそこにそれぞれ座る。それからだった。
アイオリアは店の者に注文する。そのメニューは。
「オーストラリアの料理は何が有名なのだ？」
「我が国の料理ですか」
「そうだ、それだ」
実はこの国の料理について何も知らないのである。
「それは一体何だ？」
「そうですね。羊ですかね」
店の者は暫し考えてからこう述べてきた。
「羊料理でしょうか」
「羊か」
「あとはオージービーフですね」
つまりオーストラリアの牛肉である。
「そうしたものを使った料理が多いですね」
「羊に牛か」

「どちらにしますか？」
今度は店の者がアイオリアに問うてきた。
「どちらもお勧めですが」
「そうだな。ここは」
「ここは羊が有名なんですよ」
「それもかなり」
少し迷いかけたアイオリアに青銅の者達が言ってきた。
「ラムとかマトンとか」
「それこそ羊でもっているってまで言われる国ですし」
「羊か」
「そうですね。ここは」
「羊が宜しいのでは」
ダンテとダイダロスもそれを勧めてきたのであった。
「羊といえばオーストラリアですし」
「ここではそれがよいかと」
「そうだな」
ここまで聞いて頷くアイオリアだった。

第六十七話　豪州という地その二

「それはそれにしよう」
「はい、羊で」
「それにしましょう」
「決めた。羊にする」
店の者に顔を向けての言葉である。
「それでいこう。頼めるか」
「勿論です」
微笑んで彼の言葉に応えてきた店員であった。
「では当店のオリジナルコースで」
「それで頼む」
「それでは」
こうして話が決まった。店員が一礼して去るとすぐに山の如きサラダととてつもない大きさの皿に入ったスープが来た。スープには人参に玉葱、それにジャガイモが大量に入れられている。コンソメスープであった。
「何かいきなり」
「凄い量ですね」
青銅の者達はその量にまず圧倒された。
「何かこれだけ食べても」
「満足できそうですね」
「それだけのものがありますよ」
「そうかもな」
アイオリアもその山の様に積まれたレタスとトマト、それにアスパラガスとラディッシュのサラダを見て言う。そこにフレンチドレッシングがこれでもかというまでにかけられている。
「野菜をまず食べろということか」
「肉だけ食べてはよくないからでしょう」

だからだと述べたのはまたダイダロスだった。
「ですからまずはこれだけの野菜とスープをです」
「そういうことか」
「しかし。スープはこれだけではないようです」
ダンテが言うとだった。今度はポタージュが来たのだった。それもまたかなりの量でありこれにはとうもろこしが入れられていた。
「これもだというようです」
「本当に最初から」
「戦場なんだな」
青銅の者達はその二つ目のスープを見てまたそれぞれ言った。
「いざ食べるとなると」
「かなりのものだな」
「だが食べなければ話ははじまりはしない」
アイオリアはそのサラダと二種類のスープを前にして述べた。
「それではだ」
「ええ、それじゃあ」
「戦闘開始ですね」
こうして彼等はそのサラダにスープとの戦いをはじめた。それが終わるとすぐに羊のソーセージが来て今度はハムだった。そしてステーキにロースト、立て続けに来たのであった。
「うっ、流石に」
「これだけ食うと」
「かなりのものが」
皆ローストまで食べ終えて流石に満腹感を感じだしていた。
「きますね」
「けれどまた来ましたよ」
「今度は」
まだメニューがあるのだった。今度は脛肉を煮たものだ。そこにデミグラスソースをかけている。
「煮たやつですね」

「パンもありますし」
それもあった。これまたかなりの量だが彼等は頑張って食べている。
「それでも食べますか」
「いざ」
そしてその脛肉も食べ終えた。ここでようやくデザートになるのだった。
デザートもかなりのものだった。デコレーションの半分はありそうなチョコレートケーキにこれまた山の様に積まれたフルーツであった。それも全て食べてようやく終わったのである。
「やっとだよな」
「ああ、何とか全部食ったな」
「本当にやっとだよ」
青銅の者達も食べ終えて満足というよりも苦しげであった。
「ここまで食ったのなんてな」
「はじめてだよ」
「全くだ」
ダンテにしろそれは同じだった。
「ここまで量が多いとはな」
「これがオーストラリアなのか」
ダイダロスも言う。
「この量が」
「流石に特別ではないのか？」
アイオリアは流石にそう思っていた、
「ここはラガーマンやそうした人間の来る店の様だからな」
「けれど俺達も聖闘士ですよ」
「ですから」
青銅の者達はこうアイオリアの今の言葉に返した。

第六十七話　豪州という地その三

「ですからそれを考えても」
「あの連中の食う量は異常じゃないですか？流石に俺達よりは食ってないですけれど」
それでも同じ位は食べている。どちらにしろ相当な量を食べていることは疑いようのない事実であった。
「オーストラリア人って元々大食いなんじゃっても思いますけれどね」
「確かにラガーマンは食うでしょうけれど」
「オーストラリア人はか」
「有り得ますかな」
アイオリアは幾分疑わしげであったがダイダロスはその可能性を否定しなかった。
「それもまた」
「有り得るか」
「はい。何はともあれです」
「ここはオーストラリアということだな」
ダンテがこうダイダロスに対して述べた。
「そうだな」
「そうだ。ここはオーストラリアだ」
そのダンテにこう返したダイダロスだった。
「オーストラリアの食べる量があるのかも知れないな」
「オーストラリアのだな」
「どちらにしろこの店の量は相当なものだった」
このことは認める彼だった。
「それは間違いない」
「三日分は食べたな」
「全くだ」

青銅の者達がここでまた言うのであった。
「さて、何はともあれ」
「エネルギーは補給できたし」
「行くか」
「そうだな。行くとしよう」
青銅の者達の今の言葉に応えて頷くアイオリアだった。
「行く先はだ。わかっているな」
「はい」
「それはもう」
ダンテとダイダロスが彼の言葉に頷いた。
「オーストラリア中央部」
「そこにまで」
「エアーズロックが近くにある」
そのオーストラリアの観光名所の一つである。一枚岩の如き岩山が砂漠の中にある。そうしたある意味幻想的な名所である。
「そこに行く」
「っていうとここからかなり」
「シドニーからだと」
青銅の者達はすぐにこのことに気付いたのであった。
「ですよね。オーストラリアって相当広いから」
「ここから中央までだと」
「車の手配はできている」
その彼等に対して告げるダイダロスだった。
「それは安心しろ」
「流石に徒歩ではないか」
「瞬時に行くことはできる」
ダンテにも言う。これは音速以上の動きが可能な聖闘士ならば楽なことである。しかしそれをすればそれはそれで問題があるのである。だからこそ誰もそれはしないのである。あくまで戦闘中だけである。

「だが。それはだ」
「できはしないな」
「だから車を手配してもらった」
また述べるダイダロスだった。
「ムウ様にか」
「そうか。またムウだな」
アイオリアはそれを聞いて静かに頷いたのだった。
「あの男にはいつも助けられるな」
「はい、確かに」
ダイダロスも低い声で今のアイオリアの言葉に頷く。
「ムウ様の手配は常に何処までも手配が行き届いています」
「悪いが俺はそうしたことには慣れてはいない」
幾分困った顔になって述べるアイオリアだった。
「獅子宮でも周りの者達に何でもしてもらっている位だ」
「まあアイオリア様だからな」
「そうだよな」
青銅の者達は今のアイオリアの言葉にこう言い合うのだった。

第六十七話　豪州という地その四

「やっぱりそういうのはな」
「不得意って予想できるよな」
「当然みたいにな」
「おい、聞こえているぞ」
当のアイオリアが苦笑いを浮かべてその彼等に告げる。
「せめて俺の聞こえないところで話せ。そういうことはな」
「あっ、すいません」
「これはどうも」
軽く申し訳なさそうに今のアイオリアの言葉に頭を下げる彼等だった。それぞれ右手を自分の頭の上に置いて。あまり真面目に謝っているようには見えない。
「失礼しました」
「これはまた」
「全く。まあいい」
彼等についてはこれで許すアイオリアだった。そうしてそのうえでダイダロスとダンテに対して言うのだった。
「それでだ。車はだ」
「既に発注した業者もわかっていますので」
「ではそれに乗るだけだな」
ダンテがダイダロスの今の言葉に突っ込みを入れた。
「そして中央部まで行き」
「それで終わりだ。では」
「よし、行くぞ」
またこう言うアイオリアだった。
「その中央部にな」
「そこに何かがあるようです」
ダイダロスはここでまた述べたのだった。

「おそらくは狂闘士達も」
「アイオリア様、このシドニーから中央までは長いです」
ダンテはその距離について語った。
「おそらく途中に狂闘士達が何度か」
「間違いないな」
そのことはもう既に察しているアイオリアだった。
「来る、間違いなくな」
「はい、ですから」
「警戒して行くとしよう」
アイオリアは真剣そのものの顔で述べた。
「中央部までな」
「流石にここで仕掛けて来たりはしませんよね」
「シドニーでは」
青銅の者達はそれを警戒しだした。目だけであるが周りをきょろきょろと見たりもする。
「幾ら何もここでは来ませんよね」
「奴等も」
「安心しろ」
その彼等にアイオリアが静かに告げた。
「ここでは狂闘士達の小宇宙は感じない。全くな」
「そうですか。それじゃあ」
「安心していいってことですね」
アイオリアの今の言葉を聞いてまずは落ち着きを取り戻す彼等だった。そうしてそのうえでさらに言ってきたのであった。
「じゃあアイオリア様」
「中央部へ行きましょう」
「連中を倒しに」
「それはもう言っている。それではだ」
アイオリアが立ち上がった。それに続いて他の聖闘士達も。
「行くか」

「ええ、では」
「いざ戦いの場へ」
こうしてその中央部に向かう彼等だった。そのまま戦いの場に向かう。
その頃シオンは。またあの鏡を並べた間において鏡の向こうにいる男と話をしていた。シオンは彼に対してまずこう言うのであった。
「これでだ。七つ目だ」
「そうか。早いものじゃな」
「アイオリアが行った」
出陣した黄金聖闘士が誰かも話すのだった。
「オーストラリアにだ」
「そうか。次はそこか」
「これで後は一つだが」
「どうじゃ？それで」
鏡の向こうの男はシオンの言葉を聞き終えてから彼に問うた。
「アーレスは」
「どうやら復活は避けられないようだ」
シオンはこのことは残念そうであった。言葉にそれが滲み出ている。
「防ぎたかったがな」
「アーレスだけではあるまい」
男はこうも言ってきたのだった。
「復活するのは」
「そうだ。それも間違いない」
シオンの声が曇っていた。声に感情を含ませない彼にしては珍しいと言えるものだった。だがそれはここでは別であったらしい。
「あの神々もだ」
「争いと嫉妬の神エリスと共にアーレスを支えてきたあの神々もまた」
「これで五柱だ」

神の数であった。
「それだけの神々が戻るのだ」
「アーレスを入れれば六柱じゃな」
「トラキアの強さは狂闘士達だけではない」
その過去の聖戦で獰悪なまでの強さで知られた彼等だけではないというのである。

第六十七話　豪州という地その五

「あの神々もまたその力だ」
「戦いに餓えた神々じゃな」
「あの神々とも戦い、そして勝たなければならない」
シオンの言葉には深刻な響きもあった。
「この地上の平和の為には」
「それではシオンよ」
「何だ」
「御主もそこに留まるだけで終わらせるつもりではあるまい」
鏡の向こうの男はこう彼に問うてきたのだった。
「それだけでは。終わらせるつもりはあるまい」
「必要とあらばだ」
こう前置きしてからの言葉である。
「私も戦う」
「そうか。やはりな」
「そしてだ」
今度はシオンが鏡の向こうの男に対して問うた。
「御前もそれは同じだな」
「わしはここから動くことはできぬ」
男の返答はまずはこれであった。
「しかしじゃ」
「しかしか」
「そうじゃ。ここに来るというのなら相手をする」
強い言葉であった。老いている筈だが何故かそこには確かな若さがあった。
「ここにいるあの者達を解き放たたせるわけにはいかんからのう」
「狂闘士達、いやアーレスは」
「あの者達を解き放とうとすると思うのじゃな」

「間違いなくそうして来る」
シオンの今の言葉は確信であった。
「御前を倒したうえでだ」
「そして世界を分けるというのじゃな」
「アーレスとあの神の絆は深い」
シオンは静かに言った。
「それを考えればだ」
「解き放ちそのうえで世界を分け合う」
「そうしてくるだろう」
「そうなればどのみちじゃ」
男の言葉はいささか何かを含むものになっていた。それは妙に剣呑なものも帯びている、そうしたものを含む言葉になっていたのだ。
「この地上は終わってしまう」
「人間の世界の平和もまた」
「あの二柱の神々の下では人は生きてはいけぬ」
男の言葉はそれを見透かしたものであった。
「間違いなくな」
「だからだ。それを許してはならない」
「その時は任せておくのじゃ」
男はシオンに言ってきた。
「わしが何としても守るからのう」
「頼めるか」
「任せておくのじゃ」
こう返す男だった。
「わしもその時は戦う」
「そうしてくれるか」
「確かにこの場を離れることはできぬ」
それはどうしてもだというのだ。
「しかしじゃ。ここに来るのならばじゃ」
「戦ってくれるか」

「シオンよ」
男のシオンにかける言葉が実に優しく親しげなものになっていた。
「あの者達は気付いておらぬがのう」
「誰一人としてな」
「しかし戻って来てくれた」
その彼等も見ている言葉であった。
「そしてまた同じ時を過ごせる」
「そうだな。だが私は」
「間も無くか」
「この戦いが終わって暫くか」
言葉に寂しげな笑みが宿っていた。
「去ることになる」
「左様か。遂にじゃな」
「長いようで短い時間だった」
シオンの言葉には過去を懐かしむ確かなものがあった。

第六十七話　豪州という地その六

「だが。これで私は去り」
「わしもやがては」
「その時は頼む」
シオンはその彼に告げた。
「私は間違いなくいないからな」
「わかっておる。その時も任せておけ」
応える男の言葉は何処までも温かいものだった。
「あの者達なら大丈夫じゃ」
「そうだな。あの時と同じだ」
シオンの声は今度は微笑むものになっていた。
「彼等は気付いていないがな」
「魂は同じなのじゃよ」
男の言葉もまた微笑んでいた。そうした意味でシオンのそれと同じものになっていた。
「わしもあの者達もな」
「そして私もか」
「そういうことじゃ。わしはまことに幸せ者じゃ」
「私もな」
「またあの者達と共に戦える」
だからだというのである。
「それを幸せと言わずして何という」
「私もまたあの者達と同じ時間を生きることができる」
シオンはその微笑みを含んだ言葉のまま述べた。
「やはり。いいものだ」
「僅かとはいえか」
「僅かであっても素晴らしいものは素晴らしい」
そこには惜しむ気持ちはなかった。喜ぶものがあるだけだった。

「私はそう思う」
「そうじゃな。素晴らしいものじゃ」
「私の後は頼んだ」
「うむ。聖域に行くことはできんがな」
「あの者達はわかっている」
その彼等について話を続けるシオンだった。
「正義というものがな」
「それもあの時と同じじゃな」
「それぞれ口にする正義は違う」
それは違うというのである。
「だが。その根は同じものだ」
「人の正義であり」
「アテナの正義だ」
それだという両者だった。
「それは変わってはいない」
「ハーデスにしろアーレスにしろ人は見てはおらん」
「ポセイドンもまた」
そうした三柱の神々については彼等は否定的であった。それも当然のことであるが。
「人については何も思うところはない」
「ただの道具としてしか思っておらんわ」
男の言葉はまさに言い捨てる感じのものだった。
「自分達に従う者達ですらじゃ」
「あの天界の神もか」
「そうじゃな。同じじゃな」
その神も同じだというのだった。
「所詮はのう。同じじゃよ」
「アテナだけが人を見ていて下さっている」
「そして認めて下さっておるじゃ」
そうだというのである。アテナだけがだというのだ。

第六十七話　豪州という地その七

「だからこそわし等もあの者達も再びこの地上でじゃ」
「人として戦うのだな」
「それが人の正義じゃ」
彼はシオンに対して言った。
「傲慢な神々の正義ではない」
「押し付けられた正義ではなく選び貫き通す正義」
シオンが今言った正義はそうした正義であった。
「そうだな」
「そうじゃな。それではじゃ」
「うむ、その時が来ればだ」
「わしも戦おう」
男はここでもはっきりと言った。
「この場においてのう」
「私も戦うことになるかも知れない」
シオンはその可能性を否定しなかった。むしろ認めていた。
「先の教皇であられたセージ様の様に」
「よいことじゃな」
男はそれをいいこととした。それにセージという名前を聞くと声だけでなく鏡の向こうにあるその顔を綻ばせもしていたのだった。
「あの方と同じことをするというのじゃったらな」
「素晴らしい方だったな」
「うむ」
先の教皇セージについても彼等の考えは同じだった。
「あれだけの方であられたからこそ」
「わし等も戦うことができた」
「私はセージ様には及びはしない」
ここでシオンの言葉には謙遜が入った。

「全くな」
「いやいや、そうではない」
「慰めてくれるというのか？」
「違う。あの聖戦で生き残ったのはわし等だけじゃった」
男はまずこのことから語るのだった。
「しかしじゃ。御主は聖域に残り教皇となった」
「そのことか」
「そして僅か一人から聖域を立て直した」
こう彼に告げるのだった。
「これがどうして素晴らしくないと言えるのじゃ」
「・・・・・・・・・」
「確かにセージ様は素晴らしい方じゃった」
それは否定できないことだというのである。
「しかし御主もまた素晴らしいのじゃ。じゃからあの者達も集っておるのじゃ」
「済まないな。そう言ってもらい」
「よいよい。では頼んだぞ」
頼む側と頼まれる側がここでは入れ替わったのだった。
「聖域のことはのう」
「わかった。では任せてもらおう」
「それではじゃ」
ここまで話すとだった。男の姿は鏡の中から次第に消えていった。
「また会おう」
「うむ、またな」
「八つの場所での戦いが終わった時じゃ」
男は消えながらも話してきた。
「またあらたな戦いがはじまるのう」
「アーレス達との本格的な戦いがだな」
「今は前哨戦に過ぎん」
それだというのだった。男は。

「これからじゃな。本当の戦いは」
「我等が勝つか彼等が勝つかだな」
「アーレスが降り立とうとも諦めぬことじゃ」
それをするなというのである。
「よいな。必ず勝機はあるのじゃ」
「わかっている。私は諦めはしない」
それはないと。断言するシオンであった。
「何があろうともな」
「それを聞いて安心した。ではじゃ」
ここで遂にその姿を完全に消した男だった。後に残ったシオンもすぐに部屋を後にした。そうしてまた己の仕事に戻るのであった。

第六十七話　　完

２００９・１１・６

第六十八話　魔界の戦士達その一

魔界の戦士達

シドニーからオーストラリア中央部に向かうアイオリア達。その道はかなり長くキャンピングカーの中ではいささか暇も持て余していた。

「そういえばこのキャンピングカーって」

「あれじゃね？」

「何か中近東行った連中もキャンピングカーだったっていうしな」

青銅の者達はポーカーに興じていた。それぞれテーブルを囲んでそのうえでカード遊びをしている。それを楽しみながら話をしているのである。

「これも同じタイプかな」

「そうじゃねえのか？やっぱり」

「まあ実際のところはわからないけれどな」

「いや、違う」

だがそれは違うと。彼等の横で本を読んでいたダイダロスが答えるのだった。

「アルデバラン様達のキャンピングカーとこのキャンピングカーはまた違うタイプだ」

「あっ、そうなんだ」

「違うのか」

「そうだ。あれは日本製だったがこれはドイツ製だ」

まず造っている国が違うというのである。

「そこが違う」

「ドイツか」

「あそこなんだ」

「そうだ。意外か？」

こう青銅の者達に問うダイダロスだった。

「それは」
「いや、それは別に」
「感じてないけれどな」
「なあ」
そうしたことは別に思っていない青銅の者達だった。それはアイオリアも同じでそれを聞いても特に何かを思っている様子はなかった。
「特にな」
「そういうのはな」
「そうか。それはないのだな」
「俺も日本製の車は好きだがな」
アイオリアはここでふと言った。
「聖域の黄金聖闘士が乗る車はどれも日本製だからな」
「ああ、そうですよね」
「グラード財団が寄付してくれてるんですよね」
「聖域の車のかなりの部分が」
「そうだ」
こう答えるアイオリアだった。
「グラード財団には他のことにおいても世話になっているがな」
「車っていうとグラード自動車ですね」
「確か日本でも有数の自動車メーカーですよね」
「かなりいい車を作っているらしいですね」
こう一同に話すアイオリアだった。
「そこからの寄付だったんですか」
「いい車だとは思ってましたけれど」
「運転するのは我々ではないがな」
このことも言い加えるアイオリアだった。
「宮にいる者達が運転してくれている」
「それでも日本の車ですか」
「いいですね」

「乗り心地はかなりいい」
アイオリアの話は彼以外の者が言えば自慢になるものだった。しかしそうはならないのはやはりアイオリアが話しているからであった。
彼には嫌味がない。そして暗いものもない。これがアイオリアという男だった。
そして彼はさらに話すのだった。
「噂以上の車ですか」
「そんなにいいんですか」
「そうだ。御前達は乗っていないのか」
ふと青銅の者達に対しても問うた。
「グラード自動車の車は」
「まあ寄付は受けてますけれどね」
「車も」
それは受けているというのである。しかしそれでもなのだった。
「ですが。俺達は何人かで一台ってところですからね」
「白銀だと確か」
「一応一人に一台だ」
そうだと述べたのはダンテだった。今は彼が運転しているのだった。ハンドルは左である。その左ハンドルの車を運転しているのである。
「それはな」
「俺達はそこが違いまして」
「二人に一台ってところなんですよ」
「そんな辺りです」
「そうだったのか」
それを聞いて今それをはじめて知ったという感じのアイオリアだった。

第六十八話　魔界の戦士達その二

「青銅はそうなのか」
「黄金聖闘士の方々はあれですか？」
「やっぱり一人に一台ですよね」
「それもかなり高級なのが」
「高級なのか」
それは自覚のないアイオリアだった。この辺りはやや疎いところがあった。アイオリアはそうした世間については知らないところがあった。
「我々が乗っている車は」
「ってそれはまあ」
「当然じゃないんですか？」
青銅の者達は少し驚いた様な顔でアイオリアに言葉を返した。
「黄金聖闘士ですよ」
「聖域で最強の」
このことについては最早言うまでもなかった。黄金聖闘士こそ聖域で最強の聖闘士達でありそして聖域の象徴でもあるのである。
「その車もやっぱり」
「相当なものですよ」
「そうなのか」
言われてそのうえでまた気付いた様な顔になるアイオリアだった。
「黄金聖闘士が乗っているその車は」
「はい、そうですよ」
「それについては」
また話す彼等だった。
「って知らなかったんですか」
「それは」
「ううむ、それはな」

やはり知らなかった。彼は難しい顔になっていた。
「そういうものなのか」
「やっぱり違いますよ」
「青銅と白銀、それに黄金では」
あらためて話す彼等だった。
「黄金聖闘士はやっぱり凄いものがありますよ」
「俺達から見たら憧れですし」
「ですから」
彼等はそれぞれ話す。これもまたアイオリアには気付いていなかったことだった。
「俺達黄金聖闘士はそうした存在だったのか」
「だからといって深くお考えになられることはありません」
ここでダイダロスがアイオリアに告げた。
「アイオリア様はアイオリア様でお考えになられればいいのです」
「俺の考えでか」
「そうです。それでいいのです」
ダイダロスの彼への言葉は続く。
「深刻に考えられることはありません」
「そうか」
「はい、確かに自覚は必要です」
それはいるというのである。
「ですがそれでもです。それに押し潰されてはなりません」
「押し潰されてもならないか」
「そうなってしまっては何もなりません」
彼は言った。
「だからこそです」
「俺は俺の黄金聖闘士としての生き方を歩む」
アイオリアは述べた。
「そういうことなのか」
「何も深く考えられることはないのです」

また言うダイダロスであった。
「アテナが導いて下さいます」
「わかった」
ここまで聞いてようやく頷くことができたアイオリアだった。
「では。そうさせてもらう」
「はい、是非」
ダイダロスは彼に対して頷いてみせた。
「それではです」
「これからのこのオーストラリアでの戦いもまた」
「アイオリア様の進まれるべき道を歩まれて下さい」
「ですよね。それがアイオリア様らしいですよ」
「そうそう」
ここで青銅の者達もアイオリアに対して告げるのだった。

第六十八話　魔界の戦士達その三

「アイオリア様ってこう言ったらあれですよ」
「怒らないで下さいよ」
「いや、別に怒ることはないが」
彼等のその申し訳なさそうな前置きに対してこう返すアイオリアだった。
「別にそれはな」
「それならいいですけれどね」
「それでですね」
他ならぬ彼自身の言葉を受けて安心しそのうえでさらに話してきた。
「アイオリア様は考えるより先に動かれる方がいいんですよ」
「そっちの方がね」
「そうなのか。まず動くことか」
彼等のその言葉を聞いて頷くアイオリアだった。
「俺はその方がか」
「アイオリア様の御心はまっすぐなものですからね」
運転しているダンテも言ってきた。
「それでいいですよ」
「動いてか」
「ええ、まずは動かれて下さい」
運転中なので前を向いているままだが声は彼に向けていた。
「何事につけても」
「わかった」
ここまで聞いてまた頷いたアイオリアだった。
「それではそうしていく」
「そういうことですねアイオリア様らしく」
「まっすぐで」

青銅の者達も笑顔で彼に言ってきた。するとだった。
「むっ」
「どうしたんですか、急に」
「何かあったんですか？」
「ダンテ、車を止めてくれ」
表情を一変させ鋭いものにさせたアイオリアは周りの声をとりあえず置いてダンテに対して言ってきたのである。声も鋭いものになっている。
「いいか」
「車をですか」
「来る」
彼は言うのだった。
「狂闘士達がな」
「えっ、まさか」
「俺達は何も感じませんけれど」
「なあ」
青銅の者達が狼狽に近い顔になって言い合った。
「まさかそんな」
「もう出て来たんですか」
「そうだ。すぐに車を出る」
さらに言うアイオリアだった。
「それでいいな」
「ええ、そうですね」
「敵が出て来るんなら」
彼等にとっても異存のないことだった。敵が出て来るならばである。
「行きましょう」
「すぐに」
「その通りです」
青銅の者達の言葉を受けてダイダロスもアイオリアに言ってきた。

ダンテも既に車を停めて何時でも出られるようにしてある。この辺りは流石だった。

「アイオリア様、すぐに出ましょう」

「そうだ、出るぞ」

こうして彼等はすぐに車から出た。車の外は荒野で岩と赤い乾いた土があるだけである。そこに出てそのうえでもう聖衣を着ていた。暫くしてであった。インプ達の大軍が彼等の前に出て来たのだった。

「何っ、まさか」

「気付かれたというのか！？」

「我等の動きが」

「そうだ」

アイオリアが驚きを隠せないその彼等に対して告げた。既に車の前で構えを取ってさえいる。

「見ての通りだ。貴様等の動きは既に読めていた」

「何故だ、それは」

「何故わかった」

「小宇宙だ」

今アイオリアが言葉に出したものはそれだった。まさに文字通り仁王立ちしてそのうえで彼等に対して告げてみせたのである。

第六十八話　魔界の戦士達その四

「それでわかった」
「小宇宙だと」
「それでだというのか」
「そうだ」
また告げた。
「それでわかる。何もかもがだ」
「ふん、流石は黄金聖闘士ということか」
「聖域で最強の者達と言われる」
インプ達も彼のそうした力は認めることは認めた。
「しかしだ。それでもだ」
「我等とて狂闘士」
「それを忘れるな」
その力を知ってもだった。彼等の戦意は衰えてはいなかった。
「レオ、ここで貴様を倒す」
「そして他の聖闘士達もだ」
こう言ってそれぞれその手にしている三叉の槍を構えるのであった。
「全員ここで倒してやろう」
「リゲル様達の御手を煩わせるまでもない」
「アスモデウスか」
アイオリアはリゲルという名前を受けてまた述べた。
「またここで出て来るのか」
「そうだ、リゲル様は貴様達のその行く先におられる」
「それが何処かもうわかっているようだな」
「その通りだ。既にな」
今度は目を閉じて答えるアイオリアだった。
「それもまたわかっている」

「ならばだ」
「ここから先に行かせるわけにはいかない」
「尚更だ」
ジリ、と前に出て来ての言葉であった。
「いいな、覚悟するのだ」
「貴様等には悪いが死んでもらう」
「生憎だが」
彼等の言葉を受けてダンテが前に出た。当然ながら彼も聖衣を身に着けておりそのうえで両手には鉄球と鎖を持っているのである。完全に武装している。
「それは適うことはない」
「ケルベロスか」
「貴様が相手をするというのか」
「望みとあらばな」
こうは言うが最初からそのつもりなのは見て取れるものだった。
「そうするが」
「ならば話は早い」
「まずは貴様からだ」
インプ達も彼の言葉に応えてさらに前に出た。槍の先端が禍々しく輝く。
「串刺しにしてやろう」
「その全身をだ」
「それは貴様等にはできはしない」
ここでもこういったことを言うダンテであった。
「このダンテに対してはな」
「いや、ダンテ」
その彼に後ろから。今度はダイダロスが姿を現わしてきた。そのうえで彼に言ってきたのである。
「御前ばかりではない」
「貴様も戦うというのか」

「そうだ」
応えながら彼の横に出て来た。
「私もまた戦わせてもらおう。いいか」
「別に拒むつもりはない」
口元を微かに綻ばせての今の言葉だった。
「何もな」
「ではいいのだな」
「そうだ。では共に戦おう」
「うむ」
二人はそのつもりだった。そうしてインプ達と対峙する。しかしここでその二人に対してアイオリアが告げてきたのであった。
「待て」
「アイオリア様」
「どうされたのですか？」
「ここは俺に任せてくれ」
こう言ってきたのである。

第六十八話　魔界の戦士達その五

「俺にだ」
「といいますと」
「戦われるのですぁ」
「そうさせてもらいたい」
こう二人に申し出るのだった。
「それで駄目か」
「いえ、アイオリア様がそう仰るのならば」
「我等に異存はありません」
彼等の返答はこうしたものであった。
「それでは我等は」
「これで」
「アイオリア様自ら戦われるのか」
「まさか」
青銅の者達は今まで見ているだけだったがアイオリアがこう言ったのを見てゴクリ、と息を飲んだ。そのうえで見守るのだった。
「これは凄いことになるな」
「ああ、そうだな」
「黄金聖闘士の戦い」
それがどういったものか。彼等はまだ知らなかったのだ。彼等聖闘士の中でも最高位に位置する黄金聖闘士の戦いがどういったものなのか。
だからこそ見守るのだった。どれだけの戦いが繰り広げられるのか。自分達から戦うことを申し出ることは今の彼等には無理なことであった。
「一体どんな戦いになるんだ?」
「これは」
「全くわからないぞ」

そしてだった。それは彼等だけではなかった。
「レオが出て来るのか」
「最強の黄金聖闘士がここでか」
インプ達も同じであった。彼等もゴクリ、と息を飲んでいた。
「だが。好都合だ」
「そうだな」
「その通りだ」
しかし彼等は狂闘士特有のその激しい闘争心でもって戦いへの恐怖はなかった。当然アイオリアが強大であるとわかっていてもだ。
「ここでレオを倒せばここでの戦いは決まる」
「聖域の象徴である黄金聖闘士を一人倒せばそれだけでだ」
「我等の有利になる」
「倒せることができればの話だ」
しかしその彼等に対してアイオリアが言ってきたのだった。
「それはだ」
「それはわかっている」
「我等を侮らないでもらおう」
今のアイオリアの言葉に毅然として返したインプ達だった。
「レオ、貴様がどれだけ手強い相手なのかはわかっている」
「しかしだ。我等も狂闘士の端くれ」
「そのことを忘れるな」
雑兵達とはいってもだ。彼等も狂闘士達の誇りを強く備えているのであった。
誇りのままだった。彼等はここでもジリ、と前に出るのだった。
そのうえでだ。今まさにアイオリアに向かわんとしていた。
「まずは貴様を倒す」
「そして他の者達をだ」
倒すというのだった。
「覚悟はいいな」
「串刺しにしてやろう」

「ならば来るのだ」
やはりその彼等の言葉を正面から受けてみせるアイオリアだった。

第六十八話　魔界の戦士達その六

「貴様等のその力、見せてみるのだ」
「よし、二言は許さん！」
「見せてやろう、我等の力！」
そう言うとだった。一気にアイオリアに殺到した。
「受けろレオ！」
「我等の槍を！」
その言葉通り槍を手に向かう。しかしここで。
アイオリアは構えた。そしてそれと共に右手を突き出した。
忽ちのうちにそこから凄まじい光が放たれ。彼は叫んだ。
「ライトニングボルト！」
「何っ、光が！」
「アイオリア様の右の拳から光が放たれたぞ！」
「あれは一体」
青銅の者達が思わず叫んだ。そしてその光が縦横にチェスのボードの如きラインを描くとだった。
その縦横の光がインプ達を貫き。吹き飛ばしたのであった。
「う、うわあああああーーーーーーっ！！」
「何だこれは！」
叫ぶと共にその戦衣が粉々にされていく。そうして吹き飛ばされた後で地面に叩き付けられてしまった。
「こ、これが」
「レオの拳か」
「黄金聖闘士の拳なのか」
「その通りだ」
その彼等に対して答えるアイオリアだった。
「これこそがだ。このレオのアイオリアの技」
こう言ってからだった。

「ライトニングボルトだ」
「ライトニングボルト・・・・・・」
「それがその技の名前か」
「黄金聖闘士の拳は光」
黄金聖闘士の力の特徴の一つでもあることだ。
「光の速さで放たれるのだ」
「くっ、だからこそか」
「これだけの威力があるというのか」
「そうだ」
まさにその通りだと。述べるアイオリアだった。
「それを今ここで言っておこう」
「やはり手強いか、レオのアイオリア」
「その力、尋常なものではないな」
「確かに・・・・・・」
インプ達は今事切れようとする中で呻いていた。
「だが。我等の仇はだ」
「必ずリゲル様達が取って下さる」
こう言って呻きながらも穏やかな顔を見せているのだった。
「必ずだ」
「ではレオよ」
死の間際ながらその顔は。至って冷静な顔であった。
その顔で言う言葉だった。
「冥界で待っている」
「リゲル様の拳を受けて死ぬがいい」
「それを楽しみに見ていよう」
こう言ってだった。事切れていく。生き残っているインプ達は一人もいなかった。
「アイオリア様、これで」
「この地での初戦が終わりました」
「そうだな」

ダイダロスとダンテの言葉に頷くアイオリアだった。
「これでまずは、だな」
「はい、もう敵の気配はこの辺りにはありません」
「それでは」
「先を急ぐとしよう」
最後にアイオリアが告げ皆車に戻った。そうして再びオーストラリア大陸の中央部へと進んでいくのであった。先はまだ長いものであった。

第六十八話　　完

２００９・１１・１０

第六十九話　アイオリアの選択その一

アイオリアの贅沢

「リゲル様、その結果としまして」
「レオは今こちらに向かっております」
「何も阻むものはありません」
「そうか」
そこまで聞いたうえで頷いている男がいた。それは紛れもなく狂闘士八大公の一人であるアスモデウスのリゲルその男であった。
周りに集い報告しているのは狂闘士達である。彼等がそれぞれ集いリゲルに対して報告しているのであった。
「インプ達を何なく倒したか」
「レオがその技を繰り出しまして」
「ライオにングボルトという技をです」
「光の拳か」
リゲルは彼等の報告を聞いているうちに静かに述べたのだった。
「それだな」
「御存知なのですか？」
「レオのその技を」
「知っている」
こう周りのその狂闘士達に返した。彼等は今荒野の中にいた。周りにあるものは砂と岩ばかりであり他には何もない。そうした場所にいるのであった。
その中で狂闘士達に囲まれて。リゲルは話を聞いているのである。
「レオの技の一つだ」
「技の一つといいますと」
「まだ他に技が」
「そうだ、ある」
こう答えるのだった。

「まだだ、あるのだ」
「ではその技はまたこれから」
「戦いが進むにつれてですか」
「出して来るだろう。レオは手強い」
彼はそれも既に知っているようであった。
「その拳の力は黄金聖闘士達の中でも随一だ」
「聖域で最強とされる彼等の中でもですか」
「随一だと」
「多くの黄金聖闘士はそのセブンセンシズにより目覚めた技も使う」
これは数多くの者達は当てはまることであった。サガにしろアイオロスにしろその中に入っていると言っていいものであった。それだけ強大な力を持っているということでもあるのだ。
「しかしだ。レオは違うのだ」
「セブンセンシズに目覚めていてもですか」
「その拳で戦うのですか」
「光の拳でな」
黄金聖闘士の象徴の一つであった。光の力である。
「それでのみ戦うのだ」
「それがレオ」
「獅子座の男ですか」
「代々レオの聖闘士はそれを誇りとしてきた」
こうも話すリゲルだった。
「その獅子の心のままにだ」
「獅子の心を持つ男」
彼等はアイオリアをそう認識したのだった。
「レオのアイオリア」
「我等が倒すべき者」
「御前達は行くつもりだな」
リゲルはここで彼等に告げてみせた。
「レオを倒しに」

「はい、無論です」
「それは」
これについてはもう他に考えはなかった。
「レオだけでなくサジタリアスも出るでしょう」
「だからこそ余計にです」
「我等にお任せ下さい」
「是非」
「いいだろう」
それを黙って受けるリゲルであった。そのうえでまた言うのだった。
「御前達の好きにするがいい」
「有り難き御言葉」
「それでは」
「俺はここにいる」
動かないというのである。
「レオが御前達に倒されるというのならそれまでの男だ」
「左様ですか」
「サジタリアスもだ」
彼についてもそうだというのであった。

第六十九話　アイオリアの選択その二

「所詮はそれまでだ。俺が相手をするまでもない者ということだ」
「ではリゲル様はここで休まれていて下さい」
「動かれることはありませんので」
「そうだな」
少し眉を動かしたが彼等の言葉に頷いてみせたのであった。７０
「では俺はここにいさせてもらう」
「はい、それで御願いします」
「我等が全て」
「しかしだ」
ここでリゲルは言葉を鋭くさせて。彼等に告げてきた。
「若し貴様等に何かあれば」
「その時は、ですか」
「動かれるのですか」
「狂闘士は同胞が倒されたならば」
その同胞が他ならぬ目の前に集う彼等ということである。
「その仇を何処までも追い詰めそのうえで倒す」
「ですから我等も」
「インプ達の仇を」
「それは俺も同じだ」
また告げてみせるのだった。
「このリゲルもだ」
「では我々に何かあれば」
「その時は、ですか」
「だから安心して行くのだ」
そしてここでも彼等に対して告げた。
「いいな、それで」
「はい、有り難き御言葉」

「では」
「レオのアイオリアか」
彼の名も言葉に出して呟くのだった。
「先の聖戦、そして前の我等との戦い」
その二つの戦いのことを知っている、そうした今の言葉であった。
その言葉を出しながらアイオリアについて思索を巡らせていくのだった。
「その時に見せた力、再び見せてもらおう」
右手を拳にしそれを見ながらの言葉だった。彼もまた戦いを見据えているのであった。そのうえで今その場に残ることにしたのだ。
九人の狂闘士達が消えようとする。やはりリゲルは彼等を見送るだけである。動こうとせずその背を見ているだけなのだった。
「ではリゲル様」
「行って参ります」
「戦いを楽しむのだ」
今は彼等にこう述べた。
「いいな」
「わかっております」
「聖闘士達との戦いを楽しみ」
「そして」
そのうえで述べる言葉は。
「その血を浴びましょう」
「それで我等の戦衣をさらに赤く染めましょうぞ」
「そうするといい」
リゲルは彼等のそうした言葉を受けてまた述べた。
「それが我等の赤なのだからな」
「はい、赤こそが最も尊い色です」
「アーレス様の色です」
赤はまさに彼等の崇めるその神そのものだというのである。
「ですからその鮮血の赤で」

「我等をより赤く」
「やがて地上はアーレス様のものとなる」
　このことはリゲルも確信しているのだった。それを確信しているということそれ自体がまさに彼がアーレスの僕であることを示していた。
「その際には地上は全てが戦いで支配される世界となる」
「はい、アーレス様の望まれる」
「戦いとそれによる破壊と殺戮、流血に覆われた世界が」
　それこそが彼等の世界であった。アテナの愛するものはそこには何一つとしてない。
「業火と災厄に覆われた世界」
「その世界が実現されます」
「その為にはまず聖闘士だ」
　リゲルの目の光が鋭いものになった。
「あの者達を倒さなければならない」
「では。まずあの者達を生贄としましょう」
「アーレス様への」
「その為にも」
「行くのだ」
　また告げたリゲルだった。

第六十九話　アイオリアの選択その三

「いいな、それではだ」
「はっ、では」
「今より」
こうして彼等は一斉に姿を消した。そのうえで何処かへと向かうのだった。後に残るリゲルは今は一人でその遠くなっていく小宇宙を感じ取っていた。
アイオリア達はそのまま中央部に向かっていた。車は順調に進んでいる。
「悪いな、運転を代わってもらって」
「気にするな」
ダイダロスがダンテに応えていた。今は彼が運転している。
「元々交代で運転する予定だったからな」
「だからか」
「そうだ。それでだ」
ここでダイダロスはさらに言ってきた。
「今のうちによく休んでおくことだ」
「そうだな。敵は何時来るかわからん」
その休まなければならない理由はダンテもわかっていた。
「それではだ。今は」
「休め。いいな」
「そうさせてもらう。しかし」
ここで彼はまた言ってきた。
「アイオリア様も青銅の連中も今は身体を休めているのだな」
「それが妥当だ」
それでいいと返すダイダロスだった。運転をしているのでその顔は正面を見たままである。そこには何処までも続く荒地があった。
「長い旅になっている。それにやはり」

「狂闘士が何時出て来るかわからない」
「それだ」
話がまたそこに至っていた。
「だからこそだ。御前も休め」
「そうさせてもらうか。それでだが」
「どうした？」
「御前はこの聖戦が終わったら聖域を離れるそうだな」
このことを彼に問うたのである。
「確かそうだな」
「その予定だ」
まさにその通りだと返すダイダロスだった。
「アンドロメタの聖衣がある場所に行くことになっている」
「アンドロメダの聖衣というとだ」
その聖衣のことを聞いたダンテが思い至った様な顔になって述べた。
「アンドロメダ島だったな」
「そうだ、そこだ」
「あの島は確か」
ダンテの顔は今度は怪訝なものになった。
「日中は灼熱地獄、そして夜は極寒の場所だったな」
「その苦しさはデスクイーン島に匹敵する」
「そうだったな。アンドロメダ島かデスクイーン島か」
今度は別の島の名前も出したダンテだった。
「そう言われているな」
「その島に行くことになった」
「そうか。大変だな」
「いや、そうは思わない」
大変かどうかというとそうは思わないというのである。
「それはな」
「いいのか？それだけ過酷な環境の場所に行っても」

「聖闘士はその程度でどうにかなるものではないが」
「それはそうだがな」
それで倒れるようなことがあればそもそも聖闘士になることはできはしない。そういうことであった。
「そうか。覚悟はできているのか」
「そしてだ」
ダイダロスはさらに話していく。
「そこで後進の指導も教皇に告げられた」
「教皇からか」
「そうだ。やがて一人の青銅の少年が現れるという」
このことを話すのだった。
「その若者を育てよということだ」
「青銅か」
「何かあるのか？」
「いや、青銅だというのにだ」
そのことに疑問を抱くダンテだった。実際にその首をいぶかしげに振っている。
「教皇がそこまで気をかけておられるのはだ」
「妙だと思うか」
「確か魔鈴もそんなことを言われていたな」
自身の同僚であるその白銀の女聖闘士のことも話した。
「聖域でペガサスの聖闘士になるべき少年を待てとな」
「それも教皇からの御言葉だったな」
「何かが起こるのか？」
ダンテはまたいぶかしげな声を出した。

第六十九話　アイオリアの選択その四

「だとしたら一体何がだ」
「今以上の聖戦が起こるのだろうか」
「だとすればハーデスか」
かつての最大の聖戦のもう一方の勢力の神である。
「あの神との戦いなのか」
「それならば黄金聖闘士の方々がおられる」
「そうだ、それだ」
ここでダンテはアイオリアをちらりと見た。彼はソファーに腕を組んで目を閉じている。眠っているのは誰が見てもわかるものだった。
青銅の者達はそれぞれのベッドやハンモック、寝袋、ソファーと様々な場所で寝ている。彼等は本当にそれぞれであった。
そのアイオリアを見ながら。ダンテは言うのだった。
「アイオリア様だけではなくな」
「全員おられるのだ」
「確かに先のハーデスとの戦いは熾烈なものだったと聞くが」
「黄金聖闘士の方々が全ておられるのだ」
ダイダロスは運転しながらそのことを言い続けるのだった。
「それで充分ではないのか」
「そうだ。確かに青銅の力も必要だが」
「何故だ？」
「そうだな。何故だ」
彼等はそれぞれ言った。
「青銅の者に対して」
「しかもまだ出て来ていないのにだ」
「そこまで仰るのか」
「それがわからない」

彼等はそについて疑念を抱いた。しかしであった。
「だが。教皇はだ」
「そうだ。決して間違いを犯す方ではない」
彼等のシオンへの忠誠と信頼は絶対のものであった。まさにアテナの代理人として仕えているのである。
「何があろうともだ」
「そうだな。だとするとだ」
「お考えがあってのことだ」
ダイダロスは確かな声で述べた。
「我等が及ぶべくもないまでのな」
「では安心してこのまま進めばいいな」
「私はそう考えている」
ダイダロスは結論も述べた。
「そうな」
「それは俺も同じだ」
そしてそれはダンテもなのだった。
「教皇の仰ることならばだ」
「間違いはないな」
「そうだ」
まさにその通りだというのである。
「ではアンドロメダ島へだ」
「安心して行けというのだな」
「俺も教皇の御言葉に従うだけだ」
彼もまた、というのだった。
「その御言葉があればな」
「それは変わらないのだな」
今のダンテの言葉を聞いて微かに笑ったダイダロスだった。
「聖闘士になった頃からな」
「俺は変わっていないか」
「いい意味でな」

そうだというのである。
「変わっていない。あの頃と同じだ」
「少なくとも忠誠心は忘れていないつもりだ」
ダイダロスのその問いにこう返すダンテであった。
「それはな」
「私も忠誠心は忘れてはいない」
「忘れればそれで聖闘士でなくなる」
こうまで断言したダンテであった。
「それだけでだ」
「その通りだ。そしてダンテ」
「何だ？今度は」
「休むといい」
また彼に休息を勧めてきたのである。
「今のうちにだ。いいな」
「そうだな。そうさせてもらおうか」
ここで同僚の言葉に頷いたのだった。
「今は」
「うむ、ではな」
こうして彼は休息に入った。ソファーに座り込みそのうえで眠りに入る。そして暫くして起きた時には。既に外は夜になっていた。

第六十九話　アイオリアの選択その五

その中でも車は走り続けている。ダンテは目を覚ますとダイダロスに対して問うた。
「今はどの辺りだ？」
「丁度中間点だ」
その辺りだと答えるダイダロスだった。運転はそのまま続けている。
「今はな」
「そうか。その辺りか」
「まだ先だ」
また言うダイダロスだった。
「数日はかかるな」
「わかった。それではだ」
ここまで話を聞いてダンテはここで言ってきた。
「運転を代わろうか」
「あと数時間ある」
しかしダイダロスはこう彼に返すのだった。
「だから今はいい」
「いいのか」
「それよりもよく眠れたか？」
逆に彼から問うのだった。
「休んでいる間。どうなのだ」
「ああ、それはな」
気遣い無用だというダンテだった。
「よく休めた」
「そうか。それならいい」
「しかし運転はまだいいのだな」
「それはいい」

また言うダイダロスだった。
「食事でもしておくことだな」
「そうだな。そうさせてもらうか」
「丁度ソーセージがあったな」
「羊のな」
「それとパンに飲み物だな」
「野菜ジュースがあるな」
車の中の冷蔵庫を開ける。するとそこには実際に野菜ジュースが多量にあった。
「確かアイオリア様が買われているものだったな」
「アイオリア様は健康志向だからな」
「ああ、こうしたものがお好きだな」
「実際に味もいい」
どうやらダイダロスは野菜ジュースが好きなようである。それは今の言葉から窺えるものであった。
「ソーセージは茹でてだ」
「そしてあとは目玉焼きでも作るか」
見れば冷蔵庫の中に卵もあった。
「それで軽くな」
「何処か朝食みたいな献立だな」
「だが量が多ければ立派な夕食だ」
そうなるというダンテであった。
「それでな」
「それもそうか」
「野菜ジュースの他に何か野菜が欲しいな」
「オレンジとキーウィがある」
ダイダロスは運転しながらまた彼に告げた。
「デザートにどうだ」
「そうだな。それでビタミンを採るか」
「そうするといい」

「何かそれだけで充分だな」
ここまで話して満足した顔で調理にかかるダンテだった。周りはまだ寝ている。
そして調理をしながら。ダイダロスに言ってきたのだった。
「それでだ」
「どうした？今度は」
「御前の分も作っておくぞ」
こう彼に告げるのだった。車の端のキッチンでソーセージを茹で目玉焼きを作りながらだ。
「それでいいな」
「済まないな」
「あとアイオリア様達の分も作っておくか」
彼等の分も考えているダンテであった。
「人数分な」
「そうしてくれるか」
「一人で食べるよりは全員で食べた方がいい」
そしてこんなことを言うのだった。

第六十九話　アイオリアの選択その六

「だからな」
「その通りだ。それではだ」
「作るぞ」
こうしてメンバー分作る。丁度彼が作り終えた頃に全員起きるのだった。やはり夜で車の外は真っ暗闇である。車の中も暗い。
「今何時だ」
「十一時です」
ダイダロスが目を覚ましたアイオリアに告げた。
「今丁度なりました」
「そうか、その時間か」
「はい、そうです」
「それで晩飯ですけれど」
「その辺りにあるものを食べるか」
質素なアイオリアはそうしようとした。しかしここでそのダンテが彼に対して言うのであった。
「何言ってるんですか」
「何かとは？」
「今俺が作りましたから」
微笑んで彼に告げるのだった。
「ソーセージと目玉焼きを焼きましたから」
「それか」
「どうですか？それで」
「デザートもありますが」
ダイダロスも言ってきた。
「キーウィとオレンジが」
「俺も分もあるのか」
「勿論ですよ」

その問いにもはっきりと答えるダンテだった。
「それは当然じゃないですか」
「ダンテは人数分作りましたよ」
「そうか、悪いな」
ここまで聞いて感謝している顔で応えるアイオリアだった。
「やっと話が飲み込めてきた」
「起きたてですからね」
「どうしてもそうなりますね」
「済まない。しかしよく寝たな」
右手を顔にやって首を数度小さく横に振ったうえでの今の言葉だった。
「本当にな」
「そうですね。それは」
「よくお休みでした」
「おかげで身体の調子がいい」
こうも言うのだった。
「それでソーセージと目玉焼きにフルーツか」
「それと野菜ジュースです」
「どうでしょうか」
「贅沢だな」
メニューを聞いて微笑んでの言葉だった。
「それはまた」
「贅沢ですかね」
それを言われたダンテは怪訝な顔になった。
「こんなの普通の粗食じゃないんですか？朝の」
「いや、贅沢だ」
しかしアイオリアはあくまでこう言うのだった。
「贅沢だ。ダンテが作ってくれたんだな」
「はい、それは」
その通りである。自分でも言った通りだ。

「そうですけれど」
「それが何か」
「だからだ。贅沢だ」
だからだというのである。アイオリアは。
「誰かが心を込めて作ってくれたものを食べられるというのは贅沢なことだ」
「だからですか」
ダイダロスはここにもアイオリアの心を見たのだった。
「お流石です」
「流石？」
「そうです、流石はアイオリア様です」
運転しながらであったがそれでもこう告げるのであった。

第六十九話　アイオリアの選択その七

「そのお心は」
「俺は別にそんな大層なことは言っていないが」
「そう言えることこそがです」
ダイダロスはあくまでアイオリアに対してこう告げる。
「素晴らしいのです」
「そうなのか」
「そうですよ」
ダンテもここでまた彼に話した。
「凄いですよ、本当に」
「ああ、済まない」
ここでそのソーセージと目玉焼きを出してきた。ソーセージの量は多く目玉焼きも見れば何個も同時に焼いている。ボリュームは如何にもオーストラリア風であった。
そこに野菜ジュースとパン、それでデザートが付く。ボリュームは相当なものであった。
アイオリアはそういったものを食べながら。満足した声で言った。
「美味いな」
「有り難うございます」
「本当に贅沢だ」
そしてまた言うのであった。
「ダンテの心が食べられるのだからな」
「有り難き御言葉」
「それでだが」
彼はここでさらに言うのだった。
「一つ聞きたいことがあるのだが」
「何でしょうか、それは」
「御前達や青銅の者達も分もあるのだな」

問うてきたのはこのことであった。
「それはどうなのだ？」
「はい、あります」
その問いにすぐに答えたダンテだった。
「御安心下さい」
「そうか。では青銅の者達も起こすか」
「そうですね。いい時間ですし」
「それでは」
アイオリアのその言葉に頷きダンテが四人を起こした。そうしてそのうえで彼等に対してもその贅沢な食事を食べさせるのであった。
「ああ、朝飯か」
「何か美味そうだな」
「いや、晩飯だ」
アイオリアは起きたての彼等に微笑んで告げた。
「そして美味いのは事実だ」
「そうなんですか。美味いんですか」
「それじゃあ」
「贅沢な食事だ」
彼等にもこう話すアイオリアだった。
「皆喜んで食べるといい。心がこもった食事だからな」
「心ですか！？」
「っていうと誰の心が」
「食べればわかる」
今はそれは話さないアイオリアだった。
「食べればだ」
「そうですか、じゃあ」
「頂きます」
「しかし。贅沢とはそういうことなんですね」
ダンテはあらためてアイオリアに問うた。椅子を持って来てそのうえで彼の向かい側に座ってそのうえで彼に対して声をかけたので

ある。
「心ですか」
「どれだけ高い食材や立派な料理人が作ったとしても」
アイオリアは彼に応えてまた言うのだった。今度はパンを食べている。
「そこに心がなければだ」
「何にもなりませんか」
「そうだ」
まさにそうだというのである。
「俺はそう考えている」
「成程」
「そういうことですか」
「だからこれは贅沢だ」
何度もこう言ってみせるのだった。
「極めてだ」
「贅沢ってそういうものなんですね」
「金をかけるとかじゃなくて」
「金でできることには限度がある」
既に金というものの限界も見ているのだった。
「しかしだ。人にできることはだ」
「無限」
「そうなのですね」
「そういうことだ。それではだ」
ここでまた言う。その言葉は。
「皆で楽しもう」
「はい、この贅沢を」
「皆で」
運転しているダイダロスも車を止めるように言われるのだった。
「皆でゆっくり食べよう」
「宜しいのですね、それで」

「この食事は運転しながらだと無理だ」
微笑んで彼に告げるアイオリアだった。
「だから。車を止めてだ」
「はい、それでは」
こうしてであった。彼もまた運転を止めてそのうえで一同で食事を採るのだった。それは確かに贅沢な御馳走であった。アイオリアの言う通り。

第六十九話　　完

２００９・１１・１４

第七十話　先手その一

先手

アイオリア達は車で先を進み続けている。今は実に穏やかであった。

「まあそのうちですね」

「来るでしょうね」

青銅の者達がくつろぎながらアイオリアに声をかけていた。

「あの連中も」

「またわんさと来て」

「インプ達が来るというのだな」

アイオリアはその彼等に対して言葉を返した。

「あの者達が」

「はい、また」

「来るんじゃないですかね」

そうだと返す彼等だった。

「何時来てもおかしくないですよ」

「奴等のことですから」

「何時来てもおかしくないのは間違いない」

それについてはアイオリアも否定しなかった。

「それはだ。だが」

「だが？」

「何かあるんですか？」

「出て来るのはインプ達だけとは限らない」

こう言うのだった。

「彼等だけとはだ」

「っていいますと」

「他に誰かがですか」

「来るっていうんですね」

「というと」
それを聞いてだった。彼等はいぶかしむ顔になってそれでまた言うのだった。
「誰が出て来るんですかね、それだと」
「雑兵じゃないっていうと」
「あれですか」
「そうだ、あの者達だ」
アイオリアの声がより確かなものになった。
「出て来てもおかしくはない」
「そうですか、奴等がですか」
「出て来てもですね」
「これまでの戦いもそうだった」
また言うアイオリアだった。
「それならばだ。何時出て来てもだ」
「言われてみれば確かに」
「それもまた」
青銅の者達もまた真剣な顔になってきていた。
「充分に有り得ますね」
「その通りですね」
「そうだ。誰が出て来てもだ」
アイオリアの言葉は続く。
「いいように心構えはしておくべきだ」
「そういうことですね」
今はダンテが運転している。従ってダイダロスがアイオリアの側にいてそのうえで彼の今の言葉に対して頷いてみせたのだった。
「魔神達を司る狂闘士達が出て来てもおかしくはありません」
「特に八大公の一人」
アイオリアは言った。
「アスモデウスもだな」
「その力は星の力だとか」

ダイダロスはそのサリアの力について述べた。
「元々アスモデウスはその身体を流星に変えることのできる魔神でした」
「流星にか」
「そうです。それにより天から地上を移動していたのです」
ダイダロスはこのことを知っているのだった。
「だからこそあの男もまた」
「星の力を操ることができるのだな」
「そういうことです」
まさにそうだと述べるのであった。
「ですから。御用心下さい」
「わかった」
彼の今の言葉に強く頷くアイオリアだった。
「それではだ。あの男と対する時はだ」
「えっ、アイオリア様がですか」
「アスモデウスの相手をされるんですか」
「俺以外にはいないだろう」
アイオリアは言った。

第七十話　先手その二

「あの男の相手となるとな」
「ですね」
運転しながらダンテが応えてきた。
「八大公の相手となると」
「そうだ。八大公の相手は黄金聖闘士しかいない」
アイオリアの言葉もさらに強いものになった。
「光の動きを持ちセブンセンシズを持っているのだからな」
「ということはつまり」
「八大公は黄金聖闘士と同等の力ってことですか」
「そんなに強いんですか」
青銅の者達はそれぞれ真剣な顔になって述べた。
「じゃあ俺達にはですか」
「あいつの相手は」
「止めておくべきだ」
それを止めたのはダイダロスだった。
「絶対にだ。さもなければ死ぬことになる」
「その通りだ」
今度はダンテも彼等に言ってきた。
「御前達はお前たちのできることをやるのだ」
「俺達のですか」
「やれることを」
「さもないと倒れることになる」
ダイダロスの言葉はこれまでになく厳しいものになった。
「それはわかっておくことだ」
「間違っても八大公にはか」
「向かうなってことか」
「他の狂闘士達にもだ」

ダイダロスは八大公達だけではないとも言うのであった。
「その者達についてもだ」
「実力を見誤らず」
「戦えか」
「無論恐れてはならない」
ダイダロスはこうも言った。
「恐れるということはだ」
「ああ、それはな」
「ないさ」
こう返す彼等だった。今度の言葉はこれまでになくはっきりしていた。
「俺達だって聖闘士だからな」
「それは絶対にな」
「それを聞いて安心した」
ダンテは運転しながらまた彼等に告げた。
「恐れては戦うことはできない」
「だからな」
「それはな」
「恐れを知ることもな」
ダンテはこうも言った。
「それも大事だ」
「えっ、恐れをって」
「どういうことなんだ？」
「つまりだ。あれだ」
ここで彼は青銅の者達に話した。
「恐れを知ってこそ恐れなくなるのだ」
「恐れを知ってこそって」
「そういえば修業時代に言われたな」
「そうだよな」
彼等もその修業時代にそれぞれの師匠達等から言われたことを思

い出すのだった。
「そういうのよくな」
「ああ、言われたよ」
「恐れを知れってね」
「恐れを知るからこそ恐れなくなる」
ダイダロスも言った。
「それが我等聖闘士なのだ」
「何か狂闘士の奴等は恐れを知らないらしいが」
「あれは一体」
「それがあの者達なのだ」
ダンテがまた言ってきた。
「そして狂った様に死ぬまで戦う」
「だから狂闘士ってわけだな」
「それでか」
「アーレスは恐れを知らない神だ」
ダイダロスの言葉である。

第七十話　先手その三

「その神に仕える彼等もだ」
「恐れを知らないってか」
「そうなるんだな」
「しかし聖闘士は違う」
ダイダロスの言葉は深く、そしてしなやかな強さを帯びたものになっていた。柔らかな強さと言うべきか。そうした強さを含んだ言葉だった。
「まずは恐れを知る」
「それからか」
「そこからはじまるってわけか」
「恐れを知りその恐れを克服する」
それこそが聖闘士だというのである。
「そういうことなのだ」
「成程な」
「そうだったんだか」
「だから俺達はか」
ここまで聞いて青銅の者達も納得して頷いた。
「恐れを知らないといけないのか」
「そしてそれを克服して」
「本当の強さってわけだな」
「その通りだな」
それまでただ話を聞いているだけだったアイオリアがここで口を開いた。
「我等聖闘士は恐れを知りその恐れを克服する」
「そうして本当に強くなっていくんですね」
「それから」
「そうだ。それが真の強さを得る最初の一歩だ」

まさにそれだというのである。
「聖闘士としてな」
「じゃあアイオリア様も」
「恐れは」
「当然知っている」
答えるまでもないといった様子であった。
「それもな」
「そうですよね、やっぱり」
「恐れもまた」
「しかしそれを克服した」
これもまた聖闘士ならば当然の流れであった。
「そして今がある」
「じゃあ俺も」
「ああ、俺もだ」
「恐れを忘れずにだな」
「まずはな」
青銅の者達は明るい笑顔になりそのうえで言い合った。
「奴等と戦うか」
「見極めも忘れないでな」
戦士として確かなものも得られる話であった。彼等にとっては今も無駄な時間ではなかった。
それから暫くしてであった。アイオリアがまた察したのであった。
「また来るな」
「わかりました、じゃあ」
「すぐに出ましょう」
「全員聖衣の用意だ」
アイオリアはすぐに全員に告げた。
「そして車の外に出るぞ」
「はい、では」
「今から」

こうして車が止められ全員聖衣を身にまとって出陣した。ここでもアイオリアが先頭になっている。やがてその彼等の前にその者達が姿を現わしたのだった。
「そうか、もう気付いたか」
「相変わらず察しがいい」
「これが黄金聖闘士の力ということか」
「力は確かに使っている」
アイオリアもそれは否定しない。
「それにより察しもした」
「我等の小宇宙を察した」
「そうだな」
「如何にも」
まさにその通りだというのである。
「それではだ。聞こう」
「何をだ?」
「何を我等に聞くのだ?」
彼等はアイオリアの言葉を受けて返してみせたのだった。

第七十話　先手その四

「話によっては答えてもいいが」
「何をだ？」
「九人だけか」
アイオリアが問うたのはこのことだった。
「貴様等九人だけで来たのか」
「インプ達も呼べば来るが」
「それがどうかしたのか？」
「聞きたいことはそれだけか？」
「あの男はいないのだな」
アイオリアは彼等に対してさらに問うた。
「アスモデウスは」
「リゲル様は後ろにおられる」
「ここにはおられぬ」
こう答える彼等であった。
「残念だったか？」
「我等が相手で」
「別にそうは言っていない」
アイオリアの返答は至って落ち着いたものだった。
「特にな」
「そうか。ならばいい」
「我等が相手でいいというのならな」
「それではだ」
アイオリアはまた彼等に問うた。
「貴様等は何者だ」
「ふふふ、我等がか」
「何者だというのだな」
「そういえば狂闘士達は四つの軍団に分かれていた」

ダイダロスはこのことを指摘した。
「火、炎、災難、恐怖だったな」
「如何にも」
「それがどうかしたのか？」
「そしてそれぞれの軍団に所属していたな」
ダイダロスの言葉は続く。
「アスモデウスは火の軍団を率いていた筈」
「ベールと共にだったな」
ダンテも言った。するとだった。
「その通りだ。我等は火の軍団の者だ」
「それに属している」
彼等もそのことを認めてみせたのだった。
「その通りだ」
「では名乗ろうか」
「では名乗るがいい」
アイオリアが彼等に対して応えた。
「今からな」
「ではだ」
こうして彼等は名乗りはじめた。まずは。
赤い燃える様な髪の男だった。
「公爵、アロケンのザカリア」
「公爵、キメリエスのリシュエル」
青い長い髪と目の男である。
「侯爵、オリアスのハガル」
大柄の金髪の男である。
「子爵、オロバスのエゼキエル」
黒い髪と目の中背の流麗な男だ。
「子爵、ゴモリーのエンテ」
赤髪と黒い目の美女だ。
「男爵、サレオスのカムイ」

水色の髪と目をした男である。
「男爵、ヴェパールのクレア」
白い髪に灰色の目の少女だ。
「公子、エリゴスのレネ」
銀色の髪と黒い目の小柄な少女である。
「公子、ウコバチのザール」
黒い髪と目の少年だ。
「我等火の軍団の九人がだ」
「相手をしよう」
「わかった」
アイオリアが彼等の名乗りを受けたうえで言葉を返した。

第七十話　先手その五

「ではだ。相手をしよう」
「レオ、貴様がか」
「貴様が我等の相手をするというのか」
「不服か」
こう彼等に問い返してきた。
「それは」
「いや、それならばだ」
「喜んで受けよう」
彼等とてそれを拒むつもりはなかった。
「黄金聖闘士の一人である貴様は何があっても倒すつもりだった」
「ならばだ」
彼等もそれぞれ前に出た。明らかに戦うつもりであった。
「その申し出受けよう」
「他の者はどうするのだ？」
「当たり前だろ」
「俺達だってな」
青銅の者達がまず前に出た。
「やらせてもらうからな」
「御前等全員倒してやるぜ」
「その通りだ」
「我等も容赦はしない」
ダンテとダイダロスも前に出た。
「覚悟はいいな」
「戦わせてもらうぞ」
「いや、それはいい」
ところがだった。アイオリアが彼等に対して告げてきたのだった。
「御前達は見ておいてくれ」

「えっ、アイオリア様」
「まさか御一人で」
「そうだ、ここは俺に任せてくれ」
実際にこう告げるのだった。
「このアイオリアにだ」
「そのつもりだったのですね」
ダイダロスはその彼の言葉を受けて述べた。
「最初から」
「そうだ。ここはこのアイオリアが一人で戦う」
実際に述べたのだった。
「この者達とな」
「わかりました」
その言葉を受けてそのうえで静かに言葉を返すだけのダイダロスだった。
「それではそうされて下さい」
「だよな、アイオリア様がそう仰るのならな」
「俺達もな。それでな」
「いいか」
「ああ」
青銅の者達もそれで納得するのだった。
「じゃあアイオリア様、それで」
「頑張って下さいね」
「うむ、そうさせてもらう」
アイオリアも彼等の温かい言葉に応える。
「ここはな」
「アイオリア様ならば」
ダンテも言うのだった。
「間違いはないからこそ」
「済まない」
彼等の心を受けての言葉だった。

それがアイオリアをさらに前に出させた。そしてそれは狂闘士達も見ていた。

確かにアイオリアは一人である。しかしその彼を見ながらザカリアは他の狂闘士達に告げた。

「いいか」

「はい」

「わかっています」

「レオはただ強いだけではない」

彼等も既にそれを見抜いているのだった。

「その心もだな」

「そうですね、あれだけ信頼されているということは」

「かなりのものです」

「まさに獅子だ」

ザカリアは彼をこう評した。

「その称号に相応しい」

「確かに」

「強さだけでなく」

「レオよ」

ザカリアはあらためてアイオリアに対して告げた。

「では行くぞ、若き獅子よ」

「いいだろう。来い」

アイオリアはその黄金色の小宇宙を今これ以上はないまでに高めていた。その中でその誇り高き目を彼等に向けているのであった。

そうして再び。彼等に対して告げた。

「このレオのアイオリア」

「むっ！？」

「何だというのだ？」

「一切手は抜かない」

そうするというのであった。

「全力で以って戦おう」

「我等とか」
「今ここで」
「そうだ。それを今告げよう」
「いいだろう。それでは」
「我等もだ」
彼等もその言葉に応えて身構える。それと共に彼等もまた凄まじい小宇宙をみなぎらせる。それは赤く禍々しいものであった。
「貴様に対して全力を尽くす」
「倒す為にだ」
彼等もまたアイオリアと激突せんとしていた。獅子と魔神達の戦いがはじまろうとしていた。それはまさに戦士達の戦いであった。

第七十話　　完

２００９・１１・１７

第七十一話　せめぎ合う小宇宙その一

せめぎ合う小宇宙

「いよいよだな」
「ああ」
「そうだな」
青銅の者達がそれぞれ言い合う。話をしながらアイオリアと狂闘士達の戦いがはじまるのを固唾を飲んで見守っていた。彼等もまた緊張していた。
「アイオリア様と狂闘士達の戦いが」
「しかもだ。あれは」
その狂闘士達も見るのだった。その彼等は。
「魔神だからな」
「そうだな」
「七十二柱の魔神達だ」
それが何なのか彼等も知っていた。その魔神達が何なのか。
「戦皇アーレスに仕える魔神達」
「それだからな」
「その強さは尋常じゃないらしいな」
彼等は話を続ける。
「アーレスの軍勢の主戦力だからな」
「八大公の下で戦う奴等がな」
「その力は」
かなりのものであるのは。やはり言うまでもなかった。
「それこそこの世を支配するまでのものがある」
「そして」
彼等は口々に言い合う。そのうえで様子を見守っていた。
そして白銀の二人もだった。彼等も見ていた。
「ダイダロス」

「うむ」
ダイダロスは横にいるダンテの言葉に頷く。二人共真剣そのものの顔で戦いを見守っていた。今まさに本格的にはじまろうというその戦いをだ。
「アイオリア様の小宇宙がかなり高まっている」
「そうだな。かなりのものだ」
「そしてだ」
アイオリアだけを見ているのではなかった。彼等もだった。
「狂闘士達もだ」
「九人のそれぞれの小宇宙もまた」
「相当なものだな」
ダイダロスもそれを見ていたのだ。
「どちらが勝つか」
「どうなるかだな」
彼等もまた戦いの成り行きを注視していた。そうしてだった。遂に彼等が動いたのだった。
「行くぞレオ！」
「この拳受けてみよ！」
「喰らえ！」
それぞれ左右、そして上から一斉に彼等に襲い掛かる。一気に青いリアを倒そうとする。
「この拳ならば！」
「どうだ！」
「来たか」
アイオリアはその場から動かない。一歩も動かずそのうえで迫る拳を見ていた。
九人の拳が殺到する。すると。
拳は全てアイオリアの身体をすり抜けた。透明になったかの如きであった。
「何っ、拳が！？」

「我等の拳が全て」
彼等はそれを見て我が目を疑った。何とそれを全てかわしたのである。
九人の攻撃を全てかわされた。そのアイオリアは平然としていた。
そして言うのだった。
「我等の攻撃を全てかわしたというのか」
「まさか」
「そうだ。まさかだ」
アイオリアはここでまた彼等に告げた。
「黄金聖闘士が光の動きを持っているのは知っているな」
「くっ、それでか」
「その動きで全てかわしてみせたというのだな」
「貴様等の攻撃は確かに凄いものがある」
アイオリアもそれは認めた。
「しかしだ」
「くっ、それ以上だというのか」
「貴様の動きは」
「言った筈だ、光だ」
またそのことを言うのだった。
「その光の動きに迫るものでなければだ」
「そうか」
それを聞いてまず応えたのはザカリアだった。

第七十一話　せめぎ合う小宇宙その二

「ならばだ」
「何をする気だ、今度は」
「拳が効かなければ技だ」
目が鋭くなった。
「このザカリアの技を出そう」
「私も」
「俺もだ」
他の者達もそれに続くのだった。今まさにそれを出そうとする。
そしてアイオリアも。今ここで己の技を出そうとするのだった。
まさに決戦の時が迫ろうとしていた。
だがここで。その場に新たな男が出て来たのだった。
「待て」
「むっ！？」
「貴様は」
まず聖闘士達がその男を見た。
「まさか貴様が八大公の一人」
「アスモデウスのリゲルだな」
「如何にも」
まさにその通りだというのだった。リゲルは丁度アイオリアと狂闘士達の間に立っていた。そのうえで聖闘士達の声に応えたのである。
「その通りだ」
「八大公が出て来たか」
「ここで戦いをするつもりか！？」
「それなら」
「いや、残念だがそれは違う」
リゲルはそれを否定するのだった。冷静な顔で。

「俺はここでは貴様等とは戦わない」
「では何処でだ」
「我等のいる場所に来るのだ」
こうアイオリアに告げるのだった。
「そこで待っている」
「ここではないのか」
「そうだ。ここではない」
また言うリゲルだった。
「事情が変わった。そこで戦うとしよう」
「何故ですか、リゲル様」
「それは」
狂闘士達も彼のその言葉に応えて彼に問うた。
「ここで下がるとは」
「どういった事情が」
「それはだ」
「私が言おう」
ここで出て来たのはだった。彼女だった。
「貴様は」
「そうだ、レオよ」
エリスであった。彼女がその整っているが凄惨な微笑を浮かべたその顔でアイオリアに対して応えたのである。
「このエリスがそれについて話そう」
「エリス様」
「ここに来られたのですか」
狂闘士達も彼女の姿を見て言う。
「何故ここに」
「いや、今のエリス様は実体ではない」
「となると」
「その通りだ。意識だけを飛ばしているのだ」
そうして出て来ているというのである。見ればその姿はやや透き

通っている。それが今の彼女が実体ではない何よりの証である。
「そうしているのだ」
「では何故だ」
アイオリアがその出て来たエリスに対して問うた。
「貴様がここで出て来たのは」
「戦いを止める為だ」
「そうだ」
リゲルもここで言うのだった。
「その通りだ」
「何故ですか、戦いを止められるとは」
「それはどういうことですか？」
「ここで御前達が戦ってはならないのだ」
こう狂闘士達に対しても告げるのだった。
「ここではだ」
「！？それは何故」
「どうしてでしょうか」
「アーレス様の為だ」
だからだというのである。
「だからだ」
「アーレス様の為ですか」
「その為に」
「わかったな。だからここでは戦ってはならぬ」
あらためて彼等に言うのだった。

第七十一話　せめぎ合う小宇宙その三

「わかったな」
「アーレス様の為ですか」
「その為に」
「これでわかったであろう」
エリスの笑みが彼等にかけられた。
「それではだ。わかったな」
「はい、わかりました」
「それでは」
彼等もアーレスの名前を聞くとすぐに応えた。流石にアーレスの名前を聞くと絶対の忠誠を見せる彼等だった。やはり狂闘士達であった。
「ではこれで」
「レオよ、また会おう」
「然るべき場所で待っている」
それぞれアイオリアに対して告げる。
「そこで貴様と闘うことになるかも知れぬな」
「貴様とか」
「そうだ」
リゲルがアイオリアに対して言っていた。
「その時にだ。また会おう」
「そうだな。その時にこそだ」
「このリゲルの力見せてやろう」
アイオリアを見据えながら赤く激しい小宇宙をその身にみなぎらせていた。
「星の力を」
「ではこのアイオリアもまた」
彼もまたその激しい小宇宙を相手に見せる。

「見せよう」
「ではだ」
こうして彼等は一旦去った。後に残ったのは聖闘士達だけであった。その中でアイオリアが他の者達に対して声をかけるのだった。
「とりあえず戦いは終わったな」
「はい、これで」
「思いも寄らぬ形でしたが」
ダンテとダイダロスが彼に対して応える。
「しかしそれでもです」
「戦いが終わったわけではありません」
先になっただけであるのだ。それはよくわかっていたのである。
「先に行きましょう」
「そこであの者達と」
「そうだな。しかしだ」
ここでまた言うアイオリアだった。
「あの者達との戦いはせずに終わったが」
「？となると」
「まだ何かあるのですか？」
「ある、インプ達が来る」
こう言ったのだった。
「あの者達がだ」
「ああ、雑兵ですか」
「それでしたらですね」
青銅の者達がここで出て来たのだった。
「俺達にやらせて下さい」
「露払いってことで」
「いや、そうもいかないようだ」
だがアイオリアがここで彼等に告げたのだった。
「奴等が狙っているのはこのアイオリアだ」
「げっ、御指名ですか」

「よりによって」
「そうだ。見るのだ」
「いたかレオ！」
「リゲル様達は去られたが我等がいる！」
そのインプ達が出て来たのだった。
「先日の同志達の仇だ！」
「ここで取ってやろう！」
「ちっ、俺達じゃねえってのかよ」
「また随分と無視してくれるな」
「何なんだよ、そりゃ」
青銅の四人はあくまでアイオリアだけを見ているインプ達に対して不平の声を出した。
「俺達もいるってのによ」
「随分なこったな」
彼等はかなり不満であった。しかし無視されたままであった。

第七十一話　せめぎ合う小宇宙その四

「まあ仕方がない」
「奴等がアイオリア様を指名するのならな」
ダンテとダイダロスがその彼等に告げた。
「ここは見守ろう」
「いいな」
「とりあえずわかったよ」
「何か凄い不満だけれどな」
「一応な」
納得はした。こうして彼等はアイオリアの戦いを見守るのだった。
その戦いが今まさにはじまろうとしていたのであった。
「死ね！」
「容赦はしない！」
その三叉の槍を手に一斉に突き進む彼等だった。だがアイオリアはここで。
「来たか」
「！？アイオリア様」
「今度は何を」
「それではだ。受けてみるのだ」
言いながら構えを取る。そうしてだった。
「ライトニングプラズマ！」
右手が輝き無数の拳が一直線に繰り出される。それでインプ達を吹き飛ばしてしまった。
「なっ、あの拳は！」
「ライトニングボルトとはまた違う」
「あの拳は一体」
青銅の者達はアイオリアの今の拳を見て驚きの声をあげた。
「アイオリア様の拳は一つだけではない」

「そういうことだ」
それだというダイダロスとダンテだった。
「今はそれを出したのだ」
「それでだ」
「何かライトニングプラズマとまた違って」
「ああ、えげつない威力だな」
「インプの連中が一撃で全員消し飛んだぞ」
その通りだった。ライトニングプラズマの一撃で全員吹き飛ばされたのである。その威力はまさに超絶的なものだった。
「うう、レオ・・・・・・」
「何という恐ろしい男だ・・・・・・」
インプ達は今その中で倒れていく。それで終わりであった。
こうして再び敗れたインプ達だった。アイオリア達はまた敵を倒したのであった。
そのうえで車に戻ろうとする。ここでアイオリアは言うのだった。
「それではだ」
「はい？」
「何でしょうか」
「中央に向かおう」
こう他の者達に言ってきたのだった。
「いいな、今からだ」
「は、はい」
「それでは」
その言葉に頷く彼等だった。
「車に戻りそれで」
「向かいましょう」
「そうするとしよう。それではな」
こうしてまた車に乗り込み進みはじめる彼等だった。とりあえずはまた旅に戻った。
そうしてであった。ここでまたダイダロスが言うのだった。彼等

は既に聖衣を脱いでいる。そのうえでアイオリア達に対して話すのであった。
「やはり中央部での決戦になりますが」
「そうだな」
アイオリアはくつろいだ中で彼の言葉を聞いていた。
「そうなるな、間違いなく」
「オーストラリア中央部はです」
彼はその戦場について話をした。
「かなり独特の場所であります」
「独特か」
「見渡す限りの砂漠です」
そうなっているというのである。
「そして」
「そして？」
「それだけではありません」
話をさらに続けてきた。
「北に湖があります」
「湖がか」
「そうです、それがあります」
このことを強く言う彼だった。
「彼等から見て我々が来る東は開けていまして」
「うむ」
「南も同じで」
ここでは正反対となる方角の西は議論されなかった。

第七十一話　せめぎ合う小宇宙その五

「そして北には湖です」
「それがあるというのだな」
「地形はそうなっています」
こう話すのだった。
「それでどうされますか」
「つまりだ」
話を聞いたアイオリアゆっくりと述べてきた。
「北の湖を上手く使うのか」
「そうです」
まさにそれであった。
「無論です。ただ湖から攻めるのはです」
「それはなあ」
「意味ないよな」
青銅の者達が今の彼の提案にそれぞれ言い合った。表情は怪訝なものである。
「向こうも馬鹿じゃないしな」
「そんなの予想してるし」
「それにな」
口々に言い合うのだった。
「小宇宙で奇襲とか察知されるよな」
「相手にはアスモデウスがいるからな」
「そうだ、あの男がいる」
アイオリアの声が強いものになっていた。
「あの男を騙すことはできない」
「その通りです」
そしてこれはダイダロスもわかっていることだった。
「ですから奇襲は考えていません」

「そうか。やはりな」
「ただ。湖の方から攻めるべきです」
それでもダイダロスはこう提案するのだった。
「湖の方からです」
「何か考えがあるのだな」
「うむ」
その通りだとダンテにも返す。今はダンテが運転していた。
「あの魔神達は流石に影響を受けない」
「あの者達はだな」
「しかしだ。インプ達は違う」
彼等を見ての言葉だった。
「彼等はだ。違う」
「あの連中は水に弱いのか」
「そうだ。アーレスは火も司っている」
そのアーレスのことだった。彼等の神の。
「それだけに水には弱い」
「そうなるか」
「だからこそだ」
また言うダイダロスだった。
「ここは湖から行く」
「そうするというのだな」
「そうだ。これでどうだ」
「いいな」
ダンテはそれでいいとした。
「正直魔神を司る連中はどうにもならないのはあれだが」
「それはいい」
ここで言ったのはアイオリアだった。
「あの者達はこのアイオリアが相手をする」
「左様ですか」
「わかりました」

白銀の者達はアイオリアのその言葉を受けるのだった。
「それではその様に」
「御願いします」
「うむ、それではだ」
彼もまたそれで頷くのだった。そして青銅の者達はというと。
「じゃあ俺達はインプをやらせてもらいます」
「そういうことで」
「わかった」
アイオリアもそれをよしとした。
「それではそちらを頼んだ」
「御任せ下さい」
「存分にやらせてもらいますんで」
そのアイオリアに笑顔で返す彼等だった。

第七十一話　せめぎ合う小宇宙その六

「じゃあそういうことで」
「やらせてもらいます」
こう返す彼等だった。
「それじゃあ今は」
「休みますか」
「そうだな」
また彼等の言葉に頷いたアイオリアだった。そうしてダンテにも言ってきたのだ。
「休め」
「ですが運転は」
「いい。このアイオリアが動かす」
こう言うのである。
「だから休むのだ」
「えっ、動かすって」
「アイオリア様運転できるんですか？」
「そりゃその可能性も考えられますけれど」
「運転はできる」
それはできるというのだった。
「しかしだ。運転はしない」
「しないってことは」
「けれど動かすんですよね」
青銅の者達はそれを聞いても首を傾げさせるばかりだった。
「それってつまりは」
「どういうことですか？」
「黄金聖闘士はそれぞれセブンセンシズを持っている」
これはもう言うまでもないことだった。誰でも知っていることである。

「それによって様々な力も備えている」
「ああ、超能力ですね」
「俗に言うそれですね」
「そうだ、それだ」
まさにそれだというのだった。
「それで動かすから安心するのだ」
「そんなこともできるんですか」
「黄金聖闘士は」
「実は今までは言っていなかった」
このことは、というのである。
「それは済まない」
「いえ、それはいいのですが」
「それにしても超能力で車を動かすとは」
ダンテとダイダロスはこのことにかなり驚いているのだった。そしてそれは当然のことであった。
「何ということか」
「やはりそれが黄金聖闘士なのですね」
「俺の超能力はたかが知れたものだ」
ここでこんなことも言うアイオリアだった。
「しかしムウやシャカは違う」
「あの方々はですか」
「違うのですね」
「そうだ、俺とは比較にならないまでの超能力を使うのだ」
「そうですね。御二人は」
「かなりのものかと」
「そうだ。このアイオリアのそうした力はほんの児戯だ」
まさにその程度だというのである。
「あの二人のそれに比べたらな」
「ムウ様とシャカ様はそれだけのお力があるのですね」
「そこまでなのですか」

「そうだ。そしてだ」
アイオリアの言葉はここで強いものになった。何処か警戒を促すものであった。
「あの二人の力は尋常なものではない」
「尋常なものですか」
「そこまでの力が」
「俺もまだ出会って間もないがな」
それは間もないというのである。だがそれでもわかることがわかるというのである。
「それはな」
「おわかりになられるのですか」
「それも」
「それを言っておく」
アイオリアの言葉はここでも真剣なものだった。
「特にシャカはだ」
「シャカ様ですか」
「とりわけ」
「あの男の小宇宙は相当なものだ」
このことを六人に話す。既にダンテもアイオリアの言葉に従い運転席を離れている。そうしてそのうえで彼の話を聞いているのである。

第七十一話　せめぎ合う小宇宙その七

アイオリアが動かしている車はそのまま順調に動いていた。それは誰かが運転している時と全く変わらない程に見事に動いていた。
「目を閉じているな」
「はい、普段は」
「けれどシャカ様って」
「あれですよね」
ここで青銅の者達が言ってきた。
「目が見えるんですよね、確か」
「そうですよね」
「五感は健在って聞いてますけれど」
「そうだ、見えるのだ」
これは確かだというのである。
「見える。間違いなくな」
「では何故ですか？」
「いつも目を閉じているのは」
「それはどうしてなのですか？」
「どうやらだが」
あまり確証がないというまま述べるアイオリアだった。
「小宇宙を高めているらしい」
「小宇宙をですか」
「その為にだと」
「瞑想だ」
今度はこれを話に出して来たアイオリアだった。
「それは知っているな」
「ええ、それはまあ」
「あれですよね。インドや日本でよく行われている」
「そうだ。座ったまま目を閉じて沈黙の世界に入る」

まずはこう説明したいアイオリアだった。
「そのうえで己の小宇宙の世界に入る」
「ええ、やったことはありませんが」
「そうした修業があるのは知っています」
「シャカは普段からそれをしている」
こう述べるアイオリアだった。
「その効果があるものなのだ」
「では目を閉じることによってですか」
「小宇宙を高めると」
「そうしているというのですね」
「その通りだ」
まさにその通りだというのである。
「それをしているのだ」
「そうですか。それでなのですか」
「シャカ様はいつも目を閉じていると」
青銅の者達はそれでわかったのだった。白銀の者達は黙って聞いている。
「ではその蓄積された小宇宙は」
「かなりのものですか」
「シャカは目を閉じているが見えているのだ」
アイオリアはまたシャカについて述べた。
「そのセブンセンシズによってだ。目を閉じていても全てが見えているのだ」
「何と」
「そうしたこともできているとは」
「シャカ様、恐るべきですね」
「そしてその蓄積された小宇宙は」
アイオリアの言葉は続く。
「何時どうして使うのかは俺も知らない」
「御存知ありませんか」

「それは」
「しかし。何かに使うのは間違いない」
それは、というのだった。
「その小宇宙をだ」
「何かおっかないですね」
「そうですよね」
青銅の者達はあらためてこのことを言い合った。
「何ていうか」
「シャカ様って何も言いませんけれど」
「だがあの男は誰もが一目置いている」
アイオリアの言葉は真剣なままだった。それもこれまで以上にであった。
「黄金聖闘士だけでなく教皇もだ」
「教皇もなのですか」
「あの方には」
「黄金聖闘士の中でも特別の存在だと言っていい」
これもまた黄金聖闘士ならば誰もが知っていることだった。
「その真の力が発揮される時」
「その時は」
「どうなるかですか」
「わからない。だが」
アイオリアは言った。
「シャカの目が開いたその時はだ」
言葉を続ける。
「恐ろしいことになるのは間違いない」
「バルゴのシャカ、ですか」
「そこまでの御力が」
ここで白銀の者達が口を開いたのだった。ようやくであった。
「味方であってよかったです」
「そこまでの方が味方で」

「その通りだ。敵であったならば恐ろしいことになっていた」
「それがシャカ様ですね」
「あの方ですね」
「この聖戦で出ることはあるか」
アイオリアはこのことも考えるのだった。
「若しあればその時は」
「聖域にとって真に苦難の時」
「そうなのですね」
「そうだと思う。そしてあの目が開かれた時だ」
その時のことを考えずにはいられなかった。
「何かが起こる」
「わかりました」
「それは」
あらためてアイオリアの言葉に頷く。そのうえで彼が動かすその車で先に進むのだった。中央部のその狂闘士達が待っている場所にである。

第七十一話　完

２００９・１１・２１

第七十二話　来たるべき戦いその一

来たるべき戦い

狂闘士達はその場所に戻った。本来彼等がいるべきその場所にである。

「ではリゲル様」

「ここで奴等を待つのですね」

「そうだ」

まさにその通りだと周りに集う他の九人の狂闘士達に対して答えるリゲルだった。

「ここで待つ」

「そしてここで」

「奴等を全て」

「一つ言っておく」

ここでまた彼等に告げるリゲルだった。

「我等の敵はだ」

「七人です」

「その全てを」

「違う。一人だ」

しかしであった。彼はこう言うのだった。敵は一人だと。

「我等の敵は一人だ。それはわかっておくのだ」

「一人といいますと」

「やはり」

「そうだ、レオだ」

アイオリアだというのだ。

「レオだ。ただ一人だ」

「黄金聖闘士ですか」

「それがですか」

「今は一人だ」

ここで言葉が少し変わってきた。
「だが二人になっていく」
「といいますともう一人は」
「あの男ですか」
「サジタリアスも間違いなく来る」
彼もだというのだ。その結果として出された言葉は。
「二人の黄金聖闘士が我等の敵なのだ」
「レオとサジタリアスこそが」
「我等の敵なのですね」
「白銀や青銅の者達はいい」
こう言い切ってみせたのだった。
「相手をするのはまずこの二人だ。この二人を倒せばだ」
「後はどうにでもなる」
「そうなのですね」
「その通りだ。戦いはそれで決まる」
またしても言い切ってみせたのであった。
「あの二人を倒すことでは」
「それではです。何としても」
「あの二人を」
「まずは御前達が行くつもりだな」
「はい」
「御願いします」
ここでこう名乗り出た彼等であった。
「何としてもです」
「やらせて下さい」
「是非」
「わかった」
彼等のその言葉を受けたリゲルだった。小さいが確かな声と動作で頷いてみせたのであった。それがそのまま証拠となったのである。
「では。やってみるがいい」

「有り難き御言葉。それでは」
「喜んで受けさせて頂きます」
「どちらも尋常な強さではないことはわかっておくのだ」
それも言うのだった。
「レオもサジタリアスもだ」
「確かサジタリアスはジェミニと並ぶ今聖域にいる黄金聖闘士の中で最強の者でしたね」
「そしてレオはそのサジタリアスの弟」
「兄弟やそれ以前にだ」
まずはそれは置いていたリゲルだった。
「レオの強さはかなりのものだ」
「確かに」
「二度のインプ達の攻撃を一撃で退けましたし」
それは彼等もよく知っていた。見たからである。ただしその心の目で、である。
「その力は黄金聖闘士のものです」
「紛れもなく」
「だからだ。やはり黄金聖闘士の力は尋常なものではない」
リゲルもまたそのことを熟知していた。しかも冷静に、である。

第七十二話　来たるべき戦いその二

「それだけにだ」
「わかっています。冷静に」
「レオを倒します」
「そしてサジタリアスも」
あらためて決意を述べる彼等であった。
「それもお任せ下さい」
「何としても」
「では任せた」
リゲルは再び彼等に対して言ってみせた。
「何としても二人を倒すのだ」
「はい、それでは」
「何があろうとも」
「そして安心するのだ」
話が一段落したところでこう彼等に述べたのだった。
「若し何があろうともだ」
「はい、その時は」
「リゲル様がおられます」
彼等のその声が微笑んだものになった。
「だからこそ我等は悔いなく」
「戦うことができます」
「狂闘士の戦いに悔いは不要だ」
リゲルの今度の言葉はこうしたものだった。
「一切だ。不要だ」
「はい、そうです」
「我等に悔いはありません」
「ただ戦うのみです」
実に狂闘士らしい言葉のやり取りであった。

「だからこそ我等はです」
「レオと、そしてサジタリアスと」
「戦いましょう」
その念に満ちているのであった。彼等は。
「是非共」
「我々の手で」
「戦いは近い」
リゲルの言葉の色は変わらない。
「それではだ」
「はい、それでは」
「これより」
またしても戦いがはじまろうとしていた。今彼等はそれに燃える目を見せていた。
アイオリア達は今は冷静な中にあった。車から出てガソリンの補給を受けていた。そうしてその間に彼等も補給を受けているのであった。
「やっぱりオーストラリアはこれですね」
「羊ですね」
イロコイと山鬼が言う。
「羊の肉のカツサンドですか」
「結構美味いですね」
「それに野菜サンドも」
「これも結構」
クルトとオックスはそれを食べていた。見ればかなり大きく具も多いかなりのボリュームのサンドイッチである。如何にもオーストラリアといった感じのだ。
「キーウィも入ってますし」
「甘さも」
「キーウィは如何にもだな」
ダンテもまたそのキーウィ入りの野菜サンドを食べながら述べた。

その野菜サンドには他にはレタスやトマトといったものも入っている。
「オーストラリアらしい」
「確かに」
「だよな」
イロコイと山鬼もまさにそれだというのだった。見れば彼等も今はその野菜サンドを食べている。しかもかなり美味そうに話をしている。
「この大雑把な味付けも」
「それで結構美味いしな」
「これってワイルドっていうのか？」
「そうじゃないのか？」
クルトとオックスも話す。

第七十二話　来たるべき戦いその三

「こうした感じが」
「そうなるよな」
「まさにこれがオーストラリアだ」
ダイダロスもそれだというのだった。彼はヌードルを食べている。彼はそのカレー風味のかなり強い味のヌードルを食べながら言うのだった。
「このヌードルは」
「日本のカップヌードルか！？」
「そうだよな」
青銅の者達もそれを食べていた。そうしてそのうえで話すのだった。
「この味はな」
「そっくりだよな」
「辰巳のおっさんが俺達に食わせてくれた」
「あれだよな」
「あの人はこうしたものも食べるからな」
見ればアイオリアもだった。そヌードルを食べていた。食べているのはフォークを使ってである。それもまたオーストラリア風であった。
「日本の味が好きだからな」
「これって日本だったんですか」
「カレー味ですけれど」
「そうらしい」
青銅の者達にそのヌードルを食べ続きながら述べるアイオリアだった。見ればバケツ位の巨大なバケツ型の容器の中にそれがあるのだった。
そしてその容器の中にカレーのスープがあり様々な野菜やハンバ

ーグ状の肉がある。やはりどう見てもカップヌードルである。
「それがオーストラリアに入ってきたみたいだな」
「ってここにまで日本の味がですか」
「何か凄いですね」
「実は我が聖域もだ」
ダイダロスが話した。
「日本からはかなりの援助を受けている」
「あの国からですか」
「縁所を」
「そうだ。特にグラード財団にだ」
そこだというのである。
「援助を受けている」
「あの財団って何なんだろうな」
「城戸の爺さんも訳わからない人だしな」
青銅の者達もまたヌードルを食べはじめていた。その中で言い合うのだった。とにかく物凄い量のサンドイッチとヌードルを食べ続けている。
「一見凄く厳格そうだけれどな」
「実は凄い女好きだったりしてな」
「ああ、その可能性あるよな」
そんな話もする彼等だった。
「素顔なんてわからないからな」
「裏の顔なんてな」
「それこそ子供が何人もとかな」
「愛人が何人もいてな」
「そ、そうだな」
何故かその話を聞いて戸惑った顔になるアイオリアだった。
「それはな」
「ってアイオリア様」
「どうしたんですか？」

クルトとオックスが今の彼に対して突っ込みを入れた。その戸惑った顔になった彼に。
「急に顔から汗が出て」
「何かあったんですか？」
「何でもない」
一応はこう返すアイオリアだった。
「しかしだ」
「しかし？」
「やっぱりおかしいですけれど」
イコロイと山鬼も彼に問うた。
「どうしたんですか、本当に」
「アイオリア様も何かあったんですか？」
「一つ言うが」
ここで不意にこんなことを言い出してもきたアイオリアだった。
「若しもだ」
「若しもって」
「またどうしたんですか」
「子供が百人いる人間がいたらどうする」
そのことを彼等に問うのだった。

第七十二話　来たるべき戦いその四

「その場合はだ」
「ってまさか」
「そんな人間いませんよ」
彼等は笑ってそれは否定した。
「そんな無茶苦茶な人間が」
「いる筈ないじゃないですか」
「百人ですよ、百人」
「有り得ませんよ」
口々に話すのだった。
「そんなオットセイかマントヒヒみたいなおっさん」
「いたら怖いですよ」
「なあ」
「どんだけ女好きなんだか」
「普通はそう思うな」
まさにその通りだという彼等だった。やはりそんな人間はいないと確信していた。
そしてその彼等にだ。アイオリアはまた言った。
「それならそう思うといい」
「まあ有り得ないですからね」
「そんな変態」
「いや、確か」
「そうだったな」
しかしここでダイダロスとダンテが言った。
「神話にはな」
「いた筈だ」
「ヘラクレスもかなりの子供を持っていたがな」
「それでも百人の子供の父親というのも確かにな」

「そうだったな。誰だったか」
「はっきりと名前を思い出せないが」
そこまでははっきりと言えない彼等だった。しかしこう言うのだった。
「それでもだ。途方もないことだけは事実だ」
「子供を一人で百人作るとなるとな」
「その途方もないことをした人間がいればだ」
何故かアイオリアは妙に現実味のある様に言うのだった。
「現実にいればだ」
「だからいませんって」
「そんな奴は」
やはり信じようとしない山鬼にイロコイだった。
「そんな百人って」
「十人でも凄いのに」
「確か多いので五十人とかだったな」
「ああ、そうだったな」
オックスとクルトは歴史から言った。
「普通はそれで滅茶苦茶多いよな」
「五十何人とかでな」
「ですからアイオリア様」
「どうも実際に百人となると」
「それならそう思っておくことだ」
青銅の者達に対して返す言葉はそれだけだった。
「だが。言いはした」
「そうですか」
「それは」
「言った。そしてそれを実際に知った時にはだ」
言葉は忠告めいてさえいた。
「決して驚かないことだ」
「まあ。それでしたら」

「そうしますが」
「世の中途方もないことをできる人間もいるのだ」
やはり何かを知っている言葉だった。
「実際にな」
「そういえばですが」
「アイオリア様」
ここでダンテとダイダロスは彼等にしてみれば今の話とはこれといって関係のないようなことを彼に対して問うのであった。そう、あくまで彼等が思うにはだ。
「その辰巳さんのグラード財団ですが」
「総帥は城戸光政氏でしたね」
「あの男だ」
アイオリアは俯いたまま述べた。

第七十二話　来たるべき戦いその五

「あの男こそがだ」
「あの、一体」
「あの方がどうかしたのですか？」
「あっ、いや」
ここで自分の言っていることに気付いて言葉を慌てて引っ込めた。
そうして何とか表面を取り繕ってそのうえで彼等に応えるのだった。
「何でもない。気にしないでくれ」
「左様ですか」
「何か御気分が優れないようですが」
「何でもない」
彼にしては珍しい取り繕いであった。サンドイッチを持っているその手が微妙に震えている。それを見ればすぐに察しがつきそうなものだが幸い今は誰も気付いていなかった。
そして彼はその幸運のまま。さらに言うのであった。
「それでだが」
「はい、それで」
「どうされたのですか？」
「城戸光政氏だな」
話をそこに戻すのだった。
「あの人のことだな」
「はい、そうです」
「あの人のことです」
まさに彼のことだとまた述べた白銀の二人だった。
「確かお子さんはおられませんね」
「御子息もお嬢様も」
「確かに娘はいない」
ここでまた妙なことを言うアイオリアだった。

「しかしだ」
「しかし？」
「また何か」
「息子は。そう」
また半ば無意識のうちに言おうとしている自分に気付いた。それでその言葉を慌てて引っ込めて再び平静を取り繕う為に努力するのであった。
「いや、いない」
「そうですよね。まだ独身ですし」
「それを考えれば立派な人ですよね」
青銅の者達はそう思っているのだった。
「あくまで世の為人の為」
「贅沢もしないで女にも興味がないっていうのは」
「そうだな」
やはり何かを隠しているかの様な面持ちのアイオリアだった。
「それはな」
「ああいう人がもっといれば」
「世界は平和になるのに」
「全くだぜ」
「いや」
また言ってしまったアイオリアだった。
「あの人が何人もいればそれこそだ」
「それこそ？」
「それこそとは？」
「地球に人類が増え過ぎる」
ついつい言葉が漏れてしまっていた。
「大変なことになってしまう」
「あの、やはり何か」
「御存知なのでしょうか」
ダンテとダイダロスが彼に怪訝な顔で問うた。

「アイオリア様は」
「何かを」
「いや」
しかし自分ではそれは必死に否定するのだった。
「それはない」
「だといいのですが」
「いえ、本当に」
「何もない。それでだ」
そういうことにしたうえでまた話を元に戻した。

第七十二話　来たるべき戦いその六

「そうだな。グラード財団だな」
「後継者がいませんし」
「暫くしたら大変なことになりますかね」
「そうだな」
このことには素直に頷けたアイオリアだった。
「誰か相応しい後継者がいなければな」
「ですよね。あのままいったらちょっと」
「折角聖域にも色々援助してくれますし」
「良心的な財団なのに」
実際にグラード財団の評判は世界的によかった。城戸光政はあくまで世界の偉人として知られている人物なのである。とりあえずはそうなのだ。
「そこがどうかなってしまうのは」
「残念なことですよ」
「あの人のことだから後継者は任命するだろう」
アイオリアはこう返したのだった。
「きっとな」
「ええ、そうですよね」
「でしたら俺達は」
「見守っていればいい」
楽観的な意見を述べたアイオリアだった。
「今はな」
「そうですね。じゃあアイオリア様は暫くあれですよね」
「辰巳さんの店に行けますよね」
「いい店だ」
その辰巳の店については微笑んでこう述べたアイオリアだった。
「あの人もあれで悪い人ではないしな」

「ちょっと髪の毛がないだけで」
「あれって若ハゲなんですかね」
「老けて見えますけれど若いんですよね、確か」
「ですよね」
それは間違いのないことであった。彼は若いのだ。
「それ考えたらあれは」
「髪型ですかね」
「そういう話もあるな」
アイオリアもそのことはあまり知らなかったりする。
「果たしてどうかはわからないが」
「そういうことにしておいた方がいいみたいですね」
「こういう話は」
「そうだな。さて」
ここで食べ終わったアイオリアだった。そのバケツの如きヌードルも巨大なサンドイッチもだ。しかしまだ食べるものは残っていた。
それは。
「次はこれだな」
「ええ、これですね」
「デザートですが」
それがあるのだった。彼等の座っている席の中央には大きな白い皿が置かれている。その皿の上にあったのは赤いスイカであった。
「これも食べてですね」
「それで終わりですね」
「不思議なものだな」
アイオリアはそのスイカを見ながら述べた。
「これだけ食べてもまだ食べられそうだ」
「ええ、確かに」
「それは」
青銅の者達もアイオリアのその言葉に頷いた。
「まだ食べられそうですね」

「デザートは」
「どういうわけか」
「甘いものは別腹ということか」
アイオリアはそのスイカを見ながら述べた。
「だから食べられるのかもな」
「ですね。しかしこのスイカも大きくないですか？」
「それもかなり」
見ればそのスイカは普通のスイカより一・五倍は大きい。その大きさを見ているとどうやって作ったのかと思える程だった。そこまでの大きさなのである。

第七十二話　来たるべき戦いその七

「この国は何でも大きいんですね」
「食い物もそうですし人間も」
「そうだな。大きい」
アイオリアはそのスイカを一切れ取りながら述べた。
「これがオーストラリアなのかもな」
「オーストラリアって何か何でもかんでも大雑把っていうかでかいっていうか」
「そういう国みたいですね」
「まあこのスイカでかいだけで中身がかすかすだと思ったら」
「味いいよな」
青銅の者達はそのスイカを手に取っていた。そうしてそれを食べながら話すのだった。
「身はしっかりしてるしな」
「甘いしな」
「うん、確かに美味い」
「いい味だ」
白銀の二人も言い合いながら話していた。
そのスイカを食べ終えるとだった。アイオリアは六人に対して告げた。
「では一休みしてから行くとしよう」
「そうですね。その頃にはガソリンの給油も終わってますし」
「それなら」
ダンテとダイダロスそれに応える。
「いい時間ですね」
「丁度いい具合かと」
「そうだな。さて、それではだ」
食べ終わったスイカのその皮を皿の上に置きながらまた述べたア

イオリアだった。
「これで出発したらだ」
「ええ、ですよね」
「いよいよですよね」
イロコイと山鬼が言う。
「中央部まで行って」
「それであいつ等と」
「それで、ですけれど」
「北からですよね」
クルトとオックスが問うたのは作戦のことだった。
「そこから攻めるんですよね」
「まずは」
「そうだ」
ダイダロスが彼等の言葉に答えた。
「そこから攻める。いいな」
「そうか。北からか」
「北から攻めるんだよな」
青銅の者達はそのダイダロスの言葉に頷くのだった。
「北から攻めて雑兵共の力を弱めて」
「それで」
インプ達の力を弱めてそのうえで攻めるというのである。これが今回の彼等の戦術だった。それで戦おうというのである。
「よし、それなら」
「北に行ったら」
「その時までは慎重にだ」
アイオリアは言った。
「敵に気付かれてはこの作戦の意味がないからな」
「ええ、そうですね」
「それは」
青銅の者達はそれを聞いて言い合う。

「肝心な時まで牙を隠す」
「それですよね」
「その通りだ。ではいいな」
「はい、じゃあ」
「それで」
アイオリアの言葉に頷きここで食べ終えたそのスイカの皮を元の皿に戻す。そのうえで暫し休息を取り戦場に向かうのだった。オーストラリアの戦いも正念場を迎えようとしていた。

第七十二話　完

２００９・１１・２４

第七十三話　アイオロス合流その一

アイオロス合流

「いよいよだな」

「はい」

「来ています」

狂闘士達はリゲルを中心に砂漠の中に立っていた。北には湖がある。その湖を一瞥したうえで聖闘士達が戦場に来るのを待っているのであった。

「間も無くです」

「この場に来ます」

「インプ達は既に戦闘用意ができているな」

リゲルはここで九人にこのことを問うた。

「あの者達も」

「はい、既に」

「何時でも戦えます」

「そうか。ならいい」

リゲルは彼等のその言葉を聞いて頷くのだった。

「それならばだ」

「はい、そして我等もまた」

「何時でも」

「言っておく。まずレオだ」

彼を名指ししたのだった。アイオリアを。

「そしてサジタリアスをだ」

「やはりサジタリアスも来ますか」

「あの男も」

「来ない筈がない」

それはもう見据えている彼だった。

「そう思っておくことだ」
「ではサジタリアスには四人」
「そしてレオには五人で向かいます」
「そうするのだ。まずは一人を倒す」
このことを念頭に置いているリゲルだった。
「それが聖域を陥落させる第一歩になるのだ」
「レオかサジタリアスか」
「そのどちらかを」
「このリゲルもまた」
また言うリゲルだった。
「その為にいざとなればだ」
「その御命をですか」
「捧げられるというのですね」
「我等狂闘士の命は何の為にあるか」
そうした言葉にもなるのだった。
「何の為だ」
「はい、アーレス様の為にあります」
「全てはアーレス様の為にです」
「そのことにおいて我等は同じだ」
狂闘士全てがそうであるというのである。
「全てだ。わかっているな」
「それは無論です」
「では」
「命を捧げよう」
このことを何でもないといったように述べるのだった。
「わかったな」
「では我等九人」
「この命をかけて」
「レオとサジタリアスを」
まさにそのことを誓う彼等だった。そのうえで聖闘士達が来るの

を待ち受ける。そして遂にそのアイオリア達が戦場に近付いたのだった。

「よし、それではだ」

「行くぞ」

ダンテとダイダロスが青銅の四人に告げる。既に彼等は車から降り聖衣をその身に纏っている。それはアイオリアも同じであった。

「ここから奴等の場所に向かう」

「いいな」

「湖の上での戦いか」

「また随分な戦いになるな」

青銅の者達は自分達の目の前に広がるその湖を見ていた。砂と岩の荒地の中に湖だけがある、そうした実に殺風景な場所であった。

「水に足を取られないようにしないとな」

「それはな」

「それについてはだ」

「こうするのだ」

白銀の二人がここで青銅の四人に告げたことは。かなり奇想天外なことであった。

第七十三話　アイオロス合流その二

「まずは跳びだ」
「それで水面に着くとだ」
こう話していくのだった。
「その瞬間に跳ぶのだ」
「水の中に沈む前にだ」
「おいおい、また凄いな」
「そうするっていうのかよ」
青銅の四人は彼等のその言葉を聞いて思わず苦笑いを浮かべてしまった。そのうえでまた言うのだった。しかし悪い顔ではなかった。
「水面に着いてすぐにまた跳ぶ」
「そうしながら戦うっていうのかよ」
「御前達ならば普通に出来る筈だ」
「無論我々もだ」
それが出来ると言うのである。
「出来ない訳ではあるまい」
「聖闘士ならばだ」
「まあそれはな」
「できるけれどな」
そして青銅の者達もだ。今度は純粋な微笑みになって二人に返してみせたのだった。
「よし、じゃあな」
「それで行くか」
「ではインプ達は俺達で相手をする」
「そしてアイオリア様は」
「わかっている」
静かだが確かな声で応えるアイオリアだった。
「そのまま一気に湖を突っ切ったうえでだ」

「はい、魔神達を御願いします」
「あの者達を」
「ここにいるインプ達の数は尋常ではない」
アイオリアは湖の方を見据えて述べた。彼等の姿は見えない。しかしその小宇宙は既に感じ取っておりそのうえで言ったのである。
「頼んだぞ」
「ええ、それは任せて下さい」
「俺達もやりますから」
青銅の四人はアイオリアにも明るい笑顔で応えた。
「そういうことで」
「任せて下さい」
「わかった。では行くぞ」
「はい！」
「一気に！」
七人は駆け出した。そのまま湖に一気に向かう。その彼等に湖の左右からインプ達がその槍を手に取って一斉に姿を現わしたのだった。
「来たな聖闘士達！」
「待っていたぞ！」
叫びながら一斉に彼等に襲い掛かる。
「ここで倒す！」
「覚悟しろ！」
「アイオリア様！」
「手筈通り！」
彼の左右にそれぞれいるダイダロスとダンテが彼に告げてきた。
駆けながらだ。
「ここは我等にお任せ下さい！」
「それで前に！」
「わかった！」
それに応えてアイオリアはそのまま前に出た。インプ達も彼の姿

を認めた。
「レオ！いたか！」
「仲間達の仇ここで！」
取らんと一斉に襲い掛かる。しかしだった。
アイオリアの速さは彼等より遥かに上だった。そのまま振り切る。
水面の上をそのまま一直線に突っ切ってそのうえで進むのだった。
インプ達は追おうとするが六人が彼等の足止めに入る。作戦は成功だった。
「アイオリア様、そのままです！」
「あちらはお任せしました！」
早速戦いに入りながらアイオリアに言う彼等だった。既に拳による戦いがはじまっていた。
そしてアイオリアは彼等の前に出たのだった。
「来たか、レオ」
「ここで決着を着ける」
アイオリアは自身の前に悠然と立つリゲルに対して告げた。
「いいな」
「よし、それでは」
「我等が相手をする」
その九人がアイオリアの前に出て来た。

第七十三話　アイオロス合流その三

「レオ、貴様と」
「サジタリアスのだ」
「来たか」
ここでまた言ったリゲルだった。
「サジタリアス、遂にだな」
「流石だな」
リゲルの言葉に応えてだった。その彼が姿を現わしてきたのだった。
アイオロスは彼等から見て東から来た。既にサジタリアスの聖衣をその身に纏いマントも羽織っている。戦う用意は整えていた。
「私の気配を察していたか」
「それだけの気配、わからない筈がない」
リゲルは彼にも目を向けて告げた。
「それはな」
「そうか。それではだ」
「貴様も倒す」
「いいな」
魔神の狂闘士達は彼に対してもその激しい敵意を向けるのだった。
「わかったな、それで」
「行くぞ」
「いいだろう。私とてだ」
アイオロスもそれに言葉を返してみせた。
「戦う為に来たのだからな」
「よし、それではだ」
「我等が相手になろう」
早速四人が彼に顔を向けてきた。そうしてアイオロスに告げるのだった。

「我々が相手になろう」
「それでいいか」
「よければ名乗ってもらおう」
アイオロスはその四人に対してこう言うのだった。
「そちらの名前をな」
「いいだろう、それではだ」
「名乗ろう」
四人は彼の言葉に応えた。そうしてそれぞれ名乗った。
「キメリエスのリシュエル」
「オロバスのエゼキエル」
「サレオスのカムイ」
「エリゴルのレネ」
四人全員が名乗り終えそのうえでリシュエルが彼に言うのだった。
「我等四人がだ」
「貴様の相手をする」
「よし、わかった」
彼等のその言葉をあらためて受けたアイオロスだった。
「それではだ。今ここで貴様を倒す」
「覚悟するのだ」
「いいだろう。では参る」
この言葉と共に身構えるアイオロスだった。その黄金色の小宇宙が高まる。そしてアイオリアは五人の狂闘士達を前にしていた。
その彼等もだ。それぞれ名乗ってきた。
「アロケンのザカリア」
「オリアスのハガル」
「ゴモリーのエンテ」
「ヴェパールのクレア」
「ウコバチのザール」
五人は名乗り終えた。するとザカリアがアイオリアに言ってきたのだった。

「既に名乗ったから知っているな」
「そうだな。既に名前と顔は覚えていた」
冷静に言葉を返したアイオリアだった。
「その魔神の名前もな」
「そうか。それでは話が早い」
「行くぞ」
それぞれ身構え技を放とうとしてきた。いよいよだった。
「行くぞレオ！」
「この拳を受けよ！」
「そして倒れるのだ！」
アイオリアに突き進みながら叫んできた。そうしてだった。
まずはザカリアが攻撃を放って来た。突風を出してきた。
「このアロケンの風、受けてみるのだ」
「むっ、来たというのか」
「ジャノサイドトルネード！」
無数の竜巻をアイオリアに向かって放ってみせた。
そして次はハガルだった。彼も技を放つ。
左手を下から上に一閃させる。そうして叫んだ。
「ジェットシュート！」
凄まじい衝撃波でアイオリアを両断せんとするのだ。

第七十三話　アイオロス合流その四

三人目はエンテだった。彼女は優雅に空中で舞いそのうえで無数の蝶を出すのだった。
「この蝶こそが我がゴモリーの力」
「その蝶がか」
「全てを眠らせ動かせなくする蝶」
まさしくそれだというのだ。
「レオ、それを受けて眠るのです」
「来るか」
「はい、受けなさい」
両手を広げて前に繰り出したうえで技の名前を言った。
「ポイズンパピヨン」
無数の蝶達もアイオリアを囲むのだった。
三人で終わりではなかった。クレアもだった。クレアは今海を出してきていた。
「海だと！？」
「ヴェパールは海の魔神」
だからそれを放つというのだ。
「だからこそここに海も出せるのです」
「そうだからだというのか」
「さあ、受けるのです」
言いながらその背負っている波を彼に向かって放った。その青黒く巨大な波を。
「ビッグウェーブ」
最後はザールだった。彼はその手に持っている炎の杖を一閃させて叫んだ。
「ローリングファイアー！」
その炎は無数の火球だった。それで焼かんとするのだった。

五人の攻撃がアイオリアに炸裂する。彼等はそれを見て言った。
「よし、これで！」
「レオは！」
「倒れた！」
そう確信した。しかしであった。
攻撃が全て炸裂したかと思ったその瞬間に何かが光った。それは。
「何っ、我等の攻撃が」
「消えた！？」
「光によって！？」
「攻撃は最大の防御！」
光はアイオリアからだった。アイオリアはこう言ってきたのだった。
「それがこれだ。行くぞ！」
「何っ、ではその光は」
「攻撃だというの！？」
「そうだ、受けるのだ！」
アイオリアの声がした。そうして無数の光が今五人を襲った。
「ライトニングプラズマ！」
「う、うわあああああーーーーーーーーーっ！」
そのライトニングプラズマを受けて忽ち吹き飛ばされる五人だった。そしてその戦衣も粉々に砕かれそのうえで地面に叩き付けられたのだった。
「こ、これがレオの力か」
「我等の攻撃を消しそのうえで」
「ここまでのダメージを与えるとは」
「もう立つことはできない」
その攻撃を放ち終えたアイオリアの言葉だった。
「苦しむことはない。死ぬのだ」
「み、見事だレオ」
「我等の負けだ」

彼等は断末魔の中でそれを認めた。
「だが。リゲル様はこうはいかぬ」
「八大公であるあの方だけはだ」
「それは言っておく」
こう言って事切れるのだった。その頃アイオロスに対しても四人が襲い掛かっていた。
「サジタリアス、ここで倒す！」
「イラクと南米での仲間達の仇！」
「それをここで！」
「取らせてもらう！」
その言葉と共に襲い掛かる。そうしてその技を放つのだった。
「それではだ」
最初はリシュエルだった。
「このリシュエルの技を受けてもらおう」
「その技は何だ」
「これだ、受けろ！」
黒く鋭い無数の影の刃であった。
「ブラックシャドー！」
「よし、次は！」
二番手はエゼキエルだった。その足で無数の蹴りを放つ。
「イリュージョンフラッシュ！」
その蹴りをアイオロスに繰り出しての技だった。そして三人目も来たのだった。

第七十三話　アイオロス合流その五

「我が技受けよ！」
カムイだった。右手を上に、左手を下にしてまるで鰐の顎の如き形にしての技だった。
「クロコダイルタスク！」
両手で挟んでの攻撃だった。まさに鰐の顎であった。
「最後は私が」
レネは右手に持つランスを前に突き出した。それと共に叫んだ。
「ファイナルランス！」
四人の攻撃が今まさにアイオロスに迫る。彼等はそれで勝利を確信した。
「これで！」
「如何にサジタリアスとて」
「終わりだ！」
「間違いないわ！」
まさに確信であった。しかしであった。
アイオロスはそこから消えた。技だけが空しく通り過ぎたのだった。
「何っ、我等の技を」
「最初で見切っただと！？」
「まさか」
「見えたのだ」
アイオロスは空の上にいた。彼等の頭上に浮かんでいたのだった。
「その攻撃がだ」
「馬鹿な、我等の攻撃が」
「見えていただと！？」
「最初の一撃で」
「そうだ、見えていた」

こう驚きを隠せない彼等に対して告げるのだった。
「既にだ」
「何故だ、最初で」
「何故見えていたというのだ」
彼等にとってはそのことがまず信じられないことだった。それで問わずにはいられなかった。そしてアイオロスはその問いに対して答えてきたのだった。
「それはだ」
「そうだ、それはだ」
「何故だ！？」
「何故わかったのだ」
「予期できたのだ」
だからだというのであった。
「攻撃を繰り出す前にだ」
「おのれ、それもセブンセンシズか」
「その力でか」
「見えていたというのね」
「セブンセンシズはあらゆる力となる」
黄金聖闘士を象徴するその力の一つがというのである。
「だからこそだ」
「技を既に予期できた」
「それによって」
「その通りだ。そしてだ」
アイオロスはさらに言ってきたのだった。
「もう一つ予期したものがある」
「まさかそれは」
「我等の」
「私の勝利だ」
彼にとってはそうなることだった。
「それがだ。今それを見せよう」

「くっ、来るというのか」
「今ここで」
「我等の頭上に」
「受けるがいい。このサジタリアスのアイオロスの技」
言いながらだった。その小宇宙を溜めて。その技を放った。
「ケイロンズライトインパルス！」
渾身の力で左腕から拳を放った。それは無数の光となって四人の狂闘士達を襲った。
白い爆発が起こり彼等を吹き飛ばした。それで全てが終わった。
「くっ、噂通りだ」
「黄金聖闘士の中でも最強の一人」
「それに相応しい力だ」
「まさに」
四人は戦衣を粉々にされ荒野に倒れ伏しながら述べた。
「それだけの強さがある」
「我等をこうまで容易に倒すとは・・・・・・」
「恐ろしい男・・・・・・」
四人はそのまま息絶えてしまった。アイオロスはその四人を見下ろしてそのうえで告げたのだった。
「そのまま眠るがいい」
降り立ったうえでの言葉だった。
「安らかにだ」
そうしてであった。アイオリアは今リゲルと対峙をはじめていた。その彼とだ。

第七十三話　アイオロス合流その六

「さて、アスモデウスよ」
「言いたいことはわかっている」
アイオリアを見据えて返してきた言葉だった。
「それは既にだ」
「そうか」
「そして俺の言葉もわかるな」
「既にな」
わかると返したアイオリアだった。
「俺を倒す。そうだな」
「五人、そして多くのインプ達の仇だ」
まさにそれによってというのであった。
「それを取らせてもらう」
「その為に俺をか」
「そういうことだ。狂闘士は仲間の仇は必ず取る」
まさにそれが絶対の戒律だというのだった。
「だからこそだ」
「貴様の言いたいことはわかった」
アイオリアもそれを受けるのだった。
「それではだ。はじめるとしよう」
「容赦はしない」
また言ってきたリゲルだった。
「決してな」
「それは俺とて同じこと」
今アイオリアはその背に獅子を背負った。
「このレオの名にかけてだ」
「獅子は鼠を倒すのにも全力を尽くす」
リゲルが今度出した言葉はこれであった。

「そういうことだな」
「その通りだ。だからこそだ」
ゆっくりと構えを取ってきたうえでの今の言葉だった。
「アスモデウス、貴様に対してもだ」
「俺は八大公の一人」
このことも言ってきたリゲルであった。
「アスモデウスのリゲルだ」
「鼠とは違うということか」
「狂闘士達、即ち魔神達を束ねる八大公の力見せてくれよう」
まさにそれをというのだった。その言葉は本気であった。
「今ここでな」
「兄さん」
見ているアイオロスに告げたアイオリアだった。
「手出しは無用だ」
「言われるまでもない。そのつもりだ」
冷静な声で返してきたアイオロスだった。
「私も既にな」
「そうか。ならいい」
アイオリアはそれを聞いて安心したような声を出したのだった。
態度は冷静なものであったがそこには明らかに喜びもあった。
「それではだ。やらせてもらう」
「その闘い見せてもらおう」
アイオロスはこう告げただけであった。
「ここでな」
「サジタリアスよ」
そのアイオロスにも顔を向けて告げるリゲルだった。
「次は貴様だ」
「そのつもりなのだな」
「そうだ、レオを倒してだ」
彼を見据えながらの言葉であった。

「貴様を倒す。いいな」
「それはアイオリアを倒してから言うべきではないのか」
こう冷静に笑いもせずに返すアイオロスだった。
「私と闘うと言う前にだ」
「無論それはわかっている」
リゲルもまた冷静だった。
「レオ、貴様の実力もだ」
「わかっているというのか」
「実力は互角だ」
そう見ているというのである。
「完全にだ」
「互角だというのか」
「如何にも」
アイオリアの実力を決して侮ってはいなかった。それは間違いなかった。
その証拠に目は冷静だった。その口調もだ。
「わかっている。だが」
「だが。何だ」
「互角という立場においてこのリゲルが敗れることはない」
それはないというのである。
「決してだ」
「それはこのアイオリアとて同じこと」
構えながら言葉を返すアイオリアだった。今にも何かの技を放たんばかりだった。
「それも言っておこう」
「面白い」
アイオリアの今の言葉を受けてまた述べたリゲルだった。
「ならばその互角の立場においてどちらが勝つかはっきりさせるとしよう」
「そうだな。ではアスモデウスよ」

またしてもアイオリアの小宇宙が高まるのだった。
「行くぞ」
「参る」
こうして闘いをはじめる両者だった。二人の死闘が幕を開けた。

第七十三話　　完

２００９・１１・２８

第七十四話　流星の牙その一

流星の牙

アイオリアとアイオロスが魔神達と戦っている頃白銀と青銅の六人の聖闘士達もだ。インプ達とそれぞれ激しい戦いを繰り広げていた。

「やっと出番だぜ！」

「ああ、そうだな！」

まずは山鬼とイロコイが言うのだった。

「待ちに待ったな」

「暴れる時だぜ！」

「アイオリア様とまた違った強さだぜ！」

「それを見て驚くなよ！」

クルトとオックスも言う。

「その技を食らってだ」

「あの世に行きやがれ！」

四人は一斉に跳んだ。水面を跳んでだ。まず山鬼が技を繰り出した。

「サークルチェンジ！」

円形の気を放ちその輪を飛ばし一気にインプ達を吹き飛ばす。

そしてイロコイはだった。右手を大きく振り下ろしてだ。

「トマホーク！」

それはまさに斧だった。重厚な一撃で水面を大きく吹き飛ばし彼等を倒すのだった。

そして三人目はだった。クルトだった。

彼は水面を大きく動かしてきた。その小宇宙でだ。

「ビッグウェーブ！」

その波でインプ達を飲み込む。それは荒地でも出していた。

最後はオックスだった。右手の五つの指からそれぞれ黄色い気の

リングを放ちそれで敵にぶつけて各個に吹き飛ばしてみせたのだ。
「リングオブデス」
こうして四人はそれぞれインプ達を倒していた。それは白銀の二人も同じだった。
「いいかダンテ」
「ああ」
ダイダロスは右、ダンテは左に位置していた。そのうえで囲むインプ達を見ているのだった。
「一気にやるぞ」
「わかっている」
こう言い合ってであった。二人同時に跳びそのうえで、であった。ダイダロスが必殺技を放つ。それは。
鎖であった。無数のそれを出し竜巻の如く振り回してインプ達を撃つのだった。
「トルネードチェーン！」
無数のその鎖の嵐で敵を撃つ。彼もまた超絶的な攻撃を出すのだった。
そしてダンテはだった。彼もまた鎖を出していた。
「鎖を使うのは俺もだ！」
「くっ、そうか」
「貴様はケルベロスだったな」
インプ達が跳んだ彼を見て言う。ケルベロスとは地獄の番犬であり三つの首と蛇の尾を持ち首には無数の蛇達が生えている。口からは猛毒を放つ恐るべき魔獣である。
「それではその鎖は」
「やはり」
「その通りだ。地獄の番犬を捕らえる鎖だ」
まさにそれだというのである。
「その鎖を受けて死ね！」
鎖は複数あった。それぞれに鉄球が付いている。

その鉄球を振り回しそのうえでインプ達を倒すのだった。
「地獄の鉄球鎖！」
彼等は水面を跳ねながらインプ達との戦いを有利に進めていた。
そうしてだった。
そしてアイオロスはリゲルと対峙したままだった。そのリゲルが動いた。
「行くぞレオ」
「遂に来るか」
「アスモデウスの技見せよう」
赤い小宇宙が燃え上がる。そうしてだった。
「むっ、これは」
「この技は！」
見ているアイオロスも思わず叫んだ。その技は。
「メテオシャワー！」
無数の流星が舞い降りアイオリアを襲う。それはアイオリアをしても驚かせるものだった。
「何っ、流星をこれだけ！」
「知っている筈だ、アスモデウスの力は星の力」
またこのことを言う彼だった。
「その力で今貴様を倒そう」
「くっ、これだけの流星はだ」
アイオリアは己に迫るその無数の流星達を見て言う。それは一つだけでも彼を滅ぼすのに充分のものであった。

第七十四話　流星の牙その二

だがそれでも彼は引かない。その拳を繰り出す防ぎにかかった。
「技には技だ」
「その拳で俺の流星を潰すというのか」
「如何にも」
まさにそうするというのだった。
「この拳でだ。見よ！」
「むっ！？」
「ライトニングボルト！」
アイオリアの右手が突き出された。それが白く輝く。
そうしてだった。そこから放たれた無数の光が縦横無尽に暴れ回る。それによりリゲルが放ったその流星達を全て叩き潰して消し去ってしまったのであった。
「やってくれるな」
リゲルはアイオリアが己の技を技で潰したのを見て述べたのだった。
「技には技、まさにその通りだな」
「そうだ」
アイオリアの返答は毅然としたものだった。
「それがこのアイオリアの戦いだ」
「同じだな」
その彼の言葉を聞いてにこりともせず返したリゲルだった。
「それはな」
「同じだというのか」
「そうだ。俺と御前は同じだ」
今度はこう言うリゲルだった。
「闘う者同士としてだ」
「技には技ということがか」

「それこそが闘いだ」
リゲルの言葉は続く。
「まさにな」
「闘いは色々なものがある」
アイオリアはまずはリゲルの言葉をそのまま認めはしなかった。
こう告げたのである。
「だが」
「だが。何だというのだ」
「その闘いがこのアイオリアの最も好むものは事実だ」
「そう言うのだな」
「だからだ。また来るのだ」
アイオリアはこうリゲルに告げた。
「若し来ないならばだ」
「貴様から行くというのだな」
「その通りだ。受けるのだ」
今度は彼からだった。その右腕が再び光った。
「その技か」
「そうだ。受けてみろ」
アイオリアは彼等に告げた。その拳を放つのだった。
「ライトニングボルト！」
「メテオシャワー！」
彼がライトニングボルトを放つのと同時にリゲルもメテオシャワーを放った。再び両者の技が激突し撃ち合った。その結果再び相殺された。
「またか」
「そうだな」
またお互いに言い合う両者だった。互いに見合ってもいる。
「ライトニングボルトと互角か」
「メテオシャワーでは貴様を倒すことはできないな」
このことも確認し合った。

「それならばだ」
「次の技はだ」
「そうか」
それを見たアイオロスが呟いた。
「さらに技を出すというのだな、二人共」
「行くぞ！」
「今度はこの技だ！」
両者は再び動きに出た。アイオリアの右腕がまた輝く。そしてリゲルは今度はその左腕を輝かせたのだ。アイオリアと同じ様に。
「ライトニングプラズマ！」
「シャイニングスター！」
アイオリアの拳からまた凄まじい光が放たれる。そしてリゲルの拳からは。
「何だと！」
それを見たアイオロスが思わず叫んだ。
「拳から星を出しただと！」
「これがこのリゲルの技だ」
まさにそれだというのだ。

第七十四話　流星の牙その三

「このシャイニングスターを受けて無事だった者はいない」
「無事だったか」
「そうだ。この拳を受けてだ」
いないというのである。
「さあレオよ、この技を受けて倒れるのだ」
「その星を受けてから」
「この星はメテオシャワーの比ではない」
そこまで威力があるというのだ。
「貴様のそのライトニングプラズマで防げるというのか」
「防いでみせる」
まさにそうすると返すアイオリアだった。
「一つ言い忘れていたことがあった」
「何をだ？」
「このアイオロスの拳で砕けないものはない」
それはないというのだ。
「決してな」
「決してだというのか」
「そうだ」
また言葉を返すアイオリアだった。技を放ったうえでだ。
「決してな」
「ならばそれを見せてみるのだ」
あえてそれを告げるリゲルだった。
「貴様のその言葉が真かどうかな」
「では見るのだ」
見せてやろう、ではなかった。こう返すのだった。
「このライトニングプラズマの威力をだ」
「むっ！？」

今星と拳がぶつかった。その時だった。
何もかもが砕け散った。星も光も。そして後に残ったものは何一つとしてなかった。
「まさかな」
リゲルは己の星が砕かれたのを見て顔を顰めさせていた。
「シャイニングスターまで砕くとはな」
「言った筈だ、このアイオリアの拳に砕けないものはない」
このことをまた言うのだった。
「決してな」
「そうだったな」
その言葉に顔を顰めさせて応えるリゲルだった。
「嘘は言わぬというわけか」
「その通りだ。このレオのアイオリア決して嘘は言わない」
断じてないと、はっきり言い切るのだった。
「例え何があろうともだ」
「その心気に入った」
アイオリアのその言葉を受けてだった。
「やはり貴様はこのリゲルが倒すのに相応しい相手だ」
「倒すのにか」
「アスモデウスはだ」
今度は彼が司るその魔神の話をするのだった。
「魔神の中にあって最高位にある八大公とされている」
「それはもう知っているが」
「それだけに闘う相手は選ばれる」
そうだというのだ。
「闘うのに相応しい相手がか」
「相応しいか」
「そうだ。相応しい相手にだ」
「ではこのアイオリアはだ」
「今それを完全に認める」

不遜な態度で返した言葉だった。
「感謝するのだな」
「では俺からも言おう」
アイオリアはここでまた身構えた。その構えを解くことはない。
「貴様はこのアイオリアが倒す」
「貴様が言うのはそのことか」
「そうだ。それを言っておこう」
まさにそれだというのである。
「そしてだ。再び言う」
「その言葉をか」
「このアイオリア、決して嘘をつくことはない」
やはりこのことであった。言うのはである。
「何があろうともだ」
「そうだな。では行くぞ」
「行くというのか」
「闘う」
再び激突がはじまろうとしていた。
「ここでだ」
「またはじまるか」
アイオロスはそれを見ながらまた呟いた。
「激しい闘いが」
アイオリアとリゲルの闘いはさらに激しくなろうとしていた。そしてその頃だった。

第七十四話　流星の牙その四

エリスは今己の玉座にいた。そうしてそこで何かと話をしていた。
その話は。
「そうだ、まずはだ」
『我々をですか』
『この忌まわしい束縛より解き放って下さるのですね』
『遂に』
「左様、そなた達がいなければだ」
その声の主達に話すエリスだった。玉座に座ったまま厳かな声で彼等に話している。
「我等の勝利はおぼつかぬ」
『有り難き御言葉』
『そう言って頂き何よりです』
「言葉では済まさぬ」
それには留まらないというのである。
「実際にだ。解き放ってみせよう」
『それではまさに』
『我等を』
『この世に出して下さるのですね』
『そしてこの世をアーレス様のものに』
「そなた達を解き放ってだ」
エリスの言葉は続く。
「その力を使わせてもらう」
『アーレス様にお戻り頂く為に』
『この世に』
「その通り。そなた等の力あればこそだ」
エリスはまた彼等に告げた。
「アーレス様を冥界より戻ることができるのだ」

『アーレス様も我等を必要とされている』
『そうなのですね』
「言うまでもないと思うが」
それを聞いたエリスは思わず微笑んだのだった。その彼等の言葉にだ。
「それについては」
『そうなのですか』
『我々が』
「そなた達がいて私がいる」
彼等と自分自身のことを話してみせた。
「そして狂闘士達がいればじゃ」
『それでアーレス様の羽翼が全て揃います』
『何もかもが』
「その通り。だから戻って来るのだ」
また彼等に告げた言葉だった。
「よいな」
『はい、それでは』
『是非共御願いします』
『我等の封印を』
『この忌まわしい封印を』
口々に言った彼等だった。エリスに願う言葉であった。
『そして我等四柱』
『再びアーレス様とエリス様の下に集う』
『この力を捧げましょう』
『アーレス様の世界の為に』
「そうだ。アーレス様の為だ」
エリスの言葉は淀みがない。彼女もまたアーレスの治める世界を見ている。それをはっきりと見ているのだった。しかも純粋なまでにだ。
「よいな」

『はい、それでは』
『その時には』
「今七つ目の封印が解かれようとしている」
エリスの話が変わった。
「そして八つ目の封印が解かれたその時にこそ」
『それは間も無くですね』
『その時こそ』
「リゲルがもうすぐその闘いを終える」
彼がというのだ。

第七十四話　流星の牙その五

「そして最後の封印もだ」
『それでエリス様』
『あの者達は』
「あの者達か」
エリスの言葉がここですっと笑ったものになった。そのうえで言うのであった。
「そなた達も案ずることはない」
『といいますと』
『再びですか』
「そう、再び立ち上がることができる」
そこには絶対の確信があった。そのうえで安心しきっている顔で出した言葉だった。
「だからだ。案ずることはないのだ」
『そうですか。そしてそれもまた』
『アーレス様の御手によってですね』
『全てが』
「我等は全てアーレス様の手によるもの」
まさにそうだというのだった。
「だからこそ。あの者達は再びだ」
『では一刻も早くですね』
『アーレス様を』
「その為にもだ」
エリスはまた彼等に対して言う。それは変わらなかった。
「よいな。そなた達に戻ってもらう」
『畏まりました。ではその為にも』
『封印の件は御願いします』
「わかっておる。それも近い」

エリスと声達の話は戻っていた。それと共に確信も増していた。
そうして話されるのだった。そして最後にエリスは言った。
「それでじゃ」
『はい、それで』
『何と』
「その時そなた達の封印を解くにあたって」
その時の話になるのだった。
「四人を向かわせる」
『ほう、あの者達をですか』
『あの四人を』
それを聞いただけで誰なのか察したらしい。彼等の声は気付いたものであった。
『成程、あの者達と八大公ならば』
『何の問題もありませんな』
『我等のことに関しても』
「左様、だからこそそなた達は案ずることはない」
また彼等にこう言ってみせたエリスであった。
「わかったな」
『わかりました』
『ではエリス様、その時をです』
『楽しみにしております』
「待っているのだ」
エリスの今の言葉は静かなものだった。だがその静かさは戦いの嵐を前にして期待している為にあえてそうなっている、そうした静かさであった。
その静かさの中でだ。彼女は言ったのである。
「それではだ」
『その時まで眠っていましょう』
『暫し間は』
「そうしてもらう。もう暫くな」

こう話して話を終えるのだった。今の戦いの後の戦いの舞台がもう整えられようとしていた。戦いはまだ終わらないのであった。

第七十四話　　完

２００９・１１・３０

第七十五話　第三の技その一

第三の技

アイオリアとリゲルは睨み合ったままだ。その中においてだ。
アイオリアからだった。こう言ってきたのだ。
「いいか」
「どうしたというのだ？」
「貴様はまだ仕掛けて来ないようだな」
こう彼に問うてきたのである。
「どうやらな」
「仕掛けて来ると言えばどうだというのだ？」
「どちらにしろ答えは同じだ」
アイオリアは彼を見据えながら告げた。見据えるその目はまさに獅子のそれであった。
「それはだ」
「というとだ」
「こちらからやらせてもらう」
アイオリアは今言った。
「このアイオリアからだ」
「というとだ」
リゲルは今の彼の言葉を受けてそこからすぐにあることを察したのだった。それは何かというとだ。
「貴様の技はまだあるというのだな」
それを彼に問うたのだった。
「そうだな。まだあるのだな」
「このアイオリアの牙は二つではない」
これが彼の返答だった。
「そういうことだ」
「獅子の牙は二つだけではないか」

その言葉を受けてリゲルも呟く様にして述べた。
「そうだというのだな」
「その通りだ。それではだ」
「来るというのか」
「行かせてもらう」
言いながらだった。その小宇宙をさらにみなぎらせてきた。その強さはこれまでより遥かに上であった。
黄金の小宇宙がその場を包み込まんばかりだった。そうしてその中にアイオリアがいた。
「この小宇宙は」
「まさかな」
リゲルだけでなくアイオロスもここで呟いた。
「ここまでの小宇宙を持っているとは」
彼にしても予想外のことだったのだ。
「アイオリアが何時の間に」
「どうやら俺は最高の敵を前にしているようだな」
リゲルが笑った。凄みのある笑みだった。
「レオ、まさにこのアスモデウスのリゲルが全力で闘うのに相応しい相手だ」
「受けよアスモデウス！」
叫ぶと共にだ。その右手を思いきり地面に叩き付けたのだった。
「拳を」
「大地にか」
「ライトニングファング！」
技の名前を叫ぶ。するとだった。
無数の電光が地面を走る。そしてその爪達が一斉にリゲルに襲い掛かるのだった。
「地を雷がか」
「先程牙と言ったがそれは訂正する」
技を放ったアイオリアの言葉は冷静なものだった。右膝を大地に

着きそのうえでしゃがんだ姿勢になっていた。そのうえでの言葉だった。
「これは爪だ」
「獅子の爪だというのだな」
「そうだ。その爪をだ」
リゲルに対する言葉だった。
「防げるか、アスモデウスよ」
「見事だ、レオよ」
リゲルは自身に迫るその爪達を見て冷静に言うのだった。
「これだけのものを放てるとはな」
「褒めるというのだな」
「まずはだ」
凄みのある笑みをここでも浮かべる彼だった。
「このアスモデウスが倒すのに相応しい。それはまた言おう」
「そうか」
「ならばだ。こちらもだ」
言いながらだった。その全身に彼の小宇宙をみなぎらせるのだった。
「俺も見せよう、さらなる力を」
「来るというのか、また」
「見よ、これがこのアスモデウスのリゲルの力だ！」
叫びながらであった。その小宇宙を周囲に飛ばすのだった。

第七十五話　第三の技その二

「おおおおおおおおおおおーーーーーーーーーーっ！！」
「何っ、小宇宙を発散させただと！？」
「まさかそれでだというのか」
「そうだ、これでだ！」
アイオロスに返した今の言葉だった。
「これで貴様の攻撃を防いでみせよう！」
「何と！」
「恐ろしい男だ、アスモデウス」
アイオロスも彼に唸るしかなかった。
「そこまで闘いに執念と気迫を見せるか」
「見よ！」
さらに言うリゲルだった。
「俺のこの小宇宙をだ！」
そうしてだった。アイオリアのライトニングファングを全て打ち消してしまった。まさにその小宇宙で成し遂げた恐るべき行動であった。
「見たか」
「まさかそう来るとはな」
アイオリアにしても驚愕の色を隠せなかった。
「このアイオリアの攻撃をそうして防ぐとは」
「そしてレオよ」
あらためてアイオリアに告げてきた彼だった。
「貴様はもう攻撃を放てまい」
「何っ！？」
「それともまだ俺に攻撃を放って来るか」
こう彼に問うてみせたのだった。
「それはどうなのだ」

「できると言えば」
アイオリアは彼を見据えて言葉を返した。
「どうするというのだ」
「その時は俺もまた見せよう」
リゲルは全身から凄まじい汗を噴き出しながら述べてきた。
「俺の最後の必殺技をだ」
「最後の技をか」
「そうだ」
まさにそうだというのだ。
「それを見せる。どうするのだ」
「ならばだ」
アイオリアもまたそれに応えた。そうして再び身構えるのだった。
「俺も見せよう。全ての力を込めてだ」
「来るというのか」
「そうだ。どうするのだ」
あらためて彼に問うリゲルだった。
「ここでお互い死ぬか。それとも」
「それも悪くはないな」
アイオリアも引かなかった。
「貴様を倒せればそれだけでだ」
「では来るのだな」
「では行くぞ」
そのまま再び激突しようとする両者だった。しかしだった。
「待て」
「何っ、兄さん」
「サジタリアスか」
「ここでこれ以上激突するべきではない」
こう言って両者の間に入るのだった。静かにだ。
「今はな」
「それは一体」

「何故だ？」
双方が怪訝な顔になって彼に問うた。
「今ここでアスモデウスを倒しておけば」
「それはこちらとて同じこと」
両者の考えはこの点においては完全に一致していた。見事にだ。
「トラキアの力は相当落ちる」
「何を考えているのだ」
「この大地のことをだ」
今の言葉はリゲルに返したものだったが同時にアイオリアも見ているものだった。
「考えてのことだ」
「この大地のことを」
「どういうことだ」
「アイオリア、黄金聖闘士の力のことはわかっている筈だ」
今度はアイオリアに告げた言葉だった。
「そのことはだ。そうだな」
「確かに」
彼の今の言葉に確かな声で頷くアイオリアだった。

第七十五話　第三の技その三

「我等黄金聖闘士の力はまさに星の力だ」
「それは八大公も同じだ」
彼等もそうだというのだ。
「星と星の力がぶつかればだ」
「その時は」
「少なくともこのオーストラリア大陸は跡形もなく消し飛ぶ」
そうなってしまうと今二人に言うのだった。
「間違いなくな」
「だからこそだというのか」
「ここは闘いを止めよというのか」
「そうだ。どちらも本意ではあるまいがな」
「無論だ」
リゲルが鋭い目を彼に向けて言ってみせた。
「狂闘士にとって闘いを止めよというのはだ。死ねと言っているのと同義だ」
「それをわかってのことだ」
アイオロスも引かなかった。
「全てだ。いいな」
「ではサジタリアスよ」
リゲルはなおもその鋭い目をアイオロスに向けていた。そうして言うのだった。
「貴様が死ぬのだな」
「私とやるというのか」
「レオを退かせるというのならそうさせてもらう」
闘いから身を引くつもりは毛頭ないのだった。何処までも狂闘士である彼だった。
「それでいいか」

「いいだろう。どちらにしろ今この大陸にいる者達や動物達を失わせはしない」
だからだというのだった。
「アイオリア、御前にはそれがわかるな」
「・・・・・・・・・」
無言で兄の言葉に頷く。それが答えだった。
「ならばいい。ではアスモデウスよ」
「レオを倒せずともサジタリアスを倒せば」
既に彼にその気を向けているリゲルだった。そのうえでの言葉だった。
「それでよし。ならばだ」
「いえ、なりませんリゲル様」
「それはです」
ところがだった。ここで四人の狂闘士達が突如として姿を現わした。そうしてリゲルに対して告げるのだった。
「今はその拳をお収め下さい」
「どうか御自重を」
「御前達か」
リゲルは己の右に片膝をついて述べる四人を一瞥して言った。
「御前達が来たということはだ」
「はい、エリス様の御命令です」
「それによってです」
「エリス様の御言葉か」
それを聞いてまた言う彼だった。それを聞くと目の色が変わった。
「わかった」
「おわかりになられましたか」
「それでは」
「エリス様の御考えは我等の意志」
それまであくまで闘おうとしていたリゲルが急に態度を変えていた。完全にだ。

「そういうことだ」
「ではこれで」
「トラキアに戻りましょう」
「うむ。ではレオ、サジタリアスよ」
四人の方に向かい踵を返す。その時に二人の方を振り向いての言葉だった。
「また会おう。そしてだ」
「その時こそはか」
「今の闘いの続きをというのだな」
「そうだ」
まさしくその通りだというのだった。
「その通りだ。次に会ったその時こそだ」
「いいだろう」
アイオリアが彼に対して言葉を返してみせた。
「それではその時にまた拳を交えよう」
「あの時を思い出す」
リゲルは不意にこんなことも言ってきた。
「あの時をな」
「あの時だというのか」
「そうだ」
彼は確かな声でアイオリアに対して告げてみせた。
「あの時のだ。もっとも貴様は覚えていないようだがな」
「一体何の話だ」
表情は変わっていないが言葉のそれはいぶかしむものであった。
「覚えているとは。俺がだというのか」
「そうだ。それはないようだな」
「何を言っているのかわからないが」
「ならばいい」
リゲルもそれで話を収めたのだった。
「だが。貴様はあの時と変わってはいないな」

「貴様が言うその時とか」
「そうだ。サジタリアスも他の黄金聖闘士達もだ」
彼等もだというのだった。
「それは同じだな」
「そうなのか」
アイオロスはこう彼の言葉に返してみせた。

第七十五話　第三の技その四

「貴様が言うにはそうなのだな」
「そういうことだ。それではだ」
ここまで話してだった。顔を前に戻すリゲルだった。その最後の言葉は。
「また会おう」
「ではな」
「またな」
アイオリアとアイオロスも別れの言葉を告げた。そのうえでリゲルは四人の狂闘士達と共に姿を消した。後に残ったのは聖闘士達だけであった。
「アイオリア様」
「去った様ですな」
すぐにダンテとダイダロスが来て彼に声をかけてきた。その後ろには青銅の四人もいる。彼等は全員この戦いを生き残ったのであった。
「アスモデウスは」
「しかしあの四人の狂闘士達は」
「それはわからない」
アイオリアはまだ彼等が去った方を見ていた。そのうえで二人の言葉に応えるのだった。
「しかしだ」
「しかし？」
「何かあったのですか？」
「あの者達、小宇宙は大したことはなかった」
既にそのことを察してわかっていたアイオリアだった。
「だが非常に癖のある小宇宙だった」
「癖があるですか」

「そうした類の」
「狂闘士達には様々な人材がいるようだな」
アイオリアはその彼等を見てこのことを察したのだった。
「どうやらな」
「そうなのですか。我等が対してる魔神達の他にも」
「そうした者達も」
「そうだ。いるようだな」
また言うアイオリアだった。
「そしてだ」
「そして？」
「まだ何か」
「俺が覚えているというのか」
彼が次に考えたのはこのことだった。
「俺がか。それは一体」
「どうやら考えても仕方のないことのようだな」
しかしここで兄が微笑んで彼に言ってきた。
「どうやらな」
「考えても仕方のないこと」
「そうだ。アスモデウスにはわかっているが私達にはわからない」
こう弟に話すのだった。
「そしてだ。それを知っていてもだ」
「知っていても」
「どうやらこの戦いには直接関係はない様だな」
アイオロスはそう感じ取っていたのだった。
「どうやらな」
「そうか。それでか」
「そのことは別に考えなくてもいい」
また弟に告げた。
「わかったな。それでだ」
「わかった」

アイオリアも彼の言葉に頷いたのだった。
「それでは」
「帰るとしよう」
弟だけに告げただけではなかった。
「これでな」
「ええ、そうですね」
「もう狂闘士達もいませんし」
「それじゃあ」
青銅の者達がアイオロスの今の言葉に応えた。
「帰りますか」
「聖域に」
「そうするとしよう。それでは車は」
「北の方に置いています」
「湖の北にです」
白銀の二人が今の問いに答えた。

第七十五話　第三の技その五

「では今からそこに戻って」
「帰路に着きますか」
「そうするとしよう。ではアイオリアよ」
「うむ」
「それでいいな」
あらためて弟に問うたのだった。
「それで」
「俺としても異論はない」
彼もまたそうであった。
「特にだ」
「私が増えるがそれでもいいか？」
しかしここでこんなことを言ってきたアイオロスだった。
「それでも」
「旅は多い方がいい」
微笑んで兄に返してみせたのだった。
「その方がな」
「そうか。そういうことか」
「では聖域に帰ろう」
アイオリアも言った。
「今からな」
「はい、じゃあアイオリア様」
「これからまたシドニーに、ですね」
「そうだ。また長旅になるな」
青銅の者達に答えて述べるアイオリアだった。
「またな」
「まあ楽しく過ごそう」
アイオロスがぼやき気味に言った弟を宥める様にして微笑んで声

をかけた。
「せめて帰りはな」
「楽しくか」
「やはり警戒は必要だ」
これは踏まえているアイオリアだった。その表情が一瞬ではあったが緊張したものも入った。やはりそれはあるのだった。
「しかしだ」
「しかしなのか」
「そうだ。楽しく帰るとしよう」
またこう言ってみせるのだった。
「それでいいな」
「俺としては別に構わないが」
アイオリアは自分の考えを述べた。元々鷹揚で陽気な性質の彼は特にこだわるところがなかった。最低限の警戒心は最初から備えているということもあった。
「それで」
「そうか。ではいいのだな」
「うむ。それでいい」
あらためて頷いてみせるアイオリアだった。
「それではだ」
「じゃあアイオロス様、アイオリア様」
「これで」
青銅の者達が明るく彼等に言ってきた。
「楽しくシドニーまでということで」
「まずはコアラを観ますか？」
「それかカンガルーか」
オーストラリアだけにいる動物達の話が自然に出て来た。オーストラリアといえばどうしてもそうした動物達が浮かび上がってくるのであった。
「そういったものを観ながら」

「そうしますか」
「そうだな」
アイオロスもそうした動物達の名前を聞いて満足した顔になっていた。
「他にはウォンバットもいるしな」
「そうですよね。他にはディンゴとか」
「そういう動物達を観ながら」
青銅の者達はアイオロスの今の言葉にさらに乗るのだった。
「帰りましょう」
「明るくですね」
そんな話をしながら帰路の旅について明るく話す彼等だった。こうして彼等は意気揚々と帰路に着くのだった。オーストラリアでの戦いはこれで終わったのだった。

第七十五話　　完

２００９・１２・３

第七十六話　最後の封印へその一

最後の封印へ

アイオリアはアイオロスと共にオーストラリアから聖域に帰った。
二人は白銀と青銅の者達を下がらせるとそのまま教皇の間へと向かうのだった。
「それではな」
「はい、それでは」
「俺達はこれで」
ダイダロスとダンテが彼等を代表してアイオリアに応える。
「教皇への御挨拶は俺達がしておく」
「ではゆっくりと休むのだ」
アイオリアだけでなくアイオロスも微笑みながら彼等に告げた。
「いいな。それでだ」
「後は私達がしておく」
「教皇への御報告はですか」
「何か悪いですね」
「構うことはない」
それはいいというアイオリアだった。
「これもまた黄金聖闘士の務めだ」
「だからだ」
こう言ってそれはいいとしたのだった。
そうしてだった。二人でそのまま教皇の間に向かう。その遠い階段を登りそのうえで教皇の間の前に来るとだった。白い宮殿の前に黄金の彼等がいた。
「よお、遅かったな」
「待っていたぞ」
まずはデスマスクとシュラが彼等を迎えたのだった。当然他の者達もいる。

「てっきりそのままオーストラリアで観光三昧かと思ってたがな」
「思ったより遅かったな」
「遅かったのか」
「これで」
二人は彼等の言葉を聞いてこう返したのだった。
「確かにあまり急がなかったが」
「遅くなっていたか」
「何、少しだけです」
今度はアフロディーテが彼等に告げてきた。その右手にはいつもの紅薔薇がある。
「これから薔薇を敷きますので。それでは」
「あえてデモンローズをどけていてくれたのか」
「私達の為に」
アフロディーテのさりげない心遣いだった。彼もまたそういうものを持っているのだ。
「有り難い。それでは」
「すぐに教皇の御前に行くとしよう」
「そうだ。では行こう」
アルデバランも二人に声をかけてきた。
「教皇がお待ちだ」
「見たところ」
今度はカミュだった。
「戦果はあったようだな」
「それはどうかな」
しかしアイオリアは彼の今の言葉に懐疑的な言葉と顔で返したのだった。
「果たしてな」
「違うというのか？」
「アスモデウスとは決着がつかなかった」
だからだとミロに返した。

「それでだ」
「そうか。だがそれも仕方のないことだ」
サガがその言葉を受けてアイオリアのフォローの声をかけた。
「気にすることはない」
「そうなのか」
「そうです。今は倒す時ではないのです」
シャカもそこにいた。
「それだけです」
「そうなのだろうか」
「とにかくだ」
またここでサガが言ってきた。
「今は教皇の御前に向かおう。それでいいな」
「そうだな。それでは」
「このまま」
こうして彼等は教皇の間に入りそのまま中を進んでいく。そうしてシオンの前で片膝をついて控えるのであった。
「御苦労だった」
「はい」
「有り難うございます」
シオンは己の一番前に横に並んで控えるアイオロスとアイオリアに対して声をかけた。二人もまたその声に対して応えて言葉を返した。
「アイオリア、報告は届いている」
「左様ですか」
「まずは誰も死ななかったことを喜ぼう」
聖闘士の中で誰も死ななかったことについて純粋に述べた言葉だった。それと共にアイオリアの自責の念もまた消してみせたのだった。

第七十六話　最後の封印へその二

「それをだ」
「有り難き御言葉」
「では暫し休むがいい」
アイオリアにはこう告げたのだった。
「よいな」
「はい。それでは」
「オーストラリアでの戦いの件はこれで終わりとする」
そうしてであった。あらためて話をするのであった。
「そうしてだ」
「次の戦いですね」
「それでは」
「そうだ」
まさにそれだった。そのことについての話をはじめるのだった。
「八つ目の戦いだが」
「今度は何処になるでしょうか」
「その場所は」
「インドだ」
その場所についてすぐに答えたシオンだった。
「そこでの戦いになる」
「インドですか」
「その地で」
「そこにはだ」
そして次に言う言葉は。
「ムウよ」
「はい」
「御前に行ってもらおう」
「わかりました」

ムウに対して告げるとすぐに返答が返って来た。彼は畏まってそれを受けるのだった。
「それではすぐに」
「八大公も最後の一人が出るだろう」
「といいますと」
「最後は」
「ルキフグスだ」
その魔神の名前も言うのだった。
「それが出て来る」
「ルキフグス」
「魔神の中の宰相」
その名は黄金聖闘士達も知らない筈がなかった。一度対峙しているからである。
「あの者がですか」
「出て来るのですね」
「八大公の中でも随一の頭脳を持っているという」
シオンはムウだけでなく他の黄金聖闘士達に対しても告げた。
「エリスからの信任も高い」
「八大公の中でもですか」
「ではそれだけの力も」
「八大公の実力は伯仲している」
この問いにはこう返したのだった。八大公同士の実力は黄金聖闘士達の間のそれと同じで伯仲しているというのである。そうなのだった。
「それはだ」
「ではその頭脳で、ですか」
「エリスからの信頼を」
「そうだ。八大公の頭脳だ」
まさにそうだというのだ。
「参謀と言っていい」

「ではその八大公の参謀が出陣する」
「そうなのですか」
「そうだ。だからこそムウ」
「はい」
またムウに声をかけ彼が応えるのだった。
「御前に言ってもらうことになるがだ」
「それで」
「やはり白銀聖闘士と青銅聖闘士達も連れて行くのだ」
彼にしてもそれは同じなのだった。
「いいな」
「畏まりました」
「この戦いが終わってもまだ戦いはある」
そしてこのことも言うのだった。
「まだだ」
「といいますと」
「アーレスが」
「そうだ。どうやらだ」
シオンはここで彼らに告げたのだった。

第七十六話　最後の封印へその三

「トラキアはアーレスの復活を目論んでいる」
「あの者達の主神の復活を」
「目論んでいるというのですね」
「そうだ。若しそうなればだ」
シオンの言葉が深刻なものになった。その声で言うのであった。
「トラキアの力は比較にならないものになる」
「では教皇」
サガが深刻な顔で問うてきた。
「その場合は」
「そしてだ」
さらに言うシオンであった。サガに応える形で。
「アーレスだけではない」
「といいますと」
「一体」
これには他の黄金聖闘士達もいぶかしむ声をあげた。片膝をついたままであってもそれでもそれぞれ顔をあげて言葉を出していたのである。
「まだ何かいるのでしょうか」
「だとすれば」
「冥皇ハーデスには二柱の腹心の神々がいたな」
シオンはまず彼等のことから話した。
「眠りの神ヒュプノスと死の神タナトス」
「はい」
「あの神々ですか」
彼等のこの二柱の神々のことは知っていた。先の聖戦においてもその恐ろしい力を見せたその彼等のことはだ。よく知っていたのだ。
「あの神々の様な存在といいますと」

「エリスの他にですか」
「まず争いの神エリスがいる」
シオンはまた言った。
「あの女神はアーレスの第一の側近だ」
「確か」
ここでアイオロスが言った。
「冥界で言うとパンドラの様な存在だったかと」
「それに近い」
それは認めるシオンだった。
「しかしだ」
「しかし」
「エリスは神だ」
このことも言うのだった。
「神だ。そこがパンドラとは違う」
「つまりあれですね」
デスマスクの口調はわざと軽口を出しているものだった。
「神様だから何もかもが半端じゃないってことですよね」
「パンドラはタナトスとヒュプノスの下になる」
ここが複雑なのだった。
「人であるからだ」
「しかしエリスは神」
今度はシュラが言った。
「そしてアーレスの妹となると」
「その地位はまさにアーレスの巫女」
アフロディーテは彼女をそうしたものと考えた。
「そうなりますね」
「そうだ。エリスはアーレスの代理にもなる」
シオンもそのことを認めた。
「丁度今あの女神がトラキアを司っているのがまさにそれだ」
「そしてですか」

カミュも言ってきた。
「そのエリスの他に」
「またトラキアに神が降臨する」
アルデバランもであった。
「そうなると」
「ではアーレスも入れて」
アイオリアもまた言う。
「トラキアにはさらに神々が集うと」
「それに対して我々は」
サガの言葉はやや危惧したものだった。
「アテナがおられない」
「そうだ」
シオンもまたそのことを指摘した。

第七十六話　最後の封印へその四

「我々にはアテナがおられぬ」
「はい、それは確かに」
「アテナは」
「だが聖戦が行われている」
アテナがいなくともだ。それは行われているというのである。
「そして聖戦にはだ」
「はい、何があろうとも」
「勝たなければいけません」
それは言うまでもなかった。絶対のことであった。
「その通りだ。ではムウ」
「はい」
「インドに行くのだ」
また彼に告げたのだった。
「よいな」
「はい、それでは」
こうしてムウの出陣が告げられた。そうしてそのうえで話が終わった。ムウが今まさに出陣しようというその時にだ。白羊宮にシャカが来たのだった。
「貴方がですか」
「はい、そうです」
彼は目を閉じたまま応えてきたのだった。
「貴方に伝えておきたいことがありまして」
「私に」
「宜しいでしょうか」
また言ってきたシャカだった。
「それでなのですが」
「戦いのことでしょうか」

「そうです。インドですね」
その戦場となる場所について問うたのだった。
「そこですね」
「はい、そこです」
まさにそこだと答えたムウだった。
「インドですが」
「インドは私の祖国です」
シャカはまずそのことを述べてきたのだった。
「あの国のことはよく知っています」
「そうですね。あの国のことは」
「聖もあれば魔もあります」
そして次はこんなことを言うのだった。
「どちらもです」
「それがインドという国なのですか」
「その通りです。インドにある魔は狂闘士達にとっても使えるものでしょう」
シャカは目を閉じたままムウの前に立ち告げるのだった。
「それに御注意下さい」
「確かルキフグスは」
その出て来ると思われる魔神についても話される。
「魔神達の中で最もバランスの取れた者だとか」
「そうです。八大公にはそれぞれ癖があります」
それがあるというのだ。
「その中でも、です」
「とりわけなのですね」
「魔を使うこともあるでしょう」
「それに気をつけてなのですね」
「そうです。ただ魔物達を操るだけではありません」
シャカは言った。
「その充満している魔を使うことも考えられます」

「そうですか。それでは」
それを聞いて応えるムウだった。
「私もまた」
「その都度冷静に戦局を御覧になって下さい」
今彼がムウに告げるのはこのことだった。
「宜しいですね」
「わかりました。それでは」
「では」
ここまで話すとだった。話を止めるシャカだった。そうしてムウが身支度に入ろうとする前に去ろうとする。だが今度はムウが彼を呼び止めたのだった。
「そういえば貴方は」
「何でしょうか」
踵を返して一歩前に出たところで立ち止まって言葉を返した。
「一体」
「この聖戦では聖域を守られていますが」
「それが何か」
「それで何を見られているのでしょうか」
それを問うのだった。

第七十六話　最後の封印へその五

「一体何を」
「私はトラキアを見ています」
顔をムウの方に少し向けての言葉だった。
「トラキアをです」
「そうですか。トラキアをですか」
「はい」
まさにそうだというのだった。
「その通りです」
「ではトラキアには一体何が」
「今は何もありません」
ないというのだった。
「何もです」
「今は、ですか」
「間違いなく何かを考えています」
しかしそれは感じ取っているのだった。この辺りは流石であると言えた。
「ですから。御注意を」
「トラキアでもまた、ですか」
「アーレスの降臨だけではなく」
「その何かもなのですね」
「彼等が何か。それもまた問題なのです」
シャカの声はいつも通りだがそこには深く見ているものがあった。
「アーレスだけではないのですから」
「ではこの戦いが終わっても」
「戦いはそれからです」
シャカの今度の言葉は断言であった。
「私達の戦いはです」

「アーレスの降臨だけは防ぎたいですが」
「それは最悪の結果です」
「最悪の、なのですね」
「そうです」
まさにその通りだというのだ。
「ですがその最悪の事態になってもです」
「なろうともですか」
「私達は戦わなければなりません」
強い言葉になていた。シャカのそれにしては珍しくだ。
「必ずです」
「そうですか。必ずですか」
「その通りです。何があろうともです」
それは絶対に引けないというのだった。シャカもまた。
「アーレスが復活してもです」
「そうなろうとも」
「それでは貴方に御聞きします」
ムウに対する言葉だった。
「宜しいでしょうか」
「はい、それは」
ムウもまた強い表情でシャカの言葉に頷く。
「何があろうとも」
「私もそれは同じです。そして」
「そして？」
「黄金聖闘士ならば誰もがです」
その心は同じだというのだ。
「誰もがアーレスがこの世界に現われようとも怯みません」
「そうですね。では」
「行って下さい」
ムウを見送る言葉だった。
「戦いに」

「わかりました」
こうして出陣するムウだった。白羊宮を出て戦場に赴く彼の前に二人出て来た。
「私達が」
「お供させてもらうよ」
「貴女達がですか」
ムウは彼女達を見て言った。一人は赤髪に仮面の女でもう一人は緑の髪に仮面の女だった。聖闘士が女であった場合には仮面を着ける、それを守ってのことだ。見れば二人共実に動きやすいジーンズをはいている。そこもまた戦士らしい服装であった。
「イーグルの魔鈴に」
「ああ」
「蛇使い座のシャイナ」
「そうさ。あたし達がだよ」
まさに彼女達がというのである。
「教皇の御命令でね」
「それでいいね」
「早いですね。もうですか」
ムウは彼等の名乗りを受けて微笑んで述べた。

第七十六話　最後の封印へその六

「出陣する白銀聖闘士が決まっていたのですか」
「おや、妙なことを言うね」
「それはまた」
しかしだった。彼女達はムウの今の言葉を受けてこう返してきたのだった。
「そんなのいつも決まってるさ」
「黄金聖闘士が出陣するその時にはね」
「そうなのでしたか」
「そしてあたし達だけじゃないよ」
「青銅もだよ」
彼等もだというシャイナと魔鈴だった。
「四人共ね」
「もう来てるよ」
「もうですか」
ムウが声をあげたその時にだった。もうその四人が来ているのだった。
「どうも、ムウ様」
「じゃあ私達がですね」
「同行させてもらいます」
「いいですね」
「貴女達がですか」
ムウはここでまた少し驚いた顔になった。何と今度も全員女だったのだ。
「カメレオンのジュネ」
金髪の美しい少女だった。
「子狐座のスカーレット」
赤い髪の小柄な少女だ。

「カシオペアのクレウサ」
収まりの悪い茶髪の少女である。
「風鳥星座のカサンドラ」
長い黒髪の少女だ。この四人だった。
「私達がです」
「それで宜しいでしょうか」
「ええ、私は構いません」
こう返したムウだった。
「ですが。全員女性とは」
「まあ何か残った人間の関係でね」
「そうなったみたいだね」
そうだと述べるシャイナと魔鈴だった。
「けれどあんたなら妙なことはしないからね」
「それもあるんだよ」
「私は信頼されているということでしょうか」
それを聞いて少し微笑んでから述べたムウだった。
「女性に対して何もしないということは」
「だってムウ様ってね」
「明らかにそういう人ですし」
「黄金聖闘士の中で一番人気なんですよ」
青銅の者達もここで言ってきた。
「中性的な面持ちにお優しい性格で」
「もうダントツなんですよ」
「そのムウ様と御一緒なんて」
「もうそれだけです」
「あのですね」
彼女達ののろけたような言葉に幾分引きながら返すムウであった。
そうしてそのうえで。こう彼女達に告げた。
「私はアイドルではないのですが」
「それはわかってますよ」

「勿論ですよ」
「ねえ」
「そんなことは」
四人はそれはわかっているという。しかしであった。
「それでもムウ様と御一緒したかったし」
「私デスマスク様でも」
「私はシュラ様でも」
「アフロディーテ様も」
今度はそれぞれのほかに贔屓の黄金聖闘士の話にもなる。
「アルデバラン様も頼りになるし」
「アイオリア様の一途なところもいいじゃない」
「カミュ様のクールさも」
「シャカ様なんて凄く神秘的じゃない」
「あの、一人欠けてませんか」
思わずこのことにも突っ込みを入れたムウだった。
「若しかして」
「年長組では誰がいい？」
「私サガ様」
「私アイオロス様」
「どちらも捨て難いわね」
やはり一人忘れられていた。
「まあミロ様もね」
「悪くないけれど」
「何ていうかまあ」
「一応はね」
「一応なのですか」
それについてはあまりとかくは言わないムウだった。この辺り謙虚さも備えている彼らしかった。

第七十六話　最後の封印へその七

「それではいいのですが」
「それでムウ様」
「これからですけれど」
「はい」
ようやく話が戻ったのであった。
「インドに行かれるんですよね」
「私達と一緒に」
「まあそうです」
彼女達のペースのまま話すムウであった。
「それはその通りです」
「いや、そうじゃないよ」
「そこはね」
しかしここでシャイナと魔鈴が四人に対して告げるのだった。
「あんた達が同行するんだよ」
「私達も含めてね」
「ってことは」
「ムウ様のお供ってことですよね」
「それって」
「その通りだよ」
また彼女達に告げるシャイナだった。
「そのことよくわかっておくんだよ」
「はい、わかりました」
「けれど」
しかしだった。ここで青銅の四人はそのシャイナと魔鈴に言ってきたのだった。
「シャイナさんも魔鈴さんも」
「そうよね」

「何だか」
「んっ、何だい？」
「私達に何かあるのかい？」
「タメ口だし」
彼女達が二人に対して言うことはこのことだった。
「ムウ様に対して」
「相手は黄金聖闘士なのに」
黄金聖闘士と白銀、青銅のそれぞれの聖闘士達とでは実力だけでなく地位や待遇も全く違う。マントを羽織りそれぞの宮殿が置かれていることからもそれは窺える。
「それでタメ口って」
「いいんですか？」
「敬意は言葉で出すものじゃないよ」
「そういうことだよ」
二人が言うにはそうなのだった。
「その態度で表すんだよ」
「それをわかっておくことだね」
「そうかしら」
「何か御二人って態度もね」
「普段からね」
そう話すのだった。確かにシャイナと魔鈴の態度は青銅の四人から見るとどうにもあまりいいものではなかった。少なくとも黄金聖闘士に対するものではなかった。
「だからそれはちょっと」
「どうかしら」
「そのうちわかるよ」
「それはね」
しかし四人はこう言って彼女達の言葉をしりぞけたのだった。
「まあそれはとにかくだよ」
「行くよ」

こう二人から言ってきた。
「インドにね」
「いいね」
「はい、わかりました」
「それじゃあ」
このことには素直に頷く四人だった。そしてムウにも話がいくのだった。
「じゃあムウ様」
「いざインドへ」
「行きましょう」
また彼女達からの言葉だった。ここでまたシャイナと魔鈴がそんな二人を注意するのだった。
「だからね。ここはよ」
「あんた達じゃなくて」
「ああ、いいですよ」
しかし温厚なムウは微笑んでそれはいいとしたのであった。
「それは特に」
「だから黄金聖闘士だから」
「それはね」
彼女達も彼女達に彼に敬意を払っていることが窺えた。
「よくわかったね」
「そういうことだよ」
「そうですか。それではです」
ここまで言われてようやく自分から話す彼女だった。
「インドへ」
「はい、ムウ様」
「行きましょう」
あらためて出されたムウの言葉に笑顔で頷く。こうしてそのインドに向かうムウ達であった。

第七十六話　完

2009・12・7

第七十七話　最後の八大公その一

最後の八大公

エリスの部屋において八大公達が玉座に座る彼女に告げていた。
その光景は普段と同じである。彼等もそれぞれ片膝をついて控えている。
「黄金聖闘士はアリエスのムウ」
「そしてです」
「そして。何だ？」
「白銀及び青銅の者達はです」
「全て女です」
このことも告げられるのだった。
「つまりアリエス以外はです」
「女です」
「女か」
「はい、女です」
「六人はです」
このことが話される。するとエリスの表情が微妙なものになった。
そうしてそのうえで八人に対して告げるのであった。その言葉は。
「確かだ」
「確か？」
「といいますと」
「白銀の女聖闘士はイーグルと蛇使い」
シャイナが挙げてきたのはその二人だった。
「その二人だったな」
「はい、そうです」
「そうか、聖域はか」
「はい、出陣しました」
「七人です」

「その二人です」
「わかった」
そこまで聞いて頷くエリスだった。そのうえでまた言う。
「あの者達は白銀の者達の中でもとりわけ強い小宇宙を持っている」
「そうなのですか」
「それ程までに」
「それに注意することだ」
彼女は言うのだった。
「そうしてだ」
「そうして」
「他には」
「次にはアリエスだ」
彼のこともだというのである。
「アリエスのムウだ」
「あの男ですか」
「あの男もなのですね」
「あの男の実力もかなりのものだ」
このことも言うのであった。
「先のハーデス様との聖戦で生き残った二人の聖闘士のうちの一人」
「はい、それは存じております」
「既に」
そのことはもう知っている彼等であった。言われるまでもなかった。
「そしてアリエスはその弟子」
「そうなのですね」
「その通りだ。その実力はかなりのものだ」
さらに話されるのだった。
「黄金聖闘士の中でもかなりのものだ」
「では一体」
「誰が」

「既に行くべき者は決めている」
こう八大公に対して告げた。
「既にだ」
「といいますと」
「それは」
「最期の八大公」
言いながらその彼を見ての言葉だった。
「よいな」
「はい」
その彼が顔をあげた。そしてエリスに応えるのだった。
「それではエリス様」
「うむ。そなたが行くがいい」
「わかりました」
応えたのはであった。リーヴェであった。ルキフグスの彼であった。
「では今より」
「場所はわかっているな」
「無論です」
涼しげな笑みを浮かべてエリスに応える。

第七十七話　最後の八大公その二

「インドであります」
「それではだ。すぐに向かうがいい」
「畏まりました。それでは」
「無論共も連れて行くのだ」
「はい」
それにも応えるのだった。
「その人選もまた」
「とはいっても」
ここで少し苦笑いになるエリスだった。
「今のところ生き残っている者だけだがな」
「残念ながら」
「しかし」
ここでまた言うエリスだった。
「それも間も無く終わる」
「間も無くといいますと」
「それは」
「すぐにわかる。まずはだ」
それから先は今は言わないエリスだった。思わせぶりな笑みを見せるだけである。そうしてそのうえでそのリーヴェに対して言葉を続けた。
「インドへだ。よいな」
「わかっております。それでは」
こうしてリーヴェはインドに出陣することになった。インドでの戦いがはじまろうとしていた。
ムウ達はインドに辿り着いた。そこはニューデリーだった。
「うわ、噂以上に」
「凄い街ですね」

「人も多いですけれど」
青銅の面々がそのニューデリーの街を見回してそれぞれ言う。
「牛もいますし」
「ヨガをしている人とか」
「独特ですね」
まさに異文化を見ての言葉だった。少なくとも聖域のあるアテネとは全く違っていた。
「笛を吹いてコブラを操ってる人もいますし」
「これがインドなんですね」
「カレーの国ですか」
「こら、あまりきょろきょろするんじゃないよ」
シャイナがこう彼女達を注意する。今は聖域の外なので仮面ではない。しかしムウはそれを見てはならない為かなり濃いサングラスをかけている。
それで実質見えないようになっている。それでセブンセンシズで周りを見ているのだった。
そのムウがだ。ふと言うのだった。
「それにしても」
「それにしても？」
先頭をいく彼に応えたのは魔鈴だった。
「何かあったのかい？」
「いえ、この街のことです」
彼もこのニューデリーのことを話すのだった。
「この街は確かに凄い街ですね」
「ああ、そうだね」
それは魔鈴も認めるところだった。
「何かね。秩序だっていないっていうかね」
「カオスですね。ですが」
「それがいいっていうんだね」
「はい、独特の趣があります」

こう言うのである。
「これがインドなのですね」
「そうだね。これがね」
「インドなんだね」
魔鈴だけでなくシャイナもそれに応えてきた。
「一見するととんでもない国だけれどな」
「それから感じ取ることができるね」
そういう国だというのであった。インドは。
「それじゃあまずは」
「どうするんだい？」
「何か食べましょう」
ムウの提案はこれであった。
「とりあえず着きましたし」
「じゃあカレーですね」
「それですよね、やっぱり」
「インドですから」
青銅の者達は笑顔でこの料理を出してきたのだった。

第七十七話　最後の八大公その三

「インドですからカレーを食べましょう」
「是非共」
「カレー以外にありませんし」
「カレー以外にはですか」
それを聞いてサングラスの奥で微妙な顔になるムウだった。
「それはまた」
「あの、ムウ様まさか」
「カレーがお嫌いとか」
「そういうことですか？」
「いえ、それはありません」
カレーの好き嫌いはないと答えはした。
「カレーは好きな方です」
「そうですよね。ギリシアにもインド人いますしね」
「あの人達のカレーがありますから」
「ですから」
「ただです」
しかしここでムウはまた言うのだった。
「あのカレーはインドのカレーではありません」
「あれっ、そうなんですか！？」
「あれ本場のカレーって言ってますけれど」
「違うんですか？あれって」
「チキンカレーも野菜カレーも」
流石に彼等もインドでは牛肉を食べないことは知っている。インドでは宗教的な理由で牛肉を食べない者が多い。従ってビーフカレーというものはないのだ。
「本場のカレーって宣伝してますし」
「それで食べてたんですけれど」

「凄く美味しいですよ」
「ちゃんとお米使ってますし」
「インド人は商売上手です」
ムウはこのことも話した。宗教やカーストが大きく影響するにしてもインド人もまた天性の商人であることはよく知られていることなのである。
「ですからそうした宣伝は普通です」
「えっ、それじゃあ何か」
「過剰宣伝じゃないですか」
「そうですよ、それって」
「ですからそれも商売のうちです」
こう言ってそれはそのまま受け入れているのだった。
「ですから特に驚かれることはありません」
「そうだったんですか」
「じゃあ辰巳さんのお店のカレーも」
「あれもやっぱり」
「あれは日本のカレーです」
ムウはそれであると青銅の四人に話した。
「とろりとしたカレーですよね」
「はい、何かお米も柔らかくて」
「そうしたカレーですけれど」
「あれは日本のカレーです」
それであるとまた話すムウだった。
「日本のカレーはまた独特なのです」
「何かカレーっていっても」
「色々なんですね」
「本当に」
青銅の四人はこのことをあらためて強く思うのだった。
「じゃあ本場のカレーって一体どんな」
「どんなのなんでしょうか」

「はっきり言って全然違うよ」
「それ見て驚くかもね」
魔鈴とシャイナはこう言うのだった。
「そのカレー見たらね」
「そもそもカレーじゃないしね」
「ああ、そうですね」
「カレーじゃないですよね」
彼女達はこのことも知っていた。インドではカレーとは呼ばれないのである。それでは一体何と呼ばれるかである。その呼ばれ方は。
「カリーでしたよね」
「確か」
「そうだよ、それだよ」
「カリーっていうんだよ」
まさにそれだというのだった。カリーなのである。
「カリーだからね」
「カレーじゃないからね」
「何か少し違うだけれだけれど」
「それで通じないのね」
「何かややこしいわね」
彼女達は怪訝な顔になって首を傾げさせた。彼女達にしてみればそうなのである。

第七十七話　最後の八大公その四

「それもね」
「しかもそこまで違うのね、中身も」
「どんなのかしら」
「それは言ってみてだよ」
「いいね、それで」
白銀の二人はそれから先はあえて言わないのだった。何故あえて言わないのかというとどうやらそれを知ることこそが楽しみだからのようだ。
「それじゃあムウ」
「どのお店に入るんだい？」
「そうですね。あそこはどうでしょうか」
近くの一店を指差したのだった。
「あのお店は」
「そうだね、あそこはね」
「結構いいかもね」
その店を見て応える二人だった。見ればその見せは外装は質素である。だが小さめの扉から出入りする人々は多い。その人の出入りから見ての言葉だったのだ。
「それじゃああそこにね」
「入ろうか」
「はい、それでは」
こうして一行はその店の中に入った。店の中は雑多であり外から見るよりは広かった。かなり古い扇風機がギコギコとした音を立てて首を回しており店の客達に風をあてている。そして中の客達が食べているそのカリーも見るのであった。
白い壁のと床で椅子もテーブルも全て木製である。大きな葉の上に置かれたカリーは。

「あれっ、葉の上に置いてあるけれど」
「そうよね」
青銅の彼女達はまずこのことが目に入ったのだ。
「お皿じゃないの」
「葉がお皿になってるみたいだけれど」
「インドじゃそうなんだよ」
「インドではね」
それだというのである。魔鈴とシャイナが話すのだった。
「元々皿とかそういうものは使わなくてね」
「ああやって葉の上に乗せて食べるんだよ」
「ふうん、そうなんだ」
「そうして食べるんだ」
青銅の四人はそれを言われてまず感心した顔になって頷いた。
「最初は何かって思ったけれど」
「それに」
ここでまたあることに気付いた。それは。
「手で食べてるのね」
「そうね、指でね」
「食べてるわね」
このことにであった。そしてこのことを見るとであった。
「これは知ってたけれど」
「成程ね、実際にそうなのね」
「インドじゃ手で食べるのね」
「それは知ってたみたいだね」
「どうやら」
白銀の二人は彼女達の言葉を受けて述べた。そんな話をしながら店の者の案内を受けて空いている席に座る。そのうえでさらに話をするのだった。
「インドじゃ手で食べるっていうのは」
「知ってたみたいだね」

「ええ、それはね」
「知ってたわ」
まさにそれは知っているというのだった。席についたうえでさらに話す。
「ただ。実際に見るとね」
「本当にそうだったのね」
「そうだよ。あたし達は前にインドに来たことがあるけれど」
「あんた達ははじめて見たみたいだね」
「インド来たのはじめてだから」
「それでね」
彼女達四人はこの国に来たことははじめてである。だから知識では知っていても実際には見たことがなかったのである。それでなのである。
「葉の上に乗せてそれで手で食べる」
「それがインドのカリーなのね」
「そうさ。それでね」
「カリーの中身もね」
ここでそのカリーが来た。それはだった。
「あれっ、お野菜だけね」
「野菜カリーなのね」
「ああ、そうさ」
「そうなんだよ」
まさにそうだというのである。それがインドのカリーだというのだ。

第七十七話　最後の八大公その五

「これはインドの宗教的な関係でね」
「そうなってるんだよ」
「あとは鶏肉だったわよね」
「主なのは」
「そうだよ。インドはね」
「豚肉もあるけれどね」
それもあるのだという。だがあくまでメインはそれだというのである。その野菜のカリーだというのである。
「野菜とかそういうのが多いからね」
「そこもわかっておくことだね」
「美容にいいんじゃない？」
「そうよね」
「野菜ばかりだと」
青銅の四人はその野菜の多さに気付いて言うのだった。
「そういえばインドの女の人って」
「そうよね。痩せてる人ばかりよね」
「やっぱりベジタリアンだからなのね」
それで納得するのだった。食べ物の関係だというのだ。
「じゃあ私達もここじゃカリーばかり食べて」
「もっとスリムになって」
「美人になれるのね」
「そうだね。ただしね」
「気をつけることはあるよ」
魔鈴とシャイナはもうカリーを食べている。やはりその右手の指で見事に食べながらそのうえで四人に対して話すのであった。
「インドは甘いものも多いからね」
「果物だけじゃなくてお菓子とかもね」

「じゃあそれを食べ過ぎたら」
「まずいってことね」
彼女達もそれがわかったのだった。甘いものがダイエットにあまりよくないことはよく言われることである。これはダイエットの基本である。
「そういうことなの」
「まあそうでしょうけれど」
二人の今の言葉に納得して頷く。そうしながら食べているとであった。そのカリーの汁気の多さと独特の味にも気付いたのである。その味はというと。
「うっ、これは」
「確かにね」
「辛いわね」
「それもかなり」
カリーを食べた時の感想をそのまま言う四人だった。
「予想通りだけれど」
「いや、予想以上だけれど」
「そうかも。これは」
「かなりくるわね」
「辛いものは徹底的に辛いんだよ」
「そして甘いものは何処までも甘いんだよ」
魔鈴とシャイナはここでまたその四人に話した。
「それがインドなんだよ」
「それがわかったかい？」
「何ていうか身を以って」
「想像以上に」
こう返す四人だった。顔から汗を流しながら。
「辛い、本当に」
「唐辛子に胡椒に」
「あと色々」

とにかく香辛料を大量にかつ多くの種類を使っていく。それがインド料理だ。香辛料こそがインド料理と言っていい位なのである。

「何ていうかこれは」

「殺人的だけれど」

「ほら、これ飲みな」

「水よりずっといいよ」

その四人にあるものを差し出す二人だった。その差し出したものは。

「白いっていうとミルク？」

「けれどどろっとしてるし」

「ヨーグルトなのね」

「それなの」

「そうだよ、それだよ」

「これを飲むんだよ」

ここでまたそれを飲むように話すのだった。そのヨーグルトをだ。

「そうすれば随分と楽になるからね」

「ただし砂糖とかはね」

「入ってないのね」

「それは」

「いや、入ってるよ」

入っているというのである。それはなのだ。

第七十七話　最後の八大公その六

「けれど用心しなよ」
「覚悟は必要だよ」
「覚悟って何が一体」
右手の指をテーブルの上にカリーと一緒に置いてあるボールの中の水で洗ってからそのヨーグルトが入ったコップを受け取り飲む。するとその味は。
「・・・・・・これはちょっと」
「甘過ぎるっていうか」
「お砂糖入れ過ぎ？」
「極端じゃないの？」
四人はそれぞれそのヨーグルトを飲んで今度は口を難しくさせていた。先程までの汗と混ざり合ってそれでそうした顔になっているのだった。
「甘いものはとことん甘いっていっても」
「これはちょっと」
「あんまりなんじゃ」
「これがインドなんだよ」
「わかったね」
その四人にまた話す二人だった。
「食べ物だけじゃないからね」
「ここは異次元だよ」
「油断したら何が何かわからなくなるから」
「それも用心しておきなよ」
インドという国全体がだというのだ。四人はそれを聞いてあることに例えるのだった。
「シャカ様みたいな感じ？」
「あの方みたいな」

「捉えどころがないっていうか」
「ああした感じかしら」
彼がインド出身であることから思ったことである。
「あの方って何考えてるかわからないし」
「お優しいのかしら」
「怒ったところ見たところないけれど」
「いつも物静かだし」
しかしであった。ここでまた白銀の二人が言うのだった。
「まあ怒らせないことだね」
「何があってもね」
「あれでかなり気紛れだし」
「全然優しくないよ」
シャカのその人間性についての言葉である。
「あれでね。黄金聖闘士の中で一番怖いからね」
「何するかわからないから」
「絶対に怒らせたら駄目よ」
「とんでもない方法で死ぬよ」
「とんでもないって」
「シャカ様って」
四人は魔鈴とシャイナのその言葉にそれぞれ顔を見合わせて困惑した顔になる。そしてそのうえで言葉を出し合うのであった。
「怖い人なのね」
「シャカ様のそうした性格もカリーとヨーグルトが作ったのかしら」
「極端な性格って」
「とにかくインドだからね」
「用心しときなよ」
二人はさらに注意するのだった。そしてここでムウを見てみるとだった。
「そういえばあんたは」
「表情変わらないね」

「ネパールですが」
彼が生まれ修業していたその国である。
「あの国の料理もかなり辛く甘いものですから」
「ネパールもですか」
「インドと同じだからなんですね」
四人はムウの言葉からそれを察した。
「そういえばあの国はインド文化圏ですね」
「それで辛さと甘さが極端なんですか」
「けれどムウ様は」
「シャカはあれは特別だからね」
魔鈴が四人に告げる。
「ムウはまた違うんだよ」
「そうですよね。ムウ様はムウ様ですよね」
「お優しくて穏やかで」
「気品があって」
ムウの評判のよさはこうしたところから来るのである。
「それじゃあ安心して」
「インドでの戦いを続けさせてもらいます」
「インド自体にはかなり思うところがありますけれど」
今は戦いのことよりもまずインドというその異文明に対する感情と戦う彼女達だった。しかしその中でムウだけは穏やかであった。
「それではです」
「はい、それでは」
「一体」
「これを食べ終わったら出発しましょう」
既に食べてからのことを考えているのだった。
「戦いの場へ」
「ええ、このカリーを食べたら」
「ヨーグルトも」
「デザートもあるからね」

「それもね」
それもあるというのである。
「果物がどっさりとね」
「それも食べなよ」
「何か食べるの多いみたいね」
「この国って」
「やっぱり凄く甘そうだし」
またしても食べ物の話になる。
「辛いのも続くし」
「それがね。何か凄そうだけれど」
「果たしてどうなるか」
「何、大したことはありませんよ」
しかしムウは穏やかな顔で言うだけであった。
「何ともありません。同じ人間です」
「そうですか」
「人はですか」
「ただ」
しかしであった。ここでムウの言葉が少し変わった。
そうしてであった。彼は言う。
「シャカみたいな人は本当にいますので」
「ってそれもやっぱり」
「凄い国じゃないですか」
そのことを認識せざるを得ない四人だった。何はともあれインドでの戦いがはじまるのであった。それもまた激しいものになろうとしていた。

第七十七話　　完

2009.12.11

第七十八話　ムウの技その一

ムウの技

ムウと六人はその戦場に向かっていた。そこは。

「ええと、カルカッタ！？」

「滅茶苦茶遠いじゃないですか」

「ギリシアが幾つも入りますよ」

青銅の四人がその場所を聞いてまず驚きの声をあげた。

「このニューデリーからだと」

「それに人は相変わらず多いし」

「しかも私達って今」

「普通に歩いてますけれど」

こうも言うのであった。

「まさかこのままカルカッタまで歩くとか」

「そういうのですか？」

「あそこまで」

「いえ、それはありません」

流石にそれは否定するムウだった。彼等は今そのニューデリーを出ようとしている。その最中なのだ。

「ただ。車はありません」

「車っていうと自動車ですか」

「それはないんですか」

「残念ですが」

一応こう言いはする。

「それはありません」

「じゃあ船とかですか？」

「けれど船にしろ」

彼女達もインドの地理は多少は知っている。脳裏の中でそれを描いてみると。

「カルカッタまではないし」
「そうよね、それもないし」
「インドって色々な場所が入り組んでるから」
それがインドである。地理的にもモザイクなのだ。ただ暑い国ではないのだ。
「ただ船だけで行けないしね」
「カルカッタまでとても」
「そんな場所だから」
「自動車はありませんが車はあります」
するとここでまたムウが言ってきたのだった。
「それはです」
「っていいますと」
「馬車ですか？」
「それですか？」
「いえ、牛車です」
ところがであった。ここで出て来たのはそれであった。
「牛車を用意してもらっています」
「牛・・・・・ですか」
「ここでも牛なんですか」
「何か如何にもインドっていうか」
青銅の四人はさながら旅行客の様に話を聞いて唖然となっていた。傍から見ればまさに若い旅行客一行だ。実際に側では日本人の女の子達がインドに唖然となっている。
「牛多過ぎ、この国」
「カレー辛過ぎだし」
「暑過ぎだし」
「話に聞いていた以上じゃない」
こんな風に日本語で話をしていた。
「無茶苦茶っていうかね」
「何か日本と全然違うし」

「訳わからないし」
「ターバン巻いてる人ばかりだし」
「おトイレだって」
完全に彼女達と同じであった。
「何で紙ないのよ」
「便器から豚さん顔出すし」
「どういう国なのよ」
そんな話をしていた。そしてそれを聞いた青銅の四人はというと。
「何か私達がいるけれど」
「日本人だけれどね」
「そっくりじゃない」
「っていうか鏡!?」
彼女達は日本語がわかるのでそう思ったのである。
「私達が今見てるのって」
「そう思う？やっぱり」
「ええ、何かね」
「どうにもね」
「まあインドだからね」
「誰だって最初はそう思うよ」
ここでまた魔鈴とシャイナが彼女達に話してきた。
「あたし達だって最初は」
「何だって思ったからね」
「全くだよ。普通に道を牛が歩いてるからね」
「あれはないね」
このことを言うのであった。

第七十八話　ムウの技その二

「牛が普通にねえ」
「これがインドなんだってね」
「最初は唖然となったね」
「本当にね」
「魔鈴さん達もだったんだ」
「やっぱり」
四人はこのことを聞いてあらためて納得したのだった。
「それだけのものがあるわよね」
「インドってね」
「何があるかわからないし」
「何か人も」
ここで周りを見るとであった。誰もが同じ様な格好をしている。女性もだが特に男性は。誰もがターバンを巻いて髭を生やしているのである。
「そういえばインド映画って」
「どうしたの？」
「何かあるの？」
インド映画の話もするのであった。
「普通にスクリーンで上演されるんでしょう？」
「別におかしくないわよね」
「滅茶苦茶おかしいのよ、これが」
「もうね」
こんな風に話されていく。
「誰も彼もが踊るし」
「歌うし」
「そんなのだから」
「何が何なのか」

これが彼女達のインド映画への感想だった。
「わからないけれど」
「ねえ」
「ストーリーも何か」
「わからないしね」
「それはわかるよ」
「あたしもね」
魔鈴とシャイナもインド映画に関しては彼女達と同じ感想であった。
「ちょっとね。あれはね」
「わからないね」
「そうよね。そんなのだから」
「ちょっと。何ていうか」
「抵抗があるから」
「かなりね」
四人はかなり戸惑う顔で述べてみせた。
「だよねえ。何かね」
「どうなんだろう、本当に」
「まずい！？っていうか」
「わかりにくいなんてものじゃないから」
それを口々に言うのであった。
「インド映画はちょっと以上に」
「あまり観ることはないかなって」
「思うんだけれど」
「そんな暇もないでしょうし」
「はい、残念ですがその時間はありません」
ムウもそれはないというのだった。
「このままカルカッタにです」
「向かうんですね」
「このまま」

「そうです」
またはっきりと答えるのだった。
「牛車で、です」
「牛車っていうと」
「あれですか？馬車で馬の代わりに牛が」
「そんな感じですか」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのである。
「牛に曳かれてそのままインドをですね」
「ううん、やっぱりですか」
「さっきも御聞きしましたけれど」
「本当に牛さんで」
「凄い話ですね」
「では行きましょう」
かなり唖然とする彼女達にさらに告げるムウだった。

第七十八話　ムウの技その三

「その牛車のところにです」
「ええ、じゃあまあ」
「とにかくそこにですね」
「それでカルカッタに」
このことはもうムウが決めていた。それならば決定だった。何しろ彼もまた黄金聖闘士なのだ。聖闘士の中で頂点に立つ彼なのだ。
「行きましょう」
「そうだね。道は長いけれどね」
「行くとするかい」
魔鈴とシャイナはここでも冷静であった。
「のどかとはいかないだろうけれどね」
「それでもね」
「何か注意することあります？」
「旅の途中に何か」
「それありますか？」
ここで四人はまたムウに尋ねるのだった。
「あったら何ですか？」
「それは」
「そうですね。暑さや疫病は私達なら大丈夫ですが」
それはまさに聖闘士だからである。
「蠍や毒蛇も」
「うわ、そんなのまで」
「やっぱりいるんですね」
「水はあれですね」
ムウは水の話もここでするのであった。
「やはり生水は飲まないことですね」
「あっ、身体に悪いからですね」

「やっぱり一旦沸騰させてからですね」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのである。
「それにも気をつけて下さい」
「わかりました」
「あと食べ物にもですか」
「水と食べ物が一番問題ですので」
これは聖闘士でもなのだった。人間やはりこれからは逃れられない。
「だからです」
「それじゃあそれもですね」
「後は」
「何かありますか？」
「そうですね。他はないですね」
ムウは少し考えてからまた述べた。
「では行きましょう」
「はい、それじゃあ」
「今から」
こうして彼等は牛車に乗ってそのうえでカルカッタに向かうのだった。ところが六人は牛車のそのほろの中にいてムウは別の牛の背中にいる。牛は複数いるのだった。
「あれっ、何で」
「ムウ様はそこに」
「中に入られないんですか？」
「私はここでいいです」
その白い牛の背に座禅をする様に座りながらほろから顔を出してきた彼女達に答えるのだった。
「ここで修業も兼ねてこうしています」
「そうなんですか。座禅もされて」
「それでなのですね」

「いや、中々いいものです」
彼はにこりと笑って彼女達に返したのだった。
「こうしてインドの景色を見るのもです」
「そういえばここは」
「見渡す限りの平原ですね」
「凄い場所ですね」
まだニューデリーを出たばかりだ。一面水田である。
そこに多くの人が働いている。のどかな光景ではある。そしてやはり牛もいる。
「これはギリシアにない場所ですね」
「これもインドなんですか」
「こうした場所も」
「その通りです」
答えるムウの言葉は温厚なものだった。
「それを心の目で見るというのもいいものです」
「セブンセンシズで見る」
「それなんですね」
「その通りです」
また答えるムウだった。

第七十八話　ムウの技その四

「それにより目では見えないもの、耳では聞こえないものが」
「見聞きできるんですか」
「凄いんですね、セブンセンシズって」
「他にも色々な力に目覚めます」
さらにあるというのだ。
「そしてそれは正義の為、人々の為、アテナの為にです」
「使われるんですね」
「何かそれも凄いですよね」
青銅の四人はそのセブンセンシズにも驚くばかりだった。そしてそれを隠そうともしない。
「黄金聖闘士って」
「何もかもが」
「いえ、凄くはありません」
しかしムウ本人は微笑んでこう言うのだった。
「別に」
「いえ、全然ですよ」
「そうじゃないですよ」
「まあそうだね」
「それはね」
これについては魔鈴もシャイナも彼女達と同意であった。
「黄金聖闘士のその力はね」
「立派だよ」
「そうですかね」
「あんたのその力がね、ここでは使われるから」
「いいね、それは」
彼女達もムウには絶対の信頼を見せていた。一行はこうした話をしながら先に進んでいた。そして次の日の夜だった。相変わらずの

どかな田園の中を進み夜はそれぞれ道の横にテントを設けてだ。そのうえで休んでいた。
ムウは彼のテントの中にいた。しかしふとその中から出た。
「さて」
既に黄金聖衣を着ている。そのうえでの言葉であった。
「おられるのですね。出て来られたらどうでしょうか」
「ふむ、気付いてたのか」
「我等の気配に」
「既にか」
「ええ、それはもう」
気付いていたと返すムウだった。闇夜の中に穏やかな微笑と共に立っている。そのうえには無数の星が煌めきを放ち続けている。
「貴方達には申し訳ありませんが」
「謝る必要はない」
「それはだ」
だが彼等はそれはいいというのである。
「我等もそろそろ姿を現わすつもりだった」
「奇襲を仕掛けるつもりだったがな」
「そうでしたか」
ムウの周り、夜の田園のあちこちから出て来たのだった。
インプ達はそれぞれの手にあの三叉の槍を持っている。そして彼を完全に取り囲んでいた。
「さて、アリエスよ」
「ここで死んでもらう」
「いいな」
「生憎だがね」
「ムウばかりじゃないよ」
そしてここで、であった。魔鈴とシャイナも出て来た。
二人は既に聖衣を身にまとい仮面を着けている。服はズボンからさらに機能性の高いスパッツになっている。その格好で出て来たの

である。
「私達も気付いていたよ」
「それだけはっきりと殺気を出していたらね」
「イーグル、それに蛇使いか」
「貴様等もか」
インプ達は二人を見ても言うのだった。
「だからどうだというのだ」
「我等はどのみち貴様等全員をここで倒すつもりだった」
「そうだ、ここでな」
言いながらさらに間合いを詰めようとする。するとだった。
「私達だってね！」
「いるんだから！」
「気付いていたわよ！」
青銅の四人も。彼女達は仮面にズボンでその上から聖衣を身に着けていた。そのうえで、であった。

第七十八話　ムウの技その五

「バレバレっていうのよ」
「幾ら青銅でもね」
「インプの気配位わかるわよ」
「ふむ、そうか」
「それはか」
インプ達はその四人を見ても言う。
「どうやら聖闘士というだけはあるな」
「我等の気配は察することができるのだな」
「それは確実に」
「私は昨日からわかっていました」
ムウはそうだというのだった。
「既に」
「黄金聖闘士はそうか」
「そこまでわかっているのか」
「察せられるか」
「はい、その通りです」
彼等に対しても穏やかな言葉のままである。それがムウだった。
「セブンセンシズによって」
「既に察していたのは見事だ」
「それはだ」
彼等もそれは素直に認めた。
「だが。だからといって勝てるわけではない」
「それは言っておく」
しかし同時にこうも告げるのだった。
「我等の力はだ」
「侮ることはできはしない」
「それもまた言っておく」

「はい、それもわかっています」
ムウの返答はここでも穏やかなままである。
「それもまた」
「ならばだ。ここでだ」
「倒れるのだ」
「アリエス、まずは貴様からだ」
彼等はまずはムウを見ていた。彼をである。
「我等の全力を以ってだ」
「倒してやる。覚悟するのだ」
「いいな」
「いいでしょう」
ムウは彼等のその言葉を静かに受けた。
「ではここで」
「行くぞ、その言葉を受けてだ」
「やらせてもらう」
彼等はそれぞれ前に出た。だがここで。
青銅の四人が出て来た。そしてそれぞれ言うのであった。
「ちょっと待ちなさいよ」
「そうよ」
こう言ってムウの前に一斉に出る。
「あんた達の相手は私達よ」
「無視しないで欲しいわね」
「ふむ、貴様等がか」
「前座を務めるというのだな」
「そうよ、わかったわね」
「覚悟はできてるでしょうね」
彼女達も戦うつもりだった。
「あんた達なんかね」
「ムウ様の御手をわずらわせなくても」
「私達だけで充分よ」

こう言うのであった。
そしてそれを受けて。インプ達も言ってきた。
「わかった。それではだ」
「我等もまずは貴様等をだ」
「倒してやろう」
こう言って彼女達に槍を向ける。しかしであった。
「いえ」
「いえ!?」
「まさかムウ様」
「それでもですか」
「はい、そうです」
ムウは微笑んで青銅の四人に対して告げるのだった。

第七十八話　ムウの技その六

「ここは私にお任せ下さい」
「ですがインプ達位は私達が」
「そうです。やらせて下さい」
「大丈夫ですよ」
「私が戦いたいと言えばどうでしょうか」
だが彼はここでこうも告げた。
「私がそう言えばその時は」
「それは」
「その場合は」
こう言われるとだった。彼等は急に言葉に力を失った。そう言われるとどうしてもであった。
「そうですよね。ムウ様の御言葉なら」
「黄金聖闘士の方の御言葉ですし」
「それは」
従うしかなかった。聖域で黄金聖闘士の言葉に異を唱えられるのはアテナか彼女の代理人である教皇以外には存在しないからである。
「わかりました。それじゃあ」
「ここはムウ様にお任せします」
「それで」
「有り難うございます。それでは」
ムウは彼女達の言葉に応え穏やかに微笑み。そうしてであった。
一歩前に出る。そうして言うのだった。
「では戦いましょう」
「そうか、アリエス、貴様がか」
「貴様が我等の相手をするのだな」
「それでいいのだな」
「はい、それはもう決まりました」

穏やかな微笑みはそのままであった。
「それでは御願いします」
「ふん、覚悟がいいな」
「そう言っておこう」
「では。遠慮はしない」
こう述べてであった。じり、と間合いを詰める。そのうえで彼に一斉に向かって来た。
「受けよ、我等の力！」
「この技をだ！」
言いながら一斉に槍を放つ。無数の槍が彼に襲い掛かる。
「ムウ様！」
「危ないです！」
青銅の四人はその槍の嵐を見て一斉に言う。
「このままでは！」
「ムウ様が！」
「いや、大丈夫だよ」
「そのまま見ていいよ」
しかしであった。その四人にここでも魔鈴とシャイナが言ってきたのだった。
「このままね」
「驚く必要はないよ」
「けれどあれだけの槍が来たら」
「如何にムウ様でも」
「それに」
四人は彼女達に言われてもその狼狽を消すことはできなかった。それはどうしてもできなかったのである。
「ムウ様よけようとなさりませんし」
「あのままじゃ本当に」
「万が一のことが」
このことを心から危惧していた。しかしであった。

「だから黄金聖闘士だよ」
「あたし達とは違うんだよ」
二人はそれでも言うのだった。
「それも全くね」
「だから見ておくんだよ」
「黄金聖闘士の力を」
「ここで」
四人は今の二人の言葉の意味はわかった。それは、であった。
「そうなんだ、それじゃあ」
「そのムウ様の御力を」
「そうだよ。よく見ておくんだよ」
「黄金聖闘士ってやつをね」
二人の言葉は真剣そのものだった。そうして。
無数の三叉の槍が今まさにムウを貫かんとする。ここで、であった。
「クリスタルウォール」
こう言うとだった。彼の周りに四方八方を四角く囲む形で透明な水晶を思わせる壁が出て来た。それが彼を包むのだった。
槍がそれに触れるとだった。全てはじき返してしまった。そしてその槍達は。
「ぐわあああああっ！」
「馬鹿な！」
主のインプ達を貫いたのだ。そのまま跳ね返った結果であった。

第七十八話　ムウの技その七

彼等はそれにより倒れてしまった。彼等にとってはまさに思わぬ結果であった。
「ば、馬鹿な」
「我等の槍を全て跳ね返しただと！？」
「それで我等を」
「クリスタルウォールはです」
ムウはその己の技について述べた。
「あらゆる攻撃を跳ね返すのです」
「くっ、それでか」
「それでだというのか」
「我等を」
「戦いは攻めるだけではありません」
ムウは目を閉じて静かに述べた。
「こうして。相手の力を使うこともあるのです」
「おのれ、それもまた黄金聖闘士の戦いだというのか」
「相手の力を使ってか」
「その通りです。おわかりになられたでしょうか」
「見事だと言っておこう」
ここでもムウを褒める言葉は出された。
「このことはだ」
「左様ですか」
「だが。リーヴェ様はだ」
「こうはいかない」
「このことは言っておく」
彼の名前がここで出された。
「あの方の御力は貴様といえど」
「尋常なものではない」

「我等の仇はあの方が取って下さる」
このことを確信し希望を持っている言葉であった。
「だからだ。我等はこれでだ」
「笑って去ろう」
「さらば、アリエス」
ムウに別れさえ告げていた。
「冥界で待っている」
「楽しみにしておくぞ、貴様が来るのをな」
こう言って息を引き取るのだった。そして残った聖闘士達は。
「これで終わりじゃないですよね」
「やっぱり」
「ああ、それは間違いないね」
「確実にね」
魔鈴とシャイナがまた青銅の者達に答えた。
「というよりかこれはね」
「ほんの前哨戦だよ」
「これからだよ」
そしてこんなことも告げるのだった。
「それはわかっておくことだね」
「いいね、それは」
「前哨戦」
「これだけの数のインプ達が」
「ほんの小手調べって」
青銅の四人は彼女達の言葉を聞いて少し愕然となった。
そしてその彼等にだ。ムウがまた言ってきた。
「戦いはまさにこれからです」
「これからなんですね」
「本当にまさに」
「そういうことです。この程度で驚いていては」
微笑んではいた。しかし強い言葉だった。その言葉は青銅の四人

だけでなく魔鈴やシャイナにも向けられていた。彼女達にもである。
「何にもなりません」
「そういうことだね」
「言っておくがこの連中は雑兵だよ」
シャイナは今度はこのことを指摘してみせた。
「それこそ魔神にもなるとね」
「覚悟しておくなんてものじゃないよ」
「それは言っておくよ」
「覚悟なんてものじゃない」
「まさにそういう相手ってことね」
「そうね」
四人は彼女の言葉にあらためて頷くことになった。
「私達も本当に」
「気合入れていかないとね」
「どうにもならないわ」
「そういうことだよ」
「わかったね」
二人はまた彼女達に告げた。
「いいかい、一瞬でも気を抜くとだよ」
「まあ御前達は大丈夫かね」
二人はこうも言った。
「そんなことはないね」
「大丈夫だよ」
「大丈夫かしら」
「何か不安が」
「そうやって不安を感じているうちは大丈夫なんだよ」
魔鈴はそれそのものだと告げる。
「それがね」
「それだったらいいけれど」
「まあ私達だって全力を尽くすし」

「私もです」
またムウが言ってきた。
「やらせてもらいます」
「じゃあ私達は私達で」
「頑張ろうか」
「そうね」
そんな話をして、であった。今彼女達も戦いに向けて思いを確かにするのだった。このインドにおける狂闘士達との更なる戦いに対して。

第七十八話　　完

２００９・１２・１５

第七十九話　更なる歩みその一

更なる歩み

「そうですか。彼等は」
「はい、そうです」
「残念ですが」
「一人も、です」
リーヴェに対して周りにいる狂闘士達が話していた。皆それぞれ戦衣を着ている。
「誰一人として残りませんでした」
「アリエスの前に」
「わかりました」
リーヴェはここまで話を聞いたうえで静かに述べた。
そうしてそのうえで。周りにいる彼等に対してさらに話すのであった。
「それでですが」
「はい、それでは」
「何でしょうか」
「彼等の冥福を祈りましょう」
こう告げるのであった。
「今はです」
「インプ達の冥福をですか」
「そうされよと」
「無論私もです」
彼もするというのだ。その言葉には強いものがあった。
「ハーデス様が彼等を祝福して下さることを」
「そうですね。ハーデス様ならば」
「あの者達を優しく迎えて下さります」
彼等はアーレスだけでなくハーデスにも敬意を払っていた。ただ

しそれはアーレスのそれよりも弱い。流石にアーレスが至高であった。
「だからこそ今は、なのですね」
「彼等の冥福を」
「そうです」
まさにその通りだというのだ。後ろに流れる大河を背にしての言葉である。
「祈りましょう」
「では」
こうして彼等はそれぞれ黙祷した。それはまさに戦死したインプ達の冥福を祈る動作であった。そしてそれが済んでからであった。
リーヴェは目を開くと。静かに言うのだった。
「それでですが」
「はい、今度は」
「何でしょうか」
「アリエス達はこのカルカッタに来ていますね」
このことを問うたのである。
「この場所に。そうですね」
「その通りです」
「ゆっくりとですが」
「わかりました」
それを聞いて頷くリーヴェだった。
「それでは。次はです」
「我々が、ですね」
「彼等に対して」
「そうです」
周りの言葉に応える。しかし言葉はそれだけではなかった。
「ですが」
「ですが!?」
「まだ何かあるのでしょうか」

「インプ達も向かわせます」
彼等もだというのだ。
「それは宜しいですね」
「インプ達もなのですか」
「あの者達も」
「そうです。いっそのことインドに連れて来ているインプ達全てを投入したいのですが」
彼はその女と見紛うばかりの美しい顔に思案の色を漂わせていた。
そうしてそのうえで周りにいる九人の狂闘士に対して告げるのだった。
「それは少し。冒険に過ぎます」
「冒険に、ですね」
「だからそれは」
「半分を行かせます」
数はそれだけだというのだ。
「それだけ向かわせます」
「そしてそのインプ達でも」
「聖闘士達をですか」
「白銀聖闘士ですが」
リーヴェは白銀聖闘士についても考えを及ばせていた。
「確かイーグルと蛇使いでしたね」
「そうです、イーグルの魔鈴と」
「蛇使い座のシャイナです」
その二人だというのである。九人はそれぞれ述べた。

第七十九話　更なる歩みその二

「その二人です」
「二人共女であります」
「女でありながらその実力はかなりのもの」
リーヴェはその二人について述べた。
「そうでしたね」
「確か白銀聖闘士の中でも屈指のものだとか」
「黄金聖闘士と拳を交えられる程だとか」
「そうです。その実力はかなりのものです」
やはり彼女達のことを知っている言葉を出すのだった。
「その二人もいます。それに」
「それに」
「今度は青銅の者達でしょうか」
「はい」
まさにそうだというのだ。
「あの四人の実力もまた侮ってはなりません」
「それだけの力を持っているからこそ」
「だからなのですか」
「聖闘士は侮れません」
また言うリーヴェだった。
「そう、決してです」
「だからこそ今は」
「そういうことなのですね」
「我等だけでなくインプ達もまた」
「戦いは見極めることが絶対なのです」
彼は言葉を続けていく。
「ですから」
「わかりました。それでは」

「我等だけでなくインプ達も」
連れて行くということになった。これで決まりであった。
「では。今より向かいます」
「聖闘士達の場所へ」
「彼等を倒しに」
「御願いします」
それぞれ名乗りを挙げた彼等に告げた。
「それではその様に」
「はい、お任せ下さい」
「それでは」
「いざとなれば私も向かいます」
リーヴェはこうも告げた。
「その時には」
「いえ、それは」
「リーヴェ様の御出陣には及びません」
「その通りです」
彼等はそれは制止しようとする。だがリーヴェはその彼等に対して穏やかではあるが強くはっきりとした声で告げるのであった。
「彼等だけではないのです」
「といいますと」
「サジタリアスもなのですね」
「そうです。来ています」
リーヴェの顔が察するものになっていた。
「このインドにです」
「来ていると」
「既に」
「あれだけの強大な小宇宙は隠せるものではありません」
それはできないというのである。
「だからこそです」
「ではサジタリアスが出て来る様な時には」

「その時には」
「そうです。私も赴きます」
やはりそうするというのである。リーヴェは。
「では。今から」
「はっ、それでは」
「今より」
こうして方針が決定された。狂闘士達は戦場に赴いた。そしてその頃。滝を後ろにして座る老人に誰かが声をかけてきたのである。
「いいか」
「御主か」
「そうだ。感じているか」
「無論じゃ」
こうその声に答えるのだった。

第七十九話　更なる歩みその三

「間も無くじゃな」
「今わかった。これまでの戦いはだ」
「あの者達に乗せられておったのう」
「私の不覚だ」
声は無念そうにそれを出した。
「こうなってしまうとは」
「いや、これまでが最良じゃよ」
「最良だというのか」
「左様、聖闘士達を向かわせなければそのまま破壊と殺戮に入っていたじゃろうな」
「狂闘士らしくか」
「それを防いだのじゃ」
彼等を向けたそれは、である。そうだというのだ。
「じゃから正解じゃ」
「そうか。ではそれでよかったのだな」
「上出来じゃ。それでじゃ」
老人はさらに告げてみせた。滝の方から聞こえるその声にだ。突き出ている岩山に座したままそのうえで告げるのであった。
「インドでの戦いが終わればじゃ」
「うむ」
「奴等は仕掛けて来るぞ」
「それにより成ったもので」
「そうじゃ。そこでじゃ」
なるというのである。
「まず四柱じゃ」
「四柱か」
「そして遂に」

「あの男か」
「左様」
まさにそれだというのだ。
「どうやらそれは止めることはできん」
「ではこれからの戦いは」
「わしはここから動けん」
それはできないというのである。
「決してな」
「それはわかっている」
声もそれはわかっているというのだった。
「しかしだ」
「それでも来るやも知れぬか」
「御前はそれだけ重要な場所にいる」
「確かにな」
「そしてそれだけではない」
声はさらに言ってきた。
「御前自身もまた」
「やれやれ、動けぬ者まで見逃さんというわけか」
「そういうことだ。狂闘士の考えはだ」
声はそのことについても述べる。
「敵は一人残らず倒す」
「そうじゃったな。それはな」
「それならばだ。私も御前も」
「誰一人残らずか」
「そういうことになる。だからこそだ」
それを老人に告げるのだった。
「誰一人としてだ」
「それではじゃ」
「その時はか」
「わしはここからは動けん」

これはどうしてもというのである。普遍だった。
「しかし。向こうが来るならその時はじゃ」
「頼んだぞ」
「うむ」
声に対して頷くのだった。
「そうしようぞ」
「私もまた同じだ」
彼もだというのだ。
「私に来る相手はだ」
「尋常な相手ではなかろう」
老人は声に対して述べた。
「間違いなくな」
「その通りだ。しかしだ」
「戦うのじゃな」
「私もまた同じだ」
声に微笑みが宿った。滝の向こうに顔は見えない。しかしそれでもその声に表情が宿っているのであった。老人もそれは読み取っていた。

第七十九話　更なる歩みその四

そしてその老人に対して。声がさらに言ってきた。
「そして」
「そしてか」
「そうだ。それでだ」
「やるのじゃな」
「その通りだ」
声の色が変わった。強いものに。
「そしてそれはおそらく私にとって」
「最後じゃな」
「運命の時は近付いている」
こう言うのである。
「その前の最後の戦いになる」
「わかった。それではじゃ」
「やらせてもらう」
声はまた言った。
「その時はだ」
「では健闘を期待している」
「そして必ず勝つ」
それも絶対だというのだ。
「何があろうともだ」
「相変わらずじゃな。じゃがそれだからこそ御主はじゃ」
「それは言うことはない」
声は老人に対してそこから先は言わせなかった。
「今はな」
「ふふふ、左様か」
「ではな」
「うむ、またな」

「御前には苦労をかけることになるだろうが」
声は去る前に申し訳なさそうに告げた。
「それは申し訳ない」
「今度はわしが言うぞ」
「むっ！？」
「それは言うことはない」
今度は老人が声に対して言うのだった。
「お互い様じゃ」
「そう言ってくれるか」
「わしもまたやがて大仕事がある」
未来のことを話すのだった。
「最後の最後にな」
「ではその時にだな」
「あ奴等は見守らせてもらう」
「そうしてくれるか」
「また巡り合ったのじゃ」
声には親しみがあった。老人の言葉に今度はそれが宿ったのである。
「では今度こそはじゃ。最後の最後まで付き合わせてもらうとしよう」
「それは羨ましいな」
声の色がここでまた変わった。老人に対して純粋に向けられた言葉であった。
「私は間も無く去らなければならないが」
「済まぬ・・・・・・というのは」
「それも言う必要はない」
声は四度微笑んだ。
「それもだ」
「そうじゃな。それではじゃ」
「また会おう」

「うむ」
こう話をして声は気配を消した。老人は一人残りその岩山の上でしゃがんだままであった。そしてそのうえでまた言うのであった。
「頑張るのじゃぞ」
その頃ムウ達はカルカッタに相変わらず牛車で向かっていた。その歩みはというと。
「あれっ、思ったよりも」
「そうよね」
「速いわよね」
青銅の四人は牛舎のそのホロの中で言い合う。
「牛も結構足が速いのね」
「そうなのね」
「ああ、そうさ」
「牛は結構速いんだよ」
まさにそうだというのはやはり魔鈴とシャイナだった。
「馬と比べてもね」
「そんなに変わらないんだよ」
「身体みたらそうは思えないのに」
「そうよね」
青銅の四人はそれを言う。

第七十九話　更なる歩みその五

「こんなに速いって」
「これじゃあカルカッタにも」
「そうです。だからです」
ここでまた外で牛の背に座るムウが言ってきた。
「牛車にしたのです。それに牛はです」
「牛は？」
「持久力があります」
それがあるというのだ。
「ですからそれもあって」
「選んだんですね」
「牛を」
「そういうことです」
ムウは微笑んで答えた。
「牛はこれで使い勝手がいいのですよ」
「そういえば何か見慣れたら」
「美味しそうっていうよりは可愛い顔だし」
「そうよね」
「美味しそうはインドでは禁句ですよ」
ムウはこのことは少し真面目な顔になって嗜めた。
「シャカも牛肉は・・・・・いえ食べましたかね」
「シャカはちょっとわからないね」
「あいつだけはね」
彼を理解することは魔鈴にもシャイナにも極めて難しいことであった。それでこんなことを言うのであった。やはりシャカはシャカである。
「戒律っていってもあいつはヒンズー教徒なのかい？」
「シーク教徒でもないだろうね」

「仏教徒ではないでしょうか」
この辺りはムウもよくわからなかった。それで彼も首を捻ることになった。
「シャカですので」
「確か仏陀の生まれ変わりだったかね」
「随分と冷淡な仏様だね」
「シャカの心には慈悲は・・・・・・どうですかね」
ムウはここでまた首を捻った。
「あまり聞きませんね」
「そういえばかなり超然っていうか」
「おっかないところありますよね、シャカ様って」
「確かに」
それは青銅の四人も何となく感じていることだった。
「気紛れで何でもしちゃいそうな」
「そういうところありますよね」
「そうそう」
「実際に彼の性格はよくわからないのです」
同僚であるムウをしてもそうなのである。
「ですから。実際に彼が牛についてどう思っているかは」
「わからないんですか」
「それじゃあ」
「はい」
まさにその通りだというのである。
「それにですね。その仏教にしてもです」
「世界三大宗教ですよね」
「インド発祥の」
「それは知ってますけれど」
「いえ、これがです」
ここでムウはその仏教について詳しく話すのだった。
「インドではシャカは神の生まれ変わりとされていまして」

「神様の？っていいますと」
「インドの神様ですよね」
「そうですよね、やっぱり」
「はい、ヴィシュヌ神です」
インド神話、ひいてはヒンズー教における三大神の一柱である。創造神ブラフマー、破壊神シヴァと並ぶ存在とされており調和神として今も尚絶大な信仰を受けている。千の首を持つ竜アナンタの上に寝て大海の中にまどろみ四本の腕を持っているとされている。
「そのヴィシュヌ神の第九の転生であるとされています」
「御釈迦様も神様の転生した姿なんですか」
「インドじゃ」
「そうです。そしてです」
話はさらに進む。
「そのせいで仏教はですね」
「仏教は」
「どうなってるんですか？インドじゃ」
「確か殆ど消えているそうですけれど」
「消えてはいないのです」
ムウはインドでは仏教はまだ存在していると答える。

第七十九話　更なる歩みその六

「ただ」
「ただ？」
「何があるんですか？」
「インドでは仏教はヒンズー教の一派であると考えられています」
これを聞いた六人の反応はというと。
「えっ！？」
「ムウ様、今何て」
「何て仰いました！？」
まずは青銅の者達が唖然とした顔になった。
「ええと、仏教がヒンズー教の一派って」
「何かお話がよくわからないんですけれど」
「どういうことなんですか！？」
「ですから言ったままです」
ムウは今はこう述べるだけだった。
「仏教はヒンズー教の一派と考えられているのです」
「何か話がわからないね」
「あたしもだね」
それは魔鈴とシャイナも同じであった。
「そんな論理ははじめて聞いたけれど」
「今何を言われたかさっぱり把握できないんだけれどね」
「皆さんそう仰います」
ムウにしてもこう言われたことは一度や二度ではなかったようである。今の返答がそのことを何よりも雄弁に物語っている。言葉は偉大である。
「ですが事実です」
「仏教はヒンズー教の一派」
「何ていうか」

「壮絶過ぎて」
「理解できません」
青銅の四人はまだ唖然としていた。
「そんな考えなんですか、インドって」
「何ていうか」
「もう訳がわかりません」
「そういう考えですので」
ムウもこのことについてこれ以上言おうとはしなかった。
「頭の中に入れておいて下さい」
「それがインドですか」
「何ていうか」
「そういえば牛も」
ハアン氏がまた牛に戻った。
「あれですよね。何万もの神様が宿ってるとか」
「そう言われてるんですよね」
「それだけ神聖だとされているのです」
これまたインド独特の考えである。牛をそれだけ神聖なものと見るということがである。
「ただ」
「ただ？」
「あのガンジーはかつて牛を食べたことがあります」
インドの偉大な独立運動家として有名な偉人である。その深い叡智は伝説とさえなっている。ただその無抵抗平和主義には恐ろしいまでの政治、戦略のセンスがあったことも見逃せない。ガンジーはそうした意味においても偉大な賢者だったのである。
「そういったお話もあります」
「何か話せば話すだけわからなくなってくるっていうか」
「インドって」
「確かに」
「ねえ」

もう青銅の四人は訳がわからなくなってきていた。
「スケールが大きいっていうか」
「悠久っていうか」
「もう訳がわからないまでに」
「それがインドなのです」
ここでようやく普段の微笑みに戻るムウだった。
「この国は他の国とは全く違いますので」
「みたいですね。本当に」
「凄い国です」
「凄くはないですよ」
ところがムウはそれは否定した。
「特にね。凄くはないです」
「いえ、凄いですよ」
「ねえ」
「インドは」
それでも彼女達はこう言う。
「これだけ個性が強烈だったらもう」
「それだけで」
「これで凄くないなんて」
「どの国も凄いのですよ」
ムウのここでの言葉はこれであった。
「そう、どの国もですよ」
「じゃあインドが特別じゃないんですか」
「それは」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのである。
「インドはただ個性が強い国というだけですよ」
「それだけでもこれは」
「何ていうか」
「壮絶過ぎるけれど」

今のムウの言葉には完全に頷くことができなかった。しかし今はそれでもカルカッタへの旅を続ける一行であった。悠久の国の中を。

第七十九話　　完

２００９・１２・２０

第八十話　川辺においてその一

川辺において

「シャカ、一ついいか」
「何でしょうか」
シャカはアイオリアの話に応えていた。この夜彼等は辰巳の店の奥座敷にいる。そこでそれぞれスーツで卓を囲んで話をしているのであった。
「今ムウ達はインドに向かっているが」
「はい」
シャカは目を閉じたままで彼の言葉に頷く。
「インドは御前の祖国だったな」
「それが何か」
「いや、御前は行かないのだな」
「私は聖域での守護を命じられていますので」
やはり目を閉じたままでの返答であった。
「それでなのです」
「それでか」
「はい、それで」
また答えるシャカだった。
「インドには向かいませんでした」
「そうだったのか」
「元より教皇はムウに行ってもらうつもりでした」
そしてシャカはこうも彼に話した。彼だけが奥座敷の中で座禅を組んでいる。他の面々は胡坐をかいてそのうえで座布団の上にいる。
「彼にです」
「ムウにか」
「御前にではなく」
「そうです」

他の面々の言葉にも答えた。
「それに彼の相手はムウの方がいいのです」
「あいつか」
アルデバランが今のシャカの言葉に応えた。
「ルキフグスだな」
「そうです。八大公の中でも随一の頭脳を持っている男です」
その彼のことを話すのだった。
「彼にはムウです」
「まああいつはな」
デスマスクがここでムウについて述べた。
「俺達の中じゃ一番頭が切れるしな」
「そうですね」
アフロディーテもそのことは認める。
「彼の考えることなら納得ができます」
「それに人柄もだな」
シュラは彼のその部分を認めた。
「あの人柄も信頼できる」
「そういうものを考えてだというのだな」
「はい」
シャカは今度はカミュの問いに答えた。
「まさにその通りです」
「そうか、わかった」
カミュもそれで納得した。
そして次にはミロだった。彼が言うことはだ。
「では頭脳と頭脳か」
「そうです。そして彼の人柄も武器になります」
「人柄もだな」
「性格は戦いにおいて大きく影響します」
シャカはそのこともわかっていた。戦いにおいてもだ。
「ですから。彼はまさに相応しい相手に向かっているのです」

「そのルキフグスがか」
「ルキフグスはまさに八大公のまとめ役です」
シャカはそのことも踏まえていた。何もかもわかっていた。
「その彼に対してはです。やはりムウです」
「俺達では駄目なのか」
「貴方達には貴方達でなければならない相手がいます」
そうだというのである。
「例えばデスマスク」
「俺か」
「貴方にはベルゼブブです」
あの男だというのである。
「そしてシュラにはベール」
「そうだな」
シュラもその指摘に納得する顔で頷く。
「アフロディーテにはアスタロト」
「彼の相手は任せて下さい」
既にその口に薔薇があるアフロディーテであった。
「アルデバランにはモロクです」
「力には力か」
「その通りです」
こうアルデバラン自身に告げた。
そしてさらに言うのだった。
「カミュにはベリアル」
「やらせてもらう」
カミュも頷いてみせた。

第八十話　川辺においてその二

「ミロにはサタナキア」
「そうだな。あの男には俺しかいない」
「アイオリア、貴方にはあのアスモデウスです」
「それぞれの相手がいるのだな」
アイオリアはそこまで聞いて述べるのだった。
「そういうことか」
「その通りです。おわかり頂けましたね」
「それぞれが倒すべき相手がいる」
「それぞれの相手が」
「無論私もです」
ここでシャカも言った。
「私に相応しい相手もまたいます」
「おいおい、八大公は全員埋まってるぜ」
デスマスクが軽く笑いながらシャカに言ってきた。
「それで何で御前の相手がいるんだよ」
「ですがいるのです」
シャカはまた言った。
「やがて出て来ます」
「それは一体何者だ？」
アルデバランがその存在について問うた。
「一体」
「詳しいことはまだ私にも確かに察することはできませんが」
シャカでもそれはできないのだという。
「しかし。おそらくは神」
「神が」
「出て来るというのか」
「エリス以外に」

「はい」
まさにそうだというのである。
「そうです」
「そういえばだ」
シュラがここで言った。
「冥皇ハーデスの下にも二柱の神々がいたな」
「死の神タナトスと眠りの神ヒュプノスですね」
アフロディーテも彼等の名前はよく知っていた。
「相当な小宇宙を持ち五百年以上前の冥皇ハーデスとの戦いにおいて猛威を奮ったとか」
「そうだったな」
カミュも彼の言葉に頷く。
「前の聖戦においても多くの犠牲を払っている」
「そしてアーレスにもまたか」
今言ったのはミロだった。
「そうした存在がいるのか」
「エリスだけではないとはな」
アイオリアは深刻な面持ちになっていた。
「厄介なことになるな」
「ですが出て来たならば戦わなければなりません」
シャカはここでまた言った。
「何としてもです」
「戦いそして勝利を収める」
「平和の為にだな」
「その通りです。戦いは続きます」
シャカの言葉がここでまた出された。
「それで勝たなければなりません」
「今の八大公との戦いが終わっても」
「まだこれからだというのか」
「アーレスとの戦いは」

黄金聖闘士達はこのことをあらためて知った。
「八大公との決着をつけるだけでは済まないか」
「まだ倒すべき相手がいるか」
「それならば」
こう言い合いながら飲むのだった。今は。
「蛸はいいものだ」
「全くだな」
デスマスクは蛸の天麩羅を笑顔で食べていた。
「この味がいい」
「硬さもな」
それがいいというのである。言いながら食べていくのだった。
カミュもまた食べていた。彼は蛸の刺身を醤油に漬けて食べている。
「蛸はいいものだ」
「北欧では蛸は」
アフロディーテは少し困った顔をしてはいた。だが食べるとであった。
「いいものですね」
「そうだ。蛸は美味だ」
カミュはそのアフロディーテにまた告げた。そして食べていく。

第八十話　川辺においてその三

だがアルデバランは食べながらも。やや難しい顔をしていた。
「最初は驚いたものだがな」
「ブラジルでは食べなかったな」
「そうだ」
彼はミロの問いにも答える。
「ギリシアでは普通に食べるがな」
「そうだな、昔からな」
同じギリシア人のアイオリアも抵抗はない。黄金聖闘士達はその蛸料理を白ワインと一緒に楽しみ宴にも興じているのであった。
「蛸はな」
「私も食べていますよ」
シャカは目を閉じたまま平気な顔でその蛸を食べていた。箸も使っている。
「いいものですね」
「いや、それはいいが」
「しかしシャカよ」
「いいのですか？」
だがここで他の黄金聖闘士達が怪訝な顔で彼に問うてきたのだった。
「生き物を食べても」
「それは」
「確か仏教は」
「いいのです」
しかしシャカは平然としてこう仲間達に答えるのだった。
「本来仏教では生あるものを食べてもいいのです」
「では蛸もまた」
「いいのか」

「そして私は箸にもこだわりません」
それもだというのである。
「無論インドでは手で食べますが」
「そうか、それにも」
「全くこだわりなく」
「そうです」
言いながら食べ飲み続けていくのであった。表情を変えることなく。
そして彼は。こうも言った。
「それにです」
「それに？」
「私はアテナの聖闘士です」
今更ながらの言葉だったがそれを言うのであった。
「ですから。そうしたタブーはありません」
「そうか、それでか」
「だからいいのか」
「はい、そうです」
こう言いきるのであった。
「無論酒に関してもです」
言いながら何でもない顔でワインも飲む。ここで辰巳が彼等のところにやって来た。そのうえで彼等に対して言ってきたのである。
「おい、御前等」
「あっ、辰巳か」
「どうしたんだ、一体」
「今日の料理はどうだ？」
その割烹姿のままで彼等に問うのである。
「いいか？どうだ？」
「悪くはないな」
「確かにな」
これが彼等の感想だった。

「美味いものだ」
「一体何処の蛸ですか？」
「ここの蛸だ」
辰巳は彼等の問いにこう答えたのだった。
「ギリシアの蛸だ。活きのいいのを選んだんだ」
「それを一気に料理して」
「それで」
「魚介類のことなら任せてくれ」
辰巳は彼等にこうも言ってきた。
「何もかもがわかっているからな」
「そういえば貴方は」
アイオリアは怪訝な顔で彼に言うのだった。
「前は板前だったか」
「いや、違う」
それは否定するのだった。
「別にそんなことはないがな」
「そうなのか」
「代々城戸家にお仕えしている」
彼はここで自分のことも話した。

第八十話　川辺においてその四

「それは断っておく」
「しかしこの料理は」
「貴方がだな」
「そうだ。俺は料理も得意なのだ」
そうしているというのである。これは辰巳の意外な趣味であった。
黄金聖闘士達もその趣味を知り。あらためて驚いた。
「ただの親父だと思っていたが」
「違ったのか」
「まあ今日は蛸料理を楽しんでくれ」
とりあえず今日は、というのであった。
「いいな、それではな」
「よし、それじゃあな」
「今日はな」
「そうしてくれ」
また言う辰巳だった。彼等は今はその馳走を楽しんでいた。
その頃ムウはというと。一行と共に夜の店に入っていた。そこで夕食を食べていた。やはり夕食も所謂カリーと呼ばれるものであった。
それを指で食べながらだ。シャイナが言ってきた。
「これで中間を超えた辺りかね」
「ああ、確かそうだよ」
魔鈴もまたカリーを食べながら応えた。
「もうその辺りだよ」
「思ったより早いね」
それを聞いたシャイナはこう述べた。
「もう中間を超えたなんてね」
「そうだね。ただね」

「狂闘士だね」
「そうさ、問題は連中だよ」
彼等だというのである。
「何時出て来るかわからないね」
「そうだね。ただね」
ここでまた言うシャイナだった。
「それは近いよ」
「来るタイミングだね」
「そう思うけれどね」
シャイナはそう見ているのだった。彼等の動きをある程度読んでいるのだ。そのうえでの今の彼女達のやり取りであった。それをしているのである。
「そろそろね」
「来るね」
「ああ、来るね」
両者は互いに言い合う。
「じゃあその時はね」
「やらせてもらうとするかい」
「あっ、私達が」
「そうよ、私達もいるのよ」
「それを忘れないでよ」
このタイミングで青銅の四人が出て来た。そうしてそのうえで二人に対して言うのであった。その言葉遣いはやや必死の赴きがあった。
その言葉でだ。彼女達はさらに言うのであった。
「魔鈴とシャイナだけじゃないんだからね」
「私達だっているんだから」
「そりゃね、強さでは負けるけれど」
「顔も。負けてるけれど」
魔鈴とシャイナの顔を見ているとだった。そのことも否定できな

かった。魔鈴もシャイナもその顔もまたかなりのものであったのである。

「それでも私達だっているんだから」

「やらせてもらうからね」

「意地があるし」

「ああ、是非頼むよ」

「あんた達もね」

白銀の二人も彼女達の言葉を受けて述べた。

「実際聖闘士なんだからね」

「頼りにさせてもらってるよ」

このことを彼女達に告げた。

「いいね、それじゃあ」

「そのかわり死んでもらったら困るよ」

それもだというのである。彼女達に死ぬなというのだ。

第八十話　川辺においてその五

「いいね、絶対にね」
「死ぬんじゃないよ」
「え、ええそれは」
「わかってるけれど」
「またえらく真剣ね」
二人のその言葉を受けておどおどとした調子になる四人だった。
「けれど何でそこまで真剣になるのよ」
「私達だって覚悟してるし」
「そんなにまで」
「それでも死なれたら困るんだよ」
「仲間にはね」
二人はここで彼女達を仲間と呼んだ。
「いいね、それはね」
「仲間が死ぬのは嫌なんだよ」
「仲間だから」
「私達に死なれたら困る」
「そこまで言ってくれるの」
「その通りです」
この場では今まで黙っていたムウが述べてきた。彼もまたカリーを食べている。それは彼もまた同じであった。食べているものは同じものだったのだ。
それを指で口の中に入れながら。彼はさらに言ってきた。
「貴女達は仲間ですよ」
「ムウ様もそう仰るんですか」
「私達は仲間って」
「そう」
「それ以外の何だというのです？」

微笑んでも告げるのだった。
「貴女達が私の仲間でなくて」
「ですけれど。私達青銅ですよ」
「白銀ともかなり開いてますし」
「黄金の方々なんてもう」
「仰ぎ見る存在ですし」
青銅の彼女達から見ればまさにそうである。ムウだけでなく黄金聖闘士達は誰もが彼女達にとってみれば雲の上の存在であるのだ。
その彼に言われてだ。彼女達も狼狽しないわけにはいかなかった。そしてその狼狽した声でまたムウに対して言い続けるのであった。
「そんな人に仲間だなんて」
「そんなことって」
「ないですよ」
「そうですよ」
「いえ、仲間です」
しかしムウは微笑んでまた言うのであった。
「貴女達は仲間ですよ」
「そうですか」
「そう言って下さるんですね」
「はい」
微笑みはそのままだ。その声で述べ続けている。
「同じ聖闘士ではありませんか」
「同じ聖闘士だから」
「仲間なんですか」
「そうです。同じアテナの聖闘士です」
だからだという。彼の言葉はそこにあった。
「それでどうして貴女達が仲間でないといえましょうか」
「同じアテナの聖闘士だから」
「だからなのですか」
「そうです」

また答えるムウだった。
「ですから。私もまた」
「ムウ様もまた」
「はい、私も同じです」
微笑んで述べ続けるのだった。
「貴女達に命を落とされては困ります」
「ムウ様・・・・・・」
「私達の為にそこまで」
「ですから。わかりましたね」
ムウは彼女達にその優しい微笑みを向けている。そのままだった。
それは彼女達にも伝わった。深く強く。そのせいでカリーの味が変わってしまった。
「何かカリーが急に」
「そうよね」
「不思議な味になったわね」
「本当にね」
口々に言うのだった。
「その御言葉を聞くとそれだけで」
「何か」
「不思議なものだね」
ここで魔鈴も言った。やはり彼女もそのカリーを手で食べている。

第八十話　川辺においてその六

「ムウの話を聞くと私もだよ」
「そうだね。あたしもね」
シャイナも同じだというのである。
「一緒だよ。それじゃあね」
「食べてまた行くか」
こんな話をしていた。カリーを食べ終わると勘定を払ったうえで店を後にする。そうしてまた牛に揺られてカルカッタへと向かうのであった。
カルカッタに向かいながらふと川辺に立ち寄る。ここでムウは牛車から出て来た六人に対して話した。
「ここで水を貰いますが」
「はい、わかってます」
「水は一旦沸騰させてからですよね」
「ちゃんと薪もありますから」
「それは絶対に御願いします」
こう言うのである。
「水は危ないですからね」
「そういうことですね。沸騰させてお茶にして」
「そうして飲まないといけませんからね」
「はい、それではです」
彼等は水を手に入れようと川辺に向かう。インドを代表する大河の一つガンジス川である。彼はここでその大河を見ながらまた話した。
「この川もですね」
「大きいですよね」
「対岸が見えませんよ」
「はい、この川もまたインドを創ってきました」

そうだというのである。
「この悠久の国をです」
「その国を創ったのがこの川」
「それだけ凄いものなんですか」
「この川は」
「はい、まさにそうなのです」
ムウもまたその大河を見ていた。黒い川が静かに流れている。それはまさに永遠の流れであった。今はその川を見ながら言うのである。
「この川がです」
「川の水は何でも清めるんでしたね」
「確かインドでは」
「水は全てを」
「そうです」
水自体がそうなのである。インドではだ。
「それはこの川もまた同じなのです」
「その川の水を貰って」
「また。カルカッタにですね」
「そうしましょう」
こんな話をしながら水を汲もうとする。しかしであった。
「むっ!?」
ムウが足を止めた。そのうえで言うのであった。
「お水よりもまずはです」
「!?まさか」
「またですか」
「そうです、またです」
ムウはその目を強いものにさせて述べた。
「また来ました」
「!?そうだね」
「この気配は」

続いて魔鈴とシャイナが気付いたのだった。
そして青銅の四人も。最後に気付いた。
「こんなところで来るなんて」
「また出て来たのね」
「さあ、姿を現わしなさい！」
「早くね！」
こう周りに叫ぶとであった。声がしてきた。
「生憎だがそうはいかん」
「残念だが貴様等にはここで死なせてもらう」
こう言った。そうしてであった。

第八十話　川辺においてその七

川の中から無数の狂闘士達が出て来た。そうしてであった。
「アリエス、そして聖闘士達よ」
「よくぞ気付いたな」
「もっとも貴様等ならば容易に気付くことか」
「そうだな」
そんな話をしながらであった。ムウ達をゆっくりと取り囲んできた。そうしてであった。
「では。倒させてもらう」
「最後に水位は飲ませてやってもいいが」
「それはどうだ？」
「それは遠慮させてもらいます」
こう返すムウだった。表情は今はわざと消している。
「それはです」
「では水を飲ますに死ぬがいい」
「せめて苦しまずに死なせてやる」
「覚悟はいいな」
「では。はじめましょう」
ムウが今言うとだった。彼の頭上にアリエスの黄金聖衣が姿を現わした。そうしてそれはすぐにそれぞれの部衣に別れ彼の身体を覆った。マントも備わっていた。
そして他の聖闘士達もだ。すぐに聖衣をまとっていた。そのうえで彼等と対峙するのだった。
「では。戦うとしましょう」
「それでは」
「おいで下さい」
「今ここで」
「うむ、わかった」

狂闘士達が不意にこんなことを言うとだった。急に川辺から彼等が出て来た。九人の狂闘士達がインプ達の中に姿を現わすのだった。
「アリエス、はじめて見るな」
「我等のことは既に見た筈」
「そうだな」
「はい、聖域において」
そのことは彼もよく覚えていた。
「御会いしましたね」
「黄金聖闘士の貴様を倒す」
「そしてその首をエリス様に献上するとしよう」
「それでいいか」
「馬鹿言ってんじゃないよ」
彼等の言葉にシャイナが忌々しげな声で返した。
「何であんた達の言う通りにならないといけないんだね？」
「はいそうですかと首を差し出す奴なんてそうはいないよ」
魔鈴も言う。
「特に聖闘士はね」
「そうよ、何馬鹿なこと言ってるのよ」
「そんなことムウ様が受けられる筈ないでしょ」
「ふざけたこと言わないでよ」
そして青銅の四人もまた言うのであった。
「そんなこと言っていたらね」
「私達があんた達をやっつけるわよ」
「それでいいわね」
「面白い。それではだ」
九人の狂闘士達もまた彼女達の言葉を受けて返してきた。
「アリエスを倒す前に貴様等を倒すとしよう」
「見れば美しい首」
「それをアリエスの周りに飾るのも面白い」
こう言ってそれぞれ一歩前に出る。そしてさらに言うのだった。

「では。いいな」
「拳を交える」
「覚悟するのだ」
「いえ、まずはです」
しかしであった。ここでムウが前に出るのであった。そしてその九人の狂闘士達に対して告げる。それは静かだが強い言葉であった。
「私が御相手しましょう」
「そうだ、まずは貴様だ」
「同志達の仇をだ」
「今取らせてもらう」
インプ達が彼を見て言う。その槍を鋭く輝かせる。そうして九人の狂闘士達も彼を見据えそうして。今再び戦いがはじまろうとしていた。

第八十話　完

２００９・１２・２３

第八十一話　恐怖の九人その一

恐怖の九人

ムウと狂闘士達は対峙を続ける。その中で、であった。

「まだ名乗っていなかったな」

「そうだったな」

「そうですね」

ムウもまたそのことを認めた。

「それはまだでした」

「それではだ。名乗るとしよう」

「我等の名を」

「それでいいな」

「はい、それで御願いします」

ムウは彼等に対しても穏やかな態度を崩さない。その礼儀は守っていた。

そうしてその声で彼等に返すとだった。こう述べてきたのであった。

まずは中心にいる精悍な黒い髪と目の男がだ。こう名乗った。

「公爵、パイモンのゼツ」

「侯爵、バラムのメリエル」

続いて赤い長髪の青年が名乗った。目は青い。

「侯爵、アンドロマリウスのナルサス」

三人目は緑の髪と目をした男である。

「伯爵、アンドラスのシャロン」

鋭く強い紫の目をした紫髪の男だ。

「伯爵、バルバトスのサン」

白く長い髪をした女だ。それに対して目は漆黒だ。

「伯爵、デカラビアのミンツ」

オレンジの髪に青い目の男だ。

「子爵、モラクスのシゲン」
大柄で短い金髪に碧眼の岩の様な顔の男だ。
「男爵、フェニックスのレニー」
薄紫の髪と紫の目の少女である。
「公子、ヴァルフォレのレオンハート」
最後は黒髪の少年だ。この九人であった。
「我等九人リーヴェ様の命に従い」
「アリエス、そして貴様等全員をだ」
「ここで倒す」
こう宣言した。そのうえであらためてムウを見据えるのだった。
ゼツが一歩前に出た。そのうえでムウにまた告げる。
「まずは俺がだ」
「貴方がなのですね」
「そうだ、貴様を倒す」
こう彼に告げるのだ。
「いいな、それではだ」
「はい、では」
こうして戦おうとする彼等だった。しかしここでインプ達が彼の前に出て控えてだ。そのうえでこう彼に対して言うのである。
「御前達か」
「はい、お待ち下さいゼツ様」
「ここは我等にお任せを」
こう言うのである。彼の前に控え言葉は必死のものであった。
「アリエスには先の戦いで多くの同志を倒されています」
「ですからここは何としても」
「あの者達の仇を晴らさせて下さい」
「仇か」
それを聞くとだった。ゼツの言葉が止まった。そうしてだった。
「わかった。それではだ」
「宜しいのですね、それで」

「我々に任せて下さって」
「同志の仇を取ることは我等狂闘士の絶対の掟」
それを言うのである。このことは彼とてもよくわかっていることだった。何故なら彼もまた狂闘士であるからだ。それが最大の理由である。
「それに逆らうことは誰もできない」
「ではそれで」
「やらせて頂きます」
「頼んだぞ、それではだ」
こうしてであった。インプ達がムウの相手をすることになった。そうしてそのうえであらためてムウに対してその三叉の槍を向けるのだった。
「それではだ。アリエスよ」
「覚悟はいいな」
「貴様は我等が倒す」
彼等の目は剣呑なものになっていた。禍々しい光さえ放っている。

第八十一話　恐怖の九人その二

「それではだ。いいな」
「いいでしょう、それではです」
「よし、ではな」
「行くぞ」
そう告げて今一歩出した。そのうえでムウに一斉に襲い掛かった。
ムウは彼等を前にして一歩も動かない。そして彼等が迫ったそこでだ。
「スターライトエクスティンクション！」
右手を前に出しそこから無数の光を放った。その光は瞬く間に彼に襲い掛かって来たインプ達を完全に包み込んでしまったのである。
「な、何っ！」
「この光は一体」
「何だ！？」
「冥界へ」
ムウはその彼等に対して告げた。
「私が貴方達を誘う場所はそこです」
「ば、馬鹿な！」
「何故我等がここで！」
「ここで消え去るのだ！」
彼等はその光の中に消え去った。残ったインプは一人もいなかった。
「何っ、どういうことだこれは」
「インプ達が一人残らず消えただと！？」
「これは一体」
残った九人の狂闘士達は今のムウの技に驚きを隠せなかった。
「あの技は何だというのだ！？」
「あれだけの数のインプ達を完全に消したというのか」

「まさか」
「黄金聖闘士はそれこそ想像を絶する技を持っている」
ここで言ったのはナルサスだった。
「そのセブンセンシズによってだ」
「ではそれによってか」
「インプ達を冥界に送ったというのか」
「あの光で」
「そうです」
そしてそれをムウも認めるのだった。技を放った彼自身がだ。
「このスターライトエクスティンクションという技は相手を私が念じた世界に送ることができます」
「ではそれによってインプ達をか」
「冥界に」
「その通りです」
こう答えるのだった。
「苦しみはしません。一瞬です」
「一瞬であれだけの数を消したというのか」
「やはりアリエス恐るべしと言うべきか」
「それにだ」
ここで彼等の小宇宙が高まった。その赤く禍々しい小宇宙がだ。
湧き上がりそのうえでムウを見据える。声にも怒りがこもってきていた。
「知っていると思うがだ」
「我等狂闘士の絆はまさに血の絆だ」
「同胞達の仇は必ず取る」
彼等は口々に言う。
「だからだ、アリエスよ」
「二度に渡りインプ達を倒したその仇」
「ここで取らせてもらう」
こう言って彼に向かおうとする。しかしここで。

また新しい小宇宙が来た。それは。
「来られましたね」
「えっ！？この小宇宙は」
「一体何なの！？」
「これは」
青銅の者達もこの小宇宙を感じて驚きの声をあげた。しきりに周りを見てだ。
「この小宇宙はまさか」
「八大公がここに」
「ここに来たというの！？」
そうしてだった。九人の狂闘士達もまた。驚愕した顔でそれぞれ言うのだった。
「リーヴェ様、何故ここで」
「ここに来られるのですか！」
「何故ですか！」
「事情が変わりました」
こう彼等に告げるのだった。

第八十一話　恐怖の九人その三

「ですから」
「事情が変わったと」
「そうなのですか」
「はい、そうです」
また彼等に対して告げた。
「ですから今は引き下がりましょう」
「事情が変わったのですか」
「それはまた何故」
「どうやらここでサジタリアスが来るようなのです」
それだというのである。
「ですから今はここで下がりましょう」
「そうなのですか。だから今は」
「撤退するべきだというのですね」
「そうです。撤退です」
そのことをまた言う。
「わかりましたね」
「はい、それでは」
「ここは」
リーヴェの言葉に素直に従う彼等であった。彼等に対して八大公という立場がどれだけ強いものか。それがはっきりわかる一幕であった。
彼等はそれを受けて撤退に入る。そしてここでまた話されるのであった。
「アリエス、それではだ」
「カルカッタで待つ」
「その時を楽しみにしておく」
こうムウにそれぞれ告げるのであった。

「それではだ。その時にまた会おう」
「それでいいな」
「はい、わかりました」
ムウもまた彼等のその言葉を受けて頷いた。
「それではまた」
「ではそれで」
最後にリーヴェが告げてその場を後にする。こうして川辺での戦いはインプ達を倒したところで終わった。後に残ったのは聖闘士達だけであった。
その残った聖闘士達の中で。まずは魔鈴とシャイナが口を開いた。
「アイオロスも来てるのか」
「そうみたいだね」
「それはね」
このことを話すのであった。
「とはいっても気配はないね」
「どういうことだい、これは」
「おそらくはです」
いぶかしむ二人に対してここでムウが述べた。
「アイオロスはそのままカルカッタに向かっています」
「カルカッタに直接かい」
「向かっているんだね」
「その途中でこちらに小宇宙を向けたのです」
ムウはこのことを話した。
「そしてそれによってです。狂闘士達を撤退させたのです」
「それによってかい」
「けれど向こうもそれに気付いるんじゃないかい？」
シャイナはここでこのことを指摘した。
「あのルキフグスは狂闘士の中で随一の頭脳の持ち主なんだろう？」
「それだったらね」
「おそらく気付いていたでしょう」

「気付いていてかい」
「それであえて撤退したっていうのかい」
「それもまた考えあってのことだったのです」
ムウは彼等の動きを手に取るように把握していた。
「彼等のです」
「じゃあカルカッタはあれだね」
「相当なことが待ってるんだね」
「間違いなく」
そしてこのことも言うのであった。
「だからこそ私達をカルカッタに誘き入れるのです」
「何か相当なことになりそうだね」
「カルカッタの戦いは」
「ですが私達は敗れるわけにはいきません」
そしてムウはこうも述べた。

第八十一話　恐怖の九人その四

「何があってもです」
「何があっても」
「退くわけにはいかない」
「そうなんですか」
「今は」
今度は青銅の四人が声をあげた。しかしその言葉には驚きはなく決意があった。彼女達も決して臆していなかったのである。
「ですね。だったら」
「私達はあえてそこに入って」
「勝つんですね」
「そうです」
まさにそうだというのである。それがムウの考えだった。
「では。いいですね」
「わかってます」
「それはもう」
これがその彼女達の返答だった。
「何があっても勝ちます」
「この戦い」
「そうですよね、ムウ様」
「おそらくはです」
ここでムウは洞察する目になった。そのうえでの言葉である。
「彼等の仕掛けていることはです」
「それは一体」
「何ですか？」
「カルカッタにあるのは」
「トラップが私達に通用するとは思っていないでしょう」
それはないというのである。

「ですからそれはありません」
「罠がないとすると」
「では何でしょうか」
「それじゃあ」
「数です」
ムウが今述べたのは一言だった。
「数で来ます」
「数で来て」
「それで私達を覆い潰す」
「それですか」
「これまでにない数のインプ達がいるでしょう」
また言うムウだった。
「それは覚悟しておくことです」
「数があってもそれでもね」
「どうってことないよ」
ところがここで魔鈴とシャイナが強気の言葉を述べた。
「今更ね。どれだけ数が来てもね」
「何てことはないよ」
「何てことはないって」
「けれど。数がいたらやっぱり」
「数は力だから」
青銅の四人は今の二人の言葉には懐疑的に問うた。これは彼女達に自信がないからではない。むしろ相手の自信を問うたものである。
「それでもなの」
「大丈夫だっていうのね」
「そうさ。質だよ」
「質ではこっちが勝ってるからね」
二人が言うのはそれであった。数より質であった。
「あんた達にしてもだよ」
「あの地獄の修業の日々を思い出すんだ」

そしてこのことを話すのだった。
「あの時をね」
「あの修業の時を」
「その時を」
ジュネとカサンドラが最初に反応を見せた。
「確かに。あの時は」
「何度死ぬと思ったか」
「そうよね、本当にね」
「私だって」
スカーレットとクレウサもであった。
「地獄は。見たわね」
「信じられないのを」
「そういうことだよ。わかったね」
「それを思えばだよ」
また言う魔鈴とシャイナだった。

第八十一話　恐怖の九人その五

「あの連中との戦いなんて何でもないさ」
「全くね」
「そうよね、じゃあ」
「あの連中が幾らいても」
またジュネとカサンドラが言う。
「全然大丈夫ね」
「死にはしないわ」
「あの連中にやられて死ぬんだったら」
「修業の時でとっくに死んでるわ」
スカーレットとクレウサもであった。
「絶対に負けないわよ」
「そうね、何があってもね」
「わかったね。じゃあ行くよ」
「それで全員で帰るよ」
「全員で」
「誰一人欠けることなく」
ここで、だった。青銅の者達は二人の心を知った。その優しさをである。
「わかったわ、じゃあ魔鈴さんとシャイナさんも」
「絶対に死なないでね」
「約束してよね」
「おいおい、私達に約束をかい」
「また言うねえ」
今の四人の調子には彼女達も少しばかり苦笑いになった。仮面をしているがそれでも表情はそこから窺い知れるものであった。
「それも死なないでってね」
「可愛いところあるじゃない」

「そう？別にね」
「そうよね」
「私達は別に」
ところがこれは彼女達にはわからないことだった。自分達では中々わからない話である。
「そんなつもりはないし」
「特にね」
「ねえ」
「だったらいいさ」
「それでね」
そして魔鈴とシャイナもそれでいいとしたのだった。
「まあとにかくだよ」
「カルカッタじゃね」
「もうわかったね」
「そういうことだよ」
こう話してであった。今は聖衣を外して戦場から去る。そうしてそのうえでまたカルカッタに向かう旅路へとつくムウ達であった。牛車に乗って。
そしてムウはであった。またあの牛の背に乗りながら牛車の中の彼女達に声をかけるのであった。インドの道はのどかなものであった。
「ところで」
「あっ、はい」
「何ですか？」
ジュネとカサンドラが彼の言葉に応える。
「一体何が」
「何か出て来たんですか？」
「まさかアイオロス様」
「あの方が」
ここで言ったのはクレウサとスカーレットだった。

「来られる！？」
「遂に」
「いえ、そうではありません」
だがそれは否定するのであった。

第八十一話　恐怖の九人その六

「アイオロスはまだこちらには来ません」
「そうなのですか」
「何かがっかり」
「そうよねえ」
「まさかって思ったのに」
それで明らかに落胆する彼女達だった。どうやら彼女達はアイオロスに対してもかなりミーハーめいた好意を持っているようである。
「残念」
「カルカッタでかしら」
「みたいね」
「まあそんなに落胆することはないよ」
「そうだよ」
ここでまた言う魔鈴とシャイナだった。
「だからね。それでね」
「何かあったのかい、ムウ」
「そろそろ宿をと思いまして」
彼が言うのはこのことだった。見ればもう日がかなり落ちてきていた。
「それはどうしましょうか」
「ああ、そうだね」
「もう夕方だしね」
魔鈴とシャイナもこのことに頷くのだった。
「それじゃあそろそろ」
「そうだね。どっかの宿に入って休むか」
「そうしましょう。とはいっても」
ムウはここで周囲を見回す。魔鈴達は牛車の出入り口から顔を出してそのうえでムウとやり取りをしながら周囲を見回していた。し

かしであった。
「何か何もないね」
「そうだね」
「見渡す限り大平原」
「左手には川」
「そればっかり」
基本的に狂闘士達と戦ったその場と景色は変わっていなかったのである。
「家が一軒も見えないし」
「何もね」
「どうしようかしら。また寝袋？」
「そうなるのかしら」
それを危惧したその時だった。不意に前の方に村が見えてきたのであった。
「村が見えましたよ」
「あっ、そうですか」
「村がですか」
青銅の者達はそれを聞いてすぐに喜びの声をあげた。
「それじゃあすぐに」
「その村で宿を」
「そうしましょう」
「そうだね。じゃあまたカレーを食べてね」
「休もうか」
こう話してであった。村に入る。その村は小さいながらも賑やかな村だった。一行はそこに入ってとりあえずはほっと一息ついたのであった。
「やっぱりね、寝袋ってね」
「今一つ安心できないし」
「完全に休んだ気にはならないわよね」
「そうそう」

それが青銅の四人の意見であった。
「だからここは思い切って」
「宿屋に入って」
「休みましょう」
「はい、それでは」
ムウも彼女達の言葉を受けて言う。
「中に入りましょう」
「了解っ」
こうして今は静かで落ち着いた休息を取る一同であった。しかしそれは戦いの前のほんの息抜きに過ぎないのもまた事実であった。

第八十一話　完

２００９・１２・２６

第八十二話　嵐を前にしてその一

嵐を前にして

ムウ達はカルカッタに向かい続けていた。もう敵が来ることはなく旅路はのどかなものであった。だがそれでも彼等の中には緊張もあった。

「今は何もないけれど」

「そうよね」

ジュネとクレウサが牛車の中で話していた。

「カルカッタでの決戦に備えてね」

「英気を養っておかないとね」

「けれど。あれよね」

「インドって広くない？」

カサンドラとスカーレットはこのことに困った顔をしていた。

「これまた随分と」

「広いってのは聞いていたけれど」

「ああ、それは確かにね」

「その通りね」

ジュネとクレウサは二人のその言葉に頷いたのであった。牛車の中は日が入らず比較的涼しい。腰にはクッションを敷いてそれで快適に過ごしていた。

「いざ実際に来てみると実感するわよね」

「全く」

「何言ってんだよ、皆同じだよ」

「そうだよ」

ここで魔鈴とシャイナが四人に告げた。

「他の連中だってだだっぴろい国に行ってるんだよ」

「アメリカとか中国とかロシアね」

「あとオーストラリアとかね」

「そういうところばっかりなんだよ」
こう話すのであった。
「ドイツとかイランとかペルーだって結構な距離移動したしね」
「あたし達だけじゃないってことさ」
「そうなの。だったら」
「この旅もあれなのね」
「普通なんだ」
あらためてこのことを認識する彼女達であった。
「成程、道理で一回出陣したら戻るのが遅い筈ね」
「時間がかかるから」
「それでなの」
「そういうことだよ」
「まあ旅ってことさ」
こういうふうに気楽に考えている二人であった。
「まあそれでね」
「いいかい？」
「はい、何か」
「あるの？」
「果物食べるかい？」
「どうだい、それは」
白銀の二人はここで四人にある果物を出して来た。それはマンゴーであった。見れば十個以上はある。それぞれの大きさもかなりのものである。
「マンゴーだけれどね」
「どうだい？」
「あっ、マンゴー」
「美味しそうよね」
「ええ、確かに」
四人もそのマンゴーを見て笑顔になる。喉がごくり、と動いてさえいた。

「それじゃあ今から」
「いいかしら」
「このマンゴー」
「ああ、いいよ」
「何個でもあるからね」
こう気前よく返す二人であった。
「幾らでも食べていいよ」
「冷えてるしね」
「冷えてるって」
「氷かお水でもあったの？」
「この牛車の中で」
四人はそのことに目を少し丸くさせて問うた。見たところこの牛車のほろの中にはそうした水槽や氷といったものはない。それでどうやって冷やしているのか疑問に思ったのである。
一応見回す。しかしであった。
「ないわよね」
「そうよね」
「何処にも」
「カミュ様もおられないし」
そしてカミュの名前も出した。
「それでどうして冷やしたのよ」
「かなり謎だけれど」
「方法があるんだよ」
「ちゃんとね」
ところが二人は平気な顔をして言葉を返してきた。

第八十二話　嵐を前にしてその二

「ほら、こうやってね」
「小宇宙で大気を変えてね」
実際二人でそうしてみせてだ。気温をかなり下げてみせた。
しかもそれは一部分だけである。そうやってみせたのである。
「これでやってたんだよ」
「わかったかい？」
「へえ、それもできるんだ」
「聖闘士って」
「小宇宙で」
それを知って思わず感心する顔になった四人だった。これは四人にとっては全く知らない道の世界の話であったのである。それも当然の話であった。
「私達ってまだまだ」
「そうね」
「全然小宇宙のこと知らないのね」
そしてこのことも確認することになった。
「まだまだ修業が必要なんだ」
「やっぱり」
「そういうことさ」
「小宇宙の使い方は様々なんだよ」
実際にそれを言ってみせる二人であった。
「勉強だよ、これも」
「わかったら食べな」
「ええ、じゃあ」
「頂きます」
こうしてその冷えたマンゴーを食べてみた。するとその味は。
「美味しい・・・・・」

「凄く甘いし」
「それに柔らかい」
充分な及第点であった。皮を剥いたそのマンゴーは見事な味であった。その繊維が気になることは確かだがそれでも味は確かなのであった。
「熟れてるわよね」
「ええ、とてもね」
「そういうのばかり選んだからね」
「結構安かったよ」
「そうだったんだ、このマンゴーって」
「安かったの」
青銅の四人はこのことにも驚いたのであった。
「これだけ美味しいのに」
「そんなにしないって」
「他にはスイカもあったよ」
「ドリアンもね」
そういったものもあるというのである。
「それもあるよ」
「えっ、ドリアンっていったら」
「あの」
「果物の悪魔っていう」
「あのドリアン」
彼女達もその名前は知っていた。ドリアンのことをだ。
「あれもあるの」
「この国には」
「まさか」
「あるよ、勿論」
「インドにもね」
二人の返答は素っ気無いものであった。
「当たり前じゃないか」

「インドだよ」
やはり平然として述べるのであった。
「そんなのね」
「普通にあるから」
「何なら食べるかい？」
「それも」
「いや、それはちょっと」
「遠慮するわ」
「私も」
だが四人はその誘いには焦った顔で返すのだった。

第八十二話　嵐を前にしてその三

「やっぱりね、何ていうか心の準備ができてないし」
「だから。それだけはね」
「悪いけれど」
「まさか」
そしてこうも思うのだった。
「今ここにあるとか」
「それはないわよね」
「幾ら何でも」
「ああ、ないわよ」
「マンゴーだけだよ」
やはりそれはないというのである。そのドリアンはだ。
「だから気にしないでいいから」
「安心していいよ」
「そう、よかった」
「それならね」
「安心できるわ」
四人はそれを聞いて納得するのであった。
「それならね」
「ほっとしたわ」
「あれは匂いが凄いしね」
「あんまりだからね」
それが理由なのだった。ドリアンが何故悪名高いかというとその匂いのせいなのである。果物の悪魔とまで言う人間がいる程なのである。
「だから止めたんだよ」
「それでよかったみたいだね」
「ええ、本当に」

「あれだけは」
「御免ね」
「けれどあれだよ」
「ムウはね」
しかしここでムウの名前が出て来た。
「ドリアンが大好きなんだよ」
「あれでね」
「えっ！？ムウ様が」
「あの果物大好きって」
「本当の話！？」
四人はそれを聞いて表情を一変させた。
「あのドリアンを」
「嘘でしょ、それ」
「あんなのを」
「他にも納豆とかも好きだよ」
「それに、あのスウェーデンの」
「そうそう、あれだよね」
「そうだよ、あれだよ」
話がさらに恐ろしい方向に向かう。スウェーデンといえばまさに最終兵器とまで呼ばれている代物があるのだ。あの北の国にもである。
「あれも好きだよね」
「あの缶詰ね」
「アフロディーテ様の御国にあるあれって」
「そうよね、あれしかないわよね」
「あの缶詰の」
「一つしかね」
四人はすぐにわかった。それが何かが。
「あれもお好きなの」
「っていうか」

「匂いが凄いのばかりじゃない」
そのことに唖然としているのであった。
「じゃあムウ様ってあれで」
「ゲテモノもいけるのかしら」
「みたいね」
「間違いなく」
そのことがわかったのである。
「シャカ様なら何となくわかるけれどね」
「そうよね、あの方ならね」
「普通に食べそうだけれどね」
ある意味シャカへの認識はかなりのものだった。

第八十二話　嵐を前にしてその四

「あの方の場合はね」
「何かもう何でも召し上がりそうだけれど」
「っていうか黄金聖闘士は全員そうだよ」
「何でも食べるよ」
こう述べるのであった。
「だからね。ムウもね」
「それ位は普通にだよ」
「ううん、それでも何かイメージが崩れるっていうかね」
「そうよね」
青銅の四人はムウに抱いているその思いを気にしているのである。
それでこう言うのである。つまりはイメージの問題ということである。
「ムウ様ってやっぱりお優しくて」
「そして気品があって優雅で」
「いつも微笑みを讃えておられる」
「そんな方だから」
「ねえ」
まさにそれが彼女達のムウのイメージであった。
「ドリアンとかあれとかは」
「イメージじゃないから」
「だからね」
「そうそう」
「そう思うのはあんた達の勝手だけれどね」
それははっきりと言った魔鈴だった。
「人の食べ物の好みなんて十人十色だよ」
「それぞれっていうのね」
「それは」

「そうだよ、それも個性なんだよ」
まさにそれだというのである。
「個性だから気にすることはないんだよ」
「そうなの。それじゃあ」
「私達も」
「結局のところそういうことさ」
それだけだというのである。
「食べ物の好みもね」
「そういうことなんだよ」
「そうなんだ」
「結局のところは」
そうしてであった。彼女達は納得した。そうして今はマンゴーを食べるのだった。
その冷えたマンゴーは実に美味かった。冷えて甘い果物程美味いものはない。それを食べてであった。それぞれ感想を述べた。
「やっぱり美味しいね」
「そうよね」
「暑いから余計に」
「このお水も」
水もあった。それを飲むと余計にだ。
「あれっ、このお水も」
「美味しい」
「すっきりしてるし」
「それは一旦沸騰させてね」
「それでそれから冷やしたんだよ」
そうしたというのである。
「だから美味いんだよ」
「沸騰してそれから冷やしたからね」
それで美味いというのである。その水もだ。
そしてジュネがふと。こう言った。

「そうそう、ムウ様もね」
「そうよね」
「私達で食べるのはあれだしね」
「ええ、本当に」
その言葉にクレウサとカサンドラとスカーレットが応える。
「だからムウ様にもね」
「食べてもらいましょう」
「是非ね」
「ああ、それはいいよ」
「ムウはね」
しかしここで魔鈴とシャイナが言うのだった。

第八十二話　嵐を前にしてその五

「ムウは食べているからね」
「だからいいのよ」
「いいの？ムウ様は」
「御自身も召し上がられているから」
「それで」
「だからそのドリアンをね」
「食べてるからね」
またそのドリアンが話に出て来た。
「別にいいんだよ」
「冷えたドリアンをね」
「あれってそんなに美味しいのかな」
「どうかしら」
「それでも食べてみようって気にはならないし」
それはどうしてもならないのであった。ドリアンのその匂いを思うとだ。
それで四人はマンゴーを食べるのだった。
次の日に食べたのは。スイカだった。
「このスイカもね」
「そうよね」
「冷えてるだけじゃなくて」
「滅茶苦茶甘いし」
やはり白銀の二人がよく冷やしたそのスイカを食べるのであった。
「冷えていて甘いとね」
「美味しさが倍増するわよね」
「その通りよね」
言いながら満面の笑顔で食べていく。スイカは野菜であるがそれでも果物と同じ様なものとしてそれを食べていくのであった。

そしてそのうえで。また言うのであった。
「何かカルカッタまではこんな感じでね」
「そうよね」
「のどかではあるわね」
それでいいんだよ、今はね」
「それでね」
魔鈴とシャイナはこう四人に告げた。
「カルカッタじゃ死闘になるよ」
「今のうちに英気を養っておくんだよ」
「いいね」
「ムウを見るんだよ」
そしてここでムウの名前を出すのだった。
「今だってね」
「牛車の外でね」
「牛車の外で」
「何してるのかしら」
「ええと？」
ほろから顔を出して見るとであった。そこには。
相変わらず牛の上にいるムウがいた。そこでそのドリアンを食べていた。だが流石に牛車の方まではその匂いは漂っては来なかった。
「ああして食べてるだろう？」
「ドリアンをね」
「ムウもムウでリラックスしてるんだよ」
そうだというのである、
「だからいいんだよ、それでね」
「あたし達もね」
「そう。だったら」
「カルカッタまではこうして」
「平和にいけばいいのね」
「そろそろアイオロスも来るかね」

「そうだね」
アイオロスの名前も出た。
「そろそろだろうね」
「いよいよって感じだけれど」
これは実感から来る言葉だった。
「まあ決戦の時には来るよ」
「絶対にね」
それは間違いないというのである。
「あいつの性格からしてね」
「それは大丈夫だよ」
「そういえばアイオロス様ってね」
「サガ様と並んで責任感凄いしね」
「まさに黄金聖闘士のまとめ役」
これは聖域全体での評価でもあった。

第八十二話　嵐を前にしてその六

「あの方とサガ様がいれば何の問題もなし」
「まさにそうよね」
「頼りになる方よね」
やはり黄金聖闘士の中でも年長のこの二人が周囲から寄せられる信頼は絶対的なものがあった。それはもう絶対に揺るがないまでなのだった。
「お優しい方だしね、御二人共」
「そうそう、あんな立派な方々なのに」
「全然飾らないし公平だしね」
「親切だし」
その人柄も有名なのである。二人は。
「ああした方々だからね」
「おられるともうそれだけで」
「安心できるわ」
こうまで言われるのだった。
「あの方々がいればそれだけで」
「ムウ様がおられるだけでも千人力、いや万人力だけれど」
「そこにアイオロス様が揃えばもう」
「鬼に金棒ね」
「言い換えればそこまでの相手だってことだよ」
「それはわかっておくんだよ」
二人はここでは釘を刺した。
「いいね」
「了解って言いたいけれど」
「アイオロス様までもね」
「それはかなり」
「ううん」

このことについてあらためて考える彼女達だった。そしてその頃。
アイオロスは確かにインドにいた。しかしであった。
カルカッタに向かいながら。ここで誰かと話をしていた。
「アイオロスよ」
「御前か」
「そうだ、私だ」
サガの声だった。だが声だけである。
「私だが。今どうしている」
「カルカッタに向かっている」
そうしているというのである。
「それがどうかしたのか」
「そうか、わかった」
それを聞いたうえでさらに言う彼だった。
「それでだが」
「どうした？何かあるのか？」
「そこでの戦いが終わった後だ」
「それから何かあるのか」
「トラキアがまた動く」
そうなるというのである。
「だが。今度の場所はだ」
「何処に向かうというのだ？」
「それがわからない」
彼はまた言った。
「だが。間違いなく仕掛けて来る」
「今度はギリシアでの戦いになるか」
「少しどうなるか見るべきか」
サガの声はこうも述べた。
「ここは」
「いや、それはどうかな」
だがアイオロスはその言葉には懐疑的であった。

「そうするのは」
「駄目だというのか」
「積極的に動く方がいいのかもな」
そうしてはどうかというのである。
「今度はだ」
「そうか。それならば」
「ギリシア全土に一旦黄金聖闘士を散開させるべきか」
「そのうえで監視網を築いてか」
「そうしてまずは見出す」
それがアイオロスの考えだった。
「それでどうだ」
「そうだな。悪くはないな」
サガは返した。
「それで」
「恐らく今度はだ」
アイオロスはここで彼等の話を名前に出した。
「アーレスの僕達がまた出て来る」
「あの四柱の神々か」
「そうだ、あの神々が出て来る」
それを今言うのだった。

第八十二話　嵐を前にしてその七

「間違いなくだ」
「封印が解かれるか」
「解かれるかではない」
「解かれるかではなく？」
「解かせてはならない」
また自分の考えを言ったアイオロスだった。
「そうなればすぐにアーレスの復活にもつながる」
「この世に再び降り立つ」
「我等には今アテナがおられない」
これが今の聖域の最大の弱点だった。聖域には黄金聖闘士達が揃っている。そして教皇もいる。だがそれでもアテナがいないのだ。
「それで四柱の神々に対することも」
「アーレスに対することもだな」
「できはしない」
アイオロスはそう見ているのだ。
「八大公と互角だ」
「そうだな。八大公とはだ」
「しかしここであらたな神々が加われば」
「もうそれだけで」
「状況が一変する」
所謂パワーバランスということである。アイオロスは聖域とトラキアの今の力関係を踏まえそのうえでそうなった場合の状況を考えて言っているのである。
そしてその答えがであった。
「トラキアにとって圧倒的に有利な状況となる」
「ではそれを防ぐ為にも」
「まずはあの四柱の神々が解放されるのを防ぐ」

何につけてもであった。
「それは何としてもだ」
「わかった」
サガもその言葉に頷いた。
「それでは。教皇にお話しよう」
「私と共にしてくれるか」
「今お話しても駄目か」
「止めておくべきだ」
それは、というのである。
「私が帰って来てからの方がいい」
「そうなのか」
「一人で上奏するよりもだ。それに」
「それに？」
「アイオリア達にも教えておきたい」
こんなことも言うのだった。
「四柱の神々のことをな」
「そういえばそうだったな」
サガも今の彼の言葉から気付いた。
「あの神々のことを知っているのは私達と」
「教皇だけだ」
「あとは老師だけか」
「しかし老師は動けぬ」
その人物についても述べられる。
「それではだ」
「やはり私達しかいないか」
「そうだ。だからこそだ」
「わかった」
そこまで聞いて納得するサガであった。
「では。その様にな」
「するとしよう」

「健闘を祈る」
サガの言葉が遠くなった。
「それではだ」
「ギリシアに戻り教皇に上申したらだ」
「どうした？」
「飲むか」
アイオロスの顔が不意に僅かだが綻んだ。
「久し振りにな」
「ふふふ、そうだな」
サガの声も彼の今の言葉に笑って乗ってきた。
「そういえば長い間御前とも飲んでいないな」
「若い連中は辰巳さんの店に入り浸っているみたいだがな」
「おい、若いというのはないぞ」
サガは笑ってその言葉には注意を入れた。
「私達にしろだ。若いのだぞ」
「ははは、それはそうだがな」
アイオロスも今の彼の言葉には顔を崩して笑った。
「私にしろな」
「だが黄金聖闘士の平均年齢がかなり下がったのは確かだな」
「そうだ。若い力だ」
そのムウ達のことを言うのである。
「その力がこれからの聖域の、そしてアテナの力となっていくな」
「その通りだ。それではだ」
「うむ、それではな」
「またな」
こう話をして別れるのだった。彼等は離れていようともその絆は確かなものだった。アイオロスはその絆を強く感じながら戦場に向かうのだった。

第八十二話　完

2009・12・30

第八十三話　カルカッタにてその一

カルカッタにて

ムウ達はいよいよカルカッタに入ろうとしていた。聖闘士達の表情も変わってきていた。

「明日よね」

「そうよ、明日よ」

「いよいよよ」

また牛車のほろの中で青銅の四人が話をしていた。

「出て来るからね、連中が」

「そうなのね、じゃあ正念場ね」

「本当に」

「わかってると思うけれどね」

「いいね」

その四人にまた魔鈴とシャイナが声をかけてきた。二人は今は水をゼラチン状に固めたそれの上に休んでいる。青銅の四人もその上にいる。

これは小宇宙を使って水を固めたものである。それをクッションにしているのだ。涼しくそれでいて柔らかい。そしてその中にフルーツを入れて冷やしてもいる。

「死ぬんじゃないよ、絶対にね」

「それだけはね」

「ええ、わかってるわ」

「それはね」

四人も真剣な顔で二人に返す。

「何があってもね」

「勝って。そして」

「生きて帰るわよ」

「何があってもよ」

こう言ってそうして戦いに向かうのであった。それが今の彼女達であった。

その夜カルカッタの手前の村に入ったところで。一行の前に彼が現われた。

「間に合ったな」

「うわ、遂に」

「遂に出て来られたわね」

「そうね」

青銅の四人はその彼の顔を見て驚きの声をあげた。彼こそは。

「アイオロス様ね」

「遂に御登場ね」

「本当に」

「おいおい、私は何なんだ?」

アイオロスはそんな彼等の言葉に軽い苦笑いで応えた。彼の服は実にラフな格好である.普通のシャツにジーンズといったいで立ちである。

「別に幽霊でも何でもないぞ」

「けれど。黄金聖闘士ですし」

「しかもサガ様と並ぶ黄金聖闘士のリーダー格」

「教皇様の両腕の一つでして」

サガとアイオロスはまさに教皇シオンの両腕とも呼ばれているのだ。そしてシャカが今ではシオンの頭脳とさえ呼ばれるようになっているのである。

「そんなお方ですから」

「やっぱりそりゃ」

「ねえ」

「物凄い美男子だし」

「顔は関係ないのではないか?」

アイオロスはそのことにも突っ込みを入れた。

「別にな」

「いえ、お顔だって物凄くご立派で」
「凛々しいし。それに」
「気品もおありで」
「弟君のアイオリア様も美男子ですけれど」
彼も、というのだ。
「アイオロス様は大人の風格もありますし」
「もう何て言ったらいいのか」
「わからない位ですよ」
「まあその位にしておきな」
「いいね」
ここで魔鈴とシャイナがいい加減に四人を止めた。
「言ったらきりがないからね」
「これでね」
「うっ、そうなの」
「これで終わりなの」
言われた四人は少しバツの悪そうな顔になった。
「ま、まあそれならいいけれど」
「けれどアイオロス様が来られて」
「何かもう余計にね」
「そうよね」
「だからこれで終わりなって」
シャイナがまた四人に告げた。
「きりがないからね」
「そうだよ。とにかくね」
魔鈴はアイオロスに顔を向けた。そのうえで彼に対して言うのだった。
「アイオロス」
「ああ」
「よく来てくれたよ」
微笑んで彼に述べたのだった。

第八十三話　カルカッタにてその二

「その力、頼りにさせてもらうよ」
「では共に戦わせてもらう」
アイオロスは微笑んで彼女の言葉に応えた。
「是非な」
「はい。そしてです」
アフロディーテが微笑んで彼に応えてきた。
「アイオロス」
「うむ」
「明日カルカッタに入りますが」
彼はその話をするのだった。
「すぐに戦いとなります」
「そうだな。もう奴等の小宇宙がそこまで高まっている」
「ですから。今日は英気を養いましょう」
「わかった。では今日はな」
合流して話を終えるのだった。こうしてアイオロスはムウ達と一緒になった。
宿を取り娘達はそこで休んだ。だがムウとアイオロスは二人外に出てそこで話をするのだった。
夜空には無数の星達が瞬いている。ムウはその星を見ながら言うのであった。
「あの星はです」
「あれはサジタリアスだな」
「貴方の星座ですね」
微笑んでこう言うのだった。
「あれこそが」
「ははは、そうだな」
アイオロスは彼のその言葉に対して笑いで返した。

そうして彼もある星座を指し示して。ムウに言うのだった。
「あれはだ」
「アリエスですね」
「ムウ、御前の星座だ」
こう言うのである。
「あれがな」
「そうですね。十二の星座が空にあります」
「全ての星座が今この宇宙にある」
アイオロスは空を見上げたまま言った。
「私達全てがな」
「そして」
「そして？」
「アテナも」
こうも言うのであった。
「おられます」
「そうだな」
アイオロスも彼の今の言葉に頷くのだった。そうしてこう言った。
「空にはアテナがいつもおられる」
「そうして私達をいつも見守って下さっています」
「有り難いことにだ」
「空はいつもあります」
また言う彼だった。
「私達を見守って下さって」
「そうだな。そしてだ」
「そして？」
「私達はこの空の下にいる者達の為に戦っているのだ」
こう言うのであった。
「全ての者達の為にだ」
「そうですね。それは確かに」
「そうだ。そして」

「明日ですね」
話が明日の戦いのことに移った。
「明日、戦いです」
「私がいて御前がいる」
「こちらはそれで八人です」
「対する向こうはだ」
「十人です」
「数は向こうが少しばかり有利だな」
わざと数の話をしてみせたのである。
「さて、それでだ」
「それで？」
「どう戦うつもりだ？」
今度は戦術についての問いだった。

第八十三話　カルカッタにてその三

「御前は今回はどう戦うつもりなのだ？」
「そうですね。ここはです」
「うむ」
「小細工はしないことです」
これが今回のムウの判断だった。
「今回はです」
「小細工はか」
「相手はルキフグス、狂闘士の中で最大の知恵者です」
「トラキアの頭脳だ」
「そうした相手に下手に仕掛けてもです」
「何にもなりはしないか」
「かえって付け込まれます」
こうまで言うのだった。
「下手な策を弄するよりはです」
「正面からだな」
「攻めます」
また言う彼だった。
「正面から堂々とです。如何でしょうか」
「わかった」
それに頷くアイオロスだった。
「それではだ」
「それで宜しいのですね」
「いいと思う」
彼もそれでいいとしたのだった。
「どのみち何をしても結局はだ」
「結局は」
「正面から戦うことになる」

「そうなりますか」
こうアイオロスに問うムウだった。
「やはり」
「そう思う」
アイオロスは静かにムウに返した。こう。
「ルキフグスに下手な策を仕掛けても読まれてそうなってしまう」
「その通りです。それでは」
「明日の朝早くだな」
「はい、この村を発ち」
「カルカッタに入るとしよう」
「それでは」
こうして二人はこれからのことを決めた。そうして次の日朝一番にホテルを出てカルカッタに向かった。その郊外でもう彼等が待っていた。
「来られましたね」
「ルキフグスだな」
「はい」
リーヴェがいた。そのうえでアイオロスの言葉に応える。聖闘士達は既に全員聖衣を着けている。そしてリーヴェもまた同じであった。
あの赤い戦衣を着て。そのうえで立っているのであった。
だが今は彼一人だ。その彼がアイオロスに応えてきたのである。
「そういう貴方は」
「アイオロスだ」
自身の名前を名乗った。
「サジタリアスのアイオロスだ」
「そうでしたね。サジタリアスでしたね」
「この名前は知っているな」
「勿論です」
微笑んでその言葉に頷くリーヴェだった。

「お話は聞いております」
「これまでの戦いのことだな」
「そうです」
まさにそれであった。
「それはもう聞いています」
「そうだったか」
「そしてその御力も」
それもだというのだ。
「これまで三つの戦場で貴方に多くの同志達を倒されています」
「それもわかっているのだな」
「勿論です。そして狂闘士の掟はです」
それも話に出すのだった。
「同胞の仇は何があっても取る」
「それか」
「そうです。そしてそれは」
今度はムウに顔を向ける。そうして言うのだった。

第八十三話　カルカッタにてその四

「アリエス、貴方もです」
「私もまた」
「インプ達の仇は取らせてもらいます」
これがムウへの言葉だった。
「何があろうともです」
「それでは、なのですね」
「はい、それでは」
彼の今の言葉と共にであった。多くの狂闘士達が姿を現した。彼の左右には魔神達が、そして後ろにはインプ達が。それぞれ姿を現わしたのである。
「はじめましょう」
「それでは」
ムウがまた言った。
「魔鈴、シャイナ」
「ああ」
「わかってるよ」
こう返す二人だった。
「それはもうね」
「安心しなよ」
「それでは」
「ではムウよ」
アイオロスはムウに声をかけてきた。
「いいな」
「はい、では私達は」
二人の黄金聖闘士達が前に出る。そして魔鈴とシャイナは四人の青銅聖闘士達に対して二人が動くとすぐにこう告げたのであった。
「それじゃあね」

「あたし達はね」
「ええ、一人は絶対によね」
「倒さないと」
「私達で四人で」
「それであんた達で二人で」
彼女達は二人の言葉に応えて述べたのであった。
「六人」
「後は黄金の方々が御相手されて」
「そうよね」
「違うよ、それは」
「残念だけれどね」
しかし白銀の二人はこう返したのであった。
「私達が雑兵の相手をするんだよ」
「そうするっていうんだよ」
「えっ、そうなの！？」
「じゃあ魔神の相手は」
「まさか」
「そのまさかさ」
シャイナが四人に対して述べた。
「ムウとアイオロスが相手をするんだよ」
「そんな、御二人で？」
「十人もいるのに」
「無理よ、そんなの」
四人は常識から考えて述べていた。それはあくまで四人の常識である。黄金聖闘士の常識ではなかったのである。あくまで彼女達の常識でしかなかったのだ。
「そんなことは幾ら何でも」
「無理なんじゃ」
「それはすぐにわかるよ」
「それよりもだよ」

またここで言う魔鈴とシャイナであった。
「いいね、私達はね」
「雑兵達に専念するよ」
「そこまで言うのなら」
「わかったら」
「仕方ないわ」
四人もここで遂に納得して頷いた。
「私達は私達で」
「やらせてもらうわ」
こうして六人でインプ達の相手をすることになった。すぐに高々と跳びそのうえでそのインプの大群の中にその身を躍り込ませるのであった。
そしてムウとアイオロスは。十人の魔神達と対峙していた。
黄金色と赤色の小宇宙が燃え盛っている。その中で言ったのはリーヴェであった。
「それではです」
「貴方が私の相手をされるのですか？」
「はい、その通りです」
ムウを見据えながら静かに告げた言葉であった。

第八十三話　カルカッタにてその五

「それで不服でしょうか」
「いえ」
それはすぐに否定するムウだった。
「愛手にとって不足はありません」
「そうですか」
「では」
こうして二人が戦闘に入ろうとする。しかしここでメリエルがリーヴェに対して言ってきたのであった。
「リーヴェ様、お待ちを」
「まさかとは思いますが」
「申し訳ありません、そのまさかです」
「私もです」
レニーも言ってきた。
「是非アリエスとの勝負を」
「若しくはサジタリアスとの」
「いいのですか？」
リーヴェはその彼等に対して言葉を返した。
「アリエスもサジタリアスもその強さは」
「構いません」
「元より覚悟のうえです」
すぐにこう返す彼等だった。
「ですからここはどうか」
「我等に」
「・・・・・もう一度聞きます」
リーヴェは慎重に彼等に問うてきた。
「いいのですね、それで」
「迷いはありません」

「我等も狂闘士です」
「わかりました」
ここまで聞いて遂に頷くリーヴェだった。
そうしてそのうえで。彼等に対して言うのであった。
「思う存分戦うのです」
「はい、それではです」
「すぐに」
こうして彼等は黄金聖闘士達と戦うことになった。すぐにそれぞれの相手に向かう。
ムウには五人、アイオロスには四人であった。
ムウにはメリエル、ナルサス、サン、シゲン、レニーが。アイオロスにはゼノ、シャロン、ミンツ、レオンハートが、それぞれ来たのであった。
「我等で貴様等を倒す」
「必ずだ」
「いいでしょう」
ムウもまた彼等の言葉を受けそのうえで返した。
「それでは私もまた」
「全力を尽くそう」
アイオロスも言うのであった。
「聖闘士としてだ」
「この全力で以って」
「獅子というわけだな」
ゼノが彼等の言葉に返した。
「つまりは」
「黄金聖闘士は誰であろうが決して侮ることはありません」
「敵と戦う時は全力を尽くす」
これが二人の返答だった。
「だからこそです」
「来るのだ」

「よし、それならだ！」
「行くぞアリエス！」
「そしてサジタリアス！」
彼等は一斉に動いてきた。
「この我等の攻撃をだ！」
「今ここで受けるのだ！」
こう言ってそれぞれの技を放ってきた。
「受けよ！」
まずはメリエルの技であった。
「このバラムのメリエルの技！」
「来ましたね」
「そう、これで！」
言いながらその技を放った。
「スリーヘッドポイズン！」
右手から三つの毒の激流を放ってそれをムウに向けるのだった。
そして次はナルサスだった。
「次は俺が」
「ああ、ナルサス」
メリエルがその彼に告げる。

第八十三話　カルカッタにてその六

「やれ、一気にだ！」
「そうさせてもらう。受けろ！」
その言葉と共にである。彼も己の技を放った。
「シューティングスター！」
右足から蹴りを放ちそこから白く丸い光の衝撃波を放ったのである。
三人目は。サンだった。
「受けなさいアリエス！」
「女の方ですか」
「女といえど狂闘士！」
こう言ってそれでもだというのだ。
「この攻撃受けてもらうわ！」
「いいでしょう。それでは」
ムウも彼女に対して応える。
「今ここでそれを」
「マッドストリーム！」
全身で叫ぶ様にして技の名前を叫ぶとだった。その後ろから無数の竜巻が生じ。そのうえでムウに対して激しい攻撃を浴びせたのである。
三人だけではなかった。もう一人いた。それは彼だった。
シゲンが動いてである。その右手には角を出していた。
「角ですか」
「我がモラクスは牛の魔神」
だからだというのである。
「だからだ。この角を受けてもらおう」
「その攻撃は」
「これだ。バイソンホーン！」

その技の名前と共に巨大な角が出た。それがムウに向かって突き進んで来た。
これで四人。しかし最後の一人がいた。
レニーがである。既にその両手の指と指の間にそれぞれダガーを挟んでいた。
そのダガーを放ってきたのだった。
「ヤクトダガー！」
「よし、これで！」
「我等五人の攻撃を受ければ！」
「如何にアリエスとて！」
彼等は明らかに勝利を確信していた。
「これだけの攻撃を与えればそれで」
「流石に勝てまい」
「そうだ、絶対にだ」
確かに勝利を確信していた。しかしであった。
攻撃の後の煙が消えたそこには。ムウがそのまま立っているのだった。
何処も傷付いてはいなかった。マントさえも。それは白いままで風になびいてさえいた。
それを見た狂闘士達は思わず言った。
「何と・・・・・・」
「マントさえもだと」
「何もないというのか」
「かわすことができましたから」
だからだというムウだった。
「ですから」
「馬鹿な、かわしただと！？」
「我等のあの攻撃を」
「全てか」
「黄金聖闘士は光の動きを持っています」

これは最早言うまでもないことだ。だがあえてそれを言うのだった。
「だからこそです」
「それでだというのか」
「それでか」
「そうです」
まさにそうだというのだった。
「攻撃が一方からならそれで、です」
「かわせるというのか」
「くっ、何という男だ」
「アリエス、それならだ」
彼等はムウが無傷なのとその言葉に冷静さを失ってしまった。そうしてそのうえで今度は彼を取り囲んで、である。再び技を放つのだった。
「これでどうだ！」
「これならば！」
「如何に貴様とて！」
それで倒そうとする。しかしであった。
彼等が一斉に技を放ったのを見てムウはまた言った。
「聖闘士に一度見た技はです」
「何だ！？」
「何だというのだ、それで」
「効きはしません」
言うのはこのことだった。

第八十三話　カルカッタにてその七

「それで見切ることができます」
そうしてであった。今技を放ったのだった。
「クリスタルウォール！」
ムウの全身をその壁が覆った。そうして。
それは彼等の渾身の攻撃をありのまま弾き返した。そうしてそのうえで他ならぬ彼等自身を打ち、である。吹き飛ばしてしまったのだった。
吹き飛ばされた彼等はそのまま倒れこんだ。致命傷なのは明らかだった。
戦衣は所々砕け傷を負っていた。その中でシゲンが何とか顔を起こして言った。
「まさか我等の力をそのまま使うとは」
「これはそういう技なのです」
ムウは立ったまま静かにそのシゲンに対して述べた。
「技をそのまま返すのです」
「知ってはいたが」
「そうだ、知ってはいた」
メリエルも言った。
「だが。まさかここで使うとはだ」
「思われなかったのですね」
「迂闊だった」
彼等にしてはまさしくであった。
「冷静さを失っていた」
「確かに」
ナルサスも言う。
「その結果か。これは」
「私達の負けね」

「確かに」
サンとレニーも言う。彼女達も致命傷を受け頭からそれぞれ血を流して倒れていた。何とか頭だけをあげてそのうえで言ったのである。
「やはりアリエス」
「格が違うということね」
「それではだ」
最後にメリエルが言ってきた。
「我等の仇はリーヴェ様に討って頂く」
「ルキフグスにですね」
「そうだ。八大公の一人であられるあの方の御力」
彼に対する絶対の信頼が窺える言葉であった。
「とくと味わうがいい」
「それではだ。アリエス」
「冥界で会おう」
最後にこう言って五人は息絶えた。これで彼等とムウの戦いは終わった。
しかしであった。そのムウの前にだ。今度はリーヴェが立っているのであった。
そして彼は。こうムウに対して言ってきた。
「まずはお見事でした」
「彼等との戦いですね」
「そうです」
まさにその戦いのことだった。
「アリエス、教皇の直弟子だけはありますね」
「それは関係はないと思いますが」
「いえ、かつてのアリエスのシオンを彷彿とさせます」
少なくともそれだけのものがあるというのである。
「それはです」
「そうなのですか」

「しかしです」
ここで彼の言葉の色が変わってきたのだった。
「その仇は取らせてもらいます」
「それはですか」
「そうです」
まさにその通りだというのであった。
「私もまた狂闘士、しかも八大公の一人です」
「同胞の仇は何としても取ると」
「そういうことです。宜しいですね」
「いいでしょう」
ムウもまたそれを受けて述べた。
「それではです。ルキフグスよ」
「はい、それではです」
「闘うとしましょう」
それぞれ小宇宙を燃え上がらせてきていた。
「それでいいですね」
「望むところです」
二人はこうして闘いに入ろうとしていた。カルカッタでの闘いもいよいよ佳境となってきていた。黄金聖闘士と八大公の闘いがここでもはじまろうとしていた。

第八十三話　完

２０１０・１・３

第八十四話　黒と白その一

黒と白

ムウとリーヴェが対峙しているその頃。六人の聖闘士達はインプ達と戦っていた。

「白銀に青銅なぞ！」

「所詮我等の敵ではない？」

こう言って彼女達に襲い掛かるのだった。

まずは魔鈴に対してだった。

「貴様がイーグルか」

「噂では女だというが」

「女だからといって容赦はしない」

「それはわかっておけ！」

こう言いながらそれぞれ三叉の槍を手に襲い掛かる。その槍が赤く禍々しく光りそれだけで血を欲しているのが何よりもよくわかった。

「それではだ、いいな」

「死ね！」

「女だからって遠慮はしないんだね」

魔鈴がその言葉に応えた。

「いいよ、それこそがだよ」

「望むところだというのか」

「まさか」

「ああ、そうさ」

まさにその通りだというのだった。そしてその言葉と共に彼女の小宇宙を高まらせる。その強さと激しさは白銀聖闘士達の中でもかなりのものだった。

「それじゃあ。見せてあげるよこのイーグルの魔鈴の技！」

「来たか！」

「その前にだ！死ね！」
「死ぬのはそっちさ！受けな！」
魔鈴は今の言葉と共に跳んだ。そうして蹴りを放ちであった。
「イーグルトゥフラッシュ！」
無数の光がインプ達を貫いた。魔鈴がその渾身の力を見せたのだ。
そうしてだった。シャイナもまた。
彼女にも無数のインプ達が襲い掛かる。その攻撃はやはり槍によるものだった。
「この槍でだ！」
「貫いてくれる！」
「その奇麗な顔をだ！」
「おやおや、これは仮面だよ」
見れば実際にシャイナは今は仮面を被っている。それは他の聖闘士達も同じである。
「それでも顔は見えるってのかい？」
「何となくわかることだ！」
「雰囲気でな！」
「ふん、あたしは顔は別に気にしちゃいないんだよ」
だがシャイナはそれについては無頓着であった。
「別にね」
「何っ、どうでもいいというのか？」
「それは」
「ああ、あたしは聖闘士だよ」
だからだというのである。
「だから。これを見せるよ！」
「何っ、これは！」
「雷か！」
「そうさ、サンダークロウ！」
叫びながら右手の五つの爪を一閃させた。
そうしてそこから雷を放ち。インプ達を撃ったのであった。

「あたしの雷はそれこそ避けることすらできないよ」
「おのれ、白銀とはいってもか」
「これだけの力を見せるというのか・・・・・」
インプ達は彼女の攻撃を受けて倒れてしまった。そして戦っているのは白銀の二人だけではなかった。
青銅の四人もだ。ジュネが跳んでいた。
そうして両手を広げ。今無数の手刀の衝撃波を繰り出し下にいるインプ達を襲った
「クレインフェザー！」
その羽根でインプ達を倒すのだった。
そうしてクレウサもまた。攻撃を放っていた。
「イリュージョンダンス！」
激しく動き回りそのうえで拳や蹴りをインプに叩き付けていく。
そうして倒していく。
カサンドラはだ。迫るインプ達を前にゆっくりと目を閉じていた。
仮面の下で。
それを見たインプ達はだ。まずは驚きの声をあげた。
「何だとっ、動かないだと！？」
「まさか！」
「行くわよ」
こう言ってであった。仮面の下の目を開けた。すると。

第八十四話　黒と白その二

彼女の全身から凄まじい光が生じてそれでインプ達を払ったのである。

「シャイニングライト！」

それが彼女の技だった。その光でインプ達を倒していく。

そしてスカーレットは。両手に炎を宿らせそれを放って叫ぶ。

「ファイアースネーク！」

その炎の蛇でインプ達を焼き尽くす。彼女達も果敢に戦っていた。

そしてアイオロスは。四人の狂闘士達と対していた。

そのリーダー格であるゼツがだ。彼に対して言ってきた。

「ではサジタリアスよ」

「戦うというのだな」

「そうだ」

まさしくその通りだというのだった。

「我等狂闘士は戦いの中にこそ生きるもの」

「だからだな」

「その通り。だからこそだ」

こう言いながら四人共彼を強い憎悪の目で見据えていた。

言葉もまた。かなり鋭いものだった。

「我等四人で貴様を倒す」

「仲間達の仇も討つ」

「これまでの三つの戦場でのことだな」

「そうだ」

まさしくその通りというのであった。

「だからこそだ。いいな」

「死んでもらおう」

「死ぬのがどちらかはだ」

アイオロスは四人を前にしてもいつもの冷静さであった。

その冷静だで。さらに言うのであった。
「これからわかることだ」
「では行くぞ」
「死んでもらう」
こうして四人はそれぞれ技を繰り出した、まずはゼツであった。
「食らえ！」
叫びながらその技を繰り出してきた。
両手を組み合わせそのうえで前に出し。叫ぶのであった。
「クライムブレス！」
凄まじい衝撃波がその組み合わせた両手から放たれアイオロスを襲った。
そして次はシャロンだった。その右手に巨大な片刃の刀を持っている。
それを右から左に一閃させ。技の名前を叫んだ。
「グレートソード！」
その攻撃でアイオロスを襲うのだった。
そしてミンツは一旦跳んだ。身体を大きく広げてそれから技の名前を叫んだ。
「スターダストレクイエム！」
無数の流れ星が落ちてきた。それで一気にアイオロスを倒さんとする。
最後はレオンハートだった。彼は両手の十本の指を前に突き出してその技の名前を叫んだ。
「ディケイドヘッドドラゴン！」
その指から赤い竜の頭を持った気が放たれる。それはそれぞれ複雑な動きを示しながらアイオロスに対して向かって来たのであった。
アイオロスはその四人の攻撃に対してだ。自らも技を繰り出してそれに対してきた。
「御前達がそう来るのなら私は」
「むっ！？」

「どうするつもりだ！？」
「技を放つというのか！？」
「そうだ」
まさしくその通りだと返すのだった。
「これがその技だ。見ろ！」
「くっ、それか！」
「その技か！」
「そうだ。インフィニティブレイク！」
その技の名前を叫ぶと同時に無数の光の矢が放たれた。そうして。
まずは四人の技を全て打ち消してしまった。
「くっ、我等の攻撃を全てか！」
「しかも！」
「来たぞ！」
技はそのまま四人に向かいそのまま吹き飛ばしてしまった。その無数の光の矢が彼等を完全に叩き潰してしまったのである。
そうして吹き飛ばされた四人はそのまま倒れ伏し。何とか顔だけあげて言うのだった。
「おのれ、これがアリエスだというのか」
「アリエスの攻撃か」
「如何にも」
まさにその通りだと返すアイオロスだった。

第八十四話　黒と白その三

「これでわかったな。私の技が」
「くっ、確かにな」
「それはだ」
それを倒れ伏しながら言う彼等だった。
「まさかこれ程までとはな」
「恐ろしい男だ」
「我等の負けだ」
そしてこう言ったのであった。
「無念だがそれは認めよう」
「だが」
「だが。何だ」
アイオロスはその彼等の言葉に対して問い返した。
「何だというのだ？」
「我等に勝ったとしてもだ」
「それでアーレス様に勝てるとは思わないことだ」
彼等が今言うのはこのことだった。
「それは言っておく」
「それはな」
「そうか、その言葉は確かに聞いた」
アイオロスは彼等のその言葉を邪険にはしなかった。落ち着いた様子でそれを受け冷静に返すのだった。それが如何にもアイオロスらしかった。
「アーレスか」
「アーレス様は必ずこの世に降臨される」
「絶対にだ」
それは必ずだと断言する彼等であった。
「その時こそ我等の勝利の時だ」

「所詮貴様等はアーレス様には勝てはしない」
「神には、というわけだな」
「そうだ、その通りだ」
「アーレス様には誰も勝てはしない」
自分達が仕える神には絶対の信仰を見せるのだった。
「例えオリンポスの神々であろうともだ」
「戦いの神に勝てる者はいない」
「誰であろうとだ」
こう言うその間に死期に近付いていた。そうしてであった。
彼等はそのまま事切れたのであった。後にはアイオロスだけが残った。しかし彼は勝利の余韻に浸ってはいなかった。再び戦いに思いを馳せていた。
「ムウはどうか」
彼の闘いについてであった。今そのムウはリーヴェと対峙していた。
そのリーヴェがだ。まずは一歩出て来たのであった。
「さて、それではです」
「来られるというのですね」
「そうです」
まさにその通りだというのだった。
「アリエス、申し上げた筈です」
「彼等の仇をですか」
「取らせてもらいます」
言いながらまた一歩前に出る。するとさらにその小宇宙が沸き起こったのであった。その大きさはムウのそれと比べても全く遜色のないものであった。
その小宇宙のままムウを見て。静かにその右手を胸の前にやってきた。
そうして今言う言葉は。
「それではです」

「技をですか」
「私の技を見せましょう」
言いながらであった。その右手に黒い渦を涌き起こしてきた。それは最初は掌にあったが徐々に大きくなっていき。やがてリーヴェの身体全体程になってしまった。
そしてそれをムウに向けて放ち。こう叫んだ。
「ブラックホール」
「ブラックホールというと」
ムウはその不吉な名前を聞いてすぐに声をあげた。
「あの宇宙にある全てを吸い込むという渦ですか」
「その通りです」
また答えるリーヴェであった。ブラックホールを放ったうえで。
「これこそがです」
「そうですか。やはり」
「このブラックホールは全てを吸い込みます」
このことをあらためてムウに告げた。

第八十四話　黒と白その四

「そう、全てをです」
「私もまた、ですね」
「さあ、アリエスよ」
技を放ったうえでの静かな言葉であった。
「この攻撃。どうかわされますか」
「かわすつもりはありません」
ムウは毅然として彼に言葉を返した。
「それはです」
「ないというのですね」
「そうです」
彼もまた引いてはいなかった。
「私もまた同じものを持っているのですから」
「それはあれですか」
「そうです。見るのです」
言いながら彼も技を出す姿勢に入った。身体全体をゆっくりと動かして。
「スターライトエクスティンクション！」
「その技をですね」
「この技ならばどうです！？」
技を出したうえで問うムウだった。
「貴方のそのブラックホールも」
「面白い方だ」
その技を見たリーヴェの感想はこれであった。
「私のブラックホールと同じ性質の技をここで繰り出すとは」
「目には目をです」
だからだというのである。
「そして黒には白をです」

「成程、だからですね」
「その通りです。さあ、これならどうですか？」
「そうですね。これではっきりとどちらが上かわかります」
リーヴェは今度はこう言うのであった。その顔には不敵な笑みさえあった。
「だからこそです」
「そうですか。ではどちらが上か」
「勝負です」
今白い光と黒い渦がぶつかり合った。白と黒がまず拮抗していた。そうして互いにせめぎ合う。そうして遂に。
両者がはじけ飛んだ。白と黒、光と闇が飛び散ったかに見えた。それが消え去ったその時にはだ。何も残ってはいなかった。完全に相殺されてしまっていたのだ。
それを見た両者は。また言った。
「そうですか。実力は」
「伯仲ということですね」
「確かに」
実力はまさに伯仲であった。どちらが劣っているということはなかった。まさに双方の実力は完全に互角の有様だったのである。
そしてそれを確かめ合ってから。まずはリーヴェが言ってきた。
「アリエスよ」
「何でしょうか」
「どうやら貴方を侮っていたようです」
そうだというのであった。
「それは謝罪します」
「侮っていたというのですか」
「そうです。何故なら」
「何故なら？」
「このブラックホールは私の技の中では大したことはないものです」
そのブラックホールはそうだったというのである。

「それを出したことをです」
「だからこそなのですか」
「それを謝罪致します」
ここでまた謝罪という言葉を述べるのだった。
「貴方はこの技で倒すのに相応しい方ではない様です」
「そうだと仰るのですね」
「私の全力を以って」
リーヴェの言葉が強いものになった。
「貴方は倒すべき方です」
「それでは」
「見せましょう」
リーヴェはムウに対して告げてきた。

第八十四話　黒と白その五

「私のその技をです」
「そうですか。それでは」
ムウもその言葉を受けた。そのうえで小宇宙をさらに高めさせ。再び攻撃を仕掛けんとしてきていた。
ムウの小宇宙は穏やかである。だがその強さはかなりのものであった。その強大さは彼を黄金聖闘士であると認識させるのに充分なものであった。
その小宇宙を起こしながら。また言ってきた。
「では私は」
「来られるのですね」
「はい、では見せましょう」
その技を放とうとする。その技は。
「エビルタスク！」
「！これは！」
無数の牙を思わせる黒い衝撃波が沸き起こりそれがムウに向かって襲って来た。さしものムウもそれを見て驚きを隠せなかった。
「無数の衝撃波が」
「さあ、これはどう防がれますか？」
技を放ったリーヴェはその無数の黒い衝撃波の中でムウに問うてきた。
「アリエス、貴方は」
「ならば！」
ここでムウも動いた。彼もまた。二人の技が再び激突するのであった。
彼等が戦っているその時エリスは八大公達を集めていた。そしてそのうえで話をするのであった。
「狂闘士の中で残っているのはだ」

「はい、残念なことに」
「我等だけです」
八大公のうち七人がエリスの前に控えている。その声には無念さもあった。
「七十二柱の同胞達は全て」
「黄金聖闘士達によって」
「それはどうとでもなることであるな」
しかしエリスはここでこう言うのであった。
「そうであろう」
「それでは」
「いよいよなのですか」
「そうじゃ。リーヴェもよくやってくれた」
エリスの顔に笑みが浮かんだ。その青い顔に凄みのある微笑みが浮かんだのである。
「これで八つの封印はじゃ」
「全て解かれるのですね」
「いよいよ」
「あとはそなた達と四騎士がじゃ」
あらたな名前も出て来た。
「無論このエリスもじゃが」
「あの方々を降臨させて」
「そしてアーレス様も」
「そうじゃ。まずはあの者達じゃ」
それが誰かは言わないがこう述べるのであった。
「あの者達をこのトラキアに呼び戻し」
「あの方々の御力でさらに」
「アーレス様もまた」
「全ては整おうとしておる」
エリスはここでまた凄みのある笑みを浮かべてみせた。そして言うのだった。

「我等がこの世を治めるべき全てがな」
「アーレス様が降臨されれば」
「まさに」
「そうじゃ。アーレス様さえおられればじゃ」
何につけてもアーレスであった。彼等にとってアーレスとはまさに絶対の存在であった。それを知らしめる言葉のやり取りであった。

第八十四話　黒と白その六

「アテナのおらぬアテネなぞは」
「相手ではありませぬ」
「所詮は」
「わかったのう。アーレス様の御力ならばあの者達も蘇る」
「はい、まさに」
「アーレス様ならば」
八大公達の言葉には希望が宿っていた。先程見せた無念さは消えていてそれがそのまま希望にかわりそのうえで話をしているのである。
「我等に全てをもたらせてくれます」
「同胞達を蘇らせ」
「そのうえで我等の理想とする世界も」
「全てをもらたしてくれます」
「アーレス様こそが絶対の存在である」
エリスもまたそう言い切るのだった。
「戦いとは何ぞや」
「全てです」
「この世の全てであります」
これが狂闘士達の返答であった。
「まさにこの世そのものであります」
「戦いこそは」
「その通り。しかもじゃ」
エリスの言葉は続く。彼女もまたアーレスへの絶対の忠誠心を見せていた。そうした意味で彼女も狂闘士達と同じなのであった。
「アーレス様は天皇ゼウスとその正室ヘラの間に産まれた」
「まさに嫡子であります」
「オリンポスの」

「オリンポスをも治められるのに相応しい方なのじゃ」
これが彼等のアーレスへの認識であった。とにかく彼の存在なくして彼等の存在もない、そうした絶対の忠誠が彼等にはあった。
「よいな。それではじゃ」
「はい、では」
「次は」
「あの場所に向かう」
まずはその場所については言わないエリスであった。
「あの場所にじゃ。よいな」
「というと」
「我等の第二の聖地」
「あの永遠の都にですね」
「左様、一度は言っておるな」
「はい、既に」
こう返す八大公達であった。
「それはもう」
「そうだったのう。では話は早いな」
「はい、それではリーヴェが帰ったならば」
「あの都に」
「行くがよい。あの都から全てがはじまる」
エリスは悠然と笑って己の前に控える八大公達に対して述べるのだった。
「よいな。それでは」
「はい、わかりました」
「ではその様に」
「黄金聖闘士は確かに強い」
エリスもそれは認めた。その強さはかなりのものである。それは既に八大公達が率いている狂闘士達が全て倒されていることからも言えた。
「しかしじゃ」

「しかし、ですか」
「それでは」
「我等には劣る」
そうだというのである。
「あの四柱が戻り。そして」
「アーレス様が」
「あの方も戻られれば」
「全てが終わる。よいな」
こう告げるのであった。彼女達は勝利を確信していた。そうしてであった。そこに不敵な笑みを浮かべるのであった。

第八十四話　完

2010・1・6

第八十五話　八つの封印その一

八つの封印

リーヴェのブラックファングはそのままムウに襲い掛かって来ていた。それはまさに暴風を思わせる凄まじい勢いを見せていた。

「さあアリエスよ」

彼はその黒い嵐の中心にいた。

「この攻撃、どうかわされるのです？」

「かわすというのですね」

「違うのですか？」

「何もかわすだけではありません」

ムウは今いるその場所に留まったまま述べるのだった。

「それだけではないのではないでしょうか」

「かわすだけではないと」

「そうです」

まさにそうだというのである。

「それはです」

「弾き返すですか」

ここでリーヴェはまた彼に言ってきた。

「それを考えているのでしょうか」

「クリスタルウォールですか」

「それではないのですか？」

あらためて彼に問うてみせた。

「あれを使うおつもりなのですか？」

「そうだと言えば」

「生憎ですがそれは意味がないと述べておきましょう」

これが今のリーヴェの言葉だった。そのまま数えきれぬだけの黒い刃の中で立っている。その強大な小宇宙をそこに見せながらである。

「それはです」
「無駄だというのですか」
「見るのです」
言いながらふと前に黒い壁を出した。するとだった。
牙がそれを撃っていきそうして。忽ちのうちに砕いてしまったのである。
「壁が」
「これは貴方のクリスタルウォールと同じものです」
壁が砕け散るのを見届けながらの言葉であった。影はガラスの様に砕けそうして消え去っていく。落ちるとそのまま影の如く消え去るのであった。
「それがこうなります」
「その攻撃によってですか」
「そうです。貴方のクリスタルウォールは効きません」
あらためて述べる彼であった。
「それは申し上げておきましょう」
「そうですか。しかしです」
「しかし？」
「クリスタルウォールだけではありません」
ムウも立ったまま言うのであった。
「私の技はです」
「あの水晶の壁ばかりではないと」
「そうです。私の技は二つだけではありません」
あらためて述べるムウだった。
「それは申し上げておきましょう」
「ではその技は一体」
「それを今見せましょう」
こう言ってであった。今四方八方にあるものを出した。それは光り輝く巣だった。蜘蛛の巣を出してそのうえで牙に対してきたのである。

「蜘蛛の巣!?」
「クリスタルネット」
その蜘蛛の巣を見せたうえでの言葉である。
「これならばです」
「私のブラックファングを防ぐと」
「さあ、見るのです」
ムウの言葉は続く。
「この蜘蛛の巣の力を」
「むっ!?」
今まさにその牙達がムウに襲い掛かる。だがその前にいる蜘蛛の巣に捉えられてである。そうして一つ一つ全て捕らえられていくのであった。
「牙が全て」
「このクリスタルネットに捕らえられないものはありません」
ムウは身動き一つしない。その蜘蛛の巣が全て捕らえているのであった。
「何一つとして」
「その様ですね。まさかまだ技を持っておられるとは」
「これで貴方のその技は封じました」
牙は全て蜘蛛の巣に捕らえられてしまった。そしてその巣が消えると共に消え去っていく。こうして彼等の戦いはまた振り出しに戻ったのだった。
「こうしてです」
「お見事です」
またムウを褒めたリーヴェだった。

第八十五話　八つの封印その二

「このブラックファングまで止められるとは」
「左様ですか」
「やはりアリエス。尋常な手強さではありません」
また彼を認める言葉を出した。
「しかしです」
「しかし？」
「私の技はまだあります」
それはまだあるというのである。
「それはまだです」
「まだだというのですか」
「そしてそれは貴方もですね」
ムウにまた告げてきた。
「その通りですね」
「既に読んでおられましたか」
「そのクリスタルネットは護りの技」
そのことを指摘してきた。
「切り札があるならばここでそれを引く筈です」
「だからだというのですか」
「そうです。貴方は切り札として攻撃用の技を持っておられます」
「それをですか」
「その通りですね」
リーヴェはこのことを問うてきたのである。
「貴方にはその技がまだ」
「そしてそれは」
ここでムウも返してきた。
「貴方もですね」
「それはもう読んでおられるのですか」

「はい、理由は貴方と同じです」
こう真顔で返したのである。
「切り札として。そうですね」
「それは否定しません。私もまた」
「そうですか。やはり」
「ですがそれをここで出すのはです」
「されないというのですね」
「今はその時ではありません」
こう述べて今それはしないのだった。
「今はです」
「ではこの戦いはですか」
「これで終わりとしましょう」
こう言ってその小宇宙を収めるのであった。
「貴方との決着はまたの機会にです」
「そうですか。わかりました」
そしてムウも己のその小宇宙を収めるのだった。二人は互いに矛を収める形となった。
「では。私もこれで」
「貴方らしい。私が闘う気をなくしたと見ると」
「私が闘うのはあくまで闘う気のある相手にだけです」
微笑みを元に戻しての言葉であった。
「だからこそです」
「そうですね。どうやら貴方はまさに私が闘うのに相応しい方です」
「黄金聖闘士だからというだけではなくですね」
「そうです」
まさにそうだというのであった。
「貴方だからです」
「そこまで言って下さるとは思っていませんでした」
それを言われたムウの言葉である。
「私だからだとは」

「アリエス、貴方は私が倒します」
「では貴方も私が」
「私以外の誰にも倒されることを許しません」
こうまで言ってみせた。
「いいですね。それでは」
「はい、ではまた」
「御会いしましょう」
最後の言葉を残して姿を消すのであった。後には何も残ってはいなかった。戦場に残っていたのは聖闘士達だけである。ジュネ達がムウのところに駆け寄ってきた。
「ムウ様」
「御無事だったんですね」
「どうなるかって思いましたけれど」
「私は無事です」
ムウは彼女達にはいつもの優しい笑みを受けたのであった。四人はすぐに彼を取り囲む。するとムウの頭が飛び出る形になっていた。

第八十五話　八つの封印その三

「ですが。貴女達も」
「はい、全員無事です」
「安心して下さい」
微笑んで返す彼女達だった。見れば確かに全員いる。
「何とか倒しましたから」
「もうインプ達は一人もいません」
「そうですか。それは何よりです」
ムウもそれを聞いて笑顔になった。
「では戦いはこれで終わりですね」
「ああ、そうだよ」
「インドでの戦いはね」
ここで魔鈴とシャイナも来た。彼女達も無事であった。
「私達の勝ちだね」
「ルキフグスも帰ったみたいだしね」
「はい、そうです」
まさにそうだと二人に返したムウだった。
「彼も帰りました」
「残ったのはあいつ一人かい」
「何かいつもの流れらしいね」
各地での戦いは常に八大公の一人だけが生き残り戦場を去る。それが流れになっているのである。二人が今言うのはこのことであった。
「それはね」
「どうやら」
「そうですね。ですが」
ここでまた言うムウであった。
「まだ戦いは続きます」

「その通りだ」
アイオロスもここでムウのところに来た。そうして彼に対して言ってきたのだった。
「これまでの戦いは前哨戦に過ぎない」
「そうですね。結局のところは」
「これだけ激しい戦いが前哨戦ですか」
「そんな」
「いや、そうだ」
アイオロスは青銅の四人に対しても告げるのだった。
「もっとも御前達はこれからは聖域に留まってもらうが」
「ってアイオロス様達はどうされるんですか？」
「黄金聖闘士の方々も」
「これからは私達だけが動くことになるだろう」
そうなると。アイオロスは確かに言った。
「だからだ。御前達は聖域の守りを固めることになる」
「まあ私達が出てもね」
「話にならない情況になるみたいだしね」
魔鈴とシャイナが彼の話を聞いて述べた。
「だからね。それはね」
「教皇もそう判断するだろうね」
「ムウ」
アイオロスはあらためてムウに声をかけてきた。
「いいな、聖域に戻ればだ」
「はい」
ムウもまた真剣な面持ちで彼の言葉に応える。
「これからのことが決まる」
「そうですね。さて、どうなるかですが」
「御前はどうなると思う？」
具体的なことをムウに尋ねてきた。
「これからは」

「彼等の今現在の最大の目的はアーレスの復活です」
ムウはその問いを受けこう述べたのだった。
「その為に動くでしょう」
「そうだな。そしてだ」
「そして？」
「私達の殆どで出ることになる」
そうなるともいうのであった。
「それだけの激しい戦いになるということだ」
「次の戦いもですか」
「そうだ。向こうも八大公が出て来る」
彼等もだというのだ。
「そのうえでだ。激しい戦いになるぞ」
「わかりました。それでは」
「まずは戻る」
何につけてもまずはそれだというのだった。
「聖域にだ」
「ここにこれ以上留まっていても意味はありませんか」
「そういうことだ」
それはまさにその通りだというのである。

第八十五話　八つの封印その四

「ここに最早狂闘士はいないのだからな」
「その通りですね。それでは」
「帰るとしよう」
「はい」
アイオロスの言葉に頷くムウだった。そして他の者もだ。
「じゃあ私達も」
「これで聖域に帰るのよね」
「やっぱり」
「当然だ」
アイオロスは青銅の四人に対しても告げた。
「皆帰らなくては話にならない」
「流石にここに残れとは言われないですね」
「それはないですね」
「いや、それは絶対にない」
残るということはであった。
「それはだ」
「ですよね。何かここでいることが長かったですから」
「それでついつい」
「戻れるかどうか不安になりまして」
それで不安になたのだという。真相はそうなのだった。
「けれど戻られるのなら」
「それで」
「当たり前だろ？敵がいないのにこれ以上残ってどうするんだい？」
「全くだよ」
そんな彼女達に魔鈴とシャイナも言ってきた。
「敵がいるからここに来たんじゃないか」
「いないのに残っても何にもならないよ」

「まあ考えたらそうか」
「そうよね、やっぱり」
「じゃあ」
「また言うが帰る」
アイオロスは三度言った。
「いいな、それではだ」
「はい、それじゃあ」
「帰りましょう」
「いざギリシアへ」
青銅の四人が笑顔で彼のその三回目の言葉に応えた。
「戻ってそれで」
「とりあえずはギリシア料理をね」
「そうそう、それをね」
「まずはね」
彼女達はギリシア料理のことを話して笑顔になるのだった。
「熱いお風呂にも入りたいし」
「アイスクリームとかも食べたいし」
「そうそう」
「しかし」
アイオロスはこうした彼女達の話を聞いていてふと思った。そうして言うのであった。
「四人共また随分と我慢していたのだな」
「やっぱりインドってあれですよ」
「物凄い国じゃないですか」
「本当に」
彼女は少し顔を顰めさせてそれぞれ言った。
「もう混沌としてるっていうか」
「おトイレも凄かったし」
「そうそう」
ここでトイレの話も出た。インドのトイレである。

「紙ないんですよ」
「水で洗うんですよ」
「しかも中から豚が顔出してきたりしますし」
「有り得ないんですよ」
「それがインドではないのか？」
アイオロスはそれを聞いてもこう返すだけだった。表情も素っ気無い。
「それがだ」
「それがだって」
「何ともないみたいですけれど」
「そうだ、何ともない」
まさにその通りだというのである。
「それがインドだからな」
「それがですか」
「信じられない言葉なんですけれど」
「ギリシアとインドは違う」
いぶかしむ声を出す四人にまた告げるのだった。

第八十五話　八つの封印その五

「全くだ。それぞれの国で個性があるが」
「特にこの国はね」
「個性的なんだよ」
ここでまた言う魔鈴とシャイナだった。
「インドはインドなだよ」
「一つの世界なんだよ」
「一つの世界」
「インドは」
四人はその言葉を聞いてまた考える顔になった。
「そうなの、一つの世界なの」
「ここは」
「だから」
「そうだよ、全く別の一つの世界なんだよ」
「そう考えるんだよ」
また四人に話す彼女達だった。
「わかったらね。それじゃあね」
「帰るよ」
「何かシャカ様がああした方なのも」
「納得できてきたっていうか」
「本当の意味でね」
インドを横断してみてわかったことである。
「この国があの方を作られた」
「そういうことよね」
「まさに」
「けれど」
しかしであった。ここで四人の口調が変わってきたのだった。
「こうした国だけれど」

「そうよね。それでもね」
「また来たいわよね」
「確かにね」
こんなことも言ったのである。
「凄い国だったけれどね」
「それでも何か感じるものがあったし」
「言葉ではっきりと言えないけれどね」
「それがインドなのですよ」
ムウが微笑んで四人に述べた。
「それこそがです」
「そうなんですね。これが」
「インドなんですね」
「これこそが」
「はい、そうです」
また微笑んで応えるのだった。
「それでは。暫しこの国に別れを告げて」
「はい、聖域にですね」
「帰りましょう」
こうして聖域に帰る一行だった。帰りは飛行機ですぐだった。そうして聖域に帰るとであった。ムウとアイオロスは白羊宮で仲間達の歓待を受けたのであった。
「おや、まさか」
「待っていたのですか」
「そうだ」
アルデバランが二人に対して応えた。全員黄金聖衣を装着している。そしてそれはムウとアイオロスも同じであった。全員マントも羽織っている。
「待っていたぞ」
「そうでしたか。お待ちしていてくれたのですか」
「済まないな」

「白銀と青銅の連中はどうしたんだ？」
ミロが二人にこのことを問うた。
「魔鈴やシャイナがいたな」
「はい、そうですが」
「どうしたのだ、それで」
「先に解散させた」
アイオロスが答えた。
「既にな」
「そうなのか」
「我々が教皇に報告すればいい」
だからだというのである。
「それでいいな」
「ああ、っていうかよ」
今度はデスマスクが言ってきたのであった。

第八十五話　八つの封印その六

「それ俺達もやってたからな」
「そうだな」
カミュもデスマスクに応えて頷く。
「私達が報告すればそれで済むことだ」
「連中は終わったら休ませていいんだよ」
デスマスクはこうも言った。
「それでな」
「そういうことだな」
「では二人共」
シュラも彼等に声をかけてきた。
「これから教皇の御前にだな」
「はい、そうさせてもらいます」
ムウが応えた。
「今より」
「わかりました。それではです」
アフロディーテもいた。彼も応える。
「そこまでの薔薇は退けておきましょう」
「すいません、いつも」
「あれはまさに教皇への最後の守りだからな」
サガもそのことはよくわかっているのだった。
「あれがなくなればだ。最早教皇まで何の守りもない」
「その通りだ。教皇の御手をわずらわせることはない」
アイオロスも語る。
「その為にもな」
「では。参りましょう」
最後にムウが言った。こうして彼等は揃って教皇の前まで来た。
そうしてムウとアイオロスがそれぞれシオンに対して報告をするの

であった。
「そうか。カルカッタもか」
「はい」
「ルキフグスは逃がしてしまいました」
「よい」
それはいいとするシオンだった。彼の前にムウとアイオロスが並び他の面々がその後ろにある。そうした並びになっているのである。
「それはだ」
「宜しいのですか」
「あの男を倒すのはカルカッタではない」
そうだというのである。
「そういうことだ。それよりもだ」
「それよりも？」
「これからのことだ」
それを話してきたのであった。
「よいか」
「はい、これからということは」
「今後の戦いのことですね」
「そうだ」
まさにそうだと二人だけでなくほかの黄金聖闘士達にも返した。
「その通りだ。これからのことだが」
「今度は一体どの様な」
「何処で戦うことになるでしょうか」
「ローマだ」
かつて彼等が一度向かった都であった。
「そこに行ってもらう」
「ローマ」
「そういえばローマは」
「そうだ、アーレスが信仰されていた」
シオンはいぶかしむ声をあげてきた一同に対してまた話した。

「ローマ帝国は戦いにより大きくなっていった一面がある帝国故にだ」
「はい、だからこそですか」
「あの街に」
「間も無くトラキアも動く」
彼等もだというのである。
「あの街に向かうだろう」
「では我々もまた」
「すぐにローマに」
「向かうのだ。そしてだ」
ここでシャカに顔を向けた。彼は黄金聖闘士達の中にいて片膝を折り控えていた。シオンはその彼に対して静かに声をかけたのである。

第八十五話　八つの封印その七

「シャカよ」
「はい」
「御前は残るのだ」
こう彼に告げるのであった。
「御前は残り聖域の護りにあたれ」
「畏まりました」
「他の者達で行ってもらう」
そして他の面々にはこう告げたのであった。
「よいな、その様にする」
「教皇」
ここでサガがシオンに対して問うてきた。
「御聞きしたいことがあります」
「何だ」
「何故シャカを残すのでしょうか」
彼が問うのはこのことだった。
「我等全てを向かわせてそれで何故シャカのみを残すのでしょうか」
「備えだ」
だからだというのだ。
「備えとしてだ。残しておくのだ」
「備えですか」
「出来ることならば御前達全員を向かわせたい」
これは紛れもなくシオンの本音であった。今それを言ったのである。
「しかしだ。そういう訳にもいかぬ」
「トラキアは何をしてくるのかわからないが故に」
「だからこそシャカを置いておく」
また言うのであった。

「備えとしてだ。これでわかったか」
「はい」
サガはここまで聞いたうえであらためて頷いたのであった。
「それでは。その様に」
「ではまずは一日置く」
シオンはまたしても彼等に告げた。
「その間にムウとアイオロスは身体を休めるのだ」
「わかりました」
「それでは」
「長旅の後すぐで申し訳ないとは思う」
気遣う言葉もかけてきた。
「しかしだ。今は戦いの時だ」
「はい、それはわかっております」
「無論」
それはわかっていると返す二人であった。それはである。
「ですからお気遣いは無用です」
「すぐに向かわせてもらいます」
「わかった。ではその言葉を受けよう」
二人の言葉を聞いて述べるシオンだった。そうして今度は黄金聖闘士全員に告げるのであった。
「ではローマだ」
「はい、二日後」
「あの都に」
「そこで戦いとなる。サガとアイオロスを軸とする」
その二人が軸なのだという。
「わかったな。それではだ」
「はい、それではです」
「向かわせて頂きます」
「ローマに」
「八大公は全て出て来るだろう」

まずは彼等であった。
「そしてだ。他にもいる」
「といいますと」
「それは一体」
他にもいると言われてだ。黄金の者達は顔をあげ怪訝な声を出した。そうなってしまったのにはれっきとした理由が存在していた。

第八十五話　八つの封印その八

「八大公以外にもまだ狂闘士達が残っているのでしょうか」
「まだ」
「そうだ。残っている」
「ではあの連中とも」
「また」
「そうなる。いいな」
あらためて彼等に告げるのであった。
「ローマでの戦いも激しいものにな」
「それで教皇」
デスマスクがここでシオンに対して言ってきた。
「あの連中と俺達が戦えば」
「技と技の応酬になった場合か」
「ええ、とんでもないことになりますよ」
彼はいつもとは違い真顔で言うのだった。
「それこそローマが消し飛ぶ位のことに」
「それはわかっている」
「じゃあ技は」
「しかもです」
シュラが続く。
「我等とあの者達が全てそれを行うとなると」
「ローマだけでは済まないな」
「その通りです」
シュラの声は危惧する色を含んでいた。その声で語るのだった。
「ですから。それは」
「そのことについてだが」
シオンは冷静な口調で述べてきたのであった。
「心配することはない」

「!?といいますと」
今度はアフロディーテが顔をあげてシオンに問うた。
「何故ですか、それは」
「ローマに向かうことは確かだ」
「はい」
「しかしだ。地上で戦うのではない」
それは違うというのである。
「御前達が戦うのはだ」
「そこは一体」
「地上ではないとなると」
「地下だ」
そこだというのである。
「地下に行ってもう」
「地下ではそこで」
「そうだ。そこで戦うことになる」
「だからなのですか」
アルデバランが声をあげてきた。
「地上で戦うことはないとは」
「その通りだ。そしてその地下はだ」
「地下は」
アルデバランがさらに問うとすぐに答えるシオンであった。
「神殿になっているのだ」
「神殿!?ではそこは」
「まさか」
「そうだ、アーレスの神殿だ」
まさにそれだというのである。彼等が今戦っているその神の神殿だというのである。
「ローマ帝国の時代に築かれた巨大な神殿が残っているのだ」
「ではそこに向かい」
「そうしてですか」

「戦うと」
「その目的はだ」
それについても話すシオンだった。
「ここで話そう」
「それは一体」
「何でしょうか」
「まずはだ」
またシオンの口調が変わってきた。
「サガとアイオロス以外にはこのことを黙っていたことを詫びる」
「教皇・・・・・・」
「その様なことを」
シオンの、教皇の謝罪の言葉には彼等も唖然となった。その彼等に対して話されることは。殆どの者が知らないそのことであった。

第八十五話　　完

２０１０・１・１０

第八十六話　四柱の神々その一

四柱の神々

「それはだ」
「はい、それは」
「何なのでしょうか」
「エリスだけではないのだ」
こう述べたシオンであった。
「アーレスに仕える神々は」
「何っ！？」
「左様ですか」
「タナトスとヒュプノスは知っているな」
続いてこのニ柱の神々の名前も出してきた。
「あの冥皇ハーデスに仕える神々をだ」
「死の神と眠りの神」
「かつて聖戦で猛威を奮ったという」
「あの神々ですか」
「あの二神と同じだ」
そうだとはっきり言った。
「恐ろしいまでの力を持っている」
「それだけの神々がいると」
「アーレスにはまだ」
「そうだ。四柱の神々だ」
その数についても述べられた。
「それぞれの軍団を司っているのだ」
「といいますと」
今度声をあげたのはカミュであった。
「八大公とはまた別に」
「そうだ。エリスの下に位置する」

「やはり」
「それがその四柱の神々だ」
こう黄金聖闘士達に話した。
「アーレスに仕えるだ」
「左様ですか」
「しかし」
今度言ったのはシャカだった。
「ハーデスの下にあの二柱の神々がいて」
「どうした、シャカ」
「それが一体」
「そしてパンドラが二柱の神々の下にいた」
彼はここでハーデスの軍勢の構造を語ったのだ。
「それとは逆にアーレスでは」
「そうだ、アーレスの下にまずエリスがいる」
シオンもまたこのことについて説明してきた。
「そしてその下にだ」
「その四柱の神々がいる」
「そうなのですね」
「そして狂闘士達がいるのだ」
この辺りは冥闘士と同じであった.
「そうなっているのだ」
「わかりました。それは」
「そして」
シオンの話は続く。
「その神々だが」
「はい、名前は」
「そして司っているものは」
「まずはだ」
シオンは黄金聖闘士達の言葉に応えてである。彼等のことをだ。
「彼等を総じて四闘神という」

「四闘神ですか」
「それがなのですね」
「そうだ。それが彼等の総じての名だ」
そのことをまず語ったのである。
「そしてだ。それぞれの名はだ」
「それは」
「それぞれの名は」
「恐怖の神デイモス」
まずはこの名前が告げられた。
「そして敗走の神ポポス」
次にこの神が。
「混乱の神キュドイモス」
三人目であった。そして最後は。
「戦死の神ケーレス」
「その彼等がですね」
「アーレスに仕える四闘神だと」
「その力はタナトス、ヒュプノスに匹敵する」
そこまでだというのである。
「だからこそだ。油断できない相手だ」
「そういえば」
アイオリアが述べてきた。

第八十六話　四柱の神々その二

「かつての戦皇アーレスとの聖戦はハーデスのそれに匹敵する、若しくはそれ以上の激しさだったとか」
「それか」
「はい、そのことですが」
「若しやと思いますが」
ムウも言葉を出してきた。
「あの時はライブラの聖衣の武具がそれぞれ使われましたが」
「そのことか」
「まさかあれは」
「そうだ。その神々の存在があったからだ」
だからこそ解放されたと。そう話すのだった。
「だからこそだ。アテナはあの武具を使うことをはじめて許されたのだ」
「それだけの力を持っている」
「その神々が」
「わかったな。どれだけ恐ろしい相手なのかを」
シオンの言葉は峻厳ささえ帯びてきていた。それだけ彼等の力をよく知っていてそれを声域にとって、何よりも人類にとって脅威と感じているということなのだ。
「そしてだ」
「我等には今アテナがおられません」
「そしてライブラの聖衣も」
「今ライブラを動かすことはできん」
シオンはこのことも話すのだった。
「御前達だけで防いでもらわなければならないのだ」
「わかりました」
最初に応えたのはサガだった。

「ではこのまま。まずはローマで」
「健闘を祈る」
シオンは今は一言だった。
「それではだ」
「では明後日に」
今度はアイオロスが言ってきた。
「我等全員で」
「向かいましょう」
他の黄金聖闘士達も応えた。彼等はそれぞれの宮に戻ると明後日の用意に入った。そのうえで次の戦いに心を向けるのであった。
その間にシオンは。また鏡の間に入った。そのそれぞれ向かい合う様に拝され無数の世界を映し出している鏡の中を覗きながら。言葉を出すのであった。
「ローマだ」
「左様か」
シオンから見て正面の鏡にあの男が出て来て応えた。
「決まったのじゃな」
「うむ、今先程決まった」
そうだと話す彼だった。その鏡の中にいる男を見ながらだ。
「シャカだけを残して全ての者でだ」
「そうか。正解じゃな」
「シャカを置いたことをか」
「わかっておる筈じゃ。防げぬことは」
男は静かな面持ちで彼に告げてきた。
「封印が解かれることはな」
「その通りだ。これは言わなかったがな」
「アーレスまで蘇るか」
「それは防げはしない」
「わかっていてあえてもか」
「そうしなければならないからだ」

声に苦いものが及んでいた。しかしそれでも言うシオンだった。
「そうだな。今は」
「その通りじゃ。今はな」
「そしてあの神々が蘇ったならばだ」
「すぐに聖域に攻撃を仕掛けて来るであろうな」
「その時のことも考えてのことだ」
シオンはあらゆることを考えて手を打っているのだと。今自ら言った。
「それが教皇だからだ」
「そうじゃったな。あの方ものう」
「神の先を読んでこそ教皇だ」
彼は言った。
「あの方はそうして見事に務めを果たされた」
「マニゴルドと共にな」
「私はそれを忘れはしない」
「わしもじゃ」
それは男もだという。

第八十六話　四柱の神々その三

「忘れられるものではない」
「だからだ。私もまた」
「教皇としてじゃな」
「読んだ。だからこそ手を打つ」
また言うシオンだった。
「幾らでもだ」
「この世の為にか」
「誰一人として失わせはしない」
シオンは今度は。己の決意を語った。それを語ってそのうえで言うのであった。
「絶対にだ」
「わし等の運命は既に決まっておる」
「嘆きの壁でか」
「そのうえで。全てをじゃな」
「私もまた」
彼もだという。シオン自身もだと。
「そうなる。全てはわかっている」
「御主も辛い役目ばかり背負うのう」
「教皇として当然のことだ」
笑いはしなかった。それを受け止めてだ。あえて言うのであった。
「それもだ」
「そう言うか」
「何か問題があるというのか」
逆に聞き返す形になっていた。
「それが」
「いや、御主らしいと思ってじゃ」
男はこの言葉を告げただけであった。

「それがのう」
「それがか」
「そうじゃ。しかしその御主だからこそじゃな」
「それが私らしいのか」
「そうじゃ。わしもそれができればのう」
「御前は御前で自分の任を果たしてくれている」
シオンは男に対して述べた。
「それで充分だ」
「そう言ってくれるか」
「左様。それでじゃ」
「うむ」
「聖域への攻撃はかなりのものになるぞ」
男が次に言う言葉はこのことだった。
「あの神々が来るからのう」
「それはわかっている」
シオンはそれはもう当然のこととして把握しているのであった。
「しかしだ」
「しかし？」
「その為のシャカだ」
「あの者か」
「シャカならばやってくれる」
彼への絶対の信頼も見せる。それは彼に対してだけではないがそれを見せるのだった。
「そしてだ」
「そして？」
「私もいる」
彼も、即ちシオン自身もだというのだ。
「シャカだけではない」
「ふうむ。御主も戦うというのか」
「何か不都合があるか？」

「いや、やはりそれもまた御主じゃ」
何処までもシオンらしいと。そう語るのである。
「自らも戦うとはのう」
「あの方もまたそうだったからな」
「そうじゃな。まことにな」
「私もだ。教皇として戦う」
「うむ、ならばそうするがよい」
「わかった。それではだ」
男に言われて確かな声で頷くシオンだった。
「そうさせてもらう」
「うむ、それではな」
「さて、それではじゃ」
「何だ？」
男の言葉が変わった。シオンもそれに応えるのである。

第八十六話　四柱の神々その四

「一体」
「いや、こうしてここでいるのはのう」
「それがどうしたのだ」
「御主と飲みたい思ってもじゃ」
言葉に苦笑いが入っていた。それと共の言葉である。
「それができぬからのう」
「仕方ないな。それは私も同じだ」
「そうじゃな。聖域から滅多に離れられんな」
「そうだ。だが」
「だが？」
「やるべきことは果たさせてもらう」
それはだというのだ。絶対にだ。
「その通りだ」
「そうか。それはか」
「私も一人では飲んでいる」
そうしているというのである。
「どうもな。教皇という手前中々公にはできないが」
「ふぉふぉふぉ、それは仕方ないのう」
それはだというのだ。それは彼にだけ向けた言葉ではないのだ。
「まあ飲めるだけでもよいか」
「御前はどうなのだ？」
「わしか」
「そうだ。時折息抜きをしているのかのう」
「うむ、時々な」
こうシオンに対して返すのだった。
「飲んだりしておるぞ」
「そうか」

それを聞いて少し安心したような声を出すシオンであった。
「ならばいい」
「左様か」
「そうだ。それならばいい」
それでいいというのである。
「御前もそうしているならな」
「左様か」
「そうだ。さて、私もだ」
「どうするのじゃ？」
「まずは風呂に入るとしよう」
そうするというのだった。彼はまずは風呂に入ることにしたのである。
そうしてである。さらに言うのだった。
「それからだ」
「飲むのじゃな」
「ワインがある」
この辺りはやはりギリシアであった。ギリシアでは古代からワインを飲んできている。ワインはギリシア、そしてローマとは切っても切れない関係にある。
そのワインを話に出してだ。そうして言うのだった。
「それを楽しむ」
「左様か」
「そちらにも送ろうか」
「いやいや、こちらにもワインはあるぞ」
「むっ！？」
それを聞いたシオンは少しだけ驚いた様な声をあげた。それは意外だといったようにである。しかしすぐに思いなおして言うのであった。
「そうだったな」
「思い出したのじゃな」

「詩にもあったな。それは」
「そうじゃ。葡萄のじゃ」
男はさらに言ってきた。
「美酒じゃよ」
「そうだったな。迂闊にも忘れていた」
シオンは少しだけ微笑んだ声を出した。
「唐の詩でもあったな」
「うむ。それを飲んでおる」
「他の酒も飲んでいるな」
「無論じゃ。酒には案外困っておらん」
「ならばいい」
それを聞いて安心した声を出すシオンだった。ここまで話してである。
「それならな」
「左様か」
「御前と飲むのはだ」
「何時になるのかのう」
「ふふふ、そうだな」
こう前置きしてからである。そのうえでの言葉である。

第八十六話　四柱の神々その五

「この世では無理でもだ」
「あちらでだな」
「そして生まれ変わってもだ」
その場合もだというのだ。彼等はそのことを確かに信じていた。
「その時にまた飲める時が来る」
「そうじゃな。できればわしはじゃ」
「どうだというのだ？」
「あの者達とも飲んでみたいのじゃがな」
言葉は期待するものになっている。その言葉で続けるのだった。
「それも無理かのう」
「そうだな。それもだ」
「来世になるかのう。まあよい」
「いいのか」
「聖戦はこの戦いだけではない」
このことを確信していた。それもかなり強くである。
「それもだ」
「そうじゃな。わしが見ているあの者達との戦いもある」
「しかもだ」
さらに言うシオンであった。
「おそらく海皇ポセイドンの戦いもある」
「ポセイドンともか」
「そしてその先にも」
聖戦はさらにあるのだという。聖域の苦難は続くというのである。
「あの神々ともだ」
「ふむ」
それを聞いた男の声がだ。神妙なものになった。その言葉で言うのである。

「いよいよか」
「残念だが私も御前もその時にはいないが」
「それが残念じゃが」
「しかし、続く」
「そうじゃな」
「私達の後もだ」
その遥かな先のことも見ている彼等であった。既に、である。
「戦いは今で終わりではないのだ」
「その通りじゃな。しかしじゃ」
「どうしたのだ?今度は」
「いや、今遂に再び十二人揃った」
「うむ」
男はまずは黄金聖闘士のことを話すのだった。
「それで終わりではないとはのう」
「私もそのことにはだ」
シオンも男のその言葉に応えて言う。
「驚いている、正直なところな」
「あの子供達の中から出て来るのじゃな」
「御前達の後がだ」
「そして御主のか」
「私達が消え去ってもだ」
「後の世代がある」
そのことを感じるとであった。男にしてもシオンにしても心強いものがあった。不思議なまでに落ち着きそうして頼りになるものを感じているのである。
「だからじゃ」
「うむ、託していける」
「まああの者達でも充分にやってくれるがのう」
「頼りにしている」
まさにそうだというのだ。

「あの時からな」
「あの時か」
男の言葉に深い、そして懐かしいものが宿った。
「あの時の戦いではじゃ」
「多くのことがあったな」
「その通りじゃ。多くの者が倒れてしまった」
「彼等もな」
「しかし今こうして集っている」
懐かしさから悲しみ、そして喜びへと言葉は移っていった。
これは男だけではなかった。シオンにしてもそれは同じであった。

第八十六話　四柱の神々その六

「いいことだな」
「全くじゃ。それではじゃ」
「うむ。これで終わるのか」
「いや、そうではない」
姿を消すというのではなかった。これからであるというのだ。
「これからじゃよ」
「何がだ、今度は」
「わしのことじゃが」
彼自身のことであった。男がこれから話すことはである。
「よいか」
「うむ、何だ」
「その子供達のことじゃ」
「あの子供達のことか」
「一人わしに預けさせてくれるか」
こうシオンに申し出てきたのである。
「ここはじゃ。よいか」
「御前にか」
「左様。幸い聖衣もある」
それもあるのだという。
「だからじゃ。一人な」
「そうだな。それはだ」
「よいか？」
「いいだろう」
シオンも彼のその申し出に対して賛成の言葉で返したのだった。
「それではだ」
「そうか。済まぬな」
「その手配はしておく」

「では決まりか」
「あの子供達は大きな力だ」
それは既に決まっているというのである。もう既にである。
「その力を育んでくれ」
「済まぬのう。わしの我儘に」
「あの聖衣だけではあるまい」
シオンは男に対してさらに言ってきた。
「御前が求めているのは」
「ふぉふぉふぉ、それもわかるか」
「長い付き合いだ。当然だ」
わかるのはそれが当然だというのであった。
「その程度のことはな」
「御主はアリエスの聖衣をムウに継がせた」
「うむ」
「ならばわしもじゃ」
「黄金聖衣は主を選ぶ」
シオンが今度言ったのはこのことだった。それは彼がかつて黄金聖闘士だっただけにとりわけよくわかることであった。実感としてである。
「ならばだ」
「そうじゃ。ならばじゃ」
「御前が育むその子供もまた」
「選ばれるように育てるつもりじゃ」
そうするというのである。
「そう、わしが育てたあの者達の様にじゃ」
「アルデバラン、デスマスク、シュラ、カミュ、アフロディーテの様にか」
「あの者達はよくやってくれている」
「そうだな。そして」
「ムウ、アイオリア、シャカ、ミロ」

男が名を挙げたのはこの二人であった。
「この者達もじゃな」
「黄金聖闘士になることはわかっていた」
シオンはこれもまた既にというのである。
「それもだ」
「そうじゃな。わかっていたが」
「思い出してもらう必要があった」
「本人達が覚えておらずともじゃな」
「サガにアイオロスも同じだ」
黄金聖闘士の中で年長の彼にしてもそうだというのである。
「あの者達もだったな」
「サガはわしが育て」
「アイオロスは私が育てた」
二人をそれぞれ育てたというのである。
「場所は様々だったがな」
「ふぉふぉふぉ、思念は幾らでも遅れるからのう」
「そうだな。それではだ」
「その子供もしかと育ててみせよう」
「頼むぞ。そしてだ」
ここでさらに言うシオンであった。
「他の子供達もだが」
「それぞれに相応しい師を用意するのじゃな」
「今十の聖衣が空いている」
それだけの数がだという。
「そしてその中にはだ」
「そうじゃな。あの聖衣もある」
「あの聖衣を受け継ぐべき子供もまたいるのじゃ」
「全てはあの時のままじゃな」
「そしてアテナも」
彼等の中で話が続く。それは今を語っているものではなかった。

彼等の遥かな過去を、そして未来を語っている言葉であった。
「その中におられる」
「そうじゃな。間も無く全てがはじまる」
「その時には私はいない」
シオンは、というのだ。
「それが心残りと言えば心残りだが」
「運命には誰も逆らうことはできんよ」
「それもわかっている」
全てがわかっている。それは間違いなかった。そのうえでのやり取りである。
その中でだ。さらに言うシオンであった。
「だからこそだ」
「わかっておる。わしもその時になればじゃ」
「頼んだぞ」
「うむ。それではじゃ」
「今日はこれで終わりだな」
「そうじゃな。それではな」
こう言い合ってそのうえで男が鏡から消えてそれで終わった。シオンも鏡が男が姿を現す前に戻って無数の世界をそこに映し出しているものになるとであった。その場から静かに立ち去ったのであった。後に残ったものは静寂、その一つだけであった。

第八十六話　完

２０１０・１・１４

第八十七話　再び古都へその一

再び古都へ

「教皇」
「シャカか」
「はい、皆もうローマへ発ちました」
シャカがシオンの前に控えていた。そのうえで報告を述べていた。
既に彼以外の黄金聖闘士達は全て聖域を発ちそのローマへと向かっていたのである。
「今しがたです」
「そうか、わかった」
それを聞いて静かに応えるシオンであった。彼はいつも通り教皇の座にいる。そこでシャカの報告を聞いているのである。広い部屋にいるのは二人だけだ。
「今聖域にいる黄金聖闘士は御前だけだ」
「はい」
「守りは頼んだぞ」
こうシャカに告げるのだった。
「是非な」
「有り難きお言葉。それでは」
「ローマでは激しい戦いが行われるだろう」
シオンはローマについても語った。
「それは一昨日話した通りだ」
「左様ですか」
「そしてだ」
シオンの言葉は続く。
「トラキアからは何か感じるか」
「八大公の小宇宙が消えました」
まずはそのことを述べるシャカだった。

「そしてです」
「そしてか」
「はい、エリスの小宇宙も感じます」
続いて感じたのは彼女のそれであった。しかしその他はである。
「ですが。それ以外は」
「これといって感じないな」
「感じているのはインプ達のものだけです」
彼等だけだというのだ。トラキアの雑兵達である。
「彼等の数は相当ですが」
「魔神達はいないな」
「誰一人として」
「そうだな」
彼の言葉をここまで聞いてあらためて言ってきたシオンだった。
そうしてそのうえでさらに言うのだった。彼も感じ取っていたのである。
「確かに今トラキアで強大な小宇宙はだ」
「エリスのものだけです」
「今トラキアにいるのはあの争いの女神だけ」
シオンはこのことをあえて言ってみせた。
「ではシャカよ」
「ここは動くべきではありません」
「そう言うのだな」
「エリスは神、しかもアーレスの第一の側近であります」
シャカが言うのはこのことだった。
「まさにあのタナトスとヒュプノスに匹敵するものであります」
「それだけ強大な神が控えているならば」
「迂闊に動くべきではありません」
そうだというのである。
「何があってもです」
「その通りだ。それではだ」

「はい」
「我々は今はここから動かない」
シオンはあらためてこのことを断言した。
「決してだ。よいな」
「聖域の守りを固めてですね」
「そうだ。我々は守る」
シャカだけでなくシオンもであるというのである。
「白銀及び青銅の者達もだ」
「今は全員待機ですか」
「そうだ、待機だ」
彼等についてもである。そうするというのだ。
「全員だ。いいな」
「インプ達への為ですね」
「雑兵と言っても馬鹿にはできない」
シオンは彼等のことも決して侮ってはいなかった。彼は相手を侮る男ではない。そしてそれと共に相手を見誤る程浅い男でもないのである。

第八十七話　再び古都へその二

「聖域の兵士達もいるがだ」
「やはり彼等の力が必要ですね」
「だからこそ待機させる」
やはりそうだというのである。
「いいな。それでだ」
「わかりました。それでは」
「サガやアイオロス達がいない間はだ」
「あくまで守りですね」
「攻めはしない。わかったな」
「畏まりました」
静かに応えたシャカだった。そしてそのうえで言ってきたのである。
「それではそれと共に」
「トラキアを見ることも忘れないのだな」
「無論です」
それは当然であるというのだ。彼はただ守るだけの男ではなかった。
「既に見続けています」
「そして何が見える」
「トラキアに見えるのは先程申し上げただけです」
「そうか」
「しかしローマでは」
「見えるか」
「禍々しい強大な小宇宙が四つ」
彼は述べた。
「それを感じます」
「そうか。それをだな」

「今まさに起き上がらんとしています」
こうも言うシャカだった。
「それがです」
「ではやはり」
「避けられなくともです」
シャカはまた言ってきた。
「教皇」
「何だ？」
「我等の戦いはこれで終わりではありますまい」
目は閉じられていた。しかし己の前にいるシオンをしかと見ての言葉であった。既にそれは見えているのであった。例えその目は閉じられてもである。
「左様ですね」
「そうだと言えば」
「その運命の為にも戦いましょう」
これがシオンの言葉に対する返答であった。
「喜んで」
「そうしてくれるか」
「私はアテナの聖闘士です」
彼もまた、であった。それは彼も何よりも強く自覚していることであった。
「ですから」
「そうか」
「はい、それだけです」
こうも言うシャカであった。
「私はです」
「そうだな。そして私もだ」
「教皇もまた」
「私もまた同じなのだ」
彼の今の言葉である。

「そういう意味では御前達とだ」
「我々とですか」
「そうだ、アテナの僕だ」
こう表現したのである。
「我等全員だ」
「教皇といえどもですね」
「そうだ。そうした意味ではだ」
そしてその次のシオンの言葉は。
「我等は同じだ」
「はい、まさに」
「我等は同じだ」
また言うシオンであった。
「アテナの為に戦う存在だ」
「その通りです。それは」
シャカもそのことを認める。彼にしてもそれは同じ考えだった。
確かに教皇と聖闘士という立場の違いはあるが彼等はアテナの僕という意味で同じ存在なのである。

第八十七話　再び古都へその三

その彼等がだ。話をするのであった。
「ではシャカよ」
「今は聖域をですね」
「共に守ろう」
お互いにこう言い合うのだった。
「それでいいな」
「喜んで」
「さて、そしてだ」
シオンはここまで話を態度を変えてきた。
「いいか、それではだ」
「処女宮に戻りですね」
「守りは頼んだ」
「では」
こうした話をして別れる二人だった。二人の心は今完全に同じものになっていた。
そうしてである。ローマでは。今黄金聖闘士の面々が空港にいた。ローマ空港である。
そのエアポートは左右にかなり広い。その中にスーツ姿の彼等がいる。派手な黄色いスーツを着たデスマスクがここで言うのだった。
「しかしな」
「どうしたのですか？」
「何か懐かしいな」
こうムウに返すのだった。
「祖国ってのはな」
「前に戻って来られたばかりでもですか」
「ああ、それでもだ」
またムウに返した。

「やっぱりな。祖国はいい」
「成程」
「落ち着くんだよ。空気が違う」
彼は満面の笑みになっていた。
「イタリアの空気ってやつだな」
「そうだな。イタリアの空はいい」
彼の横にいるシュラも言ってきた。
「何処までも透き通る青い空がな」
「そう思うだろ。ドイツはな」
ふと彼が戦ったドイツの戦場について話す。
「あそこの空はな。どんよりとしているからな」
「北欧は全てそうですが」
その北欧出身のアフロディーテの言葉である。今は薔薇はスーツの左ポケットにある。その置いている配置が実に映えている。
「どうしても。ですが」
「オーロラだな」
「はい」
カミュの言葉に応える。
「それがあります」
「あれはいいものだ」
カミュはオーロラについて静かに述べた。
「まさにこの世での至上の美だ」
「この青い空よりもか」
「上だというのだな」
デスマスクに同じラテンであるスペイン出身のシュラが加勢していた。
「まあオーロラも奇麗だけれどよ」
「この青い空の素晴らしさはだ」
「どちらも同じではないのか？」
ことになる前にアルデバランが間に入った。

「というよりはだ」
「というよりは」
「どうだというのです？」
「アルデバランよ、御前さんはよ」
「どちらがいいというのだ？」
「どちらがいいというものではない」
こうその重厚な声で語るのであった。
「青い空もオーロラもだ」
「オーロラは美しい」
「それに勝るものはありません」
「青い空はアテナの美だぜ」
「それは否定できはしないぞ」
「どちらも比べられるものではない」
四人に対してまた話すのであった。

第八十七話　再び古都へその四

「そういうことだ。どちらも等しく美しいものだ」
「その通りですね」
アルデバランの言葉に微笑んで頷いたのはムウであった。
「アルデバランの言う通りですね」
「おい、ムウよ」
「それはどうかと思うのだが」
「そうだ。どちらも等しいというのはだ」
「どちらつかずではないでしょうか」
四人は今度はムウに対してつっかかる。そんな彼等を見て周りの利用者達は首を傾げさせておかしな連中がいると見ているのであった。
「それは違います」
「そうだ。比べられるものではない」
またアルデバランが言う。
「どちらもだ」
「だからよ、それこそがよ」
「どちらつかずなのだ」
「そういう表現はだ」
「あまりいいものではないのですが」
「ああ、四人共落ち着いて下さい」
欧州の北と南で別れている彼等にまた言うムウであった。
「つまりです」
「青い空が美しいのはこの青故だな」
「ああ、そうだ」
「その通りだ」
デスマスクとシュラが答える。
「っていうかよ。そんなことはよ」

「もう言うまでもないことだが」
「そしてだ。オーロラはその輝き故に美しい」
「今更ではないのか？」
「その通りですね」
今度はカミュとアフロディーテが言う。巨体のアルデバランと二人と二人で挟んでいる。四人もその背はかなりのものだがアルデバランの巨体はその彼等をも圧倒していた。
「比べること自体が間違いだ」
「つまりはです」
またムウが出て来て言う。
「サファイアとルビーはどちらが美しいでしょうか」
「そんなこと比べられるかよ」
「全くだ」
「どちらも色が全く違う」
「比べられるものではありません」
「つまりそういうことです」
ムウは今の四人の言葉を受けてまた優しい微笑を見せた。
「どれがいいということは言えません」
「太陽と月を比べられるか」
アルデバランはこう表現した。
「どちらがよりいいか」
「そういうことですから」
そうだと四人に話すのであった。
「だからですね」
「言い争っても仕方の無いことだ」
「そうだな」
ここで横からミロが出て来た。彼はギリシア出身である。
「二人の言う通りだ。四人共ここはだ」
「矛を収めろというのだな」
「その通りだ」

こうカミュに対しても告げるのだった。
「いいな、それで」
「まあ俺もよ」
デスマスクもそれに一応従って応える。
「あれだよ。オーロラだって嫌いじゃないさ」
「俺もだ」
それはシュラもであった。二人共穏やかな調子にはなっている。
「奇麗なことは認めるぜ、はっきりとな」
「それにはやぶさかではない」
「私もだ。青い空はだ」
「この上ない美しさを持っています」
カミュとアフロディーテも青空の美しさは知っていた。

第八十七話　再び古都へその五

「思えばだ。どちらも見事なまでに美しい」
「そういうことですね」
「アフロディーテの薔薇は三つあるな」
アルデバランはアフロディーテが出て来たので彼の三つの薔薇に話を例えてきた。
「どの薔薇も実に美しい。そういうことだ」
「そうだな。どれがいいかとは言えない」
アイオリアも彼の今の言葉に頷いた。
「青い空とオーロラ、どちらもだな」
「そういうことです。それではです」
ムウはこれで完全に話をまとめて一同に告げた。
「折角のイタリアです。ここはです」
「観光か」
「流石にそれは」
苦笑いでアルデバランの言葉に返した。
「まずいかと」
「そうだな。教皇が怒られる」
それは実に容易に察せることであった。ミロが呟く。
「それもかなりな」
「それだよな。別に少し位羽目を外してもいいんじゃねえのか？」
実にデスマスクらしい言葉であった。彼は実際にそう考えていた。
「なあ、ここはよ」
「ですが私達がここに来たのは戦う為です」
「狂闘士達とだ」
アフロディーテとシュラが真面目に彼に返した。
「戦いが終わった後ならともかく」
「流石に今はな」

「やっぱり無理か」
実際のところデスマスクもわかってはいた。わかっていてもそれでも言うところが彼であった。
そうしてだ。ここで彼はまた言うのであった。
「まあイタリアだ」
「貴殿の祖国のな」
「ああ、それだけに色々知ってるぜ」
カミュに応えながらの言葉である。
「食い物には困らない国だからな」
「ほう、それではだ」
それを聞いたアルデバランがすぐにデスマスクに問うてきた。
「パスタだな」
「おう、それとピザに生ハムにワインだ」
デスマスクはすぐにそういったものを出してみせた。それにである。
「ジェラートにティラミスだ。どうだよ」
「流石はイタリアですね」
ムウもそれを聞いて思わず笑顔になっていた。
「美味しいものが多いですね」
「イタリアには美味いものしかないんだよ」
こう断言するデスマスクであった。
「食い物と美人と音楽と明るい気候な。この国には何でもあるぜ」
「ではないのは何だ？」
「節操だ」
ミロに応えての言葉である。
「それはない。あと欠点はな」
「うむ、それは」
「戦争に弱いことだな。まあそれはどうでもいいな」
このことについてはそれで済ませるデスマスクであった。
「イタリアは戦争をやったら負けるがそれでもいつも勝つ方に残っ

ている国だからな」
「どういうことだ？それは」
アイオリアは今のデスマスクの言葉に首を傾げさせた。
「戦争に負けてもいつも勝つ方にいるとは」
「つまりだ。外交ってやつだよ」
デスマスクは笑って言うのであった。
「外交で負ける方から離れて勝つ方につくんだよ」
「それはどうなのだ？」
生真面目なアイオリアはそれを聞いて思わず眉を顰めさせてしまった。そうしてその眉を顰めさせた顔のままでまた言うのであった。

第八十七話　再び古都へその六

「卑怯ではないのか？」
「要は生き残る為だよ」
しかしデスマスクはこう言ってそれを肯定する。
「外交ってやつはな。何があっても生き残らないといけないからな」
「それでか」
「そうさ、それでだよ」
まさにそれだからだというのである。
「わかったな。それでだ」
「しかしだ。それでもだ」
「いや、アイオリア」
しかしここでミロがアイオリアに対して言ってきた。
「我がギリシアもだ」
「どうだというのだ、ミロ」
「前の戦争ではドイツに敗れてそれで占領されたままで何とか助けられているしな」
「それはそうだが」
アイオリアもそれは知っていた。しかしなのである。
「どうだというのだ」
「イタリアのことか」
「どうもだ」
「それも政治だ」
ミロは外交と政治を同じものとして述べたのであった。
「だからだ。それもだ」
「いいというのか」
「まあ俺達は聖闘士だ。そうした政治には関わらないがな」
「うむ」
「それで多くの命が救われるのならいいのではないか？」

こうアイオリアに話すのである。
「それならばだ」
「そういうものか」
「その通りだな」
「確かにな」
「私もそう思います」
ミロの意見に賛成したのはデスマスクの他にシュラとアフロディーテであった。
「結局あれなんだよ。政治ってのはな」
「力だ」
「そうしたこともまた力のうちなのです」
「そういうものなのか」
アイオリアにはどうしてもわかりにくい話であった。首を傾げるばかりである。
「政治の世界というものは」
「力こそ正義だ」
「ならばそうして多くの命を守ることができるのならだ」
「それも正義なのでしょう」
やはりこう言う三人であった。カミュもそれを聞いて冷静に述べた。
「そうかも知れないな」
彼も三人の側に近かった。実際に立つ位置がそうなっていた。
今度はミロが中間になりそのうえで四人がいて向かい側にムウとアイオリア、それにアルデバランが位置していたのであった。場所が替わっていた。
「正義ってのはな」
またデスマスクが言う。
「やっぱり絶対的な力が必要なんだよ」
「その通りだ」
カミュも彼の言葉に同意して頷く。

「さもなければぶれてしまう」
「そうなってしまっては話にもならない」
シュラもである。
「やはりアテナ、そして教皇が圧倒的な力を持たれてこそだ」
「そうでなければ力のない者が苦しむだけです」
アフロディーテはこう表現する。
「何にもなりはしません」
「それはどうでしょうか」
それに異議を呈するムウだった。
「まず必要なのはです」
「心だな」
アイオリアが続く。
「確かな心がなければ正義は成り立たないのではないのか」
「そうだ。幾ら力があろうともそれを使うのは心だ」
アルデバランもそういう意見である。
「だとすればやはり心だ」
「ふうむ、ここはだ」
ミロは考える顔になって述べる。

第八十七話　再び古都へその七

「どちらとも言えないものがあるな」
「いや、そうではない」
「それは大きな間違いだ」
だがここでアイオロスとサガが出て来て彼等に告げるのであった。
二人は彼等の話を聞いていてここで出て来たというわけである。
「力も心も同じだけ必要だ」
「だが最も重要なものはだ」
それを言うのである。
「我等は何だ」
「まずそれを問おう」
二人はそこから話すのであった。
「我等は一体何か」
「言ってみるのだ」
「それは言うまでもないこと」
応えたのはアルデバランであった。まずは彼だった。
「アテナの聖闘士」
「そうだ、それはだ」
「言うまでもない」
「それが何か」
「そうだ、それなのだ」
アイオロスは彼等の言葉を聞いて満足そうに頷いてから述べるのだった。幸い今は周りに誰もいない。だからこそ話せる内容でもあるのだ。
「アテナの聖闘士だ。人々と世界を守るな」
「それはわかっているな」
「ったりめえだな」
デスマスクはわざと偽悪的に述べた。

「間違ってもアーレスとかハーデスとかとは違うぜ」
「アーレスの正義とはです」
ムウは眉をひそめさせてそれについて話す。
「破壊と殺戮です。そこに平穏はありません」
「そこでは弱い者は死んでいくだけだ」
シュラも言い捨てる。
「それは力ではない」
「その通りだな。力は確かに必要だが」
カミュも言う。
「冷静さも何もない。あるのは狂乱だけだ」
「美もありません」
アフロディーテはその点を指摘した。
「それでは何もないのと同じです」
「それならばいい」
サガは彼等のその言葉を聞いて彼も満足気に頷いた。
「それならばだ」
「それではだ」
アイオロスが声をかけてきた。
「いいか、ローマに入るぞ」
「いよいよか」
アイオリアの声が引き締まった。
「この地での戦いか」
「まずは色々と調べる必要があるな」
ミロが言った。
「最初はそれからだな」
「とりあえずはだ」
「空港を出る」
またアイオロスとサガが告げてきた。
「そうするとしよう」
「今からだ」

「はい、それでは」
二人の言葉にムウがいつもの微笑みで応えて言う。
「行くとしましょう」
こうしてまずは空港を出る彼等であった。ローマでの戦いがはじまるのだった。

第八十七話　　完

２０１０・１・１７

第八十八話　四騎士その一

四騎士

ローマに入った黄金聖闘士達は。まずは腹ごしらえをするのであった。皆デスマスクの勧めるあるレストランに入るのであった。そこは。

席は外にある。ローマの街並みや道行く人々を見ながらだ。彼等はパスタを食べていた。

しかしそのパスタは真っ黒である。ミロがそれを見て顔を顰めさせてデスマスクに問うた。

「デスマスクよ」

「何だ？」

「このスパゲティはだ」

パスタはスパゲティである。他にもラザニアやマカロニやフェットチーネ等が置かれている。当然チーズもあるしワインもある。そうしたかなり量の多い食事である。

「インクをだ」

「ああ、そう言うと思ったぜ」

笑って彼に返すデスマスクであった。屈託のない笑みである。

「っていうかこれ前に食っただろ」

「そうだったか」

「そうだよ。イカの墨のスパゲティだよ」

それだというのである。

「イカの墨をソースに使ってるんだよ」

「イカの墨をか」

「そうだ。美味いぜ」

味は間違いないというのである。

「まあ食ってみなよ」

「イカか」

イカと聞いて特に抵抗は見せないミロだった。そうしてこう言うのであった。
「それならいい」
「大丈夫なのだな」
「辰巳さんの店でもよく食べるからな」
アイオリアの言葉にも返すのだった。
「アイオリア、それは御前もだろう？」
「俺は食べ物には好き嫌いはない」
実にアイオリアらしい言葉であった。
「それについてはだ」
「そうか。それならか」
「有り難く食べさせてもらう」
そして実際にフォークを手に取っていた。
「今からな」
「イタリア料理はですね」
アフロディーテはまずはその手にワインを持っていた。グラスの中に紅の酒がある。
「やはりワインとですね」
「そうだな」
カミュも同じ意見であった。
「ワインはいい酒だ」
「イタリアはやっぱりこれだぜ」
デスマスクも笑いながらそのワインを飲んでいる。ローマの市民達は陽気な顔で古都を行き来している。その街並みはそのまま歴史であった。彼等はその歴史を見ながら話をしているのである。
「ワインとパスタだな、やっぱりな」
「そうだな」
アルデバランもそれに同意してフォークを手にしている。
「しかしだ」
「しかし？何だよ」

「意外と量が多いな」
アルデバランはそのパスタそれぞれを見て言うのであった。
「御前が作っていたあの量と同じ位はあるな」
「ああ、量は参考にしてるんだよ」
そうだと言うデスマスクだった。
「実際にな」
「そうだったのか」
「食い物は美味いものをたっぷりだぜ」
デスマスクははっきりと言い切った。
「やっぱりな」
「そうだな。それはな」
「その通りです。それにしても」
シュラとアフロディーテもここで言う。
「パスタという食べ物はだ」
「中々種類が多いのですね」
「そうですね、確かに」
ムウはラザニアを最初に食べている。マカロニはトマトソースである。フェットチーネは見ればペペロンチーノである。そうなっているのである。
「このラザニアにしてもパスタですよね」
「ああ、そうだぜ」
まさにその通りだと答えるデスマスクはフェットチーネを食べている。

第八十八話　四騎士その二

「それもなんだよ。パスタなんだよ」
「種類も多いのですか」
「イタリア人は浮気性なんだよ」
デスマスクは上機嫌に笑いながら話した。
「一種類のパスタじゃ満足できないんだよ」
「そうみたいだな。それにしても」
ミロはここであらためて周囲を見回してみる。各種のパスタをである。
「パスタだけでも充分なだけはあるな」
「マカロニもいいな」
シュラはそれを食べていた。
「ふむ。マカロニウエスタンといえばだ」
「シュラ、貴方の国で撮影していましたね」
アフロディーテはこうそのシュラに対して言った。
「イタリアの西部劇は」
「そうだ。イタリアにはああした西部劇に相応しい舞台はないからな」
「そうですね。それでスペインまで行って撮影していたと」
「そうだ。それにしても」
シュラはここであらためてデスマスクを見て言うのであった。
「同じラテン系としてイタリアとスペインは縁が深いな」
「だよな。歴史もな」
デスマスクの方でもそれはよく自覚していた。それでシュラの言葉に合わせて頷くんどえあった。
「色々と付き合いがあるからな」
「そうだな。ハプスブルク家の関係でもあったな」
ここで欧州随一の名門の名前も出て来た。

「イタリアとスペインはな」
「俺はシチリア生まれでな」
彼の出身はそこであるのだ。
「南の方でな。景色はいいしワイルドだし面白い場所だぜ」
「シチリアか」
カミュがシチリアと聞いて言ってきた。
「あそこはな」
「海の幸は美味いしいい場所だぜ」
「海か。フランスも海が多いが」
「御前の国も烏賊食うよな」
「そうだ、食べる」
それはその通りだというのである。
「しっかりとな。だからこのスパゲティもだ」
「いけるだろ」
「美味いな。それを考えればこのスパゲティはな」
デスマスクも今度はその黒いスパゲティを食べながら話すのだった。見れば誰もがそのイカ墨のスパゲティを美味そうに食べている。
そうしてであった。また言うのであった。
「烏賊の墨がこれだけいいとはな」
「やっとわかったようだな」
「ああ、確かに美味い」
ミロはアイオリアの言葉にしっかりと頷く。
「ギリシアに帰っても食べたいものだな」
「全くだ。このチーズもだ」
アイオリアはチーズも食べている。無論それと共にワインも飲んでいる。やはりチーズとワインの組み合わせは最高のものの一つである。
「いいものだ」
「イタリアの味だな」
サガが静かに言ってきた。

「この味は」
「そうだな。まさにイタリアだ」
アイオロスも言う。
「この味はいい」
「さて、これを食べてだ」
話がここで動いた。
「動くとしよう」
「そうするか」
二人はこう話していた。これからのことを考えているのである。このローマでの戦いをである。そのことを考えているのであった。楽しい食事が終わり店を出るとすぐにであった。彼等は古都を歩きはじめた。彼等が足を向けたのはフォロロマーノであった。

第八十八話　四騎士その三

白い大理石の遺跡が並んでいる。柱や彫像が残り家の跡や宮殿、神殿の跡も残っている。中央の広場も残りそこには歴史が残っていた。

その中を歩きながらだ。ムウが言うのであった。

「趣はありますが」

「感じるな」

「そうだな」

サガとアイオロスも眉を顰めさせた。

「この感じはだ」

「間違いなくいる」

「あの者達がだ」

小宇宙を感じ取っていたのである。

「来ている」

「既にここにだ」

「ということはだ」

「ふふふ、どうやらな」

「感じ取っていたか、既に」

「流石と言っておこう」

その言葉と共にであった。彼等の前に赤い戦衣の男達が出て来た。

それは。

「何だ、御前達は」

アルデバランが彼等に対して問うた。見れば四人いる。

「はじめて見る顔だが」

「我等は四騎士」

「狂闘士四騎士だ」

こう名乗ってきた。確かに四人いる。

「以後知ってもらおう」

「死への土産にな」
「ということはだ」
今度はアイオリアが彼等に対して告げる。
「御前達が我々をここで倒すというのか」
「ふふふ、そうしたいものだが」
「残念だがそうではない」
「違うというのか」
「そうだ、何度も言うがそうしたいのはやまやまだ」
「それは否定しない」
こう返す彼等であった。
「だが。我等の役目は別にある」
「それを果たすのが今の我等の為すべきことだ」
「それではだ」
それを聞いたサガが彼等に言ってきた。
「その為すべきこととは何だ。そしてだ」
「そして？」
「今度は何だ？」
「御前達は何者だ」
そのことも問うのである。
「狂闘士だが見ない顔だ。四騎士というのはわかったがだ」
「我等それぞれの名か」
「それを聞きたいというのか」
「そうだ。その名前は何だ」
それを言うのである。
「それを問おう」
「わかった。それではだ」
「名乗ろう」
「この我等の名をだ」
こうしてであった。四人はそれぞれ名乗りをあげるのであった。
まずはだ。鋭い目に険しい眉の鋭利な顔の男が言ってきた。

「メフィストフェレス、ファウスト」
「ベルフェゴール、イシュティス」
続いて狡猾そうな顔の紫の目の男が。次は妖艶な女であった。
「バフォメット、メンデス」
「アリオク、エノク」
背の高い金髪の男である。この四人であった。
「我等四騎士」
「覚えていてもらおう」
「おう、名前だけは覚えてやったぜ」
デスマスクは首に手を当ててその首を左に傾けながら言って出て来た。
「じゃあ心置きなく死にな」
「キャンサーか」
「ふむ、死を操る男だったな」
「聖闘士としては一際異質な男」
「ああ、聖闘士ってのはそれぞれ個性があるんだよ」
デスマスクは彼らのその言葉に対して悠然としたまま返した。
「それはよく覚えておくんだな、冥土の土産にな」
「前に出て来たということはだ」
「我等を倒すつもりか」
「そうなのだな」
「言うまでもねえことだな」
これがデスマスクの返答だった。

第八十八話　四騎士その四

「まあ聖衣は着てねえがな。相手になってやってもいいぜ」
「生憎だが我等狂闘士は神の僕は衣をまとった相手としか拳を交えぬ」
「それは知らなかったようだな」
「それは我々と同じということだな」
シュラは彼等のその話を聞いて呟いた。
「つまりは」
「そういうことだ」
「それはわかったな」
「へっ、折角その五月蠅い口を黙らせてやれると思ったんだがな」
デスマスクはその彼等に対してこう言うのであった。
「まあいい。逃げたいのなら逃げるんだな」
「逃げはしない、それはだ」
「我等は我等の責を果たしに行くだけだ」
「それだけだ」
逃げるということは彼等も否定する。そうして告げるのである。
「我等も狂闘士だ、逃げることはしない」
「敵に背を向ける者はアーレス様の僕ではない」
「それは言っておこう」
「では。ここに聖衣があります」
アフロディーテは己の前に聖衣の箱を呼び寄せてきた。ピスケスのその箱はそれ自体が黄金色に輝き凄まじいまでの小宇宙を出していた。
「相手をしましょうか、私が」
「それも一興、しかしだ」
彼のその言葉にファウストが悠然と笑って返す。
「今はそれよりもだ」

「言った筈だ、我等の責を果たさせてもらう」
「そういうことだ」
イシュティスとメンデスも言う。
「それではだ。黄金聖闘士達よ」
「また会おう」
四人の姿が赤い霧の中に消えていく。何処からか出て来たその霧の中にである。
「何時かこの剣を見せてくれよう」
エノクが消える中で彼等に告げる。
「それではその時までだ」
「消えたか」
カミュはそれを見届けたうえで述べた。
「それで終わりだというのだな」
「少なくとも今はだ」
アルデバランが重厚な声で言ってきた。
「しかしだ。これで終わりではない」
「小宇宙を感じます」
ムウは既にそれを察しにかかっていた。その探る顔での言葉である。
「ここから暫く行った神殿の中にです」
「あの神殿は」
「そうだな」
アイオロスとサガも察している顔になっている。その顔でのそれぞれの言葉である。
「アーレスの神殿だ」
「やはりそこか」
「アーレスの神殿。それならばだ」
ミロはそれを聞いて述べた。
「やはりそこから地下に入りか」
「そうだな。そしてそこにあの四人がいる」

アイオロスも怪訝な顔で言う。
「四騎士が」
「アイオリア、それだけではありませんよ」
その彼にムウが声をかけてきた。そうしてこう言うのであった。
「貴方も感じますね、彼等を」
「これは・・・・・アスモデウスか」
かつて拳を交えたあの男のものだった。間違いなかった。
「他にもいるな」
「あの蝿野郎もいるな」
「ベールだ、間違いない」
「アスタロトですね」
「モロクか。いるな」
「ベリアル、あの男もまた」
「いるか、サタナキア」
それぞれの相手の気配をはっきりと感じ取った彼等だった。間違いようのないまでに凄まじい小宇宙を感じ取ってだ。それぞれ言ったのである。

第八十八話　四騎士その五

「ルキフグスもいますね」
最後にムウが呟いた。
「八大公達もまた」
「ならば尚更だ、行かねばならん」
アイオリアはまた前に出た。その遺跡の中で。
「そして四闘神の復活を阻止するのだ」
「それは言うまでもありません」
ムウが応えて言う。
「では」
「さて、八大公の奴等が出て来たらな」
デスマスクは悠然と笑って言葉を出す。
「一気に叩き潰してやるか」
「その通りだ」
アルデバランも言う。
「モロクは俺が倒す」
「よし、それではだ」
シュラが最初にそのアーレスの神殿に足を進めた。狂闘士達のその禍々しい小宇宙を感じ取りそこにあることが既にわかっていたからである。
「行かせてもらう」
「そうですね。では聖衣はです」
アフロディーテも言う。
「行きましょう」
「それでは」
「行くか」
カミュとミロも言う。こうして彼等はアーレスの神殿に向かう。
そうしてであった。

神殿は壮厳な趣であった。大理石の柱が縦にも横にも並んでいる。天井は消え去ってしまっている。白い床にはひび割れも見られる。それを見るとこの神殿が遺跡になってしまっているのがわかる。黄金聖闘士達は聖衣とマントを身に着けてそこにいた。

「これより中に入る」

アイオロスが話す。

「アーレスの神殿の中にだ」

「そうだな。行くとしよう」

サガも言う。そうしてであった。

彼等が神殿の跡の中に足を踏み入れる。その奥にであった。奥の祭壇の場所が割れていた。そしてそこに巨大な穴が開いていた。そこに階段がありそこから下に行けるようになっているのであった。

「ここからだな」

「地下にだ」

またアイオロスとサガが言う。彼等が先頭に立ち他の黄金聖闘士達はその後ろにいる。そうしてそのうえで進もうとしているのだった。

「この階段の先に進もう」

「行くぞ」

「四闘神の復活を阻止しなければな」

アルデバランはその黒い穴とその中に見える階段を見ていた。その地下へと続く階段をだ。見ながらそのうえで言葉を出すのだった。

「だからこそ」

「先に進むぜ」

デスマスクも顔は笑っていたが目には緊張があった。彼にはないことだった。

「あの連中が出て来ても潰してやるぜ」

「神が出てもですか」

「ああ、そうさ」

こうムウに返すのである。
「絶対に倒してやるぜ」
「わかりました。復活を許しても倒せばいいですね」
「そういうことですね」
アフロディーテはデスマスクのその言葉に賛同した。
「四闘神が復活しても倒せばいいだけです」
「同時に八大公も倒す」
カミュはそのアフロディーテに続いた。
「そうなればトラキアに残るのはエリスだけ。全力で倒す」
「例え何があろうともだ」
シュラも言葉が鋭くなっていた。まさに剣になっている。
「アーレスの復活だけは阻止する。絶対にだ」
「穴に入るとしよう」
アイオリアはもうその穴に入ろうとしていた。
「いざだ」
こうして彼等は穴の中に入り階段を降りていく。そうしてその地下神殿へといったのであった。アーレスが崇められていたその場所にである。

第八十八話　　完

２０１０・１・２０

第八十九話　地下神殿その一

地下神殿

黄金聖闘士の面々は地下に降り立った。そこはまずは暗黒の世界で何も見えはしない。しかしすぐにサガがその力で光を自分達の前に出して浮かび上がらせたのであった。

「これでいいな」

「済まない」

アイオロスがそのサガに対して礼を言う。その光によって周囲が見渡せる。その中はかなり広く左右に円柱が並んでいる。床は白く丁寧に整えられた大理石のものである。

地上と同じものであった。違うのは地上か地下にという違いである。彼等はその中に立ってそのうえで周囲を見回しているのであった。

「とりあえず前に行くみたいだな」

「そうだな」

ミロがアイオリアの言葉に頷く。後ろを見れば行き止まりである。左右は狭くなっていて壁が見える。前に道が続いているのだった。

それを見てである。そう判断したのである。

「それではだ」

「先に進むか」

こうしてであった。前に進む。暫く先に進むと広間に出た。

そこには柱がない。宮殿の様に整った場所である。そこに入ってまず彼等は警戒する目で周囲を見回してである。そうして言い合うのであった。

「で、ここにはだ」

「そうだな」

「誰もいないようですね」

デスマスクとシュラ、アフロディーテが話す。天井はわりかし高

い。広間は六十メートル四方ある。やはり白い大理石の世界であり光のせいで薄青い色に見えている。
その中には誰もいなかった。しかし不意にである。全員がその剣呑で禍々しい小宇宙を感じ取ってしまったのである。その主は。
「来たか」
「ここで出て来たのか」
カミュとアルデバランが言う。部屋に八大公達が出て来たのである。そうしてそのうえで黄金聖闘士達に対するのであった。
八人である。それに対する黄金聖闘士達は十人である。それでここでムウが言ってきた。
「サガ、アイオロス」
「うむ」
「どうしたというのだ？」
「貴方達は先に」
行けというのである。
「ここはお任せ下さい」
「行けというのか？」
「御前達を残して」
「おいおい、自惚れてもらっちゃ困るぜ」
しかしここでデスマスクが彼等に言う。
「俺達はな」
「俺達は？」
「どうだというのだ？」
「こいつ等位楽勝で倒してやるからよ」
その言葉は自信に満ちているものだった。
「そっからすぐに追いかけてるからな」
「そうするというのか」
「その通りだ」
ミロもここで言う。
「ここは我等が倒す」

「そうするのか」
「ここは」
「だから行くといい」
彼もデスマスクと同じことを言うのであった。
「ここはだ。先にだ」
「そこまで言うのならだ」
「その言葉受けさせてもらう」
二人もここで彼等の言葉を受けて頷いた。
「先に行かせてもらう」
「そしてあの神々の復活をだ」
「それは頼む」
シュラも彼等に告げた。
「ここは我等が引き受ける」
「だからこそです」
そしてムウもまた。
「先に行って下さい」
「では」
アフロディーテはミシェイルを前にもう右手に紅薔薇を手にしていた。
「闘いのはじまりですね」
「ピスケスよ」
そのミシェイルが彼に対して言ってきた。
「ここでだ」
「ここで？何だというのですか？」
「貴様を倒してみせよう」
既にその両腕に全てを凍らさんばかりの凍気を漂わせての言葉である。

第八十九話　地下神殿その二

「このアーレス様の神殿においてだ」
「その言葉お受けしました」
こう返しはした。
「ですが」
「ですが？」
「私はここでは倒れません」
その手にある薔薇を見ながらである。その紅の薔薇をである。
「決してです」
「では倒れるのは私だというのか」
「そう思われるのならそうなのでしょう」
あえて悠然として言葉を返してみせた。
「貴方がそう思われるのなら」
「そうか。それならだ」
ミシェイルはアフロディーテに対して悠然と構えを取りながら述べてきた。それと共にその全身にも凄まじい凍気を帯びさせてきたのである。
そうしてそれは。彼だけではなかった。
他の狂闘士達もだ。それぞれの相手を前にしていた。
「タウラス、ここで会ったからには」
「そうだな。決着をつける」
アルデバランとドーマも対峙していた。二人共その全身に小宇宙を漂わせている。
「どちらが上か」
「バビロンでの続きといこう」
「そういうことだな」
「それではだ」
彼等も闘いに入ろうとしている。八人の黄金聖闘士達がそれぞれ

の相手と対峙している。その激しい小宇宙が激突しようとしている。
その小宇宙と小宇宙の激突を感じてだ。サガとアイオロスは後ろに感じながら述べるのであった。
「はじまったな」
「そうだな」
二人はその廊下を進みながら行く。駆けながら言葉を交えさせる。
「ああは言っていたが」
「どうなるかだな」
「問題はそれだ」
アイオロスは彼等を気遣う声を出していた。
「問題はないと思うが」
「気にすることはない」
サガはここであえて強い言葉を言った。しかしそれをすぐにであった。
「いや」
「いや？」
「気にしてはならない」
こう言い換えるサガだった。
「ならないのだ、それは」
「気にしてはならないのか」
「彼等は彼等の戦いをしている」
だからだというのだ。
「だからだ。今はその意を汲もう」
「そういうことか」
「わかるな、それは」
「サガ、しかしだ」
アイオロスは怪訝な顔になっていた。そのうえであえて表情を消した感じになっているサガに対して言い返すのである。そうしたのである。
「気遣わないことはだ」

「その気持ちはわかる」
「では何故」
「あの者達を信じるだ」
これが今のサガの考えであった。
「彼等はやる」
「勝つというのか」
「そうだ、何があろうともだ」
前を駆けながらの言葉が続く。
「最後には必ず勝つ。絶対にだ」
「そうか、そうだな」
その言葉を聞いてであった。アイオロスも遂に頷いたのであった。
「それならばだな」
「行こう」
また言うサガだった。

第八十九話　地下神殿その三

「いいな、それで」
「わかった」
遂に納得した顔で頷いたアイオロスだった。
「それではだ」
「さらに先に進むぞ」
サガはさらに言う。
「いいな、それでだ」
「よし、それならだ」
「先に進む」
また言った。
「そして神々の復活をだ」
「何があっても防ぐ。そうだな」
「それが私達の今のやるべきことだ」
「だからこそムウ達もか」
「そういうことだ。ならばだ」
サガは冷静な顔のまま話す。
「我々はそれに応えなければならない」
「だからこそだな」
「そうだ。我々は我々の戦いをやらなければならない」
「ではサガ」
「感じるな、アイオロス」
彼は今は正面を見ていた。彼が駆けているその先をである。
「あの禍々しい小宇宙を」
「うむ、感じる」
アイオロスもそれは確かに感じていた。
「この気配はだ」
「間違いない、ことは一刻を争う」

サガの声が強いものになった。
「それに遅れればだ」
「復活するな」
「そうなってしまってからでは遅い」
サガの言葉が続く。
「いいな、それだからこそ」
「行かなければならない」
「アテナの為に」
サガが今出したのは彼等の女神だった。
「そして」
「この世の人々の為に」
「世界の為に」
言葉は続いていく。
「その為にだ」
「何としてもだな」
こう言い合いながら駆けていく。彼等は彼等の果たすべき戦いの場に向かっていた。
そしてであった。広間に残った黄金聖闘士達と八大公はそのまま戦いに入っていた。誰もが激しい光の攻撃を繰り出し合っていた。
それはデスマスクとカナンもである。お互いに凄まじい速さと量の拳を繰り出し合いながら言う。
「へっ、どうやらな」
「何だ？」
「ただ気色の悪い技を使うだけじゃねえんだな」
こうカナンに対して言うデスマスクだった。
「拳も持ってるんだな」
「それはこちらの台詞だ」
カナンは挑発的に笑うデスマスクに対してこう返した。
「キャンサー、貴様もだ」
「褒めてくれるのか？」

「褒めるといえば褒めてはいる」
実際にそうだともいう。
「貴様は拳も持っているのか」
「俺を誰だと思ってるんだ？」
わざと自信を見せて言うデスマスクだった。
「俺も黄金聖闘士だからな」
「だからか」
「そうさ、俺はただ技を持ってるだけじゃない」
言葉はここでは真剣なものになった。
「拳も持ってるってこと忘れるなよ」
「少なくとも今覚えた」
カナンもまた攻撃を放ちながら言葉を返す。双方の拳は互いに打ち消し合っていた。実力は完全に互角のまま戦いが進んでいる状況だった。
そうしてである。今度はカナンが言ってきた。
「そして忘れることはない」
「覚えたまま冥界に戻るんだな」
「だが。そうはいかない」
「いかないってのかよ」
「キャンサー、貴様は私が倒す」
強い顔での言葉だった。

第八十九話　地下神殿その四

「それが私のこの戦いでの役目だ」
「じゃあ俺もだ」
「貴様もだというのか」
「ベルゼブブ、手前は俺が倒す」
まさにそうだというのである。お互いに言い合うのだった。
「それが俺の役目だな」
「ではお互いの相手は決まったな」
「その通りだな。じゃあな」
「ここで倒す」
「そうさせてもらうぜ」
二人は拳と拳で戦っていた。そしてその横では。
ジークが右手の剣を横薙ぎにしてきた。しかしである。
シュラは左手のその手刀でジークの剣を受け止めた。完全にです。
「止めたか」
「前の戦いからさらに腕を上げたな」
「貴様もな」
ジークは鋭い顔でそのシュラに言葉を返した。
「アメリカでの戦いの時よりさらに強くなっているな」
「お互いにということか」
シュラは彼の言葉も受けて述べた。
「そういうことだな」
「しかしだ」
「しかし。何だ」
「実力が互角ならばだ」
ジークは一旦剣を放した。そのうえで今度は突いてきた。
その突きでシュラを貫こうとする。しかしであった。
シュラもその右手から突きを繰り出しそれを弾き返したのだった。

剣と剣がぶつかり合いそのうえで激しい衝撃音を出したのであった。
火花さえ散る。衝撃も起こったが二人はそれからは退かなかった。
そうしてそのうえで再びお互い突きを繰り出す。今度もまた火花が散った。
「面白い」
「面白いというのか」
「そうだ、カプリコーン貴様は面白い」
シュラ自身に対して告げる。
「やはりこのジークの相手となるのに相応しい男だ」
「ではその言葉に応えてだ」
「どうだというのだ？」
「ベール、貴様はこのシュラが倒す」
右手の手刀を輝かせての言葉である。
「そしてアーレスの復活を止める」
「ならば俺は貴様を倒しだ」
今度は下から上に振り上げての言葉である。
「アーレス様に戻って頂く」
「そうするというのだな」
「そしてこの世にアーレス様が理想とする社会を築いて頂く」
こうも言うジークであった。
「貴様等を倒しだ」
「ならば止めてみせよう、我等がだ」
二人も激しい戦いを繰り広げていた。そうしてである。
アフロディーテとミシェイルは睨み合っていた。アフロディーテの足元には紅薔薇が生じそれがミシェイルの方に広がっていく。しかしであった。
その薔薇はそれ以上進まなかった。ミシェイルの近くで凍りそのうえで砕け散っていく。彼はそれによって薔薇の毒を止めているのであった。
そうしてだった。ミシェイルはアフロディーテに対して告げてき

た。
「しかしだ」
「しかし。何でしょうか」
「相変わらず薔薇を使うのだな」
「それが何か」
「ピスケスは薔薇か」
彼と薔薇を重ね合わせた言葉であった。
「それがまずあるのか」
「薔薇だけだと思われるのですか」
ここでアフロディーテの言葉は思わせぶりなものになった。
「私にあるものは」
「違うというのか？」
「それを御覧になりたければです」
今は紅の薔薇を出すだけだった。しかしこう言ってきたのである。

第八十九話　地下神殿その五

「私とさらに闘われることです」
「そうすればわかるというのだな」
「そうです」
こうミシェイルに言葉を返した。
「それを御覧になられたければ」
「ならば見せてもらおう」
ミシェイルは彼のその言葉を受けて述べた。
「貴様のその技をだ」
「では」
二人の静かな戦いはさらに激しくなっていく。彼等もであった。
カミュの冷気とレダの熱気がせめぎ合っていた。
双方の結界にも似たそれは完全に拮抗していた。カミュはその中で言うのであった。
「どうやらだ」
「何だというのだ？」
「ベリアル、貴様の力はこれだけではないようだな」
こう彼に言ってきたのである。
「どうやらな」
「だとすればどうだというのだ？」
「貴様とは決着をつけなければならない」
カミュの言葉が強いものになった。
「それは何としてもだ」
「だとすればどうだというのだ？」
「私も最大の奥義を出す時が来たようだ」
その言葉は更に強いものになった。
「いよいよだな」
「いよいよか」

「そうだ。それでベリアルよ」
またレダに対して述べる。
「貴様を倒す」
「その言葉確かに受けた」
ミシェイルはカミュの言葉を聞いてまた述べてきた。
「それではだ」
「それでは。何だというのだ」
「私もだ」
自分自身もだというのである。
「私もまた私の最大の技を出す時が来たな」
「今もだというのだな」
「その通りだ」
カミュを見据えながらの言葉だ。そうしながら攻防は続けている。
氷と炎の攻防は続けていっている二人であった。それは続いているのであった。
「だからこそだ」
「私を倒すと」
「やはり貴様は私が全ての力で倒す相手に相応しい」
明らかにカミュを認めた言葉であった。
「その技でアクエリアス、貴様を倒そう」
「面白い。それではだ」
「ここで出すのか？」
カミュを見据えながら問う。動きはしないが攻防は続けそのうえで見据えているのだった。小宇宙も激しく沸き起こり続けている。
その中でのやり取りである。
「その技を」
「出してもいい」
カミュもそれは否定しない。
「しかしだ」
「今はその時ではないというのか」

「私は切り札はその時にしか出しはしない」
彼は冷静な言葉で述べた。
「今がその時ならば出す」
「では出させてみるか」
レダの言葉そのものにも黒い炎が宿った。
「それではだ」
「思えば私もだな」
ここでカミュはふとこうも思ったのである。
「それはな」
「それはだと？」
「貴様にその技を出させる」
そのままレダの言葉を返した形になっていた。
「その最大の技をだ」
「ではどちらが先に出すのか」
「そしてどちらの技が上なのか」
「見極めさせてもらおう」
お互いにこう言いながらせめぎ合っていた。二人の攻防はまさに一触即発であった。

第八十九話　地下神殿その六

そしてアルデバランとドーマは。力比べに入っていた。
お互いに手を組み合いそのうえで押し合う。そうしながらドーマがアルデバランに対して言ってきたのである。その言葉とはである。
「やはりな」
「どうしたというのだ？」
「このドーマの力は魔神の中で随一だ」
まずはこのことを言ってきたのである。
「俺に力で勝てる者はいない」
「そうだというのだな」
「その俺にだ」
アルデバランを見据えながら言っていく。
「互角の力を出すとはな」
「こちらも言っておこう」
今度はアルデバランからの言葉である。
「このアルデバランの力はだ」
「どうだというのだ？」
「黄金聖闘士の中で随一だ」
彼も同じであった。
「力で誰かに遅れを取ったことはない」
「貴様もだというのだな」
「そうだ。その俺と互角とはだ」
「このドーマの力は大地をも覆す」
「このアルデバランの力は天を支える」
どちらもこう言っていく。
「その力と競り合うとはだ」
「やはり尋常ではないか」
「闘いがいがある」

ドーマはアルデバランを見据えたままだ。そのうえで言ってきたのである。
「タウラス、貴様はな」
「それはこちらも同じだ」
「力と力だな」
「どちらが上か」
その勝負であった。
「今こそ決める時だ」
「その通りだ」
こうして二人は力比べを続けていく。まさに二匹の雄牛が角を突きつけ合っていた。それが彼等の闘いであった。力と力の攻防である。
ミロの相手はサリアだった。サリアはその目でミロを見据えて。そうして言ってきたのである。
「マチュピチュの時以来だな」
「そうだったな」
「あの闘いのことはよく覚えている」
まずはこう告げたサリアだった。
「よくな」
「それはこちらも同じこと」
ミロを見据えながら話していく。
「忘れる筈もないことだ」
「あの時は決着がつかなかった」
サリアは言いながら闇の翼を左肩から出した。しかしそれはミロが爪から放った光により消された。右手の人差し指から放った光で、である。
それで消したうえで。さらに言ってきたのであった。ミロからであった。
「それでここでだというのだな」
「そういうことだ。それにしてもだ」

「今度は何だ？」
「私の今の魔を消したな」
そのことを言ってみせた。
「その爪の光でな」
「それがどうしたというのだ？」
「私の今の魔を消せた者はいなかった」
そうだというのである。
「これまで一人もだ」
「いないというのか」
「そうだ、いない」
このことを言葉に出し続ける。
「スコーピオン、貴様を覗いてだ」
「俺だけだというのか」
「スコーピオンにだけだ」
サリアの言葉は妙に含んだものだった。しかしその含んでいるものが何かまではミロには察することができなかった。少なくとも今生きている中においてはである。
「それ以外の者は今ので終わっていた」
「そういうことか」
「そうだ。さて」
サリアはまた言ってきた。

第八十九話　地下神殿その七

「ならばだ」
「どうだというのだ？」
「私は既に本気だった」
こう言ってきたのである。
「まずはそのことを言っておこう」
「本気か。ではこれからはどうなのだ？」
「切り札を出す」
今度はそれであるという。
「それを言っておく」
「切り札をか」
「スコーピオンよ」
そのミロを見据えての言葉である。
「私は今まで切り札を出したことは少ない」
「しかし俺に対してはか」
「そうだ、貴様以外に出したことはない」
そうだというのである。
「貴様に出そう、その切り札をだ」
「では俺もまただ」
ミロもであった。その目を強いものにしてサリアと対峙しながら述べるのであった。
「貴様を倒す為にだ」
「貴様もまた切り札を出すというのだ」
「そうだといえば？」
「見せてもらおう」
サリアもまた一歩も引かない。完全に向かい合っていた。
そのうえでだ。二人は同時に動いた。一歩前に出たのである。
「お互いにここで」

「決着をつけよう」
二人もまた完全に死合うつもりであった。最早そうした状況であった。
アイオリアとリゲルも同じである。彼等は激しい拳の応酬を繰り広げている。
その中でだ。リゲルはアイオリアに言ってきたのである。
「やはりな」
「やはり。何だ？」
「俺の見た通りだ」
攻撃を繰り出しながらアイオリアを見据えての言葉である。
「レオ、貴様はさらに強くなった」
「オーストラリアの時よりもか」
「そうだ、強くなった」
まずはこのことを告げるのであった。
「あの時からさらに強くなるとはな」
「一つ言っておこう」
ここでアイオリアの言葉が動いてきた。
「聖闘士というものはだ」
「どうだというのだ？」
「常に進化し続けるのだ」
「己を高めることによってだな」
「その通りだ。貴様等はどうか知らないがだ」
「同じだ」
ここでリゲルはこう言ってきた。

第八十九話　地下神殿その八

「貴様等と同じだ」
「同じだというのか」
「そうだ、我等狂闘士は常に闘いの中にその身を置いている」
それがアーレスの僕という訳である。
「だからこそだ。我等も常にその強さを高めているのだ」
「だからか」
ここでアイオリアも悟った。そのことをだ。
「拳の強さが増しているのはか」
「ふふふ、その通りだ」
「恐るべしと言うべきか」
アイオリアもまた彼を認める言葉を出した。
「狂闘士もまた」
「ではレオよ」
アイオリア自身に対して声をかけてきた。
「貴様を倒す為にだ」
「どうするというのだ？」
「俺の最大奥義を見せよう」
それをだと。彼も言うのであった。
「このアスモデウスのリゲルのだ」
「貴様のその最大の拳をか」
「俺の拳はまさに星の拳」
それだという。６４
「それを見せてくれよう」
「その星を砕く力をか」
「星を砕くのは星だ」
構えながらの言葉である。
「今それを見せよう」

「ならばだ」
その言葉を受けてアイオリアも、であった。
構えを取る。そのうえで、であった。
「俺もだ」
「来るというのだな」
「このレオのアイオリア最大の拳を見せよう」
「それはライトニングプラズマだけではないのだな」
「まだだ」
一言で告げた。
「まだだ。俺の拳はだ」
「どうやら貴様はだ」
「何だというのだ？」
「光だな」
それだというのである。彼の言葉では、である。
「まさに光だな」
「俺は光か」
「その光を見せてもらおう」
そう返しながら構えるのであった。
「今ここでだ。いいな」
「いいだろう。では見せよう」
アイオリアは静かに構えてきた。その全身に凄まじいまでの黄金の小宇宙を漂わせながらである。
「このアイオリアの拳をだ」
「そうだな。それではだ」
「行くぞ」
二人の小宇宙がこれ以上はないまでに高まった。そのうえで決着をつけんとしていた。
ムウとリーヴェは静かに対峙をしている。お互いに攻撃は繰り出していない。
しかしお互いに一分の隙もない。全くであった。

その冷たいが激しい対峙の中で。まずはリーヴェが言ってきた。
「どうやら」
「何でしょうか」
「私達もまた決着をつけなければなりませんね」
こうムウに言ってきたのである。
「その時の様です」
「そうですね」
その彼の言葉をである。ムウも受けて応えたのであった。
「それは私も同意です」
「ではアリエスよ」
「はい」
「私もまた見せましょう」
ムウを見据えたままでの言葉である。
「私の最大の技をです」
「では私もです」
リーヴェに応える形でムウも言ってきた。
「見せましょう、私の技を」
「貴方を倒します」
ムウもまた、であった。彼等も対峙していた。
黄金聖闘士達と八大公の戦いは本格的なものになっていた。これ以上はないまでに激しい戦いになろうとしていた。その中においてであった。何かが起ころうとしていた。

第八十九話　　完

２０１０・１・２５

第九十話　封印の前でその一

封印の前で

サガとアイオロスは長い廊下を駆けていた。二人の前にはまだ敵はいなかった。

「いないな」

「うむ」

「誰もだ」

アイオロスがこうサガに告げてきていた。

「誰も出て来ないとは」

「意外だな」

「これはだ」

ここでさらに言うアイオロスだった。

「インプ達は出さずにだ」

「八大公と、そして」

「四騎士だけだな」

「ここに来たのはか」

「それだけだな」

このことを二人で確認した。そのうえでさらに先に進む。

そうして先に進むとであった。やがて彼等は巨大な裁断の前に出て来た。それは四つの柱を中心にして置かれており何か峻厳な趣きを醸し出していた。

白、いや赤だった。赤いその大理石の祭壇を前にしてだ。二人は立ち止まった。そうしてそのうえで、であった。周りを見回すのであった。

「さて、それではだ」

「出て来るか」

「少なくともいる」

「そうだな」

二人が周りを見回しながら言うとであった。祭壇の前に彼等が出て来た。
四騎士だった。その彼等が出て来たのである。
そうしてである。そのうえでサガとアイオロスに対して言ってきたのである。
「来たな」
「ジェミニ、そしてサジタリアスか」
「他の者達はどうやら」
「足止めを受けているな」
既にそのことを見抜いていた。彼等も決して愚かではなかった。
「八大公の方々にだ」
「そうだな」
「その通りだ」
サガが彼等のその問いに答えてきた。
「だが。あの者達を侮るな」
「侮るなか」
「そう言うのだな」
「そうだ。あの者達が敗れることはない」
自分達を先に行かせたその彼等への言葉だ。
「それはわかっておくことだ」
「八大公の方々も侮ってもらっては困る」
「こちらもそれは言っておく」
すると四騎士達も言葉を返してきた。
「よくわかっておくことだ」
「それはだ」
「実力は完全に伯仲している」
今度言ってきたのはアイオロスだった。
「そういうことだな」
「如何にも」
「その通りだ」

まさにそうだと返す四騎士の面々だった。彼等もその心では負けてはいない。

そうしてである。さらに言うのであった。

「ではだ」

「いいな」

「それでだ」

「どうだというのだ？」

四騎士達が動くと見てだ。サガもアイオロスも身構えた。戦いを念頭に置いていた。

しかしである。ここで四人は前には出なかった。何と祭壇の上に跳んだのである。

「むっ！？これは」

「どういうことだ！？」

「戦わないというのか」

二人はいぶかしむ顔で彼等に問うた。しかしであった。

その彼等はだ。静かに言ってきたのである。その祭壇の上からだ。

「先に行ったが我等の目的は戦うことではない」

「少なくとも今はだ」

「それは言っておこう」

このことを二人に対して告げてきたのである。

第九十話　封印の前でその二

「つまりだ。我等は目的を果たさせてもらう」
「そうさせてもらう」
「我等の目的をだ」
「目的だと？」
「ということはだ」
二人もであった。彼等のその言葉を聞いてすぐに察してきたのであった。
「四闘神をか」
「降臨させる」
「そうするのか」
「そうだ」
ファウストが答えてきた。
「あの方々を冥界より御呼びする」
「そうしてだ」
今度はイシュティスである。
「アーレス様を御呼びする下地を作る」
「アーレス様さえ戻られればだ」
メンデスも言ってきた。
「我等の勝利はなったも同然」
「さすれば」
最後はエノクだった。
「ここで戦うことはない」
「生憎だがそうはいかない」
サガが彼等の言葉を受けて身構えだした。そのうえでアイオロスに対して言ってきた。
「いいか」
「あれを使うのだな」

「そうだ。あの技でまずはこちらの世界から離す」
そうするというのである。
「ここはだ。それではだ」
「わかった。では付き合おう」
アイオロスはサガのその言葉を受けて述べた。
「御前にだ」
「済まぬ。終われば共に戻ろう」
「うむ」
「だが今はだ」
そうして技を放ちにかかった。その技は。
「アナザーディメンション！」
その技が放たれるとであった。彼等は祭壇ごとある場所に出て来た。そこは宇宙空間であった。
祭壇の上にいた四騎士達はだ。その太陽や隕石、それに遠くの星や銀河達を見てそのうえでだ。冷静な声で言ってきたのである。
「これがジェミニの技か」
「あのアナザーディメンションか」
「それがこの技か」
「そうだ」
まさにそれだと返すサガだった。
「この技こそがだ」
「この技がアナザーディメンション」
「相手を異次元に飛ばすジェミニの技の一つ」
「これがなのか」
「ここならば例え何があろうともだ」
サガは落ち着いた声で四騎士に言ってきた。
「人界に害が及ぶことはない」
「だからここにか」
「我等を飛ばしたと」
「そして貴様達もか」

「そうだ。それではだ」
ここでまた言うサガであった。
「貴様達を倒しだ」
「四闘神の封印は解かせん」
こう言ってであった。アイオロスも構える。しかしそれまでにであった。
「何度も言うがだ」
「我々は今は戦わない」
「そしてだ」
「そして？」
「どうだというのだ」
サガとアイオロスが怪訝な顔になったその時だった。

第九十話　封印の前でその三

不意に四人は動いた。そうしてであった。
「見よ！」
「これがだ」
「封印が解かれる時だ！」
「今こそ！」
四人はそれぞれ一本の柱をその拳で殴った。そうしたのである。
「拳を撃っただと！？」
「まさか」
「そうだ、そのまさかだ」
柱を打ったファウストが笑いながら答えてきた。
「この拳から我等の小宇宙を送る」
「そしてだ」
今度はエノクであった。
「さらに」
「見るのだ」
イシュティスも言う。
「我等の拳を」
「血か」
「その血でだな」
「如何にも」
最後にメンデスが言ってきた。四人の狂闘士達はそれぞれの柱を打ったままでその動きを止めていた。そしてその柱の中心にある。
「よくぞやってくれた」
「何だと！？」
「エリスが」
「ここに出て来ただと！？」
「まさか」

「そのまさかよ」
エリスが姿を現わしてきたのだ。そうしてそのうえで祭壇の中央から二人を見下ろしてそのうえで悠然として言ってきたのである。
「四闘神のこの世界への再度の降臨には私の力が必要なのだ」
「何故だ、何故ここに」
「私の異次元空間に入って来るというのか」
「私は神だ」
サガに対して今度は傲然と言ってきた。
「その神ならば人の技なぞ」
「造作もなく破るというのか」
「そうだ」
まさにそうだというのである。
「貴様等程度の技なぞはな」
「神は人の技なぞか」
それを確認してであった。サガの顔が鋭くなった。しかし今はエリスの方が言ってきているのであった。やはり神として不遜な態度である。
「何ともないのか」
「左様。そしてじゃ」
「今度は何だというのだ?」
アイオロスが彼女に問うた。
「それではだ」
「今よりあの者達を呼び戻す」
そうするというのである。
「それを見ているがいい」
「くっ、させん!」
「それはだ!」
二人はすぐにその光の拳をエリスに向けて放った。当然それで倒さんというのだ。しかしであった。それは全く意味のない攻撃だった。

その拳が全て弾き返される。エリスの前に何か壁があるかの様に。
全く効かなかった。
「障壁か！？」
「それなのか」
「言った筈だ。私は神だ」
またしてもその不遜な声で言ってきたのであった。
「御前達の攻撃なぞ当たる筈もなかろう」
「その小宇宙で防いでいるというのか」
「左様」
そうアイオロスに述べる。
「その通りよ」
「小宇宙での障壁か」
「そういったものまで出せるというのか」
「神は人には傷付けられぬ」
それを確信している言葉だった。

第九十話　封印の前でその四

「決してだ」
「ではエリス様」
「今こそ」
「うむ」
今度は四騎士の言葉に微笑んで応えた。何処か血塗られたものを感じさせる微笑みであった。
その微笑みを浮かべたうえでだ。右手に持つその杖を高々と掲げて言うのだった。
「今こそ。再びこの世にい出よ！」
その言葉と共に凄まじい赤い光がその杖から放たれた。それはまるで稲妻の様に激しく動きそのうえで四つの柱を撃ちそして。
「柱が！」
「崩れたか！」
柱達は音もなく崩れ落ちた。そうしてであった。
柱があった場所から四つの赤い光が立ち起こり柱となった。そしてそこに。
赤い戦衣を着た四人の者達がいた。それこそが。
「よくぞ戻った」
「有り難うございます、エリス様」
「我等を再びこの世に御呼び頂き」
「感謝の念に堪えません」
「全くです」
こう言ってだった。それぞれの場所からエリスに対して片膝をつき恭しく述べるのであった。
その彼等の前にいる四騎士達はそれぞれの前にいる彼等に片膝をついていた。その動作はまさに仕えるものであり信仰さえ見られた。
そしてであった。その者達にだ。エリスが告げるのであった。

「それでは」
「はい、わかっています」
「我等がまずやるべきことは」
「ここから出ること」
「この下らぬ場所から」
「下らぬだと」
その異次元に祭壇を送ったサガが彼等に対して言った。
「私の異次元がか」
「人の技により送られた場所なぞ」
「我等にとっては只の箱庭」
「それを下らぬと言わずして」
「何だというのだ」
これが彼等の言葉であった。
「確かに汝等は強い」
「聖域の象徴でもある黄金聖闘士」
「人としては最高の強さを持つ」
「だが所詮は人だ」
立ち上がりそのうえでサガを見据えてきてだ。そのうえでの言葉であった。
そうしてさらに言うのだった。エリスと同じく不遜なその様子で、である。
「人は神には勝てはしない」
「人は神の意のままになるもの」
「それでどうして」
「この場所から出ないということがあろうか」
「さすればじゃ」
四人に続いてエリスが言ってきた。
「この味気ない世界にいても下らぬこと」
「はい、まさに」
「その通りです」

また四闘神がエリスに答えた。
「ですからここはです」
「すぐに戻りましょう」
「どうするというのだ」
それを聞いたサガが言う。
「私のこのアナザーデイメンションは決して逃れることはできないというのにだ」
「また言うがだ」
「それは人ならばだ」
「人であるならばだ」
彼等は人間ということを強調して言ってきた。
「この異次元空間からは出られまい」
「しかし彼等は神」
「神であるのだ」
このことも強調してきたのだった。
「それならばすぐにでも出られる」
「こうしてだ」
そのうちの一人がその手を掲げた。するとであった。

第九十話　封印の前でその五

見ればそれはだ。銀色の髪と目をしていた。サガはその彼を見て言った。
「恐怖の神デイモスだな」
「如何にも」
その男デイモスはにやりと笑って彼が言ったその名前に応えてきた。
「それが私だ」
「やはりそうか」
「そしてだ。この機会にだ」
「我等も名乗っておこう」
「いいな、それではだ」
「ここでだ」
他の三人も出て来た。そうしてそれぞれ名乗ってきたのであった。
「敗走の神ポポス」
金色の髪と目をしている。
「混乱の神キュドイモス」
白い髪と目である。
「戦死の神ケーレス」
黒い髪と目だ。その彼等が四闘神であった。
そのうちのデイモスがであった。右手をゆっくりと自分の肩の高さに掲げてだ。そのうえでまた自信に満ちた声で言ってきたのである。
「この程度の空間なぞだ」
「貴様一人で充分だというのか」
「如何にも」
まさにその通りだというのだった。サガに対しても返す。
「この程度のことはだ」

「デイモスに出番を取られたか」
「全くだ」
他の三人はその彼を見て薄く笑うだけだった。
「仕方がない。では見させてもらおう」
「今地上がどうなっているかをな」
その言葉と共にであった。デイモスがその手から赤い光を放った。
そのうえで言うのであった。
「元の世界に」
「!?技ではないのか」
「それだけだというのか」
これにはサガもアイオロスも驚きの声をあげた。しかしであった。
技の名前なぞ言わなかった。デイモスはそのまま手から光を放っただけだ。それだけで。
彼等は祭壇ごと別世界に移った。元の地下神殿であった。
「元のあの場所にか」
「戻ったというのか」
「その通りだ」
二人にデイモスが告げてきた。彼等も四騎士もそのままである。
そしてエリスもまた。悠然と笑いながらまた二人に話してきた。
「さて」
「ここでか」
「我等を倒すというのか」
「それも一興か」
エリスは二人の言葉を聞いてこう返してきた。
「ここで汝達を倒すのもだ」
「生憎だが倒されるつもりはない」
「我等もだ」
サガもアイオロスもその言葉を強くさせて返した。
「何があろうともだ」
「貴様等を倒すことはあってもだ」

「ふむ」
エリスは二人の言葉を聞いてまた述べた。
「見事な心じゃ。流石は黄金聖闘士だけはある」
「確かに」
「思えば思い出します」
「あの時を」
四闘神もここで言ってきた。
「あの時もこの者達は決して諦めませんでした」
「例え何があろうとも」
「決して」
「そうじゃな。何もかもが同じよ」
エリスもまた悠然と笑って返してきた。
「それではじゃ」
「はい、それではここは」
「一体」
「楽しみは後に取っておくもの」
だが。ここでのエリスの言葉はこうしたものであった。

第九十話　封印の前でその六

そしてさらに。周りの己と同じ神に仕える者達に告げたのであった。
「ここは去るとしよう」
「戦われないのですか」
「ここは」
「確かに汝等ならばこの者達を討つのは容易い」
サガとアイオロスを見ながら四闘神に対しての言葉であった。
「それはだ」
「では今は」
「ここはですか」
「アーレス様を」
「左様、今はそれを先にやる」
そうするというのであった。
「今はだ」
「左様ですか。それでは」
「今はこの者達を置き」
「アーレス様を」
「わかったであろう」
悠然と、血塗られた声で告げたのであった。
「さすれば。トラキアに戻るとしよう」
「懐かしく我等が宮殿に」
「アーレス様のおられるあの場所に」
「左様じゃ。よいな」
「はい、それでは」
「今こそ」
彼等も従う。これで全ては決まった。
エリスは彼等に片膝をつかれて周りから一礼されながら。サガと

アイオロスに対して告げたのであった。
「さすれば今はその命預けておこう」
「そのまま去るというのだな」
「トラキアへ」
「如何にも。まずは僕達は戻った」
その四闘神のことであるのは言うまでもなかった。
「それではまずは」
「アーレス様に戻って頂く」
「そうさせてもらう」
「それはさせん」
アイオロスは何としてもそれを阻もうとした。すぐに身構える。
そのうえでだ。すぐに必殺技を放とうとする。しかしであった。
「無駄だ」
「何っ！？」
「貴様に我々は倒せん」
「一人もだ」
ポポスとキュモイドスが言ってきた。
「人に神は倒せぬ」
「それは言った筈だ」
「わからないと言えばどうだ」
だがアイオロスは彼等のその言葉を受け入れようとはしなかった。
あくまでその攻撃を放とうとする。しかしその彼に対してであった。
ケーレスがだ。静かに笑って告げてきたのだった。
「止めておくのだ」
「無駄だというのか」
「その通りだ。その技はだ」
アイオロスが右手を上に、左手を下にして大きく開きそのうえで放とうとしている姿勢を見てであった。そのうえで言ってみせてきたのである。
「インフィニティブレイクだな」

「だとすればどうだというのだ」
「その攻撃で私を倒せるというのか」
自分をだと言ってみせたのである。
「それでだ」
「誰であろうと倒す」
これはアイオロスの返答だった。
「何としてもだ」
「殊勝だな。それは認める」
今度は目を閉じて言ってみせてきた。
「しかしだからといって私を倒せはしない」
「あくまでそう言い張るのか」
「知りたいというのならその技を放ってみるのだ」
そのインフィニティブレイクをというのだ。
「それをだ」
「いいだろう。受けるがいい」
遂にであった。彼はその無限の光の矢を放ったのだった。

第九十話　封印の前でその七

「インフィニティブレイク！」
「来たか」
それを受けてである。ケーレスはその左手を開いて前に突き出してみせた。するとである。
その無数の光の矢を全て受け止めてみせたのである。そうしてアイオロスのその技を全て防いでしまったのだ。その左手一本だけで、である。
「何だとっ！？」
アイオロスは彼が自分の技を全て防いだのを見て眉を顰めさせた。
「あれだけの光の矢を全てか」
「何度も言うが確かに貴様は人としては強い」
ケーレスもまたこのことを言ってみせたのだった。
「だが」
「神にはか」
「人が神を凌駕することは有り得ない」
こうも話してきた。
「決してだ。その人の技なぞはだ」
「何ということはないか」
「見ての通りだ。わかったな」
「くっ・・・・・・・」
「それではだ」
ケーレスもまた傲慢な笑みを浮かべて言ってみせてきた。
「これでだ」
「我等は去る」
「それではだ」
「よいか」
エリスが周りの者達に告げてきた。

「トラキアに戻るぞ」
「はっ、それでは」
「今より」
「八大公達もじゃ」
彼等もだという。
「この地より去るのじゃ」
「はい、それでは」
「トラキアに」
こうして彼等はトラキアに戻った。その姿を消し、である。
後に残ったのはサガとアイオロスだけだった。二人は自分達だけになると正面を見たままで。眉を険しくさせてそのうえで言ってみせたのだった。
「戦いは終わったが」
「我等の完敗だな」
「そうだな」
アイオロスはサガのその完敗という言葉に応えて述べた。
「四闘神は甦ってしまった」
「全ては無に帰してしまった」
「何の意味もなくなった」
アーレスが復活するということも既に視野に入れていた。
「だが。これで戦いは終わりではない」
「わかっている」
アイオロスはサガの今の言葉に頷いた。
「まだ戦いは続く」
「それが続く限りはだな」
「諦める訳にはいかない」
アイオロスの言葉がさらに強いものになった。
「何があろうともだ」
「よし、それではだ」
「まずは聖域に戻るとしよう」

「次の戦いに備えてな」
こう言い合いそのうえで祭壇の前を後にした。そのまま行きに通った廊下を歩いているとであった。前から八人やって来たのだった。
「御無事でしたか」
「私達はな」
「しかしだ」
「はい、わかっています」
ムウが深刻な面持ちで二人のその言葉に応えてきた。
「あの四柱の神々が復活してしまいましたね」
「小宇宙を感じた」
アルデバランも言ってきた。
「圧倒的な四つの小宇宙を」
「そうか、感じていたか」
「御前達もまた」
「うむ。そしてだ」
アルデバランはさらに言ってみせてきた。
「八大公達も全て去った」
「あっという間だったぜ」
デスマスクは己の口をやや歪ませて述べた。
「逃げ足も速い奴等だ」
「しかしだ。あの神々が復活したということはだ」
「そうだ」
シュラとカミュが話す。
「トラキアにとって非常に大きなことだ」
「神が四柱だからな」
「どちらにしろこれからは苦しい戦いになる」
ミロはそのことを覚悟していた。
「だが。それでもだ」
「何が起ころうとも」
アイオリアも言う。

「この世界を守らなくてはだ」
「では今はだ」
「帰るとしよう」
サガとアイオロスはその彼等にこう告げた。そうしてそのうえで今は声域に戻るのだった。

第九十話　　完

２０１０・１・２９

第九十一話　聖域への攻撃その一

聖域への攻撃

「教皇」
「わかっている」
教皇の間においてだ。シオンとシャカが合っていた。そのうえでの話である。
「降臨したな」
「最悪の結果となりました」
「そう思っているのか？」
シオンはシャカの今の最悪の結果という言葉に対して言ってきた。
「御前は真実に」
「といいますと」
「わかっている筈だ」
玉座からシャカに対して話してきた。
「あの神々の復活は決してあってはならないことだったのではない」
「私の考えはおわかりでしたか」
「その通りだ。そしてだ」
「はい」
「御前の率直な考えを聞きたい」
こう言うのだった。
「よいか、それで」
「わかりました。それでは」
シャカも彼のその言葉を受けてだ。静かに返してきたのであった。
「正直にお答えします」
「うむ」
「アーレスが復活してもそれはまだ最悪の結果ではありません」
「その通りだ。それでもだ」
シオンはシャカの話を聞き終えてからまた述べた。

「我々には確かに今アテナはいない」
「今はまだ」
「アテナは最大の聖戦の時に降臨される」
そうだというのである。
「そのアテナは今はおられぬ」
「トラキアにアーレスが降臨しようとも」
「しかしそれでも最悪の状況ではないのだ」
「我等黄金聖闘士がいるからですか」
「そうだ、御前達がいてくれている」
このことをまず述べた。
「そしてだ」
「教皇」
目を閉じてはいた。しかし顔は間違いなく彼に向けてだ。そのうえで言った言葉である。
「貴方もおられます」
「私もまた戦わせてもらう」
「はい」
「八大公とその四闘神は御前達に任せる」
「我々に」
「御前達ならばやれる」
そうだというのである。
「必ずだ」
「ですが教皇」
ここではあえて言ったシャカだった。
「四闘神は異次元でサガとアイオロスの攻撃を打ち消しています」
「それは私も知っている」
「それでもなのですね」
「そうだ。御前達ならば可能だ」
そうだと言うのである。
「必ずだ」

「では。その信頼に応えてみせます」
シャカは静かに述べた。シオンのその言葉を受けてだ。
「この戦いにおいて」
「御前達のその心がある。それでは決して最悪の状況ではないのだ」
そうだというのである。
「だからこそだ」
「つまり最悪の状況というのは」
「御前達が絶望したその時だ」
「その時こそが」
「御前達が戦おうと向かう限りは最悪ではない」
「その通りです。それでは」
シャカはそこまで聞いてである。言葉を確かなものにさせるのだった。
「私もまた」
「私はここにいる」
シオンは今度は自分から言った。
「そしてシャカ、御前は」
「処女宮に戻ります」
己が守護するその宮にである。
「そしてそこで」
「頼んだぞ」
「間違いなくこちらに攻撃をしてきます」
「その通りだ。既に動こうとしている筈だ」
それもまた考えているのだった。
「だからこそだ」
「ではこれで」
「くれぐれもだ。その為に御前には残ってもらった」
「わかっております」
「教皇とは何か」
このことからも話した。

第九十一話　聖域への攻撃その二

「神の先の先を読んでこそだ」
「先の教皇と同じくですか」
「あの方は務めを果たされた」
シオンの中にはその時の記憶も残っていた。遥かな昔の戦いの日の記憶だ。
「だからこそ私も」
「そうされるのですね」
「御前もだな」
シャカ自身もそうだと言うのだった。
「そのつもりだな」
「人には運命があります」
シャカはそれに応えて述べた。己の言葉をだ。
「私もまた」
「バルゴのシャカよ」
その星座まで呼んでみせての言葉だ。
「頼んだぞ」
「わかりました」
これで話は終わった。シャカは処女宮に戻った。処女宮に務めている者達がすぐに彼を迎えてきた。
「お帰りなさいませシャカ様」
「まずは何にされますか？」
「ご昼食ですか？それともお風呂でしょうか」
「どちらも用意をしてありますが」
「今はどちらも」
シャカは相変わらず目を閉じたままであった。そのままで彼等に告げるのだった。
「それよりも貴方達は今は処女宮から離れるのだ」

「といいますと？」
「何か」
「休み時間ということです」
こういうことにしたのだった。
「ですから」
「休み時間ですか」
「今からですか」
「そう、今から全員です」
また言うシャカだった。
「いいですね」
「ではその間は」
「我々は一体何処に」
「この処女宮から離れるのです」
それをせよ、というのである。その口調は絶対のものであった。
「宜しいですね」
「ではその間は」
「その間の雑事は」
「昼休みです」
やはり有無を言わせない口調である。
「わかりましたね」
「そこまで仰るのなら」
「我々は」
彼等もそこまで言われればであった。頷くしかなかった。何しろこの処女宮の主はシャカである。その言葉は絶対のものがあった。従うしかなかった。
「そうさせてもらいます」
「それでは」
「ではそういうことで」
彼等を見送る言葉も出したのであった。
「御願いします」

「はい、それでは」
「我々はこれで」
こうして彼等は今は処女宮を後にした。シャカはその誰もいなくなった宮殿の中央に座した。座禅を組み宙に浮かんでいる。その彼にだ。
『いたか』
『そこにいたな』
『黄金聖闘士』
『聖域を護っているのか』
「その通りです」
声は四つであった。その四つ全てに応えたのである。
「貴方達が来るのはわかっていました」
『ということはだ』
『我等の復活を見越していた』
『そしてそのうえで』
『既にここにいるのだな』
「そうです」
まさにその通りだと言い切る。

第九十一話　聖域への攻撃その三

「だからこそ私は今ここにいるのです」
『その読みは見事だと言っておこう』
『我等の復活を既に読んでいたのはな』
『人ながら』
『それは認めよう』
四柱の神々もそのことは認めてきた。しかしである。
ここで口調が変わった。不遜なまでに自信に満ちた声になってだ。
こう言ってきたのである。
『しかしだ。それは人としてだ』
『我等は神』
『その神の動きを読めたとしても』
『力までは防げまい』
「ではどうされるというのです？」
目は閉じたままである。座禅も崩してはいない。シャカはその姿勢のまま己の全身に黄金色の小宇宙を沸き起こらせている。その中での言葉である。
「一体」
『知れたこと。我等が復活したからにはだ』
『アーレス様の御手をわすらわせるまでもない』
『その前にだ』
『聖域なぞ跡形もなく消してみせよう』
そうしようというのである。今それを言ってきたのである。
『そしてだ。アテナの聖闘士よ』
『貴様もまただ』
『この我等の手によってだ』
『消してみせよう』
「笑止」

だがシャカはその彼等の言葉を一笑に伏した。そのうえでさらに言うのであった。
「このバルゴのシャカは最も神に近い男」
『だが人だ』
『神に近いとは戯言を』
『その神である我々に対するその不遜』
『万死に値する』
「我等聖闘士にとっての神はアテナ」
シャカは彼等に対しても負けてはいなかった。恐れなぞ何処にでもなくこう返すのだった。
「それ以外の何者でもない」
『ではだ』
『アテナは我等よりも高位にあるというのか』
『あの平和なぞという下らぬものを愛する女が』
『我等よりも』
「貴方達だけでなく」
恐れることなくその彼等にまた返してみせた。
「アーレスさえも」
『何だとっ!?』
『今の言葉聞き捨てならん』
『アーレス様を愚弄するなぞと』
『何という不遜か』
「言った筈です。私にとっての神はアテナ」
しかしであった。シャカはここでもシャカであった。あくまで彼等に臆することなくである。こう言い切ってみせるだけであったのだ。
そしてであった。その小宇宙をさらに高めて。まだ気配だけの彼等に対して告げるのであった。
「それではです」
『それでは?』

『何だというのだ？』
「アーレスに仕える四闘神」
彼等が何であるのかは既にわかっていた。
「その力見せてもらいましょう」
『アーレス様を侮辱するだけでなく』
『その側近である我等まで愚弄するか』
『神を試すという言葉まさに』
『万死に値する』
明らかにであった。その声が起こっていた。そうしてである。
彼等の小宇宙が沸き起こった。その赤い禍々しい小宇宙がだ。
それが聖域に迫る。そのうえで、であった。
『この力でだ』
『聖域ごと滅ぼしてくれる』
『バルゴの黄金聖闘士よ』
『貴様をだ』
「来ましたか」
シャカはまだ目を閉じていた。そしてそこから動くことはない。
しかしである。その小宇宙がさらに高まり。聖域に迫るその四つの強大な小宇宙に対して向かうのだった。
「喝っ！」
『何だと！』
『この小宇宙は！』
「言った筈、このバルゴのシャカは神に最も近い男」
またこのことを言ってみせたのである。驚きを隠せない彼等にだ。
「そのアテナにとって」
『この小宇宙』
『これは』
「神が勝つか私が勝つか」
目は閉じられたままだ。だがその言葉は強くはっきりとしたものになっていた。

「今ここで勝負！」
『くっ、おのれ！』
『ならばだ！』
それを受けてであった。

第九十一話　聖域への攻撃その四

彼等はその小宇宙を強くさせた。そのうえでだ。
シャカを押し切り潰そうとする。それに対して。
シャカもまた小宇宙をさらに高めてきた。そのうえで。
「むん！」
何とであった。四柱の神々の小宇宙を押し切ったのである。これには神である我等も驚きを隠せなかった。それが声にも出ていた。
『何と・・・・・・』
『神の小宇宙をだと』
『退けたというのか』
『人間が』
「このシャカは最もアテナに近い男」
このことは何度でも言ってみせるのだった。
「それに」
『それに！？』
『今度は何だというのだ』
『一体何なのだ』
「人間を侮らないことです」
彼が今度言ったのはこのことだった。
「そうおいそれとです」
『ふん、人間なぞ』
『所詮は我等に治められるもの』
『神の僕でしかない』
『その通りだ』
シャカの言葉を受けてもであった。彼等の考えは改まる様子はなかった。まるでそれが絶対の摂理であるかのようにである。変わることはなかった。
『それで何故だというのだ？』

『侮らないとはな』
『そんなことは有り得ない』
『決してだ』
「その言葉」
シャカの言葉が強いものになった。
「後悔しなければいいですが」
『神は後悔しない』
『それが神だ』
『所詮人の戯言でしかないな』
「戯言かどうかも」
シャカの態度は変わらない。悠然とすらしている。
そうしてだった。四闘神はその姿をシャカの前に現わしてきたのである。
しかしその姿は透き通っている。実体ではなかった。
「精神だけ送って来られたのですね」
「ふむ、これがか」
「今のバルゴの黄金聖闘士か」
「成程な」
シャカの姿をまじまじと見ての言葉である。その身体には既に戦衣を身にまとっている。赤い血を思わせる禍々しい輝きもそのままである。
「よく似ている」
「いや、同じか」
「そうだな、同じだ」
「あの時と」
同じだというのである。それが彼等の言葉だった。
「やはりこの者達の魂は引き継がれるのだな」
「永遠に」
「先のハーデス様との戦いもそうだったな」
「見させてもらった限りではな」

「成程」
シャカはその彼等の言葉を聞いたうえで述べた。
「どうやら貴方達は私達全ての前世を知っているのですね」
「知らない筈がない」
「だが。貴様はどうやら」
「知っているな」
「その時のことを」
このことを察しての言葉だった。
「既にだ」
「無論」
目を閉じたまま恐ろしいまでの小宇宙を放ってきた。

第九十一話　聖域への攻撃その五

「私にとって前世の記憶はそのまま受け継がれるもの」
「自ら神に近いというだけはあるか」
「どうやら」
「それはだな」
「その通り」５８
また答えるシャカだった。
「既にわかっていること」
「そうか。それではだ」
「我等のことも」
「やはり覚えているのだな」
「どうやら完全ではないようだが」
「ある程度は」
これがシャカの今度の返答だった。
「既にわかっていること」
「やはりな」
「それもか」
彼等はシャカからその言葉を聞いても驚きはしなかった。そうしてさらに言うのだった。四人並びそのうえでシャカを見据えたうえで、である。
「ではだ」
「我等も遠慮することはないな」
「バルゴよ」
シャカをその星座で呼んできた。
「その力、ここで潰させてもらう」
「どうやら貴様は黄金聖闘士の中で最も危険な存在だな」
「我等にとって」
狂闘士の側に立っての言葉であった。それは当然のことであった。

「ならばこそ」
「今ここで死んでもらおう」
「いいか」
「果たして実体でない貴方達にできるでしょうか」
しかしここでこう言うシャカだった。
「それは」
「何っ！？」
「できぬというのか」
「神である我等に」
「神であろうとも」
シャカの言葉の色は変わらない。何一つとして。
「精神を飛ばしただけでは力に限りがあるのは自明の理」
「くっ・・・・・・」
「それを言うのか」
「如何にも」
まさにその通りだというのだ。
「果たしてそれだけでこのシャカに勝てるのか」
「ふむ」
それに応えたのは。ケーレスだった。戦死の神である彼だった。
「そうだな」
「戦死の神ケーレスですか」
「そうだ」
まさにその通りだという彼であった。
「そして一つ言っておく」
「何をでしょうか」
「先程貴様を襲った小宇宙は私のものだ」
「貴方のですか」
「神は人を倒すのに集いはしない」
ここにも絶対の自信があった。神としてのである。
「一人で充分だ」

「だからこそですか」
「しかし貴様は私のその小宇宙を退けた」
こう返すのだった。
「そのことは人としては見事だった」
「しかし。なのですね」
「貴様は私の誇りを傷つけた」
「誇りをですか」
「神の誇りをだ」
言葉には怒りが篭っていた。明らかにであった。
「神の誇りをだ」
「だからこそですか」
「人でありながらそこまでの力を見せたことは認める」
それはだ、と言いながらだった。

第九十一話　聖域への攻撃その六

「しかし神を怒らせた罰は重いぞ」
「神罰だというのですか」
「今それを見せてやる」
こう言ってであった。
「いいな、それで」
「生憎ですが」
目を閉じていることは変わらない。平然と述べるシャカだった。
そうしてである。今度の彼の言葉はだ。
「私の神はアテナのみ」
「まだそういうのか」
「その通り。他の神の怒りなぞ意に介しはしません」
まさにそうだというのである。
「だからこそ今ここでも」
「受けて立つのか、私の怒りを」
「来るのです」
こう言いながらであった。小宇宙をさらに高めさせ黄金の輝きを見せながら。
「このバルゴのシャカの技見せて差し上げましょう」
「ならばだ」
ケーレスもそれを聞いて述べてきた。
「私の技も見せよう」
「それでは」
彼等の闘いがはじまろうとしていた。そうして教皇の間では。
シオンは玉座にいた。そこで頭の中で話をしていた。相手はあの男だ。
「来たぞ」
「わかっている」

こう静かに彼に言葉を返すのだった。
「既にだな」
「四柱じゃな」
「そしてそれだけではない」
「エリスもじゃな」
「来ている」
シオンも男もそれを既に察しているのだった。
「それではだ」
「わしが行こうか」
「いや、御前はだ」
シオンは彼が名乗り出たのは制止した。その上で言うのである。
「御前のやるべきことがある」
「じゃからか」
「そこから動く訳にはいかない筈だ」
「精神だけでも送れるが」
「相手は神だ」
シオンもまたこのことはよく認識しているのだった。
「それで精神を飛ばしただけではだ」
「勝てはせぬか」
「御前もそれはわかっている筈だが」
「確かにのう、それは」
当然彼もそれはわかっていた。しかしだったのである。
そうしてだ。さらに話す彼等だった。
「ここは私に任せるのだ」
「争いの女神はか」
「そうだ、任せるのだ」
こう言うのである。
「いいな、それは」
「わかった、では御主に任せる」
男もそれでいいとしたのだった。

「頼んだぞ」
「あの方もそうだった」
シオンはまた過去を遡って考えた。
「教皇として己の本分を尽くされた」
「御主もじゃな」
「あの方には及ばずとも」
これは謙遜だった。
「それでもだ」
「いや、御主もじゃ」
「どうだというのだ？」
「よくやっておる」
こうシオンに告げていた。
「とてもよくな」
「生憎だが私は」
「何、謙遜することはない」
こう言って親しげなものも見せるのだった。
「それはじゃ」
「果たしてそうなのか」
「御主はどう思っておるかわからんがそれでもじゃ」
「私はやっているというのか」
「あの方と同じ程な」
そうしているというのである。

第九十一話　聖域への攻撃その七

「よし、それではじゃ」
「来る」
「わしは去ろう」
シオンの頭の中で告げた。
「これでじゃ」
「私もまた先を読んでいるつもりだ」
その言葉には覚悟が既にあった。
「神の先の先をだ」
「読んでこそじゃったな」
「そうだ、教皇だ」
まさにそれだというのだ。
「だからこそだ」
「それでじゃな。今も」
「おそらくエリスは私が察していることを知らない」
そう読んでいるシオンだった。
「そして」
「そうじゃな」
「これからのこともだ」
「その通りじゃな。それはもうじゃな」
「四闘神の復活も」
まずはそれだというのだ。
「そしてその次もまた」
「ここにエリス達が攻撃を仕掛けて来ることもじゃな」
「既に読んでいる」
そしてだった。
「そして」
「そうじゃな」

「その先もまた」
何処までも考えて読んでいた。シオンも動いていた。
そうしてである。さらに言うのだった。
「全ては考えてある」
「でははじゃな」
「来る」
それも既にだという。
「間も無くだ」
「ではな」
男はここまで話して気配を消してきた。
「わしはこれでじゃ」
「御前はそこから動かなくとも」
「戦うことになるじゃろうな」
「御前もまた、だからな」
「さて、その時はやらせてもらおう」
彼はまた言った。
「是非な」
「それではだな」
「またここに出向くからな」
「何なら私からも行く」
「そうか。それではじゃ」
「また会おう」
こんな話をしてであった。男の思念は消えた。そうしてだった。
教皇の間に物凄い大きさの禍々しい赤い矢が迫ってきていた。
「来たか」
シオンはそれを察するとだった。すぐに。
教皇の間の上に白い巨大な光の穴を出してきた。それで矢を消したのだ。
『むっ！？』
「やはりな」

シオンは気配を察したうえで述べた。

第九十一話　聖域への攻撃その八

「そう来たか」
『まさかと思うが』
声はエリスのものだった。それを出して言ってきたのである。
『我が気配を察していたというのか』
「如何にも」
そのエリスの声に応えるシオンだった。そしてそのうえでまた言うのである。
「既にだ」
『まさかその様なことがだ』
「神の先の先を読む」
彼女に対しても言うのだった。
「それが教皇だからこそ」
『人でありながら神を読むというのか』
エリスもまた怒りを見せてきた。
『戯言を』
「戯言ではない」
それを否定する。そうしながらだった。
玉座から立ってだ。そのうえでさらに言うのだった。
「その証拠にだ」
『何だというのだ』
「既に結界も晴らせてもらった」
それもだというのだ、
「貴女が攻撃を出す前にだ」
『結界をだというのか』
「この札によって」
言いながら懐から札を出してきた。数枚ある。
「教皇の間にだ」

『確かにな』
それを自分でも察したエリスだった。
『私が中に入られないとは』
「実体では入られないというのだな」
『今はその時ではない』
だからこそだというのだ。
『貴様等を直接滅ぼすのはだ』
「違うというのか」
『その通りだ。だがそれでもだ』
「それでもだというのか」
『そうだ』
その通りだといってだ。また小宇宙を放ってきたのだ。
それで教皇の間に攻撃を浴びせる。今度は一発ではなかった。
「続けてだというのか」
『これはどうじゃ？』
エリスの笑みは不敵なものになっていた。
『汝に防げるか』
「防げると言えば？」
『戯言を』
またこの言葉を出すのだった。
『私のこの攻撃を防げるというのか』
「何度も言った筈」
シオンも負けてはいなかった。
「神の先を読んでこそ」
『左様か。さすれば』
「さすれば？」
『私も読んでみせよう』
攻撃を放ってからの言葉だった。
『貴様の先をな』
「それでは」

シオンはその言葉を聞いて述べた。
「どちらが勝利を読めるか」
『神を侮るその言葉許しはせぬ』
シオンとエリスの言葉はそれぞれ違っていた。その見るものもである。
『決してだ』
「さすれば」
彼等の闘いもはじまった。聖域に残る彼等も死闘に入る。聖域とトラキアの闘いは神まで出て来てさらに続くのであった。

第九十一話　完

2010・2・2

第九十二話　神の力その一

神の力

処女宮においてシャカとケーレスは対峙し続けていた。
その中でだ。ケーレスは言うのだった。
「それでだ」
「それでとは？」
「バルゴよ」
シャカに言ってきたのである。
「貴様は私を怒らせた」
「だとすれば？」
「神の怒りを受けなければならない」
こう言うのである。
「それは言っておく」
「ではどうされると」
「答えは決まっている。つまりはだ」
「つまり、ですか」
「私のその技を受けて死ぬのだ」
言葉を出すうちにその小宇宙がこみあがってきていた。
「それを栄誉に思うのだ」
「栄誉だというのか」
「人でありながら神の技を受ける」
このことをまた話してきたのである。
「それを名誉と言わずして何と言うのか」
「私は別に名誉とは思いませんが」
シャカは冷静に返すのだった。
「それは」
「貴様がどう思おうとだ」
ケーレスの赤い小宇宙が動く。かなり禍々しい。

それを全身にまといながら技を放つ姿勢に入る。そうして。
「行くぞ、バルゴ」
「来ますか」
「これが神の技、よく見るのだ」
その言葉と共に放ったのは。
「デスハンキング！」
いきなり赤い無数の鞭が出て来てシャカに襲い掛かる。そのうえで座ったまま身動き一つしていない彼を捉えたのである。
そしてそのうえで首や両腕を絞めてきた。じりじりとである。
「これが神の技だというのですか」
「そうだ」
まさにその通りだというのだ。
「これこそがだ」
「そうですか」
「私の技だ。そして」
「そして？」
「これで終わりではない」
自信に満ちた冷酷な笑みと共の言葉であった。
「それも言っておく」
「では今度は何を」
「この鞭はただの鞭ではない」
これは見ればわかることだった。何しろ彼の後ろの空間から無数に出て来ているからである。まさに言うまでもないことだった。
「だからこそだ」
「ではこの鞭がさらにですか」
「私の鞭は動くのだ」
今度はこう言うのである。
「自らの意志でだ」
「生きた鞭という訳ですか」
「そしてだ」

ケーレスはさらに言ってきた。
「それだけではなくだ」
「むっ！？」
シャカの身体にだ。鞭から恐ろしい波動が向かって来た。そうしてそれで彼の身体を打つのである。
シャカはそれを受けながら。冷静に言ってみせた。
「魔の波動ですね」
「こうして力で打つこともできる」
また言うケーレスだった。
「さあ、これならばどうだ」
「そうですね」
しかしである。そのシャカの言葉は。神の攻撃を受けているとは思えないまでに冷静で落ち着いたものであった。
「流石に神であるだけはあります」
「そうか」
「これだけの力」
その攻撃に対しての言葉だ。

第九十二話　神の力その二

「そう容易には出せません」
「ならばこのまま死ぬのだ」
「いえ」
ここでシャカはまた言ってきた。
「それでもです」
「何っ！？」
「私は敗れません」
こう言ってであった。その黄金の小宇宙が高まりである。
「オーム」
「むっ！？」
それと共にだ。シャカの身体にさらに小宇宙が高まり。
そのうえでシャカはさらに言うのだった、
「カーン」
すると紅蓮の炎が沸き起こりそのうえでその鞭を全て焼いてしまったのである。神の攻撃をそれによって防いだのである。
「何と」
これにはであった。ケーレスも唖然としていた。
そうしてである。シャカに対して言うのであった。
「私の攻撃を破ったというのか」
「見ての通りです」
まさにそうだというのだ。
「こういうことです」
「あの時と同じか」
「その様ですね」
ケーレスのその忌々しげな言葉にも返す。
「どうやら私はあの時もまた」
「そうだ」

まさにそうだと答えるケーレスだった。
「私の今のデスハンキングを焼いた」
「そして今も」
「人間では貴様だけだ」
彼だけだと。こうも言うのだった。
「貴様だけが私のその技を破ったのだ」
「左様ですか。私が」
「そしてだ」
ケーレスの言葉は続く。
「私の技はだ」
「この技だけではないと」
「神を侮辱することは許されぬこと」
まさにそうだと告げてだ。そのうえで。
悠然とその手を構えてきた。そしてシャカもまた。
「どうやら私もまた」
「既にわかっている」
またケーレスから彼に言ってきた。
「貴様のその目は見えないのではないな」
「既におわかりでしたか」
「貴様の目は見える」
彼は見抜いていた。シャカのその目のことをだ。
「しかし常に目を閉じている」
「そうだな。間違いない」
「この男はだ」
「目が見える」
四闘神のその彼等も言うのだった。
「だが目を閉じている」
「それは」
「五感の一つである視覚を遮ることでだ」
ケーレスがまた言ってきた。

「それによってその小宇宙を高めているのだ」
「おわかりでしたか」
「貴様は視覚に頼らずとももものを見ることができる」
しかもであった。シャカは目を使わなくともものを見ることができる。それができるというのである。それは何故かも話すケーレスだった。
「そのセブンセンシズからだ」
「そうだな。それは我等も同じ」
「目を閉じればそれだけで」
「見えるようになる」
それをわかったうえでだ。さらに話すケーレスだった。
「バルゴ、その貴様が目を開いた時だ」
「その時だな」
「まさに」
「貴様のその小宇宙が開かれるのだ」
「それが今だというのですね」
シャカの小宇宙はさらに高まっていっている。その凄まじさは神であるケーレス達から見てもだ。かなりのものになっていた。

第九十二話　神の力その三

「私の目が開かれるその時は」
「我等アーレス様の僕達の信条を教えておいてやろう」
「その信条とは」
「泣かぬなら」
まずはそこからだった。
「殺すか。若しくはだ」
「鳴かせるかですね」
「待つという言葉はない」
それがまさにアーレスだというのである。
「それは言っておく」
「そうですか」
「それではだ」
そうしてだった。その構えのままでだ。
「このケーレスのさらなる技を見せよう」
「来るのですね」
「これで倒す」
言いながらであった。今まさに攻めようとする。シャカもそれを受ける。二人の闘いはさらに激しいものとなろうとしていた。
そしてだ。シオンとエリスの睨み合いもだ。さらに激しさを増していた。
赤い矢での無数の攻撃は防がれた。シオンはそれに対しても備えを置いていたのだ。その張っていた結界で防いだのである。
『またしてもか』
「さて、また私の読みが当たった」
シオンは忌々しげに言うエリスの声に応えていた。
「その様だな」
『しかし言った筈だ』

それでもだった。ここでエリスはまた自信に満ちた声で言ってきた。
『こうしてだ』
「こうして？」
『その結界を破ってみせよう』
何と無差別攻撃を浴びせてきたのだ。無数の赤い矢を放ってそれで結界を崩そうというのである。まさに絨毯爆撃だった。
「これは」
『さて、これならだ』
また自信に満ちた声で言ってきた。
『汝の結界もだ』
「破れるというのか」
『違うか？』
「いや」
嘘はつかなかった。しかし同時に冷静であった。
「それはその通り」
『ではこのまま我が攻撃を受けて死ぬがいい』
エリスの声はもう勝ち誇ったものになっていた。
『教皇を倒せれば大きい』
「しかしです」
ここでもであった。また言ってきたシオンだった。
「教皇というものは」
『またそれか』
「その通り。神の先の先を読んでこそ」
この言葉であった。
「教皇なのだから」
『左様か』
それを聞いたエリスは今度はかなり冷静であった。
『まだそう言えるのだな』
「如何にも」

『わかった』
そして納得した言葉で頷くのであった。
それからだった。また言うのだった。
『さすればだ』
「どうすると？今度は」
『その命預けておく』
引き下がるというのだった。
『今はだ』
「ここで下がるというのか」
『気が変わった』
今度はこう言ってきた。心変わりだというのである。
『聖域を滅ぼすのは今でなくともよい』
「それでは」
『アーレス様が戻られてからだ』
それからだというのである。

第九十二話　神の力その四

『全てはそれからでよい』
「だから今は下がると」
『左様』
また言ってきたエリスだった。
『その通りだ。それではだ』
「それでは」
応えはした。しかしまだ安心してはいなかった。何しろ相手は神である。一瞬でも気を抜けばどうなるかわかったものではなかったからだ。
「また御会いしよう、復讐の女神よ」
『教皇だったな』
エリスはシオンをこう呼んでみせた。
『聖域の』
「如何にも」
静かにこう返すシオンだった。
「名をシオンという」
『わかった。教皇よ』
シオンをこう呼ぶのだった。
『それではだ。また会おう』
「ではまた」
それに応えて言葉だけで頷くシオンだった。
エリスのまがまがしい小宇宙は消え去った。そうしてだった。
ケーレス達もまた。戦いを終わらせるのだった。
「ふむ」
「どうされたというのか」
「戦いたいのはやまやまだが」
こう対峙しているシャカに対して言ってきたのである。

「残念だがそうはいかなくなった」
「去るというのか」
「エリス様が撤退された」
そうしたというのである。
「ならばこれ以上戦ってもだ」
「意味はないというのか」
「貴様の命預けておく」
そして彼もこう言うのだった。
「また会おう」
「わかりました」
シャカもであった。今は積極的に闘おうとはしなかった。それでいいとするのだった。
そしてそのまま去る。残ったのはシャカだけだった。
二つの闘いが終わりであった。シオンとシャカはまた教皇の間にいた。そしてそのうえでこれからのことも話すのだった。
「戦いは終わったがだ」
「はい、しかしですね」
「そうだ」
まさにそうだと答えるシオンだった。
「どうやら現実味を帯びてきたな」
「アーレスの復活が」
「それが行われる」
シオンは言った。
「あの神がこの世に戻って来るのだ」
「そしてその時こそですね」
「来る」
まさにその時だというのだ。
「この聖域にだ」
「そのうえで激しい戦いになる」
「その時こそが決戦ですね」

「そうです。ですから」
さらに言っていく彼だった。
「これからはです」
「トラキアでの死闘になる」
「このシャカが思っていた通りのことに」
「なるな」
まさにそうなるというのだ。
「これからは」
「わかりました」
「してシャカよ」
シオンの言葉は続く。
「我等としては」
「我々としては」
「アーレスの復活は止められない」
シオンはそのことは既に諦めている感じだった。
「だが」
「だが？」
「この聖戦に勝つことはできる」
それはというのだ。

第九十二話　神の力その五

「戦いに勝つことはだ」
「それはできると」
「そうだ。アーレスが復活したならば」
その声が強いものになった。
「トラキアを攻めるぞ」
「このトラキアを」
「私も行く」
彼自身もだというのだ。
「そしてだ」
「そして？」
「御前達には全員出てもらう」
黄金聖闘士全員で、というのだ。
「わかったな」
「わかりました」
シャカはそれもいいと頷くのだった。
「それではその様に」
「わかった。それではだ」
「その時こそ」
「全てが決する」
シオンはまた断言した。
「わかったな」
「では今は」
「様子を見る」
そうするというのである。
「動くことはない」
「では他の者達にも」
「同じだ。あの者達が帰ったならばだ」

シオンの言葉は続く。
「私から直々に命じる」
「動くなとですね」
「それぞれの持ち場を離れることは許さん」
何があろうともというのである。
「無論シャカ、御前もだ」
「わかりました。ではその様に」
こうして彼等の次の動きは決まった。自然にだ。彼等は今は動かないことになった。
そしてトラキアでは。エリスが四柱神を前にして己の玉座にいた。
そのうえで話をしていた。
「どうじゃ、久し振りのこの宮殿は」
「はい、実にいいものです」
「落ち着きます、やはり」
彼等はエリスの前に立っていた。そのうえで述べるのだった。
「懐かしきこの宮殿は」
「アーレス様の御力を感じます故」
「そうじゃろう。アーレス様はじゃ」
そのアーレスの話もするのだった。
「間も無く戻られる」
「はい、それでは」
「その様に」
「我等が再び」
「まずそなた達がいる」
四柱神を見ての言葉である。
「そしてじゃ」
「はい、エリス様もおられます」
「我等とエリス様がおられればです」
「アーレス様を復活させられます」
「その通り。それではじゃ」

エリスの顔に笑みが宿った。この上なく凄みのある笑みを浮かべての言葉である。

「そなた達が暫し休んでからじゃ」

「それからですか」

「いよいよ」

「儀式を執り行う」

エリスは言った。

第九十二話　神の力その六

「わかったな。五人でじゃ」
「そしてその時こそ」
「アーレス様がこの世に戻られる」
「その時です」
「その通りじゃ。そしてアーレス様が戻られれば」
エリスの話は続く。
「その時こそじゃ」
「我等の世になります」
「戦いが全てを支配するその世に」
「永遠に戦い続ける世界に」
「まさに」
「そういうことじゃ。そういえば」
ここでエリスはあることに気付いた。その気付いたことを凄みのある笑みと共に語るのだった。
「あの者達の中に面白い者がおったのう」
「面白い者とは」
「それは一体」
「どの者でしょうか」
「バルゴじゃったな」
彼だというのである。
「バルゴの黄金聖闘士じゃったな」
「あの者ですか」
その名を聞いてであった。四人の中でケーレスがその眉をぴくりと動かしたのだった。
そのうえでだ。彼が言ってきたのである。
「何でも東の方の。仏ですか」
「あの者の名前にもなっておるな」

「はい、あの者の今の名前はです」
彼の今の名前だというのだ。
「確かシャカといいました」
「そうじゃったな。そのシャカじゃ」
「あの者が何か」
「あの者の世界の中で修羅界というのがあったのう」
エリスが話すのはこのことだった。
「確かそうじゃったな」
「そうですが」
ケーレスがエリスのその言葉に応えた。
「それが何か」
「我等の世界はまさにその修羅界じゃな」
それだというのである。
「永遠に戦い続け破壊と流血を続ける」
「そういえば確かに」
「そうですね」
「我等の世界は」
ここでケーレス達も気付いたのだった。
「まさにそれです」
「ならばそうです」
「我等は修羅であります」
「それならばそれでいいかと」
「面白い。修羅か」
エリスは目を細めさせてその言葉を受けていた。そうして言うのだった。

第九十二話　神の力その七

「さすればじゃ」
「その修羅の世界を作り出しましょう」
「我等の手で」
「是非共」
「そうする。それではじゃ」
また言うエリスであった。
「儀式の前は休むものとする」
「いえ、エリス様」
「休むのは性に合いませぬ故」
「ここはです」
ケーレス以外の三人がここで言うのだった。
「我等もまたです」
「行かせて頂いて宜しいでしょうか」
「戦いに」
「ふふふ、相変わらず勤勉な者達じゃ」
エリスはその三人の言葉を目を細めさせて受けるのだった。
「さすればその間にもじゃな」
「聖闘士達と戦ってきます」
「そうして宜しいでしょうか」
「よい。さすればじゃ」
エリスはケーレスを見てだった。こう告げたのである。
「ケーレス」
「はい」
「そなたは残っておれ」
そうしろというのである。
「わかったな。それでじゃ」
「畏まりました」

恭しく応えるケーレスだった。
「それでは私はここでトラキアの守護を」
「頼むぞ。わらわと八大公達もここに残る」
そうするというのである。
「よいな、それで」
「わかりました。それでは」
「四騎士も残す」
彼等もだという。
「あの者達もじゃ」
「では我等三人で」
「今から」
「二人は聖域に向かうのじゃ」
エリスはその行く先まで指し示した。
「そして一人は」
「残る一人は」
「五老峰じゃ」
そこだというのだ。
「そこに向かうのじゃ」
「そうですか、あそこに」
「ならば」
四闘神達はそれを聞いてだ。すぐに納得する顔で頷いたのだった。
「すぐにそちらにも」
「一人向かい」
「そして二人は」
「聖域じゃ」
そこには二人だと。また告げた。
「そこに向かうのじゃ」
「はい、それでは」
「その様に」
「黄金聖闘士達は手強い」

このことはエリスもよく認識していた。どれだけ強いのかもだ。
そしてそれだけあって慎重かつ徹底した手を打っておくことにしたのである。
「だからこそじゃ」
「それでは」
「我等もまた」
「その様に」
「数を減らしておくに限る」
これこそがエリスの考えだった。
「アーレス様の御帰還までにだ」
「畏まりました」
「アーレス様の為に」
彼等もまた頷きそのうえでエリスの命に従うのだった。戦いはここであらたな局面を迎えていた。今度は神が攻めるのであった。

第九十二話　　完

２０１０・２・６

第九十三話　襲撃者その一

襲撃者

聖域にサガ達が戻って来た。そしてシオンからことの一部始終を報告した。そしてそれと共に聖域で起こったことも聞いたのであった。

聞くのは教皇の間であった。そこで話を聞くとであった。

まず口を開いたのはムウであった。

「何と、この聖域にですか」

「そうだ」

シオンは彼に対して静かに述べた。

「攻めて来たのだ」

「しかもこの十二宮にですか」

「やはり神だけはあると言うべきでしょうか」

ミロも深刻な顔で述べた。

「十二宮に攻め寄せて来るとは」

「この十二宮はだ」

シオンは今度はミロの言葉に応えて言った。

「確かに相当な結界を張ってある」

「我等黄金聖闘士もまた」

「その結界になっている」

「しかしだ」

ここでシオンはさらに言うのだった。

「神ともなるとその結界を破ることも可能だ」

「それだけの力があるからだってやつですね」

デスマスクはいつもの軽い調子だったがその顔は苦々しげなものだった。

「それはまたお偉いことで」

「デスマスク、それはまたえらくシニカルだな」

カミュがその彼に言った。
「それだけ腹が立っているのか？」
「俺はな。自分以外に威張った奴が嫌いなんだよ」
こうカミュに返す。その苦々しげな顔は変わってはいない。
「例え神様だろうが何でもな」
「だからだというのか」
「そうさ。そういう奴は見ても聞いても頭にくるぜ」
実に彼らしい言葉であった。
「四柱、復讐の女神エリスを入れて五柱だったな」
「そうだ」
「なら全員倒してやるぜ」
カミュに対して言葉を返す。
「全員だ。このデスマスクが相手をしてやるぜ」
「いや、御前はそういう訳にもいくまい」
カミュはそのデスマスクにこう返した。
「御前はあのベルゼブブを倒さなくてはならない筈だ」
「だからな、あいつだけじゃなくて他の奴等も全員俺が倒すっていうんだよ」
これがデスマスクの言いたいことだった。彼はあえてこう言ってみせたのである。
「どいつもこいつもな」
「言うものだ。全て自分で背負い込むこともあるまい」
「へっ、俺はそんな殊勝な奴じゃねえよ」
自分ではこう言う。
「ただ戦いたいから戦う、それだけさ」
「そうだといいうのだがな」
デスマスクの本心はわかっていたのでカミュも今は静かに受け流した。だが彼は同時にこうしたことも言うのだった。
「それは私も同じだがな」
「おいおい、御前もかよ」

「私もまたできるならあの五柱の神は全て倒しておきたい」
カミュの言葉が剣になった。それはまさに氷の剣であった。
「この私の手でな」
「そういう御前はベリアルの奴が相手だろ」
「無論あの男も倒す」
デスマスクと殆ど同じことを言うのだった。
「そのうえでだ」
「あいつも倒すってのかよ」
「そういうことだ。私もまた同じだ」
「あの四闘神、尋常な小宇宙ではなかった」
「確かにな」
今度はシュラとアルデバランが話す。
「まさに神に相応しい小宇宙だった」
「だからこそか。聖域の結界を破れたのか」
「となるとだ」
「これからどうするべきかだ」
アルデバランの顔が考えるものになっていた。彼は決して浅慮ではなかtった。むしろかなり思慮深い性格であることがここで出ていた。
「我等としてはだ」
「攻めるか、それとも」
「守るかだ」
アルデバランはこうシュラに告げた。

第九十三話　襲撃者その二

「そのどちらかだ」
「攻めるとするならば」
シュラはあえてその攻める場合について考えて述べた。
「トラキアを一気に攻める」
「そうだ。そしてアーレスの復活より前にあの五柱神全てを倒す」
これが目的だった。どちらにしろアーレスに仕える神々は全て倒さなくてはならない、それが彼等の勝利への絶対条件であった。
「そうすべきだが」
「必ず全員倒さなくてはならない」
「しかしだ」
ここでアルデバランは言うのだ。
「我等はまだあの神々のことをよくは知らない」
「それか」
「先のアーレスとの聖戦においてもだ」
「あの神々はどうだったのだ」
「それについては後で見せよう」
ここでシオンが教皇の玉座から告げてきた。
「聖域の図書館の奥に先の戦皇アーレスとの聖戦についての文献が見つかった」
「それがなのですか」
「見つかったのですか」
「そうだ」
その通りだと答えるのだった。
「後でそれを見るのだ」
「わかりました」
「それでは」
「しかし。ここでそうした文献が出てくるとはだ」

「これも運命でしょうか」
今度はアイオリアとアフロディーテが話す。
「そうだな。これまであの神々についてはよくわからなかったが」
「それがわかるというのですから」
「ただしだ」
アイオリアの目が鋭いものになった。
「あの神々は少なくともだ」
「人のそれを遥かに凌駕する強さを持っています」
「その通りだ」
今度はアフロディーテの言葉に応えた。
「その強さは間違いなく尋常なものではない」
「八大公だけではなくなりました」
「八大公もかなりの強さだ」
「そうです」
彼等のことも当然念頭にあった。
「彼等の存在もあります」
「どうするべきかだな」
アイオリアも何時になく険しい顔になっている。
「一体」
「そうですね」
「それについてはだ」
ここでまたシオンが彼等に告げてきた。
「まず今八大公と対峙している者達はだ」
「はい」
「我々ですか」
「そうですね」
「そうだ、御前達だ」
ムウをはじめとする八人に対しての言葉であった。
「御前達はそのまま八大公の相手に専念するのだ」
「ですがそれでは」

「四闘神やエリスは」
「一体どうするのですか？」
彼等は怪訝な顔になってそのことを問うた。
「彼等の存在が今最大の脅威です」
「それについては」
「案ずることはない」
シオンは彼等にまた述べた。今度は落ち着かせる声だった。
「全てはだ」
「案ずることはないと」
「といいますと」
「まず四闘神だ」
まずは彼等についてから話すのだった。

第九十三話　襲撃者その三

「アイオロス」
「はい」
「サガ」
「はい」
「シャカ」
「はい」
この三人に声をかけたのである。
「御前達三人がまずそれぞれ相手をするのだ」
「わかりました」
「それでは」
三人も彼のその言葉に対して頷いたのだった。
「お任せ下さい」
「必ずや」
「頼んだぞ」
「お待ち下さい」
ここでミロがシオンに対して言ってきた。
「一人一人で神に向かうというのですね」
「その通りだ」
まさにそうだとミロに対しても述べた。その言葉は断言そのものであり有無を言わせないものだった。その言葉で彼に告げたのである。
「この者達ならばだ」
「しかしです」
「はい、そうです」
「三人ですが」
デスマスクにシュラ、アフロディーテが怪訝な顔で述べてきた。
「後の一人はどうされるのですか？」

「相手は四柱です」
「最後の一柱は」
「それについても案ずることはない」
彼等についても断言して述べるシオンであった。
「何もだ」
「といいますと」
「一体」
今度はアルデバランとカミュがシオンに言ってきた。
「最後の一柱は」
「どうされるのでしょうか」
「その一柱は自ら動いてくる」
こう述べるシオンであった。
「だからだ。案ずることはないのだ」
「それは一体」
「どういうことでしょうか」
「自らとは」
「やがてわかる」
今はこう彼等に答えるだけのシオンだった。
「やがてだ」
「左様ですか」
「それでは今は」
「考えることはないと」
「その通りだ。わかったな」
そうしてであった。シオンはその言葉をさらに続けるのだった。
今度は。
「そしてエリスだが」
「はい、あの神については」
「どうされるのでしょうか」
「我等全員で向かうのでしょうか」
「いや、あの神にはだ」

シオンは言う。そのこともだ。
「このシオンが闘う」
「えっ！？」
「まさか」
「教皇がですか」
「それは」
「何を驚く必要がある」
今の言葉に驚きを隠せない彼等とは正反対にだ。あくまで冷静なシオンであった。その違いはまさに炎と氷であった。

第九十三話　襲撃者その四

「教皇もアテナの僕」
「ですがそれでも」
「教皇が前線に立たれるというのは」
「そうです」
これが彼等の論理だった。彼等にしては教皇であるシオン自らが前線に立つなどということは全く考えられないことであったのだ。
それで口々に言う。しかしシオンはそれでも言うのであった。
「私もまた黄金聖闘士だった」
「はい、それは存じております」
「無論です」
これについてはだった。彼等もよく知っていた。教皇は黄金聖闘士の中から最も優れた者が選ばれる、それは聖域の絶対の掟であるからだ。
しかしそれでもであった。彼等は今のシオンの言葉に驚きを隠せずさらに言うのである。
「ですがそれでも」
「それをされては」
「前線に立たれるのは」
「先の教皇もこれまでの教皇も」
そのシオンの言葉は続く。
「全ていざという時には自ら前線に立たれた」
「だからなのですか」
「それで」
「そうだ」
言葉はここでも断言であった。
「わかったな。それではだ」
「エリスの相手をですか」

「教皇御自身で」
「あの女神の相手は私がする」
シオンも引くところはなかった。
「これでよいな」
「そこまで言われるのですか」
「そしてあの女神を」
「私もまたアテナの僕」
このことも言ったのである。
「ならば必要とあれば自ら闘う。それだけのことだ」
「わかりました」
「それでは」
「そしてだ」
シオンの言葉はさらに続く。
「当面の方針だが」
「はい、それは」
「どうされるのですか？」
「トラキアへの出陣でしょうか」
「それとも」
一斉に問う黄金聖闘士達にだ。こう答えるのだった。
「ここに留まる」
「聖域にですか」
「今は」
「そうだ、今はここに留まる」
あらためて彼等に告げた。
「わかったな」
「左様ですか」
「それでは」
「今は出陣することはない」
言葉が繰り返される。
「いいな。各自それぞれの宮の守護に就け」

「それでは」
「我等は」
「また敵が来る」
シオンは既に読んでもいた。トラキアのその動きをだ。
「それに備えておくのだ」
「畏まりました」
こうして当面の方針も決まった。こうして黄金聖闘士達はシオンの前から下がるとそれぞれの宮の守護に就いた。その次の日であった。
十二宮白羊宮の前、まさに十二宮の入り口にだ。恐ろしいまでの小宇宙が二つあがったのだった。
「!?これは」
「この凄まじい小宇宙は」
「間違いない!」
黄金聖闘士達はすぐにその小宇宙の主が何者なのかを察した。

第九十三話　襲撃者その五

「来たか」
「四闘神！」
「ここでか！」
「ふふふ、これが今の十二宮か」
「あの時とは随分と変わっているな」
「そうだな」
その二柱の神々はだ。ここで話すのだった。
「懐かしいものも残っているがだ」
「やはり変わったな」
「思えばだ」
いるのはデイモスとポポスだった。彼等が話していた。
「あの聖戦からどれだけ経ったか」
「さて、どれだけだったかな」
ポポスはわざととぼけたようにしてデイモスに言葉を返した。
「そんなことは忘れてしまった」
「ふふふ、そうか」
「そういう貴様はどうなのだ？」
「私もだ」
デイモスもまたポポスと同じ笑みを浮かべて言うのだった。
「そんな昔のことはな」
「そういうことだな。それではだな」
「うむ、誰が出て来るかだな」
「全員でもいいが」
ここで二人は不敵な笑みを浮かべた。
「さて、果たしてだ」
「どれだけ出て来るか」
「何人でもいいがな」

「生憎だが」
「二人だ」
こう言ってだ。小石を踏む音と共に彼等が出て来た。二人である。
「我々が相手をする」
「これで異存はあるか」
「ほう、そうか」
「御前達二人か」
デイモスとポポスはその彼等の姿を認めても述べた。
「御前達が我々の相手をするのか」
「二人ということはだ」
「そうだ。それぞれ一対一だ」
「それは言っておく」
サガとアイオロスだった。その彼等が二柱の神の前に出たのである。
「それで相手をする」
「それでいいな」
「我等としては構わない」
「それはだ」
これが彼等の返答であった。
「神に対して一人で向かうその度胸」
「それは認めよう」
「そう言うのか」
「そうだ」
デイモスがサガの言葉に応えた。
「しかしだ」
「我々では勝てはしないと言うつもりか」
「その通りだ。人は神には勝てない」
やはり出した言葉はこれだった。
「何があろうともだ」
「確かに神殿では遅れを取った」

アイオロスもそれは認めた。
「だが聖闘士は二度は遅れは取りはしない」
「二度はか」
「それは言っておく」
言いながらデイモスに対して身構えるのだった。
そのうえでだ。彼はまた言った。
「では。デイモスよ」
「サジタリアスだったな」
「如何にも」
今度の返答は短いものだった。
「私はサジタリアスのアイオロス」
「そうだったな。今聖域にいる黄金聖闘士の中でとりわけ強い者の一人だったな」
「それがどうかしたのか」
「我等アーレス様にお仕えする者はだ」
ここでもこうした言葉が出た。

第九十三話　襲撃者その六

「強い者と闘い」
「闘いか」
「そして勝つことを無常の喜びとする」
その彼等の喜びを語ってみせたのである。
「それこそがだ」
「そうだというのだな」
「その通りだ。確かに貴様は人だ」
それはどうしても変わらないものだった。アイオロスが人であることはそのまま彼の誇りでもある。変えようのないものであった。
「だがそれでもだ」
「強ければばか」
「そうだ。闘う面白みがある」
そう言って笑いながら彼もまた構えを取るのであった。
「それは言っておく」
「それではか」
「闘うとしよう」
双方共ここで構えを取った。
「それでいいな」
「ここは通しはしない」
アイオロスはこの言葉も出した。
「決してだ」
「そうか。何があろうともか」
「十二宮には敵は誰も入ることはできない」
彼もまた己の言葉に絶対のものを宿らせてきていた。
「例え何があろうともだ」
「それをこじ開けて通るのが我等だ」
しかしデイモスも言う。

「それは言っておく」
「そうか、ならばだ」
「行くぞ」
彼等の闘いがはじまった。そしてサガとポポスもだ。
「ジェミニだったな」
「その通りだ」
サガはポポスのその問いに頷いてみせた。
「私はジェミニのサガ」
「黄金聖闘士でも最強の一人」
ポポスもまたあえて言ってみせたのだった。
「そうだったな」
「そう思いたいのなら思っておくといい」
サガはここではこう言うに留めたのだった。
「それでだ」
「ではこう言わせてもらう」
そしてポポスもこう返したのだった。
「それでいいというのならな」
「それではだ」
「神の力を見せてやる」
彼もまた神であることに絶対の誇りを持っていた。それは隠してはいなかったし隠そうとしても隠せるものではなかった。そうしたものだった。
そしてその誇りと共にだ。彼は言うのである。
「その力で貴様を倒す」
「それではだ」
「退かぬというのだな」
「聖闘士に背を向けるという言葉はない」
こう言って実際に背を向けようとはしないサガだった。
「例え相手が誰であろうとだ」
「それは言っておく」

「そしてだ」
「闘うのだな」
「我等と」
デイモスもポポスも自信に満ちた笑みと共に話してみせてきた。
「ならばよし」
「その意気に応えてだ」
「相手をしてやろう」
「来い」
こうしてであった。闘いがはじまろうとしていた。それを他の黄金聖闘士達はそれぞれの宮で映像を映し出して見ていた。彼等の小宇宙によってだ。

2013

第九十三話　襲撃者その七

「はじまったな」
「はい」
シュラに対してアフロディーテが答える。
「いよいよですね」
「そうだな。しかしだ」
ここでシュラはさらに言うのだった。
「この小宇宙はだ」
「あの神殿の時よりもさらにですね」
「大きくなっている」
こう言うのだ。言葉はテレパシーである。セブンセンシズがそうした力も彼等にもたらしているのだ。その圧倒的な小宇宙によってである。そうさせているのだ。
「今以上に」
「まさに神です」
「へっ、何か見ているだけで忌々しいぜ」
デスマスクはその映像を見ながら目を怒らせていた。
「何かよ、ああした連中を見ているとな」
「デスマスクよ」
その彼にアルデバランが声をかけてきた。そして問うのだった。
「御前は力こそ正義ではなかったのか？」
「ああ、そうだぜ」
この考えは彼自身も認めることだった。
「結局力がないとどうにもならないだろ」
「その通りだ」
「全くもってです」
シュラとアフロディーテも彼のその考えに賛同した。
「それはだ」

「真実です」
「それはどうかと思うがな」
アルデバランは彼等三人とはまた違う考えでありそれについても言いたかった。しかし今はそのことにはあえて言わずこう言ってみせたのである。
「だが」
「それで何だってんだよ」
「アーレスの考えには賛同しないのだな」
「あの血生臭い野郎にかよ」
「そうだ。アーレスとその僕達の考えもまた力だ」
それは言うまでもなかった。アーレスといえばまず力を尊ぶ。そしてそれによって絶対的なまでに人を治め永遠に戦いと破壊、そして流血の世界を築き上げる。これこそが彼の理想とする世界なのだ。
しかしである。デスマスクはそのアーレスの僕達にはっきりとした嫌悪を見せていた。アルデバランはその考えに対して言うのである。
「しかしそれにはだ」
「俺はな」
デスマスクはアルデバランのその問いに対して答えるのだった。
「確かに力こそ絶対の正義だって思ってるさ」
「うむ」
「けれどな。傲慢な神様ってのは嫌いなんだよ」
ここでこんなことを言ったのである。
「アーレスの野郎にしろあそこにいる神様連中もな」
「嫌いか」
「アテナがそんなこと言われるか？」
そしてこうも問うのだった。
「言われないだろ。絶対にな」
「その通りだ。アテナはそうしたことは言われぬ」
「そういうことさ。あの連中は人間を完全に見下してやがる」

嫌になるまでにわかることだった。
「そういう相手にはな」
「賛同しないというのだな」
「俺は人間なんだよ」
デスマスクは人間という言葉も出した。
「その人間として戦ってるんだ。誰がアーレスの奴隷になるかよ」
「その通りだな」
カミュもここで言うのだった。

2016

第九十三話　襲撃者その八

「アーレスもあの神々も我等人間を手駒、奴隷としか見てはいない」
「その通りですね」
ムウが彼のその言葉に頷いた。
「それはよくわかります」
「アテナは我々人間を認めて下さっている」
「人は人だと」
「そこが違う」
こう言うのである。
「全くだ」
「はい、それでは我々は」
「アテナの聖闘士として、人間として」
カミュもまたこうした考えであった。
「戦うまでだ」
「そしてあの二人もか」
「そういうことだな」
アイオリアはミロの言葉に応えた。
「今から」
「闘うのだな」
「御前達は何があっても動くな」
闘いはシオンも見ていた。そのうえで今聖域に集結しているその黄金聖闘士に対して告げた。何があろうともといってであった。
「わかったな」
「はい」
「わかっております」
そして彼等もシオンのその言葉に頷くのだった。
「若しあの二柱の神々がここに来ても」
「それでもです」

「我々は」
「それぞれの宮に留まれ」
具体的な言葉だった。
「そして敵が来たその時にだ」
「そうさせてもらいます」
「その時にこそ」
「それではだ」
また言うシオンだった。
「この闘いを見ておくのだ」
今遂にであった。それぞれの拳と拳がぶつかり合った。
凄まじいばかりの小宇宙がそれぞれ沸き起こりであった。黄金と赤の二つの光が乱れ飛ぶ。
その中で四人の闘いが行われていた。まずは凄まじい拳の応酬であった。
「来たか」
「それならばだ！」
デイモスとポポスがそれぞれ言う。
「我等としてもだ」
「その力を出そう」
「例え何があろうとも」
「我等は負けぬ」
サガとアイオロスは二人並んで言った。
「この拳にかけて！」
「ここは通さん！」
「よし、ならばだ！」
「我等はだ！」
両者のこぶしが激突する。聖域での戦いは今最も熾烈な一幕を開けようとしていた。そしてそれは聖域だけではなかったのである。

第九十三話　完

2010・2・10

第九十四話　最強の聖闘士その一

最強の聖闘士

五老峰。そこにもであった。

赤く禍々しい小宇宙が出て来た。そのうえで老人に対して問うてきたのである。

「私が誰かはわかるな」

「うむ」

小柄な老人であった。彼は流れ落ちる滝を背に岩場の先にうずくまる様にして座っている。その彼が男の問いに静かに答えるのだった。

「混乱の神キュドイモス」

「その通りだ」

まさにそうだと。老人に名乗るだった。

そうしてそのうえでだ。その混乱の神キュドイモスは老人に対して問うのだった。

「そしてだが」

「次は何なのじゃ？」

「私がここに来た理由もまたわかるな」

「闘いじゃな」

「それもまたわかるのだな」

「それだけ禍々しい小宇宙を出していてじゃ」

老人が言うのはキュドイモスのその小宇宙だった。それは八大公のそれすらも遥かに凌駕するとてつもなく禍々しいものであった。

そしてその小宇宙を見てだ。老人も言ったのである。

「わからぬ筈もない」

「言われてみればその通りだな」

「そうか。闘いか」

「貴様を倒し封印を解く」

キュドイモスは老人を見据えて告げた。
「そしてそのうえでだ。あの方もこの世界において頂くのだ」
「アーレスだけではなくか」
「アーレス様は言うまでもない」
彼等の主についてはというのだ。彼の復活については彼等は当然のことと考えていた。そしてそれを隠すことすらしなかったのである。
「当然この世界においで頂く」
「アーレスだけで満足はできぬか」
「我等はあの方には神話の頃よりよくして頂いた」
話が遡った。遥かな神話の時代にである。
「そういうことだ。わかったな」
「ふむ。ではどうしてもじゃというのだな」
「無論貴様がそう簡単にここを退くとは思っていない」
それはキュドイモスもわかっていた。すべて読んでいるのである。
「その為にもここにいるのだからな」
「左様、わしはここを退きはせぬ」
それは老人自身も述べた。
「何があろうともな」
「先のあの方との聖戦の生き残り」
キュドイモスの言葉がさらに強いものになる。そしてその声で老人に対して言うのであった。その言った言葉とは。
「ライブラの童虎よ」
「名を呼ばれたのも暫く振りじゃな」
「戯言を。貴様を知らぬ者はない」
その童虎を見据えての言葉だった。
「誰一人としてな」
「誰一人としてか」
「そうだ、貴様がここにいることもだ」
それについてもだというのである。

「誰もが知っている。トラキアにおいてもだ」
「そして四闘神自ら来るとはのう」
「黄金聖闘士の中でも最強の力を持つ男」
そここそが童虎だというのである。彼の目の前の老人だというのである。
「今ここで倒させてもらう」
「ふむ」
童虎はその言葉を聞いてだ。まずは一言出した。
そしてそのうえでだ。こう返してきたのである。
「わしにあの聖衣を着よというのじゃな」
「そうだ。早く着るがいい」
実際に彼にこう告げたキュドイモスだった。
「それまでの時間は与える。そのうえで闘うとしよう」
「さもなければ闘うつもりはないか」
「狂闘士は闘いのうちに悦びを見出す」
それこそが彼等なのだった。闘いこそが全てなのだ。
「だからこそだ。弱い相手なぞ何の眼中にもない」
「その言葉はわかった」
キュドイモスの言葉は受けたのだった。
「よくな。わかった」
「では早く着るがいい」
「しかしその前にじゃ」
「むっ！？」
「共に向かおうぞ」
キュドイモスに対して不意にこんなことを言ってきたのである。

第九十四話　最強の聖闘士その二

「共にじゃ。あの場所にじゃ」
「あの場所だと？」
「デスマスクやシャカ、それにサガはわし等の世界とは違う世界を行き来することができる」
彼等独自の技によってである。
「そしてじゃ」
「貴様もだというのか」
「いや、そうではない」
それは違うというのだった。
「わしはそうした技を持ってはおらぬ」
「では何処に行くというのだ？」
「記憶の中にじゃ」
その中にだというのである。
「その中にじゃ。行くとしよう」
「記憶の中か」
「以前にもおぬしには会っておるな」
童虎は神に対して問うた。
「そうじゃな」
「ふん、そのことも覚えているのだな」
「少しはな」
そうだというのだった。
「覚えておる」
「私はあの時も貴様と闘った」
キュドイモスから童虎に対して述べた。
「それも覚えているな」
「うむ。そして今もこうしてじゃな」
「あの時貴様は武器を解き放った」

キュドイモスの目が光った。
「貴様のその武器をだ」
「そうじゃったな。それにより我等は勝利を収めた」
「今もか」
また童虎に問うのであった。
「この聖戦もそうするつもりか」
「そうじゃといえばどうするつもりなのじゃ？」
「今度は遅れを取らん」
これがキュドイモスの返答だった。口元には不敵な笑みが浮かんでいる。
「決してだ」
「今度はなのじゃな」
「そうだ。ライブラよ」
あらためて童虎に対して告げてきた。
「ここで貴様のその武器も封じてくれよう」
「さすればじゃ」
彼もまた神の言葉に応えてだ。言うのであった。
「過去の世界へ行こうぞ」
「我等がかつて闘ったあの時代にか」
「そうじゃ。そこにじゃ」
「面白い」
キュドイモスの言葉はここでも自信そのものであった。
「ではその時代においてだ」
「わしと闘うというのだな」
「無論。そして貴様を倒す」
「さて」6
その童虎とキュドイモスが出て来た場所はだ。荒野だった。そこでダークブラウンの短い髪の精悍な若者とキュドイモスが闘っているのが見えてきた。
その男はライブラの聖衣を着ている。そのうえで彼と対峙してい

るのだった。
キュドイモスはそれを見てだ。まずはこう言ってみせた。
「懐かしいな」
「そう言えるのじゃな」
「この時のことはよく覚えている」
そしてこんなことも言ってみせたのである。
「しかしそれがどうかしたのか」
「どうかしたか、か」
「そうだ。どうかしたのか」
そうは言ってもである。その目には明らかに不機嫌なものが宿っていた。そしてそれは隠せるものではなかった。はっきりと浮き出ていたのだ。
「私とこの時の貴様との闘いのことがだ」
「わしも覚えておる」
「セブンセンシズは東洋の思想で言う悟りでもある」
キュドイモスはそれについてこう表現してみせた。

2025

第九十四話　最強の聖闘士その三

「悟りを得れば様々なことがわかるというがな」
「そして力もじゃな」
「こうして過去の世界に行くこともだな」
「そうじゃな。しかしじゃ」
「我等はこの世界にいるがいないとも言える」
キュドイモスの言葉が謎めいたものになった。
「そうだな」
「左様。この世界に干渉はできん」
童虎もそれはできないというのだ。
「しかしじゃ」
「ここで闘うことはできる」
「我等だけはな」
「それではだ」
キュドイモスの言葉に剣が宿った。
「ライブラの聖衣を身に着けるのだ」
「今のわしはそれはできん」
「何っ！？」
「わしの身体が着けることはできん」
それはできないというのである。
「それはじゃ」
「ふむ。実体ではか」
キュドイモスは彼のその言葉を受けても冷静だった。そして静かにこう述べたのである。そうしてそのうえでまた言うのであった。
「ならばだ」
「それでよいというのじゃな」
「本来ならば実体でなければ完全な実力は出せない」
それは無理だというのだ。

「だが。ライブラよ」
「うむ」
「貴様程の力の持ち主ならばだ」
その童虎を見据えてまた言ってみせたのである。
「それも可能だ」
「実体でなくとも本来の力を出すことが」
「そうだ。可能だな」
再度彼に対して問うたのだった。
「貴様ならばだ」
「確かに」
そして童虎は偽らなかった。ありのまま答えてみせたのだ。
「それはできる」
「ならば問題はない。来るのだ」
「ではじゃ」
こうしてライブラの聖衣が現われた。それが突如出てきた影の身体を覆ってである。そのうえで姿を現わしてみせてきたのである。
その男を前にしてだ。キュドイモスは満足した顔で笑ってみせた。次にはだ。左手を爪を立てる獣のそれのようにして前に出して構えてである。右手を引いて言うのだった。
「ではだ」
「うむ。行くぞ」
「受けるがいい」
キュドイモスの方からだった。仕掛けてきたのは。
「我が拳」
「来たか」
「クリムゾンファング！」
言葉と共に技を繰り出してきた。その左手を上から下に大きく一閃させる。するとそこから五つの赤い光が発して。影の男に襲い掛かったのである。
「これが貴様に避けられるか！」

「ならばじゃ」
童虎が言った。影の男に代わって。
その言葉と共にであった。不意に影が動いたのだ。
「むっ！？」
「我が技」
影は彼の言葉に合わせるように動いてきた。そして右手を下から上に大きくやり。
「廬山昇龍覇！」
その言葉と共に龍を放った。それはまさに神龍だった。
そしてその龍でキュドイモスのその爪の刃を打つのだった。
爪と龍が激突してだ。残ったものは。
「何と・・・・・・」
「くっ、流石は神じゃ」
二人は同時に声をあげた。
「我が技をそれで消すとは」
「ここにまで衝撃が来たか。恐ろしい力じゃ」
「見事だと言っておこう」
キュドイモスは技を消されても何とか落ち着きを取り戻して言うのだった。

第九十四話　最強の聖闘士その四

「私の技を相殺したことはだ」
「いや、相殺ではない」
だが童虎はそうではないというのだった。
「このわしにまで衝撃が来た」
「それはこちらも同じこと」
今度はにこりともせずその小柄な老人に言葉を返した。
「影であってもそれは貴様そのもの」
「左様。わしの影はまさにわし自身」
それは彼そのものだというのだ。今闘っているその影の男はだ。
「この影が敗れればわしも倒れる」
「そしてその力も貴様自身のものだ」
キュドイモスはこうも言ってみせた。
「だからこそ。今私の攻撃を相殺したのもだ」
「どうじゃというのじゃ？」
「貴様の力そのものだ」
まさにそうだというのだ。
「ライブラ、貴様のな」
「ふむ、左様か」
「流石は先のハーデス様との聖戦の生き残りだ」
またこのことを彼に告げるのだった。
「私の技を打ち消すことができる人間がいるとは」
「しかし」
「何だ、今度は」
「その技が全てでないことはわかっておる」
童虎は今度はこう言った。
「既にな」
「そうだな。思えばだ」

ここで左手を見た。そこではキュドイモスとかつての童虎が闘っている。その時は名前が違えどそれは確かに彼であった。二人の戦いだった。
「その通りだな」
「あの闘いだけではない」
童虎はさらに話すのだった。
「わし等はこの聖戦の時にも何度も拳を交えている」
「だからこそわかるのだな」
「左様、記憶はある」
「では、だ」
「その技を次には出すのだな」
「聖闘士には同じ技は通用しない」
キュドイモスの言葉である。聖闘士である童虎の言葉ではなかった。
「そうだったな」
「その通り。そしてそれは」
「我等も同じだ」
それは彼等もだというのだ。キュドイモスに限定した言葉ではなかった。
「我等もまた一度見た技は忘れはしない」
「左様か」
「それではだ」
拳を構える。そうしてであった。
「このキュドイモスの拳を再び受けてみせよう」
「来るというのじゃな」
「このキュドイモスは混乱の神」
その混乱という言葉も出すのだった。
「混乱を見せてくれよう」
「そうじゃな。それではじゃ」
「この技は今の貴様は見てはいない」

今の彼はというのだ。かつての彼ではないというのだ。
「そうだったな」
「如何にもな」
「先程の技にしてもだ」
その昇龍覇である。
「あの時とは違っていたな」
「ふむ。気付いていたのか」
「言った筈だ。我々にも一度見た技は通用しない」
「そうじゃったな。それは」
「あの技はかつてのあの技ではない」
今二人がいるその時代での昇龍覇だというのだ。
「それがよくわかった」
「では御主の今放つ技も」
「そうだ、この技で貴様を倒す」
今度は一旦両手を大きく上げてきた。そうしてであった。
「受けよ、コンフュージョンスクリーン！」
「むっ！？」
童虎は何もない空間に飛ばされた。そこにいたのは。
無数の亡霊達だった。顔だけの亡霊達が尾を引いて襲い掛かって来たのである。

第九十四話　最強の聖闘士その五

それが一つ、また一つと童虎にぶつかる。するとそれはすぐに童虎自身になった。それが一斉に彼を取り囲んできたのである。
「わし自身か」
「そうだ」
まさにそうだと。キュドイモスの声だけがした。
「貴様は貴様自身に倒されるのだ」
「わし自身にか」
「貴様は貴様を攻撃できるのか」
こう問うのである。童虎にだ。
「どうなのだ。それは」
「造作もないこと」
「何っ！？」
「確かにわしも己は大事だ」
それは認めたのだ。
「しかしだ」
「しかし？」
「わしは必要とあらばわしと闘うこともできる」
そうしてであった。再び構えを取る。そうして。
「ではだ。来るがいい」
「それは貴様自身への言葉だな」
「如何にも」
それはその通りだというのである。
「わしは闘う」
「では見せてもらおう」
キュドイモスはその言葉を受けた。だが姿を見せないのだった。
あくまで声だけだ。今は決して姿を見せなかった。声だけだった。
その声でだ。彼に告げていたのである。

「貴様のその闘う気構えをだ」
「では。今からだ」
そうして再び構えてだった。あの技を繰り出すのだった。
「廬山昇龍覇！」
その技で周りの自分自身を消し飛ばしたのである。その周りにいる彼等はそれで消えたのだった。完全に姿を消してしまったのだ。
そして世界も元に戻った。かつての彼等が闘うその世界にだ。戻ったのである。
「世界も元に戻ったか」
「そうか。それで破ったのか」
「世界まで元に戻すことができるとは思っておらんかった」
これは童虎にとっても予想外のことだったのである。
「それはじゃ」
「だが。それもまた流石だと言っておこう」
「ふむ。そうか」
「貴様のことはわかった」
こう言うとだった。童虎の前にいる彼はだ。右手を高々と掲げた。するとであった。
五老峰に戻ってきた。まさに一瞬であった。
「時代が戻ったか」
「貴様にできることは私にもできる」
「神だからじゃな」
「その通りだ。さて」
「ではここでも闘うのか」
「いや」
しかしであった。ここでキュドイモスは言うのだった。
「今回はこれで止めておこう」
「よいのか」
「充分楽しませてもらった」
余裕と共の言葉だった。

「だからいい」
「左様か」
「ライブラ、今の貴様はかつての貴様とはまた違う」
その楽しんでいることが浮かんでいる笑みだった。
「その様だな」
「ふむ。確かにあの時のわしは今とは違うな」
「それがわかったことも収穫だ。それではだ」
「またか」
「また会おう」
はっきりとした別れの言葉であった。
「そしてその時にはだ」
「決着をつけるというのか」
「私はアーレス様の為に闘う者」
あくまで己をアーレスの僕とするのである。
「その為にはどちらにしろ貴様を倒さなくてはならん」
「わしもじゃ。アーレスの世界はこの世にあってはならんもの」
その童虎が出した言葉は。
「修羅の世界はじゃ」
「修羅か。まさしくそうだな」
そう言われても動じないキュドイモスだった。それどころか笑ってさえいた。

第九十四話　最強の聖闘士その六

「我等はそれだ」
「その世界をこの世界に出すわけにはいかん」
「人にとってもそれが最もよい世界なのだがな」
「認識が違うのじゃな」
童虎は今述べたのはこのことだけだった。
「つまりは」
「それでいいのだな」
「そちらも考えをあらためることはあるまい」
「あらためる？何をだ」
冷笑で返すだけだった。童虎のその言葉にだ。
「何故あらためる必要があるのだ」
「まさにそういうことじゃ」
童虎はこうキュドイモスに返した。
「わしもまた考えは変わることはない」
「アテナの聖闘士としての考えはか」
「正義は一つ」
彼は言った。
「人の正義。アテナはそれを認めて下さっておるのじゃ」
「人に正義なぞない」
今二人の考えが決定的に出ていた。だがキュドイモスはそれを自覚してはいない。童虎はそれをはっきりと感じ取っていた。だが今は言葉には出してはいない。
「人は神に導かれるものだ」
「神にか」
「アーレス様にだ」
具体的にはそういうことであった。
「アーレス様にこそ導かれるものだ」

「人は考えなくともよいのじゃな」
「その通りだ」
また言った。自覚することなく。
「人は愚かなものだ。神はその愚かな者達を導く者なのだ」
「そう思うことそのことがじゃ」
「何だというのだ？」
「我等が永遠に闘う理由」
それだというのである。
「そういうことなのじゃよ」
「わからんな」
少なくとも彼にわかる話ではなかった。わかるつもりもなかった。
「神に導かれぬ人なぞ」
「アテナは人を見守って下さる」
「アテナは人に対して甘過ぎる」
ここでもだった。決定的な違いが出ていた。だがキュドイモスはそのことに何一つとして自覚することのないままだった。そのまま話を続けていくのだった。
「全く以ってな」
「甘いのではない」
童虎はそのことははっきりと否定した。
「アテナはだ」
「ではどうだというのだ？」
「わかって下さっているのじゃ」
「わかっているというのか」
「そう、人をじゃ」
まさに彼等をだというのである。
「わかって下さっている。人をじゃ」
「海皇ポセイドンも冥皇ハーデス様も」
ハーデスだけ敬称をつける。アーレスとハーデスの関係がここでも出ていた。

「人については同じだ」
「そして天のゼウスもじゃな」
「あの世界のことは我々はよくは知らない」
それはキュドイモスもよく知らないことだった。天界のことはだ。
「だが」
「だが、か」
「同じだ。その様な戯言を言っているのはアテナだけだ」
「戯言か」
「人は所詮は泥くれでしかない」
こうも言うのである。
「御前達人が泥ならば我等は光」
「光だというのか」
「そうだ、光だ」
絶対の断言であった。
「貴様等を導く光なのだ。絶対のな」
「曇りのない光か」
「神は過ちを犯すことはない」
その言葉は続く。無謬であることを確信している言葉はだ。
「アーレス様は特にだ」
「アテナもまた光」
童虎もそれは言う。
「しかしじゃ。優しい光じゃ」
「光は光ではないか」
「違う。じゃがそれは御主にはわからん」
こうキュドイモスに告げるのだった。
「何があろうともな」
「わかる必要もない。それではだ」
「帰るか」
「長い話だったがな」
踵を返しての言葉だった。

「これでトラキアに帰るとしよう」
「また会うことになるな」
「貴様を倒すのは私だ」
背中越しに彼に告げたのだった。振り向くことはない。
「あの時の聖戦から決まっていることだ」
「ではじゃ」
「また会おう」
最後の言葉だった。
「それまでその首は預けておく」
「うむ、またな」
別れは互いへの最後の言葉ではなかった。二人の闘いも一先終わっただけであった。しかしそれは次の闘いの前の休息に過ぎなかった。

第九十四話　　完

２０１０・２・１３

第九十五話　聖域の前でその一

聖域の前で

サガとアイオロス、デイモスとポポスの闘いは激しいものだった。
光の拳が激突する。そして互いに引かない。
「凄いものですね」
「そうだな」
ミロがムウの言葉に応えていた。
「流石という他はない」
「ミロ、今の言葉はだ」
アルデバランが今のミロの言葉に問うてきた。
「どちらへの言葉だ？」
「何？」
「今のはどちらへの言葉だ？」
再度問うてきたのだった。
「二人か？それとも」
「それは」
「どちらも、ですね」
口ごもるミロに代わってムウが答えたのだった。
「そうですね、ミロ」
「そうだな」
実は自分でも今の自分の言葉はどちらへのものかわかりかねていたのだ。言葉を出しておきながらではあったがそれでもなのだ。
「それはな」
「そうか。双方か」
「サガとアイオロスは今聖域にいる黄金聖闘士の中では最強です」
アフロディーテは二人の実力を素直に認めていた。
「私達よりもさらにです」
「そうだな。あの二人はまさにだ」

アフロディーテのその言葉にカミュが頷いた。
「我等の中でも随一だ」
「その二人だからこそ」
アフロディーテは己の上に映し出しているその映像を見上げながらまた言ってきた。その目は映像の中の闘いから離れることはない。
「あれだけで戦うことができているのです」
「その通りだ。だが」
ここでまた話すカミュだった。
「その彼等にしてもだ」
「まあ尋常な苦労じゃねえな」
「その通りです」
シャカはデスマスクの今の言葉に頷いた。二人は今の彼等のその小宇宙から目を離してはいなかった。離せなかったと言ってもいい。
「尋常なものではありません」
「聖域をぶっ壊せるな」
デスマスクはまた述べた。
「あの連中一人でな」
「その通りです。その彼等をそれぞれ相手にする」
シャカの言葉が続く。
「確かに尋常なものではありません」
「俺でもだ」
流石のデスマスクも今は余裕を見せられなかった。
「あのうちの一人を相手にするってなるとな」
「敗れるのですか？」
「奥の手を出すしかねえな」
こう言ったのである。
「一か八かだけれどな」
「あの技をですか」
「ああ、あの技だ」
真剣そのものの面持ちでシャカに話す。

「あの技を出す、そうでもないと勝てはしない」
「そうです。私もまた」
シャカもデスマスクのその言葉を聞いて述べた。
「最大の技を出さなければいけません」
「サガとアイオロスにしてもそうだろうな」
デスマスクは冷静にこう述べた。
「機を見てってやつだな」
「その通りだな」
「うむ、まさにだ」
アルデバランはアイオリアのその言葉に頷いた。
「そうなっていくだろう」
「しかしどうなのだ？」
アイオリアがここでまた話した。
「この凄まじい小宇宙は」
「あの二柱の神々からのものだな」
「そうだ、それだ」
まさにそれだというのだ。

第九十五話　聖域の前でその二

「これだけ恐ろしいものがあるとはな」
「これが神か」
アルデバランも言った。
「神の力だというのか」
「彼等でこの力だというのなら」
ムウがまた言ってきた。
「アーレスは」
「アーレスか」
「はい、そうです」
ムウに問われてもその名前に対して頷くのだった。
「彼はさらに上でしょう」
「その通りだ」
ここはシオンが言ってきたのである。
「戦皇アーレスがオリンポス十二神の一人」
「オリンポスの」
「その」
「そうだ、オリンポスのだ」
言うまでもなく天の神々の宮殿である。聖地と言ってもいい。
「そこにいる神々の一人だ」
「つまりアテナと同格」
「それですか」
「そして小宇宙も」
「圧倒的な小宇宙が」
「神の力は圧倒的だ」
シオンの言葉は続く。
「それはアーレスの下にいる彼等も同じだ」
「そういえば」

シャカが目を閉じたまま述べてきた。
「あのアーレスとの聖戦でライブラの武器が解放されたのは」
「!?まさかよ」
「あの四闘神が」
「その存在によって」
「そうです」
シャカはデスマスク、シュラ、アフロディーテの言葉に応えた。
「彼等に対する為です」
「八大公だけでなくあの神々に争いの女神エリスもいる」
アイオリアは闘いを見守りながら話す。闘いは恐ろしいまで激しさを見せていた。その中で延々と続いていたのである。
「だからこそアテナもライブラの武器をお許しになられたのか」
「しかしだ」
アルデバランがまた言ってきた。
「それはだ」
「老師は離れられないからな」
「あの五老峰から」
「何があろうとも」
またデスマスクにシュラ、アフロディーテが話した。
「ライブラの武器は無理だな」
「だとすれば一つしかない」
「私達の拳で倒すしか」
「その通りです」
また言ってきたシャカだった。
「そうするしかありません」
「そうだ。この聖戦ではライブラの武器は解放されない」
それは無理だと。シオンからも言ってきた。
「アテナがおられないからではない」
「といいますと」
「今ライブラの童虎もまた離れられないからだ」

「その五老峰からですね」
「だからだ」
まさにそれこそが理由だと。ムウにも話すのだった。
「わかったな。それでだ」
「わかりました」
「ですが教皇」
それを聞いてだ。シャカが言ってきたのである。
「あの聖戦は先の冥皇ハーデスのそれに匹敵する激しさだったと聞いています」
「歴史にはそうあるな」
「先の聖戦で残られたのは貴方と老師のみ」
それだけ激しい戦いだったことも非常によく知られている。何しろそのシオンこそがその聖戦での数少ない生き残りだからだ。それも当然のことだった。
「それだけの激しい戦いになると思いますが」
「しかしだ」
だが、であった。まだシオンは言うのだった。
「あの時とは違う」
「違うというのですか？」
「それは」
「今の御前達は違う」
そうだというのである。

第九十五話　聖域の前でその三

「だからだ。ライブラの武器を使わずともだ」
「勝てるというのですか」
「それは」
「そうだ、今の御前達に勝てる者達はいない」
そこまで言ってみせた。しかもそれは褒め言葉ではなかった。
「最早だ」
「では我々は」
「この拳で」
「戦うのだ」
まさにそうしろというのだ。
「わかったな」
「わかりました、教皇」
「それでは」
「頼んだぞ」
教皇としての言葉だった。
「それではだ」
「だからこそあの二人も」
「今そうして」
「闘っているのだ」
拳と拳が打ち合っている。彼等はその闘いを見守っていた。
サガの拳がぶつかった。だがポポスはそれを受けてみせたのだ。
「ふむ」
「拳で拳を受けたか」
「まさかここまでやるとはな」
ポポスはその拳で受けてみせたのである。そのこぶしと拳が打ち合うその中での言葉であった。不敵な笑みと共に出した言葉だった。
「黄金聖闘士、いやジェミニよ」

「むっ！？私のことか」
「如何にも」
楽しむ笑みと共の言葉だった。ポポスは。
「その通りだ」
「私がどうかしたというのか」
「さらに腕をあげたな」
「さらにだと？私と貴様が会ったのはだ」
「今だけではない」
ポポスの言葉と笑みが思わせぶりなものになってきていた。
「かつてもだ」
「かつて、か」
「そうだ。かつて」
話すのは過去のことだった。
「私と貴様は拳を交えたのだがな」
「どういうことだ、それは」
「何、貴様が覚えていないだけだ」
またしても楽しむ笑みを浮かべた彼だった。
「ただそれだけだ」
「それだけだというのか」
「その通りだ。貴様と私は前にも闘ったことがあるのだ」
「私が覚えていないのか」
それを聞いてもであった。サガにはわからない話だった。それはサガが人間であるからだった。人の記憶はどうしても限られてしまうものだからだ。
「しかしそれは」
「人はその一生でしかその記憶を保てないものだ」
「記憶は？」
「そうだ。我々神は永遠の記憶を持っていられる」
今度はまたしても自分達が神だということを話した。
「それもだ」

「記憶か」
「残念な話だ。人は前世の記憶を持っていることはできない」
「前世か」
ここでだった。サガはようやく話のある程度を理解したのだった。
それは。
「そうか。私は前世においても貴様と闘っていたのか」
「これでわかったな」
「わかった。私はあの時からアテナの聖闘士だった」
わかったのはまさにそのことだった。
「そして貴様と闘った」
「そういうことだ。もっとも」
「まだ何かあるのか」
「貴様の前世はそれだけではない」
その時に留まらないというのだ。
「貴様、いや貴様達はだ」
サガだけではないというのだ。
「常にだ」
「私だけではないのか」
「それは言っておく」
拳と拳が打ち合ったままで話がされていた。

第九十五話　聖域の前でその四

「そうした運命の下にあるのだ」
「我々の因果か」
「わかったな。何故私が腕をあげたと言ったか」
「よくわかった。それではだ」
「来るか」
「受けるのだ、我が技」
拳を離した。そうしてだった。
その拳を一旦後ろにやってだ。そうして。
前から一気に突き出してきた。その技は。
「ドゥームキャノン！」
「これがか！」
「そうだ、このポポスの技だ！」
まさにそれだというのだ。
「さあジェミニ、今の私の技を受けられるか！」
「くっ！」
その拳が一気に来た。サガはそれに対して。
両腕を胸の前でクロスさせた。それでポポスの技の衝撃を受けるのだった。
サガは吹き飛ばされた。衝撃は抑えきれなかった。
「何っ！？」
「サガがだと！？」
それは他の黄金聖闘士の面々をしても驚かさせられるものだった。
「まさか。吹き飛ばされたのか」
「あのサガが」
「いや、まだです」
だが。その中でシャカは冷静だった。
「サガはまだ倒れてはいません」

「倒れていない」
「だが」
「落ち着くのです」
シャカの今度の言葉はこれだった。
「ここは」
「落ち着けというのか」
「今は」
「そうです」
まさにその通りだというのだった。
「何があろうともです」
「そうですね」
最初にそれを取り戻したのはムウだった。
「ここは騒いでも仕方がありません」
「確かに」
そしてカミュもまた。
「今は落ち着くべきだな」
「おわかりになられればいいです。それでは」
また話すシャカだった。
「この闘いを見守りましょう」
「そうだな」
「それではだ」
こうして彼等は落ち着きを取り戻した。しかしその間にも闘いはまだ続いていたのだった。
サガは吹き飛ばされる。だが空中で。
「まだだ」
「まだだと！？」
「そうだ、まだだ」
こう言ってきたのである。
「流石に神の技だ」
サガはポポスの技を受けてはいたがまだ意識はあった。そして身

体も動いていた。例え吹き飛ばされてもそれでもであった。
「だが。こちらも意地がある」
「意地だと！？」
「そうだ、意地がある」
それがあるというのだった。
そうしてだ。空中で姿勢を変えてみせたのだった。
「何っ、空中でか」
「そうだ。そして」
空中で後方に身体を伸ばして宙返りしてだ。それからだった。
空中に立ち止まった。何と浮かんでいた。
「浮遊術」
「それを使ったか」
黄金聖闘士達はそれを見て述べた。

第九十五話　聖域の前でその五

「そして今度は」
「どうする？」
「ではだ。行くぞ」
また言うサガだった。今は空中に完全に立ち止まっている。
そしてそこから。あの技を出すのだった。
「受けるのだ、この技を」
「その技を使うか」
「如何にも。見るのだ！」
両手を再び交差させてそのうえで。その両手を高々と掲げて叫んだ。
「ギャラクシアンエクスプロージョン！」
その技でポポスを撃たんとする。
その技を見てだ。シオンは思わず唸った。
「見事だ」
「はい、確かに」
「これだけの小宇宙を出すとは」
黄金聖闘士達もサガのその技を見て言う。
「これだけの技なら」
「如何に神とて」
「倒せる筈」
「いや」
しかしであった。ここでシオンはそれを否定した。
そうしてだった。こう言うのだった。
「そう思うのは早計だ」
「なっ！？」
「銀河すら砕くといわれるあの技でも」
「神を倒せないというのですか」

「そうだ」
まさにそうだというのだった。
「まだだ。倒せはしない」
「しかし教皇」
「それでもです」
「これだけの小宇宙があれば」
「如何に彼等とても」
「見るのだ」
しかしシオンはまだ言うのだった。彼等に対して。
「あの神を」
「ポポスを」
「彼を」
「そうだ。見るのだ」
あくまでそのポポスを見るように言うのだった。
「今業を受ける彼をだ」
「まさか」
「これだけの技を受けても」
「それでもだと」
シオンの言葉とはいえにわかには信じられなかった。しかしだった。
ギャラクシアンエクスプロージョンのその攻撃を受けてもだった。ポポスは立っていた。それどころか傷一つ受けず涼しい顔さえしていた。
「馬鹿な、あの技を受けて」
「傷一つ受けていないだと!?」
「あのギャラクシアンエクスプロージョンを」
「ふむ。これが今のジェミニの技か」
そのポポスが余裕の笑みと共に言うのだった。
「成程な」
「私のギャラクシアンエクスプロージョンを受けても何ともないと

いうのか」
「そうだ」
返答は一言だった。
「言った筈だ。人に神を倒すことはできない」
「くっ・・・・・・」
「そしてだ」
神の言葉は続く。
「私の技はそれだけではない」
「今のドゥームキャノンだけではないのか」
「その通りだ。貴様が複数技を持っているのと同じ様に」
黄金聖闘士はそれぞれ複数の技を持ちそれにより戦うのだ。
「私もまた別の技を持っているのだ」
「それではだ」
ここでサガがポポスの前に降り立ってきた。
「その技をここで出すのだな」
「受けてみるか」
こうも言ってきたポポスだった。
「それではだ」
「見せてもらおう」
今はこう言うだけだった。

第九十五話　聖域の前でその六

「それならばだ」
「そうか、見たいのだな」
「来るのだ」
サガも毅然としていた。
「貴様の神としてのその技を」
「ならばだ」
ポポスは不敵な言葉と共に両手をゆっくりと動かしてきた。
そしてその横では。アイオロスとデイモスが激しい闘いを行っていた。
その中でだ。デイモスは言うのであった。
「私もまた」
「何だというのだ？」
アイオロスも攻撃を繰り出しながら彼に問う。
「アーレス様の為に戦う一人の戦士だ」
「神であってもか」
「神は神だ」
それは認めるのだった。
「だがそれと共に戦士でもあるのだ」
「そうなのか。そういう意味か」
「そしてだ」
神の言葉は続く。
「アーレス様の御為にだ」
「命をだというのだな」
「如何にも」
にやりと笑っての言葉だった。
「それも言っておこう」
「確かに聞いた」

そしてアイオロスもその言葉を受けて述べた。
「しかしだ」
「しかしだと？」
「私もまた敗れることはない」
こう言うのだった。
「敗れることはない」
「敗れることはないというのか」
「そうだ」
言いながら構えるのであった。
「この世の人々の為にだ」
「思えばアテナも愚かなことだ」
「アテナが愚かだというのか」
「その通りだ」
まさにそうだというのだ。
「神でありながら人のことを考える。それが愚かと言わずして何というのだ」
「それは貴様等にはわからないことか」
「人は神に仕えるもの」
やはりこう言うのだった。
「それで何故人のことを考えなくてはならないのだ」
「海皇ポセイドンも冥皇ハーデスもだ」
かつて聖戦を戦ったその二柱の神々だ。天帝ゼウスと並ぶ大神である。
「そしてオリンポスの神々の殆どもだな」
「人なぞ所詮神の恩恵を受ける存在でしかない」
やはりこう言うディモスだった。
「所詮はだ」
「その考えは変わらないな」
「変わる？何をだ」
これがディモスの返答だ。

「何を変える必要がありのだ」
「それがわかった」
今その拳を構えるアイオロスだった。
「それではだ」
「来い」
デイモスは彼に告げた。
「相手をしてやる」
「行くぞ」
今アイオロスの小宇宙が全身を覆った。そうして。
「出すな」
「ああ」
「あの技を」
黄金聖闘士達は戦いを見守り続けていた。
「だが。あの技をもってしてもどうか」
「神に対しては」
「勝てるのか」
「案ずるな」
彼等にここでもシオンが告げた。
「アイオロスはアイオロスだ」
「だからですか」
「案ずるなと」
「そうなのですか」
「そうだ」
まさにそうだというのだった。
「あの男、そしてサガも」
「サガも」
「彼も」
「決して敗れはしない」
彼等を心から信じている言葉だった。
「例え何があろうとも」

「ではその御言葉」
シャカが言ってきた。
「今こそ」
「信じるのだな、私の言葉を」
「我々はアテナの聖闘士です」
これが黄金聖闘士の言葉だった。
「それだけです」
「わかった。それではだ」
アイオロスとデイモスの激しい戦いがさらに激化していた。それはまさに運命の戦いだった。

第九十五話　　完

２０１０・２・１８

第九十六話　神々その一

神々

「それではだ」
アイオロスは構えの中で言う。
「このサジタリアスのアイオロスの技をだ」
「出すというのだな」
「そうだ」
まさしくその通りだというのだ。
「この技を受けてもらう」
「来たな」
「インフィニティブレイク！」
無数の光の矢を放った。それで倒すというのだ。
光の矢はそのままデイモスに向かう。しかしであった。
「見よ！」
「何っ！？」
「エターナルフィールド！」
技の名前を叫び左手を右から左に一閃させた。するとだった。
それによってアイオロスのその光の矢を防いだのだ。それも全てだ。
「な、何ィ！？」
「光の矢をだと！？」
「あの技は」
「小宇宙だ」
アイオロスの技を防いだのを見て驚きを隠せない黄金聖闘士の面々にシオンが話す。彼だけが落ち着いてそのうえで話をしていた。
「それによってだ」
「な、アイオロスのあの技を防ぐ小宇宙・・・・・・」
「そんなものがあるというのか」

「まさか・・・・・・」
「見ての通りだ」
だがシオンはそれでも言うのだった。
「現に技は防がれた」
「で、ですが」
「あの技はサガのギャラクシアンエクスプロージョンと並ぶ技です」
「そう容易には」
「神だ」
またそれだった。
「神ならばだ」
「できるというのですか」
「それもまた」
「容易に」
「そうだ。できる」
シオンの言葉は揺るがない。
「それもだ」
「アイオロスのあの技を防ぐ」
「それも容易に」
「見ての通りだ」
ここでシオンは現実を指し示してみせた。
「確かに今防いでいるな」
「確かに」
「それでは」
「見たものがそのまま真実だ」
ここではよく言われる言葉を出してみせたのだった。
「そういうことだ」
「四闘神、やはり」
「一筋縄ではいかないのか」
彼等もそれを思い知ることになった。デイモスはアイオロスの技を全て防いでみせてである。そのうえで誇らしげな顔で言ってみせ

たのである。
「これが神の力か」
「驚かないというのだな」
「ありのまま受け止めるだけだ」
こう返すアイオロスだった。
「ただそれだけだ」
「そうか」
「しかしだ」
だがここでだ。アイオロスはさらに言うのだった。
「だからといって諦めたわけではない」
「まだ闘うというのか」
「その通りだ」
こう言ってデイモスのその前に立っていた。
「それはわかったな」
「それではだ。私もまた」
「来るのか」
「私の技は守るだけではない」
こう言いながらであった。全身にその赤い禍々しい小宇宙を湧き上がらせる。そうしてそのうえでまた言ってみせたのである。

第九十六話　神々その二

「こうした技もあるのだ」
そしてだった。両手を重ね合わせて前に出してだ。技の名前を叫んだ。
「ブロウクンデスティニー！」
その凄まじい衝撃波をアイオロスに放つ。それで倒すというのだ。
「これでだ！」
「来たか！」
それを受けてだった。アイオロスはそれに対してだ。
「ならば私もだ！」
「技には技だ！」
こう言ってであった。出した技は。
「アトミックサンダーボルト！」
その技を繰り出しデイモスの技に対するというのだ。
そしてだ。今技と技がぶつかった。
黄金と紅蓮、二つの衝撃がぶつかった。その二つが激しくせめぎあう。
それはまさに二人の激突だった。しかしだ。
やがて激しい衝撃が飛び散った。相殺されたのだ。
そしてその後に残ったのはだ。何もなかった。ただ二人がそこに立っていた。
「まさかとは思った」
「まさかか」
「そうだ、まさかだ」
デイモスの言葉である。
「私のこの技をそうして防ぐとはな」
「受けては倒されると判断した」
アイオロスはそう読んだのである。

「そしてだ」
「そして？」
「かわせるものではなかった」
そうも見ていたのだ。
「だからだ。こうした」
「そうか」
「そしてそれは正解だったようだな」
「中途半端な技では駄目だった」
ここでデイモスは言ってみせた。
「私の技は生半可なことでは防げはしない」
「そう言えるのだな」
「そうだ」
まさにその通りだというのだった。
「私は神だ。神の技は容易には防げない」
「確かにだ。これも一か八かの賭けだった」
「防ぐことがか」
「私は賭けはしない」
このことも言った。
「だが」
「今回はか」
「そうだ。今回は特別だった」
それだけに必死だったというのだ。アイオロスにしてもだ。
「だが。私はこうして防いだ」
「確かにな」
デイモスは彼のその言葉に目を閉じて言葉で頷いてみせた。
「機転を利かせたか」
「そしてだ」
ここで、だった。アイオロスは己のその言葉を変えてきた。
「貴様の技もまた見切った」
「神の技を一度見ただけでか」

「そうだ。見切った」
そうしたというのである。
「それも確実にだ」
「言うな。神の技を見切ったというのか」
「その通りだ。では見てみるか」
アイオロスは構えに入った。それは彼が今まで出したことのないような技を思わせるものだった。その構えで言ってきたのである。
「それをだ」
「ふむ。私の技を見切ってだ」
ここでデイモスは冷静な言葉を出してきた。
「そのうえで、だな」
「わかるというのだな」
「如何にも」
不敵な声の色だった。
「既にだ」
「では。どう来るのだ?」
「今は止めておこう」
これがデイモスの判断だった。

第九十六話　神々その三

「今はだ。これで矛を収めるとしよう」
「下がるというのか」
「できればここで聖域を滅ぼしておきたかったものだがな」
余裕を含んだ言葉は変わらない。
「しかしそれができないとなればだ」
「立ち去るというのだな」
「如何にも」
返答は迷いのないものだった。
「そういうことだ。それではな」
「わかった」
それを聞いてだった。アイオロスも矛を収めた。彼の全身を覆っていた小宇宙が急激に消えていく。
「では私もだ」
「闘いを止めるか」
「退く者を打つ気はない」
こう言うのである。
「だからだ」
「そうか。わかった」
「ではサガよ」
まだポポスと闘うサガに顔を向けての言葉だった。
「ここはだ」
「闘いを止めよというのだな」
「その通りだ」
こう告げたのである。
「今はな。それでどうだ？」
「そうだな」
そしてポポスも彼のその言葉に頷いたのだった。

「きりがいいところだな、確かに」
「わかってくれたか」
「他ならぬ貴様の言葉だ」
だからだというのだった。
「わからぬ筈がない」
「済まぬな。気が乗っていただろうがな」
「いや、いい」
それはいいというのだった。彼も。
「言ったな。貴様の言葉だからだ」
「そうか」
「ジェミニよ」
彼はあらためてサガに告げたのだった。
「闘いは今はこれで終わりだ」
「そうか。下がるか」
「また会おう」
微笑んでの言葉だった。
「そしてその時こそはだ」
「決着をつけるろいうのだな」
「如何にも。その通りだ」
まさにそうだというのであった。
「その時まで命は預けておこう」
「その時に貴様を倒す」
そんな話をしながら闘いを終えるのだった。お互いに小宇宙を収めていた。闘いが終わった何よりの証拠だった。
そしてだ。デイモスもそれは同じであった。
「サジタリアスよ、また会おう」
「ふむ。それではだ」
「ではな」
こうして二人は静かに戦場を後にした。霧の様に姿を消してそれで終わりであった。十二宮前での戦いはこれで終わった。まずは十

二宮への侵入は防がれはした。
二人はすぐにシオンの前に赴き戦いの報告をした。他の黄金聖闘士達も一緒である。
「そうか」
「はい、以上です」
「十二宮への侵入は」
「見事だった」
シオンは二人の言葉を受けて静かに述べた。
「だが。それでもだ」
「はい」
「多くのことがわかりました」
そうだというのだった。

第九十六話　神々その四

「彼等は先の聖戦で我々と」
「既に」
「そうだな。皆もわかったな」
「はい、それは」
「信じられないことですが」
「魂は輪廻する」
シオンは言った。
「御前達も然りだ」
「そして黄金聖衣は」
「その戦いの記憶をも」
「代々持っているのだ」
黄金聖衣にはそういうものもあるのだというのだ。
「それは御前達にもわかっていよう」
「感じます」
「聖衣から間違いなく」
「それだ。御前達は輪廻を経ていき」
彼等のことを話してからだった。
「そして聖衣はそれを内在していく」
「これまでの無数の聖戦を」
「中に」
「それはそのまま御前達の力にもなるのだ」
黄金聖衣はそういうものだというのだ。
「聖戦の記憶も当然だ」
「深いものですね」
サガの言葉だった。
「簡単な言葉ですが」
「簡単でもそれが真実だ」

それでいいというのである。
「御前達の戦いの輪廻は深いのだ」
「まさか」
「どうした、アイオロス」
「いえ、我々はそうした輪廻の中にいるのでしょうか」
こんなことを言うのである。
「永遠に」
「そうかも知れん。例えばペガサスの聖衣はな」
「冥皇ハーデス」
「あの神との因縁が」
「そうだ、それを持っている聖衣だ」
まさにそれだというのだ。
「そしてそれを身にまとう者もだ」
「輪廻の中にある」
「そういうことなのですね」
「とりわけ御前達はその中の中心にいる」
黄金聖闘士達はとりわけそうなのだというのである。
「それをよく心得ておくことだ」
「戦いの輪廻」
「聖闘士としての」
「アーレスとの戦いもその一環だ」
言い換えれば戦いの一つでしかないのだというのだ。この聖域全体を巻き込んだ激しい戦いもである。
「御前達はこれからも激しい戦いを経ていく。その運命の中にだ」
「戦いの運命」
「その中に」
「頼んだぞ」
彼等への言葉だった。
「この戦いもだ」
「わかっております」

「それはくれぐれも」
「そしてだ」
シオンの言葉がだ。ここで変わった。
そのうえでだ。彼は重い言葉で全員に告げてきたのであった。
「間も無くだ」
「間も無く！？」
「一体何が」
「まず聖域を白銀及び青銅の者達に護らせたうえで」
こう話してからだった。
「そのうえで我々はトラキアに向かう」
「教皇もですか」
「我等と共に」
「そうだ、向かう」
そうするというのである。

第九十六話　神々その五

「そしてトラキアで直接だ」
「戦う」
「自ら敵の城に乗り込んだうえで」
「御前達全員と私で向かうのだ」
これが彼が告げることだった。
「わかったな」
「教皇」
サガがそのシオンに対して言ってきた。
「それでなのですが」
「出陣のことか」
「いえ」
違うというのだった。サガはまた別のことを彼に言ってきた。
「アーレスのことですが」
「アーレスか」
「はい、彼等の主です」
最早言うまでもないことだった。だがそれでもサガは言うのであった。
「そのアーレスですが」
「残念だが」
まずはこう返してきた。シオンだった。そのうえでの言葉だった。
「アーレスの復活はだ」
「避けられませんか」
「やはり」
「既に四闘神が復活した」
先だって攻めて来たその彼等だ。
「彼等はアーレスの忠実なる僕にして側近達だ」
「アーレスの側近」

「そしてその力も」
「相当なものだ。そしてその彼等の力とエリスの力が合わされば」
アーレスの第一の腹心にして妹である彼女のことも話された。
「その時はだ」
「どうすると」
「アーレス復活の時は」
「御前達全てとだ」
ここでも彼等に告げたのだった。
「そして私とだ」
「教皇ですか」
「教皇もなのですね」
「そうだ。全ての力を合わせてだ」
シオンは表情は声からも見せない。しかしその言葉は続けるのだった。
「アーレスは封印する」
「倒すことは無理なんですかね」
今言ったのはデスマスクだった。
「アーレスの野郎は」
「無理でしょうか」
シュラも問うてきた。
「それは」
「どうなんでしょうか、あいつは」
「倒せるのでしょうか」
「神は不滅だ」
これがシオンの返答だった。
「それはだ」
「無理だというのですか」
「それは」
「肉体を滅ぼしてもその精神は不滅だ」
そうだというのだ。その身体はというのだ。

「何があろうと滅びはしない」
「滅びない」
「そうなのですか」
「そうだ、そして神は精神だけでも生き残る」
それが神だというのである。神とはそういうものだというのだ
「それではなのですが」
「アフロディーテか。何だというのだ?」
「神はその本来の肉体を破壊しても無駄なのですね」
「そうだ。肉体もやがて元に戻る」
こうしたことも話した。やはり人のそれとは違っているというのだ。
「だから倒しても何の意味もない」
「しかし」
それを聞いて言ったのはカミュだった。

第九十六話　神々その六

「それではやはり封印しかないのですか」
「そうだ。それしかない」
シオンはあくまで神を倒すことはできないというのである。５８
「結局はな」
「どうもそれは」
そう言われてミロはいぶかしむ声になってしまっていた。その声での言葉だった。
「解決にはならないかと」
「そういうのでしょうか」
「違うのでしょうか」
「言ったな。輪廻だ」
ここでもこの言葉を出すシオンだった。
「御前達は輪廻の中にいるのだ」
「だからこそですか」
「結局のところは」
「戦わなくてはならないのですか」
「聖戦は果てしなきものだ」
シオンの今の言葉は極めて厳粛なものだった。
「終わることはない」
「だからこそですか」
「神は死なないと」
「アテナも然りだ」
彼等のその神だ。そのアテナにしてもそうだというのだ。
「アテナもまたその精神は不滅であられるのだ」
「だからこそ何度も転生され」
「その度に」
「そういうことだ。神は不滅だ」

「では」
今度言ってきたのはアルデバランであった。
「アーレスの僕ではありませんが」
「誰だというのだ？」
「ハーデスに仕えるタナトスとヒュプノスですが」
彼等についての話だった。
「彼等の真の肉体はエリシオンにあると聞いています」
「その様だな」
「はい、ではその真の肉体を倒してもですか」
「そうだ。精神は不滅だ」
まさにそうだと返すシオンだった。
「例え倒せても次の聖戦の時にはだ」
「肉体も蘇ると」
「そうした存在なのですか」
「御前達が輪廻の中にあるのと同じだ」
彼等と同じだというのだ。
「そういうことだ」
「左様ですか」
「そうした意味で我々と」
「それが神だ」
彼はまた言った。
「わかったな」
「はい、そういうことですか」
「だからこそ聖戦も永遠に」
「気の遠くなる間。そしてこれからも続く」
シオンの言葉は果てのないものだった。まさに神の時代から、そしてこれからも続くという。そうした途方もないものだというのである。
「御前達も。私も」
「教皇もまた」

「そうなのですか」
「そうだ。しかしだ」
ここでまた言うシオンだった。
「敗れることはできない」
「若し敗れれば」
「その時は」
「地上は傲慢な神のものになる」
そうなってしまうと。今確かに告げられた。
「人を道具としか思っていない神にだ」
「それがポセイドンでありハーデス」
「そしてアーレスなのですね」
「彼等ですか」
「おそらくはだ」
シオンの言葉はここでやや曇った。
「天帝ゼウスもだ」
「あの神もまた同じですか」
「彼等と」
「私はそうだと見ている」
あくまで己の見方に過ぎないと断りはした。

第九十六話　神々その七

「しかしだ」
「やがてはオリンポスの神々ともですか」
「戦わなくてはならない」
「その聖戦もまた有り得る」
「そうなのですか」
「そうだ。それもわかっておくのだ」
シオンの声は重いものになっていた。しかしそれでも言わずにおけなかった。彼もまた教皇としての己がわかっていたからである。
そしてだ。ここでアイオリアが言った。
「では教皇」
「何だ、アイオリアよ」
「我々はこれからも幾度と生まれ変わりなのですね」
「その通りだ。頼んだぞ」
「わかりました」
「では」
アイオリアだけでなく他の者達も応えた。
「我等はこれからもアテナの聖闘士として」
「戦い続けます」
「人類の為に」
「その言葉必ず言ってくれると信じていた」
シオンはその彼等に言ってきた。
「それではだ」
「はい」
「このまま」
こうしてだった。彼等は今誓いを新たにしたのだった。そのうえで教皇の間を後にする。そしてその時にであった。
「さて」

「何だ？ムウ」
アルデバランがムウの言葉に応えた。
「何かあるのか」
「いえ、私達のことは聞きましたが」
こう言うのだった。教皇の間から双魚宮への階段を進みながらだ。
アフロディーテの薔薇は今は取り払われていた。綺麗なものだった。
「しかし」
「しかしか」
「それは私達だけでないのですね」
こう言うのだった。
「ハーデスと因縁あるのはペガサスの聖闘士ですか」
「ペガサスかよ」
それを聞いたデスマスクは拍子抜けした様に言った。両手を己の頭の後ろにやってそのうえでそんな言葉を出したのである。
「青銅の奴がかよ」
「しかし青銅といえどもだ」
カミュの言葉だ。
「輪廻の中にいるのは同じだ」
「私達とですね」
アフロディーテはこう話した。
「そうした意味では同じですか」
「我等黄金聖闘士だけでなくか」
ミロは遠くのものを見ながら話していた。
「他の聖闘士達もか」
「そして教皇もまた」
シュラはシオンのことを話した。
「その中におられる」
「ひいてはアテナもか」
今言ったのはアイオリアだ。
「全てその中にいるのだな」

「それではです」
シャカの言葉だ。
「我々としてはです」
「まずはそれぞれの宮に戻りましょう」
ムウの言葉である。
「そしてそのうえで」
「今は英気を養うことだ」
「いいな」
サガとアイオロスが他の面々に告げた。
「次の戦いの為に」
「いいな」
「わかっています」
ムウは微笑んで彼等の問いに頷いた。
「それでは次の戦いに備えて」
「次が最後だ」
サガは厳かに告げた。
「いいな」
「そうだな。最後だ」
今のサガの言葉に応えたのはアイオロスだった。
「最後の戦いになる、彼等とな」
「こちらが勝つか向こうが勝つか」
サガは正面を見ていた。そこに見ているものはかなり先のものだった。
「それがはっきりとする時だ」
「その通りだ」
そうした話をしながらそれぞれの宮に戻っていく。彼等はその中で次の、そして最後の戦いに思いを馳せていた。トラキアとの戦いのことをだ。

第九十六話　完

2010・2・22

第九十七話　降臨への儀式その一

降臨への儀式

エリスは四闘神を前にしていた。そのうえで告げていた。
「よいな」
「はい」
「既に」
彼女の前に片膝をついて応える彼等だった。荘重な城の中に彼等のその赤い心や戦衣から出される光が異様な光を放っていた。
「何時でも」
「何でしたら今からでも」
「ふふふ、焦ることはない」
エリスは彼等のそうした感情は抑えさせたのだった。
「それはだ」
「焦ることはない」
「それならば」
「間も無く執り行う」
このことはしかと告げるのだった。
「よいな、間も無くだ」
「間も無くなのですね」
「我々もまた」
「その時こそ」
「我等が揃った時に既に決めていた」
エリスは四人に厳かに告げた。
「このことはだ」
「左様ですね。我等が揃えばです」
「その力を合わせれば」
「アーレス様が」
四闘神も口々に話すのだった。

「この世に戻って来られます」
「その為にも我等の封印を解いて下さったのだとも思っていますが」
「その通りですね」
「無論」
エリスの返答は一言だった。
「そなた達がいればこそじゃ」
「有難き御言葉」
「ではその時には」
「そなた達はわらわと供にアーレス様の御傍を固める者達じゃ」
それがまさに彼等だというのである。
「だからじゃ。よいな」
「わかっております」
「それは」
彼等も承知していることだった。何故四闘神というかとだった。
それはアーレスの傍に常に仕えているからに他ならないのだ。
「ではエリス様」
「その時は何時でしょうか」
「今ではないとすれば」
「焦る必要はない」
エリスは余裕の笑みと供に彼等に述べた。
「既に八つの封印は解かれておる」
「それもまたなのですね」
「既に」
「狂闘士達がやってくれた」
それをしたのは彼等だというのだ。
「そしてだ。そなた達も戻った」
「ならば」
「既に用意はできているのですね」
「既に」
「左様。そして」

その言葉を続けていく。
「時が来れば執り行う」
「アーレス様御降臨の儀式を」
「このトラキアの宮殿で」
「アーレス様の玉座の間においてだ」
場所についても話す。アーレスの玉座の間だというのだ。
「執り行うとしよう」
「ふむ。それは」
ここで言ったのはキュドイモスであった。彼はエリスの話をここまで聞いて述べたのである。
「間も無くですね」
「わかるか」
「我等はアーレス様の忠実な僕」
ここから答えたのである。
「それならばです」
「わかるというのだな」
「アーレス様の星の力が最も強くなるその時にですね」
「ふふふ、左様」
エリスはキュドイモスのその言葉を受けてだ。楽しげに笑った。
そうしてそのうえで言葉を返してみせたのである。

第九十七話　降臨への儀式その二

「その時にだ」
「では今は」
「英気を養ってですね」
「その通りだ。アーレス様の星がもっとも強くなったその時に」
エリスの言葉は続く。
「そなた達には動いてもらう」
「それでは」
「その様に」
「話はこれで終わりとする」
エリスの方からそれを切ってみせたのである。
「ではそれぞれ休むがよい。いや」
「いや？」
「何でしょうか」
「まだだな」
こう言い出してきたのである。
そしてだ。四闘神に告げた言葉は。
「そなた等昼食はまだだったな」
「はい、それは」
「まだですが」
「ですが」
「よい。共に食しようぞ」
謙遜して退室しようとする彼等を呼び止めたのだった。
「馳走をな」
「御相伴にですか」
「お招き頂くと」
「その通りだ。よいな」
「有り難き幸せです」

「そこまでとは」
「わらわとそなた達の仲ではないか」
彼等の謙遜についてはこう返すのだった。
「それはだ」
「ではこのままですか」
「我等と」
「久し振りにあれを食するがいい」
こう言ってであった。玉座の手すりのところに置いてある右手を動かした。するとすぐにテーブルに椅子が運ばれて来て様々な御馳走が持って来られた。その中には黄金の林檎と酒もあった。
エリスと共に席に着いた四闘神はそれを見てた。気付いたように言うのだった。
「そうですか、それですね」
「それをなのですか」
「左様。黄金の林檎に黄金酒よ」
まさにその二つだというのである。
「食べるがいい」
「それでは」
「御言葉に甘えまして」
「では」
「この味は覚えている筈だ」
エリスはその黄金の食物を前に楽しそうに話すのだった。
「そうだな」
「はい、勿論です」
「それは」
「ではだ」
また食べるように勧める。そうして食べるのだった。
そして食べてみるとだった。その味は。
「どうじゃ？」
「はい、懐かしい味です」

「美味という他ありません」
実際にその林檎と酒を味わっての言葉である。
「こうしてまた食べられるとは」
「有り難いことです」
「わらわだけで食してもつまらん」
それは何ともないというのだ。
「しかしじゃ。そなた等と共に食するとじゃ」
「美味だというのですね」
「それで」
「左様、その通りじゃ」
まさにそうだというのだ。
「そしてアーレス様もじゃ」
「そうですね、アーレス様も」
「その通りです」
「是非食べてもらわなくては」
その通りだというのである。彼等にしてもだ。
「アテナは食べないようですが」
「あの女神だけは」
「アテナは人間の姿でしか現われようとはしない」
エリスはアテナについても語った。アテナは神の本来の身体で出ることはないのである。その時代に人間の姿で出るだけなのである。

第九十七話　降臨への儀式その三

「そして黄金の林檎も酒もだ」
「オリンポスの神でありながら」
「不死であることを捨てたと」
「どういう考えかはわからぬ」
それはエリスもわからないというのである。
「しかしアテナはそうしておる」
「わかりたくもありませんが」
「奇妙な話です」
「神でありながら」
四闘神にしてもであった。これはどうしてもわからない話だった。
それでその黄金の林檎や酒を楽しみながら言っていくのだった。
「そうしたことをしないとは」
「人であり続けるのでしょうか」
「その様です。ですが」
「今はそのアテナもいません」
「いるのは我等だけです」
「そしてアーレス様も」
彼等だけだというのだ。そしてこのことにあるものを見ていた。
それは。
「降臨されます」
「これでアーレス様が戻られれば」
「我等の世界です」
「その通りじゃ。では今は食べて飲み英気を養うがいい」
四闘神に向けての言葉である。
「よいな」
「では。その時に備えて」
「アーレス様の御為に」

こう言ってであった。今は次に備えるのだった。そのうえで彼等は今は食べ飲んでいた。そしてその夜のことであった。

シオンは教皇の間の向こうのスターヒルにいた。そこで星の動きを見ていた。その夜空には赤い星が一際大きき輝いていた。

「間も無くか」

「いよいよなのじゃな」

「そうだ」

こう童虎に答える。彼は思念体を出してきてそのうえで話をしているのだ。

「明日にでもだ」

「明日にでもアーレスの降臨が」

「こちらも時が来ようとしている」

シオンはその星を見ながら言っていく。

「そしてだ」

「行くのか」

「全員で出る」

こう童虎に話す。

「御前はそこにいなければならないが」

「残念じゃがな」

「しかし行かせてもらう」

その時はどうしてもというのだ。

「いいな」

「おそらくわしのところにも来る」

童虎もそれは見極めていた。

「間違いなくな」

「そちらもか」

「同じ戦いになるのう」

「そうだな。結局のところは同じだ」

彼等は話していく。

「戦うということは」

「よし、それでは」
「我々はだ」
それぞれ話をしていく。
「トラキアに入る」
「トラキアでの戦いは激しいものになるのう」
「まさに聖戦だ」
その最後の戦いの場だというのだ。
「行かせてもらう」
「アーレスは手強いぞ」
童虎はこのことも話した。
「それもかなりじゃ」
「我等のアテナと同じオリンポスの神であり」
「同じく戦いの神でもある」
そうした関係なのである。
「それだけに強い」
「先の聖戦でもその激しさははーですのそれに比肩するものだったな」
「思い出したな、そのことを」
「しかとな」
シオンもであった。そのことを思い出したのである。

第九十七話　降臨への儀式その四

「御前の武器を使わざるを得なかった程だ」
「今度はどうじゃろうな」
「御前が使わなくてはならない」
だがシオンはここでこう言うのだった。
「それはないな」
「それでいいのじゃな」
「よい。あの者達にはそうした心配は無用だ」
言い切ってみせたのだった。
「全くな」
「あの時よりもさらに強くなっておるしのう」
「幾多の戦いをその輪廻の中で経てきている」
その彼等のことを話すシオンだった。
「だからだ。例え御前のその武器がなかろうともだ」
「勝利を得られるか」
「必ずやってくれる。アーレスも封じる」
「それではじゃ」
「時が来れば出る」
強い決意そのものの言葉だった。
「必ずだ」
「ではじゃ」
「戦いに備えておいてくれ」
こう童虎に告げた。
「御前もだ」
「うむ、既にそうしておるぞ」
童虎はそれはもう既にというのだった。
「抜かりはない」
「そうしてくれているか」

「ではな」
ここでその思念が消えていく。
「その時にまたな」
「会おう。そしてだ」
「アテナと。そして人間の為にじゃ」
「勝つとしよう」
こう話したうえで童虎は消えシオンも場を後にした。夜空にはその赤い星がさらに輝きを増してきていた。
それは黄金聖闘士達も見ていた。そのうえで言い合うのであった。
「あの赤い星は」
「そうです」
シャカがムウに応える。彼等は今それぞれの宮にいる。その前でその赤い星を見ているのであった。
そしてだ。シャカは言った。
「アーレスです」
「ああ、わかってるさ」
デスマスクも何時になく真剣である。
「あの星はな」
「何という星だ」
アルデバランの顔も強張っている。
「火星があれだけ禍々しいとは」
「そして火星が禍々しく輝く時だ」
カミュも言う。
「アーレスの力がとりわけ強くなると言われている」
「アーレスがいないならばだ」
シュラも見ていた。
「それでもだな」
「彼に従う者達の力も強くなる」
アフロディーテも述べる。
「そういうことですね」

「間近いな」
ミロの目も強張る寸前だった。
「その復活は」
「出て来たその時か」
アイオリアも覚悟を決めている顔だった。
「トラキアに」
「あと数日のうちだ」
「そうだな」
アイオロスとサガも言い合う。
「アーレスがこの世に戻る」
「降臨する」
「その通りですね」
ムウも真剣な顔である。いつもの穏やかな微笑みはない。
「ではその時は」
「へっ、あの蝿野郎か」
デスマスクも軽口を言いながらも目は全く笑っていない。
「あいつは俺がやるからな」
「俺はモロクか」
アルデバランも己の相手のことを考えていた。
「あの男と決着をつけるか」
「決める」
シュラは一言だった。

第九十七話　降臨への儀式その五

「何があろうと勝たなければならない」
「そういうことですね。では」
アフロディーテはその手に白薔薇を持っていた。その鮮血により紅く染まっていくその薔薇をだ。持ちながらの言葉だった。
「私も」
「ベリアルの炎が勝つか私の氷が勝つか」
カミュもまた己の相手のことを考えていた。
「それが決まるか」
「対するは四闘神と八大公です」
シャカも目を閉じたまま述べる。
「そして争いの神エリスです」
「その先にはアーレスがいる」
ミロは彼のことも考えていた。
「あの破壊と流血の神がか」
「この戦い、勝たなければ意味がない」
アイオリアも険しい顔である。
「どうするかだな」
「はい、それではです」
ムウがまた言う。
「その時にこそ」
「戦力はかなりのものだ」
「トラキアの力はだ」
サガもアイオロスも敵の戦力を侮ってはいなかった。
「それと対して勝利を収める」
「その為にはだ」
「私も。あの技を使うしかない」
「そうだな。私もだ」

二人はここでさらなる覚悟を言うのだった。
「さもなければ勝利を収めることはできない」
「ならばだ」
「じゃあ俺もあの技を出すか」
デスマスクも相変わらず口元だけで目は笑ってはいない。いつもの余裕に満ちた態度をわざと作っている感じであった。
「あまり出したくはないんだがな」
「あれをか」
「出すというのだな」
「ああ、そうさ」
こうアルデバランとカミュにも返すのだった。
「御前等だってとっておきの切り札出すんだろう？」
「そうだな」
「この戦いではだ」
二人もそれを否定しないのだった。険しい顔で答えたのはその証であった。
「出すしかあるまい」
「こちらも命懸けだがな」
「私もまた」
アフロディーテもいつもよりも深刻な顔だった。
「あの技を」
「シュラ、貴方もですね」
「無論だ」
ムウの問いに答える。既にその顔は剣そのものだった。
「ベールを倒すとならばだ。何がどうなろうともだ」
「アイオリア、御前は」
「あの技を出せばどうなるかわからない」
アイオリアはミロの言葉にその表情を鋭くさせていた。
「しかしだ。出す」
「そうか。わかった」

「誰もが同じですね」
ムウもだというのだ。
「それは」
「ではその時はです」
シャカもまたであった。その凄まじい小宇宙を既に発していた。
黄金の光が最早処女宮を覆い十二宮にまで及ぼうとさえしていた。
「命を賭けて戦いましょう」
「命を賭けたその先にだ」
アイオロスも既に意を決していた。
「全てがあるのだから」
「その通りだな。それでだ」
サガはその赤い星を見ている。
「その時はだ」
「よし、トラキアに向かう」
「そのうえで戦う」
「そして勝つ」
何につけてもだった。勝利を収めなければならないというのだった。
「アーレスに」
「全てをかけて」
「よし」
こう言い合い誓い合うのだった。そうして。

第九十七話　降臨への儀式その六

「いよいよじゃのう」
「そうですね。機は熟しました」
「その時が来ました」
四闘神達だった。彼等が口々にエリスに応える。
「では」
「今から」
「参るぞ」
エリスはその彼等にまた告げた。
「護りは八大公達に任せる」
「トラキアの今の護りはあの者達にですね」
「任せると」
「例え黄金聖闘士共が総掛かりで来ようとも」
また言うエリスだった。
「八大公を全て倒すには時間がかかる」
「そして我等はその間にアーレス様をこの世に降臨させる為の儀式を終え」
「遂にアーレス様が」
「おそらく今仕掛けたりはするまい」
エリスはこうも呼んではいた。
「しかしじゃ」
「念には念を入れてですね」
「あの者達に警護をさせると」
「左様じゃ。今が最も大事な時」
エリスの言葉が引き締まった。このことを誰よりもわかってそのうえで言っている、今の彼女の言葉はまさにそうしたものであった。
「だからこそじゃ」
「それでは是非」

「その様に」
「頼んだぞ。それではじゃ」
「はい、では」
「今こそ」
エリスが己の座を立ち八大公達も続く。彼等が向かったのは宮殿の中でも最も奥深くにある一室だった。そこは紅く輝く宝玉の柱と床、それに紅の絨毯があった。
数段の階段の上には玉座があった。それもまた紅く輝いている。四人はそこにやって来たのであった。
まずはだ。デイモスがエリスに告げたのだった。
「ではエリス様」
「わかっておろうな」
「はい」
一言で答えた彼だった。
「既に」
「わかっていればよい。ではじゃ」
ここで他の三神も見る。彼等もまた同じであった。
「よいな」
「今より」
「アーレス様御降臨の儀式を」
「今こそ我等の彼岸が達成される時」
エリスは厳かに告げた。
「それではじゃ」
「今より我等五人で」
「アーレス様の玉座を取り囲み」
「そのうえで」
「御降臨を」
「力を集めよ」
また言うエリスであった。
「アーレス様の玉座に」

「我等五人の力をアーレス様の玉座に」
「そして今ここに」
「アーレス様が復活され」
「そのうえで」
「我等の理想とする世界が」
口々に言いながらであった。それはその言葉そのものが呪文であるかの如く発せられる。そうしてそのうえで遂に、であった。
「いざ！」
「我等が主よ！」
「再びこの世に！」
「出られよ！」
四闘神が口々に言う。
「我が兄にして偉大なる戦いの神！」
エリスもここで叫ぶ。
「今こそおいで下さい！」
「アーレス様！」
「この世に再び！」
巨大な紅い柱が玉座を包み込んだ様に見えた。そしてその柱が完全に消えたその時にはだ。玉座に誰かが座っていた。それは。
「再びだな」
「おお、その御声は」
「まさしく」
「貴方様なのですね」
「夢にまで見た我等が主」
まずは四闘神が恍惚として述べた。
「偉大なる戦いの神」
「天帝ゼウスとその后ヘラの正統なる御子」
「そして破壊と流血を司られる方」
「我等を治める唯一の存在」
それが何かというとであった。

「アーレス様」
「遂に戻られたのですね」
「この世に」
「礼を言う」
その声は若々しいものであった。そしてその身体もだ。

第九十七話　降臨への儀式その七

だがその全身から放たれる紅い小宇宙は既にエリスのそれをも遥かに凌駕してしまっていた。まさにそれは禍々しい瘴気が世を覆うものであった。

「そなた達の働きにだ」

「いえ、それは」

「滅相もありません」

「我等はただ」

しかしここで彼等は恭しく言うのであった。

「当然のことをしたまでです」

「それだけです」

「当然のことか」

見ればアーレスは紅い服を着ている。身体全体が隠れる、さながらシオンの法衣の様な服を着ている。その髪は黒く短いが燃え上がる様である。そしてその顔は眉が太く猛々しい整った顔であった。

「私を復活させることが」

「はい、何故ならです」

「我等はアーレス様の僕です」

「ならばそれも当然です」

「違うでしょうか」

「その言葉と行動がだ」

だがここでアーレスは彼等に言うのであった。

「いいのだ」

「といいますと」

「当然のことなのにですか」

「それを当然と言う」

アーレスの声が笑っていた。明らかにであった。

「それこそがだ。私への最高の忠誠の証なのだからな」

「何と、そう言って下さるのですか」
「その様に」
「その通りだ」
また言うアーレスだった。
「そしてだ。よいか」
「はい、アーレス様」
「今度は一体」
「何でしょうか」
「来るな」
こう四闘神とエリス達に告げたのだった。
「あの者達も」
「トラキアにですか」
「聖域の者達が」
「そうだ、来る」
その彼等がだというのだ。
「間違いなくだ」
「ではこれより」
「我々はあの者達を迎え撃つ」
「そうなのですね」
「そうだ。私としてはだ」
アーレスは考える顔になっていた。そのうえでの言葉だった。
「むしろ聖域に攻めたいものだが」
「確かに」
エリスが兄でもある主神の言葉に応えるのだった。
「それこそが我等に相応しいですから」
「自ら攻める方がです」
「まさに」
「我等としてはです」
それを四闘神達も応えて頷く。
「今からでも聖域を攻めて跡形もなく破壊する方がです」

「それがいいのですが」
「ここはですか」
「迎え撃つ」
やはりそうするというのである。
「わかったな。それではだ」
「はい、それでは」
「今から」
こうしてであった。彼等はトラキアの護りを固めることにした。
そして戦いの神はさらに言うのであった。
「そしてだ」
「そして、ですか」
「次は」
「我が愛する僕達はだ」
彼が今度言うのはこのことだった。
「随分と減ってしまったな」
「はい、それは」
「悲しいことに」
それはエリス達も言うのだった。嘆く声であった。

第九十七話　降臨への儀式その八

「全てその命を捧げました」
「聖戦の中に」
「どの者も見事な最後でした」
まさにそうだというのである。
「ではアーレス様、その者達を」
「今こそ再びですか」
「遂に」
「そうだ、そうする」
また言う彼だった。
「行くぞ、いいな」
「はい、それでは」
「あの者達も喜びます」
「このアーレスがいる限りはだ」
アーレスはさらに話すのであった。
「そなた達は何度でも蘇ることができる」
「そうでした、まことに」
「アーレス様がおられれば我等は幾度でもです」
「蘇ることができます」
「まさに」
そうなのだった。アーレスがいればであった。
「では今から」
「彼等を」
「蘇らせてですね」
「このアーレス己に仕える者達は一人たりともおろそかにせぬ」
アーレスの目が峻厳な光を放った。そうしてであった。
「それではだ」
「はい、それでは」

「今から」
「蘇るがいい」
その右手をゆっくりと掲げてであった。その右手を少し上にやって手を何かを掴む様に上に向けている。そうしてそこから紅い光を宮殿全体に放った。
するとであった。広間にだ。あの彼等がいた。
「おお、アーレス様」
「この世に戻られたのですね」
「ようやく」
彼等は蘇ってすぐにだ。アーレスの姿を認めて歓喜の声をあげたのであった。自分達について言う者は誰一人として存在しなかった。
「ではいよいよですね」
「聖域を倒し」
「この世を治められるのですね」
「その為に」
「そなた達はだ」
ここでアーレスはさらに言うのであった。彼等に対してもだ。
「これから私の為に動いてもらう」
「喜んで」
「その為にです」
まさに答える彼等であった。アーレスの前に恭しく片膝をついている。
そして八大公達もだ。既に宮殿の中にいた。そうしてだった。
「アーレス様、まずはです」
「御帰還心より喜ばせて頂きます」
「そしてです」
彼等はそれぞれ言うのであった。
「いざ聖域にですね」
「今から」
「いや、あの者達の方から来る」

彼等にも言う言葉は同じだった。
「だからだ。我々はだ」
「護るのですか」
「このトラキアを」
「迎え撃つ」
やはりそうするというのであった。
「わかったな」
「御意」
「では我等も」
「エリスは私の補佐につけ」
まずはエリスについて告げた。
「そして四闘神、続いて八大公」
やはり神が先であった。これは彼等にしてみれば当然のことであった。

第九十七話　降臨への儀式その九

「そのうえで魔神達が護れ。四騎士達もだ」
「はっ、それでは」
「今より」
「聖域の者達を迎え撃ちましょう」
「我等全ての力で」
「そしてだ」
アーレスがあらためて告げてきた。
「わかるな」
「はい、無論です」
「それは」
「ここからはじまるのだ」
それがアーレスの言葉だった。
「私の時代がだ」
「はい、その通りです」
「アーレス様の時代は今からはじまります」
「いよいよ」
「破壊と永遠の闘争が支配する世界」
それこそがアーレスが理想とする世界であった。
「それが今こそだ」
「その通りです。それでは」
「我々はその為に」
「喜んで戦いましょう」
「期待しているぞ」
またであった。
「戦っていくぞ。いいな」
「それでは」
「聖闘士達をこのトラキアで」

こうしてであった。アーレスの帰還を受けた彼等は極限までその士気をあげていた。そうしてそのまま彼等を迎え撃つのであった。
その時だ。聖域でもだ。シオンが意を決していた。
「よし」
「いよいよじゃな」
「そうだ」
まさにその通りだというシオンだった。
「我々も出る」
「ではわしもじゃな」
「そこにいてもらう」
童虎への言葉だった。今は彼等はまたそれぞれ思念で話をしていた。
「いいな、それは」
「わかっておる。どのみち向こうから来る」
「その通りだな。では私はだ」
まだ立ってはいない。しかし自ら言うのだった。
「あの者達を連れて行く」
「そうか、あの者達をじゃな」
「全員だ」
そして全ての者をだというのだ。
「連れて行くことにしている」
「それが妥当じゃな」
「いいというのだな」
「むしろそうしなくてはならん」
それは絶対だという童虎であった。
「この戦いはじゃ」
「最後の、そして最大の戦いになる」
彼はそれを既に見ていた。
「だからこそだ。私もまただ」
「あの方と同じくじゃな」

「戦う。いいな」
「そうするがいい。ではじゃ」
「うむ」
「勝利を手にするのじゃ」
童虎が告げるのはこのことであった。
「よいな」
「わかっている。さもなければこの世はない」
これもわかっていることだった。
「アーレスの支配する世界では人は生きられはしない」
「強い者だけが生き残りそこには法はない」
「戦いこそが法だ」
それがアーレスの世界だというのである。
「そうした世界にはだ」
「何があろうとも勝たなければならんな」
「だからこそだ」
意を決した言葉が続けられていく。
「行く」
こうしてであった。シオンはその玉座から立ち上がった。今こそ最後にして最大の戦いがはじまろうとしていたのだった。アーレスは遂にこの世界に戻った。

第九十七話　完

２０１０・２・２８

第九十八話　出陣その一

出陣

シオンは己の前に全ての黄金聖闘士達を集めていた。まさに黄金集結であった。

この聖戦においては常に行われていることだ。だが今はその雰囲気が全く違っていた。

「へっ、どうやらわかってるみてえだな」

「わからない筈がない」

アイオリアが緊張した面持ちでデスマスクに返す。そのデスマスクの顔もその笑みがいささか引きつっていた。そのうえでの言葉だったのだ。

「これだけの禍々しい小宇宙はだ」

「あいつしかねえな」

「アーレス、間違いない」

アルデバランもその顔が強張っていた。

「遂に出て来たか」

「それだけではありません」

アフロディーテですら普段の余裕がその表情から消え失せてしまっている。

「争いの女神エリスと四闘神、それに」

「ええ。八大公と倒れた筈の彼等がです」

ムウも今はあの優雅な微笑みがなかった。

「います」

「復活したということだな」

カミュは何とか冷静さを保っていた。しかしその目はかなり険しいものだった。

「あの者達もまた」

「つまりトラキアの戦力は以前よりも遥かに強大になった」

シュラもその緊張が恐ろしいまでだ。
「あの者達も復活したことによって」
「その通りです」
シャカだけであった。彼だけは普段とその態度が同じであった。
「今トラキアは戦力のピークにあります」
そんな話をしながら教皇の間の中を進んでいく。そしてその彼等の前にだ。あの二人がいてそのうえで声をかけてきたのであった。
「来たか」
「これで全員だな」
サガとアイオロスだった。彼等は既に来てそのうえで二人並んで立っていたのである。
そして彼等を迎えてだ。また言うのであった。
「それではだ。行くか」
「教皇の御前に」
「はい」
応えたのはシャカであった。
「今から」
「わかっていると思う」
「既にだ」
二人はあらためて彼等に告げた。
「アーレスは復活した」
「そしてトラキアにいる」
「嫌になる位わかるぜ」
デスマスクは相変わらず目を笑わせられなかった。
「本当にな」
「だからこそ我等は今ここにいる」
シュラもそのまま険しい顔だ。
「そのトラキアに向かう為にだ」
「そしてです」
アフロディーテも続く。

「貴方達もですね」
「無論だ」
「言うまでもない」
二人の返答は既に一つしかなかった。
「それはだ」
「我等も共に行く」
「言い換えるならば行かなくてはならない」
カミュも冷静さに加えて深刻さがそこにあった。
「そういうことだな」
「言い換えればな」
「そうなる」
それを否定しないことにも彼等は言うのだった。
「我等全てでだ」
「トラキアに向かわなくては勝てるものではない」
「そして」
さらに言う彼等だった。
「我等全ての力を合わせなくてはだ」
「今のアーレスの軍勢には勝てはしない」
「黄金聖闘士全員が」
アルデバランはそれを聞いて強張った顔で述べた。
「まさに聖戦ということだな」
「普段ならば我等が出るだけでも余程のことだ」
ミロはそのことはよく認識していた。黄金聖闘士というものはそれだけの重さがあるのだ。それだけの存在でもあるのである。
「その我等が全員か」
「今聖域にいる黄金聖闘士は十一人」
アイオリアも言う。
「それが全てなのか」
「それだけで済めばいいのですが」
ここで言ったのはシャカだった。

第九十八話　出陣その二

「我等だけで」
「わかっているのか」
「それもまた」
「はい」
二人に対しても答える彼だった。
「余地はしています」
「そうか。それならばだ」
「我等だけとは限らない」
「教皇もですね」
ムウもそのことは察したのだった。やはりその顔には微笑みがない。
「あの方もまた」
「そういうことだ。教皇御自身もだ」
「御出陣される」
まさにその通りだと。二人も答えた。
「今はそれだけの状況だということだ」
「教皇御自身もまた出られなくてはならない」
「では」
また言うシャカだった。
「参りましょう、その教皇の御前に」
「今からな」
「行くとしよう」
こうして十一人の黄金聖闘士が教皇シオンの前に勢揃いした。そのうえでサガとアイオロスを先頭にして片膝をついてだ。それぞれ述べるのであった。
「教皇、只今参上しました」
「御前に」

「よく来てくれた」
まずはこう応えるシオンであった。
「そしてだ」
「はい、それでは」
「今よりですね」
「トラキアに向かってもらう」
重厚な声で述べる。そうして次の言葉は。
「私と共にだ」
「教皇もまた」
「行かれるというのですね」
「そうだ」
まさにその通りだというのだ。
「私も行く。いいな」
「わかりました」
「それでは」
それにはもう驚かなかった。既にシャカの予見を聞いていただけではなかった。誰もが心の中である程度察してもいたのである。
そうしてだった。シオンはさらに言ってきた。
「まずは七十二柱の魔神達がいる」
「あの連中がまた」
「蘇ったのですね」
「そうだ。そしてインプ達もいる」
所謂アーレスの兵士達である。
「それもかなりの数がだ」
「どれだけの数でしょうか」
サガがその実数を問うた。
「一体」
「少なくともこの聖域にいる兵士達の二倍だ」
それだけの数がいるというのだ。
「御前達が倒してきたあの者達も蘇ってきている」

「しかし雑兵達は」
「数では」
「侮ってはならない」
だがシオンの言葉は厳しかった。
「敵は敵だ」
「だからこそですか」
「それは」
「そうだ。この戦いはどちらが滅びるかだ」
まさにそうした戦いだというのである。
「だからこそだ。いいな」
「例え何者であろうとも」
「一人残らず倒す、ですか」
「アーレスの軍勢に降伏という言葉はない」
シオンはまた言った。
「そして退却もだ。わかっている筈だ」
「はい、それは確かに」
「嫌になる程」
わかっていることであった。これまでの戦いにおいてだ。
「だからこそですね」
「我々も降伏や退却を知らないからこそ」
「その為もあり」
「そうだ。どちらが滅びるかだ」
まさにそうした戦いであるというのである。

第九十八話　出陣その三

「そして生き残るかだ」
「我等が生き残れば世界は」
「このままですね」
「しかしアーレスが勝利を収めればだ」
その未来もあえて語ってみせるシオンだった。
「その時はだ」
「最早言うまでもありませんね」
「それは」
「その通りだ。ではだ」
言葉は多くは必要なくなっていた。ここまで来ればだ。
「行くぞ、守りは白銀及び青銅の者達に任せる」
「はっ、では」
「今より」
こうして黄金聖闘士達はシオンに率いられてトラキアに向かって出陣した。シオンを中心として彼等は一路トラキアを目指すのだった。

その中でだ。シャカが言った。今ギリシアは暴風雨の中だ。ギリシアは冬は暴風雨に襲われる。その冬の嵐が彼等を包んでいた。その中での言葉だった。既に全員聖衣とマントで武装している。
「集まっていますね」
「トラキアにだな」
「あの地に」
「その通りです」
こうサガとアイオロスに対しても答えるのだった。
「全員揃っています」
「一兵に至るまでだな」
「トラキアの全ての戦力が」

二人はそこまで聞いて述べた。そうしてであった。
「ならばだ。我々もまた」
「この全ての戦力をぶつける」
まさにそうするというのである。
「そして勝つ」
「何があろうともだ」
まさにそのつもりだった。そうしてであった。
シオンに対して声をかけるのだった。彼は一行の中央に位置している。サガが右に、アイオロスが左にいる。そうして暴風雨の中を進んでいるのである。
「トラキアに入れば正面突破を仕掛けましょう」
「まずは」
「わかっている」
シオンは一言で答えた。
「まずはだ。正面から突き破る」
「はい、それでは」
「その様に」
「そしてシャカ」
シオンは自らシャカに声をかけた。
「御前には四闘神の一人を頼むがだ」
「はい」
「魔神達も頼む」
こう彼に告げたのである。
「それでいいな」
「御意」
返答は一言であった。
「さすればその様に」
「頼んだぞ。それではだ」
シオンは次に他の面々にも告げた。
「他の者はすぐにそれぞれの相手のところに向かえ」

「それぞれの相手のですか」
「そこに」
「アーレスはトラキアの宮殿の最も奥深くにいる」
まずはアーレスの位置から話した。
「そして宮殿の要である中央にエリスがいる」
「エリスはそこに」
「そうなっているのですか」
「そこに至るには宮殿には十二の門がある」
次に話したのは門のことであった。
「十二の門は四つの大門と八つの小門からなる」
「四つと八つ」
「それによって構成されているのですね」
「そうだ。そしてその十二の門とエリスの部屋が陥落しその封印が解かれた時にだ」
その時にというのである。
「アーレスへの道が開けるのだ」
「では我等は」
「まずはその門を開ける」
「そうせよというのですね」
「その通りだ。四闘神は八つの封印が解かれたことにより復活する下地ができた」
「八つの！？」
「まさかそれは」
黄金聖闘士達はそれでわかった。彼等のこれまでの戦いが何であったのかを。それを悟ったのである。

第九十八話　出陣その四

「世界で戦ったあれですか」
「あれがなのですね」
「その通りだ。私も気付いたのはその後だった」
戦いの後でのことだったというのである。
「薄々は感じていたがだ」
「そうだったのですか」
「そして封印を解いて」
「そのうえで四闘神をですか」
「四闘神が復活したならばだ」
後は玉突き的であった。アーレスへと至ることだった。
「アーレスを降臨させたのだ」
「ハーデスのいる冥界から」
「あの戦いの神を」
「それが今だ」８０
今アーレスがいるその時だというのだ。
「あちらはそれで既に勝利を収めたとさえ思っている」
「アーレスがいるだけで」
「それだけで」
「オリンポスの神々の力はまさに銀河の力だ」
シオンの言葉は決して誇張ではなかった。
「だからこそだ」
「そこまでの力がある」
「そういうことですか」
「アーレスに対してはだ」
「どうされるというのですか？」
「一体」
黄金聖闘士達もそれを問うのだった。

「トラキアの全ての者を倒してもアーレスがいればそれだけで蘇ってきます」
「アーレスは全てを蘇らせます」
それもまたアーレスの力だった。アーレスはその力で己の部下を全て蘇らせることができるのだ。つまりトラキアとはまさにアーレスが全てなのだ。
「その銀河の力を持つ神をどうして倒すか」
「それですが」
「案ずるな。御前達が全て揃っているならばだ」
話はそこからだった。
「それで大丈夫だ」
「我等が全ていれば」
「それでなのですか」
「そうだ。そして私がいる」
次にはシオン自身であった。
「私もだ」
「では我等の力の全てを使ってですね」
「アーレスを封じる」
「そうすると」
「わかったな。ではだ」
シオンは前を見据えていた。そのトラキアのある方をだ。
「そろそろだ」
「トラキアですか」
「いよいよ」
「見えてきますね」
「城だ」
「見るのだ」
言ったすぐ側にであった。
「あれだ」
「何と、あれがですか」

「あれがトラキアですか」
「そうだ」
彼等の前にだ。赤く禍々しい形をした巨大な城が見えてきた。多くの塔や天主を持っている。西欧のそれを思わせる城がそこに浮かんでいた。
「まさしくあれは」
その城を見ながらムウが述べた。
「伏魔殿ですね。魔界にあるという」
「あの魔王の城か」
アイオロスがそれを聞いて問い返した。
「あの城だというのだな」
「あの城には魔王はいません」
それは間違いなかった。いるのは神だ。
「ですが。アーレスはです」
「その魔神達を統べている」
「まさに魔神の主」
「戦皇だな」
他の黄金聖闘士達がここで言った。
「その戦皇の城か」
「あの城は」
「そうした意味でまさに伏魔殿だな」
サガはムウの言葉をそのまま踏襲した。

第九十八話　出陣その五

「あの城は」
「我等は天使ではない」
シオンはこのことは確かに話した。
「しかしだ。彼等を退けなければだ」
「この世はアーレスのものになってしまう」
「力が支配する世に」
「何度も言うが勝つ」
これは幾ら言っても言い過ぎるということはなかった。
「いいな」
「参りましょう、教皇」
シャカが声をかけてきた。
「今より本当の戦いのはじまりです」
「このまま正門より入る」
シオンは彼等の中心に位置して言った。
「いいな」
「では」
「今より」
「そして突破する」
まさに実力行使だった。それによってというのだ。
「まずはさ」
「了解です」
「ならば」
ここで出て来たのあアイオロスだった。
「私が先陣を」
「いや、ここは私が行く」
しかしサガもここで言うのだった。
「私に任せてもらおう」

「サガ、御前が行くというのか」
「そうだ、ここは私がやらせてもらう」
こう言って引かない。彼も意地があるかの様にである。
「それでいいな」
「残念だが今度ばかりはそうもいかぬ」
アイオロスも引かない。彼も微かに意地を見せていた。
「私もまたやるべきことがある」
「だからだというのか」
「そうだ。だからだ」
やはりこう言うのであった。
「御前は下がっているのだ」
「そのつもりはない。御前に下がってもらいたい」
「あくまでそう言うのだな」
「何度でも言うがな」
二人は対立とまではいかなかったがそれでもお互いに引く素振りは一切見せない。そうして互いに意地を張っているそのうちにだ。
他の黄金聖闘士達がそれぞれ名乗り出ようとしたその時だった。シオンが一歩前に出てそのうえで彼に対して言ってきたのだった。
「それには及ばない」
「えっ、教皇」
「何故ですか、それは」
「では誰を選ばれると」
「ここは」
「私だ」
またしても一言であった。
「私がやらせてもらう」
「教皇が先陣だと仰るのですか」
「まさか」
「いや、そのまさかだ」
また言うのであった。

「私が行かせてもらう。いいな」
「いえ、それは幾ら何でも」
「教皇御自身が先陣とは」
「そうです」
サガとアイオロスだけではなかった。他の者達もこう言って彼を止めるのであった。彼等にしては教皇の先陣なぞ考えられなかった。だからこそ誰もが止めようとする。しかし彼はここでこう言ったのだった。
「御前達の危惧には及ばぬ」
「といいますと」
「やはり」
「行かれるのですか」
「見ているがいい」
こう言うだけであった。
「私の戦いをな」
「・・・・・わかりました」
最初に応えたのはシャカだった。目を閉じたままで静かに頷いてみせたのであった。それが何よりの返答であった。
「それではです。教皇の御考えのままに」
「済まぬな。それではだ」
「そうだな。シャカが言うのならばだ」
「我々も意地を張り過ぎた」
「全くだ」
サガとアイオロスも冷静さを取り戻した。そのうえでの言葉であった。
「では教皇、ここは」
「御願いします」
「是非」
「うむ。そうさせてもらう」
シオンも静かに応える。そうしてであった。

今シオンを先頭にしてトラキアの巨城前に来た。大きく壮麗だが赤く禍々しさを漂わせた門であった。ルビーと赤い大理石で築かれた柱を左右に置くその門には既に多くのインプ達がいた。彼等は一行を見てすぐに身構えたのであった。

「来たか黄金聖闘士！」

「そして教皇までか！」

「来たというのだな！」

「その通りだ」

応えたのはシオンであった。

「通らせてもらうぞ、今からな」

「ふざけたことを言う」

「全くだ」

「そんなことができるものか」

「ここはアーレス様の聖地」

あの三叉の槍をそれぞれ手に持ってだ。そのうえで次々に門から出て来た。そのうえでシオンを見据えて言うのであった。

「貴様等が入られる筈がない」

「我等のこの手でだ」

「倒してやろう」

「それにだ」

さらに言う彼等だった。

「黄金聖闘士だけでなく教皇までいるとなるとだ」

「倒しがいがある」

「貴様等を全て倒せばそれで聖域は終わりだ」

「ならばだ」

聖域がまさに教皇と黄金聖闘士をその中心としていることをわかっていてであった。そのうえでの彼等の今の言葉であった。

そうしてだ。今まさに飛び掛らんとする。だがシオンはまだ冷静なままだ。身動き一つしない。

「来るのだ」

「言われなくともだ！」
「覚悟するがいい！」
「その首我等が貰い受ける！」
口々に叫んで襲い掛かる。今シオンの首を取らんとする。
しかしであった。そのシオンは。
まだ動かなかった。微動だにしない。
だが小宇宙が高まる。その中でシオンは。何かをしようとしていた。

第九十八話　　完

２０１０・３・４

第九十九話　宮殿の中へその一

宮殿の中へ

インプ達の襲撃を受けるシオン。しかしであった。

彼が右足を半歩前に出しただけだった。それだけでだ。

「うわあああーーーーーーーーーーっ！！」

インプ達は大きく吹き飛ばされてしまった。まさにそれだけだった。

そのうえで派手な音を立てて地面に叩き落される。残った者は誰もいなかった。

「光速拳・・・・・・」

「いや、違う」

「小宇宙だけで」

黄金聖闘士達でようやくわかることだった。

「それだけで倒したというのか」

「拳すら使わずに」

「流石と言うべきか」

「行くぞ」

驚く彼等を後ろに造作もなく言う彼だった。

「戦いはこれからだ」

「は、はい」

「わかりました」

黄金聖闘士達も驚きから我に返り応えた。

「それではいざ」

「中に」

「そして戦いに」

「行くぞ。敵はまだ多い」

こう言ってであった。今その門をくぐった。するとまた無数のインプ達が彼等に対して襲い掛かって来たのであった。彼等にしても

必死であった。
「させるか！」
「これ以上は行かせぬ！」
「教皇シオン、今こそ！」
「死んでもらう！」
こうして再びシオンに襲い掛かる。だが今回もだった。
その小宇宙だけで薙ぎ倒す。それで終わりだった。
「お、おのれ・・・・・・」
「何という強さだ・・・・・・」
今中庭に入った。そこは左右対称で花が咲き壮麗ではあった。だがその彫刻はどれも猛々しく武張ったものであり緑の木々も何処か禍々しい。やはりアーレスの世界だった。
「アーレスの世界というのはこういうものですか」
「どれだけ美しい場所であっても」
「そこには破壊と流血を感じますね」
「決して落ち着けるものではない」
「人はアーレスの世界では安らぎを感じることはない」
シオンはまた言った。
「決してだ」
「そうですね。それは決して」
「感じられることはありません」
「何があろうとも」
それが非常によくわかるのだった。気配でだ。
その中庭を進みさらに行くと遂に城に入った。アーレスの宮殿でもある。
そしてだ。その前にだ。彼等がいた。
「おいおい、性懲りもなくかよ」
「蘇ってすぐか」
「貴方達も引かないということですか」
その彼等を見て言ったのはデスマスク、シュラ、アフロディーテ

だった。
「まあいいさ。それならだ」
「相手をしてやろう」
「容赦はしません」
「いや、待て」
だがシオンは前に出ようとした三人を制止したのであった。
「それには及ばぬ」
「といいますと教皇」
「ここもまた」
「教皇御自身が」
「言った筈だ。シャカ」
名を呼ぶのは彼だった。
「ここは頼む」
「わかりました。それでは」
シャカもそれに応えて静かに頷く。これで決まりであった。
シオンはシャカに告げてから他の者達に対しても告げた。まさにいよいよであった。
「そしてだ。御前達はだ」
「はい」
「それではですね」
「わかるな。それぞれの相手がいる場所は」
それはもう言うまでもないというのだった。
「私は正門から入る。御前達はそれぞれの門から入るのだ」
「わかりました」
アルデバランが重厚な声で応えた。
「それでは今より」
「頼んだぞ。それではだ」
「わかりました、教皇」
カミュもまさに氷の剣と化している言葉で応えた。
「では我等もまた」

「任せた」
今度は一言であった。

第九十九話　宮殿の中へその二

「そしてアーレスの前で会おう」
「では我等は今より」
アイオリアはもう動いていた。相手のいる場所は確かにもう感じ取っていた。その小宇宙は間違えようがなかった。
「それぞれの相手に向かいます」
「では教皇」
ミロも既に動いている。
「アーレスの前で」
「また会おう」
「さて、それではです」
ミロも己の向かうべき場所に向かわんとしている。
「参りましょう」
「では教皇」
サガも己の場所を見据えてそのうえでシオンに声をかけた。
「また会いましょう」
「誰一人として欠けることなく」
アイオロスも言う。
「アーレスの前で」
「頼んだぞ。ではシャカ」
「はい」
「また会おう」
シオンはそのまま前の正門に向かう。しかしであった。
「行かせはせん！」
「誰一人としてだ！」
魔神の狂闘士達だった。彼等が一斉に動いてそのうえでシオン、そしてその他の黄金聖闘士達の前に立ちはだかろうとする。そのうえで言ってきたのである。

「アーレス様の御前に行かせるなぞだ」
「断じて許しはしない」
「我等の命にかえてもだ」
「いいでしょう」
するとであった。シャカがシオンの前に出て来た。そのうえでシオンと他の面々に対して言うのだった。背中のマントが風で翻る。
「ここは私の仕事です。では」
「うむ、それではだ」
シオンがまた彼に応える。そうしてであった。
「行くぞ」
「はい！」
「では！」
こうして全員それぞれの場に散った。魔神達ですら彼等を止めることはできなかった。
何故ならだ。彼等の前にシャカがいるからだ。彼は目を閉じたまま静かにそこにいる。それだけであるがだ。彼等を動かさせない確かなものがそこにはあった。
「バルゴ・・・・・・」
「黄金聖闘士の一人にして最も神に近い男」
「そうだな」
「如何にも」
シャカ自身その言葉を否定しなかった。
「私は神」
彼は言い切ってみせた。
「その私が今御前達の相手をしてやろう」
「我等とて魔神」
今言ったのはクレーベだった。彼だけでなく他の魔神達も皆いる。誰もが蘇りそのうえで今ここにいるのである。
そしてだ。彼等は一歩間合いを詰めた。そのうえで、であった。
「死んでもらう」

「いいな」
「貴様にもだ」
「まずは貴様を倒しだ」
彼等はその言葉を続けていく。
「そのうえで門に向かい」
「他の黄金聖闘士達も教皇も倒す」
「そうさせてもらう」
「いいだろう」
シャカはまずは彼等のその言葉をよしとした。
「思うのならばよい」
「思うだけではない」
「断じてだ」
しかし彼等にしては当然思うだけではない。本気でそうするつもりだった。
だからこそだ。今まさにシャカに向かわんとする。そうしてであった。
「覚悟はいいな」
「目を閉じたままでは我等を本当に見ているのかさえわからぬが」
「それでもだ。見ないのだな」
「目を開かずとも見えている」
シャカはその目を閉じたままで言うのであった。
「御前達全員の動きがだ」
「セブンセンシズか」
「それによってだな」
「左様。しかしだ」
ここでシャカの言葉が強くなった。まるで鐘の様になる。そうしてだった。
「今見せよう、このバルゴのシャカの力を」
「!?この小宇宙は」
「何だこの高まりは!」

「サジタリアス！？ジェミニ！？いや」
「それ以上に高まりだというのか！」
誰もがシャカのその小宇宙の高まりを見て驚きの声をあげた。あげずにはいられなかった。

第九十九話　宮殿の中へその三

「くっ、しかも」
「技か！」
「この技は！」
「オーム！」
両手で印を結んだだけである。だがそれだけで。
小宇宙が途方もなく高まったのだ。その小宇宙は魔神達の誰もが人に対しては今まで感じたこともない程に巨大なものであった。
「くっ、だが！」
「まだ我等を攻めてきているわけではない！」
「ならば！」
魔神達も怯まずそのうえでそれぞれの技を繰り出そうとする。しかしだった。
そのシャカはまた印を組んだ。そうしてであった。
「カーン！」
その言葉と共に今度は小宇宙が炎となった。
赤い炎ではなかった。何と白い炎である。それが襲い掛かって来たのだ。
「白い炎だと！」
「赤ではないというのか」
「これは」
「白き炎は最も熱き炎」
それを放ったシャカの言葉である。
「まさに全てを焼き尽くす浄化の炎」
「ならば我等を焼き尽くせるというのか！」
「戯言を！」
「その様なことができるものか！」
「ならば受けるがいい」

シャカの今度の返答は一言であった。
「御前達自身で。不動明王のこの浄化の炎をだ」
「くっ、これは！」
「だ、駄目だ！」
忽ちのうちに数人がその炎の衝撃に吹き飛ばされた。
そうしてだった。彼等の誰もが瞬く間にその荒れ狂う白い炎に吹き飛ばされた。その熱さ、衝撃は彼等をしても避けられるものではなかった。
全ての者が城の石畳の上に叩き付けられた。瞬時にであった。
「ば、馬鹿な・・・・・・」
「七十二柱の魔神の我等が全員だと・・・・・・」
「しかも瞬時にだと・・・・・・」
「言った筈だ。私は神だ」
シャカはその倒れ伏す彼等の前に立ちながら静かに述べてきた。まるで何もなかったかの様に涼しげな顔でそこに立っている。
白い炎は既に消えている。その中でさらに言うシャカだった。
「御前達は確かに強い。しかしだ」
「貴様はそれ以上だというのか・・・・・・」
「まさに」
「そうだ。私と戦える者は神のみ」
まさにその神だけだというのだ。
「では。その神と今から戦いに向かうとしよう」
「くっ、バルゴのシャカ・・・・・・」
「何という恐ろしい男だ・・・・・・」
「間違いない、この男こそ」
彼等は薄れゆくその意識の中で確信していた。
「聖域で最も恐ろしい男・・・・・・」
「まさに最強の聖闘士だ・・・・・・」
「間違いない・・・・・・」
その黄金聖闘士達と戦ってきた彼等の言葉である。

「神だ」
「だが、しかしだ」
「バルゴよ、覚えておくことだ」
「そうだ、覚えておくのだ」
彼等は倒れ伏しながらも最後の力を振り絞って言うのであった。
まだその目は死んではいなかった。その目を光らせながらの言葉だった。
「八大公の方々、それに四闘神の方々はだ」
「貴様をしても容易な相手ではない」
「それにアーレス様だ」
「あの方には勝てはしない」
その彼等の主である。赤い戦いの神だ。
「それを覚えておくことだ」
「そしてアーレス様さえ御健在ならばだ」
「我等は何度でも蘇ることができる」
「アーレス様の御力によりだ」
だからこそ彼等は今いる。それは事実だった。
「最後に勝つのは我等だ」
「何があろうともだ」
「それを覚えておくがいい」
「冥界でそれを思い知るのだ・・・・・・」
こう言ってそれぞれ息絶える。七十二の小宇宙が今消え去った。
アーレスは己の玉座にいた。そこでその小宇宙達が消え去ったのを感じ取った。そのうえで今は傍らに控えるエリスに対して告げるのだった。

第九十九話　宮殿の中へその四

「惜しいことをした」
「あの者達ですか」
「むざむざ忠義の者達を死なせてしまった」
その言葉には明らかに悔恨の情が入っていた。
「悔やんでも悔やみきれぬ」
「ですがアーレス様」
エリスがその悔やむアーレスに対して告げた。
「あの者達もそれで本望です」
「そうだというのか」
「はい、我等は皆アーレス様のその命を捧げています」
だからだというのである。
「ですから」
「そう言ってくれるのか」
「はい、それにです」
エリスは主であり兄である彼に対してさらに話すのだった。
「あの者達、いえ我等はアーレス様さえおられれば何度でも蘇ることができるではありませんか」
「それは確かにな」
彼が最もよくわかっていることである。アーレスは己に仕える者達を幾度でも蘇らせることができるのだ。それは既に降臨した時に見せていた。
「だが。少し時間がかかる」
「しかし復活させることができるのは事実です」
エリスはそれはそうだというのであった。
「ですから。案じられることはありません」
「そう言ってくれるのだな」
「私は事実を申し上げただけです」

エリスにとっては謙遜ではなかった。ただ事実を述べただけであった。
「ですから。御気を落とされることのないよう」
「そうだな。確かにな」
アーレスも彼女の言葉を受けてその気を取り戻したのであった。
そうしてだ。そのうえで再び顔をあげた。妹にまた言ってきた。
「そしてだ」
「はい、そして」
「来たな」
話を変えてきたのである。
「あの者達が」
「はい、再び」
ここでエリスは再び、と言った。今がはじめてではないというのだ。
「この宮殿の奥に」
「守りは既に固めているな」
「御安心下さい。既に四闘神及び八大公達がそれぞれ守りについています」
「そうか」
「十二の門の守りは万全です」
それはだというのだ。
「そして正門はです」
「御前がだな」
「御安心下さい。誰一人としてアーレス様の下へ辿り着くことはできません」
エリスの言葉には絶対の自信があった。
「我等がいますので」
「そうか。私としてはだ」
「アーレス様としては？」
「既に私の戦衣は用意してある」

言葉に笑みが宿っていた。そのうえでの言葉であった。
「あれを久し振りにこの身にまとってもみたいのだが」
「それは後で存分にお楽しみ下さい」
「後でだというのだな」
「はい、後でです」
エリスは静かに主に述べるのであった。
「後でお楽しみ下さい」
「わかった。では聖域との戦いが終わりだ」
「我等の永遠に続く戦いの中で」
「あの戦衣をまとうことにしょう」
アーレスは妹の言葉を容れてこう述べるのであった。
「私はこの世界だけでなくだ」
「全てを治められる為に」
「私は何だ」
アーレスはエリスに対して問うてみせた。
「答えるのだ。私は何だ？」
「天帝ゼウスとその妃ヘラの御子でございます」
「そうだ。私こそ天帝とその妃の嫡子」
彼にはその自負が確かにあった。
「アテナは何だ。父上が他の女に産ませた者でしかない」
「そして他の神々も」
「そうだ。だが、だ」
ここでアーレスの言葉に苦々しいものが宿ったのであった。
「多くの者が私を認めようとしなかった」
「人間達の多くも。オリンポスの神々でさえも」
「私を野蛮だの獰猛だのと蔑んでくれた」
「その通りです。戦いのことを何一つとして知らずに」
「私を蔑み。認めようとはしなかった」
言葉に明らかに怨念が宿っていた。

第九十九話　宮殿の中へその五

「だが、だ」
「我等は」
「そうだ。そなた達は私に従ってくれた」
言葉の色が一転した。親しいものが宿ったのだ。
「最初はエリス、そなただったな」
「次にはあの者達が」
「四闘神。そなたとあの者達にはどれだけ感謝したことか」
そのことを告げるのであった。言葉には明らかに慈しみがあった。
「誰からも蔑まれ罵られていた私の傍に来てくれたのだからな」
「アーレス様の御考えこそが真実だからこそです」
少なくとも彼女達はそう捉え信じたのである。アーレスのその考えに惹かれ賛同し忠誠を誓った。それは紛れもない事実であった。
「ですから」
「そう言ってくれたな。私はあの時はじめて孤独以外のものを知った」
「有り難き御言葉」
「そしてだ」
アーレスの言葉はさらに続いた。
「狂闘士達もだ。天闘士達から抜けてな」
「思えば天闘士達のうち三分の一がアーレス様に従いました」
「絶対の忠誠を誓ってくれた」
この忠誠は微動だにしてはいない。狂闘士はただひたすらアーレスに忠誠を誓っている。誰一人としてそれから外れる者はいない。
92
「何度にも渡る聖戦の中でな」
「何故揺らぐことがありましょう」
エリスは恭しく彼に述べた。

「我等のこの心が」
「それはないというのか」
「有り得ません」
誰一人として例外はいない、それを確かに断言したのだった。
「我等全て。永遠にです」
「私と共にいてくれるか」
「アーレス様が望まれる限り」
アーレス自身に対して告げた言葉であった。
「そうさせて頂きます」
「それでは私もだ」
「アーレス様も」
「私が存在する限りだ」
神は不滅である。そのことを念頭に置いたうえでの言葉であった。
「そなた達と共にいよう」
「有り難き御言葉・・・・・・」
「私を信じ忠誠を誓うそなた達は何があっても疑うことはない」
まずはこう言うのであった。
「この私についてきてくれるのだからな」
「アーレス様だからこそです」
エリスはエリスでこう返す。
「我等の様な。戦いの中でしか生きられない者を受け入れて下さるのですから」
「私達は同じか」
アーレスは不意にこんなことも言った。
「考えてみれば」
「そうかも知れません」
エリスもそれは否定しなかった。
「結局は」
「そうなのだろうな。私達は同じだ」
「はい」

「戦いを愛しその中でしか生きられない」
まさにそうだというのだ。

第九十九話　宮殿の中へその六

「そしてだ。だからこそ」
「この世界を戦いの世界に」
「しようぞ。いいな」
「喜んで」
「まずはこの世界を全て破壊と流血の世界にし」
「そしてハーデス様が封印より解放されましたら」
その時のことも頭の中に入れていた。既にであった。
「そうしたらその時こそです」
「私は叔父上と共にオリンポスを治められるようになる」
「ゼウス様より禅譲されてですね」
「何故だ」
ここでアーレスは疑問の言葉も出した。
「何故私は受け入れられなかったのだ」
「オリンポスの神々に」
「アテナもアポロンもアルテミスも」
全てアーレスから見れば傍流でしかない。彼にはゼウスとヘラの子という自負があった。それは最早絶対に近いものがあった。
「ヘルメスもヘパイストスもだ」
「誰もがアーレス様を邪険にし愚弄さえしておられました」
「人間達もだった」
またこの話をするのだった。アーレスの声にもエリスのそれにも怨念が宿る。それは底の見えない、まさに暗黒のものであった。
「アテナやアポロンだけを崇め」
「ギリシアでは蔑まれてきました」
「だがこのトラキアは違った」
そうだったのだ。彼はギリシアでは愛されてはいなかった。しかしトラキアやマケドニアといった国や地域で崇拝され愛されてきた

のである。
「私を愛してくれた」
「そしてアーレス様はここにこの宮殿を築かれました」
「愛すべき場所だ」
まさにそうした場所なのだというのだ。
「この宮殿こそが私の玉座のあるべき場所だ」
「その通りですね」
「アテナの聖域を滅ぼしたならばここを聖域とする」
「はい」
まさにこのトラキアがだというのだ。
「わかったな。そうするぞ」
「わかっております」
「以上だ。それではだ」
「はい、私もこれで」
「行くのだな」
「闘うべき相手が来ようとしています」
言葉に微笑みが宿ってきていた。
「ですから」
「そなたが闘うべき相手だな」
「その通りです。来ようとしています」
そうだというのだ。
「それでは」
「行くといい。私はここで見守ろう」
「有り難き御言葉」
「何度も言うがそなた達には私がいる」
またこう言うのであった。
「私がだ。いいな」
「それこそが最も有り難い御力です」
彼女達の後ろには主であるアーレスがいて何度でも蘇らせてくれる、それはハーデスが己の愛する冥闘士達を蘇らせるのと同じであ

った。
「では」
「来るのは教皇だな」
「はい、あの者です」
「あの者もまた強大な力の持ち主」
エリスは彼の力を決して低く見てはいなかった。彼女もまた愚かでない。
「闘いがいがあります」
「だからこそだ。楽しんでくるのだ」
「そうさせてもらいます」
こう話してであった。エリスはアーレスの前を後にした。戦いは神も加わるこの上なく激しいものになろうとしているのだった。

第九十九話　　完

２０１０・３・６

第百話　魔の杖、再びその一

魔の杖、再び

ミロは門の一つに入った。そしてそこから左右に赤い柱が立ち並ぶその赤い宮殿の廊下を駆けていく。廊下はかなり長く何処までであるのかわからない程だ。その先を進んでいくとやがて大きな玄室に出た。そこに彼がいた。

「来たな、スコーピオンよ」

「サタナキアか。やはり貴様か」

「貴様の相手は私しかいない」

その男サタナキアのサリアはミロを見据えながら言ってきた。

「この八大公の私がだ」

「そうだったな。それはマチュピチュの時で既に決まっていた」

「その通りだ。貴様は私が倒す」

サリアはミロを見据え続けていた。

「何があろうともだ」

「そう言うのだな」

「そして言葉を変えることはない」

それもないのだという。

「何があろうともだ」

「つまり俺を倒すのか」

「何があろうともだ。貴様等黄金聖闘士の相手は八大公か神しかない」

まさに彼等だけだというのだ。

「ではだ。いいな」

「来い。受けて立つ」

「私の力は知っているな」

言いながらであった。その杖を出してきた。マチュピチュでミロに対して使ってみせたその杖を出してだ。そのうえでだった。

「そしてこの杖の力もまた」
「あの闘いで破壊した筈だが」
ミロはその杖を見ながら述べたのだった。それは確かに彼が破壊したものである。見間違えようがなかった。
「しかし。何故だ？」
「この杖は何度でも元に戻る」
そうだというのである。彼が今持っているその杖はだ。
「アーレス様の御力によってだ」
「貴様等の神によってか」
「その通りだ。アーレス様は我等狂闘士を何があろうとも助けて下さる」
そうだというのである。
「何があろうともだ」
「それが貴様等の神か」
「我等はアーレス様に全てを捧げている」
その言葉に偽りはなかった。彼にしても本気の言葉である。
「そしてアーレス様はその我々を何があろうとも御護り下さるのだ」
「絆だな」
「そうだ、絆だ」
まさにそれだというのである。
「我等の絆はそれだけのものだ」
「そうか。敵ではあるがだ」
「どうだというのだ？」
「見事だ」
こう言うミロであった。
「皮肉抜きにだ。見事なものだ」
「そう言うのだな」
「何度でも言おう。そしてだ」
「そしてか」
「我等アテナの聖闘士と戦うのに相応しい相手だ」

今度はこんなことを言うのであった。
「まさにな」
「確固たる者は確固たる敵と対する」
「つまりはだ」
その言葉を聞いたミロは静かに返した。
「己に相応しい相手と闘うということだな」
「そういうことだ。ではスコーピオンよ」
「来るのだな」
「そうだ。まずはだ」
言いながらであった。あの赤紫の霧を出してきた。それは。
「クリムゾンミスト」
「まずは霧か」
「私の魔の世界はここからはじまる」
そこからだというのである。
「そしてだ、次はだ」
「杖だな」
「読んでいるのだな」
「如何にも。既にわかっている」
そうだと返してみせる。返しながらその杖を出してだ。かざしてその技の名前を言ってみせるのだった。その技の名前も既にミロの知るものだった。

第百話　魔の杖、再びその二

「デモンズロッド」
「魔性の杖をまたか」
「貴様は私の全ての力を使うに相応しい相手だ」
ミロを認めていた。明らかに。
「だからこそだ。霧と杖を同時に使いだ」
「来たか」
ミロの周りに無数の異形の魔物達が姿を現わしてきた。その彼等がミロに少しずつ迫って来る。何をしてくるかも最早言うまでもなかった。
「魔物達か」
「既にこの魔物達は知っているな」
「知らない筈がない。だが、だ」
「だが、か」
「この程度ならばだ」
言いながらであった。拳を繰り出した。光の拳が縦横無尽に荒れ狂いであった。魔物達を瞬く間に蹴散らし倒してしまったのであった。
「どうということはない」
「そうだな。この程度ではな」
それはリゲルもわかっていた。それを言葉にも出すのであった。
「しかしだ」
「しかし？」
「私の技はこれだけではない」
「まだあるというのだな」
ミロはサリアの言葉を聞き逃さなかった。
「貴様の技は」
「そうだ。見るのだ」

言いながらであった。杖を両手に持ち構えてだ。そのうえで杖を上に掲げてそのうえでその技の名前を叫んだ。その技こそは。
「ダークネスイリュージョン！」
「暗闇の幻か」
「この技を出すのはだ」
サリアは技を放ちながら言うのだった。
「私と同じだけの力を持つと認めた相手にだけだ」
「そうだというのだな」
「暗闇の中で倒れるがいい」
世界が暗闇の中に包まれる。ミロもその中にいた。
「これは」
「光はこの世界の中にはない」
暗闇の中でサリアの声だけがする。
「そしてだ」
「俺が暗闇の中に飲み込まれるというのだな」
「そうだ。貴様は私の闇の中に消えていく」
サリアの姿は見えない。ただ声が聞こえてくるだけだった。
「そのまま何もかも消えるがいい」
「果たしてそうなるか」
しかしであった。ここでミロは不敵な声を出してきた。
「貴様の思う通りにな」
「私のこの技が破れるというのか」
「破られない技なぞない」
そうだというのだ。ミロはだ。
「決してだ」
「ではどうするつもりだ？」
「このミロもまた」
「貴様もまた？」
「まだ技は持っている」
暗闇の中で右手の人差し指を出してきた。その爪が赤く輝き伸び

ている。
「それも最大の技をだ」
「最大の技か」
「スカーレットニードルだけではないのだ」
言葉を少しずつ出していく。そうしてだった。
爪を出してきてた。また言っていく。
「このミロの最大の技、今見せよう」
ミロも切り札を出そうとしていた。そうしてその中でだった。黄金聖闘士と八大公の最初の戦いは正念場を迎えようとしていたのであった。

第百話　完

２０１０・３・８

第百一話　赤い爪の光その一

赤い爪の光

ミロの小宇宙が高まる。これまでにない程に。
「小宇宙を高めてきたか」
「技には小宇宙が必要だ」
こう返すミロだった。声だけのサリアにだ。
「だからこそだ」
「神に匹敵する小宇宙だな」
サリアもまたミロのその小宇宙をしかと見ていた。そのうえでの言葉だった。
「まさにな」
「貴様のこの技もまた」
暗闇はまだ続いている。それが消えることはなかった。
「神の域に達しているものだ」
「ふふふ、残念だが四闘神の方々の力は私のそれではない」
それ以上だというのだ。
「私なぞ。あの方々に比べればだ」
「力は微々たるものか」
「そうだ。だがスコーピオンよ」
またミロに対する言葉であった。
「貴様を倒すことはできる」
「このミロをか」
「さあ、消えるかそれとも」
「消えはしない」
それはないというのだ。
「そして」
「そしてか」
「破れるのはだ」

サリアに対する言葉だった。
「貴様になる」
「言うものだな」
「この闇もまた」
言いながらその小宇宙を高めてだ。一気に放出してきた。
「何っ、小宇宙を!?」
「おおおおおおおおおっ!!」
ミロにしては珍しく絶叫していた。
「闇を払うもの、それはだ」
「まさか。その小宇宙によって」
「聖闘士の小宇宙は光」
ミロはまた言った。
「そしてだ。我等黄金聖闘士のこの十二の聖衣は黄道にある」
「あの太陽の道だな」
「そうだ、そこにあるのだ」
ミロはこう語る。
「その太陽の輝きを常に受けている我々の小宇宙にとっては闇なぞだ」
「果たしてそういくか」
だがサリアもまた己のその闇に絶対の自信を見せるのだった。
「その光ですらだ」
「退けられるというのだな」
「それを今見せてもらおう」
サリアの声の中にある自信は変わらない。それはまさに普遍のものだった。その普遍の声はそのまま闇と同化しているとも言えた。
「貴様の光か、私の闇か」
「どちらが勝つか、か」
「若し私が勝てばだ」
サリアはまずそこから話した。
「貴様はそのまま闇の中に飲み込まれ。そして」

「消える」
「そうなる」
まさにその通りという。その話の間にもミロは小宇宙を放ち続ける。黄金の小宇宙はまさに光そのものとなり闇を退けようとしている。
「貴様が勝てばだ」
「このミロがか」
「そうだ。そうなればだ」
サリアは続いてミロが勝利を収めた場合について語ってみせた。そのケースも語ってみせたのは自信だけではない。そこには公平さもあった。
「私が倒れる時だ」
「貴様がか」
「そうだ。そうなる」
まさにそうだというのだ。
「私の最大の技だが」
「それを破られた時か」
「私が倒れる時だ」
まさにそうだというのだ。

第百一話　赤い爪の光その二

「小宇宙は技そのものだからな」
「確かにな。小宇宙がそのまま技となる」
これは聖闘士や狂闘士だけではなかった。ポセイドンの戦士である海闘士やハーデスの戦士である冥闘士もだ。彼等も同じなのである。
「だからこそだ」
「そうだな。それではだ」
「勝負だ」
まさにそうした勝負だった。
「貴様が勝つか私が勝つかだ」
「闇に負ける聖闘士はいない」
言いながらその小宇宙をさらに高めるミロだった。そして。
光と闇がさらにせめぎ合う。それはさらに激しくなり。
「ぬうううううう・・・・・・・・！」
「くうううううう・・・・・・・・！」
ミロだけでなくサリアの声も聞こえてきた。彼もまた小宇宙を技の中に込めそのうえでミロを包み込み消してしまおうとしているのだった。
そしてだ。光と闇のせめぎ合いの後でだった。
遂に闇が押してきた。ここでサリアの声がしてきた。
「このままだ」
「消すか、このミロを」
「スコーピオンよ」
サリアがまた言ってきた。
「ここでの貴様との戦いは私の勝利だ」
「ここでだと！？」
「そうだ。私の勝利だ」

サリアは今己の勝利を確かなものに感じているのだった。
「このままだ」
「このミロの小宇宙はだ」
しかしここで彼はまた言う。
「この程度だと思わないことだ」
「何っ！？」
「光はまだある」
言いながらまたその右手の爪を赤く光らせてきた。そして。
「おおおおおおおおおっ！！」
「何っ、小宇宙がさらに！？」
ミロのその小宇宙がさらに高まりであった。
光が闇を押した。そうして。
一気に消し去った。そのうえでだ。
「受けろ！」
「むっ！？」
「スカーレットニードルカタケオ！」
サリアの姿が見えたその瞬間にだった。
その指から凄まじい光を放つ。赤い光がサリアを撃つ。
そしてだ。最後の光もだった。
「アンタレスカタケオ！」
それが最後にサリアの心臓を撃つ。全てはそれで決まりだった。
「ぐっ・・・・・・」
「これがこのミロの最大の技だ」
ミロはその技を放ち終えてから言うのだった。
「受けて生き長らえる者はいない」
「確かにな。このサリアとてもだ」
彼はミロの正面に立っている。しかしそれでもだった。
既に動けなくなっていた。あまりものダメージにだ。
だが立ったままだ。崩れ落ちることはなかった。
「立っていることすら耐え難い苦痛の筈だ」

「わかっているのか」
「わからない筈がない。俺の技だ」
だからだというのである。
「カタケオの強さは通常のスカーレットニードルの比ではない」
「その様だな。そして痛みもだな」
「そうだ。それでも立つか」
サリアを見据える。彼は表情一つ変えない。
「今死のうとおかしくはないというのに」
「死は恐れるものではない」
サリアはミロを見据えたまま言い切った。
「アーレス様の為に闘うならばだ」
「それならばか」
「さらばだ、スコーピオン」
サリアはまだ立っている。やはり動じるところはない。
「また貴様と闘うことを願う」
「こちらもだ」
そしてそれはミロもだというのだった。

第百一話　赤い爪の光その三

「貴様の様な者と闘えたことはだ」
「誇りか」
「何があろうと忘れることはしない」
やはり彼も相手を見据えている。その死にゆく戦士を。
「決してだ」
「その言葉嬉しく思う」
最後に微笑んだ。そうして。
「さらばだ」
この言葉と共に姿を消したのであった。後に残ったのはサタナキアの戦衣だけだった。それは魔神の姿を作ってそれまでサリアがいた場所に着くのだった。
ミロはそこまで見届けてだ。静かに言った。
「アーレスの戦士、見事だ」
こう言って先に進むのだった。アーレスの下へだ。
そしてだ。これを感じ取った者達がいた。ミロの勝利をだ。
「勝ったようじゃな」
「そうだな」
シオンは先に進みながら童虎と精神で話していた。
「どうやらな」
「まずはミロじゃな」
「そしてだ」
シオンはさらに言った。
「ミロだけではない」
「他の者達もじゃな」
「そうだ。皆勝利を収める」
そうなるというのである。
「当然私もだ」

「神に勝つのじゃな」
「神の先を読む」
シオンはまたこの言葉を出してみせた。
「ハクレイ様と同じくだ」
「そうじゃな。それができるからこそ」
「教皇だ。例えアテナがおられずともだ」
それでもだと。言葉ははっきりとしていた。
「勝つ」
「そうじゃな。しかしわしはじゃ」
「おそらくは向こうから来る」
彼に関してはそうだというのだった。
「案ずることはない」
「そうか。自らか」
「闘うな」
「無論じゃ」
童虎も考えははっきりとしていた。
「この世の為にじゃ」
「若し敗れれば世界はない」
人の世は、という意味だ。
「わかっているな」
「わかっていなければ今こうして話をしてはおらん」
「先のアーレスとの戦いではライブラの武器を使ったが」
「今は使えぬ」
「だがそれでも勝利を収める」
それでもだというのだ。
「何があろうともだ」
「先の戦いではライブラの武器を持っているからこそ勝利を収めることができた」
「覚えておるか」
不意にこんなことを言ってきた童虎だった。

「あの時のことは」
「思い出したと言うべきか」
これがシオンの返答だった。
「かつてのことを」
「左様か。御主もまた」
「思い出した。あの時もあの者達はいた」
「我等の弟子にして古い友達がな」
「名前は違えど心は同じだ」
違うのは名前だけだという。しかしその他はというのだ。
「全てはだ」
「うむ、同じじゃな。完全に」
「ハーデスとの聖戦では別れることになってしまった」
シオンの今の言葉には悔恨が宿っていた。

第百一話　赤い爪の光その四

「それが運命だったか」
「運命じゃが悲しみのある戦いじゃった」
「そうだった。だが今また巡り合えることができた」
「あの者達はわかっておらんがな」
「しかしそれでもだ」
「魂は同じじゃ。ではな」
「私もまた行く」
シオンは前を見据えていた。
「敵はおそらくエリスだけではないが」
「他にもおるじゃろうな」
「四人だ」
その数もわかっているのだった。
「まずは四人を倒さなくてはならない」
「油断はせぬようにな」
童虎はこのことは釘をさしてきた。
「よいな、決してじゃ」
「わかっている、それはない」
シオンの言葉が確かなものになっていた。これまでよりもだ。
「私もまたアテナの戦士だ」
「ふぉふぉふぉ、教皇の椅子を温めているわけではないようじゃな」
「教皇の椅子は温めるものではない」
「そこから見る為のものじゃ」
「そうだ」
シオンは強い言葉で言った。
「その為のものだ」
「御主が教皇でよかった」
童虎の言葉は温かいものだった。

「まことにそう思う」
「私としては御前の方が教皇に向いていると思っていたのだがな」
「いや、そうではない」
それは違うというのである。
「教皇は御主の方が合っていた」
「私がか」
「アテナはそれを見ておられたのだ」
だからこそ彼を教皇にしたのだというのだ。あのハーデスとのとてつもなく激しく壮絶な戦いの後でだ。彼を教皇に任じたというのである。
「だから御主じゃ」
「そうか。では、だ」
「行くな」
「私のやるべきことは既に少なくなっている」
運命に対する言葉だった。
「しかしだ。それでもだ」
「戦うのじゃな」
「この命の限り戦う」
そうする、それが今のシオンだった。
「御前と同じくな」
「わしはまだ嘆きの壁でやるべきことがあるな」
「わかっているか」
「あの者達と共に戦う」
まさにそうだというのだ。
「そしてエリシオンへの道を開く」
「それがこの時代での我々の運命だ」
「人は幾度も生まれ変わるものじゃ」
輪廻であった。彼等はその中にいるというのだ。
「そしてその中で運命を紡いでいく」
「我等はその運命の中で生き、そして死ぬ」

「そしてまた蘇り」
「聖戦を戦っていく」
「他の者達も同じじゃが」
聖闘士ならばというのだ。
「しかしじゃ」
「我等はその中心にいる」
「わしもそなたも。そして」
「あの者達もだ」
二人の頭の中に彼等のそれぞれの顔が思い浮かんだ。
「常に戦う者としてだ」
「そういうことじゃ。ではじゃ」
「うむ」
「行くがいい
シオンに向けた言葉であった。
「わしは待っておる。若しくは」
「心を送るな」
「そうさせてもらう」
そうするというのである。
「どちらにしても戦うがな」
「貴様もいればそれだけで有り難い」
シオンの言葉は本心そのものだった。
「だからだ。是非な」
「やらせてもらうぞ」
「そしてだ。目指すはだ」
「アーレスの玉座じゃな」
「そうだ。そしてだ」
さらに先を進む。その赤く禍々しい小宇宙に満ちた場所をだ。
「もう言うまでもない」
「そうじゃな。ではな」
「何時かまた一緒に飲もう」

「ふぉふぉふぉ、またな」
「うむ」
こんな話をして彼等も戦いに赴く。まずは聖闘士が勝利を収めた。

第百一話　　完

２０１０・３・１１

第百二話　ゲヘナの神その一

ゲヘナの神

アルデバランもまた先を進んでいた。そこはやはり赤い宮殿の中だった。

血というよりはルビーを思わせるその中を進んでだ。やがて玄室に出た。その古の宮殿や神殿を思わせる部屋にだ。彼がいるのだった。

「待っていたぞ」

「モロクか」

「そうだ、モロクのドーマ」

こう名乗るのだった。

「覚えているな」

「忘れる筈もない」

アルデバランは玄室の中央に来た。そのうえで彼に告げるのだった。

「貴様のことはな」

「そうか。忘れることはないか」

「ゲヘナの魔神」

ドーマを見据えての言葉だ。

「そうだな」

「その通りだ。それはこのドーマだ」

ドーマもまた同じであった。アルデバランを見据えそのまま対峙していた。両者をそれぞれ黄金と紅蓮の小宇宙が包み込んでいた。

「豪力の魔神だ」

「力か」

「そうだ。力だ」

まさにその力だというのである。

「このドーマに力で勝てるのか」

「勝てると言えばどうする」
アルデバランは静かに彼に言ってきたのだった。
「その場合は」
「タウラス、そういえば貴様はだ」
ドーマはその彼を見据えてまた言ってきた。
「聖闘士の中で最も強い力を誇っていたな」
「そう言う者もいる」
アルデバランが己を誇ることはない。だからこそこう言うのだった。
「ではだ。どちらの力が上かだ」
「ここで確かなものとするか」
「ここは通らせてもらう」
アルデバランはドーマを見据えたまま言ってきた。
「何があろうともだ」
「いいだろう、それではだ」
「それではか」
「行くぞ、タウラス」
ドーマの小宇宙がさらに強まる。それはアルデバランも同じだった。
「貴様は俺が倒す」
「通さないというのだな」
「無論だ。通しはしない」
あくまでこう言うのだった。
「アーレス様の御前に行くことはまかりならん」
「その為にここにいるのだな」
「それだけではない」
そしてだった。さらに言うのであった。
「タウラス、貴様と闘う為にもだ」
「ここにいるのか」
「そうだ。タウラス、それは貴様も同じ筈だな」

「そうだな。貴様はこのアルデバランが倒す」
二人はそれぞれ鋭い声で述べてきた。
「行くぞ」
「その前に一つ聞いておこう」
ここでドーマはふと言ってきたのだった。
「一つだ」
「何だというのだ？」
「タウラス、貴様は闘いは好きではないな」
アルデバランのその気質を見抜いての言葉だった。
「そうだな。違うか」
「好きではない」
その通りだと答える彼だった。
「それはその通りだ」
「貴様は本来静かに穏やかに過ごすことを好んでいる」
「俺は本来はこの場にいるべき男ではない」
自分を見ての言葉だった。アルデバラン自身をだ。
「農園か牧場で静かに暮らすのが性に合っているのだ」
「しかし闘うのだな」
「アテナの為だ」
その為だというのである。
「俺は闘うのだ」
「そうか。その為にか」
「俺は闘う」
また言う彼だった。

第百二話　ゲヘナの神その二

「アテナと。人々の為にだ」
「わかった。それではだ」
「それではか」
「闘うとしよう。そして見せてもらおう」
「見るともいうのだな」
「貴様のその闘いをだ」
戦いは好まない、しかしアテナと人々の為に闘う彼をだ。あくまで見るというのである。
「見せてもらおう」
「ではだ」
お互いに構えを取った。そして。
「まずはドーマが拳を放ってきた。光の拳をだ。
「来たか」
「さあ、タウラスよ」
拳を放ってからの言葉だった。
「この拳、どう止めるか」
「そうだな」
問われたアルデバランは冷静なものであった。
「こちらもだ」
「拳を出すというのだな」
「貴様の拳が勝つか」
次にはこう言ってみせたのだった。
「このアルデバランの拳が勝つかだな」
「一つ言っておく」
ここでドーマはさらに言ってみせてきた。
「貴様が防げなければ勝つのはこのドーマだ」
「そうだな。そうなるな」

「必然的にだ、さあ」
ドーマの言葉は続く。
「どちらが勝つかだ」
「では見るがいい」
ここで遂にであった。アルデバランも拳を出したのであった。
「来たか」
「さあ、どちらが上かだ」
拳を放ったうえでの言葉である。
「貴様の拳と俺の拳のどちらかだ」
「一つ言っておく」
ここでまた言ってきたドーマだった。
「このドーマの拳はただ光の速さを持っているだけではない」
「力もか」
「何度も言うがこのドーマの力は狂闘士随一だ」
このことを言うのである。
「誰にも遅れを取ったことはない」
「そうか。それではだ」
「タウラス、貴様もだな」
「そうだ。このアルデバランもまただ」
彼もまた力を持っているというのである。
「力においては遅れを取ったことはない」
「牛は力によって成るものだからな」
「どうやらだ」
アルデバランの言葉が変わってきた。
「我等が闘うことは運命で定められていたな」
「ふふふ、それはわかっていたこと」
ドーマは今のアルデバランの言葉にはさも当然といった笑みで返してみせた。それはアルデバランにとっては意外なものであった。
「最初からな」
「最初からか」

「貴様が忘れているだけだ」
「そうか」
アルデバランとて愚かではない。それで全て察したのだった。
「そういうことなのだな」
「わかったようだな」
「我等は先の聖戦でも闘っていた」
このことがわかったというのである。
「そういうことだな」
「あの時にも貴様と闘っている」
「そうだな。そういえばだ」
「また気付いたな」
「闘いにおいて避けていることがあった」
それがあったというのだ。アルデバランもまたこのことを思い出すのだった。それは遥かな過去の記憶である。今の彼が存在していない時代のだ。

第百二話　ゲヘナの神その三

「あの時の闘いの動きをな」
「言っておくが我等にも一度使った技は通じぬ」
ドーマはこのことも言ってみせた。
「それは貴様等と同じだ」
「そして同じ動きもだな」
「そうだ。通じぬ」
まさにその通りだというのだ。
「貴様もそれがわかっているからこそだ」
「無意識のうちに避けていたというのだな」
「その通りだ。それこそがこのドーマの相手に相応しい」
それだけのことができるからだというのである。
「力だけではないのだからな」
「モロク、貴様もまた力だけではないか」
「無論だ。我等八大公は狂闘士達を束ね」
それだけではないのだった。
「こうしてアーレス様のお傍を守護するのだ。愚かであってできるものではない」
「神を護る戦士達か」
「アーレス様こそは我等が全て」
絶対の忠誠もまた見せるのだった。
「だからこそだ。わかったな」
「何度も聞いている。だが」
「だが、か」
「貴様等のその忠誠と心には敬意を表する」
それにはだというのだ。
「見事としか言いようがない」
「そうか」

「しかしそれは我等も同じ」
そのうえでこうも言うのだった。
「我等聖闘士も同じだ」
「アテナに対してか」
「そして人間に対してだ」
アテナと彼等にだというのだ。
「アテナが信じ愛している人間もまただ」
「確かに我等は人間だ」
ドーマもそれは否定できなかった。己が人間であることはだ。
「しかしだ」
「しかし。何だ?」
激しい光と光の応酬の中でのやり取りだった。双方の拳が光となりそのうえで打ち合っているのである。美しいが凄まじい応酬であった。
「何だというのだ、貴様は」
「人は神の僕」
これが彼の考えだった。
「神は人を導かれる存在だ」
「アーレスがか」
「そうだ。アーレス様が人を理想の世界に導いて下さるのだ」
まさにそうだというのである。
「アーレス様が。人を永遠の戦いが行われる素晴しい世界に導いて下さるのだ」
「それは人の世ではない」
アルデバランはそれは一言で否定してみせた。
「決してだ。そうではない」
「では何だというのだ?」
「それは修羅の世界だ」
彼が述べた世界はそれだった。
「人の世ではない」

「修羅か」
「人は戦いに満ちた世では生きられはしない」
「弱き者達はな」
「強いも弱いもないのだ」
まずそれを否定するのである。
「あるのはだ」
「何だというのだ？それでは」
「慈しみだ」
出した言葉はこれだった。
「それがあってこその人だ」
「戯言だな」
ドーマはにこりともせず彼の言葉に返した。

第百二話　ゲヘナの神その四

「所詮はな」
「戯言だというのか」
「それ以外の何者でもない」
ドーマの言葉は続く。
「人に必要なものは戦いだ。永遠に続く戦いの中で己を磨きそのうえで強くなっていくものだ。それこそが人のあるべき姿なのだ」
「戦いの中でか」
「そうだ。何度も言おう」
やはりドーマは表情を消して述べるのだった。
「それはだ。何度も言おう」
「どうやらだ」
アルデバランはドーマの言葉をここまで聞いて述べた。
「貴様等と我等の決定的な違いはそこだな」
「そうだな。我々は慈しみなぞ知りはしない」
「あるのは戦いだけか」
「そしてアーレス様への忠誠と同士達への連帯感だ」
そうしたものはあるというのだ。
「だが。慈しみというものなぞ持ちはしない」
「あくまで戦うだけだな」
「その中で己を鍛え磨いていく」
こう話していくのだった。
「それが我等狂闘士だ」
「そして今の拳も」
アルデバランとドーマの攻防は今も続いている。その中で言葉を交えさせている。拳と拳が打ち合い光と光となって消えていっている。
「まさにそうだな」

「そうだ。この拳も鍛え上げられていったもの」
まさにその拳こそがというのだ。
「わかったな」
「一つ言っておく」
アルデバランの言葉がここで変わった。
「我等聖闘士の拳もだ」
「どうだというのだ？」
「鍛え上げられていったのもだ」
まさにそうしたものだというのだ。
「だがそれはだ」
「何だというのだ？貴様等の拳は」
「人の為の拳だ」
「人の為か」
「アテナが護る人の為のものだ」
まさしくそれだというのだ。
「そしてアテナの為でもある」
「そして慈しみがあるというのだな」
「その通りだ。人の為の拳だ」
「では。そのどちらが勝つかだな」
「タウラス、貴様はその護るものの為に、そして慈しみをその拳に込めているのだな」
「そういうことになる。人は護るものがあればだ」
アルデバランの言葉が強いものになっていた。そこには確かな強さがあった。
「人は強くなれるのだ。鍛えられるのだ」
「ではだ」
再び拳が打ち合う。
「この拳と拳、どちらが強いかだ」
「このまま確かなものとするか」
「いや、違う」

それは違うと。ドーマの言葉が変わってきたのである。
「それは違うな」
「ではどうだというのだ？」
「拳だけではない」
そうだと言ってきたのだ。アルデバランを見据えながらだ。二人の周りにはそのまま無数の拳と拳が打ち合い続け光の炸裂となって次々と出ては消えていた。
「このドーマの最大の技をだ」
「技か」
「それを見せよう」
ドーマの言葉がさらに強くなっていた。
「今ここでだ」
「いいだろう」
光が何時の間にか消えていた。そのうえで二人は対峙になっていた。
「それではだ」
「俺がこの技を出したことは数少ない」
ドーマはそれだけに真剣であった。まさに闘う戦士の顔だった。
「これは言っておく」
「少ないか」
「俺がその実力を完全に見定めた時だ」
その時だというのである。
「その時にこそ使う技だ」
「わかった。ではだ」
「見せよう」
ドーマの言葉がいよいよさらに強いものになってきた。
「その技をな」
こうして今二人の小宇宙がさらに高まっていく。それは静から動に向かう前の小宇宙だった。それが高まってきているのであった。

第百二話　完

2010・3・13

第百三話　強大な角その一

強大な角

「ではタウラスよ」
「うむ」
アルデバランはドーマと対峙しながら彼の言葉を聞いていた。
「このモロクの最大の技はだ」
「これまで二つの技を貴様に見せてきた」
「そうだったな」
アルデバランもこのことはよく覚えていた。
「それはな」
「そうだ。インフィニティホーンにゲヘナインフェルノ」
イラクでの闘いで見せたその二つの技だ。
「その二つは破られている」
「そして最後の技か」
「その技で貴様を倒す」
まさにそうするというのである。それがドーマの考えだった。
「何としてもだ」
「来るがいい」
アルデバランも腕を組んだ。
「このアルデバランも見せよう」
「グレートホーンか」
ドーマは彼のその腕を組む動作が技の構えであることを既に知っていた。
「それか」
「それは後でわかる」
今言おうとはしなかった。
「後でだ」

「そうか、後でか」
「どちらの技が勝つかだ」
対峙する二つの小宇宙がさらに高まっていく。
「それも見ることになるな」
「では行くぞ」
ドーマはいよいよ技を放とうとする。
「このモロクのドーマ最大の技を」
「来るか」
「受けるがいい、タウラス」
その両手をかざして。そして技を放った。
「ロストガイア！」
「何っ、これは！」
アルデバランも叫ぶ他なかった。
「この技は一体」
「見よ、この世界を！」
何と彼等は今破壊される荒涼とした大地にいたのである。
「この世界こそゲヘナの地だ」
「これがか」
「そうだ。このモロクがかつて神としていた地だ」
まさにそこだというのである。
「そしてだ」
「そして？」
「ここにはまだある」
こうも言うのである。
「この地を見ろ」
「むう、これは」
アルデバランは彼の言葉を受けてその大地を見るとだった。
そこはまさに焼け落ちようとしていた。そして砕けようとしていた。
そうしてだ。その中でまた言ってきたドーマだった。

「貴様はこの中で死ぬ」
「それはこの破壊の中に巻き込まれてか」
「そうだ。このまま死ぬのだ」
こうアルデバランに言うのである。
「この戦い、このドーマの勝利だ」
「勝つというのか」
「そうだ」
まさにその通りだというのである。
「さあ、この砕ける世界の中でだ」
ドーマの言葉が続く。
「貴様は大地に飲み込まれそして噴き出る炎に飲み込まれるのだ」
「そして死ぬというのか」
「このドーマがこの技を出した時はだ」
「貴様が勝利を収める時か」
「そうだ」
まさにそうだというのである。

第百三話　強大な角その二

「その通りだ。ならばだ」
「このアルデバランに死ねというのだな」
「地獄に落ちるのだ」
こうしてだった。今まさに飲み込まれようとする彼だった。
そしてその中でだ。さらに言ってきたドーマだった。
「さあ、大地よ砕けよ！」
そのゲヘナの地への言葉だった。
「そして今この最大の敵を飲み込め。全てを燃やし尽くせ！」
「見事」
そのドーマをここでも褒め讃えるアルデバランだった。
「これだけの技を使えるとは。まさにこのアルデｂランの最大の敵に相応しい」
「その言葉と共に死ぬがいい」
「しかしだ」
だが、というのだった。
「それだけの相手だからこそだ」
「どうだというのだ？」
「俺もまた技を出そう」
見れば腕は組んだままだ。そのままだった。
「貴様に相応しい技をな」
「グレートホーンか。それとも」
ドーマはその彼を見て言ってきた。
「タイタンズノヴァか。どちらだ」
「一つ言っておく」
ここでまた言うアルデバランだった。
「同じ技だとしてもだ」
「どうだというのだ？」

「そこにある小宇宙と心が強くなればだ」
「どうだというのだ」
「それだけ強くなる」
こう言うのである。
「それを見せよう」
「ならばどちらだ」
「それを見せてやる」
こう言ってであった。今その技を放たんとしてきた。
「このアルデバランの最大最高の技だ」
そして出した技は。
「グレートホーン！」
「同じか。いや」
ドーマにはすぐにわかった。
「違う。これは」
「モロク。おそらくこのアルデバランが生涯で会う人としては最強の相手」
彼をそこまで認めているのだ。
「ならばこのアルデバランもその最高の技で葬ろう！」
まさにそうするというのだ。
「この最高のグレートホーンを受けるのだ！」
「むうっ！」
恐ろしいまでの衝撃が起こった。そうしてだった。
ドーマの出したその砕ける大地が吹き飛ばされ炎も消し去られていく。
そのうえでドーマも衝撃を受ける。しかしだった。
「まだだ」
彼は己の両手をクロスさせてそのうえでその衝撃に耐えていた。
「まだだ。この程度ではだ」
「いや、それはできはしない」
無理だと言うアルデバランだった。

「このグレートホーンは俺の全てを注ぎ込んだ技だ」
「それはこのドーマも同じ」
彼もだというのである。
「全てを懸けて。耐えてみせよう！」
そのまま暫く耐え切っていた。しかしだった。
彼は遂に吹き飛ばされた。その凄まじい衝撃に耐え切れなくなった。
そして吹き飛ばされてだ。ゲヘナの地も完全に消え去った。
元の玄室に戻ってだ。大きく吹き飛ばされそのうえで床に叩き付けられた。勝敗は明らかだった。
「ぐうっ・・・・・・」
「勝負ありだな」
そのドーマに告げるアルデバランだった。
「このアルデバランの勝利だ」
「その通りだ。貴様は勝った」
ドーマは仰向けに倒れ伏していた。その中でアルデバランに告げたのである。

第百三話　強大な角その三

「このドーマにだ」
「そうだ。勝った」
それを認める彼だった。
「そして俺はだ」
「今のグレートホーンは受ければ誰だろうが耐えられるものではない」
「その通りだ。俺は間も無く倒れる」
完全にだというのである。
「やはり耐えられなかったか」
「そしてこの時代での戦いは終わったな」
「また闘うことになる」
ドーマは倒れたままで告げてきた。
「しかしだ」
「しかし？」
「今の闘いはこれで終わりだ」
「そうだな」
「行くがいい」
ドーマの声は何とか強さを保とうとしていた。しかしそれには限界が見えていた。明らかにであった。
「だが。アーレス様はだ」
「どうだというのだ？」
「貴様等では勝てはしない」
ここでもアーレスへの絶対の忠誠を見せるのである。
「神には勝てはしない」
「その言葉は受けはしない」
アルデバランにも思いがあった。それ故の言葉だった。
「決してだ」

「そうか」
「神であろともだ」
アルデバランはその決意を出してきていた。
「この世の人々の為ならばだ」
「倒すか」
「何度も言うがだ」
「貴様とは拳を交えられてよかった」
そのアルデバランの心を見て言ったのだった。
「しかしこうも思う」
「どう思うのだ？」
「貴様が仲間であったならば」
言うのはこのことだった。
「こう思うのだ」
「仲間にか」
「ふふふ、不思議なものだな」
アルデバランに対する言葉が続く。
「敵である貴様に対してこう思うとはな」
「そうだな。モロク、貴様が味方だったならば」
「貴様もそう思うのか」
「そうだ。それは確かだ」
「最高の褒め言葉だ。ではな」
「さらばだ」
こう言ってであった。アルデバランは玄室を去る。ここでの戦いもそれで終わったのだった。聖闘士側はここでも勝利を収めたのだった。
ドーマはそのまま静かに死を迎えようとしていた。その時だった。
「ドーマよ」
「エリス様ですか」
「そうだ、私だ」
エリスが彼の前に出て来た。無論それは実体ではなく思念を飛ば

してきたのだ。そのうえで倒れ伏す彼の上に浮かんでいるのだった。
「敗れたな」
「申し訳ありません」
「謝ることはない」
敗北はいいというのである。
「それはだ。よい」
「そうなのですか」
「御前は充分闘った。それでいいのだ」
「有り難き御言葉」
「そしてだ」
またドーマに対して言ってきたのだった。
「今は静かに眠るがいい」
「そうしていいのですね」
「見事な闘いを繰り広げた者にはそれに相応しい眠りがある」
「それに相応しい眠りが」
「そうだ。それがあるのだ」
そうだと話すのである。
「御前はだ」
「私は」
「それに相応しい。ゆっくりと眠るがいい」
「有り難うございます。それでは」
「また蘇る」
エリスの言葉は何処までも優しい。

第百三話　強大な角その四

「アーレス様がおられる限りはな」
「はい、それは」
彼もそれは知っていた。それは狂闘士ならば誰でも知っていることだった。それと共に狂闘士達の強さの秘密の一つでもあることだった。
「よく」
「そういうことじゃ。だからこそじゃ」
「安心して」
「眠るがいい。時が来るまでじゃ」
「はい、それでは」
「眠り。そして」
エリスの言葉は続けられる。
「また戦うのだ」
「そうさせてもらいます」
「アーレス様が負けられることはない」
それは絶対にないという。エリスもまた己の主に対して絶対の忠誠を持っていた。それが揺らぐことは何があろうともなかった。
「何があろうともな」
「最後に地上に立つのは我々です」
「思い出すがいい」
話は遥か過去のものにもなった。
「我等がアーレス様の前に集ったあの時を」
「天界において。天闘士であることを止めアーレス様の下に集ったあの時を」
「左様、あの時をじゃ」
まさにその時をというのだ。
「思い出すのじゃ」

「忘れる筈もありません」
遥かな神話の時代だ。だが忘れる筈のないことだった。
「天界の中でも孤立していた我等でした」
「しかしアーレス様だけは我等にお声をかけて下されていた」
「戦いにこそ至上のものを見出している我等に対して」
「お声をかけて下さったな」
「はい」
まさにその通りだった。孤独だったのはアーレスだけではなかったのだ。それは戦いしか見えない彼等もまた同じだったのだ。
「戦いだけでもいいと。そこからも必ず何かが生まれ出すと」
「破壊があればこそじゃ」
エリスはアーレスの司るそのことについても語った。
「創造があると仰られたな」
「如何にも」
「その時のことを思い出すのじゃ」
言葉はこの上なく優しいものだった。それは自分自身の同志であり頼りにすべき僕に対する言葉であった。そう、仲間に対するものだった。
「よいな」
「そして忘れないことですね」
「左様。さすればじゃ」
「また蘇ります」
ドーマはそのことを確信していた。
「アーレス様の為に」
「永遠に共にある」
「そうです、永遠に」
「我等はアーレス様と永遠に共にいるのじゃ」
「次にこの地上を、そしてオリンポスを統べられる方と共に」
「ではな」
最後にドーマに告げた言葉だった。

「さすれば今はじゃ」
「はい、今は」
「眠れ」
一言であった。
「ゆっくりとな。眠れ」
「では」
「また。戦う時にこそ」
「御会いしましょう」
「その時こそな」
ドーマは静かに目を閉じた。その顔は安らかなものだった。
エリスは彼のその死に顔を見届けてから今は去った。また一つの戦いが終わり次の戦いがはじまる。戦いはまだ続くのであった。

第百三話　　完

２０１０・３・１６

第百四話　星の拳その一

星の拳

赤い廊下を進むアイオリア。やがて玄室に出て来た。そうしてそこにはあの男がいた。

「来たな、レオよ」

「アスモデウスか」

「貴様しかいない」

その男リゲルはこう彼に返してきた。

「このリゲルの相手はだ」

「そう言うのだな」

「如何にも。それではだ」

早速構えに入って来た。そのうえでの言葉だった。

「レオよ、見せてもらおう」

「このアイオリアの拳をか」

「そうだ、それを見せてもらおう」

こう彼に言うのである。

「今からな」

「そうか。今からか」

「来い」

また言うリゲルだった。

「かつてオーストラリアでは貴様の二つの拳を見せてもらった」

「ライトニングボルトと」

アイオリアは彼の言葉を聞いて言った。

「そしてライトニングプラズマか」

「そうだ、その二つだった」

まずはその二つの技について話すのであった。

「だが。それは既に見せてもらった」

「確かにな」

「貴様はまだ技を持っている」
構えを取っているアイオリアを見ながらの言葉だった。お互いに構えを取り合いそのうえで今から闘いに入ろうというのだ。激しい小宇宙が高まっている。
「そうだな」
「そうだと言えばどうする」
アイオリアは隠すことがなかった。
「その場合はだ」
「是非共見せてもらう」
リゲルの声にも小宇宙がこもってきていた。そしてそれは次第に狂闘士特有の禍々しく剣呑なものにまでなってきていた。その中での言葉だった。
「それをだ」
「それではだ。アスモデウスよ」
今度はアイオリアからの言葉だった。
「俺も見るべきものがあるな」
「このリゲルの技か」
「そうだ。貴様もまたあれだけではあるまい」
構えを取りリゲルを見据えながらの言葉だった。
「そうだな。あの技だけではあるまい」
「その通りだ。俺にはまだ技がある」
リゲルも隠しはしなかった。その通りだというのであった。
「まだな。技がある」
「そうか。やはりあるのか」
「そしてだ」
それについて答えたうえでの言葉だった。
「レオよ。その技でだ」
「俺をどうするというのだ」
「倒す」
まさにそうすると。鋭い言葉で告げたのであった。

「貴様を倒すのに相応しい技だ。それでこそだ」
「話は聞いた」
それは確かにであった。
「だが」
「だが、か」
「そうだ。このアイオリアそう容易に倒されはしない」
こう言うのである。
「それは言っておく」
「確かに貴様を倒すことは容易ではない」
そのことについてはリゲルもまた承知であった。隠しもしない。
「しかし。その技ならばそれも可能だ」
「俺を倒すこともか」
「その通りだ。このリゲルは八大公の一人」
リゲルをリゲルたらしめている誇りそのものであった。それを今己から言いそのうえで誇示し己自身の士気を鼓舞させるのであった。
「アスモデウスの戦衣をまとう者だ」
「その名にかけてというのか」
「そういうことだ。それは今言った」
声が強いものになっていた。先程よりもさらにであった。
「言葉は出すだけでは何の価値もないものだ」
「現実のものとしなければ」
「そうだ。何の意味もないものだ」
こう言うのである。

第百四話　星の拳その二

「だからこそだ」
「見せろというのだな」
「そして見るのだ」
言葉は今は両方の意味を持っているものだった。それをあえて言ってみせたのである。そしてリゲルは言葉をさらに続けてきた。
「いいな」
「来るか」
「貴様が見せぬのならばこちらから行く。いや」
リゲルはここでまた言った。
「ふむ、そういうことか」
「わかったというのだな」
「例え何も言わなくとも小宇宙の高まりまでは隠せはしない」
そこから見たというのである。
「そういうことか」
「残念だがこの技を出すには時間がかかる」
アイオリアは構えたままこう彼に返した。
「それはまだだ」
「そしてそれだけ大きな力を持っているということだな」
「そうとも言える」
アイオリアの小宇宙はさらに高まってきている。その中での言葉であった。
「そしてだ」
「技を放つまではどうするつもりだ？」
「貴様のその技」
そのリゲルに対しての言葉だった。
「受けてみせよう」
「いいのか？只では済まぬぞ」

リゲルはアイオリアのその言葉を聞いて逆に返してみせた。
「このリゲルの最大の奥義はだ」
「アスモデウスよ」
アイオリアはそのリゲルに対してまた言ってみせてきた。
「貴様は星の魔神だったな」
「それはもう言うまでもないことだと思うがな」
「確かにな」
「では何故それをあえて問うたというのだ？」
「確かめただけだ」
それだけだというのである。
「ただそれだけのことだ」
「そしてその技もまた星の技だと思っているな」
「違うか？」
「いや、寸分も違うことはない」
まさにありのままといった言葉だった。
「それはだ」
「ではやはり」
「そうだ。星だ」
そのものだという。
「私の最大の技もまた星を使う技だ」
「そうか」
「しかしレオよ」
己の技のことを語ってからまたアイオリアに問うた。
「貴様はそうではないな」
「違うと見ているのだな」
「その通りだ。違うな」
また言うリゲルだった。
「貴様の最大の技は」
「光だ」
これが返答だった。

「俺の最大の技は光だ」
「そうか、光か」
「貴様の星が勝つか俺の光が勝つか」
まさにその二つの対立だというのだ。
「勝負だな」
「そうだな。では見せよう」
「こちらもだ」
お互い技に入る。まずはアイオリアが言ってきた。
「フォトンインヴォーク！」
「むっ！？」
アイオリアの全身から小宇宙が放出される。それはまさに光であった。
「雷の光か」
「そうだ」
まさにそれだというアイオリアだった。
「まずはこれからだ」
「小宇宙を最大まで燃焼させたな」
それが何なのかすぐに察したリゲルであった。
「そうだな」
「如何にも。その通りだ」
「やはりな。そしてそれだけではないな」
「無論だ。これだけではない」
まさにそうだというのだった。
「ただ小宇宙を燃焼させただけではない」
「そしてか」
「そうだ。まだだ」
尚も小宇宙を燃やし続ける彼だった。

第百四話　星の拳その三

「まだだ、これからだ」
「かなり大掛かりな技だな」
それは実によくわかることだった。
「それはこのリゲルの技も同じだがな」
「どう来る？それでは」
「見るのだ」
遂に技を放ってきた。その技は。
「スターダストレクイエム！」
「何っ、これは！」
「さあ、どうだレオよ！」
リゲルはその技を放ったうえでアイオリアに問うてみせてきた。
「この星の嵐、受けられるか！」
「上からだけではないというのか！」
「星は上から降るだけとは限らない」
そうだというのだ。
「こうして横からも四方八方からも来るものだ」
「それがこの技か」
「無数の流星があらゆる方角から襲い掛かる」
それがだというのだ。
「これこそがこのアスモデウスのリゲル最大の技スターダストレクイエムだ」
「このままでは」
アイオリアもその技の恐ろしさは充分過ぎる程察していた。
「倒されるか。俺が」
「そうだ。どうするのだレオよ」
またアイオリアに問うてみせた。
「これだけの技。勝てるか」

「勝てると言えばどうする？」
「絶対の自信があるのだな」
「例えどれだけ傷つこうともだ」
その流星の嵐の中での言葉だった。
「聖闘士は勝つ」
「敗れないというのか」
「そうだ。必ず勝つ」
まさにそうだというのだ。
「それを今見せよう」
「言いながら流星はかわしているな」
そのアイオリアを見ての言葉だ。アイオリアは小宇宙を燃焼させながらも流星達はかわしている。しかしその動きは目では見えない。
「それは」
「そうそう当たるものではない」
アイオリアはこう言い返す。
「如何に流星といえどもだ」
「それはこちらも同じこと」
彼だけではないというのだ。
「このリゲルもだ。最早貴様のあの技は通じはしない」
「ライトニングボルトもライトニングプラズマもか」
「そうだ。最早通じないことは言っておく」
まさにそうだというのである。
「それはだ」
「そうか。通じないか」
「貴様等聖闘士が一度見た技を見切るのと同じだ」
「それとか」
「同じだ」
そのことを強い言葉で言ってみせたのである。
「それとだ」
「それはわかった。だが」

「だが？」
「この技はそうかわせるか」
相変わらず小宇宙を燃焼させながらの言葉であった。
「果たして」
「それだけの技だというのだな」
「この技はこのアイオリアの全てだ」
その言葉通りだった。彼の全身にさらに力が宿る。
そしてそこから。さらなる光が放たれた。
「これは」
星の煌きの如き光だった。それがさらに放たれたのである。
「さらなる光か」
「コスモスオープン！」
そう叫ぶのである。

第百四話　星の拳その四

「これからだ。受けろアスモデウス！」
「むっ！？」
「このアイオリアの最大の技はこれからだ！」
「この技は」
「まだだ」
アイオリアの言葉が不意に変わった。
「だが。見るのだ」
「どうやら逃れられないな」
リゲルは己の置かれた状況を悟った。
「その様だな」
「かわせるものではない」
また言うアイオリアだった。
「だが。それよりも前にだな」
「この星達は減ることはない」
リゲルもまた己の技には絶対の自信を持っていた。それを言葉にも出す・
「そう、さらに増えていくのだ」
「さらにか」
「さて、貴様の技が出されるのが先か」
「貴様の星達が俺を倒す方が先か」
「そうだ。どちらが先か」
まさにどちらが先にそうなるかであった。
「その勝負だな」
「アスモデウスよ」
アイオリアはここでリゲルを呼んでもみせた。
「貴様は動じないのだな」
「動じる？何をだ？」

返す言葉に不敵な笑みが宿っていた。
「何故動じる必要がある」
「そう言えるのだな」
「何度でも言える」
まさにそうなのだというのである。
「このリゲルはだ」
「命を賭けたやり取りが楽しいのか」
「それこそが戦いではないのか」
逆にアイオリアに問い返しもしてきた。
「命を賭けることこそがだ」
「そして狂闘士はその中で生きるのだな」
「同時に己を高めていく」
それもあるのだという。語る言葉は毅然としている。
「そういうものではないのか」
「そうだな。己を高めるということはだ」
「貴様等聖闘士も同じ筈」
「その通りだ。だが」
「だが？」
「我等は狂闘士とは決定的に違うところがある」
それについて話すのである。
「それがだ」
「決定的にか」
「確かに我等は戦う」
このことは否定しないのである。
「だが。その為の戦いはだ」
「守る為の戦いか」
「そうだ。戦いの為の戦いではない」
否定するのはこのことであった。
「貴様等の様にだ。己を高めることは他のことでも充分にできる」
「違うな、それは」

「違うというのか」
「そうだ、違う」
こう言うのである。
「それは違うな」
「では何故違うというのだ？」
「人も神も放っておけば堕落する」
「それはアーレスの考えだな」
「その通りだ。アーレス様の御考えだ」
まさにそれだというのだ。アーレスの考えであるというのだ。
「崇高な御考えだ」
「ではそれは何故崇高なのだ？」
「戦いは命を賭け生き残る為には己を鍛えなければならないな」
「そうだな。それは事実だ」
「心も身体もだ」
「だからこそ戦いが必要なのだな」
リゲルの言葉はわかった。
「そういうことだな、つまりは」
「話は聞いたな。それではだ」
リゲルの小宇宙もさらに高まった。極限にまでだ。
そのうえで流星の数が増えた。まさに荒れ狂う流星の嵐だった。
アイオリアをその中心に置きだ。リゲルは言うのである。
「さて、レオよ」
「俺の技か」
「最早俺の星達をかわすのにも限度が出て来た筈だ」
彼はまずはこのことを言ってみせた。
「技を放たない限り倒れるのは貴様だ」
「わかっている」
流星は次々とアイオリアに当たろうとする。だがそれはその都度砕かれていく。しかしそれにも限界があるのは明らかなことであった。

「だが。貴様が案ずることではない」
「間も無くだな」
「見るのだ！」
ここでアイオリアは叫んだ。
「このアイオリアの小宇宙のさらなる高まりを！」
「むっ！」
その高まりを見るリゲルだった。アイオリアの小宇宙はさらに燃え上がるのであった。

第百四話　　完

２０１０・３・１８

第百五話　光の力その一

光の力

「見るのだアスモデウス！」
「さらに来るというのか！」
「そうだ、フォトンドライブ！」
全身からこれまで異常に凄まじい小宇宙を放ってきていた。アイオリアの身体も力を放っている。立ち上がった姿勢で両手に力を込めて吼える様になっている。
「これが第三の段階だ！」
「これ程までとはな」
リゲルもそれを見て驚きを隠せない。
「そうか、これ程か」
「逃げはしないだな」
「狂闘士に逃げるという言葉はない」
それはないというのである。
「そしてだ」
「そしてか」
ここでもこうしたやり取りになるのであった。
「このリゲルはアスモデウスだ」
「魔神達の中でもかなりの力を持っているな」
「かつてアーレス様の御傍でオリンポスの他の神々、そして天闘士達を争ってきた頃からだ」
「その名は知られていたな」
「まず我等八人がいた」
八大公である。
「この俺はそれからも様々な戦いを経てきた。アーレス様の為に多くの戦いを経てきたのだ」
「それが貴様か」

「そういうことだ。その俺が何故下がるか」
また言ってみせたのだった。
「それは有り得ないことだ」
「そうだな。貴様に限って有り得ないことだ」
「そして貴様はそれがわかっている筈だ」
今度言ってきたのはこのことだった。
「そうではないのか」
「今それがわかった」
アイオリアが今出した言葉は肯定のものであった。
「そうだったな。あの時の聖戦でもだ」
「そうだ。あの時に既に我等は闘っている」
リゲルは己の流星達の中で語る。
「それを思い出したなら何よりだ」
「そうだったな。しかしだ」
「しかしか」
「あの時はこの技を使わなかった」
この話もするのだった。
「あの時はな」
「しかし今はか」
「あの時の俺と今の俺は確かに同じだ」
アイオリアはそれは認めた。
「しかしだ。同時に違うものだ」
「違うか」
「そうだ、違う」
まさにそうだというのである。
「貴様は同じかも知れない。しかし俺はだ」
「同じであり違うか」
「その証が今の俺のこの技だ」
小宇宙がさらに燃え上がってだ。そうしてである。
「おおおおおおおおっ！！」

「来たか！？」
「遂にこの時が来た！」
アイオリアは叫んだ。
「受けよアスモデウス！」
「この技は」
「そうだ。フォトンバースト！」
彼を中心として凄まじい爆発が起こった。
そしてその爆発にだ。リゲルも巻き込むのだった。
「なっ、何、これは！」
「この技、避けられるか！」
その爆発の中心から叫ぶ。
「これをだ！」
「うっ！」
「これで終わりだ！」
言いながらその爆発する小宇宙をリゲルに対して向ける。そうして。
「おおおおおおおおおおおおっ！！」
「くっ、これは・・・・・」
「このアイオリアの全て」
今出したその小宇宙の爆発をリゲルに炸裂させる。

第百五話　光の力その二

リゲルは逃げなかった。受けようとする。しかしであった。
「なっ、このリゲルをもってしてもか」
「受けられるならばだ」
アイオリアはその攻撃を炸裂させたうえでリゲルに対して言う。
「俺はそれで倒れる」
「まさに貴様の命だというのだな」
「そうだ。俺が倒れるか貴様が倒れるか」
その凄まじい小宇宙の炸裂を何とか受けようとするリゲルに言うのである。「そうした勝負だ」
「そうだな。そうした勝負だな」
「俺は敗れはしない」
アイオリアはまた言った。
「決してだ」
「決してか」
「そうだ、決してだ」
彼もまた自信があった。
「その為にもこの技を放った」
「そうか。それならだ」
リゲルもさらに言う。
「貴様のこの技を受けきればいいのだな」
「できればな」
「そうだな。・・・・・・だが」
「だが？」
「この技はまさかな」
さしものリゲルも明らかに押されてきていた。それは彼の言葉にもはっきりと出ていた。それを隠すこともできなくなってきていた。
「ビッグバンだというのか」

「黄金聖闘士はその命をかけた時」
また言うアイオリアだった。
「まさに神に迫ることができる」
「神か」
「そうだ。その力でだ！」
その全てを賭けたアイオリアの叫びだ。
「今貴様を倒す！」
「くっ！」
「これで決まりだ！」
その前に突き出した両手からさらに小宇宙を放つ。
「アスモデウス、俺の勝利だ！」
「うおおおおおおおおおおおおおおっ！！」
リゲルが絶叫し吹き飛ばされた。これで全ては決した。
彼はそのまま大爆発に巻き込まれそのうえで床に叩き付けられる。
身体はその戦衣をもってしてもダメージを抑えられなかった。致命傷だった。
「くっ、これか」
「そうだ、これがフォトンバーストだ」
まさにそうだというのだった。
「このアイオリアの全てを賭けた技だ」
「そして最大奥義か」
「その通りだ。俺の勝ちだな」
「そうだ、貴様の勝利だ」
リゲルもそのことを認めてきた。しかしであった。
彼は立ち上がった。足はふらつき全身に傷を受けながらもだ。それでも立ってそのうえでそのアイオリアに対して言ってきたのである。
「まさにな」
「では何故立つ？」
「ふっ、俺が今立ったことか」

「そうだ。それは何故だ」
このことを言うのであった。
「貴様が今立ったのはだ」
「ダンディズムだ」
リゲルは不敵に笑って言ってみせてきた。
「このリゲルのだ。ダンディズムだ」
「ダンディズムか」
「そうだ、ダンディズムだ」
まさにそうだというのだ。
「最後までそれは貫かせてもらう」
「貴様がそれを意識するとはな」
これはアイオリアにとっては意外なことだった。だからこそ言ったのである。

第百五話　光の力その三

「意外なことだな」
「そうなのか」
「戦いだけではないのか」
「ふっ、我等とて人間だ」
その二本の足で立ちながらの言葉であった。
「人間ならばだ」
「そうしたものを持っているのか」
「戦いの中にもそれを持つ」
不敵に笑いながら言ってみせた。
「それもあるのだ」
「そうか」
「わかったか、だからだ」
「よくわかった」
アイオリアは彼の今の言葉に対して頷いて応えた。
「それはな」
「天界には人もいる」
リゲルはこのことも言ってきた。
「それは知っているか」
「いや」
だがアイオリアは今度はこう返した。
「そうだったのか」
「それは知らなかったようだな」
「その通りだ。そうだったのか」
「天闘士は人だ」
具体的には彼等のことであった。
「人がなるものだ」
「人がか」

「そうだ、人がなるものなのだ」
このことを話すのであった。
「我等もまたそうだったのだからな」
「神ではないのか」
「我等は人だ」
これをまた言うリゲルだった。
「それと同じだ」
「では聞こう」
アイオリアは強い言葉でそのリゲルに問うた。
「貴様等は神ではなかったのか」
「そうだ。神ではなく人なのだ」
そしてさらに言ってきた。
「人が選ばれてなるものなのだ」
「というとだ」
アイオリアは自分達にもあてはめて考えてだった。そのうえでまた言った。
「我等と同じだ」
「そうだ、同じなのだ」
「やはりな。我等とそういう意味で同じなのだ」
こう言うのである。
「貴様等とだ」
「そうか。人とか」
「そして我等は選んだのだ」
「天闘士ではなかったのか？」
「かつてはそうだった」
それは過去のことだというのだ。
「かつてはだ。だが我等はアーレス様を選んだのだ」
「破壊と流血をか」
「そしてアーレス様をだ」
その二つをというのだ。

「選んだのだ。アーレス様もまた我等をだ」
「選んだのか」
「いや、選んだのではない」
「それは違うのか」
「受け入れて下さったのだ」
そうだったというのである。
「我等の様な天界において除け者達をだ」
「除け者だったのか」
「我々は天界においては異端だった」
「その考え故にか」
「我々は他の神々においても嫌われうとまれていた」
それが彼等の過去だったのだ。現在ではなかったのだ。

第百五話　光の力その四

「そしてアーレス様もだ」
「アーレスもか」
「我等の考えは否定され疎まれるものでしかなかった」
「だがその中でか」
「我等はアーレス様に受け入れられたのだ」
「そして今に至るのだな」
「そのことは忘れはしない」
決してという口調だった。
「我々はアーレス様の為に何処までも戦う」
「貴様達の人としての心故にだな」
「その通りだ。それではまた会おう」
「そうだな。また会おう」
アイオリアも彼の言葉に応えて返した。
「次の戦いの時にはだ」
「思えば天界で孤独に苛まれていた彼等がアーレス様に出会い」
「そしてだな」
「そのうえで貴様の様な男に出会えた」
このことも話すのだった。
「思えば幸せなものだな」
「俺もまたそうだな」
「レオ、貴様もか」
「アテナに出会えそのうえ貴様の様な男と闘えた」
彼もまた言った。
「幸せなことだな」
「その言葉有り難く受け取っておく」
リゲルは何とか立ちながら言葉を返した。
「ではな。レオよ」

「去るか」
「今はそうさせてもらう」
不敵に笑ったうえでの言葉だった。
「ではな。さらばだ」
「また会おう」
リゲルの小宇宙が消えた。立ったままであったが。
そしてアイオリアはそれを見届けてだ。静かに言うのであった。
「見事だった」
そのリゲルへの言葉である。そう言ったうえで玄室を後にしさらに奥に向かった。
この戦いも見られていた。見ている者達が話をしていた。
「さて、これでアテナがまた勝ったな」
「これで勝利は三つ」
「あと九つの勝利が必要だが」
「どうなるかだな」
「そうだな」
こう話していく。
「さて、それにしてもだ」
「どちらが勝つかだな」
「聖域かトラキアか」
「アテナかアーレスか」
言葉は楽しむものだった。それと同時に上から見るものでもあった。
「どちらかだな」
「さて、どちらが勝つ？」
「そしてその後はどうなるかだ」
「まあそうね」
ここで女の一人が言ってきた。
「アーレスが有利ね」
「本人がいるからだな」

「それは」
「ええ、そうよ」
女はそれを理由とした。
「だからこそ。アーレスが勝つわ」
「それに対してアテナはいない」
「これは大きいな」
「そうだな」
それを受けての他の言葉だった。
「神がいるといないのとでだ」
「それだけで全く違う」
「しかもだ」
彼等はさらに話していくのだった。
「彼等には四柱の神々がいる」
「そして争いの女神エリスもな」
「その存在も大きい」
「神は六柱」
その数も述べられた。
「それに対して聖域はアテナすらいない」
「勝負はあったか？」
「いや」
しかしであった。ここで一人が言った。重厚な声であった。
「それはどうか」
「といいますと」
「聖域が勝つのですか」
「この戦いは」
「そうなのでしょうか」
「その可能性はある」
重厚な声がまた述べてきた。
「何が起こるかわからない」
「しかしです」

「彼等には神がいません」
「それは否定できません」
それが大きいというのだ。やはりそうなのだというのだ。
「所詮人が相手ではです」
「どうしようもないのではないでしょうか」
「神には勝てません」
「どうしてもです」
「いや、わからないな」
だがその声は言うのだった。確かな声だ。
「あの黄金聖闘士達の強さもかなりのものだ。若しかするとだ」
「ふむ、そうですか」
「貴方がそう仰るのならば」
「もう少し見ていきましょうか」
そうしていくというのだった。彼等はここでもう一度戦いを見ることにした。そのうえで彼等の周りにあるものが出て来たのであった。
「うむ、これだ」
「これこそが我等の飲むべきもの」
「そして食するべきものだ」
「その通りです」
彼等はその黄金に輝くものをそれぞれの手に取り飲み食いをはじめた。そうしながらまた闘いを見ていくのであった。
「我等から離れてアーレスについたあの愚か者達と」
「アテナにのみ忠誠を誓うあの者達」
「あの者達のどちらが滅びようとも我等にとってはいいことだ」
「まさにな」
これは彼等の事情だった。
「さて、戦ってもらうか」
「できれば共倒れになってもらいたいものだ」
「そうだな」

こう話していく。そうしてであった。
「さて、それではだ」
「次の闘いはだ」
「どの者達が闘う？」
「果たして」
こういいながら観ていくのだった。彼等の戦いは何者かに見られていた。それは決して見えるものではない。だが彼等は確かに観ていた。そしてそれを観ることを楽しんでさえいるのであった。

第百五話　　完

２０１０・３・２２

第百六話　剣と剣その一

剣と剣

シュラもまた先に進んでいた。そして玄室に出るとであった。
「待っていたぞ」
「やはり貴様か」
シュラはその声の主に対して冷静に返してきた。
「貴様がこのシュラの相手か」
「違うとでも思っていたか？」
「いや」
そうではないと。彼に返すのだった。
「間違いなく貴様と闘うと思っていた」
「俺もだ。何しろだ」
「俺と貴様はこれまでも闘ってきている」
シュラはこうその男ジークに対して告げた。
「だからこそだな」
「そうだ。貴様と俺はあの時も闘っている」
ジークもまた彼に返す。
「だからだ。必ず会うと確信していた」
「そして闘うとな」
「その通りだ。では行くぞ」
ジークはその手に剣を出してきた。あの赤く禍々しく輝く剣をだ。
その剣を右手に持ちシュラを指し示して。そうしてまた言ってみせた。
「いいな。カプリコーンよ」
「その剣で俺を倒すか」
「貴様を斬る」
声が鋭いものになっていた。まさに剣そのものになっている。
「必ずだ。いいな」

「いいだろう。では行くぞ」
シュラもまたその右手を剣にしてきた。聖剣を抜いたのである。
「いいな」
「貴様にとってはその手が剣だったな」
「それもまたあの時と同じだな」
「そうだな。確かにな」
その通りだと。瞑目する様な言葉で返したジークだった。
「だが。変わっているものもある」
「俺が強くなり」
「貴様も強くなった」
シュラはジークの言葉に応えて述べた。
「あの時よりもだ」
「強くなっているのは確かだ」
ジークも今にも技を出そうとしている。シュラもそれは同じだ。
どちらが先に技を出すかである。その問題だった。
「いいな、それではだ」
「ベールよ、貴様はだ」
「どうしたのだ、今度は」
「貴様はかつてはあの地における神だったな」
シュラが言ってきたのはこのことだった。それはジークの過去のことだった。
「そうだったな、覚えているな」
「忘れる筈もない。俺はそこから天界に入った」
ジーク自身も言ってみせる。まさにそうだというのだ。
「だが」
「だが？」
「俺は所詮人だ。人でしかない」
「貴様自身はか」
「そうだ。人でしかない」
こう言うのである。

「ベールは魔神だ。アーレス様の僕なのだ」
「アーレスのか」
「俺もまたアーレスの僕だ」
彼もまたアーレスに対して絶対の忠誠を持っているのだった。そしてそれを隠すこともない。まさにアーレスの僕として闘うというのである。
「貴様もそれは同じだな」
「一つ言っておく」
シュラもまたここで言うのであった。
「このシュラ、いやアテナの聖闘士はだ」
「どうだというのだ？」
「アテナへの忠誠が揺らぐことはない」
「何があろうともだ」
「そうだ、決してだ」
そうした意味でジーク達狂闘士と同じだというのだ。

第百六話　剣と剣その二

「揺らぐことはない」
「そうだというのだな」
「その言葉は嘘ではない」
ジークはシュラのそうした言葉を聞いて静香に述べた。
「目を見ればわかる」
「目でか」
「口で何を言おうとも目で偽ることはできはしない」
ジークは実際にシュラのその目を見ている。お互いに強い光を放っている。まさに星と星の瞬きがぶつかり会っている、そうしたものだった。
「それはカプリコーン、貴様とてだ」
「このシュラ、嘘を言うことはない」
「それはないか」
「間違ってもだ。聖闘士が偽りを言うことはない」
また言うシュラだった。
「例え何があろうともだ」
「それは我等とて同じだ」
「狂闘士もか」
「我等が行うのは戦い」
このことを告げるのである。
「それ以外の何でもないからだ」
「だからこそか」
「そうだ。敵は正面から戦いそのうえで倒す」
言葉には絶対のものさえ宿っていた。
「だからだ。それで何故嘘が必要か」
「アーレスもまた同じか」
「アーレス様が嘘を仰ることはない」

ここでもアーレスへの絶対の忠誠、信頼を見せる。ジークもまたそうしたものを持っているという意味でアーレスの狂闘士であった。
「あの方は真の誇りを持っておられる方だからだ」
「真の誇りか」
「そうだ、それをだ」
持っているというのである。
「だからこそだ。嘘を仰ることはない」
「真の誇りか」
「オリンポスの神々の誰もが認めようとしなかった」
「アーレスの誇りをか」
「だが我等は違う」
それはだというのだ。ここでも彼の忠誠と信頼が出ていた。
「我等はアーレス様の誇りを知っている」
「神としての誇りか」
「オリンポスの神々にも天闘士にもわからぬものだ」
「それは何故だ？」
「あの者達にあるのは己達だけだ」
冷徹なジークも今は感情が見られた。気の遠くなる程の年月の間で積み重なったそれがつい表に出てしまっているのである。それなのだ。
「アーレス様を認めず愚弄しだ」
「愚弄か」
「そしてアーレス様に忠誠を誓った我々もまた排除したのだ」
「そしてオリンポスから去ったのだな」
「そうだ。だからこそ今トラキアにいる」
そうだというのである。彼等がトラキアにいる理由はそれなのだった。
「まずはこの地上を制しだ」
「そして天界もか」
「アーレス様は地上と天界を治められるのだ。そして我々もまた」

「栄誉を受けるというのか？天闘士達が持っているそれを」
「我等には興味のないことだ」
栄誉はというのだ。それには興味はないというのだ。
「栄誉なぞ既に受けている」
「受けているか」
「そうだ、アーレス様にお仕えすることそのこと自体がこのうえない栄誉なのだ」
「惜しいな」
シュラはそんなジークの言葉を聞いて述べた。
「それだけの志を持ちながら」
「アーレス様にお仕えしていることがだというのか？」
「それは違う。貴様が敵であるということだ」
「そのことがか」
「そうだ、貴様と敵であることがだ」
そのことが惜しいというのである。シュラはここでも偽りを語ってはいなかった。真実を語りだ。そのうえで目の前のジークを見据えるのであった。
「そのことがだ」
「惜しいか」
「惜しい、だが」
「闘うのだな」
「貴様も逃げる筈がない」
それは最初から有り得ないとわかっていた。既にだ。

第百六話　剣と剣その三

「それが誇りなのだな」
「そうだ。その誇りを今見せよう」
「来るか」
「このジークの最大の技」
右手の剣が再び光る。それはまるで血を欲しているかの様だ。
その輝きを見せながらだ。ジークはシュラに対してさらに言うのだった。
「今こそ見せよう」
「貴様のその技をか」
「カプリコーン、貴様もだな」
「わかっていたか」
「あの時の貴様の技もかなりのものだった。しかしあの時に最大の技を出すというのもそれはないな」
「感じていた。この時が来るのをだ」
言いながらシュラは次第にその右手の輝きを増していく。彼の剣もまたこの上ない鋭さを見せ今にも全てを断ち切らんとしていた。
そしてだ。両者はさらに睨み合いだ。激しい火花を散らしていた。
「来ないのか、カプリコーン」
「貴様こそな」
互いに隙を窺いながらの言葉である。
「見ているのだな、このシュラの隙を」
「流石だ。アメリカでの闘いの時よりも」
さらに言っていく。
「かつての闘いの時よりもだ」
「どうだというのだ？」
「強くなっている」
そうだというのだ。

「刻一刻と強くなっているな。だがそれはこのジークとて同じこと」
「ではどちらが勝利を収めるか」
「見極めようぞ」
言い合いながらもまだお互いに攻めようとはしない。隙を窺い続けている。
そしてだ。ここでまた言うジークだった。
「隙がなければだ」
「作るのか」
「そうだ、作る」
まさにそうだというのである。
「それがこのジークの闘いだ」
「ふむ、ではだ」
「受けるがいい」
言いながら拳を出してみせた。空いている左腕から光速の拳を出したのだ。
「この拳をだ」
「生憎だがこの程度ではだ」
シュラはそれを見ても表情を変えない。まさに何でもないといったものだった。
「牽制にもなりはしない」
「ならぬというのか」
「そうだ。見るがいい」
シュラは一見すると動いていないように見える。しかしその周囲では丸い光と刃の形の光がぶつかり合う。そしてそれぞれが炸裂していた。
「この通りだ」
「やはりこの程度はか」
「このシュラに通じるものではない」
「そして隙も作れるものではないか」
「そうだ。それではだ」

「うむ」
「どう来るつもりだ？」
あらためてジークに問うのであった。
「拳が通じないとなるとだ」
「知れたこと。隙を作ると言ったが」
「うむ」
「それは止める」
そうするというのである。
「そしてだ。最早小細工はしない」
「では来るというのだな」
「そうだ。カプリコーン」
ここでまたシュラの名前を呼んでみせたのであった。
「行くぞ」
「来るといい。こちらもだ」
シュラもまた身構えながら言う。
「最大の技を繰り出そう」
「エクスカリバーはまだあるというのだな」
「如何にも。そのエクスカリバーの中でもだ」
既にこれまでの戦いで多くの技を見せてきている。シュラはただ剣を振るうだけではない。その手からは実に多くの剣を放つことができるのである。

第百六話　剣と剣その四

「とりわけ切れ味のいいものだ」
「それを見るのも楽しみだ。だが」
「だが、か」
「残念だが俺がそれを見ることはない」
こう言うのであった。
「それはだ」
「ないというのだな」
「そうだ、ない」
ジークはまた言った。
「何故ならだ。貴様はこの技で死ぬからだ」
「だからだというのか」
「このジークが司る魔神ベールは魔神の中でも随一の剣の使い手なのは知っているな」
「既に見た」
「そうだな。このジークに剣で勝てる者はいない」
その自信も見せる。まずはそれがあってのジークだった。
「それは何故か。ベールは八本の足を持っている」
「人と猫と蛙の三つの頭を持つ蜘蛛だな」
「それこそがベールの姿」
魔神の中でもとりわけ禍々しい姿をしていると言える。それがベールなのだ。伊達に八大公として多くの魔神達を指揮するわけではないのだ。
「そしてかつてはバールだった」
「そのバールの剣か」
「そうだ。バールは戦う神でもあった」
死の神モートと絶え間なく戦い続ける神であったのだ。そしてその中で季節と時が移ろいでいく。カナンの地での神話にはそうある。

「その手には剣があった」
「バールが変じたベールもまた、だな」
「今ではこの剣はアーレス様の為にある」
またしてもアーレスへの忠誠を見せる。
「そしてだ。この技こそがだ」
「来たか」
「アーレス様を脅かす敵への最大の攻撃だ。受けるがいい」
言いながら剣を振るう。それはジークの身体よりも大きな、両手で持つべき巨大な剣になった。そしてその巨大な剣を上から下に思いきり振り下ろし叫んだ。
「ムーンブレイド！」
「これは」
「さあ、受けるがいいカプリコーンよ」
技を放ってからの言葉だった。
「この技をだ。受けてみるのだ」
「来たか」
「この技を見せたのは貴様だけだ」
凄まじい衝撃が辺りを縦横無尽に荒れ狂う。天地を引き裂き全てを切り裂かんまでである。それがシュラにも襲い掛かるのであった。
「そう、貴様を倒す為の技だ」
「このシュラをか」
「貴様の技、見せるのだ」
技を放ったうえで不敵に笑っての言葉だった。
「そうでなければ防げるものではあるまい」
「その通りだ」
シュラはジークの最大の技ムーンブレイドを見ても冷静であった。それは変わるところがなかった。
「勿体をつけるつもりはなかったが時が来たな」
「貴様の最大の剣を見せる時がだな」
「そうだ。受けるがいいベールよ」

シュラの目がさらに光った。
「このシュラの技をな」
「貴様の聖剣が勝つかこのジークの魔剣が勝つか」
ジークの言葉が不敵なものになっていた。
「今ここでわかる」
「いや、答えは既に出ている」
「何っ！？」
「このシュラがこの技を出した時はだ
その時はだというのだ。
「全てが決する時。だからだ」
「面白い。この嵐が貴様を切り裂くか」
「このシュラの剣が貴様を斬るか」
「それで全てが決まるな」
「その通りだ」
こう言ってであった。遂にシュラもその最大の技を出すのだった。
闘いはこの玄室においても佳境に入ろうとしていた。そう、まさに
佳境であった。

第百六話　　完

２０１０・３・２４

第百七話　全てを斬るものその一

全てを斬るもの

シュラの右手が動く。それは光の動きだった。

「光か」

「見えるな」

「光を見ることができるのは我等だけだ」

これがジークの返答だった。

「光を操れる我等だけだ」

「そうだな。だからこそ見ることができるな」

「如何にも」

この時もジークの不敵は変わらない。まさにそれこそが彼だった。

「さて、そしてどうする？」

「このシュラもまた剣を使う者」

シュラは右手をゆっくりと振り上げながらジークに告げる。

「ベール、貴様と同じくだ」

「このムーンブレイドは一つの腕だけで放つものではないしな」

「そうだな。ベールの八本の腕でだな」

それで放つ技だというのである。

「使う技だな」

「その通りだ。それがわかるか」

「ベールのことは知っている」

今話すのはそこからだった。

「ならばそれも当然のこと」

「このジークの技は一つの腕から出すものではない」

「そうだな。八本の腕から放つもの」

「だからこそこれだけの威力があるのだ」

ただ一本の腕から放つものではないというのだ。八本の手で放つものだという。そしてだ。その凄まじい攻撃はシュラを襲い続けて

いる。
「さて、これだけの攻撃だが」
「どの様にして退けるかか」
「それも見せてもらおう」
「いいのか？それで」
シュラは今のジークの言葉を受けて冷静な言葉で返した。
「俺が貴様の技を返しても」
「できるならばな」
「つまりそうならない自信があるということか」
「そういうことだ。さて、それがどうなのか見せてもらおう」
「いいだろう。それではだ」
その振り上げられた右腕がだ。一気に振り下ろされた。そして叫ばれた技の名前は。
「カリバーン！」
「何っ！？」
ジークはその技の名前を聞いて思わず声をあげた。
「カリバーンだと！？」
「聞いたことはないな」
「エクスカリバーではないというのか」
「そうだ、聖剣エクスカリバーをも凌駕する技」
こう言うのである。
「これがこのカリバーンだ」
「それでこのジークのムーンブレイドを退けるというのか」
「そうだ、このカリバーン」
また技の名前を言ってみせるのだった。
「そうそう容易な技ではない」
「その様だな」
それはジークも悟ることだった。攻撃を見てだ。
「しかしだ」
「しかし？」

「その腕は一本だな」
「それがどうかしたのか」
「このジークの腕は八本だ」
またその腕のことを話すのだった。
「その八本の腕に勝てるのか」
「勝てると言えばどうする？」
「それもまた見せてもらう」
言葉が逆になっていた。見事なまでにである。
「このジークの技を破れるかどうかだ」
「どちらが勝つか勝負というわけだな」
「その通りだ。貴様の一本の腕が勝つか俺の八本の腕が勝つか」
「ではそれも勝負だ」
こう言ってである。攻防がさらに続く。シュラのカリバーンは一直線に進みＺ一クのムーンブレイドの衝撃波を次々に打ち破っていく。
しかしだ。衝撃波は次から次に来る。まさに尽きることがない。
「まだ出て来るのか」
「そうだ、この衝撃波は尽きることがない」
ジークの顔には笑みはない。しかし言葉にはそれがあった。

第百七話　全てを斬るものその二

「だが。貴様の腕はどうだ」
「俺か」
「果たしてこのジークの技を退けられるか」
「退けてみせよう。是非な」
技がせめぎ合い続ける。それは暫くの間互角だった。しかしだ。
やがてシュラのカリバーンが押されだした。僅かであったが明らかに圧迫されていた。それはシュラもジークもはっきりと見ていた。
「どうする？」
「どうするか、か」
「このジークのムーンブレイドが押してきている」
それを見ながらの言葉である。
「このままでは俺の勝利だ」
「このままいけばな」
「まだそうはならないというのか」
「その通りだ。見るがいい」
カリバーンの力が強まった。そうしてだ。
ムーンブレイドを押してきた。そして互角に戻してきたのである。
「戻したか」
「このままいけるかどうかだな」
「生憎だがムーンブレイドも只の技ではない」
そうなっても自信を維持しているジークだった。
「押されようがそう容易に返されるものではない」
「そうだな。どうやら」
ここでまた言うシュラだった。
「このシュラとベール、貴様の小宇宙の闘いだな」
「その通りだな。どちらの小宇宙が上か」
ジークもそれに応えて言う。

「その勝負だ」
「小宇宙で負けることはない」
シュラもまた自信を見せる。
「このシュラの小宇宙はだ」
「ならば見せよう、このジークの小宇宙もだ」
こうして二人はその技に小宇宙をさらに込めていく。そのうえで闘い続ける。
しかしだ。両者がその小宇宙を込めることを最大限にした時だ。
勝敗が見えた。
「くっ・・・・・・」
「見えたな」
ジークがシュラの声の苦悶を見た。
「このジークの勝利だ」
「いや、まだだ」
だがシュラはこうジークに返す。
「この程度ではない」
「小宇宙はまだだというのか」
「このシュラの命の小宇宙を込める」
本気だった。まさにそうするつもりだった。
そしてだ。シュラが実際にその小宇宙をさらに込めた。そしてジークも。
「ならばだ。俺もだ」
「込めるか」
「敗れるつもりはない」
だからだというのだ。
「俺もまた命を賭ける」
「命をか。いいのだな」
「命を賭けることは当然のことだ」
それはだというのだ。
「狂闘士にとってはな」

「そのうえで闘い続けるのだったな」
「そうだ、狂闘士は永遠に闘い幾度も死ぬもの」
既に言っていることをまた言うのだった。
「アーレス様の為にだ」
「そうだな。ではその命、見せてもらう」
「行くぞ」
技の小宇宙がさらに込められてであった。
「この命、ここで賭けよう」
「俺もだ」
シュラもであった。互いの身体がそれぞれの小宇宙に包まれていく。

第百七話　全てを斬るものその三

「命を見せる」
「そうだな」
「その命、どちらが残るか」
「今それを見せる！」
そのまま技がこのうえなく強くなってだ。二人の間で炸裂した。黄金と赤の衝撃が極彩色の華を飾った。そうしてその華が消えた後で残ったのは。彼だった。
「見事だった」
「貴様もな」
シュラがジークの言葉に応える。
「一歩間違えれば俺の方がだったな」
「いや、それは違う」
「違うというのか」
「勝ったのは貴様だ」
まさにそうだというのだ。
「そして倒れているのは俺だ」
「確かに貴様は倒れている」
見ればジークは仰向けに倒れていた。その全身に凄まじい衝撃の痕がある。それを見れば勝敗は明らかだった。シュラは立っていた。その立っているシュラがだ。ジークに対して言うのである。
「ベールよ」
「何だ？」
「貴様は満ち足りているのだな」
「そうだ、満ち足りている」
ジークは倒れながらもこう返した。声は確かにそうしたものだった。
「思う存分闘うことができ」

「それにだな」
「そうだ、貴様とも再び会うことができた」
「だからこそか」
「俺もまた同じだ」
シュラはそれは自分もなのだと返す。
「俺もまた貴様と闘うことで満ち足りている」
「そうなのか」
「そうだ。確かに立場は違う」
それは違うのだという。しかしなのだった。
「だが」
「だが、か」
「貴様との闘い、忘れはしない」
「俺もだ。また会うことになる」
「そうだな。我等は輪廻の中にある」
それはシュラもわかってきていた。その輪廻の中にあるからだ。
そしてその中で動いてだ。黄金聖闘士として闘う自分を見ているのだった。
「貴様もまたな」
「全てはその中にある」
ジークもまたそれは同じだった。
「我等はその中で闘っているからだ」
「ではまた会おう」
シュラはそのジークに再び告げた。
「そしてその時こそはだ」
「勝つというのか」
「そうだ、勝つ」
まさにその通りだという。
「次に勝つのはこのジークだ」
「その言葉確かに受け取った」
それはだと返す。

「しかしだ」
「次も勝利を収めるというのだな」
「この地上と人々を守る為に我等はいる」
この考えは変わらない。それは彼がアテナの聖闘士だからに他ならない。
「だからこそだ」
「ならばそうすればいい。我等はアーレス様の為に闘う」
「それは変わらないか」
「全くな。ではベールよ」
「うむ」
「さらばだ」
これが最後のやり取りになった。
「今は眠るがいい」
「アーレス様に栄光あれ」
ジークも言う。
「この地上と天界を統べるべき方に」
この言葉を最後に息を引き取った。シュラはそれを見届けてから玄室を後にし先に進んだ。彼は最後の闘いに己を向かわせたのだった。

第百七話　全てを斬るものその四

そしてその頃アーレスはそれを見ていた。そのうえで言うのだった。
「案ずるな」
「ジークのことですか」
「そうだ、ジークよ」
エリスに応えての言葉である。
「そなたは必ず蘇る。私が蘇らせる」
「はい、アーレス様がおられればこそ」
「そなた達は幾度でも蘇るのだ」
「それは狂闘士であらばこそですね」
「冥闘士も同じだったな」
これはハーデスの戦士達である。
「確か」
「はい、ハーデス様もまた優しき心を持たれている方」
エリスの声はこうアーレスに答える。彼等はハーデスとは密接な関係にあり自然とその言葉にも敬意が出ているのである。それはアーレスも同じだ。
「ですから」
「叔父上もまた理解されることの少なき方」
「残念なことに」
「私もまた同じだった」
「そのこと、忘れはしません」
エリスの言葉に無念が宿っていた。
「例え何があろうとも」
「済まぬな。私はそなた達があってこそだ」
「いえ、それは違います」
エリスは兄神の今の言葉は否定した。

「それは違うのです」
「違うというのか」
「はい、我等はアーレス様があってこそなのです」
「私ならばこそか」
「アーレス様以外にお仕えすることもありません」
それもないというのだ。言葉には絶対の響きがあった。
「例え何があろうとも」
「神々の時代から言ってくれるな」
アーレスの言葉に親しむものが宿っていた。
「私に対して」
「アーレス様ならばこそです。我等はお仕えします」
「その言葉通りにもしてくれるな」
「我等も。狂闘士達も」
どちらもだという。
「嘘をつくことはありません。アーレス様にお仕えする者として」
「誰一人としてだな。確かに気の遠くなる過去よりそうだった」
「今も。そして」
エリスの言葉は続く。
「これからもです」
「ではだ。私はそなた達の為にだ」
「はい」
「全てを捧げ尽くそう」
そうするというのである。
「私の全てでな」
「有り難き御心」
「有り難いのではない」
アーレスはエリスの今の言葉は退けた。
「そうではないのだ」
「といいますと」
「当然のことだ」

こう言うのである。
「これは当然のことだ」
「我等にアーレス様の全てを捧げられることがですか」
「そうだ、それはだ」
また言うのだった。
「当然のことだ。だから礼なぞいいのだ」
「それは何故でしょうか」
「私はただ君臨するだけの神ではない」
「そうでないのは承知しています」
「ならわかる筈だ。私は私に忠誠を誓い全てを捧げるそなた達に対してだ」
「全てで応える」
エリスはアーレスの言葉の意味がわかった。
「左様ですか」
「そうだ、そういうことなのだ」
「わかりました。ではアーレス様」
「うむ」
「その全て、受けさせて頂きます」
エリスはアーレスの心がわかった。だからこその今の言葉だった。
「有り難く」
「そうしてくれるか」
「では今はこれで」
こう言って思念をアーレスの前から消す。そうして今は兄神の前を去った。その心だけ受けてだ。

第百七話　　完

２０１０・３・２７

第百八話　死の世界の前でその一

死の世界の前で

デスマスクが進む先に誰がいるのか、もう彼にはわかっていることだった。

「さて、それじゃあな」

彼は余裕の笑みを浮かべながら前に進んでいた。そのうえでの言葉だった。

「あの蝿野郎の面を拝んでやるか」

こう言ってだ。赤い廊下を進み同じく赤い玄室に出た。やはり彼がいた。

「来たか」

「来たかじゃねえよ」

目の前にカナンが現われた。その彼に対しての言葉だ。

「来てやったんだよ」

「相変わらず減らず口を言うか」

「これが俺の性分でな。悪く思っても謝罪はしないからな」

「謝罪なぞ求めるつもりは最初からない」

カナンは余裕綽綽の態度を身体全体で見せるデスマスクに今はこう返した。

「しかしだ」

「しかし？」

デスマスクはカナンのその言葉を呼び止めて返した。

「何だってんだ？それから」

「キャンサー、貴様はアテナの聖闘士だな」

カナンが問うのはこのことだった。

「そうだな。それで間違いないな」

「おいおい、何馬鹿なこと問うてくるんだ？」

デスマスクはカナンのその言葉にも軽口で返す。

「この黄金聖衣が目に入らないのか？俺は言うまでもなくな」
「だが貴様は戦いが好きだな」
カナンは鋭い目で彼に返す。
「それもこの上なくだな」
「それがどうしたってんだ？」
「そして人を殺めることにも躊躇しない」
このことも問うのだった。
「そうだな、その通りだな」
「まあな」
デスマスクは今度はあえてこう言ってみせた。
「それはな」
「それではだ」
カナンは彼のその言葉を受けたうえでまた言ってきた。今はお互い技を出すことはない。しかしそれでも全力で小宇宙を放ち合っている。
そしてだ。そのうえで言うのだった。
「何故聖闘士なのだ」
「俺がか」
「そうだ。何故なのだ」
彼への問いを続ける。
「何故貴様は聖闘士なのだ？戦いを好み人を殺めることに躊躇しない貴様が」
「それが疑問なんだな」
「貴様から放たれる小宇宙の感覚はだ」
彼の小宇宙についても語る。
「それは我等のものに似ている。戦いを好み死に迷うことがない」
「まあ戦いもぶっ殺すのも嫌いじゃないさ」
「そうだな。我等狂闘士もまたそれは同じ」
彼等もだというのだ。
「だが。それでもだ」

「それでもかよ」
「聖闘士にそうした者がいるのは何故だ」
カナンの問いは続く。
「前の聖戦で貴様と闘った時からそれが疑問だった」
「前の闘いじゃわからなかったんだな」
「そうだ。それがどうしてもわからなかった」
まさにそうだというのだ。
「キャンサー、貴様は何故聖闘士なのだ?それも最高位である黄金聖闘士なのだ」
「それが知りたいってのか」
「答えるつもりがないのならそれでいい」
その場合もいいというのだ。
「しかしだ」
「しかしか。どうだってんだ?」
「どちらにしろ貴様は倒す」
それは何が何でもだというのだった。
「貴様はだ」
「へっ、ベルゼブブよどっちにしろな」
「貴様もまた私を倒すつもりか」
「俺は蝿は嫌いなんだよ」
デスマスクらしい言葉だった。それをあえて出してみせたのである。
「それもだ。大嫌いなんだよ」
「そして私もまた蟹が嫌いだ」
デスマスクの言葉をそのまま返した形だった。

第百八話　死の世界の前でその二

「そういうことだ」
「まあ拳で語るなんてことは言わないさ」
「では言うのだな」
「そうだ。俺は傲慢な神様ってのが嫌いなんだよ」
デスマスクは余裕のある笑みを浮かべたままだったがその目を鋭いものにさせてそのうえで言ってみせたのである。笑みは口元だけになっていた。
「手前を神様だってことでやりたい放題する神様がな」
「それが嫌いか」
「そうさ。この世で一番嫌いだ」
このことを言うのだった。
「それをまず言っておくぜ」
「だからアーレス様もか」
「嫌いさ。まあ冥界の神様連中よりはましかも知れないがな」
「アーレス様は素晴しき方だ。我等を認め受け入れて下さった」
「手前等はな」
彼等はだというのだ。
「けれどな。他の奴等、特に弱い奴等は虫けら程度にしか思ってないな。違うか？」
「キャンサー、貴様も弱い者達は嫌っているのではないのか？」
「嫌いだがだからといって殺すことはしないさ」
それはないのだというのだ。
「俺はな」
「それはないというのか？」
「俺が倒すのは敵だけだ」
それだけだというのだ。
「武器を持たない、拳を持たない奴を倒すのは聖闘士の流儀じゃな

いからな」
「それは戯言だな」
だがカナンはそれを否定した。
「完全にな」
「俺が嘘を言っているってのか？」
「そうだ、キャンサーよ」
そのデスマスクを見据えての言葉である。
「貴様は戦いの中でこれまで多くの者を殺してきたな」
「少なくともデスマスクとしてだけでもな」
こう言ってみせたのである。
「手前等のとこの雑兵達は相当倒させてもらったな」
「そしてその前にもだったな」
「ああ、おおよそ察しはついてるさ」
不敵な笑みをそのままにしての返答だった。
「俺の前世とかだな」
「いちいちその時の名は言わぬがな」
「そうだな。俺は戦いの時に相当な数を殺している」
「貴様の技で多くの者が倒れた」
カナンの言葉は続く。
「その中には巻き添えになった者も多い」
「これからもそういう奴はまた出て来るな」
「それでどうしてそう言える」
ここまで話しての問いだった。
「キャンサー、貴様は何故そう言えるのだ？」
「一つ言っておく」
ここでデスマスクの顔から完全に笑みが消えた。そのうえでの言葉であった。
「俺達黄金聖闘士はだ」
「どうだというのだ？」
「それこそ動くだけで相当の力を放つ」

「そうだな。それはな」
「そして俺達が動く時はだ」
その時のことも話すのだった。
「この世界が危機にある時だ。その時はだ」
「犠牲もか」
「それも覚悟してのことだ」
そうだというのだ。
「犠牲も止むを得ない、そう教皇が判断された時にだ」
「出陣するというのだな」
「そういうことだ。俺達が出る時はそうした時だ」
「では戦いで死ぬ犠牲を止むを得ないというのだな」
「そうだ」
今度の返答は一言だった。
「その通りだ。わかったな」
「それは貴様だけではないな」
「当たり前だ。黄金聖闘士全員だ」
彼だけではないというのである。
「俺達はそれだけのものを背負って出陣する。覚悟もな」
「では聞こう」
カナンの問いは続く。
「キャンサー、貴様はその命を背負っているのか」
「巻き込まれた奴等の命をか」
「そうだ。背負っているのか」
問うのはこのことだった。

第百八話　死の世界の前でその三

「それはどうなのだ？」
「当たり前だな」
これが今のカナンの問いへのデスマスクの返答だった。
「それはな。当たり前なんだよ」
「あまりそうは見えないがな」
「このデスマスクの技で死んだ奴は全員冥界巨蟹宮に顔が浮き出る」
言うのはこのことだった。
「そして俺が倒れるまで呻き声を出し続ける」
「巻き込まれた者達もか」
「それが俺の技の特徴だ」
「では背負っているというのだな」
「俺は目的の為なら誰でも倒せる」
デスマスクはまた言った。
「年寄りだろうが子供だろうがだ。女でもだ」
「巻き込んでもだな」
「そうさ。そしてその命を背負っている」
その言葉に偽りはなかった。何時になく真剣な口調でもある。
「それが俺のやり方だ。その為には何でも納得させる力が必要だ」
「貴様の正義もまたアテナの正義か」
「そして聖闘士の正義だ」
「成程な。やはり貴様は我等に組することはないか」
「馬鹿言え、アーレスの野郎もハーデスの野郎も糞くらえだ」
このことははっきりと言い切ったのだった。
「何があっても心から服従することはないからそれは安心しろ」
「その言葉を聞いてある意味安心した。こちらも気兼ねなく相手ができる」
「俺を倒すってのか」

「我等が倒した相手の命を背負うことはない」
カナンはこのことも話した。
「貴様等の様にな。確かに武器を持たぬ相手には興味はないがな」
「へっ、つまり戦士だってのか」
「そうだ。我等はアーレス様の戦士」
このこと自体が彼等の誇りでもある。
「しかと言っておこう」
「何度も聞いたがな。しかしあらためてわかったぜ」
「貴様等と我々の違いがか」
「ああ、よくな」
このことを言うのだった。
「そしてだ」
「今度は何だ？」
「ベルゼブブ、手前はかつては神様だったな」
「そういうことになっているな」
デスマスクの言葉を受けての言葉だった。
「カナンの地のだな」
「あの蜘蛛の剣持ってるすかした野郎と一緒だったな。バアルだったな」
「如何にも」
「貴様の戦衣はそうだったな」
「そして私は天闘士だった」
「悪魔になったってことか？」
魔神という存在をあえて悪魔と呼んでみせたのである。
「天使からな」
「そうだな。我等はアーレス様を選び」
カナンもデスマスクの言葉を受けて言う。
「そしてアーレス様も我々を受け入れて下さったのだ」
「それで今ここにいるってのか」
「その通りだ。貴様等と戦士になった事情は違うがな」

「アーレスの野郎のことも知ってるさ」
既に、という今のデスマスクの口調だった。
「もうな」
「覚えているのだな」
「思い出したんだよ。手前等とは前もやり合ったからな」
「あの時はあと一歩で勝利を収められたが」
「残念だったな」
また余裕の笑みを浮かべてみせるデスマスクだった。
「手前等にとってはな」
「あの時はライブラの武器があったな」
「しかし今は、っていうんだな」
「そうだ。今はないな」
「確かにそれはないさ」
それは言うデスマスクだった。
「それはな。しかしだ」
「しかし？」
「それでも俺は余裕で勝ってみせるぜ」
こうも言うのだった。

第百八話　死の世界の前でその四

「簡単にな」
「そう言えるのか」
「まさかと思うが俺の技は今まで出したので全部だとは思ってないな」
「そうだな。それはな」
「とっておきのがあるからな」
そうだというのである。
「それはベルゼブブ、手前もだな」
「そうだ。私とて技はまだある」
カナンもだというのだ。それはだ。
「貴様と同じくな」
「ドイツでの戦いの時にそんなことを言っていたな」
「覚えているか。それならだ」
「話が早いな。俺の技が勝つか」
「貴様の技が勝つかだな」
「そういえばまた思い出したことが出て来たぜ」
デスマスクは余裕の笑みをそのままに話す。
「ベルゼブブ、手前は冥界を統率する立場でもあったな」
「俗にそう言う者もいるな」
カナンもこう返す。
「欧州の者達だな」
「地獄の最高長官だったな」
「だが私は冥界には縁があろうと治める立場にはない」
それは違うというのである。
「それはハーデス様及び冥闘士の者達だ」
「縁があるからそう言われるだけか」
「そういうことだ。だがその縁はだ」

「どうも俺と近いような」
「キャンサー、一つ言い忘れていたことがある」
「今度は何だ？」
カナンのその言葉に対して問い返す。
「何があるっていうんだ？」
「貴様は我等以上に冥界の匂いが強い」
そうだというのだ。
「死の香りに満ちている」
「それにかよ」
「そうだ。あの一連の積尸気の技を使うからか」
「その通りだ。俺はこの世とあの世も行き来できる」
「ふむ」
「そうした意味では同じだな」
デスマスク自身が認める言葉だった。
「ベルゼブブ、それは手前もだな」
「如何にも。そしてだ」
「そして？」
「今から行くんだな」
今度は彼から問い返したのだった。
「そうだな」
「そのつもりだ。ではキャンサー」
カナンの目も鋭くなる。
「いいな」
「来るか」
「このカナン最大の技」
カナンの全身に赤く禍々しい小宇宙が沸き起こる。それはデスマスクにもはっきりと見えている。そうしてそのうえでまた言うのだった。
「今ここで見せよう」
「来るか」

「キャンサーよ」
デスマスクにまた言ってきた。
「冥界に行くがいい」
「面白い言葉だな」
デスマスクもその言葉を受けて笑う。
「俺にとっちゃ冥界はな」
「全くどうとでもないようだな」
「それも見せてやりたくなってきたな」
「そうか。ならば余計にだ」
「行くぞ」
そうしてだ。その放つ技は。
「何故このカナンが地獄の最高長官とされたかだ」
「そのこともここでわかるか」
「その通りだ」
まさにそうだというのだ。
「それもだ」
「見てやるぜ。少し飽きてきたしな」
「飽きただと？」
「アーレスの野郎の宮殿をずっと見てるのもな」
「それがか」
「一度遊び場を見てから戻るのがいいな」
「ふむ」
カナンはデスマスクのその言葉を聞いてまた述べる。
「勝つつもりか、貴様が」
「その通りさ、俺が勝つ」
まさにそうだというのだ。
「何があってもな」
「言うな。では私もその言葉を返そう」
「手前が勝つってのか」
「この技でな。受けるのだ」

右手を前に出してきた。そうしてだった。技が放たれる。そのうえで二人は玄室から姿を消した。だが二人の闘いはそれで終わりではなかった。

第百八話　　完

２０１０・３・２９

第百九話　黄泉比良坂その一

黄泉比良坂

「受けろキャンサー！」
「面白い、見てやるぜ！」
「これがベルゼブブのカナン最大の技」
それを放った。両手をクロスさせてそれを前に突き出してだ。黒い衝撃を一度に放ったのだ。
「ラストダークネス！」
「闇が！？」
「冥界に行く闇だ」
カナンはその技を放ちながら言った。
「この技を受けて死ぬのだ。いいな」
「あそこに行くのも久し振りだな」
デスマスクはカナンのそのラストダークネスを受ける。しかしそれを受けてもだ。それでも彼の余裕綽々の態度は変わらなかった。
「さて、行くか」
「いいだろう。では私も行こう」
その闇の中に消えるデスマスクを見てだ。カナンも言うのだった。
「あの場所にだ」
彼もまた闇の中に姿を消した。玄室には誰も残ってはいなかった。
こうして二人が辿り着いた場所はだ。陰気な荒野だった。
灰色と赤が混ざった様な色の岩や土がある。そこは緩やかな坂になっていて上に向かって多くの者達が虚ろな足取りで進んでいる。
そこに来たのである。
「本当に久し振りだな」
「動じていないか」
「何度も言うがな」
デスマスクは首を横に振り頭の後ろに手を置きながらそのうえで

自分の前に出て来たカナンに対して言うのだった。余裕の口調だ。
「ここは俺にとっちゃ遊び場なんだよ」
「あくまでそう言うか」
「ベルゼブブ、手前もそうだな」
「その通りだ。ここは私にとっては自分の部屋も同じだ」
彼もだというのだ。
「貴様と同じくな」
「わかったぜ。じゃあな」
「どうするというのだ？それで」
「それは俺がまず聞くぜ」
カナンを見ながらの言葉だった。
「俺はこの世界に来ても自由に帰ることができる」
「その通りだな。私と同じくな」
「あの技はそうした技だな。俺の技と同じだ」
「貴様のあの技もまただな」
「そういうことだな。普通の者ならあれで終わりだ」
それはカナンもよくわかっていた。
「だが」
「俺と手前は違う。ここに来てもそれで終わりじゃねえ」
「しかし貴様はあえて俺をここに呼んだ」
「それは何故かだ。貴様をここで倒す為だ」
「手前のその技をだ」
「死んでもらう」
カナンはそのままこの場所でも構えを取った。そうしてだ。
「いいな、それではだ」
「行くぞ」
「受けるがいい、キャンサーよ」
言いながら出すその技は。
「ブラックエンドライト！」
「その技かよ」

「そうだ。キャンサーよ」
技を放ちながらの言葉だった。
「貴様はこの技で死ぬのだ」
「へっ、生憎だがな」
しかしここでデスマスクも技を放ってきた。その技はだ。
「来た！」
「その技はだ！」
「受けろ！」
そしてここで彼も技を出した。その技は。
「積尸気魂葬波！」
「その技か！」
「技には技ってな！」
こう言っての返し技だった。
「これならどうだ！」
「おのれ、それならだ！」
黒い光と爆発が炸裂する。
「受けろ！」
「このままだ！」
「一気にだ！」
このまま激突が続く。そのうえでだ。
その二つが消え去ってだ。後に残ったのは両者だけだった。両者の技が消え去ってだ。そしてそのうえでまた言い合うのだった。

第百九話　黄泉比良坂その二

「相変わらず力は凄いな」
「貴様もな」
デスマスクとカナンはそれぞれ言い合う。
「しかしな。それでも勝つのは俺だ」
「貴様だと言えるのか」
「そうだ。俺は勝つ」
こう言うのだった。
「最後には絶対にな」
「そういえば貴様はだ」
カナンはその彼等を見て話していく。
「まだ技があると言っていたな」
「そうさ」
また不敵な笑みであった。
「手前には何があっても勝てるんだよ」
「貴様の切り札」
カナンはそれを冷静に見ながら述べる。
「ではそれを見せてもらうか」
「いいだろう。いい加減俺もアーレスの野郎のところに行かないといけないしな」
「アーレス様のところに行くというのか、まだ」
「だから何度でも言ってやるぜ」
また返す彼だった。
「それこそ何度でもな」
「では来るがいい」
その技を見ながらの言葉だった。
「貴様のその技でだ」
カナンは言いながらまた構えてきた。そうして言うのだった。

「今度はだ。ブラックエンドライトだけではない」
「あの蝿も出すってのか？」
「そうだ、ヘルズフライをだ」
まさにそれをだという。
「その二つの技を同時に放って倒す、いいな」
「まあその二つの技を同時に受ければな」
デスマスクはその彼の言葉を受けていた。
「確かに俺も無事では済まされないな」
「そうだな。まさにな」
「まあ確実に死ぬな」
自分でもそれはわかっていた。だからこその言葉だった。
「幾ら俺でもな」
「だからこその二つの技でだ。貴様を倒す」
「そうなればいいがな。しかしな」
「しかしか」
「俺もそう易々と受けるつもりはない」
こう言ってであった。余裕のある笑みはそのままだった。
そのうえでだ。構えはしない。しかしだった。
デスマスクの黄金の小宇宙が極限まであがる。まさに黄泉比良坂を全て照らさんまでにだ。それだけの小宇宙を放ちながらの言葉だった。
「言っておくが尋常な技じゃねえからな」
「あの積尸気冥界波よりもか」
「あの技でも手前は倒せねえ」
言葉に鋭いものも宿った。
「だから最初からこれでいくつもりだった」
「貴様のその最大の技でだな」
「出すのははじめてだがな」
このことも言う。
「だがな。それでもだ」

「使うのだな」
「俺もな。死ぬ訳にはいかねえからな」
「その技、見せてもらおう」
「ああ、見やがれ！」
この言葉と共にであった。
「このデスマスク最大の技！」
デスマスクの全身からこのうえない小宇宙が沸き起こりであった。
そうしてその技の名前を叫んだ。
「積尸気転霊波！」
「何っ、これは！？」
無数の戦士達が姿を現した。それは。
「これまでの無数の戦士達がか」
「その通りだ。俺は相手をぶち殺すだけじゃねえ」
それだけではないというのだ。
「こうして魂を呼び出すこともできる」
「それもだというのか」
「そうさ。この技ならだ」
言いながらだった。デスマスクは今にも倒れそうになっている。
しかしその中でも不敵な笑みを浮かべてだ。そのうえで言ったのである。

第百九話　黄泉比良坂その三

「ベルゼブブ、手前を倒せる！行くぜ！」
その戦士達と動きを合わせてだった。今攻撃を放った。
「喰らいやがれっ！」
「くっ！」
これまでの無数の戦士達の攻撃を受けてはだ。如何にカナンといえど耐えられるものではなかった。瞬く間に吹き飛ばされてしまう。
場が戻った。あの玄室にだ。カナンはその床に叩きつけられてしまった。最早立ち上がることは出来なかった。勝敗は明らかであった。
「まさかこれだけの技を持っているとはな」
「正直命懸けの技だがな」
見ればデスマスクは憔悴しきっている。今にも倒れようとしている。
しかし何とか己の両足で立ちだ。そのうえで言うのである。
「それでも生きているぜ」
「それでもか」
「使って三年寿命が縮むとはないがな」
「そういう技ではないか」
「一歩間違えれば俺自身が死ぬ」
デスマスクは言った。
「そういう技さ」
「それをあえて使ったか」
「手前を倒そうと思えばな」
「その技しかなかった」
「積尸気転霊波以外にはな」
「最初の闘いな」
あのドイツでの戦いのことを言う。

「それはわかっていたさ」
「あの時でか」
「これまでの技では倒せなかった」
「私はか」
「積尸気冥界波でもな」
彼にとっての最大の技だ。少なくとも今まではそう思われていた。
「倒せないとわかったならばだ」
「それはできないとわかればか」
「この技しかない」
彼は言った。
「手前を倒すにはな」
「私はそれだけの者だったというのだな」
「その通りさ。俺は俺の命も賭ける」
その目の光は確かなものだった。偽りを言っているものではない。
「勝利を手に入れる為にはな」
「アテナの為にか」
「そういうことになるな。じゃあな」
ここまで話しての言葉だった。
「ベルゼブブ、安心してあの世に行け」
「キャンサーよ」
カナンは己の前に立つデスマスクに対して告げた。
「貴様に一つ言っておく」
「何だってんだ?」
「立て」
告げた言葉はこれであった。
「しっかりとだ。ふらつくことなぞするな」
「へっ、言う言葉はそれかよ」
「そうだ。それだ」
「何だ?それでそう言う理由は」
「私を倒した男がふらつくものではない」

だからだというのである。
「しかと立ちだ。次の戦いに向かうがいい」
「だからか」
「そうだ、だからだ」
これがカナンの言葉だった。倒れてはいてもそれでもだ。彼はまだ心は立っていた。敗れてはいてもそれでも心は立っているのである。
「わかったな」
「わかったと答えてやるぜ。じゃあな」
「そして行け」
またデスマスクに告げた。
「次の戦いにだ」
「アーレスの野郎とのか」
「アーレス様は貴様等では勝てはしない」
「まだそう言えるのかよ」
「これは絶対のことだ。アーレス様は倒されはしない」
倒れていてもその言葉には絶対の響きがあった。
「我等の主は。人には倒されはしない」
「その言葉は聞き入れねえぜ」
デスマスクは今のカナンの言葉にはこう返すのだった。
「生憎だがな」
「ふふふ、それでもいい」
「いいのかよ」
「貴様らしくてな」
そうだというカナンだった。
「それでいい。だがアーレス様はだ」
「だからその言葉は聞かねえって言ってるさろ?」
「そうだな。ではだ」
「へっ、俺達は負けるつもりはねえからな」
言いながらだった。今彼はまた戦いの場に向かおうとする。足取

りはあえてしっかりとしたものにさせている。無理をしてでもだ。
「じゃあな」
「私の言葉はそこは聞いているか」
「馬鹿言え。俺を誰だと思ってるんだ？」
既に彼に背を向けていた。しかしここで立ち止まったのである。
そのうえで彼に顔を向けてだ。こう言ってみせたのだ。
「デスマスクだぜ」
「キャンサーのか」
「そうさ、黄金聖闘士のな」
そうだというのだ。
「その俺が負けるものかよ」
「その言葉、決して現実のものとはならぬがな」
「手前だけさ、そう思ってるのはな」
「そう言えるのだな」
「幾らでもな。じゃあな」
ここまで話して顔を前に戻した。そうしてだった。
「安心してあの世に行け」
デスマスクはその場を後にした。顔を前に戻して歩きはじめた。
後に残ったのはカナンだけだったが彼も事切れた。それで終わりであった。

第百九話　完

２０１０・４・２

第百十話　薔薇の毒その一

薔薇の毒

アフロディーテが玄室に辿り着くとだった。もう彼が待っていた。彼はアフロディーテの前に立ちだ。そのうえでこう言ってきたのである。

「待っていた」

「私が来るのがわかっていたというのですね」

「そうだ。貴様以外にはいない」

その男ミシェイルはアフロディーテにこうも告げた。

「貴様以外にはな」

「貴方の相手をするのはというのですね」

「その通りだ。それは貴様だけだ」

また言う彼だった。

「私の相手ができるのはな」

「有り難い御言葉と申し上げておきましょう」

アフロディーテはミシェイルのその言葉を聞いて静香に述べた。

「まずそれは」

「そう言うのか」

「はい、そしてです」

アフロディーテの言葉はさらに続く。

「私もまた」

「貴様もだというのか」

「私の相手ができるのは貴方だけです」

彼もまた言うのだった。

「アスタロト、貴方だけです」

「そう言うか」

「その通りです。では」

早速その右手に薔薇を出してきた。赤薔薇である。

「早速はじめるとしよう」
「薔薇か」
ミシェイルはその薔薇を見て述べた。
「やはり貴様はそれか」
「私にとって薔薇は身体の一部」
アフロディーテはそれについても言う。まさにそれだというのだ。
「しかし。私はただそれだけで戦っているのではありません」
「薔薇だけでなくか」
「それだけとは思わないことです」
ミシェイルを見据えての言葉だ。その闘気はその整った顔からは想像できないまでに強いものだった。それを見せながらの言葉であった。
「それだけとはです」
「薔薇以外に技があるというのか」
「私もまた黄金聖闘士」
それだというのだ。
「それならばそれも当然のこと」
「薔薇だけには頼っていないか」
「普段はそうであろうとも」
また言うのだった。
「いざとなればです」
「かつて私と戦った時」
ミシェイルはまたアフロディーテに対して告げた。
「そう、その時だが」
「中国との戦いの時ではありませんね」
「あの戦いより前だ」
かつての中国での一連の戦いのことだ。その戦いにおいてアフロディーテは多くのものを見てきた。しかしその時ではないというのである。
「それよりもだ」

「そうですか。それよりもですか」
「わかるな、これで」
「はい」
ミシェイルの問いに静かに返した。
「よくわかります」
「かつての聖戦の時」
話が具体的なものになった。
「その時貴様は私にその外見からは想像できないまでの闘志を見せた」
「美は絶対のもの」
アフロディーテはミシェイルに対して己の信念で返した。まさしくそれは彼にとって絶対の信念である。彼は美こそが正義と考えているからこそ。
「それを崩さないのが私です」
「優雅ではなくともか」
「優雅は確かに美の一つ」
「それは認めるのだな」
「しかし」
ここで言葉がさらに加わった。

第百十話　薔薇の毒その二

「それだけではありません」
「美はそれだけではないか」
「その通りです。美は一つだけではありません」
「あの時の貴様もそうか」
「命を、全てを賭けて戦う」
アフロディーテの言葉が自然と強いものとなる。
「それもまた美なのです」
「その通りだな」
ミシェイルもそれは否定しなかった。アフロディーテの言葉を認めていた。
「私もまた美を愛している」
「貴方もだというのですか」
「そうだ」
まさにそうだというのだ。
「私もまた同じだ。我が魔神アスタロトは美を愛する魔神だ」
「そうでしたね。アスタロトの前身はイシュタル」
「そうだ」
「メソポタミアの美と戦いの女神」
「貴様と同じだ」
そのアフロディーテとだというのだ。
「その貴様とだ」
「同じですね。美と戦いならば」
「そう、我々は同じなのだ」
また言う彼だった。
「美を正義として戦いの中に生きるのだからな」
「そして」
「そしてか」

「そうです、そしてです」
彼の言葉は続く。
「貴方はかつてはその地にいました」
「フェニキアにな」
「そしてオリンポスにあがりですか」
「アーレス様と出会った」
これが彼の歴史だった。戦士になる歴史だった。
「アーレス様は孤独に苛まれ我等も自分達の価値観を否定されてきた」
「その中でアーレスと出会いですね」
「我等は互いにかけがえのないものを感じ取ったのだ」
「そして仕えた」
「アーレス様は我等を受け入れて下さった」
ここでも言うのだった。狂闘士の歴史をだ。
「そして我々はオリンポスの神々、そして天闘士達と戦った」
「天界を追われトラキアに降り立ち」
「オリンポスの神々はこの地を伏魔殿という」
「伏魔殿ですか」
「パンデモニウム」
ミシェイルはこの名前も出した。
「魔神達の城だとな」
「悪の城だというのですね」
「そう呼びたければ呼ぶがいい」
アフロディーテに対しても告げた。
「貴様等もな」
「生憎ですがそのつもりはありません」
「ないというのか」
「貴方達は悪ではありません」
それは言うのだった。
「しかし。我等の正義でもありません」

「聖域の正義ではないか」
「我等の正義は人の正義です」
それが彼等の正義なのだという。
「しかし貴方達は」
「どうだというのだ？」
「アーレスの正義」
それだというのだ。
「まさにそれですね」
「それの何が悪いのか」
ミシェイルもそれを否定しない。完全に肯定さえしている。
「アーレス様の正義の」
「そう、そこです」
「それだというのだな」
「私は美を絶対の正義と信じています」
アフロディーテはまた己の正義を語ってみせた。

第百十話　薔薇の毒その三

「そしてそれと共に力もまた」
「力も正義だというのだな」
「正義は何によって立つのか」
問題はそれだった。
「ただ理想だけによって立つものではありません」
「その通りだ」
ミシェイルもまさにその通りだという。アーレスに仕える者としては頷くべき話であった。
「力こそ正義だ」
「はい」
「まさか聖闘士にそう考えている者がいるとはな」
「それは私だけではありません」
しかも彼だけではないというのである。
「私の他にもキャンサーのデスマスク、そしてカプリコーンのシュラ」
「あの者達もか」
「そして私もまた。我等三人は力があってこその正義と考えているのだ。
「では何故だ。何故アテナの聖闘士なのだ」
「それが何故か、ですか」
「力を正義と考えているのなら」
それこそがまさに狂闘士の考えなのだ。力を正義と考えることがだ。
「それで何故狂闘士とならない」
「それです。何度も言いますが我々の正義の元は人です」
それだというのである。
「アーレスではありません。むしろ」

「むしろか」
「傲慢な神は我々の最も忌み嫌うもの」
こう話すのだ。
「だからこそです」
「我等狂闘士とはならないか」
「そういうことです。我々は人の正義、そしてそれを守るアテナの正義に仕えているのです」
「それはその二人も同じか。確か」
ミシェイルは名前を忘れたわけではない。あえて一呼吸置いたのである。そうしてそのうえでその二人の名前を出してみせたのだ。
「キャンサーとカプリコーンか」
「デスマスクは素直ではありませんしシュラは寡黙です」
流石に二人のことはよくわかっているアフロディーテだった。
「ですが彼等もまた黄金聖闘士です。何度も生まれ変わりそのうえでアテナの聖闘士として戦い続けているのですから」
「筋金入りというわけか」
「貴方達が何があろうともアーレスに仕えているのと同じです」
そのことも例えるのだった。
「そういうことです」
「そういうことならわかった」
ここまで聞いてであった。頷くミシェイルだった。
「信念か」
「聖闘士は信念によって立つもの」
アフロディーテはミシェイルを見据えながら話す。
「貴方達と同じです」
「奇妙だな。戦っているというのに頷ける」
ミシェイルはアフロディーテのその言葉を聞きながら静かに述べた。
「それは他の同志達も同じだろうな」
「八大公のですか」

「そして貴様等黄金聖闘士達もだ」
「そうですね。私にもそれはわかります」
アフロディーテはここでも述べた。
「我々の戦いは信念と信念の戦いです」
「そうだな。どちらの信念が勝利を収めるかだ」
「その戦いだな。それでは」
先に動いたのはミシェイルだった。その身体の周りからあの霧が起こってきたのだった。
「ポイズンブレスですか」
「これはほんの挨拶だ」
その毒霧の中での言葉だった。
「もっとも貴様には毒は効かないようだがな」
「おわかりですか」
「何故毒が効かないかだ」
ミシェイルの言葉が強いものになった。
「それだ」
「私の薔薇には毒があります」
その手に紅薔薇を持っての言葉だ。薔薇はその美しい姿を見せている。しかしその美の裏に何があるのかはもうミシェイルも知っていた。

第百十話　薔薇の毒その四

それを見ながらだ。さらに言う彼だった。
「この紅の薔薇にしても黒い薔薇にしても」
「そうだな。毒に満ちた薔薇だ」
「その薔薇の毒に常に覆われているのです。その私が生半可な毒で倒れることはありません」
「そうだな。少なくともこの程度の毒では倒れない」
また言うミシェイルだった。
「それはわかっている」
「ではその毒はやはり挨拶なのですね」
「そういうことだ。そしてだ」
「そして、ですね」
「貴様を倒す為の切り札はもう用意してある」
こう言いながらだった。その全身に赤い小宇宙を巻き起こさせる。
それは何時になく強大なものであり。彼の全身を覆い尽くしていた。
その中でミシェイルはまた言ってきた。
「このアスタロトのミシェイル最大の技だ」
「それを私にですか」
「そうだ。私がこの技を出す時はだ」
言いながらさらに小宇宙を巻き起こしてだ。アフロディーテを見据えていた。
「全てが決する時だ」
「貴方の全ての力によって」
「狂闘士は戦うだけではない」
赤い光の中での言葉だった。
「その時に全てを賭けるのだ」
「全てをなのですね」
「命も何もかもを賭ける。アーレス様の為にだ」

「何度も言いますがそれは私達も同じこと」
アフロディーテは今は構えてはいない。しかしその黄金の小宇宙は沸き起こっていた。ミシェイルのそれと比べても遜色がないまでにだ。
「聖闘士もまた」
「そうだな。貴様もまた全てを賭けるか」
「はい。そして」
ここでアフロディーテはまた言ってみせた。
「おそらく薔薇で貴方は倒せないでしょう」
「それはわかるのか」
「私には三つの薔薇があります」
「紅、黒、そして白だな」
「まずはです」
紅の薔薇を放った。それと共に薔薇の園が玄室に現れる。だがそれは瞬く間にその毒の霧によって全て消えてしまった。同時に霧もまた。
「ロイヤルデモンローズはこの通りです」
「そうだな」
「そしてこの薔薇も」
今度は白薔薇を出し彼に向かって投げた。だがそれも彼の前で霧の様に消え失せてしまった。
「御覧の通りです」
「黒薔薇は使わないのだな」
「どちらにしても同じでしょう」
それはもうわかっているというのだった。
「貴方に対しては」
「その通りだな。私もまた毒を使う」
「だからこそ」
「その私に毒は通じない」
こう返してみせたのだった。

「決してだ」
「ですがそれはそうでしょうか」
「何？」
「毒の強さにも限度があります」
アフロディーテは今度はこう言うのである。
「そう、弱い毒は強い毒に敗れるものです」
「だとするとだ」
ミシェイルはアフロディーテのその言葉を受けて返した。
「私の毒が敗れるというのか」
「私は敗れることはありません」
はっきりと返してもみせてきた。
「何があろうとも」
「言うものだな。それだけの自信があるというのか」
「自信がなければ聖闘士にはなれません」
やはり強気である。その外見からは想像できないまでにだ。
「ですから」
「その自信は私も同じだ」
ミシェイルも負けてはいなかった。
「それではだな」
「どちらの毒が勝つかですね」
「はっきりさせる闘いでもあるな。だが」
「だが？」
「ピスケスよ」
アフロディーテを呼んできたのである。
「貴様に薔薇はもうないな」
「はい」
アフロディーテもそのことは認めた。
「お話した通りです。三つだけです」
「そうだ。紅薔薇に黒薔薇、それに白薔薇だ」
その言葉は続く。

第百十話　薔薇の毒その五

「今敗れたな。その三つの薔薇だ」
「黒薔薇は出すまでもありません」
「それでは貴様にはもう手はない」
アフロディーテ自身にこのことを告げてみせた。
「薔薇はもうない」
「確かに薔薇はもうありません」
アフロディーテ自身もそれは認めることだった。
「ですが」
「ですが、か」
「私の技は薔薇だけではありません」
ミシェイルを見据えながらの言葉だった。
「それは申し上げておきます」
「聖闘士の中でも随一の美貌を誇り」
ミシェイルの言葉がここで変わった。
「その貴様の象徴である薔薇を使わない技か」
「意外でしょうか」
「確かにな」
その通りだという。ミシェイルもだ。
「それはその通りだ」
「左様ですか」
「だからこそ余計に見たくなる」
こう言ってであった。小宇宙をさらに高めさせてきてだった。
「私の最大の技で敗れるか」
「私がその技を出すかですか」
「その勝負だ。見せてもらう」
今まさに赤い小宇宙がさらに沸き起こる。
「貴様のその最大の技」

そしてだった。
「薔薇を使わない技をだ」
「かつてこの技を使った時は」
「今の貴様ではないな」
「そう、過去の私です」
「しかも私と闘った時ではない」
彼等もまたその時の記憶を持っているのだった。より正確に言えば思い出したのである。これまでの戦いの中で己の力をさらに高めてだ。
「それは」
「先の聖戦です」
その時だという。
「あの時でした」
「ハーデス様との戦いか」
「それから出すことはないと思っていました」
アフロディーテ自身はそう考えていた。しかしであった。
「ですが」
「そうはいかなくなったな」
「はい、その通りです」
まさにそういうことだった。思いも寄らぬことにだ。
「しかし今こうして」
「あの聖戦での貴様の名前は知っている」
「それはなのですね」
「だがどうして戦ったまでは知らない」
「それはですか」
「ミーノスだったか」
相手の名前も知ってはいた。
「冥界三巨頭の一人、天貴星グリフォンのミーノスだったな」
「そう、彼でした」
アフロディーテもこのことを思い出していた。その先の壮絶な闘

いのことをだ。
「私は彼と闘いました」
「そしてお互いに倒れたのは知っている」
「ミーノスとのお知り合いでしたか」
「知らぬ訳ではない。アーレス様とハーデス様は近い」
アーレスの数少ない理解者がハーデスなのだ。オリンポスで孤立し認められることのなかった彼にとっては何よりも喜ぶべき存在なのだ。
「だからこそ我等狂闘士と冥闘士もだ」
「知り合っているのですか」
「仲がいいとは言えないが」
そこまではいかないのだという。
「仕える神はそれぞれ違う。そこまではいかぬ」
「あくまで仕える神は、ですか」
「それにミーノス自身も好かぬ」
ミシェイル自身の好き嫌いも存在していた。
「あの様に他の者を操りいたぶることによって悦に入る者はだ」
「好きになれませんか」
「貴様に倒されてのも道理」
冷たい言葉だった。
「所詮その程度だったのだ」
「そう仰るのですね」
「だが。私は違う」
彼はだというのだ。
「貴様を私自身の力で倒す」
「御自身の力で」
「しかもだ。苦しませたりいたぶることもしない」
それもないのだという。確かな言葉だった。
「楽に死なせよう」
「それは有り難き御言葉。しかしそれは」

「それは？」
「私もまた同じこと」
アフロディーテもなのだというのだ。
「貴方を苦しませることはありません」
「それは趣味ではないか」
「美しくありません」
その行為自体について言ったのだった。
「ですから」
「そうか。だからか」
「では。今から」
「どちらの技が上か。勝負だ」
こうして二人の最後の応酬がはじまった。彼等の戦いもであった。

第百十話　　完

２０１０・４・５

第百十一話　鮮血の嵐その一

鮮血の嵐

「ではピスケスよ」
「はい」
またミシェイルがアフロディーテに言ってきた。アフロディーテもそれに応える。
「このアスタロトのミシェイルの最大の技、今こそ見せよう」
「遂に、ですね」
「そうだ、遂にだ」
まさに今だという。そうしてだ。
赤く禍々しい小宇宙を巻き起こさせて。それからだった。
「受けよ！」
「むっ！？この技は」
「スノードラゴンストーム！」
そう叫ぶとだった。ミシェイルの背に凄まじい大きさの氷の竜が出て来た。そうしてそれが荒れ狂いアフロディーテに襲い掛かって来たのである。
「竜を召還した！？」
「違うな」
ミシェイルはそれは否定した。そして言う言葉は。
「これは私なのだ」
「貴方だというのですか」
「そうだ、私だ」
また言う彼だった。
「私自身なのだ」
「ではこの竜はまさに貴方の全てを注ぎ込んだ技だというのですね」
「その通りだ。アスタロトは竜に乗る黒づくめの天使」
それが伝えられるアスタロトの姿である。そしてその右手に蛇を

持っている。八大公の一人の姿はそうしたものなのである。
「その竜はただ乗っているだけではない。私自身なのだ」
「つまり貴方の分身なのですね」
「そうだ。そういうことだ」
また言う彼だった。
「この技、出させたことを光栄に思うがいい」
「成程。貴方も命を賭けられるのならば」
アフロディーテはそこに彼の本気を見ていた。
「私もまた」
「そうだな。先程言っていたな」
「そうです、命を賭けます」
まさにそうだというのだ。
「それを見せましょう」
「この氷の竜に対してか」
竜はミシェイルの上でその巨大な禍々しい姿を見せている。そうしてそのうえで今凄まじい氷の息吹を放ってもきていた。それはこれまでの技以上であった。そしてそこには氷以外のものも含まれていた。
「氷だけではなく」
「そうだ。言った筈だ」
ミシェイル自身の言葉である。
「私には氷だけではない」
「毒もですね」
「その毒もある。ピスケスよ」
ミシェイルのその言葉が続く。
「さあ、その技を見せてみるのだ」
「いいでしょう。私の技は」
「むっ！？」
「ただ放たれるものではありません」
こう言ってであった。その全身からあるものが出て来た。それは。

血であった。アフロディーテは全身から自分自身の血を出してきたのである。
そしてだ。それは忽ちのうちにミシェイルに襲い掛かって来たのである。
「己の血を使うというのか」
「そうです」
まさにその通りだという。
「この血を使ったのはアフロディーテとしてははじめてです」
「はじめてか」
「そうです」
まさにそうだという。
「この技の名前を言っておきましょう」
「何だというのだ?それで」
「クリムゾンソーン」
それだという。その鮮血は忽ちのうちに嵐となってだ。ミイェイルの氷の竜に襲い掛かってきた。今まさに二人の攻防がはじまっていた。
紅の嵐と白い竜の戦いだった。その戦いの中でだ。
竜は氷の息を吐く。それはアフロディーテ自身も襲っていた。
しかしだ。彼はそれを受けてもまだ戦う。倒れはしない。
「この程度では」
「倒れぬか」
「私自身も私の嵐も抑えられません」
まさにそうだというのだ。
「そしてです」
「そしてか」
「この嵐を」
彼はまた言った。
「そう簡単に破れるとは思わないことです」
「そうだな。それではだ」

「まだ来られるのですね」
「まだだ」
ミシェイルは実際にこう言ってであった。竜にさらに激しい氷と毒の息を吐き出させる。白い死がさらに荒れ狂いアフロディーテを襲う。

第百十一話　鮮血の嵐その二

だがその中でも彼は立つ。そして嵐に向かって念じて叫ぶ。
「今です！」
「むっ！？今だと！？」
鮮血の嵐がさらに激しさを増して。それで竜を包み込んだ。
「今動かすか」
「その通りです、今こそ」
また言うアフロディーテだった。
「私が勝利を収める時！」
「来たか！」
「行け、クリムゾンソーン！」
技に対して叫ぶ。己の技に対して。
「その鮮血の嵐で今勝利を！」
「何の、させん！」
ミシェイルも対するように叫ぶ。そして。
その全ての小宇宙を氷の竜に込めてだ。そのうえでこう叫んだ。
「竜よ、その氷と毒とでだ！」
その二つを出してだ。
「ピスケスを倒せ！その嵐も！」
「攻めてきましたか」
「決めると言った筈だ」
ミシェイルの言葉にはまさに血が篭っているかの様だった。その言葉を今アフロディーテに対して言ってみせたのである。それだけのものだったのだ。
「そうだな」
「はい、そうです」
アフロディーテも返す。
「ですがそれでもです」

「勝てるというのなら勝ってみるがいい」
ミシェイルはさらに言ってきた。
「この私の竜、破ってみせよ」
「そのつもりです」
アフロディーテもそれに応えてだ。その嵐をさらに強めてきた。
「さあ、これで！」
「むっ、嵐がさらに」
強まったのだ。そうしてだ、
それが氷の竜を完全に包み込んだのだった。
「嵐が竜をか」
「それだけではありません」
さらに言う彼だった。
そしてだ。彼はその身体からさらに鮮血を出してみせたのだ。
「これで・・・・・・」
「何だと、まだ血を出すというのか」
「言った筈です、全てを賭けると」
先程の言葉を繰り返してきていた。
その言葉だけのものがあった。鮮血はそのまま嵐となり竜に襲い掛かる。そのまま嵐が力を増しているということであった。まさにそれだった。
それにより竜が退いた。僅かではあるがだ。
「竜がか」
「退きましたね」
「そうだな。だが」
それでもミシェイルはまだ言う。
「この程度ではだ。私もだ」
「まだですか」
「そうだ、私もまた言った筈だ」
アフロディーテの言葉をそのまま返す形になっていた。
そしてそのままさらに叫んできた。

「うおおおおおおおおおおおおっ！！」
「全ての小宇宙を」
「どちらにしろ貴様を倒せなければ先はない！」
だからだというのだ。
「ならばだ！ここで賭ける！」
「それでこそこのクリムゾンソーンに相応しい相手」
「そう認めるか」
「そうです、ならば」
さらに鮮血を出した。最早アフロディーテの全身の血を出していると言ってもいい。その鮮血によりまさにミシェイルを倒すというのだった。
嵐がまさに玄室全体を包み込み竜を襲う。その凄まじい嵐の中で竜の身体に遂にヒビが走った。
「竜にヒビが！？」
「よし、今です」
アフロディーテはそれを見てまた言った。そしてだ。
ここぞとばかりに力を込めてだ。アフロディーテもその黄金の小宇宙を巻き起こらせた。そしてそれは竜のヒビにさらに攻め入った。
それが決め手になった。竜の全身にヒビが入りだ。そのまま動きを止め完全に砕け散った。それでこの戦いは終わりであった。
「ぐっ・・・・・・」
「勝負ありですね」
片膝をついたミシェイルに対しての言葉だった。
「これで」
「見事だ。だが貴様も」
「私のことはお構いなく」
それはいいというのだった。

第百十一話　鮮血の嵐その三

「私はこの程度では倒れません」
「だからか」
「そう、だからです」
こう言うのである。
「血はすぐに戻ります。黄金聖闘士は回復力もまた秀でているのです」
「そうか。しかし敗れていればだ」
「どちらにしろ勝つか負けるかでした」
アフロディーテはそのミシェイルに対して冷静に述べた。
「ですから」
「生き残る為に全てを賭けたか」
「私にはまだ先に戦うべき相手がいます」
そこまで見ていたというのだ。
「その為に全てを賭けたのです」
「生き残りさらに戦う為に命をか」
「そうです。そして私はそれに勝ちましたね」
「確かにな。貴様は勝った」
ミシェイルも認めることだった。
「見事だ。褒めておこう」
「有り難うございます」
「さあ、行くといい」
ミシェイルは片膝をついたまま動かない。勝敗は明らかだった。
「先にだ」
「はい、それでは」
彼の言葉を受けるアフロディーテであった。
「アーレスの前へ」
「アーレス様には勝てはしない」

ミシェイルはこのことは確信していた。
「絶対にだ」
「我々では、ですか」
「例え貴様等黄金聖闘士全員が相手をしてもだ」
それでもだというのだ。
「アーレス様を破ることは不可能だ」
「その言葉聞きはしました」
「しかしか」
「そうです。しかしです」
アフロディーテは立っている。そのうえでの返答だった。
「私達は勝利を収めます」
「そう言うのか。それではそう思うがいい」
「思っていません。確信しています」
「確信か」
「そういうことです」
こう言ってであった。一歩前に出るのであった。
そしてそのまま玄室の向こうに向かう。アフロディーテとミシェイルはここで擦れ違った。だが今は激しい激突はなかった。それはもうなかった。
「それでは。また」
「また会おう」
だが言葉は交あわせるのだった。
「それではな」
「私もまた運命の中にいます」
アフロディーテは全てがわかっている口調であった。
「ですから」
「また。闘うことになるな」
「私は何度生まれ変わろうとも黄金聖闘士です」
「貴様等は全てそうだな」
「神話の時代より定められた」

そこから遡るものだというのだ。
「運命ですから」
「因果なものだな」
ミシェイルはアフロディーテのその言葉を聞いて述べた。
「それもまた」
「因果ですか」
「考え方にもよるがだ」
「それでもですか」
「そうだ、因果なものだな」
また言ってみせた。
「それもまた」
「受け止めていますから」
「受け止めているか」
「受け止めずして何とするのでしょう」
アフロディーテの言葉は揺れ動くことはない。何一つとしてである。
「そうせずして」
「そうか。強いな」
「強いですか、私が」
「運命とは時として過酷なものだ」
ミシェイルは運命についてはこういうように認識していた。彼もまたその運命の中にある、それならばこれも当然のことであると言えた。

第百十一話　鮮血の嵐その四

「それを受け止められるならば」
「強いですか」
「そういうことだ。ましてだ」
ミシェイルは言葉を出していく。彼は最後の力をそれに注いでいた。まるでそれこそが己の最後の責務であるかのようにである。
「貴様等の運命は戦いの中にある」
「はい、確かに」
「それ以上に過酷な運命はない」
ミシェイルはさらに述べる。
「それを受け入れるか」
「喜んで。それもまた」
「やはり強い」
今度は一言であった。
「果てしない戦いを受け入れるというのならばだ」
「私もまた多くの戦いを経てきました」
それは今の命だけの言葉ではなかった。
「しかし。それを辛いと思ったこともありません」
「何度も戦い命を落としていってもか」
「アテナの為、人々の為」
返した言葉は聖闘士の言葉であった。
「だからこそです」
「そう言い切るか。だからこそのなのかもな」
「だからこそですか」
「運命の神はそれに相応しい者を選ぶ」
ミシェイルはまたしても言った。
「相応しい者をだ」
「私はそれに相応しいというのですね」

「そういうことになる。貴様はその果てしない戦いを繰り広げる運命に相応しいのだ。貴様だけでなく他の黄金聖闘士達もまただ」
「そして教皇もまたですね」
「他の者かもそうかも知れない」
彼等だけではない可能性についても示唆した。
「我々もまた全て何度も蘇りアーレス様の下に集うのだから」
「それと同じですか」
「その通りだ。同じなのかもな」
こう言うのである。
「貴様等聖闘士もだ」
「左様ですか。我等全てはですか」
「我等八大公が戦うのは黄金聖闘士」
これはもう決まっていることだった。運命においてだけではない。それを決めているのは実力もあった。八大公と黄金聖闘士はまさに互角であるからだ。
「そうだな」
「はい、それはその通りです」
「では。そういうことになる」
また言う彼であった。
「貴様等は全て運命の中にあるのかも知れぬ」
「成程」
「では私はまた」
アフロディーテはここまで聞いてだ。再び足を前に動かした。そうしてそのうえでだ。前を見据えそのうえで玄室の向こうの廊下に向かっていた。
だがミシェイルはその彼にもだ。さらに言うのであった。
「ピスケスよ」
「はい」
また足を止めたアフロディーテであった。
「何でしょうか」

「次に戦う時はこうはいかん」
「そうですね。今は私が勝利を収めましたが」
「私は必ず貴様に勝つ」
それは確固たる信念に基づく言葉だった。例え今は死が迫っていようともだ。
「楽しみにしておくことだ」
「また。闘いましょう」
アフロディーテもそれに応えて述べた。
「それでは」
「うむ」
最後に頷いてだった。ミシェイルはもう一方の膝もつきがくりと頭を垂れた。それで全ては終わりだった。彼は遂に倒れたのであった。
アフロディーテはそれを見届けてからまた先に進むのだった。そして次の戦いに向かう。彼の戦いはこれで終わりではなかった。
その闘いを見ていたのはである。彼等だった。彼等はアフロディーテとミシェイルの闘いも見てだ。そのうえでそれぞれ言うのであった。
「今度は戦いは聖闘士が強いな」
「勝利を収め続けているわね」
「思った以上にやる」
水面に映るその戦いを黄金の酒や林檎を傍に置いたうえでのやり取りだった。戦いを見ながらくつろいだものすらそこにはあった。
「そう言うべきだろうか」
「そうだな。そう言うべきだな」
「確かにな」
「危ういと思っていても」
それでもだというのだ。

第百十一話　鮮血の嵐その五

「ここぞという時に技を出すな」
「それも彼等の命を賭けた技を」
「そのうえで闘っているな」
「そうだな」
「しかしだ」
ここで一人が言う。
「狂闘士の方もあと一歩で勝てるところだったな」
「実力は伯仲しているか」
「その通りね」
「しかし聖闘士が勝利を収めている」
結果としてはそうだった。
「彼等の渾身の攻撃によって」
「そしてまた一人アーレスに近付いたか」
「オリンポスの神々の一人にか」
「近付いているな」
「しかしだ」
だがここでまた言われるのだった。
「所詮アーレスは外れ者」
「そうね、所詮はね」
「嫌われ外れていた者だ」
彼等のアーレスを見る目は実に冷たい。蔑みそのものであった。
「血の気が多いだけの粗野な者」
「その者に勝ったとしても」
「何ともないことだ」
「そうだな、結局はな」
「では」
ここでだ。彼等はその玉座に座る者に顔を向けた。そしてそのう

えでその者に対して声をかけそうして問うのであった。
「この者達は大して見ることはありませんか」
「人に過ぎませんし」
「それにアテナも今はいません」
「それなら」
「そうだな。しかしだ」
その玉座に座る者はその彼等に対して言ってきた。
「アテナはいなくとも彼等はいるな」
「教皇と黄金聖闘士達ですか」
「その者達がですね」
「そうだ、その者達がいる」
玉座の男はまた言った。
「それがどう働くかだな」
「人間ではあってもです」
「やるというのですね」
「狂闘士達は少なくとも人間だ」
玉座の男の言葉がまた出された。
「そうだな」
「確かにその通りです」
「八大公にしてもです」
「人と人の戦いならばわからない」
彼は話し続ける。
「だが。神ならばだ」
「今控えるのは四闘神と」
「争いの女神エリス」
彼等の名前もまた話される。
「合わせて五柱です」
「アーレス程ではありませんがタナトス、ヒュプノスに匹敵する力です」
「それだけの存在でありますが」

「それでは問題はなかろう」
玉座の男もそれを聞いて頷いた。
「それではな」
「ではやはりアーレスの勝利は揺るぎませんか」
「結局のところは」
「やはり神がいる」
玉座の男はそれが大きいという。あくまで神を人よりも上に見ている。それは決して変わらないというようにだ。そう言うのである。
「ましてやアーレスもいるのだからな」
「では地上は暫くアーレスのものになりますか」
「あの者の」
「ポセイドンでもハーデスでもなく」
「ふむ。それでは」
彼等の中のとりわけ若く狡猾そうな顔の男がだ。ここで言った。
「暫く我等は静観ですかな」
「そうだな。今はな」
「静観すべきか」
「それに」
さらにであった。
「ポセイドン様もハーデス様も間も無く動く」
「三つ巴になるか」
「ならば我等は余計に」
さらに話す彼等だった。
「今は動くべきではないか」
「そうだな。今はな」
「様子を見させてもらおう」
「我が兄弟達が動こうともそれはそれでよい」
玉座の男は何処までも冷静だった。それは全てがわかっているといった言葉ではなかった。己に対して絶対の力がありそれによってどうとでもなる、そうしたものがあからさまに見えている言葉であ

った。
その言葉でだ。男はまた言った。
「アーレスはハーデスとは衝突しないだろうがな」
「やはりですか」
「ハーデス様だけはアーレスに対して親しい」
「ではポセイドン様ですか」
「あの方が」
「ポセイドンもどう動くかはわからない。しかし地上を治めるべきはだ」
男もまた水面の中を見ていた。そうしてだ。
「私以外にはない」
「はい、その通りです」
「そして我等もまた」
「全ては我等の手中にある」
彼はここでも絶対の自信を込めて言う。
「何があろうともそれは変わらない」
「ではその時こそ」
「我々もまた」
「そういうことだ。ではな」
男はここまで話すとその手にある黄金の杯の中の黄金の酒を口に含んだ。そのうえでまた水面の中を見る。そこにある戦いを。

第百十一話　完

２０１０・４・８

第十二話　炎の魔神その一

炎の魔神

カミュは赤い玄室の中に入った。そこにはもう相手がいた。
「ベリアルだな」
「ベリアルのレダ」
彼は自分から名乗った。
「私のことは覚えているな」
「ロシアでの闘いのことは忘れる筈がない」
カミュもまた彼に対して言葉を返す。
「私は今まで、今の命の中で」
「ふむ」
レダはカミュの今の言葉に目を向けた。そこから何か気付いたようであった。
「貴様もまた気付いているのだな」
「気付いているというのか、私が」
「そうだ。気付いているな」
そのカミュに対して問うた言葉だった。
「貴様も私も。今の命で闘っているだけではない」
「それはわかっている」
カミュもまたレダに返した。
「私は永遠の戦いの中にいる」
「その通りだ。そして私ともだ」
「そうだな。戦っていたな」
「そうだ」
まさにそうだと。レダはまたカミュに対して述べた。
「我々はあの聖戦でも戦った」
「あの時私はライブラの武具を持ちそのうえで貴様と闘ったな」
「覚えているな。それではだ」

さらに話すレダだった。
「全てはわかっているな」
「貴様とだけではない」
カミュも言う。
「私は狂闘士達だけでなく冥闘士、そして海闘士達とも戦ってきた」
「貴様等黄金聖闘士全員はな」
「そうだったな。戦いは私が輪廻転生を繰り返す度にそうなっていた」
「そういうことだ。それがわかったな」
「気付いた。それでわかった」
カミュは普段通り落ち着いた言葉で答えた。
「我等全てそうだ」
「そういう意味で貴様等は皆同じなのだ」
「我々は。そうだな」
「そうだ、同じだ」
彼はまた言った。
「同じなのだ。聖闘士は生まれ変わる」
「そして狂闘士はだな」
「何度でも蘇る。アーレス様がそうして下さる」
「面白い話だ。特にベリアルよ」
「私がどうした？」
「貴様がアーレスの下にいるのはだ」
言うのはこのことだった。
「思えば面妖なことだな」
「面妖だというのか」
レダもまたカミュのその言葉に応えてきた。
「それは」
「貴様は堕天使とされている」
これはレメゲトン等にある話だ。聖書や失楽園にもある。
「それもかなり高位のな。それこそ神に従わないまでのだ」

「案ずるな。私は確かに魔神だが」
「うむ」
「八大公の一人。しかしだ」
「しかし？」
「人でしかない」
他ならぬレダの言葉である。それであった。
「所詮はだ」
「人か」
「そうだ、私は人だ」
またカミュに対して言ってみせたのである。
「アクエリアス、貴様と同じ人だ」
「そういう意味ではか」
「そういうことだ。私は人であり天闘士となったが」
こうした意味では彼もまた他の狂闘士達と同じであった。狂闘士のはじまりは誰もが天闘士である。アーレスにつきそれにより狂闘士となったのだ。
「そこで私を待っていたのは孤独だ」
「孤独だったのか」
「私は戦いを愛していた」
ここでも彼は他の狂闘士達と同じである。
「それが受け入れられなかったのだ」
「戦いによって何をするつもりだった」
「全てを変える」
「全てをか」
「そうだ、全てを変えることを望んでいた」
こう言うのである。
「戦いによって。停滞し腐敗していくだけの世界をだ。それを果てしない戦いによって動かしそのうえで全てを変えていきたかったのだ」
「それでなのか」

「だが。私の考えはだ」
レダの言葉が一旦止まった。

第十二話　炎の魔神その二

「天界、オリンポスでは誰も認めようとはしなかった」
「そうだろうな。オリンポスは本来は戦いは好まぬ」
「オリンポスのことを知っているのか」
「聞いてはいる」
目を閉じてそのうえでレダに返すカミュだった。
「天界のことはな」
「そうか。知っていたか」
「一応はな。そしてそこで受け入れられずにか」
「私は孤独の中にいた」
過去を思い出しだ。唇を噛んでいた。そのうえでの言葉であった。
「誰にも認められずにだ。蔑みも受けていた」
「悔しい思いをしたなと言って欲しいわけではないだろう」
「生憎同情は受けない主義だ」
そうではないという。
「そう考えられる為に言ってはいない」
「そうなのだな」
「そうだ。私にとって蔑みや孤独はどうとでもなかった」
「では何故今私にそれを言う」
「アーレス様に出会えた」
彼もまたこのことを話したのだ。
「私の考えを理解し認めて下さる方がいたのだ」
「それを話したいのだな」
「そういうことだ。私のこの黒い炎はだ」
実際にその右手に黒い炎を漂わせてみせてきた。それは闇に近いものを漂わせながらそのうえで彼の右手に宿っているのだった。
「アーレス様の為にある」
「堕天使の炎だな」

「その通りだ。この炎は魔神の炎だ」
ここでは魔神と堕天使を同じ意味としていた。その天使にしても天闘士と同じ意味である。彼等の中ではそうなっているのである。
「あくまでな」
「その黒き炎で私を倒すのだな」
「そうだ。ここでは貴様だ」
カミュを見据えそのうえでの言葉だった。
「貴様を焼き尽くしそしてだ」
「我等全てを焼き尽くすか」
「そうさせてもらう。いいな」
「ベリアル、貴様のことはわかった」
カミュはまた目を閉じてだ。そのうえでレダに対して返した。そのうえでの言葉である。
「しかしだ」
「しかしか」
「私とて敗れるつもりはない」
こう言って言葉を返すのである。
「貴様に黒い炎があるように私にもだ」
「武器があるな。わかっているぞ」
「ロシアでも見せた筈だ。氷がある」
実際にその後ろに冷気が宿ってきていた。戦いが近いのは明らかだった。そしてその冷気はカミュの周りを覆っているのであった。
「氷がだ」
「氷だな。それが貴様にとっての武器だな」
「その通りだ。ではこの氷がだ」
「私を倒すというのだな」
「では。行くぞベリアル」
また彼の名前を呼んでみせてだった。構えてみせてきた。
「貴様とはここで決着をつける」
「いいだろう、ではアクエリアスよ」

レダもまた構える。そしてまた言ってきた。
「まずは礼を言う」
「礼をか」
「私の話を最後まで聞いたな」
「そのことか」
「最後まで聞いたこのことに対して礼を言う」
それについてであった。
「それは言っておく」
「そうなのか」
「そうだ、今はだ」
また言う彼だった。
「そのことに礼を言っておく。これから闘う貴様にそれは言っておく」
「貴様のその言葉受け取った」
カミュも確かな声で彼に返す。
「今な」
「そうか。ならばいい」
「そしてだ」
そのうえでだ。彼もまた言うのであった。

第十二話　炎の魔神その三

「貴様をここで倒す」
「いいだろう、貴様の炎が勝つか私の炎が勝つか」
レダもそれを受けてだ。そのうえで言葉を返すのだった。
「それを見極めよう」
「思えば。あの時は真の勝利ではなかったかも知れない」
「そう言えるのか」
「ライブラの武具を使った」
このことを言う。
「ならばだ。真の勝利ではない」
「いや、あれもまた」
「勝利だというのか」
「貴様はあの時正面から私と戦ったな」
「それが聖闘士だ」
カミュの言葉も正面からだった。やましいものはない、まさにそうした言葉であった。
「卑怯未練は一切ない」
「そうだな。ではだ」
「あの時も私の勝利だというのだな」
「その通りだ。真の勝利だ」
敵であるカミュに対してだ。言ってみせたのである。
「アクエリアス、貴様はあの時も私に勝っている」
「敗北を認めるというのか」
「その通りだ。少なくとも私は誇りがあるつもりだ」
「誇りがか」
「そうだ、それがある」
こうカミュに対して返す。
「それならばだ。敗北、そして強敵を認めることもできるのだ」

「そうだな。誇りはそうしたものだ」
「相手を認める。そして己の不足も認める」
「うむ、確かにな」
カミュも頷く。
「ベリアル、貴様は八大公に相応しいな」
「そう言うか」
「何度も言う。私の相手に相応しい」
「そうか」
「あの時もそうだった」
話がここでまた過去のものに戻った。
「貴様は私の相手に相応しい男だ」
「貴様もだな。私の相手に相応しい」
「貴様は黒い炎を出し」
「貴様は氷を使う」
それぞれの技についても言い合う。
「その優劣を決めるのもまた」
「相応しい相手だからこそ」
「ならばだ」
カミュの言葉だった。
「あの時の際限だな」
「そういうことになるか。それならばだ」
「来るか」
「行かせてもらう。あの時は貴様を倒せはしなかった」
「ロシアの時だな」
「ロシアでの戦いもまた見事だった」
レダはここでもカミュを認めてみせた。あの戦いにおいての彼もだ。
「あの時貴様は私の二つの技を破ったな」
「うむ」
「あの二つの技はかつても破られた」

「先の聖戦においてか」
「そうだ、あの聖戦において貴様に破られた」
二人のやり取りは過去と現在を行き来していた。そのうえで今を語る。過去と現在はここでは複雑に絡み合い一つになっているのだった。
「だが」
「だが、か」
「私の技は一つだけではない」
「そうだな。一つではないな」
「もう一つあるのだ」
それを今カミュに対して告げるのだった。
「最大の奥義がだ」
「それで私を倒すのだな」
「そうだ、貴様を倒す」
まさにその通りだと返す。
「覚悟はいいか」
「そういえばロシアで言ったな」
カミュもここでレダに言葉を返す。

第十二話　炎の魔神その四

「私の技もまたまだあるのだ」
「貴様の最大の技か」
「そう、それがあるのだ」
まさにその通りだというのであった。
「私にはある」
「お互いあるのか」
「貴様を倒すにはそれしかない」
カミュは今確かに言い切った。
「それしかだ」
「私もまた同じだ」
「このカミュを倒すにはか」
「そうだ、その技しかない」
最早、であった。それしかなかったのだった。
「だからこそだ。いいな」
「でははじめるとするか」
カミュはレダを見据えていた。レダもまた同じだった。
「最後の闘いだな」
「少なくともこの時代ではそうなる」
未来の話も混ざった。過去と現在だけではなくなってもいた。
「これが最後だ」
「そうだな。だが言っておく」
「何だ？一体」
「勝つのは私だ」
カミュはその全身に冷気をまといながら言ってみせた。
「この時代でもだ。勝つのは私だ」
「言うものだな。だが」
「だが、か」

「それは私の言葉だ」
レダはにこりともせずカミュの言葉をそのまま返してみせたのだった。
そしてだ。その黒い炎を己の足元にも出してだ。そうして言うのだった。
「私は負けはしない、今はだ」
「何があろうともか」
「そうだ、負けはしない」
また言ってみせた。
「それを言っておく」
「聞きはした」
カミュはレダの今の言葉にもクールに返した。
「だが。それが実現することはない」
「そう言えるか」
「言える、何故ならだ」
「貴様が勝つからだな」
「貴様と同じ考えだ」
次第に小宇宙を大きくさせながらの言葉だった。
「これはだ」
「話は聞いた。この言葉そのまま使わせてもらおう」
そしてレダもまた。その小宇宙を湧き起こさせながら話した。
「いいな、それで」
「構わん。ではベリアルよ」
「うむ、アクエリアスよ」
「死合おう」
言葉が氷になった。
「いいな」
「無論だ」
そして彼の言葉も炎になっていた。
「我が最大の技、受けるがいい」

「それではな。私もまた」
二人の闘いはいよいよ最大の正念場になろうとしていた。その小宇宙がさらに沸き起こってである。それぞれの技が放たれようとしていた。

第百十二話　完

２０１０・４・１２

第百十三話　氷の奥義その一

氷の奥義

「行くぞ、アクエリアス」
「来るか」
「そうだ、このベリアルのレダ最大の技だ」
こう言ってであった。その漆黒の炎が沸き起こる。
「黒い炎か」
「このベリアルのレダの炎」
これはもう言うまでもなかった。
「既に見せているな」
「もうな」
カミュもこう返した。
「幾度となくだ」
「そうだったな。だがこの炎でだ」
「私を倒す。それも既に聞いている」
「だがあえて言おう」
言わずにはいられなかった。それが彼の象徴でもあるからだ。黒い炎こそがだ。まさしくそれこそレダを表すものになっていたのである。
「この技をだ」
「来い。ではな」
「受けよ！」
そしてであった。放った技は。
「ダークネスエンドフレイム！！」
「くっ、炎がか」
「この技、どうだ！」
技を放ったうえでの言葉だった。
「これがこのベリアルのレダ最大の奥義だ！」

「炎が全てを覆ったというのか」
「それだけではない」
玄室全体がその漆黒の炎に集まった。それが全てを焼き尽くさんと燃え盛る。黒いその炎の輝きはまさに闇の輝きそのものだった。
「まだだ」
「これだけではないというのか」
「炎はただ燃え盛るだけではない」
それだけではないというのだ。
「私の技はわかっているな」
「動くか」
「そうだ、私の意のままに動く」
「あの猟犬達と同じだな」
「如何にも。それも今また見せよう」
無数の黒い武装した兵士達になる。古代のギリシアの戦士達だ。黒く燃え盛る武装した兵士達が炎の中でカミュに迫るのだった。
「さて、どうするアクエリアスよ」
「流石に貴様がここまで出さなかっただけはあるな」
「そうだ、この技を使ったのはだ」
「はじめてか」
「私の技はそれに相応しい相手に出すもの」
こうカミュに言うのである。
「だからこそだ」
「そういうことだな」
「その通りだ。ではだ」
「この技を私がどう破るか見てみたいのだな」
「見せてもらおう」
不敵な笑みと共の言葉だった。
「それもまた」
「楽しんでいるな、闘いを」
「闘いは狂闘士の嗜み」

だからだともいうのである。
「それを楽しまずしてどうだというのだ」
「そういうことか。やはり貴様等は戦いの中に生きるのか」
「魔神とは何か」
彼等の話にもなる。
「それは戦いの中に生きるからこそだ」
「それが魔神か」
「アーレス様に仕えそして戦いの中に生きそこに喜びを見出す」
こう言っていく。
「それが我等魔神であり狂闘士だ」
「そうだったな。それが貴様等だったな」
「わかっていた筈だ。それではだ」
「見せてみるのだ」
また言ったのだった。
「貴様のその技をだ。どうして私のこの技を破るつもりだ」
「炎を破るものはただ一つ」
カミュはこの状況でも臆してはいなかった。圧倒的なまでの漆黒の炎に囲まれ戦士達の槍が投げられそれを障壁で防ぎながらだ。そのうえで言ってみせたのである。
「氷だ」
「貴様の技だな。やはりそれか」
「氷と水ならば私の右に出る者はいない」
カミュは絶対の自信を持っていた。そうであった。
「黄金聖闘士であってもだ」
「いないか」
「そうだ、いない」
彼はまた言ってみせた。

第百十三話　氷の奥義その二

「一人たりともな」
「それは狂闘士の中でもだというのか」
「聖闘士は最強の存在だ」
この自負も口にしてみせた。やはり彼は聖闘士だった。
「ならば言うまでもないな」
「それが答えか」
「違うか、それは」
「あえて言う。違うな」
またしても不敵な笑みを見せるレダだった。
「それはだ。全く違う」
「違うというか、やはりそうか」
「狂闘士こそが最強だ」
彼もまた自負を口にしてみせた。そして彼なりの根拠も出すのであった。
「その証にだ」
「この黒い戦士達か」
「黒い槍、何時まで防げるか」
それを言ってみせたのだった。カミュは今も周りの戦士達の槍を受ける。当然それも漆黒に燃え盛る炎である。炎の槍なのだ。
「例え貴様でもそうはもつまい。間も無くか」
「今まで防げればいい」
「今までか」
「そうだ、今こそ放とう」
そして遂にでであった。両手を握り合わせてそのうえで。
ゆっくりと頭上に掲げた。垂直にである。
「このアクエリアスのカミュ最大の技」
「いよいよ来るか」

「そうだ、見よ」
言葉に興奮はない。この状況でもクールなカミュだ。
そしてその冷静さのままでだ。放った技は。
「オーロラエクスキュージョン！」
「むっ！？」
「これがこのアクエリアスのカミュ最大の奥義」
それだとも言った。
「オーロラエクスキュージョンだ」
「この技は」
レダはその技を見てだ。すぐに言葉を出した。
「これ程までの威力だというのか」
「予想以上だというのか」
「戦衣はそうそう容易に冷気を通しはしない」
まずはこのことから話した。
「そう、我等を守るアーレス様の武具だからだ」
「しかしだというのだな」
「寒いというのか」
レダは今明らかにその感覚を味わっていた。
「戦衣を着ていても」
「感じるのだな、冷気を」
「戦衣は全てを防ぐ」
レダはカミュを見据えながら述べた。
「そう、冷気だけでなく熱気もだ」
「衝撃だけを防ぐのではないのだな」
「ありとあらゆるものを防ぐ」
まさにそうしたものだというのだ。
「それがか。冷気を感じるか」
「これがこのカミュの最大の技だ」
カミュはそのレダに対してこうも言ってみせたのだった。
「オーロラエクスキュージョンだ」

「これがだというのだな」
「ベリアル、貴様の炎も」
そして彼の炎についても言及した。
「感じるぞ、確かにな」
「貴様もまた熱気を感じているというのだな」
「その通りだ。黒い炎は伊達ではないな」
「どちらが先に倒れるか」
レダもその冷気の中で言う。
「その勝負だな」
「そうだな。このカミュの氷」
それを今も放っている。そしてレダもだ。
両手を開いて前に突き出した。そのうえで炎を放っているのだった。冷気と黒炎がせめぎ合いそれは周囲にも及んでいる。そうした闘いであった。

第百十三話　氷の奥義その三

「何処まで防げるか」
「それはこちらの台詞だ」
「貴様のだというのか」
「そうだ、私の炎を何処まで防げる」
こう言ってみせるのである。
「果たしてな」
「このカミュの冷気はいざとなればだ」
「いざとなればどうだというのだ」
「絶対零度にまでなる」
そこにまで至るというのだ。
「このカミュの全てを注ぎ込むことによってだ」
「実際に今そうしているな」
「如何にも」
その通りだと返しもした。
「ベリアル、全ては貴様を倒す為にだ」
「そうだな。では私も言おう」
「何をだ？」
「私のこの黒い炎もだ」
その炎を放ちながらの言葉である。
「これで終わりではないのだ」
「まだあがるというのか」
「そうだ、まだだ」
こう言うのである。
「この程度ではないのだ」
「炎はまず赤からはじまる」
ここでカミュはその炎についての話をした。
「そして青になりだ」

「さらに白になっていくな」
「それを超える熱さだというのだな」
「当然だ。魔神の炎だ」
だからだというのだ。
「只の炎と思わないことだ」
「そうだな。だからか」
「その通りだ。私の炎はその白い炎よりも上だ」
そして言う。
「果てしなくあがっていくものなのだ」
「わかった。では私もだ」
「絶対零度まで達するか」
「それで。貴様を倒す」
その絶対のものでだと返す。
「私の、このカミュの命にかえてもだ」
「その言葉を聞いて言っておくことができた」
「何だ、それは」
「私もまた同じだ」
こう言ってみせたのである。
「私もだ。炎に命を入れることができるのだ」
「そしてそれによりあげていくのだな」
「そうだ、それによってだ」
「私を倒すか」
「全てを。焼き尽くす」
これが返答であった。
「アクエリアス、貴様の全てをだ」
「では私もだ」
「凍らせるか」
「その通りだ、貴様の全てをだ」
言葉をそのまま返していた。
「凍らせ。そのうえで倒す」

「ではどちらが生き残るか。ここで確かなものにするぞ」
「私のこの全てをだ。今ここで注ぎ込む」
何時になく強い言葉だった。それは少なくとも普段の冷静なカミュのものではない。彼を知っている者が聞いたならば驚く他ない、まさにそうした言葉であった。
「例えそれにより倒れようともだ」
「行くぞ、アクエリアス！」
レダは今は多くを語らなかった。だが彼も同じだった。
「この炎、受けるがいい！」
「オーロラエクスキュージョンは伊達ではない！」
カミュも再び叫ぶ。
「それを今ここで貴様に見せる！」
「炎よ、全てを焼き尽くせ！」
レダの全身から黒い炎がさらに放たれた。
「そしてアーレス様に勝利を！」
「この世の為、アテナの為に！」
カミュの全身からも白い冷気が放たれる。
「今ここでこそ！」
「おおおおおおおおっ！！」
「うおおおおおおおおっ！！」１０８
凄まじい叫び声があがり青白い光と黒い闇が激突したかに見えた。
そして両者の炸裂が玄室を覆った後に。立っているのは彼だった。

第百十三話　氷の奥義その四

「勝ったな」
「うむ」
彼は相手の言葉に頷いた。
「私が勝った」
「敗れるとは思っていなかった」
相手は仰向けに倒れていた。武具はそのままだがそれでもダメージを受けていた。その為最早立ち上がることはできなかったのである。
「まさかとも思わなかった」
「まさかとも、か」
「そうだ。アクエリアスよ」
カミュに対して言う。倒れているのはレダだった。立っているのはカミュだった。彼は何とか戦場に立ち続けていたのである。ふらつきながらもだ。
「貴様は勝った、私にな」
「絶対零度を出した」
彼はそうしたと言う。
「出したのははじめてだった」
「そうだったのか」
「これまでの戦いでだ。はじめてだった」
「この生の中でか」
「前世のことはわからない」
そこまではわからないという。しかしであった。
「だが。それでもだ」
「今の生で出したのははじめてだというのだな」
「その通りだ。出させたのはベリアル」
彼に対して告げた。

「貴様がはじめてだ」
「そうか」
「そしてだ」
カミュはレダにさらに言う。
「私がここまで命を賭けたのもだ」
「私がはじめてか」
「これまでの生の中では度々あった。だが、先に貴様と闘った時以上にだ」
「全てを賭けたか」
「そうしなければ敗れていたのは私だ」
こうも言ったのだった。
「倒れていたのはな」
「言ってくれるものだな」
レダは倒れたままカミュに応えていた。その顔は満足しているものである。
「そこまでだというのか。私は」
「そうだが。それがどうかしたのか」
「やはり貴様と闘えてよかった」
それを聞いたレダは満足そうに言った。
「この聖戦でな」
「私もだ。貴様とは再びアーレスと闘う時にまたあいまみえるな」
「その時も同じだ」
「やはり我々は闘うか」
「それが運命だ。その運命に導かれこの時代に私達は闘いだ」
「また幾度か生まれ変わった時に」
その時の話も為される。彼は過去も現在も未来も同時に見ているのである。そのうえで二人でその三つの時代の闘いを話しているのだ。

第百十三話　氷の奥義その五

「また闘う。その時は」
「どうなるかだな」
レダが述べた。
「次の闘いでは私も敗れるつもりはない」
「それは私も同じことだ」
「貴様もか。ならば次も激しい闘いになるな」
レダの目にはもうそれが見えていた。彼等の次の闘いがだ。
「私は何度蘇ろうともアーレス様の戦士だ」
「私は幾度生まれ変わろうともアテナの戦士だ」
二人の言葉は微妙に違っていた。しかし一つの命でお互いに幾度も闘うことには変わりがなかった。そうしたふうに考えるならばだ。
「そのうえで貴様を倒す」
「よし、それではだ」
「次の闘いまではか」
「私は眠る」
あえてこう言ってみせたのである。
「それではだ」
「眠るのか」
「そうだ、眠る」
カミュにまた述べた。
「暫くな。だからだ、今はだ」
「行けというのだな」
カミュもレダの考えはわかっていた。そのうえでのやり取りであった。
「私に。これから先に」
「貴様は勝った。ならば当然のことだ」
先に進むことがだというのである。

「だからだ。行くといい」
「わかった。ではその言葉受けよう」
「受けるのだな」
「最初からそのつもりだった。しかしその言葉確かに受けた」
受けたのは言葉だけではない。他のものだ。だがカミュはそれを全て言葉に内包させてだ。そうした受け応えになっていたのだ。
「今な」
「そうだ、受けたな」
「確かにだ」
「では行くのだ」
言葉は多くはなかった。
「先にな」
「そしてアーレスを倒す」
「倒せればだな」
ここでレダの言葉が変わった。
「そうしてみせることだ」
「倒せればか」
「そうだ、アーレス様は地上だけでなく天界も治められるべき方」
アーレスへの忠誠は絶対であった。レダもまた、だ。
「その方に勝てるというのか」
「勝つ」
しかしカミュは言った。
「我等全員、そして教皇もおられればか」
「黄金聖闘士全員だけではないのか」
「そうだ、教皇もおられる」
シオンもまた入っていた。彼等の中にだ。
「我等全ての力でだ。アーレスを倒す」
「出来ると思うか」
それを聞いてもレダの余裕は変わらない。
「人が神を。しかも戦いの神を倒せるなど」

「この世の為だ。してみせる」
ここでも目を閉じて言うカミュだった。
「何があろうともな」
「貴様等はあくまでそう言うのだな」
「それがどうかしたのか」
「味方であったならばな」
レダはこんなことも言った。
「そうであったならばだ」
「私がか」
「貴様等がだ」
黄金聖闘士全てがだというのである。
「味方であったならばな」
「そうだな」
カミュもレダのその言葉に応えたのだった。
「私もそう思う」
「貴様もか」
「若しも貴様等が味方であったならば」
「そして友であったならば」
「この上なく有り難い存在だった」
「そうだな。生憎敵と味方だったがな」
「しかしそれもまた運命だ」
だがこうも言うレダだった。
「こうして敵と味方だったのもまた運命だ」
「そういうことだな。ではまた次の戦いで会おう」
「そうだな。またな」
こう言葉を交えさせてであった。彼等は別れた。カミュはアーレスの下に向かいレダは静かに息絶えた。それで終わりであった。

第百十三話　　完

2010・4・15

第百十四話　狂闘士の長その一

狂闘士の長

ムウはもうリーヴェと対峙していた。八大公、ルキフグスの彼とだ。

リーヴェは狂闘士とは思えぬ優しい笑みを浮かべていた。そのうえで今自分の目の前にいるムウに対してこれまた優美な声をかけてきたのである。

「アリエス」

「はい」

「ようこそと言うべきですね」

こう言うのであった。

「ここまで来られました」

「私の相手がルキフグス、貴方というのは」

「そのことですか」

「これこそが運命なのですね」

これがムウの言葉だった。

「そうなのですね」

「そうですね。これは今の世に決まったことではありません」

「先の聖戦でも」

他の闘いと同じ話になっていた。彼等もまたそうしたやり取りをするのだった。

「そうでしたし」

「あの時は敗れたのは私でした」

リーヴェは今も静かに述べた。

「貴方が持たれたライブラの武具によって」

「ライブラの。そうでしたね」

「あの武具は強大でした」

その時の話もする。先のアーレスとの聖戦においてはライブラの

武具が勝利を決定付けたのだ。それでアーレスを冥界まで退けたのである。
「私達も。敗れる他ありませんでした」
「しかしそれは」
「それは？」
「私達の真の勝利ではありませんでした」
「いえ、勝利は勝利です」
しかしリーヴェはこう言うのだった。
「それに貴方はあの時正々堂々と私と闘いました」
「聖闘士として卑怯なことはしません」
ムウは優雅だが確かな声で答えた。
「例え何があろうとです」
「そう。貴方は正面から闘われた」
また言う彼だった。
「それこそが勝利の証です」
「そうなのですか」
「だからこそ。真の勝利でないとは言われないことです」
「成程」
「それにです」
リーヴェの言葉は続く。
「アリエス、貴方は今は違いますね」
「今の私には技があります」
「技がですか」
「このアリエスのムウ最大の技がです。あります」
「インドの時のあの技ですね」
「そうです。それでは私もです」
リーヴェも述べてきた。
「最大の技は持っています」
「貴方の最大の技ですか。貴方の」
「その技で貴方を倒します」

今このことをムウに告げるのだった。
「ここで」
「そしてアーレスを守りますか」
「我等八大公は狂闘士を統べるだけではありません」
それだけではないのだというのだ。
「アーレス様をお守りすることもまた、です」
「それも役目なのですか」
「はい」
ムウの言葉に対して答えた。
「その通りです」
「アーレスの親衛隊でもありますか」
「アーレス様こそは我等の神」
「神ですか」
「そうです、神です」
また述べたのだった。

第百十四話　狂闘士の長その二

「我等の全てなのです」
「そこまで忠誠を誓われていますか」
「貴方達がアテナに忠誠を誓うのと同じです」
「それとですか」
「その通りです。それと同じです」
リーヴェの言葉は続く。
「だからこそ我等はアーレス様を崇拝しています」
「アーレス。戦いの神」
「アテナと同じですが」
「いえ、それは違います」
リーヴェのその言葉は否定した。
「アーレスの戦いは破壊と殺戮、侵略と闘争の戦いです」
「それが何か」
「アテナの戦いは違います」
ムウは今度はアテナの戦いについて述べた。
「それはです」
「違うのは知っていますが」
「アテナの戦いは守る為の戦いです」
それであるというのである。
「人々を守り、その為に力と智恵を奮う戦いです」
「それであるというのですか」
「アテナは自ら攻めることはしません」
それは否定しているというのだ。
「そして破壊も殺戮も好みません」
「戦いはそれにより彩られ破壊こそが全ての再生であるというのにですか」
「破壊にも殺戮にも何もありません」

ムウはこのことは目を閉じて語った。
「そう、何もです」
「破壊の後の創造を理解されないとは」
「貴方達のそれは果てしない闘争ですね」
「その通りです」
レダはそれも否定しなかった。
「神も人も止まっていては何もなりません。それよりもです」
「戦いですか」
「それにより全てを進めます」
リーヴェはここでアーレスのこの考えを述べた。
「永遠に続く破壊と殺戮により世の中を作り変え続け無駄な存在を淘汰し侵略し合い闘争を続けることで互いに高め合います」
「それがアーレスの理想ですか」
「もう御存知ですね」
「はい」
ムウはリーヴェの今の言葉に頷きはした。
「それはその通りです」
「では何の問題もない筈ですが」
「知ってはいます」
ムウはまた言った。
「ですが」
「ですが、ですか」
「それを受け入れることはできません」
目を閉じてそのうえでの言葉だった。
「貴方達のそうした考えはです」
「受け入れられませんか」
「そうです。私はアテナの聖闘士です」
これこそがムウの全てであった。彼はここからはじまる。そう、全てであるのだ。
「ならばそうした考えはです」

「絶対に受け入れられないというのですね」
「そういうことです。これも御存知ですね」
言葉を返す形になっていた。
「私のこの考えもまた」
「その通りです」
今度はリーヴェが言葉を返した。そのまま逆になったやり取りだった。
「それはです」
「そうですね。私は狂闘士です」
やはり彼もこう言うのだった。話は完全な平行線であった。
「アーレス様に絶対にお仕えするからこそ」
「貴方達にとってはアーレスはまさに絶対なのですね」
「絶対にして全てです」
言い切った。まさにそれだった。
「それ以外の何者でもありません」
「絶対以外にはありませんか」
「その通りです。だからこそ貴方達とは決して相容れません」
このこともはっきりとムウに告げた。

第百十四話　狂闘士の長その三

「何があろうともです」
「何があろうともですか」
「貴方達と同じです」
またしても言葉は平行線であった。彼等の間にはどうしても相容れない二つのものが存在していた。戦いの神に仕える者同士でもだ。
「アーレス様の御考えこそが無謬のものですから」
「無謬ですか」
「貴方達にとってもアテナはそうした存在ですね」
「否定するつもりもありません」
ムウはまた目を閉じていた。そのうえでの言葉だった。
「貴方達と私達はやはり」
「アーレス様とアテナが同じように」
「そうですね」
また言葉が交えられる。
「だからこそ私達は再び」
「闘うことになります」
「それではです」
ムウからの言葉だ。
「ルキフグス、闘いましょう」
「はい、アリエス」
お互いを呼んだ。
「貴方を倒してアーレスの前に向かいます」
「アーレス様の御前にはいかせません」
「私達のどちらが勝つか」
「それを確かなものにしましょう」
小宇宙がそれぞれ湧き起こる。ムウはその中でまたリーヴェに対して言ってきた。

「ルキフグスですね」
「それが何か」
彼の司るその魔神についての言葉だった。
「魔神達の中では宰相でしたね」
「はい、そうされています」
そのことも認めたのだった。
「我が魔神ルキフグスは魔界の宰相、魔界の主の側近中の側近であると」
「八大公はそもそも魔界の領袖達である魔神達」
そうした意味でアスタロトもベルゼブブもベリアルもだ。彼等はいずれも魔神達の中でも傑出した力を持つ魔界の重臣達であるのだ。
「その中でも貴方は」
「八大公の中に序列はありません」
リーヴェは序列の存在については否定した。
「しかしです」
「それでも、ですか」
「私は同志達のまとめ役とされることが多いです」
このことは認めるのだった。
「それは確かです」
「そうですか。それはですか」
「はい」
ムウに対して頷いてもみせたのだった。
「その通りです」
「成程、やはりそうなのですね」
「貴方達黄金聖闘士にも序列はありませんね」
「はい、その通りです」
ムウもこのことは認めた。隠すこともしなかった。
「我々はアテナ、そしてその代理人である教皇の前に平等です」
「平等ですか」
「まさにその通りです」

また述べたムウだった。
「誰もがです」
「聖闘士に黄金、白銀、そして青銅の違いこそあれどですね」
「それぞれの階級では誰もが平等です」
これは聖闘士の特徴の一つである。そして黄金聖闘士の者達には突出した権限や任務が与えられる。黄金聖闘士は聖域の中心でもあるからだ。
「貴方達もそうした意味では同じですね」
「爵位はあります」
狂闘士達を形成するものの一つだ。これが彼等の階級になっているのだ。
「しかしです」
「それ以上に、ですね」
「はい、同じ爵位にあっては序列はありません」
こうムウに述べるのだった。
「私は同志達と全てにおいて対等です」
「しかしまとめ役ではあるのですね」
「そうです。私は参謀でありまとめ役を務めることがままあります」
リーヴェは静かに述べた。
「そうした意味では宰相なのでしょう」
「そういうことですか」
「これでおわかりでしょうか」
ここまで話したうえでのムウへの問いであった。
「私の立場は」
「はい、有り難うございました」
闘いの間であったが優雅に礼を述べたムウであった。

第百十四話　狂闘士の長その四

「よくわかりました」
「どうもです」
「では。ルキフグスよ」
あらためてリーヴェに対しての言葉であった。
「貴方とここで」
「では私も」
「お互い。志がありますか」
「ない筈もありません」
二人はこのことも確かめ合うこととなった。
「志があればこそ」
「だからこそ今ここにいる」
「それでは」
こう言い合いそうしてであった。
二人の小宇宙がそれぞれ湧き起こってだ。そのうえでの言葉だった。
「ここで決着をつけましょう」
「ところでアリエスよ」
リーヴェはまたムウに対して声をかけてきた。
「貴方のその最大の技ですが」
「それですか」
「そうです、その技は一体」
問うていた。そのことをだ。
「それを知りたいのですが」
「その技をですか」
「私もまた見せることになります」
「貴方もですか」
「そうです、もっともそれを貴方に見せればです」

このことを話したのだった。
「その時はです」
「どうなるかというのは貴方の言葉では、ですね」
「はい、全てが終わります」
そうだというのである。
「貴方は倒れることになります」
「そうなると仰るのですか、やはり」
「その通りです。貴方を倒す時です」
「成程、そういうことですか」
「予想はされていましたね」
「ええ、確かに」
まさにその通りだというのである。
「貴方にも。自信がおありですから」
「そしてそれは貴方もですね」
「否定すれば嘘になります」
ムウも言ってみせたのだった。
「それもまたです」
「やはり。そう仰ると思っていました」
「左様ですか」
「はい、貴方もまた自信を持っておられます」
また言う彼だった。
「それも当然のことです」
「私は最大の技に全てを賭けます」
「全てを」
「黄金聖闘士はその最大の技を放つ時」
その時だというのだ。
「その命を賭けます。全てを」
「全てをだというのですね」
「まさに」
「そうです、まさに命懸けの技なのです」

「その言葉わかりました」
確かにだと返すリーヴェだった。
「では。それでは私もです」
「貴方もですか」
「貴方達黄金聖闘士が最大の技に命を賭けるのと同じことです」
ここでも言葉をそのまま返していた。
「それとです」
「同じだというのですね」
「我々もまたその最大の技を放つ時全てを賭けます」
やはり同じであった。
「そういうことです」
「命を賭けて戦うのも同じですか」
「同じです。変わりません」
また言ったのであった。
「その通りです」
「ではどちらの命がここで潰えるか」
ムウの目が光った。その優雅な目に強い光が宿る。そのうえでの言葉であった。
そうしてだ。彼はまた言った。
「では。どちらが立っているか」
「今確かになります」
言葉が交差した。
「私の技か」
「若しくは私の技か」
「どちらが勝つか」
「確かめましょう」
静かだが激しい闘いがはじまった。ムウとリーヴェは気品はそのままであった。だがその小宇宙はさらに高まり続けていた。

第百十四話　完

2010・4・17

第百十五話　星の嵐その一

星の嵐

「全てが決まろうとしている」
「はい」
エリスは己の場にいてだ。そのうえでアーレスの言葉に応えていた。それぞれ離れた場所にいても二人は話すことができるのである。神故にである。
「今まさにですね」
「我が愛する僕達は次々と倒れていっている」
アーレスの言葉は苦いものであった。
「悲しいことだ」
「ですがアーレス様、それは」
「私がいればか」
「はい、我々はアーレス様がおられればです」
エリスが言うのはこのことだった。
「幾度でも立ち上がることができますから」
「私には御前達が必要なのだ」
「我々がですか」
「そうだ、御前達がだ」
こう言うのである。
「必要なのだ」
「そう仰って下さいますか」
「御前達に受けたものを忘れることはない」
温もりが宿っていた。アーレスのその言葉にだ。
「決してだ」
「決してですか」
「孤独に覆われていた。長い間」
アーレスは語る。

「実にな。長い間だ」
「オリンポスの者達は誰もアーレス様を認めようとしませんでした」
「私は生まれてから長い間孤独だった」
ゼウスとヘラとの間に生まれてもだ。それでもだったのだ。彼はその考えが誰にも理解されず受け入れられずだ。孤独に苛まれていたのだ。
「だがエリス、御前達はだ」
「はい」
「私の下に来てくれた」
懐かしむ言葉だった。全てをだ。
「オリンポスの神々の下を去り私のところに集ってくれたな。あの時の喜びを忘れたことはない」
「我等もです」
だがここでエリスも言うのであった。
「アーレス様に受け入れて下さり。何と嬉しかったことか」
「私にか」
「我等もまた孤独でした」
エリスは言った。己がかつて味わったその地獄のことをだ。
「天界では誰からも愛されず、認められず」
「辛かったか」
「誰にも見られないこと」
このことを言うのである。
「それがどれだけ辛いか」
「受けた者、味わった者にしかわからないことだな」
「その通りです。受けなければです」
わからないと。エリスは言うのである。
「オリンポスの者達にわかることではありません」
「あの山にいる者達は誰もが光輝の中にいる」
アーレスの言葉も再び苦渋に満ちたものになっていた。
「だが。我々は」

「そうです、誰一人としてその中にはいませんでした」
「私は長い間光とは無縁だった」
「オリンポスにいながら」
「光の中にあろうと光を浴びてはいなかった」
そうだったというのである。
「見たこともなかった」
「しかしです」
だが、だというのであった。今言ったのはエリスである。
「それが大きく変わったのです」
「私に会ってか」
「アーレス様に御会いできてそれによって」
「私にか」
「アーレス様と御会いして何が変わったのか」
それも言うのであった。彼等はだ。
「我々にとっては全てがです」
「全てが変わったのか」
「そうです。アーレス様は我々の考えを受け入れて下さいました」
「私と同じだったからだ」
アーレスはエリスの言葉にこう返した。
「だからなのだ」
「同じですか」
「考え、そして理想が同じだっただけではない」
「それだけではなくですか」
「そうだ、全てが同じだったからだ」
アーレスの言葉は続く。それもだ。

第百十五話　星の嵐その二

「何もかもが」
「全てがですか」
「私と同じだった。全てに疎外されていたな」
「全てがか」
「そうだ、疎外されていた」
まさにそうだというのである。彼等はだ。
「私と同じだった。私達は同じだったのだ」
「我々がアーレス様と同じだと」
「狂闘士も四闘神も。そしてエリス、御前もだ」
「私もだと」
「私と御前は血を分けた兄と妹」
そうした関係である。二人はそれぞれ戦いと争いを司る。だがそれだけではなくだ。それ以上の絆を持っているというのである。
「だが。それでもだったな」
「はい、兄と妹以上にです」
「我等は絆を築いているな」
「その通りです」
また言うエリスだった。
「兄や妹というものだけではありません」
「共に戦い共に生きてきた」
「そうです。絆は深くです」
「オリンポスの神々と戦った時は覚えているな」
「忘れる筈がありません」
彼等にとってはそれは記憶の原点にあるものだった。全てのはじまりだったのである。彼等の果てしない戦いはそこにはじまりであったのだ。
「オリンポスの神々と果てしない戦いに入りました」

「だが我々は敗れた」
「しかし。誰一人としてアーレス様の下を離れませんでした」
「そのことは絶対に忘れない」
「戦い以上にですか」
「私一人でどうしてここまで来られたのか」
こうした話にもなった。
「それを考えると。いや、考えなかったことはない」
「考えなかったことはありませんか」
「御前達は私に従い天界を追われた。だが一人として私の下を離れなかった。何があろうとも離れることはなかったな」
「離れる、ですか」
エリスはアーレスのその言葉に応えて述べた。
「我々がですか」
「それはなかったな」
「考えたこともありません」
これがエリスの返答だった。
「誰一人としてです」
「私は去る者は追わない」
アーレスはこのことも話した。
「だが。御前達は誰一人としてだったな」
「どうして離れられましょう」
また言うエリスだった。
「我等を認め受け入れて下さったアーレス様を」
「そう言うのか」
「ですから。我々は」
「その御前達の心も常に私の中にある」
「有り難き御言葉」
「その御前達と私は永遠にある」
彼の言葉はまた発せられた。
「何があろうともだ」

「では。この戦いも」
「安心しろ、我々は勝つ」
「はい、最後に勝つのは我々です」
「私には御前達がいる」
「そして我々にはアーレス様がいます」
言葉はまた一つになっていた。
「まさに同じです」
「その言葉、決して忘れない。ではだ」
「私もまた戦います」
エリスは見ていた。彼女の戦いをだ。
「アーレス様の為に」
「それではな」
「私の相手は教皇になります」
「アテナの第一の僕だったな」
「はい、その彼です」
「名前は確かシオンだったか」
アーレスは彼の名前も知っていたのだった。
「そうだったな」
「確か」
「先の聖戦での生き残りだったな」
「ハーデス様との戦いでしたね」
「そうだった、あの戦いでだ」
「そして今も尚」
アーレスの言葉はまだ続いていた。

第百十五話　星の嵐その三

「戦うのか」
「そうです、教皇でありながら」
「いや、教皇もまた前線で戦うものだ」
「そういえば。あの者はあの時も」
「そうだったな。あの時のことを思い出すのだ」
「はい、それでは」
エリスは兄神の言葉に頷いた。そうしてであった。
「あの時のことを肝に命じて」
「戦うがいい」
「わかりました」
こうしてであった。エリスもまた来るべき戦いに意識を向けていた。今は誰もが戦いの中にその感情を見せていたのである。トラキアにおいて。
ムウとリーヴェは向かい合ったままお互い小宇宙を高め合っていた。そしてその中でリーヴェはムウを見据えてそのうえで言ってきた。
「いいですね」
「来ますか」
「私の技、受けてもらいます」
こう言ってきたのである。
「そして勝つのは私です」
「少なくとも覚悟はしています」
「覚悟はですか」
「はい、貴方の技を受ける」
このことをであるというのだ。
「それは覚悟しています」
「ではそのまま死ぬのです」

ムウのその言葉を聞いたリーヴェの返答だった。
「私の技を受けて」
「受けても死ぬ訳にはいきません」
「むっ！？」
「ルキフグス、貴方の技を防ぎきることは」
ムウは冷静だった。冷静なまま彼に対して言ってみせたのである。
「おそらく無理でしょう」
「無理だというのですか」
「はい、クリスタルウォールをもってしてもです」
「あの壁ですか」
「貴方の小宇宙を見る限りそれは無理です」
ムウはそう見ていた。そしてそれは間違いないと確信もしていた。
「あの技を以てしても」
「そうでしょう。私もまた本気です」
言葉にもそれは出ていた。リーヴェにしても負ける訳にはいかなかった。それでこう言ってみせてだ。今まさに技を放たんとしているのだ。
「それでは」
「来られますか」
「決めさせてもらいます」
こう言ってであった。今その技を出すのであった。
「パンデモニウム」
「パンデモニウム！？」
「このルキフグスは魔界の宰相」
己が司る魔神の話をまたしてみせた。
「伏魔殿の一切を取り仕切る者とされています」
「魔界の全てを」
「その力、今こそ」
言いながら紅蓮の小宇宙を湧き起こらせてだ。そうしてその小さい宇宙をミロに向けて放ってみせたのである。それを攻撃としたの

である。
「受けるのです、アリエス」
「小宇宙、これは」
「そう、私の全ての小宇宙に力を込めています」
そうしているというのだ。
「私のありとあらゆる力をです」
「それで私を倒すと」
「如何にも」
「そうですか。それで私を倒すおつもりですか」
「この小宇宙、防げますか」
ムウに対する問いであった。
「アリエス、貴方には」
「ならば私も」
リーヴェの全身全霊の技を前にしたその時でだ。彼はその技の構えに入った。
そしてだ。あらためてリーヴェに対して言うのだった、
「このアリエスのムウ最大の技」
「それで私を倒すのですか」
「そうです、その技で」
まさにそれだというのである。
「全ての決着をつけましょう」
「むっ！？」
リーヴェはそのムウを見た。するとであった。

第百十五話　星の嵐その四

ムウはその両手を高々と掲げた。そして。
その技の名前を言う。両手を輝かせつつ。
「スターダストレボリューション！！」
「！？これは」
リーヴェがその技を見たその瞬間だった。
ムウの後ろに銀河が見えた。そうしてだった。
そこから無数の流星が降り注ぐ。それは空間を無視したものだった。
「流星がこの中に」
「そうです」
まさにそうだというのである。
「私はこの技だけは使うまいとしていました」
「力故にですか」
「そうです、あまりにも恐ろしいこの力」
己の技であってもだというのだ。
「この力を使うことは全てを壊しかねません」
「それをあえて使った」
「今がはじめてです」
リーヴェに使ったのがだ。そうであるというのだ。
「貴方に。そして」
「そして」
「この力。私の全てでもあります」
降り注ぐ無数の流星の中での言葉である。
「これで全てを終わらせます」
「くっ、ならば」
リーヴェもそれを見てであった。己の技をムウのスターダストレボリューションに向けた。そうしなければ倒されると判断してのこ

とである。
「これで」
「技と技の闘いですね」
「勝った方が生き残ります」
リーヴェもまた全てを賭けていた。彼もそうした意味でムウと同じだった。
「この技と技の応酬の中で」
「そうですね。それでは」
「負けはしません」
普段のリーヴェではなかった。優雅なのはそのままだ。しかしその中にこれまで見せたことのないような凄まじい闘志を含ませていたのだ。
その赤い小宇宙、嵐にさえ見えるそれをぶつけてだ。そうして言うのであった。
「私もまた」
「同じです」
「そうですね。何度もお話している通りですね」
「アテナの聖闘士として」
ムウの言葉である。
「決して」
「アーレス様の御前に通すことはできません」
己の決意をこう言い換えたリーヴェだった。
「何があろうともです」
「そうですね。それが貴方の信念」
「そうです」
「そして私の信念は」
互いに言い合いであった。

第百十五話　星の嵐その五

「そのアーレスの前に行くことです」
「ならば私のこの技を破ることです」
まさに全身全霊を技に込めてだ。そのうえでの言葉であった。
「パンデモニウムを」
「魔神の城そのものの技ですね」
「あえて言うのなら」
そうだというのである。
「そうなります」
「この城とはまた違うのですね」
「この城はアーレス様のもの」
「だからこそ違うと」
「そうです、アーレス様そのものです」
トラキアの城はそうであるというのだ。
「パンテモニウムとはまた違います」
「では。尚更です」
「私を倒すというのですね」
「如何にも」
「では」
両者のせめぎ合いはそのまま続く。その攻防はさらに続く。だがその渦中においてである。やがてリーヴェの技が崩れてきた。
「くっ・・・・・・」
「今ですね」
そしてだった。ムウもそれを見逃さなかった。そうしてであった。スターダストエクスプロージョンにさらに込めた。それは命であった。
「ここで」
それが決めてであった。そのムウが全てを込めた威力の前に遂に

リーヴェは完全に崩れた。流星が全てを押し切ったのだった。
リーヴェは吹き飛ばされた。これで勝敗は決した。立っているのはムウであった。
「やりましたね」
「はい」
ムウはリーヴェの言葉に頷いた。彼は吹き飛ばされはしたが何とか片膝をついて座り込んでいる。倒れてはいない。しかしであった。
「私はもう」
「立てませんか」
「残念ですが」
こう言うのであった。
「貴方の勝利です」
「ではこれからアーレスの前に」
「行きなさい」
行けというのであった。
「貴方は私に勝ちました。だからこそ」
「その言葉、有り難く受け取らせて頂きます」
「有り難くですか」
「貴方と戦えたこと、アテナに感謝します」
嫌味ではなかった。ムウはそれとは全くかけ離れた男だ。だからこそこう言えたのである。そのままの心を言葉に出してである。
「今ここで」
「そうですか。アテナに」
「以前の戦いではこの技は使いませんでしたが」
「そうですね。それは確かに」
「しかしです」
だが、というのであった。
「私はこの戦いで今の生ではじめて使いました」
「はじめてですね。先程仰ったように」
「その通りです。貴方はそれ程の方です」

「ふふふ、それは有り難いこと」
リーヴェはここまで聞いて笑ってみせた。だがそれでも起き上がることはなかった。
「しかしです」
「しかし、ですか」
「次はこうはいきません」
こう言うのである。
「決してです」
「次の聖戦では貴方達が勝たれるのですね」
「その通りです。次はです」
「いいでしょう。では私もまた」
「次も勝たれるというのですね」
「そうです」
ここでも静かなままのムウだった。しかしその言葉はしっかりとしていた。
そしてであった。言ってみせたのである。
「貴方にも。そしてアーレスにも」
「私はアーレス様の為に全てを捧げる者」
「それは幾ら経ても変わりません」
「何があろうとも変わりませんか」
また言ったリーヴェだった。
「では。また御会いしましょう」
「そうですね。それではまた」
「それでは」
こうしたやり取りのうえで別れてだった。ムウはアーレスの下へ向かった。リーヴェは片膝をついたまま事切れた。八大公の戦いは一旦は終わったのだった。

第百十五話　完

2010・4・21

第百十六話　老いていぬ者その一

老いていぬ者

「ライブラよ」
「うむ」
キュドイモスは己の玄室にいた。だがそこにいながら遠く離れた五老峰にいてそのうえで童虎と話をしていた。離れていてもその力によってである。
「私の相手はだ」
「わししかおらぬというのじゃな」
「そうだ、先の聖戦より決められていること」
こう言ってであった。
「だからこそ貴様を倒す」
「ふむ。運命は定められているか」
「闘う運命は変わりはしない」
そうでもあるというのである。
「それはだ」
「そうじゃろうな。しかしじゃ」
「しかし、か」
「わしは逃げることはせぬ」
こうキュドイモスに言ってみせたのである。
「決してじゃ」
「その言葉言うと思っていた」
キュドイモスの返答は既に全てをわかっているかの様なものだった。
「やはりな」
「わかっていたか」
「うむ、わかっていた」
こう言ってであった。今また童虎に対して言うのである。

「そう言うことはだ」
「では話が早いな」
「さて、わしはここから動くことはできぬが」
「場所なぞどうということはない」
キュドイモスは目を閉じて言葉を返してみせた。
「それはだ」
「ふむ、では精神世界でか」
「そうだ。そこに参ろう」
「やはりそうなったか」
童虎もわかっていたのだった。全てだ。
「それではじゃ」
「いいのだな」
「どのみち断ることはできまい」
「その選択肢はない」
キュドイモスも応えて述べた。
「どちらにしろだ」
「そうじゃな。ではもう決まっておる」
そこまで聞いた童虎の言葉だ。
「そこに参ろう」
「既に覚悟は決めているか」
「そうじゃな。それを覚悟と言うのならばじゃ」
「そうなるというのだな」
「うむ」
キュドイモスの言葉に対して頷いたのであった。
「そうじゃな」
「貴様とは前の闘いの記憶がある」
「神としてじゃな」
「神、そうだな」
キュドイモスは神という言葉に反応を示した。しかしそれだけではなかった。そこにはもう一つも感情がはっきりと見えていたので

ある。
そしてキュドイモス自身もだ。それについても言ってみせた。
「私もまた」
「御主も？」
「戦士だ」
こう言うのである。
「アーレス様に仕える戦士だ」
「神であると共にじゃな」
「アーレス様に全てを捧げその御為に戦う」
これは四闘神であっても狂闘士であっても同じであった。それは全く変わりがない。アーレスに対する忠誠は神や人を超えていたのだ。
「その戦士だ」
「左様じゃな。御主は戦士じゃ」
「そしてライブラよ」
己のことを言ってみせたうえでだ。童虎に対しても言ってみせたのである。
「貴様もまた同じだな」
「そうじゃな。わしもまた戦士じゃ」
「ならば来るがいい」
あらためて告げた言葉である。
「私の誘う場所にじゃ」
「うむ」
童虎が頷くとであった。そのうえでその場所に入ったのである。
そこは玄室であった。キュドイモスのいるあの玄室だ。しかしアーレスの宮殿にはなかった。別の場所に存在する玄室であった。

第百十六話　老いていぬ者その二

「中々よい場所じゃな」
「私の中にある玄室だ」
「アーレスの宮殿ではなくじゃな」
「私の中、そして貴様の中にある」
彼の中にもだというのだ。
「それがここだ」
「言った通りじゃな」
「私は神だ。言葉に偽りを含ませることはしない」
今度はその誇りも見せたのであった、
「決してな」
「誇り高いことも前も変わらぬか」
「変えるつもりもない。貴様に勝利を収めるに相応しいだけの誇りを失うことはしない」
「わしに勝つつもりだからというのか」
「貴様は神を退けた」
また先の聖戦のことを言ってみせたのである。
「それだけの相手を倒すにはだ」
「相応しいものをというのじゃな」
「そういうことだ。これでわかったな」
「神だけはあるのう。むしろ」
「むしろ？」
「こう言っては何じゃが」
こう前置きしての今の言葉であった。
「オリンポスの神々よりも誇り高いのかも知れぬな」
「我等は疎外された神」
不意にキュドイモスの言葉にあるものが宿った。
「そうだ、疎外された神なのだ」

「疎外というのじゃな」
「オリンポスの神々は我等を認めなかった」
今も尚忘れてはいないことだった。彼にとっては、いやアーレスに仕える者達にとっては決して忘れることのできない忌々しい記憶である。
それを口にしてだった。キュドイモスもその顔に苦いものを見せていたのである。そのうえでの言葉であった。
「アーレス様も我々も」
「そのこと。忘れられぬか」
「忘れる筈がない。しかしだからこそだ」
「誇りは忘れぬか」
「決してな」
まさにそうだというのであった。
「忘れることはない」
「御主達の傷は癒せぬか」
「癒すつもりはない。忘れぬ為に」
キュドイモスの目に炎が宿っていた。身動きはしないがその目に宿らせてだ。そしてそのうえで小宇宙も燃え上がらせているのだった。
「何時の日かオリンポスの玉座にアーレス様が座られる為に」
「野心ではないな」
「違うな。当然のことだ」
それは当然だというのである。
「アーレス様にとってはだ」
「天帝ゼウスとその妃ヘラの唯一の子」
「言わばオリンポスの皇子であられる筈なのだ」
このことを強く意識していた。しかしなのだ。
「だが、誰もがだ」
「アーレスを認めなかったのう」
「無念だ、これ以上までになくな」

キュドイモスははっきりと歯噛みしていた。
「それを晴らす為にもだ」
「忘れぬか」
「忘れずにだ。そして誇りも捨てることはない」
「残念なことじゃ」
ここで童虎はこうしたことを言ったのだ。
「実にのう」
「残念だと？」
「そうじゃ。そこまでの誇りを持ちながら恨みを忘れぬ」
彼が言うのはこれだった。恨みについてなのだ。
「それが残念じゃ」
「恨みは戦いを呼ぶ」
しかしキュドイモスはその恨みを肯定してみせた。この辺りにアテナに仕える者とアーレスに仕える者の違いが出ていた。それもはっきりとだ。
「ならばそれはいいことだ」
「戦いの為の戦いじゃな」
「そうだ。全てを戦いの中に置く」
語るキュドイモスの目は真剣なものだった。

第百十六話　老いていぬ者その三

「それこそが我等の世界だ」
「それが御主等の世界ならばそれでよい」
「いいのか」
「思うのはな」
いいというのだ。
「だが。それを許しはせぬ」
「実現することはか」
「だからこそわしは戦う」
その年老いた小さな姿での言葉だった。しかしである。
童虎のその小さな姿を見てだ。キュドイモスは言うのだった。
「その姿もだ」
「うむ？」
「真の姿を出すがいい」
こう彼に言うのである。
「貴様の真の姿をだ」
「わかっておったのか」
「わからぬ筈がない」
キュドイモスはその彼を見据えながら言ってみせた。
「それはだ」
「わからない筈がないというのか」
「そうだ、気配でわかる」
キュドイモスの言葉は続く。
「その小宇宙でだ」
「そうか。やはり外見では騙せぬか」
「私はわかる。だとすればだ」
「他の者もじゃな」
「貴様自身もわかっている筈だ」

また童虎に対して告げた言葉だった。
「それはだ」
「確かにのう。シオンにしても他の者達もまた」
「わからない筈はないか」
「そういうことだ。黄金聖闘士程度の力があればわかることだと思うが」
「隠してはおる」
童虎はそれはしているというのだ。
「しかし。察せられてはおるのか」
「薄々ではあるだろうがな」
キュドイモスはこう前置きはした。
「それでも気付いているだろう」
「左様か。ならばそれはそれでよい」
「いいというのか」
「どちらにしてもわしはわしのやるべきことをするまでじゃ」
それまでだというのだ。
「それだけじゃ」
「察せられてもいいというのか」
「隠してはおるがな。察せられていてもどうこうするつもりはない」
無駄な戦いは好まない、そういうことだった。
「さすればじゃ」
「実態を知った者は消すとでも言うと思ったのがな」
「ふぉふぉふぉ、それは何処の悪党じゃ」
今の言葉には笑って返してみせたのだった。
「そういうことは一切せんよ」
「ふむ、そうか」
「そうじゃ。そういうことはせん」
また言う童虎であった。
「断じてのう」
「そうだな。貴様も聖闘士だからか」

「聖闘士は無駄な戦いはせん」
「だからこそだな。それではな」
「今度の戦いはそうではない」
二人の言葉は今度は同じものを指し示していた。
「ではじゃ」
「また言おう」
キュドイモスは再度童虎に対して言ってみせた。
「真の姿を出すのだ。そしてだ」
「御主と闘えと」
「ここは精神世界、ならば姿を出すことも容易な筈だ」
「確かにのう」
「ならばだ。出せ」
キュドイモスはそうでなければ闘わないというものすらその言葉に含ませていた。そうしてそのうえで言ってみせているのだ。
「早くな」
「いいじゃろう」
童虎もそれに応えた。
「それではじゃ」
そうしてであった。その姿が瞬く間に変わっていく。そしてその小柄な老人があの逞しく精悍な若者になったのである。
上半身裸であったがそこにだ。あのライブラの黄金聖衣が来た。
「着たか」
「聖衣と聖闘士は一身同体」
その若い童虎の言葉だ。
「念じれば何処であろうとも来る」
「そうだな。だからこそ来たのだな」
「左様じゃ。そしてじゃ」
童虎はその言葉を続けてみせる。

第百十六話　老いていぬ者その四

「今ここでこれを身にまとおうぞ」
「いいだろう、着る時間は与える」
キュドイモスもその間は動こうとはしないのだった。
「身に着けるのだな」
「礼を言うべきかのう」
「礼はいい」
すぐにこう返してみせたのだった。
「それには及ばん」
「左様か」
「私は私に相応しい相手と闘う。それにだ」
「それにか」
「私もまた戦衣を身に着けている」
それはその通りだった。彼もまた戦衣を着ていた。四闘神もまたそれぞれの戦衣を持ちそれを身に着けて戦うのである。彼等もなのだ。
「ならばだ」
「それで互角だというのじゃな」
「そういうことだ。条件はだ」
強さとは言わなかった。神と人の違いは彼もまた強く意識しているからだ。
「同じ条件で闘う流儀だ」
「そして倒すか」
「その通りだ。わかったな」
「うむ、ではだ」
今ライブラの聖衣が分かれた。そうしてそれぞれのパーツになり。童虎の身体を覆った。彼は両手を大きく横に広げた姿で聖衣を受けてだった。完全に武装したのである。

「これでよいな」
「よし、それでいい」
武装した彼への言葉だ。
「それではだ。はじめるとするか」
「うむ、そうじゃな」
「ライブラの聖衣、久し振りに見たが」
今度はその聖衣に対する言葉だった。
「見事なものだ」
「見事だというのか」
「黄金聖闘士最強の男が身に着けるに相応しい」
「最強か」
「貴様が最強だろうな」
その童虎への言葉でもあった。それを言ってみせたのである。
「黄金聖闘士達の中でもだ」
「そうかも知れぬ。だが」
「だが？」
「黄金聖闘士は同じ。互いに闘えば間違いなく双方が倒れることになる」
その黄金聖闘士の言葉である。
「千日戦争のうえでだ。互いが本気を出せばじゃ」
「出せばか」
「どの者も強い。しかも命を賭けて戦う者達じゃ」
仲間達をよくわかっている。そうした言葉だった。
「そういうことじゃ」
「そうだというのか」
「御主達もそういう意味では同じであろう」
「そうかも知れない」
キュドイモスもそれは否定しなかった。命を賭けるということはだ。
「それはだ」

「では。どちらが倒れるか」
「今からそれをはっきりとさせる」
また互いに言うのだった。
「いいな、ライブラよ」
「うむ、キュドイモスよ」
「行くぞ」
こうして戦いがはじまった。その中でだ。
お互いに拳を繰り出し合う。光の拳を。
その中でだ。またキュドイモスが言ってきた。
「ふむ」
「どうしたのじゃ？」
「腕をあげたな」
童虎の拳を受けながらの言葉だった。無論彼も拳を繰り出している。
「また一段となな」
「そう見ているのか」
「拳は嘘をつくことはない」
こうも言うのだった。
「決してだ」
「そういえば御主もじゃ」
「私か」
「そうじゃ、御主じゃ」
キュドイモスに対しての言葉だった。
「御主の拳もまたじゃ」
「腕をあげているというのか」
「今のこの生のこの聖戦においてもじゃ」
この戦いにおいてもだというのである。
「さらに腕をあげたのう」
「怠ることはない」
キュドイモスの返答はこれであった。

「日々の鍛錬はな」
「神であってもじゃな」
「神であろうと人であろうともアーレス様にお仕えしている」
厳然たる事実であった。彼等にとってはだ。
「ならば己を鍛えていくことは決して欠かしてはならないことじゃ」
「奢ることなかれかのう」
「違うな。スパルタを知っているな」
古代ギリシアの都市である。その都市の名前を出してみせたのだ。
「スパルタは。知っているな」
「あの軍事国家じゃな」
当然ながら童虎もスパルタのことは知っている。国民皆兵制を執り鍛え上げられた精兵達により勝ち進んできた国家である。また厳格な教育でも有名だ。
「あそこか」
「そうだ、スパルタと同じだ」
またこの都市の名前を出すのだった。
「我等は戦いの中に生きている」
「前に聞いたか話したか」
童虎はこの辺りはあえて曖昧にしてみせた。

第百十六話　老いていぬ者その五

「スパルタの者が己を鍛える目的は」
「戦いに勝つ為だった」
「そうじゃな。そしてそれが」
「スポーツのはじまりだ」
スポーツは元々血生臭いものであったのだ。爽やかに汗を流すという考えは最初はなかったのだ。だがそれがオリンピック等につながっていく。
キュドイモスはそれを話してだ。そういて言うのである。
「我々はスポーツをしている」
「戦いの為じゃな」
「そういうことだ。日々の鍛錬は怠ることはない」
「それが御主等じゃな」
「如何にも。それを怠ることはない」
今も拳を繰り出しながらの言葉だった。
「決してだ」
「わかった」
そこまで聞いて頷いた童虎だった。
「では御主達はその中で永遠に鍛えていくというわけか」
「その通りだ。戦いの中で生きる為に」
言葉を続けていく。
「そしてアーレス様の理想の世界を実現させその中で生きていく為だ」
「実現で終わりではないのじゃな」
「実現ははじまりに過ぎない」
キュドイモスにとってはそうなのだった。
「それからが大事なのだ」
「わし等との戦いだけを見ておるのではないのじゃな」

「その通りだ。だがライブラよ」
「うむ」
「アーレス様の世界の礎となるのだ」
鋭い目での言葉だった。
「今ここでだ」
「わしを倒してアーレスの世界を築く」
「そうだ」
「ではわしはだ」
拳の欧州は続いている。二人は一見して動きはしていない。だがその周りでは光と光が打ち合いそのうえで消えている。それが応酬だった。
「この世を守る為に戦う」
「それは変わらないか」
「決してじゃ」
絶対にないとまで述べたのだった。
「何があろうともな」
「そうだな。それが変わることはないのはわかっている」
「お互いにな」
「ではじゃ」
童虎の言葉が動いた。
「そろそろ決めるとしようぞ」
「いいだろう」
キュドイモスはここで技を繰り出した。それは」
「クリムゾンファング！」
「その技か」
「ライブラよ、貴様も出すのだ」
技を出してからの言葉だった。
「よいな。貴様もだ」
「最初からそのつもりじゃ」
こう言ってであった。彼が出した技は。

「廬山百龍覇！！」
「むっ！？」
彼の両手から放たれた無数の龍達を見てだ。キュドイモスは思わず声をあげたのだ。
「その技ということはだ」
「何じゃ？」
「まだ技があるな」
これを見抜いての言葉だった。
「そうだな」
「それは御主も同じじゃな」
童虎もそれを聞いて返したのだった。
「そうじゃな」
「否定はしない」
それを隠さないキュドイモスだった。
「私にはまだ技がある」
「やはりのう」
「貴様と同じだ」
こうも言ったのである。
「それはだ」
「では話は早い」
「お互いの技を繰り出すとしようか」
「最初からそのつもりだったがのう」
「遊びは終わりだ」
二人の言葉が強くなった。
「いいな」
「遊びではなかったがこれまで以上にじゃ」
その鋭いままのやり取りである。
「闘おうぞ」
「よし、ではだ」
二人の闘いは激しさを増していく。そしてその先にあるものは二

つあった。だがどちらになるのかまではまだわからなかった。果てには達していなかったからだ。

第百十六話　　完

２０１０・４・２５

第百十七話　己を捨ててその一

己を捨てて

「貴様を倒す為にはだ」
「むっ！？」
「言った筈だ、私は全てを賭ける」
キュドイモスが今言うのはこのことだった。
「命もだ」
「そうじゃな。お互いにな」
「今その全てを賭けてだ」
キュドイモスはその小宇宙を極限まで湧き起こらせた。そして同時にそれを燃え上がらせてである。そのうえで言ってみせてきているのだ。
「貴様を倒す」
「ではその技を見せてもらおう」
「いいだろう。行くぞ」
構えた。まずは右手を後ろにやった。
「このキュドイモス最大の技」
「来るか」
「今ここに。受けよ！」
その右手から恐ろしいまでの衝撃を繰り出した。いや、それは禍々しい幻影の衝撃だった。それを童虎に対して放ったのである。
「イリュージョンダスト！」
「この技は」
「私は混乱を司る」
その彼の司るものも言ってきた。
「そしてその混乱によってだ」
「全てを壊すというのか」
「ライブラよ、見るがいい」

技を放ったうえでの言葉だった。
「己の周りをだ」
「これは」
キュドイモスの言葉に応えて周囲を見るとであった。何と周りには無数の自分自身がいた。そのうえで彼自身を見て不敵に笑ってきていたのだ。
「わし自身か」
「そうだ。そしてだ」
キュドイモスはまた童虎に対して言ってきた。
「この多くの貴様を攻撃すればだ」
「わし自身が傷を受けるのじゃな」
「わかるか、それが」
「わからぬ筈がない」
童虎は冷静に返した。既に察していたのである。
「そうでなければわし自身を出してくる筈がない」
「しかもだ。この貴様の影達はだ」
無数の童虎を影と表現してみせたのである。
「貴様を撃つ。見るのだ」
「来たか」
実際にであった。それぞれの童虎が攻撃を放ってきた。それぞれの拳から放たれた無数の龍達が彼に襲い掛かってきたのである。
「さて、ライブラよこれはどうする」
「受ければ死、攻めても死か」
「しかも力は互角だ」
これもあるというのだ。
「貴様と全く同じだ。技も同じだ」
「何もかも同じであるわし自身が何人も襲い掛かるか」
「さて、どうする？」
また童虎に対して問うてみせた。
「この状況をだ。どうするのだ」

「言った筈だな、キュドイモスよ」
童虎は自分の影達から放たれるその龍達をかわしながらだ。そのうえで言ってみせた。その言葉には何ら動揺したものはない。
「わしは既に全てを賭けている」
「では。ここでもか」
「わし自身と闘い倒れるつもりはない」
それはないというのである。
「貴様を倒しそのうえで先に進んでみせる」
「その為にもか」
「そうじゃ、倒す」
こうしてであった。その全身の小宇宙を燃え上がらせてだ。そしてそのうえで影達に対してその技を放ってみせたのである。
「廬山百龍覇！！」
「死ぬ気か、ライブラよ」
「命は賭けておると言ったな」
またこの言葉を言ってみせたのだった。

第百十七話　己を捨ててその二

「しかしじゃ」
「しかし、か」
「言った筈じゃ。貴様は必ず倒す」
それは間違いないというのだ。
「その為に今影達を倒すのじゃ」
「それにより倒れてもか」
「わしは倒れんよ」
それもないというのだ。
「決してのう」
「言うものだな。果たしてそうなるか」
「してみせると言おう」
童虎の影達が次々に消し飛ばされていく。確かに影達を倒している。しかしであった。
彼自身も傷ついていっていた。その傷はかなりのものだ。全身が鮮血で紅に染まり生命の危機も明らかだ。だが彼はそれでも立っていた。
「よく立っていられるものだな」
「影達は全て消した」
ふらつきもしなかった。全身鮮血に染まってもである。
「その次じゃ」
「その身体で私と闘うつもりか」
「御主ももう技を繰り出すことは容易ではあるまい」
キュドイモスを見据えていた。顔もあげている。全身傷だらけでもそれでも姿勢は毅然としてた。それが揺らぐことは全くなかった。
「出せばそれでじゃな」
「言った筈だ。今の技は私の全てを賭けた技だ」
キュドイモスもそれは認めた。

「それは事実だ」
「そうか」
「しかしだ」
また言う彼だった。
「今の貴様を倒す程度の力は残っている」
「今のわしをか」
「その程度の力はな」
あるというのだ。
「クリムゾンファングでだ。貴様を倒す」
「言っておく」
そのキュドイモスにだ。童虎は毅然として返してみせたのだった。
「わしも今最後の技を出す」
「貴様の最大の技か、その」
「そうじゃ。それを出す」
こう言うのだった。
「わしの最後の力でじゃ」
「その前に貴様を倒してみせよう」
「ならばその爪出してみせるがいい」
半ば挑発めいた言葉だった。
「クリムゾンファングをな」
「いいだろう。それではだ」
キュドイモスは童虎の言葉に応える形になった。そうしてだった。
その牙を繰り出しながらだ。彼に対して言う。
「この一撃で全てが決まる」
「そうじゃな」
「貴様を倒す」
キュドイモスの言葉は強い。
「この一撃で。何としてもだ」
「ならば来るがいい」
それを聞いても動じていない童虎だった。

そうしてだった。キュドイモスがその技を繰り出したのだった。
「クリムゾンファング！」
「今じゃな！」
その紅の爪を見た言葉だった。
爪が来た。だがそれは。
童虎の身体をすり抜けた。まさにそれであった。
「身体を！？」
「見切っていた」
そうだというのであった。
「既にじゃ」
「まさか。神である私の技を」
「一度見ればどんな技も見切ることができる」
「聖闘士だからか」
「左様、だからこそじゃ」
まさしくそれだというのであった。

第百十七話　己を捨ててその三

「聖闘士ならば一度見た技なら見切ることができる」
「だからこそか」
「神の技であろうと見切ることができる」
また言ってみせたのであった。
「そしてじゃ」
「そして？」
「次はわしの番じゃ」
それだというのだった。
「行くぞ」
「来るというのか」
「わしの最後の技じゃ」
その技の名はまだ言わなかった。
そのかわりになのだった。キュドイモスの後ろから声がした。
気配もだ。その気配は。
「後ろに来たのか」
「そうじゃ。そして」
キュドイモスの身体を後ろから掴んできた。それからだった。
「来るのだな」
「わかるというのじゃな」
「そうでなければ後ろに来たりはしない」
「それでわかるというのか」
「そうだ、わかる」
後ろから自分を掴んできた童虎に対する言葉である。後ろを振り向きはしない。しかしそれでもはっきりと感じ取っていた。その気配をだ。
「では貴様の技は何だ」
「廬山亢龍覇」

今その技の名前を言ったであった。
「それがわしの技じゃ」
「廬山亢龍覇か」
「その技を今から出す」
そう言ってであった。童虎の小宇宙がさらにあがった。これまで以上にだ。まるで彼の全てを燃え上がらせるような。そうした燃焼であった。
その燃焼を後ろから感じ取ってだ。キュドイモスは問うのであった。
「これからどうするつもりだ？」
「貴様と共に天にあがる」
まずはそうするというのだ。
「そしてそのうえでだ」
「死ぬつもりだというのか」
「龍は滝を昇り天に達する」
ここで龍の話もするのだった。
「そして天に達した龍はじゃ」
「どうするというのだ」
「そのまま達し尽くし消える。達したならばじゃ」
「では童虎、貴様は」
「左様、御主と共にのぼり詰めてみせようぞ」
「いいのか？死ぬことになるのだぞ」
キュドイモスはあえて言ってみせたのだった。
「貴様も」
「命を賭けると言った筈じゃがな」
後ろの童虎の声は笑っていた。明らかにであった。
「それはのう」
「そうか。ならばだ」
キュドイモスはそれを聞いてだ。静かに述べるのであった。
「ライブラよ、貴様のその技私に対して見せるがいい」

「よいのか?脱出せぬのか」
「この状況でできるものではないな」
今の言葉は冷静そのものの言葉だった。
「最早な」
「それを察してなのか」
「そうだ。覚悟を決めることもまた大事だ」
こうも言ってみせたのだった。
「ならばだ。受けてみせよう」
「左様か。それではじゃ」
「技を出すのだな」
「行くぞ」
こう言ってであった。童虎はキュドイモスをその背中から掴んだまま上に上がった。両手で相手の両手を後ろから羽交い絞めにしてだ、そのうえでの技だった。
そのまま天高く飛びそのまま昇っていく。その中でだ。
キュドイモスの身体に凄まじい衝撃が走る。そして童虎にも。
神はその中で言った。今滅びようとするその中でだ。
「見事だな」
「見事だというのか」
「私の負けだ」
こう言ってみせたのだ。童虎に対してだ。

第百十七話　己を捨ててその四

「このままこの戦いでは滅びるな」
「わしの勝利か」
「死ぬ。しかしだ」
キュドイモスの言葉がここで変わった。
「貴様もまた共になのだな」
「それで満足か」
「戯言を。貴様は勝った」
それを言うのだった。
「貴様はな」
「しかしこの技はわしもまた共に死ぬ」
こう言うのであった。
「それではじゃ」
「死ぬのか」
「そうじゃ、そうした技じゃからな」
「それには及ばん」
キュドイモスの言葉が変わった。
「それにはな」
「どういうことじゃ、それは」
「貴様は生きろ」
こう言ったのである。
「いいな」
「生きろというのか、このわしに」
「私は今にも滅びる」
天高くあがり続ける。その衝撃が二人の身体を容赦なく襲う。戦衣も黄金聖衣も最早何の意味もなかった。その凄まじい衝撃の前にはだ。
「しかしその私に勝った貴様はだ」

「生きよというのか」
「行け」
今度は一言だった。
「いいな、私から離れろ」
「残念だがそれはできん」
童虎はそのキュドイモスの言葉に返した。
「それはな」
「離れることはできぬか」
「そういうことじゃ。貴様と共に滅びる」
「ふっ、ならばだ」
童虎の言葉を聞いてであった。
キュドイモスは不敵に笑った。そうしてであった。
「無理にでもだ」
「無理にだというのか」
「道連れにするつもりはない」
こう言うのである。
「何があろうともだ」
「ではどうするというのじゃ」
「この私の最後の力を使う」
「力をじゃと？」
「そうだ。行くのだ」
今の言葉と共にだった。
童虎の全身が赤い光に包まれた。それは紛れもなくキュドイモスの小宇宙だった。
それに囲まれるとだった。童子の姿が消えていく。
「これは」
「私は私に勝った者を道連れにするつもりはない」
また言うキュドイモスだった。
「そう、決してだ」
「決してじゃというのか」

「如何にも」
それをはっきりと言ってみせたのだった。
「私の最後の意地だ。行け」
「キュドイモス、御主は」
「また会おう」
消えゆく童虎に最後に告げた言葉だった。
「次の戦いではこうはいかん」
「御主が勝つというのじゃな」
「戦いはこれで終わりではない」
この聖戦だけではないというのである。
「必ずやアーレス様の世界を作り上げてみせる」
「しかし今はなのだな」
「そうだ。行くがいい」
こう言ってであった。
「このままな」
「ではまた会おう」
童虎もキュドイモスのその言葉を受けたそうしてであった。
彼は姿を消した。キュドイモスだけが衝撃を受けていく。
そうしてであった。彼は遂に天に姿を消したのであった。

第百十七話　己を捨ててその五

後に残った童虎はだ。現実の世界に残っていた。その姿は。
「ふむ」
「童虎よ」
あの老人の姿であった。その彼に声をかけてきた者がいた。それは。
「勝ったな」
「御主か」
「そうだ、私だ」
シオンの声だった。古い友人である。
その彼がだ。また言ってきたのである。
「勝ったのだな」
「何とかのう」
「それは何よりだ」
友人を労う言葉であった。
「しかし御前はここに来ることはできないな」
「肉体はな」
それは無理だと言うのだった。童虎はだ。
「そちらにはとても行けはしない」
「しかし精神はどうだ」
「それはいけるのじゃがな」
精神はだというのだ。
「じゃが完全に行くことはできん」
「そうか。なら仕方がないな」
「精神、若しくは聖衣だけなら向かわせることはできるがのう」
「わかった」
童虎の言葉をここまで聞いてであった。シオンはあらためて言ってみせた。

「それではじゃ」
「どうするのだ、一体」
「精神と聖衣で来てくれ」
こう言ったのである。
「それでいいか」
「ふむ。それでか」
「そうだ、それでだ」
「わかった」
童虎は頷いた。そうしてである。
シオンに対してだ。こう言ったのである。
「ではその時にじゃ。向かおう」
「来てくれるか」
「わしもいなくては仕方ないのじゃな」
「そうした事情がある」
実際にはそうした事情もあるのであった。アーレスとの戦いにおいては黄金聖闘士は全員必要なのである。だからこそ是非にというのであった。
「やはり御前も必要なのだ」
「そうじゃな。黄金聖闘士が十二人いなければアーレスには」
「勝てはしない」
アーレスの力をよく見ていた。まさにである。
こうして話は決まった。童虎も行くことになった。アーレスとの戦いにだ。
「絶対にだ」
「そして御主もじゃな」
「そういうことだ。私はまずエリスと闘う」
シオンも己の闘いを見ていた。その闘いをだ。
「そしてそのうえでだ」
「来るのじゃな」
「そうした意味で御前と同じだな」

「ふぉふぉふぉ、神は手強いぞ」
「それも承知のうえだ」
既にわかっているというのである。
「それではだ」
「行くか」
「うむ、今からだ」
シオンは廊下を歩き続けている。戦場に向かっていた。
前にはまだ玄室への入り口すら見えはしない。赤い廊下が続くだけだ。
そこを進みながらだ。シオンは童虎に対して話すのである。
「行って闘う」
「健闘を祈るぞ」
こう告げるのだった。友に。
「勝つのじゃ」
「私は勝つ」
シオンもはっきりと言い切ってみせた。
「何があろうともだ」
「相手が神であるならば」
「その先の先を読む」
言葉に厳然たるものが宿っていた。
「教皇としてな」
「ハクレイ様もそうじゃったしな」
「ハクレイ様の御心、忘れたことはない」
言葉も顔も前を見ていた。
「何があろうともだ」
「わしもじゃ。忘れる筈がない」
「それではだ。行って来る」
「アーレスの前でな」
「また会おう」
こう言葉を交えさせて今は別れる。シオンもまた戦いの地に赴く

のだった。

第百十七話　完

2010・4・28

第百十八話　閉じられている目その一

閉じられている目

シャカはケーレスに対してだ。まずはこう言った。

「私はこう呼ばれています」

「それはもう知っている」

ケーレスも既に知っているというのだった。すぐに言葉を返してみせた。

「神に最も近い男だな」

「はい、そうです」

まさにそうだというのだった。

「そう言われています」

「あの聖戦の時からだからな」

「ええ、確かに」

「先の聖戦でも私はそう呼ばれていましたね」

「小宇宙の桁が違うな」

ケーレスはそのシャカの小宇宙を見て言うのだった。

「私と比べてもな。遜色ないまでにな」

「そこまでだというのですね」

「そうだ。遜色ない」

シャカの小宇宙を見続けている。

「全くだ」

「左様ですか。ではその私をですか」

「そうだ、倒す」

戦うという言葉はもう省いていた。これもあえてであった。

「貴様をだ」

「では私もまた」

シャカの小宇宙がだ。さらに高まった。そしてそのうえで今ケーレスと対峙しているのだ。

そのシャカにだ。ケーレスはまた言ってみせた。
「さて、バルゴよ」
「何でしょうか」
「今の貴様は目を常に閉じているな」
「はい」
ケーレスの言葉に対してこくりと頷いたのであった。
「その通りです」
「目が見えぬわけではない。見えていない生の時もあったがな」
「そうした時があったのも事実です」
「確かに貴様は目でなくてもものを見ることができる」
「ええ。目を使わずとも耳を使わずとも」
それでもだというのである。
「見えますし聞くこともできます」
「それはいい。だが何故目を閉じているかだ」
「そのことですね」
「それが何故かだ。ただ何の意味もなくしているわけではないな」
「はい、確かに」
シャカもそれは認めた。言葉だけで頷いてみせたのである。
「その通りです」
「戦いの中にあってもそうだな」
「戦いもまた見えていますので」
「だからか」
「はい、だからです」
「しかし目を閉じているのは確かだ」
それをまた言うのケーレスであった。
「貴様はそれによって何をしているかだ」
「もうおわかりだと思いますが」
「確かに」
それを否定しないのであった。
「既にな。貴様は目を閉じそのうえでだ」

「はい、そうです」
「小宇宙を高めているのだな」
「その通りです。小宇宙を高めています」
まさにそうだというのである。
「常にです」
「そうだな。そしてだ」
また言う彼だった。
「貴様はその高めきった小宇宙をどうする」
「然るべき時に放ちます」
シャカの言葉が強いものになった。
「そう、それが今ならばです」
「放つか」
「必要とあらば」
シャカはそれを否定しなかった。
「そうさせてもらいましょう」
「では開かせてみせよう」
ケーレスはその言葉を受けた。
「貴様のその目をだ」
「そのうえで私を倒すというのですね」
「我等もまたアーレス様の僕」
ケーレスもまたこのことを強く意識していた。己がアーレスの忠実な僕であるということをである。

第百十八話　閉じられている目その二

「それならばだ」
「ですか」
「そうだ。いいな、それではだ」
「私の目を開きたければ」
シャカは冷静なままである。
「そうされるといいでしょう」
「容易ではないというのだな」
「侮ってはいません。しかしです」
ケーレスも神だ。それで侮る筈もなかった。
「それだけではありません」
「意地か」
「誇りとも言うでしょうか。少なくとも貴方に対しても容易に目を開くつもりはありません。これは誰に対しても変わらないことでありますが」
「それは誇りだな」
シャカの言葉をここまで聞いたうえでだった。
「バルゴ、貴様のな」
「やはりそうなりますか」
「しかし貴様の誇りは目を開いてからも存在する」
既にそれも見ているのである。
「それからもだ」
「では。はじめますか」
「いいだろう。それではだ」
「はい、では私の技をお見せしましょう」
凄まじい小宇宙だった。それは他の黄金聖闘士達が見ても驚くべきものだった。
その小宇宙を放ちながらだ。シャカは言うのであった。

「オーム」
「オームか」
「ふむ。御存知でしたか」
「魔神達を倒した時に見ていた」
その時だというケーレスであった。
「既にな」
「そうですか。あの時に」
「一瞬だったな」
語るケーレスのその言葉が鋭いものになった。
「前の生よりさらに強くなっているな」
「あの時の私ともまた違いますので」
「ふふふ、そうだな」
ケーレスはその言葉を受けて不敵に笑ってみせた。
「さらに己を高めたというのだな」
「如何にも」
「あの時の貴様も今の貴様も同じだ」
「それもまた真実です」
「しかしそれだけではない」
こうも言うのだった。
「実力は高めている」
「貴方もそうではないのですか？」
シャカはケーレスに対しても言葉を返した。
「それは」
「私は封印されていた」
「しかしその中においてもですね」
「鍛錬を積むことはできる」
「そうですね。その中にあっても」
「私はこの時を待っていたのだ」
シャカを見据え続けている。だがシャカは目を開いてはいない。
それはまだであった。その目をまだ開こうとはしていない。しかし

見えていたのである。
「貴様と再び闘えるこの日をだ」
「あの時私はライブラの武具を持っていました」
「それがどうかしたのか」
「それでもです」
シャカの言葉が少し変わってきた。
「あの時は私の力を完全に出してはいません」
「ライブラの武具に頼っていたというのだな」
「ですから純粋な勝利ではありません」
その言葉には純粋に悔悟が見られた。彼は明らかにその時の勝利を純粋な勝利だとは見ていなかったのだ。そのことは言葉にも出てしまっていた。
「しかし今はです」
「違うのだな」
「そうです、違います」
また言うシャカだった。

第百十八話　閉じられている目その三

「私のこの純粋な力を使わせて頂きます」
「貴様のその全ての力」
「引き出すというのですね」
「如何にも。そのうえで倒す」
また言ったのだった。
「いいな、それは」
「いいでしょう、それでは私もまた」
オームにより小宇宙を高めながらだ。その背に紅蓮の炎を出してきたのだ。
そしてだ。その炎でケーレスを襲うのだった。
「カーン」
「炎か」
「そう、全てを焼き尽くす不動明王の炎」
それだというのだ。
「これは如何ですか」
「前にも見たが見事な炎だ」
それを見ても動じていないケーレスだった。
「確かにな」
「見事ですか」
「他の者ならばその技で終わりだな」
ケーレスは迫るその炎を冷静に見据えている。身動き一つしない。
「しかしだ」
「しかし？」
「私には通用しない」
こう言うのである。
「全くな」
「通じませんか」

「そうだ。見るのだ」
ケーレスが今言った。するとだった。
その不動明王の紅蓮の炎に包まれた。しかしであった。
彼は全く傷ついてはいなかった。どれだけの炎に包まれてもである。火傷なぞは何一つとしてなかった。まさに怪我一つなくその場に立っていたのだ。
「この通りだ」
「その言葉に偽りなしですね」
「私は嘘は言いはしない」
炎は完全に消えた。しかしケーレスはその中で何一つ傷つくことなくそこに立ち続けていたのである。
何一つとして傷つかずそこに立ってだ。そのうえでの彼の言葉だった。
「それではだ」
「貴方の攻撃ですか」
「次は私が見せる番だな」
それだというのである。
「貴様がまだ技を見せるというのなら別だがな」
「いいでしょう」
シャカは今は動こうとはしなかった。
「それではです」
「攻めぬというのだな」
「そうです。見せてもらいましょう」
また言うシャカだった。
「貴方のその技を」
「そのうえで貴様を倒す」
身動き一つしていないがそれでも小宇宙はさらに高まっていた。
そうしてだ。
構えに入った。そうしてであった。
「このケーレスの最大の技でだ」

「遂に出されるのですね」
「あの時は見せていなかったな」
先の聖戦の話もするのだった。アテナとアーレスが戦ったあの聖戦だ。
「全くな」
「あの時から持っておられたのですね」
「持ってはいた」
それはだというのだ。
「しかしだ」
「見せる機会はなかった。そうなのですね」
「残念なことにだ。それが悔やまれる」
「成程。そして今だというのですね」
「そうだ。今それを見せよう」
構えは独特のものだった。右手を高々と掲げ左手を前に出している。そうしてだ。
今技を放った。その技の名前は。
「ロイヤルデモンクラウド！」
「その技は」
「一つ言い忘れていた」
ここでこうも言ってきたケーレスだった。
「私の技はだ」
「貴方の技ですか」
「最大の技はもう一つある」
今出した技だけではないというのだ。

第百十八話　閉じられている目その四

両手を独特に構えたそこから放ったのは夢幻と思われる妖しい雲だった。それを放ってきたのだ。それを今彼に対して放ってきたのである。

「これだけではない」

「最大の技はもう一つですか」

「表があれば裏がある」

ケーレスはまた話してみせた。

「この技は言うならば表」

「そして裏もある」

「そうよ、裏があるわ」

また言ったのである。そうしてだ。

雲がシャカを覆う。その雲はだ。

「毒、ですか」

「私は毒もまた使うことができる」

放ってからの言葉であった。

「そしてこの毒はただの毒ではない」

「あのデスハンキングはほんの余興だというのですね」

「今の技から見ればそうだな」

まさにそれだというのだ。

「それに過ぎない」

「あの時はカーンで焼くことができましたが」

「今度はどうする、バルゴよ」

「方法はあります」

ここでもシャカは動じてはいなかった。

「今もです」

「そうか。ではいよいよ」

「ええ、そうですね」

「見せてもらう」
ケーレスの技はさらに包み続けている。そのシャカをだ。
毒がシャカを覆わんとしている。その中でまた彼に言うのである。
「この毒はだ」
「尋常な毒ではありませんね」
「そうだ。神の毒だ」
まさにそれだというのだ。
「ただ防げるものではない。黄金聖闘士であってもだ」
「黄金聖闘士はただの毒では倒されません」
それも言うシャカだった。
「しかし神の毒にはですね」
「防げるものではない。現にだ」
大気が溶けていた。その毒によってだ。
「見ろ。この通りだ」
「はい、見えています」
目を開いてはいないがだ。それでも見ているのである。
「既に。それは」
「では何をするというのだ?」
「私もまた技を見せましょう」
そうすると。シャカは遂に言った。
「私のこの技を」
「むっ!?」
「見るのです」
今の言葉と共にであった。
シャカの小宇宙が沸き起こりだ。そうしてだった。
「このバルゴのシャカの技の一つ」
「遂に来たか」
「そう、これこそが」
世界が変わった。それはこれまでの玄室ではなかった。

第百十八話　閉じられている目その五

全ての世界があった。そこは。
「天魔降伏！」
「天魔降伏だと」
「そう、これこそがここで出した私の技」
こう言うのだった。ケーレスはその世界を見てだった。
険しい目で述べた。二人が今浮かんでいるその世界を見てだ。
「六界か」
「そうです、ここがです」
その六界だというのだ。シャカはその世界について言ってきた。
「まずは私達の世界、人界」
「見えている」
それを見ての言葉だった。
「人間達の世界がな」
「ここから上がれば下がりもします」
シャカもまた浮かんでいた。手と手を少し間隔を開けて向かい合わせ胸の前に置いている。そしてその目はまだ閉じたままであった。
「そう、極めて不安定な世界です」
「次に修羅界か」
「互いに戦い合い殺し合う世界」
「我々の世界だと言いたいのか」
「近いのは事実でしょう」
それはというのである。
「しかしです」
「しかしか」
「そうです、しかしです」
また言う彼だった。
「貴方達はこの世界と同じでありながらまた違いますね」

「アーレス様は一つの世界に留まられる様な方ではない」
ここでもアーレスの名前を出してみせたのだ。
「だからこそだ」
「左様ですか」
「そして畜生界」
「獣の世界か」
「この世界もまたあります」
獣達もいた。互いに吼えてそのうえで彷徨っている。そうしているのだ。
そしてその間にだ。今度は腹だけが膨れ痩せ細った卑しい存在がいた。それは。
「餓鬼達か」
「そうです」
今度は餓鬼道であった。
「餓えと渇きに苛まれ続ける。苦の道です」
「そこに堕ちる者もいるか」
「如何にも。しかしまだ下はあります」
その下もあるというのだ。
「下がです」
「地獄か」
「それがここです」
その地獄界も見えてきた。亡者達が鬼達から様々な責め苦を受けている。そこだった。

第百十八話　閉じられている目その六

「地獄もまた一つの世界です」
「我等が最後に向かう場所だとでもいうのか」
「いえ」
そうではないというのだ。
「それはまた違います」
「そうだな。我等が向かうのは」
「ここだというのですね」
最後は光り輝く和やかな世界だ。全ての安楽がそこにあった。
その世界を見てだ。ケーレスは満足した声で述べたのだ。
「天界だな」
「ここに入られるというのですね」
「忘れたことはない」
ケーレスは満足したその顔をだ。一転させて険しくさせてきたのである。
「オリンポスの神々も天闘士達もアーレス様も我々を認めなかった」
「全く、でしたか」
「そうだ、我等は疎外され最後は追われた」
ケーレスもまたこのことを言うのである。
「そして今に至る」
「トラキアに入られたと」
「我等のこの城にだ。しかしあの者達はこの城をだ」
さらに忌々しげになる。そうした言葉だった。
「伏魔殿と言った。パンデモニウムだとな」
「魔、ですか」
「そして我等はその名をあえて受けた」
そうだというのである。
「そしてこの城からだ。全ての世界を制してみせる」

「そしてその為にもですか」
「戦う」
そうするというのだ。
「そして必ず勝つ」
「お互い譲れないのですね」
「そうだな。そしてバルゴよ」
「はい」
「見事だ」
一聞するとだった。急にシャカを褒めたように聞こえる言葉だった。
しかしであった。ここで彼はさらに言った。
「私の技を消したか」
「この技はただ世界を移るだけではありません」
シャカはこう言うのであった。
「それだけではなくです」
「そうだな。敵の攻撃を防ぐ」
「消すのです」
それもあるというのだ。
「それがこの天魔降伏です」
「普通の者ならそのまま何処かの世界に魂どころか身体も送られているな」
「そして倒れる」
シャカの言葉は冷然としたものになっていた。
「その世界にいる者達、とりわけ餓鬼や鬼達によって」
「生憎だが」
ケーレスの言葉が笑ってきていた。
「私が鬼や餓鬼達に倒されると思っているのか」
「それはないというのですね」
「そうだ、絶対にない」
まさに断言であった。

その彼の周りに実際に鬼や餓鬼達が集まってくる。しかし彼は冷静なままで。その彼等を見据えてそのうえで拳を放った。技すら使わなかった。

その拳だけで鬼も餓鬼も吹き飛んでしまった。後に残ったのは誰もいなかった。

「これで終わりだ」

「成程」

「まさかと思うがこれで倒せると思っていた訳ではあるまい」

こうシャカに対して問う程だった。

「そうだな。思ってはいなかったな」

「ええ、確かに」

シャカもまたそのことば認めるのだった。

「貴方ならばその程度では」

「こういうことだ。私の相手はだ」

「私ですか」

「そうだ、さあバルゴよ」

そのシャカへの言葉だ。

「今こそだ。その瞳を開くがいい」

「そうですね」

シャカの言葉が動いてきた。

「時が来たようです」

「ようやくだな」

「では。ケーレスよ」

彼に名前を告げての言葉だった。

「貴方に見せましょう。いえ」

「いえ、か」

「聖闘士になることを志してからはじめてです」

そこにまで至るというのだ。

「私が目を開くのはです」

「そうか、それ以来か」

「ですが今こそです」
その目はまだ閉じたままだ。しかしだ。
小宇宙の高まりが最高潮に達した。そして。
今シャカの目が動いた。ゆっくりと。
開かれるそれはただ開かれるだけではなかった。そこには底知れぬものも存在していた。

第百十八話　　完

２０１０・５・１

第百十九話　神に近い男その一

神に近い男

その気配は。アーレスの宮殿全体に伝わった。
黄金聖闘士達もそれを感じ取ってだ。それぞれテレパシーで話した。
『今だな』
『シャカの目が開かれた』
『間違いありません』
アーレスの前に向かいながらだ。そのうえでのやり取りだった。
そしてその彼等の顔はだ。穏やかなものではなかった。むしろ警戒するものであった。その顔で言うのである。
『まさかこれだけの小宇宙を持っていたとは』
『予想外っていうかな』
『信じられません』
彼等は皆唖然としていた。その小宇宙を感じてだ。
『神にも匹敵する』
『いや、神にも勝るか』
『この小宇宙は』
『流石はバルゴのシャカ』
こうした言葉も出された。
『最も神に近い男と呼ばれるだけはある』
『そうだな』
アイオロスだった。サガに対して言っているのだ。無論テレパシーである。
『私もここまでの小宇宙はだ』
『私もだ』
この二人ですらだった。黄金聖闘士達の中でリーダー格の彼等でもだ。

『到底持てはしない』
『そして操れはしないな』
『貴方達もですか』
『それは無理だと』
『そうだ、無理だ』
『出来るものではない』
実際に二人はこう答えた。
『ここまでの小宇宙を出して操れるのはだ』
『シャカ以外にはいない』
まさにそうだというのだ。
『決してな。しかしそれを出してきたとなるとだ』
『間違いなく本気だ』
これもわかることだった。
『さて、この戦い』
『どうなる？』
『バルゴのシャカ、果たして』
『アーレスの前に辿り着けるか』
彼等は一人も欠けるつもりはなかった。誰一人として欠けてはならない、そう強く確信しながら今は戦場に向かうのだった。最後の戦場に。
そしてだ。目を開いたシャカはだ。ケーレスを見据えてそのうえで言うのであった。
「さて、それではです」
「遂にだな」
「これで宜しいのですね」
その切れ長の独特の目での言葉だ。
「私が目を開いた。それで」
「そうだ、それでいい」
彼もまた満足した言葉で返す。
「それでだ」

「満足して頂いているようで何よりです」
「そしてバルゴよ」
今度はケーレスからだった。
「先程言ったが」
「はい」
「私の最大の技は一つだけではない」
言うのはこのことだった。
「言ったな。表があれば裏もあると」
「はい、確かに」
「何度も言うがアーレス様に仕える者は嘘は言わない」
同時にこのことも言うのであった。
「そういうことだ」
「それではですか」
「見せよう」
そしてだった。
「私のその技をだ」
「では私もまた」
シャカはその目を見開いた顔で言う。その光が異常なまでに強い。
「お見せしましょう」
「来るというのだな」
「はい、このバルゴのシャカ最大の技」
それだというのだ。

第百十九話　神に近い男その二

「それをお見せしましょう」
「いいだろう。ではだ」
ケーレスは今度は構えなかった。そのうえでの言葉だった。
「私の技は今度はだ」
「構えられないのですか」
「そうした技だ」
ケーレスはこう言った。
「この技はだ」
「成程、面白そうな技ですね」
「確かに構えはしない」
また言ってみせたのである。
「だが」
「だが？」
「それでもこの技は私の全てを賭けるもの」
こう言い切るのである。
「そう、この技は」
「！？何だ！？」
ケーレスがシャカの今の小宇宙を感じてだ。驚きを隠せなかった。
「これまで以上の凄まじい小宇宙は」
「そう、この技こそが」
そしてだ。また両手をあの間隔を開けて合わせた形にしてだ。名を言うのだった。
「天舞宝輪」
「天舞宝輪だと」
「この名前は聞かれたことはありませんね」
「名前を聞いたことはない」
ケーレスですらだ。それはなかった。

しかしだ。その中で彼はまた言うのだった。
「しかしだ。はじめて感じたことはある」
「この小宇宙ですか」
「これだけの小宇宙、まさか」
「感じられたことはありませんか」
「アーレス様のものとはまた違う」
ここでもアーレスの名前は出すのだった。
「また違う種類の強大な小宇宙だな」
「そしてです」
「そしてか」
「はい、そしてです」
こう言ってである。そのうえでだ。
凄まじい小宇宙の湧き起こる中でだ。ケーレスを何かが襲おうとした。
だが彼はそれより前にだ。己の技を放ったのである。
「させん！」
「むっ！？」
「貴様は技を出した」
まずはそれを言うのだった。
「では私もまた技を出そう」
「貴方のその技をですか」
「そうだ、この技をだ」
こう言ってであった。出す技はだ。
彼もまた小宇宙を出してだ。その技を放ったのである。
「トラキアクライシス！」
「トラキアクライシス！」
「私はアーレス様の戦士！」
このことは何度言おうともであった。変わることも訂正することもないものだった。
「トラキアを護る者だ。その私こそがトラキアを救う者」

「だからこそその名前の技ですか」
「さあ、バルゴよ」
その右手から凄まじい、全てを切り裂き押し潰す様な波動を放ちながらの言葉だった。
「この技で貴様を倒す」
「では私もまた」
「ではどうする」
また言うのであった。
「どうして私を倒すのだ」
「この技はありとあらゆるものを私の意のままにするものです」
「全てをだというのか」
「そう、それは相手の六感全てもです」
「面白いことを言う」
その言葉を聞いてもだ。動じないケーレスだった。
そしてだ。そのうえで言ってみせたのである。
「ではその技で私を倒してみるのだな」
「はい、ではまずは」
今の言葉と共にであった。
不意にだ。ケーレスの耳が聞こえなくなった。それがだ。
「何っ!?それではだ」
「耳で聞くことを止められましたね」
「聴覚が消えただと」
「はい、まずはそれです」
こう言うのである。

第百十九話　神に近い男その三

「聴覚をです」
「神の聴覚を奪ったというのか」
「まずはそれです」
「そう来たか。だが」
「貴方は耳を使わずともその技を放つことができますね」
「そうだ、では次は何だ」
「これです」
次はだ。舌が動かなくなったのである。
「口か」
「口で話されることも止められましたか」
「今度は口だというのか」
「そうです。口です」
また言うのだった。
「所謂味覚です」
「それも奪ったか」
「そして次は」
シャカが今言うとだった。何も匂わなくなった。それでまたセブンセンシズを使った。それで臭覚を取ることに決定してみせたのである。そうしてみせてだ。
「これです」
「目か」
目が見えなくなった。ケーレスはまたセブンセンシズにした。
四つの感覚がなくなった。彼はその四つでは感じられなくなったのだ。
だがそれでもだ。彼は言うのだった。
「確かに感覚を奪われることは辛いものだ」
「その通りですね」

「しかしそれはセブンセンシズに目覚めていない者」
それだというのだ。
「神は既にセブンセンシズを手にしている。それでどうして感覚を奪われてどうなるのか」
「それですか」
「それでどうなるのか」
また言うのだった。
「私にはどうということはない」
「どうということはないか」
「そうだ、どうとでもない」
あくまで強気のケーレスだった。実際に彼は見えてもいるし聞こえてもいる。それは確かだった。
「現にこうして全て感じられているのだからな」
「話されてもいますし」
「では何故それをする」
あらためてシャカに問うのだった。ここでシャカはまた仕掛けた。それで触覚もなくなった。それで技は消えたかというとだ。
まだ残っていた。そうしてだった。
「この通りだ。私はセブンセンシズで攻撃を出しているからだ」
「出しているからですか」
「そうだ、出している」
また言ってみせたのだ。
「こうしてだ。だが」
「だが？」
「貴様が何を考えているのかを知りたいものだ」
「私が何を、ですか」
「そうだ、何を考えている」
言いながら技の攻防を続けている。その中では誰もが同じだった。
そのうえでだ。また言うのであった。
「今度は最後の感覚も奪うか」

「はい思考を」
「奪うのなら奪うといい」
自分から言ってみせるのだった。
「好きなようにするのだ」
「それでどうにもならないというのですね」
「そうだ、何度も言うがだ」
「セブンセンシズがあるからこそ」
「セブンセンシズは誰にも消せはしないものだ」
ケーレスの自信はここにあるのだった。その消えないものにだ。
「誰であろうともな。それこそだ」
「貴方の命がなくなるまで」
「そうだ。私の命を消すには私に勝つしかない」
「確かに」
それはもうわかっているという返答だった。
「それしかありません」
「ではだ。私の第六感を奪っても何にもなりはしない」
「そう思われますか」
言いながら最後の感覚も奪った。頭脳もだ。
ケーレスはこれで完全に何もなくなった。普通の者ならだ。

第百十九話　神に近い男その四

彼はまだ立っていた。動いてもいる。それまでと全く同じにしか見えない。

その同じ姿でだ。彼は言うのであった。

「さて、これからどうするのだ」

「天舞宝輪は放ちました」

言葉は既に過去形だった。

「これで、です」

「それではもう終わりか」

「いえ、終わりではありません」

「では何をするつもりだ」

技はまだ放たれたままだ。そのうえでの言葉だった。

「次はだ。何をするつもりだ」

「確かに放ちました。ですが」

「ですが、か」

「私の技はまだあるのです」

「まだだと？」

「そう、それこそがこの技です」

言いながらだった。再び構えを取ってだった。

「一つ言い忘れたことがあります」

「何だ、それは」

「確かにセブンセンシズはありとあらゆる感覚を感じることができます」

それはだというのだ。

「見ることも聞くこともです。話すことも感じることもできます」

「今の私がだな」

「そうです。それはです」

「それはか」

「しかし私は他にも技を持っています」
ここでこう言ったのだった。
「他にもです。最大の奥義を複数持っているのは貴方だけではないのです」
「まだあるというのか」
既に彼の技はシャカを撃っている。だがシャカは倒れはしない。そうしてその中で言葉を続けるのである。マントは攻撃を受けたなびいているがだ。それでもシャカは吹き飛ばされもせず傷を受けてもいない。そのまま立っているのである。
その中でだ。シャカは言うのだった。
「そう、私のもう一つの最大の技はです」
「何だ、それは」
「天空覇邪魑魅魍魎」
その技の名前を出したのである。そしてだ。
無数の悪霊と思わしくものがケーレスを襲う。それは彼とてもかわしきれなかった。
「!?これは」
「さて、どうしますか」
無数の悪霊を出しつつ問うシャカだった。
「彼等を防ぐことはできますか」
「侮るな」
これがケーレスの返答だった。
「私にとってはだ。悪霊なぞはだ」
「ではそれを見せてもらいましょう」
こう返すシャカだった。そのうえでその悪霊を浴びせ続ける。ケーレスはその衝撃に暫くは耐えていた。しかしそれも遂に限界を迎えたのであった。
「うっ・・・・・・」
「限界ですね」
「馬鹿な・・・・・・」

技も消えていた。そのうえでの言葉である。彼は今両膝をついてしまっていた。
「何故だ、何故神である私が敗れた」
「若しも貴方が万全ならばです」
シャカはここで言うのだった。その両膝をついた彼に対してだ。
「私もこうなってはいなかったでしょう」
「万全ならばだというのか」
「感覚はただ存在するだけではありません」
「何だと、一つだけではないというのか」
「そうです、一つ一つが力になるのです」
こうケーレスに対して告げる。
「視覚も聴覚も。存在しているだけで、です」
「しかし貴様は目を」
「はい、閉じていました」
その開いた目での言葉だ。

第百十九話　神に近い男その五

「しかしあえてそれを使わないことによってです」
「小宇宙を溜めていました」
「そうなのですか」
「そうです、ですから私は閉じていました。そして」
「そしてか」
「小宇宙を高めていました。おそらく感覚が恒常的になければ問題はなかったでしょう」
ケーレスに対しての言葉である。
「小宇宙をかえって高めることにもなりました」
「しかし今はか」
「貴方は一時的に奪われていました」
「その分の小宇宙を奪われていたのか」
「その分、攻撃にも防御にも出ていたのです」
シャカの言葉は続く。そこまでもだ。
「それで私は貴方の攻撃を受けても倒れず」
「私は倒れたのか」
「その差が出てのことです」
シャカはまた彼に話した。
「それでなのです」
「考えたな。簡単な引き算か」
「ですがそれは確実に出ます」
「そうだな。それで私は敗れた」
また言う彼だった。
「見事だ。私に頭脳で勝ったのだな」
「そういうことになります」
「では行くがいい」
膝を屈したまま言うケーレスだった。

「先に行け。アーレス様の御前にだ」
「では。そうさせてもらいます」
シャカもその言葉を受けて言うのだった。
「そしてアーレスを」
「また会おう」
確かに膝はついている。だがそれでも言葉は出す。敗れはしたがそれでもである。彼は心は倒れてはいなかった。立ったままである。
「次の戦いの時にだ」
「次の聖戦ですか」
「その時は必ず来る」
確信だった。まさにそれだった。
「必ずだ。その時こそだ」
「勝たれるというのですね」
「そうだ、私は勝つ」
シャカに対しての言葉だった。
「何があろうともだ」
「その言葉受けました」
シャカもだ。その言葉を正面から受けてだ。こう言うのである。
「では。その時にまた」
「また会おう」
シャカは前に向かう。既にケーレスに背を向けている。だがケーレスは微動だにしない。それが動けないのか動かないのかはわからない。しかし動きがないのは確かである。
その動きがない状況でだ。彼はまた言うのであった。
「バルゴ、アーレス様は強いぞ」
「わかっています」
立ち止まらずに応えるシャカだった。振り向きもしない。
「しかしです」
「しかしか」
「相手が強大なのは理由にはなりません」

「理由にはか」
「はい、なりません」
そうだというのだ。
「それは理由にはなりません」
「そうか、ならないのか」
「そうです、なりません」
また言うシャカだった。
「それは申し上げておきます」
「相手がどれだけ強大であろうと向かうか」
「そして勝利を収めます」
また言うシャカだった。
「何があろうともです」
「その言葉受けた」
確かにだというのだ。
「確かにだ。では次の戦いにだ」
「勝たれますか」
「何があってもだ。私は勝つ」
また言うケーレスだった。
「絶対にだ」
「その言葉も受けました。それでは」
「そのまま行くといい」
二人の話は完全に終わりシャカはアーレスのいる場所に向かった。
そしてケーレスは彼の気配が完全に消え去るとだ。そのうえで静かに意識を消したのだった。
「次だな」
こう言ってである。そのまま膝をついたまま倒れた。それで全ては終わりだった。

第百十九話　完

2010・5・4

第百二十話　射る者その一

射る者

アイオロスが対しているのはデイモスであった。両者は既に玄室にいてだ。そうしてそのうえで互いに見合っているのであった。
「さて、それではだ」
「闘いのはじまりだな」
まずはお互いに話をする。
「ここで勝ちアーレスの下へ向かう」
「あの時と同じか」
「同じだというのか」
「そうだ、あの時と同じだ」
こうアイオロスに返すデイモスだった。
「あの時とだ。同じだ」
「そう言われればそうかも知れないな」
アイオロスもだ。それを否定しなかった。そうしてであった。
「私はあの時貴様と闘ったうえでだ」
「アーレス様を封じたな」
「我等全てと教皇の御力によってだった」
「アテナもいたがな」
「それも覚えている」
こう返すアイオロスだった。
「アテナもおられた。そうしてだった」
「闘ってだな」
「アーレスを冥界に追いやった」
「全ては同じだ」
デイモスはまた言ってみせた。しかしである。
それと共にだ。彼はこうも言ってみせた。
「だが」

「だが？」
「同じなのはここまでだ」
「これからは違うというのか」
「そうだ、違う」
また言うデイモスだった。
「ここから勝利を収めるのは我々だ」
「だから違うというのか」
「アテナがおらずともアーレス様はあの時とは違う」
デイモスの言葉は続く。
「あの時よりさらに強大になっておられる」
「強大にだと！？」
「そうだ、なっておられる」
その言葉にあえて言ってみせたのである。そのうえでだった。
「まさにオリンポスを治めるだけに相応しいだけの小宇宙を蓄えられたのだ」
「冥界で己を高めたのだな」
「我等は永遠の戦いの中で己を高めていく」
まさしく修羅である。そうした意味においても同じであるのだ。
「アーレス様もそれは同じなのだ」
「強くなっているのだな」
「そうだ、最早アテナいようと。いや」
言葉を換えた。そしてだった。
「オリンポスの神々の誰にも勝てるものではない」
「アーレスの力は元々が強大だったがな」
「先の聖戦よりもさらにだ」
「そうか。そのことは確かに聞いた」
だからといって臆してはいなかった。その態度は変わらない。
そしてだ。また言う彼だった。
「今確かにだ」
「だがそれでも行くのか」

「例えどの様な相手だとしても」
アイオロスの言葉は毅然としたものになっていた。そのうえでの言葉である。
「聖闘士は必ず勝利を収めるものだ」
「必ずか」
「例え我等がどうなろうともだ」
「その心意気は見事だ」
「認めるというのだな」
「相手を認めることにはやぶさかではない」
まさにそうだというのである。
「だが。一つ問題がある」
「それは何だ」
「アーレス様の御前に辿り着く前にだ」
「その前にか」
「私がいる」
強い目で見据えてだ。そのうえでの言葉になっていた。

第百二十話　射る者その二

「この私がだ。いるのだ」
「つまりここは何としても通さないというのか」
「何故私がここにいるかだ」
そこからの言葉だった。
「それを考えるのだな」
「それはわかっている。いや」
言ってからだった。言葉を変えたアイオロスだった。その言葉は。
「言うまでもないことだったな」
「その通りだ。最早言うまでもないことだ」
デイモスもその通りだというのだった。
「私がここにいるその理由はだ」
「あくまでアーレスを護るというのか」
「貴様等がアテナを護るのと同じだ」
「それとか」
「そうだ、それと同じだ」
また言うのだった。
「これでわかったな」
「話は聞いた」
確かにだという。
「我等はそうした意味では同じだな」
「同じだな。確かにな」
それはお互いに言い合うことになった。だがここでの同じというのは平行線という意味である。混ざり合うものでは決してなかった。
そしてだ。さらに話を交えるのだった。
「ではサジタリアスよ」
「うむ」
「これから雌雄を決する」

言葉がさらに強くなってきていた。
「私が勝つ」
「そうした意味での雌雄か」
「アーレス様の御前は何があろうと通しはせぬ」
この決意は他の者達と同じであった。やはり彼もアーレスの戦士であった。
「そう、絶対にだ」
「私もまた勝たなければならない」
「ではだ」
「行くぞ」
来い、ではなかった。その言葉は果敢なものだった。そうしてであった。
その小宇宙が湧き上がってだ。構えに入った。
「あの時は二つの技で貴様を倒せなかったな」
「そうだったな。だがその威力はだ」
「貴様を倒せなかったのは変わらない」
デイモスの言葉が変わらない。
「それは事実だ」
「では次の技はか」
「貴様を確実に倒す」
こう言ってであった。
「ここでだ」
「倒すというのか」
「貴様と同じ考えだ」
「そうだな」
アイオロスはデイモスのその言葉に頷いてみせた。
「そうした意味では同じ考えだな」
「サジタリアスよ」
構えながらだアイオロスに対して言うのだった。
「貴様は過去どれだけ戦ってきた」

「どれだけか」
「そうだ、どれだけだ」
それを問うのであった。
「これまで何度もだ。どれだけ戦ってきた」
「覚えていない」
アイオロスは一旦目を閉じてだ。そのうえで答えたのである。
「神話の時代から。どれだけ蘇ってきたのかはだ」
「そうか、覚えていないのか」
「私は幾度も輪廻転生を繰り返してきた」
「輪廻か」
「シャカの言葉になるがだ。それはまさに輪廻だ」
言葉として最も相応しいからだ。あえてこう言ってみせたのである。輪廻転生とはまさにシャカが言う言葉だった。それは仏教にある言葉だ。
「それだ」
「だからこそそれか」
「そうだ、私は輪廻転生の中に生きているのだ」
「魂自体がだな」
「身体は変わる。だが魂は変わらない」
こう言うのであった。

第百二十話　射る者その三

「永遠にだ。それは変わりはしない」
「そうだな。私は神、滅びることはがないがな」
「この話はわかるのだな」
「狂闘士達を見ているとな。わかる」
これがデイモスのアイオロスへの返答だった。
「それもよくだ。わかる」
「狂闘士達はアーレスによって何度も蘇ることが可能だったな」
「そうだ、それを見ていればな。よくわかる」
「アーレスは彼等の肉体を蘇えらさせているのだな」
「その通りだ。肉体さえ復活すればだ」
「魂がそこに入りだな」
そうなるというのである。肉体さえあればというのである。
「復活するのだな」
「そういうことだ。魂は不滅なのだからな」
「私達もまた同じということだ」
アイオロスだけではないのだという。彼だけではだ。
「肉体は幾度滅んでもだ。魂は不滅だからこそだ」
「そして神話の時代から戦っているのだな」
「如何にも」
今度の返答は一言だった。
「その通りだ」
「そしてかつては私とも闘ったな」
「海闘士とも戦い魔物達とも戦ってきた」
「冥闘士ともだったな」
「そうだったな。確かに数多いものだ」
伊達に神話の時代から戦ってきただけはある。戦ってきた相手も実に多岐に渡る。一つや二つだけではない。まさに無数といってい

いだけだった。
「倒した戦士の数もだ」
「魔物も入れてか」
「そうだ、多い」
アイオロスは確かな声で述べた。
「私は数多くの戦いで多くの戦士達を倒してきた」
「それが貴様の魂の辿ってきたものだな」
「そうなる。思えばアーレスの戦士達よりその戦いは多いかも知れない」
「しかしそれでも修羅ではないのだな」
「それは違う」
また断言だった。
「決してだ。違う」
「何故修羅でも我々とも違う」
「私達は人々の為、アテナの為に戦っているからだ」
「だから違うというのか」
「戦いの為の戦いではない」
それを断る。断じてだという。
「護る為の戦いだ」
「護る為か」
「人々、平和、愛」
この三つを挙げる。
「アテナが愛される全てのものをだ」
「その全てをか」
「そうだ、その全てを護る為に戦っているのだ」
「それはあの時も言ったな」
デイモスはアイオロスの言葉を聞きながらだ。こう彼に問い返したのである。
「先の聖戦の時に。ライブラの武具を手にしていた時にもだったな」
「そうだったな。それは今思い出した」

「過去にはそう言って私を退けた」
「そして今もだ」
「今もだというのだ」
「そうだ、今もだ」
また言うのだった。
「今も同じだ。アテナの聖闘士である限りそれは変わらない」
「言うものだな」
「何度でも言う」
言いながらの言葉だった。

第百二十話　射る者その四

「私が生きて。戦っている限りはだ」
「生きている限りか」
「私は決して倒れはしない」
アイオロスの言葉がさらに強いものになっていた。
「何があろうともだ」
「そして言い戦うか」
「そういうことだ。ではディモスよ」
「うむ」
「今は武具は持っていない」
アイオロスはこのことも告げてみせた。黄金の翼を生やした聖衣がそこにあるだけだ。その手にあるものは何もない。心だけである。
その心を持ってだ。彼は言うのだった。
「何もだ」
「それがあの時とは違うな」
「私は拳だけだ」
まさにそれだけだというのである。
「それだけだ」
「それで私を倒すというのだな」
「聖闘士本来の力でだ」
「あの時も本来の力だったのではないのか」
「何っ！？」
「ライブラの武具もまた聖闘士の力ではないのか」
こう問い返すのである。
「それは。貴様達の力ではないのか」
「そうなのか」
「自分ではそう思っていないのだな」
「私の力は私が持っているこの力だけだ」

それだけなのだというのだ。
「それだけだ」
「だからこそライブラの武具は貴様の力ではないのか」
「そう考えている」
「では聞こう」
デイモスはアイオロスに対してまた問うてみせた。
「いいか」
「何をだ」
「貴様はサジタリアスの聖闘士だ」
問うのはこのことだった。
「そうだな」
「それがどうかしたのか」
「弓矢を持っているな」
問いが具体的なものになった。
「そうだな」
「如何にも」
アイオロスもそのことは否定しない。
「確かに持っている」
「それは使わないというのか」
デイモスはさらに問うたのだった。
「弓矢はだ」
「使うことはない」
自身でだった。言い切ってみせたのである。
「決してだ」
「決してか」
「戦いの時に使うことはない」
アイオロスはまた述べてみせた。
「決してな。それはない」
「ないか」
「そしてだ」

さらに言う彼だった。
「私が戦闘で使うのはこの拳だけだ」
「そして脚だな」
「身体しか使うことはない。決してだ」
また言ってみせる。嘘を言っている目ではなかった。

第百二十話　射る者その五

そうしてである。彼はまた話した。
「矢を放つのは別の場所だ」
「人でも神でもなくか」
「若き戦士達を先に行かせる為に使うものだ」
その弓矢のことも話したのである。
「その為のものだ」
「あの壁か」
ここまで聞いてだった。デイモスも気付いたのだった。
「そうだな。あの壁だな」
「如何にも」
アイオロスはまた言葉を返してみせた、
「その通りだ。あの壁の為にあるものだ」
「あの壁はそう容易に突き破れはしない」
明らかに知っている言葉だった。デイモスはあえてそれを言ってみせるのである。そうしてそのうえでアイオロスの話も聞くのであった。
「貴様等全てが揃いその力を、いや」
「そうだ」
「命まで賭けてな。そうしなければな」
「その時にこそ使うもの」
毅然として言うアイオロスだった。
「私はこの生ではその為に生きているのだ」
「死ぬ為にか」
「身体は必ず滅びる」
「その通りだ。肉体は魂とは違う」
「しかし魂は永遠だ」
話が元に戻っていた。それもあえてであった。

そうしてだ。アイオロスはその言葉を続けてみせた。
「だからこそだ。この生ではだ」
「あえてか」
「それもまた運命」
受け入れていた。明らかにだ。
「どうということはない」
「貴様等にとっては永遠の戦いもまた当然のことか」
「その通りだ。だからこそ死ぬのもまた当然のこと」
言葉を繰り返してみせてきていた。
「だからだ」
「人にしておくのは勿体ないな」
アイオロスの言葉をここまで聞いてである。デイモスは今度はこう言ってみせたのである。その言葉は厳かなものさえ含まれていっていた。
そしてだ。アイオロスを見ながらまた告げた。彼自身にだ。
「神であらばだ」
「神であればか」
「貴様等黄金聖闘士が全て神であらばな」
「どうだというのだ」
「オリンポスの神々よりも上であっただろう」
言葉には嘆息はない。しかしそれが含まれていた。
「間違いなくな」
「あの神々よりもか」
「あの神々の心は人のものだ」
デイモスの顔が歪んだ。忌々しげにだ。
「人のだ」
「私も人だが」
「しかし貴様は高潔だ。貴様等がだ」
「高潔だというのか」
「そうだ、高潔だ」

また言ってみせたのである。
「そこが違うのだ。神々とはだ」
「オリンポスの神々をそこまで憎んでいるか」
「憎むのも当然だ」
それを否定しなかった。それどころかその炎をさらに高めさせている。そのうえでまた言うのだった。彼はその目に今は過去を見ていた。
そのうえで語る言葉にも憎悪を宿らせている。そうしてであった。
「あの者達こそは。我等、そしてアーレスのだ」
「貴様達も苦しんできたのだな」
「あの時のことは決して忘れはしない」
憎悪に満ちた言葉は続く。
「その復讐の為にもだ。まず地上を手に入れる」
「その為に私を倒してだな」
「貴様には恨みはない。だが邪魔立てするのならな」
「いいだろう。我等聖闘士は人々、この世界の為の戦いは受けて立つ」
「では、だな」
「はじめるとしよう」
言葉を交えさせさらに小宇宙を高めさせてだ。そうしてだった。
両者は最後の闘いに入ろうとする。黄金と赤の小宇宙が湧き上がってだった。
それぞれ構えに入るのだった。

第百二十話　　完

２０１０・５・６

第百二十一話　放たれた矢その一

放たれた矢

デイモスは構えを取りながら。対するアイオロスに対してまた問うのであった。
「そしてだ」
「何だ」
「貴様の技はこれまで見てきた」
「うむ」
「二つな」
まずは二つというのである。
「見させてもらった」
「しかし。それからだな」
「そうだ、それで終わりではあるまい」
アイオロスを見据えながらの言葉だ。
「それでだ。まだあるな」
「言った覚えがあるが最大の技がまだある」
「そうか。やはりな」
「その技で貴様を倒す」
言葉に気迫が宿ってであった。
「必ずだ。倒してみせる」
「私も同じだ。私もまた最大の技がまだある」
「その最後の切り札か」
「如何にも。それだ」
デイモスの言葉には不動のものがあった。
「それで貴様を倒す」
「そうするというのか」
「この技を使ったことは神話の時代よりそうはなかった」
このことも言ってみせるのだった。

「それだけの相手でなければな」
「私はそれだけの相手か」
「そういうことになる」
まさにそうだというのである。
「この技、神にさえもそう使ったことはない」
「それはオリンポスの神々にもか」
「如何にも」
率直な返答だった。しかも迅速なものだった。
「その通りだ」
「私を認めるというのは有り難い」
アイオロスもそれを受けて述べる。
「しかしだ」
「しかしか」
「その心を受けたからこそ余計に力を出させてもらう」
「そうした相手でなければ出しはしない」
その技をだと。デイモスはこのことも言ってみせたのである。
「決してだ」
「オリンポスの神々には使わなかったと言ったな」
アイオロスは先程の話をさらに問うてみせた。
「そうだったな。それは何故だ」
「それはだ」
それに応えて話すデイモスだった。
「あの者達は。オリンポスの神々はだ」
「うむ」
「自分達こそが絶対だと思っていた」
言葉に苦いものが宿っていた。それを隠すことはしない。過去の記憶は消せはしない。その消せないものが今彼を苛んでいるのである。
「我等を下の。下賤の神々と侮っていたのだ」
「下賤のか」

「我等だけではなくアーレス様もだった」
彼等が仕えるアーレスもだったというのである。そう話すのだった。
「同じく下賤の者として侮蔑されていた」
「戦いを好む血生臭い神としてか」
「それでだ。我々を侮蔑するのはいい」
それは構わないのだという。
「まだだ。許せる」
「だがアーレスを愚弄するのはか」
「我等を認め受け入れて下さったあの方を愚弄することは絶対に許さん」
言葉にこれまでになり怒りが宿っていた。それをどうしても消せないものだった。それを隠さずにだ。アイオロスに対して語るのだった。
「何があろうともだ」
「許しはしないか」
「そうだ、許さない」
また言うのだった。
「絶対にだ」
「それは忠義か」
「人の言葉で言うとそうなるだろう」
否定しなかった。はっきりとは言わなかったが肯定の言葉だった。
「それはだ。そうなる」
「そうなるというのか」
「アーレス様もまた疎外されていた。御一人だった」
神話の時代のことだ。彼もまた誰からも認められる一人だったのだ。そしてデイモス達もだ。だが彼等はお互いに認め合いそうして永遠の絆を結んだのだ。

第百二十一話　放たれた矢その二

その絆を確かめ合ってだ。そうしてだった。
デイモスはそのことを思い出してだ。また話すのだった。
「そのアーレス様が我々を受け入れて下さったのだ。我々を認めて下さったアーレス様を愚弄する者は例え誰であろうが許しはしない」
「狂闘士達は誰もが絶対の忠義を持っていたが」
「だからだ。アーレス様が受け入れて下さったからだ」
「それでなのか」
「そうだ。そのアーレス様を裏切ることは絶対にない」
断言だった。
「何があろうともだ」
「何があろうともか」
「そうだ、我等は誰一人としてアーレス様から離れることは永遠にない」
「我等もまた同じだが」
「その経緯は違うが忠義は同じか」
「我等もまた何度死のうがそれを変えることはない」
聖闘士達もなのだという。彼等もだというのだ。
「死のうともだ」
「死んでも生きてもそれは変わらない」
また話すのだった。
「幾らでもだ」
「そうだ、変わりはしない」
「あのアーレス様を、我々を侮蔑したあの者達には相応しくない技だ」
話は技に関するものに戻っていた。
「力はあるが心はありはしない」
「心も見ているのか」

「心が相応しくないのだ」
それをまた言ってみせたのだ。
「私のこの技にはだ。あの者達と戦う時にはだ」
「別の技か」
「あの心に相応しい技で葬る」
まさにそうするとだ。言ってみせたのである。
「そうする」
「そして私はか」
「私の最大の技で葬る」
だが彼はというのだ。その技でだというのである。
「それに相応しいからだ」
「オリンポスの神々ですら受けることはないその技で私を倒すか」
「そうだ」
言葉が再び出される。
「そういうことだ」
「では私もだ」
アイオロスも応えてだった。
構えに入ってだった。そうしてだ。
「行くぞ」
「来い、このデイモスの最大の技」
「来るか」
「受けよ、サジタリアス！」
この言葉と共にだった。その技を出したのである。
「クレッシェンドソーン！」
「むっ！？」
「この技で貴様を倒す！」
何かが見えた。それは無数の槍だった。
その槍は光速で動きアイオロスを貫こうとする。それがであった。
「私の最大の技でだ！」
「いいだろう。それではだ」

アイオロスもだった。今己の小宇宙を極限まで高めてだ。そのうえで放った技はだ。
「受けろ！」
「よし、来るがいい！」
「ケイロンズライトインパルス！！」
その技の名前が出された。そしてだ。
無数の衝撃と光の矢がデイモスを襲い掛かる。それがだった。
その攻撃を前にしてだ。デイモスは言うのだった。
「その光でか」
「そうだ、貴様を退けそして倒す」
まさにそうするというのだ。
「この無数の光でだ」
「いいだろう」
デイモスもそれを受けてだった。己の技にさらに小宇宙を込めてだ。
「ならばどちらが勝利を収めるか」
「決着をつける」
こうして互いに技をぶつけ合った。

第百二十一話　放たれた矢その三

光の槍と矢である。両者が激突する。
まずは完全に互角だった。しかしだった。
ふとだ。デイモスが呻いたのだった。
「うっ・・・・・・」
「むっ！？」
迂闊と言えば迂闊だった。一瞬の油断で矢の一本を頬にかすめさせたのだ。
かわしはした。しかしだった。
そこにまた一瞬であるが隙が生じた。その時だった。
「今だ！」
「くっ、しまったか！」
「今こそ勝機！」
アイオロスは叫ぶ。
「このアイオロスの全て、受けよ！」
「ぬううっ！！」
彼の攻撃を受けてだ。何とか矢を槍で防ごうとする。しかしだった。
それは無駄に終わった。押し切られてしまったのだ。
後ろに大きく吹き飛ばされる。デイモスは一瞬のうちに高く飛ばされた。
そのうえでだ。叩き付けられる。勝敗はこれで決した。
「ううう・・・・・・」
「勝負ありだな」
アイオロスの言葉だった。
「これで」
「その通りだ」
仰向けに倒れているがそれでも言葉を返すデイモスだった。

「サジタリアス、貴様の勝利だ」
「そうか、それでいいのだな」
「勝利は勝利だ」
こう言うのだった。
「見事だったと言っておこう」
「そこまで言ってくれるか」
「勝者を褒めるのにやぶさかではない」
このことも告げたのだった。
「それについてはだ」
「それもか」
「そうだ、やぶさかではない」
このことをまた告げたのだった。
「それについてはだ」
「潔さか」
「言った筈だ。我等には真の誇りがある」
今言った言葉はこれだった。
「相手を認めることもそのうちの一つなのだ」
「だからか」
「行くがいい」
言葉には微笑みさえあった。
「私を倒したのだからな」
「わかった。それではだ」
「行くがいい」
また告げたデイモスだった。
「アーレス様の御前にだ」
「行かせてもらう」
「そして闘うがいい」
アーレスとの闘いもまた勧めるのだった。
「しかしだ。勝てると思わないことだ」
「それはだというのか」

「アーレス様に勝てる者はいない」
それはだとも言うのを忘れなかった。
「何があろうともだ」
「そう言えるか」
「そうだ、言える」
また言うのだった。
「決して勝てはしない」
「それは私一人ではだな」
「貴様一人ではか」
「私には仲間達がいる」
彼が今出した言葉はこれだった。
「そして教皇もだ」
「無駄だ」
デイモスは今のアイオロスの言葉も否定してみせた。
「それもだ。無駄なことだ」
「無駄だというのか」
「そうだ、無駄だ」
また言う彼だった。
「アーレス様には何人いようとも決して勝てはしない」
「人ではか」
「神でもだ」
あえてだった。神と言ってみせたのである。

第百二十一話　放たれた矢その四

「勝てはしないものだ」
「アーレスの力故か」
「アーレス様は貴様等を倒される」
彼にとってはだ。このことは既に定まったことであった。運命として考えてそのうえで言ってだ。語ってみせているのであった。
「そして我等と共にオリンポスを攻められるのだ」
「そのうえで天界も制圧するというのか」
「そして神々の長となられる」
これこそがであった。彼の理想の未来であるのだ。それを語ってみせているのだ。
「それは間も無くのことだ」
「では私はか」
「その礎となるのだ」
それであるというのである。
「光栄に思うのだな」
「光栄か」
「そうだ、アーレス様は貴様等のことを決して忘れられぬ」
言葉は笑っていた。
「そして私もだ」
「また蘇るか」
「言ったな。我等は何度でも蘇る」
このことも言ってみせたのだった。
「幾らでもな」
「だからか」
「そうだ、倒れはしない」
確かに今身体は倒れている。しかしなのだった。
「決してだ」

「何度でも蘇るか」
「それも貴様等と同じだ」
また言ってみせたのだった。
「それを言っておこう」
「しかしこの生では最早会うことはない」
今の言葉を終えるとだった。アイオロスの身体が微かに揺らいだ。
そしてデイモスもそれを見逃さなかったのだった。鋭くだ。
「先程の技に命を賭けていたのは嘘ではなかったのか」
「黄金聖闘士の最大の技は己の命を入れる」
これを告げたのだ。
「勝利の為にだ」
「勝利の為にか」
「そうだ、勝利の為にだ」
こう言うのだった。
「その為に全てを賭けるのだ」
「見事だな。あの神々はだ」
「それも違うか」
「戦いは余興に過ぎない」
それだというのだ。
「その程度にしか考えていないのだ」
「その程度か」
「戦いも何もかもだ」
そしてだ。デイモスは言った。
「アーレス様は戦いの中にこそ全てを捧げているがだ」
「アテナとは全く違うか」
「同じものではない。我等にとってはだ」
「どうだというのだ」
「アテナよりもだ」
アテナも確かに憎むべき敵だ。しかしそれ以上にだというのだ。
「あの神々が憎い」

「アーレスを愚弄したからか」
「そうだ。アテナは少なくともアーレス様を愚弄したりはしないな」
「アテナはそうした神ではない」
アイオロスもそれは否定した。
「誰かを愚弄することはだ。それはしない」
「否定はしたがな」
「否定はするし批判はする」
それはだという。
「だが。愚弄することはない」
「それは決してか」
「そして嘲笑も罵倒もしない。侮蔑もだ」
「アーレス様は全てを受けられた」
またアーレスのその忌まわしい過去の話をする。
「そうしたことの全てをだ」
「認められずにか」
「アーレス様の恥辱は必ず晴らす」
敗れていても尚言う言葉だった。

第百二十一話　放たれた矢その五

「何があろうともだ」
「我等はオリンポスの神々と争うことはないが」
「それはわからぬぞ」
こう返したデイモスだった。
「全くだ」
「わからないというのか」
「オリンポスの神々が何も考えていないと思うのか」
「何っ！？」
「あの者達も同じなのだ」
何かと同じだとだ。言うのである。
「ポセイドン様やハーデス様とだ」
「海皇ポセイドン、そして冥皇ハーデスとか」
「そうだ、同じなのだ」
また同じなのだというのだった。
「それは覚えておくのだ」
「天帝ゼウス様もだ」
「あのゼウスもか」
「地上も全ても支配しようとしている」
言葉は続く。
「それを覚えておくことだ」
「覚えておこう。だが」
「だが。何だ」５４
「その時私達はおそらく閉じ込められているだろう」
未来を見ての言葉だった。
「それはだ」
「いないというのか」
「そうだ、その時はおそらくだ」

やはり閉じ込められているというのだ。
「主に戦うのは別の少年達だ」
「覚えておくといい」
デイモスはそのアイオロスに対してまた告げた。
「私を倒した貴様だからこそ告げることだ」
「だからか」
「そうだ、だからだ」
また話すのだった。
「このこともだ」
「そのことも礼を言おう。だが」
「だが？」
「オリンポスの神々もか」
アイオロスの言葉には感慨もあった。だがそれはいい感慨ではなかった。
「地上をか」
「我等の様にそれは正面からのものではないだろう」
「正面からか」
「向かい合うものでもない」
そうしたものではないともだ。こうも言うのだった。
「それはない」
「そうか」
「ただ上から見下ろすだけだ。それはわかっておくことだ」
「神故にか」
「私も貴様等は人としてしか見ていない」
彼自身もそうだとはいうのだ。
「だが、だ。戦士として認めてはいたな」
「確かにな。その通りだった」
「先の戦いからだ。それはあったつもりだ」
「あった。それは言っておく」
「そうか、ならいい」

「戦士が相手ならば言うことはない」
アイオロスもまた彼を認めていたのだった。
「私はだ」
「そうか」
「そうだ。ではな」
「行くがいい。私の言葉を覚えてな」
「そうさせてもらう」
こう話してだった。彼等は別れアイオロスはアーレスの前に向かった。デイモスは満足した笑みを浮かべながら静かに眠ったのだった。

第百二十一話　完

２０１０・５・９

第百二十二話　二つの顔その一

二つの顔

サガはポポスの言葉に応えていた。二人も赤い玄室の中で対峙している。

「ジェミニよ」

「何だ」

「どうしたというのだ」

「貴様は一人か」

不意にこんなことを問うてきたのだ。

「どうなのだ。一人なのか」

「何が言いたい」

眉を顰めさせて返したサガだった。

「一体何をだ」

「一人には思えないのだ」

ポポスの言葉は続く。

「そう、あの時からだ」

「先の聖戦からだというのか」

「如何にも」

こう返すポポスだった。

「どうもな」

「私は確かにジェミニの聖闘士」

サガ自身も己のことに言及した。

「しかしだ」

「しかしか」

「私は一人だ」

これは自分でも強く言い切った。

「それは言える」

「一人か」

「ジェミニのサガはこの世に一人」
彼はまた言ってみせた。
「私以外に誰がいるというのだ」
「そうだな。貴様は一人だ」
ポポスもそれを認めるようにして述べた。
「それは間違いない」
「では何故そう言う」
「心の中に何があるかだ」
「心の中だと」
「そうだ、心の中にあるものだ」
ポポスの話がここで変わった。
「貴様の中にだ」
「私の心の中か」
「確かに貴様は高潔な戦士だ」
ポポスもそれはわかっているというのだった。
「だが」
「だが？」
「心は一つではない」
こうも言うのだった。
「そう、一つではないのだ」
「人の心には多くの顔があるということか」
「如何にも」
彼が今言いたいのはこのことだった。このことをサガに対して言ってみせているのだ。
「多くの顔がだ」
「全て私の顔だ」
「貴様の顔だというのか」
「そうだ、私の顔だ」
それだというのである。
「それ以外の何者でもない。違うか」

「顔が同じならば全て同じだというのか」
「違うというのか？それで」
「顔にも色々ではないのか」
「何っ！？」
「人の顔も色々とある」
ポポスは今度はこうサガに対して言うのであった。
「色々とだ」
「まだ言うのか」
「言おう。そしてだ」
まだ話すのだった。
「それは全て貴様ならばだ」
「私ならばか」
「そのまま何人も貴様がいるということにならないか」
「笑いもあれば怒りもある。悲しみもあるというのか」
「その通りだ。そしてだ」
ポポスの言葉がだ。遂にその中心に入るのだった。

第百二十二話　二つの顔その二

「そこにもう一人の貴様がいるのだ」
「私のそこにか」
「そうだ。貴様はそれに気付いているか」
「いないと考えている」
これがサガの返答だった。
「全くだ」
「全くか」
「そうだ。私は常に私だ」
断言だった。そうではないというのだ。
「それ以外の何者でもない」
「言ったな。しかしだ」
「しかし？」
「私が見たことは事実ならばそれは否定できない」
こう言うのである。
「決してだ」
「それはできないというのか」
「そうだ、できはしない」
「現実は否定できないか」
「それはわかるな」
「わからないと言えば嘘になる」
サガもそれはよくわかっていた。実にだ。
「このサガもそれは踏まえているつもりだ」
「ではだ。わかっておくことだな」
「私は一人だ」
サガはここでまた言ってみせた。
「何度も言おう」
「今はそう思っておくといい。だが」

「だが？」
「わかっている者はわかっている筈だ」
こうも言うのだった。
「既にだ」
「これまで誰にもそうしたことは言われたことはないがな」
「しかし気付く者は気付いている」
ポポスはそれでも己の言葉を翻させない。それはあくまでだった。
「これも言っておこう」
「話は平行線か」
「そうなるな。ではだ」
「では、か」
「来るのだ」
ここまで話してだった。
「いいな、それではだ」
「闘いか」
「逃げるわけではあるまい」
それも問うのだった。
「まさかとは思うがな」
「それはない」
サガもそれは否定する。
「決してだ。それはしない」
「先の聖戦でも前の聖域での闘いでもだったな」
「私は敵に背を向けたりはしない」
言葉はさらに強いものになった。
「それも言っておく」
「私もだ。お互いに倒れるまで闘うとしよう」
「この世の人々、そしてアテナの為にだ」
「アーレスの為に」
ここに二人の考えの違いが完全に出ていた。
「この闘いに勝つ」

「アーレス様の世界を実現させる為にだ」
「アーレスへの忠誠は絶対なのだな」
「如何にも」
ポポスは即座にサガの今の言葉を肯定してみせた。
「それが変わることはない」
「決してだな」
「それも誰一人としてだ」
彼だけではないというのである。
「狂闘士ならばだ。インプの一人に至るまでだ」
「インプ、あの者達か」
「我等の兵士達だ」
その彼等だというのである。
「彼等もまた、だ」
「まさに誰一人としてなのだな」
「アーレス様に二心を抱く者なぞ誰一人としてだ」
「我等もまた同じだな」
「同じか」
「そうだ、同じだ」
サガの言葉である。
「我等もまた、だ」
「誰一人としてアテナを裏切らないというのか」
「絶対にだ」
彼は断言していた。

第百二十二話　二つの顔その三

「それはない」
「ほぼ全ての者がそうだな」
ポポスはサガの言葉をまずは認めるのだった。
「まさにな」
「ほぼ、か」
「私の見たところそうではない者もいる」
「二心を抱く者がか」
「そうだ、いる」
こう言ってみせたのである。
「その者もだ」
「誰だ、それは」
「一人だけだがな」
サガの問いにまずは答えずにその数だけを言うのだった。
「そう、一人だけだ」
「一人だというのか」
「二心ある者だ」
ポポスは思わせぶりにまたこの二心という言葉を出してみせたのである。
「その者だけだ」
「戯言だな」
それを聞いてもただこう返すだけのサガだった。
「それはな」
「またそう言うのだな」
「何度も言う。聖闘士に二心のある者なぞはだ」
「ではそう思っているといい」
ポポスの今の言葉は今は冷淡なものだった。
「思いたければな」

「そう言うか」
「そうだ、言わせてもらう」
ここまで話してだ。あらためて構えに入るポポスだった。
構えると共にだ。その小宇宙が湧き上がる。それはまさにだ。
「神の小宇宙だな」
「既に知っているな」
「聖域で見せてもらった」
その時の戦いのことを今もはっきりと覚えているサガだった。
そしてだ。また言うのであった。
「だが。その時以上だな」
「そういうことだ。あの時に出さなかった技をだ」
「それを今ここでか」
「出させてもらう」
ポポスの言葉である。
「覚悟はいいな」
「いいだろう。それではだ」
サガもまた身構える。そうしてだった。
彼の小宇宙も湧き上がる。それもかなりのものだった。
お互いに黄金と紅蓮の小宇宙を湧き上がらせてだった。
両者見据え合いだ。そのうえでの言葉だった。
「このサガもだ」
「何を出すつもりだ」
「このサガ最大の技で相手をしよう」
「あの技か」
「そうだ、あの技だ」
こう言ってだった。その技の名も告げるのだった。
「ギャラクシアンエクスプロージョンだ」
「またあの技を出すというのか」
「このサガ最大の技だ」
それは変わらないというのだ。

「それで倒させてもらおう」
「一つ言っておく」
ここでポポスはあえて言ってみせたのだった。
「私は既にその技を知っている」
「見た。そうだったか」
「神も一度見た技を覚えられるのだ」
そうだというのである。
「それも言っておく」
「一度見た技ならばか」
「見切っている。それは言っておく」
「一つ言い忘れていることがある」
ここでまた言ってみせたサガだった。
「それを言っておこう」
「それは何だ」
「同じ技でも幾つもあるものだ」
「幾つもか」
「そうだ、同じ技でもだ」
そうだというのだ。

第百二十二話　二つの顔その四

「幾つもあるものだ」
「同じ技に違いを入れられるというのか」
「普通の者ならそれはできはしない」
サガはここでこう言ってみせた。
「だがこのサガはだ」
「それができるか」
「そうだ、ギャラクシアンエクスプロージョンは無数の軌跡がある技なのだ」
「銀河の力を操るからこそだ」
それが何故かも言ってみせる。
「銀河の力は無限だ」
「そしてその軌跡も無限か」
「その通りだ。それではだ」
「来るというのだな」
「行くぞ、ポポスよ」
小宇宙がさらに湧き上がってだった。
そのうえでの言葉だった。力はまさに最高まで高まろうとしていた。
そしてそれはサガだけではなかった。ポポスもだった。
彼もまたここでだ。こう言うのだった。
「さて」
「さて、か」
「私は別の技を出させてもらおう」
「その技を出すか」
「そうだ、出す」
ポポスはこう言うのである。
「ここでだ」

「神の最大の技だな」
「如何にも」
「やはりな。そうか」
それを聞いても落ち着いているサガだった。
「それで来るか」
「驚きはしないのか」
「わかっていたことだ」
だからだというのである。
「それもだ」
「そうか、わかっていたか」
「察していたと言ってもいい」
こうも言い換えてもみせた。
「そう言おうか」
「そう言うのか」
「そうだ、言える」
サガは構えを取ったまま冷静に返す。またしてもだった。
「容易にな」
「成程な。やはり貴様は黄金聖闘士の中でも随一の傑物だな」
「それを認めるというのか」
「我々は敵を認めることにやぶさかではない」
ポポスは冷静に返してみせた。彼もまた冷静だった。
「全くだ」
「それだけの度量はあるというのか」
「オリンポスの神々とは違う」
彼もまた、だった。ここで己の持っている嫌悪という感情を見せたのだ。
「全くだ」
「違うか」
「そうだ、全く違う」
彼はまた言ってみせた。

「同じである筈がない」
「そこまで言うか」
「あの者達は確かに力を持っている」
それは認めることだった。彼等に対してもそれを認めることはやぶさかではないのであった。この辺りは彼等にとって譲れないものだった。
「それは確かだ」
「確かか」
「そうだ、力は持っている」
このことは確かに認める。しかしであった。
言葉に明らかに棘があった。ポポスもそれを隠すことなくさらに言うのだった。

第百二十二話　二つの顔その五

「しかしだ」
「しかしか」
「己を絶対の存在と思っている」
「自分自身をか」
「それは天界にいる神々全てがそうだ」
「そして貴様等はか」
「あの神々に常に蔑まれ侮られてきた」
そうだったというのである。
「我等はまだいい。しかし」
「アーレスだな」
「アーレス様を愚弄することは誰であろうと絶対に許さん」
言葉にさらに怒りを見せる。
「決してだ」
「アーレスもまた蔑まれてきていたのだったな」
「誰もアーレス様を認めようとせずそのうえで愚弄し続けてきた」
「そしてあの神々と戦いか」
「我等は天界を追われた。しかし天界を追われたとしてもだ」
それもだというのだった。ここでポポスは言うのだった。
「やがてはだ。攻め上がってみせる」
「そして自分達が握るか」
「そうだ、握る」
こう言ってみせたのだった。
「全てをだ」
「オリンポスの神々を倒すか」
「一つ言っておく」
ここでポポスの言葉に忠告めいたものが宿った。
「いいか、ジェミニよ」

「何だというのだ？」
「貴様達の仕えるアテナもまただ」
「どうだというのだ、一体」
「オリンポスの神々には好まれていない」
そうだというのである。
「それは言っておく」
「アテナもまた、か」
「そうだ。あの神々は自分達だけだ」
「では人を見るアテナはか」
「海界の神々、そして冥界の神々ともまた違うのだからな」
つまりアテナだけが異質の存在であるというのである。彼は今は理性的な口調でサガに対してこのことを話すのであった。
「人のことを考え気にしているアテナはだ」
「疎ましいというのか」
「そうだ」
まさにそうだというのだった。
「そう思っているのだ」
「それは初耳だがな」
「初耳か」
「確かにこれまで多くの聖戦があった」
今戦っているそれだけではないというのだ。
「前にもアーレスとも戦いポセイドン、ハーデスとも戦ってきた」
「そうだったな、貴様達はな」
「ギガンテス達とも魔物達とも戦ってきた」
「しかしか」
「そうだ、オリンポスの神々とは戦っていない」
彼が言うのはこのことだった。
「これまでだ。そして」
「意識したこともなかったか」
「あの神々は何処か異質だ」

サガが彼等に対して感じていることでもあった。
「上から見ているだけだ。そう思える」
「だが、だ。アテナについてはだ」
「快く思っていないか」
「アテナの兄であるアポロン、姉であるアルテミスもだ」
「そうした神々もか」
「そうだ、言ったな。自分達しかない神々だと」
このことを強く告げるポポスだった。
「確かに言ったな」
「受けている」
言葉をというのだった。
「既にな」
「ならわかるな。そういうことだ」
「では何時かはか」
「貴様達が今戦うかどうかはわからない」
「そこまではわかりはしないか」
「しかしだ」
また言葉を強くさせるポポスだった。
「いいか」
「戦うこともか」
「有り得る、いや必ずある」
言葉を途中で断言に代えてみせてもきた。
「やがてはな」
「戦うというのか。天界の神々とも」
「しかも。見せはしないがだ」
「野心もあるか」
「ない筈がない」
咎める言葉だった。それは自分に対してのものでもサガに対してのものでもない。彼が今その目に見ている、その相手に向けているものだった。

「必ずな」
「だからこそ来るのか」
「我等は隠すことはしない」
自分達についての話に移った。
「それはない」
「誇り故にか」
「戦う者に誇りなくして何なのか」
「そうだな。だからこそ戦える」
「そういうことだ。ではだ」
ここまで話してであった。
今彼等も激突するのだった。その技が互いに炸裂する。

第百二十二話　　完

２０１０・５・１３

第百二十三話　サガの素顔その一

サガの素顔

小宇宙が湧き上がる中で。またポポスは言ってきた。
「ジェミニよ」
「闘いのことか」
「貴様が闘いの先に見ているものは平和だな」
これを問うのだった。
「そうだな」
「それは何度も言っているな」
「確かにな」
ポポスはあえてそれを聞いたかのようであった。
「それはだ」
「しかしあえてか」
サガは彼が何故それを問うたのかを考えて述べた。
「あえて問うたというのだな」
「その通りだ。確かに貴様は平和を見ている」
「だが、か」
「そうだ。何を見ている」
また問うポポスだった。
「もう一人の貴様は」
「平和ではないとでもいうのか」
こう返したサガだった。
「それでは」
「いや、おそらく平和だ」
「それは同じか」
「しかし貴様はその平和は何によってもたらされると思っている」
「何によってか」
「そうだ、何によってだ」

それを問うのだった。
「それは何によってもたらされると思っているのだ」
「愛だ」
返答は一言だった。
「愛によってもたらされる」
「それが貴様の考えだな」
「人の心によってそれがもたらされる」
そう言ってそれであった。今度はだ。
ポポスは彼を見たままだ。また言ってみせたのである。
「しかしもう一人の貴様はだ」
「平和は何によってもたらされると思っているというのか」
「力だな」
それだというのだ。
「力によってもたらされると思っているな」
「力による平和か」
「そして力による正義だな」
「力か」
力と聞いてだった。サガは少し考える顔になった。そのうえでの言葉だった。
「力による正義か」
「それは違うというのか」
「力による正義はデスマスクもシュラも言っている」
彼等がだというのだ。
「そしてアフロディーテもだ」
「黄金聖闘士達にもそうした者がいるのか」
「いる。しかしだ」
「しかしか」
「それは人としての正義だ」
それだというのである。
「人としての正義だというのか」

「そうだ、それ以外の何者でもない」
「人として、アテナの聖闘士としての正義か」
「それに全く変わりはないのだ」
こう話すのであった。
「ではもう一人の貴様もか」
「そうだ、もう一人私がいるとすればだ」
サガはポポスにあえて話を合わせていた。そのうえでの言葉だった。
「その私もまた同じだ」
「同じだというのか」
「人としての正義を見ているのだ」
「野心や覇権があってもか」
「それでも人としての正義を見ているのだ」
また言うサガだった。
「それが極端であり逸脱するかも知れないがな」
「その逸脱が問題だな」
「問題か」
「そうだ、それが問題だ」
「だがそれがだ」
「それがか」
ポポスの言葉を問う。
「それがだというのか」
「それが貴様が持っている運命の一つであり」
ポポスの言葉が続く。

第百二十三話　サガの素顔その二

「やがて貴様を苦しめることになるか、いや」
「いや？」
「破滅させることになるやもな」
こう言うのだった。
「出来ればその運命はこの生で断ち切っておくことだ」
そうせよというのであった。敵であるサガに対してだ。
「さもなければ万全の貴様とまた戦うこともだ」
「できはしないというのか」
「万全の貴様と闘うことを望む」
また言う彼だった。
「だからこそだ」
「どうも敵に対する言葉ではないな」
「敵だからこそ言うのだ」
「敵だからか」
こう話してであった。そのままポポスを見据えてだ。
「言うのか」
「何度も言うが万全の貴様と闘いたいのだ」
「万全ではないというのか」
「そうだ、万全ではない」
「二人いることか」
「ハーデス様との戦いの時からか」
ポポスはこう察した。
「その時からだったか」
「あの時か」
「あの時のことは思い出したか」
「いや」
言葉だけで首を横に振ってみせたのだった。

「それはまだだ」
「まだか」
「そうだ、まだだ」
また言う彼だった。
「それはない」
「そこまでは思い出せはしないか」
「流石にな」
「さもありなん。魂は生まれ変わる度に何かを忘れる」
「何かをか」
「そういうものだ」
こうサガに話すのである。
「人とはそういうものだ」
「新たな世に入る度に忘れ」
「思い出しもする。しかしか」
「そうだ、忘れていることはどうしてもある」
それがわかっているというのである。
「そういうものだ」
「だが神は違うか」
「それはない。神は常に覚えているものだ」
「そして忘れることはない」
「それが神の条件の一つだ」
サガを見ながらの言葉だった。
「ジェミニよ、貴様はそれになりたいか」
「私はそうは思わない」
「そうか」
「人でいい。神になることには何の興味もない」
「貴様はそうだな」
「そうだ」
「だが」
ここでポポスの言葉が変わった。

「もう一人の貴様はどうか。別の考えではないのか」
「どうかな、それは」
「その正義故にだ」
「力を正義とすればか」
「貴様は正義だな」
「少なくともそれを果たそうとはしている」
これがサガの返答だった。
「少なくともだ」
「そうしているか」
「そうだ、人として、アテナの見られている正義をだ」
「その際に何かを勘違いしなければいいがな」
「もう一人の私がか」
「力もまた正義であろう」
アーレスに仕える立場から認めた言葉だった。

第百二十三話　サガの素顔その三

「だが、しかしだ」
「しかしか」
「それは常に根は人として、アテナの正義としてだな」
「それ以外の何者でもない」
「何度も聞いても貴様のその考えは変わらないな」
「変われればそれでアテナの聖闘士でなくなる」
「そういうことなのもわかった。だが、だ」
ポポスの言葉が変わってだ。そうしてだった。
「やはりもう一人の貴様はわからぬな」
「それはどうしてもか」
「わからん。それは言っておく」
「そうか」
「そしてだ」
さらに言うのだった。
「私とこれからまさに決着をつけるがだ」
「うむ」
「そこでまた見させてもらう」
サガを見据え続けたままであった。
「それでいいな」
「望むところだ。それではだ」
「このポポスの最大の技だ」
両手を大きく上に掲げそこでクロスさせてだった。
「今こそ見せよう」
「では私もだ」
サガも同じであった。胸の前で両手をクロスさせてだ。
「今ここでだ」
「受けよジェミニよ！」

ポポスの言葉が突如として強くなった。
「この技を！」
そして放った。その技の名前は。
「ロストシンフォニー！」
「これは！？」
不思議な音が聴こえたかに思えた。その瞬間だった。
周りが一変してだ。音が襲い掛かってきたのだ。その何もかもが歪んだ世界の中でだ。
「これが貴様の最大の技か」
「そうだ、アーレス様は音楽も愛される」
ポポスの勝ち誇った言葉が聞こえてきた。
「そう、勝利の音楽をだ」
「これがだというのか」
「勝利の音楽だ」
まさにそれだと答えるポポスだった。
「アーレス様の為のだ」
「それにより敵を屠るか」
「如何にも」
目を閉じて出した言葉だった。
「その通りだ」
「まさにそうだというのか」
「そしてだ。ジェミニ、貴様はその歌によって死ぬ」
こうサガに対して告げる。
「今からな」
「確かにな。このままではだ」
音楽による肉体にも、精神にもの攻撃を受けながらの言葉だった。
「私も。滅びる」
「貴様の名前は何があろうと忘れはしない」
既に勝利を確信しているポポスだった。
「何があろうともな」

「さて、それはどうかな」
しかしであった。サガの目はまだ死んではいなかった。
「それはだ。どうなるかだ」
「破れるというのか、この技を」
「如何にも」
その死んでない目で語ってみせる。
「そうしてみせよう」
「人が神の技を破るというのか」
「確かに人は神に劣る」
サガもそれは認めた。
「しかしだ」
「しかしか」
「命を賭ければどうか」
「貴様の命をか」
「ならばどうか」
「言葉に偽りはないようだな」
ポポスはサガの今の言葉を聞いてこう述べた。
「やはり。貴様はな」
「何故それをここで言う」
「何、言っているだけだ」
これを返答とするのだった。
「それだけだ」
「そうか、それだけか」
「では。ジェミニよ」
サガを見据えたままだった。

第百二十三話　サガの素顔その四

「貴様のそのギャラクシアンエクスプロージョンを見せてもらおう」
「私の最大のそれをだな」
「そうだ」
まさにそれだというのだった。そしてだ。
サガの小宇宙がこれまでになく湧き上がってだ。そのうえで放たれたのだった。
「ギャラクシアンエクスプロージョン！」
「来たか」
「このサガの全てを込めたこの技！」
サガは技を出しながらまた言ってきた。
「これを受けてみよ！」
「むっ、これは」
サガがその全てを技に込めるとだった。それでだった。
ポポスがその技で作り上げたその世界がだ。変わった。
「むっ！？我が世界が」
「その世界があろうとも」
サガの長い髪が逆立っているように見えた。そうしてだ。
その渾身の技がだ。今ポポスの作り上げた世界を端から壊していった。
その中でだ。ポポスが言ってきた。
「ならば私もだ」
「来るというのか」
「そうだ、やらせてもらう」
こう言ってであった。その技に今彼もまた全てを注いできた。
「くっ、これは」
「どうだ、ジェミニよ」
そのポポスの言葉である。

「私のこの小宇宙は」
「神だけはあるな」
「神か」
「そうだ、神だけはある」
ポポスのその小宇宙を感じ取っての言葉だった。
それと共に世界が元に戻っていく。彼のその世界がだ。
「世界が」
「これは私の世界だ。ならば私が力を込めればだ」
「元に戻るか」
「そういうことだ。そしてジェミニよ」
「何だ」
「貴様もそれで終わりではあるまい」
不敵な笑みと共にだ。言うのであった。
「そうだな」
「私がまだ小宇宙を出せるというのだな」
「違うか、それは」
それをサガに対して問うのである。
「それはだ。違うか」
「そうだな。それではだ」
ポポスのその言葉を受けるまでもなかった。サガは実際にだ。己の全てをその技にさらに注ぎ込んだ。そうしてそのうえでさらに技を出し続けるのだった。
銀河が少しずつ壊れだしている。世界は壊れながらも元に戻ったりもしている。そうした一進一退の攻防となっていたのである。
その中でだ。ポポスはまた言うのだった。
「さて、今は互角だな」
「互角か」
「私も貴様もその全てを出している」
このことも言うのである。
「そのうえで互角か」

「互角か」
「そうだ、互角だ」
ポポスの言葉は続く。

第百二十三話　サガの素顔その五

「今はな」
「しかしそれは何時までも続くものではない」
「それもまたその通りだ」
そうだと返してみせる。
「私か、貴様か」
「どちらが生き残るかか」
「それがはっきりする。これからな」
「ならば・・・・・・！」
サガはここでだ。さらに込めるものがあった。それは。
「まさかそれは」
「そうだ、全てを注ぎ込むといったな」
こうポポスに告げるのである。
「それは覚えているな」
「忘れる筈もない」
「そういうことだ。だからだ」
また言ってであった。
「これからの人々の世界とアテナに為にだ。私はだ」
「命を賭けるか」
「ポポスよ、貴様はどうする」
そしてポポスにも問うてみせる。
「これからだ。どうするつもりだ」
「知れたことだ。それではだ」
言いながらだった。その技に全てを注ぎ込んだ。両者共だ。
そのまま激しい攻防が静かに続いていく。それが千日間戦争にまでなるかと思われた。しかしであった。
ポポスが一瞬だが僅かに揺らいだ。そこでだった。
そこからサガの攻撃が瞬く間に入り込んだ。それにより音楽も世

界も全てが砕け散った。
銀河も割れだ。今サガはその両手を交差させたうえで高々と掲げた。
「私の勝利だ！」
ギャラクシアンエクスプロージョンを放った構えだった。その構えでの言葉だった。
それを受けてポポスは高く吹き飛ばされた。そうしてだった。
そのうえで床に叩き付けられる。そこで世界は元に戻った。
「うう・・・・・・」
「終わったな」
サガはそのポポスに対して告げた。
「私の勝利だ」
「そうだ、貴様の勝利だ」
それに応えながら立ち上がるポポスだった。
「貴様は確かに私に勝った」
「そうか」
「見事だと言っておこう」
言いながら立ち上がる。足はふらついてもそれでもだった。立ち上がってみせてだ。そのうえで彼に対して言葉を出すのである。
「ここでな」
「私がこれまで力を込めたことはなかった」
「なかったか」
「そうだ、なかった」
このことを告げるサガだった。
「神というのは伊達ではなかったか」
「そうだな。しかしジェミニよ」
「何だ」
「今の私には見える」
何とか立ち上がっている。そのまま言う。
「倒れようとしている私にはな」

「見えるというのか」
「そうだ、見える」
まさにそうだというのである。
「私にはだ」
「そのもう一人の私がか」
「髪の色だ」
彼がここで指摘したのはこのことだった。

第百二十三話　サガの素顔その六

「それに気をつけることだ」
「髪か」
「そうだ、髪だ」
「私の髪にあるのか」
「それを言っておく」
こうサガに告げる。
「覚えておくことだ」
「意味がわからないのだが」
サガ自身はそう言われてもだった。目を閉じて言うのであった。
「全くな」
「わからないならいい。しかしだ」
「しかしか」
「それでもだ」
また言うポポスだった。
「私の言葉は事実だ」
「それもまた言うのだな」
「そうだ、言っておく」
「まさか知っているというのか？」
「むっ？」
「我が弟のことを知っているのか」
こうポポスに対して問い返す。今倒れようとしている彼に対してだ。
「カノンのことを」
「生憎だが私が興味があるのは貴様だけだ」
「カノンにはないのか」
「その名前もはじめて聞いた」
ポポスは何とか立ちながら述べた。

「貴様に弟がいることもはじめて知った」
「そうだったのか」
「また言うが私が興味があるのは貴様だけだ」
「私だけか」
「貴様の家族やそういったものには何の興味もない」
敵として、戦士としてのサガだけだというのである。それだけだというのだ。
「だからだ」
「それは知らなかったのか」
「そうだ。言ったな」
サガを見据えながらの再度の言葉だった。
「ジェミニよ、貴様の司るものにこそあるのだ」
「ジェミニか」
「そうだ、貴様にだ」
ポポスは最後の力を振り絞りながらサガに話す。
「貴様のそのジェミニにこそだ」
「それがあるのだな」
「人の顔は一つではない。ジェミニは二つの顔があるな」
「それか」
「それだ。貴様のもう一つの顔のことを忘れるな」
こう告げる。
「それをだ」
「ジェミニのもう一つの顔を」
「覚えておくことだ。そしてだ」
「そしてか」
「克服するのだな」
サガを気遣う言葉だった。それも出してきたのである。
「この生でな」
「私の名がサガであるその時にだな」
「そうだ、その時に終わらせるのだ」

サガを見ての言葉であった。
「その時にだ。そして次の聖戦を楽しみにしている」
「私にはまだ貴様の言葉の意味はわからない」
サガはまずはこう前置きした。
「しかしだ」
「しかしか」
「貴様の言葉は忘れない」
それはだというのである。言い切った。
「決してな」
「その言葉を聞いて安心した。ではまた会おう」
「次の聖戦でだな」
「我等とのな。その時を楽しみにしている」
「わかった」
サガはここまで話してポポスに背を向けた。そのうえでその場を去りアーレスの前に向かう。闘いはこれで終わった。そして最後の戦いがはじまろうとしていた。
ポポスは立ったまま倒れた。静かに微笑みそうしてだ。そのまま息を引き取ったのだった。彼もまた誇りを持ったまま倒れたのである。

第百二十三話　完

２０１０・５・１６

第百二十四話　争いの女神その一

争いの女神

「来たか」
「争いの女神エリスだな」
「知っている筈だがのう」
目の前にいるシオンを見てだ。そのうえでの言葉だった。
「それは」
「その通りだ。既に知っている」
こうそのエリスに対して返す。
「あの時でな」
「私は忘れてはいない」
エリスのその目に怒りの色が宿った。それは誇りを傷つけられた者の目だ。
そしてだ。その目で言うのであった。
「神である私を退けたことをだ」
「忘れてはいないか」
「貴様は人だな」
「それ以外の何者でもない」
シオンもまたエリスに返す。
「それを言っておく」
「ではだ。よいな」
「あの時の言葉も覚えている」
また言葉を返すシオンだった。
「聖域でのことだな」
「そうじゃ、そういえば貴様とはじゃ」
「あの時とは別にか」
「思い出しておるな」
シオンを見据え続けていた。そのうえでの言葉である。

「既に」
「先の聖戦か」
「貴様はあの時も教皇だった」
あの先のアテナとアーレスの聖戦のことをだ。ここでも話すのだった。それは彼等の記憶にそのまま蘇ってきているものであった。
「そうじゃったな」
「そうだった。私もだ」
「あの時はライブラの聖衣で敗れたがのう」
「今は違う」
シオンは言い切ってみせた。
「今はだ」
「貴様等自身の力だというのじゃな」
「そうだ、その力でアーレスに迫っている」
そうなっているというのだ。
「こうしてだ」
「貴様もか」
「私もまた戦士だ」
また言い切ってみせたのである。
「それ以外の何者でもない」
「教皇であってもか」
「私は戦士だ」
このことを強調して言う。何としてもだった。
「だからこそ今ここにいる」
「戦士か」
「違うというのか」
「それは言わぬ」
シオンの言葉をだ。否定しないのだった。
「何故ならじゃ。私もまた」
「争いの女神もか」
「アーレス様の戦士だ。それに」

「それに？」
「戦衣もある」
それもあるというのだった。
「私のな」
「争いの女神のものもか」
「左様、ある」
こう言うのであった。
「私のものがな」
「ではそれを着るのだな」
シオンはそれを止めようとしなかった。むしろそれを勧めるのだった。
「その間は何もしない」
「何もしないというのか」
「それは」
「そうだ、私もまたアテナの戦士」
そこにこそ誇りがあるというのである。しかと言ってみせたのである。

第百二十四話　争いの女神その二

「だからこそだ」
「何もしないのじゃな」
「左様、何もしない」
こう言ってだった。実際に動こうとはしない。絶対にだった。
そのうえでだ。また言う彼だった。
「だからだ。早く身に着けるのだ」
「では。言葉に甘えてじゃ」
こうしてだった。エリスの目の前にだった。神話の時代の彼女の姿を模したその戦衣が出て来た。そうしてそれを見据えてであった。
「では遠慮なく着させてもらう」
「うむ、そうするといい」
「しかしよいのか」
「どういうことだ」
「私がこの戦衣を着ればだ」
その時のことを言うのである。
「貴様は勝てはしない」
「だからか」
「左様、必ず後悔することになる」
自信に満ちた声でだ。こう言ってみせたのである。
「それを言っておこう」
「言葉は受けた。だが、だ」
「貴様は聖衣を持ってはいまい」
「如何にも」
このことも認めるシオンだった。彼はあくまで嘘を吐こうとはしなかった。
しかしであった。彼はここでこうも言ってみせたのであった。
「聖衣以上に武器になるものがある」

「武器か。技か」
「それだけではない」
こう言うのだった。
「それだけではだ」
「ではその武器は何だ?」
「頭脳と目だ」
その二つなのだというのである。
「この二つだ」
「それで私を倒すというのか」
「そういうことになる」
「戦衣を身に纏い絶大なる力を得た私を」
余裕の笑みだった。見下してさえいた。
「倒すとはのう」
「確かに聖衣も戦衣もかなりの力を持っている」
シオンもそのことは認めた。
「しかし」
「しかしと申すのじゃな」
「教皇は神の先を読む」
こう言ってみせるのである。
「その先の先をだ」
「それが頭と目か」
「聖闘士を統率しアテナを補佐する。その教皇だ」
「面白いことを言う。さすれば私もじゃ」
「争いの女神エリスもまた」
「左様、同じじゃ」
教皇とだ。同じであるというのである。彼女自身の口からだ。
「狂闘士、そして四闘神達を統率するのう」
「左様です」
「そしてエリス様」
「宜しいでしょうか」

ここで、であった。エリスの後ろから四人の声が聞こえてきたのだった。
「遅れて申し訳ありません」
「しかしです」
「どうか我等にも」
「戦いの楽しみをお与え下さい」
「ふむ」
四人のその言葉を背に受けてだ。エリスは満足した面持ちで微笑んだ。
そのうえでだ。言葉をこう返したのであった。
「戦いたいのじゃな、そなた等も」
「はい、そうです」
「それは駄目でしょうか」
「我等もまた」
「よい」
微笑みをそのままにしての言葉だった。

第百二十四話　争いの女神その三

「では楽しむがいい」
「そう言って下さいますか」
「我等に楽しみを下さるとは」
「有り難き幸せ」
「さて、シオンよ」
エリスは彼等の言葉を受けながらだ。あらためてシオンに告げてきた。
「よいか、それで」
「争いの女神との闘いの前にか」
「そういうことになる。そなたの相手は四騎士が務める」
その四人が誰かも言ってみせるのだった。
「私との闘いの前にじゃ」
「エリス様の御手をわずらわせるまでもない」
「我等のこの手でだ」
「教皇を倒してみせよう」
「是非共な」
「いいだろう」
シオンもまた、であった。それを受けるのであった。
「それではだ」
「よし、話は決まりだな」
「エリス様、それではです」
「まずは我等が」
「倒すのならそれでいい」
それもいいというエリスであった。
「それもまたじゃ」
「宜しいのですか、それで」
「我等が教皇を倒しても」

「それで」
「面白いことを言うのう」
彼等のその言葉を受けてだ。エリスは今度は楽しそうに笑ってみせて言うのであった。
「それはまた」
「面白いといいますと」
「それは何故でしょうか」
「戦いとなれば相手を倒すもの」
エリスがここで言うことはこれだった。
「答えは出ているではないか」
「有り難き御言葉」
「それでは」
「その御言葉に甘えさせてもらいます」
「甘える必要もない」
また微笑んで述べたエリスだった。
「それもじゃ」
「では純粋に戦えというのですか」
「そういうことですか」
「そうじゃ。そうするのじゃ」
微笑みはそのままだった。そうしてだ。
「では、私は戦衣を着ける」
「はい、では」
「エリス様のその御姿を見させてもらう為にも」
「ここは」
あらためてシオンを見る。そうしてであった。
「倒させてもらおう」
「それでいいな」
「私は誰であろうともだ」
彼等の言葉を受けながらだ。そのうえでまた言ってみせるのである。

「そして何処であろうと何時だろうとだ」
「戦うというのだな」
「そういうことか」
「その通りだ。そのことは他の者達と同じだ」
そうだともいうのである。
「わかったな」
「教皇の首を獲れば勝利は貰ったも同然」
「それならばだ」
「ここは何としてもだ」
「覚悟もできているようだしな」
四人はそれぞれ動いて扇形の陣を組む。それで半月でシオンを囲んでだ。
それぞれの小宇宙を湧き上がらせてだ。そして言ってきた。
「では、だ」
「今からだ」
「戦わせてもらおう」
こうして四人とシオンの戦いがはじまる。シオンの力が今出されようとしていた。

第百二十四話　完

２０１０・５・１８

第百二十五話　女神の戦衣その一

女神の戦衣

「それではだ」
「戦いの前にだ」
四人はここで再びシオンに言ってきた。
「よいな、まずはだ」
「名乗ろう」
「そうだな。名乗りがまだだったな」
シオンも言われてだ。そのことに気付いたのだった。それがまだだったのである。自分のことはもうお互いにわかっていたのでそれで忘れてしまってもいたのだ。
「お互いにな」
「ではどちらから名乗る」
「我等から」
「いや」
しかしだった。ここでシオンは言うのだった。
「私から名乗ろう」
「そうするというのか」
「ここはか」
「そうだ、そうさせてもらおう」
こう四人に返すのである。
「それでいいか」
「我々はそれで構わない」
「一向にだ。名乗りたいというのならだ」
「そちらから名乗るがいい」
四人は名乗りに関しては寛容に返すのであった。
「是非な」
「我等の名乗りはそれからだ」

「そうか。それではだ」
シオンは四人の言葉を受けてであった。そのうえで名乗るのであった。その名はだ。
「我が名はシオン」
そしてであった。さらにだ。
「聖域の教皇。かつてはアリエスの聖闘士だった」
「そうだな。確かに聞いた」
「貴様のことは今だ」
「聞いたぞ」
四人は最後まで聞いてだ。それぞれ言った。
そのうえでだ。今度は四人からであった。
「それでは我等の番だな」
「今から名乗ろう」
「それでいいな」
「うむ」
シオンも頷く。そうしてである。
四人はそれぞれの構えを取りつつだ。名乗ってきた。
「メフィストフェレスのファウスト」
「ベルフェゴールのイシュティス」
「バフォメットのメンデス」
「アリオクのエノク」
四人共名乗り。そしてだ。
「我等四騎士」
「覚えておくことだ」
「今確かに聞いた」
シオンは四人の名乗りを受けてだ。確かに言うのだった。そしてだ。
「しかもそれではだ」
「今からはじめるとしようか」
「戦いをな」

「私もまた戦わせてもらう」
シオンもだ。その全身から小宇宙を込み上がらせてだ。言葉を出してである。
「ではだ」
「よし」
「では、だ」
四騎士達が先に動いてだ。そうしてだった。
「受けよ教皇よ！」
「我等のこの技をだ！」
「ここでだ！」
それぞれ言ってであった。四人はそれぞれの技を繰り出したのだった。
「ワルプルギスダークネス！」
「エビルデスサイズ！」
ファウストは両手を突き出し闇を出す。イシュティスは両手に持つ鎌から気を繰り出した。
そしてだ。次の二人も攻撃を出すのだった。
「エターナルサバト」
「サンダーソード！」
無数の異形の魔物達が地の底から這い出てきてだ。剣から稲妻が放たれる。四人はそれぞれの攻撃でシオンを撃とうとする。

第百二十五話　女神の戦衣その二

それに対してだ。シオンは右手を前に出してだ。まずは上から下に一閃させた。
「エクスカリバー！」
「何っ！？」
「その技は！」
そしてであった。さらにだ。
その右手に新たな薔薇を出した。黒薔薇だ。
「ピラニアンローズ！」
「どういうことだ！？」
「その技を使えるというのか！？」
「まさか」
シオンの攻撃はさらに続く。そうしてである。
今度は青い炎が放たれてだ。
「積尸気鬼蒼焔！」
最後にはだ。これも右手だけで出した技だった。
「グレートホーン！」
それでだ。四人の攻撃を全て打ち消してしまったのだ。技によって技を打ち消したのである。
「何故だ、何故使える！？」
「その技を」
四騎士達は着地してだ。そのうえで言うのであった。
「何故だというのだ」
「何故もこれもない」
こう返すシオンだった。
「私は教皇だ。そして」
「そして？」
「そしてか」

「そうだ、かつての聖戦を生き延びてきた」
このことも話すのだった。あのハーデスとの聖戦のことをである。
「その時に身に着けたものだ」
「先の聖戦でか」
「その時にだというのか」
「そうだ、その時に身に着けたものだ」
こう言うのである。
「かつて共に戦った仲間達の想いと共にだ」
「そんなことは聞いていないぞ」
「そうだ」
「そんな筈がない」
「どういうことだ、それは」
「教皇はただ教皇であるだけではない」
また言ってみせるのだった。
「そこには技もあるのだ」
「技もだというのか」
「全てをか」
「そうだ、黄金聖闘士の技ならば身に着けることができる」
こう四騎士の面々に話す。
「それが私なのだ」
「そうなのか」
「何ということだ」
「それは」
「だからだ。貴様等四人ともこうして戦うことができる」
聖衣も着ておらず武器もない。しかしそれでも彼は負けてはいなかった。その小宇宙は圧倒的であり四人を向こうに回しても臆してはいなかった。
その力でだ。彼はまた言うのであった。
「私は決して負けはしない」
「それは我等の言葉だ」

ファウストがシオンを見据えて言ってみせた。
「我等とてもだ」
「決して敗れはしない」
「教皇、貴様を倒す」
「何かあろうともだ」
こう言ってだ。再び攻めようとする。そこにシオンはだ。
また右手を出してきた。少し前にである。
「カリツォー」
それで周囲を凍らせてしまう。そのうえでだ。
凍らせた周囲にだ。さらに攻撃を放ってみせるのだ。その技は。
「!?この技は」
「小宇宙がこれまで以上に湧き起こった!?」
「何だ、今度は」
「レオの最大の技だ」
こう言ってだった。そしてだ。
その技を放つ。その技は。

第百二十五話　女神の戦衣その三

「フォトンバースト！」
「命を賭けるか！」
「ここで！」
「勝利とは命を賭けるもの」
こう返すシオンだった。
「ならばだ。この技もまた」
「使うというのか」
「ここでか」
「そうだ、使う」
宣言もした。そしてであった。
「だからこそだ。受けるがいい」
「くっ、この技は！」
「避けられるか！？」
「いや、無理だ！」
四騎士達はそれぞれそれを悟った。そうしてだ。
「ならばだ。ここはだ」
「技を放って」
「それで相殺するしかない」
「そうだ、それならだ！」
彼等はそれぞれの技を放つ。それで自分達を守ろうとする。
しかしそれはならなかった。そのフォトンバーストによってである。あえなく吹き飛ばされそのうえで床に叩き付けられたのだった。
「ううう・・・・・・」
「これは」
「これこそがか」
「そうだ、私の技だ」
まさにそれだというのである。

「全てな」
「教皇の力、見せてもらった」
「確かにな」
「今ここでだ」
倒れ伏す彼等はここでこうも言った。
「しかしだ。それでもだ」
「貴様の技はエリス様も御覧になられた」
「そのことは覚えておくことだ」
こうシオンに告げてみせた。彼等は倒れていてもである。それでも目も心も死んではいなかった。そうしてそのうえで言うのであった。
「よくな」
「そのことをだ」
「無論それもわかっている」
シオンは落ち着いた声で彼等に返す。
「当然としてだ」
「そうか、それも読んでいるのか」
「神の先の先を読む」
「そういうことか」
「そうなるな。ではだ」
「また会おう」
「次の戦いでだ」
こう言う四騎士達だった。
「戦わせてもらう」
「貴様とな」
「いいだろう。次のアーレスとの聖戦ではだ」
シオンは完全に落ち着いていた。それを隠さずに言うのであった。
「また戦おう」
「それではだ」
「まただ」

「戦おう」
「楽しみにしているぞ」
こうそれぞれ言うとだった。四人は完全に意識を失った。戦いの勝者は明らかであった。シオンはその場に静かに立ち続けていた。
そのうえでだ。彼が前を見るとだ。そこにエリスがいた。
既に戦衣で全身を覆っていた。右手には禍々しい髑髏の先の杖があった。

第百二十五話　女神の戦衣その四

その赤い杖を前にやりながらだ。シオンに対して言うのであった。
「待ってはいないな」
「戦いがあった」
このことで返すとするのだった。
「それだからだ。それはない」
「左様か」
「そしてだ。戦うのだな」
「楽しませてもらう」
エリスは悠然と笑いながらシオンに言ってみせた。
「思う存分な」
「貴様もまた戦いを楽しむのか」
「そういうことじゃ。それではじゃ」
「死ぬがいい」
こう言ってであった。今悠然と杖を掲げてだ。言うのであった。
「この戦いでじゃ」
「先に行かせてもらう」
彼はまた言った。
「勝利を収めてだ」
「心構えは見事じゃ」
エリスもシオンのそれは認めたのだった。
「じゃが」
「だが、か」
「私にはそれだけで勝てはしない」
こう彼に告げた。
「それを言っておくぞ」
「では先程の技もか」
「そうじゃ、通じぬ」

それもだというのだった。
「私にも一度見た技はだ」
「通用しないのか」
「左様じゃ。通じぬ」
こうも言ってであった。小宇宙を高めてだった。
そのうえでだった。エリスが腕を振るってきた。そうしてだ。
「我が技も見せよう」
「争いの女神の技か」
「そうだ、その技をか」
「そうだ、技を見せよう」
杖を前に出して繰り出してきた技は。
「ブラッククロス！」
「むっ！？」
その言葉と共にであった。黒い巨大な十字架が現われてだ。それがシオンに対して向かってきたのである。そう、漆黒の十字架がである。
しかもその十字架をよく見ればだ。逆になっていた。シオンはその十字架を見てそのうえでこう呟いたのであった。
「逆十字か」
「左様。知っておるな」
「正しい十字架はアテナのもの」
「しかし逆十字はじゃ」
「アーレスのものだったな」
「そしてアーレス様の御力を表わすもの」
それでもあるというのである。
「それがこの逆十字よ」
「そうだったな。アーレスの力か」
「私はアーレス様の御力を最も受け継いでいるもの」
こうも言うエリスだった。
「それよ」

「そうだったな。だが」
「だが、じゃな」
「それもまた打ち破ってみせよう」
こう言ってであった。そのうえでだ。
シオンは再び身構えてだ。技を放とうとしてきた。
それを見てだ。エリスはそのうえで言ってみせてきた。
「さて、どの技を放つのじゃな」
「どの技か」
「そうじゃ、どの技じゃ」
それをシオンに対して問うのであった。
「どの技を使うつもりじゃ」
「それもまた見せよう」
シオンはそれを言われても動じていなかった。
「ここでな」
「よかろう。それではじゃ」
「見るがいい」
シオンもまたその技を放った。その技は。

第百二十五話　完

２０１０・５・２０

第百二十六話　先の先をその一

先の先を

シオンが放つ技。それは。
「見るがいい」
「むっ！？」
「今の私の技はこれだ」
こう言ってだ。放った技は。
「アナザーディメンション！」
「むっ、逆十字が！？」
異次元の穴が開いてだ。その逆十字が飲み込まれた。それで消してみせたのである。
穴が消え後は何もなかったかの様であった。シオンはそうしてみせたうえでまた言ってきたのであった。
「この技だ」
「確かジェミニの技じゃったな」
「如何にも」
シオンもそのことに頷いて答えてみせた。
「その通りだ」
「それもまた使えるというのか」
「言った筈だ。黄金聖闘士の技ならばだ」
落ち着いた声で返すシオンであった。
「全て使うことができる」
「先程四騎士達の相手をした通りじゃな」
「その通りだ」
「そしてその切り札とも言える技もじゃな」
エリスの言葉に鋭いものが宿った。
「それもじゃな」
「そうだ、持っている」

こう返すシオンだった。
「言った筈だ、全ての技を」
「左様か」
「そうだ、私はそのそれぞれの技でも命を賭ける」
言葉は真剣なものだった。そうしてであった。
「戦いに勝つ為にはだ。命を賭けることも厭わない」
「殊勝じゃな。じゃが」
エリスは再びその小宇宙を湧き上がらせてきた。そうしてである。
今度は地の底から何かを出してきた。それは。
血の大海原であった。それを出してきたのである。
「血の海か」
「これもまた我等の海よ」
「アーレスの海か」
「アーレス様に仕える者達が今まで流してきた血だ」
「それか」
「左様、それじゃ」
こう言ってだった。その海をシオンに対して向けてきたのである。
「その海に飲まれて死ぬことじゃ」
「それで。私を」
「さて、どうするのじゃ」
ここでもシオンを見据えてきて言ってきた。
「この海に対してじゃ」
「どうするかか」
「左様、このまま飲み込むこともできる」
技の名前もだ。それも言ってみせてきたのである。
「このブラッディオーシャンでじゃ」
「まさに血の海か」
「アーレス様の忠誠の証よ」
アーレスの為に流した血である。それであるというのだ。
「それなのじゃ」

「それで私を飲み込む」
「さて、どうする？」
こうも言ってみせてきた。
「先の先を読んでおるのじゃな」
「如何にも。確かに争いの女神の言葉は知らなかった」
「それでどうして先を読むのじゃ？」
「読めるものは読んでいる」
シオンの言葉はここでも負けているものではなかった。
「既にだ」
「読んでおるのか」
「そうだ、どんな技かわからなくとも」
それでもだというのである。
「読んではいた」
「面白い。それではじゃ」
「その技も破ってみせる」
「ではどの技を使うつもりじゃ？」
明らかにであった。楽しんでいる言葉だった。

第百二十六話　先の先をその二

その言葉でだ。さらに言うのであった。
「それでは」
「これだ」
言ってであった。放った技は。
「むっ、それは」
「タイタンウノヴァ！」
放った技はそれだった。それで技を相殺しにかかったのだ。
その地震を見てだ。エリスも言う。
「ふむ」
「驚きも侮りもしないのだな」
「驚く？何をじゃ？」
その返答には悠然と笑って返すのだった。
「何を驚くのじゃ」
「私相手ではとでもいうのか」
「それは侮るということでもあるな」
「確かにな。そうなるな」
「それはない」
侮りはないというのである。
「貴様の強さはわかっておる。尋常なものではない」
「尋常なものではか」
「左様じゃ。わかっておるのじゃ」
まさにそうだというのであった。
「だからじゃ。侮ることはない」
「だからだというのだんだ」
「狂闘士は相手が誰であれ全力で倒す」
「獅子の心か」
「そういうことじゃ。そして驚かないのはじゃ」

それの話もするのだった。話はそこにもなった。
「同じじゃ。貴様のことをわかっているからよ」
「黄金聖闘士の全ての技を使えることがか」
「如何にも」
まさにその通りだというのだった。
「その通りじゃ。さすればその技を使ってきてもじゃ」
「驚くことはないか」
「そういうことになる。そうしてじゃ」
ここまで話してだ。言葉を変えてみせてきた。
「この技で血の海を消すか」
「相殺する」
消すのではなくそれだと。こう言いはするのだった。
「海と大地の戦いになる」
「言っておくがこれはポセイドン様の海とはまた違うぞ」
「アーレスの海だからだな」
「それを大地の力で相殺できるものなのか」
「できない算段があって出すようなことはしない」
サガはまたエリスに告げた。
「では、だ」
「さて、どうなるかのう」
大津波の下から地震が起こってだった。そして激しい衝撃と衝撃がせめぎ合いだった。世界が壊れるかの様な激しい轟音が鳴り響いた。
海が割れ大地が砕ける。そしてその先にあったものはだ。
二人だけだった。両者が立っているだけであった。
エリスはここでだ。さらに言ってみせてきた。
「ふむ」
「何とか防いだな」
「相殺したのは事実じゃな」
「言った筈だ、先の先を読む」

またこのことを言うシオンだった。
「この通りだ」
「先の先を読んで動き手を打つ」
「そうして戦う者こそ教皇」
「では。さすればじゃ」
「さすれば？」
「読めぬ技を出すとしよう」
妖艶ですらある凄みのある笑みを浮かべてである。そのうえでの言葉だった。
「それをじゃ」
「切り札か」
「そうとも言う。このエリス最大の技」
エリスの声にもだ。凄みが宿っていた。
「それを今見せよう」
「争いの女神の最大の技か」
「そうじゃ。それを見せよう」
そしてだ。両手で杖を持ってだ。
それを一閃させると。凄まじいまでの紅の小宇宙が放たれてだ。

第百二十六話　先の先をその三

辺りを紅が支配して。そのうえで。
「行くぞ」
「その紅の小宇宙は」
「私もまた命を賭ける時が来た」
こう言ってだ。そしてだ。
その小宇宙を己に凝縮させて。そのうえで。
周囲に向けてその凝縮させた小宇宙を爆発させてきたのだった。
「何っ、この技は」
「受けるがいい、この争いの女神エリス最大の技」
爆発の中からの言葉だった。
「スカーレッドビッグバン！」
その大爆発をこう呼んだのである。
その爆発がだ。玄室も何もかもを破壊せんとしてきたのだ。
「さて、アテナの教皇よ」
「死ねば諸共だというのか」
「そうではない。私は必ず生き残る」
爆発の中でだ。声が笑っていた。
「左様、何があってもじゃ」
「生き残るというのか」
「だからこそこの技を使うのじゃ」
そうだと言ってだ。爆発と共に紅の光も四方八方に放たれる。
そしてその爆発と光の中でだ。エリスは言うのであった。
「さて、この技はどう防ぐか」
「どの様にしてか」
「この技ならばオリンポスも粉砕できる」
確かにだった。今の技はそれだけの威力があった。エリスの言葉は偽りではなかった。

「間違いなくのう」
「その通りだな。だが」
「だが？」
「その技でもだ」
こう言うシオンであった。その爆発に巻き込まれようとしているその中でもだ。彼は焦ってはいなかった。そのうえでの言葉だったのだ。
「私は打ち破ってみせよう」
「面白い。ではどの様にして私のこの技を破る」
「兵法と言っておこう」
「兵法か」
「それだ」
これがシオンの返答であった。
「それを使わせてもらう」
「私はアーレス様の軍師も務めている」
エリスはシオンの今の言葉を受けてこう言ってきたのであった。
「兵法もまた」
「わかっているというのか」
「アーレス様の為に身に着けたものよ」
アーレスの為というのはまさに不変のものであった。
「そう、決してじゃ」
「そしてその兵法によってか」
「アテナを下し地上を制し」
そしてそれからであった。
「オリンポスも制する。アーレス様の為にじゃ」
「私の兵法とは違うな」
「また護る為のものだというのじゃな」
「その通りだ。私の兵法はそれだ」
まさにそれだといってであった。また構えを取るのであった。
それと共にだ。シオンは己の言葉を続けてきた。

「いいな、それではだ」
「今度は何を見せるつもりじゃ」
「見せるものはこれまでと同じだ」
それは変わらないというのだった。
「先の先を読んでだ。それで見せる」
「またそれだというのじゃな」
「それは変わらない」
こう言ってであった。そうして。
エリスの動きを見る。やはりここでも彼女の方から仕掛けてきたのだった。
今度はだ。尖らせた糸の様にした小宇宙をそれこそ蜘蛛の巣を無数に、立体的にも放った様にしてきてだ。言うのだった。
「ファイナルネット！」
「小宇宙を放ったか」
「ただこうして放っただけではない」
こうシオンに告げてであった。
そのうえでだ。その小宇宙にだ。
炎も氷も雷も闇も風も毒も。あらゆるものを走らせてきたのだ。
それでシオンを一気に葬ろうというわけであった。

第百二十六話　先の先をその四

それも蜘蛛の巣はシオンの方に集中的に放たれていた。周りを既に覆ったうえでだ。
「さて、これでじゃ」
「逃げられるかというのだな」
「どうじゃ、これで」
その通りだという返答だった。
「如何に御主といえとじゃ」
「確かに逃げられはしない」
シオンもこのことは認めた。
「それは事実だ」
「そうじゃな。それではじゃ」
「だが」
しかしこう言ってみせた。
「逃げられないのならばだ」
「前に出るだけだというのじゃな」
「そうだ。聖闘士もまた演技以外で背を向けることはしない」
「それが誇りか」
「そうだ、恥を忍んで芝居をする時もある」
それはあるともいうのである。
「だが。今はその時ではない」
「では前に出るだけか」
「見せよう、その私の前に出る姿を」
言いながら構えを取り。そしてだった。
技を放ってきた。その技は。
「見よ、このシオン最大の技を」
「むうっ！？」
「スターライトエクスプロージョン！」

その技を放ってだった。己の全てを注ぎ込んできたのであった。
凄まじいまでであった。まさにシオンの全てを放ってだ。
エリスとせめぎ合う。エリスもまた、であった。
己の全てを技に込めて。そのうえで言ってきた。
「負けぬ！」
「貴様もまたか」
「左様、言った筈じゃ」
目が血走っていた。その目と共の言葉だった。
全ての小宇宙を込めて。シオンとせめぎ合い続ける。
お互いに激しいまでの小宇宙を出し続ける。その中でだった。
エリスはその全てを出そうとした。だが。
「ぬうっ！？」
「むっ！？」
「くっ、抜かったわ」
ここでだ。こう言ってきたのである。
「これは。しまったわ」
「尽きた様だな」
シオンもまたそれを見切ったのだった。
「貴様もまた」
「ううっ、まさかこの私が」
エリスの言葉が弱くなってきていた。それには理由があった。
小宇宙が遂にだ。止まろうとしていたのである。
それまでの圧倒的な小宇宙が消えようとしている。シオンもそれを見ていた。
「小宇宙が尽きるだと」
「神にも限界はある」
シオンは言った。
「そういうことだな」
「そうかもな。じゃが」
「まだ注ぎ込むか」

「我が最後の命まで注ぎ込もう」
己の小宇宙が尽きようとするその中での言葉だった。
「今ここでだ」
「私と共にか」
「そうだ、死ぬことなぞ恐れはしない」
こう言ってまさに最後の最後まで小宇宙を出してだった。技に込めてシオンにぶつけていく。
表情には鬼気迫るものがあった。それを見てシオンもまた。

第百二十六話　先の先をその五

最後の最後までだった。全てを注ぎ込んできたのだった。
「何っ、貴様もか」
「言った筈だ、聖闘士は一つの戦いに全てを賭けるものだと」
「私に対してもか」
「アテナの為に死ぬ」
このことも言う。
「それならば何の問題もない」
「貴様はここで死ぬか」
「必要とあらば。喜んで」
こうしてだった。彼もまたその無数の星屑達に全てを注ぎ込んでだ。エリスに向けてきた。
「さあ、どちらが生き残るかだ」
「両方死しても後悔はせぬか」
「しない」
一言で返した言葉だった。
「何があろうともだ」
「ふふふ、面白い」
エリスの顔はさらに鬼気迫るものになっていた。
最後の最後まで出してそのうえでシオンにぶつけ続ける。だが結末は。
雲の糸がほつれた。それは最初は一本だけだったが全てにつながってだ。そしてそれで崩れたのだった。
「ううう・・・・・・」
「終わったか」
「見事・・・・・・」
右手を床についていた。そのうえでの言葉だった。
「流石は教皇よのう」

「勝利は私のものだな」
「それは認めよう。行くがいい」
顔は上げていた。例え倒れ込もうとしているところでもだ。
「このままな」
「そうさせてもらう。それではだ」
「アーレス様に勝てるとは思わないことじゃ」
エリスは最後にシオンにこう告げた。
「それは無理じゃ」
「無理だというのか」
「アーレス様こそは絶対の存在となられる方」
またアーレスを讃える言葉だった。死を前にしてもアーレスへの忠誠は変わらない。
「何があろうともだ」
「そう言えるか、今も」
「何度もでもじゃ。そういうことじゃ」
「その心はわかった」
静かに返すシオンだった。
「ではだ。私は行こう」
「アーレス様、それでは」
最後の最後はだ。アーレスへの別れの言葉だった。
「勝利を。お待ちしております」
この言葉と共に姿を消した。霧の様に。
シオンもまた最後の戦いに向かう。そうしてだった。
アーレスはこの時だ。二つの影と話していた。その玉座にありながら。
「アーレス殿」
「いよいよですが」
「うむ」
その二つの影の言葉に応えていた。
「そうだな」

「落ち着いておられますが」
「動じたところは」
「ある筈もない」
やはり玉座にいたまま言ってみせるのだった。
そしてだ。彼等に対して告げる。
「それで貴殿等だが」
「はい」
「何でしょうか」
「間も無くこの世界に来てもらう」
こう告げるのだった。
「そしてその時にはだ」
「あの方もですね」
「この世界に」
「我等と貴殿等はかねてから深い絆を結んでいる」
「はい、確かに」
「その通りです」
二人もそのことは認めたのだった。
「では我等が戻った後は」
「その後は」
「この地上を我等のものとしてだ」
そしてであった。アーレスはさらに言うのであった。

第百二十六話　先の先をその六

「そしてだ」
「そのうえで、ですね」
「天界も」
「我等だけでそれをしてもいいのだがな」
アーレスはここでこうも言ってみせた。
「しかしだ」
「我等への義理ですか」
「それでなのですか」
「かつてのことは忘れてはいない」
アーレスは前を見ていた。そのうえでの言葉だった。
「いや、忘れる筈がない」
「あの方が貴方を認めてくれたこと」
「そのことをですね」
「そうだ、私も私に仕える者達も恩は忘れはしない」
強い言葉だった。そこには確かな心があった。
「決してだ」
「だからこそですか」
「我等もまた」
「先の聖戦でも私を迎え入れてくれたな」
「あれは当然のことです」
「その通りです」
彼等はそれをごく普通のことだと言ってみせたのである。
「貴方様だからこそです」
「それも当然です」
「当然だというのか」
「はい、ですから」
「御気になされぬよう」

「そうか」
彼等の言葉を受けながら頷くアーレスだった。
「ではそのまま受けさせてもらう」
「どうぞ」
「そうされて下さい」
「天界の神々に復讐をだ」
アーレスこそはだった。その思いを最も強く持っていたのだった。
それを隠さずにだ。言ってみせたのである。
「その為にはだ」
「まずはこの地上をですね」
「アテナの聖闘士達を」
「彼等を全て倒しそのうえで我が愛する僕達を再び蘇らせ」
こう言葉を続けていく。
「そしてそのうえでだ」
「地上を制し」
「我等をこの世界に解放され」
「そして天界だ」
ここまで話を見ているのだった。そこまでもだ。
「天界の玉座にだ。共に座ろう」
「あの方と共にですか」
「そうされると」
「私は恩のある相手に何かをすることはしない」
アーレスは確かな声で告げた。
「そう、決してだ」
「決してですか」
「我等とは」
「覇権は確かに私の生きる道」
それについてはこう言ってみせた。
「しかしだ」
「しかしですか」

「覇権よりもですか」
「天界で。私を認めず僕達まで愚弄してきた者達にだ」
アーレスの目に怒りが宿った。そうしてであった。
「私を愚弄するのも許せぬが何とか我慢する」
「それはですか」
「アーレス様御自身へのは」
「それ以上に許せぬのは。私についてきてくれる僕達を愚弄することだ」
「狂闘士達を」
「そしてエリス殿や四闘神を」
「そうだ、それが最も許せないことだ」
そしてであった。その怒りに燃える目での言葉だった。

第百二十六話　先の先をその七

「オリンポスの神々も天闘士達も全てだ」
「倒される」
「そうされると」
「思えばあの神々はだ。アベルもだ」
「はい、陥れてです」
「そのうえで」
「消し去った。あくまで己達のことしか考えていない」
辛辣であった。今戦っている聖闘士達よりもアテナよりもだ。激しい敵意と憎悪を見せてそのうえで言葉を発するアーレスだった。
「己達だけだ」
「確かにアベル様に関しては」
「あの方も眉を顰められました」
「アベルに何の不徳があったのか」
アーレスはそのことについても言う。これは二つの影だけでなく彼自身への自問でもあった。あえてそれをそうしてみせたのである。
「何があったのか」
「はい、ありませんでした」
「何一つとして」
二つの影の返答が返って来たのはすぐであった。
「ですがそれでもです」
「アベル様は」
「ただ。オリンポスの神々の中でとりわけ秀でていた」
そのアベルという神のことについての話だった。
「そう、とりわけだ」
「しかしそれ以外には」
「何も野心もやましいことも」
「一切ない方でした」

「ただ。聡明であられ心が清らかで魅力があっただけです」
「つまり秀でていただけだった」
アーレスの語る言葉がさらに苦々しいものになった。
「それだけだった」
「しかしそれが彼等の妬みを買い」
「そのうえで」
「滅ぼされた。あの時は私もアテナも反対した」
この時はだというのだ。アーレスとアテナ、対立する二柱の神々がこのことについては意見を完全に同じにさせたというのである。
「アベルには。滅ぼされる理由はなかった」
「あの方もそう仰っていました」
「そして海界の主ポセイドンも」
「わかっていなかった、いやオリンポスの者達は危惧していたのだ」
アーレスのその言葉が険しいものになった。
「アベルに。彼等が越されそして支配されることをだ」
「その野心がなくともでした」
「しかし彼等はそれでも」
「力があった。彼等よりもだ」
またアベルについての話だった。
「その結果だ。全てな」
「アベル殿が討たれたのは」
「それによって」
「アベルが蘇り復讐を考えたとしても」
言葉に陰惨なものが宿った。
「その時はだ」
「その時はですか」
「アーレス様はどうされるのですか」
「止めはしない。復讐は当然の権利だ」
血生臭い戦いを好むアーレスらしい言葉だった。
「その場合はだ」

「止められませんか」
「決して」
「そうする。それが正しい」
復讐を肯定する。まさにアーレスだった。
「この場合はな」
「では。その様に」
「ここは」
「そういうことだ。それではだ」
ここまで話してであった。
「まただ」
「またですか」
「それでは」
「また会おう」
別れの言葉になっていた。
「戦いの後でな」
「では。その時にまた」
「この地上で」
「会おう。そして久し振りに飲もう」
こうしたことも言うのであった。
「その時はな」
「勝利の美酒を」
「あの方と共に」
「飲むとしよう」
最後は微笑みに終わった。そうしてであった。
二つの影の気配が消え去るのを感じ取ってから。そのうえでまた言うのであった。
「さて、それではだ」
玉座に座ったままだ。前を見据えてだ。
「来るがいい」
彼の戦いを見据えていた。己のいるその広大な間の前の扉を見な

がらだ。そのうえで呟いたのであった。最後の戦いを前にして。

第百二十六話　　完

２０１０・５・２４

第百二十七話　決戦の前の集結その一

決戦の前の集結

広間にだ。まずは彼が来た。
「私だけではないな」
アイオロスはその四角い広間の壁に見える十三の扉を見て言った。
今開いたのは彼が出て来たその扉である。まずは一つであった。
そしてだ。隣の扉が開いた。そこから来たのは。
「やはり来たか」
「生きていて何よりだ」
サガだった。サガはアイオロスのその顔を見て微笑んできた。
「お互いにな」
「そうだな。確かにな」
「だが。私達だけではない」
サガはここでこうも言うのだった。
そしてだ。その言葉が出された瞬間にだ。また扉が一つ開いた。
「お待たせしました」
「いや、待ってはいない」
「今来たばかりだ」
「そうですか」
シャカだった。目をゆっくりと閉じたうえでの言葉だった。
「今しがたですか」
「そしてここにいる」
「そういうことだ」
こうシャカに言う二人だった。
「そしてだが」
「これで三人だな」
「また。来ます」
シャカもまた言うのだった。

「仲間達が」
「さて、次はだ」
「誰だ」
「よお、いよいよだな」
四番目の扉が開いてだった。デスマスクが来た。
「アーレスの野郎の死に顔を巨蟹宮に飾ってやるからな」
「頼りにしていますよ」
目を閉じたままのシャカの顔が微かに微笑んだように見えた。
「貴方の力も」
「大船に乗ったつもりでいな。あっという間に終わらせてやるからな」
自信に満ち満ちた言葉だった。
「今度の戦いもな」
「これで四人だな」
「そして次は」
「最後の戦いだな」
シュラだった。五番目の扉からだった。
「アーレスだ」
「その通りだ」
「これでこの聖戦は終わる」
「終わらせてみせる」
その右手を構えて顔の前にやりながら二人のことばに応えていた。
「このエクスカリバーでだ」
「そうだな。この戦いでだ」
「終わらせなければな」
二人も彼のその言葉に頷く。そうしてであった。
六番目の扉からは薔薇の香りと共にだ。アフロディーテが出て来て言うのであった。
「安心しました」
「安心したというのか」

「それは何故だ」
「私だけではなかったからです」
だからだというのであった。
「他の方々もおられるからこそ。だから」
「だからか」
「それでもだというのだな」
「はい。例え私一人であっても」
それでもだという。
「アーレスを倒してみせるつもりでした」
「誰もが同じですね」
シャカもアフロディーテのその言葉を聞いて述べた。
「その為に戦場にいるのですから」
「確かに」
アフロディーテはシャカのその言葉に頷いてだった。そうしてであった。
今度はだ。アルデバランだった。彼もまた無事ここに来たのだった。
「俺もまた向かおう」
「最後の戦いに」
「いいのだな」
「そうでなければここに来ることはない」
確固たる意志を見せての言葉だった。

第百二十七話　決戦の前の集結その二

「決してだ」
「私達と同じく」
「それはか」
「そういうことになる。アーレスを倒す」
強い声で言い切ってみせた。
「この戦いでだ」
「では。行くとしよう」
「いざ、な」
また扉が開いた。カミュも来た。
「いるな、全員」
「後でまた来る」
「だが既にこれだけいる」
アイオロスとサガは彼に対しても告げた。
「しっかりとだ」
「それは安心しろ」
「そうか。それは何よりだ」
カミュも二人の言葉を聞いてだ。にこりとはしないが満足した声で頷いたのだった。そこにある感情は確かなものだった。志もだ。
そしてだ。また一人来た。それは。
「ミロか」
「貴様も来たのか」
「何とかな」
こうサガとアイオロスに答えることができたミロだった。
「激しい闘いだった。しかしだ」
「ここに来ることができた」
「そうだな」
「その通りだ。そしてだ」

そこから先に見るものはだ。彼もまた同じであった。
「アーレスを倒す。今からだ」
「そうだな。行くとしよう」
「全員でだ」
十番目の扉もまた開かれた。そこから入って来たのは。
アイオリアだった。彼もまた来たのであった。
「皆いてくれて何よりだ」
「おいおい、また言うな」
「我等が倒れるというのか」
「いささか心外でありますね」
デスマスクにシュラ、アフロディーテがアイオリアのその言葉に応えて言う。
「生憎だがな、そこまでヤワじゃねえぜ」
「闘いには勝利を収めている」」
「だからこそここにもいるのです」
「そうだな」
アイオリアもその通りだと頷いた。
「言われてみればな。確かにな」
「そうだよ。それでだ」
「いいな」
「貴方もまた」
「そのつもりで来た」
アイオリアの返答は決まっていた。
「それではだ」
「さて、残る黄金聖闘士はだ」
「一人だ」
アイオロスもサガもアイオリアを迎え入れてからこう述べた。
「ムウだが」
「来るだろうか」
「心配することはありません」

シャカは目を閉じてこう述べた。
「それは」
「案ずることはない」
「そういうことか」
「その通りです。ムウはそう容易には敗れません」
やはりここでも目を閉じている。今開くことは決してしようとはしない。
そのうえでだ。彼はムウが来ることを確信して言うのであった。
「その証拠にです」
「来るか」
「それでは」
「はい、来ます」
こう言ったその時だった。そのムウもまた来たのだった。

第百二十七話　決戦の前の集結その三

優雅な微笑みを浮かべてだ。言ってきたのであった。
「遅れて申し訳ありません」
「いや、今来たばかりだ」
「我等もな」
こう返すサガとアイオロスだった。
「このことについて案ずることはない」
「全くな」
「そうですか」
ムウはそれを聞いてまた頷くのだった。
「それならいいですが」
「そうだ。それでいい」
「そしてだ」
ここまで話してであった。そうして。
十二番目の扉が開いた。しかしであった。
だがそこから入って来た者はいなかった。全くである。
黄金聖闘士達はそれを見てだ。いぶかしむ顔で言うのだった。
「これは一体」
「誰も入って来ない？」
「どういうことでしょうか」
「いや、来られています」
しかしだった。ここでシャカは言った。
「あの方がです」
「そうか。あの方か」
「あの方がだな」
サガとアイオロスが最初にわかったのだった。シャカの言葉に納得した顔で頷く。
「来られたのか」

「確かに」
「はい。ですから案ずることはありません」
シャカの言葉はここでも落ち着いていた。
「ですから」
「まさかと思うがな」
「あの方か」
「来られているのですか」
デスマスクとシュラ、アフロディーテもここでわかったのだった。
「流石って言うかな」
「それだけのものがあるな」
「あの方ならではです」
「では。宜しく御願いします」
カミュはその彼に対して告げた。
「最後の戦いに」
「これから最後の戦いになります」
「だからこそ」
アルデバランとアイオリアも言う。
「是非。その御力を」
「我等に」
「これで全員ですね」
ムウは今も穏やかに微笑んでいた。
「では」
「後は教皇だけだ」
ミロは最後の扉を見ていた。まだ開いていないその扉をだ。
「あの扉が開けば」
「間違いなく開くな」
「間も無く」
サガとアイオロスもだ。その扉を見つつ言うのであった。
「あの方も来られる」
「間違いなくだ」

「我々がここに来てです」
シャカもまた言う。
「教皇が来られない筈がありません」
「その通りだ。それではだ」
「その時を待とう」
「今な」
黄金聖闘士達は彼が来るのを待っていた。そうしてであった。
その最後の扉が開いてだ。彼が来たのであった。
「皆いるか」
「はい、ここに」
「全員います」
一斉に片膝をつき控える。サガとアイオロスが代表して述べた。
「誰一人として欠けてはいません」
「この通りです」
「そうだな。全員いるな」
シオンもその彼等を見回してからだ。そのうえで述べた。

第百二十七話　決戦の前の集結その四

「何よりだ」
「はい、それでは」
「これよりですね」
「そうだ。アーレスの前に向かうぞ」
まさにそうするというのだった。
「今からだ」
「アーレスですか」
ここで言ったのはミロだった。
「遂にこの時が来ました」
「この戦いで敗れればだ」
「はい」
「それで全てが終わります」
「わかっているな。このことは」
シオンは黄金聖闘士達の言葉を受けてまた述べた。
「トラキアはアーレスがいる限り何度でも蘇る」
「アーレスが狂闘士達を蘇らせるからこそ」
「そしてエリスや四闘神達も」
「そうだ、アーレスは己に仕える者達を何度でも蘇らせることができる」
これはこれまでの戦いでよくわかっていることだった。彼等もその蘇ってきた者達を見てきた。だからこそ知らない筈がないことだった。
「だからこそだ」
「それにアーレスこそがトラキアの中心」
「そのアーレスを倒さなければ」
「話は終わりません」
「それもある。どちらにしろアーレスを倒さなければだ」

シオンもまただ。そのことはよくわかっていたのだ。
「決して終わりはしない」
「では。今より」
「アーレスの前に」
「皆立つのだ」
黄金聖闘士達に対して告げた。
「いいな」
「はい、では」
「行きましょう」
「アーレスは神」
シオンの言葉が鋭いものになっていた。
「戦いの神だ。それもオリンポスの神々の一柱だ」
「決して油断はできない」
「存じているつもりですが」
黄金聖闘士達は立ち上がりながらシオンの言葉に返す。
「それでもですね」
「油断はしてはならないと」
「その力は絶大なものだ」
シオンもまたよくわかっていた。アーレスの強大というどころでは済まないまでの力をだ。これは前世の記憶からも読んでいることであった。
「我等が全て揃っていたとしても」
「それでもまだ」
「適わないものがあると」
「そう考えていい」
楽観はなかった。何一つとしてだ。
「いいな、そう思って行く」
「いざ、死地へ」
「最後の戦いに」
「行くぞ」

こう話してであった。彼等はその最後の戦いの場に向かう。シオンを軸にしてその左右を固めてそのうえで先に進む。広い廊下は彼等が揃って歩いてもまだ余っていた。
その先を進むにつれだった。次第にだ。
「一歩ごとに感じますね」
「そうだな」
アイオリアは強い顔でだ。シャカの言葉に応えた。
「アーレスの小宇宙をな」
「はい。これが神の小宇宙です」
目を閉じてだ。そうして言うシャカだった。
「まさしく」
「へっ、ここまでの小宇宙はな」
「そうだな」
カミュがデスマスクの言葉に頷いていた。
「感じ取ったことはない」
「あの四闘神や争いの女神以上だぜ」
「まさにこの世を覆い尽くさんばかりだ」
「足を止めようとさえしています」
シュラもアフロディーテも言う。
「しかし。ここで立ち止まれば」
「何にもなりはしない」
「そしてアーレスと戦い」
「そのうえでだ」
アルデバランはムウに続けていた。

第百二十七話　決戦の前の集結その五

「勝たなければだ」
「世界は終わってしまう」
「そして教皇」
「この戦いですが」
サガは右手、アイオロスは左手だった。それぞれシオンの左右を固めていた。そうしてそのうえで彼に対して告げていたのである。
「我等全員の力を合わせて」
「そうしてですね」
「そして私もだ」
シオンはその中に自分自身も入れた。
「私もまた同じだ」
「教皇もですね」
「だからこそここまで来たのだ」
ミロの言葉にも返す。
「それはわかっている筈だが」
「確かに。それは」
「私もまたアテナに仕える身」
こうも言ってみせる。
「ならばだ。その時が来たならだ」
「戦われる」
「戦士として」
「そういうことだ。教皇とは何か」
シオンの言葉は仮面の下からもだ。はっきりとわかる程強いものだった。
「アテナに代わり聖域を統べこの世を護る。そして」
「そして」
「そのうえで」

「アテナの為に戦う第一の戦士でもある」
「アテナの」
「だからこそ」
「そうだ、私もまただ」
また言うシオンだった。
「皆と共に行こう」
「では」
「共に」
「そしてアーレスを倒す」
このことも言うのであった。
「いいな」
「はい、では」
「参りましょう」
「アーレスはもうすぐだ」
「あの扉の向こうに」
そしてであった。一行の前にだ。赤い禍々しい巨大な扉が姿を現してきた。
それを見てだ。シオンはまた言うのだった。
「あそこだ」
「あの扉の向こうに」
「アーレスが」
「最後の戦いが」
「開くとしよう」
退くことはだ。やはり選択肢になかった。
そうしてその前に次第に近付いていきであった。遂に前に来た。
「よし」
「ここを開いて」
「いよいよですね」
「この扉はだ」
シオンもまたその扉の前にいた。そして黄金聖闘士に対して告げ

た。
「一人では開くことはない」
「一人ではですか」
「ではここにいる全員で」
「そうなりますか」
「そうだ、全員でだ」
こう述べるシオンであった。
「開くとしよう」
「そして教皇」
「この扉ですが」
サガとアイオロスがこうシオンに対して言ってきた。
「どの様にして開けましょうか」
「拳でしょうか、それとも力でしょうか」
「どちらでもない」
だがシオンはだ。こう返した。

第百二十七話　決戦の前の集結その六

「どちらでもだ」
「どちらでもといいますと」
「それでは」
「触れるだけでいいのだ」
シオンはこう言うだけだった。
「それだけでいいのだ」
「触れるだけ！？」
「それだけこの扉が開くと」
「そうなると」
「そうだ、それだけだ」
シオンはだ。驚く一同にまた述べた。
「それだけでだ。この扉は開くのだ」
「あのアーレスの扉であってもですか」
「最後の扉だというのに」
「アーレスに仕える者ならばそのまま通られる」
つまりエリスや四闘神や狂闘士はというのだ。
「しかし。彼と戦うのならば」
「その場合はそうではない」
「通られないと」
「そうだ、そうではないのだ」
シオンは述べる。しかしであった。それでも彼はここでまた一同に話した。
「この扉はそもそもアーレスの意志で開閉されるものだ」
「アーレスの意志によって」
「それによってですか」
「そうだ、アーレスの力を超えるならば自然と開かれる」
その場合はというのだ。

「だが。アーレスを超えるとならばだ」
「神々だけですね」
「それもおそらくは」
そうした神というとだった。誰もが想定する対象を限られてしまった。
彼等はそれぞれだ。話すのだった。
「天帝ゼウスや海皇ポセイドン」
「それに冥皇ハーデス」
「そうした神々しか」
「最低でもだ」
シオンも彼等の言葉に応えて述べる。
「オリンポスの神々を凌駕する力がなければ」
「この扉を強引に開けない」
「そうなりますね」
「そういうことになる。だが、だ」
シオンはだ。また言うのだった。
「我等全員の力を合わせればだ」
「神々にも匹敵する」
「あのオリンポスの神々と」
「そうなる。だからだ」
シオンの言葉は続く。
「その我等全員で扉に触れればだ」
「開く」
「そうなりますか」
「そうだ、開くのだ」
その触れることによってだというのだ。そしてであった。
十二人で扉に触れる。すると。
扉は前から後ろにだ。まるで部屋の中に誘うようにだ。ゆっくりと開いた。
そこから見える部屋を見てだ。シオンは言う。そこもまた赤い床

と壁だった。かなり広い部屋らしくかなり広い。そこを見たうえで、である。
「感じるな」
「ええ、挑発していますね」
「来い、と。自分から」
「言っていますね」
「神だ、それも一軍を率いるだ」
そうした神だというのだ。
「その神と戦うぞ」
「では。このまま」
「行きましょう」
「楽しいですね」
今言ったのはデスマスクである。
「もう小宇宙に吹き飛ばされそうですよ」
「全てを制圧し破壊する」
シュラも言う。
「そうした小宇宙だな」
「はい。そしてこれこそが」
アフロディーテが続く。

第百二十七話　決戦の前の集結その七

「戦皇アーレスの小宇宙です」
「アテナのものとは全く違う」
カミュの言葉は既に戦うものになっていた。
「まさに血を欲しているものだ」
「だが。それでもだ」
アルデバランは確かに踏み止まっていた。
「勝つ」
「そうだ、勝つ」
ミロも言う。
「何があろうともだ。勝たなければならない」
「アーレスがどれだけ強大であろうとも」
アイオリアは既にだ。前に出ようとしていた。その背には獅子が確かにいる。
「勝たなければならない」
「敗れれば未来はありません」
ムウはこのことを話した。
「だからこそ。何があろうともです」
「私達の全ての力を合わせ」
シャカも何時になくだ。熱いものがそこにあった。
「そのうえで、です」
「では行くとしよう」
「教皇、では」
サガとアイオロスはだ。シオンに対して告げた。彼は今も中央にいる。
「これより」
「最後の戦いに」
「そうだ。それではだ」

シオンもだ。言うのだった。
「行くぞ、アーレスの前にだ」
「はい」
「それでは」
その開かれた扉を潜る。するとだった。
遥か前に玉座があった。赤い大理石の輝く床の中央にさらに紅い、紅蓮を思わせる色の絨毯が敷かれその先にだ。高い階段になった台の一番上の段に玉座があった。
そしてそこに座っている青年がいた。紅の丈の長い衣を着て猛々しい美貌を見せた青年がだ。そこにいて彼等を見据えていた。
戦士達はその彼の前に来た。そうしてだった。
まずはシオンがだ。こう問うのだった。
「戦皇アーレスだな」
「そうだ」
その玉座の男がだ。地の底から響き渡る様な声で応えてきた。
「私がアーレスだ」
「そうか」
「戦皇。戦いを司りだ」
そうしてさらに言うのだった。
「この地上も治める者だ」
「この地上をか」
「それではだ」
ここまで話してだった。アーレスはその言葉をさらに続けてきた。
「決着をつけよう」
「そうだな」
「その為に来たのだからな」
今度彼の言葉に応えたのはサガとアイオロスだった。彼等であった。
「最後の戦いだ」
「この聖戦のな」

「どちらにしてもそうなる」
アーレスは玉座に座ったまま応えてきた。
「そう、それはだ」
「それは？」
「何だというのだ？」
「私が勝つことによってだ」
それ以外はないというのだった。絶対の自信と共の言葉だった。
「それは決まる」
「ではそれをはっきりさせるとしよう」
シオンはあえて強く反論せずにだ。こう述べたのだった。
「それでいいな」
「いいだろう、それではだ」
「今からな」
こう話してであった。双方最後の戦いに入った。遂に最後の戦いの幕が開いた。

第百二十七話　完

２０１０・５・２８

第百二十八話　戦皇アーレスその一

戦皇アーレス

シオンと黄金聖闘士達は玉座に座るアーレスと対峙していた。玉座は上にありアーレスが見下ろす形になっている。その中においてだ。

まずはだ。ミロが言うのだった。

「アーレスよ」

「何だ」

「何故そこまで地上にこだわる」

彼が言うのはこのことだった。

「何故だ。何故そこまでこだわる」

「地上にというのだな」

「そうだ。トラキアで満足することはないのか。この地だけで」

「地上を欲するのは当然のこと」

アーレスはゆっくりとした、王者を思わせる悠然とした口調で話してきた。

「神ならばだ」

「神ならば、ですか」

今度はアフロディーテが述べてきた。

「それは当然のことですか」

「そうだ、この地上を欲しているのは私だけではない」

「貴方だけではありませんか」

「そうだ、私だけではない」

アーレスの言葉は毅然としていた。そのうえでの言葉であった。

「海皇ポセイドン、冥皇ハーデスもだ」

「そうだったな」

アルデバランがアーレスの今の言葉に頷いた。

「それはだ」

「だからこそ聖戦が起きたのは御前達も知っていよう」
「そして貴様とも戦ってきた」
アルデバランもだ。言葉を返した。
「先の貴様との聖戦がそれだ」
「そうだ。だが」
アーレスはここまで話してだ。そしてまた述べるのだった。
「オリンポスの神々もだ」
「天界の神様達もってのかよ」
デスマスクはアーレスを見上げながらそのうえで口の左端を歪めさせて述べてみせた。
「オリンポスのな」
「オリンポスの者達もまた同じだ」
アーレスはデスマスクの言葉に応える形で言葉を続けてきた。
「それはだ」
「あの神様達のことはよく知らないがな」
デスマスクはわざと軽く言ってみせていた。
「野心はあるってのか」
「意外というべきか」
アイオリアもそれを言う。
「オリンポスの神々もまた地上への野心を持っているのか」
「そうした意味では同じだ」
アーレスはアイオリアに対しても言葉を返した。
「私も。あの者達もな」
「あの者達もか。だが」
「だが。何だ」
「アーレス、今の貴様には憎悪を感じる」
彼はアーレスのこのことに気付いたのだ。その言葉からだ。
「オリンポスの神々にな」
「そういえばだ」
今度はシュラが言うのだった。

「貴様はオリンポスの神々に敗れていたな」
「その通りだ」
「そのせいか」
何故彼等を憎悪しているのか。シュラはそこに理由を求めていた。
「それでオリンポスの神々をか」
「それ以上にだ。あの神々はだ」
「むっ！？」
カミュはアーレスの今の言葉に反応した。
「どうやらオリンポスの神々に敗北以上の感情があるな」
「ないと言えば嘘になる」
「何があった」
カミュはそれをアーレスに対して問わずにはいられなかった。
「かつて。彼等の間に」
「私はかつて一人だった」
アーレスはここでだ。その過去を語ってみせた。彼の過去をだ。
「誰も認めず。愚弄され続けてきた」
「それは既に聞いているが」
カミュはそれを聞いてだ。言うのだった。

第百二十八話　戦皇アーレスその二

「しかしそこにあるものは聞いた以上のものだな」
「私だけでなくあの者達もまた愚弄していた」
「狂闘士達ですね」
ムウがここで言った。
「そうですね、彼等ですね」
「私についてきて仕えるあの者達への愚弄は何があっても許さん」
言葉が強いものになる。まさに刃のものになる。
「決してだ」
「そう言いますか」
「あの者達は私に仕える者達すら愚弄した。戦いしか知らぬ、そして目の見えぬ愚か者達だとな。愚弄し嘲り続けていたのだ」
「それが許せませんか」
「そうだ、だからこそだ」
怒りに燃えるその目でだ。やはり言うのであった。
「あの者達は私が倒す」
「そうして主の座にも」
シャカもまたアーレスに対して告げた。
「つかれるのですね」
「そのつもりだ。私に仕えているあの者達に栄華を与える為にも」
「どうやら貴方は己の権勢の為に戦っているのではないのですね」
「権勢なぞ戦いの後でくるものだ」
それに過ぎないというのだ。
「所詮はそういうものだ」
「ではまずは復讐ですね」
「雪辱を晴らす。絶対にだ」
「わかりました。それでは」
目を閉じたまま言うシャカだった。その言葉が。

「それは我々に勝利を収めてからですね」
「そうさせてもらう。オリンポスへの復讐の為にだ」
「復讐を捨てろとは言わない」
サガはそれは言わなかった。
「貴様にそれはできる筈もないことだな」
「私に対してならまだ受けられよう」
彼自身にだけはというのである。
「だが。私に仕える者達への侮辱は何があろうと許さん」
「そう言うか、やはりな」
「何度も言う。貴様等を倒す」
こう言い切ってだった。小宇宙をさらに燃え上がらせてきた。
そのうえでだ。彼はその目の前にだ。あるものを浮かび上がらせてきた。
それは紅蓮の戦衣だった。それを出してみせてだ。また言うのであった。
「これを身に包むのは久し振りだ」
「あの聖戦以来か」
「そうだな。それ以来だ」
アイオロスの言葉にも返す。
「おそらくな」
「それまで冥界にいたと聞いているが」
「だから身に着けてはいない」
理由はそれだった。それ故にだ。
「しかし。今その時が来たのだ」
「その戦衣を着たうえで」
「私はこのままでもいいのだ」
戦衣を身に着けなくともだ。それでもいいというのである。
「しかしだ。それでもだ」
「身に着けるのか」
「貴様等は既に聖衣をその身に纏っている」

シオンを除いた黄金聖闘士全員に告げた言葉だった。
「ならば私に身に着けるのが礼儀だ」
「だからこそ」
「今ここで」
「そうだ、身に着けよう」
こう言ってであった。そのうえで今その戦衣がそれぞれ分かれた。
アーレスはそれを見ながら玉座から立ち上がった。戦衣はその彼の全身を覆った。
その彼を見てだ。黄金聖闘士達はそれぞれ言った。
「まさかこれ程までにあがるとは」
「この小宇宙、まさしく」
「神のもの」
「間違いなく」
「神の最大の力を出そう」
アーレスもこう言ってみせてきた。
「貴様等にだ」
「手を抜くことはしないか」
「手を抜く？戯言だな」
全身をその紅い戦衣で包んだうえでだ。そのうえでの言葉だった。

第百二十八話　戦皇アーレスその三

「私にそうしたものはない」
「では常に全力を出すというのか」
「どの様な相手でも己の全力で戦いそして倒す」
シオンに返した言葉だった。
「それが私のやり方だ」
「そしてこのトラキアに集う全ての者のだな」
「如何にも。我々は相手を侮ることはしない」
決してというのだった。それはだ」
「それは言っておこう」
「ではだ」
そこまで聞いてだった。また言うシオンであった。
「その全力を。見せてもらおう」
「いいだろう」
静かに返したアーレスだった。そして。
右手を前に出してきた。それだけでだ。
シオン達の周りを炎が包んできた。その炎は。
「おいおい、本当に全力だな」
「その様だな」
デスマスクの言葉にミロが返す。その周りを包む炎を見てだ。その炎はというと。
「白い炎なんてな」
「極限まで燃え盛るからこそのこの色だったな」
「そうさ、俺の炎は青だ」
黄金聖闘士の中で炎の技を使うデスマスクだからこそ。よくわかっていることだった。炎を使う者はそのことを誰よりもよくわかっているのだ。
「白は青よりもな」

「強いのだな」
「尋常じゃなくな。しかし」
不敵な笑みはいつもものだ。だが今のデスマスクはその額に汗をかいていた。笑いの中に覚悟しているものがある証だった。
「これはどうして返してやろうか」
「返せるか？」
「多分な。おいカミュ」
「うむ」
デスマスクはここでだ。カミュに対して声をかけた。カミュもそれに返す。
「御前にもやってもらうからな」
「氷か」
「炎と氷だ、わかるよな」
「よくな」
「じゃあやるぞ」
多くは語らなかった。
「いいな、それじゃあだ」
「うむ。それではだ」
まずはカミュがだった。技を放った。
「オーロラエクスキュージョン！」
それで白い炎を退けんとする。そしてデスマスクもだ。
構えからだ。放った技は。
「積尸気魂葬破！」
「何っ！？」
「その技か」
「ああ、そうさ」
技を放ったうえで不敵に返すデスマスクだった。
「積尸気鬼蒼焔だと思ったか？」
「それでなくか」
「その技か」

「青じゃ白には勝てないんだよ」
炎についての話だった。
「だからな。ここはな」
「爆発させたか」
「ああ、そうさ」
まさにそれだというのである。
「だからこれを使ったんだよ」
「そうか、それでなのか」
「それでその技か」
「爆発の衝撃で炎を吹き飛ばす」
彼の狙いはそれだった。
「そういうことさ」
「成程、それか」
「そういうことか」
「さて、どうだ?」
技を放ったうえでだ。また言うデスマスクだった。

第百二十八話　戦皇アーレスその四

カミュの氷とデスマスクの爆発でだ。白い炎は凍り吹き散らかされてしまった。二人の作戦勝ちとも言える結果に終わっていた。
だがアーレスはそれを見てもだ。動じていなかった。
そのうえでだ。彼はまた攻撃を放つのだった。
「炎が駄目ならばだ」
「今度は何だ？」
「何をするつもりだ？」
「これだ」
こう言ってであった。次に放ったものは。
嵐だった。しかし只の嵐ではない。そこに何かが含まれていた。
アフロディーテはすぐにその含まれているものが何か察した。それは。
「毒ですね」
「毒か」
「それか」
「はい、毒です」
こう仲間達にも答える。
「間違いありません」
「そして嵐」
「それで来たか」
「シュラ」
アフロディーテはここでシュラの名を呼んだ。
「いいでしょうか」
「俺か」
「はい、貴方です」
まさに彼だというのである。
「わかりますね」

「そうだな。ここは俺が一番だ」
「それでは」
「行くぞ」
今度はシュラとアフロディーテだった。それぞれ動きを合わせる。
「エクスカリバー！！」
「ロイヤルデモンローズ！」
「剣に薔薇か」
アーレスは二人の攻撃を見て述べた。
「その二つか」
「如何にも」
「その通りです」
まさにそうだと返す二人だった。
「この技ならばだ」
「貴方のこの毒の嵐も破れます」
まずはエクスカリバーにより嵐が断ち切られた。そしてだ。
アフロディーテの紅の薔薇がだ。毒を相殺していた。その薔薇の毒でだ。
嵐が断ち切られ毒を消されてはだ。それで終わりだった。
アーレスはそれを見てだ。冷静に言うのであった。
「こういうことだ」
「御覧になられましたね」
「私の技をまたしても破るとはな」
アーレスはそれを見て冷静に述べた。
「やはり黄金聖闘士。尋常な力ではないな」
「今わかった、とは仰りませんね」
「それは言わない」
その通りだとだ。返すアーレスだった。
そのうえでだ。また技を放った。今度は。
流星が降り注ぎ地震が起こる。その二つであった。
今度は二つの力をだ。同時に浴びせてきたのであった。

それを見てだ。次に動いたのは。
「次は私ですね」
「俺だな」
ムウとアルデバランであった。
「空には私が」
「大地には俺が」
「それぞれ防ぐというのだな」
「防げるならばやらせてもらいます」
「そういうことだ」
また返す二人だった。
そしてだ。二人が放った技は。
「クリスタルウォール！」
「タイタンズノヴァ！」
ムウはその壁で自身も仲間達も守った。

第百二十八話　戦皇アーレスその五

そしてアルデバランはだ。自ら起こしたその地震の力でだ。アーレスの地震の力を押し殺したのだった。二人もまた己の力を見せたのだ。

「危ないところでしたが」

「上手くいったな」

「ふむ」

アーレスはまた言うのだった。

「どうやらここは」

「ここは？」

「何だというのですか？」

「小細工は何の意味もないな」

それを悟ったというのである。

「それではだ。今度はだ」

「何をするつもりだ」

「全力で向かわせてもらう」

そうするというのである。

「最早だ」

「全力！？」

「それを遂にか」

「戦いの神の全力をだ」

また言うアーレスだった。

「それを見せよう」

「来るか」

「はい」

「間違いなく」

サガとアイオロスがシオンに応える。

「今度はこれまで以上にです」

「恐ろしい力が来ます」
「そうだな。しかしだ」
だがここでだ。シオンは言うのだった。
「この程度でやられることはない」
「では次は」
「我々が」
「頼んだぞ。私もまた」
シオンもであった。その小宇宙を燃え上がらせてきた。
だがそのシオンにだ。二人は言うのであった。
「いえ、ここはです」
「お任せ下さい」
「そうか」
二人の言葉を受けたのだった。
「それではだ」
「はい、では」
「ここは我々が」
こう言ってそのうえで、だった。彼等もまたその小宇宙を燃え上がらせる。
そうしてだった。そのアーレスの攻撃が来たのだった。
「雷か、次は」
「そうだな」
アイオロスはサガの言葉に頷いた。
そのうえでだ。彼の方から言った。
「ここは私に任せてくれ」
「いいのだな」
「うむ、そして」
サガに告げてからだ。次に声をかけたのは。
彼だった。自身の弟に声をかけたのである。
「アイオリア」
「兄さん、ここは」

「そうだ、御前の力が必要だ」
こう彼に言うのである。
「だからだ。いいな」
「では。ここは」
「その動きを合わせる」
また弟に対して告げる。
「わかったな」
「わかっている。それでは」
「雷に対してはだ」
「雷だ」
二人は動きを合わせた。そうしてだ。
「アトミックサンダーボルト！」
「ライトニングプラズマ！」
それぞれ雷の技を放った。それで前から来たアーレス自ら放った雷をだ。二人のその雷で受けたのだった。そうしてみせたのである。

第百二十八話　戦皇アーレスその六

それを見てだ。アーレスも言うのだった。
「この全力もか」
「これまでも全力だった筈だが」
「違うか」
「そのことは否定しない」
アーレスは眉一つ動かさず述べてみせた。
「言ったな、私は常に全力を尽くすと」
「確かに」
「それは聞いた」
「しかしだ。この雷はだ」
アーレスは今己が放っている雷についてだ。それを語るのだった。
「私がゼウスとヘラの嫡男である何よりの証だ」
「だからこそ」
「思い入れがあるというのだな」
「その通りだ。オリンポスでこれを使える者はだ」
こう話してきた。
「天帝ゼウス以外には私しかいないのだ」
「そうか」
それを聞いてだ。アイオロスは言うのであった。
「嫡男であるが故か」
「アポロン、ヘルメス」
そうしたオリンポスの神々の名も出していく。
「アルテミス、アフロディーテ、デメテル」
「そしてか」
「そう、アテナもだ」
彼等の名前を次々と出してだ。そうしてそこにはまたしても忌まわしげなものを含ませてだ。そのうえで言葉を出しているのであっ

た。
「アテナもまた同じだ。雷を使えない筈だ」
「如何にも」
シオンが答えた。
「それはだ」
「だが私は使える」
「その雷を」
「この様にしてだ。私こそはあの天界を次に治めるに相応しい者」
「天帝ゼウスの次にか」
「父上と母上の血にかけて」
今アーレスは確かに言った。その両親のことをだ。
「その雷は今汚させはしない」
「むっ！？」
「消えた！？」
その雷を消してみせたのであった。アイオロスとアイオリアの雷もであった。それもまた消えてしまった。アーレスが己に迫る直前で無効化してみせたのだ。
「私の雷を」
「消したというのか」
「雷は今は使いはしない」
こう言ってそれは止めてしまった。
「しかしだ」
「しかし」
「それでも」
「そうだ、技はまだある」
そしてだった。今度は異界を出してきたのだった。
嵐も吹雪も炎も荒れ狂い星が砕ける。光と闇がめまぐるしく交差してそのうえでぶつかり合い岩が乱れ飛ぶ。シオン達をその世界に導き入れたのである。

第百二十八話　戦皇アーレスその七

そのうえでだ。彼は言うのだった。
「私はこうした世界を創ることもできる」
「異次元とは少し違うな」
サガはその世界を見て述べた。
「ここは」
「その様ですね」
ここで言ったのはシャカだった。
「どうやら」
「ではここはだ」
「はい」
「我等だな」
「そうですね。私達が一番です」
サガとシャカはすぐにその呼吸を合わせた。そうしてであった。
その技をだ。放ったのであった。
「ギャラクシアンエクスプロージョン！」
「六道輪廻」
彼等もまた異世界を放ったのだった。
二つの異世界が交差して。そうしてだった。
それによりアーレスが出した異世界をだ。消してしまった。
ここでも相殺だった。それで元の世界に戻ってみせたのだ。
アーレスの技はまたしても防がれた。そうして。
アーレスはまた一歩踏み出してきた。そのうえで言ってきたのである。
「ふむ」
「今度は何だ」
ミロが彼に問う。
「何をするつもりだ」

「その力は完全にわかった」
言いながら光の拳を出す。だがそれはだ。
ミロはすぐに己の技を放った。それは。
「スカーレットニードル！」
「むっ！？」
その爪の光でだった。アーレスの光を弾き返したのだった。今度は彼だった。
「拳も通じないか」
「このミロもまた黄金聖闘士」
ミロも強い言葉で返す。
「ならばこそだ」
「よくわかった」
ここでまた一歩前に出るアーレスだった。そしてだ。
シオン達を見下ろしてだ。告げたのだった。
「それではだ」
「それではか」
「そうだ、私の最大の技を出そう」
こう黄金聖闘士達に対しても告げる。
「いいな、最大の技をだ」
「それで私達を倒すか」
「全てな。倒す」
宣言であった。紛れもなくだ。
「貴様等全員をだ。それで倒す」
「アーレスの最大の技」
「それは一体」
それを聞いただ。サガとアイオロスがまずは怪訝な顔になった。
そうしてだった。
「それは今まで聞いたことがないが」
「どういった技だ」
「すぐにわかる」

アーレスの言葉は動じない。全く、である。
「そう、すぐにだ」
「すぐにか」
「それがどういった技なのか」
「この技を使ったことはなかった」
アーレスの言葉が昔も思い起こすものになっていた。そうしての言葉であった。
「オリンポスの神々にもだ」
「それを今使うってのか」
「我等に」
「その通りだ、全員一まとめに倒す」
こう言い切ってもみせていた。
「では、だ」
「来るか」
「その技が」
「いいか」
シオンは冷静な声で彼等に告げる。彼もまた告げるのだった。
「我等もまた、だ」
「技をですか」
「出すと」
「さあ、来るのだ」
ここで誰かを呼んだのであった。
「我等の友、最後の友よ」
「最後の友!?」
「それは一体」
「間も無く来る」
その最後の戦士が来たのであった。今ここにだ。最後の戦士もまた来た。

第百二十八話　完

2010・6・2

第二百二十九話　最後の戦いその一

最後の戦い

その現われた戦士を見てだ。黄金聖闘士達も驚きを隠せなかった。
「貴方もここに！？」
「実体か！？いや、違う」
「実体ではない」
それはわかった。それはである。
「精神だけで来たのですか」
「しかしそれでも聖衣を着ておられる」
「これは一体」
「何、御主等もできることであろう」
その男童虎は微笑んで彼等に告げた。
「この程度のことは」
「いや、ですが」
「それでも」
彼等はそれを聞いてもであった。まだ唖然としていた。その感情は消せなかった。消すにはあまりにもそれぞれの感情が昂ぶったままだった。
「ここに来られるとは」
「いえ、来ることができたのですか」
「今ここに」
「そうだ、できるのだ」
彼は微笑んでいた。驚く彼等に対して穏やかな笑みさえ浮かべている。
「御主達と共に戦う為に来たのだ」
「左様ですか」
「だからこそここに」
「十二の黄金聖闘士と」

童虎は彼等の場所に来てだ。そのうえでの言葉だった。
「そして教皇がいなければならないからな」
「我等全員と教皇が」
「全ていなければですか」
「そうだ、その通りだな」
今はシオンを見ていた。そのうえでの言葉だった。
「これから出す技は」
「その通りだ。だからこそ来てくれたのだな」
「うむ」
今度は強い笑みでシオンの言葉に頷く童虎の言葉だった。
「ではよいな」
「礼を言う」
友と友の間の言葉だった。まさにそれだった。
そしてだ。黄金聖闘士の面々はここでまた驚きの言葉を挙げる。
今度は何かというとだ。
「それにしても精神ならばその御姿ですか」
「若い時のその御姿になられるのですか」
「何と」
「ふふふ、どうかな」
しかしここでだ。童虎は悪戯っぽい笑みも浮かべてみせたのであった。それはまるで真実をあえて隠しているような笑みであった。
「それは」
「それは？」
「といいますと」
「時が来ればわかる」
こう言って今は言わないのであった。
「その時にな」
「その時といいますと」
「それは一体」
「少なくとも今ではない」

やはり話そうとしない。とにかく今はだ。
「それは言っておく」
「左様ですか。それでは」
「今は聞きません」
「その時にこそ」
「その時は必ず来る」
ここでも不敵な笑みの童虎だった。
「それではだ。シオンよ」
「うむ」
「共に戦おうぞ」
あらためて告げた言葉だった。
「今からな」
「これで充分に戦える」
シオンは彼の援軍を受けてだ。こうも言ったのであった。
「黄金聖闘士が全員揃ったことによってな」
「そういうことじゃな。それではだ」
「こちらとしても好都合だ」
アーレスもまた言うのだった。

第二百二十九話　最後の戦いその二

「何故ならだ。黄金聖闘士も教皇もまとめて全て倒せるからだ」
「一網打尽」
「そういうことか」
デスマスクとアイオリアがこう返す。
「それで好都合ってんだな」
「つまりは」
「そうだ」
まさにその通りだった。アーレスの言いたいことはだ。
「その通りだ。一人ずつ倒す手間が省けるということだ」
「確かにな」
「我等は全てここにいる」
アルデバランとシュラがアーレスの今の言葉に応える。
「ここで我等が全て倒れれば」
「アテナがおられぬ今は」
「そういうことだ」
まさにその通りだとだ。返すアーレスであった。
「私の勝利になる。必然的にだ」
「そうですね。私達こそが聖域の最大の戦力であるのですから」
「その私達がいなくなればです」
今度はムウとアフロディーテの言葉だった。
「最早貴方に対抗できる者はいなくなりますね」
「この地上には」
「如何にも」
まさにその通りだった。アーレスの思惑はそこにあったのだ。
そしてだ。彼はさらに言うのであった。
「だからこそだ。私にも好都合だ」
「しかし。それはだ」

「我等を倒せればだ」
カミュとミロの言葉である。
「果たしてそれができるか」
「例え貴様が神であろうとも」
「できると言えばどうする」
アーレスの今度の返答はこうであった。
「その場合は」
「決まっています」
シャカは目を閉じたまま。その小宇宙をこみあげさせていた。
「我々もまた、です」
「戦い。勝利するというのだな」
「そうだ」
「それしかない」
サガとアイオロスの返答であった。
「我等としてもだ」
「そうしてこの世界を護る」
「それではじゃ」
童虎が若き仲間達に声をかけた。
「いいな」
「はい、それでは」
「今から」
「その力を一つに集めるのだ」
「いいか」
今度はシオンの言葉だった。
「全ての力を私に集めるのだ」
「教皇にですか」
「我等の全ての力を」
「そして私の力もそこに入れる」
そうもするというのである。
「その全ての力をアーレスにぶつければ」

「勝てる」
「神であっても」
「いいか、全ての力をだ」
また言うシオンだった。
「私に集めるのだ」
「黄金聖闘士十二人とか」
アーレスもその話を聞いていた。そうしてであった。
そのうえでだ。彼等の言葉を聞いて言うのであった。
「教皇の力をか」
「先の聖戦ではだ」
またシオンがアーレスを見上げながら告げる。
「貴様は撤退したな」
「如何にも」
彼もそれは否定しない。だがその表情からは何も窺い知ることはできなかった。彼は今はあえて表情を消してそのうえで応えているからだ。

第二百二十九話　最後の戦いその三

「冥界の者達に勧められてな」
「それは本意ではなかったな」
「それもまたその通りだ」
このことも否定しない彼だった。
「私は戦いの神。あくまで戦い続けるのが、最後まで戦うことこそがだ」
「望みだな」
「その私が一人撤退するというのは好むところではない」
こう言うのであった。
「決してだ」
「しかし今は違うということか」
「そうなる。私はこの聖戦では最後まで戦う」
決意の言葉だ。それに他ならなかった。
「必ずだ」
「そして我々に勝利を収めてか」
「既に言ったな。そういうことだ」
「それではだ」
「我が最大の技を今ここでだ」
赤い小宇宙が王の間はおろか宮殿全体を包んでだ。そのうえでの言葉だった。
「見せよう」
「！？小宇宙が」
「我等を包む！？」
「そうして」
黄金聖闘士達が周りから迫るものを感じて言う。
「我等をこのまま潰すというのか」
「その小宇宙で」

「これから逃れることはできない」
その凄まじい小宇宙の中心でだ。アーレスは言うのであった。
「決してだ。他の次元であってもどれだけ距離があっても」
「この小宇宙はこの大地全体を覆っているか」
シオンがだ。それは何故かということを察して述べた。
「他の次元もまた」
「その通りだ。だから決して逃れられない」
だからだというのである。
「そういうことだ」
「しかし破る方法はある」
シオンはこの状況でも冷静であった。それは変わらない。
「それもまたある」
「ではそれこそが」
「我等の今の技」
「そうなのですね」
「そうなる。いいな」
彼等を目だけで見回してであった。
「今から集めるぞ」6
「ええ、それでは」
「我等の力ここに一つに」
「そして教皇」
「御願いします」
「これこそがだ」
シオンは十二人の黄金聖闘士達の力を己の身体に受けながらだ。
そのうえで彼自身の小宇宙も高めさせる。そうしてそのうえで彼自身の力を放たんとしていた。
アーレスはそれに対してだ。大地全てを覆わんばかりの彼自身の小宇宙で彼等をまとめて倒さんとしていた。彼そのものの凄まじい闘志と殺意に満ちた小宇宙でだ。
そのうえでだ。シオンに対して問うた。

「アテナの教皇よ」
「何だ」
「あくまで戦うのだな」
こう彼に問うたのである。
「そうだな、戦うのだな」
「それがどうかしたというのか」
「私とも」
まずは彼自身のことだった。
「そしてこれからも」
「例え私がどうなろうともだ」
シオンは己以外にもだ。いるというのであった。
「それでもまだ戦士達はいる」
「その者達か」
「そうだ。この者達がいる」
今彼にその全てを託している黄金聖闘士達がだ。彼等がだというのだ。
「彼等がその後を戦う」
「それで迷いはないか」
「この者達ならば相手が誰であろうともだ」
深い言葉だった。絶対の信頼がそこにある言葉であった。

第二百二十九話　最後の戦いその四

「戦い、そして」
「勝利を収めるか」
「この世界を護る」
勝利ではなくだ。そうするというのだった。
「そうしてくれる」
「かつて私は貴様等に敗れた」
シオンだけでなかった。黄金聖闘士達も見ていた。
「海皇ポセイドンに冥皇ハーデス」
「その都度、激しい戦いになったな」
「そしてギガンテス達もだったな」
古の巨人達である。ガイアが生み出した巨大な者達だ。
「彼等もまた」
「そうだ、倒してきた」
シオンもまたその時のことを忘れてはいなかった。思い出したと言うべきであろうか。果てしない戦いの中での輪廻を忘れてはいなかったのである。
「そして今もだ」
「私を倒してか」
「神である貴様が不滅だとしても」
神は死ぬことはない。人は輪廻転生により幾度も蘇るものだ。だが神にはそれがない。永遠にその生を生きる。例え肉体が滅びても魂は不滅であるのだ。
「それでも。今はだ」
「退けるというのか」
「如何にも」
こう言ってであった。
その全てを集めた小宇宙を今放った。

それは黄金の一条の光となってだ。アーレスに迫る。
しかしアーレスはそれを見てもだ。やはり微動だにしない。
そうしてだ。己の前に赤い壁を出してみせた。それで以てであった。
「これならばだ」
「守れるというのか」
「守ってみせる」
その赤い壁は光を防いだ。弾き返しはしなかったがそれでもだ。
防いだのである。アーレスはその向こうで不敵な笑みを見せていた。
「どうだ」
「それで防ぐか」
「私も簡単に敗れるつもりはない」
そうしてだった。言う言葉はだ。
「ここで貴様等を倒し我が愛する者達をまた蘇らせ」
「そしてまたか」
「そうだ、また戦う」
それから先も言うのだった。
「この地上を制圧し理想の世界とし」
そしてであった。
「オリンポスも征服するのだ」
「それは知っていた。だが、だ」
「貴様等もまだ戦うか」
「今は防がれている」
その光が防がれていることについてであった。
「だが」
「まだやるというのか」
「これで終わりと思わないことだ」
「そうだ」
「これで終わりではない」
サガとアイオロスも言ってきた。彼等は今も小宇宙を込め続けて

いる。そのうえでの言葉だった。
「我等の小宇宙はまだある」
「それを注ぎ込んでくれよう」
「聖闘士、見事だな」
その二人の言葉を受けてだ。アーレスは褒め言葉も出したのだった。
「そこまでの気概があるか」８６
「それがなければだ」
「聖闘士ではいられない」
「貴様等が私の部下であれば」
そして言うことは。
「狂闘士達であればな」
「どうだというのだ」
「その場合は」
「愛せたものを」
狂闘士達への愛はだ。ここでも健在であった。

第二百二十九話　最後の戦いその五

「それができないとはだ。残念なことだ」
「そうか」
「そう言うのか」
「言う。やはり無念だ」
また言うのであった。
「しかし。それもまただ」
「生憎だが我等はアテナの聖闘士だ」
「このことは変わらない」
「それだけの相手だからこそ戦うに値する」
こうも述べた。攻防を続けながら。この間にもアーレスの小宇宙は世界を、そして聖闘士達を覆っていた。一瞬でも気を抜けばそのまま飲み込まれてしまう状況だった。
「この私がだ」
「ならな」
「このまま倒れはしない」
「決してです」
黄金聖闘士達は口々に言う。
「戦うに値する相手ならよ」
「決してだ」
「敗れません」
その言葉と共に全身全霊を注ぎ込む。それが光にそのまま入っている。
そうしてアーレスと戦っていた。そしてだ。
遂にだ。その赤い小宇宙の壁がだ。割れた。
光はそのままアーレスの胸を貫いてだ。勝負を決めたのであった。
「うっ・・・・・・」
「決まったか」

「これで」
「いや、油断するな」
シオンはすぐにだ。黄金聖闘士達に告げた。
「これで終わったとは思わないことだ」
「まだですか」
「そうなのですか」
「そうだ、まだだ」
また言うシオンだった。
「まだ油断しないことだ」
「はい、確かに」
「小宇宙はまだ」
その彼の言葉にサガとアイオロスが応える。
「衰えていません」
「全く」
「だからだ。油断するな」
その証拠にだった。まだアーレスの小宇宙は衰えていなかった。
そしてだ。それが彼等を尚も襲わんとしていた。
「アーレスはまだ死んでいない」
「身体を貫かれても尚」
「まだ衰えていないのか」
「私がこの程度でやられると思っているのか」
アーレスは既に光に身体を貫かれている。既に顔には暗いものが見える。しかしそれでも彼はまだ毅然としていた。そのうえでの言葉であった。
「甘いな」
「そうだな。戦いはまだだ」
シオンはそれも認めた。
「まだ続く」
「如何にも。私もだ」
アーレスは力をさらに振り絞ってみせた。そうして。

小宇宙を凝縮させた。己が持っているその小宇宙をだ。
「この世界を覆っていた小宇宙が」
「我等に今」
「襲い掛かって来たというのか」
「それによって」
「そうだ、押し潰すつもりなのだ」
シオンは全てを看破して述べた。
「このままだ」
「来る」
「そして」
「このまま」
「私はまだ倒れはしない」
アーレスはまだ言っている。立ち続けてだ。
「この技で貴様等を倒せれば。終わる」
「最後の乾坤一擲の技」
「まさにそうなっているのか」
「ここで」
「さて」
アーレスはだ。いよいよといった状態であったがそれでもだった。

第二百二十九話　最後の戦いその六

意を決した声をあげてだ。そのうえで彼の小宇宙を全て凝縮させたのだった。
「これでどうだ」
「くっ、教皇！」
「今度は」
「どうすれば」
「臆するな、そして」
黄金聖闘士達への言葉だ。
「慌てるな」
「臆せず慌てず」
「そのうえで、ですか」
「そうだ、落ち着け」
また言う彼だった。
「そのうえで戦えば問題はない」
「ではここは」
「どうされますか」
「御前達の渾身の技を全て放つのだ」
そうせよというのである。
「いいな、全てだ」
「そしてそれにより」
「このアーレスの小宇宙を退ける」
「そうせよと」
「私もまた同じだ」
他ならぬシオン自身もだというのだった。
「渾身の技を放つ」
「わかりました、では再び」
「我等の全ての技で」

「最後の決着をつけましょう」
「面白い」
アーレスもその言葉を聞いていた。そのうで、だった。
「ならば見せてみるのだ。その渾身の技もだ」
「いいだろう」
シオンがその言葉を受けた。
「それならだ」
「行くぞ！」
「この技で！」
「この長い戦いを終わらせる！」
「ここで！」
黄金聖闘士達はその技を放った。それぞれが先程の八大公や神々に対して使った最大限の技を放ったのである。
しかし童虎はだ。百龍覇を放った。
「わしはこれだ！」
「老師はそれですか」
「その技を」
「この時はやはりこれだ」
状況を見てのことであった。
「龍達がだ。退けてくれようぞ」
「では！」
「我等も！」
「おおおおおおおおおおおおーーーーーーーーーーーーっ！！」
最後の十三人の絶叫が聞こえた。十三の渾身の、命をかけた技が四方八方に放たれる。それによって遂にであった。
アーレスの小宇宙が退けられた。そして消え去った。赤い凄まじい闘気そのものの小宇宙がだ。完全に消え失せてしまったのである。
「終わったか」
「これで」
「遂に」

技を放った彼等はだ。今まさに力尽きんとする顔で述べた。
「終わったか」
「アーレスは」
「どうなった？」
「見るのだ」
シオンはここでも黄金聖闘士達に述べた。
「アーレスを」
そしてだ。そのアーレスを見るとだ。
彼は今立っていた。しかしであった。
口から血を流していた。そのうえで死相を浮かべていた。
その顔でだ。まだ彼等を見下ろしてそうして立って言うのであった。
「まさかな」
「我等の勝利だな」
シオンはそのアーレスに対して答えたのだった。
「そうだな」
「その通りだ」
まさにそうだと返すアーレスだった。

第二百二十九話　最後の戦いその七

「貴様等の勝利だ」
「そうか」
「嬉しいか」
その死相で問うてみせた。
「そのことが」
「生憎だが嬉しいと思わない」
しかしシオンはこう言うのであった。そしてそれはだ。
黄金聖闘士達も同じだった。皆寂しい様な顔をして述べた。
「決してだ」
「それは何故だ」
「アーレス、若し貴様がだ」
「私がか」
「ただ邪悪だったなら喜んでいた」
これがシオンのアーレスへの言葉だった。
「野心だけでこの地上を征服したいのならばだ」
「それならばか」
「その時は勝利を喜んでいた」
「しかし違うというのだな」
「そうだ、貴様はそうではなかった」
このことを指摘するのである。
「果てに見ているものがあったからだ」
「オリンポスの神々へのことか」
「憎しみ、そして怒り」
彼等に対するだ。そういった感情をである。
「それを知ったからだ」
「聖闘士はそうした感情を否定するのではなかったのか」
「如何にも」

シオンはそれについてはその通りだと答えはした。
「しかしだ、そこに至った経緯も知った」
「それもか」
「アーレス、貴様は邪悪ではない」
「邪悪と言われても結構だがな」
「しかし邪悪ではない」
シオンはあくまでそこを指摘するのだった。
「だからこそだ」
「そうか、だからか」
「我等は喜びはしない」
「私に勝った今でもか」
「まだ。戦うことになる」
ここまで話してであった。やがて、遠い未来に起こる聖戦のことも述べるのであった。シオンも黄金聖闘士達ももうそれを見据えていた。
「その時にまた会おう」
「その時こそはだ」
アーレスはその血を流している口で述べた。
「今度こそ。オリンポスの神々をだ」
「倒すか」
「私がどうなろうと倒す」
「どうなろうとか」
「そうだ、倒す」
ふらつきそうになる足をだ。何とか保っていた。
「何度でも戦い。そうしてだ」
「その為に地上を制圧したいのか」
「アテナ、あの者が私の邪魔をする限りはだ」
強い怒りと憎しみはまだ目にある。そうした意味で彼の目は死んではいない。
「その限りはだ」

「ならば我等ともまた戦うか」
「この地上を私の色に染め上げることも忘れてはいない」
これもであった。
「それもだ」
「では。また会おう」
ここまで聞いてまた告げたシオンだった。
「その時にだ」
「そうだな、またな」
アーレスは今度はだ。微笑んでいた。
「また会おう、戦士達よ」
「戦士達か」
「我等を認めるか」
「如何にも」
その通りだというのである。

第二百二十九話　最後の戦いその八

「誇り高き戦士達よ、また会おう」
「我等を認めそして」
「今は去るか」
「貴様等はオリンポスの神々とは違う」
だからこそだと。肯定しているのだ。
「その貴様等に退けられたことは私も誇りに思う」
「そう思うのならな」
「ああ、何よりだ」
「確かにな」
黄金聖闘士達もその言葉に頷く。そしてだ。
アーレスの最期を見届ける。彼はだ。
身体を消していった。それで終わりだった。煙の様に消えたのであった。
「全ては終わった」
ここでシオンは黄金聖闘士達に告げた。
「これでだ」
「はい、確かに」
「アーレスは倒れました」
「既にこの城に残っている者はいません」
「ここに聖戦の終結を宣言する」
シオンは述べた。
「わかったな」
「では教皇、今より」
「聖域にですね」
「戻る。ただしこれだけは言っておく」
誰もいなくなった玉座を見ての言葉である。
「今日の勝利に驕る者はだ」

「その者は」
「どうなると」
「明日に語ること何もなしだ」
こう彼等に告げたのである。
「これを言っておく」
「汝驕ることなかれ」
シャカがシオンのその言葉を聞いて述べた。
「そういうことですね」
「そのことだけは覚えておけ」
「ええ、それは充分に」
「わかっています」
黄金聖闘士達もその言葉に頷いた。そのうえで今は宮殿を後にする。
彼等が宮殿を出るとだ。それは音もなく崩れ去った。そして後には何も残らなかった。
「これで完全に終わりだな」
「そうだな」
「これで本当に」
「終わりだな」
黄金聖闘士達はその崩れた宮殿が消えていくまでを見届けてたうえで述べた。
「後はもう」
「帰るか」
「聖域に」
「そうだ、全員聖域まで戻る」
シオンもこう告げた。
「わかったな」
「はい、それでは」
「これで」
「この聖戦は終わった」

「だからこそ聖域に」
「そうですね」
「そういうことだ。戦いが終わればここにいる理由もない」
シオンの言葉は落ち着いていた。動じているところは何もない。
「それではな」
「わかりました」
「では今より」
こうして聖域に戻る彼等だった。戦いは完全に終わった。もう後には何も残っていなかった。残っているのは僅かばかりの赤い小宇宙だけであった。それが暫く漂っていたがやがて霧消して何処にもなくなってしまった。

第百二十九話　　完

２０１０・６・７

第百三十話　聖戦が終わりその一

聖戦が終わり

「終わったか」
「はい、残念ですが」
「アーレス様は」
中央にある意志に対してだ。左右の意志が告げていた。
「そして当面の間は、ですが」
「こちらには来られません」
「確かに残念だな」
中央の意志は左右の意志の言葉に対して頷く。
「全くな」
「ですが我等はです」
「既に戻ろうとしています」
左右の意志はこう中央の意志に述べる。彼等は闇の中、人が生きては決して辿り着くことのできないその場所において話をしていた。
「あの女が転生しています」
「ですから」
「あの女か」
中央の意志は女と聞いてだ。面白そうな声をあげたのだった。
「そうか、戻って来たか」
「はい、時が来ましたか」
「いよいよです」
「いいことだ。また私を助けてくれるか」
そうしてであった。さらに話すのであった。
「有り難いことだ」
「では。時が来れば」
「我等から動きましょう」
「黄金聖闘士達はこの時代でもかなりの力を持っているな」

中央の意志は静かな声で述べた。
「それは間違いないな」
「はい、それは間違いありません」
「むしろ我々と先に戦ったその時よりもです」
「力を高めているな」
「はい、間違いありません」
「かなりの強大さかと」
「黄金聖闘士が問題だが」
そしてだ。中央の意志はここで言葉を変えてきた。
「しかしそれだけではない」
「あの者ですね」
「あの時もやってくれましたが」
「またしてくるならばだ」
中央の意志のその声に強いものが宿った。
「私自ら引導を渡してくれよう」
「はい、そうして」
「今度こそ地上を」
「そしてオリンポスをだ」
そんな話をしてであった。彼等は話を終えた。そうしてそのうえで闇の中に消えるのだった。闇の中に消えて深く沈んでいった。
別の世界でもだ。話をしている者達が来たのだった。
「アーレスは敗れたか」
「所詮は戦いだけを望む者」
「他には何もないな」
「そうね、本当にね」
「下らぬ輩だ」
「それに仕える者達も」
こう話してだ。アーレスも彼に仕える者達も侮蔑しきっていた。
そのうえでだ。見下ろす巨大な水面を見ながらだ。また話をするのであった。

「アテナの復活は間近だったな」
「ええ、そうよ」
「間も無くだ」
一人の問いに複数の口から返答が還って来た。
「そして今度はどの神と聖戦を行うかだな」
「海皇ポセイドンや冥皇ハーデスか」
「それともギガンテス達か」
「誰になるか」
こう話していくのだった。
「それが問題だな」
「私達かも知れないわね」
女の一人の言葉である。
「若しかしたら」
「我々か」
「我等だというのか」
「アテナが我々の掟に反する行動を取るのなら」
それならばだというのである。

第百三十話　聖戦が終わりその二

「その時は」
「成程、その時こそは」
「我等とも戦うことになるわね」
「我等の掟に逆らうその時は」
含み笑いと共の言葉だった。それを放ちながら楽しげに笑っていた。
そうしてだ。彼等はさらに話をする。
「さあ、それなら」
「アテナよ、今度の生はこれまでになく激しい戦いの中に置かれる」
「それでどうする？」
「どうして戦っていく？」
「多くの聖戦を経ることになるが」
「地上を守りきれるのか」
まだこの世にいないアテナに対しての言葉である。
「最後まで」
「そして我々もだ」
彼等はさらに話していく。
「何時かアテナと戦うことになるかもな」
「そうだな。アテナが何かをすれば」
「オリンポスの意にそぐわないならば」
「その時は」
こう話すのであった。
「その時にはどうして戦うのか」
「見てみたくもあるな」
「確かに」
「それもまた」
そしてだ。ここでまた話す。

「さて、それではどうするか」
「それも見させてもらうか」
「その時には」
「アテナか」
彼等の言葉にはだ。何かしら侮蔑めいたものもあった。そしてそれを隠しもしていない。
「さて、どういったものを見せてくれるか」
「間も無くこの世に出るな」
「そこから本当の戦いがはじまるのだがな」
「この時代の」
そしてだった。彼等は含み笑いを浮かべてだ。そうして誰かが目配せをした。
するとだ。彼等のそれぞれの前に黄金に輝く林檎と黄金の杯に満たされた黄金の酒があった。それを食べ飲みながらさらに話すのだった。
「アテナはこれは食することは止めたな」
「あれは昔から変わっていたけれど」
「それでも何故あんなことをするのか」
「理解できんな」
「何故であろう」
これについてはいぶかしんでだ。こんなことも話に出した。
「ポセイドンやハーデスが去ったがな」
「アーレスは排除したが」
「しかし何故アテナは自ら去った」
「それがわからぬ」
「どういうつもりだ、自ら永遠の肉体を放棄するとは」
「何を考えている」
アテナのそうした考えはわからずだ。そしてまた話をしていく。
同時に林檎と酒の味を楽しみであった。
「永遠の美貌を捨てるか」

「そして永遠の繁栄を望まぬなぞ」
「人と共に生きるというのか」
「それに何の意味がある」
そうしたことに全く興味を抱いていない。それ以上に価値を見出していなかった。
そのうえでだ。また話すのであった。
「前から変わり者だったが」
「オリンポスにいる時からな」
「実にな」
アテナについての話が続いていた。そうしてである。
「人なぞ所詮は手駒に過ぎん」
「思えばアーレスにしろ己の兵達を慈しんでいたが」
「所詮人ではないか」
「人が何だというのだ」
人も侮りだした。それを隠すこともしない。
「我等の下僕に過ぎんというのにだ」
「弱くそして愚かなもの」
「それに愛情を注ぐなぞ」
「しかも戯れの相手にもしない」
「変わっているにも程がある」
そうしてであった。さらに話すのであった。

第百三十話　聖戦が終わりその三

「今の聖戦はそのアテナおらずとも勝利したが」
「それについてはか」
「そうだ、それはどういうことだ」
一人が言うのであった。
「人だけで勝利を収めたが」
「アーレスが油断したということはないわね」
女の一人がそれはすぐに打ち消した。
「あれは」
「そうだな、アーレスは人であろうとも侮ることはない」
「それはしない」
「だとすると」
「まさか」
話をしているうちにだ。彼等の中にある疑念が宿っていった。その疑念とは。
「人は神を超えることがあるというのか」
「それがあるというのか」
「有り得るのか」
「聞いたことがある」
彼等の中でも一際高い席からの言葉であった。
「伝説の神衣というものがあるらしい」
「神衣といいますと」
「それは一体」
「何でしょうか」
「私も話に聞くだけだ」
それだけだというのだ。
「だが。あるという」
「左様ですか」

「存在しているのですか」
「そう聞いている」
今はこう話すだけだった。彼にしてもだ。
「しかしだ」
「しかし、ですか」
「それでもあるというのですね」
「その力ならば神も倒せるという」
そこにいる者はこうして話していく。
「そう聞いている」
「しかし今はそれを使っていません」
「黄金聖闘士達と教皇の力を集めてです」
「そのうえでアーレスを倒していますが」
「黄金聖闘士にはそれだけの力があるということか」
その者は彼等の言葉を受けてこう述べたのだった。
「つまりは」
「アーレスを倒したことがそれの何よりの証」
「そうだというのですね」
「そういうことになる。黄金聖闘士か」
彼は黄金聖闘士達についても考えていた。
「思っていた以上に手強いのかもな」
「そうかも知れませんね」
「どうやら」
「彼等は」
そこにいた誰もがだ。真剣な面持ちになっていた。
「アーレスは愚かではあっても神」
「我等と同じ存在です」
「そのアーレスを倒したとなると」
「若し戦う時は油断しない方がいいだろう」
そこにある男が重厚な声になっていた。
「その時はな」

「人であろうとも集まればですか」
「神を退けることもあると」
「そうだな。若しその時が来ればだが」
男はこうも言った。
「その時がな」
「左様ですか、それでは」
「今は、ですね」
「見ているだけでいい」
結論はこれに落ち着いていた。
「それではな」
「はい、それでは」
「今はこうして」
「さて、面白くなってきた」
男は今度は楽しむ様な声を出した。
「どうなるかな」
「それが見ものですね」
「地上の戦いが」
傲慢なまでに高みに立った言葉を出す彼等だった。そのうえで今は見ているのであった。そして戦いを終えた聖域においては。

第百三十話　聖戦が終わりその四

黄金聖闘士達が双児宮の庭に集まっていた。その緑の芝生においてワインに様々な御馳走を並べてだ。白い円卓に座り楽しくやっていた。

まずはデスマスクが言う。

「おい、アルデバラン」

「何だ？」

「料理の腕あげてねえか？」

彼の得意料理であるシェラスコを食べながらの言葉である。オニオンソースをかけている。

「前に比べてな」

「そうか」

だがアルデバランの返答は今はそれ程嬉しそうではなかった。

「それならいいがな」

「おい、何か無愛想だな」

「これでも嬉しいのだがな」

「元々そうした顔なのか」

シュラはデスマスクが作ったスパゲティを食べている。イカ墨の真っ黒のパスタだ。

「やはり」

「うむ、実はな」

「そうか、それならいいが」

「美味いしな」

デスマスクは結局それで納得した。

「ならそれでいいか」

「そうだな」

「ところでアフロディーテ」

「はい」

アフロディーテはアイオリアの言葉に応えていた。
「どうしたのでしょうか」
「サラダに薔薇の花か」
「如何でしょうか」
「案外いいな」
白薔薇の花びらが入ったサラダである。レタスの他に胡瓜、セロリ、それにトマトにアスパラガスも入っている。三色の奇麗なサラダだ。
「それも」
「薔薇は食べられますから」
「それで入れたのか」
「はい、どんどん召し上がって下さい」
「シャカはこれなのですね」
「はい」
ムウの言葉に応えている。出しているのはやはりカレーであった。
「健康を考え野菜カレーにしました」
「やはりそれですか」
「ムウ、貴方はそれですか」
「はい、チョウミンです」
所謂焼きそばに近い。それがムウの作った料理であった。
「どうも」
「これもまたいいですね」
「ビールと合う筈です」
「確かに」
「私はこれだが」
カミュは羊のスネ肉を焼いたものだった。
「見れば野菜と肉でバランスがいいな」
「そうだな」
ミロが彼の言葉に頷く。
「俺とアイオリアは二人で刺身を作ったしな」

「それと天麩羅をな」
「成程、巽さんですね」
ムウは二人の言葉を聞いてすぐにその名前を出した。
「あの人に教えてもらいましたか」
「教えて欲しいと言えばすぐに教えてくれた」
「気軽にだ」
「あのおっさん気前のいいところあるしな」
「そうだな」
デスマスクとシュラはそれを聞いて頷いた。
「それを考えればな」
「そうしたこともあるか」
「いや、これがだ」
そんな話をしているとであった。その巽が出て来た。何故か十二宮にいるのだ。
「確かに二人が料理したのだが」
「何故ここに？」
「来たのだ？」
アフロディーテとカミュはそのことを問う。

第百三十話　聖戦が終わりその五

「聖域に入られたのですか」
「それもこの十二宮まで」
「許可は貰っている」
巽は二人の問いに対して冷静に返す。
「教皇直々にだ」
「そうだったのか」
「それは知らなかったが」
アルデバランもミロも知らないことだった。
「やはりグラード財団の関係でか」
「それでか」
「そうだ。それでこうして十二宮に入られる」
そしてだ。さらに話すのだった。
「それでだが」
「はい、それで」
「何でしょうか」
ムウとシャカは冷静に彼に問う。
「今度は一体」
「何があったのでしょうか」
「その刺身と天麩羅が殆ど俺が作った」
アイオリアとミロが作ったというその和食についてであった。
「二人に料理ができると思うか」
「無理だな」
カミュが断言した。
「それはな」
「そうだな、それは」
「どう見てもな」
黄金聖闘士達は口々に言う。二人以外の面々がだ。

「この二人だけは」
「料理とか家事全般駄目だろうな」
「宮殿の付き人が可哀想だな」
「本当に」
「随分行ってくれるな」
「全くだ」
二人もここで何とか反撃を試みる。憮然とした顔で。
「我等も包丁を手に取ったのだ」
「ガスに火を点けた」
「それだけだった」
巽は証言者にもなっていた。
「他は全て俺がした」
「って全部だよな」
「そうだな」
「確かに」
デスマスクにシュラ、アフロディーテはここまで聞いて述べた。
「やっぱりそんなことだったのかよ」
「予想通りだが」
「二人共料理はできないのですね」
「いや、できる」
「できるぞ」
しかし二人は強弁する。
「だからだ。包丁を持った」
「ガスに火を点けた」
「それで料理をしたと言えるのか？」
「甚だ疑問だが」
カミュとアルデバランも呆れていた。
「それではな」
「とてもできるとは言えないだろう」
「そうですね、それは」

穏健なムウも言う始末だった。
「料理ができるとは」
「くっ、全員か」
「全員で言うか」
二人は劣勢を悟らざるを得なかった。流石にここまできてはだ。
「我等とてだ。料理はだ」
「しようと思っているのだ」
「料理が出来なくともいいのではないのですか？」
シャカは何気に止めをさしてきた。
「それができなくとも困りはしません」
「それはそうだが」
「しかし。他の者はできるというのにだ」
二人だけできないのでは、というのであった。

第百三十話　聖戦が終わりその六

「何故和食はこんなに難しいのだ」
「全くだ」
「そういえば一応他の料理はできたか？」
巽はフォローに回ったのだった。
「ギリシア料理等は」
「ムサカやピタは好きだ」
「一応な」
「そういえばギリシアといえば」
ムウがここでふと気付いた。
「あれですね。サガとアイオロスがいませんね」
「そうですね。特にサガはこの宮の主だというのに」
シャカもそれを言う。
「教皇の間に行っているようですが」
「それならそれでいいんじゃねえのか？」
「そうだな」
デスマスクとカミュが言う。
「待ってたらそのうち来るだろ」
「何しろ今は勝利を祝う宴だ」
だからだというのだ。そしてアフロディーテとアルデバランも言う。
「そしてここはそのサガの宮ですし」
「来ない筈がない」
「待っていればいいです」
「こうして美酒と馳走を楽しみながらな」
「そうだな」
「確かに」
シュラとムウも頷く。

「ではここはだ」
「待っていましょう」
「そういうことですね。それでは」
こう話してであった。彼等は待つことにしたのだった。何時の間にか巽も座っていた。その彼にシャカが言ってきた。
「貴方はお酒は何がいいですか？」
「別に何でもいけるがな」
こうシャカに言うのだった。
「酒はな。ただ今は」
「はい、今は」
「ワインがいいだろうな」
目の前にこれでもかと置かれた料理の数々を見ての言葉である。
「やはりな」
「ワインですか」
「幸い赤も白もある」
ワインの色の話もする。
「それならだ」
「それでは。これでいいですね」
「これでいい。ではな」
彼もまた飲むのであった。そしてその頃だ。
教皇の間ではだ。サガとアイオロスが控えていた。そのうえで、だった。
「この度は御苦労だった」
「はい」
「有り難き御言葉」
「あの者達も見事だった」
シオンは己の座に座りながら。今は宴に興じている彼等のことも褒め称えた。
「実にな」
「そう仰って頂けますか」

「彼等のことを」
「腕は落ちていない」
その彼等のことだ。
「むしろよくなっている」
「左様ですか」
「教皇から御覧になられてもですね」
「あの時の聖戦よりも、いや」
言葉をここで言い換えてだ。そのうえでの言葉であった。
「生まれ変わるその度に強くなっているな」
「そう言って頂けるのですね」
「彼等のことを」
「御前達もだ」
二人もなのだというのだ。
「先の聖戦よりもよくなっている」
「我々も」
「あの聖戦よりもですか」
「そうだ、さらに強くなっている」
こう話すのである。
「いいことだ」
「有り難き御言葉」
「それでは」
「御前達ならばだ」
シオンの言葉は満足しているものだった。威厳の中にそれがあった。

第百三十話　聖戦が終わりその七

「必ず果たせる」
「といいますと」
「また起こる戦いもですか」
「そうだ、勝てる」
まさにそうだというのである。
「私がいなくともだ」
「いえ、教皇その御言葉は」
「不吉なのでは」
「いや、不吉ではない」
シオンはこれは否定した。
「どちらにしても御前達の時代になっているのだ」
「我々のですか」
「だからですか」
「そうだ、むしろだ」
そしてまた言うのだった。
「やがて御前達のどちらかを教皇にする」
「我々のどちらかをですか」
「教皇の」
「私の次のだ」
そうすると言ってであった。そうしてだ。
「そのうえで聖戦を戦ってもらおう」
「では聖戦はまだあると」
「そう仰るのですか」
「おそらく。ハーデスも何時蘇るかわからない」
最初に名前を出したのは彼であった。聖闘士達にとって宿敵と言っていい。冥皇ハーデスとその彼に仕える者達のことであった。
「そのうえポセイドンもいるのだ」

「彼等ですか」
「彼等が何時蘇るかわからないのですね」
「だからだ。これで終わりとは思わないことだ」
あらためてこう二人に告げるのであった。
「わかったな」
「その御言葉肝に命じます」
「何としても」
彼等は実際にだ。シオンのその言葉を胸に刻み込んだ。
そのうえでだ。二人は問うた。
「それではその時に備えて」
「今は、ですね」
「己を鍛えておくことだ」
今はそうしろというのだった。
「わかったな」
「はい、ではあらたな聖戦においても」
「この地上を護ります」
「やがてアテナも降臨される」
シオンはこのことも見極めていた。
「アテナも御守りするようにな」
「わかっています」
「それもまた」
「黄金聖闘士とは何か」
その話にもなった。
「それはこの地上を、人を護る者達だ」
「アテナだけでなく」
「地上と人もですね」
「アテナは地上と人を護られている」
アテナはその為の戦いを司る神なのだ。それは神話の時代より普遍のことだ。シオンはそのことをあえて言ってみせたのである。
「だからこそだ」

「では」
「我々もまた」
「頼んだぞ」
二人に対して告げる。
「これからも」
こう話してだ。二人を仲間達の宴の場に行かせた。そして彼は一人になり鏡の間に入った。そこの鏡の一つに童虎がいた。
彼は静かにだ。シオンに対して言ってきた。
「これが御主の最後の仕事かのう」
「そうかも知れん」
シオンもそのことは否定しなかった。
「だが。それでもいい」
「よいのじゃな」
「そうだ、いい」
また言うのであった。
「私は己のやるべきことを果たす。それだけだ」
「左様か」
「若し私が今倒れてもだ」
シオンはそうした事態も頭の中に入れたうえで戦友に対して語る。
「最後まで頼むぞ」
「わかっておる。嘆きの壁を破るその時までな」
「あの者達はまだその運命ははっきりと認識してはいないがな」
「しかしそれでもよいじゃろう」
童虎はそうであってもというのだった。
「それでもじゃ」
「いいか」
「あの者達も戦いの運命の中におるのじゃ」
こう言うのであった。
「それではじゃ。それも当然として受け入れる」
「そうだな。あの時からな」

「同じじゃ。ではじゃ」
「うむ、それではだな」
「また会おう」
童虎はここで話を切るのであった。
「またな」
「そうだな。それではな」
「そして戦おう」
彼もまたシオンに、古くからの戦友に告げてきた。
「その時にな」
「共にな」
二人はこう話してであった。今は別れた。アーレスとの聖戦は終わった。だがそれは輪廻の中の戦いの一つに過ぎずこの世でもだ。彼等が繰り広げる多くの戦いの一つに過ぎないのであった。またあらたな戦いが戦士達を待っていた。

第百三十話　　完

聖闘士星矢　　若き黄金の戦士達　　完

２０１０・６・１１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4424g/

聖闘士星矢　黄金の若き戦士達

2010年10月18日22時25分発行